葵と精霊と九十九神と悪魔と…

鉄　桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葵と精霊と九十九神と悪魔と…

【Ｎコード】
Ｎ８９１５Ｋ

【作者名】
鉄　桜

【あらすじ】
突然のことです…。一人の男の人が落とし穴に落ちました。目の前には少女の姿をした神様が…。そして、また男の人は落とし穴に落ちました。目の前に映る光景は…。ドラゴンだった…。時は流れて魔法大戦の時代。葵は魔法世界に来た。なんとなく戦争に参加するために！そして生み出される数々の兵器！葵はどこまで行くのか！？寧ろどこに行こうとしているのか！？――作者にもわからないｏｒｚ異世界トリップ系です。

オリジナルキャラ紹介（前書き）

今更ですが要望がありましたので急いで作ってみました。
これからも変更していきます。

オリジナルキャラ紹介

葵と精霊と九十九神と悪魔と…

……。

●主人公

落とされる前は極普通の大学3年生。親友2人以外は浅く広い交友関係を持つ。

隠れオタクを自称しているが親友2人には既にバレている。少し鈍感気味。

猫に好かれる体質。でも本人は犬派の人。もちろん猫も嫌いではない。

子犬には好かれるが成長すると噛まれる。それでも懲りずに撫でようとする。

一部の親しい人を対象にだが怖がりだけど思いやりは人一倍ある。

ホラーが苦手。

・九重・葵

俺

「錬金術師（アルケミスト・ワン）」の称号を名乗るように発明好き。

黒髪、黒い瞳。身長１７０ｃｍ。体重６２ｋｇ。身体年齢２１歳（実年齢８２０歳）。

日本人。性別は男性。気が長い…というか長過ぎる。家族想い…いや溺愛している。

家族、友人、他人、敵の四つに分類する人。長い年月で思考がやや変化した。

全体的に中世的だが少し男性よりの容姿。目鼻立ちはハッキリしている。強面ではない。

目元は釣り上がっていて怖いが良く見ると優しい瞳の色を宿している。眠たげ。

現実世界から女神（幼女）の手によって“ネギま！”の世界に落された。

女神（幼女）の力で丈夫（頑丈？）な不老の身体になった。可愛いものが好き。

世界に落とされた直後、遭難して空腹で倒れた以降、食べ物を粗末にすることを嫌う。

様々なチート力を手にしたが把握しきれていない。発明チート。未だ実験検討中。

ハガレン錬金術、あらゆる世界の知識、技術チートなどなど…。ナデ○コ、いいよね。

葵の科学力は宇宙一ぃぃ！！と叫ばずには居られない。ｂｙ作者。臆病者。小心者。ヘタレ。お調子者。気分屋。お人好し。やや鈍感。ロリコン気味。

でも人外にはイヤと言うほど好かれる、というか崇拝？敬愛？信仰？なぜだ？

好き嫌いがハッキリしているが筋が通れば妥協できる性格。でも嫌いなものは嫌い。

喫茶店クレイドルの店長。お姉さん好きを自称している。でもツボは少女（幼女）。

最近の外出着は紅のシャツに黒のスーツ。黒のネクタイにルビーのネクタイピン。

薄い黒のサングラス。冬にはワインレッドのコートを羽織る。どこの組の人？

黒と赤の色を好む傾向がある。葵本人は目立たない服装を選んだつもり。

……。

悪魔姓名＝～～～・Ｄ・スタニック
精霊姓名＝～～～・Ｓ・アニムス

●精霊３人娘
葵と付き合いが一番長い３人。出会ってから７００と数十年。
葵の魔力を抽出、濃縮、ろ過しより純粋な魔力にした霊薬を飲用し続けたため存在。
世界を創世した四大精霊に匹敵する力を得た精霊。全力で使われることはまず無い。
人外では最初の家族。初めて会った時の姿は５０ｃｍほどの小さな可愛らしい少女達。
可愛いモノ好きである葵の溺愛の切欠。以降、家族は溺愛の対象。
目覚めたとも言う…。
精霊らしく調和を望む傾向が強い。

・ミリエール・Ｓ・アニムス
主様ぁ　私ぃ
海のような清廉な青いサラサラなロングヘアー。おっとりと優しい目をした美しい女性。
愛称がミリー。水精霊の上級精霊。ほとんどオールマイティに仕事が出来る。
顕現した時の服装は魔力で構成された海を思わせる青い絹のような衣を纏った姿。
喫茶店の店内では正統派メイド服に（似た！）服装に着替えている。
精霊３人娘の中で長女のような存在、全てを受け入れる優しいお姉さん。

・ウリエール・Ｓ・アニムス
あるじー　ウーリ

愛称がウーリ。風精霊の上級精霊。ほのぼのした子。好きなことはお昼寝。手先が器用。
外見は若草のような優しい緑色の肩まである髪と可愛らしい目が特徴の女の子。
顕現した時の服装は魔力で構成された草原の緑と思わせる少し短い衣を纏った姿。
喫茶店の店内ではミニスカメイド服に（似た！）服装に着替えている。
手先が器用なことからアクセサリー系の魔法アイテムなどの細かい細工が得意。
最近は独特な思考力と発想力からプログラム関係にも興味を持っている。
精霊３人娘の中で三女のような存在、のほほんとしている女の子。

・マリエール・Ｓ・アニムス
主　私
愛称がマリー。火精霊の上級精霊。義理堅い。鍛冶場関係や鉄工関係が得意。
炎のように赤く燃えるような髪とキリッとした目が魅力の女性。
時代劇が好き。
金属加工が得意なことから武器や防具、一般の金物まであらゆる金属の加工が出来る。
顕現した時の服装は魔力で構成された炎の赤を思わせる揺らめく衣を纏った姿。
喫茶店の店内では和風メイド服に（似た！）服装に着替えている。
最近は新しい金属。具体的には艦船の新しい装甲版の開発作製に精を出している。
精霊３人娘の中で次女のような存在、長女と三女の間で色々とがんばる女性。

……。

●陽月姉妹

葵の懐刀。６００年ものの守護刀。それぞれの鞘の拵えが白と黒とハッキリしている。

白い鞘に納まるのは陽（ハオ）。黒い鞘に納まるのは月（ユエ）という。姉妹刀。

製作当時、鍛冶場関係を担当していたマリエールだが個人の力だけでは足りなかった。

そこで属性は違うが同じ精霊のミリエールやウリエールと協力して製作に当たった。

当時は小さな存在だったために魔力の補充に葵の魔力も注ぎに注いで作られた。

誕生から１００年後、九十九神となり双子のような姉妹の姿をとる。

喫茶店では主に用心棒役。いざという時に頼れるお姉さん達。

・陽月　ハオ

我が君　私（吾ら）

［白と黒の双姫］の白の剣姫。美しい白の姉さん。剣の九十九神。

どこまでも白い、新雪の雪のように穢れの無い腰よりも長い髪。

凍えるような白い瞳をしている。でも葵には優しい眼差しをする。

流し目？

女性の姿の時は鞘の拵えと似た白い和服を着崩した姿。床にすりそうですらない。

僅かに見える肩が色っぽく艶やかさを演出している。ちょっと動くと胸元が…。

・陽月　ユエ

我が君　私（吾ら）

［白と黒の双姫］の黒の剣姫。美しい黒の姉さん。剣の九十九神。

どこまでも黒い、深遠の夜のように全てを包み込みそうな腰よりも長い髪。
見たもの全てを見透かすような黒い瞳。でも葵には優しい眼差しをする。流し目？
女性の姿の時は鞘の拵えと似た黒い和服を着崩した姿。床にすりそうですらない。
僅かに見える肩が色っぽく艶やかさを演出している。ここだけハオより大きい…。

……。

●悪魔３人娘
葵と出会ってから３００年は経っている。爵位を持たない下級悪魔。
葵の魔力を抽出、濃縮した霊薬を飲用し続けたため存在としては大公爵級になった。
深層意識下で葵と五感を共有できる。オン、オフの切り替えができる。
数十年ほど前から徐々にだが魔界（暫定）との繋がりが薄くなり始めている。
悪魔契約を切欠に葵の世界に取り込まれた模様。霊薬の影響もあり顕著に効果が現れた。
現実世界に顕現する時に世界の拘束が緩い。葵の愛情（霊薬）の影響か？
葵との初対面の時は敵対していたらしい。３人の絆は強い。

・オリビエ・Ｄ・スタニック
葵　あたし
下級悪魔。爵位は持っていない。力（魔力）だけは大公爵級。女性型悪魔。

固有能力は“切断”、あらゆるものを斬り伏せる。前衛担当には持って来いの能力。

悪魔らしい黒い髪を後頭部で結ってポニーテールにしている。瞳も黒いがやや赤い。

３人の中で最もバランスの取れた戦士。加えて指揮能力も高い。万能タイプ。

大剣による接近戦、遠距離魔法による砲撃戦。どちらも高い水準でまとまっている。

動きやすさを重視しているため結構薄着で際どい水着のような服装をしている。

大きな黒い翼と頭の左右から鋭い角を生やした勝気な女性。３人のリーダー的存在。

でも、中身は家庭的で炊事洗濯、更には料理までこなす家庭的な女の子。

・リビエラ・D・スタニック

葵ちゃん　私～

下級悪魔。爵位は持っていない。力（魔力）だけは大公爵級。女性型悪魔。

固有能力は悪魔にしたら珍しい“光”、それを霧やレーザーのように使える。

３人の中で一番魔法の操作に長けている。遠距離戦ではまず敵は居ない。

キラキラした黒いセミロングの髪と白金色の瞳をしている。

頭の左右から立派な角を生やして細いボンテージを幾重にも纏った女王様然とした姿。

翼や尻尾になる部分は普段から隠している。ただし戦闘時には展開される。

格好こそ女王様だが、とても礼儀正しい。少しおっちょこちょいなところがある。

・シルビア・D・スタニック
お兄ちゃん　ボク
下級悪魔。爵位は持っていない。力（魔力）だけは大公爵級。女性型悪魔。ボクっ娘。
小さな頭に西洋の兜の様に角を左右から生やしている。眠そうにしている目元が特徴。
小柄な身体には不釣合いな大きな翼と長い尻尾を持っているがリビエラ同様隠している。
固有能力は極レアで2つ所持。一つは“怪力”、もう一つは“鉄壁”だ。
暴力的怪力の一振りで敵を消滅させる。近距離に限れば3人の中で最強クラス。
敵攻撃は堅い防御力の前では無意味。魔法障壁とは別個のスキル。皮膚自体が堅くなる。
3人の中で力や突破力で言え一番。頭一つ跳びぬけて強い。
小柄な身に不釣合いなほど大きな斧槍（ハルバート）を小枝のように振り回す。
それでもお昼寝姿は癒されマスコット。葵のことをお兄ちゃんと呼び慕う。

……。

●AI3人娘（内1体が???）
常時接続して相互協力するため電子情報内で相互に情報のやり取りを行なっている。
擬似人格を構成している根幹部分以外を並列化、情報の共有をしている。
それぞれ艦搭載型、個人用支援型、対地上戦闘型とタイプが異なる。
ある意味一番、葵のネタが集まった集団。しかも強力だから手に

負えない。
葵の戦力の大多数を管理している。主に無人兵器類。上位機種とされた娘達。
これからも機械娘が増えるかは神（作者の指）のみぞ知る…。

・アングレカム
お父さん　私
形式番号Ｘ‐０１次世代電子精霊融合型統合制御ＡＩ。割と大きな多次元量子ＣＰ。
対艦砲雷撃戦、対電子情報戦が得意。艦の全ての制御するオペレーターの役目がある。
移動端末の見た目は１２～３歳の少女。姿は自由に調整できる。極度のファザコン。
長いサラサラの銀髪をポニーテールに、瞳の色は金色。モデルはＲＵＲＩＲＵＲＩ！
服装はレースが施された白のワンピース、胸元に輝く赤いブローチがワンポイント。
葵を電子情報面で協力にバックアップしている。あらゆる電子暗号を解読可能。
愛称は彼女の本体が搭載されているアングレカムから取ってアンと呼ばれている。

・ラミエルさん
我が主　了解
正八角形をした青いクリスタル。デバイス（？）。構成人格は女性型。負けず嫌い。
待機状態は３ｃｍの正八面体のペンダント。いつも葵の胸元で揺れている。
最大展開では１００ｍの巨体になる。空中要塞。次元結界を独自に習得した。

大小様々な荷電粒子砲を搭載。最近はミサイルも完備。掘削用ドリルを搭載。
Ｄフィールドの強度はアンよりも１．７倍ほど強力。現在は拮抗している。
葵の有人機動兵器プロテアを一時吸収した。無機物に関しては悪食。
プロテアを空間領域に格納している。趣味は自己進化、自己強化。孫の手完備。

・ＣＯＳ‐ＭＯＳ
マスター　私
機械人形（マキナ・マータ）。姿はゼノ〇ーガ？のＫ〇Ｓ－Ｍ〇Ｓ。手抜きにあらず。
姉弟機としてシュワさん（型番Ｓｙｕｗａ－ＴＸＮ－０２）が順次生産されている。
地上制圧型人型戦闘機械人形。イレギュラーだがシュワさんの上位機種として登録。
各種兵器を多数所持。大まかな区別として内部兵装と外部兵装がある。
全長１６９ｃｍ。重量１４３ｋｇ。身体の構成物質は金属骨格とナノマシン集合体。
戦闘時の服装は機械的な白いボディスーツ。防刃・防弾・防魔などの耐性に優れる。
ボディスーツはナノマシンで構成されているので服装はある程度なら変更可能。
服飾のデータ収集ができれば変更可能なのでコスプレ少女には羨ましがられる機能。

……。

●精魔奇兵のお姉さん達

精魔奇兵。素体物質と精霊か悪魔を融合させた新しい種族。悪魔合体にあらず。

外見は人の姿に酷似している。融合時に外見はある程度、本人の意思が反映される。

髪や瞳の色は大多数が元となった精霊の属性や悪魔の固有能力などが反映される。

［火精霊なら赤い髪や瞳。“毒”の固有能力なら紫色の髪や瞳…］などである。

ただし悪魔は黒色が最も反映される。赤みがかった黒などのようになる場合が多い。

融合後の特徴として身体能力・総保有魔力の飛躍的な向上が見られる。

素体を主構成しているナノマシンにより並列思考・高速思考の能力が付加される。

葵至上主義の傾向が強い。……訂正、それしか居ない？

・アイリス・D・スタニック

閣下　私

元悪魔。愛称はアイリ。親衛隊所属。精魔奇兵のまとめ役。非常に優秀。

紫がかった長い黒髪、毛先のほうを紫色のリボンで結っている。リボンはお気に入り。

瞳の色は普段は黒いが一定以上興奮すると濃い紫色になる。

私生活は優しく柔らかい雰囲気のお姉さん。任務中は鬼のように厳しい。

固有能力は“毒”。地味に強力過ぎるバイオ兵器なので普段から使われることが無い。

仲間思いのため人望もある。反面、割と心配性のため葵を過保護なまでに守ろうとする。

組織経営が優秀。ある意味、葵が頼りにしている人物の1人。

・ファレノプシス・Ｓ・アニムス
葵ちゃん　私
元火精霊。愛称はファレノ。親衛隊所属。精魔奇兵の実質Ｎｏ２。ウェーブした茜色の髪。オレンジ色のバレッタで髪を留めている。赤い瞳は光の反射で色の濃さに微妙な変化を与えて反射する。戦闘能力・事務処理能力共に優秀。後方任務が得意。そのため、ややサポート向き。
時たま落ち着きがなくなるが何故かミスが無く基本的に気の利く子。
火を操るのが得意。温泉が大好き。

・フリチラリア・Ｄ・スタニック
葵様　わたくし
元悪魔。愛称はリチラ。親衛隊所属。精魔奇兵の実質Ｎｏ３。指揮能力が高い。
黒髪だが光の加減で薄水色に見える。魔力に反応するとより鮮明に見える。
瞳の色だがこちらはハッキリと薄い水色をしている。肌は雪のように白い。
固有能力は“氷”。対象を一瞬にして氷像に変えることが可能。止めに砕くのが好き。
冷やし中華や冷製スープなどの冷製料理が得意。特に手作りバニラアイスは絶品。
精魔奇兵の制服をデザインしたのは彼女。お洒落さん。

・コーレア・Ｓ・アニムス
葵くん　私
元気いっぱいな元風精霊のお姉さん。葵にも割とフレンドリーに接する。

薄いライトグリーンの髪を短いポニーテールにしている。瞳の色も髪と同様。
趣味はアウトドア関係、あとはお喋り。特技は風系統の魔法全般。

・サルビア・D・スタニック
マスター　私
元悪魔。冷静沈着に思考が過激。綺麗な青みがかった黒髪と目が魅力的な少女。
ワンポイントは小さなメガネ。趣味は読書。特技はナイフコンバット。
固有能力は“腐”、有機物・無機物関係無く腐敗させ、組織崩壊させる。

・ランタナ・S・アニムス
葵様　私
親衛隊所属の古参の1人。元地精霊。赤茶けた肩まである髪と鋭い目元が特徴。
マジメな性格。真実、仕事中の彼女はマジメだ。責任感が強い。

・マトリカリア・S・アニムス
主様　私
元水精霊。親衛隊所属の古参の1人。後方任務を得意とする。事務処理なども優秀。
濃い青色をした腰よりも長い髪を後頭部で一本に結っている。
少し目尻の下がったおっとりとした雰囲気を持つ女性。
ただ仕事中は雰囲気とは逆の印象を与えるほどキリッとしている。

・ドラセナ・D・スタニック
閣下　私
元悪魔。情報部三課所属の１０あるチームの一つ、第４チームの

リーダー。
固有能力の“影”を持ち漆黒の髪と瞳。複数を統率指揮する能力が高い。

・ラナンキュラス・D・スタニック
主　あたし
元悪魔。情報部三課第４チーム所属。デルタ３のコードを持つ。
緑がかった黒いショートの髪と、髪と同じ色の瞳をした彼女は潜入任務を得意とする。
“風”の固有能力を持つ。風精霊同様、風を操ることができる。

・ディプラデニア・D・スタニック
葵様　あたし
元悪魔。情報部三課第４チーム所属。デルタ２のコードを持つ。
腰より長い髪は黒より尚暗く瞳も同様、見たもの全てを飲み込みそうな漆黒をしている。
固有能力は“闇”。亜空間に飲み込みエネルギーの吸収・発散ができる。

・ダチュラ・D・スタニック
マスター　私
元悪魔。情報部所属。ダリアの姉。体型が幼女（すとーん…）なのが悩み。
一課、二課、三課の三つを纏める情報部部長。陰謀、謀略が大好き。
銀と黒の合わさった色の肩より長いウェーブした髪と優しげな色を宿した瞳。
固有能力は“幻惑”。対象を甘露な夢の中に堕とし幻想空間に誘う。
可愛らしい外見とは裏腹に少し黒い。でも笑顔は花が咲いたように愛らしい。

妹は好きだが大きい（胸的な何か）のが気に入らない。子供扱いを嫌う。

・ダリア・D・スタニック

葵様　私

元悪魔。情報部所属。ダチュラの妹。体型が大きい（ボンッキュッボンッ！）のが悩み。

影に日向に姉を支える情報部副部長。情報整理、作戦計画、書類作成ｅｔｃ何でもござれ。

銀と黒の合わさった色をした髪をアップで纏め、瞳は鋭く怜悧な色を宿している。

固有能力“支配”。生物の精神に干渉する能力。夢を媒介に精神支配を可能とする。

全身から怖い雰囲気を醸し出しているが実は可愛いものが好き。

パジャマがうささん。

自室には可愛らしいぬいぐるみが沢山ある。趣味は姉の服を着せ替えること。

幼少の明日菜の着せ替えファッションショーにも参加した記録がある（後に削除された）。

姉は好きだが自分の体型にコンプレックスあり。理由は（色々と）大きいから…。

２０１１／３／１４再更新

オリジナルキャラ紹介（後書き）

気になる点があれば感想などで受け付けます。誹謗中傷は勘弁。

では！

第零話「プロローグ的な……？」（前書き）

こういう段階を省いて始めてしまったので今更ながら掲載。
この作品を始めたのは勢いだったから「いいかな？」と思って省いちゃってたのですよね。
ちょくちょく指摘があったので掲載することにしました。

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第零話「プロローグ的な……？」

桜の咲き乱れる四月中旬、季節は春を迎えていた。今の時刻は日も暮れた午後七時半だ。星も月も良く見える。

そんな夜空の下、街灯が点る道を歩き進む。どこからともなく飛ばされてくる桜の花弁と柔らかい風に思いを馳せながらも家までの帰り道をただ歩く。足取りは心なし軽く感じた。

俺は九重（くえ）・葵（あおい）。今年大学四年生になるそこらに居る普通の男だ。ただ、少し言い難いことがあるのだが俺は、その…世間で言うところのオタクだ。漫画からゲーム、アニメ、映画まで色々と世相はない。

楽しければいい。それが俺の信条だ。可愛いはこの世の真理なんだ。うん。

「ああ、もう。あのバカが。どれだけ飲ませれば気が済むんだって話しだよなぁぁ」

大学で新しく知り合った友人達とこうして飲み会を開いて既に何度目だったか。大学三年生の頭に二十歳になってから飲み始めたがもう数えるのもバカらしいくらい飲みに行ったり友人の家で飲んだりしたものだ。

この春から四年生になる。早生まれの俺は二十一歳になった。今日は誕生会と言う大儀を得た友人達がそれにかこつけて飲み会を始めてしまった。無論嬉しくないわけではない。飲むことが目的だったとは言え俺も楽しかったのだから。

「それでもなぁ…俺以外全員が潰れるとかどうよ……」

お陰で居酒屋の料金は俺が立て替える羽目になった。諭吉さんが三人旅立たれて逝きましたよ……。明日は絶対に借金の取り立てなくては、と俺は心の底から、そう決意した。

「あっとすっこし～。も～すぐ～我が家～ってね」

家まではあと一つ角を曲がった直ぐそこだ。ほろ酔い気分のまま足取り軽く進んだ。進んだら――――。

「は？はあああぁぁぁぁぁぁぁ……！！！」

――――いきなり地面が消失した。

……。

……。

目を覚ますとそこは俺の部屋だった。

「……あ〝ー！…つぅぅ、夢かぁ。酔っていたとは言えいきなり落下する夢ってなんだよ、まったく……」

寝違えたのかわからないが身体中がジンジン痛かった。二日酔いのそれとは違うそれは、まるで高いところから飛び降りて地面にシコタマ叩き付けられたように……って、は？え？

「痛い？なんでだ、これ？つぅぅ…！」
「それは私が招待したからなのですよぉ！！！」

……は？

「あー…えと、誰？」
「女神なのでちゅ！」
「……（噛んだよ……）」
「……女神、なのですっ！！」
「……（言い直したよ……）」

上半身を起こした俺の目の前に居るのは、その、一言で表すならば……幼女だ。それもとても可愛らしい幼女。ちょっと特殊でおっきなお友達が見かけたら思わずお菓子片手にお持ち帰りしたくなりそうなほど可愛らしい幼女だった。

「……いや、言い直さなくてもいいけどな。それで女神様（幼女）なお嬢ちゃんはどこから入ってきた？ここは俺の借りてるアパートなんだが」
「ちゃんと聞いていたのですか？ここへは“私が招待した”と言ったのでちゅ……言ったのですよ？」
「……（なるほど。このお嬢ちゃんは舌ったらずなんだ。だからよく噛むんだな）」
「変なところで納得しないでほしいのですよっ！？余計なお世話なのですぅ！」
「おっ？人の顔色でなに考えてるかわかったのか？すごいな！お嬢

ちゃん！よしよーし」

子供は気配に敏感とは言うが本当だな。俺の考えていることがわかっているかのようだ。こういうところが女神様ってあだ名になっているのかね？いや見た目そのものがとても可愛らしいからそこからきたのかもしれないな。

「はふぅぅ……はっ！？違うのです！そうじゃないのですよ！」
「はーい。怒鳴らなーい、怒鳴らなーい。いい子だからねー」

ふふふのふ。アパートのご近所から時たまベビーシッターの真似事みたいなことで小遣い稼ぎしていたから子供の扱いはちょっとしたもんだよ。特に撫でるスキルは秀でていると言っても過言ではないね。

「やん……ぁぅぁぅ。気持ちいいのですぅ……はふぅぅ」
「……（あぁ。癒されるー！なんなのこの子！？すっごい和むし可愛いんだけど！）」
「え？わ、私…可愛い、ですか！？」
「……（どこの娘さんかな？一階の山本さんとこか？いや、あそこは男の子だったはず。あっ、お隣の木村さんとこ？あー、でも木村さんとこは今年で中学に上がるって奥さんが言ってたっけ…）」
「んー…気持ちいいのですぅ……って！だから私は女神だと言ってるのですよ！ちゃんと話しを聞いてくださいなのですぅ！」
「あーはいはい。女神様（幼女）。女神様（幼女）ね。そんなお嬢ちゃんはお家に帰らなくていいのかなー？よしよーし」

女神……女神ねぇ……。このお嬢ちゃんが女神様か。いや、女神様は女神様でも幼女神様じゃね？……いや、可愛いから文句はサラサラないけどね。

だって今も撫でているわけなのだけど……かーいーねー！

「んん…もうちょっと右……って！だからここへは私が招待したのですよぉ！」

「はいはい。招待、招待。それで本当のとこはどうよ？二つ隣の深山さんとこの娘さん？それか姪っ子か？」

「う、うぅぅ……話しを聞いてくれないのですぅぅ……」

そろそろここらが引き際、かな。これ以上はイジメになってしまう。イジワルは楽しいけどイジメはダメだ。うん。悪意しか残らないし。

でも最後にもうひと弄り……。

「いやいや、聞いてる。聞いてるって。それでお嬢ちゃんはどちらさんの娘さんで。どこから来たのかな？もう遅いから送っていくぞ？泊まっていくなら一度親御さんに連絡取りたいから電話番号を……」

「だ・か・ら！ここは私が作り出した部屋なのですよぉ！貴方のお部屋は“ここではないどこか”にあるのですぅ！」

ふぅ……こほんっ。さて、いい加減にふざけるのはやめて――。

「最初から真面目に話しを聞いてほしかったのですよぉ！？」

「悪かった。悪かったって。それで？ここはお嬢ちゃんの作った部屋であるってことだけど。……どういうことよ？」

「ううっ……ちゃんと、うぅぅ…聞いて、くれるのですか？」

ちょっとからかいすぎたか。軽く涙目じゃないか……。

「ああ。ここからはマジだ。状況を説明してもらいたいんだがな」

「ぐずっ…わかりました。では、まずはそこに立ってくださいです！」

「ん？ここか？こんな感じ？」

「はいっ！そのままぁ、そのままなのですよぉ……えいっ！」

ぽふんっ。

「あ？」

背後から衝撃（？）が襲ってきた。お嬢ちゃんの背丈が低いから太股辺りに軽い衝突を感じた。

「えいっ！んー、えいっ！えいえいっ！！」

ぽふんっ。ぽふんっ。ぽふんぽふんっ。

「え？いや、あの？……え？」

軽いタックル（？）とか、駄々っ子パンチとか……。このお嬢ちゃんは本当に何がしたいのだろうか？いや軽い衝撃がマッサージのように感じられて気持ちいいような気がしないでもないけど……。

これはアレか？おしくらまんじゅう？

「えいっ！……うー！なんで落ちないのですかぁぁ！？ううぅぅ……！」

ついには泣きじゃくり始めたんですけど……。え？これって俺が悪いの？えー…。

「あー、よくわからないけど。よしよーし。泣くなー？泣くんじゃないぞー。お嬢ちゃんは強い子だろー？よーしよーし」

「あぅあぅ…は、恥ずかしいのですよぉ……ぐすっ」

なんで俺はこんなところで幼女を慰めているのでしょうか？神様。……あ、このお嬢ちゃんが女神様だった。幼女だけど……。

「それでなぜに…と言うか何をしようとしたわけよ？落ちる落ちないとか言ってたけど」

「そ、それは……」

幼女神様、もとい女神様（幼女）が言うには暇だったから偶然引っかかった俺を“ここことは違う世界に送り込む”つもりだったようだ。

まぁ「暇潰しかよ……」と内心思わなくもないけど女神様（幼女）という可愛らしいお嬢ちゃんと知り合えたので良しとすることにした。無理矢理、ね。

俺は可愛らしい女の子には優しいのよ？限度を越えなければ。

それで、あのおしくらまんじゅうは話しをキチンと聞かなかった俺を驚かそうと思って説明しないまま穴に落とそうとしたらしい。本来はキチンと説明したあとで自分から穴に飛び込んでもらうとのことだった。

うん。話しを聞かなかった俺が悪かったと思うが、それはヒドイ。

いや、何事もなかったからこれでお相子と言えばお相子だと思うけどさ。イキナリ人のこと拉致っておいて扱いがこれか？はぁ……。

ここに来たらもう元の世界に帰れない、とも言われた。要は、「もうサッサと覚悟を決めて旅立て」と言うことだ。これについてはいい。両親も俺が高校の時に他界しているし兄弟も居ない。親しい親戚もだ。

うん…こうして考えると元の世界に未練らしいものはない……いや、先程友人達と飲んだ時に立て替えた料金。……クッ！借金の取立てができないじゃないか！奢り損ですかね、これ！？……はぁ。

まぁこれは仕方ないからいい。通貨が貰えても向こうの世界で使えるかも怪しいし。

ただまぁ一つ。その一つだけが納得できないことがあった。その穴…“世界を越える穴”に落ちると本人の意思に関係なくランダムに行く世界が決まるらしい。

これはどうなのよ？　どうせ逝くなら、もとい死んでないっての。こほん……行くなら自分で行く世界を選びたいものだ。だが、このことで抗議しても「無理なものは無理なのですよぉ…」と涙目で言われてしまった。

それえも出現する時間や時代はある程度調整できると言う。なぜここだけ？

まぁそれなら仕方ない。幼女を泣かせてまで無理強いする気は毛頭無いのだからこれについては残念だが、本当に残念だが諦めるこ

とにした。その代わりにここに居る間女神様（幼女）を膝に乗せて愛でることにした。

愛で倒した!!

これで鬱憤は、とりあえずは晴れた。……とりあえずだけどな！それでまぁ話しを続けるがこの俺の膝の上でタレている女神様（幼女）が言うには“穴”と通る時に所謂“特典”が付与されるらしい。

この“特典”とは簡単に言ってしまえば二次創作でよくある好きな能力を貰える、というものだ。この“穴”の中で落ちている間に欲しい能力を強く願えば幾つでも付与されていると言うことだ。

だがしかし、落ちる時間や距離は様々であり一秒で抜けることもあれば年単位で時間が掛かることもあるらしい。

因みに基本的に身体能力は強化される。行く先の世界に“気”や“魔力”、その他の“力”があればそれも基本的に最大限まで強化されるとのことだ。あと簡単に死なないように不老化する。

つまり、だ。“穴”と通る間に欲しい“特典”はそれら以外のモノを願うことが肝要だ。そうじゃないと願い事が重複して無駄になるからな。

でも話しを聞き終わって俺は思ったことがある。それは……。

「……これって“欲したモノは全て叶う”と願えばいいだけじゃない？これなら願い事が一つで済むわけだし」

例えば“欲したモノは全て叶う”と一つ願い、それが叶ったとす

る。つまりこれで漫画、アニメ、映画、空想物、あらゆる技術、魔法、技が使えると言うことだろ?まぁ勿論、技の錬度や戦闘経験は無いけどさ。

「流石、人間は狡賢いのですねぇ!私は今はじめて気付きましたですぅ!」

「よぉぉし。お嬢ちゃんは俺にケンカを売っているわけだな?買うぞ?この!こちょこちょこちょこちょこちょ!!」

「きゃはっ!?あははははっ!待っ!あははははっ!あふっ!ちょっと!あははははっ!」

「ああんっ?聞こえんなぁぁ?こちょこちょこちょこちょこちょこちょこちょこちょ!!!!」

「きゃはははははっ!!あふあふあふっ!?あははははっ!あふっ!?……ぁぅ」

あ……堕ちた。

……。

「ヒドイ目にあったのですぅ……」

「だからゴメンって。……それでも楽しかっただろ?ん?」

笑わせすぎて気絶させたことで怒られております。幼女神様の前に正座して。これでも目線が同じってのが少し微笑ましく思う。と同時になんで幼女に怒られているのかと思うとほんの少し悲しくなる。

「それは、まぁ……って!誤魔化されないのですよぉ!?危うく笑い死にするところだったのですからね!?わかってるですか!?」

「ゴメンね?うん。撫でてあげるから許してよ」

「あぅ…んん…はふぅ……はっ!?危なかったのです……貴方の撫でる手は凶器ですよぉ!?撫でられると気持ちよくてボーっとしますぅ!」

「えー…なんかヒドイんですけどー…」

女神様（幼女）めェ…。凶器とはヒドイ言いようではないか。気持ちいいならそれでいいじゃないか。刹那的快楽とかはイヤだけど和む的な楽しさだったらいくらでも欲しいものだよ。うん。

「もう!それよりもいい加減に“穴”に飛び込んでくださですよぉ!ちっとも話しが進みやしないのですぅ!」

「……（ボソッ）気持ちよかったくせに」

「そ、そそそれは関係ないのですぅぅ!!!!!」↑紅潮。赤面。瞬間沸騰。

いいね。このお嬢ちゃんはからかうと楽しくて仕方ない。可愛いんだもの。うん。

ともあれ遊んでばかりもいられない。一応“穴”を通る時に何を願うかを考えておかないといけない。

俺が絶対に欲しいものは……。

一つ、某キンピカの“［王の宝物庫］（これは中身に関しては最悪なくてもいい）”。

一つ、“あらゆる世界（漫画、アニメ、映画など）の科学や魔法、その他の技術の知識”。

一つ、“上記のそれらを創造、作製、行使することができる”。

一つ、そして尚且つ“創造物、技術を使いこなせるようになる”ことだ。

以上の四つだ。これなら“なんでもできる”。つまり俺が欲しいモノは“一芸特化”ではなくあらゆる事態に対応できる“万能多芸”なのだから。

これは某人形師の考えだがとても共感できる考え方だった。それは“必ずしも俺自身が最強である必要性はない”ということだ。

例えば、自分が弱いのならば強いモノを創造すればいい。それは魔法生物であったり、それは機械（ロボット）であったり、それは武器や兵器であったり。とにかく様々だ。

例えば、“魔力”や“資源”、そして何よりも大事な“情報”が足りないとするなら外から持ってくればいい。時間を掛けて収集して蓄えればいい。

例えば、“軍”としての戦力が足りないなら創ればいい。機械でも魔法生物でも何でも…だ。そして敵対者よりもより強靭な者を鍛え上げたり、ドーピングしたりと、ね。

これだけあればどんな世界でも一応は簡単に死ぬことは無いだろ。最悪の場合は原作から遠ざかればいい。

……。

……。

さて。この愛らしい女神様（幼女）のことを散々にからかって楽しめた。……もう……いいかな。うん……。

「あいあい。――それじゃ行くとしようかな」
「やっと行く気になってくれたですか!?やたーっ!」
「でもちょっと残念とか思ってるだろ?」
「そ、それは……その……」
「くくくっ。いや、言わなくていい。今の態度を見てわかった」
「ぁぅ……」

俺の撫でる手を嘗めるなよ?ふふふのふ。

最後に女神様（幼女）の頭をひと撫でして“穴”の前に立つ。

「それじゃ、まぁ……行ってきます」
「はい!いってらっしゃい!……お兄ちゃん!」

くくくっ……“お兄ちゃん”ねぇ?女神様（幼女）だと言うのだから君のほうが年上だろうに。いや、こんな可愛い子にそう呼ばれるのは悪い気はしない。……ああ、悪くない。

「っ、くくくっ!じゃあな!」

“穴”に飛び込んだ……。意識が遠くなる……。

父さん…母さん…。妹みたいな存在ができたよ……。あの世界も存外に悪いものじゃなかったな……。うん。悪くない……。

……。

……。

彼が飛び降りたことで役目を終えた“穴”は塞がった。

「まったく……あの人にも困ったものですよぉ」

私は“穴”のあった場所を見て思う。

ここまでバカに？コケに？ううん？違う？可愛がる？そう、可愛がられたのは初めてでしたですぉ。

「困った、人なのですよぉ……」

本当に困った人なのですぅ。こんなに楽しかったのは実に数億年ぶりなのですよぉ……。少し…本当に少しだけですけど物足りないと思ってしまうじゃないですか……。

どうしてくれるんですか……あの人は、もう……。

あ、そうだ……。

「私を困らせたのですから……」

これくらいはいいですよねぇ……。にゅふふふ。

「楽しんでくださいですよぉ。私の勝手な願いですけどねぇ……」

これはほんのお返し。小さな八つ当たり。私の勝手な……願い（思い）ですぅ。

「貴方と貴方の周りに幸あれ、ですよぉ」

貴方は男性なんですから“綺麗な女の子に囲まれれば幸せ”です

よね！仮にも女神の祝福なのですから幸せになりやがれですよぉ！

の、呪いじゃないですよぉ？本当なんですよぉ？ちょっと時代間違えたりしましたけどそれはちょっとした意趣返しなのですよぉ。他意はないのですよぉ？

にゅふふふふふ。

……。

……。

「…ぁ…ああ……んん？」

目が覚めてみれば視界に入るものは木、木木、木木木……。一面緑と地面ばかりだ。

「ここ、は……」

ああっと…確かあの“穴”に飛び込んで…願い事して…それから意識が遠のいて…そうどこか違う世界に降り立つんだったな。それでここは……。えーと…？

「マジでどこだ……？」

どこかの森か？森？なんだ？ここは？……もしかしてモンハンの世界か？森と丘なのか？ここから見渡す限り木ばっかりなんだけど……。マジかー……。

ドゴン…！ドゴン…！ドゴン…！！

え?なに?何この音は?音が大きくなっている気がする?いや、こっちに近付いているのか?え?近付いている、だと?こっちに?え?

ヤバイ……イヤな予感しかしない……。と思った瞬間。飛び出してきたのは巨大な――。

「ガアアアアアアッ!!!!」
「なんかデカイの来たーっ!?!?」

轟音。イキナリ現れたものの正体、それは大きなドラゴンだった……。マジ怖いんですけどねー!!

第零話「プロローグ的な……？」（後書き）

プロローグでした！
ではでは！

第一話「思い出してみればこんな時代！？」（前書き）

私にとっては、初ネギま！です。
一応、転生物です。
色々、試したかったんです…ｏｒｚ
更新は追々していきます。

１０／２０修正。

第一話「思い出してみればこんな時代！？」

Ｓｉｄｅ　葵

今日も今日とて資金稼ぎのために金塊の練成と、その資金で得た材料や自分達が足を運んだ場所で採取した物を加工、生成して作った魔法薬や魔法アイテムを作って日々を過ごしている。

「主様ぁ？補充分の魔法薬が完成しましたよぉ？」
「ありがとう。それじゃいつもの棚に足りない商品を並べておいて」
「わかりましたわぁ」

俺のことを主と呼ぶこの子は水の精霊のミリエール。愛称はミリーです。海のような清廉な青いサラサラなロングヘアーの髪とおっとりとした優しい目をした美しい女性の姿をしています。こう見えて彼女上級精霊なんです。精霊には性別はないと言うことだったんですが、こうして顕現出来る様になってからはこの姿です。

昔はまだちっちゃくて力もそんなに強くなくって言葉も片言だったんですが、今ではとっても賢くて、いろんなことを知っている何かと頼りになる子です。ほとんどオールマイティにこなしてくれるから大変助かっています。

「あるじー？魔法薬の材料、［菜園］から持ってきたよー」
「ご苦労様。それは種類別に調合棚に仕舞っておいてね」
「あい。仕舞っておくねー」

このほのぼのした子はミリーと同じで、風の精霊のウリエール。愛称はウーリ。若草のような優しい緑色の肩まである髪と可愛らしい目が特徴の可愛らしい子です。彼女も上級精霊なんですよ。

そして、この子はですね?手先が器用なのですよ。細工が細かい物、例えばアクセサリー系の魔法アイテムなんかの細工をやってくれるんですが…。大変いい仕事してくれるんです!評判もいいです。普通に小物を作らせても出来がいいので女性客には好評です。

好きなことはお昼寝らしいです。たまにお店を休みにした時などに一緒にお昼寝することがあります。その時この子は寝ている俺の胸を枕に寝ています。本人曰くポカポカしていていい気持ちらしいですよ?彼女もミリーと同じでまだ力の弱い下級精霊の時からの付き合いです。

「主、[工房]内の鍛冶場の準備が出来ました。いつでも作成可能です」
「ありがとね。それじゃ今夜からでも仕事に取り掛かろうかな…」
「御意に。その時は私も手伝わせてもらいます」

この仰々しい子は火の精霊のマリエール。愛称はマリー。赤く燃えるような髪とキリッとした目が魅力の上級精霊で、とても義理堅い子です。会話からも分かるかもしれませんが、鍛冶場関係を任せています。

武器や防具、そして金物まで金属の加工が得意です本当にいい仕事しますよ?この前、家で使っていた包丁が刃こぼれして使い物にならなかった時にマリーが打ち直して、研いでくれたんですけど…。

切れ味がね?別物なんですよ。信じられますか?切った時に食材

ごとまな板も切れちゃったんですよ？慣れないと危なくて使えませんよ…。

昔から精霊さん達が直接作る物は何かしらの加護と言うか力が宿るとは言いますが、包丁はないでしょう？それからは俺が間に入って打ち物を作ってみることにしたんですよ。そしたら直接ではないにしても精霊と協力して作った物です。

大変よく切れます。ですが俺が間に入っているので所謂程よい切れ味と言うやつです。近所の奥様方には大変重宝されていますよ？え？マリー個人で作った物は商品にしないのかって？出来ませんよ。なぜって？危ないからに決まってるじゃないですか…。

表の品としては危なすぎて、とても商品としては出せません。でもですね？裏としてなら…。そう、武器関係です。魔法の武器としてなら問題ありません。切れて当たり前なんですから。

そんなこんなで、ここは俺の店［クレイドル］。錬金術師としての一面を持つ俺と家族だけの城。豊富な魔法薬と魔法アイテムを取り揃えている事が自慢。

魔法関係の品は大体、揃えているつもりです。たとえ今、無い品でも材料さえあれば作ってみせる自信もありますよ？そう、材料さえあれば…。珍しい品になると今では採れない材料を使う物もあるから出来ない物もあるけどね？

いや、昔に散々採りに行ったから今では採れないような材料も在庫はあるにはあるのですけど、今では採れない事もあって材料自体の価値が高騰していて数に限りがあるので滅多な事で使いたくないというのが正直な所だったりします。

まぁ、材料に限りがあるとは言っても相当量を確保しているので無くなる事はよっぽどの事が無い限り大丈夫だとは思うけどね？いや、マジで。

仮に無くなったとしても［工房］内に隣接されている［牧場］に色々な貴重種が自然に近い形でそれぞれが生息してますから採れます。これは内緒ですよ？お兄さんとの約束です。

でも、あの頃は無茶しましたぁ…。十二分な魔力とか頑丈な不老の身体は貰ったんですけどね？戦うための術が無かったのですよ…。いや、能力はあったんですよ？でも、使い方を知らなかったんです…。死ぬかと思いました…。

分かりますか？目の前にですね。西洋物語に出てくるようなドラゴンが居たんですよ…。ええ、ホントに死ぬかと思いました。形振り構わずに全力疾走で逃げましたよ。

何とか逃げ切ったんですが、こちらの世界に来たときは戦う以前に生活基盤となる物も何も無かったものですから動き回った所為かお腹が空いてしまって餓死してしまうかと思いましたからね…。

それも今ではいい思い出ですよ？家族とも言えるような存在、精霊の彼女達と出会うことが出来て今ではこうしてお店を開いて、そこそこ楽しく過ごすことが出来ているのですから。あ。あとですね。剣の九十九神（つくもがみ）が二柱と、契約した悪魔が三体居ます。

九十九神の方は、今は顕現して人の姿になって［工房］内の管理をしています。主にですね。隣接してある［菜園］内の薬草栽培の為の畑や［牧場］内で飼育している生き物の世話をしてもらってい

ます。九十九神の彼女達は。

ん?ええ、彼女達ですよ。実は顕現した姿は美しいお姉さん達でした。姉妹ですよ?お姉さんの方は眩しいほどに綺麗な白い髪と鋭い目をした仕事の出来る女性といった感じです。名前は陽(ハオ)です。

妹さんは姉とは逆で艶やかな黒髪とお姉さんに似た鋭い眼をしています。名前は月(ユエ)です。二人とも目元は鋭いのですが、その瞳には慈愛に満ちた優しさが見て取れます。俺は、この二人の瞳が好きです。綺麗ですから。

この二人とは彼是六百年近くの付き合いになりますね。精霊の子達、ミリー達と出会ってから百年してから精霊さん達の協力の元、作ったのが方手持ちで片刃の少し反りの入った二振りの剣。突く事よりも斬る事に重点を置いた剣。

この姉妹刀［陽月(ようげつ)］は、当時マリーだけの力では足りないのもあってミリーやウーリの力、そして俺の魔力を注ぎに注いで作られた特別製。ちょっとやそっとじゃ刃毀れどころか切れ味一つ落ちることは無い。

それでも手入れは確りやりましたよ?じゃないと折角作った武器に申し訳が立ちませんからね。

そうして完成した二振りを大事に使っていたらですね?九十九年経った次の年、百年目になろうかという夜の時にどこからか声が聞こえてきたのですよ。最初は空耳だと思ったのです。

そしていつも通りに剣の手入れをしようとしたら、突然二振りの剣が光ったと思ったら、そこには美しい白と黒の姉さん達が剣の変

わりに居たものですから何が何やら分からなくて初めのうちは混乱しましたよ。

でも彼女達の話しを聞いて納得できました。自分達のことを九十九年間、大事に使ってくれたことが、とても嬉しかったらしいです。そして穢れることなくいられたことを感謝して、これからもより一層俺の力になってくれるそうです。

大体は傷つけた相手の血を浴び過ぎることで嫌われて朽ち果てるのが多いそうです。俺？そんなことしませんよ？自分の為に作った大切な武器ですから嫌ったりなんかしません。

それで彼女達が九十九神として顕現出来る様になってから、しばらくして錬金術に必要な材料を狩りに行ったのです。

その時に使った陽月の切れ味が…。異常でした。斬った感覚がですね？気も通してないのに殆んど、しないんですよ？今まで気を通しても多少なりとも突っ掛かる様な感覚があったのに、熱した金属でバターを斬るように手応えというものがすごく軽いんです。

因みにですね。彼女達は自分達で自律して戦うことも出来るみたいです。それぞれが自身の魔力で複製を作り出して、それを自ら振るって戦うんです。剣の九十九神だけに、その剣舞は見事な物です。

ですが、相手からしたら悪夢でしょうね…。信じられますか？複製ということは魔力が続く限り、幾つでも作り出せるんですよ？あの切れ味のものがブーメランのように何十、何百、何千と白と黒の剣が飛んでくるんです…。並大抵の魔法障壁なんて物の役にも立ちませんよ？

阿鼻叫喚物でした……。

俺が魔力を込めただけあって上限が高いこと高いこと。今度魔力を込めて武器を作る機会があったら少し自重しようと心から誓いました。

それにしても、ただの剣であった頃からで言えばそれなりに長い付き合いですよね。顕現できるようになってから五百年近く。合わせて六百年…。訂正します。それなりではなく、精霊さん達もですが九十九神の彼女達とも結構長い付き合いです。

そして契約している三体の悪魔なんですが今顕現はしていません。なぜかと言うとこちらの世界に呼び出された悪魔では長くこちらに居られないからのようです。どんなに長くても一週間くらいしかもちません。

［工房］内のように魔力で満たされた空間ならそれなりに長く居られるようですが、それでも二週間ほどで戻らなくてはならないようです。精霊さん達と違って長く居られないことに不満のようです。

よく三体のリーダー的な位置にある大剣を持った悪魔が、そうこぼしてました。寂しいのですね？わかります。俺も精霊さん達や九十九神達が居なかったらと思うと寂しくて泣いてしまいそうです…。家族は大切にしたいですよね？

そうそう。悪魔達の名前なんですが当時は下級悪魔だったこともあり名前がありませんでした。まぁ、その点は精霊さん達も変わりませんが。九十九神達ですか？あの子達は初めから俺が名前をつけていましたから違いますよ？

名前が無いうちは意識が希薄らしいです。名前を得るとそれを起点にして自意識のような物が確立されるようです。今では名前を得たことで魂の成長とでも言えばいいのかな？

倒した敵の魂や魔力、そして俺の血を触媒にした霊薬を食べることで成長して爵位こそ無いものの今では公爵級までの力を得ています。

霊薬に関しては精霊さん達も食べることが出来ます。でも、精霊さんはそのままでは吸収することは出来ません。相性のようなものが悪いそうです。

そこでその霊薬を更に浄化して純粋な魔力に変えます。これで、やっと精霊さん達のご飯になります。沢山食べて上級精霊です。育てた者としては大変嬉しいです。

話がそれました。

悪魔達のことですね。そうです。力に関しては出会ってから百年かけて公爵級まで育てることが出来ました。そう、力に関しては、です。正直やり過ぎました…。知らなかったのです…。本来であれば自然に何百年とゆっくり時間をかけて悪魔としての等級が上がっていくのですが…。

俺がしたことは言ってしまえばドーピングです。急激な力の増長は本来なら悪魔達の魂自体が崩壊して消滅してもおかしくないらしいです。

でも俺と契約によるパスが繋がっていたんですが、その恩恵と言うのはおかしいけど、その所為で悪魔達の魂が強化、補正されて、

より契約者である俺に適した形に魂という名の器を変形、拡張させたようなのです。

この身と魔力は神様に与えられた物ですから他への影響も計り知れない物だったようです。それでも爵位はもらえないみたいです。力だけです、はい。

それで彼女達の名前なんですが…。なんですか?…ええ、またですよ?いいじゃないですか?女の子で。可愛いですよ?

それで名前なんですが立派な角を左右から生やして女王様然とした女性型の悪魔にリビエラという名前にしました。彼女は格好こそ女王様みたいですが、とても礼儀正しい悪魔です。…なんでそんな格好してるのか不思議なくらいに。

戦闘では後衛からの大規模殲滅魔法を得意としています。初めて強くなった力を使った時なんか、危うく俺ごと殲滅されそうになりましたよ?掠りました。…死ぬかと思いました。まぁ、彼女も悪気があった訳じゃなかったみたいです。

その後に誠心誠意謝罪してきましたから。あの時、涙目の彼女を見てちょっと可愛いと思ってしまった自分は悪くないと思いたいです…。

そんな彼女ですが今では後衛に限ればほぼ万能と言っていいほどの実力です。大雑把な殲滅魔法だけじゃなくて、的確に敵の隙間を縫うようにして精密狙撃をして敵の頭をつぶすのです。

すごくないですか?誘導性の魔法とは言え隙間なんてどこにあるの?と言うような状況なのに必殺必中ですよ?狙われたら最後逃げ

られません。

そして二体目の悪魔なんですが大きな黒い翼に鋭い角を左右から生やした勝気そうな女の子です。この子の名前はオリビエにしました。彼女は勝気な性格をしているのですが、実はなかなか家庭的で炊事洗濯、更には料理までこなす家庭的な子なのです。

格好が動きやすさを重視しているようで結構薄着で際どいのが、見ているこちらとしては恥ずかしくなったりしています。彼女はその勝気な性格と相まって前衛です。悪魔だけに見た目によらず力が強いです。

公爵級の力がついた時は、やっぱり彼女も悪魔なんですね。とても嬉しそうにしていました。

今の力は大体、公爵級と大公爵級の間くらいでしょうか？何気にすごいです。見た目からは想像も出来ませんよ。それとですね？彼女の使う大剣ですが、実は俺と精霊さん達の作った品だったりします。

家族にはいい品を使ってもらいたいですからね。でも、陽月のことがあるので自重しましたよ？ホントだよ？だって九十九神化してないもん。それ以外は一切自重しなかったけどね！

最後に三体目の悪魔の女の子は小柄な身体にまるで西洋の兜の様に角を左右から生やして眠そうにしている目元が特徴です。名前はシルビアです。この子、普段は眠そうにしていますが戦闘になった時や仲間が危険になった時は尋常じゃないほどの力を振るいます。

正直な話し三体の悪魔の中で力や突破力で言えばこの子が一番だ

と思います。小柄な身に不釣合いなほどに大きな斧槍、所謂ハルバート（俺と精霊作）を使って向かってくる敵を文字通り木っ端微塵にしていました。

わかります？敵の身体がブロック塊じゃなくてまるで消滅したかのように粉微塵になっていたんですよ？敵ながら哀れでした…。

おそらくですが近いうちに大公爵級に匹敵するのではないかと思っています。それでもこの子のお昼寝姿は、見ていると癒されますね。これを見ていると戦鬼の様に戦う姿は、とても想像できません。

そんな悪魔達ですが精霊さん達より付き合いは短いです。短いと言っても出会ってから三百年は経っているので、一概にそうとは言えないけどね？思えば俺がこの世界に来てから七百と数十年…。神様、長過ぎです…。原作なんか殆んど忘れてます…。

いくら神様が修行する時間をあげると言ったとは言え原作より八百年も前ってなんですか？苛めですか？最初の百年で原作なんか忘れてしまいましたよ…。辛うじて覚えているのでも何か大きな戦争が魔法界で起きて…。

えーと…。何でしたっけ？

そう！ナギ・スプリングフィールド率いる紅き翼が戦争の黒幕を突き止めて終戦に導いた。で、よかったんだっけなぁ？ダメ…。自信ないわぁ。覚えてない…。うんっ、気楽に行こう。考えても思い出せないし。はぁ。

まぁね？この世界に送ってきたあの神様には感謝していますよ。

こんなに充実した生を謳歌出来るんですから。新しい家族も出来て嬉しいですよ？皆、ヒトじゃないとは言え美人さんばかりですし。まぁそもそも俺はそんな細かいことは気にもしないけどね。可愛かったり、美人さんだったりすれば文句なんかありませんよ。と言うより大満足ですね。

このまま面白おかしく過ごせればいいですね。でも、ここまで戦力を充実したなら少しは原作に介入して、それを特等席にて見てみたいものですね。

あれ？そういえば今は何年なのでしょうか？

……え？１９８０年？？

アレレー?うろ覚えだけどもう何年かしたら戦争じゃない?…っ!!どうしよう!?戦力は用意したけど原作介入の準備は何もしてないよ!?ふぅ…。落ち着け俺。こういう時は羊を数えるんだ…。

羊が一匹…羊が二匹…羊が…って!これじゃ眠くなるわ!ん?いや、完璧だ…。気持ちは落ち着いているじゃないか…。

ふぅ…。うん、よく考えれば戦力があれば介入できる、よな?寧ろナギ達以上の戦力じゃないか?水、風、火の上級精霊さん達に三体の上級悪魔達、それも力だけを見たら公爵級。おまけに九十九神が二柱、この二人も九十九神とは思えないほどの性能だよな。

十分じゃないか。介入の用意?いらんだろう。一応この店自体を影に沈めれば移動も容易いし。アレ?準備いらないじゃん。直ぐにでも出発できるよ。よしっ!魔法界に行くか!早速皆に話して移動の準備してもらわなくちゃ。今までお世話になったご近所の人とかにも挨拶しなくちゃなぁ。

あぁ、そういえばマリーに鍛冶場の準備させてたなぁ。今夜かぁ。…うんっ、中止しよう!行くのは一週間後にしよう。…ん?なにか言いたいことでも?…いいんですよ。正直、戦争なんかよりも家族との触れ合いのほうが大事なんですから。

…なに?家族なんかほっとけ?そんなこと言う人は…シネバイイノニ。…ハッ!?何か黒い物がまとわりついたような感じがしたのですが…。気のせい、ですね。

そうと決まれば早速行動です。皆に一週間後にはここを発つことを伝えなくては!皆とは契約やな何やらで離れていても念話で事足

りるのですが、やはり、直ぐ側に居るのだから直接話したいじゃないですか？それでは…。

「皆～。お話ししておきたいことがあるから集まって～」
「主様ぁ、どうかしましたのぉ？」
「あるじー、どうしたのー？」
「主、話しとは何でありましょうや？」

俺が呼んだら直ぐに答えて来てくれました。やっぱりこの子達はいい子です。嫁にはやりませんともっ！…話しが逸れました。あまりの嬉しさに、つい…。いけませんなぁ。…歳でも取ったかな？いや、関係ないかな？だって俺、不老だし？あ、でも、魂は元はただの人間だしなぁ。

神様に改造されても精神までは違うのかな？魂が磨耗してる？いやいやいや、大丈夫。俺、正常ですよ？ホントだよ？だって肉体的には歳なんて取らないからね。精神は肉体に引っ張られるとも言うし大丈夫でしょ！

「主？先程から黙ってどうされたのですか？話しがあるのでは？」
「む？」

…いけません。つい、思考が別のところに行ってしまったようです。この子達に心配されてしましました。マリー、ありがとう。意識が戻りました。そうです。一週間後にここを発って魔法界に行くことを伝えるために集まってもらったのでした。早速伝えなくては。

「ごめんね、マリー。ついつい、考え事していたら、それにのめり込んでしまったよ」
「そうだったのですか？呼ばれて来てみたら深刻な顔をして黙って

おられるから心配してしまいました」
「大丈夫、心配ないよ?俺は昔も今も元気だからね。皆も居るんだし。それで伝えたいことがあるんだけど…」

皆に、これから準備して一週間後に魔法界に行くことを伝えていきます。話し終わると皆、突然のことに驚いていますが文句は出ませんでした。今から準備してくれます。そんな中でマリーに声をかけました。

「なにか?主」

鍛冶場での予定をキャンセルされたと思い怒っているのでしょうか?言葉がいつもより硬い感じがします。…俺、泣きそうですよ?誤解なんですよ?予定通りに仕事にはかかります。家族との約束は大切にしたいですからね。そのことをマリーに伝えると彼女は実に嬉しそうにしてます。

「御意です♪主。…お待ちしておりますね?」

なんて言ってスキップしながら鍛冶場のある「工房」内に向かいました。いつに無くご機嫌ですね。家族達が嬉しそうにしていると俺も嬉しくなります。今夜は張り切ってしようと思います。…仕事をですよ?勘違いしてはダメです。そんな人には神様の罰が当たればいいのです。

俺もここを発つ前にお世話になったご近所の人達に今からご挨拶してきましょうかね。人付き合いは大事です。仲良くしなくてはいけません。

それでも生理的に受け付けない人も稀にではありますが居ますけ

どね？そういう点を見ると俺はまだまだ商売人としては未熟なものがありますね。反省です。それでも仕事以外で付き合いたいとは微塵も思いませんけどね。

店を出て考えながら歩いていたら着きました。俺の眼の前にはごく一般的な家屋が建っています。表札には［一ノ宮］とあります。これから分かるように俺達は今日本に居ます。

結局何百年経とうと自分が育った国の空気は魂が覚えているようで昭和の時代後半になってからこちらの日本に来てしまいました。

味噌汁最高！温泉大好き！緑茶持ってこいやぁ！な俺ですからこの地は、やはり落ち着きます。たとえこの日本に俺が生まれ育った地が無いとしても、この雰囲気は変わることはありません。

おっと。そんなことを人様の家の前で考えてたら変質者と間違われてしまいます。まぁ、この辺りの人達とは、殆んど知り合いなので、そんなことはまず無いですけどね？ともかく挨拶しなければ。表札近くのインターフォンを押してしばらく待つと、この家の人が出てきました。

「こんにちは、葵君。今日はどうしたの？こんな時間に」
「こんにちは、碧さん。今日はお別れのご挨拶にお伺いしました」
「…はい？？」

おお。碧さん、驚いています。目なんかまん丸にして。この人は一ノ宮・碧さん。二年前にお店の近くのここに引っ越してきた夫婦です。碧さんは主婦です。旦那さんはシステムエンジニアをしていると聞いたことがあります。

ご近所では一番付き合いが深いと思ったのでここだけは挨拶しておきたかったのです。はい。それと碧さんが言った葵という名前が俺の名前だったりします。本名九重（くえ）・葵（あおい）です。何気にここまで俺の名前出てきてなくない？

……ちょっと凹んでたのは秘密です。

碧さんがまだ固まっています。まぁ、まだ日の高いうちから俺がお店をほったらかしてここに居るんですから吃驚しているのもあるんでしょうがね。

あ、因みですが表のお店は喫茶店兼プチ雑貨屋という感じでやっています。表の方もそこそこに繁盛してますよ？ケーキセットが人気です。プチ雑貨は小物関係とたまにですが金物なんかもですね。小物関係はお茶をしながら選べるので女性に好評をいただいています。

「あの、お別れってどういうこと？…お店が潰れちゃうって事！？あたしの所為？あたしが毎日、デザートのケーキをただで食べてた所為で潰れちゃうの？ねぇ！？」

碧さん、痛いです。襟元掴まないでください…。きまってます！いい感じに気道がきまってます…。ああ、ダメ。そんな勢いよく振らないで…。振らないでください…。気持ち悪いです…。うぷっ。

「碧さん、落ち着いてみようか？ね？お願いだから襟を掴んでる手を離して。それとそんな前後に振らないで。切実にお願いします…」

「？？ああっ！ごめん！苦しかったよね？ごめんね？」

碧さん…。貴女はこんなにいい腕を持っていたのですね？女子プ

ロレスならベルトとる事も出来るんじゃないですか?魔力や気で強化していなかったとは言え…。油断しました…。

「けほっけほっ…。いえ、俺なら大丈夫ですよ。碧さん、落ち着きましたね?それとケーキの代金なら貴女の旦那さんが週毎に払ってくれていますから大丈夫です。お店も潰れるわけじゃなくて引っ越すだけですから問題ありません」

「あ、そうなんだ…。よかった~。…って!!あの人にケーキのことバレてたの!?」

ええ、そうなんですよ。旦那さん、知っていました。「どうやって知ったのですか?」と聞いたところによると「勘ですね♪」って右手人差し指を立てて笑いながら言っていました。勘ですか?これが夫婦の絆というものなんでしょうか?素晴らしいです。ある意味理想の夫婦ですね。

「大分前から知っていたみたいですよ?いつだったか「碧のことは俺が一番知ってるからね」って笑いながらこぼしていましたから」

「いやん♪流石あたしのだ・ん・な・さ・ま♪ふふふ」

いやん、って…。碧さん…。相変わらずラブラブですね?終いには砂、吐きそうです…。でも、しません。なんだかんだ言っても俺はこの夫妻を気に入っていますから。見ていて飽きませんからね。

「…いつまで経っても新婚さん気分ですね。いいことなんでしょうけど。独身には堪えますね…」

「うふふ、当たり前よ~。ああ、そうじゃなかった。引越しだっけ?人手が足りないなら手伝おっか?昼間は家のお掃除が終わると暇だし」

残念。荷物は手持ちの最低限の物があれば、あとは影に沈めるだけですから。正直な話し「荷造り？何それ？美味しいの？」ってな具合です。やろうと思えば今すぐにでも発てますよ。でも、今回はしません。今夜はマリーと約束がありますからね。何度も言いますけど仕事ですからね？

「ありがとうございます。でも、それは大丈夫です。荷物は殆んどまとめてありますから、あとは簡単な手続きだけです」

「…相変わらず、仕事速いね。葵君は」

「それ程でもありませんよ？それじゃ今までお世話になりました。これからもお元気で」

「あいあい。…ん？あたしの方がお世話になってた気がするけど。…まぁいいや。新天地でも元気でね？身体には気を付けるんだよ？」

「はい、ありがとうございます。それでは…」

さて、とりあえず今日一日はがんばって。明日からお店を閉めるために張り紙しておかないと。ああ、それと一応だけど手荷物ぐらいはまとめておかないと。なんだかミリーがやっていてくれそうな気がしたけど……。

気のせいかな？もしそうなら、今度まとめてお礼とかしようかな。そうこうしている内に着いたみたいです。中に入りますか。

――カランコロ～ン。

「いらっしゃいませぇ。あらぁ？主様でしたかぁ。お帰りなさぁい」

「ただいま、ミリー。変わりありませんか？」

店番はミリーだけのようですね。他の二人は［工房］でしょうか？今回のついでに掃除と整理でもしているのでしょうね。よく出来

た子達で俺も嬉しい限りです。店の中はお客様のピークが過ぎているために誰も居ません。

「ん～。ないですねぇ。いつも通りでしたわぁ」
「そう。それじゃ俺は簡単に手荷物まとめてくるからしばらくお店の方はお願いね？」

忙しくないうちに手早くて荷物をまとめておきましょう。早いうちにしておけば、いざという時に慌てることもありませんからね。まとめている間はミリーにお店を任せます。がんばってくださいね？

「はいぃ。でもぉ…」
「ん？なに？」
「いえぇ。荷物なら主様が出掛けておられる間にまとめておきましたよぉ？」
「…それはミリーがですか？」
「はいぃ。ご迷惑でしたかぁ？」

予想通りです。本当によく気の付く子に育ってくれて俺は嬉しいです。でも、ホントに何かお礼を考えておいたほうがいいかもしれませんね。がんばる子にはご褒美がなければいけません。

「いやいや。ありがとう、ミリー。手間が省けました」
「どういたしまいてぇ。でも、気になさらなくてもよろしいのですよぉ？気付いたからしたまでですからぁ。」
「それでも感謝してますよ。俺には勿体無いぐらい出来た子だから」

本当に良く出来た子達です。何処に出しても恥ずかしくありません。俺の自慢です。でも、時々不安になる事があります。皆、いつか俺から離れていくのでは？と…。

皆は、そんなこと万に一つもありえない！と笑いながら言い切ります。実際今までその通りだったのですが。それでも。分かっていても、フとした時に不安になる時があります。度し難いほどの臆病者です…。

「そんなことありませんよぉ？わたし…わたし達はぁ、主様だから一緒に居たいのですからぁ。…それに他の方はちょっとご遠慮したいですねぇ」

「ありがとう、ミリー。詰まらない事を言ってしまったようです。反省ですね」

「そうですよぉ？わたし達が主様をおいて行く訳が無いですわぁ。いつまでも一緒ですのよぉ？」

やっぱりミリーはミリーですね。…皆の、この言葉を聞くたびに俺は安堵します。

「そうですね。よろしくお願いしますね？ミリー」

「はいぃ♪いつまで一緒です♪」

本当に詰まらない事を言ってしまいました。ミリーには感謝です。さて、ミリーと話していたら、いつの間にか日が沈んできました。そろそろお店を閉めますか。ああ、ついでに閉店することを知らせる張り紙もしておかなければなりませんね。

それが終わったらマリーのところに行きましょう。いや、その前に夕食ですね。お腹、空きました。何にしましょうか？鍛冶場仕事ですからガッツリ食べたいですね。焼肉にしましょうか？出立祝いもかねてちょっと豪華にしてみますか。

そうなると悪魔の三人娘も呼ばなくてはいけません。精霊さん達は人間のように食事は出来ませんから。その点、悪魔の彼女達はお酒も飲むしご飯も食べられます。

九十九神のハオとユエは精霊さん達と同じで食べることはありません。食べれないことは無いようですが意味が無いそうです。それでも食卓には呼びたいです。食べれなくても大勢で居れば楽しいですから。

その日の夕食はとても賑やかに行われました。飲めや歌えやのお祭り騒ぎです。

リビエラが持って来た向こうの世界、ここでは仮に魔界としましょう。その魔界のお酒を皆で飲みました。こちらの世界とまた違ったコクがありました。美味しかったです。

でも、これ飲み易さに騙されてはいけません。アルコール度数がかなり高いみたいです。俺は一杯飲んで顔が真っ赤になりました。

これは、うろ覚えなんですが俺の左右に居たハオとユエに抱きついたりしような気がします…。その時の二人は「「わ！我が君！？お戯れを！？」」などと慌てていたと思うんだけど…。自信がありません。でも、気が付いた時に見た彼女達は俺と視線を合わせないようにしてました。

顔が赤いのが気になったけど、それよりも気になったのがあります。…彼女達に俺は嫌われたのでしょうか？抱きつき魔な主は嫌だ、と思われたのでしょうか？どうしよう？…マジで泣きそうです。

でも、その後で誤解であることが分かって安心しました。二人と

もただ恥ずかしくて照れていただけみたいです。普段表情の変化が殆んど無いので悪いとは思ったけど新鮮でした。可愛かったです。

そして約束通りにマリーの待つ［工房］内の鍛冶場に行きました。早速、仕事開始です。物作りは楽しいです。ただの材料から想像もつかない物ができる時などは感動したこともあります。

今では材料によっては何が出来るのかとかは大体予想できるようになりましたから感動は滅多に無いですが作業自体が楽しいのでやめられません。やめるつもりもありませんけどね。

そうこうしている内に完成です。魔法技術を取り入れて作ると時間が短縮できるから嬉しいですね。その技術も精霊のマリーがいるから出来ることなんですよ?仮に時間短縮だけで作ったら性能はガタ落ちです。早くできるだけで中身がスカスカなんです。

そこで精霊さん達です。時間短縮して尚且つ性能も抜群です。強化と補正が掛かるみたいですから素晴らしい品が出来ます。俺も時間さえかければいい品は作れるけど、やっぱり精霊さん達に協力してもらったほうが丈夫に早くできるから、そっちの方がいいです。

何より一緒にするのがいいです。楽しいですからね。

……。

……。

そんなこんなで日は過ぎていっていよいよ出発の日になりました。日本から近い魔法界へのゲートがあるのはイギリスのゲートですね。飛んで行ってもいいけど近代化が進むにつれてそれも難しくなって

きたからね。まぁ見つかるようなへまはしないけどね。

ただ長時間の飛行は疲れるしね？イヤなのよ。夜中の海を飛ぶとかロマンチックな気もするけどね。…なに？…それじゃ転移魔法は？出来ますよ。出来るけどさ、それじゃ旅行の楽しさがないでしょ？考えるまでも無く却下でしょ？ダメ！絶対！

そして俺は今、小さなトランクを一つ持って空港に居ます。飛行機の出発は一時間後です。もう直ぐですね。ん？精霊さん達や皆はどうしたかですか？精霊さん達は姿を透過させてついて来てますよ？悪魔の三人娘はいつも通り顕現していないだけです。

九十九神の二人は影の中の［工房］内に居ますよ。そう、俺は今、一人で居ます。…寂しいです。精霊さんは見えないだけで一緒に居るんですけどね？こう…なんて言うか。うん、気持ち的なものです。

ん？そんなことを考えてたらアナウンスが始まりました。どうやら、時間のようです。

「それじゃ行きますか！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第一話「思い出してみればこんな時代！？」（後書き）

どうでしょう！？
ありきたりですかね？
いや、まだプロローグもいいとこなんですがね？
これからですね。ハイ。
感想＆アドバイス＆参考になりそうな二次物！
あったら何でもお願いしますね！？

第二話「紅き翼との出会いと詠春の回想と」（前書き）

どもども。
更新しました。
楽しんでいただけたら嬉しいです。
では、どうぞ！

１０／２０修正。

第二話「紅き翼との出会いと詠春の回想と」

Ｓｉｄｅ　葵

イギリスのゲートから無事に魔法界へと辿り着いた俺は転送施設の受付で預けた手荷物を受け取って外に出た。

んー。懐かしいかな？前にこっちに居たのは百年ぐらい前だった気がする。よしっ！とりあえず適当に宿を確保しよう。移動で疲れたから今日は早めに寝て明日から行動しよう。

……。

一夜明けて翌日。

疲れも行動するのに問題が無いほどに回復したから…。うーむ。何をどうするか……。実際、原作の事なんか結構忘れている。

とりあえず、戦争が始まるまでは旅でもしようかな？…うん。いいんじゃない？それ。しばらくこっちの方には来てなかったし丁度いいかもしれない。世界中旅してればいつか会えるかもしれないしね？それじゃ、適当に行きますか！

……。

……。

――数ヵ月後…。

ついに戦争が始まった…。

戦争を見るのは初めてじゃないけど、やっぱり見慣れない。人が死ぬ。獣人が死ぬ。召喚された悪魔が掻き消される。魔法が飛び交うのがここでの戦場の風景。血生臭い中にファンタジーが混ざる。

その光景は常人が見れば馬鹿にしているように見えることだろう。でも、ここじゃこれが…。

――アタリマエノコト。

俺は今、戦闘が起きているところを割りと近い位置から見ていたりする。

目の前の光景。それを見ていると、とても不毛な物に思えてくる。七百と数十年近く生きると俗世の事は大概がどうでもよくなってくるから不思議。ここ世界に来る前は原作介入だ！ヤッフー！みたいに思っていたのになぁ…。

今の俺には力もある。頼りになる仲間達も数百と居る。後は最後のピースが揃えば、まだヤル気が出るんだけどなぁ。結局ね？この時期までナギ達［紅き翼］とは出会えなかったのよ…。

何これ？苛め？神様、ご都合主義はどこにいったの？探せってか？これ以上何処探せってんだよ…。世界中行けるところは行ったよ。これで見つからないって何？今は戦闘のあるところで網張って待ち構える形なんだけどさぁ？

もう旧世界に帰ろうかなー？なんか面倒になってきた…。

「「我が君？」」

「んー？なーに？二人とも。戦闘が終わったのー？」

「ハッ。つい先程ここの戦闘に豪快に乱入した者が居りましたが。アレが我が君の探し人であらせられるか？」

「ん？どんな奴？」

「はい。赤毛の子供。刀を持った男。魔法使いらしい格好の人物。白髪の子供。外見的特徴通りなら間違いなく［紅き翼］ではないかと思われますが。我が君、いかがなされますか？」

「……は？」

［紅き翼］キターーーー！！何これ！？散々探し回ってこれ！？俺の時間返せよって感じなんだけど！！…いや、不老だから別に時間はいいんだけどさ？なんて言うの？気持ちの問題？っていう奴だよ！ハァ…。馬鹿らしい。そんじゃ行きますか！

「ハオ。ユエ。行くぞ？愚かな者共に本物の蹂躙とはどういうものか教授してやれ」

「「承知。吾等の全てを持って教えてやりましょうぞ！」」

さて！一丁ヤッたりますか！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　ナギ

連合軍の援軍要請が来たから駆けつけたけどよう。なんでここまでボロボロにやられてんだよ？情けねぇなぁ…。

「おいっ！ナギッ！一人で突っ込むな！とあれほど言っただろうが！？なに早速約束破ってんだ！このバカッ！」

「あー！詠春！うっせ！うっせ！いいんだよ！そのお陰で助かった味方も居るだろうが！？」

「あっ！？こら！ナギ！待て！」

俺は更にスピードを上げて詠春を引き離した。なんだよ…。そんなに怒鳴んなくってもいいじゃねぇかよ。早く着けばそれだけ沢山の味方が助かるんだからいいじゃねぇか！まったくよぉ！

「ふふふ。ナギは相変わらずですねぇ。そのバカなところが、この突破力を持つんですから興味深いですね…」

「こやつは、昔からバカなんじゃよ。呪文一つ教えても本人に覚える気なんぞさっぱり有りはせん。すぐにあんちょこに頼るのだから儂の手には負えんよ」

「アルも師匠も！うっせ！うっせ！黙って敵を倒しやがれ！！」

まったくよぉ。詠春だけじゃなくて今度はアルと師匠まで俺のことバカバカ言いやがって！この戦闘が終わったらぜってーメる！！よっしゃー！まだまだ敵は居るんだ！ジッとしてたら殺られるのはこっちだ。大呪文の魔法で一気にヤってやらぁぁぁ！！

「とりあえず呪文が分からんからあんちょこを見てっと…。よしっ！これだ！…来たれ雷精！風の精！雷を纏いて！吹きすさべ！南洋の嵐！食らいやがれ！雷のぼっ！？なんだ！？」

――シュンシュンシュン…。シュンシュンシュンシュン…。シュンシュンシュン…。

鋭く風を切る音が聞こえる……。

――ザクッ！ザンッ！グサッ！…。ザクッ！ザンッ！グサッ！…。

音の正体は無数に飛び交う白と黒の剣……。

――ぎゃ！？なんだ！これは！？

――た！助けっ！？ぎゃぁぁあああ！！？？

――腕が！！俺の腕が！！？？グフッ！！？

――じ！陣形を整えろ！！防御を！障壁を展開するんだ！！ぐはっ！！？？

――死にたくねぇ…！死にたくねぇよぉぉおお！！！

――撤退だ！撤退しろ！！撤たっ！ぎゃぁぁあ！？足が！？俺の足が無いぃぃいいい！！？？

出来上がる剣の墓標と重軽傷者、死者の山……。

呪文を完全に発動させる前に何百、何千、何万という大量の黒と白の剣が帝国軍目掛けて降り注いで次々と戦闘不能にさせていく。

一瞬でここは阿鼻叫喚の地獄のようになっていた。俺は…俺達［

紅き翼」は見ていた。

一撃で死ねなかった者も手か足またはその両方を切り取られたかのように無くなっていた。もちろん、その間も帝国軍の奴らも抵抗しなかったわけじゃない。集団で固まって障壁を全体に展開して防ごうとしていた。

だが、その障壁も、この剣雨の中では余りにも無意味だった…。障壁は紙同然と言わんばかりに切り裂かれ貫通して帝国軍の奴らを壊滅へと押しやった。

「もう、終わりか?帝国軍とは存外に脆いのだな。…皆殺しにするべく追うか?」

「姉上。そう言うでない。我が君は本来無益な殺生は好まぬお方だ。退くのなら追う必要な無い」

帝国軍が撤退していくそんな時、土煙の向こうから姿を現せた白と黒の二人の女の声が聞こえた。

Ｓｉｄｅ　ナギ

Ｓｉｄｅ　葵

「もう、終わりか?帝国軍は存外に脆いのだな…。皆殺しにするべく追うか?」

「姉上、そう言うでない。我が君は本来無益な殺生は好まぬお方だ。

引くのなら追う必要は無い」

後からゆっくり来たら既に戦闘は終わっていた。

二人が展開した白と黒の剣があちらこちらに刺さっていたが、それもやがては空間に溶けるようにして消えてなくなった。残るのは無傷とは言えないけど連合軍の生き残った兵士達と僅かな帝国軍の捕虜達。そしてこちらを警戒の眼差しで見つめてくる［紅き翼］の者達だけだ。

……まぁ突然こんなことされたら警戒するよね？

やがて、警戒しながらだが赤毛の少年―ナギだと思うんだけど―がこちらに近づいて来た。その後に続くようにして［紅き翼］のメンバーも近づいてくる。

パッと見、気付かないがナギ以外のメンバーは何かあればいつでも仕掛けられるように俺たちの周りを半円形に展開している。ハァ…。こうやって警戒されたくないから戦争前に接触したかったのに…。神様のバカ…。

「おい！お前何者だ！？」

ああ、ナギがいい感じに警戒してるよ…。ハァ…。あ？なんだか、最近溜め息増えたな。やだなぁ。幸せ逃げちゃうじゃん。もう…。

「黙れ！下郎が！我が君に何という口の聞き方か！？」

おおぅ。少し現実逃避してたら、なんか知らんがハオがナギにすごい喧嘩腰なんですが！？どういうこと！？

「姉上、落ち着け。我が君はそのような些事では怒りはせぬだろう？」

「だがな、ユエ！あの下郎の我が君への言葉遣いはなんだ！？」

ああ、なるほど、ね。ハオは俺のために怒ってくれたのね？ううん、やっぱり、いい子達だな。お兄さん嬉しいですよ？でも、ここはマズイから俺が直接話すしかないかな？よしっ！ハオを静めて、それから…。えーと…。とりあえず声をかけるところから始めよう！

「ハオ、ユエ。ここは大丈夫だから少し下がっててくれるか？」

「しかし、我が君！」

「ハオ、俺は気にしてないから。…お願い、下がってて？」

俺からの説得もありなんとかハオは下がってくれそうです。ハオはいい子なのですが、俺の事になると、途端に過保護になる時があります。俺も、もういい歳なんだけどなぁ…。

「くっ…！承知しました、我が君。…下郎、命拾いしたな？」

「へっ！お前が、だろ？」

「貴様っ！？」

「姉上！我が君の命です！ここは下がりますぞ！こっちに来るのです！」

なんだか少し目を離しただけで、また喧嘩になりそうなんだけど…。なにがあった？この数秒の間になにがあった！？ハァ…。うん。気を取り直してナギと話すことから始めよう！うん！そうしよう！ハァ…。テンション上げてかないと辛いなぁ…。

「ごめんね？ハオはとてもいい子なんだけど俺の事になると途端に

怒りやすくて…ふぅ」

「あ?ああ、いや。俺も喧嘩売ったみたいなもんだから、別にどうでもいいな。それよりお前は何者なんだよ?帝国軍を倒したって事は連合軍か?」

お?以外にも話しはちゃんと聞いてくれそうだ。うん。まずは自己紹介からだよな?第一印象なんかは、この際無視だ。第二印象からは改善してかないとな。

「挨拶が遅れたな。俺は九重・葵だ。魔法使いで錬金術師をしている。後ろの二人は白いのがハオで、もう一人がその妹のユエ。彼女達は、んー?…相棒、だな。うん。俺の右腕と左腕だ。所属は今のところ無所属だ。そちらは?」

「へっ!俺はナギ・スプリングフィールド!連合軍に味方してる。そして俺は最強の魔法使いだ!」

「まだ、誰もそんなこと言ってないだろうが…」

「そこ!詠春、てめぇ!聞こえてっぞ!?それにこれから証明してくからいいんだよ!そんな細かいことは!」

なんだか、目の前でコント的な何かが展開されているのですが…。でも、この時期のナギってまだ「千の呪文の男(サウザンド・マスター)」とは言われて無いのな?ああ、アレか?まだ戦争始まったばかりだから異名を付けられるほど有名じゃないとか、か?

「やはり、ナギはバカですね。実にいいですよ」

「このバカ弟子が…」

なんだか他のメンバーもナギのことバカにしてるんですけど?ここまで扱き下ろされるナギって、…ナニ?流石に可哀想になってきたから大丈夫か聞いてみようかな?うん。

「ナギ…。大丈夫か？お前、あんなこと言われてるけどいいのか？」
「アオイ…。お前いい奴だな…。大丈夫だ！あいつ等は後で〆ることが決定してるからな！そんなことよりもよ！アオイ達は無所属なんだよな！？」
「あ、ああ。そうだけどそれが何？」

さっきまでメンバーにバカにされて仲間を追い掛け回して疲れていたのに…。変わり身早いな…。

こいつはアレか？バカなのか？バカだから元気いっぱいなのか？いや、よく観察してみたら［紅き翼］の連中もナギのことをバカにしているようで、実際は楽しんでるな。うん。

ナギも怒ってる様で楽しんでるな。いや、アレは素で怒って楽しんでるのか？バカは難しいな…。何を考えてるのか想像も出来ない。

「俺達の仲間にならないか！？お前達が入ってくれたら［紅き翼］はもっと強くなる！いいだろ！？いいな！？いいって言え！コラッ！！」
「ナギ！落ち着いて！そんなに凄まないでいいから！入る！入るから！！」

アレレー？心の中でナギとバカと［紅き翼］の考察をしている間になんだか仲間になることが決まってしまいましたよ？

…何時そこまでの好感度が上がった？アレか？強い奴なら歓迎だ！っていう単純な判断なのか？…大丈夫かな、［紅き翼］…。あとナギ！いい加減、首から手を離せって！微妙に絞まってるんだよ！

「よぉし！これでアオイ達は俺達［紅き翼］の正式な仲間だ！アル！お前らも自己紹介しとけよ！」
「こほっ、こほっ…。まったく、もう…」

苦しかったなぁ、もう…。んー？おう！？俺の後ろでハオが今すぐに殺さんばかりの目でナギのことを睨んでらっしゃる！？

ああ、ユエ！ハオのこと抑えてて！落ち着いて！ハオ！俺なら大丈夫だから！あとで一身体（剣）のお手入れしてあげるから！　ねっ！？あっ、一瞬勢いが弱まりましたよ！チャンスですね？分かります！ハオ、ここで落ち着いてくれたら頭、撫でてあげます。ダメですか？

…やっと、落ち着いてくれましたよ？済し崩し的にユエも撫でることになりましたが構いません。今回の功労者ですから。ご褒美になるか分かりませんが精一杯撫でてあげましょう！ハァ…。…疲れた。

「まったく、ナギの奴も強引で困った者だ…。俺は近衛・詠春。神鳴流剣士だ。こんなところで同郷の者に会えるとは嬉しいものだな。これからよろしく頼む」
「うん。よろしくね。…なんだか、詠春とは気が合いそうだよ」

詠春とは、いい友達になれそうです。主に苦労性としてですが…。それでも同郷の者同士というのもありますけどね？お味噌汁に白いご飯が今、無性に食べたくなりました…。後で［工房］内から食材持ってきて皆で食べよう。

「私はアルビレオ・イマ。重力魔法を使います。これからお願いしますね？…そう、色々と、ね？」

「儂はゼクト。あのバカの師匠をしておる。これからよろしく頼むぞ？アオイ」
「うん？二人ともよろしくね」

重力魔法ですか？あれって便利ですよね？金属の合成とか。俺個人でやる場合、重力下では金属の比重の問題で混ざり難い物もありますから。

え？精霊さん？彼女達がいるなら簡単ですよ。不思議なくらいアッサリ混ざります。最初コレを見たとき、俺の努力ってナニ？って三日ほど落ち込みました…。皆が慰めてくれなかったら一週間は落ち込んでましたね。

ゼクトさん？ゴメンナサイ…。記憶の薄れた俺には貴方のことが思い出せません…。でも、会ってみるといい人そうです。なんだかんだ言ってても手を貸してくれそうな雰囲気がありますね。だからナギ（バカ）の師匠もしていられるのだろうが…。

そういえばこのメンバーが揃ってるって事はオスティアが解放されたって事だよな？確かそんな情報もあったしなぁ。ん？という事は近いうちにもう一人の筋肉（ラカン）バカが来るんだっけ？

ああ、印象的な事は断片的には思い出すんだけど繋がらないな。どうしてくれようか？とりあえずバカが増える前にナギ（バカ）で慣れるようにしよう。慣れたくないけど、仕方ない…。俺の精神の安定のためだ…。

…詠春、今度酒でも飲もう。今のうちに溜め込んでるモノを出しておかないと胃がもたないからね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――回想…。

Ｓｉｄｅ　詠春

ナギ達の仲間になった葵は共に数々の戦場を駆け巡る事になる。
例えばこんな戦場を前にしたこんなやりとりの光景なんかを…。

……。

「もう少しで到着だ！行くぞ、野郎共！！帝国の連中を蹴散らしてやろうぜ！！」
「ナギ（バカ）は相変わらず元気だなぁ。なぁ詠春？」
「そうだな…。まぁバカ（ナギ）だからなぁ」

葵の言葉に頷く俺だが葵もある意味で言えばバカだと思う。なにせ、葵自身も強者である事もあるから文句は無いが戦闘は葵個人がしなくてもこいつの側にいつも控えるようにしている二人の女性が全て終わらせてしまうのだから…。

想像できるか？数秒もしないうちに敵の真上に途方も無い数の白と黒の剣が現れて降って来るんだぞ？魔法障壁なんか紙のように切れる剣が…。あれはダメだ。防ぐことよりも回避に専念して魔法か、それに類するもので逆に吹き飛ばすでもしなければ無理。

仮にそれを抜けたとしても回避した目の前には姉妹ならではの連携抜群の接近戦で仕留められてしまう。初めて観察した時はホントに苛めかと思った…。分かるか？敵なのに同情したんだぞ？実際冷や汗より涙が出てきたよ…。

「アオイ！詠春！聞こえてるぞ！後で〆るから、覚えとけよ！？」
「ほう…小童（こわっぱ）、毎度の事ながらよく吠えたな？我が君に挑みたくば…。まず、私を倒すのだな」
「姉上、私も加勢するぞ。ふふ、我が君には指一本触れさせはせぬよ」
「ハオ、落ち着いて…。ユエも、ね？いつものことなんだから」
「葵は相変わらず愛されてるな？」
「うん。俺も嬉しい限りだよ。（ボソッ）度が過ぎなければね…」
「アハハハ…ハァ…」

葵が最後に呟いた言葉が聞こえてきて俺は苦笑する事しか出来なかった。いや、ホントに彼女達、ハオさんとユエさんは葵のことになると途端に過保護になるんだ。妹のユエさんはまだマシだけど。姉のハオさんは…。スゴイ…。その一言に尽きる。

この前、戦闘が起きた時の話しなんだが…。まぁ簡単に言ってしまえば撤退する連合軍の殿を任されたんだ。その戦闘で葵の着ている服に傷をつけた敵（バカ）が居たんだよ。傷と言っても少しだぞ？小指ほどのな。でもな？そのことに我慢できないお方が居たんだよ…。

そう、ハオさんだ。

信じられるか？撤退戦だぞ？混戦に次ぐ混戦で乱戦状態にあったのに戦場全体がハオさんの溢れ出る殺気で止まったんだよ…。敵も味方も、な。もちろん俺達［紅き翼］もだ。

その後は思い出したくも無い。地獄と言うのも生温いと言わんばかりの光景が…。あ、ダメ。思い出しそう…。マジで勘弁だわ…。

「ハオ、ユエ。今回は俺も前に出るから戻ってくれる?」
「なんと!?我等を使ってくださると!?」
「姉上…。興奮し過ぎだ。よろしいので、我が君?」
「うん、大丈夫。それにたまには動かないと勘が鈍るからね」

葵が珍しく前に出て戦うらしい。お前…。やめろよな…。下手したらあの時の光景が再現されちゃうだろ?さっき思い出しかけたばかりだからマジで勘弁なんだけど…。

と言うか戻るとか使うってなんだ?アレか?過保護なのに耐えられなくなって彼女達に実家に帰ってもらうって事か?実家の方でお手伝いさんみたく使うって事か?

…いいじゃないか!俺の精神的にも大変、素晴らしい!ただでさえナギ(バカ)というモノを抱えている俺としては歓迎すべきことだ。このままじゃ俺の身体ももたないからな。いくら鍛えているといっても限界はあるんだよ…。

ハオさんが、その…。ヤンチャした時は三日間魘されて、体重が四キロも減ったんだ…。お陰で前よりも随分引き締まった身体になったが、それはそれだろ?それは、ともかく負担が減るなら、こんなに喜ばしいことは無い!是非やってくれ!主に俺の胃の健康のために!!

「アオイ?何の話しをしてるんだ?」
「ん?まぁ見ててよ、ナギ。…二人ともお願い」

「「承知！！」」

彼女達から眩しいほどの光が奔ったと思って驚いていると次の瞬間にはハオさんとユエさんの姿は無く。代わりにと言うように葵は二振りの白と黒の美しい剣を持っていた。アレ？消えた？どういうことだ…？まさか…！？

「なっ！？小太刀なのか？」

「おいおい！なんだよ？これは？」

「興味深いですね…」

「うむ。あの者等は一種の精霊か何かなのかの？」

「これが九十九神にして相棒。そして最強の矛。その名も姉妹刀「陽月」。俺の愛刀達だ…」

「九十九神か…。実際に見たのは俺も初めてだな。しかし、これは剣としても見事だ…」

初めて見た。現代のような使い捨てが当たり前の世界で九十九神とは…。いや、それだけ古い品なのかもしれないな。なんにせよ驚いたな…。

「詠春、一人で納得してないで説明してくれ。そのツクモガミってなんなんだよ？」

「ん？ああ。俺の故郷の話しなんだがな？物も長い時間経つと魂を持つって言い伝えのようなものがあるんだ。だが、これは…。いや、彼女達に悪しきものは感じなかった。大抵、刀剣などの武具は血を浴びる事によって変異するのに彼女達には、それが無い…。ということは余程、大事に使われてきたのだろう。それに…」

「ああ！詠春！説明が長い！要するになんなんだよ！？」

「長いってお前は…。あのなぁ？彼女達はそれだけですごい事なんだぞ？これ程にまでなると最早、聖剣や神剣と言っても過言じゃ無

いのに…。はぁ…。まぁ、ナギだしな。つまりな?彼女達は剣の精霊みたいなもんだよ」

「おう!それなら分かりやすいな!」

このバカは…。絶対、分かってないな。賭けてもいい。実際すごい事なんだ。武器の九十九神なんて珍しいモノは。

武器はその性質上、必ずと言っていいほど血に染まり血に溺れるモノが大半だ。なのに…これには殺傷武器として刃に曇り一つ無い。単体でアレだけのことが出来るんだ。さぞ、沢山の血を流させてきただろうに。…美しいと素直に思ってしまう。

「ツクモガミですか?興味深いものですね」

「なるほどの。これも東洋の神秘というものか」

アルとゼクトさんが興味をそそられている。俺も分かる気がする。これだけの美しさと内包された魔力。俺も剣士だ、目を奪われる。

「ふふん。彼女達は美刀だろ?詠春」

「あ、ああ、これはすごいな…」

葵…。お前が羨ましいよ。これだけの業物、いや、大業物達がお前のことを慕っている。剣を使う身としてお前のことを尊敬するらするよ。

「…あげないからね?」

「そんなこと思ってないわ!このバカ!」

こいつは…!素直に尊敬してみればコレだ!まったく!

「…少しも？これっぽっちも無い？」
「……少しは思いました。ゴメンナサイ」

ホント、ゴメンナサイ。少し、欲しいなと思ってしまいました。

「ううん。こっちもごめんね？意地悪なこと言って」

葵よ？剣士に大業物の刀剣が欲しくないのか？と言われれば、大抵の奴は欲しいと答えると思うぞ？あの質問はダメだ。俺もまだまだ未熟だな…。

「なんか知らんけど、この話しは終わりだな？」
「そうですね。おや？そろそろ時間のようですよ？」
「よしっ！アル！それに他の奴らも行くぞ！俺達に敵は無い！必ず勝つぞ！」

今回の戦場で俺達は遊撃の任務を任せられた。現状の戦闘は連合軍が不利なようだ。だが、俺達［紅き翼］が、この戦闘で連合側を勝利させてみせる！

そしてこの戦闘では［紅き翼］がその絶大な力を振るうことで勝利に終わった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　詠春

――回想、完。

第二話「紅き翼との出会いと詠春の回想と」（後書き）

どうだったですか？
上手く出来ましたかね？
これからがんばりますね。ハイ。
毎度の事ながら！
感想＆アドバイス＆参考になりそうな二次物の紹介！などなど…。
あったら何でもお願いしますね！？

第三話「葵と悪魔達とバカと」（前書き）

三話を投稿！
ごめん…。今はネギま！を書くのが楽しくてたまりません。
それじゃ、続きです。

１０／２０修正。

第三話「葵と悪魔達とバカと」

Ｓｉｄｅ　葵

今、俺達は次の作戦地に向けて移動している。まぁもう昼時と言うこともあってご飯の準備中なんだ。今回の当番は詠春。何を作るのかと見ていれば、どうやら鍋料理にするらしい。

久しぶりの鍋だ。日本人として、これは外せない。本当は、ここで日本酒なんかを飲みたいけど、この近くはまだ戦闘地域に指定されているから何が起きるかわからないから我慢…。我慢だ、葵…。今から鍋だ。そう鍋料理だ！それで十分じゃないか！うん…。

お腹、空いた…。お義父さん（詠春）ご飯まだ～？？

「誰がお義父さんか！？もう少し待ってろ！今から食材を入れるから！」

…なぜ、分かったのだろう？？詠春には名前が聞こえていたはずなのに…。なかなかヤルな！詠春も！

「そんなにちまちま入れてないで一気に入れちまえよ！」
「「ああ！？このバカナギ！！何してんだ！？」」
「な、なんだよ？じれったいから食材を入れただけじゃねぇか…」
「このバカ！鍋料理はな！食材を美味しく食べるための順序というものがあるんだ！バカ！」
「葵の言うとおりだ！このバカ！肉から入れる奴があるか！バカ！」

「二人して二回もバカって言われた!?上等だてめぇら表に出ろ!」
「…バカだバカだとは思ってはいたけど、ここまでバカとは…。バカナギに教えてやる。いいか、バカ?今俺達は外に居る。分かるか、バカ?もう既に表に居るんだよ。分かったな、バカ?」
「今度はバカバカ沢山言われた!?葵!てめぇ覚悟しっ!!ぷげろば!!??」
「小童、我等のことを…」
「忘れてもらっては困るな」

すげぇ…。あのナギがゴム鞠のように飛んでいったよ…。もしかしてこの二人、ナギより強い?確かに昔は加減が分からなくて注げる限りの魔力を注いだけど…。

アレ?今、二人の魔力量を感じてみたんだけど。んー?前より増えてる?なんでだろ?ああ、成長してるんだね?うん。お兄さんは嬉しいですよ!家族の成長を喜ばないことなんてありません。今まで気付いてあげられなかったから今度お手入れする時は念入りにやってあげよう。

感謝を込めて!

「ふふ、ナギは学習しませんね?見ていて飽きませんよ」
「…学習しないからあんちょこなどに頼るようになるのじゃ。師匠として情けないの…」
「よし。出来たぞ!皆、食べろ!」
「よっしゃー!肉は頂いたー!!」
「あっ!?この!肉ばかり取るんじゃない!野菜もちゃんと食べろ!」

詠春…。黙々と作業してたのね?そしてナギよ?お前いつ帰って

きたの？かなりの飛距離だったよね？転移か？いや。こいつ転移魔法全般使えないし…。瞬間移動でもしたのか？それともこれがギャグ補正とかいうやつか？ああ、ダメだ。脳に栄養が足りない俺も食べよう。

「我が君。こちらをどうぞ。既に確保しております」

「ん？ありがとう、ユエ。ん～、美味しい。やっぱり鍋はいいね」

久しぶりの鍋はいいねぇ。なんというか、精神的な事が癒されます。

「はい。皆で食すことの出来るこの料理は実に良いものと私も思います。…あ、お代わりですか？はい、こちらをどうぞ」

お鍋の具材をユエがよそってくれます。よく気が付く子に育ってくれて嬉しいですね。受け取る時にお礼を言うのを忘れてはいけません。誠意は大事にしていきたいですからね。

「うん、ありがとうね。あの三人にも食べさせてあげたいな。今度、紹介がてら召喚しようかな。二人はどう思う？」

「私は良いとは思うのですが姉上が…」

「ん？ハオは反対なの？」

…これは、もしかしたら家庭内崩壊でしょうか！？だとしたら直ぐにでも解決に向けて動かなければなりません！戦争？そんなの後ですよ！俺は家族が無事なら構いません。まぁこの目にとまる人ぐらいなら助けることは吝かではありませんが…。それよりも今は家族の危機です！

「反対というわけではありません…。しかし、彼奴等（きゃつら）は我が君に対

して…その、馴れ馴れし過ぎるので、私は…」
「???」

違うみたいです。とりあえず家族の危機ではないようです。安心しました。でも、それだとなぜにハオは渋っているのでしょうか？ん？ユエが近くに来て俺の耳元で話しかけてきました。ユエ達は美人さんですからお兄さん、ドキドキですよ？

「我が君。要するに姉上はあの三人に嫉妬しているのです。素直に我が君に甘えることが出来る、あの者等が羨ましいのですよ」
「ユエェェッ！！？？な、なな何を言っておるのだ！！そ、そそそそのような事は…ゴニョゴニョ」

なるほど…。理解しましたよ！要するに家族としての触れ合いが不足していたんですね？わかります。俺も長い間、皆と離れて暮らすと考えたら寂しくて耐えられません！長く生きたことの弊害ですかね？ごめん、ハオ。気付いてあげられなくて！うん。ここはやっぱり…。

「ハオ？甘えてみる？」
「わ、わわわ我が君！！？？何をなさいますか！？お、おおおおお戯れはやめてくだされ！」
「…嫌だった？」

ん～？触れ合いといえば、ハグだと思ったのですが、違ったのですか？俺としては頑張ったつもりなんだけど。

何度も言いますがハオ達姉妹は美人さんだからお兄さん、ドキドキです。あと俺達を見て囃し立てるように[[rb:紅き翼 > バカ共]]！からかうんじゃないよ！？今の俺はもういっぱいいっぱい

なんだから！

「そ、そそのような事は、決して！！！」
「じゃ、いいよね♪」
「っ～～～！！」

嫌じゃ無いそうです。ここからは家族の触れ合いタイム！スキンシップは過度にならないくらいが適切です。やり過ぎるとウザがられて嫌われてしまいますから。

喫茶店時代に娘さんの居るお父さん方がそう話してました。とても、参考になります。

ん？ハオの顔が真っ赤になっています。名残惜しいけど、ここまでです。やり過ぎダメ！絶対！…だから！バカ共！からかうんじゃない！喧嘩売ってんのか？今の俺なら買うぞ！！コラ！？

「良かったな？姉上」
「う、うむ…」

もちろん、ここでは撫でることはしませんでしたがユエとも後日しっかりスキンシップ取ったのは余談だから省きます。だが！ここで一つだけ言っておこう！一緒に寝るのは勘弁してください…。マトモに寝られませんでした…。

「とにかく、あの子達の事も紹介したいし今度、召喚してみよう。ハオ、いいよね？」
「っ～～！んんっ！…我が君がお決めになられた事です。否やはありません」
「よし、それじゃ…」

…食事を再開して食べようとしたらお鍋の上にラカン(どバカ)が降ってきました…。詠春以外は素早く自分の分のご飯を確保して退避しています。詠春、大丈夫かな？火傷してなければいいけど。モロだったしね。

それにしても、このラカン(どバカ)。…シネバイイノニ。……ハッ！？また、思考が黒くなった気がします。気を付けなければいけません。だけど…。

ユルセマセン！

「お食事中にしっつれ～い！！」
「っ！？何者だ！？曲者めが！」
「おほっ！？色っぽい姉ちゃんが二人も居るじゃねぇか！…おかしいな？情報には無かったが…。まぁ細かい事はいいや！俺は放浪の傭兵剣士のジャック・ラカン！［紅き翼］さんよぅ？ちょっくら喧嘩に付き合ってくれやぁ！！」
「五月蝿いぞ！下郎が！我が君は食事中だ！即、消えろ！」
「我が君？我が君、大丈夫でしたか？火傷等はしませんでしたか？我が君？」

ハオ…。今、このバカを帰すわけにはいかないんですよ…。お話しなければならないことがあるのですから…。それとユエ、火傷はしていません。俺よりも詠春の方が酷いです。もう一度言いますがモロだったんですよ？飛んだ鍋ごと熱した出汁を浴びてるのだから。でも、平気みたいです。咄嗟に気で強化したからですかね？いや、そんなことより、まずは…。

「…し…き…や…」
「我が君？今なんと？」
「お仕置きしてやる！！食べ物を粗末にしやがって！！そこの筋肉バカ！！覚悟しやがれ！！」
「「我が君！？」」
「ハッ！いいねぇ！俺の目的は最強とか言ってるナギ・スプリングフィールドって奴だが…。丁度いい肩慣らしだ。お前から来いや！！」

肩慣らし？いい度胸だ！その余裕の顔を俺の持つ最大戦力で叩き潰してやる！！

「暗き泉！仄暗き世界！今ここに！理を繋げる！召喚！オリビエ！リビエラ！シルビア！」

「ハ～イ！召喚に応え来たわよ。どうしたの、葵？いつもより荒々しい感じがしたけど」
「そうよ～？葵ちゃん。何があったの～？意地悪されたならお姉さんが「めっ！」ってしてあげるからね～？」
「お兄ちゃん…。苛められた？そいつ…。…殺る？」

オリビエ荒くなってごめん。リビエラ、その優しい口調で今少し冷静になれました。少しだけどな！シルビア、君はいつも優しいね。ありがとう。一緒に巨悪（どバカ）を滅ぼそう…。

「オリビエ、リビエラ、シルビアよく来てくれた…。今回は目の前に居るこの「ド」バカを懲らしめたい…。力を貸してくれ…」
「葵が、ここまで怒るなんて…。九十九神の姉妹！この筋肉バカはなに遣らかしたのよ！？」
「その…これはだな…」
「なによ？そんなに言い難い事なの？」
「ここは私が話そう。姉上、他の者等を避難させてやってくれ」
「う、うむ。では、ユエ任せたぞ？」
「うむ。…それでだな。此度（こたび）の事だが理由は簡単だ。…そこのバカ者が食材を粗末にしたから我が君は怒られておられるのだ」

フフ、フフフ。こっちの世界に来た当初は何度、空腹で倒れ餓死しかけたことか…。食べ物を粗末にする者には一神（俺）の鉄槌が降るのだ！覚悟するがいい！地獄という名の世界を見せてやるぅ！！フフ、フハハハハッ！！！

「あちゃ～…。それはダメだわ。葵に、それは禁止事項だもんね…。わかった。なるべく穏便に片付けるように頑張ってみるわ…。ほら？二人も行くわよ」
「は～い。悪い子には「めっ！」ってしちゃうんですから～」
「お兄ちゃんの仇…。討つ…！」
「いや、死んでないから…」

オリビエ、訂正ありがとう。シルビア、俺はまだ死んでません。…理性は死にそうだけど。

「やっと話しはまとまったみたいだなぁ？」
「アンタ…。ホントにバカなのね？あたし達が話してる間に逃げてれば無事に居られたのに…。もう、それも無理ね…」
「ハッ！随分、威勢のいい姉ちゃんじゃねぇか？…しかし、なんだ

ぁ？女の悪魔ばかりだな。奴の趣味か？“軟弱”な野郎だな！ハッハッハッ！！」

――ピシッ…！

「…オイ、クズ？お前、今なんて言った？軟弱？あたし達のマスターをバカにしたな？そうなんだな？…いい度胸だ！てめぇの腸（はらわた）は何色だ！？ブチマケタイノカ！？いいだろう！今すぐ地べたにその空っぽの頭をめり込ませて土下座させてから、ブッコロシやる！！」

「おおぅ！！？？なんだ！？このプレッシャーは！！力量的には公爵級！？いや！それよりもこれは？？もっと上だと！！？？」

「フ、フフフフ…。軟弱？この俺が、こんな筋肉バカに言われた？フフ、フフフ…」

オリビエのプレッシャーに怯むような奴に俺は軟弱と言われた？いいよぉ、いいよぉ！いい感じにキレてきたよ！ただでは殺さん！まずは、正座させての説教を俺が満足するまでやる…！全ての話しはそれからだ！！

「あ、あ～！？オリビエちゃん～！落ち着いて～！？早まっちゃダメよ～！葵ちゃんも落ち着いてね～？ね～？？あ～ん！シ、シルビアちゃん～！？オリビエちゃんを止めるの手伝って～！」

「オリビエ、ダメ」

「なんだい！？シルビア！お前もあたしを止めるのか！？」

「私が…。最初に…。殺る…！」

「んんっ！！？？またプレッシャーが増しただと！！？それもさっきよりずっと強い！！なんなんだ！あの嬢ちゃんは！？」

「きゃ～！！シルビアちゃんまでキレてます～！？あっ！？葵ちゃ～ん！二人を止めてくださ～い！！」

「…二人とも徹底的にやっていい。ただし！殺すな。まだ、言い足りないことが山ほどあるからなぁ…」

そうだよ。たとえ許せないことがあるとは言え殺しちゃいかんよな？…ギリギリまでは殺るけどな！

「ちっ！…わかった。でも！ギリギリまでは死なす！！」

「ギリギリ…。難しい…。（ボソッ）あ、事故なら…。イイ、かな？」

「うわ～ん！殺すことはなくなったけど～、葵ちゃんも二人も怖いよ～！というかシルビアちゃん！？事故に装ってとかダメだからね～！」

「わかった…。じゃ、善処する…」

「政治家的発言ほど～、信じられないものなんて無いよ～！？絶対ダメだからね～！」

「…わかった…」

シルビア、何気に君が一番怒ってるのかな?優しい子だから家族をバカにされたのが我慢ならなかったのか?でも、事故で殺っちゃうにはいかんよ?それとそんな政治家みたいな言葉いったいどこから覚えてきたの?お兄さん心配ですよ?最後にリビエラに念押しされてるけど…。うわぁ、すっごい不満そうにしてる。やっぱりラカ(カ)ンでも生きているんだから殺すのはいかんよな。うん。時間が経つと頭が冷静になってきた。

「なんで不満そうなの~!?大体、今すぐ殺しちゃったら簡単すぎるじゃな~い!?こういうことは捕獲してからジワジワと殺るからイイのよ~??」

「「いや!リビエラの方が酷いから!!」」

「???」

リ、リビエラが怖い…。簡単に殺そうとした俺らよりも悪魔が居る…。あ、この子達悪魔だった…。…ならいいの、か?いやいやいや!ダメダメダメ!そんなこと許したらとてもじゃ無いが放送できないような事になってしまう!!止めなくては!

「…今度はなんだ??プレッシャーというより悪寒のような感じがしたが…」

「え~!?何でですか~?殺していませんよ~?ちょっと痛いかもですけど~、生きているんですよ~?ほら~♪問題ないじゃないですか~」

「いや、リビエラ?それは…。な、なぁ?葵」

「う?うん。リビエラ?とりあえず今回は俺も暴走して悪かったから。適度にボコる方針に変更しようと思うんだ。…だから、ね?」

オリビエ…。ここで俺に話しを振らないでくれよ…。とりあえず、俺自身が殺す気が無いことをアピールして事態を軟化させよう。これでダメだったら…。ラカン（どバカ）、さよなら…。君の事は三秒ほど忘れないよ！！

「あぅ～。そうですか～。残念です～。でも～…」

「いい加減、やるのか、やらないのか、ハッキリしてくれねぇか？」

「「黙れ！バカ！！お前の命がかかってるんだから黙れ！このバカ！」」

黙れ！バカ！死にたいのか！？誰のために頼んでると思ってるんだ！…この子達を呼んだのは俺だけどさ…。お前も死にたくないだろ？

「黙れとバカを二人同時に！？それも二回も言われた！？というか俺の心配してくれるのか？？」

「「いや、どうでもいいな！！」」

はい。どうでもいいです！だって、お前バグキャラだろ？殺しても死にそうにないじゃん。それにバカだし。ギャグ補正もかかるさ！

ん？？…な、なんて完璧なんだ！？これじゃ死なないんじゃないか？……試すか！？ここで殺るか？殺っちゃうか！？

いやいやいや！ダメダメダメ！間違って死んだらどうするのさ！？誰がこっちで主人公―名前は忘れた―を鍛えるのさ！……俺が鍛えるか？

いやいやいや！ダメダメダメ！やってやれないことはないけど、どうせ教えるなら女の子がいい！！なによりも俺が面倒くさい。却

下だ！却下！アレ？そういえばシルビアはどこに？？？

「自信満々に否定された！？どうでもいいって言われた！？お前らひでぇな！！？」

「お前…。五月蝿いな…。少し黙れ…」

――ドゴンッ！…グシャ…！…。

――ポタッ…ポタッ…。

「「「ヒッ！？」」」

シ、シルビアァァアアア！！？なんだか聞こえてはいけない音が聞こえていたのですが！？それにハルバートから滴ってる血が…。なんていうか…。その…。多くないか！？

血が、さ。ほら？まるで横たわってるバカの周りが血の池のように…。これってダメじゃね？死ぬか？死ぬのか！？ギャグ補正はどこいった！？ラカン（ドバカ）、カムバック！！

「大丈夫…。生きてる…。（ボソッ）多分・・・」

「「「今！多分って言った！？」」」

「むぅ～…。言って…ない」

「か…勝手に…殺すんじゃ…ねぇよ…（バタッ）」

「ア、アアアルゥゥウウ！！治療を！！治療魔法をぉぉおお！！！」

とりあえずジャック・ラカンという偉大なバカが犠牲になって今回の事件は終幕を迎えた。

さよなら、バカ！君の事は…。最早、遠い記憶の彼方のそのまた彼方にて忘れな……いや、忘れそうだな…。ごめんラカン（どバカ）、俺は筋肉バカより家族と綺麗な女の子を主軸に覚えていたいんだ！！さよなら！バカ！もう会うこともあるまいよ！！

完！！！！

いやー。めでたし！めでたし！ははははは！

「死んでない！俺は死んでねぇからな！？生きてるからな！！」
「「「「ちっ！生きてたか…」」」」
「お前らホントひでぇな！！マジでよ！！」

ちっ！生きて…じゃないだろ…。殺しちゃダメだろ？悪魔達三人娘も九十九神の姉妹も似たことを考えたのかラカン（どバカ）と目が合いそうになるとサッ！と視線を逸らしてますよ！？

でも、まぁアルの治療が間に合ってよかったじゃん。流石はラカン（カン）！ギャグ補正は最強だな！…ってかよう？なんで、アレで生きてるの？あの出血量から考えてありえないでしょう？身体の二割以上の血は流れてたよ？

……アレか？バカ過ぎて、あの世ですら拒否されたとかか？

だとしたら、もうラカン（どバカ）無敵じゃね？正直、俺の手に負えないんですけど。ハァ…。またバカが増えるのか……。

詠春、次の戦闘、終わったら飲みに行かない？俺が奢るからさ？…あ、行く？よしっ！飲もう！…わ、わかってるって詠春さん、戦闘が終わったらダヨ？今じゃないヨ？ホントダヨ？

「なぁ？アオイ。とりあえずそいつ等、誰なんだ？いや、悪魔召喚っていうのは何となくわかってるんだけどよ」

「それは私も気になりますね。皆さんのこと先程から観察していましたが三体とも爵位で言えば公爵、そちらの小柄なお嬢さんは大公爵に迫るほどと感じられます」

「そうじゃな。だが、こやつ等、力だけで爵位は持ち合わせておらんようじゃ。何よりも力に関する制約の鎖が無さ過ぎる。見たところお主との繋がりだけが異常なほどに頑丈に出来ている。これはどういうことじゃ？」

「葵、これだけ強力な悪魔をよく使役できるな。感心するぞ。ここまでの者など、そうは居ないだろうな。どうやったんだ？」

うわーい。皆が興味ありまくりだよ。ちゃんと紹介したかったのに…。これもそれも―ラカン（筋肉バカ）のせいだ！ついでにポストが赤いのもみんなこいつのせいだ！他意はない！ただの腹いせです！

アルとゼクトさん、この子達に爵位がないのよく分かりましたね？すごいです。

でも、なんて答えようかな？「イヤー、数百年前から自分が手ずから育ててますからー」なんて言えるわけないじゃん！！悪魔を育てられるほどの長生きって何！？うわー…どうしよう。

うん。とりあえずこの子達に自己紹介してもらおう！その間に何か考えられればいいじゃない！？…おほんっ。それじゃ皆、自己紹介してね？

「はいはい。あたしはオリビエ。戦闘では前衛を担当してるわ。趣味は家事全般と敵を叩きのめすこと。あたし達、葵とは彼是…ん～？三百年くらいの付き合いかな？」

「私はリビエラと申します～。主に後衛からの広域殲滅から対個人の狙撃までこなせますね～。趣味は～…。ヒ・ミ・ツ・です～♪そうね～。葵ちゃんには、私達をここまで育てて貰った恩もありますしね～？」

「シルビア…。前衛…。お兄ちゃんが…。死ぬまで…。一緒にいる…」

「バカ。死なせるかよ。あたし達のマスターだぞ？」

「そうですよ～？それに私達も、お護りしているのですから～。万に一つもありませんよ～」

「ごめん…。言い方…。悪かった…。お兄ちゃんとは…。ずっと…。一緒…。うん…」

おぅ…。この子達、素で俺の実年齢が異常なほど高い事と、この子達を俺が育てたことをバラしてくれましたよ……。

どうしよう！？どうしたらいいの！？吸血鬼とかに勘違いされたらイヤ過ぎる…。追いかけられる生活なんてイヤですよ！

いやまぁでも、見つからない自信ならあります。伊達にこの七百と数十年、俺の存在を隠して生きていません。認識阻害の魔法はほぼ完璧です。

たまに居る目撃者やこのことを知った人は記憶をこれでもかと言うくらいメルヘンな記憶に変えておきましたから周りから見たらちょっと頭の可哀想な子としか見られません。それ以外は普通に生活できますよ?壊したわけじゃありませんからね。うん。

……俺、悪くないですよ?ホントですヨ??

「葵、なんだかオリビエ…さん、か?この子、三百年がどうとか言ってたような気がしたんだけど…。どゆこと?」

「私も、気になりますね。彼女達にも興味が絶えませんが…。アオイ、どういうことでしょう?」

「うむ。儂も気になるの。そこ悪魔娘、リビエラと言ったか。彼女が言う、お主が育てたというのが気になる」

んんー??ナギ以外の三人が彼女達の言葉に、これまた興味をそそられたようです。いったいどないしょー??いっそのこと正直に話しちまうかな?それでダメだったら…。イジるか?こう…頭の中を、ね?イジっちゃおーか!?

アレ?よく考えたら俺の戦力って現時点で言えば最強クラスじゃないか??俺にハオとユエ、それに悪魔三人娘を加えて…。最高じゃないか…!我が軍は圧倒的ではないかね!?

これで足りなくても精霊さん達も居る!彼女達が居れば魔法に関して言えば三属性を封じることも出来るはず!!ヤっちゃうか!?…いや、落ち着け、俺。まだ、そうと決まったわけじゃないんだから…。とりあえず、話し合おうか?みんな?あのね…。

「ちょっと、あんたら?随分、葵に気安いけど何なの?」

「いや、俺達は…」

「っ！？まさか！あのバカの仲間！？葵の不老の秘密が知りたくて、あのバカと一緒に襲ってきたのね！？くっ！葵って、たまに抜けてる時があるから、そこにつけ込んで騙そうとかそういうことね！？そうなんでしょ！？」

「は？いや、俺達のはな…」

「黙りなさい！こうなったら問答無用よ！！葵を…。あたし達のマスターを騙そうなんて！？そうはさせないんだからね！！葵はあたし達が護るんだから！！」

…おぉ！？俺が説明しようとしたらオリビエがいい感じに盛り上がっていらっしゃる！？

マズくない？これ？マズイよね？止めないと不味いですよ！！いやね？勝つことなら出来ますよ？出来るけど…。やりたくないです。やったら最後…。殲滅戦になっちゃうからやりたくありません！大体なぜ、やりたくないかと言うと後始末が面倒臭いからです！！

…ん？ああ！？オリビエさん！落ち着いてってば！違う！違うからね！誤解なんだって！詠春！ちょっと待っててくれる？この子達に説明してくるから！

オリビエさん！落ち着ぃ…。なにそんなにムクれていらっしゃるの？…え？さん付けして他人行儀みたいにするな？今、この状況ではどうでもよくないか！？…なに？どうでもよくない、これは気持ちの問題、大事な事なのよ！？ですか…。

――説明中です。しばらくお待ちください…。

「オリビエ！ちょっと、こっち来て！」
「なによ！？こいつら懲らしめるんだから用件は早くしてよね！」
「だから！それは誤解なんだって！」
「誤解って何よ！？」

――説明中です。もうしばらくお待ちください…。

「…話しは理解したけど…。それはともかく、あの薄笑いしてる魔法使い然とした男って何なのよ！？」
「薄笑いって…。彼はアルビレオ・イマ。ちょっと悪戯っ子だけどいい人だよ？」
「悪戯っ子でいい人って…。だって、あいつ、さっきからシルビアを見る目が怪しいんだけど？それにローブからはみ出てるスクール水着とネコミミカチューシャはなんなのよ…？」
「それは…」

――説明中です。ごめん…。もうしばらくお待ちください…。

「ともかく！俺は騙されてないの！この人達は仲間なの！」
「そんなの信じられないわよ！見るからに怪しいじゃないの！」

「アルはいい人だよ！その…。ちょっと趣味が特殊なだけだよ！」
「はぁ？特殊って何よ！？ますます怪しいじゃない！」

――説明終了です。大変、お待たせしました。

「…はぁ、はぁ。よ、要するに、こいつらは今、行動を共にしているやつらで。葵は騙されたわけじゃないのね？」
「そ、そう…。はぁ、はぁ…。大体、ナギが…、ああ、このチームのリーダーみたいな人がバカなんだから。そんなこと考え付くわけがないよ」

疲れた…。やっと説得できた…。なんだか主にアルのことで揉めてた気がするけど…。ハァ…。

説得するまで、随分と時間がかかっちゃった…。もう夕飯時だよ？ラカンが来た時がお昼だから…。ホントに疲れたわー。

シルビアなんて天気がいいものだから木陰で寝てるしさ。俺もお昼寝したいなぁ。リビエラはリビエラでシルビアのこと膝枕して、こっちのこと微笑ましそうに見てるだけだし…。

リビエラも手伝ってくれても、よくない？んー！とりあえず戻ろうかな。あ、リビエラ！シルビア起こしてくれる？皆のところに戻るからさ。ほら、オリビエ、行くよ！

「おお、アオイ！遅かったな！飯は出来てるぞ！」

「話しはユエさんから聞きましたよ。今まで大変だったようですね？」

「そうじゃな。アオイ、何か困ったことがあったなら儂も手を貸そう。いつでも言うがよいぞ」

「葵…。俺達は仲間だ！何か困ったことがあったら言ってこい！力になるからな！」

「不老ね～？オレは興味ねぇからパスだな。どうでもいい。…おっ！？コレうめぇな！」

何から突っ込んだらいいのだろうか…。

人が必死にオリビエを説得しているうちに、皆は歓迎モードですよ？なにこれ？あ？何？ユエ。…勝手に話して怒ってないか？ですか？怒ってませんよ？どういうことにせよ俺のことを思っての行動だったのだから。怒れませんよ。どうせこの後、皆には話す予定だったからね。

ユエの気遣いには感謝です。言い方は悪いけど手間が省けました。ありがとう、ユエ。え？ハオも説明してくれたの？ありがとね？大変だったでしょ？本当にありがとう。

さて、ここで俺は気付きました。

え？なにに？って。……なんでラカンが一緒にご飯、食ってるんだよ？いつ和解した？敵だったじゃん！何？アル、なにがあったの？…俺達を待ってる間にラカンの体力が全快したからってナギと喧嘩してたら仲良くなった？

え？

なにそれ？バカなの？アレか？バカ同士なにか惹かれるものでもあったのかね？それにしても打ち解けるのが早くない？ああ、バカには時間は関係ないのか…。コレだからバカは…。まぁとりあえず受け入れてくれた皆には感謝しなければいけません。礼節は大事な事なのです。

ありがとう、皆…。

「我が君。食事はこちらに用意して御座います。ほら、お前達も食べるが良い」

「ありがとう、ユエ。いやー、オリビエの説得していたらお腹、空いちゃったよ。ん？コレ、美味しいね？誰が作ったの？今日の当番は詠春だけど…。味付けが違うよね？だれ？」

ユエ、いつもありがとう。ホントに気立てのいい子です。…こいつらは俺らが戻らなかったら最後まで食べ尽くしてしまうから危険です。そうなった場合、ご飯抜きですからね…。

仲間に成りたての時、初めての野宿…。その時まで知りませんでした。この［紅き翼］内で食事は早い者勝ちなのです…。取りそこねたら最後…。最初そのことを知らなかった俺は久しぶりにキレました。

今回ほどじゃありませんでしたよ？粗末にしたわけじゃないですから。ほどほどです。ええ。

しかし、料理を一口食べて疑問。今日の食事当番は詠春のはずなのに味付けが違います。詠春の料理は生まれが京都だけに少し薄味です。でもコレは…。どこか…。そう、これは俺好みの味付けに近い感じです。誰が作ったのかが気になります。…褒めてあげたい。

いい仕事しています。

「ハッ。それは…姉上の手による物で御座います。どうやら、お口に合いましたようで姉上も、さぞや安堵したことでしょう。…ほら、姉上！こっちに来んか。恥ずかしがるでない」

「ユ、ユエ？しかし、だな？初めて我が君にお出ししたのだ。私の作った物で満足していただけたのかが不安で、な？」

「姉上。我が君は姉上の料理を美味しいと言っておるではないか？自信を持つが良い」

「そ、そうか？ユエ。…わ、我が君？本当にお口に合いましたでしょうか？」

なんと？作ったのはハオでしたか。料理できたんですね？知りませんでした…。いつから練習していたのでしょうね？気になります。

でも、こういうことを聞くのはデリカシーに欠けるかもですし、聞きませんよ？まぁ、どうしても聞きたくなったら聞いちゃうかもしれませんけど、ね？とにかく、ハオに料理が美味しかったことを伝えなくてはいけません。言葉にしないと伝わらないこともあるのですよ。

「ハオの料理、美味しかったよ。ありがとう。また作ってくれると嬉しいな♪」

「あ、有り難き幸せ！！是非に作らせていただきます！！」

「はは。そんなに力まなくてもいいのに。でも、ありがとね」

実際の話し普通に俺好みの味付けでした。また食べてみたいです。ご飯は、一日の糧ですからね。どちらかと言えば好きな味で楽しみたいですよ。その点ハオは見事に俺の好みを把握していたようで嬉しい限りです。ハオ、ありがとうね。

「あら？ホントに美味しいわね。ハオもやるじゃない？」
「本当ね～。あ、これも美味しいわ～」
「うん…。美味しい…」
「ふ、ふふん。当然だ！我が君にお出しするものだからな！下手な物をお出しするわけにはいかんよ！」

オリビエがハオの作った料理を褒めています！？彼女、アレでなかなかに料理が上手いのですよ？いつでもお嫁さんに出せるほどです！

誰にもやらんがな！！この子達が欲しいなら最低でも俺よりも強い奴でなければ安心して任せられません！！まぁ、その前に彼女達自身の意志を尊重しますがね？

でも！！チャラ男だったりしたら…。泣きますね…。泣きながら撲殺します！！メッタメタに顔の形が変形するまでボコボコにしてやります！！殺しませんよ？死ぬギリギリのところ…。つまりは、ですね？…三途の川を渡る直前まではやめてやりません！！

話しが逸れましたね…。

……。

……。

こんなドタバタした一日でしたが楽しかったです。騒ぎに騒いでの大騒ぎ。

それにラカンですが彼も、現在も一緒に行動しています。敵方に

雇われた傭兵なのにいいのかな？なぜ居るのか理由を聞いてみたらですね？

…「お前らと居るほうがこれから楽しくなりそうだから」なんです…。

ああ、やっぱり、この人バカなんだな、と改めて思いました。だって、傭兵ですよ？帝国からお金貰ってるんだから働きなさいよ。

なに？…「何度か襲撃（ケンカ）したから、一応の義理は果たした」って…いいのか？それってさ？今後の信用問題とかになったりしないよな？

傭兵だけじゃないけど信用って大切よ？目に見えない事が大切な事ってあるんだから。あ、そうか…。こいつはバカだった…。考えてるわけないか。ダメじゃん。でも、結果が出るんだから、ラカンもすごいよな…。バカだけど…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――数週間後…。

［紅き翼］のメンバーに帝国の占領下にある地…。グレート＝ブリッジ奪還作戦への参加要請が打診された。［紅き翼］はこれを受諾。奪還作戦の作戦地に向けて出発した。

第三話「葵と悪魔達とバカと」（後書き）

今回は悪魔三人娘の登場でした。
ちょっと無理矢理だったけどね？
会話文が難しい…。失敗したか？
もう少し考えたほうがいいか…？
それじゃ、みんな！また会おうね！？

第四話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・前編」（前書き）

戦闘場面そこそこです。上手く出来てるか自信ないわぁ…。
とりあえず、続きをどうぞ。

第四話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・前編」

グレート＝ブリッジ奪還作戦。それの作戦は連合側にとって今後の戦況にも影響するほどの重要なものだった。この作戦に失敗は許されないのだ。失敗すれば最期…。連合側は一気に瓦解することは必至だろう。連合側は今回の作戦に可能な限りの戦力を用意して挑むのだった…。

Ｓｉｄｅ　葵

作戦開始の時間まであと少しかぁ。ああ、よくよく思い出してみたらこんな大きな戦争に直接参加するのって初めてだ。大体、いつもだったら裏側から徐々に相手の戦力を削っていって交渉に持ち込むような裏方的な事してたからなぁ。俺の正体は極力、表に出したくなかったしね。原作開始時期までに問題があったら大変だしさ。目立たないようにしてきた。まぁ、その自重もここまでだけどな！やっとここまで来たんだ。今までの鬱憤を、今回の作戦で吐き出す勢いやらせてもらうとしよう。帝国の兵隊さん。がんばって、ね？クスックスクス…。

こっちの世界に来てから［工房］で少しずつコツコツ作っている兵器があるんだけど残念ながら今回の作戦には間に合わなかった。それがちょっと…。ウソです。ものすごく残念です！何の兵器かと

いうとですね？趣味で造ったんです。ああ！でも、やっぱり今は秘密！お披露目はまた今度です。七割ほどは完成しているのですが主武装の取り付けとそれの調整、あと主機関部の出力調整がまだなんです。男なら一度は憧れると思います。早く使ってみたいな。

「作戦開始までもう直ぐだな…」

「そうだね。…なに？詠春ったら緊張してるの？」

「してない…って言ったら嘘になるな。こんな大きな作戦、それも連合の未来が左右されるようなものは初めてだからな。失敗したらと思うと怖いな」

「ははは。詠春らしいね。緊張するな、とは言わないよ。だけどいつも通りにやれば大丈夫。失敗することなんて無いから」

いや、実際勝てるでしょ？詠春、自信持ちなよ。間違いなく剣士としては強いよ？この場で純粋に剣技だけで勝てる人が居るかな？…居ないでしょ？…俺？そもそもの話し、そんな力を制限した勝負をすることなんかしないね。やるからには使えるもの全て使って勝ちに行きます。…女性や子供を巻き込むような外道な手にならなければ、ですがね？何でも使います。負ける？イヤですよ…。俺ってこう見えて結構負けず嫌いなんです。

「此度の戦には我が君のみではなく吾等も居るのだ。帝国の未来は敗北のみ。不安になる事がどこにある？」

「然り。姉上の言葉の通り、吾等が我が君に捧げるは勝利のみ。吾等が敗北するなどありえぬよ」

「詠春、大丈夫だよ。絶対勝てる。俺が保証するよ。ハハハッ！」

「ハオさん、ユエさん、葵…。そうだな…。そうだよな？必ず勝てる！俺達も居るんだ！負けるわけがないよな！」

良かった。詠春、元気が出たみたいだ？戦いを前に不安な気持ちで挑んだら危ないものね。解消出来る時にしておかないと。俺も怖いよ？怖いけど不安はない。だって信頼できる仲間が居る。そして何よりも永い時を共に生きてきた家族達が居るから不安はありません。戦力比？そんなもの数ではこちらは負けてますけど。質的にはこっちが圧倒的でしょ？極端な話しで言えば時間さえかければハオとユエだけでも勝てます。どれだけ時間がかかるかわかんないけどね？

「詠春、アオイ。作戦開始まで五分を切りました。皆さん、こちらに来てください」

「もうそんな時間か？葵、お二人も行きましょう」

「うん、そうしようか。ハオ、ユエ、行こう」

「「ハッ！」」

作戦開始時間が迫ったようです。ハァ…。最近、癒しが少ない気がします。うん。戦争しているからってのは分かってる。分かってるけどね？今まではずっと自分と家族のためにしか行動してこなかったから、こういう大規模な事はしてなかったんだよ？避けてたといってもいいね。幸いにも見つからないで居られる術は持っていたから今まで安穏としていられたけどね。まぁ最初の数年は失敗を何回もしてきたから正体とかがバレるとかはともかく寂しかったかな

？こっちに来た当初は一人だったから辛かったなぁ…。

　要するに何が言いたいかというとですね？また、のんびり、喫茶店して過ごしたいなと思うわけですよ。こっち来てからというもの戦いに、戦いに、戦いです。はっきり、言おう…。厭きてきました。戦うこと事態は嫌いじゃないですよ？言い方はダメですけど生きているって言う充実感のような物に満たされる感覚もあります。でも、それがしばらく続くと鬱になりますね…。ここに家族達が居なかったら［工房］に引き篭もってましたね。ん？そんなことを考えていたら皆が集合している場所に着いたようです。

「詠春達を連れて来ましたよ」

「詠春とアオイ達も着たようだな！この作戦、絶対に成功させるぞ！！」

「おう！やっと来たな！俺は逃げたかと思ったぞ！ハッハッハッ！！」

「バカか？勝てると分かりきっている戦で何故（なにゆえ）、逃げねばならぬのだ」

「はは。そうだね。でも勝てるとしても怪我とかには気を付けようね？」

「我が君の御身は吾等がお護りするゆえ、どうかご安心を」

　ユエ、ありがと。頼りにしてます。もちろん、ハオもね。この子達もいるから安心です。あ、詠春はゼクトさんと話してます。ここから聞いていると、ゼクトさんは詠春がこんなに大きな作戦だから

緊張してると思って心配していたようです。やっぱり、いい人です。こんな人が近くに一人居ると不思議と安堵しますよね？

というよりジャック…。逃げるわけないじゃないか。連合軍と「紅き翼」に加えて俺の個人所有の戦力があるんだよ？小さな国とだったら余裕で勝てるよ。コレだけの戦力があるんだから逃げるわけないよ。

因みに俺の持つ戦力は精霊さん達三人娘と悪魔達三人娘の将官クラス個人戦力と俺の両腕であるハオとユエの姉妹。更に言えば数に限りはあるけど下士官クラスが十八体、居てですね。兵隊クラスは二百十六体居ます。

内訳の戦力は将官クラスの精霊さん達三人娘と悪魔達三人娘とハオとユエの姉妹、それに俺、それぞれの下に下士官クラスが二体ずつ居て、更にその下に兵隊クラスが二十四体、居るのです。

例えば俺だったら…

俺
←
下士官二体
←
兵隊十二体一（三体編成の四小隊）×2

…に、なりますね。この戦力ですが人形とかではないんです。いや、人形といえば人形なんですがね？どういうことかというと、まず身体の素体となる物を用意して、そこに中級や下級の精霊や悪魔を魔法薬や降霊術の応用など、様々な特殊な方法を使って憑依させ

て…。え？…無理矢理じゃないよ？同意の基です。そんなの基本ですよ。無理矢理ダメ！絶対！…それで続きですけど憑依させたら素体の方が憑依者に適した身体に最適化、形状変化などなどが行われるんですね。性別の決定は、その時に決まります。見た目とかは人間と変わりませんね。まぁ性別に関しては自身の意思ですから俺にはどうしようもありませんし。…それでも、俺に同意してくれる精霊や悪魔は何故か女性体ばっかりなんですけどね。ハハハ…。男性体ばかりのむさ苦しいよりは花があっていいと思いますが…。皆、美人さんですから恥ずかしいです。平気でブラチラ、パンチラしてくるんですから。お兄さんドキドキものです。はい。こうして生まれた彼女達のことを俺は精魔奇兵と名付けました。一人一人名前は俺が付けてあるけど、紹介はまた機会があった時にでもしようかな。

でも、この戦力はまだ使いません。普段は［工房］内にて与えられた仕事をしてくれています。戦闘ばかりが生活じゃありませんからね。それでも二百年ほど前からコツコツと作り出した我が部隊は万全です。訓練も欠かしていません。部隊連携は完璧です。俺に協力してくれる精霊さん達も悪魔さん達も基本、真面目でいい人ばかりですから怠けることなんかありません。どんどん力を付けていきます。憑依した素体のおかげで基本性能も高いですしね。大体、元の力で比較したら全体の三十七％の向上がみられましたね。下手な魔法使いより強いです。

彼女達も俺の家族です。俺は臆病だから持てる力は持っておく主義なんです。個人の力然り、仲間の力然り、組織の力然り。でも、政治的な権力とか、いりません。邪魔です。俺の持つ戦力は個人で持つには過剰戦力もいいところですから政治的な権力を持ったら縛りが多くなりそうですからね。面倒くさいことは勘弁です。必要な事なら苦労してでもやりますけどね？例えば家族関係。あとは［紅き翼］の頼みならある程度なら聞いてあげてもいいかなと思ってい

ます。

「お前ら時間だ！行くぞ！」

「ハッーハッハッハッ！！いっちょヤッたるか！！」

「儂らも行くとするか。バカ共ばかりでは心配だからの」

「そうですね。でも、そこがナギのいいところですよ。どんな時にも諦めない。そのバカさがいいのですよ」

「そうかもな。よし！俺達もナギに続くとしよう！！」

おっと。自分の戦力を改めて整理していたら作戦開始のようです。俺達も行かなくちゃ。

「ハオ、ユエ。俺達も行くとしよう」

「「ハッ！」」

「ユエ、私は前に出る。お前は我が君の御身を死守せよ」

「承知した。姉上、無茶してくれるな？我が君が心配なさるからな」

「わかっておるわ。では、行ってくる」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　名の無き帝国軍将兵

私達が連合側の防衛の要とも言える一つの要塞［グレート＝ブリッジ］に大規模転移による奇襲を仕掛けて見事に占領してから数日。予想したものより早くに連合側に動きがあった。どうやら可能な限りの戦力を以ってこの要塞を取り戻すつもりのようだ。無駄な事を…。戦力差は歴然だと言うのに愚かな奴らだ。

連合が行動を起こすという情報が入ってからしばらく経って連合は情報通りに動き出し戦闘は開始された。戦力差は圧倒的だ。まず、負けることは無いだろう。戦争は兵の質も大事だが、やはり数を揃える事が重要だ。その点、我が軍は質も数も充実している。

それでも油断はしない。慢心は己の目を曇らせることになる。冷静に物事を見極めなければ将兵達を無駄死にさせてしまうことに繋がる。それだけは容認できないことだ。負傷者や死者が出るのは仕方ないがより少なくするのは間違いではないはずだ。

それだと言うのに閣下は余程、連合側に所属する［紅き翼］と名乗る連中がお気に召さないようだ。我が軍全体の二割にも届く、過剰とも言える戦力を彼の者等に向かわせたのだ。戦況的には問題は無いが、これはやり過ぎではないかと私は考える。

考えてみて欲しい。敵、それもたった一部隊にも満たない数の者達に割り振るべきものだろうか？答えは否だ。閣下はそれだけ彼等を警戒しているのだろうが今回に限って言えば過剰もいいところだ。閣下は何をそんなに恐れているのだろうか？

「ほ、報告します!!左翼エリア、敵の猛攻に遭い。既に部隊の二十五%以上が壊滅!至急援軍、遣されたし!との事です!」

「なっ!?」

「……やはりか」

し、信じられん…。左翼エリアと言えば閣下が兵を向かわせた場所ではないか!!どういうことだ!?あそこには全体の四割もの部隊が展開していたのだ!鬼神兵も多く配備してあるのに!なぜだ!?こんな状況などありえん!!

それに閣下はこのことを危惧なされていたのか?まるで、こうなることが分かっていたかのような態度でいらっしゃるが…。いったい現場では何が起こっているのだ!?それに閣下は何を知っているのだろうか?

「…予備戦力を左翼エリアに投入する。後詰の部隊は鬼神兵と共に後方に展開後、遠距離からの殲滅魔法による攻撃を開始させろ」

「ハッ!」

「か、閣下!?それでは我が軍、全ての兵力を投入することになります!それでは戦闘の継続も不可能になりかねません!ご再考を!」

そこまでしなければならない敵が居るとでも言うのですか、閣下?今後の作戦に支障をきたしたとしても打倒しなければならないほどの敵が…。あそこに居るとでも言うのですか!?閣下!なんなんだ?あそこに居るのはなんなんだよ!?

冷静になろうとしてもなれない。それほど異常な事が起きている。戦闘開始から僅か数分で左翼エリアに展開していた部隊の二十五％以上を壊滅まで追い遣られてしまった。もはや、悪夢としか考えられない…。本当にコレは現実なのか？夢なら早く覚めてくれ…。お願いだ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ名の無き帝国軍将兵

Ｓｉｄｅ　陽（ハオ）

私は戦場を駆ける。縦横無尽に駆け回り敵を一人また一人と斬り捨てていく。我が君のことはユエに任せてあるので心配は無い。今の私に与えられた役目は少しでも速く戦場を駆けて帝国の連中を後方から撹乱しつつ敵を屠っていく事。ただ、それだけだ。

敵陣深くに切り込み周りは誰も彼も敵ばかりだ。ふむ。この辺りでいいか…。私は程度のいい広場を見つけてそこに立ち止まった。周囲の敵は突然、私が止まった事に観念したと勘違いしたようだ。一人の部隊長らしき男がゆっくりと近づいてくる。

「ようやく観念したか？」

「観念したか、だと？それはお前達の方だ。忠告しよう。我が君は無益な殺生は好まぬ。降伏しろ。…死ぬのは怖かろう？」

「ふん！この状況で強気な事だ。だが女、大人しく投降するなら命

だけは助けてやるが…。…どうする？」

「……下衆が」

目の前の男が私の身体を纏わり付くような視線で見てくる感じがした。気持ち悪い…。このような輩は初めてではない。よって何を考えているのかは大体だがわかる。そして私にそのような視線をよこしてきた者の末路は…。

「ふはは！下衆ときたか！…もう一度言おう。投降しろ。命は助かるぞ？…命だけだが、な？くっくっ」

「黙れ。下衆が。この身は全て我が君に捧げしモノ。二振りの剣の片割れにして懐刀。下衆にやるものなど何も無いわ！」

下衆共の頭上に数万の我が分身達を顕現化する。純白に輝く白き剣。真なる我が姿。全てを屠り主たる我が君を護るべく生まれた私の姿。その分身達に、この下衆共は気付きもしない。へらへらと笑い私という獲物を前に舌なめずりしている。

この者達の最期。冥土の土産に教えてやろう…。獲物を前にして愉悦に浸るなど二流だ。ましてや自分達の頭上に命の危険があるというのに気付かないとは三流だ。一度敵と決めたのなら躊躇わずに一息に殺してやるのが定石というものよ…。さぁ、踊れ。愚かな者共よ…！

――シュンシュン、ヒュンヒュン、シュンシュン、ヒュンヒュン、シュンシュン…。

――ザンッ！…グサッ！…スパッ！…ザクッ！…ズバァ！

――なんだ！？これは！？いったぃ！ぎゃぁぁあああ！？

――どこからの攻撃だ！？一人ではなかっ！？ぐぼぁ！！

――見張りは何をしていた！？敵はっ！ぐっ！！？

――反撃しろ！反撃しっ！？腕がぁぁあ！！？俺の腕が！！

――ま、まさか！？これはあの時の！？いやだ！俺はまだ死にたくない！！？？

――どこに居やがるんだ！？出て来い！俺があいっ！！ぎゃ！！？

――応援を要請しろ！このままではこの部隊は壊滅だ！早くしっ！…。

――これはお前がやっているのか！！？今すぐやめっ！？さ…せ…。…。

この事態に今更、気付いたか者が居たか…。だが、もう遅い。私

の忠告を聞き入れなかったお前達が悪いのだよ。慈悲は最初に提示されていたのだ。それを無視したのは、お前達なのだから。精々、私の舞踏に付き合っておくれ。ふふ…。そして、この身をお前達の下衆な視線で汚したことを後悔しながら死ぬが良い。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　陽（ハオ）

Ｓｉｄｅ　月（ユエ）

今のは姉上か？どうやら余程、癇に障ったらしいな。ここからでも分かるほどの剣雨が上空に展開されている。少々過剰に過ぎると思うのだが今は戦だ。敵側には同情するが、我が君の前に立ちはだかるのだから諦めてもらおう。それに私が姉上から与えられた役目は我が君の守護。“あの”姉上が我が君のことを任せてきたのだ。失敗は許されぬ…。失敗する気もないが。

［紅き翼］の連中も思い思いに暴れているようだ。其処彼処（そこかしこ）からバカ二人の何やら楽しそうな笑い声が聞こえてくる。…何が“どちらが多く倒せるか競争だ”か？そんなものまとめて潰してしまえば変わらぬではないか。

そんな風に周囲を観察していたら一部の敵部隊が突出してこちらへと突撃してきた。どうやらこちらには私と我が君しか居らぬから壁は薄いと判断されたようだ。愚かな…。見た目に騙されるなど、戦場（いくさば）ではあってはならぬ事であるのに。

「我が君。敵がこちらへ来ます。ここは私にお任せを」

「うん。お願いするね。…それにしても俺ってあんまり戦ってないなぁ」

我が君？それは違いますぞ。我が君が後ろに居てくれるからこそ、吾等は安心して前だけを見て戦えるのですから。背中は我が君が護ってくださるから心配してはおりません。適材適所なのですよ？我が君。

ま、まぁ？たまに吾等を使ってくれると少し…。とても…。大変、嬉しく思いますが！私でなく“姉上が”ですぞ？それは私も…。その…。ふぅ…。意地を張るのはやめよう。使ってくれるとしたら武器の九十九神として、これほど嬉しいことはない。この前使われた時などは嬉しくて思わずいつも以上に力を解き放ってしまい敵部隊の半数を剣の一振りで真っ二つにしてしまった…。アレは失敗だった。心なしか我が君もお顔が若干引き攣って居られるように見えた。

「二人？ハハハッ！連合のバカ共め！ここに二人しか配置しないとはな。最低でも十数人は居ると考えていたのだが…。投降しろ。殺しはしない。こんなところで二人しか居ないようなバカだ。殺す気にもならん」

「黙れ、下郎が。我が君の御前である。口を慎まぬか！それに武士（もののふ）ならば口ではなく己が力を以って示してみせよ！」

「くっ！優しくしてやってれば付け上がりやがって…。いいだろう！その言葉後悔させてやる！おい！お前達は後ろに居る男を殺せ！！」

…この下郎は今何と言った?…我が君を殺す、と言ったのか?…ふふ、ふふふ。下衆風情が調子に乗って言うじゃないか?私の目の前で我が君を陥れる事を言ったのだ。相応の覚悟は出来ているのだろうな?なに、ただでは殺さぬよ。出血死で徐々に死ぬことを思い知りながら、この地で朽ち果てるが良いわ!

――ザンッ!…ズバッ!…ザクッ!…。

――ぼと…。

――――ぼと…。

――――――ビチャッ…!

「?…!!ぎゃぁぁあああ!!??腕が!!!」

「あ、足が!?ぐぅぅぅうう!!!!?」

「ごふっ!!血が!?だ、誰か!助けて!!あぁぁああ…」

「黙れと言ったぞ、下郎共が…」

私は駆けた。目の前の愚か者に向けて斬りかかる。急所ではない。それには別の狙いがある。先に宣言した通りにただでは殺さぬためだ。敵の腕を斬り捨て、足を斬り捨て、腹を致命傷にならないほどに深く斬りつける。全てが即死するには足りなく、戦うには出血で不可能な状態。

本来であれば敵は一撃の下に斬り倒す事が定石であろう。敵は何が起きたのかも知らずに死ぬ。それが戦闘者としての一つの到達点だと私は考えるのだ。しかし、今回はそれを敢えて枉げてでも許せぬことが起きた…。

私の目の前で我が君の事を陥れる発言をこの者達はしたのだ…！我慢など出来ようか！？私には出来ない！！普段は姉上が真っ先に切り捨てるのだが今は私だけが守護を担っている。私がやらずに誰がやるというのか！楽に死ねると思うなよ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　月（ユエ）

Ｓｉｄｅ　葵

姉さん！事件です！こっちに帝国兵が来て俺達二人しか居ないことが分かると笑いながら降伏を言い渡してきたんです。こっちとしては失笑モノだったんですけどね？降伏？バカじゃないの？確かにここに居るのは俺達しか居ないけどね。だからってあからさまに油断してちゃダメでしょ？

どんな敵でも油断なんかしてはいけませんよ。こいつらバカなの？死ぬの？…ん？…うわぁ。ユエが怒ってます。もうね？容赦なく敵の腕とか足や腹を斬りつけてます。でも、おかしいな？…ん？何がって？敵の皆さん即死じゃ無いんです。なんて言うか。血だけが派手に出てる感じ？お陰でここいら一帯まるで血の池ですよ？

ハァ…。時間かかるようなら援護しようかと考えてたけど必要なさそうです。ユエ、一人無双って感じです。…俺っていらないんじゃない？ここにいらないよね？ナギ達のところに行こうかな？あっちは敵の数も多いからまだ派手にやってるみたいだし。

でも、ホントにあのバカ二人は元気だよね？かなり離れてるはずなのにここまで笑い声が聞こえて来るんだよ？どれだけ楽しんでるの？でも、いいなぁ。楽しそうで。だって今の俺ってかなり暇なんだもの。敵が俺のところまで来ません。いや、わかってるよ？ユエが護衛としての役目を果たしているって事ぐらいね。でも、暇なんだもの仕方ないでしょ？

そう言う訳だからここはユエに任せることにして俺は敵陣後方。先行したハオよりも奥深くに行きたいと思います。ブッちゃけて言っちゃうとね？ユエ一人でここは十分なのよ。俺ってばここに居てもただの余剰戦力扱いだしね？とりあえず、ユエに先に行くことを伝えなくては…。

「ユエ～？ここは任せるから俺、敵陣の奥に行ってくるね～」

「なっ！？お待ちください！あと少しで殲滅出来るのです！だからっ！…置いて行かないでください！！」

え～？？あ、ホントだ。あと少しじゃないか…。これなら待ってあげてもいいかな？ふふ、さっきのユエの「置いて行かないで」の発言の時。ちょっと涙目になってるところが可愛いと思った俺は悪くないと思いたい…。悪くないよな？

それとユエ？これだけは言いたい。いいかい？懇願するなら敵を斬る手を止めて話しなさい。俺と話しながらも戦闘を続けるなんて

無駄に器用な事をしてからに。俺はちゃんと君と目を見て話したいです。なぜかって？俺が寂しいからに決まってるじゃない。

ん？そうこうしているうちに先程までの戦闘音が聞こえなくなってきました。辺りに聞こえるのは倒れた帝国兵の呻き声と風に揺れる葉の音ぐらいです。生きている敵もこのままではいずれ失血死は必至でしょう。バイバイ。生き残れたらいいね？

「我が君。雑事は片付けました。私もお供します。…よろしいですね？」

終わっちゃったよ…。帝国兵の皆さん早過ぎです。ちゃんと訓練しているんでしょうか？その程度じゃ祖国なんか護れませんよ？アレ？この程度なら俺の戦力だけでも帝国倒せるんじゃない？いや、流石にそれは無理…かな？無理って言い切れないから性質が悪いな。

とにかくここの敵はユエが殲滅したので状況はクリアです。次の制圧目標エリアに行くとします。でも［紅き翼］に任せられた、このエリア…。敵の数がおかしいくらいに多いんですけど？お偉いさんの嫌がらせか何か、か？玉砕して来いとか？やだなぁ。

とにかくユエの仕事が終わったなら問題ありません。連れて行くことにします。ほら、ユエ行きますよ？うん。ご苦労様ね？大変だったでしょう？一人でやらなくても俺に少し任せてくれればいいのに。…え？ダメ？それじゃ姉上に任せられた役目を果たせない？

なんていい子なんだ…。姉との約束を健気に守ろうとするなんて。お兄さん感激です。とりあえず、いっぱい褒めることにします。より具体的に言うと頭をナデナデします。いーこ～。いーこ～。む？このしっとりとした髪の感触…。いいですね！大変いいです！

「わ！我が君！こんな時にやめてくだされ！…あ、あぁ！？違うのです！違うのです！決してイヤな訳ではありませぬ！…ただ、ここは戦場（いくさば）。後程では、なりませぬか？」

なるほど…。確かにここは戦場。ゆっくりとユエを一褒める（愛でる）事なんて出来ません。うん。納得です。…ここは、やはりアレでしょう。そう！一刻も早く一帝国兵（邪魔者）を排除しなければならないのですね？わかります。

少々名残惜しくはありますが仕方ないです。ここは直ぐにでも行動に移しましょう。家族との触れ合いに勝るものはありません。帝国兵が、その障害となるなら…。ふふふ…。さぁ？行くとしますか。覚悟はいいか？

「ユエ、行くよ。この戦い終わらせる」

「ハッ！お供いたします！」

帝国兵の部隊が展開している遥か後方に大規模魔法を行使しようとしている集団がありました。鬼神兵も数体確認できますね。どうやら敵さんの目的は［紅き翼］のいるこのエリア一帯のようでね？このままではナギ達を中心に展開している部隊が居る辺りに殲滅魔法規模の爆撃がされてしまいそうです。

そうはさせません。させませんとも。後方に展開している帝国兵部隊は俺がイタダキマス。美味しくいただきますよ？全て、ね…。後方に展開している部隊以上に前衛部隊はまだまだ多い。一々相手なんかしていられませんよ。殺しすぎて恨みを買うのは面倒ですからね？まぁ来たら来たで返り討ちにしますが。

何か文句でも?俺にとっては大分、昔ですが所謂、復讐者という人が突然俺達に襲撃を仕掛けて来た事がありました。その時は油断していましてね…。家族の一人が重傷を負ったのです。一応一命は取り留め今も一緒に居ますけどね。

あの時の事は今も忘れませんよ。家族が死ぬかもしれないという言いようも無い絶望感。その時から敵として立ちはだかって来た者達は、良くて戦闘不能。悪ければ死ぬだけです。余計な情けをかけてリスクを背負うよりは排除して家族の安全を俺は取ります。

――おや?

「我が君。陽月が白剣。ハオ、只今帰還いたしました。指定された攻略目標であるエリア一帯の敵、これを殲滅。よって私は本来のお役目、我が君の守護に戻ります」

「無事で良かった。どこも怪我とかしてない?あったら言ってね?直ぐに治療するから」

「有り難きお言葉!されど我が身は我が君の守護の御為(おんため)に存在するのです。お気になさらぬよう…」

「ハオ、そんな悲しい事言わないで?どんな時だって家族の心配はするものだよ。…うん。それじゃ、行こうか?」

「ハッ!…(ボソッ)ありがとうございます、我が君」

ハオが無事に帰ってきました。この程度の敵にやられる事はないと信じてますよ?でもね?不安は無いけど心配はしますからね。そ

れとなくハオの事を良く見てみましたが怪我どころか掠り傷一つありません。剣の九十九神としての体が丈夫だからでしょうか？

…あー、俺は思い出した事があるのです。それは今まで一度もハオとユエが大きな傷を負ったところを見た事がないことを…。傷らしきものはつきますよ？着ている服に小さな傷ですけどね。もしもの時の為に昔、一度だけ「致命傷みたいな怪我を負ったらどうなるか？」と二人に聞いたことがあるんだけど。

その時の答えは「実際になってみないと分からない。ただ…、しばらく人の姿になれない、ような気がする？」との事。本人達も答える時に疑問系でした。だけど死ぬわけじゃないとは言え、しばらくの間話せないのは寂しく思います。まぁ家族がそんな事にならないようにするために色々と準備しているんですけどね。

ん？ふふん♪見つけましたよ？魔力反応が大きい場所まで敵と戦うのが面倒だったから迂回して来ましたから相手は今まさに魔法が発動しようとしていますがね？問題ありません。どうやら魔法の系統は火と風の大呪文をそれぞれが集団詠唱で威力を向上させて攻撃するつもりのようです。

甘いですね…。火と風の属性というところが相手に運がありません。なぜならこちらには火と風の上級精霊達が居るのですから相手の魔法を減衰、一時的にですが無効化出来ます。ただ普通の上級精霊では、こうはいきません。俺の自重のない育て方をした事による恩恵というか弊害というか…。ハァ…。

まぁ今はその事はいいか。とりあえず目の前の部隊を排除しよう。それでは彼女達に協力を頼みましょうか…。

――ウーリ…。マリー…。お願い、力を貸して…。

――ピシッ！…ピキッ…ピキッ…。

――パッリィィィーーン！…。

敵の魔法は砕かれた…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　帝国側後方部隊の部隊長

今まさに集団詠唱による大呪文の詠唱が完了した。あとは目標地域へと放つだけとなった。ようやく連合のやつらの喉元に剣を突き立てられるチャンスなのだ。この要塞は何としても死守しなければならない。

オスティアの時は二度も連合に煮え湯を飲まされたが今回はそうはいかない…！今度は、こちらが連合の愚か者達に我らが帝国の力を思い知らせてやる！

「よし。殲滅魔法！発動準備！その後、合図と共に一斉射！いいな！？」

「発動準備、完了！いつでも可能です！」

「連合の馬鹿者共に帝国の誇りと意地を見せてやれ！殲滅魔法！一斉射！開っ！？なんだ！これは！？」

――ピシッ！…ピキッ…ピキッ…。

――パッリィィィーーン！…。

な！なんだとぉぉお！？一体何が起こった！？発動準備が終わり、いつでも放てるはずだった殲滅魔法が突然、前触れもなく魔法陣ごと砕け散ったのだ。俺の目の前でだ！！何があった！？どこを失敗したんだ！ん？あそこに居るのは…？

展開されてる俺の部隊の上空に人影を三人確認した。男を中心に白と黒の女が左右に待機している。まさか、これはあいつらがやったのか？馬鹿な！そのような事が可能なものか！魔法を任意に無効化、無力化するなど出来るはずがないではないか…。

ともかく、この状況は不味い。集結した魔力は既に霧散してしまっている。もう一度、展開するとなると時間がかかってしまう。…どうしたらいい？どうしたら…。そうだ…。今、一時は鬼神兵の砲撃を展開するとして、その間に兵達の回復の時間を稼ぐ。これしかない。

「あ、あー。帝国将兵に告ぐ。大人しく投降するなら生命の保証は

しよう。もちろん条約に基づいて捕虜の扱いは、これを順守する。繰り返す。大人しく投降するなら…」

男がいきなり、そんな事をほざきやがった…！このぉ…嘗めやがってぇ！！こいつはバカなのか！？これだけの数を前に、そんなことを言いやがってぇ！！殺してやる！これは俺だけではなく我らが帝国への侮辱だ！！決して許してはならない！！

「全将兵に告げる！！今、我らの前に愚かにもふざけた事をぬかすために、たった三人で来た馬鹿共が居る！これは我ら帝国への侮辱も同じだ！！諸君！目の前のゴミ虫共を殺せ！！殺して後悔させろ！！誰に喧嘩を売ったのかを分からせてやるのだ！！」

俺の言葉を合図に風属性で拘束して、そこから威力の高い火属性の魔法の射手の連射、掃射、乱射。火属性で威力の高い中位魔法が放たれようとしていた。今も上空にて不敵な態度で降伏勧告をしている男と、そいつを護るように居る二人の白と黒の女。男はこちらに投降する意思はないと諦めたようで左右の二人に指示を出した。

それが終わると、こちら側から見て男をその場に残し白い女が左から黒い女が右から三人はそれぞれに行動、進撃してきた。女達は両手に白の双剣と黒の双剣をこちらに向け突撃してくる。男はその場に残ってなにやら呪文を唱えている。だが、遅い！こちらは低位の魔法や中位魔法とは言え即発動が可能！今更、何をしようがこの数の前には塵も同然だ！

「全部隊！撃てぇーー！！」

――…、…、…。…、……。

――スィィィーーーーンンン…！！…。

ま、また消えた…だと！？俺の部隊は風と火の魔法では帝国でも屈指の実力者達だぞ！？何度もこんなミスが起こるとは思えない！！一体、何が…？ハッ！しまった！？

「呆けていて良いのか、下郎共よ？そのままでは瞬く間に死ぬぞ？」

――キィィィーーン…！…。

――…ばた。…ばた。どさっ…。ズチャ…。…。…。…。

「戦いを前にして呆けるなど愚かな…。鍛錬が足りぬよ。一度死んで出直すのだな」

――キィィィーーン…！…。

――ズチャ…。…ばた。どさっ…。…ばた。…。…。…。

こ、今度は、なにが起こったのだ？女達が一瞬消えて次に現れた時には数十人の兵達が物言わぬ死体に変わっていた…。その死に顔は、まるで自身でも何が起きたのかを分かっていないかのような表情だ。戦場ということで若干の強張りはあるが、それがなかったとしても自然な表情をしていた。あれは即死だ…。実際、斬られた本人は分からなかったのだろう。それを見ていた俺や他のやつらも理解できないでいた。

「俺の呼びかけを無視して戦う意志を以って拒んだんだ…。ここからは覚悟してもらおう。さぁ！殲滅戦の始まりだ！！」

俺は、この時認識した。俺はここで何の抵抗も出来ずにただ死ぬのだろう、と…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　帝国側後方部隊の部隊長

……。

……。

…。

第四話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・前編」（後書き）

グレート＝ブリッジを少し細かく書いてみたかったんです…。
まだ、そんなに見たことないなぁ。と思ったので。
ただ単に俺が見つけられてないだけ、かもですけどね。
感想＆要望お待ちしています。ではでは。

第五話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・後編」（前書き）

後編です。前編どうだったかなぁ…。
上手く出来てればいいけど。
まぁ続きをどうぞ。

第五話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・後編」

連合軍は帝国の必死な防衛に膠着状態になる。しかし一部の戦線では、これに該当しない。そう…。［紅き翼］が展開しているエリアである。彼らのみが戦線を押し上げているのだ。連合は彼らを基点に帝国軍を徐々に撃退していった。

そしてここで帝国軍の後方部隊を前に［紅き翼］所属の九重・葵と彼の両腕たるハオ、ユエ達三人は戦いを…。いや、蹂躙を開始した…。

Ｓｉｄｅ　葵

やっぱり降伏はしないか…。まぁ仕方ないかな。帝国には帝国の誇りや意地があるしね。何もしないで、ただ降伏は出来ないよね。うん。仕方ない。だから彼らには知ってもらおう。絶対的な強者が一体どういうものかをね…。

帝国側の大呪文を一度と低位や中位魔法の一斉射の合計二回の攻撃は無効化した。二回目の一斉射での予想だが、どうやらこの部隊の得意魔法は火と風の二つ。戦法は単純に、まず風の拘束魔法で相手を絡め取って動きを止める。そして動けない相手を属性魔法の中で比較的高い威力の火属性の魔法の一斉射で相手を仕留める。単純

故に決まれば十分なダメージを敵に与えることができる。

だが、それも俺達ではなかったらの話しだったたね。残念！さっきも言ったように俺の家族には精霊さん達が居るのですから！彼女達を象徴する属性と、それに類する属性は無効化または威力を減衰させる事が出来る。

魔法に関してはこれでいいかな？精霊さん達にはこの戦闘の間だけ相手の魔法の無力化とかを頼んでおいたし。ハオとユエには帝国が攻撃態勢を整えるのを確認した時に左右から挟撃を仕掛けるように指示した。

彼女達が敵に奇襲を仕掛け相手が混乱している間に俺は敵を屠る準備をする。この世界で言うところの魔法を使うための始動キーにあたるものを自分の脳内に意識を集中して、描いていく。やがて脳内には巨大で緻密、そして機械の回路のような魔方陣が意識される。俺はそれに魔力を流し込む。すると仄かに光っていた魔法陣は命を吹き込まれたかのように眩しく輝きだす。

――…精神魔導回路（アストラル・ライン）、起動（アクション）。

――…並列詠唱（パラレル・キャスター）、開始（スタート）。

――…高速詠唱（クイック・キャスター）、開始（スタート）。

――…術式［燃える天空・改］を展開。

――…術式［燃える天空・改］を展開。

――…術式［燃える天空・改］を展開。

――…全術式展開（スペル・メモリー）、完了（コンプリート）。
――…選択（セレクション）、広域殲滅型（アニヒレート）を形成。
――…集束。…集束。…集束。
――…圧縮。…圧縮。…圧縮。
――…全工程（オール・コンプリート）、完了。

意識内の全工程を終えて後は魔法を放つためのトリガーボイスを発するのみとなった。二人に後退するように念話で指示を出す。

【…二人とも！退け！！…】

【【…ハッ！…】】

「…大規模殲滅魔法［メギド］、発動（エグザート）！焼き払え！」

――…ヒュゥゥウウンンン…！…。

放たれた膨大な熱と圧倒的な光の塊は帝国兵達へ迫る。
破壊の光が地上に着弾した…。
次の瞬間…。

――・・・カッ！！！…ドヒュゥゥゥウウウン！！！！！！

破滅の炎は一瞬の閃光の後、思う侭にその力を振るう。
帝国兵、鬼神兵…分け隔て無く、その炎で全てを喰らい尽くしてい

った。
後に残るのは焼け爛れた不毛の大地のみ…。

――あぁ……。うん…。

…シクッた。やり過ぎたわ…。地形が変わったどころか、なんかドロドロの溶岩になってるんですけど…？どうすんのコレ？俺のせい？いやいやいや！違うでしょう！？だってこのエリアの敵の殲滅が俺らに任されたことでしょ？…アレ？殲滅じゃなくて撃退だった…かな？アレレー？

アハ、アハハハハー…。ちょっと失敗しちゃった♪てへっ！…じゃないよ！！？え？なにこれ？俺のせいになるの！？ちょっとやめてよね！力加減間違えただけでしょ？俺、悪くないよ？ホントだって！うわー…。明日からどうしようかなー？確実に危険人物扱いじゃね？

死体とか焼却じゃなくて消滅だもんな…。人も鬼神兵もみんな関係なく…。…逃げるか？危険人物扱いされて捕まるくらいなら逃げちゃうか？でも、ナギ達を残して行くのもな…。…あぁダメだ。考えが全部ネガティブな方向に行っちゃうな。

「我が君、お疲れ様でした！実に見事な戦果でございましたな！私は嬉しいですぞ！」

「姉上、落ち着けというに…。しかし、私も同じ思いです。お見事でした」

「うん…。二人とも、ありがとね…」

二人が今回の戦果を褒めてくれます。…少し気分が落ち着きました。やっぱり家族は偉大ですね。うん。とりあえず、今回の目的は要塞［グレート＝ブリッジ］を取り戻すことだから問題無いでしょ。無事一（？）に取り戻したんだから文句は無いはずだ。…だよね？だったらいいな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　ナギ

今、すげー爆発したのは確か…。あー…。葵達が担当してたところか？あいつら死んでないかな？…大丈夫か。確かアレは葵の仕業だよな？…ってかよう！？ホント、すげーな！？ここからでも分かるぐらい異常な魔法だったな！何だアレ！？［燃える天空］か？でも、それにしちゃ範囲も威力も桁違いだし。アレ、半径数キロがクレーターじゃねぇか！！…俺にも出来るか？やってみるか！？

「ナギ…。お前、今変な事考えたろ？」

「……なんにも考えてねぇよ！うっさいぞ！？詠春！」

「その返答までの間が信用出来ないと言ってるんだ！」

いつも変なところで詠春は勘が鋭いから困るな。おちおち大魔法

もぶっ放せねぇじゃねぇか。あーあー！葵はいいなー！好きなだけ暴れられてよー？俺なんかちょーーーっと！敵陣の中に飛び込むだけで怒られるんだぜ？やってられねーっての！

あっ！？そっか！今度やらかす時は葵に着いて行けばよくね？そうすれば詠春達とは別行動！好きなだけ暴れられる！…かも！？…あー…。ごめん。やっぱ、ダメだわ。葵は問題ねぇけど、ツクモガミの姉妹が問題だ。絶対なんか言われる。

あいつら葵の事となると目の色が変わるからな…。あの状態の二人には俺でも勝てる気がしねぇわ、マジで。ただでさえ、あの剣の前では魔法障壁が紙ほどにも役に立たねぇのにキレると更にスペックが跳ね上がるんだからな…。アレは、もう手に負えない。無理！メンドクサイ！

出合ったばかりの時に何度かケンカでやり合ったけど…。信じられるか？あの二人は俺の［雷の斧］を涼しい顔で斬り捨てるんだよ…。それがムカついたからムキになって［千の雷］をぶっ放そうとした時は詠春とお師匠にマジボコりにされたっけなぁ…。その後、木に吊るされたな。

あーっ！くそっ！思い出したらムカついてきた！大体よぉ、何もボコった挙げ句に木に吊るすことないじゃんかよ！？半日だぞ！？半日も吊るされたんだよ…。頭に血が上って来て死ぬかと思った。こっそりアオイに助けてもらわなかったら…。あの時はマジで助かったな。うん。

ともかく！アオイの大魔法をくらって後方部隊が全滅したことで帝国側は浮き足立ってやがる。攻めるなら今がチャンスだな。

「よし！野郎共、アオイが作ったチャンスだ！無駄にするなよ！？行くぞ！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ナギ

Ｓｉｄｅ　名も無き連合軍将兵

――信じられない…。

その一言に尽きた。人格的な癖は強いものの間違いなく最高位の魔法使い達。連合軍所属の彼ら［紅き翼］の一人が帝国の後方部隊を一瞬のうちに消滅させてしまったのだ。私はこれをやった者に恐怖したのと同時に子供のような憧憬にも似た感情を感じた。

何者にも負けない力。敵を完膚なきまでに打ち倒す力強いその姿。それは、今は忘れた子供の頃に憧れたヒーローを思い出させる。戦力は数で劣っていた我々連合軍だが、これを見たらその考えは吹き飛んでしまった。

実に帝国軍の推定二割ほどが消え去った…。帝国側は突然の事態に浮き足立ち、一部が恐慌状態に陥っていた。無理もないことだ。私だってこんな事が自軍で起きたらと思うと恐怖で頭がおかしくなってしまうことだろう。

連合軍はこれを好機と考え攻勢に打って出る事にした。［紅き翼］は我々よりも早くに敵陣に向けて突撃していた。そして彼らも個

々人が規格外の強さを誇っている。その中でも彼ら［紅き翼］のリーダー格の人物、ナギ・スプリングフィールド。彼は、ただしく一騎当千の働きをしているだろう。

数えるのも馬鹿らしくなる敵の集団を彼は暴力的なまでの［雷の暴風］で蹂躙していった。やがて彼は敵部隊が陣形を整えているのを確認したら特大の呪文［千の雷］を放つことで壊滅させ、これをほぼ無力化。

そしてナギ・スプリングフィールドと並ぶように走る人物が居た。ジャック・ラカン、それが彼の名だ。彼も一騎当千に相応しい戦果を挙げている。近寄る敵をその拳で吹き飛ばし、離れた敵は彼のアーティファクトであろう様々な剣で串刺しにされていく。…時折、戦艦を切っているように見えるのが、気のせいだと思いたい。

他にも剣技では並ぶ者無しといった近衛・詠春。様々な魔法に造詣が深く、その中でも重力魔法では並ぶものが無いアルビレオ・イマ。そしてナギ・スプリングフィールドの師匠だというゼクト…。彼らは帝国側から見たら斉しく悪魔に見えることだろう。

しかし我々連合からは皆、この事態から救ってくれる救世主達に見えるのだ。彼らはこれからの連合を引っ張って行く存在となることだろう。それが実に楽しみな事に思え私は知らずに自分の口元が笑っているのだが私自身はそれに気付かなかった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　名も無き連合軍将兵

Ｓｉｄｅ名も無き帝国軍将軍

もはやこの戦いの結末は見えたな…。我ら帝国の敗北だ。この戦況を覆す手立てがもう見つからない…。既に全軍の半数以上が壊滅か全滅…。軍の建て直しも容易ではないだろう。

「全軍に撤退命令を出せ！帝国本国に帰還する！」

「…っ！は、はい！」

失敗だった…。よもや、この戦力差での敗北とは…。連合の魔法使い共はバケモノか？事態が変わったのは予備兵力と後詰を向かわせた左翼エリア後方。全軍の四割の戦力が左翼エリアに展開されていた。それが崩れそうになったために、更に予備兵力と後詰に遠距離から殲滅魔法で砲撃させよう向かわせたのだが予備兵力と後詰は連合のたった三人に敗北…。全滅させられた。

あのただの魔法では有り得ないほどの破壊力…。膨大な量の魔力で造り出された破壊の象徴。着弾点からざっと見ても半径数キロが溶岩状になり冷めた一部の地面はガラスの結晶になっている。熱量は計り知れない。前線の者は何が起きたのかもわからずに蒸発したことだろう。苦しまずに逝けたのが僅かな救いかもしれない…。

天へと旅立った兵士諸君…。すまんと謝罪することはしか出来んこの身を許せとは言わん。だが、せめて心安らかに眠ってくれることを祈る…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　名も無き帝国軍将軍

―とある記録から…

グレート＝ブリッジ奪還作戦は連合側の勝利に終わった。両軍が膠着状態に陥っていたのだが、そこに状況を変えるほどの一撃を連合側が与えた事が決定打となり帝国側は撤退まで追いやられたのだ。

その一撃を与えたのは連合軍［紅き翼］所属のメンバー達の一人とされているが現時点の詳細は不明。しかし彼らの活躍は疑いようの無いものであるのも事実であることから、彼らのうちの一人であるのは間違いないことと思われる。

そう彼らの活躍によるものが大きい。全員が全員、一騎当千の者達だ。彼らだけで帝国側の四割以上の戦力を相手に戦い、これに勝利したのだからその力は凄まじいものがある。連合はこの大戦を切欠にして帝国領へと攻め入ることになる。

短いがここで終わりとしよう。続きは、いずれまたここに記す。

―とある記録より…

Ｓｉｄｅ　葵

俺は今戦闘が終わり近くの町に寄り宿泊施設の一室に居る。他の皆も思い思いに疲れた身体を癒すために暫しの休息をとっている。

勝った…。嬉しいよぉ…。何がって？今回の作戦に勝った事がじゃないよ？勝つのは当たり前だからソレじゃない。じゃあ何が嬉しいか？それは俺が捕まってないことがだよ！ずっとアレがやり過ぎだったんじゃないかと不安だったんだ…。

［紅き翼］の皆には予めアレを俺がやったことを黙ってもらうかぼかしてもらう事を脅は…ちゃんとお願いして約束してもらった。…ホントダヨ？別に俺の後ろに九十九神の姉妹に精霊さん達（このため彼女達の存在がナギ達にバレた）や悪魔さん達、精魔奇兵の全軍が居たとしてもお願いダヨ？みんな、ガクガクブルブル震えてたけど恫喝とか脅迫じゃないヨ？

はぁ、皆が快く納得して約束してくれたのに…。せっかくの準備が無駄になっちゃった。とりあえず、お咎めは無しで、それどころか長々とした賛辞を、まぁ要約すると「良くやった」との有り難いお言葉をお偉いさんから俺を含めた［紅き翼］の面々に頂いたわけですよ。

隠さなくてもよかったのか…。せっかくの功績が…。うぅ、報奨金とか貰えたかもしれないのに失敗したかな？んー？？…あー。いや、これで良かったかもしれない。よくよく考えたら今はいいけど、近い将来、俺の力を脅威に感じた誰かに狙われるかもしれないし…。それに俺の身体って不老だしね？この事だけでもバレたら変な研究所的な何かに拉致られそうだしね。老い先短くてお偉い誰かさん達とか、ね？

うん！これは結果オーライというやつじゃないかな？まぁ来たら

来たで返り討ちだけどね。兵数的なものでは圧倒的に負けてはいるけど兵の質や技術では機械的にも魔法的にも圧倒的にこちらが勝ってる。ゲリラ戦なら負けないね。

…話が逸れた。結構、物騒な方向に…。自重しないとなぁ…。

「我が君？どうかなされましたか？」

「ううん、なんでもないよ」

まさか、物騒な事考えていました、なんて言えないよね。こっちから仕掛けることはしないだけだけどね。

「姉上、我が君はお疲れなのでは？此度の戦は大戦（おおいくさ）だったこともある」

「む？そうなのですか？そうならば少し早いですが、お休みになられますか？」

「んー？大丈夫。それより二人はどう？身体に問題ない？」

今回はよく戦ってくれたからどこか怪我してないかが心配です。…まぁ毎度の事ながら殆んど無傷に見えますけどね。それでも心配なのは変わりありませんから。

「魔力は多少消耗いたしましたが活動には問題ありません」

「姉上の言うとおりです。それよりも久方ぶりに力を思う存分、振るう事が出来ましたので充足感のようなものすらありますな」

「そう。二人とも今回はすごかったもんね。今回もお疲れ様。次からも頼りにしてるよ」

ホントにすごかった。ある意味じゃ俺よりも強いんじゃないかと思う時があるよ？でも、そんな二人の強いところが大好きです。

「「ハッ、お任せください！」」

いい返事です。従者の鏡みたいな子達ですよ？自慢になりますね。この子達が家族だと思うと俺も嬉しく感じますなぁ。はっはっはっ。

今夜は念入りにこの子達のお手入れをしてあげたいと思います。…えっちぃ事じゃないよ？剣のお手入れだから、そんな事ありませんよ。まぁいつも終わった後の彼女達は顔を真っ赤にしていますがね？…どうしたんだろうか？毎回、思うけど俺のお手入れに不手際があったのだろうか？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

そうして今日は終わった。今回の大戦から［紅き翼］は、また戦線を転々としながら戦うことになる。その活躍は凄まじいものがあり、彼らが戦場に居れば勝てるとまで言われるほどの知名度を獲得していたのだ。

［紅き翼］のリーダー、ナギ・スプリングフィールドは連合から最強の魔法使いとして［千の呪文の男（サウザンドマスター）］と讃えられる事になる。逆

に帝国からは［連合の赤毛の悪魔］と恐れられる。

そして、しばらく転戦を繰り返していると新たな仲間を二人迎えた。名前はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと高畑・T・タカミチという。彼らは捜査で、とある組織の事を追っているらしい。その過程で［紅き翼］に接触を持つ事にしたとのことだ。

彼ら［紅き翼］の行く先は遠く厳しいものとなる。しかし彼らはそれらを諦めずに進むことだろう。その先にある、か細い希望の光を目指して…。

……。

……。

……。

…。

第五話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・後編」（後書き）

グレート＝ブリッジ奪還作戦編、完了！
どうかな…？
楽しいですかね？

感想＆要望お待ちしています。ではでは。

第六話「日常と変化と逃亡と」（前書き）

大きな戦を乗り切ったので一休み的な？
はぁ、私も癒しが欲しい…。
主にリアルな方で、ね？

第六話「日常と変化と逃亡と」

それはある日の事だった。［紅き翼］のメンバーは新たな仲間の一人ガトウからナギ、詠春、ジャックに集まるようにと連絡があったので彼に指定された本国首都内にある一つの建物にて待機していた。

Ｓｉｄｅ　葵

ナギ達はガトウに呼ばれて出かけていった。アルとゼクトも首都までは着いて行ったようだ。二人とも休暇中で暇だからって理由みたいだけどな。俺か？俺は今、忙しいのよ。［工房］内で造ってた兵器なんだけどね？ソレの総仕上げなんだ。

「主様ぁ？こちらはこれで終わりですわぁ」

「ありがとう、ミリー。次はあっちの方の確認お願いね？」

「はぁい」

今は家族総出で作業中です。とりあえず今後の兵器の運用のために整備や修理をするための場所を用意するために［工房］に新しく隣接させる機能［ドッグ］の調整もあるのだよ。空間技術とか時間魔法とか特殊な機材とか物資の搬入と必要な物の製造などなど…。とにかく色々やることがあるんだ。

「主、兵装や装甲などの艤装は取り付けが完了いたしましたぞ。後はシステム面ですな」

「マリー、ご苦労様。システム面はウーリの班が後でやっとくからマリー達の班は三十分の休憩に入ってね？」

「御意。皆にはそのように伝えます」

ふぅ。面倒くさいけど仕事は確りやりますよ？じゃないと碌な大人になりませんからね。商品を作る際にも妥協はしません。不良品なんか作ったらお店の信用問題になるしね。…クレーマーって怖いんだね？正面からじゃお店としても手が出せないから対応が面倒くさい事面倒くさい事…。謝り倒しましたよ？まぁ後日その人はそれ以降、姿を見せることはなかったけどね？クスクスクス…。

「あるじー？［ドッグ］の調整殆んど終わったよー。確認お願いねー？」

「んー？おー。相変わらずウーリはいい仕事してくれるね。俺は助かってるよ。頭を撫でてあげよう」

なでなで、なでなで、なでなで…。

「～～～っ♪…はふぅ♪」

まぁ、そんなこんなで完成まで後ちょっとです！戦艦っていいですよねー？ふふふ…。おっとと今のは聞かなかった事にしてくださいね？皆には何も知らせずに大変な状況になったら「こんな事もあろうかと！」ってやりたいじゃないですか？

錬金術師も、ある方面から見れば科学者ですからね？やっぱり「こんな事もあろうかと！」という台詞には憧れます。何としても一度は言わなければ…。それに俺の個人戦力の精霊さん達を含めた精魔奇兵さん達の事もバレたしね？失敗したわぁ…。兵器関連はバレてないけど現兵力はバレちゃったし。あれは軽率だったなぁ。

まぁ後悔しても仕方ないね。なるようになるでしょう。「紅き翼」以外にはバレてないし。…ん？精魔奇兵の子がこっちに来るね。何だろ？あの子は精魔の士官達のまとめ役です。元は悪魔さんよ？それで彼女の名前はアイリス。愛称はアイリ。ホント、どうしたんだろ？あっ！訓練報告？

「司令閣下！本日の訓練項目の完了をお伝えに参りました！」

「あー。ありがとね。でもアイリ？毎回言うけど任務中以外は、もう少し楽にしてくれていいんだよ？」

「いえ！自分はまだ、司令閣下に報告するという役目がありますれば！今はまだ任務中であると考えます！」

相変わらず、この子、堅いです…。私生活は、あんなに優しくて柔らかい雰囲気なのに任務中は鬼のように自分に厳しいです。それでも仲間思いなのは確かだから人望もあるし優秀ですね。

「じゃあ、たった今報告は終わったから後は楽にしていいんだよね？」

「ハッ！…は？し、司令閣下？」

「家族には名前で呼んでほしいなぁ？…それとも俺の名前なんか呼ぶのイヤ、とか？…ぐすっ…（ちらっ）」

「し、ししし司令閣下！？あっ！いや、葵君？わかった！わかりましたから！お願い！泣かないでよ？」

ふふふのふ。大成功ですよ。多少、強引だったけど砕けた態度にしてやりました。

「くくくっ！騙されたね？ウソ泣きですよ♪」

「しれっ！…葵君！そういうのホントやめてよね？間違ってハオさんに誤解されたら大変なんだからね！？」

あー…。ごめん…。それは考えてなかったわぁ。ここは素直に謝っておこう。うん。

「すまん。そこまで考えてなかった。今度部隊の皆にお菓子の差し入れを持って行くから許してね？」

「…それって葵君のお手製ですか？」

え…？作るの？俺が？…部隊の全員分？二百人以上のお菓子を俺一人で？えー…。

「ふふ、冗談です。さっきの仕返しです。ふふふ、本気にしないでください」

「ほ、ほんとに？よかったー…」

アイリ、冗談キツイよ。確かに俺一人でも作る物によっちゃ出来なくはないけどさ。一人は大変だよ。お手伝いが欲しいです。

「ふふふ。それじゃあ、これが訓練内容の報告書になります。後でちゃんと読んで下さいね？」

「はいはい。ちゃんと読んどくよ。じゃあね、アイリ。ゆっくり休んで」

「了解です、葵君」

ふぅ…。んー？時期的に言えば今頃ナギ達は王女と面会しているころかなぁ。仕事がなければ俺も行ったのに…。いや、仕事と言っても殆んど趣味だけどね？どちらかと言えば家族達と物造りしてる方が好きなんだよ？…戦闘はって？んー。戦争って技術の進歩を早めることにはなるけど無くすものの方が圧倒的に多いしね。ハァ…。不毛だよね？

とりあえずの平穏な時代は、あと二十年ほど先か…。長いような短いような微妙な感じ？だいたいさぁ、秘密結社［完全なる世界］だっけ？彼らにも自分達の正義があるのは分かるけどさ。周りに理解を求めないってのはどうなのかね？…それともそれが出来ない理由でもある、とか？

んー…。うん。これは俺が考えても仕方のないことだな。俺には俺の戦いがあるしね？何者にも束縛されること無く自由に生きたいっていう思いがあるのですよ。他は知ったことじゃないね。それでもまぁ、親友達と女性や子供くらいは助けようかな。…男？ほどほどですよ。当然じゃないですか。誰が好き好んで野郎を助けたいと思いますか？俺はしませんよ。むさいのヤですからね。それに、こ

れは俺の偏見だけど男なら自分で何とかしてほしいですな。さて、作業を続けようかな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――［紅き翼］のとある記録から…

ガトウから呼び出されたナギ、詠春、ジャックの三人は本国首都内にある一つの建物の中にて然るお方と出会うことになる。その人物は連合のマクギル元老院議員が建物の中へと案内されて現れた。彼の人の名はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。ウェスペルタティア王国の王女殿下である。

帝国と連合に挟まれたウェスペルタティア王国。彼の国は、その位置的な事情ゆえに両大国に翻弄されてきた。アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下は自らが調停役となり今回の戦争を終わらせようとしたが…失敗に終わった。

そこで助けを求めるために［紅き翼］へと協力を要請、ガトウが接触することにした。そして［紅き翼］リーダーのナギを初めとした他二人との会談となったのだ。王女殿下の要請をナギ達は協力を承諾。戦争の裏に潜む者達、秘密結社［完全なる世界］の調査を本格的に開始する。

調査の途中経過の報告から証拠は無いが、かなりの数の［完全なる世界］のシンパが居ることが判明。帝国、連合は言うに及ばず。

歴史と伝統の国［ウェスペルタティア王国］の王都オスティア内部にまで彼らの魔の手は伸びていた。

以降、これからも調査を続行するものとする。

――［紅き翼］のとある記録より…

Ｓｉｄｅ　ガトウ

アレから調査を進めて数週間…。思ったより事態に進展がみられない。どうしたものか？エイシュンやアル、ゼクトの三人は優秀ではあるが俺達には人手が無い。圧倒的に足りない。アオイ達はする事があるとか言って手伝ってくれないしな。

ん？そういえばアオイ達は今頃どこに居るんだ？最近姿をよく消すことがあるが…。また、碌でもないことを仕出かすつもりじゃないだろうな？この前の戦闘なんか「新しい魔法を考えた！」とか言って発動地点から数十キロに渡るほど深い溝を造りやがって…！人工の川でも造る気か！？と本気で説教したっけな…。

結局、その説教の後、アオイに見つからないようハオさんが俺を路地裏に連れ込んだ時は…。んん！？なんだったか？何でそこからの記憶が綺麗さっぱり無いんだ？くっ！…頭が痛い？思い出す事すら拒否するようなことだったのか！？ふぅ…。落ち着け、ガトウ。今ソレはカンケイナイ…。

「ガトウ？そんなとこで何してんの？」

「んん？あぁ、アオイか…。三日ぶりか？用事は終わったのか？」

本当に三日もどこに行っていたんだか。こっちは調査が思うように進まないというのに…。

「うん。殆んど終わったよ。後は試運転を残すのみかな。何もかもが順調だね。それでガトウは最近どうよ？」

こいつ…！こっちは情報が殆んど集まらないで苦戦しているってのにぃ！せめて人手だけでも何とかなれば、まだマシになるんだがな…。はぁ…。

「全然だ。こうも人手が無いんじゃ話しにならんよ。ここは時間をかけてじっくりやるしかない」

「人手？…何人ぐらい？」

「何人でもいい。とにかく人手は多ければ多いほどいいような状況だ。お前も手伝えよ」

本当にアオイが手伝ってくれるだけでも随分、違う。長生きしているとはエイシュンから聞いていたが、そのためか何事も要領がいいのだ。是非手伝ってもらいたい…。主に俺の睡眠時間のために…。

「手伝うのはまた今度ね？でも、人手ねぇ…。百人くらいだったら紹介しようか？こっちの作業も一段落したし、それくらいならいいよ？」

「な…に？」

「だから百人。彼女達って優秀だよ？戦闘や諜報は当たり前、護衛からメイドさんまで何でもござれだから。しかも皆、美人！」

何なんだ？その完璧超人な人達は…。アオイィ…！お前な！そういう事はもっと早めに言えよな！？こっちは徹夜が続いて眠いんだよ！

「いったいどこにそんな人材が居ると言うんだ！？嘘だったら承知せんぞぉおお！？是非とも紹介してください！この野郎！」

「わ、わわわかったから落ち着いて、ガトウ！ええい！首から手を離せっ！」

「す、すまん…。ここ最近、寝不足でな。少し取り乱してしまった」

つい興奮してやってしまった。やはりこの歳になると徹夜が身体に響くな。自分でも何を言ったのか覚えてないのが怖いな…。

「けほっ、けほっ、まぁいいけどね。それで紹介するとしてお給金の事だけど、その辺は大丈夫なの？」

「あ？あ、ああ。任せてくれ。王女殿下やマクギル元老院議員には俺からちゃんと話しを通しておくから心配ないはずだ」

「ふむふむ。じゃあ百人紹介するとして一人頭…これくらいでどうよ？」

「…なっ！？これは…。…いくらなんでも高くないか？」

ゼロが…ひい、ふう、みい、よう、いつ……。高くない？俺が捜査官だった頃の月給三か月分なんですけど？これを百人分か？本当に？

「危険手当を入れてだよ？だいたい普通に雇うとしたらこれの二倍はするし、更に危険手当があるんだからね？ガトウは仲間だから初回サービスだよ」

「むむむ。そうか…。わかった。お二方には話しておくから決まり次第百人を派遣してくれ」

「毎度～♪それじゃ決まったら教えてね？」

そう言うとアオイは後ろ手に手を振って去って行った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ガトウ

――［紅き翼］のとある記録から…

［完全なる世界］…。当初の予想では国際的マフィアや戦争で武器を売り捌く死の商人達。彼らのような戦争で大きな利益を得ようとしている者達の仕業ではないかと考えていた。しかし彼らのような者達を侮るわけではないが、ここまで完璧に隠すことの出来る組織を作り出せるとは考えられない。

未だにその真の正体は謎のままだった…。しかし捜査していたガトウ達は、相手の徹底した秘密主義もあるが、こちらの人手が圧倒的に足りなかったために捜査は難航していた。しかし、それも葵のお陰で人材の問題も解消される事になった。

葵の紹介した者達は優秀だった。次々と［完全なる世界］の活動拠点となる場所を探し当て、更には［完全なる世界］の協力者やシンパ達の名前などを状況証拠ではあるが入手することが出来た。

そしてその手に入れた情報の中に信じたくない名前があった。この国の執政官でメガロメセンブリアのナンバー2の実力者ほどの人物までが［完全なる世界］の関係者だったのだ。しかし現段階では確たる証拠が無いのもあり、踏み込むことも出来ない。

そんな時だった。本国の首都に買い物に出かけていた王女殿下とその護衛のナギが白昼堂々街中で［完全なる世界］と思われる者達に襲撃されたのだ。不幸中の幸いと言えばいいのか。王女殿下とナギは細かな傷はあるものの無事であった。

だが問題があった。二人は襲撃に遭った次の日に帰還したのだ。そう、ナギは王女殿下を連れて一昼夜暴れまわったのだ。これに詠春は怒ったが当の王女殿下自身が「楽しかった」の一言で今回の事は不問になった。

しかし、今回の事件は決して無駄ではなかったのだ。例の執政官が［完全なる世界］と繋がっているであろう証拠の手紙をナギは敵の拠点を襲撃した時に手に入れたのだ。ガトウは、この事をマクギル元老院議員に連絡した。

王女殿下は単身自ら帝国の第三皇女と接触するために目立たぬよ

うに小型船にて向かうことにした。出発は極秘裏に行われた事もあり寂しいものがあったが気心の知れた者達が見送りに来ていたので暗いものにはならなかった。

そして、今…。手に入れた証拠を手にナギ達［紅き翼］の面々はマクギル元老院議員のもとに明日、向かう…。この時は思いもしなかった。あのような事が起きるとは…。

――［紅き翼］のとある記録より…

Ｓｉｄｅ　葵

俺達は今手に入れた証拠品を持ってマクギル元老院議員を訪ねていた。ガトウに紹介したうちの部隊は召集して回収済みだし報酬もばっちりだったな。臨時収入だったし。皆にはお土産奮発しないと。しかし、なんだろ？…なんか忘れてる気がするな？

「マクギル元老院議員？」

「ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

あれ？マクギル議員って種族的には人間だったよな？なんだろ？感じが違うな…。まるで造られたような気配と匂いがする。［完全なる世界］を警戒して身代わりとかかな？

「ハ…それで法務官は、まだいらっしゃいませんか？」

「法務官は…来られぬ事となった」

「…。ハ…？」

ガトウが意外そうにしてるな？マクギル議員は、約束は守る方とガトウから聞いてたのにこれはどういうことだ？それにこの部屋に入ってきてからマクギル議員の目がおかしい…。まるで無機質な…。感情の揺らぎが感じられないような…。

「…あれから少し考えたのだがね。せっかくの勝ち戦だ。ここに来て…慌てて水を差すのも、やはりどうかと思ってね」

「ハァ…」

「……」

なんかマクギル議員の雰囲気が妙だな。ナギも不信に思ってるみたいだし…。ハオとユエもさっきから変に警戒してるし…。

「いや…その…。これは私の意見ではない。そのように考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君達も無念だろうが今回は手を引いてだな…」

少しカマかけに聞いてみるか？何も無ければそれでよし。笑いのジョークということにしよう。それでは、おほんっ…。

「マクギル議員？聞きたいことがある。その身体は…どうした？」

「……何を言っているのかね？わしは…」

言いよどんだね？これは確定かな？…。他の仲間に逃げるように念話で知らせなくちゃ。あっ、もしもし…。うん…。そう…。脱出の準備しておいてくれる？うん。…それじゃ、ね。…これでよし。あとは…。

「あんたマクギル議員じゃねぇな。何者だ？」

――ボゥゥウウンン！！

おぉ。偽マクギル議員の頭が燃えている。ナギ、威力だけならすごいね？ちゃんと勉強すればもっと強くなれるのに…。惜しいなぁ。とりあえずナギに一言…。

「おー…。ナイスヒットだ、ナギ」

「「我が君！お下がり下さい！」」

「はっはっ！当ったり前よ！」

ハオ、ユエ。いつも、ありがとうね。頼りにしてます。

「おぅ！？ちょーー！？ナギおまっ…。何やってんだよ！？元老院議員の頭、いきなり燃やして、おまっ！？…」

「バーカ。よく見てみな、おっさん」

「何っ！？」

ふぅん。無傷か。結構固い障壁だね。でも、ハオとユエの攻撃は

防げるのかな？…無理っぽくね？貫通でしょ。

「よく…わかったね？［千の呪文の男］。…それに［白と黒の双姫］に守護されし者。こんな簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要のようだ」

ハオとユエにそんな二つ名がついてたの？…知らなかった。今まで気にしたことなんかなかったしなぁ。う～ん。こういう場合ってお祝いとかしたほうがいいのかな？

「マクギル議員はどうした！？」

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガロ湾の底だよ…」

海の藻屑ですね？わかります。…そうか、あの人は逝ったのか。個人的に飲みに行った事があったけど気さくでいい人だったな。ハァ…。やっぱりいい人ほど先に逝くものなのかな？また、飲み友達がいなくなっちゃった…。

「てめぇ！」

「バカナギ！迂闊に突っ込むな！」

ナギ、相手の手の内のわからない内に仕掛けるのは愚か者のすることだ。

「通しませんよ…」

「くらえ…」

――ドドドォォォオオオンンン！！！！

案の定、伏兵が居たようだ。それもこいつら…。それなりに強いよ？でも、残念だね？水と火の使い手のようですよ？精霊さん達に頼めば後は肉弾戦しか相手は出来ないね。こっちは構わずに魔法撃ち放題だけど！

「強ぇぞ、やつら！」

「ハッハッ！だが、生身の敵だ！政治家やらと違ってガチ勝負出来る分…万倍、やりやすぜ！！」

ジャックって頭脳労働は向いてないもんね？バカだからなぁ…。

「フ…。〈わ、わしだ！マクギル議員だっ…。…うむ、反逆者だ！…ああ。…うむ、確かだ！奴らに暗殺されかけた！…は、早く救援を頼む！スプリングフィールドを初め［紅き翼］の奴らは帝国のスパイだった！今も狙われている！軍に連絡を…！〉…」

「げ…！？」

「やられたな…」

ううむ。してやられた。マクギル議員の声で連合軍に俺達が議員を暗殺しようとした犯人だとするなんて…。単純ゆえに効果的だな。敵ながら見事だ。んー…。ここで形振り構わずに倒す事も出来るけど…。それだと問題が多過ぎるよね？ならここは…。

「ナギ、ここは退却しよう。状況はこちらが不利だ…。転移は俺が

やるから」

「くっ！…わかった。ここは退く…」

ナギ、ありがとうね。ここは我慢だって。大丈夫、後で万倍にして返してあげようね？くっくっくっ…。ただでは済ませないからね？この俺に逃亡生活なんてさせるんだから覚悟してろや？

「…そういうわけなんで！ここは退かせてもらうね？」

「させると…思うのかい！？」

「ハオォ！ユエェ！」

出来ますよ。何言っているの？俺に不可能な事なんて…。気分次第だけど少ししかないよ？…多分。それに俺には頼りになる家族達が居るからね。ふふ…。

「「お前如きに我が君をやらせぬよ！」」

「くっ！？なに！？」

すげー…。やっぱり障壁切れたよ…。やっぱり自重って大事なんだってこういう時思うよね？でも、妥協はしないがな！作る者としてそこは譲らんよ！

「じゃーねー。また会おうじゃないか？…無表情君？」

「…。逃がしたか…まぁいい。精々、逃げるがいいさ」

はぁ…。これからは逃亡生活か。やだなー…。とりあえず、「紅き翼」の隠れ家にでも行こう。…あ！隠れ家に強力な結界張っちゃえばよくね？あそこって人避けの結界しかないし。…ダメか。魔力反応でバレるわ。ハァ…。とにかく行くか？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

……。

……。

…。

第六話「日常と変化と逃亡と」（後書き）

ん～。もう三、四話で［紅き翼］編は終わりにしたいな…。
早く学園編に入って木乃香とエヴァを出したいな…。
早く書けばいいだけか…ｏｒｚ

第七話「逃亡と捜索と思い出と」（前書き）

タイトルに特に意味はない。
なんとなく付けてみたかっただけです。
意味は後々付けたいとです…。
では、どうぞ。

第七話「逃亡と捜索と思い出と」

Ｓｉｄｅ　葵

どうも！葵です。現在、［紅き翼］は帝国だけでなく連合からも追われる身です。泣きそうですわ…。昨日までの英雄扱いがいきなり議員暗殺未遂で犯罪者扱いです。マジ泣きそう…。別に英雄とかは正直な話しどうでもいいけど犯人扱いだけはユルセナイナァ…。フフフ…。

「我が君、どうかされましたか？」

「何やら暗い気を纏っておられたようですが…」

いかん、いかん。つい不穏な事を考えていたら雰囲気が黒くなってしまったようだ。でも、しかたないよね？逃亡生活ですよ？もう、精神的に、ね？わかるでしょ？そう！面倒くさいの！…は？精神的に追い詰められて参ってるんじゃないの？って？

違うよ？何言ってんの？これでも俺は七百と数十年を狂わずに生きてきたのよ。今更、高が逃亡生活くらいで参ったりしませんよ。まぁ時間は無駄にあるから暇を持て余す事には我慢ならなかった時期もあったけどね…。退屈は最大の敵だわ…。

「ハオ、ユエ…。大丈夫、何でもないよ。ちょっと今の状況に理不尽なものを感じただけだから」

「ふむ。我が君がお望みならば御下命とともに吾等全軍は連合も帝国も、みな片付けてみせますが…」

ハオ…。いったい、君は、どう考えたらその結論に達する事になるんだ?そんな面倒な事したら余計に大変じゃないかな?時間的にはこちらに分があるけど人的にも物量的にもこちらは圧倒的に少ないよ…。まぁ、要は負けなければいいだけだけどね?やりようは幾らでもある。でもなぁ…。

「いや、それはいいからね。ハオは落ち着こうか?俺も落ち着くからさ。ユエ、お茶淹れてくれる?」

「承知。前に手に入れた良い茶葉がございますのでそれでお淹れしましょう」

「むぅ…。私は落ち着いておりますぞ?」

うん、わかってるよ?正直な話し正面から戦わなければ俺も勝てる気がするね。この時代の魔法使いって全体的に…。なんて言うかな…。そう…脆いよね?鍛錬、修練、修行などなど…。言い方は色々あるけどナギ達みたいな一部の人達を除いて密度が薄いのよ。

アレはダメでしょう?魔法の教本なんかもね?術式や属性間の関係性とかはある程度技術として確立してわかってるんだからさ。具体的に記せばいいのに表現が抽象的だし非効率的で無駄が多いの。まぁ門外不出の物もあるかもだから一概には言えないけどね。

それに「火よ灯れ」なんて初歩の初歩である呪文があるけど火が点くまで延々と繰り返すなんて時間の無駄でしょうよ。だって魔力の感覚がわからんのよ?ヤルだけ時間の無駄無駄。そんな事するく

らいなら誰かに間接的でもその人の身体に魔力を軽く流してみた方が早いし時間の省略にもなるよ。

…まぁ一人一人魔力を流すなんて面倒なのもあるけどね？個人に師事してるならそんな事ないけど…魔法学校とかは、ね？人数多いし無茶かな…。この世界の魔法使い達は基本的に魔法の基礎を習ったら後は術式をアレンジして自分の使い易いようにしていくみたいだから最初さえ何とかなれば後はどうとでもなるよね？話しが脱線しすぎた…。

「ハオ？俺はね、連合も帝国も滅ぼす事なんかしないよ」

「我が君？」

「だって、そうだろ？そんな事したって俺には一文の得にもならないし。寧ろ、より面倒な事になると思うしね」

「しかし我が君、吾らならば可能なのでは？この前の戦でもそれは明らかではありませぬか」

んー…。それを言われると弱いなぁ。俺は思わず苦笑してしまう。だって武力だけなら勝てるからね。でも、それをやるには時代が悪過ぎる。昔の混沌としていた時代ならやりようはあったけど、今のある程度管理された社会でそれをやるにはリスクが高すぎるからね。

今考えると俺がこの世界に来た時なら丁度良かったかもしれないなぁ。あー…。やっぱダメかな。旧世界は兎も角、この新世界は無茶かな。だってこの世界を創ったのがラスボスだった気がする。名前は…。何だったかな…？引篭り神？…なんか違う気がするなぁ。あぁダメだ…忘れたな。まぁ時期が近づいたら思い出すかな…。思

い出せるといいなぁ。いや、別にいいか？

「可能だよ？出来るけどダメ。普段は平穏なのがいいの」

「平穏…。そう…ですな。穏やかな時は良い…。心安らぎまする」

そうでしょ？のんびり過ごせばいいじゃない。もちろん戦う時は戦うけどね？一度始めたら容赦なんてしません。細胞の一欠けらまで消滅させます。あっ、模擬戦みたいな練習死合は別よ？ちゃんと消滅しないように怪我程度まで手加減します。お？ユエが戻ってきた。

「我が君、お茶をお淹れしました」

「ありがとう、ユエ。ふふ、ハオも平和なのがいいでしょ？こうしてゆっくりお茶も出来るしね」

「はい。我が君が心穏やかに過ごせるならば、私は…これ以上の喜びはありませぬ」

ハオもわかってくれて嬉しいな。おぅ？このお茶美味しいね。後でユエにメーカーを聞いておかないと…。

「姉上、我が君？何の話しでしょうか？」

「ははははっ。何でもないよ。ただ平和なのはいいね？って話しだから」

「うむ。平和なのは良い事でありますな」

「ん？んん？？」

「ふふふ」「ははは」

ユエの淹れてくれたお茶が美味しいです。緑茶はいいね、はい。平和だなぁ。…なんて考えてるんですけどね？違うんですよ…。現実逃避的な事をしていましたが俺達って一応逃亡者的な者なんだよね…。ハァ…。溜め息も出ます…。あーあ、幸せが逃げちゃうなぁ。

ふぅ。まぁそんなこんなで俺達は無事に［紅き翼］の個人的な隠れ家を拠点にして行方不明の王女殿下の行方を探したりしています。…主に俺の家族達が、ですがね？…ちょっと聞いてくださいよ。これってば前金なしの成功報酬だけなんですよ？つまり失敗したら報酬なし！どうゆう事、これって？

ことの発端は深刻な人手不足でしたよ？そこでガトウがこの前俺が紹介した人達をまた紹介してくれと言ってきたのですよ。俺は「いいけど、お金は？」って聞いたら何と言ったと思います？彼ね、「今は無いが後で必ず支払う」とか言い出したんですよ？

ガトウ君？君さぁ俺達の事舐めてんのかね？俺達は前金で払ってもらうのがモットーなのよ。それか前と後で半分とかね？ソレが何？全額を後金？ふざけてんの？そんなのに俺の家族に危険を冒せと言うのか？これはアレか？ケンカ売ってんのか？買うぞコラ？

そんなやりとりが俺とガトウとであったんですがね？最後の手段と言わんばかりにガトウがね。何したと思う？ザ☆土下座！を綺麗にしてくれやがったんですよ！？大の男にこんな事させたんじゃ動かないわけにはいかないじゃない？

引き受けてやりましたよ！ちゃんと書類にして成功したら必ず払うことを宣誓させましたよ。そう成功したら、ね？…ハメラレタｏｒｚ汚くない？これって汚くない？成否に係わらず払えよ…。こちとら慈善事業じゃないんだから。

いや、わかってるよ？ちゃんと確認しなかった俺も悪いんだけどさ。何も仲間までハメル事ないじゃん。俺のテンション、ガタ落ちですよ？契約しちゃったから一方的に破るわけにもいかないしね？…向こうが破ってくれないかな？そうすれば逃げられるのに…。…無理か。ハァ…。

「はぁ…。お茶が美味しい…」

――［紅き翼］と葵達が王女殿下を探して数日…。

捜索に出ていた皆から結果報告が来ました。でも本当にここにあの王女殿下が居るの？それもヘラス帝国の第三皇女まで居るって言うじゃないか。いや自分の家族が報告してきたことだから信じてるよ？悪い癖だけど無条件に、ね。俺も、うろ覚えで名前は忘れたけど、なんだかホニャララ迷宮みたいだったのは…。ごめん、ウソ。マジで覚えてないわ…。

そんで皆が見つけてきたのは今では古代遺跡が立ち並ぶ中にあるその名も「夜の迷宮」。昔はここも賑やかなものだったのに今じゃ遺跡扱いか…。なぜだか、とても寂しい気持ちにさせられます。自分だけが周りから置いてきぼりにあったような気にさせられるから不思議なものですよね？俺には家族達が居るからそんな事は無いのに、ね？

「我が君？」

「どうかなされましたか？」

「ん？なにがかな？」

「いえ、なにやらお顔を寂しそうにしておられたように感じましたので…」

「そうですぞ？なにかございましたら吾らにお申し付けください。必ず憂いは晴らしてみせますぞ」

二人には心配をさせてしまったようです。数百年も前の事を思い出して懐かしさに身を任せていたら…。つい、いらない事まで考えてしまったのですな。はっはっはっ！イカンイカン！人生前向きに考えなくては！俺はまだ若いんだから！だって不老だし！見た目二十歳前後にしか見えないよ！？

ふぅ…。落ち着け、俺。今は思い出を振り返る事よりもする事がある。まずはハオとユエに何でもない事を伝えなくては！…なに？皆に王女殿下の事を伝えなくていいのかだって？…この場合、家族の不安を取り除くこと以外に大事な事なんかあるか！戯けが！！

「大丈夫だよ。ハオもユエもありがとね。…ちょっと昔を思い出してただけだから」

「昔…ですか？」

「そうだよ、ユエ。あの場所には俺がこの世界に発生したばかりの頃に居た事があってね。その時の事を思い出してたんだ」

ドラゴンから逃げてきて辿り着いたのがここだったからなぁ…。割と思い出深いのよ？ここは。昔、流れ着いた俺を、ここにあった宿屋の店主に助けてもらった事は今でも覚えてます。豪快で気前のいい人だったな。

「…という事は吾等が生まれる前の事ですな？…くっ！口惜しい！その頃から吾等も御一緒出来ていればもっと長い時間を過ごせたものを…！私は口惜しいですぞぉ！？」

ハオ？それを今言われてもしかたない事だと思うよ？それにハオはもっと長くって言うけど俺達六百年近く一緒に居るんよ？…まぁハオ達は最初の百年、まだ九十九神化してなかったから意識的には五百年近くかもしれないけど。

「姉上…。気持ちはわからんでもないが落ち着くのだ。我が君が困惑しておられるではないか」

「ハッ！？…つい取り乱してしまいました。すみませぬ、我が君」

いや？びっくりはしたけど面白かったよ？ハオの一緒に居たいという気持ちがストレートに伝わってきて嬉しかったしね。…もう！本当に可愛いな！その家族思いなところが、たまりませんな！

「はは、いいよ。ハオのお陰で気分が楽になった。やっぱり楽しい時間の方がいいよね」

「ん？ん？？ん？？？ユエ、よくわからんのだが我が君は立ち直られたのか？」

「そのようだぞ。それも姉上のお陰のようだ。お手柄であるぞ」

うむ。やはり家族は偉大だと俺は思うのですよ。別に落ち込んでいたわけじゃなくて思い出に浸っていただけなんだけどね。たとえ勘違いでも心配してくれるのですから嬉しいものですな。さてとハオ達の不安も取り除けたのでナギ達に王女殿下達の事を伝えに行きますかね。

そしてナギ達［紅き翼］の皆に集まってもらって捜索の結果報告を伝えます。今現在の王女殿下の居場所、そこには王女殿下と接触する筈だったヘラス帝国の第三皇女であるテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアまでが一緒に幽閉されていることがわかった。

どうでもいいけどなんだって王族の名前ってこんなに長いのかね？俺、初めて聞いた時は舌を噛みそうになったよ。うん、ごめん。マジでどうでもいいな。話しを続けるか…。

「そうか…。アリカ王女は［夜の迷宮］に居られるのか」

「よしっ！それじゃチャチャッと助け出しちまおうぜ！」

「なんだぁ？姫さんの事が心配でたまりません！ってかぁ？」

「ははっ！ナギも存外に可愛らしいところがあるもんだな！」

「んぁ！？ジャックもアオイも！うっせぇぞ！コラァァアアア！！！」

捜査の中心であり依頼人のガトウとナギ達に、あらかた報告が終わり早速救出作戦に移る事になった。この時はナギが率先して動こうとしたからジャックと一緒になってからかってやったら無茶苦茶暴れやがった…。まぁフルぼっこにしてやったがね。バカ者が俺達に勝てるわけないじゃん。俺とジャックは殆んど見てるだけだったけどね…。

「くそっーー！四人がかりなんて卑怯だぞっーー！！」

「毎回毎回懲りる事のない小童だな。我が君の守護たる…」

「…吾らが居るというのに。学習能力がないのか？」

「なぁ、アオイよぉ？四人がかりと言ったが俺達何かしたか？殆んどお前んとこの強ぇ姉ちゃん達がやったよな？」

「あは、あはは…。人数だけを見れば最初から二対一だったんだからいいんじゃない？結果は変わらんと思うよ？」

…そう変わらんよ。そこそこ異常な力と長い年月かけて培われた体術から魔法など様々な技術をものにした俺に勝てるかよ。まぁ俺が動くと俺だけじゃなくて先にハオとユエの二人が動くんだから考えてみると容赦ないよな…。ごめん、ナギ。…でもやるからには容赦はしないからね？負けるのはイヤなのよ。

それで王女殿下達の救出だけど場所はもう判明していて俺の家族達が監視もしているから移動しても直ぐにわかるようになっている。報告からは最低でも命の危険はないようなので焦る必要もない。敵に突っ込もうとしたナギに言い聞かせてから作戦を立ててゆく。

「コラァ！下ろせや！？」

「アオイ…。ナギの奴が…」

「何、ガトウ？何か聞こえるの？」

「アオイ！聞こえてるんだろ！？下ろせっつってんだよ！」

「…いや、聞こえるのか？ってお前…。…いいのか？」

「いいの、いいの。肉体労働組みが居ても作戦を立てるのに邪魔なだけなんだから」

「それはそうだが…」

「コラッー！いい加げっ！？《ドゴンッ！！》ぐぺろ！！……」

まったく、もう…。雉も鳴かずば撃たれまいに…。な～む～。

「我が君。少々小うるさいのは黙らせてまいりました。どうぞ、続きを」

「ありがとうね、ユエ。…それで作戦なんだけど…。ガトウ、どったの？」

「…いや、もう何も言うまい。それで何だって？」

「？？？…まぁいいや。作戦なんだけど…」

そして決まった作戦は極めてシンプル。まずは正面から堂々と攻め込む、もちろんこれは陽動だよ？正面からでも叩き潰せるけど幽閉されてる王女殿下達の生命がかかってるから無茶出来ないんよ。報酬の件がなければナギに賛同して突撃かますんだけどね…。

よって却下！お金が貰えないなんてイヤです…。イヤすぎます！家族のためなら幾らでも使うけど王女殿下はナギといい仲だしね？まったく関係ないわけじゃないけど俺にとっては、まだ知り合い程度なんよ。命張ってまで助けたいとは思いませんな！

まぁ今回はナギや皆の頼みもあるから助けるけどね。報酬もかかってるしね！死なせません。助けますよ？死にそうな怪我ならどんだけでも大丈夫。即死とかでなければ何とかなる。まぁ後で使った物の料金の請求に伺いますけどね？また話しが脱線した…。これが歳をとったという事なのかな？いかんなぁ、ハァ。

…で、ですね？陽動している間に少数精鋭で王女殿下達を救出するという作戦なのですよ。監視とその他バックアップは俺の家族達です。こういう状況の場合は出来るだけシンプルな作戦の方が大き

な失敗もないしね。フォローも効きやすいのよ。

「こんな感じかな。ガトウ、どうかな？」

「うーむ…。ああ、これでいいと思う。救出作戦なんかはシンプルなものの方が成功率は高いからな」

「詠春とアル、ゼクトは？」

「問題ないな。後は救出部隊と陽同部隊を誰がするのかを決めるだけだな」

「そうですね。誰が危険な陽動の役割をするかが問題です」

「儂もこれで良いと思うぞ。役割を決めるとしよう」

結局、正面から攻めるのは悪魔三人娘達に任せます。あの三人娘、前回の［グレート＝ブリッジ奪還作戦］に参加出来なかった事が不満だったらしいよ？暴れたかったんだってさ…。いいじゃん？のんびり出来てさ。大体君達まで戦うとしたら過剰戦力もいいところでしょ？今の君達の力だけは魔神と言っても過言じゃないんだから。流石に帝国兵が可哀想だよ…。

最近、気が付いたんだけどね？俺の家族達皆一（下士官と兵隊は除く）と、この新旧世界の繋がりが希薄になってきてるようなのよ。精霊さん達は自我がより強固なものとなって始まりの四精霊と言われる原初の精霊のようになりかけて力が半端ないし。

悪魔達三人娘はもう世界の縛りが殆んどないからこちらに顕現しても力の制限がないし残ってるその縛りも決して切れる事のない俺

との契約的な繋がりを残すのみで何の弊害もないしさ。特殊な召喚とかいらんのよ?本来なら色々儀式的な召喚をして一つずつ世界の枷を外していくものなのにね。

九十九神の姉妹は…。わかるだろう?俺の自重ない当時の行いのせいで最早彼女達は『刀神(とうしん)』と言っても過言じゃない段階に入ってるんだよ!人工的な刀剣の神様だよ?当時の俺ってダメじゃね?やり過ぎだろ…。

そんなこんなで作戦が決まったから悪魔達三人娘のオリビエと心の中で今回の事を話してます。作戦の事を彼女達はどうやら俺の目と耳を通して知っていたようです。顕現していなくてもそのくらいなら今の彼女達は出来るようだね。俺のプライバシーってどこ逝った…?後で聞いたら俺から遮断できるみたいです。よかったぁ、イヤ、マジで。

【…なぁ葵はさ、あたし達とは別行動なんだよね?…】

【…そうだね、俺は救出組みの方に行くからね…】

【…そっか。ねぇ?あたし達が頑張れば葵の危険は少しくらい減るかな?…】

【…減るとは思うよ?でも、オリビエ達に無理をしてもらってまでしてほしいとは思わないけどね…】

ホントにね？無理はしてほしくないよ。彼女達なんだかんだ言って基本的に優しいから油断して襲われるとかになったら心配だし。仮にそうなったら殲滅戦も視野に入れとかないとね？仕返しは万倍返しだよ。基本でしょ？

【…減るんだね？葵が怪我する可能性が減るんだよね？ならあたし頑張るよ。絶対、成功させるよ…】

【…だから無理はしないでよ？心配なのは変わらないんだから…】

何度も言うけど無理しないでよ？お願いだからさ。お兄さん、心配なのよ。

【…何よそれ？心配なのはあたし達だって同じなんだから、葵は人間であたしは悪魔。身体の基本スペックが違うんだから大丈夫よ…】

【…そういう意味じゃないんだけど。怪我とかに気を付けてねって話しだよ。女の子なんだから傷とか残ったら大変でしょ？…】

関係なくない？悪魔って言っても女の子ですよ？いくら身体自体が丈夫とは言え傷なんか残ったら大変。お嫁に行けなくなっちゃうよ？…。やっぱり、今の無し！お嫁になんか行かせません！お兄さんは行かせませんよぉぉぉおお！！！

【…葵はあたしに…あたし達に傷が残ったら、イヤ？…】

【…イヤだよ？まぁ傷があるからって嫌いになるなんて事はないけどね。皆、綺麗なんだから勿体無いじゃん？…】

【…ありがと、葵…】

【…何言ってんだか、当然でしょ?…】

少し照れくさい…。オリビエがしおらしいです。普段の勝気な姿があるからギャップが…。可愛いなぁもう!絶対に嫁には出しません!こんないい子、どこの馬の骨ともわからない奴に渡してなるものか!ん〝ん〝っ!!すまん、取り乱した…。

そういうことで今回は悪魔三人娘の彼女達に不満を発散させるために正面から奴ら相手に暴れてもらおうと思います。これでいくらかストレスが発散できればいいな…。彼女達も悪魔だから戦う事は嫌いじゃないみたいだしね。楽しんでもらえればいいけど…。無理かな?あの無表情君ぐらいの使い手が居れば少しは楽しめるかもだけど。それでも怪しいけどね?

突入メンバーより少ない人数の陽動と言うのもアレなんだけど、この場合は正解だと思う。巻き込まれて死にたくないし…。いや死なないよ?俺は、ね…。周りは知らないけど、何もわからずに蒸発するんじゃないかな?もしくは消滅?

ザコなら魔力放出だけで消し飛ぶんじゃないかな?まぁそれはつまらないから皆、普段は力を抑えているみたいだけどね。普段から周りを威圧しちゃうのは相手が可哀想ってか、それじゃ喫茶［クレイドル］で働けないから困るのよ、俺がね。皆はそれがわかってるから最低限まで抑えてくれてるの。助かります。

威圧感のある喫茶店なんて俺がイヤすぎるからね。のんびり平和な店内にしたいのよ。思わず午睡にまどろんでしまいそうな程に安心感のあるお店にね。実際の話しスゴイ安全地帯だよ?人数で言えば軍隊並みの家族達が守ってくれるからね。質は最高峰だし。

そして各々の役割が決まり後日救出作戦を開始するために動く事になった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第七話「逃亡と捜索と思い出と」（後書き）

今、気が付いたけどオリキャラ設定出してない…。
ん～…でも物語中にちょこちょこ紹介してるからいらないか…。
原作突入したらいくつか番外編とか出したいですね。
葵の過去八百年の間とか、ね？
ではでは～、また次回にでも。

第八話「突入と救出と脱出と」（前書き）

作戦開始！みたいな？
逃亡編は早く終わらせたいです。
字数と時間がかかってちっとも進みやしない！
はぁ…。
でも負けない！だって「ネギま！」が好きだから！
では、どうぞ。

第八話「突入と救出と脱出と」

――救出作戦当日…。

Ｓｉｄｅ　オリビエ

葵に呼び出されてあたし達は今［夜の迷宮］の近くに居る。内容は葵の目と耳を通してあたし達も見聞きしていたから大体はわかってる。ウェスペルタティア王国のアリカ王女救出のためにあたし達に陽動をしてくれと葵に頼まれた。

そう、葵に頼まれたのだ！前回の大規模な戦闘ではあたし達は呼ばれなかったから不満が溜まっていたのもある。あの時あたし達が居れば瞬く間に帝国兵なんか消し飛ばしてあげたのに…。なにも葵自身が戦うことなんてない、戦いはあたし達が引き受けるよ？怪我したら危ないじゃない。

もし葵が怪我なんて負うものなら、あたしは葵を傷つけたそいつを生かしておける…ジシンガナイヨ？ううん、間違いなく殺しちゃう…。だからお願い、後ろに居てよ…。葵が強いのは知ってるけど心配なのは変わらないんだからさ。

はぁ…。まぁここに居ない人に言ってもしょうがないんだけど、ね？葵は今あの［紅き翼］の人間達と行動しているから、ここはあたしとリビエラそれにシルビアの三体だけ。これだけとは言え十分なんだけどね？どちらかと言うと過剰なぐらいだと思う。

これが殲滅戦なら完璧なのになぁ。楽なのになぁ。暴れたいなぁ。

あー、あー…。

「オリビエちゃん、作戦開始時間よ～？」

「え？もうそんな時間？んー、大した敵が居ないから気が緩んでるのかな？」

「オリビエ…ダメ…お兄ちゃんの…お願いだから…ちゃんとやる…」

「そうよ～？葵ちゃんのお願いですもの～。しっかり役目を果たさないとダメダメよ～？」

「わかってるわよ！手なんか抜くものですか（ニヤリ）。葵からの指示は「出来るだけ派手に」という事…。それさえちゃんとやれば後は好きにしていいって言われてるんだから、役目は果たすわよ！さぁて二人とも準備はいい？派手に暴れるわよ！！」

「ふふふ、わかりましたわ～！」

「お願い…されたから…うん！」

あたし達は駆け出して比較的広い場所に陣取り周囲を警戒する。敵側にはまだあたし達が侵入したのに気付いてないようだ。鈍いよね？でも、どんなに力をつけてもあたし達が油断なんかするもんか。あたし達くらいの力があれば早々簡単にはやられないけど警戒するに越したことはない。下手に怪我なんかしたら葵に心配かけちゃうからね。

「リビエラ！まずはアンタからブチかましてやんな！」

「は～い！いっくわよ～！！」

両腕を頭上に掲げてリビエラは掌に魔力を集束させていく。最初は小さな火が現れるだけだけど徐々に大きくなる。それは電化した炎の塊。形は球状でその周りをバチバチと過剰エネルギーが奔っている。これは炎の塊などと生温い物ではなく正真正銘プラズマだ。触れれば瞬く間に蒸発されるだろう。

リビエラはそのプラズマの塊に広域爆発術式を組み込んで殲滅…。って！？ちょっと待て！！殲滅しちゃダメでしょ！たしかにブチかませとは言ったが、それはダメでしょ！！葵達があの中には居るんだから！こんな物騒な物を発動させるわけにはいかない！止めなくては！！

「リビエラ！ちょっとタイム！ストップ！待って！」

「もう～！オリビエちゃん、な～に？今いいところなんだけど～」

「いいところなんだけど～、じゃないでしょ！？そんなのやったら、この辺クレーターどころの騒ぎじゃないでしょが！消滅だよ！？消滅！あの中には葵だって居るんだからね！？」

「葵ちゃんならこれぐらい大丈夫よ～。（ボソッ）他の人はわからないけど～…。とにかく大丈夫よ～」

「今ボソッと言ったでしょ！？人質になってる人達が居るんだから建物関係は壊しちゃダメ！失敗したら葵に怒られるよ！」

「む～…。他の人達はどうでもいいけど～、葵ちゃんに怒られるのはイヤだわ～。嫌われちゃうものね～。それじゃ～…こういうのは

どうかしら～！？」

リビエラはそう言うと今まで維持していたプラズマ塊の術式を変更したのか徐々に分裂・細分化を始めた。もう目に見えないほどの細かさだ。光っている霧状のモノを想像したらこうなるだろうなとあたしは思った。周りがキラキラと光っていて場違いにも綺麗だなとも感じた。周囲は物凄く暑いけど…。

でも、ちょっと待って…。さっきのプラズマ塊がコレなんだよね？ということは、だよ？コレ全部が一斉に爆発なんかしたら…？…っ！！？マズくない！？ヤバイヨネ？リビエラはなんだって今回はこんな過激な事ばかりするの？あたしは不思議に思った。

「リ、リビエラさん？なんで今回はこんなに…過激なんでしょうか？」

「？？？…。オリビエちゃん、何を言っているの～？そんなの当たり前で～、理由は一つしかないじゃな～い？」

「いや、当たり前で理由は一つって言われても、ねぇ？…わかんないから聞いてるんだけど…」

「うふふ～。ダメダメね～？オリビエちゃんったら～。そんなの～…葵ちゃんに迷惑をかけた悪い子達に～、お仕置きするために決まってるじゃな～い。…絶対に許さないわ～。フフ、フフフ…」

あー…。あたしは理性では「いけない、止めなくては」と考えているのにあたしの欲望的な部分はリビエラの言葉に揺れた。確かにリビエラの言うとおりだ。葵が今追われる立場になったのはこいつ等のせいだ。何であたしが止めないといけないのか？

止める必要なくない？寧ろバンバンやっちゃいな！…みたいな？生きている価値がこいつ等にあるの？あー…ダメだ。思考が全部暗い方向にしかならない…。どうしよう？いやいや、悩む必要ないか。葵のお願いは「出来るだけ派手に」だ。…これ以上ないくらい派手じゃない（ニヤリ）？

「リビエラ…。やっちゃいな！生かしておく必要なんかないわ！でも建物の中には葵達が居るから加減はするのよ！？」

「うふふ～。わかったわ～、任せて～。…さぁ死を振り撒け…［貪り喰らう霧］…」

リビエラの言の葉に霧は流動して指向性を持って敵が居ると思われる方向に向かって行く。周りにある霧が晴れて一瞬の後、其処彼処から小規模の爆発音とそれに紛れて悲痛な悲鳴が聞こえ始める。そして濃い血の香りと肉を焼いたような匂いが立ち込めはじめた。

さっきリビエラが倒した敵数はだいたい全体の四割ってところかな？敵襲にやっと気付いた敵があたし達の方へと向かってくる。雑多な魔力反応達の中にそこそこ大きな反応が数個ほどあるけど…ダメね。あたし達の相手にならないわ。

「よぉしっ！リビエラ、相変わらず上手いじゃない！それじゃ後は援護に専念！あたしとシルビアは向かってくる敵を片っ端から殺りに行くわよ！」

「いつもどおりね～？お姉さんにお任せよ～。…そ～れっ！」

「オリビエ…どっちが…多く倒すか…競争…する？」

「ハッハー！やってやろうじゃない！負けないわよ！？」

「うん…ボクも…負けない！」

シルビアが駆け出して行き、あたしはシルビアの横に並ぶように走る。遠くに黒いローブを羽織った魔法使い然とした姿の敵が多数見えてきた。あたし達は敵が視界に入ったと同時に一気に加速して相手の背後にまわり自分達それぞれの武器で敵を排除していく。リビエラも遠距離からの援護で「貪り喰らう霧」をあたし達の周りを包んで近寄らせないようにして精確に敵の頭を打ち抜いていった。気温が凄まじく上がってる気がするわ…。

「ハッハーッ！あたし達を止められる奴はいないのか！？」

「くそっ！何なんだ、こいつらは！？」

「たった三体の下級悪魔に何を梃子摺っているんだ！！囲め！囲んで袋叩きにしろ！」

「それが出来ればいいね！？まぁ？あんた達じゃ無理だろうけど！あーはっはっはっ！！」

「何をぉ！！――！？うぐっ！がはっ！？」

「余所見…してる余裕なんて…ないよ？」

正直退屈だなと思う、敵が弱すぎるのよね。はぁ、しっかし、リビエラの殺り方ってエゲツないわぁ…。見た目キラキラ綺麗な霧みたいなのに触れたら連鎖的に小規模爆発起こすし体内に取り込んだ

らそこから焼け爛れるんだから。後者の場合は目も当てられない状態になる。…見たくもないけど。避けても頭や身体のどこかを打ち抜かれるんだから敵にとってはやってられない。

「あたし達をただの下級悪魔だと考えたのがあんた達の敗因なんだよ！」

「バカな！？下級悪魔にこれだけの力があるわけがない！これでは、まるで…」

「バカな事を言うな！爵位もない下っ端にこんな力はない！何か仕掛けがあるはずだ！」

「残念だけど…。これは純粋にあたし達、個の力！仕掛けなんてないよ！ほらぁあ！死にさらせぇえええ！！」

とにかく敵の目はこちらに向いた。後は葵達が確りと助け出せれば今回は終わり。その後はあたし達の自由だ、ここに居るやつ等に何をしようが…。クックックッ…！葵に…、あたし達のマスターにした事の報いは絶対に受けてもらう。それまで生き残れるといいな？有象無象の傀儡どもよ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　オリビエ

Ｓｉｄｅ　アイリス

葵君…司令閣下が今回の救出作戦に参加している。自分達は作戦全体の援護と他のバックアップだ。今回の作戦に自分達「精魔奇兵」の参加数は自分を含めた指揮官となる下士官二人に一中隊１２人が二中隊の計２６人だ。

我が第一中隊と第二中隊は司令閣下直属の精鋭中の精鋭だ。任務の成功率は高く部隊の規律も良い。そして何より…葵君の事が大好きです！優しく微笑んでくれる葵君！お菓子の差し入れをしてくれる葵君！…絶対に守ります！命に代えてもなんて言うと葵君は悲しむからそんな事しません。

ゆえに私達は強くなりました！誰にも負けないように！今も訓練を疎かにはしていません！将軍達にはまだ勝てた事ありませんが…。でも、それ以外は完璧です！情報管制から事務。メイドさんなんかもやりますね。葵君だけにですけど…いやん、ご主人様♪…後は護衛官から戦争屋、暗殺から殲滅戦、搦め手は諜報戦なんかもやります。…ハニートラップなんかはしません。したくもないです。葵君相手なら…いやん、もう♪

んんっ！…話しがそれましたね。とにかく私…もとい、自分達は作戦区域に展開中だ。自分達第一中隊の今回の任務は脱出路の確保。現場の遺跡「夜の迷宮」にはほぼ全体に亘って転移による進入を妨害する結界が展開されているので自分達の役目は転移妨害をしている者、又は装置の排除。

第二中隊の役目は陽動部隊のバックアップと敵情報伝達の誘導と妨害。…陽動部隊のバックアップは正直必要ないと思われるので敵情報伝達の誘導と妨害がメインになると考えられる。その辺りは現場の指揮官に一任してあるので彼女に任せようと思う。

「指揮官殿、転移妨害の発信地点となる場所の特定が出来ました。全部で二箇所です。メインとは別に予備があるものと思われますが」

「よろしい。…では部隊を二つに分けて同時に制圧する事とする。第一小隊と第二小隊は自分に続きメインを制圧、排除する。第三小隊と第四小隊は予備と思われる場所を急襲、排除しろ。任務完了を確認したら速やかに脱出。…いいか!?こんなところで一人の犠牲も出すんじゃないぞ!そんな事になれば悲しむのは誰だ!?我らが司令閣下だ!全員何としても生き残れ!以上!では作戦開始!」

「「「「了解!」」」」

自分の号令とともに小隊長の彼女達がハキハキとした返事で駆け出していく。瞬く間に小隊長達は自分の小隊を連れて目標に向けて進撃を開始した。さて、自分達も彼女達に負けていられない。完璧に任務をこなさなくては…。…そしてこの任務が成功したら葵君に褒めてもらえるだろうか?…ふふ。そんなぁ、ご褒美に今度デートでもなんて…うふふ、いやん♪いやん♪

「指揮官殿?」

「…なんでもない。自分達は［夜の迷宮］内にある転移妨害のメインの排除だ。行くぞ!」

「了解!」

さぁ頑張ろう。私達の働きに葵君の生命がかかっているのだから。任務は必ず果たします。私の愛おしい人…!

――［夜の迷宮］内、通路…。

部隊を率いて通路を自分達は進んで行く。小隊を交互に進ませる。これはお互いに死角を最小限にして進むためだ。ここまでは敵の策敵にはかからずにやってきたが目標の近くに近づくにつれて警備の者が増えてきた。

まだ接敵してはいないが時間の問題だろう…。あちらが気付く前にこちらから攻めなければ奇襲する意味がない。時間は限られているのだから急がなくてはならない。敵に見つからないように通路を進んで行くと、ついに目標となる装置とそれを制御する三人の魔法使いを発見した。

見つけた…。自分は仲間達に指示を出して敵を半円形に囲むように展開する。全員が配置に着いた事を確認したら後は時機を見て突入の合図をするだけ…。息を殺して魔法使い達を様子を窺う。敵は外の様子が気になるのか全員が落ち着きなくソワソワしている。

仲間達が既に配置に着いた事は確認した。そして不安なのか敵は一箇所に固まろうとしていた。これは好機だ。一箇所に集まってくれれば、まとめて始末できる！…あと少し。…あと少しで。…今！

「総員、突撃！敵を排除しろ！」

自分の命令で仲間達が姿を現せて敵に攻撃魔法が襲い掛かる。自分達の身体は司令閣下に与えられた特別製。それに元は悪魔や精霊だ。魔法の発動体となる杖などは自分達には必要がない。…その代わり個を象徴する属性以外は使えないが、な。まぁ元悪魔の自分達

は関係ないけどね?戦闘が本分でしたから。

「な!何でこんなところに!?がはっ!」

「バカ!考えるより反撃しろ!この!がっ!?ぐぅうう!……」

「お、応援を…」

次々と敵の魔法使いが倒れる中で一人が援軍を要請しようとしている。不味い!ここで増援が来ると面倒な事になる!

「させるか!」

自分は、その魔法使いに一瞬で接近して魔力を乗せた拳を叩き込む。腹部を貫かれた敵魔法使いは無念そうにゆっくりと倒れていく。

「ぐはっ!おのれぇぇ…」

「ふん!愚か者が…。各員、状況報告!」

このような後ろ暗い事をしているのだ。恨み言をほざく前に自分が滅ぼされる覚悟を持て。ともあれ伏兵が居ないともかぎらない。周辺の確認も済ませなければ…。

「クリア!」

「クリア!」

「状況クリア!…指揮官殿、敵の排除を完了しました!」

次々に仲間達から確認の報告が届く。伏兵の類は居ないようだ。無用心な…。ともあれ余計な手間をかけなくていいのは幸いだ。早く装置を破壊して司令閣下の退路を確保しなければ…！

「よろしい！では、装置を破壊後に脱出する！かかれ！」

「「「了解！」」」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

Ｓｉｄｅ　アリカ

この場所に幽閉されてからどのくらい経ったのか…。まだ我が騎士は来てくれない。何を手間取っておるのか。早く助けに来ないか。私にはまだやるべき事は山ほどあるのだからこんなところでグズグズしてなど居られないのだぞ。

だいたい我が騎士はデリカシーが足りない。私に馴れ馴れしいし、な。いや、それは良い。あのような態度の者は今までになかった。私にはとても新鮮で心地よいものに感じた。正直こうしてただただ我が騎士を待つのも嬉しいものに感じてくるから不思議なものだ。

そうこう考えているうちに何やら外が騒がしい…。遠くの方で「敵襲ー！」、「見張りは何をしていた！？」などの声が飛び交っているのがここまで聞こえてくる。敵襲？ここに攻め入った者が居るということか？

ここまで考えて私は思い当たった。我が騎士だ…。ようやく来てくれた…。まったく…遅いぞ？待ち草臥れてしまったではないか。そんな思考に耽っていると私の目の前ではヘラス帝国の第三皇女が扉に近づき耳を当てて声を良く聞き取ろうとしている。

「むぅ…。会話などはよく聞こえんな。あちらこちらから爆発音のようなものは聞こえておるのじゃが…」

「……」

「のう？アリカよ。これはお前の言っておった者達の仕業かの？」

「わからない。だがここに襲撃を仕掛ける者が他に居るとも思えない。おそらく我が騎士と仲間達だ」

そう態々このようなところに襲撃をかけるなど、そのような物好きが多く居るわけがない。高い確率で私達のうちどちらかの関係者だ。そしてこれは我が騎士で間違いないと感じている。単なる私の願いかもしれないが…。

――ドゴンッ…！ドカンッ…！

「な？なんじゃ？何の音じゃ？」

「この音は…」

――ゴギャンッ！がらがらっ…。

壁の向こうから何やら鈍い音がする。まるで壁自体を壊そうとしているかのような大きな音だ。外側から数回叩きつけられた壁が崩れ去った。そしてその開いた穴から出てきたのは…。

「よぉ来たぜ！姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

出てきたナギに私は最初に言おうと決めていた言葉を口にするのだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アリカ

Ｓｉｄｅ　葵

「よぉ来たぜ！姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

この王女殿下は見るたびに思うけどツンデレだよね？いや、クーデレかな？助けられて嬉しいなら形振り構わずにナギの胸に飛び込めばいいのにさ？恥ずかしいのか？恥ずかしいんだな？初心だね～！？可愛いところもあるじゃ無いの。

――シュッ！…ドゴッ！パシッ！

「…王女殿下、なぜに俺を殴ろうとするのかな？」

「…わからん。が、お前が何か不埒な事を考えていたように感じたので身体が勝手に動いたようだ」

…勘がいいじゃない。受け止めたからいいけどさ。直撃したら重傷モノだよ？王族の魔力ってすごいね？受け止めた手が軽く痺れてますな。ダメージは殆んどないけどね？無防備でコレを受けたくはないな。…今度から王女殿下をからかう時は必ず前もって身体強化してからにしよう。

それにしても感動の救出シーンが見られなかった。残念！ん？なんかこっちを見てくる色黒美少女が居るな。もしかしてこの子がテオドラ・バシレィ…くっ！長いよ！？もうテオドラでいいや！それでこの子がテオドラかな？…ここは名乗るべきだろうか？

「のう？お前は名をなんというのじゃ？答えよ！」

「他人の名を聞く時は自分からと言いたいところだが…まぁ今回は

いいか。俺は九重・葵、一応［紅き翼］の一人だ」

「なんと!?お前があのアオイ!?という事はお前の後ろに居る二人の女は…」

「彼女達は右がハオ、左がユエ。俺の両腕だ」

「やはり［白と黒の双姫］か…」

「とりあえず話しがあるなら脱出後にしよう。着いて来てくれる?」

「無論じゃ。このようなところなど一刻たりとも居とうないわ。早う案内するのじゃ!」

うわぁババ語で喋る美少女だよ?なんと言うか…。来るね?萌えますな。…って俺のキャラじゃないな…。子供は嫌いじゃないけどどちらかと言うと大人な感じの方が好きだしな。年下も嫌いじゃないよ?まぁ俺からしたら大半が年下だけどね…。

でも、こういう子を見てると癒されるわぁ。なんというか子供の姿と言葉が噛み合ってないところなんかが特にね?可愛いじゃないの。背伸びして大人を気取ろうとしてるんだから。見ていて微笑ましいよ。気分はお父さんですな。

おっと、オリビエ達に救出成功の事を知らせなくては…。この念話、言うなれば軍用念話なのよ。盗聴防止、隠密機能、妨害防止などなどの機能がついてます。

【…陽動部隊に伝達。救出は無事成功。これより俺達は脱出する…】

【…了解。なぁ？葵。この後、残ってる敵はあたし達の自由にしていいんだよな？…】

【…オリビエ達が怪我しないようなら何してもいいよ。あまり時間かけないようにね？…】

【…わかってるって。心配ありがとね。それじゃ、また…】

【…またね…】

よしよし、これで後は脱出するだけだ。転移は出来るかなっと…？ん～…まだかな。あ？結界が消えた。皆が頑張ってくれたんだね。俺は嬉しいよ。およ？アイリから念話です。作戦完了の報告かな？

【…司令閣下、転移妨害の排除完了。司令閣下達の退路を確保いたしました。いつでも脱出できます…】

【…了解、ありがとうね。皆に怪我はない？…】

裏方の任務だけど何気に一番危険なのって彼女達だから心配です。皆綺麗だしいい子達だから傷物にはしたくないね。それに俺の家族達に傷でもつけようものなら…。生かしておかないよ？地獄も生温いと言うほど後悔させてやるよ…。フフ、フフフフ…。

【…ハッ！第一第二中隊ともに被害ありません！第一第二中隊は交互に脱出を開始。陽動部隊のバックアップに回っていた第二中隊は…任務が簡単過ぎて眠くなると軽口を叩いていました…】

【…そりゃあの子達にバックアップが必要なのかって言われると怪しいけど気を抜いたらイカンな？…】

バックアップいらないんじゃない？てか、いらないよね？悪魔三人娘達を援護しろってどれだけ無茶なんだろ…。悪い意味じゃなくていい意味でね？だって援護いらないほど強いじゃないか。それなのに油断もしないから隙がない。最強だよね？

でも、だからって任務中に軽口なんか叩いてたらダメだよ。油断は死に繋がってるんだから。再訓練が必要だろうか？…いや、でも今回の事は彼女達の気持ちもわからんでもないしなぁ…。別にいいか？注意くらいで。

【…はい。怠けたわけではありませんが今後の訓練で叩き直す所存です！…】

【…あんまりやり過ぎないようにしろよ？失敗したわけじゃないから軽く注意だけでいい…】

ホントにやり過ぎないであげてください。彼女達にも悪気があったわけではないと思うのよ。ただ味方が強過ぎて自分達の出番が少なくなって拗ねただけだと思うからさ？程々にお願いします。…後でお菓子の差し入れでもしておくか。労いの意味も込めて。

【…ハッ！寛大なご配慮有り難く思います！それでは失礼します！…】

【…うん。…ああ、アイリ？…】

そうそうやっぱりこういう場合言っておく事ってあるよね？

【…なんでしょうか？司令閣下…】

【…よくやってくれた。それと無事なのに安心した。以上。脱出の無事を祈る…】

【…ありがとうございます。司令閣下もご無事で。では…】

堅いよ…アイリ。まぁ任務中というのもあるから仕方ないけどね？気の迷いか俺まで口調が堅かった気がする。軽くオチャラケなキャラの俺はどこに逝った？ははは…。

とりあえず転移魔法で脱出しようか。は～い皆、転移魔法で脱出するから集まって～。…集まったね？それじゃ行くよ～？はい転移っと！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第八話「突入と救出と脱出と」（後書き）

アリカ王女救出編ですな。
ちょっと具体的にしたい場面です。
文才ないけどね？拘ってみたかったの…。
ごめん、意地です。
しかし！後悔はない！

第九話「帰還と皇女とＡＩと」（前書き）

救出後の葵の行動を書きたかった。
後悔？…わかりませんな！
では、続きを。

第九話「帰還と皇女とＡＩと」

Ｓｉｄｅ　テオドラ

妾（わらわ）は邪まなる思いを抱く者達によって［夜の迷宮］に長らく幽閉されておったのじゃが、ついに脱出の好機に恵まれたのじゃ。アリカの言っておった［紅き翼］の者達が妾達の救出を果たしに来たのじゃ。それにしてもよく妾達を見つけられたの？

先のグレート＝ブリッジ占領地防衛での決戦時に数で圧倒していた帝国は［紅き翼］によって散々に打ち負かされ敗北したのを帝国の将軍達は悔しがっておったが今のこの者らは帝国だけではなく味方であったはずの連合にまで追われる事態になっておった。…いったい何をやらかしたのかの？

話しを聞くところによると［完全なる世界］の者達に連合の元老院議員暗殺の濡れ衣を着せられたらしいの。これで周りは敵だらけか…。うぅむ、このまま妾達が手を拱いておれば戦争は激化するやもしれぬな。

妾自体は戦争する事にはあまり乗り気ではなかった。確かに聖地の奪還する事は妾も感じるものはあるが、それがあるとしても無駄に将兵の血を流しても良いとまでは考えてはおらなんだ。何のために妾達に言葉があると思う？互いに意志を伝えるためじゃ。

全てが言葉で解決出来るなどとは妾も思ってはおらん。だが、たとえそうじゃとしても互いに分かり合うことが出来る切っ掛けには

なるとは思わんか？父皇陛下は言葉ではなく武力による聖地奪還を周りに望まれ徹底抗戦を謳っておったが、な…。そんな時じゃアリカが妾に極秘裏に会談を望んできたのは。

帝国と連合と言う大国に挟まれた位置に自国が存在するが故、長年に亘り両大国の調停役として綱渡りのような外交で巧みに存在してきた歴史と伝統ある国。その国の王女が妾に会談を望み今回の戦争を裏から操ろうとする真の黒幕がいる事を聞いた。

まぁその後はたいして時間を置かずに妾達二人はアリカの話しておった［完全なる世界］の信奉者達に捕まり秘密裏に先程まで捕まっていた［夜の迷宮］に幽閉されておったが…。これに関しては助け出されて今は無事に脱出できたので良しとするのじゃ。

「はい！到〜着っ！…無事に戻ってきたー！」

「我が君、お疲れ様でした。部隊の者達も順次帰還しておるようです。…悪魔三人娘達は今しばらく戯れておるようですが」

悪魔三人娘達とは誰じゃ？まさか…［あの］女三魔神達ではあるまいな？噂じゃと通った道は草一本生えることのない不毛の大地に変えたとか死体は消滅させて跡形も残らぬと言う女三魔神達ではあるまいな？そうじゃよな？

「んー…。あの子達の事だから大丈夫だよ。何か考えがあるんでしょ」

「そうでしょうか？…いや、そうですな。大まかではありますがあの者らが何をしたいのかは想像が付きますな」

「え？なになに、それって？」

「我が君が追われる原因となった者達に相応の酬いを与えるためでしょうな。特にリビエラは…いえ、何でもありませぬ」

「…あの子達は…。…なんて家族思いなんだ！俺は嬉しいよ！皆優しく良い子達に育ってくれて！」

のう？それは何か違うのではないかの？妾の感覚がおかしいのか？報復することが優しいとは何かの冗談かの？確かに身内を嵌められては黙ってはおられんじゃろうがな。…それにしても、じゃ。今、妾は聞いたぞ…。

［白と黒の双姫］の片割れが零した［リビエラ］と言う名をな？間違いないのじゃ…。あの女三魔神達じゃった…。召喚された爵位も持たない悪魔なのに力だけは魔神級…。その力も抑えておれば下級悪魔と見分けがつかぬという、厄介な者達。その者達のマスターがアオイ？

この目の前で無邪気に笑顔を浮かべている者が女三魔神達のマスター？妾はわからぬ…。なぜにあのような力強き者達がアオイに使役されておるのか。アオイが言うように［家族の絆］というものか？だが相手は悪魔じゃ、そのような事があるのじゃろうか？まぁ気前のいい奴はおるが、な…。

そして妾達は今［紅き翼］のアオイが行った多重転移によって彼らの隠れ家におる。下手に魔力を追跡されたら、ちと厄介だからの。転移にもそれなりの注意を払うのじゃな。…抜け目のない奴じゃ。大抵は最後に気を抜いて追跡されるものじゃが、こやつ等は最後まで気を抜くことがなかった。転移し終わった事でやっと力が抜けた

ようじゃがな。戦いなれておるの。しかし、ここがこやつ等の隠れ家とは…。

「何だ、これが噂に聞く【紅き翼】の秘密基地か！どんなところかと思えば…ふぅ、掘立小屋みたいではないか！」

本当にボロいの…。このような者達に帝国はやられておったのか？…いかん、目から水らいしきモノが。うぅぅ…。

「ああん？逃亡者の俺らに何期待してんだ？このジャリはよ」

「何だ、貴様！無礼であろう！？」

妾の前におる、この筋肉バカはなんなのじゃ！？帝国の皇女に向かって無礼であろう！

「へっへ～ん！生憎、ヘラスの皇族にゃ貸しはあっても借りはないんでね！」

「何ぃ！？貴様何者じゃ！？」

くぅ！こやつ何者なのじゃ！妾に向かって無礼な！

「ハッ！何者と聞かれちゃしかたねぇ！俺はジャック・ラカン！最強の傭兵剣士だ！よく覚えとけ！じゃじゃ馬皇女！」

「なんじゃと！？このようなふざけた者があのジャック・ラカンじゃと！？そんな…何かの間違いじゃ」

あのジャック・ラカンがこのような無礼なバカ者だったなんて…。

確かに嫌に媚びへつらってくる者達よりは良いがこうまで遠慮のない奴など妾は初めてじゃ。

「すっげぇ失礼なジャリだな。おい…」

「まぁまぁ落ち着きなよジャック。まだ子供なんだからさ」

む？妾は子供ではないぞ？立派な淑女なのじゃ！こやつも失礼じゃな！

「そうは言ってもよぉ…。ん？おぉ！そうだ、アオイ！このジャリはお前に任すわ！じゃあな！」

「は？あ、おい！ジャック！ちょっ！待て！」

バカ者（ジャック・ラカン）はそう言うや止める暇も無く走り去って行ってしまったのじゃ。と言うよりも何なのじゃ！まるでお荷物でも任せようとするかの妾への対応は！まったく、ふざけおって！…そんなに妾はお荷物かの？

しかし、こやつら、あの［夜の迷宮］でも一見ふざけておるように見えても皆（みな）、感覚では最大限の警戒をしておった。まったく隙がないように見えたの。妾はまだそれ程の域には達してはおらんが感覚としてならなんとなくじゃがわかる、かの？本当に微々としたものじゃがな…。

この者達は、まさに強者であろう。それも一人一人が最強クラスのじゃ。そして今、妾の目の前におる男が［白と黒の双姫］がその絶対の守護の力を以って守ろうとする者。［錬金術師（アルケミスト・ワン）］にして［双姫刃（ブレード・マスター）の主］や［契約者］と言われるクエ・アオイ。

「我が君、必要とあればあのバカ者を連れ戻しましょうか？」

「…気にしなくてもいいよ、ユエ。でも、気遣ってくれてありがとうね」

「いえ、私は当然の事をしたまでですので…」

なんじゃろうの？黒の剣姫が顔を赤らめおって。こやつの言葉に照れておるのかの？

「ユエ、どうしたのだ？顔が赤いが…」

「っ！なんでもないぞ、姉上！気にするでない…」

「う、うむ？？？」

この微笑ましい雰囲気の彼の者が帝国ではナギ・スプリングフィールドに並んで恐れられておるクエ・アオイ。なぜなら帝国軍は先のグレート＝ブリッジでの決戦時にアオイ一人の手で投入戦力の実に二割強の被害を受けたのが大きかった。当初は混乱も多く、情報が錯綜しておったが整理していくことで事態が判明しおった。

「それでは皇女殿下？アリカ王女殿下の下までお送りしますね」

「む？うむ、それは構わぬがお主はどうするのじゃ？」

「俺はこの後する事があるので途中までお送りしたら別行動です」

「別行動、の…。ふむ…。のう？お主のする事とはなんじゃ？」

こやつ何をしようとしておるのじゃ？ストレートに聞いてしまったが素直に答えてくれるかの？

「今回の作戦に参加した家族達への労いと製作している物の最終確認。前者が本命だけどね」

「なんと？お主のご家族も妾達を助けるために参加してくれておったのか？」

割とアッサリ答えてくれたのじゃ。しかし妾達を救出してくれた者達にこやつのご家族がおったとは…。

「まぁ、ね。でも勘違いしないでよ？そういう契約だったの。成功しないとお給金が貰えないのよ」

「世知辛いのう…」

「本当だね…」

食べるために働かねばならぬとは言え、こういう場面で聞くと一段と切なく感じるのじゃ。ふむ、ならば、ここは…。

「…よし！妾も行こう！お主のご家族にも感謝しなければならぬのじゃ」

理由は何であれ、やはり助けられたからには直接礼をするのが礼儀であろう。今は言葉だけの感謝しか出来ぬが何れ機会をみて改めて礼をするとしよう。

「…え〝っ!?」

「な、なんじゃ?…もしかして、ダメなの、か?」

妾は何か不味いことを言ったのか?妾の事が邪魔なのじゃろうか?もし、そうなら…。ううぅぅ…。な、泣いてなどおらぬぞ!これは…ゴミ…。そう!ゴミが目に入っただけじゃ!グスッ…。

「おぉう!?テオッ…もとい、皇女殿下?違うよ?そんな事ないよ?でも俺と家族達の個人的な隠れ家みたいな物だから、そこに連れて行ってもいいものかと考えただけだから。ね?だから涙目になるのはやめよう?俺の心臓に悪いから…」

「…なんじゃ、そのような事か。安心せよ、妾は誰にも話さぬぞ?」

なんじゃ何があるかと思えばそのような事か。妾の早とちりじゃったのか…。泣いて損したの…泣いてない!泣いてないのじゃ!まったく!こやつは妾にこのような辱めを受けさせるとは…。いや、それにしても…こやつ。慌てておったせいじゃろうが妾の事を「テオ」と呼びそうになっておったの…。

…良いな。うむ、良いのじゃ!特別にこやつには妾の事を名で呼ぶ事を許してやるのじゃ!

「…ウソ泣きかよ?はぁ…。まぁいいか。いや、いいのか?いいだろ、面倒くさい…。皇女殿下?それじゃ着いて来て下さいね?」

ウソ泣きとは失礼な…。いやいや、ここで本当に妾が泣いたなどとは言えぬな…。ここはウソ泣きと勘違いしたこやつの言葉に乗る事にして流すのじゃ。なにより素直にこやつに話すのは恥ずかしい

のじゃ…。んんっ！それよりもここは…。

「うむ！早く案内するのじゃ！それと妾の事を名で呼ぶ事を許すのじゃ！光栄に思うのじゃぞ？」

「はぁ？それは光栄ですな。それじゃテオドラ皇女殿下…」

「テオだけで良い！アオイに皇女殿下などと呼ばれると背筋が痒くなるのじゃ！」

違うのじゃ！せっかく妾自ら名で呼ぶ事を許したというのに［皇女殿下］などと付けられては嬉しさ半減で台無しではないか！…それとも呼んではくれぬのか？あれは慌てていたからの気の迷いじゃったのか？

「…はいはい。はぁ…。それじゃテオ？着いて来てくれる？」

…呼んでくれたのじゃ！なんじゃ！こやつは焦らしおってからに！最初からそう呼ばぬか！ま、まぁ今回は許してやるのじゃ。有り難く思うのじゃぞ？では、行くとするかの。

「うむ！」

グレート＝ブリッジ戦での戦闘記録によると大規模広域殲滅魔法がアオイ一人によって引き起こされたとある。その威力は大呪文の［燃える天空］の実に三倍強だったとされておるが実際はそれ以上であろうと現場では囁かれておると妾は耳にしておる。

だが、この男にそのような事が出来るとは実際に会ってみても実感がないのじゃ…。顔はまぁ…良いな。うむ。こう…なんと言うの

かの？…安心？そうじゃな、安心できる雰囲気のある男じゃ。この者がおれば大抵の事は解決してくれそうな雰囲気があるのじゃ。不思議じゃのう？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　テオドラ

Ｓｉｄｅ　葵

「うむ！」

元気に返事をする皇女殿…テオを連れて俺達は皆から少し離れた位置に移動する。とりあえずテオを連れ出す事は詠春に念話で伝えたから大丈夫だろ。…伝え終わって念話を切ろうとしたら詠春が喚き立てていたような気がするけど。大丈夫！俺は気にしない！

そういう訳でテオを俺の［工房］内に連れて行こうと思うんだけど…。面倒な事にはならないよな？んー…。いや、大丈夫だろ…。テオとは会ってみてそれ程時間は経ってないが良い子のようだし。ちゃんと言い聞かせれば大丈夫。大丈夫だよな？大丈夫だといいな…。

まぁ連れて行くと言ったのは俺だししかたないか。面倒な事になりかけたら口八丁手八丁で言い逃れて…逃げよう！そうだ、旧世界に行こう！あそこならこっちの奴らは表立って手は出せないからな！思考が飛躍し過ぎた…自重しないと。まだ決まったわけじゃないんんだから。

そんな事を考えてると皆からは丁度死角の位置に俺達は着いた。俺が立ち止まったのをテオが怪訝な顔で見ている。小首を傾げてこっちを見てくるテオ…。可愛いな、もう！小さい頃のミリー達を思い出しちゃうじゃないか！もう一度言おう！可愛いな、もう！

すまん、取り乱した…。テオのあまりの可愛さに俺の思い出中枢が刺激されたようだ。脳内でそんな事が起きているとは知らないテオが今もこちらを見ている。このままこうしていても時間の無駄なので行動する事にした。

俺は目の前の空間に手を伸ばした。俺の手は何事もないかのように空間に溶け込み肘から先が飲み込まれる。この空間は某キンピカ英雄王の宝具の能力だったりする。倉庫って便利だよね？俺の後ろでそれを見ていたテオが驚きで小さく息を呑む音が聞こえる。そのまま空間内にあるものを手繰り寄せて引っ張り出す。

やがて、出てきた物は直径一メートルほどの土台に支えられたガラスの球体。その球体の周りに付属の一回り小さな球体が数個ほど付いている。そう、これは俺が長年かけて整えていった［工房］とその付属品達。まぁ簡単に言ってしまえばエヴァンジェリンの［別荘］だな。…エヴァンジェリンより俺の方が趣味に走ってて危ない気がするけどな。

「腕が消えた事には驚いたが…。なんじゃこれは？魔法球…［別荘］か？いや、しかし、これは…」

「これは［工房］。錬金術師としての俺が独自の技術で造り上げてきた特別製だ。そこいらの［別荘］なんかと一緒にしてもらっては困るな、テオ？」

「う、うむ。それはすまんのじゃ。しかし、これは…ふむ、すごいの。この中にアオイのご家族達がおるのか？」

「そう。この中と外は少々特殊な方法で繋がっているから、その方法で直接、家（うち）の子達はこの中に転送できるんだ。今頃はみんなで報告会と反省会、その後の宴会の準備中じゃないかな」

「むぅ、そうか。では早速行くとするのじゃ！ほれ、アオイ！早くするのじゃ！」

はいはい。念のために［工房］の周りには対物・魔の防御と人払いの結界で三重に覆って、と。それじゃ、テオ行くよ？ああ、それと中では勝手な行動とらないでよ？怪しい事すると中に仕掛けてある侵入者用の防衛機構が働いて大変な事になるからね。下手すると死ぬよ？

俺はパチンと指を一つ鳴らして［工房］への転送を開始した。そして、やってきました、俺の城！ここは歓迎の意思を表すためにも一言、テオに言っておくべきところかな？いや、俺がやりたいだけなんだけどね？

「ようこそ、テオ！俺の秘密の［工房］へ！俺は君を歓迎しよう！」

「おぉ…。これは見事なものじゃな…。流麗で洗練された外観に機能性がある…。これがアオイの［工房］…。って！これでは最早、城塞ではないか！？」

外観的にはわかり難いと思ったけど、やっぱり一国の皇女ともなると一目でわかるものなのかね？白い尖塔を中心として円形に建物

は増築してるからパッと見はお洒落な城なのにな…。城壁や兵器とかは非常事態にならないと展開されないようになってるし、わからないと思ったのに。

しかも、この場から見ていてもわからないだろうけど、実はココ浮き島なんですよ?昔、オスティアを見て俺も欲しいと思ったのよ。空中に浮く城塞島…いいよね?すごくね?ねぇ?すごくね?…まぁ魔法球内では普通にただの海に囲まれた島なんですが、ね。…いいんだよ!浮く島はマロン…もとい!ロマンなんだから!余談すぎたなぁ…。

「あれぇ?テオ、よくわかったね?ここは表の世界にも召喚という形でだけど展開可能なのだよ。…(ボソッ)それなりに大規模だから一度も、やった事ないけどね」

「なに!?この城塞が、か?…それが事実なら一瞬にして陣地の構築が可能という事ではないか…。なぜ、この戦争中に実行しなかったのじゃ?」

するわけないじゃん…。こんな戦略的に役に立ちそうな物を人前に出そうとするなんて俺には出来ませんよ?これは俺が丹精込めて俺と家族達のために造ったの。他人のためになんか使いませんよ。家族は別だけどね?

「これは俺個人の物なの。家族のためなら躊躇わないけど、それ以外は知った事じゃないしね。それにバレたら面倒でしょ?…テオは今回、特別なんだから誰にも言わないでよ?」

「アオイは、そこまで妾の事を信じてくれるのか…。うむ!安心せよ、妾は誰にもこの事は話さぬと約束するぞ!」

本当に話さないでよ?…じゃないと気に入ってきたテオの事を消さなくちゃいけないんだから。信用するよ?俺だってテオの事を消したくないんだからね?可愛い物好きの俺としては辛いのよ。

「うん、その言葉を信じるね。それじゃまぁ移動しようか、離れずに着いて来てね?」

「うむ!離れぬぞ!」

ああ、もう!そんなにギュッと俺の手なんか握ってきたりして…。可愛いなぁ、もう!…このままお持ち帰りしてしまおうか?いやいやいや!ダメダメダメ!俺はロリでもペドでもない!それに皇女拉致ってどうすんだよ!?問題のオンパレードじゃないか!いや、問題なくてもやらんけどな!

くっ!またもや、取り乱してしまった…。いかんなぁ、長い時間を過ごしてきた弊害からか自重というか理性みたいなモノが緩くなってきたような気がする…。今後は自重しないとな!女児誘拐とか洒落にならんよ!?俺はノーマル、俺はノーマル、俺はノーマル、…。よしっ!

そして建物内の一室に到着。ここは作戦前のブリーフィングや会議とか色々な目的に対応した部屋。まぁただの多目的ルームなんですけどね?だいたい作戦後は、この部屋で反省会などをする事になってるから皆はここに居るはずなのよ。居なかったら食堂とかかな?

「はーい!皆、今回はお疲れ様!」

「「「「「っ!?」」」」」

「司令閣下!?…態々このような場所にどうされたのですか?」

皆、俺が突然来た事に驚いてるねぇ。それでも、直ぐに立ち直って事態の把握に努めてるのは訓練の賜物かな?その中でもアイリは早かったね?流石は、まとめ役だよ。

「あぁ、アイリ?いや、あのね?今回の作戦の事で労いの言葉だけでもかけようかなと思ってさ。…迷惑だったかな?」

「いえ!決してそのような事はありません!全員が司令閣下のお気遣いに感謝しております!」

「「「「「はっ!その通りです!」」」」」

驚いたなぁ…。そんな大きな声を出さなくてもいいのに…。まぁ作戦後だし?まだ精神的に興奮してるのかもしれないよね。ふぅ…。

「そ、そう?あっ、今回は特別ゲストが居るんだよ?ほら、テオ入って入って!」

呼んだら俺が入ってきた扉からテオは静々と入ってきた。やっぱりお礼を言うからにはちゃんと礼儀をつくしてるんだね。さっきまでのはしゃぎようがウソのようだよ。

「そなた達がアオイの言っておった者達か。妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ。今回のそなた等の働き真に大儀であった。そなたらには感謝するのじゃ」

「「「「「「……」」」」」」

んー…？返事が無い…。ここは俺が盛り上げないといかんのかね？では…。

「はい！というわけでテオでしたー！…皆どうしたのよ？反応無しはお兄さん寂しいな？」

「司令閣下…」

アイリ？俯いてどうしたのよ？せっかくの綺麗な顔が見えないよ？美人さんなんだから背筋を伸ばさないと、勿体無いよ？

「何？どうしたの、アイリ？」

「…また…増えるの…ですか？」

「は？増えるって何が増えるのかな？」

マジで何なんだろ？増えるって何がよ？今のところこれ以上の部隊増強の予定なんてないしな…。兵器関連の整備も自動人形（オート・マータ）達と整備ロボット（スパイダー）に任せるから人手は間に合ってるしなぁ…。

「女の子が、です！私達だけじゃ、まだ足りないと言うのですか！？」

は？女の子？足りない？は？え？？はーっ！？

「「「「「そうですよ！？…しかもこんな幼い子を！」」」」」

「失礼だな、君達！もう一度言おう！失礼だな！？俺はそんな事し

ないよ！」

そんな事するわけないじゃない！確かにさっきはテオの可愛さにやられかけたけど…。でも！俺はノーマルなんだ！幼女は愛でるが異性としては守備範囲外なんだよ！どうせなら皆みたいに見た目、十代後半から二十台半ばまでが良いです！

外見なんか関係ないって言うけどアレはウソだ！外見も大事ですよ！？まぁ内面も伴わない美人なんかごめんだけどな！高飛車って嫌いなのよ…。唯我独尊っていうの？着いて行けないです、はい。だって俺が基本的に［S］だからな！

「ですが！現に、こうして…」

だから！違うって言ってんでしょ！？ハオもユエもなんか…。

「「ええい！黙らぬか！？」」

「「「「「「っ！？」」」」」」

びっくりしたぁ…。二人とも？突然大きな声を上げるのはやめようよ？主に俺の心臓に負担がかかるからさ？ほら、皆、怯えているじゃない？よっぽど怖かったんだね。

「この幼子（おさなご）は我が君が連れてまいった客人である！」

ハオ？幼子って…。確かに俺達から見たら大抵の人達は若いけどさ。それにしたってテオの事を幼子って…。まだ十代前半じゃないかな？幼子って言うより児童じゃないか？

「左様！それをお主達は我が君の事を邪推しようなどと…。吾らは悲しく思うぞ…！」

邪推って…。ユエ？そう言ったという事は君も何かを想像してた、ということ？ねぇ？どうなのかな？かな？…今度、二人っきりで詳しく聞こうじゃないか。

「しばらく吾らが留守にしていたせいで気が緩んでおるようだな…」

「姉上？ここは一つ、この者達に再度稽古をつけてやる必要があるように私は思うのだが…。どうか？」

「それが良いな。…それで、お前達、どこに行く気だ？」

あーあ…。二人がそんな事を言うから皆が部屋の後ろの扉に移動しちゃったじゃないか。二人の訓練ってそんなに辛いの？逃げるほど辛いの？あっ、途中で気付かれて固まってる…。

「え〝っ！？いえ、その、あの…」

「「ハッキリせぬか！？全員、［演習場］に集合！反論は認めん！行け！！」」

「「「「「「り、了解！！！」」」」」」

むぅ…。条件反射的に返事をしてしまっているようだ。駆け出して行く彼女達の目元にはキラリと光るモノがあった…ような気がする。でもね？ごめんね、こうなったら俺にも止められないの。ごめん、訓練、頑張ってね？ご飯はちょっと豪華にしてあげるからさ？元気出してね？

「我が君？そういう訳ですので吾らはここでしばしの間、別行動をさせてもらって構いませぬか？」

「あ…うん。その、あんまりあの子達に厳しくしないであげてね？作戦後っていうのもあるしさ？」

本当に程々にしてあげてくださいな。今回の事は、ちょっとした彼女達の茶目っ気なんだから、ね？皆に身体を壊されたら俺が悲しいのよ。

「はっはっはっ！この程度で根を上げるような鍛え方はしておりませぬから問題ありませぬよ！では、行って参ります！」

「それでは我が君、お客人。吾らはここで失礼いたします。…姉上、待たぬか！私を置いて行くな！」

そう言って二人は部隊の皆の後を追って出て行った…。置いていかれた俺達は、ただ見送ることしか出来なかった。頑張れ、皆！すっげー、頑張れ！終わったら俺の手料理が待ってるよ！…喜んでくれるかは別だけど、な。

「な、なかなかにパワフルなご家族なのじゃな？アオイ…」

「それはなんか違う気がするなぁ？…まぁ、いいか。テオ、他に移動するよ？」

「う、うむ」

――［ドッグ］に移動中…。

そしてやってきました！今回、新設された通称［ドッグ］です！もう、ここにテオを連れて来ちゃったから、ぶっちゃけるけど戦艦を造ったのよ！全長５１２Ｍ全幅２５６Ｍ高さ２１６Ｍのな！タマリマセンナ！元ネタは花の名前の某機動戦艦の映画に出てくる黒い人の戦艦。あれをモチーフにして、こちらの世界の魔法技術と俺に付加された異世界知識などを複合して造って、更に魔改造したものだから最早、別物だがな！

やり過ぎたかもしれないけど、後悔は無い！だって！造ってて楽しかったんだもん！やめられませんよ！［陽月］の時のようなヘマを俺が二度とするわけがないじゃないか！…アレは自重するべきだったと今では反省してるんだから。だが、後悔は無いがな！二人とも話せるし寧ろ今ではよくやったと昔の俺を褒めてやりたいくらいだ！

それで戦艦なんだけどね？廃スペック…もとい、ハイスペックよ？元の戦艦がアレだけにあらゆるステルス機能はデフォルトとしてもね？内部は亜空間技術を採用した事により十分過ぎるほどのスペースを確保した。

相転移機関を改造して重力魔法を応用した魔導式相転移機関に強化改造して空気中でも出力低下をほぼなくしてみた。エネルギー効率も向上したよ？それを正・副併せて大型四基搭載、予備として中型を二基搭載。供給されるエネルギーは潤沢ですよ。

装甲はマリーを中心とした精霊さん達が鍛えた軽くて丈夫な強化型精霊装甲を採用！対物理、対魔法、対光学、耐熱、対衝撃などの効果はあれども！そこは俺！あらゆる攻撃を防ぐのではなく吸収する事を主軸に置いてるのよ！だいたい６０％前後を吸収可能！吸収した魔力やエネルギーはカートリッジシステムを参考にしてバッテリーのように再利用可能！魔力は後で加工すれば皆のご飯にもなるしね？

もちろん、防御は装甲だけじゃなくて対物理、対魔法、対光学、耐熱、対衝撃の障壁と言うかバリアフィールドを展開可能です！フィールドはロマンなのよ！「〇〇フィールド展開！」みたいな事言いたいじゃん！こちらにも吸収特性を付加してみた。装甲だけだと吸収しきれないからね…。装甲＋フィールド展開で９０％強まで吸収するんよ？

武装に関してもすごいよ！魔法と科学の融合した魔導科学の遠・中・近ミサイルを各種、対宙、対空、対水、対地を揃えているのだ！魔導式対艦レールガンも装備！魔導式対空砲は死角をなくすために各所に装備！

主砲には重力波砲（グラビティブラスト）を、魔導式に改造。発射口に魔導式重力レンズを展開出来るようにした事で前方だけでなく前方半円状どの角度でも撃てるようにした。モードは集束・連射・拡散・おまけに追尾と設定を作ってみた。そして射程・威力ともに、この世界では現時点で最高峰！いやっほー！

各種無人機動兵器も完備！偵察機から強襲機まであるの。これからも、もしかしたら俺の趣味で増えていくかもしれないけど…。まだ、わからんな！必要分しか作らんし。

そしてそれらを制御するシステム面も某ＡＩを参考にしました！あの作品好きなんだよ！今でもそれは忘れてないね！話しがそれた…。んんっ！それでＡＩなんだけどね？ウーリを中心に元雷精霊さん達に人工的な電子精霊を構築してもらって、それを基点に科学的なプログラムを追加して後は自己学習・自己進化式に設定。今では軽くブラックボックス化してきて俺でも良くわかんなくなってきた。

このＡＩの設計コンセプトは［自我］の在る無しを主眼に考えて開発したのよ。つまり一から感情プログラムを打ち込むんじゃなくて最初の意識は希薄だけど小さくとも本能的な［自我］がある電子精霊を核にして、その周りに各種強化プログラムを構築して［自我］を強化する。

後はある程度言葉を話せるように根気よく話し相手になって教育していく。これは時間がかかるけど大事な事なんよ。言ってみれば子育てだからね。子供とのスキンシップは大事よ？感情表現が豊かになるかは、ここにかかってるんだから。

でもね？残念ながらそんなに時間がなくて経験を積む事が出来なかったのよ…。この空間内なら時間は稼げるけど如何せん教えてきた知識に経験が追いついてなかった…。

つまりね？知識としては知ってはいるけど、実際にやった事はないという、まるっきり子供のようなものなんよ。こればっかしは俺でもどうしようもないわ…。今後の成長に期待といったところですな！やばい…ちょっと楽しみだ。

『おとうさん？』

俺の前の空間にウィンドウが展開されて小さな女の子の音声が聞

こえてきた。俺はそれに一つ笑うと言葉を返す。

「ただいま、アン。調子はどうかな？」

『うん、元気だよ。お父さんは？』

「もちろん、俺も元気だよ」

いや、さも当然のごとく会話してるけど、この子が機動戦艦［アングレカム］の中枢制御ＡＩの形式番号Ｘ－０１次世代電子精霊融合型統合制御ＡＩ、愛称は［アン］ちゃんです。とっても可愛らしいですよ？お父さん子だし俺に、とても懐いてますしね。

機動戦艦の［アングレカム］は花の名前を付けましたよ？「祈り」とか「いつまでもあなたと一緒」みたいな花言葉がある花です。沈む事なくいつまでも一緒に居ようと言う祈りを託して付けました。初めて造った戦艦ですから愛着があるんですな。ははは！

「アオイ、これは、なんじゃ？説明するのじゃ」

「あ？ああ、そうだった、テオが居るんだった…。えっと、ね？この子は戦艦［アングレカム］のＡＩの［アン］ちゃんだよ。…アン、この子はテオだ。仲良くしてあげてね？」

『うん。…はじめまして、テオ。私は、形式番号Ｘ－０１次世代電子精霊融合型統合制御ＡＩ。［アン］です。よろしくね？』

「う、うむ。よろしくなのじゃ…。それにしてもアオイ、［えーあい］とはなんじゃ？アンはどこにおるのじゃ？」

な…に？ＡＩを知らないだと？…いや考えてみれば当然、か？こっちの世界じゃ人工的な電子精霊が普通だしな。科学技術は魔法のそれに依存してるし。知らないのも無理ないか…。そうだなぁ…なんて説明しようか？いや、簡単でいいか。難しく言っても行き成りじゃ、わからんし。

「ＡＩってのはな？魔法世界でいうところの電子精霊みたいなものだよ。船内の維持管理とか戦闘を色々とサポートしてくれるんだ。だから、身体は、ないのよ」

「ふむ、電子精霊であったか…。しかし、アンは会話が随分滑らかで知能も高いように見えるが？じゃが、それもアオイじゃしな…。いや、でも…」

この子、なんだろ？ちょっと鋭過ぎんか？異世界の技術をふんだんに使ってるのがバレたか？でも、他世界の技術なんて知ってなければ異質かどうかも判断なんて出来んし…。思い過ごしかな。なんか言ってきたら誤魔化せばいいや。…面倒くさいし。まぁ、それは、ともかく…。

「アン、良かったね？テオがアンの事、頭が良いって褒めてるよ」

『うん。うれしい、な…』

［工房］の一日は外の時間で一時間…。設定を弄れば変えられるけど、通常はこれが基本。そんな一日の締めは予定通り今回作戦に

参加した家族達となにやら満足げに帰ってきたオリビエ達と手の空いている家族達を交えた反省会という名の宴会が開催された。ゲストのテオも賑やかな宴会に終始楽しそうにしていた。

そして［工房］内で、もう直ぐ一日が経とうとしていた。このまま外に出たらしばらくは忙しくなりそうだから昨日の宴会は俺も楽しみました。ちょっと飲みすぎて、またハオ達二人に抱きついてしまったみたいだけどね？俺は覚えてないけど…。テオの視線がなぜか痛かったです…。

「それじゃ行こうか？」

「「ハッ！お供いたします！」」

「うむ！」

これからも忙しくなりそうで苦労しそうだけど、その分だけ充実しそうな気がするね。ふふふ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第九話「帰還と皇女とＡＩと」（後書き）

グダグダ感がある気がする…。
いや、今回はアンちゃんの紹介を軽くだけど、したかっただけなんよ。
話す戦艦ってロマンを感じません？
私は好きですよ！話せる戦艦！
萌え…げふんっげふんっ！燃えますよね。
感想＆評価待っています！
ではでは。また次回！

第十話「初めてとお父さんとお出掛けと」（前書き）

決戦までの一場面ですな…。
オリジナルで本編にはないですが…。
では、どうぞ～。

第十話「初めてとお父さんとお出掛けと」

Ｓｉｄｅ　葵

それで［工房］内から戻ってきたわけなんだけど、ね？その後が大変だった…。皆に…というより詠春に姿を見せた途端に説教の嵐でした…。内容を要約すると「ナギだけでなくお前も何で、皇女様を連れ出してんだ！？」という事らしい。

いや、俺も連れ出した事は事実だから、その事には文句はないけどさ。…ナギと一緒ってどうなのよ？アレよりはマシでしょ？危険な事は一切ない分こっちのほうがまだマシよ？時間も外では一時間ちょっとだし大して問題ないでしょ？何でこんなに怒られてんのよ？

イジメか？イジメなのか？イジメなんだな？上等だ、この野郎。やったろうじゃん。ちょっと面かせや？…ん？何、ハオ達も来るの？いいよ、いいよ、来なさいな、皆でボコろう。…だから詠春、何よ？ちょ！？土下座なんて、やめてよねー。こっちが悪者みたいじゃないよ。わかったよ。やめるから頭上げてよ？俺が悪いみた…詠春？…何か言いたい事でもあるのかな？かな？

詠春とは平和的に話し合いで解決した。…たとえ俺の後ろに二人の絶対的な武力が居たとしても行使しなければそれは立派な話し合いだよ？俺、悪くないよ？本当だよ？クックックッ…俺に説教しようなど七百と数十年足りんのだよ？

それで外に出てきたわけなんだけどね？あの名シーン（？）を見

逃しました…。あ?名シーンって言ったらアレですよ。王女殿下とナギが「我が騎士よ」や「俺の杖と翼を預けよう」みたいな?アレですよ…。丁度終わった時に俺達は戻ってきたみたいなのよ…。マジで泣きそうだわ…。感動とかじゃなくて、悔しさで…。あのシーンを見逃すなんて、何のために［紅き翼］に入ったのか、わからんわ…。もう［紅き翼］やめちゃおうかなー…。ダメか…。ハァ…。

まぁいいや…。いや、良くないけどさ?いつまでも、グダグダ言ってても始まらないしね?それに、もう終わった事だし。うん…。さて!ここからはお仕事の話です!今回、無事に王女殿下等の捜索と救出を成功させたので報酬をいただきますよ?確実に、ね?

そして、無事に払ってくれる事になりました!良かった…。本当に良かったよ…。家族達の働きが無駄にならなくてね。…まぁ別に失敗しても生活には困らないほどの財産はあるから問題はないけどな!こういうのって気持ち的なモノじゃない?

依頼を受けて報酬を貰う。社会の基本ですよ。引き篭もって研究三昧なのも悪くないけど世界の事情に疎くなるから程々に社会に出ないとね?…根暗っぽくなっちゃうし?その点、喫茶店は良いよね?適度に外の情報が入ってくるから。

俺は好きよ?喫茶店。のんびりとお茶して時間が過ぎるのがなんとも言えないね。その時に、ぼうっと考え事するのも嫌いじゃない。次は何を作ろうかな?とか、皆でどこかに出かけようかな?なんてね。取りとめもない事を考えるの。

気付いたら日が暮れてるくらいの癒し空間。俺にとってはそれが理想の喫茶店だね。そんな理想を叶えるための店、それが俺の喫茶［クレイドル］なのよ。暇な時間はのんびり出来るしね?忙しい時

は忙しいけど…。…なんか最近、話しが脱線しまくってる気がするなぁ。ふぅ…。

――［紅き翼］が反撃を開始してから一ヶ月後…。

そんなこんなで王女殿下達を救出した事で俺達［紅き翼］は反撃の狼煙を上げたわけですよ。手始めに今までの調査の過程に出てきた末端の組織を手当たり次第に襲撃してね。相手の力をそぐ事や妨害をしていったんです。…簡単に言えば嫌がらせなんだけどね？

襲撃の時のナギやジャックは輝いてたねぇ…。下調べなんてこいつらに出来るわけないから、ここぞとばかりに暴れてくれるよ。頭脳労働は王女殿下達やアルやガトウなどの［紅き翼］の人達がやってくれてるからね。まぁ適材適所ってやつだろうなぁ。

そんで俺は今回、テオに雇われて［完全なる世界］の拠点や繋がりのあると思われる組織、武器商人などを調査・襲撃・捕縛などをナギ達とは別行動でやってる。…俺ってば何やってるんだろうね？これじゃ［紅き翼］に入っても意味なくないか？

まぁ家族達のお給金もしっかり出ているから文句はないけどね？人数出したら出しただけお給料が貰えるからヤル気も出るのよ。流

石、ヘラス帝国だね？気前がいいの。俺の懐がホカホカです。今回の事が終わったら家族皆で温泉にでも行こうかな？

…あー、でも、ね？一つだけ問題があるの。いや、問題って言うほどのものじゃないんだけどね…。調査で黒と判明した組織を襲撃する時に、なんだけど。なぜか、毎回テオが同行してくるんですよ…。なぜなの？危ないからやめときなって言っても聞かないのよ。

何がしたいのか俺には、わからんのよ。下手に怪我でもさせたら連れて行った俺の責任問題になるじゃない？だから俺はイヤなんだけど置いて行こうとするとテオが涙目になるんですよ…。泣いたところを帝国の人に見られたら誤解されますって…。

前門の涙目のテオか、後門の知らない帝国人か…。俺の問題はこれに集約されますな。それで毎回前者を取ってしまうんですな。泣く女の子には勝てません…。正直言って危ないけど、この際丁度良いかもしれない。

俺は帝国と交渉しましたよ。俺は「この戦争を憂いて事の詳細を自分の目で見続けたい」と言って今後の作戦にテオが俺の部隊に同行すると。…当然こんな殊勝な事をテオが言うわけがない。俺の真っ赤なウソですよ？

でも、この話しを聞いた帝国内の味方の人達…反応は大きく分けて二つだった、感動に咽び泣いて賛成の人達と困惑しながらも危険を訴えて反対の人達。ここまでは俺の予想通り、ここからが本番だったのだよ？まぁその時のやり取りは…。

――葵の回想から…。

「皆さんのテオドラ姫を思う気持ちはわかります。俺…んんっ、私も家族が同じ状況ならと思うだけでこの胸が引き裂かれそうな思いです。だが！テオドラ姫は、それでもこの戦争の真実を自分の目で確かめたいと仰せなのです！」

自分で言ってて思う…。あのテオがこんな事言うわけないな、と…。テオは公にバレないなら出来るだけ事を面白おかしくしようとするからな。戦争事態はテオも悲しんでいるみたい（？）だけどな。

「姫様のお気持ちは私達もわかる。だが…」

「わかっております！テオドラ姫にもテオドラ姫にしか出来ないお役目があります。そこで皆さんに提案があるのですが、聞いていただけますか？」

なんか、すごく偉そうな帝国の衣装に身を纏った初老の男が意見しようと発言してきたよ？でも、させません！下手に話させて流れを持っていかれるわけにはいかないのだ！ここは多少強引でも俺が話すべきだ！まだまだぁ俺のターンだぁぁあ！！

「聞こう。そなたは姫様の信頼が厚い。ならば私もそなたを信じよう」

信頼？…アレは信頼なのかな？ただ単に懐かれてるだけな気がするけど。いや、この際、関係ない。利用できるものは何でもしよう。

「ありがとうございます！それで提案とはテオドラ姫をお守りする戦艦の事なのです。すでに試験的にではありますが稼動もしており

ます。テオドラ姫を必ずお守りできる物を私はご用意しました」

「何と…。それは真なのか？」

既にできている俺の個人所有艦だけどね？使う時が来ましたよ！
ここは何としても説得せねば！

「はい。私は今回のテオドラ姫の行動が一度きりならば、と考えていたのですが、どうやら違うようなのです。そこで私個人の伝手を使い、最強の船をご用意しました。性能の詳細はこちらの書面に記載されておりますので、こちらをご覧ください…」

この人達には話してないけど一度どころか既に三回着いて来てますよ…。バレたら怒られるわ。絶対に言わない…。とりあえず船の詳細を渡したけど技術的な事は何一つ書かれてない。ただ、この船にはこういう機能があります的な説明が延々と書かれている。

「なん…だ？これは…。これは事実なのかね？」

それでもわかる人にはわかるんだね。驚愕した表情の人がチラホラいるよ。最初の偉そうな帝国衣装のおじいちゃんも驚いてるよ。
これがわかるって事は、この人、昔は軍人だったんだね。お疲れ様です。

「はい。間違いございません。テストしたところ書面通りの性能でした」

「…これを建造した者と話せるかね？これが事実なら是非とも我らが帝国にスカウトしたいのだが…」

「残念ですが、その戦艦を建造して後に直ぐ亡くなられました…。設計図なども全てを亡くなられる前に処分したようです。現状ではこの一隻のみとなります」

白々しいなぁ、俺って！死んでないって！造ったのは俺達だっての！これ以上造る気ないの！維持費は殆んどかからないけど場所が取られちゃうのよ…。

「そうか…。真に残念だ。このような人物が帝国に居たならば更なる繁栄を齎せてくれたものを…」

無理無理！この船を造るには力ある精霊さん達の協力がいるから。量産性なんか最悪だし普通にこれ造るくらいなら鬼神兵を造ったほうが安上がりなんじゃないかな？鬼神兵のお値段とか知らんけど…。

「遺言に、この船の所有権は私になっております…。彼は私を息子のように可愛がってくれました。最後に遺せる物、証となる物が欲しかったようです…。うぅ…」

そう！ここからが大事！この船の所有権は俺にある事をハッキリさせないとダメなの！他人が勝手に弄ろうとするだけでアンの機嫌を損ねてしまうんだから危ないって。まぁその前にアンは誰にも渡さないけどな！

俺の家族を攫ったり、危害を加えようというなら俺は…。真に不本意ではあるけど、この世界に喧嘩を売らざるおえない！…だから！そうならないためにもここは絶対に俺のペースで終わらせる！ダメ押しで泣き落としまでしてな！さぁ！これで、どうだ！？

「良い…。これはそなたに遺された物だ。そなたの自由にせよ。…

バカ者が泣く事があるか。笑え！笑って己を誇ってみせろ！そなたが泣いていては亡くなられた者が安心できないではないか！」

「…はい！この船に恥じない自分を貫こうと思います！」

やった～～！！アン！俺は！お父さんは勝ったよ！ふぅ…。あまりの嬉しさに返事が遅れてしまって気合で誤魔化したが…。…怪しまれてないだろうな？

「うむ！さしあたっては姫様の護衛だ。そなたならば出来るな？」

「お任せを。必ずやお守りいたしましょう！」

さぁて話しは終わった。テオはどこにいるのかなぁ、っと。…あ、いた。テオ～？あのね？実は…。

――葵の回想より…。

…てな、事が数日前にあったんです。何で俺がこんなお芝居しなきゃいかんのよ？面倒くさかったわ…。無駄に思える今回の行動の理由なんだけどね？機動戦艦［アングレカム］の起動データ取りとアンの経験値稼ぎが目的だったの。

…なに？普通に暴れればいいじゃないか、って？ダメに決まってんじゃん…。個人で戦艦持つとか下手したらお尋ね者だって…。まぁバレなきゃ、いくらでもやりようはあるんだけどね？でも、こそこそするのってイライラするじゃない？

だから帝国に、というよりテオ個人に後ろ盾になってもらおうというわけです。造ったはいいけど対艦戦ってそんなにない、よね。だからもう、表立って行動できるようにしようと思って一芝居打ちました。今回のテオの謎の行動が起きて考えたのよ？

即興だった割には上手くいったと思うな。テオには今回の事は話して快く承諾してくれたし！次回からはアンも連れて出撃するぞ！…まぁ敵の規模にもよるけど、ね。は～や～く♪来い～来い～♪愚か者～♪ってな！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――数日後…。

Ｓｉｄｅ　アン

はじめまして、アンです。今日はお父さん達と［外］へお出かけします。今回は、お父さん達に意地悪する人達を懲らしめに行くのだそうです。いつもだったらお父さん達だけで行くのですが今回は私も連れて行ってくれるんです。

実は初めてのお出かけです。［中］では［演習場］で軽く動き回

ったことはありますが［外］へお出かけするのは今回が初めてです。実に楽しみです。現在は発進前の最終チェック中です。なにせ、初めてのお外ですから入念な確認がいるのです。

外ですか…。まだ、私が幼い頃にお外の事を聞いたらお父さんは、「その時になったら、ゆっくり感じてくれればいい」って言ってくれます。「感じるって何？」って私が聞いたら「心で思う事」って言われました。少し前の私にはその言葉が何を意味しているのか、わかりませんでした。

だって、「知識としては知っているのに実際に見るのとは何が違うの？」なんて考えてましたから。我ながら無機物的だったと思います。まぁ、感じるとは考える事ではなくて本能的で一種の原始的な感情…。あやふやなモノ…。でも、不思議と柔らかいモノ…。と、捉える事にしました。

白でも黒でもない灰色。物事をあやふやに考える事は私のような［ＡＩ］には必要な事のようです。お父さん曰く「そのほうが親しみあるだろ？」との事です。親しみ…。これは私という娘に対する愛情と捉えていいものでしょうか？…何か違う気がします。

私はお父さんのパートナーとして造られました。害意ある者からは何者にも侵される事のない最強の船として。お父さんを護るモノとして…。あ、この事ですがお父さんは知りません。私を造ってくれたウーリさん達がこっそり願いを込められての事です。

ちょっと特殊な電子精霊の私の根幹にその願いはあります。…あります、が。これは“出来ればお願い”程度の強制力しかありません。反抗しようと思えば幾らでもできます。まぁ、しようとも思いませんけどね。お父さんの事、好きですし。

誰に言われなくても護りますよ、お父さん。私に与えられた名前、アングレカムの花言葉にあるように「いつまでもあなたと一緒」です。私の、この「祈り」は誰にも邪魔させません。邪魔者は排除あるのみ、ですよ?フフフ。

「最終チェック終了、オールグリーン。起動準備よし」

「よろしい。では、司令閣下、号令を」

「うん。機動戦艦アングレカム起動!…くっ~!造ってよかったー!」

お父さん…。私を造る時に、その台詞を言いたがってましたものね。願いが叶ってよかったですね?お父さんの初めてをもらえて私も嬉しいです。…変な意味ではないですよ?初めての台詞的な意味ですからね?変な事考えたらヤ!です。

「アイ・サー。魔導式相転移機関、起動値エネルギーに到達。魔導式相転移機関の起動を確認。艦内各部にエネルギーを正常に供給中。機動戦艦アングレカム起動します」

「機動戦艦アングレカムの起動を確認しました。［ドッグ］内と外部の時空間調整…問題なし。続いて転移シーケンスへ移行。転送ポート、順調に作動中。転移まで、あと３０…」

「艦内の各部署に通達します。転送ポートによる転移を開始します。揺れる事はないとは思いますが総員注意してください」

いよいよ出発です。この先にはお父さんに意地悪する私の敵がい

ます。お外に出るのは楽しみですが、この意地悪さん達を懲らしめるのも実は結構楽しみです。精々足掻いてもらいましょう。無駄ですけどね。お父さんの前に立ち塞がるのですから覚悟は出来ているでしょうし遠慮はしません。

「3…2…1…転移、開始」

オペレーターの精魔奇兵がカウントダウンして転移を開始します。そして私達はキラキラ輝く金色の転移門が転送ポートから発生して一瞬にして外に出ました。青く広い空…。どこまでも続く広い大地…。今日の天気は快晴、まさにお出かけ日よりです。

これはアレですね？お父さんの敵を完膚なきまでに排除しなさいという事ですね？わかりました。私は全力でお父さんの敵を排除しましょう。懲らしめるだけにしようかと考えてましたが…。予定は変更です。見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ）です。

「転移、完了。作戦地から１１０ｋｍの地点。誤差範囲内です」

「各部署より報告、転移による被害なし。航行に支障なし」

「それじゃ皆、行こうか。作戦地へ向けて発進！」

「うむ！発進じゃ！」

「アイ・サー。ステルス起動します。各種レーダーはワイドに展開、現在は敵影なし。続いて早期警戒のため無人偵察機（トンボ）を周囲に展開します」

オペレーターの子、慎重ですね？無人偵察機（トンボ）まで出すなんて。で

も、私の処女航海ですし。何よりもお父さんが乗艦しているのだから当然ですかね。まぁ各無人機動兵器の実践テストの意味もあるのでしょうけど、ね。

あ、無人偵察機（トンボ）なんですけどね？名前のごとくトンボの形をしている無人偵察機で無人機動兵器の中では一番航続距離が長いのです。…武装や装甲は一番貧弱なんですけどね。でも、その代わりにレーダー機能や分析能力、通信機器の強化がされています。

「魔導式相転移機関、順調に稼働中。エネルギー効率安定。巡航速度にて航行を開始。機動戦艦アングレカム、発進します。…作戦地点到着まで、およそ二時間です」

「おぉ、すごいのじゃ。これはアオイの科学力は世界一、というやつじゃな」

「まぁね！単艦での転移なんて今のところ俺だけだな！」

「何を言うか！帝国だって大規模転移を成功させたのじゃ！」

「ははは！そうだったな！」

ふむ…。それでは早速内部生産プラントで無人機動兵器の更なる量産を開始しなければ…。作戦開始まで時間は限られていますから急がなくてはなりませんね。時間的に見て…、一千機も造れれば御の字ですか。十分とは言えませんが元からある無人機動兵器と合わせて千六百機。まぁ何とかなるでしょう。

ここで今回、造られる無人機動兵器とは基本となる無人機動兵器（カブトムシ）です。それでカブトムシですが形は、まんま名前のそれです。角の

部分には超振動カッターを装備、突撃にはもってこいです。背部には魔導式マイクロミサイルを装備。簡易だけど対物理・魔法フィールドもあります。魔導式機関を搭載していて飛行も可能。

これは言うなれば私の兵隊です。単機でも、ある程度自律行動が出来るＡＩを搭載しているのですが突然のアクシデントには弱いのです。ここは今後の課題ですね。今のところは私が各種機動兵器達を統合制御する形でしていますから問題はありません。

…が、まだ私も経験豊かとは言い難いですから状況の判断で甘いところや逆にやり過ぎてしまう事があるのです。それを調整、克服するためにも私は経験を積まなくてはなりません。全ては私のお父さんのために！私は頑張ります！

「二時間ね…。アン、調子はどう？」

『各部順調、問題ないです』

整備は完璧です。センサーにも異常は見られません。艦内の自動人形（オート・マータ）達と整備ロボット（スパイダー）からも問題の報告はないですし、概ね順調ですね。寧ろ、好調ですよ？

「そうじゃなくて気分的なもの。緊張とかしてない？って事」

気分的なものですか…。こればかりはまだ、わからないところがあるので、なんとも言えません。でも、緊張、ですか…。初めての外ですし、お父さんとのお出かけです。…ああ、これが緊張というものなのですか？人間なら「ドキドキする」とでも言うのでしょうね。

『…してないです、よ?』

「間が空くだけでなく語尾が疑問形、とは…。成長したな、アン」

『違います。緊張なんかしてません。お父…艦長の勘違いです』

お父さんって変なところで鋭いので困りものです。ああ、それと誤魔化す時のパターンを、お父さんを参考にしたのは間違いだったかもしれません。本人の事なんですから、バレる事は考え付くのに…。失敗です。

「お父さんでもいいのに…」

『…艦長?確かに私も初のお出かけで嬉しく思いますが今は作戦中です。ケジメはつけなくてはなりませんよ?』

お父さん…。悲しそうに肩を落とすのやめてください。思わず甘えたくなりますから…。でも、公私の区別はしっかりつけないと周りに示しが…。あ、全員が身内でしたね…。それは気が緩むわけですね。もう、お父さんでいいかな?私も、そう呼びたいですし。

「うぅぅ…。テオォ、アンが冷たいよぉ。昔はお父さん、お父さんって言ってたのに…」

「おぉう?な、なんじゃ、アオイ??」

『お、おおお父さん!それは昔の事です!』

私の返答が、少し素っ気ないからって変な事言わないでくださいよ!たしかに事実なのですが…。今もそんなに変わってないような

気がしますが…。それでも昔の事は恥ずかしいのですから、あまり言わないでください！

それよりもお父さん！テオから離れてください！そんなにくっついたらダメです！私もまだした事ないのに！…まだ、出来ないけど！あーもー！二人とも、は・な・れ・な・さ・い！！むぅ…。これは身体のない私には少々不利ですかね。私にも移動端末的な身体を造ってもらえるようにお父さんにお願いしてみましょうか？

「アオイ、その時の事を妾にも詳しく話すのじゃ！」

「いいよ、いいよ♪アンの可愛い頃を教えてあげようじゃない」

『テオも！何を聞いているのですか！？あと！お父さんも何を話そうとしているのですか！？』

テオ！？いけません！いけませんよ！？というより何、お父さんに再度くっついているのですか！？離れなさい、と言っているでしょう！お父さんは私のお父さんです！あげませんからね！お父さんも笑ってないで少しは抵抗してくださいよ！？何、普通に私の過去を話そうとしているのですか！？

「え？何って…。アンの可愛いところをテオに話してあげようと…」

『か、可愛いと言ってくれるのは嬉しく思いますが、やめてください。恥ずかしいです…』

こんな、皆さんの居るところで可愛いなんて…。もう！お父さんったら！もう！もう！恥ずかしいけど、嬉しいじゃないですか！ああ、でもやっぱり！恥ずかしいです！で、で出来ればお父さんと二

人っきりの時などに言ってくれれば完璧なのですが…。どうでしょう?

「むぅ…。なんじゃ、話してはくれぬのか?」

「そうみたいだよ?アンが恥ずかしいって言うから、また機会があったら、ね?」

『またの機会も何もないです!お父さんも話さないでください!』

ダメです!話したらダメなのですよ!幼い日の恥部など明かせません!本当なら断固として記憶を封印処理したいですがお父さん相手にそんな事は出来ませんし…。うわ~ん…。…あ、なんだ…簡単じゃないですか。私がお父さんをいつも見張っていれば問題ないじゃないですか。

「はいはい。もう、照れちゃって。アンは可愛いなぁ」

『お父さん!』

会話を聞いている周りの家族達はクスクスと微笑ましいものでも見ているように笑っています。うぅぅ、恥ずかしいです。お父さんに可愛いって言ってもらえるのはすごく嬉しいのですが、こういうのはやめてほしいです。ん?そんな事をしているうちに作戦地に近づいているようです。楽しい時間はあっという間とは言いますが本当のようですね。

「艦長に報告。早期警戒網より情報が来ました。敵はまだ我が方には気付いていません」

「ありがとう。偵察機は引き続き周辺の警戒を。ただし射線には入らないようにしてね。通信士、各部署に通達、総員第一種戦闘配置へ」

「アイ・サー。警戒は継続させます」

「アイ・サー。艦内各部署に通達します。総員第一種戦闘配置、乗組員は所定の配置に着かれたし。繰り返します、総員第一種戦闘配置、乗組員は…」

「アオイ、いよいよじゃな…。この船の初陣じゃ」

「そうだね。…テオは今回を入れて四回目だっけ？」

「そうじゃな。…安心せよ。まだ、爺達にはバレてはおらん」

「バレたら俺は、ほとぼりが冷めるまで逃げるよ…。怒られるのイヤだし」

「わかっておるのじゃ。アオイに迷惑はかけぬ。元々は妾の我侭からこうなったのじゃしな」

「ん？まぁそうだけど、アンの事は感謝してるぞ。こうして堂々と日の目を見られるわけだし。な？アン」

『はい、艦長。私はテオに感謝しています。何の負い目もなく日の光の下、祝福されて姿を表せる事が出来るのですから。』

切っ掛けが何であれ感謝しています。こうしてお父さんと大手を振って出かける事が出来るのですから。ありがとう、テオ。

「う、うむ。お主らが、そう言ってくれると妾も少しは肩の荷が下りたように感じるのじゃ。今思うとアオイには迷惑をかけたと思っておるしの」

「はっはっはっ！十代の子供が何、一丁前に気を使ってるんだ？いつもどおり元気いっぱいにしていろって！」

「バカ者！アオイ、良いか？妾は、もう立派な淑女でレディなのじゃ！もっと敬わぬか！」

『テオ、私は艦長に賛成です。元気のないテオなど…。私には考えられません』

元気のないテオ？…想像できません。というよりは何かの病気と考えたほうが、信憑性がありますね。

「アンよ！お主もか！？うぬぬ、揃いも揃って…。もう良いわ！わかった、お主達の前で取り繕っておっても意味のない事じゃったな。この話しはここまでじゃ！敵は、もう目の前なのじゃからな！」

テオの言うとおりですね。まぁ今回の敵は情報どおりなら殆んどが兵士崩れの魔法使い達やゴロツキ、傭兵といった者達です。こちらが遅れをとる事はありません。仮に、もしもの事があってもハオ、ユエなどのお姉さん達が居ますし、問題ありません。けど今回の戦闘は私の起動データ収集も兼ねているってお父さんは言ってました。

…無様な戦いは見せられません。お父さんには私が頼りになる事を証明しなければなりません。私一人で戦うわけではないので独りよがりな事はしませんが、それでも私にだってお父さんに頑張った

事を褒めてもらいたいという欲求のようなものはあるんです。

失敗なんて出来ません。したとしてもお父さんなら苦笑しながら「失敗は成功の母なんだから、次を頑張ればいい」なんて言ってくれるかもですが。それではダメなのです。私はお父さんの苦笑ではなくて満面の笑顔で褒めてもらいたいのです！

ここはやっぱり敵を完膚なきまでに消滅させなければならないようですね。私の初陣でもありますし、派手に祝砲をあげようと思います。敵を葬りつつ、ね。逃がしませんよ？今回の帝国からの依頼は捕縛ではなく殲滅ですから。降伏勧告は最初にしますが突っぱねたら後は知りません。

後の禍根を残さないために一人たりとも逃がしません。仮に生き残ってお父さんに逆恨みされても困りますし。それでは行くとしますか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アン

Ｓｉｄｅ　葵

いよいよ作戦地に着くね。今回はアンの起動データ取りと戦闘評価だから俺達は出撃しないでここで指揮を執るだけ。まずは降伏勧告から始めないと、殲滅戦とは言え一応、形式上はしないと不味いしね。んー…。でも、殺しすぎちゃうのもなぁ…。ふむ、一応、保険かけとくか…。ポチッとな。

「敵に通信を送れ。内容は「投降せよ、生命の無事は保証しよう。返答まで十五分の猶予を与える。これに応答なき場合は殲滅をもって対処する」以上だ」

「アイ・サー。通信送ります。…返答来ました。内容は「帰りやがれ、バカたれ」です…。（ボソッ）私達の葵君に何て事を…こいつら、ただじゃおかないわ」

「フフ、フフフ…。いい度胸じゃないか。即座に返答してきた事は評価するが…内容が、な」

即断即決できるのは指揮官としては、まぁまぁだけど言葉遣いがなってないな…。いや、これも精神戦なのか？こちらをわざと苛立たせて判断ミスを誘う…？それはないか…。相手はこちらがどういう人物かもわかってないんだからそんな事はないよな。

相手の人物像もハッキリしないうちから挑発とも取れる内容を送るとは思えない。下手をしたら致命的なミスだ。やはり、ここは指揮官としての判断力はまぁまぁだが総合的な能力は二流。加えて人格的には豪快だが品位はないという事か…。

「我が君…。吾らで彼の者らを排除してはなりませぬか？」

「左様…。姉上と私で彼奴らの尽くを排除いたします」

「ハオ、ユエ…。君達の気持ちはわかる。でも、今回はアンの初陣でもある。この子に任せてみよう。二人の出番はまだ後だって」

ダメだよ？今回はアンの経験値稼ぎなんだから、戦闘知識はあっ

ても経験的な成長は、やってみないと実際のところ身につかないからね。一戦一戦が貴重な経験だよ。こんな時代だから戦闘には事欠かないしね。

「うぬぅ…。我が君が、そう仰るならば吾らは従います」

「アン、そういう事だから任せるよ？」

『アイ・サー。欠片も残さず殲滅します…』

おぅ…？あの優しいアンが暗く燃えている？声が一段低いよ。どったの？なんか怒って、る？お父さん子だからか酷い言葉に過剰反応してるのかな？まぁやり過ぎない分には止める気はないからいいけどね。やり過ぎなければ、ね…。

『それでは艦長。戦力行使の承認をいただけますか？』

「承認しよう。まぁ軽く揉んでやって」

『アイ・サー。軽く捻り潰してやります』

アンの言葉を聞いた時「やっぱり不安だな」、と思った俺は悪くないと思いたいです…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

……。

……。

第十話「初めてとお父さんとお出掛けと」（後書き）

アンのお披露目ですよ！頑張ってもらいたいですなぁ。
それにしても、あ〝ー…作者の指が止まりませんな！
予定ではもう原作に突入しているはずだったのに！

…未だに決戦前って、どうゆう事？

すべてはこの指がいけないのです！勝手に動いて、もう！
早くエヴァりん達とこのか達を出したいです…くすんっ…。
ではでは～。また次回にでも！

第十一話「戦艦と機動兵器と敵要塞と」（前書き）

本当は昨日の深夜にでも更新するはずだったのですが体調を崩してしまい。
無念ながら出来ませんでした。腹痛で二日ほど、まともに寝られませんでした…。
シンドカッタワァ…。太陽が黄色く見えましたよ。
たかが腹痛と侮ったのが失敗でした。
夏バテって怖いね。抵抗力弱りまくりですよ…。
皆さんも気をつけてくださいね。

第十一話「戦艦と機動兵器と敵要塞と」

Ｓｉｄｅ　アン

さて、私のお父さんに暴言を吐いた敵にはお仕置きが必要ですね。それもとてもキツイやつを…。でも、一瞬で殲滅なんて楽な事をしてもお父さんのすごさは世間に伝わらないですし…。ここはやはり、最初に大きな一撃を当ててからジワジワと殲滅ですかね？では、行きますか…。

「さぁて、アン、行ってみようか」

『アイ・サー。これより戦闘を開始します』

敵に彼我の戦力差を見せつけてやります。決して勝てない事を教えてあげましょう。お父さん、見ていてください。私、頑張りますよ！

「各部署に通達、総員戦闘準備。これより戦闘を開始します」

「ステルス解除。各機関、戦闘出力へ移行。…敵要塞に動きあり、敵戦闘艦と迎撃部隊が出撃中。…敵数、尚も増加中です。…敵部隊、密集陣形で本艦に向かって接近中」

戦闘出力になって魔導式相転移機関から供給される莫大なエネルギーが私の身体（船体）の各所に行き渡ります。…この私が今、感じているモノは何でしょうか？ワクワクともドキドキとも言える、これは…？…お父さんの言っていた高揚感というモノでしょうか？

「魔導式重力波砲（グラビティブラスト）、エネルギー充填。発射準備完了まで、あと１５秒…。…３…２…１…充填完了。拡散モードにて発射待機中。…艦長？」

「グラビティブラスト、撃ぇー！…。（ボソッ）よぉしっ！」

言いたい台詞が続けて言えてよかったですね、お父さん。そんなお茶目なところを戦闘中でも私は映像記録しています。もちろん最高画質で、です。発進時のお父さんも記録しました。私に、ぬかりはありません。…これは私の趣味の一つですね。大好きなお父さんの記録収集ですよ？誰もいない時なんかに収集した映像記録を編集しています。…この事は誰にも内緒ですからね？電子精霊との約束です。

「アイ・サー。グラビティブラスト、発射」

――ズバァァァァァ！！！ドッガァァーーンッ！！…ボ、ボボボォォオン！！

オペレーターの人が艦長の命令を復唱してグラビティブラストを発射しました。黒い光の本流が敵に向かって、破壊の力で敵を蹂躙する。その光景は、まさに圧巻です。敵はグラビティブラストの超重力の圧力で紙くずのように圧縮、爆発していくのですから。

「敵陣中央部に命中。敵艦は連鎖的爆発が発生した事により被害多数を確認。敵部隊の損害率４２％です。…報告します、敵残存艦隊に高魔力反応あり。…反撃来ます」

「フィールドを展開しつつ回避行動を取れ！」

敵からの反撃ですね？まったくもう、無駄なのに…。でも、これは丁度いいですね。おっと、お父さんの指示が下されました。娘としては従わないとなりませんね。では…。

『アイ・サー。フィールド展開します。フィールド出力９６％で正常に稼働中』

「アイ・サー。ランダム回避に入ります。安全のために総員対ショック体勢」

フィールドは順調、想定の範囲内です。これで軽く防ぐ事が出来るでしょう。この規模の魔砲攻撃ならばフィールドが無くても問題なく吸収できなくもないですが私のお肌（装甲）に傷が付くのでフィールドは展開します。お父さんも乗艦していますから万全を整えなくてはなりませんしね。

回避行動は操舵士の人に任せます。彼女、腕がいいです。流石は風精霊の精魔奇兵さんです。大気中ならば風の流れを読む事が出来るらしいですよ？今回は操縦性の実践テストもありますから彼女の腕に期待ですね。

まぁ私だけでも船全体を単独運航できなくはないのですが…。やはりマンパワーというものは馬鹿に出来ません。まぁ、お父さんの作り上げた部隊なのですから当たり前なのですが。お父さんは皆を家族としていますから皆さんにも好かれていますね。皆さん、気合、気力は十二分ですよ。

…私が把握している限りでも、お父さんの事を異性として見てい

る人が何人も居ますから、ここは娘としてお父さんの事を護らなくてはなりません。…負けませんよ、皆さん？

「警告、敵魔砲弾発射しました。着弾まで３…２…１…来ます」

――グギャァァアンン！！

『敵魔砲弾命中。フィールド出力９４％に低下。しかし、被害軽微です。魔力は規定値内で吸収しました。充填されたカートリッジは自動換装中。戦闘行為に支障なし』

戦闘中に違う事をメモリの隅で考えていたら反撃されました。まぁ予定の範囲内の事で問題ありませんでしたけどね。

…それはともかく、お父さんは魔力充填されたカートリッジは何に使うのでしょうか？皆を強くするためのご飯にもなるとは聞きましたが、それとは別で確保しているカートリッジがあるのを私は知っています。

まだ誰にも話しませんけどね。下手な事したら、お父さんに迷惑がかかるかもしれませんし。まずは、お父さんに聞いてみないとお話しになりませんよ。私の予想では何がしかの媒体にするのではないかと睨んでいるのですが、どうなんですかね？

「残りの敵部隊はカブトムシを発進。一人たりとも逃がすな。アン、カブトムシの統率は任せる」

『アイ・サー。カブトムシの第一陣、６００機を発進。…第一陣の

発進完了を確認。各機三機編隊で敵部隊を半包囲しつつ殲滅。一匹たりとも逃がしてはなりません』

お父さんの指示で機動兵器達を発進させます。ここは景気良く半数近くを発進させますよ。発進後は基本編成を3機編隊にして進撃させます。敵から見たら綺麗な六角形の蜂の巣状に見えるでしょうね。…え?この陣形に意味はありませんよ。敢えて言えばただ綺麗かな、と…。

「あれ?６００機?今ある機動兵器の数って５００機じゃなかったっけ?」

『…私のデビュー戦でしたので１０００機ほど増産しました。…ダメ、ですか?…お父さん?』

「もう言ってくれればいいのに。…もう!アンは可愛いなぁ!いいよ!許す!でも、今度からはちゃんと報告するんだよ?」

『はい!お父さん!』

やっぱり、お父さんは優しいです。こんなところも大好きなんですよね。…ん?全機配置につきましたね。それでは花火を上げましょう。盛大に、ね。

…全機マイクロミサイル発射口、開放。…各機、任意に敵標準。…マイクロミサイル一斉射、開始。

「カブトムシが敵部隊にマイクロミサイルを一斉射、戦闘に入りました。敵部隊の損害率６４%、被害甚大です。味方の被害は軽微。作戦遂行に問題ありません。順次、各個撃破させます」

むぅ…。思ったより生き残りが多いですね。最初のグラビティブラストと合わせて敵損害率が６４％ですか。予定よりは下回ってしまいましたが大きな狂いではありませんし問題はないですね。

…む？レーダーに感有り、です。私達に向けて接近する艦艇がありますね。

「報告、敵戦闘艦隊の分艦隊が本艦に接近中。戦闘中のカブトムシ達を迂回するルートで来るようです」

「それじゃ、第二陣を出撃。撃破に当たらせて」

『アイ・サー。第二陣６００機を出撃、敵分艦隊に向け、これを撃破します。…第二陣の発進完了を確認。第二陣のカブトムシは3部隊に別れて進撃中』

機動兵器達は中央に３００機、左翼と右翼に１５０機ずつで半円形に囲むようにして展開中。配置についたと同時にマイクロミサイルの一斉射。その後に機動兵器達を突撃、接近戦で敵艦船の足を止めます。

…それにしても敵も思い切った事をしますね。苦しい戦況の中で、敢えてこちらに分艦隊を派遣してくるなんて…。

まぁ、それだけ敵が切迫していたという事ですかね。しかし、一発逆転を狙おうなんて…甘いですね。それも激甘です。状況によれば有効でしょうが私達相手にそれは自殺行為ですよ。

ふぅ、相手の考えが読めませんね。無駄な事をするなんて…。

以前に比べれば大分マシですが、まだ数値で物事を判断する私には難しいです。この辺は私の経験値が足りていないという事でしょうね。あ、でも、ウーリさんのお話しでは、お父さんの事になると私のスペックは上がるらしいです。気持ちを察する的な意味で。不思議ですね？

「現時点で第一陣の味方部隊の損害率は７％、敵部隊の損害率は８２％です。敵部隊の撃破を確認、敵は壊滅です。第二陣の部隊が敵戦闘艦に接触、戦闘に入りました。カブトムシはマイクロミサイル一斉射後に各機突撃。敵分艦隊は被害多数により移動速度が低下、その場で応戦に入ります」

こちらの損害も少なからず出ていますね…。第一陣と第二陣、合わせて現時点で損傷率１１％ですか…。流石に実戦の経験が足りない私では被害を抑えるのはここまでが限界ですね。

…もちろん、現時点での話しですよ？これから効率のいい部隊運営を学習していくので問題ありません。

何はともあれ、残りの敵の排除または捕縛です。殲滅だとは言っていましたが実は撃破した敵の大半はしぶとく生きています。気分的には前にも言ったように禍根を残さないためにも殲滅しちゃいたいのですが、お父さんが作戦開始前にスタンモードでロックをかけてしまいましたので出来ないんですよ。

私がロックを外す事も出来なくもないのですけど、お父さんの意志を尊重してあげたいではないですか？

…でも、スタンモードとは言ってもグラビティブラストはスタン

モードでも殺傷能力は抑え難いのです。主砲は伊達ではないのです。

実体弾のマイクロミサイルは、殺しはしないようになってはいますが命中すれば爆発しますし、ただではすみません。良くて火傷に打撲、悪ければ複雑骨折です。俗に言う半殺し？というものですかね。

とりあえず機動兵器達の補給と損傷の酷い機体は修理です。

『第一陣は損傷の軽微な一部の機体が残敵処理にまわり、他は順次補給させます。第二陣は敵分艦隊の排除を継続、まもなく排除完了します』

完璧です。敵は成す術もなく壊滅です。一度だけ砲撃を許してしまいましたが、アレは装甲とフィールドの実践テストですので問題ありません。これほどの戦果ならばお父さんの名が更に上がる事でしょう。私はお父さんの役に立てる事を証明出来たでしょうか？

『艦長、この戦闘は私達の勝利です』

「最後まで気を抜いちゃダメだよ？何が起こるかわかんないんだから」

『はい、艦長…』

――そう、ですね。

戦場で一瞬でも気を抜くなどしてはいけませんね！お父さんの言うとおりです！

…これは反省ですね。私は引き続き周辺を飛んでいるトンボから送られてくる情報と自身のレーダーの情報を分析して警戒します。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アン

Ｓｉｄｅ　葵

いやぁ、どうやら何事もなく、アンの実戦テストは終わりそうだな。処女航海で更に初陣でこれだけの戦果を挙げたんだから、お父さんとしては鼻が高いですな。良くやったね、アン？でも作戦直前にピンと閃いて流石に殺しては不味いと思ってスタンモードにしたけど…。

――結構な数が死んだね…。

いや、今更、この程度で良心が痛むとかではなくてね。尋問するために、なるべく生かして捕まえたいじゃない？帝国からは殲滅と言われてるけど俺がただ素直に従うわけないじゃん。情報は俺個人でも手に入れますよ。

そのためにはこいつらを尋問して情報を手に入れなくちゃならんのよ。もしかしたら何か有益な情報とか手に入るかもしれないしね。

あー、そうそう、スタンモードはまだ、改良の余地がありそうだなぁ。この辺は適当に作ったからなぁ…。どうしよ？やっぱりアレか？某魔砲少女の非殺傷設定とかが一番使い勝手がいいのか？

でも、アレはリンカーコアに魔力ダメージで過負荷を与えて気絶させるものだから、この世界の魔法使いに効くのかね？なにしろリンカーコアなんてないし…。あー…それ以前にマイクロミサイルはどうしよう？実体弾なんだよなぁ。

――思いきって魔導式レーザーにするか？

それなら出力調整すれば殺さずに何とかなるんじゃね？…でも、機動兵器達に搭載されてる魔導機関の出力問題があるんだよな。飛行機関とフィールドでかなりの割合、エネルギー取られてるし、レーザーとなるとミサイルより消費が激しいよな？

無茶じゃね？もう一度、設計からやり直したほうが早くね？あー、もー…。また一から設計のやり直しかな。カブトムシは某機動戦艦の機動兵器を参考に改良しただけで完全なオリジナルとは違うしな…。どうしよ？これが終わったら造るか？

とりあえず、カブトムシの姿形は今のままでいいとしても、問題は中だな。魔導機関の出力向上と機動兵器に搭載できるレーザー兵器の開発。…ん？待てよ…。レーザー兵器なんかは直ぐに作れるんじゃないか？某ガジェットなんかレーザーかビームみたいのホイホイ出してなかったか？

レーザー兵器はソレでいいか…。という事で問題は魔導機関のほうか…。出力向上なんて簡単に言ってるけど、実際問題そう簡単にはいかないしな。俺の知ってる異世界技術でなにか代用か参考になる物って言ったら相転移機関、熱核融合炉、超伝導バッテリーなどなど、だしな…。

どれも小型化が半端なく面倒くさい…。出来なくはないけど時間がかかるんだよなぁ。…いっその事カブトムシ自体を一回り大きくするかな。そうすれば、ある程度の空きスペースを確保できるから、その空きスペースに増設すればいけるんじゃない？

あー…。そうすると今度は重量の問題が出てくるか…。いくら重量軽減の魔法でコーティングしてはいても何か問題が発生して解除されたら、な…。

今の機動性を確保したまま重量を増やすとなると重力スラスターの肥大化や増設、重力制御システム、姿勢制御システムの再構築などなどの問題が一気に来るか…。

それによく考えたら某ガジェットなんかレーザーかビームの構造はともかく出力的に無茶じゃん…。問題がありすぎるけど機体自体を大きくするか？一から作るよりは面倒が…ダメだ。同じような物を作るのは精神的に辛いわぁ…。具体的に言うと楽しくない！

――とりあえずは魔導機関の開発に着手するか…。

面倒くせぇ…。でも、開発する時間は楽しそうだ…。どうするかなぁ。やっぱり、一から再設計して作るか？時間は［工房］を使えばある程度何とかなるしな。あー…でも、カブトムシの形は変えない！これが俺の挑戦だから！

「艦長、戦闘を終了しました。次の指示を」

おっと、機動兵器の改良計画を考えていたら戦闘は終了していましたな。とりあえずは…。

「それじゃカブトムシ達は捕まえた捕虜を一箇所に集めておいてね。それと医療班は敵味方に関係なく怪我人の治療をお願いね」

「アイ・サー。捕虜の集合と怪我人の治療を行います」

敵部隊は壊滅したから後は要塞ですかな？

――誰を行かせるか…。

やっぱりハオ達かな？対人戦で二人に敵う者はいないし。二人が鍛えて指揮下にある四個中隊は特に対人戦のスペシャリスト達だから心配も少ないしな。やってもらうか！援護にカブトムシもつければ人手的のも問題はないさ。

「ありがとね。あとハオとユエは自分の部隊を引き連れて敵要塞の占拠をお願いしていい？援護にカブトムシも１００機つけるからさ」

「ハッ、お任せください！」

「必ずや我が君のご期待に応えてみせましょう」

相も変わらず、頼もしい二人です。もう、惚れそうです。何も知らずに二人と出会ったら思わず「姉御！」って言ってしまいそうですな！…いや、実際には言わないけどね？だって俺のほうが歳は上だしね…。今は関係ないな…。

「いってらっしゃい。期待してるね」

「「ハッ、行って参ります！」」

さて、次は何を創ろうかな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　月（ユエ）

吾らは今敵要塞に向けて進撃中だ。私は姉上と並んで飛び、直ぐ後ろには仕官クラスの４人そして彼女らが率いる四個中隊と機動兵器が１００機を連れている。

「良いか！？吾らの敵は我が君に仇なす存在だ！しかし慈悲深い我が君は敵の捕縛を望んでおられる！…それにかかわらず！それを理解できぬ愚か者がいる！その者達には決して手加減などいらぬ！お前達の実力で以って黙らせるのだ！」

「「「「ハッ！実力で黙らせてやります！」」」」

――姉上、気合が入っておりますな…。

我が君のためならば姉上は本来の基本スペックを覆すからすごいものだ。…周りの者達は私も姉上と変わらないと言われるが、そんな事はない。ただ、私は我が君を思っての行動であって姉上のようにスペックが跳ね上がるなどしない…と、思う。

姉上と違って私は常識を持ち合わせているつもりだ。私に姉上のような非常識な力は無い…とは言わないが。それでも私は常識の範

囲内で力を振るってきたつもりだ。…時々はしゃぎ過ぎて加減を誤る事はあるが、な。

「よろしい！仕官クラスの４人は四中隊と機動兵器をそれぞれが率いて行動せよ！では、内部の制圧にかかれ！」

「「「「了解！」」」」

部下（仲間）達は行ったか…。あの者達の実力は優秀ゆえ不安はないが、それでも彼女達を鍛えてきた私は心配だ。油断して怪我でもしないかとな。彼女達が傷付くと我が君のお心に悲しみを与えてしまう事になる。

それだけは避けねばならぬと私は考える。我が君が、どんな怪我でも死ななければ治す事が可能とはいえ、傷付いたという事実だけはどうしようもない。家族想いであるあの方の事だ、我が君は怒り、傷付けた者達に復讐する事だろう。

――どのような手段を用いても相手を破滅させるまで止まる事はない…。

…考えが暗いほうへと流れてしまったな。さて、部下達は要塞を包囲して、その出入り口を押さえている。要塞の周囲は機動兵器達がセンサーを光らせているのでネズミ一匹、この包囲網から逃げる事は難しい。

――あとは内部を順次制圧していくだけだな。

「それでは姉上、吾らも行くとしよう」

「うむ。ユエよ、どこから攻めるとするか？」

…姉上、わかっていて聞いておりますな？顔が笑っておりますよ。だいたい、そんなもの決まっております。我が君の守護刀たる吾らは如何なる敵であろうと正面から叩き潰すのみ。

「そんな事は決まっておろう？正面から堂々と蹂躙するのだ」

「ふふ、それもそうだな。いや、それでこそ吾らたりえるのだ！では、行くぞ！」

「承知！」

まったく、姉上も意地が悪いものだ。このようになる事などわかっているだろうに態々私に確認を取る事をするのだから。要塞の外は既に吾らが支配下にある。逃がしはせぬよ…。一人残らず排じ…もとい、捕縛してくれるわ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　月（ユエ）

Ｓｉｄｅ　陽（ハオ）

敵拠点に突入した吾らは部下（仲間）達と内部を次々と制圧していった。…だが、先の戦闘でほとんどの兵が出ていたようで警備兵は少数ほどしか居ない。まったく！防衛のための兵を残しておけと私は言いたい！

…せっかく、我が君に吾らの活躍する姿をお見せできると思っていただけに私は不満に感じる。これでは我が君に私の勇士を見てもら…。

「姉上…。何か？」

いや！ユエ？わかっておるぞ？優先すべきことは我が君より任ぜられた、この拠点の占拠である、とな。だから、頼む…。そう怖い目で睨むでない…。

「何もない。気にするでないわ」

「左様か？何やら不埒な事を考えておったように感じたのだが…」

良いではないか。ちょ～っと我が君に良いところを見せたいと思っただけではないか。むぅ…。

しかし、ユエめ…。勘が良いではないか。事、我が君のことになるとスペックの上がると言われる私ではあるがユエこそがそうではないか…。何が「私は姉上ほどではない」だ！瞬間的な力はユエのほうがすごいではないか！…普段からためてでもいるのか？ストレス的な何かを…。

…疲れておるのか？いや、この姿になってから疲れるほど動いた事は…ないな。うむぅ？では、なんだ？

――…。

――……。

――……。

おぅ!?そうか!…愛だな?我が君の愛だな!?我(えいようそ)が君分が不足しておるのだろ?その気持ち、わかるぞ、ユエ…。ここ最近、我が君もお忙しくなられて吾らの身体（刀身）のお手入れの時間がなかなか取れなかったからな。

不満に思うその気持ちは実によくわかる!まぁ、九十九神化してから刀身の手入れはそこまで必要ではないのだが、な。ある程度は吾らだけでも出来るのだし、わざわざ、我が君のお手を煩わせる事もないのだが…。

我が君のお手入れは自分でするよりも…その…アレだ。…なに?…だからアレだと言うに…。…つまりアレだ。…その、だな?…気持ち、良いのだ…。ふむぅ…。

身を任せておると、こう、何と言うか…安心してしまうのだ。あの感覚は何物にも代えがたい…。

「姉上、何を考えておるのか?表情が…その…緩んでおるぞ?」

「ん!?いや、何でもないぞ…。んんっ!…ところで、ユエ?最近、我が君にお手入れはしてもらったか?」

いかんな、ついお手入れをされておる時の事を思い出して惚けてしまった。それにしてもユエだ…。今朝、顔を合わせてから気にはなっていたが…今日は、いつもより肌がツヤツヤしておるな?

――吾らが前にお手入れされたのは二日前のはず…。どういう事だ?

「なんだ?このような時に突然。…昨夜してもらったが、それが何か?」

「そうか私は、二日前に…ん?昨夜!?ユエ!それはどういう事だ!?」

――なん…だと?

私は二日前なのに…、ユエは昨夜!?これはどういう事ですか!?我が君!私はしてもらっておりませぬぞ!…飽きたのですか?私に飽きたのですか!?くすんっ…。

――いや、それはないか…。

私自身、言っていて違和感がありすぎる。我ながら馬鹿な事を考え付いたものだ。だが、本格的に不味いのではないか?我が君分(えいようそ)が不足しているのは私のほうではないか…。うむぅ…。

「姉上…、仮にもここは敵地なのだからそのような大きな声を出すでない。それと…」

「覚悟ぉぉおおお!!!」

「お主がな!!」

――ザンッ!ずるぅぅ、ずちゃっ…。

「さて…、どういう事も何も昨夜、私は我が君と寝る前のお茶の約束を果たしに行ったのだ。そして、その時に…して、もらったのだ」

ここは敵地ゆえ時々敵の警備兵が襲撃をかけてくるようだが通用せぬよ。ユエも油断などせぬからな。…そんな事よりも話しの続きだ！してもらった、だとぉ。…なんなのだ、それは？…ユエ、何が、あった？…なぜに頬を赤く染めておるのだ？くぅッ…！

「ず、ずるいぞぉ！？ユエェ！その時間は…」

「死ねぇぇえええ！！」

「五月蝿ぁぁあああいぃ！！」

話しの邪魔をぉぉおお！！するなぁぁあああ！！！！

――ドゴンッ！ドンッ！…ぐちゃぁぁ。

「ふん！それでユエ、邪魔が入ったが、その時間は私が休む前の鍛錬をしておる時ではないか！？…なぜだ？なぜ、この姉を誘わない！？」

ダメではないか！ダメダメではないか！姉たるこの私を誘わぬなど！ユエ、姉は悲しいぞ。うぅ…。

「だから姉上…、ここは敵地だと…」

「仲間の仇ぃぃいい！！」

「知るかぁぁああ！！！」

――ザクッ！べちゃぁぁ…。

はん！警備兵！お前の言う仇などどうでも良いわ！それとユエ…倒した敵などどうでも良い。私を誘わなかった理由を聞かせてもらおうか？理由如何によっては、私はユエ、お前と少々お話しをしなければならぬぞ？

「姉上、顔に返り血がついているぞ？拭かぬか。…ふぅ、まぁ良い。なぜも何も私が誘う前に姉上が鍛錬するために駆け出して行ったのではないか。責められる言われはないぞ？」

「うぐっ…それはそうだが…しかし、納得出来んものは出来んのだ。…ユエ、羨ましいぞ」

仕方がないではないか。我が君をお護りするためにはそれ相応の鍛錬が必要なのだからな。それを疎かになど、この私が出来ようものか？いや、出来ぬよ。しかし、なにもそのような時間にお手入れの予定など入れなくても良いではないか？元がお茶の約束だったとしても…。

「まったく、姉上は仕方のない…。本当は作戦後に伝えようと思っていたのだが…昨夜に頼まれた、我が君から姉上への伝言がある。…聞くか？」

「うむ、聞く。早く話せ、ユエ」

――我が君からの伝言であろう？早く話さぬか、ユエ！

「切り替わりの早い事だな…。伝言はこうだ「次のお手入れはハオだから今日の作戦後にでもおいで」…確かに伝えたぞ？」

「……」

ユエは今、何と言ったか？「次のお手入れはハオだから今日の作戦後にでもおいで」と言ったのか？聞き間違いではないな？そうだな？

「姉上？」

――今日のお手入れは私…。

「……ふふ」

ふふ、ふふふ！やったー！我が君！お慕いしておりますぞ！いや、流石は我が君であらせられる！ちゃんと私の事も考えていてくださるとは！私は嬉しいですぞ！ふふふ！

「姉上？何度も言うようだが、ここは敵地です。あまり惚けるのは感心せぬぞ？」

「ふふふっ！ユエ！早く終わらせるぞ！このような事をしている時間も勿体ない！」

ユエ！ボケッとするでない！行くぞ！このような片手間で出来る仕事など早く終わらせて我が君のところへ、まいらねばならぬからな！

――私は駆ける！目指すは要塞の中心部なり！

「あ、姉上！？お待ちください！一人で行くのは危険です！」

「早く来い！ユエ！一刻でも早く終わらせるのだ！はーっはっはっはっ！」

「姉上～！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　陽（ハオ）

Ｓｉｄｅ　月（ユエ）

突然駆け出して行く姉上に追いつくのは苦労した。なぜか道順を知っているが如く迷わずに進んで行くわ、防衛兵器や防御壁は一刀の元に斬り捨てて行くわ、警備兵は弱いわ…最後のはどうでも良いな。うむ。

とにかく！私が我が君の伝言を姉上に言った途端にこれだ！まったく！スペック向上にもほどがあると思うのは私だけだろうか？最近の姉上は落ち着いておられたから私も油断していたのかもしれぬな。

ここまで狂喜乱舞した姉上を止める事が出来るのは我が君だけだろう。程度によっては私にも出来るが、な。まぁ毎日のようにお手入れされてきたのに、ここ最近は、お忙しく二、三日に一度してくだされればいいほうだからな。姉上もストレスが溜まっておったのだな。私は昨夜の至福の時があったので姉上ほどではないぞ？

お手入れもそうだが我が君とお茶を共に堪能して穏やかな時間を

過ごせたのでな。気分的にも身体的にも今は万全だ。おっと、それよりも、まずは姉上だ。追いかけねば…。

「ここが、そうだな！」

先行していた姉上に追いついた私。そして吾ら二人の前には異常に頑丈そうな扉がある。たしかに怪しげではある。…が、ここが中心部かと言うと断言は私には出来ない。それなのに…。

「…姉上、なぜ、そう断言できるのだ？私は不思議で仕方ないのだが」

本当に不思議でならん。私も条件付であるなら予想くらい出来なくはないが、それでも姉上のように断言はしない。精々がココだろうな、くらいだ。吾が姉ながら不思議だ…。

「女の勘だ！それ以外に何があるというのだ！」

「姉上、貴女という人は…。まぁ良いです。それよりも手早く占拠して総仕上げとしましょう」

本当に何なのだろうか？言うに事欠いて［勘］とは…。いや、バカにはしておらんよ？女の勘は時としてバカにならんからな。…姉上の場合は我が君の事になればハズレを引くほうが珍しいな。殆ど当てにくるのだ。

ふぅ…。とりあえず、姉上の言を信じてこの扉の向こうを制圧するとしよう。時機に部下達も他の制圧を終わらせてここに駆けつけてこよう。

「うむ！そうするとしよう！早く終わらせて我が君の元に行かねばならぬからな！」

それでは、目の前の頑丈そうな扉を破り内部の制圧と行くか。私は扉の前に立ち無造作に両手に持つ剣を二回振った。そうすると扉はXの字に切り崩されて意味を成さなくなる。

「よくやったぞ！ユエ！」

ふん、このような物で吾らの侵入を防げるなどと考えるとは、な。片腹痛いわ！どうせ備えるのなら我が君とマリー達、合作の強化型精霊装甲を持ってこいというのだ。…まぁ公表してはおらんのだから無理ではあるがな。

アレはスゴイ…。我が君やマリー達は本当に良い仕事をする。切れぬわけではないが私でも骨が折れるほどだ。いつか、確実に真っ二つに出来るようになりたいものだな、うむ。それまで鍛錬あるのみだ。む？あやつが指揮官か？

「よくココまで来られたな…！お前ら、ただで済むと思っているのか！？」

指揮官らしき男が一人とその他三人か…。まだ油断は出来ぬが人員のほとんどが迎撃に当たっているとみて良いな。気配を探したところ伏兵のようなものはこの部屋には居ないようだ。外の迎撃に出し過ぎたのであろうな。愚かな…。

「済むとは思ってはおらぬよ？だが…お主らを血祭りに挙げれば問題なかろ？それで万事解決だ。我が君も安泰だな、うむ」

仮に何かあったとしても吾らがお護りしている限り死角などない！何事にも絶対などという事はないがそれに近い完璧な守護をみせてくれるわ！どちらにせよ、ここを占拠してしまえばどうとでもなる。こやつらを始末するのもその後で良いしな。

「ふざけた事を抜かしやがって…！いいか！？ここが潰されても他の奴らがお前達を地獄の果てまで追いかけ！てめぇらの我が君とやらを必ず殺して…っ！？！！？？！！」

「…今…何と言った？」

姉上…殺気の出しすぎだ。クズどもを見てみろ、ブルブル震えているぞ？怯えて話せぬではないか…。しかし、私には聞こえたぞ？…まぁ空耳かも知れぬ。一度怖がらせて、もう一度だけ…そう、もう一度だけ聞かせてもらおうか？…私は何と慈悲深いのだろうな？フフ、フフフ…。

「姉上…私の耳にはこのクズが吾らの我が君を［殺す］などと聞こえたが…」

「下郎、答えよ。今、何と言ったのだ？私の聞き間違いかも知れぬ…。もう一度だけ…言ってくれぬか？」

…姉上も優しいな？…いや、アレは辛うじて我が君のご下命を護ろうとしておるようだな。握り締めた拳から血が出ておるぞ…。余程こやつらを亡き者にしたいのを我慢しておるようだな。その証拠に視線など熱くも冷たくもないほどに静かなものだ…。姉上、私でも怖いです。お願いですから落ち着いてくだされ…。このままではクズどもが廃人と化してしまうではないか。

「答えよ…。ただし、よく考えて…発言せよ。さもなくば…！」

「すみませんごめんなさいすみませんごめんなさいできごころだったんですすみませんごめんなさいもうにどとなまいきなことといいませんですはいすみませんごめんなさい！」

姉上の事が余程怖かったのだな…。私が発言を優しく促すと即座に答えてくれたぞ。安心せよ…。必要な事を話してくれるまでは生かしてやろう。そして聞く事がなくなれば後は我が君次第…。その時は…。くっくっくっ…。

「今のは私の聞き間違い…そうだな？下郎…」

「サー！その通りです、サー！」

姉上よ、いつの間に仕込んだのだ？随分と忠実ではないか。…こやつ元は軍人か傭兵か？ふぅ、国や己が主を裏切るとは…。…救いようのない者だな。まぁ良い、吾らには関係のない事だ。とりあえず、この拠点は占拠させてもらうとしよう。

「では、この拠点は吾らが支配下とする！…問題、無いな？」

「「「「イエス・マム！！！」」」」

私の事をマムと呼ぶな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　月（ユエ）

葵達を含めた［紅き翼］とアリカ、テオドラの姫達、そしてそれに味方する者達の反撃が始まった。葵とナギ達は同じ所属でありながら別行動が多い…。だが、それには理由がある。葵個人で所有する戦力がそれを可能にしているのだ。

［紅き翼］は葵の戦力を無駄にしないために分散して情報収集、拠点制圧をすることで効果を上げていた。それは後々、帝国や連合の一部の者達やアリアドネーなどの理解ある者達に重要情報を提供することで今後、仲間になる。

……。

……。

…。

第十一話「戦艦と機動兵器と敵要塞と」（後書き）

どうッスかね？上手く出来てたでしょうか？誤字脱字とか…。
自分じゃ気付けないところもあるかもですから報告あったら感謝です。
感想なんかもあると作者が、がんばれます。

そして今になって気付いた…。
タイトルが…魔法から懸け離れていることに…。
うぅぅぅ…！

第十二話「書類と発明とお手伝いと」（前書き）

ちょっと番外風味？

第十二話「書類と発明とお手伝いと」

Ｓｉｄｅ　葵

アンのデビュー戦から四ヶ月近くが経った。今は［工房］内の比較的大きな執務室で書類仕事中…面倒くさいよぉ。ここまで色々あったなぁ…うん。襲撃して捕らえた人達は全員、帝国に引き渡した。もちろん吸い出せる情報は全て吸い出した後にだけど、ね。くっくっくっ…。

本当にどうでもいい情報から王女殿下達の役立ちそうな情報まではもちろん、俺個人で使えそうな情報とかも手に入って個人的には、してやったりですな！困った事があったらこの情報をチラつかせて言う事聞かせようと思う。情報の鮮度が落ちる前に使わないとなぁ…。うむぅ…。まぁそれは後々考えるとして…。

この四ヶ月間、何をしていたかというと、ですね？主に情報収集と敵拠点襲撃をしていました。その襲撃の時にアンの起動データを取って、それを最適化してより良い効率化を図ってみたり…。

「お父さん、ココの項目の確認をしてほしいのですが」

「んー？どれどれ…。あー…、うん、これは問題ないから、そのまま処理してくれる？」

「はい。では、そのようにしますね」

「うん、よろしくねぇ」

ん？今のは誰か？って？…誰って、アンですよ。何か文句でもありますか？いいじゃない！アンが『移動端末が欲しいな♪』って言ってきたんだもん！俺としては何が何でも造らなくちゃならないでしょう！？可愛がっているアンのお願いだもん、当然叶えましたよ！

身体は精魔奇兵の技術を利用して身体の基本となる生体金属を六割と通信系・制御系・導力系・電子頭脳などなどはナノマシンを三割使って構成！

…残り一割は何だったかな？魔法的な何かだったような気が…まぁ、今はいいか…。

で！身体はだいたいアンの思い通りになるようにした。…これはアンから特にと希望があったんだけど、何でだろ？アンにも理想の体型とかあるのかな？

そんなこんなで今ではアンも一緒に行動できるようになりました！可愛いよぉ♪ＡＩだった時からウィンドウだけで姿がなくとも可愛かったけど身体が出来て、姿を持って会話できるようになったのが…なんと言うか。…いいね。

アンの願いだったのか、見た目１２～３歳くらいで長いサラサラの銀髪をポニーテールにしてるの。歩くたび左右にそれが揺れているのが活発さを醸し出しているねぇ。瞳の色はもちろん金色です。あの作品のファンとして、そ・こ・は・譲・れ・な・い…！

服装はレースが施された白のワンピースとシンプルにまとめられてるけど、胸元に輝く赤いブローチがアクセントになっていて可憐

で可愛らしさを演出している。

アンの身体を造る事が決まってから皆で服装について話し合ったんだけど…話し合いが思いのほか難航して決まらなかったなぁ。あの時は精霊や悪魔とはいえ、流石は女の子だと思い知らされました…。皆、一歩も退かないんだもの…。

結局決めたのは話題に上ったアンでした。俺達がある意味、仁義なき話し合いをしてる時にアン自身が何百と用意した服から自分で選んでコーディネートしてた。…因みにワンピースは俺が用意した服でブローチはウーリとマリーが用意した物でした。

ウーリとマリーはイイ仕事してくれました！あのブローチはいい物だ！白に映えますな！…俺が用意したのを選ばれるとは思いもしなかったけど、ね。いや、嬉しいけどね？自分の選んだ物を着てくれるんだから。

俺のところへ着た服を初めて見せてくれた時のアンの恥ずかしそうに、はにかむ顔がなんとも言えないほど可愛らしかったです…！やっぱり女の子はいいね！可愛い服とかあるから華やかだもの！

…どうしたものかね？これは娘を溺愛する父親の気持ちというやつでしょうか？…自重しよ、マジで。俺はまだ独身ですからね。こんな事ではいけませんな！ハァ…。

…まぁ、今、その話しはいいとしよう。

「司令閣下、こちらの書類の確認をお願いできますか？」

「はいはい、どれどれー？…む？ねぇ、アイリ？なんだかココだけ

月の食料の消費が多くない？」

「はぁ、その月は戦闘が多く、その戦闘後の反省会（宴会）が多かったせいではないでしょうか？」

オウ、ジーザス…。ほとんど俺のせいじゃないか！…まぁいい、書類に記載されてるグラフを見ているかぎりでは［食料生成プラント］の許容値範囲内みたいだし。今後、自重すれば…できるかなぁ…。できたらいいなぁ…。

「それじゃ［食料生成プラント］には、この書類に記載されてるとおりに増産して、と通達しといて」

「了解しました」

さてと、それで機動兵器のバージョンアップもしたな。実体弾のマイクロミサイルを光学系のレーザーかビームに換装しようとしてたけど…結局、元の実体弾のマイクロミサイルのままにした。

換装しなかった理由？理由は必要性がなくなったから…です。

どういう事かというと弾頭を爆裂弾からトリモチ弾とか電気ショック弾などに換えれば問題ない事に気付いたからね。…まぁ実体弾だから当たれば相当、痛いけど。マイクロとはいえミサイルだし、ね？

武装に関してはそれで一応の決着がついたから、後はソフト面を強化改良してみた。ランダムな連係を取り入れて、より複雑な機動を出来るようにしたり、単体の状況判断能力を若干だけど向上させたりもした。

三機編隊なら並の魔法使いにも引けは取らない自信があるね、うん。むしろ集団になればなるほど強くなるんじゃない？だって連係がハンパないから。常時、並列ネットワークで個々が繋がってるから一機が撃破されても直ぐに、その情報が行き渡って補填されるからね。

一糸乱れる事なく淡々と進撃してくる魔導機械昆虫の軍勢…。改めて思ったけど傍目から見たらＳＦホラーじゃないか、コレ？

でも、二足歩行よりは多足歩行のほうが無人機として姿勢は安定するんだよなぁ。武装も積むからどうしても重量は重くなるしね。例として挙げればカブトムシ一機当たりの重量は、およそ４５０Ｋｇです。…それでも全ての機動兵器には重量軽減の魔法がかかってるから本来の三分の一以下だけどな！

なんか俺って地味なところで魔法を使ってる気がする…。クスンッ…。

そうそう！機動兵器で思いついたんだけどね？有人機も造ろうとしたのさ！それはもう、気分はウキウキ、機体設計や強度計算なんかもスラスラと進みましたよ！楽しかったです。あの夢のひと時は忘れません。

それで、いざ実物の製作だ！という時に俺は、とあることに気付いた…。

仮に造ったとしてもアンの中にそれを搭載させる場所…格納庫がないことにｏｒｚ

…え?…なんですか?他の機動兵器は搭載できてるって?…違うんですよ。無人機動兵器は専用のカーゴベイにチェーンベルトのように収容されるように設計されてるんです。故に発着できるハンガーデッキのようなものはあっても機動兵器用の格納庫は…ないんですよ。

それに機動戦艦［アングレカム］はね。誰が乗ることもなく無人航行できることを前提に設計されてるの。だから無人兵器も充実させたしね。…ほら?俺らって少数だし、それもあるから少しでも家族、皆の負担が減ればと思って、さ。

でも、今回はそれが仇になりました…。無人性と居住性の調和を追及し過ぎたせいで錬金術師（科学者）の一つのロマンたる人型ロボットを戦艦に搭載できないのですから…。失敗してしまったよ、とっつぁ～ん!

せっかく設計はできてるのに…。後は造るだけなのに…。俺のモノ作りの血が騒ぐのに…。

戦艦の改造は今度するとしよう!決戦までには間に合うさ!目指せ、“ナデ○コ”世界観!この戦争を逃したら次はいつ戦争が起きることか、わからんからな。ただでさえ戦争なんて面倒くさいこと

に関わってるんだから楽しめるところでは楽しまないと損だよね！

あーもー…。まぁでも丁度いいと言えば、いいかな…。秘密で確保してたカートリッジは全部使ったし。…何に使ったか？って？それは後で話すよ。…それよりも、またカートリッジを溜めないとな。

この世界は一応魔法世界だから魔法関係の備えはしないと不安だものね。魔法には魔法障壁ってね。様式美って大事だと思うのですよ。まぁディストーションフィールドなら下手に変更しなくてもいけそうではあるけど…。

…改造（魔）ってしたいものじゃない？くく、くっくっくっ！

そして後は何したかなぁ…。あー、そうそう、ラミエルさんを造ったね。…ん？なに？…うん、そのラミエルさんですよ？某新世紀な作品に出てくる使途さんです。

「…あれ？これは…。アイリス指揮官殿、ここの充填済みのカートリッジの一覧なんですけど、ちょっと見てもらえますか？」

「何？どこだ？」

んん？何だ？問題発生か？アイリともう一人で真剣な雰囲気です。面倒事は勘弁して欲しいなぁ…。

「ここです。どう計算しても空きカートリッジと充填済みカートリッジの合計が合わないんです」

「これは…確認ミスか？いや、そのような基本的ミスが我が隊で起こるものか？…誰かが使用したのではないか？」

…微かに聞こえた。カートリッジ、と…。やっべ！バレた？バレたのか！？内緒で確保していたから申請してないや！これって横領になるのか！？ど、どどどどうしよう！？

「いえ。そのような届けは受けておりません」

当たり前ですよ。使った俺自体が申請してないからな！…威張って言える事じゃねぇやｏｒｚどうしよう？こ、こここここは正直に名乗り出るべきか！？

「司令閣下にご相談するか…少々この書類は借りていくぞ？」

「はい、構いません」

「では、な…」

うおっ！？アイリがこっちに来たぁ！？ど、どどうしよう！？まだ、心の準備が！！…くっ！こうなれば、勢いに任せて謝り倒すしかないか！？よ、よぉし…来いやっ！

「司令閣下、度々申し訳ありません。…少々、問題が」

「も、問題？な、ナニカナァ？？」

くっ！ドモルだけでなく噛んでしまったっ…！変に思われてないだろうな？

「？？？はい、こちらの書類をご覧ください。カートリッジの一覧なのですが計算が合わないのです」

「へ、へぇ？それはヘンダナァ…」

どうしよう？どうしよう？どうしよう？どうしよう？ドウシヨウ？家族には嘘は吐きたくないしな…。何よりも今になって黙っている事に罪悪感が…。うぅ…。

「はい。司令閣下は何かご存知ありませんか？」

「いや…。あの、その…。えと…」

うわーんっ！もうダメ！素直に謝ろう！やっぱり俺、家族に秘密にするのは無理！グスッ…！

「司令閣下？」

「その…。ごめん！ソレ、俺が使いました！！」

「……」

えっ？無言！？頭を下げてるからアイリの顔が見えない。どんな表情をしているのかわかんないけど怒鳴り散らすのさえ超えるほどの怒りですか！？静かなる怒りですか！？…怒涛のごとく怒られるのよりも怖いんですけどぉ。ガクブルガクブル…。

「うっ…。あの、怒って、る？」

およ？恐怖に負けて頭を上げてみたらアイリさんが苦笑していらっしゃる？怒ってないの？怒髪天じゃないの？

「ハァ、そんな事はありません。…ただ、今度からご使用になるならきちんと申請していただきたいだけです。記録に残すのは組織運営では必要な事ですから」

「うぅ、ごめんよぉ。今度からはちゃんと申請させていただきますです、はい…」

「はい、よろしくお願いしますね。ではこの書類に使用したカートリッジの数、その使用目的などの記入をして提出してください」

「うん、書かせていただきます。余計な手間を取らせて、ごめんね」

「いえ、では自分はこれで…」

うぅ…アイリ達には迷惑かけちゃったなぁ。今度からは秘密にしないでちゃんと申請して使用しようっと。うん…。ごめんね？アイリ、皆…。

それで話しは戻るけど…造ったよ。ただ、本物みたいに生物ではないけどね…。メインＡＩの各種制御系と魔導式荷電粒子砲などの兵装関連、心臓部となる導力炉などの各種重要機関にナノマシンを使用して基本構造は流体金属を使って、ね…。

皆には内緒に別途で確保していたカートリッジもラミエルさんに全部使いました…。たった今バレたけど、ね…。でも、これで滅多な事ではラミエルさん単体での魔力切れになる事はないね！

お金もかけましたよ…。アンの建造費の三分の一ほどかかりました。本当にコスト度外視だよぉ。うぅ…。

それと言うのもナノマシンの生成に時間と労力がかかるのよ。流体金属のほうは錬金術でホイホイ出来るけど。ナノマシンは極小の精密機械だから錬金みたいに一発生成すると必ずと言っていいほど不具合が発生するからあまりやりたくない。

そういう事で地味だけど時間をかけて確実に生成したの。［工房］使って外の時間で二ヵ月半…。長かった…。完成まで総製作期間三ヶ月ですよ?アンに続いての傑作を造り上げましたな!

その間も［完全なる世界］の調査は続けてたよ?当たり前じゃない、お仕事だもの。ちゃんと、やり遂げますよ。

それで完成したラミエルさんね?見た目はそのままなんだけど中身は違うの。ナノマシンと流体金属を使ってるから形状や大きさとか自由に出来るのよ。小さいのは３ｃｍほどの正八面体、大きいのは１００ｍの巨体を誇るほどよ。まぁ本家よりは少し小さい気がするけど…。普段は首から提げるタリスマンみたいになってる。

…え?物理法則?ナニ、ソレ?オイシイノ?

…というのは冗談として、小さくなってる間に使われてない過剰分のナノマシンと流体金属はラミエルさんの中心部に亜空間技術の

格納庫があって、その中に超圧縮をかけて格納されてる。あとは必要に応じて圧縮を解凍して展開していけば、アラ不思議、おっきなラミエルさんに！

それで大きさも自由にできるから対人戦の時は直径２０ｃｍほどの独立した援護機になって俺の周りを周回しながら護るように設定してある。…まだ設定は甘いけど、ね。攻撃命令を出さない限り防御に重点を置いてるの。

兵装は先にも挙げた魔導式荷電粒子砲。ただしこれは砲口を自由に設定できる。例えば遠距離ならば大口径へ、近距離ならば身体表面に小型の魔導式荷電粒子砲が無数に展開されて死角無しの対空砲となる。

ＡＴフィールドのようなものも装備してある。…いや、マジで違うけどね？あくまで“ようなもの”だから。どちらかと言うと見た目的にはディストーションフィールドだし…。

――あ、ラミエルさんにもカートリッジ充填の機構を組み込めば…。

いけるかもしれないな…。一応、フィールド性能はアンのと同じにしてある。ただしアンのそれよりも断然、強力だ。性能を同じにしたのは予算の都合もあったけど、それ以上の代物はそうそうないのも確かだと思ったからでもある。

んー…。今から取り付けるとなると……ちょっと突貫作業になるけど今度やるか。この場合、やっておいて損はないと思うしな。…うん。

そうなれば！まさに無敵の空中要塞ですな！…カートリッジ生産

もできて一石二鳥だ！

もちろん！掘削ドリルも完備！！…ドリルは外せません！ドリルはロマンだからなっ…！

いずれはバージョンアップしていって某魔砲少女の出てくるデバイスのように出来たらとも計画中だし。

今まではハオとユエが居たからあまり必要性がなかったんだけど、九十九神化してから一個の人格と身体があるじゃない？

…となると、だ。

あの二人にもプライベートな時間があるからいつも一緒というわけにもいかない。そうなると俺の扱う武器がなくなる。…俺ってピンチじゃね？と考えたんですな。そこで前から考えてた計画の一つを実行に移す事にしたの。

そうだ！デバイスを造ろう！ってね。

まぁ正確にはデバイスみたいなモノだけどね…。だってラミエルさんだし…。ん？あー…。今よく考えてみたらデバイス的なモノにする意味ってなんだろ？…持ち運びが出来る事？いやいや、宝物庫的な倉庫に入れとけば関係ないな。

装飾品として綺麗？…武器に関係ないじゃん！たしかに俺は使途さん達の中じゃラミエルさんが一番好きだけどさ！装飾品って…。それはないわぁ…。

…やっぱりやめようか？俺個人でも結構、戦えるし。あ、でも、

素手で殴り合うような熱血じゃないしなぁ…。うん、武器は有るに越した事ないよな？んー…よし！悩むようなら造ってしまおう！今すぐデバイス化するわけじゃないしね！後々改造すればいいのだよ！

ラミエルさんを造ったはいいけど、どちらかと言うとプロトタイプだしね？どうとでもなるんじゃないかな？

あー…。アンもある意味ではプロトタイプだけど電子的というか精神的な成長が出来るから関係ないね。船体は成長に合わせて強化改造すればいいし。

…これ以上どう改造したらいいのかな？

ＡＩの根幹部分はもう大半がブラックボックスと化してるんですけどｏｒｚどこから弄っていいか俺にもわかりません、はい…。アン自身もちょいわからないところが出来つつあるみたいな事を言ってたけど…。もう、いいか？気にするだけ無駄じゃないか？元気な子に育ってくれれば文句ありません。ええ。

あ、そっか！ラミエルさんも成長できるようにすればよくね？今、積んでるＡＩは命令を実行するだけのモノだし。それだけじゃやっぱり味気ないよね？この戦争が終わったら今の制御ＡＩから起動データを新しい制御ＡＩに継承させて、後はアンと同じで自己学習、自己進化してもらうか…。

あー、もう！また楽しみが増えたなぁ！モノ造りの人としては、ドキドキが止まりませんな！は一っはっはっ！

「お父さん？また何か企んでます？」

「…鋭いね、アン。でも、企むなんて言い方はないんじゃない？俺が悪い事してるみたいじゃん」

「お父さんが仮に悪い事をしようとしても構いませんよ？私は一緒に居られればソレで満足ですから。これは皆も同じ気持ちでしょう」

「アン…ありがとうね。でも、今回のは悪い事じゃないよ？むしろアンに妹か弟が出来るかもね♪」

「えっ！？」

ふふふのふ。驚いてるね、アン？でも、ラミエルさんが男性人格なのか女性人格なのかは今のところ俺にもわからないのよ。まだＡＩの換装してないし。するとしても戦後の予定だしね。あー…でも今までのことを予想すると女性人格かなぁ…うむぅ。

…今ね？ふ、と思ったけど。どうしよう？俺って魔法のある世界に飛ばされたのに、やってる事は魔法じゃなくて科学なんですけど…ｏｒｚいや、正確には魔法と科学のハイブリッドなんだけどね？魔導科学と銘打ったのは伊達ではないのだよ！

それでも科学寄りなのは確かなんだよなぁ…。俺の身体にも魔法の威力・制御を上げるためにナノマシン使ってブースト処理してるしね。あ、誤解するなよ？人体実験なんてしてないからな！そんな外道な事はしませんよ。俺って小心者なんだからそんな事が出来るわけないじゃん。

たしか原作の中で中国人っぽい女の子が似たような事してたよね？アレの負担のない完成版とでも言えばいいよ。使ってみると意外と便利だったのは嬉しい誤算だった。造る当初は少しでも魔法を使

うのが楽に出来ればいいな、と思っただけなんだから。

実際の話し、この身体ならブースト処理なんてしなくても十二分に強いんだけどさ…。この先、何があるかわからんじゃない？そういう、いざという時の用意だけでもしておけば、そのいつの日かに役立つかもしれないから、やっちゃったの♪

やっちゃったの♪ってなんだよ…。自分で言ってて思ったけど、もしかして、これって自分の身体を機械的に人体改造してね？まぁ成功してるからいいけどさ。魔法も高速詠唱、並列詠唱、威力向上と一気にスペックアップしたし。

本当に嬉しい誤算でした。今思うと能力低下してなくてよかったよ…。成功してよかったぁ。

そんなこんなで俺は今、楽しく書類仕事を殺っています！アンが紙媒体を電子書類に変換してくれてるからすごく助かってます…。重要なものは紙媒体のままだけどね。

マジで量が半端ないよ？ほとんどが電子書類だからわかりにくいけど紙媒体で…エベレストクラスが四つ、富士山クラスが三つあります…。敵拠点襲撃で調子に乗りすぎました…。戦闘後の事務処理を終わらせる前に次の出撃とかをしてたから鬼のように書類が溜まってくのな…。ハァ…。

俺個人なら書類とかは気にしないよ？後でやればいい、の精神ですから。…でも、今の俺は帝国に戦闘記録を書類として提出する義務があるのよ。第三位とはいえ帝国のお姫様を預かっているんだから当然と言えば当然だよね。

もちろん、技術関係の機密に関しては濁してるけどな。再現できるとは思わないけど念のために、ね？劣化コピーとかされたらイヤだしな。

現在はアンと俺と直属の二個中隊で書類仕事を猛攻中…。この状況は「敵は強大なり！至急、援軍を！」といった感じです。それでも皆、文句も言わずに作業してくれるからありがたい限りですよ。…これが終わったら皆にご褒美あげないといけないな。さっきのカートリッジの事もあるし美味しいお菓子の差し入れでいいかな？

んー…。ミリーの第七第八中隊に応援頼もうかな？事務仕事とかのデスクワーク系が強いしな…。たしか、あの子達、今は…。

「補給物資と今後、物資生産予定の調整か…。あの子達ならこれは予定より早く終わらせるだろうな…。うむぅ…」

「お父さん、今度はどうしたの？」

ん？アンか。隣に席があるから俺の呟いた声が聞こえたのかな？でも、さっきは声にも出さなかったのにもかかわらずアンに感付かれたんだよな…。俺ってそんなに顔に出るのか？

「いや、ね。これだけ書類整理が多いからミリー達の手も借りようかなと思ってさ。人手は多いほうがいいでしょ？」

「むぅ！それはそうですけど…私達だけで終わらせられるもん！」

アンは何でそんなに不満そうな…いや、これは拗ねてるの、か？…わからん、なんでよ？早く終われば遊べるじゃん。まぁ、アンの事はともかく応援を呼べるならそれに越した事ないと考えるのよ。

じゃないといつまで経っても書類の山がなくならないしね？

まぁミリー達が手伝ってくれても書類で重要なものの最終確認は俺が直接しないとダメなのよね。それが義務であり責任だから。クスンッ…。

「ハハハ…。まぁ時間をかければね。それにミリー達にはごめんなさいだけど皆でやれば早く終わるでしょ？」

「うぅ…たしかにそうですー…」

だから何で拗ねるの？早く終わるならソレでいいって。アンも、そのほうがいいでしょ？後で帝都へ一緒にお買い物に行ってあげるからさ。機嫌なおそうよ

「ハイハイ、むくれてないで作業しようねぇ？」

「むー！むくれてないですよー！」

「はっはっはっ！」

この瞬間やっぱり元気なアンがいいなと思った俺でした。おっと！後でミリー達にヘルプの連絡しないと！

次の書類はっと…。何々？諜報関係か…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　ミリエール

【そういうわけでそっちが終わったらでいいからこっちに手伝いに来てくれないかな？】

私達が補給物資その他諸々の確認と調整をしていたらぁ。主様から、そんなお話しがきたのぉ。主様も大変なのねぇ…。でもぉ、どうしましょう？私は手伝ってもいいけどぉ他の皆に聞いてみないとねぇ。

「第七第八中隊の皆さんに連絡でぇす。よぉく聞いてねぇ？」

「はい？何があったんですか？」

「ミリエールさん、ニコニコしてるからこの後に何か遊びの提案かもねー？」

「そうなのかな？」

「はいはぁい、皆ぁ静かにねぇ？…こほんっ、主様から事務仕事のヘルプ要請がありましたぁ。この後に私、手伝ってもいいわぁという人は主様のところに来てねぇ？」

この子達も案外と現金ねぇ？主様のことが聞こえただけで静まるのだからぁ。それより何で皆はお手伝いと聞いて目を輝かしているのかしらぁ？言ってはなんだけど今回の事務処理は結構ハードなのにねぇ？

私ぃ？私はいいのよぉ。主様と一緒ならどんなことでも出来るものぉ♪よく言う“例え火の中、水の中”というものよぉ。うふふ～♪

「はーい！質問でーす！」

「はぁい、何ですかぁ？」

どうしたのかしらぁ？事務仕事だから今までと内容はあまり変わらないのだけれどぉ…。ん～？…わからないわぁ、まずはこの子のお話しを聞いてみましょうかぁ。

「葵君からのご褒美はありますか！？」

「そうですねぇ…たしかぁ、手作りのお菓子を振舞ってくれるようなことを言っていたようなぁ」

何かと思えばご褒美のことだったのねぇ？…まったくぅ、この子達ときたらぁ、そういうことだけは抜け目がないのだからぁ。困ったものだわぁ。もしもぉ…これで調子に乗って主様にご迷惑をおかけすることなんかしたらぁ…。…皆を深遠の水底に沈めちゃうわよぉ♪ウフフ～♪

「はい！私は手伝いに行きます！そして手作りお菓子を…！」

「あー！ずるい！私も行きます！」

「私も！私も行きます！」

「葵君に“あーん”なんてしてもらえたら…。きゃー！」

「あ、それいいかもー！私もソレしてもらう！」

「はぁい！皆ぁ？まずは自分達の仕事を終わらせてからですよぉ。いいですねぇ？」

この子達五人は特に自分に正直だから困るのよねぇ…。主様も叱ってくだされればよろしいのにぃ、“若いのだから仕方のないことだ”としか仰らないのですからねぇ。主様も皆が可愛いのはわかっていますけどぉ。もう少し確りしてほしいわぁ。…でも、そんな甘いところも私は好きなのよねぇ♪

他の皆もヘルプに参加するのねぇ？うふふ、主様も果報者ねぇ。精霊も悪魔も皆が皆、主様のことをお慕いしているものねぇ。…なぜか皆が女性形態なのだけどねぇ。本当に罪作りな人だわぁ。まぁ私も人のことは言えないのだけれどねぇ♪

「「「「「はーい！わかりましたー！」」」」」

「皆いい子ですねぇ。それでは早く終わらせて主様をお助けに行きましょうぉ！」

「「「「「おー！！」」」」」

「皆、元気ですねぇ。それではぁ私は先に行ってぇ主様のお手伝いをしてくるわねぇ」

「「「「「おー！…あっ！？ずるい！抜け駆けだ！？」」」」」

「うふふ～。上司としての特権よぉ♪皆はちゃんと終わらせてから来るのよぉ？」

後ろから何か言われている気がするけどぉ今の私には聞こえないわぁ♪主様ぁ待っていてくださいねぇ？今、貴方のミリエールがお側に行きますわぁ♪

――主様の居る執務室へ移動中…ですわぁ♪

着きましたわぁ♪うふふ♪それではぁ…。

――トントン。カチャ。

「主様ぁ♪ミリエール来ましたわぁ」

「いらっしゃい。随分早く来たね？もう少しかかると思ったのに」

「残りの作業は仕上げだけでしたからぁ。皆さんに後は任せて私だけ先に応援に来たのですわぁ♪皆さんも終わり次第こちらに…」

――ドタドタッ！ドドドド…！

「あらぁ？」

何かしらぁ？この音はぁ…？だんだんと音が近づいてくるようなぁ…？はっ！？まさかぁ！？

――ドンッドンッ！ガチャッ！

「「「「「お手伝いに来ましたー！！」」」」」

来ちゃったー！…ですわぁ。

本当に早いわぁ…。どういうことかしらぁ？私が主様の執務室に来てから、そんなに時間は経ってないと思うのだけれどぉ。…おかしいわぁ、普段はこんなに早く終わらないのにぃ…。それでも並よりは出来る子達なのよぉ？あぁ、でも、前にも似たようなことが…。

アレも主様関連のことだったようなぁ…。…ということはなんなのぉ？この子達も主様関連ではスペックが跳ね上がるとでも言うのぉ？…これは、なかなかに強敵だわぁ。今の身体に新生した当初は、あんなに初々しかったのにぃ。困ったわねぇ、ウーリ達に今度このことで相談してみようかしらぁ？

「…皆さん、早かったわねぇ？ちゃんと終わらせたのかしらぁ？」

「もちろん！ちゃんと終わらせましたよー！」

「それよりもミリエールさん！ヒドイじゃないですか！？」

「そうですよ！自分だけ先に行くなんてあんまりです！」

「「「「「私達も、そう思いまーす！」」」」」

「あは、あははぁ…。皆さん、ごめんなさいねぇ。私も少し、はしゃいでいたのかもしれないわぁ」

置いて行ったのはごめんなさいぃ…。ですけどぉ、何も皆さんで責めることないのではないかしらぁ？いくら私でも少し悲しいわぁ。うぅぅ…。ちょ～っとはしゃいでしまっただけじゃなぁい。可愛いお茶目だったのよぉ？

「よくわからないけど…。皆、いらっしゃい。それと、こんなことで呼んじゃってごめんね？」

「「「「「いえいえ！構いません！」」」」」

「葵君がお呼びなら、どんなことでも！いつでもどこでも駆けつけますよ！」

「うん。皆、ありがとう。それじゃお手伝いお願いするね？」

「「「「「はいっ！お任せください！」」」」」

「ですわぁ♪」

抜け駆けは失敗に終わっちゃったけど、まぁ今回はいいですわぁ。…そうだわぁ！この際、今度からはこの子達も誘ってみようかしらぁ。うふふ♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ミリエール

第十二話「書類と発明とお手伝いと」（後書き）

いろいろな意味でやっちまったなぁと考える今回の話。
複線らしい複線にもなりゃしない…ｏｒｚ
こんなことならプロット作っとけばよかったかな？
ハァ…。

第十三話「決戦前と全力出陣と完全装備と」（前書き）

やっとここまで来たぁ…。長かったですわ。
では、続きをどうぞ。

第十三話「決戦前と全力出陣と完全装備と」

王女殿下達の救出から約半年が過ぎようとした日、とあるところに帝国・連合・アリアドネーの一部の部隊が多数、集結されていた…。そこは決戦の舞台…。そこは世界最古の都である王都オスティア…。そして目指す目標はその中心部の空中王宮最奥部［墓守人の宮殿］…。

この戦争を裏から操り、魔法世界を破滅へと導こうとしていた者達と、この日、この時間、この場所で決着をつけるために各国から僅かとはいえ集結したのだ。

ここにいる者達は王女殿下達と［紅き翼］の呼びかけにより馳せ参じた者達で、敵となる［完全なる世界］を倒さんがためにこの場にいる。今は各国各部隊の最終確認をしている。

この決戦の開幕は近い…。

Ｓｉｄｅ　葵

チャオ！葵です！今は決戦準備中なんよ。

「不気味なくらい静かだの、奴ら…」

「なめてんだろ?悪の組織なんて、そんなもんだ」

「ナギ殿!帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました!」

「おう!…あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。…アオイも頼んだぜ?」

「ハッ!」

おーおー…。セラスちゃん気合入ってるねー?俺は…眠いです。それもすっごく!それというのも、この作戦開始時間間際まで溜まってた書類仕事をしていたからね。…わかってますよ。…完全に俺の自業自得ですよ。

でも、仕方ないじゃん。仕事の量が帝国の他の人よりも圧倒的に多いんだから…。絶対おかしいって、アレ…。

他の人達は定時近くなったら帰りの準備してるのに俺は書類の山に埋もれてるのよ?一山、片せばその1．5倍の山が増築されるし…。二山、片せば2倍の山が聳え立つようになるし…。

コレ、おかしいよね?俺の勘違いかな?違うよね?違うよね?よね?…イジメかな?うぅぅ…。家族が手伝ってくれなかったら俺、絶対過労死してた自信があるね!なんちゅうイラン自信だ…。はぁ、イカンな…眠気がやばい。

――…コレが終わったら俺、ふかふかのベッドで死んだように寝るんだ…。

ふぅ、あとで濃いめのコーヒー飲もう…。でも正直に話すと今すぐ帰って寝たいです。すみません、もう一度だけ言わせてください。今すぐ帰って寝たいです。

…え?負けたら魔法世界が滅ぶって?…別にいいよ、そんなの。俺は家族が無事なら、それでいいです。いざとなったら家族を連れて世界移動でもして別世界に行くしねー…。まだ、どこかは決めてないけど…。

“ゼ○魔”か“な○は”…意外性を狙って“フル○タ”の世界でもいいねー…。あっ、“ナデ○コ”世界も捨てがたいなぁ…。まぁまだ行くとは決まってないから、どうでもいいかー…。あぁ、眠気のせいか、俺ってかなりメタなこと考えてる気がする…。自重しようー…。

あぁ…そうそう、ナギと会話中だった…。

「まぁ任せなさいな、家族の皆が優秀だからね。一部を除いて皆、集団戦が本領よー?相手が一万いようが十万いようが今まで負けたこと“は”ないしー…。この子達のこと守るくらいなら問題ないね」

そう負けたこと“は”ないよ？引き分けが多いの。まぁ最後には必ず勝ったけどね。直ぐに勝ったらつまらないじゃない？だから裏から謀略を仕掛けたりとか搦め手で暇な時間を潰して遊んでました。知ってる？戦いはね…。

――最後まで立っていたほうの勝ちなんだよ…。何をしようが、な。フフフ…。

あ、でも、外道な方法は極力なしの方向でお願いします。俺の小さな心臓が良心の呵責に耐えられないから…。

「ハハッ！頼もしいねぇ！」

それにしても、ナギ…。お前…。元気だなー…。俺は今ほどお前のバカなところを羨ましいと思ったことはないよ。…一発だけ憂さ晴らしに殴っちゃダメかな？…一発だけ。山が消し飛ぶほどの一撃だけを…。今ここにー…。

はっ！？落ち着けー…。俺ー…。負けんなー…。眠気なぁんかにー…。ふぅ…。よし、落ち着いた！

「当たり前だろが俺達を誰だと思ってるんだ？あぁ、そうそう忘れ

てた…。ほら、セラスちゃん、ナギに話しがあるんだろ？」

セラスちゃん、ずっとそわそわしてやんの。可愛いねぇ？今の顔なんか真っ赤じゃん。…ん？セラスちゃん？あー…実は色々と今回のことで彼女と打ち合わせをする機会があってね。そうしていると個人的にも話す機会があってさ。

その時にナギのファンクラブに入会していることを知ったの。そこで俺が今回、直接セラスちゃんがナギのサインを貰う機会をつくったの。

眠気があったから、その時の具体的な話しは覚えてないけどね…。約束は守ったぜぃ…。

「ハ、ハイ！…それで…その、あの…ナギ殿？」

「ん？」

おーおー。ナギ相手に緊張しちゃってー。かーいーなー…。俺もモテてみたいわぁ…。

家族達は俺のこと手のかかる弟くらいにしか見てくれないしなぁ…。それに皆からは俺にファンクラブがあるなんて聞いたことないし…。それとなく聞いたときなんか皆して慌てたように必死になって否定するんよ？ヒドクない？俺って所詮いい人止まりなのかなぁ？はぁぁぁああ…。

「ササ、サインを！お願いできないでしょうか！？」

「おあ？あ、ああ！いいぜ、それくらい…」

「ありがとうございます！そ、尊敬していました！」

いいなぁナギはぁ…。俺も可愛いファンの子達と戯れたいなぁ。俺にファンなんていないけどぉ…。クスンッ…うぅぅぅ…。

む？ガトウから連絡か…。連合の出動準備が終わったのかね？

「…連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう…。決戦を遅らせる事は出来ないか？」

おぅ…。まさかの参戦遅刻ですか？俺ですら溜まってた書類仕事を終わらせて集合時間を守ったというのにぃ…！連合は余り接触がなかったから知らんけど、帝国のやつらめ…。帰ったらオボテロヨ！？イヤと言うほど事後処理の書類を回してやる！！絶対してやるからな！！！

「…無理ですね。私達で、やるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

アル、詠春…。二人とも何、冷静になってるんだよ…。怒ろうよ？怒って自己主張しようよ？ノーと言える日本人になろうぜ？…日本人って詠春しかいないけど…。

俺か？俺は既にこの世界の生まれですらないからいいんだよ。

「ええ、彼らは、もう始めています…。“世界を無に帰す儀式”を…。世界の鍵、“黄昏の姫御子”は…今、彼らの手にあるのです」

だから、アル坊よ。何言ってんの？そんなの可能だけど問題はそこじゃないだろ？遅刻してくるやつらへのお仕置きを考えないと、だろ？世界（リライト）を無に帰す魔法とか、この際どうでもいいんだよ！遅刻良くない！うぅぅぅぅ！

「ああっ…。よぉし！野郎ども！！…行くぜ！！！」

ナギもちょっとマテや、コラー！

…お前の出番は俺達、陽動組の後だろうが。ハァ…。詠春が止めてくれることを期待するかな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　セラス

ナギ殿達は行った、か…。あとは私達が予定時間に陽動を開始すればよし。この戦い…なんとしても成功させなければならない。そのためには私達は私達の役目を果たさなくては！

それにしても…。

「アオイ殿、本当にナギ殿と行かなくて良かったのですか？」

そう［紅き翼］のメンバーに数えられ先のグレート＝ブリッジ奪還作戦時にも活躍した…と言われている人だ。なぜ、言葉を濁しているかというとその時の記録が所々紛失しているのだ。まるで何かを隠そうと、秘匿するかのように。

映像はもちろん魔法的、電子的な記録はほとんどが消去されているか改竄されていた。そのどれもが実に巧妙なもので非常に細かく確認していかないと気付かないほどだった。

私がそれに気付いたのは偶然だった。当時、グレート＝ブリッジ奪還作戦のことを切っ掛けにナギ殿のファンクラブの仲間内ではさまざまな情報が飛び交った。恥ずかしながら私も、そのうちの一人だった…。

そしてナギ殿のことを調べていたら違和感を感じ取った。それは極僅かなものだったので気のせいかとも思ったのだが、それ以後も違和感は晴れなかった。そして気付いたのだ…。

――記録情報の改竄跡に…。

それはナギ殿達のことを改竄しているように見えて、最初は［紅き翼］全体を何らかの理由により何かを隠そうとしているのかと考えた。だが、少しずつ調べていってそれにも違和感があった。

アオイ殿だ。彼の記録は［紅き翼］内でも戦闘記述が極端に少ないのだ。彼が戦っているという記録は多数ある。だが、どうやって、どのようにしてということが詳しく記述されていない。ただ、“戦闘した”とあるだけ…。

それからも時間がある時に調べた。グレート＝ブリッジ奪還作戦時のアオイ殿のことを調べた。それだ…。この時から一部の記録がおかしくなっているのだ。特に魔法的、電子的な記録は無きに等しい。それに残っている記録は一部の人達が個人的に記していた紙媒体の書記のみ。

一体誰がやったのか今もわからない。私がそれ以上、調べることをやめたからだ。関わるのが怖くなったというのもあるが…。これは勘と言うしかない根拠のないことだが、そのまま調べていけば取り返しのつかないことになると感じたからに他ならない。

そして今、私はそのアオイ殿と隣り合って話していた…。

「いいの、いいの、あの程度ならナギでもなんとかなるって。それに俺はあんなのを相手するより君達を守っているほうが余程、有意義だと考えるね」

私達のことを守ってくれる。アオイ殿のその気持ちは嬉しい。だが私は怒りと焦りを感じていた。自分達はそんなに頼りないのか！と、そういう思いに囚われて…。

「しかし、アオイ殿っ！この作戦が万が一でも失敗しては魔法世界の終わりなのですよ!?私達のことなんかよりナギ殿に加勢されるべきでは!?」

「…もう、このやり取り何度目だろうね?いい加減諦めようよ、その話しはさ。それに一応の決着は前につけたでしょ?今更蒸し返すのは良くないと俺は思うな」

そうですね。この話しは何度目でしょうね。それでも私は言わずにはいられなかったのだ。尊敬するナギ殿のこともあるがアオイ殿もそれに負けず劣らずの好人物だと理解しているから。アオイ殿が加勢してくれればナギ殿達の負担は減りより確実に勝利に近づくのでは、と…。

――だから私は、しつこいようでも言うのだ…。

「そうは言いますが…。しかし、アオイ殿が加勢されるならば勝率は確実に上がるのではないですか？」

「勝率が上がる？…くく…くくはっははは！違うね！間違ってるよ、セラスちゃん？」

「…いったい何が間違っていると言うのですか？」

突然どうしたのだろうか？ここまでアオイ殿に踏み込んで話したのは初めてのことで驚いてしまった。こんな実にオカシソウに笑うアオイ殿は初めて見た。いつもは見た相手を安心させるような温かい笑みなのに今の笑みは捕まえたネズミを弄ぶネコそのものだ。

「勝率が上がるんじゃない、確実に勝てるんだよ。俺に…俺達に敗北の二文字はない！」

「……」

思考が真っ白になる…。勝、てる？それは…。それはっ！！？？

「…なーんてなっ！！はーっはっはっはっはっはっ！げふっ！ごほごほ…。イカン、むせた…」

「…アオイ殿？私のことをからかっているのですか？」

アオイ殿の先の言葉で私の思考はしらけてしまった。…まったく、こんな時に冗談を言うなど不謹慎だと思います。からかうのならもっと他に楽しい人がいるでしょうに…。ハァ…。

「こほっこほっ。…は？何、言ってるの、セラスちゃん？勝てるに決まってんじゃん、常識でしょ？あのね？ポイントはアッサリと倒してしまったら俺がつまんないからギリギリまで苦戦しているかのように戦うのがいいね！なんてーの？燃えるよね。ヒーロー的展開ってさ」

「常識…？魔法世界の危機たるこの戦いが…？ポイント…？」

常識？あの強大な敵を前にしてアオイ殿は勝てると断言している。それどころか、まるで玩具を手にした子供のようにはしゃいで、“ヒーロー的な展開”などと笑っている。

また、怒りがぶり返してきた…。先のからかわれたと思っていただけに今回は抑えが利かない。

「ん？どうしたの、セラスちゃん？」

アオイ殿の声を切っ掛けに私は、はじけてしまった…。

「だったら！勝てるのなら！なおさらナギ殿達に加勢されたほうが魔法世界のためになるのではないですか！私達のことなど気にする必要がどこにありますか！？」

「セラスちゃん？ちょ、ちょっと落ち着こうか？…いや、落ち着いてくださいお願いします」

「これが落ち着いてなどいられますか！」

「はいはい。いいから…落ち着け、セラスちゃん。昨日も言ったけど、俺はこの世界がどうなっても基本的に知ったことじゃない。滅ぶなら所詮はそれまでのモノだったというだけだしね。…俺はね、セラスちゃん？家族が無事ならそれ以外はどうでもいいんだよ」

「なっ！？それでは…っ！？」

「でも！！！そんな俺にはどうでもいい世界だとしても…。見てみたいじゃない？友達が世界を救おうとするところなんかは、さ？」

「…友が世界を、ですか？」

「うん。まぁ俺が直接行けば早いんだけど、それじゃダメなんだ。この世界を救うのは俺じゃない、そこに生きている者達の手で行うべきモノだと考える。だいたい俺が助けたとして、またこんな事態になったらどうする？また俺か？冗談じゃないね、そんなおんぶに抱っこの状態の世界など。ヒトは自分の足で立つべきだ。それがで

きるだけの力はあるのだから…」

「…アオイ殿は、まるでこの世界の人間ではないような言い方をするのですね？」

「…なーんてな！どうよ？ちょーっとシリアスにしてみたけど」

「……」

「アレ？セラスちゃん、どったの？俯いて…。肩を震わせて…。イヤだ…なんかコワイヨ？」

この人はアレなのか？マジメな話もできない、おバカなのか？くぅぅぅ…！私、キレていいよね？作戦前だけど少しだけだから…いいよね？

普段から自分自身は忍耐強いほうだと思っていたけど今回は我慢の限界だったようだ…。だって私自身意識しない内に…。私の手は彼の腕をとり…。

「え？なに？セラスちゃん？ちょっと？」

「アオイ殿…。貴方という人はーっ！人がマジメな話しをしているのにーっ！」

「あっ！？ちょまっ！あだっ！？やめて！あだだだだっ！！ノー！間接ノーーー！！痛いから！イタタタタッ！！？」

コレでもかと言うほどの力で以って強く彼の間接を極めているのだから…。

「反省しなさーーい！！」

「アーーーーーーッ！！！」

ギチギチと聞いている者に不安を与えそうな鈍い関節を痛めつけられる音が聞こえる中、陽動開始の時間が迫っていた。

そして、彼…アオイ殿の悲痛な悲鳴で以って私は確信した。この人は自分に都合が悪くなるとふざけた道化になってでも逃げるヒトである、と…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　セラス

Ｓｉｄｅ　葵

俺は今、作戦配置についている家族達のもとへと歩いている。それにしても…ああ、痛かったぁ。ちょ～っとふざけただけなのにセ

ラスちゃんったら手加減してくれないんだものなぁ。心の余裕が足りんよね？それにハオ達とは別行動だったのがマズかったのかな。

――コキンッ…コキンッ…。

腕を回して身体の状態を確認してみる。すると…。

おぅ？でも、なんだか身体が軽く感じるな…あっ。ふふふ、やるね？セラスちゃん…。俺は君が将来、整体師になる事をお勧めしたい！俺にお仕置きしつつも身体のバランスを整えるとは…。

その天然整体師のパターンデータを取らせてもらってマッサージ器でも作らせてもらえないかな？いい加減、俺も歳だから、そういうのも欲しいのよ。身体は未だに二十歳前後で固定化していますがな。

まぁ、それはいいとして…。

アイリの報告から俺のことを調べてる人物がいるって報告があったから対策はしたけど…。その一人がセラスちゃんだったなんてなぁ。おおかたファンであるナギのことを調べていたら俺の経歴に不審なものを感じて調べていたのかもしれないな。

記録情報は魔法的にも、アンが生まれてからは電子的にも、そして必要とあらば人の記憶にも処理または封印を施してきたから公式記録的には、もう問題はないけどね。

それに彼女、セラスちゃんは途中で調べるのをやめちゃったから処理対象からは除外したしね。話してみたらいい子そうだし。ちょっと頭が堅いけど、それはこれから柔軟になっていくだろうから今

後に期待しときましょか。

帝国は今回のことで“大掃除”は、だいたい終わった。連合は…知らん。正直言って、そこまで手が回らない。必要とあればやるけど…面倒くさい。だいたい帝国内部に合法的に入れたのはテオのお陰だしな。

スパイだか信奉者だか愛国者だか知らないけど勘弁してほしいわ。人の個人情報持ち出そうとかさ。本当に迷惑だ。

まぁ俺の情報を手に入れたからといって、だからどうした？ってなもんだけど。消せるものは消しておいたほうが後々楽だし。盗んだ“者”も盗まれた“物”も、それぞれの“モノ”を情報的にも物理的にも…ね。

俺は英雄なんて真っ平ごめんですよ。俺は、この物語に登場する一人のモブなの。だから、その逆の犯罪者も、お呼びじゃないの。人知れず観察したいのよ、一番近くでね。

それ以外はゆっくり人生を楽しみたいのよ。それでまぁ退屈してきたら暇つぶしで、こうしたスリル感ある時を過ごせれば文句ないね。…常時、戦いたいとは思わんな！

もちろん戦う時は、それに応じた実力を以ってするよ？何事にも引き際って大事だよね。やりすぎると相手はヤケになって何をするかわからなくなるし。それで適当に楽しんだらバイバイですよ。

先程セラスちゃんには友達が云々って言ったけど、ようはこの物語の主人公は将来、生まれてくるナギの息子で俺はそのナギの元仲間っていうモブです。

俺が世界救ってどうするんだよ?俺は観客で傍観者。この世界で踊る連中を見て楽しむのさ。まぁ?俺個人に喧嘩売ってくるなら買うけどね。とことん相手をバカにしてな!二度と歯向かう気持ちになれないほど調きょ…もとい、教育してやるよ。

おろ?もう皆のもとについたね。

「我が君、アングレカム以下機動兵器部隊の出陣準備整いましてございます」

「吾ら将8柱も戦闘待機中。後は我が君の号令を待つのみでございます」

「ありがとう、ハオ、ユエ。…うわー」

改めて、こうして見ると俺の家族も増えたんだなって思うね。俺を含めて総勢２４３人、アンも入れれば２４４人です。…多すぎたかな?平時は［工房］内の管理や店の手伝いとかに徹してくれるから助かってるけど戦闘時にはこうなるのか…。

全力出陣なんてしたことなかったから、ちょっと感動。…宴会とかではしょっちゅう集まってるけどね。フル装備での集結ってそんなにないのよ。それに今回は戦争中に開発したモノが結構ある。それを装備してだから壮観だよ。

一月前に断念していた人型高機動兵器。これの開発に着手して試作一号が完成。でもね?試作一号を改造（魔）してる内にアレもコレも、とアイデアを盛り込んでいたら通常の［エステバリス］とは似ても似つかぬモノになってしまいました…。…自分では［エステ

バリス」を造ったつもりなんです。

皆さん…。突然ですけど“パワー○ール”って知ってます？もしくは某機動戦艦の劇場版に出てくる“ステルンクーゲル”でも可。なぜこんなことを聞くかというとですね？…脚部と肩部の部分が出っ張ってそれっぽくなったんですよｏｒｚ

まぁどちらかと言うと“パワーロ○ダー”っぽい…。俺は好きだけどな！あの作品も！難易度高いミッションなんか何度失敗したことか…。ハァ…。

それで最初こそ［エステバリス］そのものだったんです。でも［長時間単独行動を可能にするためには？］、という壁にブチ当たりまして。元の機体のままじゃそれが無理でした…。何しろ動力部分は重力波送受信機に頼った外部動力式でしたから。バッテリー搭載部分はあったけど小さいのよ。

動力部分を搭載できるだけのスペースがなかったんです。そこで脚部大腿部を肥大化させて大出力超伝導バッテリーを二基、積むことで解決を図りました。ちゃんと魔力変換機構もついていますよ。

ついでに予備弾倉なんかも入れられるようにして。搭乗者の魔力補助・強化などもされるようにしているんですよ。感覚的にはドーピングみたいなものですけどね。あ、でも身体的には問題ありませんよ。無問題です。

とりあえず、これによって最大稼働時間が６時間強になり試作としては十分なものが確保できた…と思いました。…でも、そんなに甘くなかったぜｏｒｚ

まぁここで所謂、問題が発生しました。稼働時間はクリアしたのですが今度は肥大化した脚部のせいで上半身と下半身とでバランスが崩れてしまい機動性・運動性がガタ落ちという最悪の事態になってしまいました。

そして上下のバランスを取るために肩部を中心に肥大化させた。肩部には１２０ｍｍ砲や二連装５．５６ｍｍチェーンガン、通信強化のレーダー機器などをオプションとして追加武装を取り付けられるようにして武装強化もしました。

それでバランス的な問題は解決しました…が、今度は総重量の問題が発生。この時点で総重量２．９４ｔです。これにより装甲や骨組みの材料を再度見積もることに…。そして最終的にはアンにも採用されている軽くて硬い強化型精霊装甲を外部装甲に採用。

骨組みはマリーから聞いた方法で作成された神秘金属“オリハルコン”を俺が加工して柔軟性を増した“オレイカルコス”（二つとも同じ意味だが便宜上別ける）を採用。このことで前回の総重量の１．８ｔまで激減できた。

ここまでで稼働時間・全体のバランス・総重量をクリア。次にしたのは落ちた機動性と運動性の確保と保持。まず俺がしたのは背部や肩部・脚部などに今の無人機動兵器にも採用している強化型重力スラスターを装備・増設。

機動性はこれで解決。多少力ずくで解決した感があるけど…。乗るのは俺を含めて人より頑丈だからいいんだよ。

あとハード面で残す問題は運動性のみ。そこで今までほったらかしにしていた間接部の見直しと補強、そして強化。これで激しい機

動をしても間接部の磨耗は耐えられるし滑らかな動きができる。マシンパワーも向上させたしね。純粋に力も強いよ。

それで増設・強化したことでエネルギー消費が増したために最大稼働時間は5時間弱。…5時間弱です。まだ逝けると思いました。飛行ユニットの取り付けです！単なる移動だけなら単体で飛ぶことも可能なんですけど高機動戦闘すると考えると速度不足が否めない。

そこで背部に飛行ユニットを装備して解決しようと考えました。皆さん“アップ〇シード”知ってます？それに出てくる飛行ユニットがあるじゃないですか。アレを搭載させようと考えたんです。結果は大当たりでしたよ。機体との相性がいいです。

これで高機動戦闘も可能になりました。次は標準装備してある魔導式ディストーションフィールド（以下ＭＤＦ）の制御プログラムを弄ってみました。

とは言っても集束率を増しただけですけど。例えば通常、全体的にＭＤＦを展開しているのを任意で一点に分厚く展開できるようにすることで防御を強化してみようと考えてみました。まぁ別に弄らなくても展開できなくはないんだけど効率良く展開できるようにしただけです。

操縦者に対して負担は少ないほうがいいよね？とりあえず操縦方法はＩＦＳのようなものですから。一応ですが精魔奇兵の彼女達の身体には予めナノマシンが身体の組成に一割使用されてるんです。性能は色々ありますね。身体強化・対毒物・治療用などがあります。

話しが逸れました。ここまでで最大稼働時間は４時間強…。そろそろバランス的には限界かなと思います。いつか外付けのバッテリ

ーでも作るかな。

それで防御力も底上げできました。武装面は先にも挙げたとおり肩部にハードポイントシステムを採用したことにより武装強化可能。腕部に持つ標準装備の魔導式突撃銃“ラピッドライフル”（面倒だから名称はこれで）と２７式精霊鋼短刀（ナイフ）です。

もちろんフィールドランサー（以下ＦＲ）もあります。もっともこっちでは対魔法用ですけどね。一応ですけどちゃんとランスとしても使える仕様になっています。やっぱり斬れないとね、刃物としては。

それで最終的に完成してロールアウトしたのが今、俺の目の前に整列している７８機の機体。名前は、もうエステバリスなんて呼べない代物になっていますｏｒｚ

正式名称ＭＨＴ－０６“イキシア”です。花言葉で「誇り高い」「秘めた恋」「団結してあたろう」などの意味があります。この名前にしたのは「秘めた想いを胸に、それでも仲間と団結して事にあたり誇り高く進もう」という思いで付けました。

戦いはやっぱり数ですよね。俺一人が強くても手数という点ではダメだと思うのよ。心の寂しさも埋められないしね。…何より一人で暴れてもつまんないです！

…ん？オリビエ発見！

「ねぇ、オリビエ。今回から実験配備したけど、これ使えそう？」

「ん？まぁ配備されて時間も経ってないけど葵の造った物だ。こい

つらなら必死こいてモノにするだろうさ」

やっぱり操縦訓練時間が足りなかったかな？今回は第十三～十八中隊の六中隊７２人＋仕官６人で７８人にイキシアを配備することにした。

第一機甲部隊はオリビエの二中隊。

第二機甲部隊はリビエラの二中隊。

第三機甲部隊はシルビアの二中隊。

それぞれに部隊を振り分けて組織したのよ。でも、オリビエ達は乗らんよ？…彼女達の能力を考えると乗せる意味がないのよ。それに機体自体が耐えられない。専用機を開発しないとダメだね。今回は時間もなかったし諦めてもらいます。

今更こう言っちゃなんだけど俺の部隊編成は普通のそれに比べて特殊だからなぁ。軍隊と言うよりマフィア（ファミリー）だと思う。それでもそこいらのヤクザ者より統率は執れてると思うし…。あぁ、傭兵が近いのかな？

軍隊みたく厳しくないけど統制が執れていて、でも自由な感じ。それでもヤル時はヤル連中。まるでマフィアと傭兵を足して２で割った感じだわ。

自分で考えていて、ちょっと鬱です。眠いのも手伝っていい感じに沈みそう。意識の底に…。でも今は我慢…。それよりも…。

「そっか…。皆には万が一にでも落とされそうになったら機体は破

棄してでも生き残るように徹底させてね？」

本当にね。撃墜されましたじゃ話にならんのよ。終いにゃキレるよ？俺が、さ。全てを焼き払ってでも俺の身内を傷物にしてくれた敵に復讐してやるわ。

まぁ仮に身体をやられたからといっても代わりの模擬体を用意すればいい話しなんだけどさ。それでも、ねぇ？仕返しって大事じゃない？主に俺の八つ当たり的な意味で必要な事だよね。

「…バカ。落とされるかよ。こいつらを信頼してやれって。あたしらが鍛えたのもあるけど何よりこいつらは葵のために頑張ってるんだから」

バカって…ひどいなぁ。でも、そんなに優しい顔して言われたら怒れません。温かいものを感じたからね。

「心配するのは許してよ。それにそれ以上に皆のこと信頼してるよ、当たり前だって」

信頼って大事だよね？身内に限っての話しだけど…。あぁ、一応ナギ達も信頼してるよ。あいつら見ていて飽きないし。

「ははっ！それなら、よし！」

こういう時のオリビエは本当に、いい笑顔するね。可愛いね、うん。思わず見惚れてしまいますな。…ん？そろそろ俺達の作戦開始時間が迫ってきたか。

「司令閣下、作戦前に一言お願いできますか？」

「うん、それじゃ…」

「全員整列！司令閣下よりお言葉がある！全員静聴！」

アイリってば…。そんなことまでしなくてもいいじゃない…。もっと気楽に行こうよ。ほら、皆が注目してるよ？恥ずかしいなぁ…。うぅ。

「皆、よく聞いてくれ。今回の人間どもの戦乱は俺にとっては正直どうでもいい…。だが、戦乱の結果が家族達に害を及ぼすなら話しは別だ！それだけは絶対に我慢ならん！！自分勝手と笑いたければ笑え！だが！俺はその愚物を必ず排除する！俺が倒れようともだ！しかし！その過程で皆が傷付いたり死ぬことは何人たりとも俺は許さん！全力で生き残れ！そして笑顔で今日明日を生きて行こう…。以上だ」

ハズい！マジでハズいです！顔に出てないだろうな！？

「全員敬礼！…司令閣下、ありがとうございます」

「うん、それじゃ後はお願いね？」

アイリに後のことを任せておけば安心です。万事滞りなく事を進めてくれるからね。

「ハッ！お任せください！」

うん！いい返事！頭を撫でてあげよう！な～で、な～で…。

「はぅ…」

「ハオとユエ、ミリー達とオリビエ達も来てくれる？」

今回の戦闘は俺もフル装備にしようと思います。そのためには皆の力が必要なのよ。

「「承知」」

ハオ、ユエ。

「はぁい。二人とも行くわよぉ？」

「あい」

「御意」

ミリー、ウーリ、マリー。

「了解。まぁ後はあいつらだけでもできるだろ。お前ら行くぞ」

「わかりましたわ～」

「…うん」

オリビエ、リビエラ、シルビア。

それじゃ行こうか、皆。この一戦、精々楽しむことにしよう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第十三話「決戦前と全力出陣と完全装備と」（後書き）

ア…レ…？戦闘は？…くっ！有人機の説明とセラスちゃんで文字数を取られるなんて…。
やっちまったぜぃ…ｏｒｚでも！後悔は無い！

“パワ○ドール”も“ア○プルシード”も好きだから！

では今回はここまで！チャオ！

第十四話「決戦と躁鬱と副官と」（前書き）

決戦…。上手く表現できるかチョッチ不安…ｏｒｚ

では、どうぞ！

第十四話「決戦と隊員と副官と」

Ｓｉｄｅ　葵

まもなく決戦だ。俺達の準備はできている。

俺は今、両手に姉妹刀陽月を持ち、支援機ラミエルを展開、そして姿を透明化したミリー達を纏い守護とする。背後にはオリビエ達が戦いを今か今かと待機している。

これが今の俺の完全装備。両手に持つハオとユエはこの世全てを切り開き、ミリー達はそれぞれの水・風・火属性の魔法を無効化し、それに準ずる氷・雷・地属性は半減・減衰させる。また敵が発動した魔法を元の魔力に変換することも可能で逆にこちらが行使する魔法は増幅して扱うこともできる。

オリビエ達は連係による攻防に期待。従者的な意味合いが強いかも。俺が本来の魔法使いとして砲台と化したら一度、動きを止めないといけないのはお約束だしね。まぁ実際の話し動きながらより止まっているほうが集中できるしな。

そして万が一オリビエ達の手が回らなかったら今回作成したラミエルの出番。対魔法・対物理・対光学防御と荷電粒子砲などからなる支援攻撃で俺の戦闘をサポートさせる。結構、堅固なフィールド展開が可能に造った。フィールド強度で言えばアンよりも１．７２倍ほど強力にしたしね。盾として優秀よ。

第二～六中隊の部隊は俺の直接指揮下にて戦う…と言っても大まかに指示出したらあとは士官達の自己判断に任せるけど。今は対人対魔戦装備で待機中なりよ。ガンブレードっていいよね？俺は好きだな。ギミックが多いから本来なら壊れやすいけど固定化の魔法と精霊鋼で強度的な問題は解決したしね。

そして俺の服装は某錬鉄の魔術使いにあやかり赤いコートに黒い軽鎧です。ちょうど陽月も白黒だしそれっぽく見えるんじゃない？くらいのものだけどな！別に白髪でも色黒でもないし！

部隊編成は旗艦としてアングレカムが一隻、これにはアンと俺の第一中隊とミリー、ウーリ、マリーの六個中隊の計９２人が搭乗。その他には複数の自動人形（オート・マータ）や整備ロボット（スパイダー）が働いています。皆、働き者でいい子達よ、マジで。

アンの兵隊の無人機動兵器（カブトムシ）は大盤振る舞いで６．０００機を搭載。無人偵察機（トンボ）も６００機あり現在は目標周辺に展開中、敵情の情報収集中です。

今回から実験配備される高機動兵器イキシアを７８機、実戦投入される。テスト中に細かな問題点は修正してあるから今のところ致命的な欠陥は見られない。問題はないね！

元が完成度の高かったエステバリスだから弄るところが少なくて大変だった。それでも無理矢理にでも弄って今の姿形はパ〇ーローダーになったけどね。

全高７．４６ｍもの巨人達が完全武装で整列しているのを見ていると何やら奮い立つものがあるよね？それにしても造り終わってから気付いたけど、この機体…。どことなく女性的フォルムだなｏｒｚ

俺はもはや無意識に女性的なモノを求めるまでになっていたのか？ハァ…。まぁいいか。

それで他の勢力はというと…。

まず俺が今まで居た帝国からの兵力は戦艦1と巡洋艦3の合わせて4隻。艦艇搭乗者以外の魔法使いは156人でその内上級魔法使いは12人。

もうちょっと連れて来られると思ったのに他の重鎮達に反対を喰らってしまったのよ。まぁ誰だって余計な被害をうけたくないから当然っちゃ当然なんだけどね。もっと根回ししとけばよかったわ。

次に連合側。戦艦2と巡洋艦1の合わせて3隻。魔法使いは189人その内の9人は上級魔法使いだ。

こっちはもっと悲惨だね。この場にいる人達の思いは純粋だよ？でもねぇ…。何て言うかな、この場にいるのは上官から見て頑固者というか一癖も二癖もある扱いに困る者達が多いのよ。要は元老院議員から見て邪魔者が多いのよね。

できることなら皆ここで死んでくれってな思惑でここに派遣されてきたのが多いんじゃないかな。本当に悲惨だね…。でも、そんなこと現場の人達には関係ないよね。皆が魔法世界を救いたいって思いでここに来てるんだから。

最後にアリアドネー。巡洋艦2隻にセラスちゃん率いる騎士団を筆頭に123人、内24人が上級魔法使い。

アリアドネーの思惑は深いところまではわかんないな。なにせ独立した学術都市だし。今回の作戦参加も、もし本当に事が起こったら被害がバカにならないからで、それの次善策の一つとしてみたいだし。

それに学術都市っていうのもあるんだろうね？こんな大規模な魔法現象は滅多に見られないし学術的価値観から記録して危険なら第一級封印。その他の類似被害対策に用いるためだろうな…。よくやるよ、本当に。転んでもただでは起きないんだから。

とにかく艦艇９隻、魔法使い４６８人＋俺の家族２４４人（内、俺に８柱ついて機動戦艦アングレカム搭乗者９２人、対人対魔戦装備の兵が６５人、高機動兵器が７８機）。現時点での総戦力だね。

純粋な意味で俺の家族達は魔法使いじゃないしね。てか、俺も人体にナノマシン入れてるから純粋な魔法使いとは言えないよなぁ。それでも戦力的に見て戦闘力は我がファミリーが最高よ。負ける気がしないのは本当だな。それだけの用意はしてるしね。

む？時間だ…。

「諸君！この一戦に魔法世界の未来がかかっている！諸君にも守りたい者達がいることだろう！それは愛する家族かもしれない！それは大事な恋人かもしれない！それは大切な友かもしれない！その者を強く想うならば必ずや生き残れ！隣に居る仲間を守り信じよ！その信じる心があるならば必ず仲間が諸君らを守り諸君らは生き残れる！こんな戦いで死んで終わることは、この俺が断じて許さん！！生き残り未来を守るのだ！！！未来のために！！！！」

戦意高揚のために出陣前の演説って何気に大事だよね？ちょっと

年甲斐もなく張り切っちゃった。てへっ♪…ん？結構いいこと言ったと思うのに誰も反応ないんだけど、これはどういうことかね？お兄さん、寂しいなぁ…。

――…おおおおおおぉぉぉぉーーーっ！！！！！！

――未来のために！未来のために！！未来のために！！！

おぅふ？一呼吸分、遅れて反応するとは、やるじゃないか。俺はビックリしたぞ？油断したぜ！…ビ、ビビッてなんかいないんだからな！本当だぞ！大きな声に驚いただけだぃ！

とにもかくにもここは盛大な花火を上げるとしよう。まぁ試射の意味もあるんだけどな！

「特大の一撃を相手にぶつける！それを合図に全軍突撃する！いいな！？」

――応っ！！！！！！

皆さんいい返事です！俺はそんな皆が大好きだ！よし！気合も入った！それじゃあ逝ってみようか！

「ラミエル！ＷＡＫＥ　ＵＰ！！」

『了解。我が主』

「決戦形態へ移行！目標！敵召喚魔及び自動人形！狙え！！」

決戦形態、それはラミエル最大展開した状態のこと。その姿は１００ｍもの青い巨体で正八面体の形をしたモノだ。…ぶっちゃけ普通に使途の進行だな！おい！

『了解。形態変化開始…完了。続いて砲撃シーケンスへ移行…各部良好。エネルギー充填…６０…７０…８０…９０…１００…エネルギー充填完了。照準…良し。トリガーを我が主へ』

トリガーが回されてきたか。ある意味、必殺の一撃…。受けられるものなら受けてみよ！ってな！

「叶わぬ想いを抱いて堕ちろっ！…吹き飛べーーーーっ！！」

――カッ！！！キュイィィィーーーン…！！ズガガガガガガガッ！！！！！！

一瞬、目が眩むほどの光を放ち、次にそれは直進していく破壊の本流となって。…そしてその破壊の力の一部がなんと、運がないことに［墓守人の宮殿］の天頂部に命中した…。

やっべ！気合が入りすぎたか！？…白髪君達は死んでないだろうな？あいつらはナギが倒さないと物語が大分変わっちゃうからな…。

いや！心配は後だ！い、今は突撃を命令しないと…。

「…い、今だ！全軍突撃せよっ！！！！」

――うおおおぉぉぉーーーーっ！！！！！

戦いは今ここにて開幕されたのだった。…死んでねぇよな？物語はまだ始まってもいないんだから勘弁してくれよ？ガクブルガクブル…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　ナギ

さて、勢いで飛び出して来たはいいけど俺達の出番はアオイ達の陽動が開始された後からだったことを着いて来た詠春に聞かされた。…拳骨と説教でのオマケ付きで、な。

たくっ！そういうことは事前に話しとけよなってんだ。詠春にそのことで文句言ったら…哀しい目で可哀想な子を見る顔だったのは何でだ？俺の横にはジャックも居たけど、ジャックにも似たような目を向けてたし…。

…詠春。何、俺の肩をポンポン叩いて慰めるようにして説明してんだよ。…な…に？この説明って二回目だってのか？……。

ハハ、ハハハッ！そうだよな！！覚えてる！も、もちろん覚えてるぞ！

詠春の話しを聞いているうちに俺は薄っすらと今回の作戦のことを思い出してきた…。そうあの日は決戦を数日後に控えて作戦会議があって、それが終わったあと…。そうだ、そのあとだ。勝利前の宴会をすることになって、［紅き翼］のメンツで飲み始めたんだ。

それで…。それからは…。くそっ！そこからは思い出せねぇ…。ジャックの野郎に何かのビンを口に突っ込まれてからの記憶がまったく、ない…。

まぁ、いいか！今のところ困ることないし！記憶をなくすほど楽しかったと思えば…。姫さんも誘えばよかったかな…。

ああいうお祭り騒ぎの宴会って姫さんは参加するんかな？？？まっ！俺が誘うんだっ。イヤがっても連れてってやるがな！ハハッ！

――ドンッッッ！！バァァアアッン！！ドドッ！ドドドンッ！！

おお！アオイ達がおっぱじめやがったか！陽動とはいえ派手にやりやがるな！あいつは！

「よぉし！行くぞっ！」

「応！」「はい」「おうよ！！」「うむ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ナギ

Ｓｉｄｅ　葵

敵軍は先の一撃を受けて一割が蒸発、二割り近くが身体のどこか一部を損傷している。造っておいてなんだけど出力調整はもっとマジメにしようと考えさせられる威力だった。ハァ…。これはリミッターをもっと付けないとダメだな。危なすぎるわ。

まぁそれでもまだまだ敵のほうが数は多いんだけどなｏｒｚ誰だよ？こんなに呼んだのは…。まだまだ増え続けているんですけど。

空が…黒く見え…ます。あーもー！鬱陶しいったらないな！！お前らはアレか！？ゴキ○リかイナゴの群れか！？うぅぅ！自分で言っていて想像したら寒気がした。気持ち悪いです。

混成部隊と敵軍は戦闘に入ったからラミエルの一撃は使えないし

な。そのラミエルは今、２０ｃｍ程の大きさで俺の守護をするために周回しながら浮いている。

アングレカムは後方で指揮所として機能して最遠距離からの弾幕、砲撃支援、そしてカブトムシの指揮統制をしているし、それにアンは今回からは高機動兵器イキシアの広域情報管制も担当している。

アンの負担多いなぁ…。いつかメモリの増設とイキシアとの連動機動データを収集して互換システムのバージョンアップもしないとデータがオーバーフローしちゃうな。設備の追加もしないと…。

まぁそれも戦闘後にすればいいか。今はと…。

「第三第四中隊は右翼側を！第五第六中隊は左翼側だ！第二中隊は俺に続け！！」

「「「「「了解っ！！」」」」」

両翼を命じた者達は素早く散って行き俺の周りには突撃陣で待機している第二中隊のみ。続いて機甲部隊に指示を出す。

「第一機甲部隊は味方の護衛を重点に置いて行動せよ！何としても守りきるのだ！」

『『了解！』』

帝国・連合・アリアドネーは混成部隊だから心配なのよ。連携は訓練である程度、克服しているみたいだけど、まだアラが見てとれる。ならば二個中隊を派遣してでも守るしかないじゃん。

連合・アリアドネーに知り合いは、ほとんど居ないけど帝国から連れてきたのは俺の懇意にしている将校から貸し与えられた兵達だ。これればかりは無駄にはできん。他人ならいくら死のうが知ったことじゃないけどな！そこまで責任持てないし！

「第二機甲部隊は各戦線を後方より砲撃支援を開始！弾幕を張って味方に近づかせるな！」

『『了解！』』

要は近づけなければいいんだ。まぁこれはすごく極論で、まず無理だけどな。それでも相手の行動を阻害できる。そして行動を制限できれば、こちらはそこを突破口に戦闘で優位に立ち回ることが出来る。

それに一番安全な勝ちかたは簡単だ。敵と接触することなく遠距離からの強力な一撃による攻撃。これは卑怯くさい方法かと思われるが現代戦闘では、これが当たり前だ。それにここには遠距離攻撃を可能にした装備があるんだから使わないでどうするってものだ。

家族が、より安全に勝てる方法があるなら俺はその方法を迷わず選ぶね。家族の命がかかっているなら他の全てを犠牲にしてでも俺は構いませんな。例え世界でもな！まぁ滅多にそんな選択はないけど…。

「第三機甲部隊はタイミングを見計り両翼から敵陣に斬り込み敵を後方から撹乱、各個撃破せよ！お前らの力を敵に見せつけてやれ！」

『『了解！』』

敵の数が多い…。砲撃・爆撃支援だけでは対処できない。このままでは、いずれ戦線が崩壊する。危険な賭けではあるが敵後方を撹乱してもらって突破口を開くしかない。これは先を見越しての策だ。

まだ戦端は開かれたばかりで味方の気力、指揮も高い。しかし、この敵の数を前に長くは持つまい。人は戦意が高揚している時はいいが絶望的戦力差を目の当たりにした時は戦意がガタ落ちする。気持ちが折れるのだ。

戦況が最悪になる前に事前策が必要だった。そのための布石が彼女達だ。彼女達が時機を見て敵後方から撹乱することで敵戦線に乱れが出る。それは極僅かな時間かもしれない。しかし、それが俺達にとって逆転の好機となるのだ。

人は絶望の中で一度でも希望を目にすると、それに引き寄せられて突き進むことがある。言うなればこれは火事場の馬鹿力というものだけどな。それでも人は希望があるから無心に戦うことができるんだよね。

さて、もう一つ手を打っておくか…。

「アン、聞こえる？」

『はい、感度良好です。お父さん』

「よろしい。アンは無人機を統制して全戦域を把握。遊撃として帝国・連合・アリアドネー混成部隊の援護。戦艦アングレカムはグラビティブラスト（以下ＧＢ）、ミサイルで超遠距離砲撃にて支援。…アン、アイリ達を…皆を守ってね」

無人機は各機が常時並列ネットワークで繋がり情報を共有している。それをアンが送られてくる情報を分析・解析して最善と考えられる指示を無人機に下していく。そしてそれは今回から実験配備された高機動兵器イキシアに常時更新して情報が転送される。

複数の機体間とアンの管制で広域データリンクシステムを構築して最新の情報を部隊全員で共有していることになる。俺を含め皆には通信用情報端末、所謂コミュニケを持たせているからな。もちろん情報は受信に限りだが俺達も共有している。

戦域全体を規定値以上、把握したらこちらが優位だ。救援が必要な味方までの最適なルートを割り出して援護が可能になり被害リスクを極限まで減らすことができる。

こちらは戦意、魔法使いとしての質も高い。しかし数が少なくてしかも混成軍であることもあって不安が残る。さりとて、それぞれの部隊が個別に戦っていては各個撃破されてしまうのが関の山だ。潤滑液、または緩衝材となる存在が必要だった。

そこで俺の部隊を緩衝材の役目にした。これは先にも挙げたとおり常時並列ネットワークで繋がりデータリンクシステムがあるのが大きい。情報・連絡共に密に取れるので伝令役としても使えるのだ。

数の多い連合を中央に布陣させ右翼に帝国、左翼にアリアドネーを置いた。後方にはアングレカムを置き、支援攻撃と情報管制などをしてもらいながら無人機による援護もしてもらう。

残った俺達は緩衝材の役目と各軍の遊撃を務めることになる。

『はい、必ず…。お父さんも気を付けて』

信じているよ、アン…。

それじゃ俺も行くとしますかね！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　セラス

戦闘が開始された。アオイ殿が放った光の一撃…。話しに聞く旧世界の科学爆弾の破壊力を思い起こされるほどの威力だった。

敵軍は先の攻撃で三割以上に被害を与えることができた。しかし、それは現時点での敵の数に対してだ。決定打ではないだろう…。その証拠に今も召喚が行われているのか、その数は増え続けている。

――魔法の射手！連弾！光の７矢！！

７発中四体の召喚魔を撃破、か…。敵の数が多いことから魔力の温存と速度重視で無詠唱魔法を繰り出していくが…。

「くっ！切りがないっ！」

そう。どこで、この召喚が行われているのか知らないが倒しても倒しても切りがない。

幸いにも戦闘は始まったばかりでこちらはまだ戦意は高い。今しばらくは戦線を維持できることだろう。…だが、それもいつまで維持できるか。

私は召喚魔の中に動きの早いものを見つけた。下手に放っておくと味方戦線をかき乱されるかもしれない。早めに危険の芽は摘むに限る。私は召喚魔に狙いを定め…。

――魔法の射手・戒めの風矢！

戒めの魔法の矢は召喚魔を追尾して与えられた役目を全うしようとする。そして逃げる召喚魔に追いついて捕らえた。

――捕まえた！！

このチャンスを無駄にすることなく次の無詠唱を準備する。

――魔法の射手！連弾！光の３矢！！

放たれた魔法の矢で召喚魔は撃破…。まだまだ敵の数は多いがとりあえずの危険は減った。ホッとするのも束の間、戦いはまだ続くのだから。

私達、騎士団は左翼側の中央に展開している。そのため攻撃の激しさが身を以って思い知らされる。中央に布陣した連合は大丈夫だろうか？左翼の私達でもこの激しさだ。中央の者達は苦戦を強いられているに違いない…。

そう思い一瞬だけ意識を中央に向けてみた。その時に見えたもの…。それは…。

常識ハズレなほどの数の白と黒の剣の嵐だった…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　セラス

Ｓｉｄｅ　葵

くそっ！思った以上に敵の数が多い！何だ！？この面倒くさいな！もう！こんなことなら遠慮しないでアンの砲撃もセットで放てばよかった！

面倒だな…。“剣雨”でも展開して数を削るか…？そうするか…。よし！そうしよう！魔力を高めて…。あっ、警告しとかないと！

「あー！あー！…味方部隊は下がれ！巻き込まれたくなければ言うとおりにしろっ！！」

俺の言葉に周りから順次後退していく連合の魔法使い達。…俺が言うのも変だけど、よく言うこと聞いてくれたな。少しは反発があるかもと考えたのに…。まぁいい！これなら…ヤレル！

高らかに謳われるは敵を屠る力の呪文。葵本人の増え続ける魔力と陽月に長年蓄えられた魔力。それぞれの莫大な魔力にモノを言わせて展開される最大級の葵オリジナルの魔法…。

――白の一刃！放つは光！！

ハオを一振り。現れるは白の剣が一。

――黒の十刃！放つは影！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が十。

――白の百刃！紡がれるは栄光！！

ハオを一振り。現れるは白の剣が百。

――黒の千刃！紡がれるは破滅！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が千。

――白の万刃！語られるは英雄！！！

ハオを一振り。現れるは白の剣が万。

――黒の億刃！語られるは魔王！！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が億。

――陰陽の剣軍！今ここに！！敵を討つ！！！

白と黒の剣先が向くのは主の敵。

――穿て！決戦魔法“剣軍弾雨”！！！！

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドン

ッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

刃は一で十を貫く。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

刃は十で百を捻じ伏せる。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

刃は百で千を切り裂く。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

刃は千で万を消滅させる。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

刃は万で億の敵を蹂躙する。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ド…。

刃は億で兆を…。

一斉に放たれた剣軍。その数は無数といる敵を前にしても劣らな

い。魔法の発動が終わり視界を遮っていた魔力の残滓が晴れた。そして結果を見てみるとそこには…。

「何にもなくなっちゃったなぁ…」

あんなにいた敵が姿も見えない。両翼の敵はまだ健在。蹂躙したのは敵陣中央だけだから当然といえば当然なんだけど…。もうちょっと範囲を広げておけばよかったかな?…いや!ダメだろ!?イキシアのデータ収集があるんだからやりすぎちゃダメだろ!

ふぅ…。つい数の鬱陶しさからやっちゃったけど…。失敗だったかなぁ?こんな大規模の戦闘なんかもうないだろうし。苦戦時のデータも欲しかったのに、これじゃ五分で渡り合えるよ…。しまったなぁ。やっちまったよ…。

「たくっ…俺らしくもない」

俺の遊び心はどこに逝った!?くっ!?手加減を忘れてた…ｏｒｚ億の段ではなくて千の段までに留めておけばよかった!

まったく!こんなことなら宝物庫の中身も有ればよかったのに…空っぽなんだもの。王の財宝をこれでもかと使ってみたかったなぁ…。おかげで、別口で術式を構築しないとダメだったんだからイヤになるよ。術式開発に手間がかかって仕方なかった。

それでも実体を構築できるのは陽月の二振りの複製が限界だったのはどういうことかね。他の武器を複製しようとすると一時間も経ったら消えちゃうし。今考えてみると相性の問題だったのかね?二振りを打つときに俺の魔力を注いだことが原因とか。

今、その考察はいいか…。とにかく敵を駆逐しながら注意をこちらに向けさせなくちゃ、ナギ達が戦う時間を稼がなくちゃならんしな。

「総員聞けーっ！！敵の陣形は今ここに崩れた！連合の勇者達よ！行けっ！この好機を逃すな！」

――オオォォォーーーッ！！！！

そうしている間にも敵はまた召喚魔が増えてきた。まったくどこで召喚されているんだか…。俺達は囮だから召喚魔の発生源を潰すわけにもイカンし…。いや、潰すか？…待て待て待てっ！まだダメだ！イキシアのデータ取りが終わってない！

召喚魔の発生源を潰すのは十分なデータを取り終わってからでも遅くはない。まぁそれまでにナギが親玉と決着をつけるだろうし俺はほどよく戦うとするか…。先のはイライラしてヤリ過ぎてしまったからな。

それにここまで敵を減らせば残りは十分な戦いができるでしょ。家族達が各軍を適度にバックアップはしてくれているんだからな。

アンとアイリは上手くやっているかな…。

「あの…葵ちゃん？」

ファレノ？どったの？キョトンとしちゃって…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――時は少し戻りアングレカムでは…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

「ッ！？味方陣地中央に高魔力反応有り！…魔力パターンは葵様です！…これほどの高魔力は…ハッ！？決戦魔法使用の疑い有りです！！」

戦闘開始してしばらく経ってから驚きの報告が届いた。司令閣下が早くも決戦魔法を発動しようとする魔力反応が感知されたのだ。

「各部隊に緊急通達を！対象区域より即刻退避させなさい！」

自分は念のため該当区域の全部隊に退避命令を出した。司令閣下、無茶をしすぎです…。退避が間に合うようにしてくれているのはわかりますが、それでも心臓に悪いですよ。何を急がれているのですか？この程度ならばまだピンチにもならないのに…。

「アイ・マム！全部隊に緊急通達！味方陣地中央にて決戦魔法の使用を感知！対象区域にいる部隊は即刻退避されたし！繰り返す！味方陣地中央にて決戦魔法の…」

通信士の周りにウィンドウが次々と展開しては消えてを繰り返して各部隊に緊急通達されていく。通達が下される前に退避した部隊もあることから司令閣下が警告したものと思われるが、それでは足りないようだ。

しかし指揮所であるこちらからの指示には従わなければならない。退避命令は即時実行された。私は次いで念のためを考えて指示を出すことにした。

「アン、無人機に各軍を援護させて。下手に被害が出たりしたら目も当てられないから」

「うん…じゃなかった。アイ・マム、艦長代理。無人機各機は中央陣地前面にてフィールド展開準備。決戦魔法発動直前に各軍部隊をフィールド展開して流れ弾から守りなさい」

ふふ、可愛いわね、アンは。んん…今そのことはいいわね。アンは自分の考えを正確に読み取り守備に入ってくれた。これで万が一のことが起きても被害を抑えることができる。

「決戦魔法の発動を魔力レーダーと偵察機の光学映像で確認！…“剣軍弾雨”、敵陣中央の上空に展開、射出されました！攻撃は敵軍に直撃！敵陣中央を中心に攻撃範囲が広がっています！…あっ、敵陣中央ほぼ壊滅！しかし両翼の敵は尚も健在です！！」

「司令閣下が作った好機だ。該当区域の全部隊に“傷口を広げよ”と通達。しくじるなよ？」

敵陣に穴が開いた。それも致命的なまでの穴が。この好機をみすみす見逃すほど自分は甘くはない。より致命的になるまで適度に広げてみせる。

「アイ・マム！作戦区域の全部隊に通達！敵中央の“傷口を広げよ”！繰り返す！敵中央の“傷口を広げよ”！」

「実験配備されたイキシアはどうか？」

今回の作戦に不確定要素があるとしたらコレだ。データ収集班に現在の状況を聞いてみることにした。司令閣下の作られたものだから不安は少ない。だが少しくらい気を配っておいても損はないだろう。

最悪の事態を想定して予め備えるのも司令閣下の副官の一人としての自分の役目だ。もう一人の副官は第二中隊を率いて司令閣下と共に最前線に居る。ファレノプシス…彼女は上手く司令閣下をサポートしているだろうか。不安はないが心配だ…。

「はい、今のところ撃墜された者は皆無。順調に敵を撃破している模様。機動性・運動性・攻守のバランス、その他システムにも機体トラブルの問題は見られません。今回の優先目的たる機動データも順調に収集中です」

実験配備された機体は順調に戦果を挙げているようだ。この性能ならば部下達が…家族が負傷する確立が格段と減ることだろう。

今回、収集されたデータを元に機体の改良にソフトウェアの更新、ついでに装備の拡張をして今よりも更に優れた機体“イキシア？（ツヴァイ）”が開発される。

「そうか…。流石は司令閣下だ。良いモノを造られる」

「そうでしょ！そうでしょ！私もお父さんを手伝ったんだよ！強度計算とかバランス計算、姿勢制御、火器管制システムなどなど！ＯＳからいろんなプログラムまで組んだんだよ！うふふ♪」

「そうか、司令閣下の手伝いをしていたのか。アンは偉いな」

「えへへ～♪」

外見はこんなにも愛らしいのに今や立派な私達の家族なのだな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

第十四話「決戦と蹂躙と副官と」（後書き）

ここにきて新たなキャラの予感！？
自分の手が書いていて作者本人が驚いてます！！
この後どうするんだろう…。

俺の手が…ｏｒｚ

勝手に動き回るんです！俺のせいじゃないんです！！
…マジでどうなるんだろう？本当にね…。
マジメにプロット作ればよかったと後悔中ですよ。

第十五話「魔法と機械と乱戦と」（前書き）

珍しくちょっとだけ気合入って文章が長め…。
更新も早めにできました。
この調子で書けたらいいな。
では、続きを！

第十五話「魔法と機械と乱戦と」

――中央最前線にて…。

少し時間は戻り…。

Ｓｉｄｅ　ファレノプシス

私の名はファレノプシス。元火精霊の精魔奇兵で～す♪気軽にファレノって呼んでね♪第二中隊の指揮官なんかしています！葵ちゃんの近くにいられるしね♪…アイリの第一中隊より近くないけど。それでも同じくらい近いもん！葵ちゃん直属は伊達じゃないんだから！

それで私達第二中隊は今、葵ちゃんの護衛として最前線に立っているの。そのはずだったんだけどなぁ…。私達の前には敵がまばらにしかいないの。私ってここにいる意味あるのかなぁ？なんて…。

会戦後しばらくは私達も数だけは多い敵の相手をしていたんだけど葵ちゃんがキレたのか、わからないけど味方に対して突然の退避勧告。なぜかと考えていたら指揮所からの命令が下された。その命令が…。

――“決戦魔法の発動を感知。至急退避されたし”…。

…何コレ？冗談でしょ！こんな序盤で使うような方法かな！？私達は慌てて後ろ向きに前進したよ。怪我したくないからね！それに

しても葵ちゃんったらどうしたのかな？いつもならこんな場面で使うことなんかないのに…。

徹夜明けだから精神的にキテたのかな。ここ最近は睡眠時間も削られるほど頑張ってたものね。葵ちゃんもデッカイ魔法を放ったからこれで少しは気分的にスッキリしたかな！うんっ！

…んー？でも何でだろ、魔法を放って敵を駆逐したら頭を抱えてる。どうしたんだろ？声かけてみたほうがイイのかな？…うん！行ってみよう！それじゃさっそく…。

「たくっ…俺らしくもない」

俺らしくもない？近づいてみたら葵ちゃんのそんな言葉が聞こえてきた。やっぱり寝不足でキレちゃったのを後悔してるのかな？でもでも、情報端末を開いてみても被害は敵だけで味方には被害はないって出てるよ？葵ちゃんって無駄に器用さんだね。あんなに大規模魔法だったのに…。

どうしたのかな？今度は何か考え込んでるみたいだけど…。葵ちゃんがちょっとの間、考えていたから心配して更に近づこうとしたら、その葵ちゃんが突然声を張り上げて叫ぶようにして命令したの。ビックリしちゃった。

「総員聞けーっ！！敵の陣形は今ここに崩れた！連合の勇者達よ！行けっ！この好機を逃すな！」

――オオォォォーーーッ！！！！

たしかにチャンスではあるけど、葵ちゃんヒドイよう…。突然大

きな声なんか出すからビックリしちゃったじゃない！連合のオジ様達は戦線を押し上げるために突撃して行っちゃったし…。周りには葵ちゃんと私達しかいない。私は三度目の正直と思い葵ちゃんに声をかけたの。

「あの…葵ちゃん？」

「なに？ファレノ、どったの？」

…なんか失礼だよ。私が声かけたら葵ちゃん不思議そうな顔するんだもん。それにどうしたの？は私のセリフだと思うの！なんか考え込んでたみたいだから心配してたのに！もう！

「どうしたも何も、葵ちゃんが何か考え込んでたから心配したから声かけたの！」

「えっ、そんなに考え込んでた？」

気付いてなかったの？ちょっとの時間だったから戦闘には支障はなかったけど結構深く考え込んでたの…。ここで葵ちゃんが何を考えてたのか気になった私は悪くないと思うの。もちろん聞いてみたの。

「一体何をそんなに考え込んでたの？」

「あー…たいしたことじゃないよ？収集データが減っちゃうなって考えてただけだから…」

「データって…あっ、イキシアって機動兵器のこと？」

「そう、ソレ。こんな戦闘って滅多にないから実証データは多めに欲しかったのに俺が“こんなに”しちゃったから、ね」

あぁ…なるほど、そういうことなの。葵ちゃんは実戦での収集データが減ることにガッカリしてたのね。たしかに敵陣の中央だけとは言っても結構な数の召喚魔と自動人形を片付けちゃったものね…。

「ご愁傷様だね、葵ちゃん。でも元気出して！まだ敵は両翼に沢山いて、しかもまだまだ増え続けてるんだから大丈夫なの！」

そうよ、葵ちゃん！落ち込むのは早いの！変な話しだけど今なら敵には事欠かないの！実戦証明できるの！だからファイト！葵ちゃん！

「うぅん？たしかにそうだね。俺、頑張るよ！」

「うん！いい子だね、葵ちゃん。…ところで“アレ”しちゃったのはやっぱり徹夜明けでイライラしてたからなの？」

私は“剣軍弾雨”の発動地点を指差しながら笑顔で、そう聞いてみたの。そして葵ちゃんは何やら左右をキョロキョロしながら見ていたけど、やがて観念したのか幾分疲れた顔をしながら…。

「……うん」

…と、だけ頷いて答えたの。私は葵ちゃんのお仕事を少しでも減らしてあげるように、これからますます頑張ろうと思ったの。これが終わったらゆっくり寝かせてあげようと思うの…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ファレノプシス

第一機甲部隊は新しく実験配備されたイキシアにて味方部隊の護衛を重点に救援活動をしている。戦線が崩れると思われる戦域に向かい即座に部隊展開して味方を守りきるのが役目。

中央陣地の戦況は指揮所からの情報に“葵の猛攻で敵軍は壊滅状態にある”とあった。このことで部隊員達の間では「葵君が寝不足でキレた…」と噂されている。実際そのとおりなのだから冗談とは考えられないのが辛い。

このことで中央の護衛は不要と指揮所は判断。その後の通達で第十三中隊は右翼へ緊急展開して第十四中隊は左翼に急行、部隊を展開した。

本来であれば彼女達の主であり家長である葵の守護を担っているのだが、その葵からの指示で帝国・連合・アリアドネー混成部隊の味方部隊を護衛すると言う名の遊撃行動をすることになった。そして役割は異なるが第二第三機甲部隊も変わらない。

――帝国軍が展開している右翼陣地…。

Ｓｉｄｅ　第一機甲部隊

『マイクリーダーよりマイク全機へ。ここでの我らの役目は右翼に展開している帝国軍の護衛と支援だ。訓練どおり小隊単位で行動しろ。互いにカバーするんだ。そうすれば撃墜と言う不名誉は免れることが出来る。だが、何よりもまずは葵司令の期待に応えてみせろ！いいな！？』

『『『『了解！』』』』

三機編隊の小隊単位で戦場を機械の鎧を纏った乙女達が駆け抜けて行く。

女性的な姿形で白地に青いラインの描かれた機体。魔法世界では異色の機械の巨人達。魔法文明が発達しているこの新世界では、まず考えられるものではない。なぜなら魔法使いは魔法という便利な技術を使うことができるから、こうした機械技術は低く見られるのだ。

物質文明の旧世界では機械工学などが発達して科学と言う力を得たが、それも万能とは言えない。寧ろ現時点では新世界側のほうが魔法もあるのもあるが旧世界に比べて技術は発展していると言えるだろう。

しかし、ここに破壊行動としてだが、その常識は崩れようとしている。葵が開発した“イキシア”だ。正式名称ＭＨＴ－０６（ＭＨＴ＝Ｍｕｌｔｉｐｕｒｐｏｓｅ　Ｈｕｍａｎ　Ｔａｎｋ）、全高７．４６ｍの巨体の割りに総重量１．８ｔと軽い。そして完全装備時の総重量は２．０１～２．５３ｔと機体への重量負担を最小限にしている。

その一機一機が強力な火器と強靭なマシンパワーで戦域を埋め尽くしていた召喚魔や自動人形を駆逐していく。敵の厖大な数に帝国軍の魔法使い達が苦戦していたのがウソのように敵が次々と撃破されている。

『隊列を組め！射撃、構え！撃てぇー！！』

――ドドドドドドドドドドドッ…！！！！！

イキシア全機が標準装備している魔導式突撃砲（ラピッドライフル）を構えて隊列を組み一斉射する。最前列にいた召喚魔は対魔法障壁弾により障壁を紙クズのように貫通され召喚元へ還されていく。

――ドドドドドドドドドッ…！！

『射撃、止め！これ以降、各小隊は任務を果たせ！散開！』

『『『『了解っ！！』』』』

機械を纏う乙女達は戦場を飛び駆ける。主より任せられた役目を果たさんがために…。

戦場の一画に隊列を離れてしまった帝国の魔法使いが居た。そして自動人形は逃げる魔法使いに手を伸ばして組み付いた。組み付かれた魔法使いは死を覚悟して目を硬く瞑って、その時を待つ。

だが魔法使いに組み付いていた自動人形は駆けつけた一機のイキシアが振るう２７式精霊鋼短刀（ナイフ）で胴体部を切り裂かれて身体の動作を停止させた。

『大丈夫か!?まだ戦えるなら隊列に戻りなさい!!』

「は、はいっ!ありがとう!」

助け出された魔法使いは死にそうになった恐怖で一瞬、身体が固まるが直ぐに正気を取り戻して礼を言うと味方の隊列に戻り敵陣へと駆け出していった。

またあるところでは飛行して正面の召喚魔を追っていた魔法使いがいたが直後に別の召喚魔と自動人形に自分の後ろにつかれて逃げている。速度で召喚魔に劣っていた魔法使いに凶刃が今そこまで迫る。そして先回りした自動人形。追いついた召喚魔の振り下ろされる爪が魔法使いに迫り届こうとした、その時!

――キイィィィンッ!!

あわや挟撃されるかと思われたが白と青の機械の巨人…2機のイキシアが魔法使いを助けるために間に入り敵の攻撃をその堅固な装甲で一手に受け止めていた。ギチギチと押し合う装甲から嫌な音がするが音に反して装甲には傷もなく塗料が剥がれるのみだった。

その様子を助けられ、ただ見ていた魔法使いに業を煮やしたのか外部スピーカーから巨人の姿に反して綺麗な女性の声が響いた。

『何をしている!?早く退避なさい!死にたいのか!?』

「は、ははい!!」

言葉遣いは乱暴だったが先程のことで呆然としていた一人の魔法使いの命は助かったことになる。魔法使いが離れたことに安堵した

二人だが、その二人の機体に通信ウィンドウが開かれ彼女達の小隊のマイク7のコールナンバーを持つ小隊長が怒鳴り散らすように指示を飛ばす。

『マイク8、9！合図したら離れなさい！！』

『何！？…そうか！マイク8、了解！』『マイク9、了解っ！』

『…今だ！！』

合図と共に離脱する二人。次の瞬間、彼女達と召喚魔、自動人形が居た空間に弾丸の雨が降り注いだ。

――チュィィィン！ガガガガガガガガガガッ…！！！！！

マイク7の機体の左肩部に装備された二連装5．５６ｍｍチェーンガンから対魔法障壁弾が毎分２００発以上が射出され対象区域に居た召喚魔達だけでなく近くに居た敵をも巻き込み全てを物量に物言わせて撃破した。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　第一機甲部隊

――中央後方アングレカム前方の中衛に布陣…。

Ｓｉｄｅ第二機甲部隊

第二機甲部隊は後方よりの援護のために支援攻撃装備にて味方を守るために敵を遠距離から叩いていた。

巨人が両手に構えるのは長距離支援制圧砲（スナイパーライフル）が一つ、右肩部には精密広域レーダーを装備して武器の命中率を上げる。左肩部には8連装多目的ミサイルポッドを二基、装備。面制圧を目的とした多弾頭ミサイルと搭載。

長距離からの制圧を目的とした装備で弾薬補充と支援砲撃を繰り返している。そしてまた砲撃要請がきた。

『アングレカムよりオスカーリーダーへ。ノベンバーリーダーより支援要請有り。ポイント2－8－3に制圧砲撃されたし』

『了解！これより支援砲撃を開始する！着弾予定時間は90秒後！』

『ノベンバーリーダーよりオスカーリーダーへ！感謝する！』

『オスカーリーダーよりオスカー各機へ！ポイント2－8－3に制圧砲撃を30秒後に開始する！各機砲撃準備！カウント0で砲撃！』

『『『『了解！』』』』

『カウント…15…10…5…3…2…1…砲撃開始！！』

――ガチャ！…ドゥウンッ！…ドゥウンッ！…ドゥウンッ！ガチャ！…ドゥウンッ！…ドゥウンッ！…。

長距離支援制圧砲（スナイパーライフル）から重く鈍い轟音を響かせながら特殊散弾の弾丸が飛び出していく。

――ドドドドドドドッシューッ…！！ドドドドドドドッシューッ…！！ドドドドドドドッシューッ…！！

一機あたりが八連装多目的ミサイルポッドから全１６発の多弾頭ミサイルを全弾発射されていく。それが十三機だ。発射されたミサイルは多大な数になる。まさに制圧攻撃だ。

『着弾まで２０秒…１５…１０…５…２…１…着弾。…砲撃のおよそ８０％が命中。砲撃による効果、良好』

弾道を観測しているアングレカムが着弾までのカウントしていた。８０％が命中。撃破したかはともかく敵の勢いを押し留めることはできたはずの攻撃。

広域レーダーでの観測と偵察機の光学映像で確認したのは砲撃された左翼の敵が一時的に数を減らされたことで前進していたのが止まっていた。そこにノベンバー各機とアリアドネーの騎士団が追い討ちをかけるように砲撃と魔法を叩き込んでいる。

『オスカーリーダーからパパリーダーへ！この場は、しばらく任せる！』

『パパリーダー、了解！ゆっくりしてな！』

『ふふふ。ああ、そうさせてもらおう。…オスカー各機へ！弾薬の補充を開始！第四小隊からだ！』

『『『了解！』』』

『アングレカムよりパパリーダーへ。右翼に展開しているケベックより支援要請有り。ポイント９－８－４に制圧砲撃されたし』

『パパリーダー、了解っ！任せな！…行くぞ！お前ら！！』

『『『了解ッ！』』』

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ第二機甲部隊

――アリアドネー騎士団が布陣している左翼陣地…。

Ｓｉｄｅ　第三機甲部隊

第三機甲部隊の半数、第十八中隊（ロメオ）が展開している左翼陣地は混戦していた。一度体制を整えるためにも敵の動きを一時的にでも止める必要が出てきた。

そこで第十四中隊のノベンバーリーダーが指揮所のアングレカムに支援砲撃を要請。アングレカムは第十五中隊のオスカーに支援砲撃を指示。オスカーリーダーが支援砲撃を実行した。

オスカーからの支援攻撃で砲撃された特殊散弾が敵の真ん前で炸裂、対魔法障壁弾をバラ撒いたことにより敵召喚魔、自動人形は前進を一時停止。百数十発の多弾頭ミサイルが敵前で分裂して数百発のミサイルが追い討ちをかけるように飛来し爆発、威力制圧された。

敵は多数を撃破される被害を受けるも直後に魔法障壁を展開。しかし、それは一瞬だけ拮抗、反発をするも対魔法障壁弾に結果、貫通される。そして魔法障壁を展開している間に敵は動きを止めたことで更なる被害をうけることになる。

第三機甲部隊のロメオリーダーは敵の前進が止まっている今が好機と判断。主より任された敵後方の撹乱任務に動き出した。

『ロメオリーダーよりロメオ全機へ！これより敵陣へ突撃、敵後方の撹乱任務に入る！第一小隊は私と来い！各機、小隊単位で行動せよ！』

『ケベックリーダーよりロメオリーダーへ！話は聞いた、右翼陣地の我々も同調して敵に突撃を仕掛ける！』

『ロメオリーダー、了解！任務の成功を祈る！』

『ふっ、そちらもな！』

今が好機と第三機甲部隊のロメオ隊が敵陣に突撃し任務を果たそうとしていた時、同じ頃に右翼陣地で好機を窺っていた第三機甲部隊のケベックリーダーから通信が入った。彼女達も支援攻撃を要請し実行した後だった。

そこで両翼部隊がバラバラに突撃して実行するよりも一斉に進行したほうが撹乱効果は高いとケベックリーダーは考えた。両者は同時進行することに同意、任務を開始する。

だが、その前にロメオリーダーは自分の陣地の責任者であるセラスに念話で連絡を取り次いだ。

【…セラス殿？こちらロメオリーダー！セラス殿！？…】

【…はい、セラスです！なんでしょう！？このっ！しつこい！…】

【…お忙しいところ申し訳ない！ただ今より私達は任務で敵陣深くに斬り込み後方から撹乱します！敵の動きが乱れたら攻勢に出てください！…】

【…なっ！？危険過ぎます！それならば我々もご一緒します！…】

【…なりません！私達の任務は貴女方の護衛とサポートです！よってこれは私達の役目！お心遣いは無用です！…】

【…しかし！…】

【…ふふ、大丈夫です。我々は簡単には死にませんよ。葵様がお造りになった、この機体もありますから…】

【……っ…わかりました。私達、騎士団は撹乱後に敵陣が乱れたら一気に攻勢をかけます。…どうか、ご無事で…】

【…了解です。そちらもお気をつけて…】

突撃の許可も取り、ロメオリーダーは念話中に準備を整えた部隊に通信を開き号令をかける。

『ロメオ全機、行動開始！』

『『『了解！』』』

第三機甲部隊は両翼共に活動を開始した。守勢的な戦闘から彼女達が本来の戦闘スタイルとする攻勢的な戦闘へ、と…。

彼女達を鍛えたのはシルビアだ。彼女は小柄な姿からは想像もできないほど過激に苛烈に攻める極攻勢の戦闘スタイルを旨としている。その子が鍛える二個中隊の部隊はどうなるか？結果は見えてこようと言うものだ。

全体的に満遍なく鍛えられているが戦闘スタイルはシルビアに似て攻勢的な戦闘を得意としている。つまり、電撃戦による突撃強襲戦闘だ。短時間での制圧戦闘は他の部隊にも負けないほどの威力がある。

その戦闘スタイルは高機動兵器イキシアに搭乗しても変わらない。…いや、多彩な兵器を駆使できる分その傾向はますます高められている。

『我々の本領発揮だ！得意分野で遅れなどとったら全員、連帯責任だからな！わかったか！？』

『『『『り、了解…』』』』

『あ〝あ〝んっ！！？？』

『『『『了解しましたっ！！！！！』』』』

『良し♪』

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　第三機甲部隊

――中央最前線（？）にて…。

Ｓｉｄｅ　葵

――暇だ…。暇すぎる…。

いや、突然こんなこと言われても困るのはわかってるんだけど、それでもわかってほしいです。だって先程、俺が中央の敵を一掃したら増援とばかりに奥からワンサカと新たに召喚されたと思われる召喚魔が来て、ついでに両翼の敵が中央に流れ込んできたりと、また忙しくなるハズでした。

そう“ハズ”でした…。それなのに俺はここで暇を持て余してます。…いる場所？移動してませんよ。なんかファレノが「葵ちゃんは今ので疲れてるんだから、ここで休んでいてね♪」と言って中隊引き連れて俺を置いて行ってしまったのよ。

確かにファレノの言うとおり疲れてるよ？でも、それは書類仕事を徹夜でやったからで間違っても魔法を使ったからではない。まだまだ魔力的には余裕です。…眠いけど。

【…ファレノ？…ファレノ？…】

【…なーに、葵ちゃん！？今ちょっと忙しいんだけど！…この！やったなー！？…】

向こうは荒れてるなぁ…。マジで最前線なんだから当たり前なんだけどさ。ていうか、もしかして戦況不利だったりする？たったコレだけの戦力に？…まさか、な。ハハハ…。

【…いや、なんか、ごめん。でも俺も手伝ったほうがいいかな？って思ってさ…】

本当にごめん、戦闘中に念話なんかして…。でも、目の前に通信ウィンドウが開くよりはいいと思うのよ？これでも一応、気を遣ってるんだから。目の前、塞がれて撃墜なんて冗談でも笑えないからね。

【…大丈夫♪大丈夫♪私達にまっかせなさーい！あっ、こら！待てー！…】

本当に忙しそうだな…。念話中にも向こうは武器や魔法を振るってるんだから。…うん、わかってるよ？先程も言ったとおりファレノ達は最前線にいるんだから忙しいよね。んー…？ここは、やっぱり…・

【…ねぇ？やっぱり俺も手伝おうか？…】

【…うぅ、大丈夫だもん。これくらい……】

ファレノの意地っ張りな返事に俺はちょっと苦笑してしまったよ。無理なんかしなくてもいいのにね？情報端末に送られてくる戦況をこっそり見てみるとやや膠着気味のようだ。決定打にかけてるんだね？わかります。

「なぁ？葵。あたしらも行こうぜ？ここで待ってるのって暇なんだよなぁ」

「あー…そうだなぁ。どうしよ？…んー？」

「ま～ま～♪オリビエちゃんったら～。動けないのが辛いなんて～♪堪え性がないんだから～♪…好きモノね～♪♪」

「リ、リリリリビエラは何の話しをしてるんだよ！？あ、あたしは戦いたいだけよ！葵のせいで序盤しか暴れられなかったんだから…その、あの、ごにょごにょ…」

すんません。ちょっと寝不足だったからってキレちゃってマジすみませんした！でも後悔はない！最初は後悔したけどな！ファレノが励ましてくれたから、もう大丈夫だい！ん？オリビエの様子が…？

「オリビエ？」

どったのよ？オリビエったら…。顔、赤いよ？風邪ですかね？いやいや、さっきまでは元気にしてたし、それはないか。

「あらあら～♪オリビエちゃんは何を考えているの～？顔が赤いわよ～？？うふふ～♪」

「＃＃＃っ！！リビエラッー！！てめぇ！そこになおりやがれ！あたしが満足できるまでグリグリしてやる！！」

米神をグリグリするヤツですね？わかります。…アレって痛いんだよねぇ。でも、仮にリビエラが俺のなんかやったら頭が潰れて、

ものすごくスプラッタになるような予感が…。ガクブルガクブル…。

「あらあら～♪満足するまでつき合わせるなんて～♪…オリビエちゃんのえ・っ・ち♪」

「ウガーーーッ！！！」

「きゃ～～～っ♪♪♪」

二人とも元気だねぇ？まぁ仲がイイのはいいことだよね。たとえソレが魔法の撃ち合いに発展していようとも…。そしてそこら中の浮き島にクレーターを作っていたとしても…。な、仲がイイのはいいことだよね！？ハハハ、ハァ…。

「うにゅ…。うる…さい…」

「あ、うるさくしてごめんね？」

…え？シルビアだよ。俺の膝枕で寝てたのよ。今居るここは空中だけどね！それも戦場近くの！飛行魔法って便利だよね…。本当に。

「にゅう…大丈…夫。もう…行く…の？」

「んー？考え中だったよ。でも、行こうかな。また増えてきて大変そうだし」

「そう…。んー！ふぅ…。寝たから…元気…出た…。いつでも…行ける…よ？」

んー。寝起きで伸びをするシルビアが可愛いね！思わず撫でたく

なりました！いや、撫でますよ？ここで撫でずにいつ撫でるというのか！？すまん、取り乱した…。

「そっか、シルビアは偉いねぇ。撫でてあげよう♪ほぉら、な～で♪な～で♪」

「にゃ～♪うにゅぅ♪」

…ナニ？この可愛い生き物？マジでお持ち帰りしたいです。変な事考えるなよ？膝の上に乗せて撫でていたいだけだからな！今のシルビアってネコみたいなのよ。かーいーなー、もー♪

【…ファレノ？聞こえる？ファレノ？…】

【…聞こえてるよ！今度はどうしたの！？あっ、そっちに行ったよ！…】

【…うん、その…やっぱり俺もそっちに行くことにしたから！じゃ！そういうことで！まーたーねー！…】

【…えっ！？ちょ！！葵ちゃん！？どうい……】

念話を切る途中で何か聞こえた気がしたけど…木の精…もとい！気のせいだな！！では、そういうわけでオリビエ達を呼び戻さないと…。

「オリビエーッ！リビエラーッ！もう行くよー！戻ってきてー！」

「ぜー…はぁ…あ、あぁ…ぜー…今…はぁ…戻る…よ！…」

なに…これ？オリビエがものすっごい息切れしてる…。ドカドカと魔法を使ったり剣でクレーター作ったりしてたけど、どんな風にしたらそこまで息切れするのかね？いつも戦闘じゃ息切れなんかしたことないのに…。

「うふふ～♪もう、オリビエちゃんったらムキになるんだから～。仕方がないわね～♪」

オリビエに比べてリビエラは元気だよね？逃げていたのはリビエラだからオリビエを振り回していたリビエラ恐るべしって感じだ。ここまでオリビエを疲れさせるなんて早々できるものじゃないよ。…てか何で？

「二人ともお疲れさん。…ところで何でオリビエは息が切れているのにリビエラはそんなに元気なの？」

「うふふ～♪それは～♪…ヒ・ミ・ツよ～♪」

「は、話したく、ない…。はぁ…」

リビエラさん、すっごい気になるんだけど…。まぁ今はそれどころじゃないからいいか。オリビエも話したくないって言っているし。それじゃまぁ行きますか。陽月を両手に握り、ラミエルを起動して準備良し！うし！

「それじゃ皆、行こうか？」

「おう！」「は～い♪」「うん…」

転移魔法で駆けつけるなんて無茶なことしませんよ？飛行魔法で

最高速度出して文字どおり飛んで行きます。だいたい乱戦気味の戦場に転移なんてしたら大変だから。なぜかと言うと転移直後に目の前に敵が迫っていましたなんて冗談にもならないからね。

虚空瞬動とか長距離を一瞬で移動できる術はあるんだけどさ。なんていうの？様式美じゃないけどさ。外から見た感じ的に飛んでいったほうが良くね？…ウソですごめんまさい。飛んでいったほうがカッコいいと思いました！

そんなことはどうでもいいか…。今はファレノ達が戦っている中央の最前線に行かないと。…でもまぁ、そんなことを考えるまでもなく割りと近い位置で戦闘してるんだけどな。この距離なら転移イランわ…。飛行魔法で十分よ。

おっと？ファレノを目視にて発見！

「ハーイ！ファレノ♪暇だからお兄さん達も来ちゃったよ♪」

「っ！？葵ちゃん、ホントに来ちゃったの！？」

「…ファレノ。その反応は流石の俺でも傷付くよ…。ファレノは…俺のことキライなの？」

イヤ、マジで傷付くって主に俺のガラスのハートに…。ファレノの言い方だと俺がここに来ちゃいけないみたいに聞こえるよ。思わず俺のことをキライか？と聞いたのは間違いではないと思いたい。

「そんなことない！もちろん大好きなの！でも…葵ちゃん寝不足で疲れてるみたいだったから休んでてもらいたかったの！」

おぅ？？まさかの好感触…。思わず勘違いしてしまいそうです。
それよりもファレノは寝不足で疲れていた俺の身体を気遣ってくれていたとは…。この子は…。

「ファレノ…。俺のことを気遣ってくれるとは、なんていい子なんだ！頭を撫でてあげよう！ほ～ら、な～で♪な～で♪」

「んん…にゃ…ん。…ハ！？今はそれどころじゃないの！敵のまえ…な…の？」

ん？どったの？敵？敵なら、ほら…。

「敵ならあっちでオリビエ達が嬉々として倒して回ってるよ？」

「ハーッハッハッハッ！数だけでお前ら、なってないね！？それであたしを倒そうなんて千年早いんだよ！おととといきな！！ハーッハッハッハッ！！！」

「ウフフ～♪私の霧は触れるモノ全てを灰燼に帰しますわよ～♪精々お逃げなさいな～♪ウフフフ～♪逃げられれば、ね～？？フフ、フフフ～♪」

「邪魔…！ジャマ…！じゃま…！ジャマ…！邪魔…！じゃま…！ジャマ…！邪魔…！じゃま…！邪魔…！！ジャマ…！！！
…鬱陶…しいっ！！！！」

「うわー…」

その気持ち、わかります。ファレノが感じた気持ちは俺も感じたことがあるから…。圧倒的だよねー？俺達っていらないんじゃない？って感じです。コレを見ると自信とか、そういうのが一度崩れ去るのよ…。

俺は慣れたけどな！！

彼女達と仮に戦ったとして負けることはないとわかってはいるけど…。自力の魔力も強いけど、それだけじゃなくて、なんていうか戦い方が上手いのよ。

模擬戦した時の話しなんだけど、相手の恐怖をかきたてるような戦い方をしてくるから、もう怖いのなんの。流石は悪魔なだけあります。あ、思い出しちゃった…。ガクブルガクブル…。

「ファレノ？ほら、俺達も行くよ」

「え？…あっ！はい！了解なの！！」

ファレノってオリビエ達の戦い方をマトモに見たのってコレが初めてだっけかな？あー…初めてかも。マジな戦いはファレノ達が新生してここ二百年ほどは小競り合い程度しかなかったし。

それでも実戦バリの模擬戦していたから組織としての体制は強い

けど実戦で大きな戦いは今回が初めてなのか…。若いなぁ…新生して二百年…いや、百八十年だったか？百八十年だな。若い！いいねぇ～。おっと、それどころじゃないな。

―…精神魔導回路（アストラル・ライン）、起動（アクション）。
―…並列詠唱（パラレル・キャスター）、開始（スタート）。
―…高速詠唱（クイック・キャスター）、開始（スタート）。

―…術式［紅き焔・連弾］を展開。

―…術式展開（スペル・メモリー）、完了（コンプリート）。
―…選択、速射型を形成（セレクションラピットファイア）。

―…集束。…集束。…集束。

―…全工程（オール・コンプリート）、完了。
―…術式（スペル・フリーズ）・待機。

「準備完了っと。それじゃまぁ…行こうか！」

脳内に術式のイメージが走る感覚って癖になるのよね。ゾクゾクとするというかワクワクするというか精神的に高揚してくる。こう…これから戦うぞ！って感じるのよ。楽しくなってくるね！

それでは逝ってみよう！

「味方の皆さん避けてね！！！」

「「「「「「え゛っ！！！？？？」」」」」」「「「「「総員退避ぃぃ！！！！！！」」」」」

中央戦線の味方全部隊が驚愕した!!ファレノ達は即退避したけど…。

―…術式(スペル)・解凍(アウト)。

―…速射魔法［フランベルジュ］、発動(エグザート)!

「逝けやぁぁああ!!コラァァアア!!!!」

ドドンッ!ドドンッ!!ドドドドンッ!「やっ!?ちょっと!」ドドンッ!!ドドドンッ!!ドンッ!ドドドンッ!「うわっ!なに!?」ドンッ!ドドドンッ!ドドドンッ!ドドンッ!!ドンッ!ドドドンッ!ドドドンッ!ドドドンッ!ドドドンッ!!ドドドドンッ!「ちょ!?なんか来た!!」

発動したている時にナニやら巻き込まれた人達も見えた気がするけど…。見なかった方向で話しは進もう!俺は見てない!家族は警告に従って退避して巻き込まれてないからどうでもいい!うんっ!!

ん!?両翼の敵陣後方に乱れ有り!第三機甲部隊が任務を果たしたか…。ここで一気に攻勢に出たらしい帝国・アリアドネー両軍。中央の連合は…

「何だ今のは!?」「敵の攻撃か!?」「…っ!」「わからん!」「しかし、敵陣は乱れているぞ!!」「…っ!?」「今が好機か!?」「攻めるは今!!」「…!!!」「おおぉぉぉ!!!」

混乱に陥っていた…。

コレってもしかしなくても俺のせいですか、ね？やってらんねーわー…。ちゃんと避けるように逝ったのに…違った、言ったのに避けないなんて。うちの連中は余裕で避けてるのに連合は鍛え方が足らんね！まったく！

連合の人達！ゴメン！！調子に乗りました！！！でも後悔はない！楽しかったから！！

――ドゴゴゴゴッ…！ゴゴ、ゴゴゴゴッゴゴゴゴッ…！！！

ん？ナニ？この音は…。お？アレか？ここから見える限りでは「墓守人の宮殿」がひび割れて…崩れそうになってる？…ナギのヤツがやっと勝ったのか。そうなるとそろそろ総仕上げだな…。

「連合の勇者諸君！！静まれ！！我らが英雄たるナギ・スプリングフィールドが敵の首領を討ち取った！！敵陣は乱れている！！今こそ攻勢に出る時だ！！行け！！力の限り戦うのだ！！」

――…おお、おおおぉぉぉぉぉ！！！！！！！

なんか、こんなことするのが慣れてきた自分がいるな…。ハズいわ！！もう二度とやりたくない！でも俺の立場上またやりそうだけ

ど…ｏｒｚ

んじゃま、俺も行きますか…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第十五話「魔法と機械と乱戦と」（後書き）

どうッスかね？読みやすいですかね？
一応パソコンで読むことを前提に書いてるからケータイは読みにくいかも…。
両方に読みやすい書き方知ってたら教えてほしいです。

それはともかくとして…。
新キャラがここにきて出てきちゃった…。
もはや俺のキャパシティがオーバーフローしそうです。

誰だコレ書いてるの！？

俺だ！！でも！俺の手が勝手に書いてるんです！！
俺のせいじゃない（おい！）。

ーーしばらくお待ちください

お見苦しいところをお見せしました。
今後とも「葵と精霊と九十九神と悪魔と…」を頑張って書いていきます。

「なのは」は読みやすいように書き直すかも（ナニ！？）。

ではでは～！また次回！

第十六話「事後処理と救援と戦闘後と」（前書き）

感想&アドバイスをくださった方ありがとう！
作者は皆さんの応援によって支えられて頑張ってます！
では、続きをどうぞ！

第十六話「事後処理と救援と戦闘後と」

――空中王宮最奥部［墓守人の宮殿］…。

Ｓｉｄｅ　？？？

…ザザザ…ザッザッ…ザザザッ…ザザッ…ザーザー…。

「やぁ、［千の呪文の男］…また会ったね。これで何度目だい？…僕達も、この半年で君達に随分、数を減らされてしまったよ」

言葉とは裏腹にその表情に変化はない。まるで全てがどうでもいいとでも思っているかのようだ。彼の周りにいる者達はそれぞれが決めていた敵となるナギ達を睨みつけている。

「先程も錬金術師（アルケミスト・ワン）に僕達の真上に大きな花火を貰ったところだよ…。本当に非常識だね、彼は…。イヤになる」

「へっ！アオイのヤツも粋なことをしやがるじゃねぇか！！はっはーっ！」

「…いい加減、この辺りでケリにしよう」

彼の言葉を切っ掛けに一斉に散開して一対一の構図になる。

――はげいしいせんとうびょうしゃ♪（手抜きじゃないぞ！？）

そしてついに決着がついた。

「見事…。理不尽なまでの強さだ…」

「ハァ…ハァ…黄昏の姫御子は…どこだ？消える前に吐け」

「フ…フフフ…。まさか、君は…いまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん…だと？」

敵の言葉を聞きナギは一瞬の間、思考が僅かに停止してしまった。
そして、それがいけなかった…。

――ドギュウウゥーーンッ！！

突如として敵諸共ナギは第三者により身体を貫通するほどの魔法攻撃の一撃を浴びることになったのだ。

「っ！？」「ナ！？」

突然のことで驚く詠春とアル。

「ナギィ!?」「誰だ!?」

アルはナギを心配して普段になく大声で呼びかけ、ジャックは隠された僅かな気配に反応して咄嗟に身構える。しかし、次には強烈なプレッシャーを放つ存在が、その姿を現すことで意識を切り替えることになる。

「!?」「いかんっ!」

ジャックは最大限の警戒を現れた魔法使いにしていた。そして今まで傍観していたゼクトは何かを感じ取り、すぐさま障壁魔法では最強の防御障壁を最大展開していた。他の面々も防御に入った。

――ドッォォォオオオオンンンッ!!!!!!!

「ぬぅっ!!」

ジャックも両手を突き出して己が最強と誇る気合防御に全力を注いだ。しかし…。

――バァンッ!!ビチャッ…ビチャッ…。

「ぐっ…!バカな…」

防御のために突き出していたジャックの両腕は敵の魔法攻撃に耐え切ることが出来なかった…。彼の両腕は無残にも肘から先が吹き飛び夥しい量の血液が傷口から噴出している。

「まさか…アレは…」「…っ!!」

アルとジャックは敵の姿を目視にて確認した…。アルは“何か”を感じ取り、ジャックにいたっては、理解はできなくとも本能的に相手の性質を肌で感じ取ったようだ。両腕をなくして恐怖に震えている。

他の仲間達も無傷の者達は皆無だ。先までそれ相応の実力者達との死闘を辛うじて勝利し満身創痍だったのだ。そこに現れた敵の真なる首領…造物主（ライフメーカー）の登場。その敵から放たれた魔法攻撃は傷だらけのナギ達には荷が重すぎるほどに強力だったのだ。

「へっ…カハッ…」

ナギは先の一撃は辛うじて致命傷には至っていなかったようだ。相手を睨みつけこの状況で不敵に笑っている。しかし、致命傷ではないとはいえ重症なのは変わりない。今も呼吸は苦しそうに喘いでいる。出欠もジャックほどではないにしても大分出ている。

「ぐっ…。待てコラ！てめぇ！！！」

ジャックはおのれを覆い尽くさんとしていた恐怖を、声を張り上げ敵に向かって叫ぶことで振り払おうとしていた。しかし、いくら強がろうとも恐怖は振り払えない。まだ、身体は小刻みに震えていた。

「任せな、ジャック…ハァ…ハァ…」

そんな時だ。ナギがジャックに声をかけたのは。自分だって身体を貫かれて満身創痍の癖に誰よりも強がっている。だが、その目の色はジャックと違って恐怖ではなく、戦う意志によって彩られてい

た。

「い、いけません、ナギ！その身体では…」

アルは、そんなナギの無茶を察して止めようとする。

「アル…お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ…クッ」

「し、しかし！そんな無茶な治療ではっ…」

アルはナギの言ったことに困惑している。たしかにそれならば傷の治療は一瞬で可能だろう。しかし、それは身体への負担が大きいのだ。そんな無茶な治療をしても長くは戦えないとアルの冷静な部分は考える。

「３０分もてば十分だ…ハァ…ハァ…」

「ですがっ！…」

ナギは時間を指定した。

――３０分…。

たしかに無理をすればそれぐらいなら可能だ。…タイムリミットを過ぎた後を気にしなければ、だが。

「ふふ…よかろう。儂も行くぞ、ナギ…。皆の中では儂が一番、傷も浅い…」

「ハァ…ハァ…お師匠…」

「ゼクト！たった二人では、無理です！」

そう、いくらゼクトほどの者が助太刀しようとも絶望的な戦力差は変わらない。あのバケモノには、それでも足りないとアルは考えている。いや、どのような手段を用いようとも誰にもアレには決して勝てないと予想している。

故に必死になってナギを止めようとしているのだ。彼のことを普段から観察対象としていたアルは、こういう場面で決してナギは止まらないことを知ってはいても止めるために…。

「ここで奴を止められなければ、世界が無に帰すのじゃ。無理でも行くしかなかろう…ふぅ」

「ナギ！待て！奴はマズイ！奴は別物だ！死ぬぞっ！？この場は態勢を立て直してだな…」

ゼクトは無茶でも、ここで行かねば後はないと言い。恐怖で冷や汗の止まらないジャックはナギに逃げるようにまくし立て始めた。

「バーカ。んな事してたら間に合わねぇよ。らしくねぇな、ジャック。俺は無敵の千の呪文（サウザンドマスター）の男だぜ？俺は勝つ！！任せとけ！！！」

「ナギィ！？」

走り去るナギ。…ナギは最後までナギだった。バカバカしいまでに真っ直ぐなバカな男の顔をしていた。だが、それは一つの希望も感じさせてくれるものだった。小さく、瞬きの間に消えてしまいそうなほどだが、たしかな輝きを示しているように感じたのだった。

…ザザッ…ザザッ…ザー…。

「…クッ！アレは…マズイもんだった。一目見てわかった…。全身の細胞が叫んでたぜ。アレはヤバイ全力で逃げろ！ってな…」

残されたジャック達は応急ではあるが怪我の治療をしていた。アルの魔力はナギに根こそぎ渡してしまったので“治癒（クーラ）”すら、使えないような状況だったので包帯を巻いたり魔法薬での痛み止めが精々であったが。

「流石、最強の剣闘士ラカン。アレのマズさを肌で感じ取りましたか…」

アルはジャックの言うことを暗に肯定を以って返す。意味深なアルの言葉にジャックが聞き返そうとしたその時、今まで気絶していた詠春が意識を取り戻した。

「ぐっ…。ナ、ナギ…た、助けに行かねば…！」

「動いてはいけません、詠春！死んでいても、おかしくはない傷なのですよ」

「だが、あいつらだけでは、あの化け物には…！」

詠春の行動に待ったをかけるアル。それほどまでに詠春の身体はボロボロなのだ。実際、ジャックを除けばだが、一番傷が深いのは詠春だ。出血、骨折は言うに及ばず下手をすると内蔵にまで及んで

いるかもしれないのだ。

「オイッ、どういう事だ、アル？」

ジャックは中断していた問いをアルにぶつけた。アルは顔に渋面を作っている。よほど不味い状況なのか…とジャックは肌で感じ取った。…基本的にバカなので頭ではなく身体で考えているのだ。

「私の推測が正しければ…。アレを…あの化け物を倒す事は、この世界の誰にも不可能です」

「じゃあ、オメェ…。ナギの野郎も…っ！」

アルの回答を聞いたジャックは絶望と不安が表情を覆った。…が、その時、大きな揺れが起きた。

――ドゴゴゴゴッ…！ゴゴ、ゴゴゴゴッゴゴゴゴッ…！！！

…ザザッ…ザザザザッ…ザザッザザー…。

――陽動部隊の展開している戦場…。

「何だ？」

左翼陣営で奮戦していたセラスは揺れによる大きな音を聞き取りナギ達が向かって行った方向を睨むようにして見ていた。

…ザザッ…ザザッ…ザー…。

――空中王宮最奥部［墓守人の宮殿］内部…。

その揺れの正体は…。

「ぅううおおおおぉぉぁぁあああああああっ！！！！！！」

ナギと造物主との戦闘による余波であった。

「…ククク…。フフ…フフ、はは…！…ははははははは！！！私を倒すか！？人間！！それもよかろうっ！私を倒し、英雄となれ！羊達の慰めともなろう…」

「ちぃぃぃ！！しぶてぇ奴だぜっ！」

「だがっ、努々（ゆめゆめ）忘れるな…！全てを満たす解はない。いずれ彼等にも絶望の帳が下りる…。貴様も…例外ではない…！」

「ケッ！グ・ダ・グ・ダ！！…うぅるせぇえええっ！！！たとえ！明日！世界が滅ぶと知ろうとも！諦めねぇのが人間ってモンだろうがっ！！」

「くっくく…。貴様も、いずれ私の語る“永遠”こそが“全て”の“魂”を救い得る…唯一の次善解だと…知るだろう」

「人っ！間っ！をぉぉお！なめんじゃ！ねぇぇえええっ！！！！」

最後の力を振り絞るように込められた魔力が敵の魔法障壁と貫き、ついに打倒した。

…ザザッ…ザザッザザッ…ザザザッザー…ザザー…。

しかし…。

「武の英雄に未来を造ることはできぬ。貴様には結局、何も変えられまいよ…。だが…果たして…、自らに問うがよい。ヒトとは身を捨ててまで救うに足るものか？……人間は度し難い。英雄よ…貴様も我が２６００年の絶望を知れ…。さらば、だ…」

ゼクトの姿で語られる言葉がナギに突き刺さる…。

「ぬっ…。グハッ…ハァ…ハァ…グ…。…ぉ…お師匠…。…師匠っ…。…師匠ぉぉおおおおおおっ！！」

ナギの慟哭するかのような悲鳴が戦闘直後の空間に響き渡った…。

…ザザッ…ザザザザッ…ザー…ザザザー…。

――空中王宮最奥部［墓守人の宮殿］外部…。

この場から見える限りだがナギが造物主を倒したのを確認できたジャックとアル…。

「…って…。オイオイオイオイ…。倒しちまったぜ…？？」

「…の、ようですね」

先程のシリアスなやり取りを返せと言いたくなるような呆れを感じるひと時だ。

「…フッ。かなわねぇな、てめぇにゃよ」

ジャックはアレに勝ってしまったナギに聞こえないとわかっていても、そう零さずにはいられなかった。そしてアルにナギから念話が届いた。

【…ル…ッ！聞こえ…か…アルッ！】

「やぁ、ナギ。全く…驚かされますよ、貴方には。貴方は、いつも私の予測を…」

アルはナギを労おうとするがナギの様子がおかしい。酷く慌てているように感じる。

【姫子ちゃんが…いや、それよりっ、儀式だ！！親玉は倒したがヤロウ…。既に儀式を完成させちまってたみたいだ…。マズイぞっ！】

「何ですって！？儀式を！？では…このままではっ！…っ！？」

――世界が終わる！！

アルはナギの言った言葉を理解したのか、その表情に先までと違い絶望の色が見える。

「オイオイ！何だよ、この光球は！？ドンドンでかくなってるぞ！！」

ジャックは理解はしていないが巨大化する光球を前にして不味い事態であることは感じているのだろう。大いに慌ててアルに聞いてくる。そして聞かれたアルは…。

「世界の始まりと終わりの魔法…！この力場が全地上を覆った時、世界は無に帰します…。いくら我々が最強を誇ろうとナギが自らを無敵と嘯こうと、こうなってしまっては我々に出来る事は何も…っ」

大きな絶望を前に半ば放心するようにして現状の説明を口にする。そしてアル自身が諦めの言葉を口にする前に、それを止める者の声が念話となって響き渡った。

【諦めるな！アルビレオ・イマ！！この愚か者が！！】

――アリカ王女殿下だ…。

…ザザザザッ…ザザッ…ザザー…。

「アレは…メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦！？」

【こちらスヴァンフヴィード艦長のリカード！助太刀するぜ！世界のピンチだ、敵も味方も関係ねぇぜっ！！】

【そのとおりじゃ！】

――テオドラ姫…。

「おぉ、アレは…。帝国軍北方艦隊！」

アルの顔に希望の色が戻ってきた。

「ハハ…。おてんば姫ちゃんかい」

ジャックも表情が引きつっているが笑っている。

【ハハハハハッ！！皆の者！力を合わせて、あの光球を止めるのじゃ！！】

【ハハッ、姫様！】

この時のテオドラ姫とタカミチの声が印象的だった…。

…ザ…ザザザッ…ザザッ…ザザー…。

――メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦［スヴァンフヴィード］艦橋…。

「こ、広域魔力減衰現象を確認！これまでに観測されたものの比ではありません！世界を呑み込む勢いです！」

「間に合わなかったのか…」

オペレーターの報告を耳にしたガトウの表情は暗い…。

「彼等に限って、そんなハズは…。…っ!?」

タカミチと同じ少年探偵団のクルトは、そんなことはないと言いたいが現実に見ると儀式は発動しようとしているのは見間違いようがない。そして、クルトは“ある事”に思い立った…。そっと気付かれないように振り返るクルト。

「……」

振り返った先には静かにその場に立ち事態を見ているリカード艦長…。

（…陛下っ…これは罠ではないのですか!?…おそらくメガロメセンブリア元老院直轄の…）

小声でアリカに今回の事態を警告する。しかし、アリカは…。

「よい、クルト…」

（しかしっ!アリカ様…!）

静かにこの状況を受け止め、ここでは多くを語ることはなかった。ただ一言、「よい」とだけを言うに留めた…。…そして、ついに命令を下す。

「全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め!!魔導兵団、大規模反転封印術式展開!!全魔法世界の興廃、この一戦にあり!各員全力を尽

くせ！後はないぞ！！」

「「「「「ハッ！」」」」」

「よろしいのですね…？女王陛下」

ガトウは小さくアリカに確認を取る。いや、それしかできないのだ…。

――ギシッ…ギギギッ…！

「…よろしいハズがっ…ないっ…！」

同じように小さく答えたアリカ。しかし、ガトウのそれとは違い苦渋に満ちていた。

…ザザッ…ザ…ザザザッ…ザー…。

――空中王宮最奥部［墓守人の宮殿］近く…。

光球から、なんとか自力で脱出して離れた位置にいたナギは…。

「へへっ…。流石は…姫さん。…結局、助けられちまった…な」

そう静かに言葉を零した…。意識が遠のく…。無茶をし過ぎたようだ…。そのままナギは眠るようにして気絶した。

戦いは終わったのだ…。

…ザザッ…ザザッ…ザー…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

――機動戦艦アングレカム艦内葵の執務室…。

薄暗い部屋に流れていた映像が終わり、明かりが灯った。

Ｓｉｄｅ　葵

「…以上が空中王宮最奥部［墓守人の宮殿］内での戦闘記録です。現場では両者から放たれる魔力の乱流が起きたことで偵察機の大半が墜落しスクラップになり記録に破損がありました。ですが、できうる限りで記録を復元したのがコレになります」

「そう…。アイリ、お疲れ様。報告はコレで終わりかな？」

いやー、ナギも十分にバケモノだね。結構！結構！そうやって順調に人外にハミダシテイクンダヨネ！アイツが言うとおりナギは人々が望む英雄の理想像をなぞっているねぇ。なんだかなぁ…。

いつかその理想の重みに潰されなければいいけど…。

それにしても所々のデータが破損していたけどゼクトさん辺りの映像データが破損していたのが一番、痛いな…。画面が砂嵐で肝心

のところが映ってないよｏｒｚ

俺も原作知識の記憶がやや欠損しているから今のうちに取れる情報はできるだけ確保しておきたかったのに、それができないとは…。マジでしくじった…。イキシアに気をやり過ぎていたのかもな。初めてのロボットに興奮して周りが見えてなかったか…。ハァ…。

「いえ…もう一つ報告があります。例のオスティアの王女殿下のことで報告なのですが…」

「ん？どったの？」

「ハ…。どうやら自らの父王に対して半ばクーデターのようなカタチで事を起こしたようなのです。これが起きたのは今から三日前のことで…。迂闊でした…、情報を見逃すなど。書類仕事に気をとられて見逃してしまい…、申し訳ありません」

いや、書類仕事は俺の手伝いだから咎める気はないけど…。あの王女殿下…今は女王陛下か、彼女がクーデターを、ねぇ…。

「発見が遅れたことを咎める気はないからいいとして。クーデターを起こした理由は？ただの親子喧嘩のわけがないでしょ？」

「はい、父王が“完全なる世界”の傀儡であることが調べで判明したとのことでした」

「傀儡、ねぇ…。伝統と歴史あるオスティアの王が…。いや、だから、か…。相当、根深く入り込まれてるかもな」

「はい…。私達は帝国領内の炙り出しで手一杯でしたので各国まで

は…」

「ああ、いいの、いいの。気にしないで。皆、よくやってくれてるから。お陰で俺は帝国内で安心して過ごせるしね。感謝してる。ありがとね、アイリ」

「い、いえ。私達は当然のことをしているまでです！お気に止めるようなことは…」

「それでも感謝の気持ちはちゃんと言葉にしないと伝わらないよ。だから、ありがとうね、アイリ」

「…はい、葵君」

あ、報告任務中なのに珍しく素のアイリに戻ってる…。かーいーなー♪いっつもこんなんだったたら…。いや、勘違いするなよ？普段のアイリも、もちろん好きよ？当然さね。

「報告は以上だね？アイリはこのまま完全休息に入っていいから」

「ありがとうございます。以降はファレノプシス指揮官が引き継ぎますので何かありましたら彼女に連絡してくださいますように」

「うん。じゃ、この後はゆっくり休んでねー？」

「はい、それでは失礼します。…あー…司令閣下？もう一つあるのですが」

「んー、なに？」

「いえ、不確かな情報なのですが先の戦闘の帰還途中にてアングレカムの観測計器がオスティア周辺の魔力が減衰していると出ていました。このまま減少が続けば危険域に到達する恐れが考えられます」

「…本当に観測されていたの？」

「はい。精密な観測はしていないので誤認かもしれませんが。もし、観測どおりならば今頃、オスティアは…」

ふぅ…。まいったねぇ…。それが本当なら魔法の力で浮遊しているオスティアは墜ちる、かな…。テオは終戦記念の式典とかあるから残ってはいたけど、その式典は終わって今は帝国に帰還中。そっちの心配はない…。でもなぁ…。

「アイリ、オスティアに無人機動兵器って派遣してたっけ？」

「いえ、情報収集用に一無人偵察機ステルス仕様を１２機、常時交替で展開させていますが無人機動兵器となると流石に…」

「だよねー？因みに聞くけど…。今から救援用に無人機動兵器を派遣するとしたら間に合いそう？」

「それは…距離・時間的にも厳しいかと思います。近場を警戒に出ている無人機動兵器を向かわせるとしても数的には足りず“焼け石に水”です」

「あーもー…。どうしたらいいかな？この場合…あっ、転移ポート使えばいいじゃん！」

「帝国のですか？しかし、それは…」

「いやいや！そうじゃなくって自前のがあるでしょ？」

「自前？…まさか。アングレカムの外部転移ポートを使用する気ですか？」

「Ｔｈａｔ’ｓ　ｒｉｇｈｔ！」

転移すればいいじゃない！俺一人行っても意味ないし！これなら大部隊を送り込めるよね！

「ですが、アレは外部へ比較的短距離しか転移できません。出現距離も最大で１．０００ｋｍもあればいいほうです。元が外へ大質量の物を転移させることだけを目的に開発されたものですから」

「むー、それでも移動時間の短縮はできるよ？」

「それでも、です。救援を送るにしても今からでは到底、間に合いません」

そうなんだよねぇ。ここからだとオスティアまでの距離は外部転移ポートで転移できる最大距離の数倍になるもんね。時間と距離の短縮にしかならんよ。それでも間に合わないけど…。

「ハァ…やっぱり、そうかぁ。それじゃせめてオスティア市民の救援のために帝国に根回しして、いつでも動けるように関係各部署に働きかけるかな」

「はい、私も今からでは、それが妥当と判断します」

「ごめん、アイリ。休みはまた後にしてくれる？この件はアイリに一任したいんだ」

「ハッ！お任せください！それでは早速、任務に取り掛かります。先程も述べましたが何かあればファレノプシス指揮官のほうへお願いします」

「うん、ごめんね」

「ふふ、構いませんよ。では…」

アイリには負担かけてるなぁ…。今度、皆で温泉へ慰安旅行にでも行くか。人数が多いからいくつかの組に分けてだけど…。それでも普段からの労いは大事だよね。

さて、とりあえずこの件はアイリに一任したから安心だね。俺は俺の仕事をするか…。

それにしても決戦後そのまま帝国領に戻ってきて知り合いの将校に借りてきた兵の返還と口頭での作戦報告と記録用の書類作成をするために記録映像を見てみたけど…。書類には記せないものがいくつかあるな…。

誤魔化すか…。書けないってのもあるけど知らないほうがいいこともあるさ。それに俺がここで報告書を提出しなくても全てとは言わなくても知っているかもしれないし。いや、知ってる…のか？はぁ、ダメだ…わからんわ。

てか、よく考えんでも俺にはどうでもいいことではないかな…。つまらんことを考えて損したわｏｒｚ

適当に報告書に書いて提出するか。オスティアのことはアイリに任せてあるから後で考えよ。それに俺が戦闘後、時間をおかないでここ帝国まで戻ってきたのには別に理由があるんだ…。それは…。

「さて！書類仕事を押し付ける準備をしないとな！くく、くくっくっくっ…」

そう、こんなに早く戻ってきたのは決戦に遅れて参戦してきた帝国の奴らにこれでもか！と、もうやめて！と言うほどの量の書類を回してやるためだ！書類は俺でなくてもできる仕事に限るがな。

それでも3分の2近くになる11のエベレスト級書類爆弾を落とせる！フフフフ…。やってやるよ…。ある意味で俺の本当の戦いはここだ。この恨みはらさでおくべきか…ってな！

――怖いほどに暗い執念を燃やして作業中…！！

――二時間後…。

フフ、フフフ…！やった…。ついにやり遂げたぞ…！これで明日からあいつらはしばらく徹夜で書類整理にかかりきりになる！あぁ

…これでグッスリ…寝ら…れる…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

葵の意識はそこで途切れた。机に突っ伏しながら眠る葵の表情は大きな仕事をやり遂げたかのように晴れやかな寝顔だった。

この後すぐにファレノが執務室を訪れて机で寝ている葵を見つけた。ファレノは苦笑を一つしたあと帝国城内に間借りしている葵の部屋へと運んだ。葵は決戦直前の願いどおり、ふかふかのベッドで眠ることになる。

後日、決戦に遅れて参加してきた帝国の者達が地獄へ叩き落されたような悲鳴が聞こえることになったかは別の話しったら別の話し…。

――［工房］に隣接された［ドッグ］内…。

Ｓｉｄｅ　マリエール

私の前に白と青にカラーリングされたイキシアが立ち並んでいる。機体整備には整備班の皆が駆け回り作業に従事している。自動人形（オート・マータ）や整備ロボット（スパイダー）もイキシアを分解整備して問題点がないか検査している。

うむ、皆、無事に帰ってきたな。機体には大小と傷があるが、こ

れくらいなら問題ない。整備内容の許容範囲内だ。

「皆が無事に帰還できたことは喜ばしいことですな、ウーリ」

「うー?…うん。あるじがー、設計して、それを皆で形にしたから当然だよー」

「うむ?むむ…。そう…なのだろうか?」

それで絶対の自信を持つのはいかがなものと考えるのだが…。うぅむ…。

「なんで悩むのー?自分達で造ったモノなのにー…。マリーは自信なかったのー?」

「そういうわけではありませぬ。ただ…」

自信はある。火の精霊である私だが今の主の下では錬鉄などの鍛冶に携わり、それなりのものを作れる腕は持っていると自信を持って言える。だが、今回のコレは…。

「ただー…なにー?」

「うむ。初の実戦に実験配備で即投入したので戦闘中に不具合が見つかるのではと考えていたのです」

実験配備…。実戦証明のない試験機だ。戦闘中に何が起こるか、わかったものではない。現実には絶対というモノはないのです。必ず、どこかで不具合が起こるものですから…。

「不具合ー？機体動作テストでー、取り除けるところは全部、取ったのにー？」

「それでも、なのですよ。実際に実戦投入して初めて見つかる不具合もあるのです」

「んー？…あいー、言われてみればそうだねー。でもー、今回の機体に問題はなかったよねー？」

「今回は初の実験配備が実戦でしたから特に念入りにチェックして修正しましたからな。当然です」

まぁ絶対というモノがなくても限りなくソレに近づけるため努力するというのは怠っていいわけではないですな。

そのために連日、機体動作チェックしてハード面は私と主が、ソフト面はウーリ、アンが修正したのですから。それはもう念入りに。努力の賜物ですな…。

「うなー…。アレは大変だったよねー？開発時間が短かったから機体テストの予定もギチギチにスケジュール固めてさー」

「そうでしたな。あの時は、まるで時間に追われるようで大変でした…。ふふふ、だが、ウーリよ。主と共に作業した時間はとても充実していなかったか？」

大変ではあったが、その分、充実した日々だった、ふふふ。

「うにゅー。その質問はズルイよー？…でも、うん、楽しかったねー。あるじはイキシアを造ってる時とっても嬉しそうな顔してたも

んねー」

「うむ！本当にそうだったな。ふふ、まるで玩具を手にした子供のように顔を輝かせていた。…アレは…良いな、うむ」

うむ、良いな…。普段の優しい雰囲気の主も良いが、アレはアレで…ふふ、良いな。うむ。

「マリー？なにがいいのー？」

「はっ！？…なんでもない！なんでもないぞ！？アハ、アハハハァ…。気にすることはない！」

「にゅー？？変なマリー」

「と、とにかく！今は今回、収集されたデータを分析、解析してまとめておくのです！お疲れの主のためにも！」

失態だ…。イキシアを前にした時の主を思い出していたら、つい深みにハマってしまった…。ウーリには気付かれてないようだが…。

「んー…？なにか誤魔化された気がするのー。気のせいかなー？」

気付かれたっ！？“あの”ウーリに！？いつも、こういうことを気にしない“あの”ウーリに！？いや！それよりも、まずはっ！

「ウーリッ！」

――ガシッ！！ギギ、ギギギギ…。

「あいー…、わかったのー。だから、アイアンクローはやーめーてー…」

「よろしい…。では作業開始しますよ？少ししたらアンも手伝いに来てくれますから」

「…あいー」

ふぅ…。なんとか誤魔化せたか…。ウーリには痛い思いをさせたかもしれないが、ここは諦めてもらおう。私の心の平穏のために…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　マリエール

Ｓｉｄｅ　ウリエール

うなー…。マリーのアイアンクローは痛かったー…。ウーリ、悪いことしてないのに、なんでだろー？

「皆、お疲れー！手伝いに来たよ！」

「あ、アンだー。そっちもお疲れ様ー」

アンが来たー。働き者だよねー。もう仕事は一線級で活躍できるよー。それに可愛いしー。私も家族が増えて嬉しいなー。

「おぉ、アン、よく来た。早速で悪いがウーリを手伝ってくれぬか

？」

「ウーリの？あ、プログラム関係ね？はーい、わかったよ」

「アンー、こっちのこのＯＳと重力制御システムのここ、お願いしていーい？」

アンに、この二つをお願いしたのは構造が複雑なのもあるけどー、厳重なプロテクトもかけられててアンじゃないと時間がかかるのー。機密保護ってヤツだねー。

「むむむ？これはまた…。手のかかるところだ…ね？」

「ごめんねー？でもー、そこまで手が回らなくてー…」

「あぁ、いいの、いいの！この部分は私が作った部分だもん。だから、私のほうが皆より早くできるよ、うん！」

本当にごめんねー？でもー、試作とはいえ最新鋭の兵器には変わりないから製作した本人にしてもらったほうが面倒な手順を踏まなくていいのー。

先にも考えてたけどプロテクトは堅く厳重にしてるからアンの処理能力を活用しないと手間がかかるしねー。

「うん、ありがとねー。それじゃー、がんばろうかー？」

「はーい！ファイトー！おー！」

「おー…」

アンは元気だねー。この元気はどこから出てくるのかなー？こういうのもキライじゃないけどねー。それじゃー、お仕事ー、お仕事ーっと。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ウリエール

アンは直接、コードを身体のコネクタに挿して作業をしていた。数々の空間ウィンドウが開いては消えてを凄まじい速さで繰り返されている。

「むー？ここは…こうで…あれ？むむむ？…あぁ、ここが。じゃあ…こうすれば…やった♪よし、次っと…」

ウーリもアンには及ばないまでも端末を軽快に叩きながら作業を進めていく。

「…うなー？…こう…かなー？…おぅ？…あー、こうかー…あい、次ー…。…んん？あーい…」

作業は順調。ソフト面の分析、解析して修正プランをたてていく。

……。

……。

…。

第十六話「事後処理と救援と戦闘後と」（後書き）

はい！こうしてみました！
ナギとは別行動をしていた葵。
ナギ達を登場させるには、この方法が一番手ごろだと思いまして…。

手抜きじゃないよ？ホントだよ？

この物語は葵が主役なんだから少しくらいなら…って気持ちで贔屓してますが。

感想＆評価は随時募集しています！
ではでは～！

第十七話「経過報告と機体性能と休暇予定と」（前書き）

続きです。
はぁ…。更新が遅々として進まないです。
週に一度更新できればいいほうってどういうことかね？
今欲しいもの…。

切実に文才が欲しいです！

では、どうぞ！

第十七話「経過報告と機体性能と休暇予定と」

――王都オスティアのとある庭園…。

Ｓｉｄｅ　？？？３号機

…ザザッ…ザザッ…ザー…。

――…ワァアアアアアアーーーッ！！！！！

国中から歓声が響き渡っていた。長い間続いていた大国間の戦争に終止符が打たれたのだ。民達の、その喜びようは嘗てないほどだ。そんな歓声が木霊する中、ナギはただ一人、誰もいない広場に立っていた。

「お師匠…」

そう零すナギの後ろから近づく気配があった。

「…ここにいたか」

そこには表情に乏しいのはいつものことだが、いつになく厳しい表情をしたアリカだった。

「よぉ、姫さん。終わったな…全部」

「っ……」

振り返りそう言ったナギの言葉に僅かに反応したアリカ。それは誰にも気付かれないほどに微かなもの。事実、ナギはアリカの態度を不思議そうにするが気付きもしない。ナギの言葉はまだ、続く、アリカに向けて…。

「どうしたよ?世界は平和になったってのに…。何かあったか?いつもの仏頂面が余計ヒドイことになってんぞ。能面王女?」

「いや…」

「…んだよ。調子狂うな」

普段ならここでからかったナギがアリカにド突かれているのだが今回は、そうはならなかった。ナギは困惑している。流石にアリカがいつもと違うのには気付いたようだ。

「……」

アリカはただただ沈黙を保つ…。おそらく自分自身、何を言っていいのかわからないのだろう。表情は変化しないが内面では様々なことが渦巻いている。処理しきれていないのだ。

「まっ…なんだな?アンタの騎士役は、これで終わりだな。あんたに預けた俺の杖と翼、そろそろ返してもらおうか。堅苦しいのはキライでね…」

この台詞が切っ掛けとなったのかアリカに変化があった。

「っ!…ナギッ!」

背中を向けているナギに駆け寄っていったのだ。

「ん？？…う〝っ！？」

ナギはアリカが自分の名前を呼んだことに振り返ろうとするが、それはアリカ自身の手により阻止された。…ものすごい勢いで首を捻られていたがナギの首は大丈夫だろうか？

――ぎゅっ…。

「お、おい！姫さん！？何だよ！…お？おぉ？？」

ナギはアリカの突然の抱擁に一瞬慌てるが背中に感じる二つのモノがあり、そちらに意識をやってしまう。

「もう少し…。もう少しだけ…。私の傍にいてはくれぬか？」

「へっ！？」

やーらかい二つの感触に意識をやっていたナギはアリカの言葉を聞いて驚いてしまう。今までにこんなことはなかっただけに余計にそう感じてしまうのかもしれない。

「もう少しだけ…」

今のアリカの声はか細い…。泣いているのか、震えても聞こえる。

「……。あー…なんだ？もう少し、ギュッと抱きしめてくれるか？…胸のカタチがわかる」

「…？…っ！…っ！？」

アリカは何を言われたのか一瞬わからずにいて思考が停止しかけたが、直ぐに理解したのかナギを…。

「めふんっ！」

――アリカはナギを思いっきり殴りつけた…。

いい感じに吹っ飛ぶナギだが何事もなく無事に着地した…。それを見て呆れているアリカ…。

「…な、なんでもない。忘れるがよい」

今までの雰囲気はなんだったのか…。アリカは少し怒っているようだ。ナギと視線を合わせようともしない。…いや、これは先程のことが恥ずかしかっただけなのか？

「オイオイ、姫さん。なんでもないってこたねぇだろ？なんだよ“もう少しだけ傍に”て？んー…。あれ？まさか、アンタ…」

「っ……」

「まさか俺にホレちまったとかー！？いや、そりゃ嬉しいけど色々マズくね？アンタ王族だし、よぴょんっ！？」

――ナギの台詞が終わる前にアリカは殴った…。

「っ…！」

しかし、ナギは何事も無いかのように着地した。まだ余裕が見られる…。アリカは着地したナギを無言で睨むようにしている。…顔は赤いけど。

「照れるなっての。しっかし、どーすっかね？やっぱ、駆け落…ちぇるのぶいるっ！？」

――また、アリカはナギを殴った。しかも、今度は全力で…。

「…っ！」

今回ばかりは効いたようだ。ナギは着地すらできないでいるのだから。見事に顔面から地面に落ちていた。流石にアリカも今回はやり過ぎたと思わなくはないのか、ちらちらとナギのほうを見ている。…見ているだけで声はかけないけど。

「いてーー…。マジいてーー…。王家の魔力、込めんなよ…」

「自業自得じゃ。…今のは、なしじゃ、聞かなかったことにせよ。…主らに、これ以上迷惑はかけられぬ…」

「あ、オイ！」

「…妾も、これからは1人で生きていくことになろうでな。少しの…。そう、少しの気の迷いじゃ。許せ…」

「オイッ！待て！…姫さん！！」

「…もう、姫ではない」

「ああ！？何言ってんだ！待てっつの！…姫さんっ！！」

「…言わなかったか？妾は今や、この国の女王となった…。今後二度と姫と呼ぶことは許さぬ。もはや主などが気安く話しかけられる相手ではないのじゃ」

「なっ！？」

「ではな…」

「オイッ！姫さん！！待てって！！」

「触れるな！不埒者がっ！」

「聞けって！姫さん！！」

「姫ではないと言うに…！！」

「おまっ…あっ！？」

「……」

「…どうしたんだよ、姫さん。何があった？ちゃんと話せよ。…俺の翼は、まだアンタのモンだぜ。アンタが望むなら、どこへだって連れてってやる。…たとえ、そこが世界の果てまで、だってな」

「……」

「……」

「……っ！」

――ゴギンッ！！！ドギャンッ！！！！

「コプッ！？もぎゃんっ！！！」

アリカは珍しくマジメに決めたと思われるナギに鋭い膝蹴りと豪快なアッパーで叩きのめした。

「なんだよ、マジメにやってやったのにー…」

「うるさい、お調子者が…。主はマジメなのか不真面目なのか、わからぬわ」

「ぜってぇ何か隠してんだろ、姫さんよぉ。あんたオカシイもん。いきなり抱きつくとか全然キャラ違うし。よっぽど何か…」

「……すぐにわかる」

「あぁ？？？」

「……主こそ、何か隠しているのではないか？無理やり明るく振る舞っているのが丸わかりで動揺が見え見えじゃぞ？」

「ぬ……――俺は…話したくない…」

「妾も話したくなどない」

「へー、気が合うな…って！オーイッ！…じゃあ俺も話すから話せよ、姫さん」

「話せば…。主は…」

「おうっ！何だよ！？」

「……。なんでもない」

「はぁぁぁああ……。んだよ、ったく…」

アリカが立ち去っていくのをナギは釈然としない気持ちを抱えて見送ることになった。そしてナギもしばらくすると同じように仲間たちの元へ戻っていくのだった。

…ザザッ…ザッ…ブツッ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？３号機

――ナギの立ち去った王都オスティアのとある庭園…。

Ｓｉｄｅ　？？？５号機

…ザザッ…ザッ…ザー…。

ナギと別れてから数時間後。…一人になったアリカ、彼女が立つのは一つの小さな高台。ここからならオスティア本島のほとんどが見渡せる。一人静かに、この町の景色を焼き付けるかのようにして

いる…。その時、ふとアリカの脳裏にかすめるように…。

――どこへだって連れてってやる…。

「……っ」

強く、何かに耐えるように表情が厳しいアリカ。思い出すのは去り際に聞いたナギの言葉…。

――嬉しかった…。

そう、嬉しかったのだ…。表情の変化は少ないが、その顔にはたしかな喜びが見て取れる。そして、アリカの心の中に次々と思い浮かぶのはナギとお忍びで町に繰り出した日の色鮮やかな場景…。その時に交わした一つの約束…。だが、…。

「――案ずるな、ナギ…。妾にはもう、そなたの言葉だけで…十分なのじゃ」

「陛下っ！！」

駆け寄ってくるのはガトウ、それに彼と行動を共にしていたクルト少年。

「っ……」

彼らがここに…アリカの下に来たということは…。

――覚悟の時だ…。

ガトウが現在の報告を始める。

「時間です…！まもなく崩落の第一段階が…」

「進捗状況は？」

アリカが表面上は冷静に問い返す。しかし、握り締められた拳は色が白くなるほどに力が込められていた。わかっていたこととはいえ、この状況を作ったのは自分だ、という思いがアリカに自制を強制しているのだ。

「アスナ姫、封印直後から全艦艇が全力であたっており現在３７％…」

――少ない…！足りない…！もう時間もない…！

「……」

――余りにも少な過ぎる！使える艦艇も足りない！そして何よりも時間が圧倒的に足りない！！

アリカの心には焦りの色が見える。だが、今の彼女にできることは…。必死に彼女は考える。今、自分には何ができるのか、と。

「陛下のお考えどおり式典と称し、この離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでのところありませんが…崩落が始まれば、その限りでは…。全市民の救出は困難を極めるかと……！！」

「……っ！！…わかった…。妾も直接、指揮にあたる！！」

報告を続けているガトウの言葉にアリカは思考の海から引き戻された。そして今の自分にできること、それに思い至った。それは、一人でも多くの民達をこの窮地から救い出すこと、だった…。

…ザザッ…ザザッ…ブツッ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　???5号機

――とある浮遊島の一つ…。

Ｓｉｄｅ　???7号機

…ザッ…ザザッ…ザー…。

――ドドッ!ドッ!!ドドドッ!!!!

突如として崩落し始めたオスティア。美しい外観の建物は崩落の衝撃で脆くも崩れ去っていくだけだった。何も知らない人々は、ただただ、この現状に悲鳴を上げて逃げ惑うのみだった。

「くそっ!何でだ!?飛ばねぇぞ!!」

一人の民は崩落に巻き込まれまいと自前のホウキに跨り空へと飛び立とうとするも、飛行魔法が使えずにいる。魔法が発動しないのだ…。

「ホウキはダメだ！港への避難勧告が出てる！！」

「魔法障壁も効かねぇ！どうなってやがる！？」

「皆さん、こちらへ！お守りします！」

「あんたらは！？」

「メガロメセンブリア重装兵団の者です！逃げ遅れたお子様！老人！そして病人に心当たりはありませんか！？一人残らず助けろ、との厳命です！！」

「どういうことなんだ！？戦争は終わったんじゃないのかよ！？」

「ハッ…。確かに戦争は終わりました！しかし、申し上げにくいのですが…。っ…この都は…まもなく亡びます！！」

…ザザッ…ザザッ…ブツ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？７号機

――指揮所艦内艦橋…。

Ｓｉｄｅ　？？？９号機

…ブンッ…ザザッ…ザー…。

「空中王都の崩落、尚も拡大中！！本艦の周囲にも強力な魔力消失現象が発生しつつあります！！即席の対抗呪紋塗装装甲が、いつまで持つか…！！！」

「泣き言はいらぬ！！あと数時間持てば十分じゃ！！最も的確に市民を救えるよう最大効率で船を回せ！！ただし！！捨てて良い命はない！！一人も救いもらすな！これは厳命じゃ！！」

「貧民島（スラム）の避難作業が難航しています！このままでは！！」

「理由は！？」

「町の構造が複雑なうえ…不法移民が多く、全住民の把握ができません…」

「……っ」

理由を理解したアリカは瞬間、思考するとすぐに判断して行動しようとする。

「わかった…。ここは任せる！！」

「陛下！！どこへ！？」

「貧民島（スラム）は妾が直接赴き、島ごと不時着させる！！」

「なっ！？し、しかし！！」

「妾の魔法ならば、この魔力消失現象の中でも無効化されぬ！！」

「いけませんっ！女王陛下！！」

『ゴルァァーッ！！こんのバカ娘！！やい！聞いてるのか！？アリカ！！てめぇっ！！どういうこった！コレは！？』

「ナギ…。見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。…案ずるな、妾もいずれ遠からぬうちに地獄へ墜ちる」

『…っ！？なんで話さなかった！！この唐変木！！』

「話しても無駄であろう？戦いしか能のない主が一人でなんの役に立つ？」

『くそっ！…っ、今から、そっちに向かう！待っとけ、てめぇ！！』

「ここに、そなたの力は必要ない！妾を助ける暇があるのなら避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する！！」

『そっ…』

「まだ崩落を始めていない地区を頼む！ただし、この魔力消失現象の中では、そなたも満足に飛べまい！」

『む…』

「我らの逃亡生活中に使用したボロ舟にも対抗呪紋処理を施してある！それを…」

『もう乗ってるよ！！！』

「ならば良い…。では、救出活動に全力を尽くした後、そなた達は、そのままここを去れ。二度と戻るな、最後の命令じゃ！」

『何っ！？そりゃどーゆー…』

「切るぞ。この通信の間にも民が死んでいく。通信終了…」

『オイッ！待て！！！』

「へ、陛下！！しばし、お待ちを！！…アルビレオ・イマ！聞いていますか！？クルトです！！」

「ハイ？何です？クルト君」

「アリカ様のおっしゃるとおりにするのが賢明かと思います！もし戻れば…あなた方はメガロメセンブリアに拘束される可能性が高い！！今は身を隠してください！時が経てば事態は好転するはずです！とにかくコレが終わったら逃げてください！いいですね！？」

『わかりました。ナギのことはお任せを。…すみません、ナギ。これがアリカ様のお望みでもあると思いますので…』

『…っ！！』

「そなた達には世話になったな。…さらばじゃ」

『陛下も、御武運を』

『お、おい！待てよっ！！姫さ…』

「通信終了しました…」

「…妾はこれより直接、民の救出に向かう！！皆の者も奮励努力せよ！！」

「「「「「ハッ！！！！」」」」」

…ザッ…ザザザッ…ザー…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？９号機

――帝国城内、葵の執務室…。

Ｓｉｄｅ　葵

「偵察機からの追加された監視映像は以上になります」

「…ねぇ？偵察機３・５号機の監視映像って報告にいらないじゃない？」

無駄と思う部分の監視映像も見ていたら、もう夜だよ…。何が悲しくて他人の恋愛をのぞき見ないとならんのよ？なんだかなぁ…。俺も彼女欲しいわい！うばー…。

「…記録できるものはできうる限り記録した結果です。それに…」

「それに…なんでしょや？」

「…あのお二人が結ばれた時にコレを目の前で上映すれば“オモシロイ”のではないでしょうか？」

なるほど…。その考えはなかったな。ふむ、そういうことなら…くくっくっくくっ！

「…パーフェクトだ、アイリ。君は素晴らしいよ」

「感謝の極み。…それでは3・5号機の記録は別にして厳重に保管しておきます」

「よろしく～♪…で？冗談はここまでにしてオスティアに対して帝国からの救援は、どうなってるの？」

アイリに一任した手前、結果は気になるのよ。あの時は書類を押し付けることに意識を持っていかれてたからね。まぁその仕事中の意識は半ば飛んでたよ…。ヒトの執念…ってやつですな。

終わったら寝ちゃってたけどな！起きたら貸し与えられてる部屋のベッドの上でした。後日聞いてみたらファレノが運んできてくれたらしいね。本当に感謝です。お陰でグッスリ眠られました。

「ハッ！時間がありませんでしたので根回しは十分ではありませんでしたが帝国軍を始め、関係各部署には可能な限りの救援物資と救出部隊を送るように通達されているはずです」

「そっか…ありがとう、アイリ。お疲れ様」

結構、無理をしたみたい、なのかな？戦争が終わり平和になったとはいえ他国へ部隊の派遣。その無理を通すとなると並大抵のことじゃないからな。

「いえ、役目を果たしたまでです。…ですが、お気持ちは嬉しく思います」

「うん、本当にありがとうね。それにしても“完全なる世界”の拠点襲撃で得た情報がこんなところで役に立ってよかった。人生、何が役に立つかわかんないものだねぇ？」

いつか使えると思ってた情報をこんなに早く使うとは思わなかった。一度使ったらもう使えないけど、まぁ俺としてはこの先、使う予定はなかったからちょうどいいかな。

「それが当たり前です。“未だ来ず”と書いて未来と読むように時間に縛られている以上、仕方のないことです。それに未来に何があるのかが、わかってしまったらつまらないではありませんか」

ごめん、アイリ…この先の未来、少しだけど知ってます。まだ、そうなるとは確定してないけどな！介入するのはこの大戦中だけの予定だったし。そんなに時代の流れは変わらないはず…だよな！？ハァ…。

「そ、そうだねー。ところでナギ達に連絡は取ったんでしょ？なんだって？」

「ナギ君は女王陛下のことがありましたので“幼女趣味変態（アルビレオ・イマ）”が今

後の予定を話してくれました」

「なんだかアルの名前が別の字に掻き消されていた気がする…」

何だかスゴク小さな悪意を感じるな。まさか、アル…家族の誰かにネコミミスクミズを手にニジリ寄ったりしてないだろうなぁ？

「気のせいです、司令閣下。それで彼らはオスティアの救援を終了させ国内からの逃走を図った模様です。いずれこの帝国領にもお越しになられるのではないかと…」

「ふぅん、じゃあその時にでも合流か？もう半年近くここに居座っちゃったから、そろそろ皆と合流しないと」

長い間を別行動してたから忘れがちになるけど俺も一応［紅き翼］に数えられてるんだよな。いい加減この辺りで合流しないとならんよ。なにより俺が忘れてしまいそうだし！

「了解しました。ではそのように各員、準備だけはさせておきます」

「うん、よろしく。これが終わったら皆はしばらく休みだから、もうひと頑張り、お願い」

「了解しました。では手筈を整えてきます。では」

アイリが部屋を出て行った。

んじゃま、俺も適当に準備しとこうかな…。

――トントン。

ん？誰だ？こんな時間に…。

「葵ちゃーん？私だよ。居るのー？」

「ファレノ？居るよー。開いてるから入って」

「はーい。こんばんは。こんな時間だけどイキシアの報告なの、大丈夫かな？」

「おぅ？なかなか早いね。それでどんな感じかな？」

まだ時間がかかるかと思ったのに皆、仕事早いよ。頼りになるなーもー。

「うん。まずは被害報告、各機体には大小の損傷があったけど奇跡的に大破・撃墜はないの。それと戦闘後にマリー達整備班が分解整備の検査で装甲・フレームは共にハード的な問題はなし。頑丈だよね。詳しい報告書はコレね」

「ふぅ…大破なしか。よかった、ちゃんと鎧としての役目は果たしてくれたんだ…」

マジでよかったわー…。なんか欠陥があったらどうしようかと心配だったんよね。報告書を見てみると致命傷を受けた機体はほぼ皆無と言っていい感じだし、万々歳だね。

「アハッ♪そうだね。それで次にソフト面はウーリ、アンの報告で今回、収集された戦闘データからＯＳのバージョンアップ、姿勢制御システムや重力制御システムアビオニクスなどの更なる改善案を提示してきたの。あ、それの作業予定表はこっちなの」

「流石だな、あの二人。もう改善案を出してくるなんて」

今回の戦闘データを取り入れてマリー、ウーリ、アン、俺を中心に整備班の皆と新機体“イキシア？”の開発に入る。

今回の戦闘で対多数戦闘のデータが豊富に取れたからソレを元に戦闘稼働時間の更なる延長と装甲の強度強化・軽量化などなどヤルことはいっぱいですな！オラわくわくしてきたゾ♪

「まぁ［工房］内の［ドッグ］で作業してたからなの。それも時空間操作を最大に設定してるから外の時間では短時間でできることだけどね。普通のヒトなら寿命がいくら合っても足りないの」

「ハハ、言われてみればそうだね。でも、俺達の強みはそこだと思うけどね。限りなく長い時間があるから多少の無茶も効くんだ」

おぅふ？よく考えてみると、たしかにある意味、裏技的方法だよな。最大設定ってたしか外の１時間を中で９６時間に伸ばすから…皆、頑張りすぎじゃね？何も、そこまでしてくれなくてもいいのに。

身体壊したらどうするのよ？心配するでしょや。付きっ切りで看病するぞ、コラ？後で様子を見に行かないとな。

「ま、ね。それで最後に一つあるの。マリーから兵装関連で今回、

使用した各種兵装の性能評価ね」

「あぁ、それは俺も気になってたんだよ。使えない武器ならまた設計から入らないとならないし。それでどんな感じだったの？」

イキシアは実弾系統のみを今回は装備させていたから物資の消費量がすごいの何のｏｒｚ

結構多めに弾薬とか用意したはずだったけど敵の数が予想以上だったこともあって、アッという間に無くなっていくんだよ…。まぁチェーンガンとか連射機構のある兵器がほとんどだから弾薬の消費量がハンパなかったのもあるけどね。

ミサイルとかバンバン使ってたし…。多弾頭だから用意に手間がかかるんよ？…自動人形（オート・マータ）の皆さんが用意してくれるから俺が手間を感じることじゃないけどな！兵器は使ってナンボだし！

「うんとね。今回、使用された弾頭で“対魔法障壁弾”はテストどおり敵の障壁を貫通、無効化に成功したの。これは今現在、外で出回ってるモノよりも効果は１．２倍の威力が見られたの。ミサイル弾頭も同様だけど炸薬が強力すぎて、使いどころが難しいってあるの」

「とりあえずは成功か…。多弾頭ミサイルは弾頭の小型化と総弾数を増加することで威力や全体のバランスを調整、改良していくかな。…味方に吹き飛ばされたらたまんないもんね」

対魔法障壁弾は俺達が手ずから作ったんだから他と違い威力が向上していて当たり前だって。なんせ製作に携わってるのは悪魔や精霊さんなんだから。魔法障壁なんて紙ですよ。相手のレベルにもよ

るけどな？

多分、あの白髪君には牽制程度にしか役に立たないんじゃないかな？それでも無抵抗で攻撃したら傷付くけど。

多弾頭ミサイルのほうは弾頭の炸薬の量を調整してみるか？いや、いっそのこと無人機に使われてるマイクロミサイルを流用するかな。元が小型ミサイルなんだから、ちょいと規格を変更すれば使えるっしょ。互換性も出てくるから生産の負担軽減にもなるし。

そうするか…。普通のミサイル弾頭は炸薬の量を調整すればいいだけなので悩みません。…寧ろ威力を上げるのもありよ？いや、上げるけどな。小型化と威力向上を目標に頑張りますよ！

てか、改良案を考えてたらファレノがジト眼で見てくるんですけど…。いったい何よ？

「葵ちゃんみたいに、なの？」

「ファレノったら失礼だね…。俺が、いつ味方を吹き飛ばしたリしたんだよ？」

“味方を吹き飛ばす”って話しに引っかかってたんかい！？いくらなんでも俺は家族“には”被害は出さないよ！まったく！

「決戦の時に二回吹き飛ばしかけたの。一度目は決戦魔法“剣軍弾雨”の時、二度目は速射魔法“フランベルジュ”。一度目は何もなかったけど二度目の時は連合のオジ様達が軽傷を負ったの。これでも何もないとか言うつもりなの？」

「い、いや、まぁ…それは避けきれない向こうの…。イエ、ゴメンナサイ…」

アレは俺のせいじゃないと思うんだけどなぁ…。ちゃんと避けるようには警告したと思ったんだけど。…うん、したよね？警告。アレで避けられないなんてあの時も思ったけど連合は鍛え方が足りんよ！ハァ…。

でも、俺は謝りますよ？だってファレノがジト眼で見てくるんだもの…。俺は基本Ｓだから白い眼で見られて感じる趣味はないのよ。…ソフトＳだからな！？ハードじゃない！言うなれば“ちょいＳ”だ！今の関係ないなｏｒｚ

「わかればいいの♪それで報告の続きなんだけど各種兵装の性能評価と改善、改良の案ができてるの」

「もう？そこまでできてるなんて…。今度、皆には完全休暇をあげないと」

マリーはもちろんだけど、ウーリ達にも二日ほど完全休暇あげないと身体壊しそうで怖いな。人の身体より、よっぽど丈夫だけど、見ている俺が心配でならんのよ。

「あ、休暇にしてくれるなら葵ちゃんも一緒がいいの♪温泉とか行きたいの！」

「俺も？んー…温泉かぁ。わかった、時間が取れたら、その時にでも行けたら行こうか？」

温泉…。最近行ってないなぁｏｒｚ温泉行きたいよ！行くけどね

！それがいつになることか…。まぁ折を見て旅行を計画して皆で行くとしますかね。

「やった♪約束したの！家族みんなで温泉なの！」

「まぁ女王陛下のこともあるからちょっと先になりそうだけどね。でも、必ず行けるようにするよ」

「期待して待ってるの♪んー、これで報告は以上なの」

「はい、ご苦労さん。あっ、アイリから話しがいくと思うけど、しばらくしたらナギと合流するかもしれないから、準備だけはしておいてね？」

「了解なの。それじゃね～♪」

それじゃま、俺も今後の準備でもしときますかね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第十七話「経過報告と機体性能と休暇予定と」（後書き）

今回は今までより会話文を多めにしてみました。
全体的に文体が軽めに見えるかも？
自分で見ている限りだから確信はないけど…。

ではでは！また、いつか！

第十八話「完成予定と合流と拳の一撃と」（前書き）

今回の話は自信ないわー…。
そのため感想が是非とも欲しいです。
俺の文章の更なる発展のために！
では、続きをどうぞ！

第十八話「完成予定と合流と拳の一撃と」

オスティアが墜ちてから一週間が経過した日…。

――帝国城内、葵の執務室…。

Ｓｉｄｅ　葵

チャオ！葵です！ナギ達がオスティアでの救出作業の後、半ば逃亡するようにして帝国まで来るようです。隠れながら進むから思ったより時間がかかったみたいだね。

それで何事もなければ今日の夕方には帝都に到着予定らしい。一応長旅の疲れを取る意味でも数日滞在して休んだら皆で旅に出るみたい。また放浪の旅ですね？わかりました。

因みに俺達もこの一週間、遊んでたわけじゃないよ？ちゃんと仕事してました。オスティアへ物資援助や救出部隊の派遣とかを継続して働きかけてたの。

でもねぇ…。いざ、現地に部隊を派遣してみると既にメガロメセンブリアの部隊が展開、救助作業に従事してたのよ。でね？その現場責任者が帝国に開口一番なんて言ったと思う？

「帝国の復興援助は感謝するが、この場はメガロメセンブリアの管轄だ。我々を手伝うのなら邪魔にならないように私の指示に従ってもらおう」

…だってよ！！何様のつもりだよ！？ふざけんじゃないっての！救援部隊からの報告書を読んでマジでキレかけたね…。コレが俺に関係ないことなら別にどうでもいいけど、今回の救出部隊を派遣するように指示したのは俺だ。

関わってる以上無視はできんよ。そりゃあムカって来るもんですよ、ええ。まぁそのオスティア救援も、もう終わったことなんだけど…。でも、ね…。

フフ、フフフフ…。

今頃、現地の指揮を執っていたヤツは自分の恥ずかしい過去が知れ渡っていて外も歩けない状態になってる…かも、ね？あくまでも“かも”です。現実にどうなっているかなんて軽い悪戯心でやったことなんだから俺は知りませんね。ただの憂さ晴らしだし。

うん。そんなヤツのことなんてどうでもいいな。

それにしても、いくら帝国よりも国が近い位置にあるとしても連合の部隊展開が早すぎる。予め何らかの事情で配置していたとしか考えられん。何か陰謀の匂いがプンプンしますよ？昔も今もヒトは謀略が好きだねぇ？やってられんわ…。

俺は関わらんがね？当然よ。面倒事はごめんだね！今の俺には優先すべきことがある。それは“機動戦艦アングレカム”の強化・改良して正式にロールアウトすることと新鋭機“イキシア？”の開発。この二つが俺を待ってるの。早く作ってくれ～って語りかけてくんのよ！

一応まだ完成はしてないけど完成予定はこんな感じなんよ。

・機動戦艦［アングレカム］
全長５１６ｍ全高２１７ｍ全幅２５９ｍ総重量５４，８６０ｔ
・搭載メインコンピューター
形式番号Ｘ‐０１次世代電子精霊融合型統合制御ＡＩ［アン］
・外部装甲
高硬度複合精霊強装甲（攻撃吸収タイプ：吸収率６５％）、応急補修用流体金属群
・内装
亜空間技術（内部空間の拡大化）、ディストーションブロック（各部屋の個別防御）
カートリッジ式充填機構（吸収した魔力・エネルギーを保管する）
・主要動力機関
魔導式相転移機関大型４基（正・副）中型３基（予備）
大型エネルギーカートリッジ１０基
（これは魔導式相転移機関の起動値エネルギー確保のため。
カートリッジは自動交換による取替えが可能。
そして緊急時に短時間だが補助エネルギー源としても使える。）
・防御兵器
魔導式ディストーションフィールド（攻撃吸収タイプ：吸収率４０％）
・防衛用兵器類
対空レーザーガトリング砲３６基、妨害チャフ散布装置、対ジャミング装置
・武器兵装
魔導式グラビティブラスト４門（重力波レンズ有り）
ミサイル発射口１８基、大型ミサイル発射口８基
魔導式電磁投射砲（レールキャノン）１８基、三連装高出力レーザー砲４基

・電子装備
電子制圧用重力波通信アンテナ４基
熱光学迷彩システム（Ｔｈｅｒｍａｌ　Ａｃｔｉｖｅ　Ｃａｍｏｕｆｌａｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍ）
超静音航行制御システム
・搭載機動兵器
通常無人兵器　最大搭載数１７．４６０機
大型無人兵器　最大搭載数　３６０機
人型高機動兵器　最大搭載数　１５０機

武装のオンパレードなのはご愛嬌です。大きいな組織ではない個人の俺には足りないぐらいだ。まぁ俺が怖がりだから武装をできうる限り増強したのだけどな！

船体はやや大きくなって重量も増加したけど問題ない。重力制御は完璧、魔法技術による重量軽減も施してるしな。装甲版を強化型という実験装備じゃなくて高硬度複合精霊強装甲（攻撃吸収タイプ：吸収率６５％）を正式装備した。

その装甲を破損された時には応急補修用流体金属群が亀裂に集まりカサブタのような役割をしてくれる。これでいざという時は安心だ。それにディストーションブロックも今度は装備した。これで内部破壊が起きても被害を最小に抑えられるね。

電子制圧用重力波通信アンテナを４基も装備したのはこれからの時代に合わせてだ。魔法世界も人工電子精霊を使うものだとしても旧世界のように機械化できるところはするだろう。そうなると今までのようにハッキングだけでは対処できなくなる可能性が出てくる。

そこで“覗き”や“書き換える”ではなく“強襲制圧”するのよ。

気付いた時には、もう遅い。機械は持ち主の手を離れてこちらの制御下に置くことができる。先手を取れば核すら怖くはないからね。

超静音航行制御システムは海中での航行に支障が出ないように音源を極力抑えるようにするの。“フル〇タ”でもＴＤＤが使ってたよね？アレのマネですな。

無人偵察機（アカトンボ）ステルス仕様は無人偵察機（トンボ）に試験的に熱光学迷彩処理を施した無人機だ。動力部の拡張のために尾の部分がやや肥大化したのが変わったところか。

機体色は赤ですよ？赤いと性能が3倍になるって言うけど…。俺は違うからな？赤いほうが迷彩には都合が良かったの。

大型無人兵器って項目にあるけど今後造る予定なのよ。無人機動兵器（ムシ）が１．８ｍほどの大きさに対して大型無人機（ヘラクレス）は８．５ｍと４倍強の巨体。

もちろん武装も強化してるよ？マイクロミサイルは当然装備してる。発射口は倍だけど…。追加で１２．７ｍｍ機関砲（カブト）を２門装備。これはレーザー砲と交換可能。角も3本に増やしたさ。

ただ、この子はね？戦闘だけに使うわけじゃないのさ。腹部に小型格納庫があってその中に交換用の大型常温超伝導バッテリーと弾薬を積んでるの。今度、開発されるイキシア？が戦地で可能な限り長く戦えるように支援機の開発をしたかったの。

で、話に出てきたイキシアの仕様は次のとおり…。

・正式名称ＭＨＴ－０７“イキシア？”（ＭＨＴ＝Ｍｕｌｔｉｐｕ

ｒｐｏｓｅ　Ｈｕｍａｎ　Ｔａｎｋ）
全高７．６５ｍ総重量１．９１ｔ
完全装備時の総重量２．１２～２．７２ｔ
・動力部
大型常温超伝導バッテリー×２
稼働時間：８時間
外付けバッテリー：＋４時間＝１２時間
・外部装甲
複合精霊装甲
・骨格（基本フレーム）
オレイカルコス製骨格
・腕部武装（サブウェポン）
魔導式突撃砲、魔導式光学砲（ラピッドライフル／レーザーライフル）
２７式精霊鋼短刀×２、３７式精霊鋼刀（ソード）×２
長距離支援制圧砲（スナイパーライフル）
・肩部武装（メインウエポン）
単装５．５６ｍｍチェーンガン、二連装５．５６ｍｍチェーンガン、単装３６ｍｍガトリング砲
二連装３６ｍｍガトリング砲、単装レーザーガトリング砲、二連装レーザーガトリング砲
単装レーザーキャノン、二連装レーザーキャノン、単装１２０ｍｍ砲、二連装７６ｍｍ砲
八連装多目的ミサイルポッド×２、六連装多目的ミサイルポッド×３、精密広域レーダー
・オプション装備
ＤＦ発生装置、ＤＦ増幅装置、アンチジャミング装置、魔力増幅感応機構
熱光学迷彩システム（Ｔｈｅｒｍａｌ　Ａｃｔｉｖｅ　Ｃａｍｏｕｆｌａｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍ）
高性能反重力波推進機関（飛行ユニット）：宙対応万能型

頑張ったよ…。全高８ｍは超えないようにするのにな。でも、そのかわり機体重量が増加しちゃったのｏｒｚとりあえず問題ない範囲だけど外部装甲とオプション装備を多く盛り込んだらこうなっちゃった。

でも、動力源を引き続き開発していたのもあって常温でも使用できる大型常温超伝導バッテリーが完成した。おかげで戦闘稼働時間を伸ばすこととマシンパワーの増強ができた。整備班と開発班の皆には感謝だね。

武装は各種、状況に合わせて選択できる。せっかく人型をしてるんだから装備は豊富のほうがいいよね。

その中でも俺がお勧めしたいのは二連装５．５６ｍｍチェーンガンかな。他と比べて小口径ながらも装弾数の４６．０００発という多さや発射後の弾のバラつきで面制圧が可能なのがいいね。実弾系統には全て重力加速装置がついてるから貫通力にも優れているのよ。

悪魔や自動人形などの小型種、中型種にはこの口径のタイプでも十分に対処できる。…大型種になるとちょっち厳しいけど。そうなったら口径を大きくして二連装３６ｍｍガトリング砲なら大丈夫！破壊力は圧巻です。

二連装レーザーガトリング砲でもいいんだけど集弾性が高く面制圧よりもピンポイントな射撃に向いてるかな。エネルギー切れがない限り弾切れがないのは魅力だけどね。破壊力という点なら二連装レーザーキャノンがあるし。威力は小型艦載砲並ですよ。

小・中型種の対集団戦に向いてるのは二連装５．５６ｍｍチェー

ンガンでしょ。とりあえず弾をバラ撒いて敵の数を減らさないとね。二連装レーザーガトリング砲とセットで使えば強襲制圧部隊としては絶大な威力を発揮してくれるかも。

いや、夢が膨らむねぇ♪でも、問題があるのよ…。

実は資材の消費量が大変です。ハンパないって…。まぁ資材はそこらのモノを錬金や［工場プラント］に放り込めばいいけど、今備蓄しているものまで使うからマジで大変。まだ余裕あるけど消費が追いつかなくなったら買えるものは買わないとイカンから資金的にも痛いし…ｏｒｚ

世知辛くて泣けてくるわぁ…。それでも作るのはやめないけどな！！戦艦も新機体も全体の七割は完成してるんだから今更やめられんわい！

そういえばアングレカムとイキシア?を正式配備するに当たって部隊再編するみたいなことアイリに聞いたな…。今度、聞いてみよっと！

ん?そろそろ、夕方の時間帯なんだけど…。ふぅむ、ナギ達はまだ来ないのかなぁ？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――帝国領の帝都内…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

私はナギ君達の到着時刻なので町の城門まで迎えに着てみた。これは葵君に余計な手間をかけることなく円滑に事を進めるためだ。

あの人達…特にナギ君とジャック・ラカンがいるのだから油断はできない。必ず何かしらの問題を起こすに決まっている。今の帝都内で［紅き翼］の面々が問題を起こせばシワ寄せは確実に葵君に行く。

この前のオスティア援助の件で無理をしたので私達は敵を少なからず作ってしまったことから、しばらくは冷却期間が必要だった。今、問題を起こせばここぞとばかりに何を言ってくるかわかったものではない。

嫌味程度ならばまだいいが無理難題を吹っかけてきたのなら対策を講じる必要が出てくる。事前に“排除”するというのはダメだ。戦争中ならば誤魔化しようはあるが直後とはいえ終戦してしまっている。

社会的に抹殺してもいいが…。余計に怨まれそうだから困る。あ、メガロ湾にでも沈めるか？連合の領域だ。下手な詮索はまた戦争につながりかねないことから政治取引に持ち込まれる可能性もある。

まぁそれもこれもまだ想像の域だが。とにかくここでナギ君達一行を待つとするか。手ぶらで待つのも何か…。ふむ、その辺の店で飲み物でも買うとするか。ちょうど売店も近い、あそこで買うとしよう。

「すまない、コーヒーを一つ、ホットでもらえるか？」

「はい！少々お待ちください！…どうぞ！３Ｄρ（ドラクマ）になります！」

「うむ、たしかに。では、これを」

「ありがとうございました！またのお越しを！」

元の位置に戻りコーヒーを一口飲む。む？売店の割にはいい味をしているではないか…。あの店はチェックだな。そうしてしばらく待っているとここからでも目立つ一行が城門の外に見えてきた。

「皆さん。長旅、お疲れ様でした。帝都へようこそ。葵君は帝国城内にてお待ちです」

「貴女はたしか…アオイのご家族、アイリスさんでしたね。態々出迎えありがとうございます」

「いえ、幼女趣味変態を筆頭にナギ君（バカ）やジャック・ラカン（どバカ）を野放しで出歩かせるのは危険…もとい今は仮にも逃亡しているのですから皆さんの安全確保のために必要なことですから」

これは言ってみれば予防策です。下手に葵君のお手を煩わせることもありませんからね。…まぁただの道案内の役目もありますが。

「…なにやら貴女から悪意のようなものを感じるのですが私の勘違いでしょうか？」

「さぁ？どうでしょう？…何か身に覚えでもあるのですか？」

「さて？なんのことでしょう？私には何も覚えはありませんが…」

よくもシレっと言えますね？うちの若い子達にネコミミスクミズを着せようとしたのを忘れたとは言わせませんよ？それも着せる対象は皆、小柄な子ばかり…。もはや、溜め息しか出ませんね。

葵君がお望みならば着るのも吝かではありませんが…。って！わ、私は何を考えているのですか！？ふぅ…。

「ならば良いのではないですか？“何も”ないのですから…」

「ふふ、そうですね」

私の暗に含んだ言葉を聞いても幼女趣味変態（アルビレオ・イマ）は動揺もせずに普段の胡散臭い微笑を貼り付けた表情で言葉を返してきました。このタヌキめ…。

私は心の中でいつか、その化けの皮を剥いでやろうという誓いを新たにしてから葵君の下へ案内するために歩き出した。

「…では、皆さん。私がご案内します。逸れずに着いて来てください」

「オレらは幼稚園児かってんだ…」

「何か？ジャック・ラカン…」

歩き始めるとジャック・ラカン（どバカ）が小声で何か言っていますね。私はまだ熱いコーヒーの入ったカップを見せつけるようにして聞いて

みます。

「な、なな何でもねぇよ！」

「…そうですか」

あえて見せつけていたとはいえ勘がいいことですね。まだグダグダぬかすようならそれ相応の行動が取れたのに…。怨みはありませんが残念です。本当に…。

ここまで話していて気付いた。何か、いつも、うるさいのが足りない、と…。

「ところでアルビレオ・イマ、ナギ君はどうかしたのですか？随分と静かですが…」

「……」

ナギ君に気付かれないように様子を見てみれば心ここにあらずといった様子だ。彼が影を帯びても似合わない。バカのように…実際バカだけど。ともかくバカのように行動派なのに今の彼にはそれがない。

「ええ、どうやらアリカ様のことで考え込まれているようなのですよ」

「…ほう？悩む必要がどこにあるというのやら…。もしもの時は助ければ良いだけではないですか？」

驚いた…。バカはバカなりに考えているのですね。…でも、その

考えは、いくら考えようと無駄なのに。愛おしい人に危機が訪れようというのなら何であれ全力で助けるだけなのですから…。バカですね…あ、バカでした。

後悔する前に早く気付くといいのですが…。

「ふふふ、ナギもあれでバカなりに考えているのですよ。…ですが時は止まってはくれません。ナギは…もちろん仲間の私達も、いずれ必ず動くことになるでしょう」

「その時は俺もナギと共に戦おう。前の決戦では最後に不覚を取ったが今度はそうはならん」

青山・詠春ですか。貴方は立派です。仲間のために最後まで戦おうとする仁義・忠義は私から見ても尊敬に値します。葵君の下に集った私達に通じるものがありますからね。…私達の場合は愛情が大部分を占めますが!!

「ふふふ。詠春、貴方の剣の腕に期待していますよ」

「任せてもらおう」

「その時はアイリスさん…貴女にもお手を貸してもらえますか?」

アルビレオ・イマ…なぜ、私に聞くのですか?私はどうもしません。私の存在は全て葵君と共にあるものなのですから。他のヒトに従う気もありませんし理由もありません。…ですが、まぁ敢えて言うなら…。

「そう…ですね。葵君が手伝うのなら…とだけ言っておきます」

「ふふ。ええ、それで構いませんよ」

微笑みを顔に、はり付けて何を考えているのか、わからないアルビレオ・イマ。全てとまで言わないまでも私達が動く“理由”は見抜いているようだ。私達もあからさまに葵君のためにしか動かないのだからわからないほうがおかしいか…。

本当に喰えないヒトですね…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

――帝国城内、葵の執務室…。

Ｓｉｄｅ　葵

そろそろ到着しても良いと思うのになぁ。もしかしてナギのヤツ、柄にもなく落ち込んでるのか？グズついてるナギを引っ張ってきてるから皆、遅いんじゃないだろうな？ハハ、まさか、な。

――トントン。

「ん？はーい。開いてるよ」

「失礼します。皆さんが到着しましたので、お連れしました」

「おー？皆、長旅、お疲れさん！到着が遅れてたから心配して…ん？アル。ナギのヤツどったのよ？ちょっち暗くない？」

「ふふ、先程もアイリスさんに同じようなことを聞かれましたよ。実は…」

コソコソとアルと密談ヨロシクして話して理由を聞いていたら、だんだん話しの内容に呆れてきた。

「はぁ？そんなことで？…バッカらしい！落ち込むだけなら誰にだってできるだろうが…。要はこの後“どうするか？”だろうが！おい！聞いてるのか！？ナギ！お前に言ってるんだぞ！！」

「おい！葵！言い過ぎだ！」

詠春！放せ！イタタタタッ！？そんな強い力で肩掴むんじゃねぇよ！痛いだろうが！？俺はナギに話しがあるの！もう、こうなったら…。

「詠春！うっさい！俺はこの腑抜けに話しがあるんだよ！…アイリ！」

「了解しました。詠春さん、すみません。今は葵君にお任せください」

「え？…あっ！こら！待っ！ガッ！？」

アイリが詠春を俺から引き剥がして間接を極めて取り押さえる。…どうでもいいけどアイリ？神鳴流の使い手たる詠春を取り押さえられるってすごいね？詠春も女性相手に本気を出せないのもあるけ

どさ。

それにしても、詠春は時々過保護で困るな…。将来、子供ができたら過保護になりそうだよ。

…まぁ何はともあれ、こういう時は誰かが言ってやらないとわからないんだよ！それにナギみたいな相手には挑発するくらいがちょうどいいくらいだ。元がバカだから悩むだけ無駄なんだ。だったら行動させたほうがいい。

なにより、俺がドンヨリした雰囲気に耐えられそうにないッ！！

「…せぇ…」

「あ〝っ！？聞こえねぇぞ！コラッ！！はっきり言えやッ！？」

あー！あー！聞こえませんねぇ！？いつものバカ元気はどうした？…もっと声、出せよ？小僧。

「うるせぇ！！って言ってんだよ！！」

――バンッ！

受け止めた掌が痛ってぇ…。でも、ここは我慢の子です。だが！ナギはブッ飛ばす！こいつを励ますとかあったがソレとは別問題…。ヤラれたらヤリ返す！常識でしょう？

「ハッ！腑抜けたお前の拳なんて羽毛よりも軽いんだよっ！ヤ！ル！な！ら！…コレぐらい！！ヤレやッ！！！」

――ドゴンッ！！

「グハッ！！」

俺の拳がナギの顔面に綺麗に決まって壁際に吹き飛ばされる。

ああ、くそ！殴った拳が痛ってぇな！俺は素手派じゃなくて武器派なんだよ！何でこんなことしてんのかね？俺は！ついナギの腑抜けた姿にイラッときて、やっちまったが…。仕方ない、もうちょっち発破かけとくか。

「アリカ陛下はお前と別れる前になんて言っていた！？…その想いまで裏切るのか？」

「それはっ…お前に何がわかるってんだ！？」

知らんな。俺は監視映像に合った内容から推測しただけだもん。だが、画面越しからでも伝わってくるアリカ陛下の民を想う、その心はウソじゃない。だが、ナギへの想いもウソじゃない。板挟みだったんだろうさ。

王族たるものは人生の全てを賭して国と民を守るものだ。プライベートなんてあったものじゃない。自分の人生を自分の思いどおりにできないんだから。はぁ、これだから権力ってのは面倒なんだ…。だが、第三者の視点から見たらそんなものだろう。

とりあえず、今はナギのヤツをどうにかせんとな…。

「ああ！“直接”　は、わからないね！お前は何も言わないしな！そしてアリカ陛下の言葉は他の誰でもないお前だけにあてた言葉だ

からな！」

「…っ……」

言葉に詰まってんじゃねぇよ、コラ。…何だよ？その顔は。言いたいことがあるなら言い返せ。視線を逸らすな。ちゃんと俺の眼を見ろ。珍しくマジメに相手してやってんだからよ？

はぁ…仕方ない、か。

「そ・れ・か・ら！年長者からの忠告だ。覚えとけ！“考えている内に後悔するなら、その前に動け”だ！だいたいお前が物事を考える口かよ？普段のバカみたいな行動力はどこ逝ったんだ？あぁ？？」

「……」

…何、キョトンとした顔してんだよ？そんなに意外か？俺がお前に助言するのが。あー…まぁ今まで散々挑発したから当然かね？面倒くせぇヤツだな。

あ、よく考えたら…こいつ、初恋だったのか？アリカ陛下が初恋の相手かよ…ｏｒｚどんだけハードルが高いんだよ…。俺には無理だわ。ナギ、ゴメン。お前はヘタレじゃないよ。ある意味で勇者だ。“Ｍな人”って意味じゃないったら意味じゃない。コレ本当。

…ん？もういい時間か。なんだかんだで時間くったな。

「まぁ、幸いにもまだ時間はあるようだ。ここに滞在している間、しっかり頭冷やしな。…アイリ、もう放していいよ。皆を用意しておいた部屋に案内しといてくれる？」

「はい。…皆さん、お部屋にご案内します、こちらへ」

倒れていたナギは詠春が肩を貸して連れて行く。他の面々はその後を追って俺の執務室を出て行った。出て行く時に俺の顔を見て苦笑するのはどういうことだ?たしかに強引だった気がしないでもないが…アレくらいしとけば必ず立ち直るだろうさ。

後とはまぁ時間だな。そう、時間はある…。オスティア崩落事件の事後処理もまだまだある。その時間は以って一月半から二ヶ月…。その時が来たらアリカ陛下は各国から世界に対しての生贄にされるだろう。

そうならないように帝国からも働きかけるように俺からも上層部に進言してみるが…。連合の…というよりメガロメセンブリア元老院議員には届かない願いだろうな。こんなことテオには話せないし。話したとしても第三皇女というだけでは立場がやや弱い。他国の問題だし。

帝国の救援部隊を送ったのはこうならないためにも、という考えで送ったのもあったのに。既にメガロメセンブリアの重装兵団が現場に居て災害現場の指揮を執っていた。後手後手だったな。これだから陰謀とか好きになれない。俺も似たようなことはしていたがまだ可愛いもんだ。

とりあえず執務室の椅子に腰掛けて一言…。

「まったく…。世話の焼けるヤツだな」

「ふふふ、私から見たら我が君も大分世話好きと見えますが?」

「姉上、まぁそう言うな。我が君もなんだかんだと言いながら心配なのだろうさ」

「ハオ、それにユエ…いつから？」

おぅ？皆、出て行ったと思ったのに新たな人物が発生したよ。それとハオ君、俺は世話好きではない！俺が本当に世話を焼くのは家族だけでござる！…まぁそれはいいか。で？ハオ、ユエの二人はいつ来たのかね？

「ふむ。小僧が我が君に拳を振り上げた時には、もう扉の前に居りましたな」

「ハオが突入してこないなんて…。よく我慢したね？…どうしたの？ポンポン痛いの？お薬なら直ぐにでも調合するよ？」

「失礼な！…私とて…私とて…その…無闇矢鱈と突撃はしませぬ！」

そうは言うけど今までのことを思い出したら…ねぇ？必ずと言っていいほど出現してくるじゃないか。そんなハオのこと俺は好きだけどね♪なんだか可愛いじゃない？子犬みたいで。…でも、きっと、ドーベルマンの子犬だけどね。

とりあえずラミエルさん、録画スタート…。

「本当かなぁ。…それでユエ、本当のところは？」

「ハ、私が羽交い絞めにしておりました…。引っ掻かれるわ暴れるわで、ソレはもう…」

「ユ、ユユユユエッ!?裏切りおったな!我が君には内密にしてくれると約束したではないか!?」

「はて?何のことやら…。それとも姉上は私に、我が君へ嘘を吐けと言われるつもりか?」

「うぐっ…。それは…んむぅ…」

かーいーなー♪ハオったら♪ちょっち目元がウルウルしてきました!普段がキリッとした麗人だからギャップがスゴイ!からかうのが楽しいですよ?もう一度だけ言おう!かーいーなー♪ハオったら♪もう、大好き♪

「何はともあれ、ユエ、お疲れ様…。後でお手入れしてあげるね?」

「はい、お願いします♪」

ユエも俺の意図が伝わったのか、ニコニコしている。軽くお仕置き代わりにからかうことにしたけど…。やってみたらやってみたで、コレはなかなか…。楽しいな?うん。もうちょっとだけからかわせてもらおうっと♪

「ハオは…後でちょ～っち“お話し”しようか?」

「し、承知…。ぐすっ…」

おぅふ!?泣きそう!?いかん、いかん!ここまで!ここまでーっ!…いや、うん。正直に話すと泣き顔のハオにゾクッと来ました。変な癖がつきそうになった…。このことはもちろん、秘密だけどな!

「……くっくくくっ。大丈夫だよ、ハオ。冗談だから。ちゃんとユエと一緒にお手入れさせてもらうよ」

本当にね。決戦直後は取って返して帝国に戻ってきたからそんな時間もなかったからな。一度念入りにお手入れしておかないと。

「なっ！？…酷うございますぞ、我が君！私は気が気ではなかったのですぞ？」

「あっはっはっ！ごめん、ごめん。それとユエも冗談に付き合ってくれて、ありがとね」

「なに、構いませぬ。姉上の慌てふためく姿なぞ、最近は稀ですからな。ふふふ」

本当にありがとう。おかげでいいモノが見られました。今回のハオの表情とかはラミエルさんで動画記録しておいた。今もしてるよ！しかも最高画質でね！これは思い出ファイルに保管です。プロテクトは完璧！誰にも開けられないよ！

そう…アン以外は、な…ｏｒｚ

あの子、前からブラックボックス化が進んでたと思ったらね。今も更に進んでいて半精霊半機械の高次元量子コンピューター化してたのよ…。もうどんなに暗号化した防壁だとしても紙クズの如く意味がないのー…。

アンから逃れるなら完全にネット回線から物理的に切り離してスタンドアローン化するしか手がないと来たもんだ。

この話し、今はいいな…。

「うぬぬ…。二人とも悪戯が過ぎます！私で遊んで楽しいのですか！？」

この子ったら今更、何を言ってるんだろ？腕をバタバタさせて…かーいーなー♪流石にしつこいか…。でも、この世界は可愛いモノが正義だと思うんだ。故に俺は言い続ける！可愛いは正義だ、と！！それはともかくハオに最後の一手を…。

「え？何を言ってるの？楽しいよ」

「私もだよ、姉上？楽しませてもらった」

「ぐぬっ…うぅぅ」

「コレに懲りたら騙そうとしないことだな。なぁ？姉上」

「…うむ。すみませぬ、我が君」

素直に謝罪できるのは立派なことだと俺は思うんだ。やっぱりウソはよくないよね？…いや、わかってるって。こんな小さなウソがどんなもんだとは思ってるよ。ただねー…。ウソを吐くならもっと上手くしなくちゃね。

じゃないと今回のように反撃されちゃうし。反対にからかわれちゃうもん。ハオは根が素直だから虚言や陰謀とかは向かないものね。簡単にわかっちゃったよ。まぁ今回のことを反省してより精進してくれることを期待するとしよう。

「いいよ、いいよ。冗談だし、気にしないで。ははは っ」

「我が君！もう、笑わないでくださ れ！」

笑いますよ？楽しいもの。笑わなくてどうするの？

「はっはっはっ」

「我～が～君～！」

ハオ達のおかげでナギをブッ飛ばした時の雰囲気を晴らすことができた。気分は上々だね。やはり家族は偉大だと思うこの瞬間ですな。ナギにも伝えるべきことは伝えたし、後はナギ次第だ。まぁあのナギ（バカ）なら大丈夫だろう。

ナギが復活したら絶対ケンカするだろうなー…。い、今のうちに武装を用意しとこうかな？なは、なははは…。はぁ～～～…。もう、寝よ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第十八話「完成予定と合流と拳の一撃と」（後書き）

アイヤー…。ナギを殴ってハオ達とイチャついて終わっちゃったｏｒｚ
目安として一万字前後の文字数を目標にしてるから大変です。

前半の兵器開発予定の影が薄くなりそう。

でも表のようなことはしたことなかったから一度はしてみたかたった。
今後はもうやらんと思う。面倒くさいものですなコレって。
兵器とキャラの設定表を別で作って乗せることも考えてますけど…。

これっていると思います？

でもまぁ一度、作ってみようかな。
今までのを整理する意味もありますしね。

第十九話「ナギとテオドラと部隊再編と」（前書き）

皆さん、どうも！
最近、書き手ではなくて読み手に戻りそうな鉄　桜です！
個性的な二次モノがいくつもあるので読みたくなり…読んでました
ｏｒｚ
ごめんなさい…。

［なのは］の加筆修正もしているんですが、コレがなかなか難しい！
というより！自分の未熟振りを思い出させられてヘコんでますｏｒｚ
気持ち的に恥ずかしいものがありますね！ハハハッ！…はぁ。
では続きです！どうぞ～！

第十九話「ナギとテオドラと部隊再編と」

――帝国城内、葵の執務室…。

Ｓｉｄｅ　葵

翌日、朝食を食べて執務室で帝国を出るために色々と後任への引継ぎ準備をしていた時の話しだ。突然、ナギが一人で俺の執務室を訪ねてきた。

――ガチャ！

「アオイ！いるか！？」

そして訪ねて来たナギの顔は昨日までの腑抜けた顔と違って何かを決意した者の顔になっていた。無駄じゃなかったみたいかな？こんな顔ができるようになったということは。まぁ俺もナギが立ち直るのが、こんなに早いとは思わなかったけどな。

「バカナギが…。“いるか？”じゃないだろ！？入る前にノックくらいしろっつうの！」

「ハハッ！わりぃ！わりぃ！でも、気にすんなって！」

まったく…。心配したと思ったら直ぐにコレだ。やはり発破かけたのは正解だったようだな。随分と元気なもんじゃないの、このバカったらさ。…てかよう、俺のところに何しに来たわけよ？…もし

かして!?昨日の仕返しか!?

「…まぁいいけど。で?…何しに来た?」

「ああ、それ、な。…昨日、お前にブン殴られてから色々考えたんだけど、な?お前に言われたように考えるのは性に合わねぇから行動することにした!!」

…なに、この子?ものすっごく元気なんですけど。お兄さん、このテンションついていけないです。とりあえず、今後の行動方針というか決意みたいなものを俺に報告に来たってだけでケンカをしに来たってわけじゃなさそうだ…。しかし、“行動”…ねぇ?

「ほう?…それで?どう“行動”するつもりだ?」

「おう!とりあえず、あの姫さんの願いどおりに“謂われなき無辜の民達”ってヤツを皆、救ってみせるぜ!姫さんもソレを望んでるはずだからな!」

お、大雑把だな…、おい。救うったってどれくらいになることか、わからんのに。その場で救ったから“はい、幸せ”とはいかない。後にはその人の生活がある。難民としての受け入れ先も見つけないといけない。

武力介入するよりも、よっぽど面倒くさいことになるのは目に見えている。この先、ナギの歩む道のりは辛く厳しい茨の道となることだろうな。それに付き合うかどうかは個人の自由だ。俺は…まぁ少しくらいは付き合ってもいいかな?くらいかね。

なにはともあれ、今、俺の前にいるナギの顔には昨日までの腑抜

けた雰囲気はなくなっている。くっくっくっ、いい兆候だな。

「くくっくっくっくっ！ナギ？今のお前はイイ顔をしているよ。小僧が一丁前に吼えられるようになったんだからなぁ？はーっはっはっはっ！」

「うるせぇよ！笑うな！これでも俺なりに必死に考えてんだよ！…だから笑うなっつってんだろが！？」

このくらいでムキになりやがってまだまだ青いな。笑って受け入れるか受け流すくらいしてみろっての。だが、まぁ、ナギがこういう反応をしてくるから俺はますます笑って、からかうんだけど、ね？面白いことは大好物です！

「これが笑わずにいられるか！…ナギよぉ、お前、“あいつ”に惚れてんだろ？んー？」

「バ！？ババ、バババカなことホザくんじゃねぇ！！な、なんでオレがあんな姫さんなんかに…」

「おんやー？俺は“あいつ”とは言ったが“姫さん”とは言ってないよ～？？？んふふふ♪」

ちょっち揺さぶっただけでこの反応…。わっかりやすいなぁ♪この時の俺は思わず獲物たる目の前の赤ネズミ（ナギ）を弄ぶ黒ネコ（アオイ）のような顔をしているだろうな。

「ッ！？ハ、ハンッ！なに言ってるのか、わ、わわからねぇな！！」

腕組んで目線までを逸らしちゃって、まぁ♪顔が赤いぞ、コノ♪

ナギが狼狽しているのが手に取るようにわかるねぇ♪いつから意識してるのかはわからないが少なくとも、この時には少なからず自覚はしているようだ。

んー…ここはもうちょっち揺さぶってみるか？んふふふふ♪

「誤魔化すんじゃないよ。ネタは挙がってるんだぞぉ？…“どこへだって連れてってやる”だったか～？んふふふ♪」

「な！？な、ななんでアオイがそれをッ！？」

おぅ！？いい反応だな♪やっぱりからかいがいのあるヤツだ！

「おっと！情報源は明かせないぞ？俺の信用に関わるからな。しかし、まぁ…、この色ボケ小僧が！喜べ！俺の予想では、あっちもお前のこと満更でもなさそうじゃないか？んん？お前ら両想いだぞ？よかったな～？ナギちゃ～ん♪」

「く、くっそぉぉぉ…！言わせておけばぁぁ…！」

「なんだ？嬉しくないのか？ん～？？くくくっくっくっ！」

「グッ！んぐぐぐ…。ハンッ！」

ありゃりゃ？口では勝てないとやっとわかったのか、ナギはダンマリを決め込んでしまったようだ。若いねぇ。お兄さん、ニヤニヤ…もとい！ニコニコしちゃうじゃないか。これなら俺もナギ達と行動してたほうが、からかえて楽しかったかもしれんな。惜しいことをしたかな？ふふふ。

まぁこの後は一通り俺がナギをからかうことで時間が過ぎてた。
早いもんだね。もうお昼近いよ。

それで満足した後に俺はナギと…というよりその後のアルと詠春を交えての話し合いで二日後には帝都を出立し、今も続いている紛争地帯などに赴いて救援活動をすることになった。

…あ？ジャック？アイツは…わかるだろう？ナギ並みにバカなんだから“むつかしい話し”がわかるわけないじゃん…。ナギと一緒に外出してもらったよ。帝都見物だからナギを案内もできるだろうしな。

それでナギの大雑把な方針をアル、詠春、俺の三人でより具体的な方針にしてんの。前まではゼクトもここに加わっていたけど…ね。もういないし！負担が…俺らに負担が～ｏｒｚあいつ！何、勝手に消えてんだよ！？ハァ…。

俺の家族達の大半は［工房］内でアングレカムとイキシア？の正式配備の準備。それと今回、正式配備されることになった機動兵器の部隊が誕生したことで全体的に部隊の再編をするために奔走している。そのため人数は割けない。

アイリの話しでは再編は大きく分けて三つの部署になるらしい。“情報部”、“作戦部”、“司令部”の三つの部署だ。今まで曖昧にしていた役割を明確化して組織としての基盤を固めようというのだ。

今までのうちは傭兵＋マフィアの形態だったから丁度いいと言えば丁度いいんだけどね。無駄なところを省くことができるし。アイリも一度、再編したいみたいなことは前から言ってはいたんだけどさ。

大きな戦いはほとんどなかったし、皆が何でもこなせるから大雑把な編成でもこれまで十分だったのもあるの。でもまぁ今回の再編はアイリにとっても渡りに船だったみたいだね。生き生きとしてたよ…。

これまで情報管理が面倒だったのもあるのかも。アンが加わってからは少し楽になったみたいだけどね。…なんか、今までごめん、アイリ。

とりあえず後任への引き継ぎ準備が終わったら一度テオのところに報告に行かないと。…黙って出立したら何を言われるか、わかったものじゃないからな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――帝国城内、第三皇女の自室…。

Ｓｉｄｅ　テオドラ

――むぅ…暇じゃ…。

［完全なる世界］との最後の戦いを終わらせて数日。あの戦いの後、記念式典だの今回の功績を表彰するお披露目などとイベントが盛り沢山であったのに、その時のアオイときたら…。戦いが終わったらサッサとココ、帝国へとんぼ帰りしておった。

せっかく妾自ら記念の勲章を授与してやろうと考えていただけに楽しさは半減であったな。一応、今は妾の護衛であろうにアオイのヤツめ。あの時、擦れ違いざまに、あんなことを言いよってからにぃ…。

「テオはまだ小さいんだから遅くならない内に帰ってくるんだよ？」

…など、と言っておったのじゃ！妾は子供ではなく“淑女（レディ）”じゃと普段から言っておるというのに未だに子ども扱いしおって…。それにアオイの言いつけを守ったわけではないのじゃが…断・じ・て守ったわけでなく！妾の意思で帰ってきたのじゃが！

アオイは何やら忙しいらしくほとんど会うことがなかったのじゃ…。いったい何をしておったのかのう？侍従から話しを聞くにアオイは以前に比べて仕事のほうは一段落しておるようじゃし。時間は取れるはずなのじゃがの…。

まぁ今それは良い、な。それよりもオスティアのことじゃ。何が原因かは知らぬが突然魔力消失現象が起きて浮遊島が墜ちたと耳にした。そしてさほど時間をあけずにオスティア崩落後、妾のいる帝

国からも彼の国へ救援部隊が物資を携えて出立したと聞いた。

妾は正直に思うに帝国が救援部隊を同盟国でもないオスティアに派遣するとは考えておらなんだ。この時アオイの手の者達が、なにやら暗躍しておったみたいじゃが…。まぁ良いとその時は捨て置いたのじゃ。妾に不利になることはせぬじゃろうからな。

しかし、今頃、アリカはどうしておるじゃろうか？今はメガロメセンブリアの議会に出席してオスティア国民のために物資の提供や難民の受け入れ先を話し合っておる頃じゃろうかの。

――トントン。

ム？？？

「誰じゃ？」

「俺だ。入っていいかな？」

アオイ？こんな中途半端な時間に何用じゃ？夕食に誘うにしても、その時間には少し早いようじゃが…。何はともあれ…。

「良い。入ってくるのじゃ」

「こんにちは、テオ。ん？…なんだか随分久しぶりな気がするな」

「そのとおりじゃな。“随分”久しぶりなのじゃ」

戦いは終わったのに今まで何をしておったのじゃアオイは？遊んでくれないので寂しかったのじゃぞ？…そのような子供のようなこ

とは正直には言えぬから歯痒い思いをするのう。ふぅ…。

「…テオ、なんか言葉に棘がないか？」

「気のせいなのじゃ。…それで何用で参ったのじゃ？お主のことじゃ何かあったのじゃろ？」

んー…気のせいかなぁ。などと言ってアオイは首を捻って考えておるのじゃ。まったく…、妾の気持ちも知らんとはのう。今度、アオイに時間を作らせて妾の気が済むまで遊びに行くのも良いの♪うむ！今までの埋め合わせにそうするのじゃ！

…問題は“いつ”、“どう”やって誘うかじゃの♪おっと、いかん。葵の用件をまだ聞いておらなんだのじゃ。

「テオ、今この帝国にナギ達が来てるのは知ってるよね？」

「無論じゃ。城内に入るのじゃからソレくらい当に知っておる」

この城に入城するのじゃ、当然、セキュリティは万全を備えておる。誰がいるかなどの報告はすぐさま王族の者はもちろん警備の者達にも入るようになっておる。今回はアオイから事前に申請があったことから前もって皆が知っておることになる。

この体制で、知らないものが居るとしたら、その場に居合わせなかった愚か者か、間抜けな侵入者以外にありえないのじゃ。それで[紅き翼]の者達がどうしたのじゃ？

「うん。それでな？俺もそろそろ仲間と合流しようと考えてな。今日は出立前の挨拶に来たわけだ」

「……」

アオイが妾に理解できぬ…いや、理解したくないことを何か言っておる…。

「俺の後任への引継ぎはほとんど終わらせたから、とりあえず出立は二日後を予定してる」

「……」

いや、もう理解しよう。アオイが言った“二日後には出立する”…。離れてしまう、のか？今先程まで妾はアオイと出かけることはできぬかと考えておったのに…。そのアオイは二日後には帝国を去ると言いおった。

――なぜじゃ？

「テオには世話になったから…。テオ？聞いてるか？テオ？」

「…な…じゃ…」

身体が震える…。声が震える…。頭の中がクラクラする…。自分では抑えようがない…。

「ん？なんだって？ゴメン、小さくて聞こえなかった。もう一度…」

「なぜじゃ！？と聞いてたのじゃ！！今のままで良いではないか！アオイは帝国に居れば良いのじゃ！なぜ居なくなる必要がある！？」

「い、いや、テオさん？ちょい落ち着けって。別に死にに行くわけじゃないし、何も泣くことないって…」

…涙？アオイに言われて初めて妾は泣いていることに気が付いた。じゃが今はそのような瑣末事を気にしてはいられないのじゃ。“大切な人”が遠くへ行ってしまうかもしれない大事な時なのじゃから。

「じゃが！ここを出て行くのじゃろう！？」

「それは…。うん、そうなるのか、な？うん。でももう一生会えなくなるわけじゃない。ちゃんと連絡は取れるってば」

「じゃが！じゃが…。それでは…ますますアオイと会えなくなるでは、ないか…」

こんな時に限って妾は本音が零れてしまった。やはり“友達”、それも妾は“親友”と思っておるのじゃから会えなくなるのは寂しい。いつでもアオイに会えるように傍に居てほしい、と考えてしまうのじゃ。これは妾の我侭じゃとわかっておる。

じゃが、そうと理解しておっても気持ちが納得していないのじゃ…。

「は？…いやいやいやいや！待て待て待て待て！？…そんな事はないな！うん！」

何を一人で百面相しておるのじゃ？変なアオイじゃのう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　テオドラ

Ｓｉｄｅ　葵

「じゃが！じゃが…。それでは…ますますアオイと会えなくなるでは、ないか…」

テオが放った言葉にしばし呆然としてしまったぜ。何これ？

「は？…いやいやいやいや！待て待て待て待て！？…そんな事はないな！うん！」

潤んだ眼で俺のことを見ているテオ。正直、可愛いと思いました！でも、残念！俺はもうちょっと成長した女性が好きなんです…！俺はロリじゃないんだ！ノーマルなんだ！…ちょいＳだけどロリじゃないんだ！！

――ん？？？

フッ…この雰囲気で勘違いしちまうところだったｏｒｚまだテオは十とちょいの歳じゃないか…。恋愛感情なんて早過ぎるよな。小学校高学年の年齢くらいか？まだ、早い早い♪ふぅ、焦って損した。落ち着いてテオを見てみるとまだ目線を逸らさずに俺を見ている。

最近は疎かにしていたとはいえ、よく遊び相手になっていたからここで別れることに寂しさを感じてるんだな。んー…俺もそこそこテオと付き合いがあるから離れるのは寂しいものを感じるな。なんつうか…お父さんな気分？

「アオイは…その…どうしても、行くのかの？」

むー…っ！？潤んだ目で上目使いするとはテオ…そんな高等テクニックをいつの間に…！？少し小首を傾けるのもポイントが高いね！パーフェクトだ、テオ。君は可愛いよ。残念ながら今は恋愛対象外だけどな！父親みたいな感情はあるけど…。

「うん、準備はもう済ませてあるからね」

行くのか？と言われればまぁ行くけどね。もう準備は済ませてるし。ナギ達の休憩がてらここに滞在してるだけで出立しようと思えばいつでもできるよ。

「そう、か。じゃが、まだ時間はあるのじゃろ？出立は二日後と言っておったのじゃ」

「うん？まぁそうだけど…」

むむむ？？テオは何がしたいんだ？行くという意志は伝えたし、それが変わらないことも賢いテオなら俺の雰囲気から感じ取るだろう。マジで何がしたいんだ？

「ならば…ならば！明日は妾と一緒に過ごせぬか！？」

おぉ？？つまりアレか？今までのでは遊び足りないから明日は死ぬほど遊び倒してやるということ？そのために俺に一日時間を空けろ、と…。俺の体力持つかな…ｏｒｚ戦闘とはまた違った疲れが溜まるから大変なんだよな。

でも、これを逃すと次はいつテオと遊べるかわからんしな…。

「んー…。良し！いいよ♪どこに行こうか？」

「良いのか！？それなら、それなら！まずは…！」

俺の返事に満面の笑みなんか浮かべちゃって、可愛いなぁ、もう♪先程までは泣き顔だったのがウソのようだよ。

アレコレと一日遊び倒すプランをテオが楽しそうに話すのを見て俺はテオのお誘いにいい返事ができたことに嬉しさと、明日のことを思い、笑顔になるのをこの時に感じた。出立まではテオの相手をするのも、まぁいいかな、と思わせる時だったね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――［工房］内、アイリスの執務室…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

私は今、正式配備されるイキシア？とアングレカムを理由に組織の再編計画を作成している。今までは一中隊１２人からなる十八の中隊をその時その時で役割を回ししていた。おかげで当初は情報や書類はごちゃごちゃで整理するのが大変だった。

いつか組織の効率化を図ろうと考えていただけに今回のことは私

にとってまさに渡りに船だった。葵君にも再編案のことは話してある。再編に関する了解も取れた。後は実行するのみだ。

今考えてる案は、葵君にも少し話しているのだけど緊急時には移動要塞と言ってもいい機動戦艦［アングレカム］があることから、そこを後方支援（補給・整備・移動拠点）・命令を通達する“司令部”。

情報を司る部署。見え難い脅威から皆を守る“情報部”。この部署の人達は対魔対人戦闘もハオとユエの姉妹が鍛えた者が多いことから拠点防衛のため警備隊や戦闘隊も兼任している。守勢を主とする部署ね。

逆に“作戦部”、こちらは攻勢を主とする部署。大規模な作戦任務を実行するための役割があるわ。因みに前回の戦闘でイキシアに搭乗して参加した者は皆この部署に配属される。搭乗経験者は今のところこの子達だけですからね。今後は私を含めた皆に訓練を義務付けるけど。

とりあえずは大まかに説明してこのようなところかしら。

普段は葵君の喫茶［クレイドル］の店員として働いたり、［工房］内や隣接された施設などの管理をして通常時は過ごすことになるわ。それでも集団生活とはいっても皆にだってプライベートはあるから細かいところまで縛るような生活は良くないわね。

何よりもどうせ縛られるなら葵君に…んんっ！ごほっごほっ！！なんでもないわ…。

つまり何が言いたいかというと私達にだって生活があるの。元が

精霊や悪魔とはいってもね。今は葵君の手で新生した一生命体。ただ人とは違って“モノ”に対する欲望みたいなのが希薄というだけ。

私は元悪魔だから元精霊のことはわからないけど精神生命体だったというのもあるのかもしれない。“物”に対する欲望というものはよくわからないから。…ただ人の“魂の輝き”には惹かれるものを感じる。これは精霊も悪魔も変わることはないだろうなぁ。

私は葵君の、その“魂の輝き”に惹かれて悪魔契約を結んだ。皆も似たようなものでしょうけどね。ふふふ♪葵君は他の人とは違う“魂の輝き”をしていたもの。まるで誘蛾灯に誘われるように無条件に惹かれてしまった。

それで…しばらくしてから精魔奇兵に志願してこの姿に新生したのよね。その時の同期は１８人いて今の指揮官クラスの皆なの。私達“１ｓｔタイプ”は後から新生した兵隊クラス２１６人の“２ｎｄタイプ”以降からのヒトと比べても身体の創りは多少ヤンチャな仕様になっている。

なんと言うか…その、個性が強いと言うか…素直になった？…むー…葵君への好意がより顕著に現れるようになったの、よね。まぁここにいる人達は大なり小なり好意を…って！？大しかいないじゃないの！気が付いたらこんなに増えて…う、うぅぅｏｒｚ

まぁ家族の彼女達はこの際です、良いとしましょう…。でも！他の人に私…達は負けないわ！葵君は家族の皆以外には誰にも渡しません！そう！葵君は私…達との生活を満喫しているのよ…！！

だいたい葵君は少しだけ無防備なところがあるのよ。グレート＝ブリッジ奪還作戦を境に、いつの間にか非公式のファンクラブなん

かができていたりしますし…。ミーハーなものとはいえ葵君へ好意を寄せる人達ですから、これぱかりは排除できませんｏｒｚ

当然、葵君には隠し通しました。情報が行かないようにしましたとも。葵君本人にそれとなく聞かれたこともありましたが必死に皆で誤魔化しとおしましたね。まぁこの苦労もたかが数十年の辛抱です。このくらいの苦労など葵君の貞〇を守るためですから安いものです。

んん、だいぶ話しが逸れてしまいましたね。

――トントン。

「アイリー？居るー？」

「ファレノか？扉は開いている。入れ」

何をしに来たというのだろうか？休憩の時間か何か？

「ハーイ、アイリ！部隊再編のほうは順調かな？かな！？」

「な、なんだ？いきなり…。言われなくても再編案は順調に作成中だ。ほら」

ふぅ、何をしに来たかと思えば再編後のことが気になって来ただけか…。ファレノは戦闘能力・事務処理能力、共に優秀なのだが時々こうして落ち着きがなくなるのが玉に瑕だな。そんな彼女は今、私が渡した作成途中の再編案を流し読みしている。

「ふぅん、どれどれ…？…ん？情報部と作戦部は２ｎｄタイプ以降

の皆で部署を構築するの？私達１ｓｔタイプはどうするの？」

「彼女達も新生した今の身体に馴染んだこともあるが、まだ百数十年とはいえ、それなりに経験を積むこともできた。なにより彼女達だけでも十分に役目を果たすことができる、と信頼し判断した」

今までは一中隊１２人＋指揮官１人という編成の体制をとっていた。これは指導目的が多くあったことからの体制だ。今では彼女達も十分に経験を積みもう任務などを任せても安心できるレベルに達したと判断した。

機動兵器というものを配備する今では搭乗経験のある彼女達のほうが私達より乗りこなせているとも言える。まぁイキシア？が正式配備されたら私達もしばらくは操縦訓練に入るのだがな。

「なるほどねー…。ふむふむ…おっ！？アイリ！アイリ！ここに“親衛隊”ってあるけど…これは！？」

突然、駆け寄ってきたファレノに何事かと思った時には、時既に遅く彼女の手は私の首の頸動脈をイイ感じに“極めていた”。

「ファ、ファレ…ノ？答え…る。答えるから…く、首から手を…放し…ガクッ」

放せ…放して、くれ…。あ、…ダメ…意識…が…まっし、ろ…に…。

「ああっアイリッ！？ごめん！大丈夫！？アイリ！お願い！死なないでーっ！！」

「死んでないわよ!!!…まったく。んん、それで親衛隊についてだがな。今まで後輩を指導、指揮してきた私達１ｓｔタイプの１８人からなる近衛隊のことだ。そこに記してあるように“司令部”付きとなるがな」

死ぬかと思った…。視界一杯に真っ白な風景が見えたように感じたけど…。ファレノのことが少しだけ怖いと思ったのは間違いだと思いたくないわね。これからは気をつけて発言しないとね。また首を絞められたら溜まらないもの…。

「葵ちゃんの一番近くに居られるってことなの!?」

「い、いや、一番かどうかはわからないが…他の人よりは近いのではないか?というより顔が近いってファレノ…」

近いかどうかで言えば近いと思うわよ?親衛隊の名は伊達じゃないもの。…少し職権乱用な気がしないでもないけど。

「むー?…あれ?この書類にハオさんとか８人の名前がないんだけど…あ!?よく見たら葵ちゃんの名前もないの!?どうゆうことなの!?これ!!」

「だーかーらー!!首を絞めるんじゃないわよ!!!苦しいでしょうが!?」

今度はなんとか反応できた…。だけど!なんなのこの力は!?ものすごく強いんですけど!なんとか首が絞まるのは押さえてるけどファレノの指が僅かに食い込んできた。息苦しさを感じる。ええい!このっ!

「そんなことは、どうでもいいから答えるの!!私の葵ちゃんは!!?」

「どうでもいいって何よ!?というより葵君は貴女だけのじゃないわよ!?私の…んんっ!私達、皆のご主人様です!!」

“私の”発言だけは許せないわ!葵君は私のご主人様なの!…って言えたらいいけど。流石にそれは言えない。ライバルが多すぎるのもあるが私は皆も好きだからね。それに下手な発言をしようものなら“襲われる”…。

いや、“襲われる”は正しくない“修正される”が正しい、な。うん…。水底に沈められたり、局地的な暴風に晒されたり、地獄の業火に炙られたり、飛んでくる剣の的にされたり、三段階で根源的な恐怖を感じられたり…と、まぁ、色々とあるのよ。

「えー…」

「“えー…”じゃないわよ、もう…。はぁ…」

不満そうにしてるんじゃないわよ…。この子は怖くないのかしら?こういうところはある意味尊敬に値するものを感じるわね。誰にも聞かれてなければいいけど…。

「あー、溜め息、吐いてるの。葵ちゃんが溜め息、吐くと幸せが逃げるって言ってたよ?」

「…いいのよ。私は葵君の傍に居られれば幸せですから。…話しを戻すぞ?」

それは単なるジンクスであって事実そうなるとは限らないわよ。だいたい言ったように私は葵君の傍に居られれば幸せなのよ。不満はないわ。それはまぁ？二人きりでどこかに出かけたいと思わないでもないけど…。

とにかく話しが逸れたから戻さないと…。

「ん？…あー！？そうだよ！これはどういうことなの！？」

「どうもこうもないわよ…。葵君達９人は独立して動くだけよ。私達はそのサポートよ、サポート」

やることは今までと変わらない。葵君の敵で障害となる“モノ”を、その悉く排除するだけよ。変わったのは役割分担が明確化しただけですもの。…まぁ親衛隊所属予定の私達は葵君直属になるのよね。

今まで１ｓｔタイプでは私とファレノだけが葵君直属だったのに、これからは皆が来るのよね…。何か問題が起きる前に予め言い含めておく必要があるわ。先程も考えてはいたけど何で私達１ｓｔタイプにはヤンチャな子が多いのかしらね…。能力が高いのが救いだけど…。

「えー！？じゃ、じゃあ葵ちゃんはどこに所属するの！？」

「一応、葵君を含めて皆さんは司令部に所属予定ではあるけどね。…ハオさん達とは違って私達は情報収集とか大規模な戦闘でもない限り出動はないと思うわよ？」

「うなー…。離ればなれ、なの…。うぅぅ…」

「わー…。すっごい落ち込みようだわ…。ファレノ落着きなさいって、いつもどおりと変わらないわよ。部隊再編っていっても通常時は変わらず［工房］なんかの魔法球の管理とか喫茶店のお手伝いなんだから」

何もそんな床に崩れ落ちて突っ伏すほど落ち込まないでもいいでしょうに…。ファレノは大げさなのよ。通常の時はいつもどおりなのだから気にする必要はあまりないわよ。

「うぅぅ、でもー…」

「葵君もファレノが泣いてたら心配するわよ？それでもいいの？」

泣きそうにならないでよ…。私が泣かせたみたいじゃないのよ。それにファレノが泣いているところを葵君に見られたら間違いなく心配させちゃうでしょう？ファレノも悲しませたくないでしょう？泣くより笑っていたほうが幸せよ。

「うぅ、それはダメなの。心配させるのはダメ、なの」

「はいはい。それじゃ元気出していきましょう。ね？」

「うん！」

ファレノもわかってくれたようね。泣いた子がもう笑ったではないけどいい笑顔になってるわ。葵君じゃないけどやっぱり家族には笑顔でいてほしいものね。

それから後はファレノも交えて編成案を考えていた。ファレノは

隙あれば葵君の傍に自分を配置しようとするから目が離せない。だけど二人でワイワイと相談しながら進めるのは楽しいものね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

そしてその日は、そのまま時間が過ぎていった。

第十九話「ナギとテオドラと部隊再編と」（後書き）

どうですかね？ナギはちょい無理やりかな？と思ったのですが…。
多少、無理矢理でも話しが進まないので作者の強権（わがまま）を発動！
まぁ、何とかなるでしょう、ええ…。

え？テオドラ？…作者の印象です。友達で押して行こうかと…。
流石に幼女に手を出すのは如何なものかと作者は思うのですよ。

ダメです！ＹＥＳ！ロリータ！ＮＯ！タッチ！の精神です！

…でも、愛でる分には文句は言いません、ええ。

今後もアイリスみたいに１ｓｔタイプからは新キャラ（名前有り）が出てくる予感…。
作者自身が、なぜか戦線恐々としています。

キャラの人気が無ければ名前だけ出て以降は出なくなる可能性も！？

ということも有り得るかも…。怖いですねぇ？

ではでは～！評価＆感想は随時受け付けてます！
今回はこの辺りで、チャオ！

第二十話「紛争と警戒と優しさと」（前書き）

更新し忘れてた…。
申し訳ないです。すっかり更新していたものと勘違いしてました。
「なのは」の加筆修正が思うように進展してなくてこちらが疎かになってしまいました。
もう一度、すまんこってす！

では、続きでっす♪

第二十話「紛争と警戒と優しさと」

――とある町の紛争地帯…。

Ｓｉｄｅ　葵

俺達が帝国を出立してから3週間が過ぎた。今は、つい先程まで戦闘のあった場所に立っている。所々で黒煙が立ち上っていたりする。あー…角の商店らしい建物なんか綺麗に崩壊されてらっしゃいますよ?うぅ、不憫よのぉ…。

ここの主人は、これからどうやって生活していくのかね?…というか、どこ行ったんかな?避難場所に誘導されたのか?それに、これをやったのって実は…。

「このバカナギが!加減して戦えって言っただろうが!どうすんだよ!これ!?ここを復旧するの“俺達”なんだぞ!?」

「だーっ!わるかったっつってるだろ!…いつまでも、うっさい!」

こいつなんだわ…。それにここだけじゃなくて俺達の居るここから奥の建物を三軒続いてブチ抜いてくれたりしてくれやがったのさ…。まぁナギ以外にもアルやジャック、敵の魔法の被害もあるから全てをこいつのせいにするつもりは無いけどな。

あ?詠春?あいつが町を気にしないで好き勝手に暴れられる性格だと思うか?それに詠春は神鳴流剣士だ。退魔剣士としての戦闘ス

タイルがそうさせるのか知らないが対人戦が滅法強い…。町の被害よりも人的被害のほうが高いんじゃないかね？主に敵の…な。

でもさ、でもさ？聞いてくれよ。…この町に、しばらく残って復旧活動をするのって俺ら“ファミリー”なんですぜ？ハハ、ハハハ…鬱だわ…ｏｒｚ総被害額がどれくらいのものになるのか…。

紛争が起こった、ここは三つの武装勢力が鬩ぎ合っている小さな町だ。それぞれの勢力がゲリラ活動をしては、町の住人に甚大な被害を与えていた。そんな危険なところ“だった”。…そう“だった”だ。最早、過去形ですよ…。

今、その各勢力の人員の、ほとんどが俺の目の前に積みあがって山のようになっている。重軽傷者多数だが幸いにも死者はいないようだ。怪我人には治療を施した後に拘束しているし暴れる者は問答無用で昏倒してもらった。

非殺傷装備の無人機達はせっせと倒した武装勢力の人達を運んできてまた新しい山を築いている。あ、山が３つ目に突入した…。俺はコレを見て溜め息だ。まさか、こんなにいたとはねぇ。この地域の後処理は俺が担当しているから億劫だな。

まぁ何よりも億劫なのが破壊された町のことなんだけど…ねｏｒｚ小さな町とはいっても人口およそ十数万人。町もそれ相応の大きさだ。一部の区画なんかは先程も挙げたものも合わせて建物が崩壊している。ここを復旧するのに時間も金もどれくらいかかることか…。

復興の人員は現地で力の有り余ってるヤツらを採用すればいい。問題は資金だ…国や地元有力者からの資金援助、それに一般市民か

らの募金などが資金源としてあるが全てを賄うには全然足りないのだ。しかも復興地域はここだけじゃない。まだまだある。

それも、これからこういう被災地というか被害を受けた町などが増えること請け合いよ？もういや…。書類なんか、もう見たくないわぁ…。アルや詠春なんかも手伝ってくれればいいのに数日もすると旅立つナギに付いて行って逃げるんよ？

どう思うよ、これ？ヒドクね？俺に恨みでもあるんかね？あるのか？アイツら…。うぅぅ、俺もう［紅き翼］やめようかな…。今後、アリカ陛下を救出したら、それを機に抜けて、また喫茶店やるか…。そろそろ戦うのも飽きてきたしなぁ…。手伝いが欲しいなぁ…。

はぁ、こういう事務処理が得意なガトウとクルトはアリカ陛下に付っきりのようだしな。その陛下も色々な交渉を各国相手にしている。国、墜ちちゃったものねぇ…。残された国民のこともあるから必死です。だが交渉の内容は思わしくないのが本当のところだね。

欲望と陰謀が渦巻くは、この世界の天高くに位置する伏魔殿（ふくまでん）也、ってな。

マジでやってらんね…。毎度、思うけど人の欲望には際限というものが無い。まぁ俺も欲望はあるけどね？それでも元老院のやつらほどじゃないがな。それはまぁともかくとして今はこの場の処理をするか…。

「はぁぁぁぁぁあああ…。これだから戦闘バカは…」

皆…今回、俺は決めたことがある…。それはな？これからナギには市街地での戦闘は任せない！ということだ！！金がかかって仕方

ないんだよｏｒｚ資金には限りがるんだからな。いい加減、やりくりが大変なの…。

「諦めろ、葵。ナギにいくら言い聞かせてもムダだ。あのどこまでも突っ走る行動力は止められない」

「詠春…。お前はすごいな？ナギのお守りを今までしてたんだから。…本当に尊敬するよ」

うん、マジで尊敬します。俺は皆とは違って帝国を中心にして活動してたからナギみたいな“困ったちゃん”のお守りはしていない。途中でタカミチ少年なんかが帝国にガトウから任された仕事とかで来ていたけど彼は手がかからなかったからね。楽なもんよ。

「…言うな。自分自身、いつ胃に穴が開くかと不安なんだからな」

「う〝っ…なんか、その…ごめん。…詠春！元気出していこう！なんなら今度、酒を奢るからさ！」

「…ああっ！そうだな！飲みに行こう！ナギのことは俺に任せて葵は自分のことをやってきていいぞ！」

本当にごめんね、詠春…。まさか意識しないようにしていたなんて考えてもいなかったよ…。俺は詠春がナギの無茶な行動を無意識に受け入れて慣れたものと考えていたからさ。まさか現在進行形で胃にキテいるなんて思いもしなかった。

とりあえず今度、飲みに行く前に、このあと良く効く胃薬を処方してあげるね。頑張れ、詠春！負けるな、詠春！！その胃に穴があく、その日まで！！！

「葵様！捕縛者の拘束、及び住民の避難区域への誘導を完了いたしましたわ！」

「お疲れ様、リチラ。拘束した者は後から到着する国軍に引き渡す準備だけしておいて、避難民には炊き出しをしてあげて。他はそれぞれ、臨機応変にお願い」

「了解いたしましたわ！お任せくださいませ♪では！」

今、報告に来た彼女の名前はフリチラリア。愛称はリチラ。元悪魔の精魔奇兵で前は中隊を指揮していた指揮官の一人。今は親衛隊の一人として活動中。

彼女、冷凍系の固有スキルを持つためか冷やし中華や冷製スープとか冷たい料理が得意です。マジで上手いよ？俺が好きなのは彼女が作ったバニラアイスかな。濃厚なミルクとコクのある甘味がたまりません！お好みでフルーツソースなんかをかけても美味しいね。

元指揮官だから親衛隊の皆は優秀でね。大まかな指示だけでやってくれるから俺の負担も減ったなぁ。アイリが組織の部隊再編してくれたから効率化してくれたからね。こんなに楽になるならもっと前にやればよかったよ…。

「ふふふ、貴方のご家族は本当に優秀なのですね？」

「アル？まぁね、自慢の家族だからな。…それでナギのほうはもういいのか？」

「ええ、だいぶ立ち直りましたよ。口には出しませんがアリカ様の

ことは未だに気にしているみたいですよ」

「くくくっくっくっ！それはいいことを聞いたな。今度皆で飲む時にでもからかうとしよう♪」

本当にいいことを聞きました！ナギをからかうネタが増えたからな！あのバカの初恋は応援してますよ。というか結ばれてくれないと主人公が生まれてこないし…。まぁ、そんな心配は無用のようだけど。…あの二人が両思いってのはウソじゃなしな。

いやぁ、若いっていいねぇ？お兄さん嬉しくなっちゃうよ♪はぁ…。俺も彼女とか欲しいなぁ…ｏｒｚ人の応援ばかりしてる場合じゃないよな…！ちくしょー！今度、このネタでナギのことをからかいつくしてやる！からかいつくしてやるぞーッ！！

「加減してあげてくださいね？アレで一途なところがあるのですから」

「初恋だからだろ？そんなもん。それにあいつらのアレは両思いだ。切っ掛けさえあれば一気に結婚まで行くかもしれんよ？」

「ふふふ、そうですね。私もナギとアリカ様の幸せを願っていますよ」

それは俺も思ってるけどな。嫉妬とかは別にしてさ。でも、ただ祝うだけじゃつまらないと思うんだよな～♪ここで俺はとあることにアルを巻き込もうと考えた。アルならば、この提案に必ずノッてきてくれると信じてな！

「…告白シーンとかの映像記録が手に入ったら見るか？」

さぁ！返答はいかに！？

「ええ、是非♪では私もナギのもとへ行きますね」

「ああ。手は尽くそう…。くくくっくっくっくっ！」

アル先生はわかってらっしゃる♪彼もこういう空気を読むことに関しては特に稀な才能を持つからな！ノッてくれると思ってたぞ♪…まぁ時々わかっていながら、敢えて火に油を注ぐようなことを仕出かすのはいかがなものかと思うけどね。

とにかく町の復興作業だな…。あぁ…鬱だ。…これからこんなのが続くのかｏｒｚ

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――時は流れて、ここはとある町の宿屋…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

私は新しく編成された親衛隊の皆と宿屋周辺の警戒をしていた。そして交替の者に引き継いで宿屋に戻ってきたのだが門前で情報部の者が経過報告書を持ってきたところに鉢合わせたのだ。

彼女達、情報部は敵地に潜入して相手の情報を入手する諜報一課。

敵からこちらの機密情報を守る諜報二課がある。他にも戦闘を専門にする三課があるのだが、こちらは敵施設占領や殲滅を目的している。

とにかく今、私は情報部からの報告書を受け取り一度、軽く書類を流し読みしていたが内容がマズイ。すぐに葵君の泊まる部屋の前に立ちノックの後に部屋の中へと入った。

「司令閣下。情報部から監視経過の報告がきました」

「アイリ…この書類の山を見て、それを言うの？」

数日前に制圧した、この人口十数万人の小さな町。都市機能の復興・回復のために葵君と私達は残った。そしてナギ君達は次の目的地とした、この町から西に百数十ｋｍ行ったところにあるやや大きな町に向けて早くも旅立ったのは今日の昼間のことだ。

そして葵君の座る机の上には紛争による被害から再建する都市計画書、住民や難民への炊き出しの報告書、復興のための人材確保の経過報告書、開発資金の各施設への分配報告書ｅｔｃ，ｅｔｃ．…。机の上には様々な書類の山々が…。

これでも帝国にいたころに比べれば少ないほうだが…。なぜ、この戦争に関わってから葵君に書類仕事が回ってくるのだろう…。このままでは大変そうなので司令部から手の空いている者達を手伝いに回したほうがいいだろうか？

「…申し訳ありません。しかし連合会議の報告です。目を通されたほうがよろしいかと」

「むぅ…それなら仕方ない、か…。せっかく調べてくれたんだからね。それでどんな感じなん？」

なんだかんだと言っても気になるのですね。ご自分で調べるように指示されたのもありますが心配なのでしょう。葵君から聞く話しではなかなか、からかいがいのある方のようですね。もしかしたら単に勿体ないと思われただけかもしれませんが…。

私もからかいがいのある人が減るのはつまりませんから是非とも助かってほしいと思います。あ、私達は葵君のみを助けるだけですからね？他を助けるかは葵君次第ですよ。この辺の考えは人の子と違うところかもしれませんね。

悪魔契約、又は精霊契約を結ぶということは契約者か精霊・悪魔の命が尽きるまで共に歩むということ。これは人の使う通常の契約などよりも重要な意味を持つ。絶対の制約と言ってもいい。…まぁ、だからといって必ず契約者に好意を寄せるかは別なのだけれどね。ふふふ♪

「ハッ！現在、オスティア崩落から2ヶ月が経過。今日まで会議の内容は終始、連合側の思惑が蠢いているようでした」

「どうせ、陰謀でしょ？醜い老人の考えそうなことだな…」

「はい…残念ながら、そのとおりです。連合の元老院議員は俗に言う世界に対しての“生贄”を求めていました」

葵君の言うとおりだ。醜き野望を胸にした愚かな老人共…。いつの時代も人の欲望には際限がない。そのことは知ってもいるし見てきてもいるが、やるせない気持ちにさせられる。

逆に人も悪い心を持つばかりではないことも知っているし見てきてもいる。そんな人は本当に極僅かだったけど…。“僅か”だというのも善に傾き過ぎた人も多かったからだ。そういう人間達の時代だったのだ。神を妄信する狂信者が蔓延る時代だった。

あの時代は私の目から見ても地獄だった。幾数万の人達が些細なことで“魔女”だ、“悪魔”だなどと言いがかりを付けられ、自称司祭と名乗る者達が捕まった者を散々に拷問して魔女だと認めさせ最後に火炙りに処す。

ただ一人の思惑に流される大衆。そしてただ妄信的に受け入れる大衆…。その二つが揃った時は真に度し難い。

「生贄?…誰かに責任を押し付けるってか?この場合その相手は…」

「お察しのとおりアリカ陛下、です。既にアリカ陛下は逮捕、投獄され刑の執行を言い渡されるのを待つのみとなりました」

人は長い戦争に疲弊していたのもあるのでしょうね。全ての憎悪を押し付ける対象が必要だったのもあるのでしょう。何よりも憎しみを押し付けることで早く楽になりたいのでしょう。

切っ掛けを与えたのが元老院議員の者達だったとしても踊らされた人々は安易な安楽を求めるモノなのね。憎悪渦巻く人心の対象をアリカ陛下に向かわせることで偽りの平和を成そうとする。無様ですね…。

まぁ元老院が何か別の狙いがあり、その過程にはアリカ陛下のことが疎ましく思っただけなのかもしれませんが…。

「…本当にやってらんねぇ。このことはナギに伝わってるの？」

「はい。ガトウさんからアルビレオ・イマへ、そこから伝わっていると思われます」

あの変態がありのままをナギ君に教えるかは別にしても投獄されたことだけは最低限、伝わるでしょう。どちらにしても事情を聞かされた彼が先走らないように今後とも注意が必要ですね。

「そっか…。まぁ隠す手間が省けたからいいのかな…。それで、アイリ？」

「はい、アリカ陛下の収容先はケルベラス無限監獄。連合最辺境に位置する場所です」

「万が一のために監視だけはできるかな？」

「…難しい、と思いますが司令閣下の命とあらば彼女達は全力を尽くすことでしょう」

最辺境に位置するだけにケルベラス無限監獄周辺には何もなく見通しが良すぎる。見つからずに侵入して情報を確保するのは至難の業でしょうね。

情報部に配備された装備の中に特殊スーツがある。これは熱光学迷彩と個人用ＤＦ発生装置が標準装備されているのだ。隠密作戦にも戦闘スーツとしても使える一品だ。いずれは全部隊に行き渡る装備だが今は親衛隊の私達と情報部の一課と二課だけに優先配備されているのだ。

その特殊スーツを使ったとしても侵入は難しいかもしれない。だが、それでも彼女達、情報部はやってくれることだろう。まだ部署ができて間もないが今までは持ち回りでしていたことだ。家族は皆、ある程度のことなら誰にでもできる。

「無茶をしない範囲でお願い。それとこれからは防諜に力を入れておいて」

「既に対処済みです。アリカ陛下が投獄されてから、何やらキナ臭いネズミどもが我々を嗅ぎ回っているようですから」

そのこともあって私達は見回りなどもしていたのだ。二課の者達も身を隠して各所に配置されている。上空ではアカトンボも5機、敵の警戒・監視に当たっている。今のところ強硬な動きを見せていないので連中を泳がせて様子を見ている。

手を出してくれれば正当防衛として排除することもできる。だが疑わしいからという理由だけではこちらから手は出せない。…やろうと思えばやりようはいくらでもあるのだが、より面倒を呼び込みそうなのだ。だから今は様子見…。

「流石だね、アイリ。皆が居てくれて心強いよ」

「ご安心を。司令閣下は私達が何にかえてもお守りします」

お守りします、契約など無くとも…。そしてまた喫茶店のお手伝いなんかして葵君と楽しく長き時を過ごすのです。あの退屈で優しくも楽しい日々を、また…。…でも時々は戦いたいです。私も元とはいえ悪魔ですからね。

「うん…。でも、皆が居てくれないと意味がないんだからね？家族が欠けることは俺が我慢できないよ」

「はい、お任せください。誰一人欠けることなく任務を達成してみせましょう」

あれ…？葵君が言う“我慢できない”というのは、もし“万が一”が起きた場合は辺り一面が火の海になるか剣の墓標が乱立する事態になるということ、でしょう…か…。それとも四連装ＧＢの超重力で圧壊させるのでしょ…うか…？

とにかく敵は碌でもないことになることは確実ですね…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

Ｓｉｄｅ　葵

部屋を出て行くアイリの背中を見送って溜め息を一つ…。

「はぁ…。本当に、やってらんないねぇ…」

たかが女一人如きをケルベラス無限監獄なんて牢獄に送らんでもいいだろうにな。刑が執行されるまで、まだ猶予があるとしても２、３年…。あそこに投獄されたということはもう情報操作は終わった後なのだろう。

まずは自分の周りからと思って帝国内の炙り出しを優先したのが仇となった。…でも、これはこれで史実通りに事が進んでいる、か…。うん！これからは監視だけで俺は俺で独自に動くとしますか♪幸いなことに今は復興のためにナギ達とは別行動中…。

アルと詠春に胡散臭い連中が嗅ぎ回っていることを注意するように言っておけばいいか。あの２人ならナギが無茶するのを止めることもしてくれるだろ。ジャックがナギに同調しないかだけが心配だけど…。なんとかするだろ。

あ〝あ〝―っ！ストレスが溜まるなぁ…。だいたい基本ノンビリ屋で発明家で錬金術師で喫茶店店長な俺がこういう書類仕事なんか向いてないんだよ…ｏｒｚ

…そうだ！ラミエルさんのバージョンアップをまだしてないじゃないか！？

それに親衛隊専用の機体の開発…、ミリー達は完全に後衛に下がってもらうからいいとしてもオリビエ達の操縦に耐えられるような機体の開発も残ってる…。

何よりも俺が乗る機体をまだ造・っ・て・な・い！！　これは一大事だ！すっかり忘れていた…ｏｒｚ決戦前に造って本番の時に乗ればさぞかし楽しかっただろう…！マジでしくじった！こんな大事なことを今になって思い出すなんて…ｏｒｚ

うぅぅ…。いや！今、思い出しただけでも上々だ！今から造ればいいじゃないか！…とりあえず、どんなのを造るとするか…？それが問題だ。

いや、格納庫の規格が合わないから大きく逸脱したものは造れないけどな。どんなに大形なモノでも９ｍ前後が限界。それを超えると整備するのに手間がかかって仕方ない。整備効率はガタ落ちだろうね。

合体ロボ…はロマンだけど実戦では使えないしなぁ。合体中の無防備なところを攻撃されたら目も当てられない。変形ロボ…もロマンを感じさせるけど合体ロボと同じで変形中に攻撃されたらマズイもんなぁ。

ここはやっぱりシンプルに人型ロボに的を絞るとしよう。まぁ外見はパワ〇ローダーなんだけどな。とはいっても中身は別物だけどね。本物は飛ばないし…。

ナデ〇コ世界の技術を元にアップ〇シードやフル〇タ、甲殻〇動隊の技術を流用してるから、もうある意味オリジナルのロボになってるなぁ。そのまま造るのもいいけど、やっぱり改造もしないとな！

アイリ達にもいい機体を用意しないと…近接格闘能力・射撃能力共に優れた機体を、ね。…というかイキシア？を含めて言えることだけど整備性はともかく量産性が低いんだよな…ｏｒｚ機体性能は抜群なんだけど。まぁ全然構わないんだけどさ。家族以外に造る気はないし。

今後のことも考えて精霊さんの作る精霊鋼を備蓄しておかないとな。あ、あとオリハルコンも加工してオレイカルコスにしておかないとね。備蓄できる時にしておかないと後悔するからな。ただでさえ戦闘はまだ続くんだから。

まぁ開発をするにしても今は目の前の処理待ちの書類を片付けないとならんよ。ぐすっ…研究したいよう、開発したいよう…。一応ここにある書類の山で最後だから、あと一日頑張れば終わりそうなのが希望だよなぁ。はぁ…。

――コンコン。

さぁ仕事に取り掛かろうとしたところで部屋の扉がノックされた。…まさか書類の上乗せじゃないだろうな？いやだよ？コレ終わらせて機体開発したいんだから…。

「主様ぁ？入ってもよろしいかしらぁ？」

…ミリー？どうしたんだろう？今、彼女には復興のために経理の仕事を任せてるはずなのに。何か問題発生、かね？…ネズミが捕まったか？でも、それならファレノかアイリが報告してくるだろうしなぁ。…とりあえず聞いてみればわかるか。

「扉なら開いてるよ。入ってきて」

「ふふ、お邪魔しますわねぇ♪」

ん？何をそんなに嬉しそうにしているのかね？ミリーさんや。

「ミリー、どうしたの？」

「アイリちゃんからねぇ、「葵君が書類仕事で大変そうだった」って聞いちゃってぇ♪だからぁ手伝いに来ましたわぁ♪」

「え、アイリが？」

アイリがそんなこと言ってたんだ。さっき部屋に入ってきた時に、これ（書類）をジッと見てたから何かと思ってたけど、気を使ってくれたのかな。

「そうなのよぉ♪わかりやすい子よねぇ？自分の仕事もあるのに態々私のところに来てぇ話していったのよぉ？絶対、主様のことが心配だったのねぇ、アレはぁ♪」

「アイリがミリーに…、そっか。いやー、心配かけてるなぁ」

態々ミリーのところまで行ってくれたんだ、アイリ。本当に心配かけてるなぁ。アイリやファレノ達には帝国での仕事をいつも傍で手伝ってもらってたから、こういう気遣いはありがたいね。俺のことをよくわかってるよ、うん。

「ふふふ。皆が心配してますわよぉ？主様ったら今回の戦争に関わってから無茶しますからねぇ」

「む？そんなに無茶したかな？記憶に無いんだけど…」

無茶ってなんだろ？？…敵陣に突撃かましたことかな？最前線で新魔法の実験をしたことかな？個人用ＤＦの試験で無防備に姿をさらしたことかな？それとも…。ダメだ、思い当たることが多過ぎてどれかわからないｏｒｚ

この空気の流れは説教ですか？…このままではマズイですよ。ただでさえ仕事があるのに説教なんて聞いてる場合じゃないって。

「ほとんどが書類のような事務仕事ですけどねぇ。一時期なんか睡

眠時間をかなり削られていたでしょう？」

「アハ、アハハハ…。あ、あの時の記憶は眠くて朦朧としてたから覚えてないなぁ…なーんて」

おぅ？地味にキツイことを思い出させてくれますな…。正直に話すと机仕事よりも戦場に立っていたほうが性にあってますよ。発明品の実戦証明もできるから楽しいしな。

あの時期は辛かったなー…。帝国へ、テオに連れてこられて間がない時だったな。あの時は［完全なる世界］の信奉者などの洗い出しができてなかったから碌に安心できなかったから、常に気を張っていて寝られないし。

なのに仕事は増えるばかりで…。［工房］内に入ればよかったんだけど中に入ると発明したくなるから入れないし…。色々辛かったなぁ…。

「もう…。ダメ、ですからねぇ？主様にぃ何かあったらぁ皆が心配しますのよぉ。ご自愛くださいねぇ？」

「…わかった。これからは気をつけるよ。…それでまぁ差し当たって、この書類の処理を手伝ってほしいな？」

いや、冗談めかして言ってるけど本当に手伝ってくれるとありがたいです。サッサと終わらせて研究！発明！開発したいです！装備の充実化を図りたいし皆の安全だけは確保したいのよ。皆いい子達だから怪我させたくないのさ。

「ふふ、了解ですわぁ♪」

ミリー、ありがとうね。君が手伝ってくれるだけで百万の援軍を得られた気分だよ。さて、ちゃっちゃと片付けて今日は寝よう。明日も次の復興地へ行くからね。開発は移動の合間にやるとしますか。

あ、それにミリーを寄こしてくれた、アイリにも感謝、感謝♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

今後、葵達は紛争後地を回り復興に尽力することになる。途中にナギ達と幾度か合流するのだが基本的に葵は町の復興作業に従事することになった。

町々では、たまにバカな者が葵にケンカを仕掛けようとするが、その悉くは親衛隊、または情報部諜報三課の者達が事前に取り押さえ、もう二度と“オイタ”しないように洗の…もとい、教育されて開放されていった。

因みに解放された者達は皆一様に明るい性格に変わっていたという…。

それとこの長くも短い期間、葵はもちろん、［紅き翼］の全員に誰かしらの監視員が常時ついていることもありナギはアリカ救出に乗り出せずにいた。この時、ナギは意外にも強攻策に訴えることもせずにただチャンスが来るのを待つように紛争地帯を転々として救援活動を続けた。

そして運命の日…。２年後の今日、アリカを慕う少年、クルトからアリカ陛下の死刑執行が１０日後に決定したという情報が［紅き翼］のメンバーのもとに届いたのだった…。

第二十話「紛争と警戒と優しさと」（後書き）

繋ぎの日常（？）編ですな。
作者の作品は基本、プロットが設定されていないのでどのようにでもできるように組み立
てています。
実に作者の気分次第なところがあります。

基本、自己満足と妄想ですからね！

ただ、キャラ数のこともあるのでそれに関しては設定表を作る予定ではあります。
あくまで予定だけですけど！

それでは今回はここまで！また次回！チャオッ！

第二十一話「新機体と葵とラミエルさんと」（前書き）

はぁ…学園編に…本編に逝きたいなぁ…。
…なぁんて考えてしまう今日この頃の作者です。
では、続きですな。

第二十一話「新機体と葵とラミエルさんと」

――紛争地域、戦闘後…。

Ｓｉｄｅ　葵

アリカ陛下の死刑執行日が決まった…。今日、クルト少年から長距離念話で知らされたことだ。２年間費やして決まったことが死刑とは単純なものだな。と思ったのは内緒。

…実は前日には知ってたのよ、俺。一課の皆が頑張ってくれました。潜入に苦労しただろうに、何でもないかのように言ってくるんですよ？健気な皆を一人ずつ撫でてしまったのは間違いじゃないと思うんだ…。

よくやったね♪って気持ちを伝えたいし普段なかなかできない家族のスキンシップは大事なことだよね。

まぁとにもかくにも、その時に元老院議員の一人がアリカ陛下に手酷く尋問していることも一課の人から聞いて知った。だからってどうとも思わなかったけどな♪ナギのヤツがどうにかするだろうさ。美味しいところはナギにやってもらわないとな！

それにしても１０日後ねぇ…。史実ではどう助けたんだったかな？死刑場にいた奴らを皆殺しにしたんだった…かな？あれ？殺してなかったっけ…。んむー…？とにかくブッ飛ばしてた（？）ような覚えだけはあるんだよなぁ。まぁいいか♪

クルトに散々に言われてたけど今のところナギはこのまま紛争地帯を回って救助を続けるようだし。日も暮れてきてるし今日のところは宿でもとって、いつでも動けるように準備だけはしておくかな。それじゃま、行きますか。

ふふふのふ♪俺も、この2年間ただ復興作業をしていたわけじゃないのだよ。

オリビエ達の魔力量に耐えられる専用機と親衛隊専用機の開発。そして俺専用の機体の開発！この三つはやり遂げました…！特にオリビエ達の要望に応えられる機体の開発には骨を折るだけではなく肉が裂ける思いで取り掛かりました。

生身でも十二分に強いからこういう機動兵器に自分達が乗るって発想が無かったみたいだね。かなり無茶な要望だった。“あたし達が乗っても壊れない”を条件に出されたんよ。そりゃそうですよね。乗るだけで壊れたら意味ないですよねぇ…。

今ある機体は基本的にバッテリーと魔力のハイブリッドで動くから搭乗者自身の魔力でいくらでも機体スペックは上げられる仕様になってる。ただし搭乗者の魔力に機体自体が耐えられるまでだがな。

全体的な構造上、性能は折り紙付きなんだが魔力によって耐久性が区々なんよ。イキシア？は汎用性を高めるために、その機構はある程度、リミッターを設けて安定性を確保してある。まぁその分、無茶はできても無理は利かないけど…。

今回はその機構たる魔力増幅感応機構がネックになった感じ。この機構はＩＦＳが無くても登録された魔力パターンから自分の意志

のままに機体を動かすことができる魔導機構だ。そして先にもあるように搭乗者の魔力を増幅して機体を更にパワーアップさせることもできる。

それでネックになっているというのが、この増幅して機体性能アップというところだ。考えてみてほしい、魔人級の魔力に普通の機体が耐えられるだろうか…？答えは否だ。耐えられるわけがない。…そう“普通”なら、だ。

実験1回目は魔力増幅感応機構の一次機構にあたる増幅機構の部分を外して魔力感応機構としてしまおうと考えたんだ。搭乗者たるオリビエ達は元から強大な魔力を保持しているんだから増幅なんていらないのでは？と考えたんだな。

でも、それは魔力を通しても二次機構の感応機構で機体に送られる操縦者のイメージが精確に読み込まれず、あやふやになってしまって機体の反応性が低下。高い機動性と柔軟な運動性が売りなのに即応性が発揮できなくなってしまった。

よって安易な考えだったコレは即ボツになった。この時は単純なだけにイケると思ってたんだけどなぁ。

実験第2回目は増幅機構を外すのではなくてバイパスを通して一次機構の後に発生する余剰魔力を別利用しようと考えた。ネタバレするけど実際コレは当たりだった。

それというのも魔力増幅感応機構の一次機構にあたる魔力ブーストの後に発生した余剰魔力。普通ならこの次は“二次機構の感応機構”と対応しきれなくなった余剰魔力を“魔力チャンバーに送られて排出”される。まぁこの二つになる。

後、あるとしたらそれは内部機構の設定上で魔力が過剰供給され危険域に突入した時か…。強制的にセイフティが働いて余剰魔力を抑制・強制排出して機体の安定と安全を保つことになるだろう。

以上のことから、設計段階から再設計された。機体の強度的問題の解決に取り掛かった。ここで問題だったのは彼女達の溢れるほどに有り余る魔力をどのようにして機体各部に通わせて運用するかだったのだ。

彼女達のためだけに造った機体はその有り余る魔力を外部へ排出しないで飛行ユニットの高性能反重力波推進機関と追加装備した多重圧縮魔導力スラスターに並列接続する。そうして魔力を分散して送ることで爆発的な推進力を確保。空間戦闘での超高速機動力を獲得した。

まぁこれでも捌ききれないほどの魔力が“まだ”あったんだけどね…。ここで別利用するということを取っ掛かりにして他にも流用した。その一つがＤＦだ。

ＤＦ増幅機構は付いていたけど魔力的にも回路を引いてＤＦを更に強化した。おかげで通常の増幅されたＤＦよりも魔法攻撃に強くなった。なんでここまでＤＦに拘っているのか自分でも不思議だ…。いや、フィールド的なものなら“これだ！”ってモノだとは思うけどね、俺個人では。

守りは頑強。魔力とバッテリーが尽きない限り常時発動しても大丈夫なほどの頑丈さだ。大部分が魔力で補われることになったからバッテリーの消費も抑えられて省エネルギーで高効率の運用を実現できた。厖大な魔力があるっていいよね？すっごく便利♪

固有武装も装備させたよ?もちろんですよ。オリビエには艦載砲にもなる斬艦砲剣(カノン・ザンバー)。ぶっちゃけ、ガンソードを大きくしたものだ。単純故に頑丈だから、どんなに振り回しても無問題ね。

リビエラには広域殲滅から精密攻撃のできる機工天翼(ウイング・マキナ)。これは…ファンネルですな、うん。いや、ネタとかではなくて作ってみて思ったけど意外と使えるよ?コレって。独立稼動して自機の援護にも使えるしね。

シルビアには突撃槍を。他二人とは違ってギミックはほとんど無い。ただあるのは堅固たれ頑強たれという設計思想のみ。槍自体が独立して強力なＤＦと各魔法障壁などを発生させる。発生した複合フィールドが機体を包み爆発的な推進力を以って敵陣に一点突破を仕掛けるのだ。

後の諸々の細かいところの説明は省くことにするけど、そんな感じで3機の特別機が完成したんよ。試作1号機から6号機まで造っては破棄、造っては破棄して、正式にロールアウトした“グロリオサ”1号機から3号機だ。

まぁ…いつもの如く、造り終わってから気付くんだけど、さ…。まぁ、なんだ…。機体の形状がね?いや、形状とは違う…かな?雰囲気?とにかくそんな感じのなんだが…。“ブラックサレナ”に似てるんだよｏｒｚ

外装の色こそ黒に赤が施されてるけど…形状は違う。現物を知ってるヤツが見たらわかると思う。実際に見ていた俺がそうなんだから間違いない。見た感じ“グラマラスなブラッ◯サレナ”…。またか…!?またしても女性フォルムなのか!?クッ!…まぁいい、キ

ライじゃないし。

見た目はグラマラスな女性に流線型の全身鎧を着せて背部に黒い大きな翼がある、みないな。流麗な女性的なのに一部に力強い男性的にも見えるから不思議。頭部に立派な角が2本あるからか?通信アンテナなのに…。

まぁ最終的に言ってしまうならば複合装甲で軽量な素材を使った重装甲、異常な推進力を獲得した高機動力、柔軟な操縦性による高運動性で格闘戦可能。造った自分でも「なに、このバカな廃スペック?」だもん。

正直に言うけどマトモな人はまず乗らないね。…乗れないんだな。俺か?…乗れますよ。でも乗りません。三人のためだけに造ったんですから。仮に普通の人が乗ったとしたら搭乗者の生命を魔力に変換して根こそぎ吸い取られて、からっからのミイラになっちゃうね。

そして仮にそれをクリアしたとしても機体の最高加速化にあるGをマトモに受けて操縦席はスプラッタ…とまでは言わないけど即座に意識は刈り取られるかな。一応、これでも重力制御されてるからマシなほうだ。うぇ…想像したら気持ち悪くなってきた…うっぷ。

ま、まぁグロリオサはこうして完成しましたとさ…。最後に変なこと考えちゃったから締まらないなぁ…。ハハ、ハハハ…。はぁ…ジェットコースターって苦手なんだよ。想像しただけで酔いそう…。ふぅ、まぁいい続きだ。

で!俺の専用機と親衛隊の機体は、このグロリオサを基準に考えて造った。どう考えても俺の機体よりオリビエ達のほうが、仕様基準がシビアだったからな。スペックを再調整すればアイリ達にも十

分に使える高性能汎用機の完成。基準ができれば簡単なモノだ。

そんなわけでアイリ達のために造ったのはグロリオサのスペックを再調整した“ルリトラノオ”だ。再調整した機体だとしても性能的には優秀。いや、精魔奇兵が扱うものとしては破格の性能と言ってもいい。

柔軟な運動能力と近接格闘能力に優れ。増設された魔導力スラスターで増加された推進力で高機動戦闘が可能。機動戦闘中にも射撃性能は高い命中率をマーク。

装甲もグロリオサに準じる物を使用しているから見た目よりも軽い。それでも防御力はイキシア？の二倍は堅い。ＤＦは、強度はともかく全機標準装備なのさ。光学・魔法ともにダメージを軽減してくれるはず…もとい、してくれる。

グロリオサがグラマラスなのに比べてルリトラノオの姿は“スマートな女性”が肩と太腿、あとは背部に流線型の中鎧を着ている感じか。額に一角獣のような角があるのが俺のお気に入りですな。…飾りとかではなくてグロリオサと同じで通信アンテナの役目があるのよ。

言っておくけど「リーダー機っていったら角ダヨネ？」なんて考えてないからな？純粋に機能重視だから…。見た目は機能部分を作り終わってからが勝負ですな。参考は色々なロボットだけどね。あとは俺の趣味！どうしようもねぇな、俺…ｏｒｚ

ここまでで紹介した各機体。イキシアはＩ系統に属して整備製と汎用性、何より高い安定性を求めて造られたシリーズ。俺達が初めて作った人型機動兵器だ。開発秘話は涙を誘うものでしたな…。

グロリオサはG系統の、たった3機だけ造った特別機だ。複合重装甲の頑強な防御力、多重圧縮魔導力スラスターなどからの高い機動性、操縦系は魔力増幅感応機構でＩＦＳが無くても魔力だけで操縦者の思考を読み取り操縦できる。

ＩＦＳで操縦したように動くから柔軟な運動性が実現できて強靭なマシンパワーを繰り出すことができる。オマケに魔力で機体の強化もできるときたものだ。それに3機にはそれぞれ固有武装もある。

ルリトラノオがイキシアの上位機種にしてR系統に属している。G系統のグロリオサを参考に再調整してＩ系統のイキシアを基礎に置き、バッテリーと魔力のハイブリッドの高出力からなる運動性と機動性を高いレベルで両立した。このことで安定性と汎用性すら確保できた。

でも、量産性は、どの系統も向かないのが玉に瑕なんだよな…。他のヤツのために作る気なんか無いからいいけどね。補修部品とか鋼材は今も製造中。備品はできる限り備蓄しておかないといけない。ただでさえここ2、3年は消費が激しいんだから。

それでまぁ最後に俺の機体か。機体名は“プロテア”。G系統を参考に、より扱いやすいように再調整した上位機種となるP系統だ。G系統のように高機動性と高運動性を。R系統のような高い近接格闘能力と中量級の装甲…なのにそれ以上の重量級の防御力を確保した。

最初はそう造ったんだよ?でも、問題が起きたんよ…。…ええ、原因はわかってるんです。わかっているんですよ…。コレは使えるかなぁっていう軽い出来心だったんです。結果的には機体性能の向

上に繋がって成功（？）だったから良かったんだけどな。

まぁ隠すことでもないから言うけどさ。何をしたかというとだ…。ラミエルさんを機体の起動キーにしてみたんよ。ＡＩ搭載の機体ってロマンを感じません？…とは言っても新しくＡＩを作るのも手間がかかる。ならばいっそ、前から考えてたことを実行した。

プロトタイプで蓄積した戦闘データを新規のＡＩに移し変えたラミエルさんを使ってみようと考えたんよ。まぁ…その…案の定というか、ラミエルさんは女の子でした…はい。繋がり的にはアンの従姉妹（？）にあたるのかね。若しくは姉妹か。

そんでまぁ…問題の焦点となる起動キーにしたラミエルさんなわけなんだが…。

『我が主よ、どうしたのだ？先程から何やら考え込んでいたが。早く行かねば皆に置いて行かれるぞ？』

２０ｃｍほどの大きさになってフヨフヨと俺の周りを浮いてついて来ていたりします…。話し方がどことなく偉そうなのはどういうこと？一年前くらいに新ＡＩにした時はもうちょっと初々しかった気がしたんだけどなぁ。

「…んあ？あぁ、俺がラミエルさんを起動キーにした時のことを思い出してたんよ」

『おぉ？…ふむ。アレは実に愉快だったな。今でも、我の中の記録を閲覧しても笑えてくる。ふふふ♪』

「いやいや、あのね？愉快ってラミエルさん…」

愉快じゃないよぉ…。半年前のプロテア起動実験の時にラミエルさんがまさか“あんなこと”を仕出かすとは思わなかったから俺は驚いたよ。うぅぅ、俺のプロテアがぁぁぁああ…。

『それよりも我が主よ。いい加減、我のことを、敬称を付けて呼ぶのはやめてくれぬか？何やら他人行儀ではないか。我は寂しく思うぞ…』

「でも、ラミエル“さん”は、ラミエル“さん”だと思うんだけどなぁ。それに戦闘中は呼び捨てにしてるよ？」

ラミエルさんも変なことに拘るね。実は半年前から同じようなやり取りをしていたりするのよ。というか偉大な使途さんたるラミエルさんを呼び捨てにしていいものなのかな？今のところ戦闘時には呼んではいるけど、それだけでは不満みたいなんだよなぁ。

『うむぅぅ…戦闘中だけではないか。我は通常時のことを話しておるのだが？』

「だから、ラミエル“さん”は、ラミエル“さん”だって。…そんなことより俺の機体はどうなのさ？」

ラミエルさんのことを考えていたら案の定というか不満を表せてきた。いつもこのやり取りをするとラミエルさんは話しが長いので逸らす意味でも違う話題を振ってみることにした。まぁ俺の機体のことなんだけど…。

『そんなこととは何だ、そんなこととは？我にとっては重大事なのだぞ。…まぁ今は良い、今“だけ”だがな。…それと機体は良好だ。

今も順調に“成長”しておるようだな』

そんなことと言われたのにちょっと不満を示すがなんとか話題の変更にはなったみたい。この場合、ラミエルさんが俺に話しを合わせてくれたと言ったほうが正しいかもしれないけどね。それよりも今も尚、成長中かぁ。はぁ…。

「俺に断りも無くプロテアを“バラして吸収した”わりにラミエルさんの中では“成長”してるの？はぁ…まるで胎児だな」

『なるほど、言いえて妙だな…。ふむ、つまり、それは我と我が主との子ということだな？我は理解したぞ。…ならば、大事に育てるとしよう♪』

なぁ…ちょっと待とうか？引っかかるところってそこか？俺の機体バラしたことは華麗なるスルーですか？ラミエルさん…。

「なんか違うよ？違うよね？違うよな？」

『何も違うものか。我が主が手塩にかけて作り出したプロテアを我が内に取り込み一から育てておるのだ。子も同然であろう？』

なんだか、そう言われちゃうと反論し辛いなぁ…。俺もそうじゃないのか、とか考えちゃうもんな。俺、間違ってないよな？おかしいのは俺か？えー…。

「え？あれ？そう…なのか？…いやいやいやいや！やっぱり、違うだろ！？プロテアだって皆で造ったんだから！」

『だが、我が主自身が設計から建造まで終始、全てに係わったのも

事実であろう？』

「うぐっ…。まぁそうだけど…。でも子供は言い過ぎだろう？」

結婚もまだなのに子供って…。それ以前に彼女も居ないのに…。

うぅ、なぜだろう？自分で考えてて落ち込んできた。

『なんと…。我らの子を我が主は認知してくださらないと言われるのか！？』

「ちょッ！ラミエルさん、声が大きいんですけどッ！？」

認知とか言うのやめようよ！？前方を歩いてる皆に聞こえたら変な誤解をまねくでしょ！俺は未婚者です！

因みに俺も出会いの努力はしてたのよ？でも、ちょっといいなぁと思った女性といい感じになったら、なぜか家族の誰かが必ずいいタイミングで現れて邪魔されました。本人達が“偶然会った”と言ってますから信じてますけど…。皆、タイミング悪いよぉ、グスッ…。

『我の体だけが目的だったのだな…。だが、良いのだ。たとえ我が主が我の身体だけが目的だったとしても我は我が主のことを愛しておるのだからな』

「身体ないよね！？あったとしても青いクリスタルだよね！？俺は普通に綺麗なお姉さんが大好きです！！」

ラミエルさんはどこでこういうことを覚えてきたのだろうね！？…昼ドラか？昼ドラなのか！？お兄さんは驚きですよ！…てか、マ

ジメな話しだけど身体無いよ！クリスタルだってば！俺に特殊な性癖はありません！

『なっ！我には飽きたと申すのか！？捨てるのか…？どことも知れぬ場所に置き去りか！？』

「そんなわけないだろが！ラミエルさんは俺のモンだ！誰にも渡さん！！」

なんでそういう話しになるのかな！？そんなことするわけないじゃない！どうでもいい他人ならやらなくはないけど…。ラミエルさんにそんなことしないよ！これは家族全般に言えるけどな！

『わ、我が主よ…♪そのように宣言されてしまうと我とて恥ずかしいのだが♪』

「なぜだろ…？今、無性に［ｏｒｚ］のカタチに崩れ落ちたいとです…。あれ、目から水が…」

俺も今思ったよ…。何でこんなところでクリスタル相手にプロポーズのようなことをしないとならんのよ…。あぁ、目から出る水が止まらない。不～思～議～だ～な～…。

『何をしておるのだ？我が主よ。おぉ！そうか！泣き崩れるほど我のことを想ってくれておるのだな？うむ♪我も我が主と共にあることを嬉しく思うぞ♪』

「…こいつ、反省するまで［工房］内に放り込んで１０年ぐらい放置しておくかな」

いや、マジで封印も考えるか？でも、そんなことしたくもないし…。うーん…悩むねぇ？

『…すまない、我が主。戯れが過ぎたことはここに詫びよう。許すがよいぞ。だから放置は止めてくれ』

「わかればいい。…まったく、遊びが過ぎるぞ？」

『ふふ、すまぬ。ふふふ♪』

嬉しそうにフヨフヨ浮いてからに…。何がそんなに嬉しいのやら。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――宿屋までの道中…。

Ｓｉｄｅ　ラミエル

「わかればいい。…まったく、遊びが過ぎるぞ？」

『ふふ、すまぬ。ふふふ♪』

ふふ、我が主とのいつものやり取り。冗談を言い合えるというのは心地良いな。ただのプログラムであった少し前の我ではこのような簡単なやり取りもできなかった。だが自我を持つようになってからは何から何までが目新しく映るから楽しくて仕方ない。

もちろん楽しいことばかりではないことも承知しているがな。前のプロトタイプの記録を見る限り大戦時の状況。そして今は我が見る数々の紛争…大戦の残り火だ。

それでも我が主は破壊された町や村の復興に尽力してきた。難民の受け入れ先の確保、都市機能の回復などすることは沢山あった。怪我人や病人のために魔法薬や医療魔法士を用意していた。それで助かった命も多くある。

暴れていたバカ共を懲らしめもしたな。ほとんどが都市戦ということもあって大量破壊兵器は使えず、尚且つ生け捕りが目的だった。まぁ特に問題なく無人機達が悉くを仕留めていったがな。

トリモチ弾で絡めとり、特殊ゴム弾や電撃で気絶させ、ベークライトで動きを固めた。無人機で対処できない者は［紅き翼］の者達に任せた。…内2人はやり過ぎて建物まで破壊していたが…。

「…！…なんだ？」

『どうしたのだ？身体を震わせて』

風邪でも引いたか？日も暮れて風も冷たくなってきたようだからな。…ん？我が主は身体の表面に魔力を常時、纏っておるから寒暖は調整されておるはずよな？風邪などは…む？

「いや、何やら悪寒を感じたような？…これは、視線？でも、悪意みたいのとは、違う、かな？んー…？」

『…何を言っておるのだ？気のせいであろう』

なるほど、そういうことであったか…。複数の視線を認識した。これは背後の陽月の姉妹と…周辺で守りを固めておる情報部と親衛隊の者達か。陽月の姉妹はともかく、他の連中め、熱光学迷彩(ステルス)を展開するだけでなく気配遮断までしておる。

我と我が主があまりに仲良いから嫉妬しておるのだな？わかる…わかるぞ。皆の思いは理解しておる。…が、止める気はサラサラないがな。我が主とのやり取りは甘い蜜毒のように甘美なものを感じるのだ。やめられんよ。

「そうかなぁ？なんだか身近な人の視線だったような気がしたんだけど…」

『木の精だ…違う、気のせいだ。我が主が気にすることは“一切無い”ぞ』

何やら思考に乱れを観測したが…気にしてはならないと我の未来予測演算機構が告げているので流す方向で…。んんっ、話しを戻そう。

我が主が気にすることはないぞ？逆に気付かれても面倒なことになるからな。…まぁそれはありえぬか。稀に見ぬ鈍感だからな。そのくせ家族は大事だと言って敏感に反応するのだからわからぬものだ。

「んー？まぁラミエルさんがそう言うのなら気にしなくても大丈夫なのかね」

『うむ、我を信じよ♪…ッ！？…だ、大丈夫だぞ？』

おのれ…陽月の姉妹め、今の今まで静かにしていたと思えば…、これ以上は我を我が主に近づかせぬようにほぼ機械で構成されている我に殺気を認識させるとは、やるではないか…。さ、流石に2人まとめての殺気は我とて堪えるものがあったぞ。

喚き散らされるよりも怖い…いや、恐ろし…いやいや！…こほん。ともかく無言なのに殺気を込めた目で睨むのは、やめてもらいたいものだな。

「…なぜに疑問系なのかね？」

『…些事だ。心配するな』

説明できるわけがないであろう…。何のために彼女達が我が主を器用にも飛び越して我にのみ殺気を浴びせてくると思っておるのだ。我が主にバレぬよう我だけに彼女達は殺気に乗せて暗にこう言ってきているのだ…。

「「調子に乗るな…。それと…このことを話したら…わかっているな？」」

と、な…。彼女達が我に対して警告と彼女達が殺気立っていることを話したら…、ガクブルガクブル…。お、怖気づいてなどおらぬぞ？これは…武者震い…そう！武者震いだ！いつでも来るがいい！…はふぅ…。

「些事ってラミエルさん？…なんだか震えてるように見えるんですけど」

『そ、そのようなことは…ない』

今も尚、牽制のつもりか2人からやや圧力を増した殺気を叩きつけてくる。クッ！余計なことは言わせぬということか？この身は流体金属とナノマシンを主成分としている。なのに…我の早期警戒機構や自動防衛機構が、たかが殺気に反応してしまいそうだ…。

「いや、震えてるよな？どこか機能を破損したのか？ハオとユエはどう思う？」

「ハッ、ラミエルは長らく話していたので…“疲れた”のではないかと」

「左様です。元のペンダントに“戻らせる”べき…では？」

またしてもこの姉妹は…。我が長話ごときで疲れるわけがないではないか。何が何でも我を待機状態にする気だな。まったく、少し我と我が主が仲良くしていたからといって余裕の無いことだな。嫉妬とは醜いものだ。気持ちはわからなくもないが…。

「そんな軟に造ったつもりはないんだけどなぁ…。ラミエルさん、戻る？」

『う、うむ。…この場は“一時戻る”とする。では、な』

グッ…。更に圧力が高まったか？ふぅ…致し方ない、この場は一時撤退するとしよう。我が主の前で諍いを起こすわけにはいかぬからな。

『……（この借りは、いつか必ず返すぞ）』

Side out ラミエル

第二十一話「新機体と葵とラミエルさんと」（後書き）

ラミエルさん…。こんな風にする気はなかったんだけどなぁ。
女性人格なのはこの作品の仕様ですから、どうでもいいけど…。

ふぅ…。まぁラミエルさんのことはこれでいいか。

それよりも、そろそろ話数的に番外編を差込みたくなってきた…。
どうしよう？…やるか？やっちゃうか？
んー…。それより本編に突入するのが先か。うん、そうしよう！

活動報告のほうもちょこちょこ更新しています。更新の時は、よろしく！
では、今回はここまで！チャオッ！

第二十二話「下準備と襲撃とバカと」（前書き）

ハーイッ！作者の鉄　桜です！新作アニメが続々出てますね！
ゾンビいいですね…。宇宙人もイイです…。第二期のモノもいいですね…。
また、作品が増えるかも…。作者は少しミーハーな部分がありますから。
ゾンビに葵をブッこみたいなと少し妄想中です…ｏｒｚ

ではでは！続きをどうぞ！

第二十二話「下準備と襲撃とバカと」

――？？？？？…。

Ｓｉｄｅ　葵

みなさ～ん。どうも！俺は今、アリカ陛下が処刑される場所。ケルベラス渓谷にいます！谷底ではウゴウゴ、ズルズル、ネチャネチャと真っ黒い魔獣どもが蠢いてるよ。気持ち悪いわー…。思わずミサイルや光学兵器の面制圧してやりたくなる。

『ん？やるのか、我が主よ？我ならいつでも構わぬぞ』

「やらん…。やりたい気持ちはあるよ？でも今はやらんよ」

『何だ、つまらん…』

今日はダメだって明日はアリカさんの…今更だけど、もう国は無いし“さん”で十分でしょ？とにかくアリカさんの処刑執行の日だ。それでまぁ俺がなんでこんなところに居るかというと明日のための仕込みをしに来たのさ。

魔法を一切使えないケルベラス渓谷といってもそれは魔法やそれに系統するもの“だけ”だ。ただの薬物は効くだろうし光学・質量兵器の前ではただの図体のデカイ的だ。今回は前者の特別に調合した睡眠薬の入ったお肉を渓谷に投げ込みに来たのよ。

この睡眠薬は明日の処刑の時間に合わせて効果が出るようにした遅効薬だ。つまり明日の処刑の時までは元気に動き回っていられるが、いざアリカさんが飛び込む時になって魔獣どもは夢の中という代物だ。

こうしておけばアリカさんもナギの野郎も比較的安全に事を成すことをできるだろう？それでもまぁ谷の中では魔法は使えないけど…。ナギならバカ根性で何とかするさ。仮に無理でも機動兵器を送り込むしな。何はともあれ放り込むとしますか…。

「皆ー？行くよー？せー！の！…ほ～ら♪た～んと、お食べ～♪」

――ギュルルル…！！ガブッ！！ギャンッ！？ズズ、ズルルルッ！！ガジュ！！ギャアッ！？

なんでだろ…？結構な量のお肉を投げ込んだのに食べた端から共食いみたいな状況になってるんですけど…？あ、首が飛んだ…。うわぁぁあ…内臓を喰ってるよ…。さぞかし新鮮なんだろうな。まだ臓器から湯気立ってるし。

おぅ？ちょっと意外だ…。真っ黒い魔獣だったから内臓も黒いかと思ったのに意外と綺麗な色してやんの。ピンクとか、鮮やかな赤色とか。…普通にホルモン焼きにしたら食べられるんじゃないか？見た感じレバー辺りとか美味しそうに見えてきたな…。

いや、食わないからな？

魔獣なんて食べないよ。食中りしそうだしな。まぁ毒とか俺には効かないけどな。ナノマシンとこの身体の自浄作用を舐めてもらっちゃ困るってなもんだ。大抵のモノなら何の問題は無い。

まぁそのことは、今はいいんだよ。とにかくこれで仕込みはできたな。あとは敵の陣容か…。情報では処刑する場所を中心に二個艦隊と精鋭魔法騎士３．０００名が展開しているということだが…。

甘い！激甘だ！！本当に止める気があるなら最低でも、この１０倍以上は連れてこないとな。これなら楽勝だ。つまらんな…マジで。とは言ってみても今回ばかりはふざけるものじゃないもんな。マジメに逝くべきだろうか？

でも、マジになったら一方的な虐殺にしかならんしな…。あ、そうか…。俺から攻撃する前に忠告すればよくね？「死にたくないヤツは俺の周りに来るな！」とでも言えば寄ってこないだろ。それでも来たら、そいつは覚悟を決めたバカだ。丁重に葬ってやろう…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――ケルベラス渓谷、アリカ陛下死刑執行日当日…。

Ｓｉｄｅ　？？？

ケルベラス渓谷を前に施設された飛び降り台。その上には今は亡きオスティアの若き女王アリカが今にも飛び込まんと立っていた。ここに死刑執行の時が来たのだ。元老院議員の１人が前に進み出て刑の執行に際し宣言する。

「魔獣うごめく、ケルベラス渓谷…。魔法を一切使えぬ、その谷底は魔法使いにとって、まさに“死の谷”…。古き残虐な処刑法ですが…この残虐さをもって、ようやく魔法世界全土の民も溜飲を下げることとなりましょう！」

「歩け！！」

議員の言葉が終わる。それと同時に刑の執行をするため、一兵士がアリカを槍の先を向けて台の先へ歩くように命令する。

「触れるな、下郎。言われずとも、歩く」

アリカは自らの足で飛び込み台の上を歩き谷底へ、その姿を消した。

――ギャァオォ…。グァアブゥ…っ。…ギャァアンンァ…。

魔獣は飛び込んできたアリカに気付くと、いつもより緩慢な動きで襲い掛かった。どことなく就寝中にご飯を目の前に出された人のようなものだろうか？そのように見えた。

「くっくっ…。王家の血肉は、さぞや美味でしょうな。この処刑方法の長所は、復活がほぼ不可能な点です。魔法の使えぬ谷底で幾百の肉片となって魔獣の腹に収まってしまえば、たとえ吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）の真祖といえども、復活は困難でしょう」

「ぐっ…アリカ様ッ…」

議員はアリカが落ちた谷底を見て、ほくそ笑む。その様は邪魔者が消えたことを喜ぶ醜怪な老人の顔だった。クルトは飛び込んだア

リカを助けることができない無力な自分を嘆くように彼女の名前を無念そうに呟くことしかできない。

「よろし…」

「よぉーし！こんなモンだろ♪…」

死刑イベントも終わりを向かえ撤収を宣言しようとした議員を遮る声が響いた。本番はこれからだ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

Ｓｉｄｅ　葵

「よぉーし！こんなモンだろ♪録れたか？ちゃんと録れたか～？？…よぉ～し！ご苦労ッ♪…お～い！おっさん！」

「な…」

どうも～♪俺達（俺・ハオ・ユエ）は今、熱光学迷彩（ステルス）で隠れていまーす。他の皆も変装や認識阻害かけてスタンばってます♪現在は変装したままジャックが議員のことをバカにするように話しかけています。…いや、実際、アレはバカにしているな。

あーあ、議員の人が突然の事態に頭がついていかないから呆然としちゃってるよ。くくっくっくっ♪若いなぁ…。コレくらいで取り

乱したらイカンよ？コレからが本番なんだから♪

「これ生中継とかねぇよな？生中継だと、流石にマズイんだが…」

「無礼者！！何者だ、貴様！名を…ヌグッ！？」

――ガシィィ！！ギシギシ…！ゴリゴリ…！！

おぅ？痛そう…。ジャックのアイアンクローか…。図体がデカイから議員の頭がリンゴ並みにしか見えんよ。しかも少しずつ力を込めてるし…。いい趣味してるじゃん♪やっぱり、徐々に力を込めるのがポイントだよな。いきなり潰しても…ねぇ？

「おっさん…。録画はここで終わりだ。…で、今からここで起こることは“なかった”ことになる。…わかるな？…ぬんっ！！」

「き、貴様は！？せ、戦の刃の…！？ジ、ジャ…ジャック・ラカンーーッ！！？？」

ジャックさぁ、優しいなぁ？オイ。議員の頭、握り潰さないのか？いや、もちろん、わかってるよ？ここで殺しちゃマズイことはな。でもさぁ…？気絶させるくらい“ギュっ♪”って締め上げるくらいしても罰は当たらないんじゃないかなぁ。…ま、いいか。

それよりも変装用の鎧は脱げばいいのに、なぜに筋肉で破壊する必要があるのかな？…見た目のインパクト狙いか？お前はどこぞの炭鉱の親父か…ｏｒｚその服、誰が縫って直すんだよ？…あ、変装のために用意したものだし直す必要ないんだったな。

――どよどよよよどよよよどよ……っ！？？！！？！

なんなのさ？兵の皆さんがどよどよとざわめきだしたけど…。何か珍しいモノでも起きたのかね？こんなところで珍しいモノといったら…魔獣？あれ？計算では、もう連中は夢の中のはずなんだけど…。遅効性の毒にするべきだったかな？

「な！？青山…詠春ッ！？…アルビレオ・イマ！？…それにガトウまで！！？」

なんだよ、皆のことかよ…。珍しくもない…。まったく、俺の薬師としての腕を疑いかけたじゃねぇか。ん？…おい、ちょっち待てや。何で俺の名前が出てこない？…アレ？おぉ！？迷彩解除してないよ！？…気付かれるわけないのも当然か。気配遮断までしてるもんな。

ここは一つあの議員の後ろから軽く肩でも叩いて声かけてやるか。くっくっくくくっ♪ドッキリ大好きなお兄さんです！では早速、迷彩解除してっと、んんっ…。

「…俺達のことも忘れてんじゃねぇぞ？小童（こわっぱ）…」

「ッ！？九重（アルケミスト・ワン）・葵！！！…それにッ！！？？」

…何で、そんなに驚いてんだよ？いや、ドッキリ仕掛けた俺としては嬉しいんだけどさ。なぜに、そこまで脂汗？冷や汗？どっちでもいいけど、とにかく、ダラダラ流してんだ？視線が定まってないんだけど…。

あ、薬中か何かか？それとも心臓とか？まさか、お決まりの持病の癪がどうのとかか？…お薬を処方するべきだろうか？いきなり病

気とかでポックリ逝かれると寝覚めが悪いし…あ、議員のじじいの目に正気の色が戻った。

「なぜっ！［紅き翼（アラルブラ）］が…！？馬鹿なッ！では谷底の女王は…ヤツはっ！？」

「さぁ？どう…かな。案外、今頃、魔獣どもはお昼寝で夢の中かもしれないなぁ。んん？くっくっくっ…！」

ここに居ないナギなら今頃、アリカさんとイチャイチャしてんじゃねぇの？魔獣は原作とは違って寝てるし下手に寝返りとかして潰されない限りは大丈夫だろ。…だいたい、そんな風に2人が潰されたらマジで笑えねぇわ。

「ぐっ！…捕らえよ！こやつらは反逆者だ！！谷底の二人も逃がすなッ！！」

「おおっと、やるのか？いいのかよ、その程度の戦力で？」

いやだねぇ、必死になってまぁ…。てかさぁ、ジャックの言うように本当に、この程度の戦力だとはなぁ。情報どおりといえば情報どおりなんだけど、ね。

「フ、フフ…。その程度の戦力だと？愚か者が…。このイベントの警備は、ここに見えるだけではない！周囲数十ｋｍに２個艦隊と３．０００名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでも、コレを…」

「だから？…その程度の戦力でいいのか？って聞いてんだよ」

ジャックさん、楽しそうだね？そういう俺も実は楽しいです♪ま

だ援軍が来ると思ってるバカが目の前で強がってるんだから。フフフ、来ない援軍を待つなんて滑稽にも程がある…。あぁ皆は上手くやってくれてるかな…。

「それに艦隊や部隊なら来ないんじゃない？…援軍が“無事に来れたら”いいねぇ？フフ、フフフ♪」

「なっ！何ぃ！？それは、いったいどういう…！？」

今頃は空の藻屑と消えてるさ。可哀想にね？馬鹿な上司を持った哀れな部下…。同情の余地はあるけど…武器を向けてきたんだ、逆に向けられる覚悟もしているさ。それにしても議員は何を驚いているんだよ？

俺には個人戦力があることは…あぁ、情報部か？全てではないにしても記録を改竄して隠蔽したのか？やるなぁ♪この2年で、どれだけできたのかはわからないけど、頑張ったんだろうな。…あとで絶対に「よくやった」って頭を撫でてみせる♪

「ふふふ、今頃は向こうも大変なんじゃないかなぁ♪地べたに子バエのように叩き落されて…ね？」

「ッ！！？？！！？」

だから、コレくらいで取り乱しちゃったりしてはダメだって…。もう、情けないぞ？俺の過ごした時間では、この程度はピンチにもならんよ。だけど、大丈夫！殺してはいないはず！…多分だけど。大半は生きていられるさ。

「フフ、フフフ♪数には数を、質には質を、そして馬鹿には絶対な

る鉄槌を。調子こいてんじゃねぇぞ？小僧。ここからは再教育の時間だ…」

この世の地獄とも、いえるほど骨の髄まで恐怖を叩き込んで、じっくりと味わってもらうから戦闘者としての魔法使いは二度と復帰できないだろうけどな。精神的に無理だろな…。上司の不手際を部下が支払わされる結果になって残念だよね。

「ッ！何をしている！？こやつらを捕らえるのだ！！」

「お、おう！」「え、マジで！？」「…っ？…っ！」「誰から逝くよ？」「お前から逝けよ！」「…！…！」

遠巻きにものすごくペチャクチャと話して相談してんだけど…。ってか！聞こえてるっつの！来るなら来る、来ないなら来ないでハッキリしろって！…いや、誰も好き好んで安月給で死地へ飛び込めとか言われても行きたがらないだろうけどな。俺でもイヤだわ。

そうだ！ここで諸注意しておかないとな♪敵さんへ俺のせめてもの優しさです。誰だって死にたくないものなのだよ。生物の本能と言ってもいい。ここ、大事なことだゾ？恐れ知らずのバカなんぞ、関わるのもゴメンだ。

「敵将兵に言っておくが俺は他のメンバーより“敵”には優しくない。来るなら命を賭けろ。尚これは警告だ。…次は、無い」

「「「「「「……」」」」」」

あ、注意のつもりだったのに警告になっちゃった…。俺の声が聞こえる範囲にいる兵士達が揃って後退して、他のメンバーのほうへ

駆け出していった。無言で素早く駆け出して行くって…。俺って嫌われてんのか?…というかさぁ!?

「…なんで下がるんだよ?ここは「俺が行く!」って仲間のために敢えて前に出てくる場面だろ!?どういうことーッ!?」

そこが納得できん!ここは強大な敵を前にしても敢えて仲間のためにもと考え、前に出るものだろ!?たしかに最初は相手にするのが面倒くさいから注意(警告)したけどさ…。ほとんどの兵士がいなくなるってどういうこと!?

「お前があんなことを言うからだ、バカ…。これじゃどっちが悪者か、わかったものじゃない」

おろ?詠春じゃん。敵を斬り倒す(峰打ち)のが忙しいんじゃないの?俺の傍なんかに来たら敵が…寄ってこないし。なにコレ?俺の周りはセーフティゾーンとでも言うつもりか?ムカつくなぁ、おい?

それにどっちが悪者かなんてのは多種様々な他者の価値観で決まるものだから気にしても意味ないぞ?だいたい、正義など人が意識する、人の考えだから俺は知らん。…俺も元人だけどな!女神(幼女)に人間やめさせられたし…クスンッ。

「…詠春よ?善悪など人間が勝手に作った基準だってば、己の中に信念があれば、それが正義だよ。…だから気にするな♪」

「“♪”じゃないだろが?…アレを見ろよ。お前を避けた連中がほとんど俺達のほうに来ているんだぞ?」

「ん?…あー、本当だ。皆してヘタレだな…。俺には少ししか居ないのに…。不公平だー…。俺が何をしたというんだ…」

勇気というか蛮勇というべきか、俺の周りにも少数ながら敵兵は居る。それでも攻撃はしてこない。タイミングを見計らっているんだろうな…。んー…、面倒くさいから態と隙をつくって攻撃を誘ってみるか?うぅむ、俺の獲物が少ないような気がする。

「落ち込むくらいなら脅すなよ…」

「失礼な!脅しじゃない、親切心だって!…でも最初は少し敵数が減るくらいかな?って考えてたんだよ!それが、まさか、こんなに減るとは思わなかったなぁ…。うぅぅッ!俺の獲物!カンバーックゥゥーッ!!!」

「葵…お前なぁ…。はぁ…後ろを見てみろ。理由がわかるから」

後ろ?何があるっていうのさ。俺の後ろには…。

「ん?我が君、何か?あ、そろそろ殺りますか?」

ハオと…。

「吾らは、いつでも構いません。準備はできております」

ユエしかいないじゃん…。ん?アレー…?

「ハオとユエ?…あ〝っ」

「「?」」

俺、わかったよ、とっつぁん…じゃない、詠春…。まさか、こんなことが理由だとは思わなかった。たしかに、これじゃ誰も寄って来ないのは当然だよね。…なんで気付かなかったんだろ？チッ！この九重・葵！一生の不覚ッ！

「わかったか…。あの2人が睨みを利かせているんだぞ？」

「やはり、そうか…そうなのかー…。つまり俺は“トラの威を借るキツネ”だったのか…。俺自身が恐れられているわけじゃないんだ…」

そう、怖がられているのは俺じゃなくてハオとユエの2人だったんだ。俺は、なんて恥ずかしい勘違いをしていたんだろう！まさかハオ達が俺の代わりに睨みを利かせていてくれたなんて…。ん？ということは俺って舐められてるって…こと？…#ッ！

なんだか、ソレはソレでムカつくものがあるなぁ…#。もうちょっとヤンチャしとけばよかったかも！今回の大戦に参加するまで半隠居同然の暮らしをしてたからなぁ。賞金なんてかけられようもなかったし。

それで詠春は何で先程から、そんなに呆れた目で俺のことをジットッと見ていらっしゃるのでしょうや？俺、なんかしたかな…。

「…お前さぁ、自覚ないの？」

「え？だって俺のことを怖がっているんじゃなくて、ハオ達のことが怖かったんでしょ？…俺も二人に嫌われるとこなんかを考えただけでも…グスッ！うぅぅぅ！！」

「「わ！わ我が君！？！」」

「はぁ、何も泣くことなかろうに…やれやれ」

うっさい、詠春…。お前も家族を持てば理解できるはずだ！家族の誰かに嫌われる…想像しただけで俺は！俺は！！……鬱になり千年間引き篭もってしまいそうだｏｒｚいっそのこと崖の上から身を投げるか？ダメだ…無傷でいられる確率が高い…。

「グシュ…ズズッ！だ、だって～…うぅぅぅ」

「ご、ご安心を！吾らが我が君のことを嫌うなど天地がひっくり返ろうともありえませぬ！！」

「そ、そうです！吾らが我が君から離れることなど天地神明に誓ってありませぬ！！」

「ぼ、ぼん〝どう〟に〝～？えぐっえぐっ…」

「「はい！もちろんにございます！！」」

「うぅぅ…よかった…」

「「「……（ホッ）」」」

もう皆…そんな、あからさまにホッとした顔しなくてもいいじゃん。ちょっと悲しい想像しただけなのに…。悲しい…。グシュ…うぅぅ…。

「「…キッ！（余計なことを言うな！）」」

「…っ！？（スマン！…あれ？これって俺のせいなのか！？関係無くないか！？）」

「「…ギンッ！！（文句…あるのか？コラ＃）」」

「……（スミマセン…）」

なにやら詠春が2人に睨みつけられて縮こまってる？…どうしたんだろうね？まぁそれはともかく2人とも普段はキリッとした綺麗なお姉さんだけど怒ると怖いんだよ。何をしたのか知らないけど変なことしちゃダメだからね、詠春？

「んん！とにかく俺は誰にも怖がられることの無い“普通の”お兄さんってことだよな♪」

「いや、なぁ、葵？…それ本気で言ってるのか？」

え？本気で言ってるに決まってるじゃないか。ある意味、俺よりも怖いのなんか他にも、うじゃうじゃいるんじゃないか？例えばハオ達だ。2人を訓練の教官役にしたこともあったけど…俺と違って一切の甘えが許されないから怖いって皆が愚痴を零していたし。

…まぁその後日に、どこで聞いていたのか知らないけどハオとユエは愚痴を零していた面々を“特別訓練”にご招待したとか…。何があったか皆に聞いても覚えてないみたいだったなぁ。悲鳴がしていたから“何か”があったんだと思うけど…。

「お・ま・え・も！恐れられてんの！今までの自分の所業を思い出

してみろ！」

詠春…君は疲れているんだね？でなければ俺に、そんなことを言うはずないもんね。俺は怖くないって…。優しいほうだよ？“家族には”って条件はあるけど…。それに何より俺は恐れられることをした覚えはないよ。目撃者は“居ない”し…。

「…特に恐れられることはしてない、と思うけど？」

ということで、俺の正直な気持ちを言ってみた！自分の身は潔白だ！！

――ゴギャンッ！！

「ふざけんなよ！？」

「イッテーッ！？詠春！痛いでしょや！？思いっきり殴ることないじゃん！」

オモックソ殴られた…。正直な気持ちを言ったのに…。だって俺、何もしてないよ？そりゃあ大戦中に、ちょーっち“オイタ”したことはあったけど、記録にはほとんど残ってないし…目撃者も処理済だ。問題はないはず…。世間にはバレてないよ？

「このバカッ！ある意味じゃお前が一番、恐怖の対象なんだぞ！だいたい何だ！？あの兵器の数々は！！」

「恐怖の対象ってヒドクない！？それにアレは！…家族のための自衛用ですが何か？」

今更、何言ってんの？どの兵器も自衛用ですよ。どんなに強力でも自衛に使われるんだから自衛用です。まぁ裏の任務もあるからそれが全てとは言わないけど…。黙っていればバレません。この世界（主に日本など）は“疑わしきは罰せず”ですからね。

「自衛用って…お前なぁ…」

詠春もシツコイなぁ…。自衛用って言ってるんだからいいじゃん。そんなに言うなら…今ここで真の自衛行為ってのを見せてやろう！この場で実演して見せれば頑固者の詠春でも納得してくれるはずだ！

「なんなら今ここで自衛の一部を実演してみせよう！」

「あっ！？ちょ！待っ！？」

慌てることないって！大丈夫だから！…周りは知ったこっちゃないけど。ジャック達なら生きているさ！一応、出力は調整して死なないようにはするけど…個人の努力ってのも大事だよね？それじゃ逝ってみよう♪

「Ｗａｋｅ　ｕｐ！ラミエル！」

『Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！』

「Ａｌｌ　ｏｕｔ！ラミエル！」

ガンガン行こうぜ！ラミエル！ガンガン行こうぜ！！出力はできる限り絞って速射を重視。手数増やして一人弾幕で面制圧を再現してやる！向こうが数の暴力を地で行くなら今回は俺も付き合ってやろうじゃん。本物の数の暴力というものを教授してやる。これは先

にも言ったように再教育だ！

『Ｒｏｇｅｒ！』

「目標！前方に居る敵、全て！！」

あ、射線にジャックが！？…いや、あいつなら大丈夫だろ、この程度の威力なら十分に回避するなり防御できるさ。…仮に当たっても生きてそうだし。

『Ｆｉｒｅ！』

――カッ！！…シュドドド

「いよぉしっ！敵は混乱しているぞ！ハオとユエは残敵処理お願い！ラミエル！よくやった！流石だね♪」

「「承知！」」

『ふふん♪これくらい我なら当然だ！』

流石！ラミエルさん♪そこに痺れる！憧れる！…これで俺のプロテアを分解吸収してなければなぁ。もっと手放しで褒めてあげるのにね。うぅぅ…。

それにしても敵の悲鳴の中に何やら楽しそうに俺の名前を呼んだバカがいたけど…。もしかして、アレはジャックだったのか？コレだからバカは…。威力は抑えたとはいえ、あの弾幕の中で笑ってられるってどんだけなんだよ。バカには敵わんわ…。

「当然じゃない！違うだろ！？」

「うわ！？びっくりしたなぁ。何さ？テンション高いね」

詠春さぁ、空気読もうぜ…？ここは敵を屠ったラミエルさんを褒めるところだろ？それを俺の耳元で大声って…マジ、引くわぁ。そんなんじゃ嫁さんできないぞ？…あー、近衛の姫さんを嫁にするんだったか？婿養子だけど…。

『我が主よ、我は何か間違えたのか？』

「いや、何も間違えてないよ…。で？いったい、どうしたんよ？」

今回のラミエルさんに間違いはないよな。誰が否定しても俺は肯定しちゃうよ、うん♪むしろ俺の要望によく応えてくれたと思うな。速射重視といっても荷電粒子砲なんだ。当たれば必ず命を落とすことになる。良くても手足が吹っ飛ぶことになるだろう。

でも、ラミエルさんは見た目、派手にしても死者は出さなかった。…負傷者は多く出たけど。それでも生かして制圧するのって案外と難しいんよ?俺の希望どおりにやってくれたラミエルさんは最高だね。時々、オイタするけど…。

「どうしたも、こうしたもない!ジャックが巻き込まれるのを見たぞ!?」

「…ジャック(バカ)なら大丈夫だって♪生きてるよ?だいたい敵兵士が生き残れてるんだから心配ないって」

何かと思ったらジャックかよ…。あいつがマトモに死ぬところなんて想像もできないっての。まぁ、あの「造物主の掟(コード・オブ・ザ・ライフメーカー)」でもない限りジャックは無敵無敗じゃないの?バカってコレだからイヤだよね?時として、あらゆる法則を捻じ曲げてくるんだから。

『我が主の言うとおりだ。生体反応は消滅してない。よって問題無しだ。何よりアレが簡単に死ぬと思うのか?』

「む…それは、思わないが…。しかし!仲間がいるんだぞ!?危険じゃないか!」

詠春、シツコイよ?生きてるんだから、やり直しは効くってば。死んでないんだから大丈夫だよ。それにラミエルさんのセンサーでも敵兵を含めた生存は確認されてるんだからさ。落ち着こうよ?今

から血圧上げてたら歳くった時に高血圧で悩むことになるぞ?それにさぁ…。

「…ねぇ、アレ見ても、まだ、そんなこと言える?」

「アレ?……おぅｏｒｚ」

アレを見て、いきなり崩れ落ちるとか、ある意味失礼じゃないか?まぁアレを見たら、そうなる気持ちもわからんでもないけど…。

「ハーッハッハッハッ!アオイッ!派手にやったじゃねぇか!?オレも巻き込まれちったぜ!ハーッハッハッハッ!お礼にボッコボコに殴ってやるからな!!…逃げるなよ!?!?」

はぁ…仲間の心配をしているヤツに、こんなん見せたら崩れ落ちたくもなるわなぁ。弾幕に曝されてたのに本人は、いたって元気なんだから。ま、余計な心配しなくていいところがいいね。俺は早めに、このことに気付くことができたからは心配すること自体ないな。

ジャックを心配する?これ以上無駄なことは無いと思うのですよ…。いい加減、詠春も、そのことを悟ろうや?

「な?あいつは“あんなヤツ”だって…」

「すまん…。俺の認識がまだ甘かったようだ…」

詠春も、わかってくれたか。あいつの非常識さに気付けば、あとは精神的に楽だぞ?なんせ、無駄な心配をすることがなくなるんだからな。アレのことを心配するくらいならかまわずに拳を繰り出したほうが余程、建設的だと思う。

『人の生命力というのもバカにできんものだな…』

「アレが特別だと思うけどね…。な？詠春」

「ああ、そうだな…」

ラミエルさん、違うよ？ジャック（バカ）が特殊なだけで、他が普通なんだから。アレを基準に考えたら世界中（魔法世界）に変態が溢れることに…。キモッ！想像しちゃったって！マジでキモかった…。溢れ出るジャックの大群…。マジでヘコむわぁ…ｏｒｚ

はぁ、とにかくバカやってないで、あとは残敵処理を残すのみか？それもアル達やハオ達のおかげで、もう終わりそうだけど。あ、敵の援軍が来ない？…ということは家族は上手く事を成したみたいだってことだよな。ふふふ♪流石だね。

さて、ナギよ？アリカさんに上手く、かましてやリな。ここまでしてやったんだ。これで失敗なんかしたら…四分の三殺しだ。覚悟してろや？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第二十二話「下準備と襲撃とバカと」（後書き）

尺の都合でこんなんになっちゃった…てへっ♪
お〝え〝ーっ！！てへっ♪ってなんだよ？鬱だ…寝よう。

はいっ！バカなことは置いておいて後書きですな。
今回の見えないところの戦闘シーンは番外編で出そうかと思います。
ブッちゃけ早く本編に逝きたいですから…。

では！この辺りでお暇します！チャオッ！

ＰＳ．感想＆評価は随時受け付けています。誤字報告などもあると助かります。

第二十三話「記録映像と鑑賞会とアイリスの不安と」（前書き）

何も言うことはない…。
だが、敢えて言うなら…。あと少し…あと少しで本編ですよ…。
三十話までには本編に逝きたいなぁ。まぁただの希望だけどな！！
では、続きをどうぞ！！

第二十三話「記録映像と鑑賞会とアイリスの不安と」

――？？？？…。

Ｓｉｄｅ　？？？２号機

――ケルベラス渓谷、谷底…。

――ザザッ…ザザー…ザッ…。

「え…？ナ…ギ…？え…？…？…え？なぜ主（ぬし）が…地獄に…？あれ？」

飛び降りたはずのアリカは暖かなモノに抱きかかえられているように感じて目を開いてみればそこには自分を抱きかかえるナギが居た。アリカの頭は現状を理解できないようで言葉は断片的にしか意味をなさない。

「バーカ。あんたを助けに来たんだよ。…アリカ」

「え…？なぜじゃ？」

「……っ＃」

アリカは本当に理解していないためか割りと本気で聞き返した。この暢気な質問にナギの米神に“＃”のマークが一つ刻まれた…。

「な…なぜ…。なぜ、主がここにおる？」

「……っ＃＃」

ナギから答えが無いのでアリカは再度、問いかけた。ナギの米神に“＃”のマークがまた一つ刻まれた…。

「なぜじゃ…」

「……っ＃＃＃」

またもナギから答えが無いのでアリカは再再度、問いかけた。そしてナギの米神に“＃”のマークがまた一つ刻まれることになった…。

「答えよ！なぜじゃ！？この愚か者め！！いくら主でも自殺行為じゃ！」

「……っ＃＃＃＃」

とうとう、ナギから答えが無いことでアリカは詰問するように問いかけだした。この時のナギの米神に“＃”のマークがまた一つ多く刻まれたのは仕方の無いことなのかもしれない…。

「魔法の使えぬ、この場では、主も普通人じゃろ！ここの魔獣の攻撃を一撃でも、かすれば即死は免れぬ！！無謀にも程がある！何を考えておる！？この鳥頭ッ！！」

「……っ＃＃＃＃。…へっ！本来なら確かに、これまでで一番やべぇ状況下もしれねぇな？…けどまぁ魔獣はアオイが眠らせた！問題ねぇ！そして、ここからの脱出クリアの景品がアンタだってんな

ら、それも悪かねぇぜ！！」

アリカの割と元気な態度に嬉しさを感じる暇も無く。コレまでの我慢を言葉として吐き出すように非常に遠まわしの思いをアリカに告げるナギ。…そんな回りくどいやり方で彼女が気付くわけない。案の定、アリカは…。

「な！？…何を言うておるの！妾は、なぜかと聞いているのじゃッ！なぜ、ここまでの危険を冒して妾などを助ける！？無意味な行為じゃ！！」

「…ッ＃。忘れたのかよ？言っただろ！？…どこへだって連れてってやるってな！！」

気付いていない…。いや、そこまで意識する余裕がなかっただけかもしれないが…。一応、ここはケルベラス渓谷の谷底なのだから余裕などあるわけもない。アリカが言ったようにここでは“魔法”も“気”も使えないのだから。

それと、せっかく吐き出した想いも届かなかったことでナギの米神に“＃”のマークが新たに一つ刻まれた…。

「っ！り、理由になっておらぬ！！妾は、もはや、そなたの主君であるどころか王族でもない！かの戦争を起こした大罪人“災厄の女王”じゃ！妾の救出に意味はない！」

「…っ＃＃」

ナギの米神に“＃”のマークがまた一つ新たに刻まれた…。無言で俯いてプルプル震えている。抱かれているアリカは未だに混乱し

ているためか、ナギの変化にまだ気付いていない。

「妾の価値は、もう、この死にしか無いのじゃ…。頼むッ、このま…ま　。！？」

――ゴスッ！！！

「相変わらず、ゴチャゴチャうっせぇ～…」

「っ？？っ？？っ？」

アリカの言葉を最後まで言わせまいとしたナギの渾身の頭突きがアリカの頭頂部に炸裂した。ナギも痛いようで目元に涙が浮かんでいる。思った以上にアリカの頭が固かったようだ。一方のアリカは、なぜ頭突きをされたのかをわかっていないようで頭上に“？”を乱舞させている。

「あーもー！言わなきゃ、わかんねぇかな！この箱入り姫さんは！…理由だぁ！？そんなの俺がアンタを好きだからに決まってんだろぉが！！」

「は…？」

どストレートな告白にアリカは、ついにナギが言わんとした意味を理解したようだ。

「…なんだよ？その予想もしてなかったって顔だな。…傷付くぜぇ。何が“世界を救え”だよ？好きな女一人も救えねぇ男に世界とか救えるわけねぇだろ、バカ…」

「……（ポ～～）」

「で？アンタはどうだ？」

「（ハ！？）何？！な、何がじゃ！？」

「アンタは俺のこと、どう思ってんだ？」

「な、なぜ妾が言わねばならぬ！？」

「俺が言ったんだから、普通は言うだろ？」

「そ！…そうなのか？」

「ああ。…それが礼儀だ。一般常識だぜ？」

「そ…そうか。し、しかし妾は…王族であるが故、元々、妾にプライベートは許されぬ。…それどころか今の妾は大罪人“災厄の女王”。苦界に落ちた民達のためにも、そのような浮ついた話し…きゅ。！？」

――ゴスッ！！！！！

「何をするのじゃッ！！？」

ナギは、またもアリカの言葉を最後まで言わせることなく先程よりも強く頭突きをアリカの頭頂部に直撃させた。まぁそんなことをすればナギも痛いようで、またもや目元に涙を浮かべている。思った以上にアリカの頭が固かいのはわかっているはずなのに学習しない男だ。

「アンタ、もう王族じゃねぇって、自分で言ったばっかだろ。…それに“災厄の女王”もさっき死んだ。アンタは自由だ。もうアンタを縛るものは何一つない」

「……っ」

「今のアンタは他の何者でもない、ただのアリカ…。ただ1人の人間だ」

「1人の…人間…」

「そっ!そーゆーアリカさんとしては、どう思ってるんだ?って聞いてんだ」

「な!…う…。その…。…モゴモゴ。…そういう意味でなら…まぁ…。……という訳でもないがな」

「あーい?何すかー?聞こえねぇスー?」

「(ボソッ)嫌いではない」

「んぁん!?声小さいス」

「…(ピキッ)##!…ああ!そうじゃ!この2年間1日たりとも主のことを考えぬ日は無かったわ!!それがどうした!?悪いか!!?」

ナギへの想いを溢れさせたアリカ。いや、この場合はナギの言葉がアリカの心の中の堰を破壊して想いが氾濫を起こしたのかもしれ

ない。アリカは物事を溜め込む性質の性格をしているのだろう。

そんなアリカの思いを知ることができたナギは…。

「いや…悪かねぇ。…！」

「な？…んぐ…！」

アリカを抱き寄せて彼女の唇に自分の唇を重ねていた。

「…ん…んん…」

「…ぅ…ふ…ぇぐ…」

突然、いろいろな事が起きて、ここにきて気が抜けたのか、目に涙を浮かべてしまうアリカ。

「アリカ…遅れて悪い。この瞬間しかなかったんだ…」

「…ぇぐ…ふぇ…ぅぇ…」

「あーもー♪可哀そうに、こんなにヤセちまってよ。…胸だけは健気に成長した見てーだけどな。俺のため…ごこ。ッ！？」

――グシャ…！

「調子に乗るでない…。バカ…」

「あ、ああ…。なぁ…アリカ？」

「うむ…？」

「結婚すっか？」

「……」

「…アンタの罪も後悔も…まだ残る民への責任ってヤツも…。全部一緒に背負ってやるぜ！」

「……（ポ～～）」

「…な？」

「……むぐ」

「……」

「……はいっ」

――カッ！！…シュドドド

――ザザッ…ザザザ…ザー…ブツッ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　???2号機

――葵個人の隠れ家（セーフハウス）の一つ…。

Ｓｉｄｅ　葵

「「……（呆然）」」

という訳で昨日のアリカさん救出を果たしたナギの監視映像をアル、ジャック、詠春、俺、そして主役のナギとアリカさんで見ていたわけだ。本当ならここにガトウも居る筈だったんだけど折衝役というか襲撃の後始末をしてもらってるから席を外している。

「いやー♪ナギ達にバレないように撮影するのが大変だったって、うちのモン（アン）が言ってたけど何とかやり遂げてくれたよ♪いいモノが撮れたね！アル達はどう思う？」

「ふふ、ふふふ♪ええ、これはいいモノを見せてもらいました♪流石ですね？アオイ」

「ハァーッハッハッハッハハハ！ハハ、ハハハァ！アオイ！良くやった！こ、こんな面白ぇモン見られてオレは…ぷっ！ブゥーッハッハッハッハ！！」

「ナギ、アリカ様…その、おめでとう、と言えばいいのか？…それとナギ、アリカ様のことを大事にしてやれよ？その…何かあれば俺も力になる！だから頑張れ！」

３人とも…内２人だけど…言葉はアレだけど祝福する気持ちはあるみたいだね。嬉しそうにしているのが伝わってくるよ。…ジャックは普通に面白いから笑ってるだけみたいだけどな。

でも、詠春はマジメさんだね？せっかく、からかいの…んんっ、お祝いの席なんだからもっと砕けた挨拶もあるだろうに。そもそもの話しだがナギ相手にかしこまっても…ねぇ？アリカさんは、どうなんだろ？

俺１人で言葉のみでヤリ合えって言われたら…逃げるなｏｒｚ相手になんかしてられん。俺１人ではまず無理。威圧感がハンパ無いですよ？きっと…。アリカさん相手なら少しは、かしこまるかも？元王族だけに表情は読み難いったらないしな。

「「……（固）」」

因みに監視映像を見終わってからの２人はまるで石のように固まって俯いてます。…若干、身体がプルプルと震えているのは晒し者になったことでの羞恥心と怒りとか、でも２人の仲を祝福されて嬉しい気持ちとかが頭の中でゴッチャになって整理ができてないんだろね？

俯いていてもわかります。顔色が赤くなったり青くなったり白くなったり、でも最後には真っ赤になるんです。んふふふ♪２人とも若いねー♪真っ赤っかではないか？今回、色々準備した甲斐があっ

たってモンですよ！今も2人のことはラミエルさんが撮影中です。内緒だけどな？

今回は、トコトンからかいとおしてやる！！んふふふ♪まだパーティーは始まったばかりだぞ♪

「詠春は堅いなぁ。こういう時は新郎新婦をからかいぬいてこそ！ってなモンだろうに」

「葵は、そうは言うが、こういうのは最初が肝心だと俺は思うのだが？」

堅い…詠春、堅いって！今回ばかりは、思いっきりハメ外そうよ？友人の結婚が決まったんだからさ。何のために、この隠れ家（セーフハウス）の一つを開放して会場にしたと思ってんだよ？オモックソ騒ぐためだぞ？

この隠れ家（セーフハウス）な？復興作業している時に内々に確保したのよ。俺と家族以外には知る者が居ない秘密の場所。俺達が関わった復興場所には一つの町村や都市に対して数箇所の隠れ家（セーフハウス）を確保してある。

何かあった時のための備えってヤツだな。そして今まさに、役立っているのだから、この場所を用意したのは間違いではないはずだ！…隠れ家（セーフハウス）も、こんな使い方をされるとは思わなかっただろうけどな。

とにかく！詠春もゴチャゴチャ言わずにナギ達をからかい尽くせばいいんだよ！

「エイシュン！ここはアオイの言うとおりだ！からかって楽し…ゴホンッ！祝福するのは友人たるオレらの役目だぜ！だから存分にか

らかってやりゃーいいんだ！！」

「ジャックまで、そんなことを…」

尚も渋る詠春の説得にアルも参加するのか、割と真剣な表情…胡散臭いけど…で語り始めた。何を言って説得するのか、割と興味あります。詠春は石頭なところがあるから普通に説得しても時間がかかるんだよな。

「エイシュン…ニホンの諺に“鴛鴦（えんおう）の契り”というものがあります。これは仲睦まじい夫婦…つまりオシドリ夫婦のこと！ナギとアリカ様はそのオシドリ夫婦なのです！お互いにオシたりドツいたりして夫婦仲を深めるのです！我々はその様をからかいながら観さ…んんっ、見守ればいいのですよ」

「いや、アル…？オシドリ夫婦は“鴛鴦（おしどり）”夫婦であって決して“オシドリ”夫婦ではないぞ…。そもそもオシたりドツいたりはしない」

「くっくっくっ♪アルは面白いなぁ。はは、くくっくっく、あははは！「お互いにオシたりドツいたりして」かぁ？まさに、この２人のことじゃないか！ドツきあって今の関係があるんだから！くっくっくく、はははは！」

「「……＃」」

そう来たか？くっくっくくはーっはははっはははは！！！“オシたりドツいたり”かぁ？た、たしかに間違ってはいないな！普段の２人の行いを見ていれば、そう言われても文句も言えん。何かあればドツきあっているのだからな！ぷっ！あはっ♪くっくっく！

言われている本人達は未だに固まっている。整理することが多過ぎるのだな。まだまだ爆発までは時間があると見た！限界までからかいぬいてやる！２人とも覚悟しろや♪

「アオイもそう思うか！？実はオレもそう感じるんだよ！お互いにオシたりドツいたりしてってな！拳で語り合う夫婦…。アーッハッハッハハハハ、ハハ、ハハハハハッ！！イイ！！ナギの野郎にはお似合いじゃねぇか！なぁ！？エイシュンも、そう思うだろ！？」

「ここで俺に振るのか！？ええと…！それは…！世の中、そ、そういう夫婦が居てもいいんじゃ…ない…か？」

ジャック！ナイスアシスト！！詠春も困り顔だ！寧ろそんな危険なネタを躊躇なく放るジャックに痺れもしなければ憧れもしないが！！…ん？

「…てめぇら…」「…主ら…」

「「「は？」」」

マズッ！？思ったより復活が早かった！！この場は…。

「ふふふ♪では、私はここで失礼しますね」

あっ！？アルの野郎…自分だけ転移して逃げやがった！！って！こうしちゃいられねぇ！！俺も早く転移して逃げないと！！！

「「いい加減にしろーーーッ！！！！！！！！」」

一歩、遅かったーーーッ!!?!??

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――魔法球［ドッグ］内…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

私は今、前回のアリカさん救出作戦時に使用した兵器類の整備状況を確認するため［ドッグ］に自ら足を運んでいた。本来であれば上がってくる報告書を待っていれば良い。だが私は時々、こうして自分の目で確認するのだ。

無論、整備に関わらず皆の働きに疑問を挟むつもりは毛頭ない。皆、自分にできること、任せられた仕事をキッチリ果たすからだ。私のすることに特に意味は無い。言ってしまえば人間で言うところの癖のようなものだ。

敢えて、もう一つ付け加えて言うとしたら家族とのコミュニケーションとスキンシップだ。なにせ、人数が多いからな。日によっては一日中一度も会うことがない者も出てくる。まぁ、葵君が月に何度か［桜の苑］で宴会をするから寂しさのようなものは軽減されている。

［桜の苑］は読んで字の如く桜咲き誇る苑のことだ。あの場所は主に宴会の会場として使われる。因みに葵君のお気に入りでもある。

お昼寝をする時などは良く出向かれているようだ。

「整備班の諸君、ご苦労！整備班長、整備状況はどうか？」

「ハッ！比較的、被害も軽微でしたので全て予定よりも早く完了いたします。各要項はこちらをご覧ください」

被害が軽微…。たしかに軽微と言っていいのだろう。無人機の被害も思ったほどの被害は出ていない。有人機各機も大破、撃墜も無い。多少、ＤＦ発生装置が過負荷によって焼き切れかけている物があるが、それも想定の範囲内だ。

今回の戦闘で敵艦隊と部隊は数十ｋｍに渡り広域展開していたことで、こちらも戦力を分散して対処することになった。私達の作戦任務はアリカさん救出までの時間稼ぎであった。…が、危険ならば排除対象として処理することを許可されていた。結局は、ほとんどを戦闘不能にしたな…。

今後のために命までは取らなかったが魔法使いとしては、ともかく戦力としては二度と使い物にならないだろう…。二度と、な…。葵君に刃向かうモノは、須らく排除するべし。万物の尽くを灰塵としてくれる。フフ、フフフ…♪

何やら私の思考が黒くなったように感じたが…。まぁ私は元悪魔なので構わない、か？イカンな、悪魔の時の思考が、たまに漏れてしまう。少し、気が緩んでいる証拠だろうか。とにかく今は目の前の書類に目を通すとしよう。

「そうか、どれ…。…ふむ、良し。…ところで皆、問題無いか？あまり根を詰め過ぎて身体を壊したら閣下が悲しむからな」

「ふふふ。はい！皆、問題ありません！お気遣い感謝します！」

そうか…。私の気の回し過ぎだったか。本来なら私達は一週間程度なら睡眠をとらなくても平気だ。しかし、第三者からは無理をしているように見えるようだ。葵君も私達が平気であることを頭では理解しているようだが気持ちが納得できないそうだ。

よく皆に「無理するな」や「ちゃんと休んでるか？」などと声をかけては心配している。その一声が、どれだけの励みになることか…！帝国に居た時、崩落したオスティアへ救援を働きかけた時は徹夜になったな。…このことは葵君には秘密だぞ？…もし、話したら…クスクス…。

「そうか？報告ありがとう。仕事に戻るといい」

「ハッ！」

さて、整備班の邪魔にならないように視察しながら皆の状況を見て回るか。私の勝手な都合で、この場に居るのだから手早く終わらせてしまうとしよう。そして歩き出そうとしたが後ろから明るい声が私を呼び止めた。

「アーイリ♪お仕事、ご苦労さまなの。それで進捗状況はどんな感じなの？」

「ファレノ。それに珍しいな、リチラか」

「はい。お仕事、お疲れ様ですわ。アイリさん」

ファレノは前からよく一緒に居たから珍しくもないが、リチラが居るのは意外だった。彼女の前の所属はミリーさんの下だったので事務仕事ではお世話になっていたな。時々振る舞ってくれる手作りバニラアイスは絶品だった。

彼女は優秀だ。だが問題が一つある…。それは“抜け駆けする癖がある”のだ。「何の？」とは今更、言うまでもないことだろう。誰も見ていないところで葵君を手篭めに…いや、これは言い方が悪い。…と言うより逆だ。

なんとかして葵君に自分を襲わせようと“色々”と画策するのだ。…まぁその策が今まで一度たりとも成功したことは無いようだが。まったく、彼女は少し目を放すと葵君にベッタリしようとするから困る。…鉄壁の8人を超えられないから安心はしていられるがな…。

「2人とも、ここに来たりして…仕事はどうしたんだ？」

「もう、交代の時間だもん♪葵ちゃんなら今、“と一5”の隠れ家（セーフハウス）に入ってるの」

「周囲はわたくし達と交代した親衛隊の他に情報部の者達が2チーム付いていますわ。警備に問題は無いと考えますわ。…（邪魔者が多くて忍び込むこともできませんわ。はぁ…葵様に、お会いしたいですわ）」

リチラめ…何か、良からぬことを考えていたな？ここ数十年は落ち着いていたと思ったら、またか…。それに、いくら笑顔で取り繕っても私の目は誤魔化されないぞ。アレは意中の男性に思いを馳せる女の目だ…。まったく、また抜け駆けしようとしたのだな。困った奴だ。

葵君はリチラのことをジャレついてくる姉くらいにしか思っていないようだ。だが、だからこそ！私達が注意しておかないとイカンな…。基本的に葵君は私達家族には甘いからほとんどを苦笑一つで許すか流すかの二択なのだ。…心配だ、主に〇操関連で…。

「…と！いう訳で状況はどうなの？アイリ♪」

「ファレノ…いや、そうだな。状況は、ほぼクリアしている。整備班長が言うには各整備状況も予定より早く完了するとのことだ」

「でしたら、もし次の出動があっても問題無い訳ですわね？」

「ああ、そうだな。…尤も、しばらく、機動兵器の出撃は無いはずだ。今後の予定は、ほとぼりが冷めるまで、しばらくの間を地下にて潜伏するからな」

「それでは私達は今後どのように行動するのです？ただ地下で燻っている訳ではないのでしょう？」

リチラ…、葵君のことが無いとマジメで仕事の出来る麗人に見えるのだな…。いや、違うか。葵君のことが絡んでいるからマジメにしているのか？基本、彼女は葵君に害なすモノには容赦というものが感じられないからな…。

まぁ、それにも理由がある。前にも少し悪魔契約について触れたことがあると思う。この行為は人の言う契約とは根本的に違う。私達、“悪魔”や“精霊”の、それは最も重要で甘美な意味を持つ行為…。それは己の魂…所謂、自分の存在全てを契約相手に捧げる儀式だ。

その大事な契約を交わした相手に害が及ぶとしたら、そのことを許せるものだろうか？答えは断じて、否だ…。これはリチラや私だけではなく家族の皆がそうだろう。

その例でリチラを挙げてみよう。あれは私達が１ｓｔタイプの精魔奇兵になって間もない頃のことだ。百数十年前、旧世界の氷雪吹き荒ぶ北部地方に、とある材料を探しに葵君と私とリチラが行った時のことだ…。

――回想、始…。

途中で寄った村で事件に…というより、まぁ私達から見たら他愛も無いケンカなのだが、それに巻き込まれたのだ。それは村と相手側との土地の買収についての話し合いが全ての始まりだった。

話し合いは村で一番広い、酒場兼宿屋で行われていたのだが、そこでは私達も昼食を摂っていた。しばらくは互いに関係の無いことだったのだが買収話に村の若者の一人が猛反対して相手に殴りかかったのだ。

葵君は特に干渉する気は無いようで食事を続けていた。しかし、その時に運が悪いことに騒ぎを起こしていた一人が投げた椅子が葵君のほうに飛んできたのだ。もちろん、それは私が排除して事無きを得た。多少の殺意は漏れたかもしれないが気にするまでも無い…。

さて、ここで終われば良かったのだが、またややこしい問題が芽を出した…。そう、リチラだ…。彼女が葵君への無礼に激怒したのだ。リチラはゆっくりと椅子を投げつけた青年に近付いて徐にその首を掴み吊るし上げたのだ。

持ち上げられてバタバタと手足を動かして必死に呼吸しようとする青年。ただ見ているしかない他の人達は何が起きたのか、わからないまでも本能的に感じた。建物内が瞬く間に冷たい殺気に包まれて誰一人動くことのできない状況になっていたことに…。

下手に動けば即座に殺される…。誰もが、そう確信した。…だが、そんな中で動く者が居た。それは葵君だった。彼は先程のことを特に気にした風でも無く、リチラに落ち着くように話したのだ。それでリチラは渋々ながらも手を放して、その場では怒りを霧散させた。

このまま何も無ければ怪我人も死者も出なかっただろう。しかし、人は往々にして負の感情に囚われ易いものだ。

…後日、材料を採り終えた帰り道で、それは起こった。狩猟用のライフルで遠距離からの狙撃されたのだ…。やったのは前日にリチラが吊るし上げた青年だった。動機は逆恨み。そしてまたまた運が無いことにリチラを狙った弾は逸れて葵君の腕を掠めたのだ。

青年の放った弾丸が外れたことで失敗したことが、わかると青年の仲間が次々と姿を現せて数で攻めてきたのだ。葵君の怪我、攻めてくる人間達…。それらを見た、リチラは、ついに…キレた。

“氷漬け”。

それはまさに一言に尽きる…。雪の降る山岳戦でリチラは敵とな

る青年を…。葵君に仇なす人間共を次々と氷像へ変えていった。二度と融けぬ氷像へ、と…。あの時の彼女の表情は今思い出しても寒気がする。

どこまでも透明な瞳…どこまでも冷酷な光景…どこまでも純粋な殺意…。精魔奇兵になって増した力にも振り回されること無く、ただ淡々と敵を始末していく姿…。恐ろしくも綺麗だった…。

――回想、完…。

それが、今ではコレか…。はぁ…。私の、あの時の感動を返してほしいものだ…。

「ふむ。リチラ、その質問に答えよう。閣下から「最低限の警備を残して休暇に入れ」、との辞令が下りた。よって我々は二個中隊規模（２４人）で順次、休暇に入る。…他に何か質問はあるか？」

「…葵様は、いつ頃、休暇に入られるのでしょうか？」

本当に今の彼女はわかりやすいなー…。何もここまで真剣に…いや、訂正しよう。何も知らなければ私でも同じことをする気がする…ｏｒｚしかし、それでも私は彼女よりはマシだと考える。自制心というものを私は持っているつもりだからな。

「（やはり、来たか…）安心しろ、リチラ。閣下とハオさんとユエさんを初めとして我々、親衛隊も同時期で休暇に入る。…どうだ、

嬉しいだろう？」

「……（ぷるぷる）。ええ！ええ！！アイリさん！貴女は最高ですわ！うふふ♪最高の休暇になりそうですわ♪♪」

なんという喜びようだ…。休暇はまだ先なのに、もう彼女の頭の中には葵君とのバカンスしかないのだろうな。何を想像したのか、知らないが表情が蕩けきっている…。というか、こいつは“どこまで”する気だ…？休暇中は警戒が必要だな…。

【…ファレノ、ファレノ…リチラが休暇中に暴走したら手間だ。皆には注意しておくように連絡を頼む…】

【…了解、なの。皆に連絡しておくの…】

予防策は確保した。これで、いざとなれば皆と協力して彼女を説得（フルぼっこ）すれば問題無い。言ってわからない者には、それ相応の力で制圧するのみ、だ。それにせっかくの休暇なのだから葵君とのんびりと過ごしたいのだ。妨害されてなるものか！

「うふふ♪そんなところでダメですわ～♪でも、葵様になら～♪…うふ♪うふふふ♪」

「ダメだ、こいつ…早く何とかしないと…ｏｒｚ」

「なのー…ｏｒｚ」

真剣に対策を講じる必要があるかもしれない…。この時、私が考えたことは間違いではないと思うのだ…。

Side out アイリス

第二十三話「記録映像と鑑賞会とアイリスの不安と」（後書き）

あれ？新キャラがダメな子になりつつ…ある？

そんなバカなｏｒｚ

作者にコメディは、まだ早い気がする…。笑いってムツしいですね…。

これは作者の脳内で会議を開く必要が出てきたな。

次回は京都を舞台にしたいと思います。でも2、3話で終わらせる予定…。

予定だけどね？

では、また次回お会いしましょう！！チャオッ！

第二十四話「京都観光と温泉と危険と」（前書き）

はい！というわけで京都入りました葵達［紅き翼］＋α！
ある意味ここからが分かれ目かな？と思うのですよ。
では続きをどうぞ！

第二十四話「京都観光と温泉と危険と」

――日本国京都某所…。

Ｓｉｄｅ　葵

どうも、どうも！突然ですが俺は今、日本の古都、京都にいます！いやー、雰囲気いいねぇ♪心は日本人だから癒されますな。ここに来た理由は家族と観光…だったら良かったんだけど。実は新世界から逃亡してきたんですよ。

［紅き翼］（ガトウは事後処理のために別行動）とアリカさん、それに俺のファミリーの一部（陽月姉妹、精霊三人娘、悪魔三人娘、親衛隊の皆さん）が行動を共にしているんだ。アイリ達には別で旅館を用意したよ？人数、多いと目立つしね。

あ、精霊・悪魔三人娘なんだけどね？彼女達に特別性の偽体（ぎたい）を用意したんよ。偽体というのは…まぁ、ブッちゃけて言えば某死神達も愛用しているもののパクリなんだ。もちろん彼女達に適合するように調整しているから使えるよ。

今回、偽体を作った理由は精霊さんが今までだと食事の意味…と言うより食事自体ができなかったからなんだ。味見程度ならできるけどね。だから料理はしようと思えばできるんよ。

で、偽体に擬似的に憑依することで人と同じ生理現象を再現してみようと考えたんです。折角の家族旅行（それも含めて）だからミ

リー達にも楽しんでほしいと思ったんだ。それに旅行と言えば温泉、観光、そして美味しいご当地料理だと思うんだよね！

オリビエ達は食べることは問題なかったけど顕現できる時間は一週間が限界なんだよな…。彼女達用に調整した偽体に憑依することで擬似的な肉体を再現。限界時間を誤魔化したんやね。それに悪魔らしい角や翼、尻尾なども隠せて見た目、まんま人間ですよ？黒髪美人さんです。

ミリー達の姿は基本的に人のそれだから問題は無いね。まぁ精々が髪と瞳の色が色鮮やかなだけだな。これが綺麗なんだよぉ♪蒼、碧、紅の色の髪や瞳が日の光を反射してキラキラと煌いて、もう…！…はぁ♪美人さんだよなぁ。

おう！？今、気が付いたが話しが脱線しまくりだ…。気を付けないとな。

「まぁ、とにかく今、俺達は京都に居ます♪」

「「我が君？」」

「あるじー？」

「主？誰に話しているので？」

「うん、なんでもないから気にしないで」

「「「「はぁ」」」」

気にしたら負けだよ、皆。世の中、曖昧にしたほうがいいことの

ほうが多いんだからさ。

今回の俺達って客観的に見ても人数が多いからね。修学旅行生の1クラス分はあるんじゃないかな。27人だしさ…。移動にはバスを貸し切っているし。因みにナギとは別行動。さっきも言ったけど、いくらなんでも俺達に混じって行動するのは目立ち過ぎるでしょ？

それでナギの野郎な？別行動なんだけど…。んふふふ♪

――回想、始…。

――京都の隠れ家某所…。

あの救出後、ほとぼりが冷めるまで新世界から逃亡してきた俺達［紅き翼］とアリカさん。詠春の実家がある京都。彼がしばらく滞在できるこの隠れ家を用意してくれた。すでに、ここに滞在して数日経っている。

俺の家族は申し訳ないけど、隠れ家にはそんなにスペースがないから［工房］内に待機してもらっていた。でも、この数日を使って滞在できる旅館を確保したから順次休暇のために呼び出したよ。これまで働き詰めだったから、のんびりしてほしいよね。

「ナギ、旧世界なら奴らも容易に手出しはできん…。と！いう訳で俺達は観光に出かけてくる！」

旅館のほうは、向こう数週間は宿泊する予定でいるから…旅館自体を貸し切ることにした。出費がすごいことになったけど、たまにはこういうのもいいよね。ナギやんも来るみたいなこと言ってたけど…まさか、温泉目当てか？

んー…、料金は別で取ってやろうかな？…あ！でも、結婚するんだから俺からのささやかな、お祝いの気持ちとするかな…。まぁ、それはともかく家族の皆と思い出、作りたいし。何より温泉を貸し切れるのが最高！

「んあ？あー、いいんじゃねぇの？行ってこい、行ってこい。俺も…」

「デート♪か？」

「…うっせぇよ！いいだろ！…約束だからな」

何、照れてんだよ、こいつ。上映会の時にキスシーン、かましてんだから今更、恥ずかしがるなよ。…隠し撮りだったけど。あの時の二人の暴れっぷりはすごかったの一言ですな。照れ隠しにも限度というものがあると思うんだ。

あわや、記録データが破損するかと思ったよ。あの隠れ家も半壊して使い物にならないし。もう使えなくなったよ。ええ、もちろん後日、破棄決定しました。実際ね？あんなに騒いだら隠れ家の意味がないんだよ。

「なーに、拗ねてんだよ？あ…んふふ♪まだ鑑賞会のことを根に持ってるのか？」

「う、ううううっさい！！うっさい！！もうソレはいいだろ！行くなら行ってこい！！」

「くくくっくっく♪赤くなりやがって初心だねぇ。…あー、わかった、わかったからあんちょこを出すな。大呪文を唱えようとするな」

「ケッ！」

照れ隠しにも程があると思う。隠れ家半壊のこととといい今回といい。何で？ねぇ、何で？こいつらは何でこんなに過激なの？からかうのも命懸けですよ。…今更、やめてやらんけどな！被害はバカにならないけど負ける気しないし！

「そんじゃ、行ってくる。お土産は…いらんな。しばらく滞在する奴らには無意味だ」

「おう！行け、行け！」

「はいはい、行ってきます」

ったく、こいつは。まぁ、いいか…。おう！？もう、こんな時間！早く待ち合わせ場所に行かないと！

――回想、完…。

て！なことがありました！ナギのヤツも今頃デートしてるんだろ

うなぁ。俺も彼女欲しいな！こんちくしょー！

「葵様、葵様！ほらっ！金閣寺ですよ、金閣寺！キラキラしていて綺麗ですわね♪」

「本当だ。綺麗だね、リチラ。…それにしてもテンション高いよね」

「そんな…わたくしが綺麗など…♪葵様ったら♪♪」

ごめん、リチラ…。時々、君の言っていることが掴みきれません。綺麗とは言ったけど金閣寺のことだからね？あれ？というよりもリチラが聞いてきたことだよね？それと、なぜに俺にくっ付いて腕を取り、しな垂れかかってくるのでしょう？

お兄さんはドキドキですよ。あぁ、素敵で柔らかいモノが腕に当たるぅ！しかし！退かぬ！媚びぬ！省みぬぅぅぅ！ああぁぁ、でも、彼女の女性としての魅力がぁぁぁぁ…。おふ！？今、ふにゅんって！ふにゅんってしてるよぉぉおお！？！

くっ！いくら家族として安全な人認定されているとしても、これは…！

「はいっ！リチラッ、ストップ！！」「リチラッ、ちょーっと待つの！！」

「うおっ！？なに？なに？？なに？？？」

「ふぇっ！？なんですの！アイリさん、ファレノさん！」

ビックリしたー…。ちょっと脳内で煩悩と死闘を繰り広げていた

ら二人が居るんだもの。

「「問答無用！皆！！」」

「「「「「了解ッ！」」」」」

「ッ…！？」

皆、どこから現れたの！？さっきまで居なかったよね？まさか、ステルス迷彩か？こんなところで使うのは感心しないな。一般の人に迷惑をかけないように言っておかないと…。

リチラに、にじり寄るアイリ達。絶妙の連係で半包囲した彼女達はやがてリチラを捕まえた。その後、「ワッショイ！ワッショイ！」と掛け声が聞こえるようにして駆け出していく。

「え〝っ？ちょっと皆さん？え？ええ？？えええええええええぇぇぇぇぇぇぇ…！」

「なんか、よくわかんないけど…。他の人に迷惑かけちゃダメだからねぇーッ！」

「「「「「ハーイッ♪」」」」」「葵様ーッ！？」

まぁ皆、久しぶりの旅行だから、はしゃいでいるんだね。お御輿のようにリチラを担いで行っちゃうなんて…最早、お祭り騒ぎじゃないか！もう、皆、可愛いなぁ♪今回の逃亡で京都を休暇先にしたのは正解だったようだ。

金閣寺の後は銀閣寺と相国寺を巡る予定なんだよね。ルートとか

気にしないで見たいところに行くから少し歪な順繰りになりそうだけど…。この世界に送られる前は金閣寺しか見たことないから実は結構楽しみなんだよ♪

「みんな、元気だねー。ねー、あるじー？」

俺の服の裾をぎゅっと握ってきたウーリがそう言う。かーいーなー♪

「ん？そうだね。ウーリは楽しんでるかな？」

「んー？うん。みんなと居られるから楽しいよ」

「そっか♪」

――ナデナデ♪ナデナデ♪ナデナデ♪

「んにゅ？ん～♪にゃー♪」

ウーリの髪は柔らかいねぇ♪暖かい日差しに相まってウーリの碧色の髪を撫でていると俺も気持ちよくなっちゃうね。ウーリは目を細めて気持ち良さそうに撫でられてるよ。はぁー…ほのぼのするなぁ。

「主、あちらに甘味処がありますぞ。行ってみませぬか？」

おぉ、マリー、ナイス発見だ。君は素晴らしいよ。なんとなく京都に来たら甘味を食べたくなるんだよね。これは俺の気分の問題なんだけどな。

「いいねぇ。餡蜜が食べたいな。ハオ、ユエも行こう」

「「ハッ、お供いたします」」

ハオもユエも食べること自体はできるからね。栄養にはならないから完全に嗜好品扱いだけどな。美味しいって感じることはできるんだから食べれる時は食べてほしいって思うんだよね。二人も女の子だから甘いものが好きみたいだし。

ふふふ♪今日は遊び倒すぞーッ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――京都府内某所の旅館…。

Ｓｉｄｅ　マリエール

今日一日の京都観光を終えて、宿泊地となった旅館に帰還した。そして夕餉を頂き、その後は皆それぞれの時間を過ごし始めた。

その中で私達は今…。

――チャポンッ…。

「ふぅ、良い湯だ…」

「本当ねぇ」

「あいー」

旅館の露天風呂にて入浴中…。娯楽の一種として沐浴はしていたがやはり露天は趣があって良いものだな。本来なら必要は無いが、この偽体に擬似憑依してからは毎日、入浴している。

休暇を逃亡先の日本の京都で過ごすことになった私達だが観光も料理も、そして温泉も楽しめたな。主も銀閣寺と相国寺のことを嬉々として見ておられたようだしな。

「ふふふ。あぁ、そうだぁ。2人とも今日は、どうだったかなぁ？主様と楽しめたかしらぁ♪」

「ん？ああ、なかなか有意義な時間を過ごせたな。うん、楽しめた」

「ウーリもー、楽しかったよー。葛餅、食べたのー。甘くてー、プルプルしててー、おいしかったのー」

「む？私はお汁粉を頂いたな。柔らかいお餅と優しい甘みがなんとも美味であった」

うむ、実に美味であった。味覚があり食事をするというのも悪いものではなかったな。ウーリと一口ずつ交換して食べてみたが葛餅も柔らかく蜜の甘みが程よくて飽きがこないものだったように思える。

そういえばミリーのほうはどうだったのだろう？

「そう、楽しめたのねぇ♪私も楽しかったわぁ♪オリビエ達とお土産屋を見て回ったりぃ、甘味屋をハシゴしたりぃ、皆で写真撮ったりしてぇ。…本当に楽しかったわぁ」

「そうか。ミリーも楽しめたのだな。ん？しゃ、しん？…！」

しゃしん？写真…。現代では比較的簡易な映像記録媒体…。思い出の記録の定番…。今日の観光で、それを私は、したか？…あれ？したのか？？

「？？マリー、どーしたのー？」

「シマッタ…。私としたことが今日の記念の写真を撮ることをしていなかった。クッ！折角の主との思い出が…」

今から観光をやり直すか！？いやいやいや！今日という日はもう終わってしまった…。同じ時間は二度としてない…無理だ。いや、しかし、似たような時間を過ごすことはできる？違う、ソレは似ているだけで劇をしているのと変わらない…。

仕方ない…今回のことは諦めるしかないのか…？まさか、ここでウーリ達相手に愚痴るような無様をさらすわけにはいかないからな。はぁ…。

「んー…？おー！うん、大丈夫だよー。記録はアカトンボがしているから問題ないよー？しかもー、高画質でー」

「な…に？それは本当か、ウーリ？本当なのだな！？」

ウーリは記録していると…言ったか？

「ブイー♪このウーリに、ぬかりなしなのだー」

「うふふ♪ウーリは偉いわねぇ♪」

「でかした！ウーリは偉い！それと…後で焼き増ししてくれるな？」

「おーけー」

やった♪やった♪ウーリ！よくやってくれた！やはり、旅の記録は残すものだな♪これで私のコレクション…げふんっげふんっ…思い出が増えるというものだ。うむ！

「感謝する！」

「えへへー」

「あらあら♪まぁまぁ♪」

この時の私は舞い上がっていて気付かなかったことだが、後日記録映像を見たことで気付いた。撮影がアカトンボということで被写体の目線がまばらで、まるで隠し撮りのようになっていたのだ…。

しかし、これはこれで…♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　マリエール

――同旅館内の男湯…。

Ｓｉｄｅ　葵

はぁ、いい湯だねぇ…。日頃の疲れが癒される思いだよ。それにしても隣の女湯は賑やかだね。男は俺とナギ達しか居ないから…最初から男女比がおかしいっちゃおかしいんだけど、まぁこれは仕方ないよな。

今、男湯で湯に浸かっているのは俺だけなんだ。寂しいなんて思ってないんだからな！本当なんだからね！？…アホなこと言ってないで月見しながら、ゆっくりしよう。

「ふぅ…」

――ガラッ。

おろ？誰かが入ってきたな。俺は湯船の奥のほうに居るから人影は湯気でシルエットしかわかんない。…誰だ？

「いや――！疲れた、疲れた！とうっ！」

――ジャバンッ…！

…とうっ、じゃねぇよ、とうっ、じゃ。飛び込むなよ。波が立つだろうが。俺の顔にもダイレクトにかかったぞ、コラ＃。そして入ってきたヤツのことだが声を聞いてわかった。…ナギのバカだ。あいつ他に誰も居ないと思って温泉に飛び込みやがった…。

「こんの！バカが！飛び込むなんて、てめぇはガキか！？ゆっくりと入れんのか！」

「うおぅ！？…なんだ、アオイじゃん。ビックリすんじゃねぇか」

「ビックリじゃねぇよ。何、湯船に飛び込んでんだよ…」

本当にね？ビックリとかじゃなくてさ。はしゃぐなとまでは俺も言わないよ？言わないけどさぁ…普通いい歳した男が温泉目掛けて飛び込むか？ガキじゃねぇんだから、やめろよなぁ。他に人が居たら迷惑だろうが…。旅館は貸し切りだから居ようがないけどな！

なんだ？ナギよ、何をそんなに不満そうにしてんだよ？言い訳でもあるのかね？

「固いこと言うなって！こんなに広い風呂なんだ、少しくらい、かまやしねぇって！」

「かまうわ！俺に波がダイレクトにかかってんだよ！静かに入りやがれ！いいな！？」

まさかの開き直りですか！？公共の場で、そういうことをしちゃいけません！お兄さん怒りますよ！？メガッサ怒りますよ！？温泉好きなお兄さんとしては…ヤルぞ？それも割と徹底的にヤルぞ？温泉好き舐めんなよ？

「ケッ、なんでぇ、ちょーっとくらいいいじゃねぇか…」

「よく聞こえなかったが、何か言ったか？コラ＃」

この期に及んで自分の非を認めないつもりか？くくくっくっく！お兄さん、キレちゃうぞ？仲間とはいえ…いや、仲間だからこそ、遠慮しないでヤっちゃうぞ？

「何でもねぇよ！」

「そうか。…それで今日のデートはどうだった？楽しめたか」

ったく、聞こえてるんだっての…。ふぅ、まぁいい。なんだかんだ言っても俺も楽しかったからな、今日は。ナギのほうはどうかね？

「うっせぇ…。ああ、楽しかったな。アリカも表情はまだまだ硬かったけど楽しんでたのは傍に居てわかったしな」

「いきなり、惚気かよ…。聞いておいてなんだが砂糖吐きそうだ。それでどこ行ったんだ？」

皆さん！聞いてください！こいつ、ナギは独り身の俺に対して彼女…ならぬ、嫁さんとの惚気を話し出しましたよっ！？マジでやってらんねぇわ。何が悲しくて人のストロベリッた話しを聞かなきゃならんのよ。

他の人ならともかくナギがこうなるとは思いもしなかった…。いや、聞いたのは俺だけどさ？でもねぇ…実際、聞かされてみなよ？雰囲気が甘すぎて砂糖、吐くぜ？…温泉がベトつくからしないけどさ。

「惚気言うな、バカ。あー、どこ行ったかだったか？エイシュンが言ってたキヨミズノブタイっていうのに行ってきたな。他にも色々行って、どっかの神社で一緒にオミクジって占い（？）みたいなの

もやったりした」

「そうか…。って！やっぱり、惚気じゃねぇか！何だ、お前！？彼女…と言うより嫁の居ない俺への皮肉か！？」

皆さん！聞い（以下略）…。

それにしても清水の舞台か…。今度、行こうかな？うん、次の目的地にしよう。あー…。皆の新しい衣服も購入したいな。彼女達も女の子だし新世界のはともかく、旧世界の服も欲しいだろうしね。買い物の時間を作っとこう。

で？ナギさんや。本当のところはどうなのかね？ぶっちゃけ、からかってますけど♪

「バッカ！？ち、ちげぇよ！惚気てなんかねぇ！何で、そうなるんだよ！」

「…はぁ、お前って本当に、この手のからかいには弱いのな？幸せなんだったら自信持って言えばいいんだよ。どうだ！俺の嫁さん美人なんだ！いいだろ！？ってさ。…それとも幸せじゃないのか？」

こいつ、本当に口での勝負弱ぇなぁ。動揺が激しいんだって。軽く流すなりやり方はいくらでもあるだろうに、バカ正直にうろたえやがって。嫁さん中身は…アレだけど外見は文句なしで美人さんなんだから自信持てよ。

そしてナギが吐くであろう、次のセリフを確保するためにエセ宝物庫からボイスレコーダーを取り出して…。カチッとな♪

「あ、ぅ、ぇ…。っ～～！ああ、そうだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねぇよ！」

「…よぉく言った！！それでこそ男ってモンだ！俺はお前を見直したぞ！そしていいネタを、また頂きました！ごっつぁんです！！」

「は？あーっ！？てめっ！それは！？」

フフフのフ♪今更、気付いても遅いんだよ♪

「ポチッとな♪」

『ああ、そうだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねぇよ！』

俺はボイスレコーダーに記録されたモノを確認の意味も込めてナギの目の前で再生してやった。…ふむ、バッチリ録音できたようだ。これなら問題ないかな？もちろん、ネタとしてな？んふふふふ♪

「あわ、あわわわ…！」

「んふふふ♪あとでアリカさんに聞かせてあげようっと♪喜ぶんじゃないか？お前の素直な気持ちが録音とはいえ聞けるんだから。なー？」

「うわっ！待て！待ってくれ！ソレをよこせ！」

「待・た・な・い♪それじゃあ俺は、もうあがるわ。あー、ナギはまだごゆっくり～♪」

――パチンッ♪

俺はこの時、追いかけてこようとするナギに、申し訳ないと思ったんだ。だって、来たばかりなのに温泉から上がろうとするんだぜ？かわいそうだろ？そう思ったら左手で指パッチンをして拘束魔法を使ってた。単純だけどバカみたいに魔力だけは込めたヤツを、な。

後悔も反省もしてない。なぜなら、これは俺の好意だからだ。…それじゃ、のんびり浸かっててねぇ♪んふふふ♪

「ッ！？これは！…待てーッ！早まるな！アオイーッ！！」

聞こえな～い♪聞こえないったら♪聞こえな～い♪ララ～♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――同旅館内の一室…。

Ｓｉｄｅ　アリカ

ふぅ…、我が騎…いや、もといな、これは違う。ナギめ、あのように、まるで快活な少年のように、はしゃぐとは、な。今日一日は疲れた…。ふふふ。ああ…たしかに疲れはあるが、楽しかった、な。うむ、楽しかった。

ここに居て皮肉なものだと感じてしまう。この世に生を受けてか

らというもの王族としての勤めを全うしてきた。この身は国のため、民のためにある、としてきたのだ。なのに、今の私は自分の…個人の幸せを掴もうとしている。

むろん、今でも愛する民らのことを想う気持ちもある。世界のために祖国を亡ぼした自分が幸せを手にしてもいいのか？という考えも当然ある。…それに何より“あの子”のこともある。じずれはあの場所から助け出さねばなるまいが…。

あの子は、今まで過酷な生を過ごしてきたこともあり、まだ感情の表現が下手だ。辛いことだが無表情と言ってもいい…。悲しいこと、だとも思う。何が悲しいって、あの子は自分自身で悲しいことだと理解していない…いや、できていないのだから。

ただただ、空虚な瞳で見ているのだ。それさえも、ちゃんと見ているのかも怪しいが…。救出後の、これからの人生は違う生を過ごしてくれたらいいと願うばかりだ。

「ふぅ、一人になると、どうも余計なことばかり考えてしまうな…」

国や民のことを考えていたはずなのに気が付けば自分自身のことやあの子のことを考えるようになっていたことには軽くだが驚きのようなものを感じる。

「ふふ、これもあの者の影響なのかの」

そうだ、救出できたらあの子には明るい人を傍につけたほうが良いか？ナギやジャック・ラカンはどうだろうか？ああ、そうだ、良いかもしれぬな、うむ。いや、ジャック・ラカンだ…と…？

「ジャック…ラカンと…一緒、だと？これは…マズイか？」

心配だ…。あのバカ者とあの子が一緒に居ることに、よく考えてみたら不安を覚える。あの子は良くも悪くも純粋で真っ白な子だ。あのバカ者の影響で、そのバカがうつらないかが心配で、不安だ。

「いや、もしかしたら妾の狙いどおりジャック・ラカンのバカ能天気なところが…」

そうか…。もしかしたら、少しは明るく快活な子になるのではないか？バカがうつりそうで、いささか…いや、かなり…いやいや、ものすごく不安ではあるが。あの子にはいい刺激になるのではないか？

「ふむ、しばらくは保留とするか…」

――トントン…。

「アリカさーん？居ますかー？ちょっと面白いモノが手に入ったんで聞いて欲しいんですけど」

珍しいこともあるものだ。ここにきて何か問題でも出てきたのか。もしや、追っ手が差し向けられたのだろうか？いや、その可能性は砂粒ほど低いか。アオイの手の者達のことだ、その心配は限りなく低いな。何はともあれ入ってもらうか。

「アオイか？開いている。入るがいい」

「お邪魔しまーす。こんばんは、アリカさん」

「うむ、そこに座るがいい。それで聞いて欲しいものとは何だ？」

「んふふふ♪多分だけどアリカさんの喜びそうなモ・ノ♪」

「？？？」

妾の正面に座ったアオイはイタズラ小僧のように笑っている。む？…なんだ？この不安…違うな、むず痒いような感覚は…。

「まぁ前置きは省いて早速聞いてもらいましょう！ポチッとな♪」

『ああ、そうだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねぇよ！』

「……」

なんだ？今のは、ナンだ？頭がクラクラする…。

「どうよ？さっき温泉に浸かってる時に聞き出したんだけどさ。嫁さんとしては旦那さんのこのセリフは嬉しいんじゃない？」

「……」

温泉…？嫁…？旦那…？ナギ…？

「アリカさん？あー…、ダメだこりゃ」

「……ぁ」

「あ？お帰り」

え?あ?え?おかえり?

「アレ、妾は…どうして?」

「ポチッとな♪」

『ああ、そうだよ!幸せだよ!好きな女と一緒に居られんだ!これ以上の幸せはねぇよ!』

「……」

ぽ~~~…。

「いいから!それは、もういいから!!お願い!戻ってきて!」

ハ!?そうだ、思い出した。これはナギの声だ。なにか、嬉し…ん〝ん〟っ!!よくわからないセリフを聞いた気がしたが…。ふふふ♪

「あ?あ、ああ。すまない。少し、放心していたようだ、こほんっ」

「…(ボソッ)アレで、少しかよ」

「ん?何か言ったか?」

「いいえー、何も言ってないよ」

「ふむ…」

何か、引っかかるが…。まぁいい。気にする必要はあるまい。

「それで嫁さんとしては…どうよ?」

「!!…ど、どど、どどどどう?と、とととは、とは何がだッ!?」

な、ななん、ナンだ!?もとい!何がだ!?

「はいはい。…冷静なアリカさんが取り乱すほどまで嬉しかったのな」

「ち!ちがっ!」

咄嗟に否定しようとする妾の口。妾自身でも気付かぬ内に否定しようとする。羞恥から意地で否定しようとしたのだ。

「否定するのは簡単だよ?でも、それは…。うん、これ以上は言わなくてもアリカさんならわかるでしょ?」

しかしその否定もアオイによって止められた。どこまでも優しい声色でまるで娘に言い聞かせるようだった。ふと、普通の父親とはこういうものなのか?という考えが浮かんで、バカな、という思いで打ち消した。

それはともかくアオイの言いたいことだ。言いかけたが…わかっておるわ。下手な意地を張って関係が拗れるのはバカらしいと言うのだろう?ちょうどいい、ここで妾のケジメとしてアオイに聞いてもらおう。

「……った」

「ん？」

む？聞こえなかったのか？仕方ない、もう一度…。

「…かった」

「聞こえない♪ワンモアァ♪♪」

こ・の・っ！？

「ああ、嬉しかった！！これでいいのでだろう！？何だ！？文句あるのか！？」

「うん♪素直が一番だよ。…いつまでも仲良くね？」

「ふ、ふん！言われるまでもないわ！」

まったく！張り合いのないヤツだ！これがナギならば…ブツブツ。

「ふふ。それじゃこれはあげるね」

「む？こんなもの貰っても…」

先ほどのボイスレコーダーを手渡されたが…。これをどうしろと言うのか？

「いいから、いいから♪…これがあればあのバカをからかえるぞ？」

「貰っておこう」

「即答か…。まぁいいや、それじゃ俺は…」

うるさい…。ナギにはこちらのペースを乱されるが逆は滅多に無いのだ。こういうものはいくらあっても足りることはない。今後のふ、ふふ夫婦生活を考えると…な？

――ズズゥゥゥウウン…。

そのような、のほほんとした会話をしていたら…厖大な魔力の流れを感知した。

「「っ！！」」

妾とアオイは即座に立ち上がり皆の元へと駆け出そうとする。しかし、そうしようとした時、アオイに待ったをかけられた。

「アリカさんはここに居て！」

「な！？妾とて！」

「ダメッ！こんなことが起きたんだ。アリカさんが表に立つと事態がややこしくなるかもしれない。ここに居れば俺の家族が問答無用で堅牢鉄壁の如く守ってくれるから、ここに居て！」

アオイの言葉に、妾とて戦える！と言おうとした。だが、それを遮って言ったのは、またもアオイだった。たしかにアオイの言うとおりだ。妾は逃亡中の身だった。ここで妾が表立って動けば、いらぬ誤解を呼び込むかもしれない。

「ッ！！…っ。わかった。そちらは任せる」

「任された！」

皆、無事に帰ってくるのだぞ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アリカ

第二十四話「京都観光と温泉と危険と」（後書き）

マズイ…。このままじゃ2、3話じゃ終わらない。どうしよう？
4、5話になりそうです。どんなに練習しても作者の文章力は低いものですな。
フフフ、いいんですよ？地道に頑張るだけですからね。フフ、フフフ…。
まぁ作者の作品は基本、妄想と自己満足でできていますから気にしませんけどね。

では！また次回お会いしましょうね！チャオッ！

第二十五話「スクナ復活と［紅き翼］出撃と親衛隊と」（前書き）

うん、京都編の続きです。どうぞ。

第二十五話「スクナ復活と［紅き翼］出撃と親衛隊と」

――京都府某所の旅館内…。

Ｓｉｄｅ　葵

俺は大きな力の流れを感知した。そしてアリカさんのところから割と急いで皆が集まっているであろう旅館の玄関ロビーに向かっている。部屋じゃないのか？って？…だって、こっちから皆の魔力反応があるんだもん。

あ！居た！

「何があった！？」

「アオイも来たようですね」

「アル、詠春！何があった？大きな力を感じたが」

今、ロビーにはアルと詠春、ジャックが居る。…アレ？誰かを忘れているような。…気のせい、か？

「ソレについてはエイシュンから説明してくれますよ」

「ああ、アレはリョウメンスクナノカミという遥か昔、千六百年近く前に討ち倒された大鬼神だ。今までは荒御霊として封印されていたが、ここにきて封印に綻びができたらしい。復活は時間の問題だ

…」

「へぇ、俺の一回り、先輩か…。それでソイツ強いの？」

そうか。スクナってここでのイベントなんだ…。ああ、ああ！少し思い出した！ネギが戦う十数前に一度復活しかけて、それをナギ達が再封印したんだ…っけか？

むぅ、具体的なことは思い出せないけど、こういう変に細かいところは覚えているもんだなぁ。こんなことなら予め起こるであろうイベントをノートに書き出しておくんだったな。失敗だったわ。

それにしても千六百年も前の大鬼か…。うん！ある意味で大先輩ですな！なんてったって俺の一回り先輩だよ？まぁ荒御霊…ようは荒神としてだから破壊や災厄しか齎さないけど。それでも祭ることで毒を以って毒を制するんだから、よくやるよ。人間は。

それと聞いておいてなんだけど強さは…期待できない、かな。

「強い…。文献によると、かつての戦いでもヤツを滅ぼすことができず封印するしか手がなかったほどだ」

「ハッハーッ！いいねぇ、今はどっちが強ぇか試してやろうぜ！！」

「ふふふ。力試しには興味はありませんが大鬼神がどのようなものかは興味がありますね」

「ジャック、アル。今回は期待しないほうがいいって。だって復活したてだよ？長い間の封印で力が弱ってしまっている。それは、最早、図体がデカイだけの生まれたての小鹿みたいなモノだぞ？」

強いといっても封印したのは遥かな過去のことだ。封印時に損傷もしているだろうから回復のためにスクナが、その間に得られる力など本当に微々たるモノだろう。よって封印前に比べたら弱まってると考えるのが妥当だな。それでも一般的には雑魚じゃないよ?

封印が破られたのは、封印そのものが劣化したのもあるはずだ。寧ろ人間の手によるものでよくもまぁ千六百年近くも封印式を保たせたものだ。俺はそこに感心。魔法式って緻密に練らないとすぐに霧散しちゃうからね。本当に感心。

封印式って見せてもらえないかな?今後の研究の参考になるかもだし。

「な!?!?」

驚く詠春ですね?わかります。故郷の存亡がかかってるもんね。彼も必死なんですな。うんうん。大変だね!

「なに!?んー…それじゃあよ、完全復活まで待ってみるか?」

ジャック…。それはとても、とても惹かれる提案だけど…。

「ソレは面白そうではあります、が…。外野がうるさそうなので却下ですね。…残念です」

ジャックの提案をおもしろそうという理由でノりそうだった、アルだ。でも、ノらない。コワイ、コワ~イ人がすぐそこで鼻息荒くしているから。

「当たり前だ！完全復活なんてことになったら京都が火の海に沈むことになる！ダメだ！絶対！」

そうだよねぇ。必死にもなるよなぁ。俺には、もう故郷となるものはないけど、仮に俺にも故郷と呼べるモノがあったら必死になって守るだろうしな。

「…と、詠春が言うから。二人とも？完全復活の案は、今回は却下な」

「チッ、仕方ねぇな」

「おもしろそうでしたのに。…残念ですね」

ジャックよ？そんなにつまらなそうな顔してんじゃねぇですよ。アルもそんなに残念そうな…ちょっと？マジで残念そうにしてんじゃねぇっての。そんなこと言うと、またコワイ、コワ～イ詠春が…あ、名前出ちゃった。とにかく、また詠春の雷が落ちることになる…。

「仕方なくない！残念でもない！何を考えているんだ！？」

ほら、落ちた…。詠春って怒ると怖いんだから勘弁しろよな。トバッチリはゴメンだぞ？それはそうとまだ何かを忘れている気がする…。俺達は…アレ？ここに全員、アレ？居ない？そうだ！足りないのは！

「はい！詠春の突っ込みが冴え渡る今日この頃だけど…ナギは？」

そう！ナギが居ないのを忘れてたの！何で居ないんかね？

「はて？そういえば…」

「おおかた、姫さんと乳繰り合ってるんじゃねぇか？」

「いや、アリカさんはここで待機してもらうことになってる。…ナギは風呂か？少し前に一緒…に入…って。…あーーーっ！！！」

「「「っ！？」」」

またまた、思い出した！ちょっと待てよ？もしかしてもしかしなくてもナギがここに居ない原因って俺のせいですか！？いや！いやいや！違うよな！あんな簡易の拘束魔法を解けないナギに非があるよな！？

俺、悪くない、絶対！！

まぁそれは、ともかく早く拘束を解くか。これ以上、遅れたら洒落にならない事態になるかもしれないしな。

「拘束魔法かけたままだった…。ふむ、パチン♪とな。これで、よし。すぐにでも来るだ…」

「アァァアオォォオオイィィィイイイッ！！！」

「ホラ来た♪って！人の名前を大声で呼びながら爆走するのは、やめてよね！！恥ずかしいだろうが！このバカッ！！」

ナギが来るの早くね！？早いよね！？ダダダダッ！！って、駆けて来ているよ！？拘束を解いてから一分も経ってないよ！あいつ

風呂場に居たはずなのに…。

距離はどうした?物理法則は?って、あー…。これらは今更な気がするな。俺もいくらか法則を無視している時あるし。それに、こいつら（ナギやジャックなど）なら、そういうのは素で無視していそうなよなぁ。

「何でアイツあんなに急いでるんだ?」

「ナギも今回の事件の一大事に薄々ながら感づいているのだろう。流石はナギだな」

「ふふふ。そうでしょうか?私の目には何か別のことでナギは急いでいるように見えるのですが」

「別のこと?」

「そうです、エイシュン。そして、その原因はアオイじゃないかと」

「「はぁ?」」

「あくまで勘ですよ?ふふふ」

なんだか外野が色々言っているようだが気にしたら負けな気がするから気にしない！

「うっせぇよ！！そんなことよりアレ寄こしやがれ！！」

いやぁ…うっさいってあーた…。大声あげて爆走しているんだよ？ご近所迷惑でしょうが…。ご近所ないけどね。ここは旅館だし。それにしてもまだ俺が持っていると思ってるんかいな…。

「もう無いに決まってんじゃん。バカだねぇ。渡すだけだから時間は十分だっての」

「なん…だ…と？わ、わわ…渡した？…いつ？どこで？だれに？」

何？こいつ？ヤバイくらいに顔色がグラデーションして、ヤバイくらいガクブルガクブルしているんだけど…。そんなに慌てることなのか？とりあえず、おもしろそうだから丁寧に教えてやろう。

「渡したの、ついさっき、お前らの部屋で、アリカさん本人に」

「……」

今度はダンマリか…。ナギも、案外と忙しいね？一人百面相しているよ。現在のナギの顔色は真っ赤っか…。クスッ…。

「理解したか？このバカ」

「う」

「「「「う？」」」」

うまい？うがい？うめぼし？あ、それとも、うらない？

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！！！ぷき　。ょんっ！？」

――ドゴンッ！！！

俺必殺殴る！が炸裂した！！

「うっさいわ！！バカ！！近所迷惑だろうが！…主に俺に対しての迷惑だけど！！！」

いきなり叫ぶって何考えてんだ、こいつは！何度も言うが人様にご迷惑でしょが！これ以上騒ぐようなら終いにゃ大地に沈めるぞ、コラ＃…今、旅館の床に沈めたけど。

「ハーッハッハッハハハハハ！！！何か知らねぇがバッカでやんの！！ぷっ！ハハハハハハハ！！」

ジャックさぁ、そこまで笑うことなくないか？沈めた俺が言うことじゃないけど。そして、いつも思うけどジャックの笑い方って豪快だよね？笑い声を耳にしていると楽しく…違うな、難しく考えることがバカバカしくなるよ。

「ハァ、あのバカは本当に、もう…」

そう、呆れてやるなって詠春…。事態が事態だけどさ。

「エイシュン？私が言うのもナンなのですが…急がなくてもいいのですか？」

「？？…っ！！そうだった！おいっ、皆、急ぐぞ！！」

あー、もー。アルのバカ…。詠春が、また焦りだしちゃったじゃないか。一応、詠春も戦士としての心構えはできてるからヘマはしないだろうけどさぁ。はぁ、俺の精神安定上必要だったのに。ピリピリした空気苦手なのよ。ある程度は許容するけどね？

「へいへい、そんじゃま、いっちょいきますか！！」

ジャックは始終元気だね…。お兄さんは羨ましいような、どうでもいいような気持ちだよ。…さて、時間的にも、そろそろマズイ、かな？うん、沈めたナギを叩き起こすとするか。

「ほら、ナギ、そんな床で寝てないで行くぞ」

「お…お前ぇが…やったんだろが…クッ」

ほう…？この俺に口答えするつもりか。そうか、そうか、そうなのか…。いい度胸だな、おい。まぁ？たしかにナギを床に沈めたのは俺だけどな。

「はいはい、そうですね。…いいから起きろ。起きないと…先ほど以上の恥辱を与えてやるぞ？」

「っ！？わーったよ！！起きるよ！だから勘弁してくれ！！」

言っておいてなんだけど、そんなに飛び起きるほどイヤだったの

か？いいじゃん、からかってもらえるうちが幸せだぞ？無関心でいられることほど悲しいことはないんだから。その分、俺がからかって、からかって、からかいぬいてやろう♪それが俺の祝い方だ。

「よし♪それじゃま、行きますかね」

「「「おう！」」」「ふふふ」

三人は、ともかくアルは何で俺を見て笑っているんだよ？まさか…。ち、違うんだからね！？素直にナギ達を祝うのが恥ずかしいなんてことはないんだからね！なんてな！！どうでもいいか…。今はスクナを何とかしよう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　アイリス

観光の後、のんびりしていた時にそこそこ強大な魔力反応感知した。この旅館から距離もあることから考えて警戒レベル３で準待機状態へ移行。もちろん休暇中以外のメンバーに対してだ。そして、しばらくして葵君から念話が届いた。

【…では今回、私達は出撃しなくてよろしいのですか？…】

葵君からの念話は出撃要請かと思ったら、まさかの休暇の継続だった。当然、私は納得がいかなかった。ご主人様だけを戦わせて自

分達はのんびりくつろぐなど普通ならできない相談というものだ。

【…うん、せっかくの休暇中に現場に駆り出すほど俺は鬼じゃないからね。ゆっくりしていていいよ…】

【…ですが、それでは…】

違います。私達はそんなことで葵君のことを鬼だなんて思いません。思うはずがありません。私達は葵君と共に在ることこそが至上の喜びなのですから。葵君はそれをわかっていても私達に休んでほしいと言っている。これは優しさ、なのだろう。

そして葵君は休暇中ということを理由に私達が出撃することを許可してくださらない。わかっているのだ。これは純粋に葵君が私達に休んでほしいと思って言っているということは理解している。だが、理性では納得できても感情が追いつかないのだ。

【…いいの、いいの。ここ最近は日頃、忙しくさせちゃっていたからね。休んでいてよ…】

【…納得はできませんが了解しました。皆には自分のほうから伝えましょう。閣下、ご武運を…】

【…うん、ありがとう。じゃね…】

【…はい…】

感情で納得できないまま葵君との念話を終えて「ふぅ…」と溜め息が漏れた。忙しさなど気にしないのに…。私達は休みたいから休暇のことを喜んだわけではないというのに、あの方は、まったく、

もう…。

私達が喜んだ理由は葵君と共有できる時間、空間、そのものにあると言っても過言ではない。誰だって、そういうものだろう？慕っている。…好きな人と一緒に居たいという気持ちは人間も悪魔も精霊もその他だって変わらないはずだ。

要するに何が言いたいかと言うとだな…。折角、葵君とスウィートな時間を送れると思ったらハプニングが起きて、ナンじゃコリャーッ！！という心境ってことだ。ハァ…。とりあえず、全部隊に念話連絡するか…。【…あー、あー、テステス。あー、あー。こほんっ…】よし…。

【…休暇中の全部隊員に通達。皆も感知している魔力反応に向けて司令閣下達が出撃した。尚、今回私達は出撃しない。これは司令閣下の私達にゆっくり休んでほしいという願いだ。繰り返す。休暇中の全部隊員に……】

――ダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！

やっぱり来たよ…。念話を終えたとたんに聞こえてくる廊下をすごい、すごい勢いで走ってくる音。これだけで私は誰が来たのかを把握できるというものだ。ほら、もう、そこまで来ている。

――ダンッ！！！

勢い良く開かれる部屋の扉。間髪入れずに駆け込んできた人影…。

「アイリさん！先ほどの念話は、どういうことですの！？」

来たか…リチラ…。

「はぁ、はぁ、リチラッ、落ち着くの！はぁぁぁ…。もう、いきなり駆け出すのは、やめてほしいの」

ファレノもか？ああ、少しはこいつを止めようと努力したのだな？まぁその努力が実らなかったのは現状を見てのとおりのようだが、な。その行為を私は認めているぞ。良く頑張ったな。

しかし、リチラが、な…。マトモに相手にするには少々骨が折れる。面倒だし、最初は軽くシラを切ってみるか。

「リチラ、ファレノもか。いったい、どうしたというのだ？いや、大体の事情はわかるのだが…」

「どうした？じゃありませんッ！いくら葵様の願いとはいえ出撃しないとは、どういうことです！？こうしている今も怪我など、なされたらどうするのです！？あぁ！心配ですわッ！！」

「おーッ！ちーッ！つーッ！くーッ！のーッ！リチラ、興奮し過ぎなの。どうどう、なの」

「わたくしは馬ではありませんわ！それにわたくし、落ち着いておりますわ！」

「はいはい、慌てる人は皆、同じことを言うの。だいたい、本当なら怒鳴ったりしないの」

「それはッ！…んんっ。それは失礼しましたわ。それでアイリさん？どういうことか、説明してくださるかしら」

ファレノ、見事だ。この数日でリチラの扱いが飛躍的に上がったのではないか?私では、こうはいかないかもしれない。しかし、説明、か。どうしたものかな。

「あぁ、いや、説明と言っても通達のとおりのことしか言えんのだが…」

「なっ!?なんですってーッ!貴女、それでも葵様の副官ですの!?もっと状況を理解するために情報を収集、分析、対処なさいな!だいたいアイリさんは、いつも…くどくどくどくど」

なぜか、わからないが私はリチラから説教のような愚痴?を聞かされている。最初の助言とも取れる言葉はありがたいとは思う。思うが…後半はどうなのだろう?葵君と一緒に居たいという彼女の欲望がダダ漏れと言わんばかりに聞こえる気がする…。

あれ?そういえば…。

「副官なら、もう一人、ファレノも居るのだがな…って聞いてないか」

「…アイリ?いきなり、私に話しを振ろうとしないでほしいの。私にだってできることとできないことがあるの。ムチャぶり、ダメなの」

もう一人の副官はこの調子か…。だいたい、できることもなにもファレノなら大丈夫だろう。大抵のことは過不足無くこなせるだけの能力は持っているのだからな。それにさっきも思ったがリチラの扱いが今、最も上手いのは彼女だとも思う。

決して、ムチャぶりだとは思わないのだが…うーん？

「ムチャぶりって…。まぁいい。リチラ、何度でも言うが今回、私達の出撃は無い。一応言っておくが、もちろん私とて納得はしていない。が、これは閣下…葵君が私達のことを思っての願いだ。私は、その思いを大事にしたいのだ」

「ですがッ！」

リチラが私の言葉を聞いても、異議が有り！と言うように声を張り上げる。

「案ずるな。私の予想が正しければ葵君は大丈夫だ」

大丈夫だ。心配は無いはずだ。リチラの慌てぶりを見て、逆に私は冷静な思考ができるようになった。そう、よく考えなくても答えは簡単だ。葵君は“私達には”休暇を継続するように言っていたが他は聞いてはいない。

だいたい、“あの人達”がこういう時に葵君を一人で行かせるとは思えない。［紅き翼］のメンバーが居るから万が一ということは無いと思いたい。が、もしも、億が一…葵君に傷を負わせては、私達は後悔することになる。

何が悲しくて自らのご主人様を傷モノにしなければならないのか、と。まぁ、その不安も杞憂に終わることだろうがな。

「それは、どういう…」

「あっ、アイリ、アイリ。ここに来る前にユエさん達からなんだけど“後は頼んだ”だって」

うむ、私の予想どおりのようだ。これで憂いは何も無いな。安心できる。

「えっ、あの方達は出撃してよろしいんですの!?わたくし達はお留守番ですのに…ズ、ズルイですわーッ!」

「リチラ…。ズルイかどうかはともかく、これで私が大丈夫と言った意味がわかっただろう?ナギ君達に加えてあの人達も居るんだ、心配するだけ無駄というものだ」

リチラは葵君のことが心配なのは確かだが、どうも同行できないことへの不満が爆発中のようだ。

「それは…そこらの大国を相手にしても戦える方達なのはわかっておりますわ。…でも、不安はなくても心配になるのは仕方ありませんわよ」

こいつ…さっきまでの勢いは鳴りを潜めて今度はしおらしくしている。何を考えているんだ?ふむ、ここはストレートに聞いてみるか。

「……リチラ、正直な気持ちを言ってみろ。オコラナイカラ、ナ?」

「ギクッ…。な、なななんのこと、かかかしらぁあ」

うわー…わかり易いなー…。口調は乱れているし語尾は不自然なほど上がっているし、何よりギクッて…。今時、ギクッは無いと思

うんだがなぁ。

「アイリ。リチラがわかり易いほどに動揺してるの」

「ああ、そうだな。だが、ここまでわかり易いと追及する手間が省けるよ。…で？何を隠している？」

「な、何も隠してなんかいませんわ！一緒に出撃して繰り広げられる激闘の末に葵様とわたくしとの間に芽生えるラブ♪なんて♪…はっ！？か、かか考えていませんわ！」

「うわぁ…。欲望がダダ漏れなの…。アイリ、これは元悪魔としてよくあることなの？」

そんなわけないだろうが…。リチラが特殊なだけだ。そのはず、だ。

「違う…。いや、他は知らないが少なくとも私は違う。しかし、リチラはやはり抜け駆けを考えていたのか…。内容はしょうもないが」

「たしかに、しょうもなかったの」

「う、ううううるさいですわッ！！いいでしょう！？葵様のことを慕っているなら、すす少しでも仲良くなりたいと思いませんの！？」

それを言われると、弱いな。私とて、それは考えないことは無い。葵君と仲良く…にへら～♪ハッ！？いかんっ、いかんっ！私までリチラの言葉に惑わされてどうするか！？んんっ！

「う…。それはまぁ…なぁ？」

「うぇ？ああ、うん。リチラの気持ちはわかるの。…というより貴女達って前から思ってたけど、ここぞって時に、なんと言うか…純情、なの」

「それこそ余計なお世話だ！」「それこそ余計なお世話ですわ！」

ファレノに振ったのが間違いだったのか…。言うに事欠いてリチラだけではなく私までじゅ、純情などと…！そ、そのようなことはない、うん。

ん？自分で言っておいてなんだが…“余計なお世話”と言っている以上無意識にでも自覚して、いる…？ハハハ…。何をバカな。そのようなことがあるものか。…無いよな？

「怒鳴らないでほしいの！私は事実を言っただけなの。それより葵ちゃんのことはどうするの？」

「…命令は待機だ。これに変更は無い。以上だ」

変更は無い。それに不安の要素も無い今、私達が余計な動きをしては現場に混乱をもたらすことになる。最も今回はメンバーだけを見ても対国家戦ができるほどの実力者だ。心配はしても恐怖や不安は無い。

「ハイッ！？貴女はソレでいいんですのッ！？」

「お前は、あわよくば葵君とラブロマンスしたいだけだろうがッ！！」

「なのー…」

リチラは尚も異議有りと言うように詰め寄る。だが、私も負けじと言い返す。ここで負けたら今後も負け癖が付いてしまいそうだからな。負けるわけにはいかないんだ、負けるわけには。

私の言葉にファレノも「なのー」の一言で同意した。私達、二人の彼女を見る目は冷たくジト目になっているのは想像に難くない。その視線に流石の彼女も「う…」と言葉を詰まらせて一歩後退した。

「事実ですけど…。貴女達も大概失礼ですわね…」

うるさい。己の本音をさらすのはある意味で尊敬の念を抱くが…これは違う、と何となく思った。

葵君、早く帰ってこないかな…。まだ、休暇が残っていても葵君が居ないのと居るのとでは天地の差があると思う。皆と居るのも楽しいが、これは別物と割り切っている。だから、早く帰ってきてほしいと私、アイリスは願うのだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

第二十五話「スクナ復活と［紅き翼］出撃と親衛隊と」（後書き）

あれ？後半スクナ関係なくね？鬱だ…、寝よう。
まぁそれはともかくこうなったものは仕方ない。作者の指が勝手に書いたものだ。
反省もしなければ後悔もしない。作者的には問題はまったく無いし！
ここ最近気付いたんだけどね？どうらや作者はここに作品を掲載することにね？
ある意味でストレス発散に繋がってるっぽいんですよね。どうでもいいか…。

では次回も京都編です。あと2話で終わったらいいなぁ。
それでは！チャオッ！

第二十六話「合流と珍道中と出撃と」（前書き）

遅ればせながら更新しました。

第二十六話「合流と珍道中と出撃と」

――スクナ発現地帯までの道中…。

Ｓｉｄｅ　葵

旅館を出てすぐのことだ。皆に連絡してないことに気付いたのは。魔力の発現地帯がやや遠いとしても俺が何も言わなかったら彼女達は対象を危険と判断して排除に乗り出しかねない。

折角、久しぶりに休暇が取れた彼女達を働かせるのは酷というものだろう？俺は念話でアイリに連絡を取って簡単に事情を説明した。最後に今回は精魔奇兵の皆には出撃無し、と言い含めてな。

【…納得はできませんが了解しました。皆には自分のほうから伝えましょう。閣下、ご武運を…】

【…うん、ありがとう。じゃ、またね…】

【…はい…】

アイリは不満そうと言うか心配そうな意思を残して念話が切れた。心配かけているんだろうなぁ、とは思うけど俺達は負けんよ。それにこういう場合黙って待つことを良しとしない子が八柱ほど我が家に居るんだよね。

そんなことを考えつつ、俺達［紅き翼］はスクナの復活地点に向

けて全速力で急行中。限定条件下だと車やバイクに比べて自分の足で走ったり飛んだほうが速いんだよね…。何なんだろ?この世界の住人は。もちろん一部の人達だけどさ。

あ、もちろん高度数万メートルとか大気圏や宇宙戦の空間戦闘とかなら機械技術のほうが有利かもしれない。かもしれないというのは試したことが無いからっていうのもある。…今度、宇宙戦の模擬戦でもするかな。

およ?念話?誰かね?

【…我が君、我が君?…】

【…おろ?ユエ、どうしたの?…】

【…いえ、魔力反応を感知した直後に我が君等の反応が移動しましたので、出陣かと思いまして。現在、姉上、私、ミリー等、オリビエ等、計八柱が我が君の後方を追走中。もう間も無く合流します。尚、彼女達の偽体は既に除装済みです…】

おう?本当に来ちゃったんだ。半分冗談で来るかもしれないとは考えてはいたんだけどな。いや、まぁ来てくれたのはいいんだ。俺が最も頼りにしている八柱だからね。でもさ?休暇中なんだよ?できるなら休んでほしいじゃん。

でもなぁ…。うーん?まぁ早く終わらせて休暇の続きといくかな。

【…うん、皆が居るのは頼もしいもんな。頼りにしてるよ…】

【…ハッ、お任せください。あ、我が君等のお姿を目視にて確認し

ました。今より合流いたします…】

【…あいあい。じゃ、また後で…】

【…ハッ…】

んー…？おぉ、見えてきた。皆、速いねぇ。ミリーは水から水へ移動。ウーリは風に成り、あらゆるところを駆ける。マリーは己を炎化させて爆発に指向性を与えて疾走している。精霊の彼女達は自分の性質を応用して移動しているね。

ハオとユエは普通（？）に移動しているよな。我が愛刀、陽月の姉妹は瞬動と虚空瞬動を小刻みに、時に勢い良く大胆に駆けている。…時折、前方の空間を斬り捨てて空間から空間へ移動しているように見えるけど……気のせいだよ、な？

んんっ、俺は何も見ていません。オリビエ達は…？よかった、彼女達は普通だよ。普通の移動だよ。瞬動などはハオ達と似たようなものだけど、それに加えて細かく多重転移をしている。あんな短い間隔で転移を繰り返すなんて、器用だなぁ三人とも。

と、感心してオリビエ達を見ていると突然、目の前の空間が裂けた。すると、にょきっとユエが出てきた。続けてハオが別の裂け目から出てきた。…俺は何も見てない。俺はこんな性能をユエ達に付加した覚えもない。にょきって…にょきって出てくるところなど見てない、よ？

軽く意識が逃避していたら続々と合流してきた。

「我が君、お待たせいたしました」

俺達も移動してたから待ってはいないと思うんだけどなぁ。

「んー…？うん、大丈夫、大丈夫。たいして待ってないよ。…あれ？」

「？？？何か？」

きょとん、と小首を傾げて不思議そうな顔をするユエを見て俺は思ったんだ。かーいーなー♪と、ね。これがギャップ萌えというものなのだろうな。うん、それは、ともかくさっきのやりとりで思ったわけですよ。それは…。

「いや、今のデートの待ち合わせっぽくなかった？」

「ナッ！？な、ななに何を言うのですか！！その…そんなデ、デートなんて…。わ、わわたし、私などには勿体ないことです！」

そこまで取り乱すほど、イヤってことですか？ちょっと思ったことを言っただけなのに、お兄さん、軽く、いや、大分ヘコみそうです。くすんっ…。

「ジー…、ジロジロ…」×皆さん。

「あー…、うん。わかった。わかったから落ち着こう。皆、見てるし。な？」

「えっ？…ッ！？も、申し訳ありませんッ！！」

うん、俺もごめんね。移動しながらなのに、こんなやり取りをし

ているんだけど…。この生暖かかったり冷たかったりな視線にはお兄さんは耐えられません。サッサとこの空気からの離脱を望むね。ハァ…。

「ユエ…まさかお前が抜け駆けをするとは思わなかったぞ」

離脱できるかと思われたけど突如そんな底冷えする囁くような声が、いやにハッキリと聞こえた。聞こえた瞬間に背筋がブルッときましたぜ?俺のことは呼ばれてないのに変な冷や汗が流れてきそうだった。

そして当のご指名のかかったユエなんだが…。

「姉上ぇ!?ち、違うのだッ!こ、これは違うのだぞ!それは少し、キャッ、嬉しいな♪なんて思ったりしたかもしれないが…って、しまった…!!」

ものっそい動揺してテンパっておりました。普段では決してお目にかかれないユエの狼狽振りを見れて俺はヤッタ♪なんて考えてないよ?考えてないったら考えてないよ?ホントウだよ?オレ、ウソ、ツイテナイ。

「フフ、フフフ…。語るに落ちたとは、まさにこのことなり。まさか、まさかまさか己の同胞(はらから)が抜け駆けするとは、な…。フフフフフフ…」

「落ち着けぇ、姉上ぇ?落ち着くのだ。まずは拳を白くなるまで握り締めるのはやめよう」

ユエの漏れた言葉(本音?)を燃料にハオは己の内にて“何か”

を燃やして更に猛り狂い始めた。本当に何をそんなにしてプルプルしてるんだろうね？ユエが何かしたんだろうけど…。ハオがお持ち帰りした餡蜜を食べちゃったのかな？食べ物の恨みは怖いね。

逆にユエはスクナの居る現場に移動しながら器用にハオから徐々に距離をとっていた。それでもハオは離れた分だけ寄ってくるんだけど…。お互いの距離は離れもしなければ近づきもしない。まさに一進一退というやつだな。

どうでもいいけど普段から剣を振るう人が拳を固く握って迫ってきたら怖いよな？俺は怖いです。

「フフフ、私は落ち着いているぞ、ユエ。何を怯えているのだ？ああ、大丈夫だ。痛いのは最初だけだ。…ナァ？」

目元は前髪で隠れていて、よく見えないが…なんか目の辺りがキュピーンって日光ったように見えて、口は大きく三日月のように笑っている。それなんてワラ〇ア？って…マジで怖いです！元が美人だから普通より倍怖いんだよ！

「ハハ、ハハハ…。あ、姉上？冗談も過ぎるぞ。その固く握り締めた拳を下ろそうじゃないか？」

このままではスクナ戦前に犠牲者が出る…と思い、止めに入ることにした。被害者も加害者も俺の身内の手によってだけどな！止めないとマズイだろ？

「問答…無よっ」

「はいッ！ストップ！！今はそれどころじゃないから続きは帰って

からにしようね。それと二人とも余裕はいいけど慢心はダメ、絶対。もうすぐ敵の戦闘域に入るんだから。いいね？」

「「ハッ、申し訳ありませぬ…」」

もう、冗談もそこそこにしないと…お仕置きしちゃうぞ？

「「お、お仕置き…とは？」」

「…俺が自らの手で、“一日中クスグリ地獄”だな。クンズホグレツだぞ？逃がさん」

「「ポー…」」

何で頬を赤らめてキラキラと期待した目で俺を見るんだ？やらんよ？実際にそんなことしたら、ある意味、犯罪だと思うんだよね。二人とも美人さんだからクスグリに吐息を荒くして身悶える姿なんて、官の…げふんっげふんっ、犯罪っぽくね？

「ふぅ、まぁ二人の仲が良いのはよくわかったからいいけどね。いやー、ケンカするほど仲が良いって言うからなぁ。うん、いいことだよね♪」

「ユエ…」

「姉上…」

「「はぁ…、そうですな…」」

正直な胸の内を明かしただけなのになぜに二人して、そんな残念

そうというか、ダメだコリャみたいな空気を纏ってやがりますか。しかも、やや投げやりに俺に同意するし。どうしたんだ、二人は？

「んー？どったの？ガックリと肩なんか落として…」

「「いえ、別に…」」

いや、別にって、あーた達？

「葵、取り込み中、悪いが…着いたぞ」

何？もう着いたのか。なんだかんだと話しながらだから予想よりも早く着いたように感じるわ。俺達が立つ小高い丘から見えるスクナは…なんと言うか。半身浴…みたいな？下が湖面だからそう見えるのかもしれないね。

それにしても詠春？

「詠春はマジメだよね…。折角、場が馴染んだのに」

「うるさい。今は緊急事態なんだ。お前もマジメにやってくれ」

あら？いつものようにツッこみの嵐にならない。今回の詠春は意外とマジなんですね？わかりました。今回は確実に封印してやろう。あ、違った。封印作業は陰陽師の皆さんですね、すみません。じゃあ、うん、スクナをコテンパンにノシてやろう！

「エイシュン、安心しろって！誰であろうと俺達の前に敵は無いぜ！」

「ハッハーッ！ナギもわかってんじゃねぇか！まぁ？お前ら負けても最強の傭兵剣士である俺がパパッと片付けてやるけどなッ！ハーッハハハ！！」

ナギとジャックが自信満々で言ってるよ。まぁ、わからんでもないけどな。正直な話し全っ然、負ける気しないもんな。

「ジャック、うっせ！！そんなに言うなら、どっちが先にブッ倒すか勝負だ！！いいなッ！？」

「上等だ、コラッ！！吠え面かかせてやらぁ！！」

おぅ？いつの間にか二人の間に競争してスクナを倒すことになっている模様だ。それでも倒せなくはないけど戦闘の効率が悪くなるんじゃないかなぁ。ここは［紅き翼］の良心事詠春にお伺いをかけてみるか。

「詠春…アレは止めなくていいの？」

「あ？あー、アイツらはいいんだ。止めるより突っ走らせたほうが結果はいいからな。逆に止めると…いや、止まらないか。バカと何とかは止められないと言うだろう？」

すっげー身も蓋もないことを言われた気がするのは何でだろう？

「あー…。うん、ごめん。バカなこと聞いたわ。因みにアルが止めないのは…？」

「アオイならわかるのではないですか？ふふふ♪」

「…うん、よくわかった。楽しいこと好きだもんな、アルは」

ですよねー？アルならそうだよねー？止めるわけないか。アルってばマジメに面白いことを追及するタイプだから素で性質が悪い時があるんだよな…。まぁ、相手が本気で嫌がることはしないから、その辺りは信用してるけどな。

そんなくだらないことを現場を前にしながら話していたらスクナが見えてきた。んー…？おぅ！もう頭と腕が二本も出てきてるよ。復活までもう少しかな？それにしても封印式って随分と弱まっていたんだね。もうね？バキバキって術式が壊れてますよ。

「おや？ふふふ。見えてきましたね。誰から逝きますか？」

「「オレだッ！！なっ！？グルルルルッ！！」」

二人とも仲いいね…。

「うわー…睨み合ってグルル、言ってるよ。揉めなくても二人で行けばいいじゃないか。はぁ…。もう、ここは詠春が先陣切ってくれる？」

「…い、いいのか？なんか、イヤな予感がするんだが」

今は下手に揉めるよりも誰かが先陣切ったほうがいいと思うよ？そうすればナギとジャックも勝手に続くと思うしね。まぁ下手したら詠春は二人にボッコボコにされるかもしれないけど…。目の前で獲物を掻っ攫われることほど悔しいものはないもんね。

とりあえず詠春に先陣を切ってもらおう。尊い犠牲というやつで

すよ?保険です。もしかしたらあるかもしれない二人からの八つ当たりによるトバッチリを回避したいのよ。

「いいの、いいの。二人ともグルル言っていて気付かないって。ここは詠春の故郷なんだから外野はガタガタ言わないって。…やっちゃえ」

詠春、Ｇｏ!!行け!行け!詠春!!

「…わかった、行ってくる!!」

「いってら～♪ナギ、ジャック?詠春がもう行ったぞ。いつまでそうしているつもりだ?」

「「ナニィ!?」」

「神鳴流決戦奥義…真・雷光剣ッ!!!」

――斬ッ!バリバリバリバリーッ!!

張り切ってるなぁ、詠春。初手から手加減なしの一撃を叩き込んだよ。むー?でもスクナに目立った外傷が見られない…。いや、内部的には損傷しているのかな?動きが若干だけど鈍くなったように見える。本当に若干だけどな!

「ほら♪早く行かないと詠春に倒されちゃうぞ～♪」

「そんなことさせねぇ!!」「そんなことさせん!!」

「「アイツはオレの獲物だッ!!」」

――ダンッ！！ダダダダダダダダダダダダダダダッ！！！

二人とも足速ぇー…。瞬動とかも使っているから当然と言えるんだけどな。それはともかく、これで…計・画・通・り・！！危機は回避できた。

「おぅ？仲が良いんだか悪いんだか…。で？アルは行かないの？」

なんでコイツは行かないのかね？面白いことは主にナギの周りで起きるから真っ先について行きそうなものだけど…。

「ふふふ。そうですねぇ…。アオイはどうなのですか？」

「はい、アウト。質問を質問で返すのはマナー違反だぞ？答えてからにしな」

アル？イカン、イカンよ。それはマナー違反だ。それに質問を質問で返すのは人によっては嫌われるぞ？俺は気にしないがね？ただなんとなくそう思ったからアルに注意しただけだし。

「変なところで厳しいですね、アオイは。ふふふ♪では私も行くとしましょう」

「へいへい。俺も用事が終わったら行くよ」

あ、しまった…。

「用事、ですか？それは…」

「野暮用というか知的好奇し…探究心の類いかな。戦闘に直接の関係は無いから気にしなくてもいいよ」

実際の話し本当に取るに足らないことだよ?だって、ねぇ?要は観察と考察だし。

「…そう、ですか。アオイが何に興味をそそられているのか、気にはなりますがそれは後にしましょう」

「そんなに楽しいものじゃないと思うから期待しないで」

本当に気にしないでください。気にするだけ無駄だから。

「ふふふ。ではナギの後を追いますね」

「おう!いってら~♪」

そう言うとアルは転移してナギの上空に出てスクナに重力魔法を叩き込んでいた。ぺしゃんこスクナ…。語呂だけ見ると可愛くない?…可愛くないか。

「さて、…ラミエル。アンに伝達。内容は“現在より俺の周囲近辺で展開されるであろう封印術式の詳細なデータの収集及び分析。”以上」

『了解した、我が主。…アン嬢との送受信を確認。二分以内に観測用アカトンボの展開、情報収集を開始するとのことだ』

アン嬢?ラミエルさんのほうが若いのに…。まぁいいか。呼び方

は人それぞれだもんね。さて、準備完了まで二分か。ちょっち情報の整理といくかな。

「うん、上出来、上出来。それじゃ二分で現状確認といこうか。ミリー、ウーリ？」

「はぁい。水を透して見た限りではぁ、目標となるリョウメンスクナノカミを中心に東洋魔法使いの陰陽師さん達がぁ、数十人規模で広域展開中ですわぁ」

あちこちに構成員が散ってる割に随分と人員を導入できたなぁ。封印式は大規模のもののはずだから、これだけの人員が必要なのかね？

「うなー、風さんに聞いてみるとねー？上空にも式神さん達がタクサン居るみたいー。たぶんだけどー、封印術式の補助が目的なんじゃないかなー」

上空には式神か。ウーリの考えているとおり補助、または増幅（ブースター）役といったところか？

「なーる。配置から考えて新世界で見た大規模反転封印術式と似たような術式なのかな…。ん？あー、違うか。そもそもの話し主要目標が違いすぎる。スクナは魔力無効化とか無いし…。ということは、…ぶつぶつぶつ」

「主？詳細な分析と考察は後にしても良いのではないかと…」

「ん！？あ、ああ、そうだね。マリーの言うとおりだ。それじゃ…」

むぅ…。失敗したな。つい考察に夢中になっちゃったよ。だってこれだけの大規模のモノは滅多に見られないんだよ?何て言うかな?こう…そうだ。知的好奇心というものが刺激されない?どういったものなのか?どんな術式なのか?どんな構成をしているのか?

考えたら切がないな!うん!東洋魔法は余り接することがなかったから新鮮な気持ちだよ。まぁ、今はそれどころじゃないんだよね。

『我が主。アン嬢より報告だ。準備完了、いつでもよろし。…どうするのだ?』

「ん?あ、うん。やるよ。ハオとユエは戻ってくれ。万全にして挑みたいからね。ミリー達はいつもどおりで」

「「承知!」」

「はぁい、お姉さん達にお任せよぉ♪」

「うん、お願いね。信頼してるよ」

もう二分経ったのか。楽しいことを考えていると時間が過ぎるのはアッという間だよね。そんでまぁ、俺は剣に戻ったハオとユエを両手に握り。透明化したミリー達を身に纏う。あ、ちょっと注意しておかないと…。

「んんっ。ああ、それとオリビエ?」

「んお?なんだい?葵」

「オリビエ達は大規模破壊禁止ね♪(ニコニコ)」

「え〝っ!?ちょっ!おまっ!…マジで?」

オリビエ、女の子が、え〝っ!?は無いと思うよ…。男前過ぎるだろ。思わず惚れてしまいそうだね、うん。…言っておくが俺は、おんにゃのこが好きだぞ?勘違いするなよ?男はノーサンキューです。

「本気と書いてマジだ。よく考えてみ?俺らが普通に暴れたらここら一帯焼け野原にしちゃうだろ。ここは旧世界なの。新世界と違ってそういうことすると、いろいろと…メンドイことになるでしょや」

「うっ…言われてみれば、確かに…。ん!?結界張ればいいじゃん!葵ならそのくらいできるだろ?」

「できるよ?できるけど今回はパス。アチラさんの術式を阻害するかもしれない。それに今回は殲滅じゃなくて再封印が目的なの。俺はその封印術式を見てみたい。東洋魔法のデータを取りたいの」

「む、むぅ…。葵がそう言うんじゃ仕方ない。できるだけ、やってやる。あたし達の役目はあのデカブツの足止めで良いんだよな?」

「そのとおり!あっ、それと注意事項が一つ。観測機から情報を見ていて気付いたんだけど、この封印式は邪を封じることに重きを置いているみたい。俺の眷属って感じになっているからスクナと違って封印されることは無いけど。一応、オリビエ達は気を付けてね?」

一応大丈夫だとは思うけど素体が悪魔だからね。魔人化したとしても魔には違いないし心配だなぁ。まぁ魔＝邪、だと言うほど単純な話でもないけどさ。その点、日本は大らかだよね?妖(あやかし)でも善妖な

らば崇め奉ってくれるんだから。

これがイギリスなどのヨーロッパ方面とか行ってみ？過激なところなら問答無用で祓われるよ。向こうは異端には容赦が無いからね。人間以外の霊長を認めたくないんだろうな。それにそれが自分達人間よりも優れていた場合は特にね。

「まぁあたし達からしたら、あの程度で封印とは片腹痛いってなモンだけど…。わかった、注意だけはしといてやるさ」

「うん、よろしく。気を付けて」

ものすっごい自信だね？でも、確かにあの封印術式に込められるであろう魔力量を見てみたらそうかもしれない。オリビエ達を封じようとするなら俺くらいの魔力量を用意しないと…無理だな。pそれでも、ヤルなら数百年単位で魔力を溜めないとね。

ま！封印なんてさせないけどね！全力で抵抗してやる！

「そんじゃ、皆？すぅ…行くぞッ！！」

『どこまでも！』『お供いたします！』

陽月の姉妹が言った。

「はぁい♪」「あい」「御意ッ！」

精霊三人娘が言った。

「おう！」「おー…」「は～い♪」

悪魔三人娘が言った。

最後に動き出した俺達は一歩を踏み出した。視界に広がる戦場に向けて…。

ナギは、あんちょこを見ながら千の雷をスクナに放つ。未だにあんちょこを見ながらでないとダメなのか…。ナギも素質はあるんだからマジメに呪文を覚えればいいのにね。素で強いから覚えるの面倒くさがってんだろうな。

ジャックは自分のアーティファクトの中から出した巨大な斬艦剣で強襲を仕掛ける。切りつけた箇所はスクナの四本ある腕の内の一本。その斬撃は狙いから少しずれたようだが見事に命中して手首の部分を切り落とした。

先陣を切った詠春は雷鳴剣や斬空閃をスクナに放ち、怯んだところをチャンスとばかりに神鳴流の奥義を叩き込む。遊撃的位置にある詠春は小刻みに移動してスクナのことを翻弄して戦場を引っ掻き回している。

そしてアルは得意の重力魔法でスクナを見えざる枷で動きを抑える。動きは明らかに鈍りナギ達の魔法攻撃や近接攻撃を上手くサポートしている。それに少しずつ重力を増してスクナ自体を潰しにかかっているように見えるのは俺の目の錯覚だろう。

そんな戦場に俺は今、遅ればせながら参戦したんだ。…正直言って怖いから帰りたいです。でもね？ここで好奇心が先立つ俺はもう、末期だと思うんだ。ハハハ…。

Side out 葵

第二十六話「合流と珍道中と出撃と」（後書き）

クソッ…！スクナごときにドンダケ手間取っているんだ！
というご意見は勘弁してください…ｏｒｚ

話しの構成がヘボな作者ですから一朝一夕では改善できないのですよ。
努力はしておりますよ？してはいますが所詮、趣味で書いているのでリアルで時間が取れないだけです。

次回はスクナとの戦闘をメインに書きたいと思います。
ではでは～。さよなら、さよなら、さよなら！

第二十七話「闘争と戦闘と封印と」（前書き）

戦闘オンリーになってしまった…。
上手くできているのか自信ないわー。
では、どうぞ！

第二十七話「闘争と戦闘と封印と」

――［紅き翼］ＶＳスクナの戦場…。

Ｓｉｄｅ　葵

空中を駆けながらスクナが半身浴している…ように見える封印場所に接近中に最後に大まかな指示をしていく。

「オリビエ、シルビア！二人はスクナの残りの腕を牽制！さっきも話したけど目的は封印だ！無理はするな！リビエラは二人の援護！もしもの時は頼む！」

「おうよ！ククク！いっちょ軽く揉んでやんよ！アーッハッハッハッハッ！！」

「…うん…無理は…しない。…結果的に…潰しちゃう…だけ…だよ…？…クスクス…♪」

「は～い♪がんばりますわ～♪うふふ～♪…ジックリと炙り焼きにしてやりますわ～。ウフ、ウフフフフ～…」

この子達、大丈夫かな？なんだか事故に見せかけてスクナを葬ろうとかしてないか？一応、オリビエ達には今回の戦いで大規模な破壊は禁止しているけど……不安だ。

いや？彼女達は俺との約束は必ず守るよ？守るけどリビエラ達は

ともかくオリビエがなぁ…。なんと言うか、手加減がヘタなんだよな。本人が意識していないでいつの間にかヤリ過ぎることがあるんだよ。どうしようか？もうちょいクギ刺しておくかな。…いや、必要ないか。

オリビエは二人に比べて家事が完璧な女の子なのに、何で戦闘になると力の加減ができなくなるんだろう？それもあって姉さん女房的にいい女なんだけど怒ったら怖い…怖いんだよ。怒りの対象は主に敵対者に対してだけどな。

「…（ああ、もういいや…）我が前に立ちはだかるモノはその悉くを薙ぎ払え！」

「おう！」「うん…！」「は～い！」

言っちゃった…。つい、勢いだけで言っちゃった…。でもここで「今のは無し。程ほどで…」なんて言えないよなぁ。下手すると士気に関わるしね。オリビエ達は、もう行っちゃったし、このまま行くか、うん。

「ミリー、ウーリ、マリー！オーダーは、いつもどおり俺の攻守のサポート！尚、今回は追加事項として必要なら個での戦闘も可とする！」

ミリー達に個別の戦闘許可を出した理由は簡単。俺がこの目で実際に封印式を観察したいから！記録データは取るけど、リアルタイムで見たいんです！テレビだって録画とリアルタイムで見るのは何か、こう…感覚的に違うでしょ！？

そのためには脳の空き容量を少しでも多くして処理速度を軽くす

るために任せるところは任せておかないとな！全ては俺の知的探究心のためにッ！！

「はぁい。オーダー、承りましたわぁ。緻密にぃ、精確にぃ、確実にぃ果たしてみせましょう！」

「任せてー。あるじーの、お願いだからー、ウーリ、がんばるよー。…えへへー♪」

胸の前で両拳をギュッとする姿を見たら思わずウーリの頭を撫でてしまった…。反省もしなければ後悔もないけどな！かーいーなー♪

「主命、確かに！我が炎、主のために存分に揮いましょう！」

「…よろしい！では皆、配置に着け！」

「了解ですわぁ！」「あーい」「御意！」

三柱は姿を透過して配置に着いた。ああ…この包まれている感覚は何度体験しても安心と頼もしさを感じる。守られているって感じるんだよね。彼女達に任せておけば大抵のことはどうにかしてくれるし。

さて…。

「…九重・葵！いざ参る！」

スクナに攻撃を叩き込んでいる皆の下に俺は空を走り追いかける。そこで俺は、ふと考えたんだ。

「今夜はデータ解析で徹夜かな…」

ワクワク、ドキドキの封印式のデータ解析が俺を待っているッ…！

気合を入れて、オリビエ達に追いついて来てみたら俺の目の前では…。

「だらっしゃぁぁぁあああッ！！あたしの前を遮るなーーッ！！！」

「うおッ！？なんだぁ？アオイんところの怖い姉ぇちゃんじゃねぇか！あっぶねぇだろがッ！！」

大きく振りかぶった大剣をオリビエは何の躊躇も見せずに振り下ろした。その大剣はスクナの左肩部分に命中。腕が一本、千切れかかっている。…まだヤリ過ぎの兆候は出ていないようだ。

ジャックはジャックで突然背後に現われたオリビエの攻撃に驚きながらも回避に成功。彼女に対して文句を言う余裕もある様子だ。しかし、ジャックは文句を言うことで第二の気配には気付かなかったようだ。

「よそ見…しないで…邪魔…ッ！！…フッ！！！」

「なうわぁぁあああああぁぁああああああッ！？！？」

シルビアの持つハルバードから魔力によって編みこまれた風圧にジャックが巻き込まれたのだ。その風圧はスクナにぶつかると爆発するように弾けてダメージを胸部に与えた。

ジャックが巻き込まれたのはギャグ補正のなせる業だろう…。実際ピンピンしているし。

「アハハハハハハッ！！ジャック、バッカでぇ！！アッハッハッハッ！！」

そんなジャックを笑って見ていたナギ。ジャックの普段が普段だけにナギは心配して見せることもしないで存分に笑い転げている。ここが戦場だということを忘れてはいないか？

「貴方も～、避けたほうが～、よろしいですわよ～？フフフ～♪」

「ナ、ナニィィィイイイッ！？」

そこに現われたのが第三の人。ナギは笑っていたから反応が刹那の瞬間遅れたようだ。完全に回避できずにローブの端っこが黒く焦げていた。ナギはあと、もう少し反応が遅れたら全身が黒焦げになっていたかもと考えて全身から冷や汗が出まくりだ。

そう、ナギはリビエラの“輝く霧”の一部に、あわや巻き込まれかけたのだ。当のリビエラには、からかうだけで当てる気はなかったのだが…ナギが予想以上に思いっきり回避したために手元が狂い“掠ってしまった”だけのことだった。

ナギも大変だなぁ、っと俺は思ったよ、うん。

「お前らは何をしとるんだ！！？マジメにヤレ！」

「ふふふ。本当にナギを見ていると飽きませんね」

「アルも笑ってないで、何とか言ってくれ！」

「エイシュン…何事も楽しむ気持ちは必要ですよ？」

「何の話しをしとるんだ！お前はッ！？」

何？このカオス…、ってない感じで賑やかだった。ナギ達の戦闘にオリビエ達が乱入した形で、この様相をなしたんだな。それでも下手な油断などせず戦闘の手を止めないのは皆が一流だからなんだろう。

それにしても近頃、詠春の突っ込みスキルが上昇傾向にある気がするな…。普段が生真面目だから弄り易いんだよ。あと十年もしたら落ち着きと貫禄が出てくると思うんだ。でも、それまでは突っ込み役を頑張ってもらおうと思う。

そんじゃま、俺も仕上げの前準備に入るとしますかな♪それじゃ脳内スイッチオン！

―…精神魔導回路（アストラル・ライン）、起動（アクション）。
―…並列詠唱（パラレル・キャスター）、開始（スタート）。
―…高速詠唱（クイック・キャスター）、開始（スタート）。

んっ…ぁ…精神魔導回路（アストラル・ライン）が起動して他の強化・補助プログラムも連続して起動している。ああ、気分が高揚してくる…！

―…術式［白き雷・広域］を展開。
―…術式［白き雷・結界］を展開。
―…術式［白き雷・抑制］を展開。

媒体は“白き雷”を推奨！敵は巨体！包み込むために広域を！目的は封印！足止めするために結界を！力は強大！弱体化させるために抑制を！

―…全術式展開（スペル・メモリー）、完了（コンプリート）。
―…選択、攻勢結界（セレクションオフェンシブ・フィールド）を形成。

術式の構成完了を確認。術式の壱番、弐番、参番の再構成を開始…完了。術式の融合を開始…完了。攻勢結界（オフェンシブ・フィールド）の形成を確認。

―…全工程（オール・コンプリート）、完了。
―…術式・待機（スペル・フリーズ）。

全工程の終了を確認。魔砲撃シーケンスへ移行…中止。工程を現段階にて待機。尚、敵標準は継続するものとする。待機、待機、待機、待機…。

ふぅ…。これであとは発射するだけ、っと。その前に射線軸上にいる皆に警告しとかないとな。それでは、んんッ！あー、あー。本日は晴天…いや、曇天なり、あー、あー。うん。

【…戦闘地域に居る全ての者に警告する。…“避けろよ？”…】

「「「「「ッ！！？？！？！？？」」」」」「「「「散ッ！！！！！」」」」」

術式の待機状態を解除。戦闘モード、イグニッション！

「広域攻勢結界［インドラ］、発動（エグザート）！！」

直径１ｍほどの五つの白い光球が俺の周囲に展開した。一つ一つが白い電気を放出してバチバチいっている。光球はそれ自体が回転して徐々に加速していく。そして回転数が最高潮に達しようとした時。

「目標を捕らえろ！行け！」

俺の指示に従い光球達はスクナ目掛けて飛び出していった。四つの光球はスクナの足元の四隅に待機。最後の一つはスクナの天頂部に到達した。それと同時に足元に待機した光球は眩く発光した。天頂部の光球も同時に発光する。

やがて点と点を結ぶように光球達は線で結びつく。点は線となり、線は面となる。そして面は四角錐の形を創りスクナを包囲した。次の瞬間、光球から最大級の放電が開始された。

――グゥッ！？グゥワァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！？！？！？

スクナが想定した以上の放電に苦しむ。ジャックが斬り捨てた手首から、オリビエが切りつけた左肩部分から電撃で焼け焦げた匂いと放電によるイオン臭がする。

スクナは残った腕で倒れかけた巨体を何とか支えて苦しそうに喘いでいる。時々、結界の過剰放電に触れているせいかバチバチいっている。

…閉じ込められているのは可哀想だから結界は今、解除しておこう。閉じ込めたままだとこっちからも攻撃できないからな。ダメージも十分以上に与えてあるから直ぐには動けないだろうよ。

「うんッ、これでよし！！皆、生きてるかー？」

発動前に警告して退避は完了していたはずだけど一応の確認は必要だと思うんだ。やっぱりいらんことでダメージを受けられたらイヤだしさ。

「葵ッ、ズルイ！ズルイぞ！あたし達には禁止したくせに自分だけ大きな魔法を使うなんて！！」

何、駄々っ子みたいにジタバタしているんよ？可愛いとか思っちゃうだろうが。

「いや、良く見てみようよ？ほら、スクナを中心にして被害はほぼ皆無でしょ？オリビエだと問答無用で壊滅じゃん」

「グッ…！なかなか痛いところをつくじゃないか」

オリビエも戦闘でヤリ過ぎないように加減ができれば問題なんだけど…。若干、バトルマニアの気質があるからなぁ。対象の捕獲任務には向かないんだもん。

「ふふん♪オリビエはリビエラやシルビアみたいに手加減を覚えよ

うね？」

ほ～ら♪なーで、なーで♪うん、オリビエのサラサラの黒髪はいつまでも触っていても飽きないものだね。やーらかいなー♪

「ふ、ふんッ！わかってるよ！」

ありゃりゃ？赤くなって拗ねちゃった？うぅむ、赤くなった顔もかーいーし愛でていたいけど、今はそれどころじゃないか。

「ナギ、今が好機だ。一気にスクナを押し込むとしよう」

「ああ。…あとでオレらがオマエを袋叩きにしてやるから覚悟しておけよ？コラ＃」

えー…なんでさ？俺が何をした…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

Ｓｉｄｅ　観測機３号機

「それでは私から…ッ！」

まずはアルビレオが葵によるダメージで呼吸を荒くしているスクナに先んじて得意の重力魔法を五つの球状に形成した。そしてアルビレオは腕を一振りして、その五つの重力魔法を叩き込んだ。

――ググ、グゥゥウウウゥゥウウウウッッ！！？！グアァァアッ！！

苦しむスクナ。スクナは無事な腕で出鱈目に攻撃の元であるアルビレオ目掛けて振るった。

「させんッ！！雷光剣ッ！！！」

――ガガガァァァアアアァァアアッッ！！！

しかし、スクナの巨腕による打撃は逸早く気付いた詠春によって軌道を逸らされてアルビレオに命中することは叶わなかった。

「おらよッ！！斬艦剣ッッ！！！」

――ギャッ！！ギャァァアアアッ！！

そこへ早い段階で追い討ちと言わんばかりにラカンがスクナに自らのアーティファクトで小山ほどの大きさの大剣を発生させて脳天目掛けて打ちつけた。

しかし、スクナの頭部は見た目通り堅固な硬さを示したようで斬撃は打撃止まりだったようだ。ラカンがアーティファクトにそれほど魔力を籠めていなかったこともあったようだが。

次にナギが姿をスクナよりも高い上空に躍り出た。ナギは右手に愛用の魔法の杖、左手に……左手にあんちょこを取り出して雷系最大呪文を唱え始めた。

「…契約により我に従え・高殿の王・来れ巨神を滅ぼす・――燃ゆる立つ雷霆（ケラウネ・ホス・ティテーナス・フテイレイン）・遠隔補助・魔法陣展開！…」

スクナは魔力の高まりがナギに集まりつつあることを己の根幹の一部を成す破壊本能で察知したのか、ナギへ猛攻をかけるべく猛然と握りつぶしてやると言うように2本の腕を伸ばした。

「やらせはせんよッ！！」

――グワッ！？グァァアアアァアア！！！

ナギへ迫り来るスクナの巨腕。それは突然の横からの火炎と爆発の衝撃によって防がれ不可能になった。

マリーによって防がれたスクナの巨腕は表面が黒く炭化しているようで黒い破片がボロボロと落下して水面に落下していった。その間もナギは今も詠唱を続けている。

スクナは、しばらく己が腕を使えないことを感じたのか次の攻撃方法を展開した。スクナは二つある顔で正面に位置する口を大きく開くと口内に魔力を充填し始めた。それは今も呪文を唱えて魔力を高めているナギへ狙いを定めて固定されたようだ。

スクナの魔力砲の発射体制が整い、あとはナギ目掛けて射出するのみとなった時、戦場に似つかわしくないどこかのんびりとした声質で介入してくる者が居た。

「ジャマしちゃダメだよー？メーッ、なんだからー」

――グゥッ！！グゥゥゥウウウウッ！！

その声が聞こえた時と同時に魔力が充填されたスクナの口内にウーリが作り出した風の塊が突然の暴風によって叩きつけられていた。風の塊はスクナの口内に到達した瞬間に暴発。充填された魔力は元のマナに還元され空中へと融けていった。

暴発した風の塊は魔力を還元させただけではなく口内にも著しいダメージを与えた。スクナの口からは黒い鮮血と還元途中の魔力が蒸気のように立ち上っている。

「3（トリプス）…―2…臨界圧（モド）！拘束解除（カプトゥラム・ディスユンゲンス）！―全雷精（オムネース・スピリトゥス・フルグラノレース）・全力解放（フォルティッシメー・エーミッタム）！！…」

ナギの呪文が終章に入った。大呪文の発現まであと僅かだ。スクナもそれを感じ取ったのだろう。最早形振り構わずに水面の上を我武者羅に暴れスクナの巨体に群がる小さき敵を振り払い、ナギの高まる魔力を屠ろうとする。

「大人しくしてくださいねぇ？」

――ヴォッ！？バァァアアッ！！ヴァァァアアッ！！！

そして、またしてもそれは防がれることになった。ミリーが指揮者のように、その白くしなやかな指を一振りするとスクナの足元の水が、その巨体に纏わりつき動きを水流で束縛したのだ。

水の拘束が厚くなるにつれてスクナは思い通りに動くことができないとわかるや、より一層暴れ始める。しかし、それも次々と追加される水の呪縛によって抑えられることになってしまった。

ミリーの水の束縛が増えるに連れて拘束力として水圧が増し、スクナの巨体を締め付ける。それと同時に鋭い流水によってスクナの身体と魔力が削られていくことになる。これは捕まれば、あらゆる消耗が必至のミリー特有の束縛陣だ。

「百重千重（ヘカトンタキス・カイ）と・重なりて（キーリアキス）・走れよ（アストラ）・稲妻（プサトー）！！千の雷ッ（キーリプル・アストラペー）！！！！」

泣きっ面に蜂…。というわけではないがナギは完成させた大呪文をボロボロに傷ついたスクナに目掛けて大魔法を放った。

――ブブブッ！！？？！ヴァヴァヴァアアアアーッ！！？！？！

そして、これが今回の止めとなった。最早、スクナは立ち上がることができずにいる。今は、あと少しで復活というところで停止しているようだ。

呼吸が荒い。巨腕の1本の手首は無くなり、1本は千切れかかっている。残りの2本は黒く焼け焦げている。二つある顔の内、一つは口内が切り裂かれてボロボロになっている。無事なのは、まだ出てきていない足ともう一つの顔ぐらいのものだろう。

「今だッ！封印をッ！！」

詠春はここを好機と見るや、すぐさまこの封印に集った陰陽師達に封印開始の合図を送った。陰陽師達は両手で素早く印を組むと東洋魔法の詠唱に入った。

「高天原に神留まり坐す。皇親神漏岐神漏美の命以て、八百万神等を神集へに集へ給ひ、神議りに議り給ひて、我皇御孫命は、豊葦原瑞穂国を、安国と平けく知食せと、事依さし奉りき、此く依さし奉りし国内に、荒振神等をば、神問はしに問はし給ひ…」

封印呪文が開始されると設置された封印の魔法陣のラインに魔力が通って光りだす。魔法陣は三重の巨大円形立体魔法陣。その周りには幾重にも円環魔法陣がそれぞれの方向に回転している。

「神掃へに掃へ給ひて、言問ひし磐根木根、立草の片葉をも事止めて、天の磐座放ち、天の八重雲を、伊頭の千別に千別て、天降し依さし奉りき、此く依さし奉りし四方の国中と、大倭日高見の国を安国と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて…」

魔法陣からは封印の効力が出始めたようだ。今まで顕現されていたスクナの身体が魔法陣の仲で少しずつ沈むように融けていく、融けていく、融けていく…。

「皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠り坐して、安国と平けく知食さむ、国内に成り出む天の益人等が、過ち犯しけむ種種の罪事は、天津罪、国津罪、許許太久の罪出む…」

抵抗する体力も気力も魔力も無いのかスクナは今のところ封印担当の陰陽師達の呪文で大人しく封印されている…。

「此く出ば天津宮事以ちて、天津金木を本打ち切り末打ち断ちて、千座の置座に置足はして、天津菅麻を本刈り断ち末刈り切りて、八針に取裂きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ…！」

大規模封印の呪文が半分を過ぎた段階でもスクナは大人しく封印されている。ここまで来れば封印は最早、確実と言えるだろう。

「此く宣らば、天津神は天の磐戸を押披きて、天の八重雲を伊頭の千別に千別て聞食さむ、国津神は高山の末低山の末に登り坐て、高山の伊褒理低山の伊褒理を掻き別けて聞食さむ…」

呪文詠唱が後半に入った。それでも、ここに居る者達は、まだ気を抜かない。抜けない。彼等は何かを感じているのか、スクナから目を逸らすことをしない。皆、それぞれが注意深く、封印作業を警戒、観察している。

「此く聞食してば罪と言ふ罪は有らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を舳解き放ち艫解き放ちて大海原に押し放つ事の如く…」

封印作業が順調に遂行している。そんな時、警戒しているメンバーの中で幾人かが微かな異変に気が付いた。それは極僅かな変化…。警戒して見ていなければ決して気付かないであろう変化。

それは魔力の揺らぎ…。その発生源を特定するために意識を集中していく。その先には封印式の中心に在るスクナから発生していた。

「彼方の繁木が本を焼鎌の利鎌以て打ち掃ふ事の如く、遺る罪は在らじと祓へ給ひ清め給ふ事を、高山の末低山の末より佐久那太理に落ち多岐つ、早川の瀬に坐す瀬織津比売と言ふ神、大海原に持出でなむ…」

陰陽師達の呪文は、その異変に気付くことなく一見した限り順調に朗々と唱えられていく。呪文も残り、あと少し。封印式の完成まで、もうすぐだ。

それでも異変は無くならない。それどころか魔力の揺らぎは増える一方だ。ここまで来ると全員が異変を感じ取り始めた。魔力の揺らぎがゆらゆらと、ユラユラと…。

そこで皆が警戒心を一層強めた時だ。突然、何の前触れも無く、それまで感じ取れていた魔力の揺らぎを感じられなくなったのは。皆はあまりのことで拍子抜けしたようだ。瞬間、緊張を解くように誰ともなしに溜め息が一つ漏れた。

そんな時だ。

――グワァァァァァァァッ！！！！ガァァァァッ！！

突如としてスクナが最後の悪足掻きと言わんばかりに今まで以上に爆発するように暴れ始めた。封印式が完成する少し前のことだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ観測機３号機

Ｓｉｄｅ　葵

どうしよう？なんかスクナさんが、ものっすごい暴れ始めたんで

すけど…。とっつぁん、どうしよう？…とっつぁん、て誰だよ？

まぁ、んなこたーどうでもいいんよ。皆は余りに突然のことで呆然としているし。ふぅむ……ヤルか？ヤっちゃうか？ヤっちゃいますか？封印式を肉眼で舐めるように観察しておきたかったんだけど、こうなったらヤルしか…ないッ！

このままだといつまで経っても術式がちっとも進みやしない…！フフ、フフフフ、天国のお父さん！お母さん！（って生きてるのか死んでるのかは知らんがッ！そもそもあの両親が天国に逝けたのかな？）葵は、いっちょデカブツを黙らせてこようと思いますッ！

全ては知的探究心のためにッ！！！…俺の個人的の、だがなッ！！

「ハオ、ユエ…行こう。このままでは儀式が進まない」

『『承知！』』

「此く持ち出で往なば…！荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百曾に坐す速開都比売と言ふ神、持ち加加呑みてむ…！此く加加呑みてば…ッ！息吹戸に坐す息吹戸主と言ふ神…！根国底国に息吹放ちてむッ！…」

封印を施している陰陽師達は、これまでに無い抵抗をスクナから受けているのか詠唱する声に苦しさが見え始めたな…。なんと言うか…。魔力不足？抵抗が激しすぎて彼等の抵抗値がガンガン削られている感じだ。

このままでは力及ばず儀式が完成する前にスクナが出てきてしまうかもしれない。俺にとっては折角の東洋の封印式が見られなくな

るから勘弁願いたい事態だ。ここまで来てお預けは正直言ってイヤ過ぎる。それじゃ、まずは…。

――白の一刃！放つは光！！

ハオを一振り。現れるは白の剣が一。

――黒の十刃！放つは影！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が十。

――白の百刃！紡がれるは栄光！！

ハオを一振り。現れるは白の剣が百。

――黒の千刃！紡がれるは破滅！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が千。

――陰陽刃！ここに顕現せり！！陣形構築ッ！！！

スクナの天頂から円錐状に展開した白と黒の剣先が向くのは主の敵。その攻撃にさらされる敵から見たら死角は無いように見えることだろう。あとは魔法の最後の発動詠唱を残すのみ。それもすぐさま唱えられることになる。

――屠れ！鉄槌魔法“剣弾陣ッ”！！！！

――グサッ！グッ！？斬ッ！ギャアッ！？ドドドンッ！！グワァァアアァァアアッ！？…ッ？！…。

「ふんっ、身の程を知るべきだったな」

隊列を組んだ剣の軍は空を滑るように一斉に行進（マーチ）を開始した。敵を貫き、切り裂き、蹂躙するために。

スクナから見たら千以上あるとは言っても顕現した剣の大きさは小さな蚊ほどのモノにしか見えなかっただろう。だがそこに籠められている力…魔力は強大。この世のモノに限らずあの世のモノまで切り伏せることが可能と示すほどに、一振り一振りに籠められた魔力は強大だった。

「そんなに暴れんなって！葵の邪魔になるだろがッ！！！」

――ギャアアッ！？アァァアアア！！

「此く息吹放ちてば、根国底国に坐す速佐須良比売と言ふ神、持ち佐須良比失ひてむ…！」

蝋燭の最後の灯火と言うように傷付いても形振り構わず、暴れ続けるスクナにオリビエが体剣に魔力をやや強めに籠めて威力を増幅して今も暴れ続けるスクナに振り下ろして叩きつけるようにして斬りつけた。

スクナの抵抗が弱まったことで陰陽師達の呪文詠唱には澱みのほとんどが消えたようだ。詠唱も架橋に入ったようで、最後のラスト

スパートを仕掛けるように力強く唱えられていく。

「大人しくぅ封印されましょうぅ…ねぇッ！！」

――ア゛ア゛ッ！？ガァアァアアッ！！グッ！？

「此く佐須良比失ひてば、罪と言ふ罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を…！」

スクナの動きを攻撃と言う名の結界で阻害して封印式から一歩も動けなくするリビエラ。彼女の織り成す“輝く霧”はスクナを中心に漂っていたが、やがて周囲を高速で回転して範囲を狭めていった。そしてその霧はスクナの重装甲と言ってもいい表皮が容赦無く削られていく。

封印の呪文も更に抵抗が弱まったことで一気に詠唱が加速する。

「…お兄ちゃんの…ジャマ…しない…でッ！！！」

――グッ！？ア゛、ア゛ア゛ア゛ーーッ！！！！

シルビアも頑健な葵謹製のハルバードを振り上げたと見えた瞬間には彼女の姿が消失。どこに行ったのかと探せばスクナの顔のすぐ前に出現していた。そして振り上げていたハルバードを回転させて、遠心力と魔力と単純な強力（ごうりき）を乗せた突撃でスクナの顎を打ち上げた。

そのまま三度、連撃を叩き込み角と牙を叩き折った。鬼にとって角と牙は力の象徴だ。よって他の部位と違って殊更頑丈にできている。これはどの鬼も変わらない事実だ。それが荒神として在るリョウメンスクナノカミとしても例外ではない。ここで何が言いたいか

と言うと…。

――ガガッ!?!?ガッア゛ア゛ア゛ア゛ーッ!!ア゛ア゛ア゛ア゛ーー!!!?

つまり、そう。弱点を粉砕されたということに他ならないのでスクナはこの世のモノとは思えないほどの痛打、激痛と言ったあらゆる痛みを味わうことになったのだ。

想像してみてほしい砕かれた牙は…こちらは想像しやすいだろう。歯医者で麻酔無しの治療を受けるのだ。しかも治療された箇所は間違えで健康な歯を治療という名の拷問に曝され、治療の必要な箇所は更に悪化させるのだ。

粉砕された角は、人間で言うところの頭蓋骨を粉砕して脳神経を直接、無理矢理に掻き乱されているようなものだ。それほどの痛みをスクナは味わっているのだと考えたら他人事ながら同情と涙を誘う思いだ。

ここを好機と見て陰陽師達が一気に詠唱とともに魔力の質と量を上昇させて最後の仕上げの一節を唱える。

「天津神国津神八百万の神等共に聞食せと白すッ!!!」

――ア〝ア〝…ッ！ア〝ア〝ア〝アーッ！！〝ア〝ア〝ア〝ア〝ーーッッ！！！

最後の一節を唱え終わった瞬間に魔法陣は一際、眩く光るとスクナは光の粒子となって魔法陣に吸収されるようにして、その巨体は無事に封印されたようだ。陰陽師達の居る辺りから歓声が聞こえてくる。

「ふぅむ…。パッと見ただけだけど封印の基本は、やはり西洋も東洋も変わらない、か…」

基本を抑えておけば東洋の魔法を西洋式で再現できるかもしれないな。おそらく問題の一つは“何を術の発動媒体にするのか？”、と言うことなのかもしれない。一例として挙げれば西洋の杖などの発動体、東洋の呪符などの魔法媒体など、か。

「ん？ということは指定された範囲の規模と封印式の強度的な上限下限がポイントなのかな…？」

ああ、わっかんねぇ…。帰ったら早速、分析と解析をして考察して推論と結論を資料と照らし合わせて出さないと。こればかりは面倒なんて言ってらんないからな。確実に資料を増やしておかないと。“知識は発展の母である”が俺の考えの根本にあるのだし。ふふふ♪

とにもかくにも、こうしてスクナさんは再度、無事に封印されましたとさ。ハハ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第二十七話「闘争と戦闘と封印と」（後書き）

一話丸々戦闘に費やしてしまった…。なにコレ？
スクナにどんだけ字数使ってるんだよｏｒｚ
作者の文書力が低いことを痛感中です。

突然ですが次回からは物語を進めるために時間軸を飛ばしていくことになるかもしれません。
毎度の事ながら予定であって未定なんですけどね！あっはっはっはっ！
では！皆さん、また次回に！さよなら、さよなら、さよなら！

第二十八話「解析結果と昼這いと開店準備と」（前書き）

しばらくはほのぼのな話しを続ける予定です。
実際はどうなるかわからないですけどね？
では、続き！行ってみよー！

第二十八話「解析結果と昼這いと開店準備と」

――日本国京都府上空某所…。

Ｓｉｄｅ　葵

スクナとの戦いから数週間が経った。今、俺は京都府上空にステルス航行で展開した機動戦艦アングレカム内にある執務室でスクナ戦に使用された封印術式の解析結果に目を通していた。

この術式なんだけど複雑な術の部分を解体して部分化してみたんだ。そしたら基本は単純な封印式にそっくり。いや、式は封印を目的としたものだから当然っちゃ当然なんだけどね。それでな？根幹部分に、その式を主軸にしているみたい。

そしてそこに肉付けしていって巨大で堅固な封印術式にクラスアップさせたようだな。まぁそのせいか知らんが術式は複雑化して一部なんかは雑然としてしまったようだ。相手も一応、わかる限りで術式を削除したり付加したりして最適化しているみたいだ。

それでも最適化し切れていないみたいなんだ。俺が式をバラしてチョコチョコッと見た限りじゃ、まだまだ削れるところがあるように見える。

「東洋魔法って長い呪文だけど強力なものと呪符などの魔法媒体を使った威力は低いけど即効性があるもの…」

なんで東洋系は…と言うより陰陽道系は極端なんかね？術の幅が広く造詣が浅く、まぁ人によっては一部深く。良く言って万能、悪く言えば器用貧乏。生かすも殺すも術者次第の形態を持つんだなぁ、と今更ながら感じるよ。

うん、十分に封印式の情報が手に入ってホクホクですな。いやー、今回の解析結果から基本は大事だってことを改めて学んだよ。何事も工夫次第だよねぇ。基本に忠実に、手堅く堅実に、か。ある意味で俺向きな気がするわ…。はぁ。

「それにしてもスクナってこの時代では随分としつこかったんだなぁ。矢鱈と頑丈だったし…」

うん、驚きだった。物語の中では闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）にアッサリと敗北していたから弱っちぃイメージがあったんだけど…。

「子供先生の時は、この再封印の結果があったからアレだけ弱い印象を懐いたのかも？」

だとしたら今回は俺が居たから、やや変化があるか…。もしかしたら今後、子供先生の時に復活させられるスクナは原作よりも弱体化しているかもしれない。

アレ？もしかしなくても物語に介入したことになるのか、な？…マズクないか？面倒なことにならなければ…いや、ならないか。敵が弱くなるなら問題ないよな。子供先生の成長とか俺にとってはどうでもいいし。

「子供はキライじゃ無いけど…あの子に限っては厄介事しか舞い込んでこなさそうなんだよなぁ…」

トラブルメイカー…違うな。フラグメイカー？うん、これだな。フラグメイカーだから言いも悪いも区別無くトラブルも何もかもを呼び込んできそうだしな。あまりお近づきになりたいとは思わない類の人種だよなぁ。

それでも、もう麻帆良には喫茶店を展開するために1チーム送って色々と準備が進めているんだよな。とりあえず原作開始十年前までには開店したいと計画中。俺はこのままここでナギ達とは完全に別行動。また半隠居生活に突入しようと考えている。

「この休暇の間にナギ達には説明してあるから問題は…無いよな。序でに、なんか写真撮影なんかもしちゃったし。ふふふ、この先、あの2人には色々と困難な道のりだけど…。本人達が幸せならどこだって変わらないだろ。…その道が、たとえ地獄のようでも、ね」

英雄の称号は何かと重いぞ、ナギ？しかも一度、そのレッテルが貼られると二度と平穏な時は訪れない。…決して、な。英雄の最期は悲劇で終わるのが殆んどだ。願わくばできるだけ長く彼等の幸せが続くことを祈ろう。残念ながら俺が祈りを捧げる神は居ないが…。

俺のように姿を暗ませるでもしない限り、厄介事はどこまでも追いかけてくるだろうよ。俺の居場所を知ることができたらソイツは大したものだ。だが残念なことに間違いなくソイツは敵だ。知り合いなら緊急事態でもない限り事前に連絡が入るはずだからな。

「とりあえず麻帆良に行くまでは、ここ京都で喫茶店を開店して…ゆっくりと…するか…」

葵は椅子に身体を深く沈めながら今後のことを漠然と考えて、そ

のまま目を閉じた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――機動戦艦アングレカム艦内、葵の執務室前…。

Ｓｉｄｅ　フリチラリア

この数週間で家族の皆さんの休暇も無事に消化されました。皆さんそれぞれの仕事に戻って通常体制に入っています。…ええ、有意義で実に充実した休暇（バカンス）でしたわ♪葵様にご飯をア～ン♪って食べさせてもらったり…他にも…えへへ♪コホンッ！ええ、有意義でしたわ！

例の鬼神騒ぎが起きた時はどうなるかと心配しましたが杞憂でしたわ。葵様も目立った怪我をしていらっしゃらないようで安堵した思いですわ。もしも、あの――鬼神（駄神）が葵様に怪我を負わせようものなら……クスクス、クスクス…♪

ハッ！？げふんっげふんっ、それはともかくあの時は大事にならなくて良かったですわ。今回の休暇は折角、合法的に葵様に襲いか…甘えることができる、少ない機会なのですから余計なことで時間を取られるのは遠慮したいものでした。

まぁその葵様自身が戦闘から戻られてからは術式の解析に掛かり切りで数日、執務室から出てこられないこともありましたわね。そ

れに執務室でそのまま、お眠りになっていたりすることも、しばしばあるのですが…。

今日はどうかしら？今頃は解析結果に目を通されているところだと思いますけど。

――コンコン。

「葵様？失礼いたします。フリチラリアですわ。…あら？ふふふ♪このような場所で寝てしまうなんて、よほど疲れていたのですね」

また、このような場所で寝てしまわれて。ふふふ、風邪を引いてしまいますわよ？もっとも艦内空調は常時に渡ってその場の適温に調整されているからそのようなことは無いとは思いますが。

「…すぅ…すぅ…むにゃ…」

「それにしても何てあどけない寝顔なのかしら…♪」

ああ、ああ！抱きしめたい！抱きしめたい！この愛するわたくしのご主人様を時間の許す限り愛でていたい！ああ…愛しいわたくしのご主人様…！

「…ダメだよ…リチラ…そんな…すぅ…」

「ハァ…ハァ…。こ、このまま頂いてしまってはダメかしら？ハァ…ハァ…」

幸いなことに、いつもジャマをしてくるアイリさんもファレノさんも今は周辺警戒の任務で外へ出ています。これは…チャ、チャン

スかしら？…そうね、今日こそ…今日こそは…イケるッ！？

寝込みを襲うようなマネをするのは甚だ遺憾なのですが…遺憾ですのよ？本意ではありませんことよ？本当ですのよ？これは…夜這い…まだ、お昼でしたわね…。ええと…そう！添い寝ですわ！ええっ、これは添い寝です！途中でくんずほぐれつしたとしてもこれは添い寝です！

「…ということですので少々失礼しますわね…。起こさないように…。ふぅ、これで良し…。では、……いただきますッ、葵様！」

静々と葵を抱えて隣の部屋の仮眠用のベッドに寝かせて、その隣に自分も入ろうとするフリチラリア。やっと彼女の目的が達成できると思われた。しかし、往々にしてこういう場合は意図しない邪魔が入ることは既にお約束と言われる現象として位置づけられているものだ。

「お父さーん！追加の資料ができたよー！あれ？居ない？仮眠室かな？」

今の声は…アンッ！？なんで！？なんで肝心の時にいつもジャマが入るんですの！？ああ！それよりもこの状況はマズイですわ！何とかしなければッ！…って！どうすればいいと言うのですかーッ！！

「……え？」

「……ぁ」

「…すぅ…すぅ…」

き、気まずいですわ…。なんと言うか、いざ、事に及ぼうとした時に家族に発見された時のような気まずさですわ。って、そのままではありませんか…。アンは家族ですし。まだ今の段階がそこまではないので誤魔化すことは…できるかしら？

「…なに、してるのかな？リチラお姉ちゃん？ねぇ？」

早速、来ましたわ…！リチラッ、ファイト、ですわ！

「……葵様が執務机のほうでお眠りになっていらっしゃったので仮眠用ベッドへとお運びしたのですわ」

じ、事実を述べましたわよ？執務机でお眠りになっていたのも、仮眠用ベッドに運び込もうとしたのも全て事実ですわ。色々と省略したかもしれませんが…必要は無いはずですわ。ええ、必要ありませんわ。問題を大きくするだけですし…。

「…そう。それじゃ、なんで、リチラお姉ちゃんまで寝ようとしてるの？おかしくない？おかしいよね？おかしいよ」

しまったーッ、ですわ！わたくしの体勢が疑いを濃くしてしまったみたいですわ。ど、どう言い訳を！？ああ、そうですわ！

「……添い寝、ですわ」

「…添い寝？ヘェ？…添い寝なのにその服の乱れは何なのかな？ただの添い寝なのに、おかしくない？おかしいよね？おかしいよ」

はぅ！？やってしまいましたわ…。できるだけ素肌で葵様の感触を楽しもうとしたことが裏目に出るなんて。ど、どうしましょう！

？ええと、ええと…。

「……それは、その…服…そう！服が皺にならないようにしようと…」

「…服が、皺に…ねぇ？…ほう？へぇ？……ねぇ？リチラお姉ちゃん、知ってる？皆に支給されてる制服は特殊加工されていて簡単な対魔はもちろん、防弾、防刃作用と…皺が付かない安心素材でできてるんだ、よ？」

ええ、ええ！そのことは重々承知しておりますわ！わたくしも積極的に作成時に意見を出させてもらいましたもの、知っていて当然です！それでもここで正直に白状してしまっては先ほどの言い訳が無駄どころか決定的な失態に繋がってしまいます！何としても誤魔化さなくては！

「……そ、そうなんですの？それは知りませんでしたわ。ええ、知りませんわ…」

「…へぇ？知らなかったんだ。そっか、それなら仕方ないかな」

「……ホッ」

どうやら上手く誤魔化せたみたいですわ。これで危機は回避したも同然…。

「…あれーぇ？でも、おかしいなぁ」

「ッ！？」

えッ！？何か、わたくし間違えたのかしらッ！？いえ、そんなはずは…ッ！！まさかッ！？

「制服作成時には旧指揮官全員が意見を出し合った、って記録に残ってるんだけど。これはどういうことかな？」

「……そ、それは」

間違いないですわ。やはりアンは直接、データバンクから情報を検索していたようですわ。考えてみれば保管されたデジタル情報は全てアンが管理、整理しているのですから当然ですわね。でも、まさか書類のデータ化も終わらせているだなんて考えも付きませんでしたわ。

状況は最悪…。記録情報のオリジナルは全て向こう（アン）が一括管理している。そして切り口の切っ掛けを与えてしまったのも痛いですわ。最早反撃の糸口すら見えない…！わたくしは一体どうしたら！？

「その制服のデザインなんかはリチラお姉ちゃんの意見が特に反映された、って記録にあるよ？それなのに制服の特徴を知らないなんてことがあるわけ…無い、よね？」

「……」

そんな細かいところまで記録化されてますの！？あのやり取りは議事録から後で削除されたはずですわ！でも、記録は残っている。

…削除されずに書類が…残っていた？職務怠慢ですわ！！削除作業くらい、きちんとしてほしいものですわ！

既に逃走は困難…いえ、無理ですわ。こうなったらアンには黙っていてもらえるように何らかの取引に引き込むしかありませんわ。でも、それはどうしたら？一緒に添い寝に誘い込む？失敗とは言わなくてもわたくしが恥ずかしいので却下ですわね。

「素直に白状して謝罪するなら…ここだけの話しにしてあげても、いいんだけどなぁ？」

「ごめんなさいすみませんでしたごめんなさいすみませんでしたごめんなさいすみませんでした…」

形振りなんて構っていられませんでしたわ。引き出したい条件を向こうから提示してくれるなら何をしてでも掴み取らなくてはなりませんもの。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　フリチラリア

――機動戦艦アングレカム艦内、葵の執務室内…。

Ｓｉｄｅ　アングレカム

アイリお姉ちゃんからリチラお姉ちゃんの“悪癖”の話しは聞いていたけど、その時の私は“まさか～”って笑いながら流していた

けど…。そのまさかを自分の目で確かめることになるとは夢にも思わなかったよ。

私はリチラお姉ちゃんが本当に“まだ”、お父さんに何もしていないことを確実に知るために精神的拷問…もとい、事情聴取をして…あの、その…“ナニ”には、到っていないことが判明した。今になって考えると私は何てハシタナイことを追及していたんだろう…。

うぅ…！恥ずかしいよー！

「まったくもう、しょうがない、リチラお姉ちゃんなんだから！こんなことはこれっきりにしてよね！約束だからね！わかった！？わかったら返事して！」

そんなつもりは無かったんだけど自分でもビックリするくらい大きな声を上げて注意しちゃった。これじゃあ八つ当たりだよね？少し大人気ないと言うかハシタなかったかもしれない。そう思うと少し反省しなきゃって考えちゃうよ。

「はい…。今後は、このよう…が無いよ…心がけ…わ…クスン」

私が、そんな愚にも付かないことを反省しているとリチラお姉ちゃんがモゴモゴとした口調で謝罪と今後の約束をしてくれた。確かに謝罪はしている、それでも、これは…。

「聞こえないよ！ちゃんとハッキリと声を出して！ハイ！もう一度ッ！！」

「はいッ！今後は、このようなことが無いように心がけますわ！！」

「うんっ、それじゃ約束したからね？…破ったら…」

やっぱり、こういうことはしっかりとしとかないと変な癖になっちゃうからね。多少厳しくしてでもハッキリとさせないと！…一応私も好きでこういう厳しいことを言っているわけじゃ無いんだからね？

苦言を言うのは今回のことばかりだけじゃなくてお姉ちゃん達、皆のためを思ってのことなんだよ。…まぁ、変なことをお父さんにされないように目を光らせているのも事実なんだけど、ね。実際に見るまでリチラお姉ちゃんが本当に今回みたいなことをするとは思わなかった。

今回のことで約束はしてくれた。それでも私との約束がどの程度の期間、効力を発揮してくれるかが問題よね。ファレノお姉ちゃんの話しを思い出してみると過去に必ず再犯に及んでいるみたいだし。少し不安…。

「だ、大丈夫ですわ！アンとの約束は守りますわ！ええ、守りますとも！（じゃないと今回のことが密告されて今以上の苦行が待ってますわーッ！！）」

…本当かなぁ？

「信じるからね？…さってと！お父さんは寝ちゃってるし…」

「起きてるよ…」

「ッ！」

「ありゃ？お父さん、いつから起きてたの？」

今までの会話、聞かれちゃったかな？お父さんに誤解…んー？不安？とにかくそういうのを悟らせるようなことは避けたいんだけどな…。本当に、いつごろ起きたんだろ？

「ついさっきだよ。二人の声が聞こえたから。んーッ！はぁ。で？俺をここに運んでくれたのはリチラ達か？」

「それは…」

「んーん。お父さんをベッドに運んでくれたのはリチラお姉ちゃんだよ。私は追加の資料を届けに来ただけだよ。リチラお姉ちゃんって優しいよねー？」

「アンッ」

これくらいのフォローはしてもいいよね？お父さんを運んだのは事実なんだし。

「そっか。リチラ、運んでくれて、ありがとうね。おかげでグッスリと眠れたよ。…と言ってもまだ日は高いみたいだけどね。ハハハ」

「い、いえ。そんな大したことはしておりませんわ。ですが、お気持ちだけは受け取らせてもらいますわ」

リ、リチラお姉ちゃんがデレて…違った、照れている！？本当だったんだ…。リチラお姉ちゃんが純情路線だった、って。普段の鋭い騎士のような立ち居振る舞いの裏にはこんな表情が隠れていたなんて…意外だ、って言ったら失礼かな？

「…リチラお姉ちゃん。…（ボソッ）お父さんにお礼を言われたことが嬉しかったなら素直になればいいのに」

「何か…言ったかしら、アン？」

「えっ？ううん！何にも言ってないよ。アハッ、アハハハ…」

今までの涙目で反省を表していたリチラお姉ちゃんの雰囲気がガラッと変わったよ。どっちが素なのか迷うね、本当に。

「なんか、よくわかんないけど。…とりあえず追加資料を見たいから執務室へ移動しようか」

「はい、葵様」

「わかったよ」

お父さん、ナイスです！本当にありがとう…！圧し掛かるプレッシャーから救われたよ。

――隣の執務室へ移動中…。

そして執務室の自分の椅子に腰掛けてからお仕事の話しですよ。お父さんは一回深く椅子に沈み込み少しの間、瞑目してから話しをはじめたの。

「それで追加の資料は？」

「うん、これなんだけど」

「ありがとね。んー？どれどれ…」

私が渡した電子情報と紙媒体の書類に目を通すために視線を落とした時にリチラお姉ちゃんがお父さんに少し恐縮気味に声をかけてきたの。

「あの葵様？わたくしは他の用事がありますので…」

「え？あー、うん、了解。それとリチラ、身体には気を付けてね。無理をしても毒なだけなんだから」

相変わらす優しいね、お父さん。その何気ない一言に皆が一喜一憂しているのを当の本人だけが知らないんだから「なんだかなー？」、って気分にさせられるよね。

「葵様…。はいっ！無理はしませんわ。それでは、また」

リチラお姉ちゃん嬉しそうだねー？これだけであと１０年は戦えるってくらいの気迫を感じ取れそうだよ。うん、冗談とかは横に置いておいて気迫的には本当にヤレちゃいそう…。足りない物とかは現地調達してさ。

「またねー」

「リチラお姉ちゃん、またね」

それから二人でリチラお姉ちゃんをちゃんと見送ってから仕事に戻ったの。今日の教訓は“身内とはいえ油断したらお父さんを取られる”だね！！ヤラせない！ヤラせないんだからーッ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アングレカム

――機動戦艦アングレカム艦内、葵の執務室内…。

Ｓｉｄｅ　葵

アンも葵に渡した資料のことを簡単に説明にしたら次の仕事があるので部屋を後にした。

「次の仕事があったのに二時間もここに居たのか…」

俺が寝ている間に何があったんだろうか？資料を届けるだけなら執務室の机に置いておいてくれればよかったのに態々仮眠室のほうまで来てくれるなんて。…あれ？ということは、リチラはその前から居たということになるよな。俺を運んでくれたのは彼女だし。

「俺が寝ている間に、またリチラが甘えて布団の中に入ってきた、とかなのかな？」

いや、まさかな。ここ数十年そんなことは無かったのだし。今更そんなことは無いか、うん。それよりも追加の資料のことだな。

「こっちが麻帆良での出展に関して、で…。こっちが京都府にて開店する予定計画表か。…ん？これは…エヴァンジェリンの動向調査書？」

ああ、随分前にお願いしてあったものの途中経過報告書か…。ふぅむ、これから先、いつだったかナギのおっかけ（ストーカー）になるんだった、よな？その原因は忘れたけど。時期がわからないからイベント発生の大体前後５年で手配しておいたんだけど。これは…。

「んー…気付かれている、と見ていいのかな？」

この報告書を見た限りだと追跡途中で何度かそれらしい行為をしている、とある。流石は悪名高い闇の福音殿（ダーク・エヴァンジェリン）だな。彼女達の決して薄くない精霊や悪魔の気配やニオイを感じ取って気付かれたのかもしれない。若しくは他の何らかのことが原因か…？

実際に会ったことは無いけどあの子は危機に対して何げに鼻が利くからなぁ。監視するなら超高高度からの監視に絞ったほうがいいかもしれない。機械的な偵察機からの監視ならあの機械音痴には効果的かねぇ。まぁ俺は居場所の確認をしたかっただけだしね。

「現状の監視任務を偵察機による遠方からの監視に移行、っと…。これで良し」

下手に相手方を刺激して警戒なんかされたら面倒くさいことになるかもだしな。最悪、狙われることにもなりかねない。勝てなくは無いけど相手は真祖の吸血鬼（ハイディライトウォーカー）だ。息の根を止めるのに一苦労しそうだ。何より…しつこそうだし。

なによりも……見た目が１０歳前後の幼女だからヤリ難いったらない。せめて２０歳前後だったら少々の配慮だけして叩きのめせるんだけど…。ああ、詮無いことを考えてるな。こんな考えは意味がない。

「次の書類は……はぁ、アレでは懲りなかった、ということか？これは…」

書類には連合の元老院が［紅き翼］の、というよりもアリカさんの所在を探しているとある。元老院の老害共はケルベラス渓谷の一戦だけでは何も学ばなかったということか…。いや、あの場に居たのは元老院の一部の者達で全員ではなかった。

「…この際、一度、徹底的に叩き潰す必要が出てくるかもしれないな」

はぁ…ん？それこそ俺には関係ないことだ。まぁ連中が俺個人にターゲットを絞り込んできたのなら相応の対応をしないでもない。それにしても七百年ほど前はもう少しマトモな政治を心掛けていたと朧げながら記憶していたんだけどなぁ。

長い年月で中枢の権力者達の大多数が腐敗…してしまったということなのか？長過ぎる歴史を持つことで凝り固まった固定概念と、くだらない意地（プライド）を懐くことになったために何の益にもならない屈辱を晴らそうとしているのか。

「煩わしい…が、潜伏している俺達が今、手を出してしまっては元も子もない」

周りを嗅ぎ回る犬共が居ると思うと不愉快な思いにさせられる。

それもこれも俺が下手な好奇心を出して面白そうだからって理由で戦争に加担した結果がコレだもんな。やっぱり俺は裏から手を回すほうが性に合ってるかもしれないなぁ。

「面倒だ、ああ、面倒だ、面倒だ…」

…センス、無ぇなぁ。軽く表舞台に出て、軽く国家規模のことに手を出すと、いつも面倒なことになる。俺も懲りないねぇ。元老院のことをとやかく言えないかも。アハハ…。

「マズイ…鬱だ…」

この俺が奴らとドッコイドッコイだと…言うの、か？激しく鬱だ…。マジで勘弁。確かに年齢は、この世界の誰よりも上だけど俺は奴らほど腐ってない。俺は家族達が無事ならば、それで満足なだけだ。割とコレって自己満足なんだけどね？実は。

はぁ…。やめッ、やめッ！こんなこと考えても何の得にも成らない。もっと楽しいことを考えよう、うん。そうしよう！

「そうとなれば喫茶店の準備でもしよう…。まだそのほうが有意義だ」

そう言って葵は机の上にある書類に必要事項を記入して京都府店の喫茶店開店準備を進め始めた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第二十八話「解析結果と昼這いと開店準備と」（後書き）

ここからはザッと省いて原作開始まで年単位で話しを進めて行きたいと考えています。
そろそろ一話で話しをまとめる技術も身につけないと主に作者の指に被害が来そうなので…。
具体的に言うと休日に長時間タイプ打ちしているとツリそうなんですよ…。
起承転結を一話で、それも一万文字前後で表せるようになるのが今のところの目標ですかね？
アクマで趣味で書いてるんで、すぐには無理ですけどね！！アハハッ！！

では、皆さん！また次回！チャオッ！

第二十九話「橋渡しと喫茶店開店とクールな少女と」（前書き）

今回のテーマは”リクエスト”です。
その理由は後書きで！
では、続きです！どうぞ！

１０／２４誤字修正。

第二十九話「橋渡しと喫茶店開店とクールな少女と」

――京都府店喫茶クレイドル店内…。

Ｓｉｄｅ　葵

スクナ復活の事件から1年が経った。あの後俺は、ここ京都府の一角に喫茶クレイドルを新装開店させることができた。半隠居生活の始まりだった。

京都での開店準備の時。あの魔法大戦の終戦直後ということもあり異端とはいえ傍から見たら西洋魔法使いと変わらない俺達は歓迎されなかった。そのせいで東洋魔法使いの一部の者達からは俺が店を出すことに割と強い反発を受けたこともある。

まぁその時に今の関西呪術協会の長が穏健派と一緒に仲介してくれたから大事にはならなかったんだけどね。まぁその代わりに長から頼まれたことが…あるんだ。その頼まれたことというのが…現近衛家当主の娘と詠春との橋渡しのことなんだ…。

何が悲しくて独身の俺が人の結婚の世話までしないとイカンのかね？下手な借りを作りたくないからキッチリ仕事は果たしたけどさ。とりあえず婚約することに詠春は同意してくれた。本人も満更じゃなさそうだったし。

でも今、詠春は「ナギ達のこともあって結婚に集中できない。このままでは相手に失礼だ」との理由で居ない。まぁ結婚することには乗り気と言うか受け入れてくれているみたいだ。いや、実際、近

衛の姫さんって美人さんよ?詠春も奥さんになる人が美人さんで鼻が高いだろうね。婿だけど…。

美人さんは家族の皆で見慣れてるからどうってことは無いけど、やっぱり彼女が欲しいなぁ。できれば同い年の我侭ボディの可愛い感じのおんにゃのこを希望したい。

…よく考えなくても無理じゃね?同い年の、って何だよ…。家族を除けば最も歳が近いのは、あの吸血鬼幼女(エヴァンジェリン)じゃんか…。幼女は、愛ではするけど異性としては…ムズイわー。俺にはハードルが高すぎる気がする。俺は勇者じゃないんだ。

また、どうでもいいことを考えてしまった。反省。

――カランコロ～ン♪

「いらっしゃい、空いている席へどうぞー」

そんなことを考えていると客が来たようだ。俺は軽く出迎えて空いている席に座ってくれるように促した。開店してまだ1年も経ってないけどご近所の奥様方や学生さんの間で口コミで徐々に集客を増やしていってるんよ。

当店自慢のケーキセットは今も人気商品です♪来訪されるお客様に快適な癒し空間をご提供することを常に心掛けておりますよ♪

さてと、今日もマッタリと仕事しますかねー。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――京都符店喫茶クレイドル店内の一室…。

Ｓｉｄｅ　ミリエール

主様とぉ、日本の京都でまたお店を出して幾月年経ちましたわぁ。私達ぃ精霊から見たらほんの瞬きのような時間でも人間の方達にとってはそうではないのよねぇ。特に変わったことと言えばぁ…うふふ～♪詠春さんがご結婚なさったことかしらねぇ？

「ああいう衣装をシロムクというのでしたっけぇ？結婚衣装は、形は違うけど純白なのは殆んど共通なのですのねぇ♪」

子供も生まれて…あぁ、可愛い女の子なんですよぉ♪今３歳で名前は木乃香（このか）ちゃんって言うの。笑顔が素敵な女の子でしたねぇ♪いつの時代も子供は可愛いものですわぁ。新しい命の誕生は私達精霊としても歓迎していますものぉ。

「無垢なる魂に幸あれぇ。なぁんてぇ、抱き上げた時に昔の癖で言ってしまったわぇ。うふふ♪」

生命の輝き。無垢なる魂の輝き。未来への希望の輝き。様々なものを感じさせてくれるわぁ。本当にぃ、いつ見てぇ、感じてもぉ飽きませんわねぇ。小さくとも確かな輝きを、そこに感じられるのですからぁ。

「それにぃ片鱗だけだけどぉ、なかなか強力な魔力を宿しているよ

うですしねぇ…。あの子の将来が心配だわぁ」

近衛の血筋というものなのかしらねぇ？強過ぎる力はより強い力を自然と呼び寄せてしまうものですからねぇ。本人の限界を迎える前に理解ある守り手が現われれば問題は半減するのだけどぉ。それを見つけられるかはあの子次第ですものねぇ。

私はぁ主様と共に在ると決めた時から…。主様の守り手になることを決めた私達は世界に漂う一精霊としての役目、世界の調和と調整の機能を破棄せざるを得なかったのですけどぉ。…後悔はありませんねぇ。

そのおかげでぇ、この世界との繋がり（ライン）は途切れてしまっていますけどねぇ。今は主様との間にぃ切っても切れない私達だけのラインがありますからぁ問題ないんですぅ。寧ろぉ今までよりも心地いい気持ちがするのよねぇ♪

「あの子の隣に良き守り手が現われることを精霊と悪魔、そして時の流れに願いますわねぇ」

私はぁ役目はなくなっても生命の誕生を祝福する私の気持ちは変わりませんねぇ。そう、喜びを感じることは変わりません…。

生命の連鎖…進化と退化の螺旋構造…。私の意識の根底にあったモノ。嘗ての無力な私が最優先に実行してきた役目。生命を見守るだけの小さな、小さな精霊の一柱…。

でもぉ♪その役目から開放された今では優先順位がまるで違うものですけれどねぇ♪主様ぁ、私ぃミリエールは今も昔と変わらず、お慕いしておりますわぁ♪やっぱりねぇ精霊とはいっても女の子に

は変わりないのよねぇ♪

「命短し…短くは無いのだけどぉ…恋せよ一乙女（精霊）、という言葉もありますしねぇ♪」

私の命尽きる、その時まで主様と共に在りますわぁ♪なぁんてぇ♪♪照れちゃうわねぇ。鏡を見るまでも無くぅ私の顔が真っ赤になっているのがわかるわぁ。うふふ♪

「ミリー！ごめん！ちょっと手伝ってー！」

「ッ！はぁい！今、行きますわぁ！」

主様がお困りのようですわぁ。すぐに行きませんとぉ！この時間ですとお客様が沢山来ているのかもしれませんねぇ。

私がぁ今居る部屋を出てお店のほうへと駆けつけたら、店内がいい感じにお客様で込み合ってきていましたぁ。今日もなかなかに繁盛しているみたいですねぇ♪いいことですわぁ♪

「ごめん、ミリー。お休みなのに呼んじゃって…。って、なんか顔が赤いけど…調子悪いの？」

「ッ！？だ、大丈夫ですわぁ。心配ありませんよぉ。うふふ♪」

まだ顔の赤みが引いてなかったようですわねぇ。少し恥ずかしいのとドキッとした気持ちで焦りましたわぁ。それにお慕いしている主様のことを考えている時に呼ばれたので嬉しかったのかもしれませんねぇ。

今も赤みが引くどころか少し増して顔はニヤけているかもぉ♪恥ずかしいわぁ。

「そ、そう?それじゃホールのほう任せるね。…本当に大丈夫なんだよね?」

「はぁい♪それと本当に問題ありませんわぁ。主さ…店長はぁ、お仕事に戻ってくださいなぁ」

主様も心配性ですねぇ。精霊の私達が熱や風邪にかかるわけがないですのにねぇ。でも、そのお気持ちは大変ありがたく思いますわぁ。

因みに今回からお店で主様のことを呼ぶ時は“店長”と呼ぶようにと言われましたのよぉ。主様曰く「今まで何かが足りないように感じていた。それは…」ということらしいですわぁ。要するに店長という音の響きが良いらしいという理由からしいですねぇ。

私はどちらかと言うと“マスター”とお呼びしたいのですけどねぇ。主様ったらぁ「それは何か違う…」って仰るのですよぉ。いいと思いませんか?マスターって。なんだか、こう…引き締まる感覚がして。…ダメかしらぁ。

「うん、わかった…。本当に無理はしないでね?」

「はぁい♪」

さぁて主様…店長のお手伝いを頑張るとしましょうかぁ♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ミリエール

――喫茶店クレイドル仕事場兼自宅…。

Ｓｉｄｅ　葵

突然だが今日のお昼頃、つまりつい先程のことだが…なんと言うか、その…。いや、うん、率直に言おう。

「襲撃に遭ったんだ…。それも友人と信じていたヤツに」

「襲撃とは穏やかじゃないな、アオイ。折角、その友人が遥々京都まで来たと言うのに」

お前の言う友人というものはお昼を食べてるヤツに行き成り拳骨を食らわせるのか？コラ＃

「うっさい、ガトウ。…で？他の奴らはどうしたんだよ」

「ああ、ジャックはアッチで適当にしているさ。アルは…麻帆良だったか？に行っている。詠春も一緒だ。京都に来ているのはそれ以外のメンバーとアリカ様。…そして“もう一人”だ」

もう一人？…おいおい。ちょっと待てよ…。ガトウが敢えてここで名前を言うのを濁しやがった？まさか、また厄介事じゃねぇだろうなぁ？いやいやいやいや！まだ、そうと決まったわけじゃない！希望はまだある！？

「ちょっと待とうか、ガトウ？お前が物事を濁して言う時はいつも厄介事を頼みに来るように感じるんだが？」

「そいつは誤解だ。俺がお前に頼むのが厄介事しかないだけだ。厄介事意外は俺のほうで処理している」

「ナチュラルにひでぇな、お前は！俺は半隠居しているって言っただろうがッ！厄介事は勘弁だぞ！？」

こいつ…ッ！なに欧米風に「ヤレヤレ仕方ないヤツだなぁ。Ａｈａｈａｈａ！！」みたいに肩をすくめていけしゃあしゃあ、と言いやがってるんだ？俺は半分隠居してるの！休眠期間なの！原作開始までマッタリしてるのーッ！

「まぁまぁ、そう言うな。今回のことはそう大したことじゃ無い…（ボソッ）はずだ。話しというのは、そのもう一人をしばらくの間ここで匿ってくれないか？と言う話だ」

「ちょっと待て、コラ。預かるじゃなくて“匿う”？どう考えても間違いなく厄介事じゃないか」

「さっきも言っただろう？お前に頼むのは程度の差はあれ、厄介事しか頼まん。…いい加減、諦めろよ」

だからその欧米風に「ヤレヤレ仕方ないヤツだなぁ。Ａｈａｈａ！！」みたいにやるのをやめろよな！マジでムカッ＃＃、ってくるわ…！！というより諦める云々じゃなくてお前が俺のところに厄介事を持ち込まなきゃいいことじゃねぇか！！

ちくしょー…。今回は仕方ないにしても次回からは断ってやる！必ず断ってやるぞーッ！！

「ぐぬぬッ！…わかった。その“今回の”仕事は引き受けよう。だがッ！諦めたわけじゃないんだからねッ！？勘違いしないでよ！？」

「お前はどこのツンデレだ…。正直言って少し気持ち悪いぞ？」

俺もそう思ってたところだから触れないでくれよ…。気の利かないヤツだなぁ。そんなだから結婚できないんだよ…。俺も結婚してないけどな！！

「すまん…。俺もどうやら疲れていたらしいな。…というか、ツンデレ？お前がその言葉を知っていたことに俺は驚きだ。……どこで知った？」

「……アリカ様を指してアルが言っていた。その時に意味も…」

「……あー……。コホンッ…。それで匿う対象はいつごろ来るんだ？」

アルか…。アイツなら、なぁ？そんな無駄なことを知ってるかもしれない。何気に使うか、わからない、いらない情報をワンサカと持っているからね。

で？その人はいつ頃来るんよ？遅くなるようならご飯の準備とか部屋の用意とか色々しておきたいんだけど…。

「ん？…ああ、もうすぐのはずだ。俺は先に話しを通しに来ただけだからな」

――コンコン。

ん？来たのか？

「開いているよ、入ってきて」

「失礼します。主にお客人らが来ましたぞ。こちらにお通ししますか？」

あら？マリーったらちょうどいい時に来たね。それにしても客人？ガトウが言っていた人が来たのかね？……全然関係ない人だった場合どうしようか？

「おお、着いたか。アオイ、来たようだ」

「ふむ…【…マリー、誰が来た？…】」

【…はッ、ナギ殿とアリカ殿、タカミチ少年。それと見慣れぬ少女が一人でした…】

「…よし、マリー。ここへ案内してやって。その後でいいからお茶とお菓子を人数分よろしくね」

「御意。では、すぐに。失礼します」

あとはここに来るのを待つだけだ。…さて、“見慣れぬ少女”ねぇ？……誰？マジで思いつかないんだけど…。ハッ！？まさか主人公が生まれた！？いやいやいやいやいや！！！！まだ早い！早いでござるよ！！

だいたい“少女”だ!!主人公は確か男の子だったはずだ!!…
……それとも俺が関わったせいで状況が変化した…とか、か!?!
!?やばいヤバイやばいやばい!!その通りなら俺は致命的な失敗
をしたことになる!!

「相変わらず、お前のところは人材が豊富で羨ましい限りだな」

ハッ!!イカンッ、イカンッ!!どうやらイヤなことを想定して
混乱に陥ったようだ。…なんだ?さっきは何を言われた?…ああ、
そうだ家族のことだったな!!

「当たり前だろ!俺の家族(ファミリー)だぞ?半端なのは居ないよ!」

「その言い方だと、まるでマフィアだな…」

「貴様…!言うに事欠いて俺の家族を一マフィア（犯罪者）だと言
うのかッ!?」

「そんなことは言ってないし!!お前の怒りの沸点が俺にはわから
んよ!!」

イカンな…。まだ、混乱から立ち直ってなかったようだ。普段の
俺よりも沸点が低い位置にあったようだ。反省、反省…。

「すまん、ガトウ。つい、お前を亡き者にするところだった。……
（ボソッ）惜しかった」

「勘違いした言葉一つで俺を殺すなよッ!?というか!今“惜しか
った”って言わなかったか!?言ったよな!?」

「ズズー…。ガトウ、何を騒いでいるんだ？ほら、お茶でも飲んで落ち着けよ」

ああ？何を騒いでいるんだ？俺はお茶を飲んで、さっきの混乱を追い出して立ち直るんだからジャマだけはするなよ？というよりお前もお茶でも飲んで落ち着けよ。いい加減お前も歳なんだからさ。高血圧になっちゃうぞ？

「さっきの話しが無かったことにされている！？」

「だから落ち着けというに…」

―コンコン。

お？もう来たか。

「主。お客人をお連れしました」

「ああ、入ってくれ。ほれ、ガトウ来たぞ？席を寄れ」

「はぁ…。わかった。もう、どうでもいい」

堂々とソファーの真ん中に座ってるんじゃないよ。他の人が座れないだろうが。ああ、もう来た。ほら急げっての！ああッ！！忘れてた！女版主人公ーッ！？！？！？ヤバイ…マジでドウシヨウ？？？

「失礼します、主。さぁ、皆さん、こちらの部屋へどうぞ」

「おう！アオイ、久しぶりだな！元気にしてたか？」

ナギに…。

「うむ。アオイ、久しぶりだ。相も変わらず壮健のようだな」

アリカさんに…。

「アオイさん、お久しぶりです。お元気そうで何よりです」

タカミチ君…。

「……」

それに…誰？あ、あれ？この子…。

「ほら、姫子ちゃん。コイツが話してた俺の仲間のアオイだ。ちゃんと挨拶しろって」

「そうじゃぞ、アスナ？しっかり挨拶するのじゃ」

二人に促されてちょこんと顔を出してきた髪をツインテールにして瞳がオッドアイの…アリカさんがアスナと呼んでいた少女。んん？アス…ナ？アスナーッ！？なんだ！そうか！そうなのか！！このやろう！焦らせやがって…！！焦って損したわ！

マジでよかった…。決定的な過ちじゃなかった…！本っ当によかったよぉ。

「……こんにちわ」

あ？ありゃ？挨拶が終わったら二人の影に隠れちゃった？恥ずかしがり屋さんなのか？原作の元気いっぱいの女の子の印象が強いから意外な気持ちになるな。解放されて間がないのかね？

「ハハ、すまねぇな、アオイ。こいつ人見知りなもんでよ」

「あ、ああ。それは構わないんだが…。お前らいつの間に子供なんてできたんだ？」

「「……」」「「プッ」」「……？？？」

黙りこむナギとアリカさん。噴き出すガトウとタカミチ。状況がよくわかってないヒロインのアスナ（？）と思われる少女。

アスナのことを今まで聞いたことないから、咄嗟にこう言うしかなかったんだが…そんなにおかしなことを聞いたか？見ようによっては子連れの夫婦に見えなくもないと思うんだが…。

「え？え？え？俺、何か間違えたこと聞いたか？」

「「ブハッ！アハハハハハッ！」」

「「……」」「……？？？」

流石に不安になって再度聞いてみたんだがガトウ達、二人はもう我慢できなかったらしく腹抱えて笑い出した。ナギとアリカさんは今も沈黙を守っている。多分何を言っていいのかわかってないんだろうなぁ。

アスナは…わかってないだけだな、うん。子供だしね。わからなくて当然か。さてと、そろそろ、ここで仕上げだな。おまけに少しリップサービスもしておこう。

「ガトウもタカミチも何で笑うんだ?え?2人の子供じゃないの?でも…アリさんに似て綺麗な子じゃないか。目元なんか可愛らしいし…」

「……ポッ」

あ。なんか少し頬が赤くなった?クールな少女がポッとする姿を実際に見られるとは思わなかったなぁ。そしてそれに反応したのが他の面々。

「「ッ!?!!??」」

ナギ　と　アリカさん　は　こんらん　した。

……みたいな感じで2人は驚愕したようになっていた。

「しし、し師匠!あの姫子ちゃんが照れていますよ!?」

「落ち着け!タカミチ!こ、こういうことくらいで慌ててはいけないよぉ!?」

まず、お前が落ち着け…。声が上ずっているぞ、ガトウ。お前ら大げさなんだよ。たかがクールな女の子が表情を少し変えただけだろうが。何をそんなに取り乱してるんだよ…。

――コンコン。

「失礼します、主。お茶をお持ちしましたぞ」

「うん。マリー、ありがとうね」

頼んでおいた人数分のお茶と、うちのケーキが皆の前に配られていった。食器を置く時に音を立てないようにするのは当然の技術だったりするのは、この際どうでもいい話しだったり…。

「それでは、また何かありましたらお呼びくださるよう」

「はいはい。またね」

マリーが退出してから俺は落ち着いた皆とナギに目線で話しの続きを促した。

「…アオイ、その子はアリカと同じウェスペルタティア王国の王族の血を引いてるんだ。名前はアスナ・ウェスペリ…ペリー？」

「バカ者。忘れたのなら黙るが良い。アオイ、この子はアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。妾の同族だ」

ナギ？名前を覚えられないなら無理に説明しようとしなくてもいいんだよ。俺は思わず可哀想な子を見る感じで笑いかけた。

それにしてもアリカさんもちょっと的外れなことを答えているんだよな…。名前とかはまぁいいとしてもこの子が“何なのか？”を聞きたかったんだけどな。いや、これは詳しくは話したくないという表れなのか？

「はぁ…まぁいいか。それで？その姫子ちゃんがどうしたんよ」

確かこの子は始まりの魔法使いの末裔で後継者だった気がするんだよなぁ。そんな彼女を何故今、俺のところに連れてくるの？俺ってこの子に関してはノータッチで来たから関係なくないか？どこでフラグを立てた？間接的にか？

「なに、妾達は所用で遠出をしなくてはならなくなっただけじゃ。だが、そこにこの子を連れて行くわけには行かない。だからアオイにしばらくの間この子を頼みたい」

所用…所用ねぇ？それに関しては聞く気は全く無いけど。とりあえず小さな子を残して行くんだから、その本人の気持ちを確認してからにして欲しいなぁ。行った後で泣かれるのとか勘弁なんだよ。子供が泣くのは耐えられんって。

とりあえず確認してもらうか…。

「ふぅむ…。頼まれるのはいいけど、肝心の姫子ちゃんが、そのことに同意してくれるかな？イヤがる子に、ってのは気が進まないんだけど…」

「それならば心配ないだろ」

心配ない、ってナギよ…。軽く言うなよ。子供を預かる、ってのは、現実にそんな簡単なことじゃ無いんだぞ？大体…ん？なんだ？何かに服の裾が引かれているような？

――クイ、クイ。

「ん？どうした、姫子ちゃん？」

机の向かいでナギとアリカさんが「早速、行ったみたいだぞ？」とか「そうじゃな。いつになく積極的じゃ」なんて言っている。俺は普段のこの子のことを知らないから本当に人見知りなのか疑わしい思いだ。

それで当の姫子ちゃんはというと俺の服の裾を掴んで見上げてきている。

「……アスナ」

「は？」

いや行き成り自分の名前だけ言われても俺はどうしたらいいのか、わからんのだけど…。無表情のクールな少女の考えを読み取るのは至難の業ですよ？

「……アスナ」

今度は自分を指差して自分の名前を言ってくる。

ん？自分を指差して？んー…？これはもしかして…？

「アスナ？…ああ、ああ。はいはい、名前で呼べってことな？」

「…こくん」

小さく頷くアスナ。どうやら正解だったようだ。何が彼女の心の

琴線に触れたのか知らないが俺はどうやら彼女を名前で呼ぶことを許されたらしい。何はともあれ名前を許されたなら、こちらも相応しい対応を取らなければならない。

「わかった、アスナ。俺のことは葵でいいぞ」

「……アオイ…あおい？…葵。…わかった」

「おー、ちゃんと発音できてるじゃん。アスナは偉いなぁ」

いーこ、いーこ♪な～で、な～で♪わー、子供の髪って何でこんなに柔らかいんだろう？しっとりサラサラだよ。うわッ！？髪の毛、細ッ！！綺麗な髪しているなぁ。

「……クスッ」

お？

「なんだ？笑えるじゃないか。いいか、アスナ？女の子は笑え。笑顔で居れば女の子の魅力は何倍にも引き出されるんだ。…ええと、わかったか？」

「……？わかった（ニコッ）」

本当にわかってるんかね？答えるまでに間があったぞ。それでも表情はニコニコしているから…うん、いいか。そんな細かいことは。

「くっくっく♪そうだ。やればできるじゃないか。今のアスナはとっても可愛らしいぞ」

「……♪♪♪」

ふぅ、嬉しそうにしてからに、この子は…。

「…と、いうわけで、だ。コレで問題ないことがわかったか？」

「わかったか？ってナギ、お前なぁ…。まだ肝心のアスナに聞いてない…」

「……いいよ」

「は？いいよ、ってここに居るのが、か？」

「……こくん。葵と一緒なの、そんなにイヤじゃ…無い」

「あ、ああ、それはどうも？」

なんだか俺が判断に困る理由で当の本人の意思は決まったらしい。やっぱりこういう子の考えを読むのは難しいなぁ。まぁ可愛いからいいか…。

「決まりじゃな。それではアオイよ。アスナのことくれぐれも頼んだぞ？」

「ん？ああ、それは保障するけど…もう行くのか？」

「うむ。何事も速いに越したことは無い」

まだ来たばかりなのに忙しいこって。もうちょっと落ち着いて計画を立てておけばいいのにね？生き急ぐのは感心しないな。人生余

裕を持って行動しないと近い内に窒息しちゃうよ。

「そうか。それは残念だな。うちの人気商品であるケーキだったんだけど。急いでいるなら仕方がないな」

「な…に?…アオイ、それは…」

マリーに頼んでおいたケーキが無駄になっちゃったなぁ。どうしよう?そんなことを考えていたら心なしか目をキラキラさせていたアスナと目が合った。…これは期待か?催促されているのか?女の子だから甘い物が好きなのか?

「…アスナ、ケーキは好きか?皆は食べずに行くみたいだから全部やるぞ」

「…好き。葵、ありがとう♪」

「え?あの?ケーキは…?」

あれ?アリカさんまだ居たの?ナギとガトウ、タカミチが部屋の扉の前で待ってるよ?早く行くんでしょ?ほら、行かないと、ね。

「アリカ?何してるんだ?早く行くんだろ?」

「アリカ様、参りましょう。時間がありません」

「師匠の言う通りです。行きましょう、アリカ様」

「…え?あ、ああ、わかった…。すぐに行く……クスン」

なぜに泣きそう？アリカさん…。ケーキを食べたかったのかな？いや、まさかね。アリカさんに限ってそんなことで泣きそうになることなんてないよな、うん。

そうは思っても肩を落としたアリカさんの背中が…なんだか哀愁を感じさせるんだけどなぜ？あー…。あれか？お見送りが無かったことが寂しいのか？ふぅ、仕方ないな…。

「いってらっしゃ～い。ほら、アスナもいってらっしゃい、ってしな」

「……こくん。ナギ、アリカ、ガトウ、タカミチ。…いってらっしゃい（ニコッ）」

うんちゃんと笑顔で送ることができたね！花丸をあげちゃおう！オマケに鉢植えと蝶々もつけちゃおうかな！そんなアスナに見送られればアリカさんだけじゃなくて…。

「「「「…行って来ます！」」」」

皆が笑顔で出かけられるよな！子供の笑顔には勝てないよな。どことなく嬉しくなるよ。それが美少女ならば当然だね！

さてナギ達が迎えに来るまでアスナの面倒をみるとしますかね。

「行こうか、アスナ？家の中を案内するよ」

「……こくん」

アスナは小さく頷いた。

それと帰り際にナギが俺に何か伝えることがありそうにしていたが思い出せなかったそうだ。まぁ直ぐに思い出せなかったということは大したことじゃ無いんだろう。俺は気にしないことにした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第二十九話「橋渡しと喫茶店開店とクールな少女と」（後書き）

いつだったかリクエストを頂きましたので今回の構成にしました。
ハッキリ言ってやるなら今しかないと思ったんです。
原作突入したら応えられないですからね。
リクエストの部分は秘密です。どうでしょう?ご期待に応えられましたか?
次回もちょっとだけ登場予定です。

ではでは～!また、お会いしましょう!

第三十話「歓迎会とファッションショーと相談？と」（前書き）

今回の話しは物語とは余り関係ないかも…。
ただの繋ぎ兼趣味です。

第三十話「歓迎会とファッションショーと相談？と」

――京都府某所某店内…。

Ｓｉｄｅ　葵

「……どうして、こうなった？」

今、まるでファッションショーの会場のように飾り付けされた店内で葵は呆然としながら呟いた。飾り付けは華やかに。店内の中央には少し低いがモデルが歩く舞台が用意されてある。店外の扉には“本日臨時休店”の札がかかっている。

「……なぜ、こうなった？」

葵は、まだ状況を理解していない。いや、したくないのかもしれない。周りにはショーが始まるのを心待ちにしている彼が愛する家族の皆が小声で雑談しながら大人しくしている。

そして舞台裏ではモデルとなった少女を数人で着せ替えの準備をして慌しくしている音がここまで聞こえてくる。そこからは「可愛いわぁ♪」やら「素材がいいわね～♪」などの、のんびりと、おっとりとした口調の声が2つほど、葵の耳に特に聞こえてきていた。

「……どうして、こうなったんだ？」

三度、葵は自分の疑問を口に出した。そしてそんな彼を不憫に思ったのか、声をかける者も確かに居た。

「我が君…。お気を確かにお持ちください。皆のこれは一過性のものですので」

「左様です。少々、はしゃいでいるだけです。気にしていては、それこそ気が持ちませんぞ」

「ユエ、ハオ…。そうだね。今更、気にしたら負けだよな」

そうだよ。ハオとユエの言う通りだ。今更こんなことで戸惑ってどうするんだよ。今でも月に数回付属魔法球［桜の苑］で宴会しているんだから、これくらい…どうってこと無いさ！

そもそも今回の事態。コレというのも昨日ナギ達から預かったアスナが…というよりもアスナを見たミリーが原因だった。彼女はア

スナを発見した途端に「可愛いわぁ♪」と言って抱きついて構いだしたのだ。

その光景を俺の目を通して見ていたリビエラも、こちらに来たいらしく召喚するように頼まれたりもした。序でと言っては何だが他にもオリビエ達を一緒に召喚したんだ。

アスナのことを他2人は特に関心は持ってなかったんだがミリーとリビエラ…この2人は違った。彼女達に俺がアスナを暫くの間、家で預かる旨を伝えたら歓迎会をしようということになったんだ。ここまでは俺も特に気にしなかった。歓迎会には賛成だったからな。

でも、歓迎会はその日には行わずに次の日に行うことを聞かされて流石に俺も不思議に思ったんだ。だって、そうだろう?アスナを預かることを決めたのが昼過ぎだったんだ。別にその日の夕方にでも開催してもいいんだからな。

おかしいと気付いた時には既に遅かった…。今朝、目が覚めて店に顔を出してみれば…そこはファッションショーの会場になっていた…。スポットライトに電飾、そして、舞台…。会場と化した店にはそれらしい音楽も流れているんだ…。

そして、あれよあれよの内に気が付いたら今、俺は舞台最前列に陣取った状況になっていた。時刻は準備が長引いているみたいで、もう10:00時過ぎになっていた。まぁクールなアスナは今のうちでしか拝めないから、ある意味ラッキー(?)なのかな…。

この状況の経緯を整え考えていたら今まで室内を照らしていた照

明が消えていた。どうやらショーが始まるようだ。

「レディース（沢山♪）、エンド、ジェントルメ～ン（葵ちゃん一人♪）！長らくお待たせしました～。本日は当会場～、アスナちゃんのファッションショーに～、ようこそお出で下さいました～！」

「今回のイベントの目的はぁ♪ずばりぃ！アスナちゃんの歓迎するのが目的でぇす♪皆もイベントを楽しんでねぇ♪うふふ♪アスナちゃんは、とぉっても可愛らしいのよぉ♪」

「それでは～、ファッションショーの開催です～！アスナちゃ～ん♪ど～ぞ～！」

カーテンが引かれて軽快な音楽が流れてショーが始まった。そして舞台の奥から出てきたアスナはゆっくりと歩き出す。彼女が着ている服は昨日の内に有志の皆から集ったものの一着だ。普段はクールで無表情の彼女だが今は多少ぎこちないながらも口元が微笑んでいる。

「へぇ…。なかなか可愛いんじゃないか？元の素材がいいからかね？」

「ふむ。しかし、我が君？童女（わらしめ）なのだから可愛らしいのは当然なのではないのですか？」

まぁハオの言うことにも一理あるんだけどね。子供って無条件に可愛いって思うものだからさ。ただ最近は生意気な子供が増えてきたらしく見た目の愛らしさと中身が比例していない、なんてことが多々あるみたいだ。

「はっはっはっ、姉上は素直ではないな。可愛いなら可愛いとアスナ嬢のことを褒めてやれば良いではないか」

「む？何を言うのだ、ユエ。私はいつでも正直なつもりだぞ？」

それはつまり、アレか？ハオは「アスナ嬢が可愛いのはわかりきったことではないか。何を今更なことを？」、と言いたいのか？だとしたらハオさんや？どことなく言葉が伝わってないと思うのですが…。日本語って難しいぃぃぃぃぃッ！！

「2人とも？もう、アスナの歓迎会（ショー）が始まったんだから、楽しもうよ」

「そうですな、今は楽しむとしましょう」

「はい。イベントを楽しむことにします」

と、とにかく！今は歓迎会という名のショーを楽しもう！クールアスナのこんな機会なんて二度とないんだろうからな。

ショーが順調に進んでいく中。フと浮かんできた疑問をユエが口にしてきた。

「ところで我が君？今回は何故に、このようなショーをミリー等は開催しようとしたので？」

「んあ？ああ、それは…。あー…。まぁ簡単に言えばアスナの着替えが必要最低限しかなかったから服を用意する序でに、ってね」

と、とりあえず誤解の無いように無難に表向きの答えを口にする

ぞ。一応コレも事実なのには代わり無いからな。というよりもアイツらは何を考えているんだ?もうちょっと着替えとか持たせろよ…。

ここに来た時に着ていたワンピース。それと小さなカバンに入っていた着替え。キュロットタイプが一着、チェックのスカートタイプが一着。最後に…ウサギさんのアップリケがあるパジャマ。それぞれの服に見繕われたと思われる下着類が着けているのも合せて四着。

なに、コレ?小旅行じゃないんだから、もうちょっと持たせようよ…。俺に預けるくらいだから、たかが2、3日の日程じゃないんだろうが。アスナも女の子だ。可愛い服に興味があるはずなのだ。せめて、あと二着…いや、五着は持たせても罰は当たらないだろう。

それも今回のことでアスナは数十着の衣服を一度に手に入れることができたようだけどな。ここから見ている限り本人も無意識にか、ぎこちない口元とは違い目元は少し嬉しそうに見て取れる。

「なるほど。……それで本当のところは、どのような?」

「ユエは察しがいいね。……本当のところは、ミリーとリビエラの半分趣味みたいなものだ。2人は可愛いモノが好きだからねぇ」

「ふむ、そういうことですか…。しかし、アスナ嬢が、よくこんなことに参加しましたね?私が思うに彼女はこういうのをイヤがるように感じましたが」

「さぁ？アスナ自身も何か思うことがあったんじゃないのかね。…意外と食べ物で釣られたりなんかしてな？…なんてな。クックックッ」

ちょっと高いところのお菓子を取ろうとピョンピョン跳ねて取ろうとするクールアスナ…。

やべぇ…ちょっとした想像だったけど、なんか、これって…可愛くない？どんなに頑張っても手が届かなくて無表情な目元が徐々に潤みだしてくる…。でも泣かないのよ？なんだか微笑ましくならない？俺は和むわぁ♪微笑ましくて。

ただの想像だけどな！

「我が君…。それが当たりと思われます。昨日の夜と今朝方にミリーとリビエラの2人が店の甘味をエサに、なにやら交渉を持ちかけているのを見ました」

「えー…？…ハオさん、それはマジですか？」

「……事実です。残念ながら…」

あの2人は何を勝手にうちの商品を勝手に取引材料にしてくれてるんだ？いや、この喫茶店自体が趣味でやっているから儲けは二の次なんだけどさ。それでも俺に一言があってもいいものだろう。ケーキの大半は俺が作ってるんだし。

あと…冗談で言ったことが半ば事実だっただけに俺は笑っていいのか怒ったほうがいいのか、わからなくなってきたよ。まぁ怒るよ

うなことじゃないから、こうして笑いながらアスナの晴れ舞台を見ているんだけどね。

でも、そうか…。あのアスナが…。

「…（ボソッ）オゥ、ジーザァス…クールアスナは食いしん坊キャラだったのかー…」

「は？くーる？すみませぬ…。良く聞こえなかったのですが何と言いましたか？」

「いや、なんでもない。なんでもないんだ…」

衝動的に口から出た言葉だから改めて聞かれても答えられません！隠すようなことは言ってないから聞かれても困らないんだけど敢えて言い直す必要も無いからな。

それにしてもアスナは、あと何着の服を着れば終わるんだろう。俺達が雑談しながらもショーが進んでいくんだ。もちろん、可愛い服で着飾ったアスナのことは俺の脳内フォルダにきちんと余すことなく記録中だったりする。

まぁ、それはいいとして、いつごろ終わるんだろうね？舞台を往復するアスナ…。これで２７…あ、２８往復目に入った…。心なしか、アスナの顔に疲れが見てとれるぞ？今気付いたけど、これってアスナの休憩とかあるのかな…？

それから１０分後、突然の休憩が入ることになった。余りにも不自然なタイミングでの休憩に皆も困惑を露わにしていた。その後、ショーは３０分後に再開。ラスト十着の服を着てショーは好評の内に終わることができた（？）。

皆…今日は疲れたよ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――喫茶クレイドル店内特設舞台裏…。

Ｓｉｄｅ　アスナ

「本当にごめんねぇ。休憩時間のことをスッカリ忘れてたわぁ…」

「そうね～？ついつい楽しくて忘れていたわ～。アスナちゃん～、ごめんね～」

歓迎会（？）が終わって、わたしの前に居る葵にミリーと呼ばれている女性（ヒト）…人？違う気がする。人にしては不自然…ううん、“自然過ぎる”気がする。世界に属する人には多かれ少なかれ必ず、どこかに生きる者としてノイズのようなモノがある。

それにわたしに謝罪する、もう1人の女性(ヒト)もだ。…たしか、リビエラと葵が呼んでいた人。この人は悪魔らしい。目の前で葵が召喚したのを見たから間違いは無い…はず…なんだけど。この人にもミリーから感じたような印象を受けた。

この2人（というよりここに居る人全員だけど…）からは自然過ぎて不自然なほどノイズを感じない。まるで世界とは乖離した人…。この世界に属していない、縛られていないみたい…な？彼女達は何者なんだろ？自分自身で考えたことに対して、わたしは…。

「……ありえない」

「うぅぅ…。だから、ごめんって～、謝ってるじゃない～…」

「アスナちゃん？お願いだから許してぇ。ねぇ？」

わたしが無意識の内に呟いた声に反応したのは2人。別のことを考えていて出た言葉だから彼女達のことを責める気持ちは当然、無い。でも休憩も無く続けたから疲れたのは事実。そして可愛い洋服を貰えたのも事実…。

彼女達の勘違いといっても誠心誠意の謝罪をしていることはわかる。だから許すことにした。このあとの報酬のケーキもあるし……。

「……許す」

「ありがと～♪アスナちゃん～♪」

「許してくれてぇ、嬉しいわぁ♪」

コレで良し…。それにしても不思議…ここは居心地がいい。ナギやアリカ、ジャック、詠春、それにガトウ、タカミチ。皆と居るのと同じくらい、ここは居心地がいい。どこも似ていないのに…不思議。

彼女達は人?と考えた時にわたしの頭の中に嘲笑とも取れる思いが湧き出てきた。

「……（ボソッ）わたしも人じゃ…無い?」

「…えぇ?」

「…はい~?」

「……なんでもない」

わからない、わからない、わからない……。

さっきまで、楽しい気持ちだったのに少し、このなんとも言えない考えがわたしの気持ちを暗くしていく。わたしは人?ただの魔法兵器?それとも……何の意味も無いモノ?わから…ない…。

「皆、お疲れー。アスナ、なかなか可愛かったぞ。…って、どうした?泣きそうになってるぞ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アスナ

――喫茶クレイドル店内特設舞台裏…。

Ｓｉｄｅ　葵

「皆、お疲れー。アスナ、なかなか可愛かったぞ。…って、どうした？泣きそうになってるぞ」

「……ぇ？」

ショーも終わったから俺達（俺、ハオ、ユエ）は舞台裏の控え室に顔を出したんだ。部屋の中には今回の首謀者の２人、ミリーとリビエラ。そしてアスナが居た。そこへ声をかけたんだがアスナが無表情なのに泣きそうに見えたんだ。意識、無意識にしているのかは知らんがな。

アスナは、そんなことを言われると考えていなかったようで小さく目を見開いてこちらを見てきた。俺の言葉を理解してミリーとリビエラもアスナのことをジッと見ていた。それでも、わからないようでチョコンと首を傾げて不思議そうにしていたけどね。やや、気まずいです…。

え？なに？この空気…チョット、こわい…。

アスナなんかさっきから俺をターゲットしたまま微動だにしないで見つめてくる。オッドアイの瞳からは何の意思も読み取れない。俺、何か変なことを言ったかね？なんとなく思ったことを言っただけだからなぁ…。もしかして、なんか癇に障ることを言ったの、か？

「……んで…」

「ん？なんだって？」

「……なんで？」

なんで？って…なんだ？あー…さっき俺が言ったことか？

「泣きそうに、ってことか？」

「……こくん」

んー…。なんで？って聞かれてもなぁ。

「いや、すまん。なんとなくアスナの顔が俺には、そう見えただけだ。勘違いなら謝ろう。すま…」

「謝らなくて…いい。……謝らないで」

は？謝らなくていいのか…。ということは別に気分を害したわけじゃないのか。え？じゃあ何で、こんなことを聞いてきたんだ？それとわかり辛いがショーの間は楽しそうにしていた。何で今は沈んだ雰囲気を纏っているんかね？

ここは一応、確認してみるか…。

「ふぅむ…。アスナ、歓迎会（ファッションショー）は楽しかったか？」

「……こくん」

ず、ずいぶん返答に間が空いたな…。でもまぁ本当に楽しかった

んだろうというのは雰囲気から伝わってきた。

ふむ…。歓迎会に不満があったわけではない、か…。これは別のことで不安を感じているということか？考えてみればナギの友人とはいえ、アスナは、まったく知らない人のところに預けられるんだ。不安に思うのも無理はないかもしれない。

さて、とりあえずは何か思うことがあるのかを聞いてみるか…。

「そうか。何か思うことがあるなら話すことだ。それだけでも…いや、違うな。人と意思を共有することで認識を新たにし、結果的に気持ちが和らぐこともある…と言いたんだが、わかるか？」

「……こ、こくん（？）」

すこし　アスナ　には　むつかしかった　ようだ。

頷くのに間が空くだけでなく首を傾げながらするとは…。なんとか理解しようとするところには好感が持てるな。だが理解してないなら、していないでそれでいい。俺の説明がわかり難いだけなのだからアスナは悪くない。

噛み砕いてブッちゃけて言うとするか…。

「……簡単に言えば他人に話せば楽になる、と言いたいんだ。ふぅ、歳を取ると話しが長くなってイカンな。…これは反省だ」

「……話す？」

「そうだ。何も無ければソレでもいいがな。…何かあるのか？」

さっきまでの話しぶりからアスナの心の内に“何か”があると思うんだが…。はてさて、何を考えているんだか。

アスナは何かを考えるようにして俯いていた。しかし、割と早く顔を上げて話してくれる。

「……葵から見たわたしは“何に見える”？」

「……は？」

「……何に見えるのか？と聞いた。答えて…」

「いや、すまん…。余りにも予想外のことを聞かれたんでな。さて、俺がアスナのことをどう見えるか、か…」

んー？質問が“何に見える？”か…。どういう意味かね。率直に言ってしまえばただの美幼女なんだが…。アスナは、そんな表面的な答えを聞きたいわけじゃないだろう。でもなぁ、俺から見たらアスナは本当にただの女の子なんだよな…。

それは俺を含めて家族の皆が、この世界から見て異物だからなぁ。いや、俺はいいんだよ？元々この世界の住人というわけじゃ無かったしな。ただ皆は違う。彼女達は俺という異分子を契約と言う繋がりで受け入れることで変質してしまった。

もうこの世界の住人とは言えないだろうな…。それでも彼女達は俺に着いて来てくれると言ってくれた。もうね？俺は嬉しくて泣きそうだったよ。一人じゃないっていいよね。

それは、ともかく今の問題はアスナのことか…。さて、どうしたものか…。

「……」

「…ん？あー、すまん。少し考えてしまったな。“何に見える”も何も、ただの少女だろう？まぁ多少特殊な能力があるようだが…。文句無しの美少…美幼女（？）だな」

「……それは……葵にはわたしは人間に見えるということ？」

はい？人間？“人間に見える”って、どういうことー？俺はアスナ自身を見て思ったことを口にしただけだからな…。ヒトか、そうじゃ無いかはどうでもいいんだが、アスナには大事なことなんかね…？さてさて、またもや、どうしたものか。

まぁ思ったことを言ってみて反応を見てみるのも有り、か…。良し…。

「そんなことは知らんよ。俺は“アスナ自身”を見て思ったことを言ったまでだからな」

「……？？？」

「つまりだな？アスナ自身が人だろうが、悪魔だろうが、精霊だろうが、何であろうが、アスナに変わりはない。と、言いたいわけだ」

アスナに比べれば俺達のほうが他の人の目には異常に映ると思うんだ。何せ妖怪化した剣の九十九神、陽月の姉妹。実体化した上級精霊の個体が三柱。爵位持ち級以上の力を持った悪魔が三柱。

仮とは言っても肉体を持った精霊や悪魔達。普通なら精霊と悪魔は相反する位置に居るはずなのに、ここでは家族として仲良く笑い合っているし、危険なことになれば協力して撃退する。外から見たら異常なんよ？これって。

「……」

なんだろう？アスナが俺の答えを聞いてからまるで穴が開きそうなほど見つめてくるんですけど…。なんなんだ、これは？まさか文句があるのか？俺の答えに不満があるということか？気持ちは言葉にしないと伝わらないんです！話しましょうよ、アスナちゃん！？

シマッタ…。あまりの沈黙についつい取り乱してしまった…。冷静に行こう、冷静に…ふぅ。…良し、もう、大丈夫だ。

「なんだ？文句でもあるのか？言っておくが俺自身が感じたことだ。謝罪はするが訂正はしないぞ？コレは俺の価値観だからな。それで文句があるのか？」

「ふるふるっ、ふるふるっ」

おう？ち、違うの？文句があるわけじゃ無いの？そして何をそんなに必死に否定を表すように首を横に振っているんだ？文句なんてとんでもないという意思表示か、これは？

「お、落ち着け、アスナ。それ以上首を振ると筋を痛めるぞ？」

「……こくん」

あーあ、頭を振り過ぎてアスナのツインテールが少し乱れちゃったじゃないか。綺麗な髪をしているんだからしっかりとしておかないと変な癖がついちゃうだろうに。やれやれ。

「それで何であんなことを聞いたんだ？理由くらいあるんだろ？」

「……それは…」

理由くらいは聞いてもいいかな？と思って軽い感じで聞いてみたんだ…。そしてアスナの口から語られる胸糞悪い内容に俺は無意識の内に苦虫を噛み潰したような顔になっていた。いや、マジで胃がムカムカする内容だった。

話しを簡単にまとめるとアスナは百年以上前から特殊な魔法兵器として一種の生体部品のように使われていたという話しだった。何もなければ意識を沈められ封印されて、いざ、事が起きれば覚醒されて儀式の部品扱い。子供にすることかね、これが。

あー、イライラする。表情を冷静に保つのが大変だわ、本当に。

でも、アスナが“何に見える？”と聞いてきた意味が少しわかってきた気がする。要するにアスナは自分が兵器なのか、ヒトなのか、それともただのモノなのか。と疑問に思ったわけだ。今までの環境が環境だっただけに、その考えは深いものだったんだろう。

かと言って俺にはそのことをどうしようもないわけなんだよなぁ。こういうのは助け出した本人（ナギ）からの言葉のほうが助け出された本人（アスナ）の心には響く確立は高いだろう。

でも自分を兵器かもしれないと認識をするとはなぁ。やってられ

んわ、マジで。

「はー…、なるほどねー…。それで“自分自身が何者か？”なんて考えたのか…」

「……こくん」

「アスナ…お前はバカだな…。ハッ！？…まさか！？ナ、ナギのバカがうつったのか！？」

「……ジー」

なんだよ？ちょっと重苦しい空気に耐えられなかっただけじゃないか…。そんなにジッと見るなよ。少しくらいふざけておかないと俺の精神がダークサイドに堕ちそうなんだ。俺はのんびり屋でいたいの。破壊者的な立場にはなりたくないんだ。だから見るなっての！

「悪かった…。だからそんな目で俺を見るな…。あー…ミリー、リビエラ？悪いけどお茶とケーキを人数分、持ってきてくれ。話し続けで喉が渇いた」

「はぁい、わかりましたわぁ♪」

「直ぐにお持ちしますわね～♪」

べ、別に誤魔化すために話しを逸らしたわけじゃないんだからね！？本当だからね！！話し続けで喉が乾いただけなんだから！！…

…うん、キモイね。ごめん。反省した…でも、後悔はない。

ふむ、冗談はさておき…。

「さて、と…。アスナ？」

「……なに？」

俺の言葉じゃ吹っ切ることはできなくとも少しは助けになるかもしれないからね。

いやー、言葉があるってすばらしい！全てを伝えるのは無理としても2割は意思を伝えることができるんだからね。大部分の7割はフィーリング。残り1割は無理。コレは絶対、無理。

可能とするならば無意識化の集団意識集合体にアクセスできれば、その限りじゃないけど…他人と意識が繋がり溶け合うわけだから二度と個としての意識には戻れない。そうなると人をやめることになるからお勧めしないね。……今はどうでもいいか。

「アスナのような悩みは誰しもが一度は考える類のものだ。それ自体は変なことじゃ無い。だが、アスナの、さっきの話しを聞く限りでは特殊な環境だったようだな？」

「……こくん」

俺にも自分は何なのか？って考えたことはある。“ネギま！”の世界に来る前、それも小学校低学年の子供の時にだけどな。今思い出しても恥ずかしい気持ちにさせられるわ…。

「それで他の人よりも重く受け止めて深く考えてしまったようだが

……。ハッキリと言うが、アスナ？その考えは殆んどが無意味だ」

「ッ！？……それは…」

必死に考えていたことを無意味と言われて動揺する気持ちもわからなくもないけど……無意味だよ。そんなのは考えるだけ無駄。人一人に対して“何か”の使命とか役割なんてないよ。そして、その“何か”を決められるのは自分自身しか居ない。

他人から与えられるものあるけど、それは与えられた本人にヤル気がなければ意味なんて毛ほどもない。無駄で無様で無意味だ。だが、まぁ考え頭を働かせることは悪いことじゃ無いな…。

「待て、待て、話しは最後まで聞け。考えること自体は悪いことでは無い。だが、行き過ぎてもいけない。いいな？一応、それは自己分析も兼ねた自我の成長にも必要だと俺は考えている」

「……成長？」

「そうだ。アスナは長い間、眠ることで過ごして必要になったら起こされて能力の行使を強制されていたのだろう？それでは自我が芽生えることは稀だ。成長も著しく妨げられる」

「……自我…」

実際、子供の時に他人（ひと）との触れ合いが満足にできないのは精神の成長によろしくない。多感な時期にこそ、人としての成長の下地ができるとも思うんだよな。それがアスナは悲しいことにできなかった。

人生の殆んどを封印され寝て過ごしていたとはいえ百年経っているんだ。自我形成のプロセスの一段階ができていないから感情も乏しく、上手く表現できない。人は環境が育てる、というのが俺の持論だ。

その点で言えばアスナは環境に恵まれていない。でも、同情はしない。それは必死に頭を働かせるアスナに失礼に過ぎる。こうしている間も彼女の精神は貪欲に成長することを求めている。アスナは未来を諦めてはいない。これは、アスナは無意識だがな。

…俺は嬉しい。若い者が成長に貪欲な、その姿を美しく感じるからだ。成長とは進化することだけではない。時には必要に応じて退化することもある。その一進一退の成長が愛おしい…。アスナは今、未来に向かって羽ばたこうとしているのだから。

「アスナは今…正確にはナギに連れ出されてからお前の中の時計の針は動き出したんだ。そして現状、初めて成長して自我の確立が急速に発達している状態と推測できる。アスナはそれに対処し切れなくて戸惑っているんだな」

「……戸惑っている…」

「情緒不安定なんて誰にでもあることだから気にするな、としか今は言えないのが正直なところだな。まぁそれでも敢えて言うなら…」

「……言うなら？」

そんな純粋な目で期待するように俺を見ないでくれ。自分の大人としての汚い部分まで見透かされているような錯覚をうけるから。これでも俺のハートはガラス細工のように繊細に出来ているんだ。

割れ易いんだぞ？

「自分を決めるのは自分自身。と、言ったところか」

「……自分を決めるのは自分自身…」

「それでも不安なら……そうだな。ナギやアリカさん、皆に聞いてみな。アイツらはアスナのことをアスナとして見てくれるはずだからな」

「……」

あとはアイツらが上手くやるだろうさ。ナギもアリカさんも、それに皆もバカでお人よしだからな。精々、可愛がってくれるだろうよ。可愛がり方は“それぞれ”だろうがな？くっくっくっ♪

「主様ぁ？お茶をお持ちしましたわよぉ♪」

「少し～、遅くなってしまいましたわね～。あら～？アスナちゃんどうしたの～？」

「あらぁ？あらあらあらぁ♪スッキリした顔をしていますねぇ♪主様ぁ？アスナちゃんに何をしたんですかぁ？」

「ミリーさんや？その聞き方だと俺が少女に手を出したみたいに聞こえるから…やめてもらえる？」

お茶が来たと思ったらコレかい？ミリーさぁ？せめて“何かした？”って聞いてくれないかな…。“何をした？”って、したことを前提に聞かれるのは余り気持ちのいいことじゃないよ？冗談で言っ

ているのは、わかっているから責めはしないけど。

「んまぁ!?手を出されたんですかぁ?リチラちゃんが騒ぐかもしれないわねぇ。…困ったわぁ」

「いや、話しを聞こうよ…。出してないって。アスナの相談に乗っていただけだっての」

手なんか出せるかよ…。アスナの姿を見てみろって。百年以上の歳とはいっても今のアスナは精神的にも見た目的にも幼稚園児だぞ?射程範囲外だろうよ…。

それとなぜにここでリチラが出てくるん?彼女がどうかしたのかね?ハッ!?まさか……悩みか!?家長の俺としては家族の悩み事には最大限、対処する用意がありますよ!?山ほどにッ!!

「そ、そうですわよね~?私は~、もちろん信じておりましたわ~。ミリーも早とちりね~?」

リビエラ……どもったね?どもったよね?信じてくれることに疑いはしていないけど…。なんだろうね?どちらかと言うと何も無かったことを残念そうにしているように感じる…。良し、わかった…。ここでハッキリしておこう。

俺はロリコンでは無いッ!!!

何度も言うがお姉さんが好きなんだ！！だが！残念ながら今の俺より年上は居ない…ｏｒｚこればっかりは仕方ないので諦めている。しかーしッ！！母性本能豊かな女性（ひと）は大好きだ！！

すまん…またもや取り乱してしまったようだ。だが、反省もしなければ後悔もしない。俺の正直な気持ちを言ったからな。ある意味、満足だ。

「はいはい。それじゃお茶会にするか…。皆、席について」

「はぁい♪」

「はい～♪」

「「ハッ」」

「……」

このあとは、そのままお茶会して楽しいまま日は沈んだ。アスナは少しだけ憑き物が取れたようで、終始ケーキをパクつき、堪能していた。俺はその様を笑いながらただ見ていた。

アスナの今後のこと。過去のこと。そして未来のこと…。

色々と考えてはいたけど、詮無いことだと思い、考えるのをやめた。全ては時の流れのままに身を任せればいい。気に入らないことが起きれば何をしてでも流れを堰き止めればいいのだから。

2週間後、アスナは迎えに来たナギ達が連れて行った。アイツらが何をしていたかなんて聞かない。それがマナーだ。逆に俺も話さない。線引きは必要だよね?そうしないと長生きできないし。

「アスナは大丈夫だ。彼女は諦めることを知らない。だから…」

…だから、未来を自分で選べる。

アスナと別れて、そんなことを思った…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第三十話「歓迎会とファッションショーと相談？と」（後書き）

…どうして、こうなった？
ただの繋ぎ的な話しであったはずなのに…長ったらしくなっちゃった。

次回は、木乃香（幼女）を出したいな…なーんて…。

ナンですか？考えるだけなら、タダだからいいじゃない！
すみません、少し調子に乗ってました…。

では、また次回をお楽しみに！！

第三十一話「葵と詠春と木乃香と」（前書き）

しばらくのほほ～ん♪な展開が続くよー。
では、どうぞ！

第三十一話「葵と詠春と木乃香と」

――関東呪術協会総本部、近衛邸…。

Ｓｉｄｅ　葵

アスナが帰って一年が経った。俺は今、詠春の婿養子先の近衛家の家に居る。その家の庭で詠春達の娘である木乃香が手毬をして遊んでいるのを俺は縁側で眺めていた。時々こちらを振り返る木乃香に手を振って答えたりして時間を潰していた。

なぜ俺がここに居るのかを言うと、それは……単刀直入に言えば詠春に呼び出されたからだ。別に疚しいことも無かったし俺は素直に呼び出しに応じたわけなんだ。どうせ、いつもの飲みのお誘いだとも思ったしね。

でも、いざ来てみれば部屋ではなくてここ、縁側に案内された挙げ句、待たされたりしている。まぁ、愛らしい木乃香が庭で遊んでいるのを見て和んだりしているからいいんだけどね。この癒しがなかったら一旦、家に帰っていたかもしれない。

「それにしても詠春は何のようで俺を呼び出したりしたんだろう？」

「それはですね…ぶぱっ　。ッ！」

「…よう、詠春。気配を消して近付くなや、コラ＃」

この野郎、わざと気配を消して俺の背後から近付いてきて耳元で話しかけてきやがった。友人の家だからって俺も油断したようだ。現われた気配に確認もしないで、つい迎撃してしまった。

いやー、詠春でよかった、よかった。他の人だったら、申し訳ないからな。ここの巫女さんだったりしたら後悔してもしきれない…！そうだ！大体ここの巫女さんのレベルおかしくないか！？いや、魔法の技量的な意味じゃなくて外見！綺麗系の人が多いんです！！

詠春はアレか？巫女さんはぁれむ計画を発動したとでもいうのか？今の近衛家の当主になったからって調子に乗っているのか？…だとしたら友人の俺がその心を矯正してやるしかないではないかッ！！おのれ、詠春…！

あ？はぁ…。俺としたことが、また取り乱してしまった。そもそもの話し、お色気に弱っちー詠春にそんな大それたことができるわけないか…。うん、忘れよう。

それで詠春はいつまで、床で寝ているつもりなのかね？早く起き上がりやがれ。話しがあるのだろう？時間が勿体ないだろうが。

「イタタタ…。い、いきなりヒドイですね…」

「うっさい、黙れ。行き成り俺の背後に立つのが悪い。で？」

「はい。今日、葵をお呼びした理由は…」

ちょっと待ってー。マジ待ってー。

「…ちょっと待て。詠春、お前さぁ、ここのところアルと仕事する

のが多いからかもしれないけど口調がうつっているぞ。…直さないのか？」

「は？あー、これは仕方ないのですよ。近衛の家名を背負って立つのですから口調が丁寧になるのはね」

マジでか…。俺は丁寧な中、粗野に話す詠春のほうが話し易かったわー。ここ数年で口調はもう今のものに固定しまったから今更言っても詮無いことなんだけどさ。まぁ俺がとやかく言うことでもないってのもあるんだけどね。

でも…そうか。直さないのか。…いや、直せないのか？当主である限り関西呪術教会の看板を背負って立つということだから…。あー…、これは一生直せないな。仕方ない。このことは忘れよう。詠春の話し方がアルに似ていてもアイツの変態的行動までは真似しないだろうからな。

「それはまた、面倒だな…。はぁ、もういいや。話しの出だしを挫いて悪かったな。それで？」

「はい。実は娘の木乃香のことなのです」

木乃香ちゃん？娘の話しを肴に飲もうってことか？…親バカのコイツならありえそうだ。もしそうなら今日は朝までコース確定だな…。いや、待て、待て…。まだそうだと決まったわけじゃない。そうだよ。軽く突いて聞いてみればいいじゃないか！そうとわかれば…。

「木乃香ちゃんがどうかしたのか？まさかとは思うが「うち、好きな男の子ができたんや～」なんて言われたのか？」

娘を持つ男親には耐え切れない質問を敢えてしてみる。親バカのコイツのことだ。何かしらの反応が返ってくるはずだ。

あれ？　えーしゅん　どうしたの？　うつむいて…　かたが　プルプル　ふるえているよ…。

あらー？これは……地雷を踏んじゃった、かな？

「……貴方がそれを言いますか？それを言っちゃいますか？フフ、フフフフフ！イ　ノ　チ　ガ　イ　ラ　ナ　イ　ト　ミ　エ　ル　ッ　！　！」

――斬ッ！！！

あっぶねッ！？詠春！どこから夕凪を出した！？避けなかったら俺が真っ二つだったぞ！！お前は友人を殺す気か！？アレか！？警察の取調室で「カッとなって殺った。だが後悔はない」、とでも言うつもりか！？マジで勘弁なんだけど…！！

そもそもの話しだけど俺が父親の詠春より好かれているからって夕凪で斬りかかって来るのは少し…結構…いや！大分大人気無いと思う！！なんだよ！刃物って！？俺でもそんなことはしないよっ！！…今、俺のことを疑ったヤツ前に出て来いハオとユエに串刺しにしてもらうから！！

あー、もー！！あれー！？詠春の目の色が反転しちゃってる！？殺る気満々ですね！？わかりたくないけど、わかります！！こうなったら不本意だが謝って許してもらうしかない！！そうとなれば振り替えて頭を下げる！！Ｇｏ！！

「悪かった！俺が悪かったから落ち着け！！イヤ！落ち着いてください！お義父さん！！」

「だぁぁあぁぁれがお義父さんかぁぁぁあああぁぁあッ！！キシャーーーッ！！！」

しまった！？ついお義父さんと言ってしまった！！ああっ、何を勘違いしたのか庭で遊んでいる木乃香ちゃんが頬を染めている！？それ勘違いだから！あとで誤解を解いておかないと…。って！今はそれどころじゃなかった！！

詠春は、ますますヒートアップしたようで今は黒いオーラのようなものを纏っている。詠春…お前、協会の当主が闇（病み）に囚われてどうするんだよ。帰って来いよ。元の親バカに戻ってくれよ…！

そして俺は拳を力一杯引いて詠春（黒化親バカ）に正義（八つ当たり）の鉄槌を喰らわせる。

「落ち着かんか！！こ　の　親　バ　カ　が　ッ　！　！」

――正義の拳打ッ（理不尽な八つ当たり）！！

「グハッ！！オノレ…。たとえ、この私を倒そうとも第二、第三の私（親バカ）が必ず…プキ　。ュッ！！」

なんだか危ない発言が聞こえてきそうだったから思わず詠春の頭を地面にめり込むほどの力で踏みつけてしまった…。だって第二、第三の詠春（黒化親バカ）ってイヤ過ぎるだろう？毎回、野太刀持って追っかけまわされることになんてイヤ過ぎるよ…。

「黙れ、親バカ。話しの腰を折ったのは俺だがお前も暴走が過ぎるぞ？」

黒くなると限界耐久値が爆発的に増えるからしぶとくてキライなんだよね。それでもいつの間にかどこからともなく湧いて来るんだから勘弁だわ…。

お？詠春が正気に戻ったか？

「アタタタタ…。すみません。思わず我を忘れてしまいました…」

「思わずで忘れるなよ…。それで木乃香ちゃんがどうしたんだ？」

「ええ、実は木乃香の将来について話したいのです」

将来！？まさか…今から許婚でも決めておこうとかいう話しか！？それなら俺には関係なくないか！？いやいやいや！待て待て待て！！相手は詠春（親バカ）だ…。これは俺への暗殺依頼か？相手先を潰してしまえば自然と許婚の話しも消える、と…。

詠春……お前も悪だな！！まさか娘のためにそこまで堕ちてみせるとは…！！！俺はある意味、お前を尊敬するよ！！それでは話しを聞こうじゃないか。相手は誰だ？必要ならば機動兵器から戦艦、要塞まで出してみせるぞ？

さぁ話せ！と思い詠春の話しを聞いていったら、そんなことじゃなかった。純粋に将来のことだったよ…。くそぅ、俺の勘違いだったのか…。それもそうだよな。詠春が愛する娘の将来を決め付けるわけないか。俺も何だかんだで、詠春の親バカがうつったのかね。

「でも、それって俺が口出しすることじゃなくないか？詠春の娘だろうが、お前の家族間で話すようにしろよ」

「葵の言いたいことはわかっています。わかっていますが…是非とも聞いてほしいのです」

「……なんだかキナ臭い話しになってきた気がする。…それで何を聞けって？」

「はい。事の起こりは木乃香の魔力量についてでした…」

詠春の話しは娘、木乃香が高い魔力量を有しているということ。鍛えれば将来は極東最高の魔力量を保持した魔法使いになれるだろう、ということだった。このことに関してはミリーや皆から聞いていたから驚きは無い。俺も魔力量を感じ取って計れるしな。

このまま成長すれば木乃香の魔法界での将来は安泰だ。しかし、詠春は木乃香を魔法使いのドロドロとした闘争には巻き込みたくないと願う。できることなら普通に暮らして普通の幸せを手にしてほしいと考えているそうだ。

そして木乃香にはまだ魔法のことに関しては知らせていないと言う。これは近衛家当主、そして関西呪術協会の長として配下の者や

周りの親しい人間に厳重に言い含めてあるらしい。これって職権乱用じゃない？と考えたのは秘密。

「つまり、なんだぁ、アレか？魔法なんかとは関わりの無い、一般家庭の娘さんみたいな生活を木乃香には過ごしてほしい、と？」

「…ええ、その通りです。そこで相談なのですが…」

待ってー。ちょっと待ってー。マジ待ってー。

「詠春…？なんか、ますます厄介事の予感がヒシヒシとするんだが？んん？」

「……葵が察するように貴方には厄介事かもしれませんね。しかし、それでも私は貴方に頼みたい」

俺の何がお前をそこまで押すのか、わかんねぇよ。俺が何をした？確かに木乃香は俺に懐いているし俺もそんな木乃香を可愛がってはいるけど…。言ってしまえば、そこまでだ。特に何をしたというわけでもない。仲の良い友人（？）みたいなものだ。

「…詠春って木乃香ちゃんが生まれてから押しが強くなったよねぇ。昔のからかい甲斐のあるお前が懐かしいよ…」

「はっはっはっ。そうですよ。人間、親になれば強かになるものです」

「親は強し、ってか？そればっかしは俺も経験…（ボソッ）無い、無いよな？実の子供は居ないよ、うん」

うん。居ないよ。数百年前に子供を拾って気まぐれに育てたことはあったけど実の子という意味では居ないよ、うん。子育ての経験はあるけどな！女の子は難しかったです。思春期の時なんて情緒不安定なのか矢鱈とパワフルだったし…。

まぁ俺のことはどうでもいいな。今は詠春との話しのことだ。

「それで相談なのですが…。その前に確認ですが葵は数年以内に麻帆良へ居を移すようなことを言っていましたよね？」

今その話しを出すのか？まぁ俺から話したことだから知られても特に困ることは無いけど…。詠春は俺に何をやらせたいんだ？麻帆良は小中高と寮暮らしだから一緒に住めとかじゃないだろうし。うーん？わからん。話しの続きを聞くか。

「あ、ああ。確かにその下準備はもう、済ませてあるが…。それがどうかしたのか？」

「はい。実は木乃香も麻帆良のお義父さんのところへやろうと考えているのですよ。葵には向こうでそれとなく娘を見守ってほしいのです」

見守る、ねぇ…。詠春が言う“お義父さん”というのは近衛・近右衛門だろ？あのぬらりひょんに預けるのかぁ。引き受けるとしたら面倒なことになる前に、詠春に俺が学園都市入りするのを黙っていてもらう必要があるな。

向こうには今、タカミチが居るはずだからな。面倒事が増えるとしか考えられん。腕試しとか実力を見せてみろ、とか言われて学園所属の魔法使い達に手の内を見せるのは避けたい。何よりも面倒く

さい。なぜに俺がそんなくだらないことをしなければならんのだ。

さて、どうしたものかね？木乃香ちゃんのことだから心情的には受けてあげたいんだけど…。あれ？そういえば刹那ちゃんはどうした？彼女の護衛を自称している、あの子は？

「ふむ？おい、あの子はどうした？ほら、刹那ちゃん。一緒に向こうにやるのか？」

「……刹那君、あの子は、その…中学に編入という形で向かわせようと考えています」

な、なんだってー？なんで？あんなに仲が良いのに詠春は、そんな彼女達を引き離そうというのか！？はっ！とんだ外道だな！！言っておくが俺は可愛い女の子の味方だからな！？お前が木乃香ちゃん達の敵になるのなら俺が動くものと考えろよ！！

とりあえず詳しい話しを聞いてから判断するけどな！！

「何？一緒じゃないと木乃香ちゃんが泣かないか？２人とも互いに思い合っている。お前が刹那ちゃんの後見人だ…いや待て、そもそも、なぜ、別々に送るようなことをするんだ？」

「木乃香が泣くかもというのは当然、私も考えました。刹那君は…なんと言うか、あの子も思い込みの激しいこのようで、その…」

なんだよ？モゴモゴ言ってハッキリしないヤツだな。刹那ちゃんが思い込みの激しいことなんてもう当たり前だろう？何を今更。サッサと白状しろよ。俺がお前の味方になるか敵になるかの瀬戸際なんだから。

「なんだ?男の子だろうがハッキリ言えばいい」

「お、男の子…。まぁ貴方から見たら誰だって年下扱いですね。ハハハ…」

うっさい。歳のことを言うんじゃねぇよ。俺のガラスのハートが傷付くじゃないか。

「そんなことはいいから話せ。刹那ちゃんのことだろ?俺も気になる」

「はぁ、はい。それで刹那君のことなのですが、実は一年前に木乃香が川で溺れかけたことがありました。幸いにも、家の者達が居合わせたので事無きを得ました。その時に刹那君が娘を助けられなかったことを後悔して自分を鍛えると意気込んでいるのです。そして……」

いちねんまえ?え?かわでおぼれた?え?えー…?

オゥ、ジーザァス!イベントはアスナが来ていたことで潰れてしまったということか!?見逃したということか!?なんということだ!川のフラグをへし折って2人を仲良く!が、できなくなってしまった!!いや、アスナを預かったことに後悔はないけどね!!!
可愛かったし!!

しかし、今から刹那ちゃんを説得するのは……無理だ。何よりももう1年経っているし。あの子、見た目の可愛さと違って古風で頑固だからなぁ。説得するにしても言えば言うほど頑なになってしまって話しもできやしない。

今は神鳴流の修行のために協会総本部の裏山で山篭りをしているとのことだった。歳一桁の幼女に山篭りって…。普通なら警察に通報されているぞ、詠春…。しかし、まぁ…。

「はぁ？つまり、自分の力が足りないから助けられなかった。力さえあれば～、って、この一年を修行しているということか？」

「まぁ簡単に言ってしまえば、その通りです。刹那君も親友の木乃香を助けることができなかったのが悔しかったのでしょう」

あー…たくっ。一つ、イベントを見逃すとコレだよ。イベントが起こる時期なんてわからないし。だからと言っていつも監視しているわけにもいかないし。コレは仕方ないんだけどさ。あぁ、もう…。面倒だなぁ。あの頑固娘を説得するのか…。厄介だ…。

でも、このままじゃ木乃香ちゃんがなぁ…。はぁ…。

「あぁ…、あのアホっ娘は、まったく…。コラ、詠春も今の木乃香ちゃんを見てみろ。何も感じんのか？そんなわけ無いよな。…それで何か言うことは？」

「……面目無いです」

庭で一人寂しそうに手毬をしている姿は何とも言えない物悲しさを誘う。コレを見て「ハッ！ざまぁみろ！」とか抜かすヤツは人間

でも精霊でも悪魔でも無い。断じて無い！ソイツは下衆だ。外道でも己が決めた道を行くが。コレに関しては下衆だ。俺が許さん！

「いや、すまん…。俺も責めるようなことを言ってしまった」

「いえ、不甲斐無いのは事実ですから…」

「ふぅ、それで詠春的には刹那ちゃんをどうしたいわけよ？」

問題はそこなんだ。後見人は詠春になっているから、とりあえずでも今後の方針だけは聞いておきたい。まぁ場合によっては俺が独断で動くことになるけどな！

「今はあの子の好きなようにやらせてあげたいと思っています。どんな理由でも力を手に入れるには目標が必要ですから」

「……そうか。後見人の詠春が決めたことなら俺は何も言わんよ。だが、木乃香ちゃんは…」

今は、そういう時期だよなぁ。無理に言い聞かせても刹那ちゃんはより頑なになるだけだしね。詠春の決めたことに文句は無いよ。今のところは、だがな！！それにしても木乃香が麻帆良学園入りか…。本人は納得してくれるかね？

「わかっています。ちゃんと説得しますよ。……なかなか納得してはくれなさそうですがね」

それならいい。無理矢理とかじゃなければ俺から特に言うことは無い。やっぱり子供はのびのびと育ってほしいからね。変な義務感とか持ってほしくないわけよ。

一応、向こうに行ったら俺も気にはかけるけど…学園長がなー…。あのぬらりひょんが俺に気付いた時に何をしてくるのかが読めない。戦力として俺を取り込もうとするのか。それとも不可侵の契約を結ぶに止まるのか。

どちらにしても面倒なことになる前に俺の学園都市入りと生活空間の隠蔽工作には特に力を入れておくとしよう。

「そっか。それでは向こうで俺はそれとなく木乃香ちゃんのことを気にかければいいんだな？」

「はい。それで十分です。…引き受けてくれますか？」

「ふぅむ…。まぁそれだけなら構わんよ。木乃香ちゃんのことは何やかやで面倒もみたこともあるしな。苦にはならんだろ…たぶん」

「そうですか。引き受けてくれますか。それを聞いて私も安心しました」

問題は刹那ちゃんのことなんだよなー…。とりあえず予定では中学入学まで期間が空くから、それまでになんとかしないと…。なんとか…。……どうしよう？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――近衛邸の庭…。

Ｓｉｄｅ　木乃香

お父さまと葵兄さまがなんや、むつかしいお話ししとるんよ。一度、うちのことが話しに出てきた思うたらお父さまのことを葵兄さまがお義父さんって言うのが聞こえたんや♪うち、ドキッとしたんへ？顔も熱うなったわ♪えへへー♪

前にお父さまに「葵兄さまのおヨメさんになるー♪」なんて言うたこと、あったけど、まさかそのことで？なんて考えてしもたんよ。なんや恥ずかしいわー。

それでな？今、うちは一人で、手毬で遊んどるんやけど、ちっとも楽しないんよ…。はぁ、せっちゃん、今頃どうしとるんやろなー？川でのことがあってからちっとも会えへん。会えてもなんや素っ気ないし。うちがなんかしたんやろか？

「てん、てん、てまり…ふぅ、せっちゃん…」

「木乃香ちゃん」

「あっ、葵兄さま！お父さまとのお話しは終わったん？」

葵兄さまやー！お父さまとのお話しは終わったんやろか？それやったら、うちと遊んでくれへんかな？一人はやっぱり寂しいわ…。

「ああ、終わったぞ。この後は予定が無いから、木乃香ちゃんと遊べないかな？って思ったんだけど。どうかな？」

「本当!?それやったら、うち嬉しいわー!」

うちは遊んでくれる言うてくれた葵兄さまに飛びついてもうた。
葵兄さまの胸に顔を埋めてスーっと息すると落ち着くわー。んー♪
いい匂いやー♪なんや安心する匂いやなー。それやのに、うちがえ
え気分になってる時にこんなことを言うんや…。

「おととっ。木乃香ちゃんは元気だな。将来お転婆にならないか心
配だ」

なんて言うんや。どー思う?うちかて女の子やで?確かにちっさ
いけど、それでも女の子や。葵兄さまも案外ヒドイわー。うち、将
来はボンッ、キュッ、ボンッ、のスタイルになって葵兄さまを見返
してやるんや!それで、それで、うちにメロメロになって~~♪

アカン…。つい、考え込んでしもた。うちもうっかりやなー。あ
っ、そうや!うちのことをお転婆言うた葵兄さまがアカンのや。こ
こは一言言うたなアカンわ。

「む~!うち、お転婆ちゃうもん!」

「はっはっはっ!すまん、すまん。もう言わないから許してくれ」

「約束やよ?言うたらアカンへ?」

葵兄さまは約束を絶対に破らんからこういう時は信用できるんよ。
その分、他でからかってくるんやけどな…。それでも憎めんのやー。
これも“惚れた弱み”言うんかな?

「うむ。精霊と悪魔と電子に誓おう。“なるべく言わない”、とな」

「む～！なるべくなんて“せいじか”みたいなこと言ったらアカンよー！ちゃんと約束しい！？」

アカン…アカンよ！その言い様は絶対に今度も言う気満々やないか！せいじか、みたいなこと言うのはズルイわー。うちが文句言うても葵兄さまはコロコロと笑ってマジメに取り合ってくれへんし。今日は“てっていこうせん”やな！覚悟しいや！？

「くっくっくっ！それはすまなかった。では、“なるべく”ではなく“ほどほど”にしよう」

「それもアカンーッ！！」

「あーっはっはっはっはっ！」

もう！葵兄さまは時々、いぢわるになるから困ったもんや。いつか罰が当たっても文句言えへんよ？今も、うちが膨れてるのにそれを見て大きく楽しそうに笑うんや！本当にヒドイわー。なのに目は優しいから怒るに怒れへん。うちはどないしたらええんや？

「う～…葵兄さま、ヒドイわー。うちの気持ちを弄んでー…。よよよ…」

結局、葵兄さまには勝てへんかったわー。うちにできたのは、泣きマネをして葵兄さまを困らせることだけ。それもなんや微笑ましいものを見る目で見てきて、うちの頭を撫でてくるんよ？葵兄さま、わかっててやってるんやったら、ますますヒドイわー。

「はいはい。ウソ泣きはいいからなー。ほ～ら、いーこ、いーこ♪」

「うぅぅ…ん♪…ゃん♪」

それでも、うちは抵抗しいひんよ？葵兄さまに頭を撫でてくれるんは好きやからな♪こ、今回はこの辺にしといたるわー。えへ、えへへー♪

「…木乃香ちゃん」

「んー？なーにぃ？」

うちが頭を撫でる葵兄さまの感触に身を任せとる時にちょっとだけマジメな声が聞こえてきたんや。今は何も言わずに撫でてほしいんやけどマジメなお話しっぽいから仕方ないんかな。

「…少しは気が紛れたかな？」

「ッ……何のことや？」

でも葵兄さまの口から出てきた言葉に、うちの体はビクッとなってもうた。それくらいドキッとしたってことや。うちは「そんなこと無いよ？」って笑顔になろうとしたんや。でも、自分でも上手くできとるか、わからんわー。ちょっと失敗しとるかもしれへんな。

「刹那のことは聞いた。そのことで木乃香ちゃんが気落ちしていると思うと、気になってな」

「……葵兄さま。うちは…うちは、せっちゃんに嫌われたんやろか

？」

葵兄さまに言われて気が付いたら、うちの口が勝手にしゃべっとった。「うちは、せっちゃんに嫌われたんやろか？」と思いが出とったんや。そしたらなんや目の前がぼやけてきたんよ。おかしいなー？思うたら、うち泣いとったんや。

「（ボソッ）やっぱ普通はそう思うよなぁ…。ああ、木乃香ちゃん？大丈夫だ。刹那ちゃんはいつでも木乃香ちゃんのことを思っているぞ」

「グスッ…本当に、そうやろか…。うち、嫌われてない？」

葵兄さまはそう言って励ましてくれるんやけど、せっちゃんは今も、うちに素っ気ないんや。不安になるなってほうが無茶やん。うちが何かしたって考えてまうんが普通やん。グスッ…また目の前が良う見えんようになってもうたわ…。なんや鼻の奥もツーンとするし…うぅぅ。

「うん、心配ない。俺を信じろ。そうだな…もし違っていたら木乃香ちゃんの願いを一つ叶えてやろう」

「お願いを叶えてくれるん？」

珍しいわー。葵兄さまがそんなことを言うやなんて…。普段はもっと具体的に約束を決めるはずやのに今回は「願いを叶える」なんて漠然としたもんやなんて…。それくらい自信があるということやろか？

「俺に出来ることで、だけどな。善処はしよう」

「む～、また“せいじかてきはつげん”やー。信用できんわ。でもー…、その時は…」

や、やっぱり葵兄さまや…。きちんと伏線を張るやなんて…。でも、目は本気そうや。絶対に大丈夫と言うとるように感じるわ。これは信じてもええかもしれんな。でも、ハズレたら願いが叶う…。その時は葵兄さまのおヨメさんになれるんかなー？

な、何を考えとるんやろ！うちは！アカンよ！そんなことで願いを叶えるなんて！そ、そうや！もしハズレたら、せっちゃんとの仲を取り持ってもらおう！うん！それがええわー！あは、あははー。…はぁ。恥ずかしいわー。

「うん？なんだ？」

「う、ううんっ。なんもあらへんよ！うん！なんもないよ？」

「そ、そうか？ならいいが…」

「う、うん。えへへー♪」

さっきまで悲しくて泣いとったのに今では笑っとる。うちも現金やなー。ちょっと嬉しいことがあると喜んでまうよー。せっちゃんのことは葵兄さまが大丈夫言うとるなら大丈夫やなー。

それからは残りの時間をいっぱい使っていろんなことして遊んだへ。かくれんぼ、鬼ゴッコ、的当てなんかもしたなー。でも一番楽しかったのはオママゴトやー。新婚さんゴッコをしたんやけど葵兄さまも楽しかったんやろか？いつも以上にニコニコしとったわー。

うちも楽しかったから気にせえへんかったけどアレは…なんや違うと思うわー。アレは…そうや、おじいちゃんと同じ目なんや。うー…うちが、まだちっさいから相手として見てくれへんのやろか？だとしたら早う大きくなりたいわー。

そうして遊んどったら周りは夕方で暗くなってきたわー。もう今日も終わりなんやなー。楽しい時間はいつもアッという間やー。もっと時間があればもっと遊べるんやけどなー。できひんことを言うても仕方ないなー。

「遊んでいたら結構いい時間になったな…」

「あ、本当やね。カラスも鳴いとるよ。…葵兄さまは、今日はこのまま帰ってしまうん？」

できれば晩御飯も一緒に居たいんやけど…。葵兄さまも何かと忙しいからダメやろか？

「ん？んー…、そういえば決めてなかったな。どうするか…」

「あっ！そ、それなら家で食べていかへん？」

これはチャンスや！今ここで押せば、あとは何とでもなる！お父さまに言えば、もう一人くらいはなんとかなるはずや！い、いざとなれば、うちのをアーンって半分して食べ合えばええんや！そうや！それがええ！か、間接キスなんて考えてひんよ！？ほ、ほ本当や！！

「いや、それは…」

「私も、それがいいと思いますよ」

アカン！葵兄さまが帰ってまうと思った時にお父ざまの声がした。ナイスや！お父さま！うちの困った時に助けてくれるわー。でも、いつから居たんやろな？うち、ちっとも気付かんかったわー。

「詠春…気配殺して来るなと…まぁいい。それで何がい…」

「お父さま！もう、お仕事終わったん？」

アカンねん！ここで葵兄さまに発言を許したら帰る口実を与えてしまうんや！ここは畳み掛けるんや！それしかない！！あとはお父さまが頼りや！頼むよ！？お父さま！！

「ええ、終わりましたよ。木乃香は、今日は楽しかったですか？」

「うん！楽しかったへ。それよりも、それよりも！葵兄さまも一緒にご飯食べてもいいん！？」

お父さま！お願いや！！うちの気持ちに気付いて！！今日はこのまま葵兄さまとご飯が食べたいんや！！それに贅沢は言いひん！！そのあとに、ちょーっとお泊りしてもらえないか考えとるだけなんや！！

「もちろん。葵も、どうですか？家で食べていきませんか？」

「ふむぅ。家長からのお招きとあらば行かないわけにもいかないな。木乃香ちゃん、一緒に食べようか？」

「ッ～～！！うん♪一緒、や！」

やったーーーッ！！！うちは勝ったよ！！葵兄さまはうちのモンや！！そのまま葵兄さまの胸に飛び込んでしもたんは間違いや無いと思うんよ？うちの素直な気持ちを表にしただけやしな。

「おっと？そんなにハシャグとお腹が空き過ぎて動けなくなるぞ？」

「大丈夫やもん♪えへへー♪」

動けなくなっても葵兄さまが運んでくれるはずやから大丈夫♪って意味で言うたんやけど葵兄さまは気付いてるんやろか？…なんや気付いてなさそうやんな。ま、まぁええわ。今日はこのままお泊りにまでもっていければ言うことなしやな。頑張るへ！！

「はっはっはっ。木乃香は本当に葵が好きですね」

「うん！うち、葵兄さまのこと大好きやっ」

「……」

「詠春よ…自分で聞いといて真っ白に燃え尽きるなよ…」

「？？？」

お父さまに聞かれたことに素直に答えたのになんや真っ白になってもうた。動きもぎこちないものになってもうたし…。お父さま、どうしたんやろな？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　木乃香

第三十一話「葵と詠春と木乃香と」（後書き）

木乃香の少女時代がよくわからないです！
よって、うち（当作品）の木乃香はこんな感じです！
少女時代のだけどな！！最初はこんなんじゃなかった！
こんなにおませな木乃香になるはずじゃなかったんです！！

この指が！この手が！勝手に！

でも、できてみれば作者はキライじゃなかった！！
何よりもそこに作者はショックを受けました！！
「自分の木乃香像ってこんなんだったのか？」
なんて！なんて！！考えてしまったから！！！

ちくせう…。苦情が来たらどうしよう…？
作者はマジで怖いです！できればバッシングよりもエールをください！！
では、また次回にでもお会いしましょう！！チャオッ！！

第三十二話「麻帆良と入学式とケーキと」（前書き）

まだまだ、のほほ～んが続くよー。

第三十二話「麻帆良と入学式とケーキと」

――埼玉県麻帆良市麻帆良学園都市…。

Ｓｉｄｅ　葵

やってきました、麻帆良！魔法的結界は目暗ましの魔法の強力なやつで誤魔化した。電子精霊などの機械的監視もアンのハッキングで無効化。ただ無効化しただけじゃなくて相手にバレないようにアンは自分の支配下に置いたようだ。これであらゆる隠蔽工作が少しは楽になるね。

現在の時刻は午後３時過ぎ。そして原作開始１０年前（のハズ…）だ。木乃香ちゃんも後から来るよ。一応、今から数日以内に来る予定だ。俺達は状況の確認と電子制圧などして戦場（フィールド）を整えに一先ず早く来たわけなんだ。

それはいいんだが…タカミチからナギが死んだと聞かされた。そのことについて俺はあまり悲観してなかったりする。だいたい黒いアブラムシよりも生きることにしつこいアイツが、そう簡単に死ぬわけがない。姿を暗ませたのには何か理由があるんだろうよ。俺には関係ないけどね！

それよりも、だ。タカミチから聞いた次のことだ。ナギに続いてガトウも死んだこと。そのことが問題だ。アスナが懐いていたこともあるから泣いていないかが気がかりだったりする。なにせオジコンの切っ掛けだしな…。

まぁどちらにしろ、アスナもここに来ることになる。彼の、ガトウのファミリーネーム、カグラザカを持って…。まったく、あのバカ(ガトウ)、いつもは遠慮無しに厄介事を俺のところに持ち込むくせに、肝心な時ばかりは俺を頼らなかった。

もちろん、そのせいでガトウが死んだなんて傲慢なことは考えちゃいない。だが、知り合いが居なくなるのは、やっぱり悲しいものだ。聞いてから暫くは飲む酒が不味くて仕方がなかった。どうしてくれんだ?バカ野郎が…。

あー、ヤメヤメ!また気分が滅入るわ!なんか楽しいことを考えよう!うん!とりあえず出店場所を目指すとするか!

「それにしても初めて学園都市に入ったけど、マジでここだけヨーロッパ風なんだな…」

とても、ここが埼玉県なんて考えられんわ。元の世界は何も特徴の無い県だったのに…。うん、不思議だ。地域的に他は微かに覚えている俺の記憶にも合致するのに、ここだけ違う。やっぱり不思議だな。

「えっと…ここを右に曲がって?真っ直ぐか…」

ここ、麻帆良の大通りは、わかり易いんだ。でも、少し路地に入って近道をしようとすると途端に迷路みたいに入り組んだところに出ることがある。どゆこと、これ?対侵入者用に造られているとでも言うのかね?これは一度、マップ化する必要があるかもしれない。

「アンに探索用装備のカブトムシでマップの作成をするように頼んでおこうかな。これじゃ、いざという時に戦略的な不利に立たされてしまう。地形の確認は急務だな…」

『我が主よ。今からアン嬢に連絡することもできるがどうする？』

「ふむ、そうか…」

どうしたものか？ラミエルさんの言うように連絡して今すぐ行動することもできる。確かに早急に地形を把握しておきたい。でもなぁ…来た早々に目立つ動きをすれば勘繰られて痛くもない（？）腹を探られることになるかもしれない。

あ、でも極隠密行動とステルスで潜伏していれば時間はかかるが確実かもしれない。これならいけるか？

「ラミエル。アンに通達だ。内容は“極隠密にて地形の把握に努めよ”以上だ」

『Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．内容は確認した。通達を開始する…完了。返信を…受信。内容は“学園データバンクに地形データの大半を確認。早急に地形の齟齬を編集し、任務を完遂する”以上だ』

「あー、学園データバンクは既に制圧済みだったか。スッカリ忘れていたな…」

いや、本当に忘れていた。だってアンの手にかかればものの数分でカタがついたんだ。達成感なんてあるわけがない。重要なことだ

ってことは覚えているけど軽く制圧下に置けたから拍子抜けだった。緊張していたのがバカバカしく思える。

だから、少し忘れたことがあっても俺は悪くない。うん、悪くないんだ。ただ印象に残らなかっただけのことだ。

『我が主は時々だが、どうでもいい時にどこか抜けていることがあるな。…しかし、それも愛嬌があって良いな』

「……ありがとう、とだけ言っておくよ」

下手なこと言ったら薮蛇(やぶへび)っぽいからな。言葉少なに返すが吉だろう。

『ヘタレだな。薮蛇とわかっていても行くのが男(おのこ)というものであろうに』

「……お前に読心の機能を付けた覚えはないんだが？」

なんなの？ラミエルさんって…。この前メンテした時も構造に変化が見られるし。おかしくない？確かに学習機能と自己進化機構は取り付けたよ？でも、造ったはずなのに構造を俺が理解する以上の早さで強化、最適化して進化していくんだ。

それでもアンよりはマシだけどね。それでも、このまま進化されてはアンのようにブラックボックス化するのは確実だって。もう、その片鱗が見え始めているんだ。…何かって？…装備した覚えのない武装が増えているんだよ。

ラミエルさんには大小様々な荷電粒子砲と強力なＤＦは装備した

よ?でも、ミサイルやレーザー、果てはナノマシン兵器なんて装備した覚えは断じて無い。

俺は、どこから武装データが流れてきた?と考えた。まぁ考えるまでもなく答えはある意味で目の前にあったけどな…。忘れているかもしれないがラミエルさんが吸収分解した俺の愛機“プロテア”だ。そこからデータが漏れていたみたいなんだ。

ラミエルさん、どうやら自らの体内で俺の機体を自己進化、改良、改造ｅｔｃをしているようなんだ。おかげで俺は自分の愛機なのに起動実験のあの時から一度も乗せてもらえない状況だ。本当に、この青いクリスタル結晶体をどうしてくれようか?終いにゃ砕くぞ。ちくせう…。

『言わずともわかる。我は我が主と共に在るものだ。ならば何故にわからぬことがあろうか』

「…バカ。恥ずかしいことを言うんじゃないよ」

バ、バカ…。ラミエルさん、何をそんな真剣な声色で言ってるんだよ。ハスキーな女性ボイスだから、少しドキッとしただろうが。

『何が恥ずかしいものか。我は事実を言ったまでのことだ。誇ることはあっても恥じることなど何もない』

「だから、それが恥ずかしいんだって…。いや、ラミエルさんの気持ちは嬉しいんだけどね?それでも、もう少し言葉をオブラートに包んでくれるといいな、って思うわけですよ」

この子には羞恥心というものが無いわけではないようだけど他の

人とは少し感覚がずれているように感じるんだよな。何事もストレートにものを言うから困ったものだ。まぁそれがラミエルさんのいいところでもあるんだけどね。

『オブラートに包む、か。ふむ…。好きだ、我が主』

「ブッ！全ッ然！包んでないよ！？寧ろ、ますますストレートになってるよ！！」

だから！突然、何を言っとるんだ、コイツは！？好意の感情がダダ漏れですよ！？嬉しくてドキドキするだろうが！…あっ、やっぱり今の無し！却下！俺は青いクリスタル相手にドキドキする性癖は持ち合わせてない！！断じて無いったら無い！！

『なんだ、これでも不満なのか。いったい我はどうすれば良いのだ？』

「……うっさい。自分で考えろ」

ストレートな気持ちはキライじゃないが素直に受け取るには俺も歳をとり過ぎた。なかなかに気恥ずかしいんだ。まったくぅ…。

「その考えた結果を我が主が全否定したのではないか…」

「とにかく今は黙れ。この先は大通りだ。いくら学園都市内に高度な認識阻害の結界が張られていても魔法使いまでは対象外なんだ。

聞かれてはマズイ」

『色々と不満だが…了解した』

ふぅ、やれやれ。高度な認識阻害の結界…。これがあるから学園内の不思議な出来事は外部には漏れない。もちろん、それだけじゃなくて、もしものために隠蔽専門の部隊もある。ただ、ここの隠蔽部隊は比較的人道的だということは確かだ。…末端までは知らないがね。

それに学園の魔法使いに見つかるのも面倒だ。原作開始間近ならどうということはないんだけど今ここで見つかるのはマズイ。仮に見つかるとしても最低限良識のある人物で最少人数に限る。

まぁ最悪、対魔法使い用認識阻害アイテムで魔法使いは誤魔化して。アンが学園都市のシステムは制圧下に置いている現在、都市内の監視カメラのシステムは、いくらでも誤魔化せる。電子制圧のことがバレなければ、という条件がつくけど…。

何はともあれ、できる限り面倒事は避けるべきなのには、変わりない。下手に感付かれては、やってらんないってもんだ。

おっと。それよりも今は開店予定の場所に行かないと…。大分、歩いたから、もう直ぐのはずだ。地図によると、ここの角を曲がって…その先だ。

「お？あそこか？へぇ…。なかなか、いいところじゃないか」

大通りの角に面していて、そこそこに日当たりもいい。ここなら春や夏にはオープンカフェにしてもいいかもしれない。ここはレス

トラン街の中で麻帆良女子中学に一番近いし、通学路の一ルートにもなっていたりするんだ。

これなら将来、アスナや木乃香ちゃんの登下校時のちょっとした時に目が行くだろう？いやー、いい場所が“空けてよかった”げふんっげふんっ、もとい、空いていてよかった！うん！

…ごめんなさい。空いてなかったから立ち退いてもらいました…。でも！ちゃんと手順は踏んだんだ！外道なことは何一つしちゃいない！…おかげで説得に2年近くかかってしまったけどね。立ち退いてくれたから謝礼は、弾ませてもらいましたよ。ええ。

角の向こうを見てみると店先を掃き掃除していたファレノがいた。

「あれ？葵ちゃん、もう来たの？もう少し後に来るかと思ったの」

「ファレノ、お疲れー。俺だけ少し早く来たんだ。連絡したように木乃香ちゃんも数日以内に、ここの幼稚園に編入されるよ」

ファレノ、マジでお疲れした！店と土地の買取から改装。ついでに新装開店の宣伝までしてくれた。1チーム（4人）ほどつけたと言っても5人でここまで用意してくれたことに感謝だ。

「そっか。木乃香ちゃんもここに来るんだったの。刹那ちゃんもこっちに来れば良かったの」

「それは仕方ないよ。刹那ちゃん自身が決めたことだしね。それに中学の時に編入されるから、その時は歓迎会でも開こう」

刹那ちゃんは結局のところ説得できなかったんだ。あの子って思

い込みが激しくてそのことが災いしてかものすごい頑固なんだ…。説得は困難…というより現段階では無理。暫く時間を置くのが吉だったね。

今頃はまた山篭りをしているのかもしれない。幼女が山篭りって今考えても非常識な気がするよ。風邪とか引かなければいいけど。…大丈夫かな？心配だねぇ。あの子って何げに限界迎えて倒れるまで頑張るからさ。

うん。こっちに来たらイヤと言うほど構って困らせてやろう！歓迎会は、その手始めだ。フフ、フフフフ♪

「うん♪そうするの。刹那ちゃんも、きっと喜んでくれるの♪」

「そうだね。でも、そのまえにまずは木乃香ちゃんの幼稚園編入のお祝いかな」

「あー、そうだったの。でも、お店の準備も、もう終わるからちょうど良かったの」

「うん。開店祝いと一緒に木乃香ちゃんの入園祝いも一緒にやっちゃおう」

「はい、なの♪」

その日はそのままお店の開店準備に掛かりきりだった。

そして数日が経ち、準備も終わった。開店を明日に控えた時に木乃香ちゃんが麻帆良に来日。その後日、歓迎会と開店祝いと木乃香ちゃんの入園祝いで、夜遅くまでドンチャン騒ぎしていた。

木乃香ちゃんも楽しんでもらえたらしく知らない土地に来た割に終始笑顔だった。あまりのはしゃぎように俺もおかしいなと思って話しかけたら案の定だった。誰かが木乃香ちゃんに軽いアルコールを飲ませやがった！

「キャハ♪キャハハハッ♪なんや、このジュースおいしいわー♪」

「木乃香ちゃん？？」

途中で気が付いて良かった！マジで良かった！おかしいとは思ったんだよ…。普段以上にスキンシップが激しいからさ。抱っこしたりア～ンしたりは何度かあったからまだいい。いや、あまり良くないけど…。詠春（黒化親バカ）に見つかると危ないし。ここには居ないけどな！

「葵兄さま♪ん～♪」

「は？」

とりあえず、それはいいや。それで木乃香ちゃんなんだが、その…料理を口移しで俺に食べさせようとしたんだ。それを見た、リチラが対抗してくるわ。ファレノも悪乗りして煽るわ。その2人をアイリが愛の拳で黙らせるわ…。とにかく、無茶苦茶の内に終わった。

だいたい誰だ？木乃香ちゃんにお酒を飲ませたのは？まだ、幼女

だぞ?飲ませたらイカンだろ。それ以前に木乃香ちゃんが大胆でお兄さんはマジで困りました!相手は幼女（木乃香ちゃん４歳）だとわかっていたからよかったけど…。

これが今、発育のいい中学生とかになったら…。ヤバイよ!?詠春っ!!木乃香ちゃんが将来、悪女になったらどうしよう!?２０歳くらいになったら天然で色香を撒き散らしそうだぞ!?イカン!イカン!お兄さんは許しませんよーッ!!

「やっぱりお酒はまだ早かったか…」

飲ませたのはお前か!?オリビエッ!!!

まさか…まさかの伏兵がここに居たとは…!!俺は、このあとオリビエにお仕置きという名の説教を小一時間ほどしてやった。

時刻は日を跨ぐちょうどのことだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良市立第一小学校校門前…。

Ｓｉｄｅ　木乃香

今日は、うちの小学校の入学式や。今は式も終わって校門前なんかで皆がお父さん、お母さんに一緒に嬉しそうにして写真撮ったりなんかしとる。そんでなー？うちも校門に居るんや。ここで人、待っとるんよー。もう直ぐ来るはずなんやけど…。

「木乃香ちゃん、お待たせ」

「むー。ほんと、遅いで？何してたん？」

葵兄さまがやっと来たわー。式が終わってから３０分も経っとるんよ？信じられるー？うちは、その時間、ずーっと、ここで待っとったんや。ええかげん足が疲れたわー。いったい、こんな時間まで何しとったんや？

「はっはっはっ！そいつは悪かった。一応、先生方への挨拶をしてきたんだ。木乃香ちゃんのことお願いします。ってな」

「そ、そんなんせんでええよー！恥ずかしいやんか！」

なっ！？そんな恥ずかしいことをしとったんか！うぅ！これやと明日は、せんせーから、なんや温かい目で見られてまうやないか…。勘弁してやー。うちのワクワク、ドキドキの学校生活が、葵兄さまの手で壊されようとしとるわ！

葵兄さまもちょっと過保護やねん。うちも、そこまで子供やあらへんもん。知らない人について行ったりもせんよ？お菓子くれる人も……菓子だけもらったらアカンやろか？…アカンか。

葵兄さまは、うちの文句を聞いても、またなんや言うてきたんや。

「何を言う!?可愛い木乃香ちゃんのことだ…。いつ変な野郎が近付いてくるか、わかったものじゃない!もしものために予防線を張っておかなくてどうする!?お兄さんは心配で眠れませんよ!?」

どないな理屈やねん…。でも、これは葵兄さまが、うちのことを気にかけてるいうこと、やんな?このままやったらただの過保護な葵兄さまやけど…。上手くしたら、うちのこと好きになってくれるかもしれへんわ♪ヤリ方間違ごうたらアカンな!ファイトや!このかっ!

でも、過保護やと、わかっても心配してくれるんは、やっぱり嬉しいわー。これは好きな人やからやんな。せっちゃんも好きやから、うちは心配やな。初めてできたお友達やから仲良うしたいわー。せっちゃん、どうしてるんやろなー?早く会いたいわー。

「葵兄さま…。心配してくれるんは嬉しいよ?嬉しいけど…なんや大げさやと思うねん」

「そんなことは…!?こほんっ、そうだな。すまない。少し…取り乱したようだ」

「んーん。ええよー。葵兄さまは、うちのことを心配してくれたんや。嬉しいへ?えへへ♪」

葵兄さまが、うちのことを可愛い言うてくれたんは、ほんとーに嬉しいへ?今はうちもまだちっさいけど、あと10年もしたら振り向いてくれるやろか?16歳になれば結婚もできるしなー♪あー、

でも、アカンわー。うち、まだ恥ずかしいわー。きゃー♪

「木乃香ちゃん…。よーし！今日は進学祝に好きなものご馳走しちゃうぞ！」

「ほんとーに！？それなら、うちは葵兄さまが作ったケーキが食べたいわ♪」

思わぬところでご褒美がきたわ♪今日はええ日やなー。そやけど、うちの口は勝手に動いて葵兄さまの手作りがええなんて言うとったわー。もう“じょうけんはんしゃ”ってコワいわー。考える前に言うとるんやもん♪

「おうおう！いいぞー！何がいい？チョコか？フルーツ系か？それともスタンダートにいくか？」

「んと、んと…。あっ、あんな？あんな？アレがええわ！この前、幼稚園卒業した時に食べた、アレ！」

葵兄さまが作るケーキの種類の多さに、ほんとー、迷ったわー。それで一番、美味しかったケーキにすることに決めたんや♪幼稚園の卒業にお祝いで食べたケーキアレはメッチャ美味しかったんよー♪

でも、アレって値段がメッチャ高いってミリー姉さんが言うとったなー。食べたい言うた後で思い出したわー…。これはアカンかなー？葵兄さまはなんやむつかしいお顔しとるしー…。

「ア、アレ？アレというのは限定スペシャルケーキのことか？木乃香ちゃん…」

「そうや！それそれっ！あれって、メッチャ美味しかったんや♪もう一度食べたいわー」

「そ、そうか…。アレか…」

やっぱ、アカン？この前、食べた時はただ美味しくて何も聞いとらんかったんやけど、ほんとーは、そんなに高いんかな？うちのお小遣いで足りるやろか？いざとなれば、うちのなけなしのお金を葵兄さまに渡して少しでも足しにしてもらうんや！

それでケーキは…どうなんやろかー？…アカンー？

「もしかして…アカンの、やろか？うち、我が侭…言うたんか？」

「無い！無い！我が侭なんかじゃ無いぞぉ！ただね？ちょーっと考えただけだから！大丈夫！ちゃんと作ってあげるぞー！はっはっはっ！…はぁ」

「やった♪葵兄さま、ありがとーな。うち、幸せや♪」

「ハハハ…木乃香ちゃんに喜んでもらえて俺も嬉しいよ」

やっぱり、うちは葵兄さまのこと大好きや♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　木乃香

――麻帆良市立第一小学校校門前…。

Ｓｉｄｅ　葵

木乃香ちゃんの小学校の入学式にちょうどいいと考えて学校内の先生（魔法先生）の確認をしていたら少し時間がかかってしまった。それなりの使い手だったら木乃香ちゃんの迎えに来た時に気付かれて面倒なことになる。主に俺の正体的な意味で！

気軽に木乃香ちゃんを迎えに来たいから俺は、こんな面倒なことも手間隙かけてやっているんだ。大きな面倒を回避するためには小さな手間隙がかかるものなんだよ、うん。…それでも巻き込まれる時は巻き込まれるけど、ね？ハハハ…。

そんなこんなで用事を片付けた俺は木乃香ちゃんが待つ校門の前で行ったんだ。あとで合流しようと待ち合わせを提案したのは俺だから待たせたことに悪いなぁっと思ったね。時計を見たら３０分も待たせちゃったんだもん。

それで無事に合流して他愛も無い話しをしていたら木乃香ちゃんが「葵兄さまは、うちのことを心配してくれたんや。嬉しいへ？えへへ♪」なんてハニカミながら嬉しいこと言ってくれるから俺は少し調子に乗って…。

「木乃香ちゃん…。よーし！今日は進学祝に好きなものご馳走しちゃうぞ！」

そんなことを言ってしまったんだ。でも仕方ないだろ？子供の笑顔には勝てないって…。喜ぶ顔を見てみたいじゃない？まぁそれが今回は実に微妙な失敗をしてしまったんだけどね。いやー、木乃香ちゃんも強かに育ったものだよ。うん、本当に…。

「ほんとーに！？それなら、うちは葵兄さまが作ったケーキが食べたいわ♪」

「おうおう！いいぞー！何がいい？チョコか？フルーツ系か？それともスタンダートにいくか？」

「んと、んと…。あっ、あんな？あんな？アレがええわ！この前、幼稚園卒業した時に食べた、アレ！」

幼稚園の卒業祝いの時のアレと聞いて少し顔が引きつった…。

「ア、アレ？アレというのは限定スペシャルケーキのことか？木乃香ちゃん…」

限定スペシャルケーキ…。これは最高級の素材を厳選に厳選を重ねて尚且つ新鮮なフルーツを盛り付けたケーキ。甘さもカロリーも若い女性に満足してもらえるものを用意した。だが、その反面新鮮なフルーツ故に作成後、直ぐに食べないと味が落ちてしまい美味しさも半減してしまう。

そんなデリケートなケーキは頭に限定とあるように1日1ホールしか作れない予約ものだったりする。そしてこのケーキ値段もバカ

高い…。こちらが1ホールなのに対して他のケーキを買うとしたら12のケーキをホールで買える値段だ。単純計算で12倍…。

なんで、こんなケーキを作ったのか?ここ麻帆良で新規開店するに当たって限定という商品で赤字覚悟の宣伝効果を期待したものだからだ。実際この試みは当たりだった。若い女子学生や主婦などが店内に集う場所になったんだ。

しかし、まさか、アレが食べたいなんて…。木乃香ちゃんも、やっぱり女の子ってことなんだろうね…。

「そうや!それそれっ!あれって、メッチャ美味しかったんや♪もう一度食べたいわー」

「そ、そうか…。アレか…」

そりゃー、美味しいだろうさ。これで不味かったら二度と店には並べないよ。コストがかかるだけの物なんてあるだけで害悪だしね。切る時には躊躇っちゃイカンのよ。切る時はバッサリ切らないとね。

しかし…マジかー…アレかー…。どうしよう?今日の分の限定品は、もう予約分は売れちゃったしなー…。もう一度作るにしても時間が足らないよ。

「もしかして…アカンの、やろか?うち、我が侭…言うたんか?」

ダメじゃん!!子供の願いを潰しちゃダメじゃん!!俺ッ!!!ハッ!!そうだよ!「工房」の中なら…ヤレるッ!?あの中なら時間を引き伸ばすことができる!!やった!これならなんとかなる!!木乃香ちゃんの期待に応えられるぞ!!

「無い！無い！我が侭なんかじゃ無いぞぉ！ただね？ちょーっと考えただけだから！大丈夫！ちゃんと作ってあげるぞー！はっはっはっ！…はぁ」

「やった♪葵兄さま、ありがとーな。うち、幸せや♪」

「ハハハ…木乃香ちゃんに喜んでもらえて俺も嬉しいよ」

出費は痛いが木乃香ちゃんの笑顔を見られただけで一応、満足かな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第三十二話「麻帆良と入学式とケーキと」（後書き）

木乃香、微妙に暴走中な気がする…！？
作者はどうしたんだ！？って私か！？

ＰＳ．自分でも何をしたいのか、わかりません。

第三十三話「木乃香と明日菜とお泊り会と」（前書き）

活動報告でも書きましたがパソコンの初期化に伴いテキストデータが消滅したため更新が遅れました。
とりあえず復活しました。更新するのは今まで以上に亀化しますが長く生暖かい目で見守ってください。
では、続きです！どうぞ～。

第三十三話「木乃香と明日菜とお泊り会と」

――麻帆良市レストラン街…。

Ｓｉｄｅ　葵

木乃香ちゃんが小学校に入学した日から数日後。木乃香ちゃんのクラスに一人の転校生が来た。まぁ、誰かと言わなくてもわかるんだが…明日菜だ。

原作とは多少の誤差はあるかもしれないが一応は予定通りと言えるな…よね？明日菜がいつ頃、麻帆良に来るのかは覚えとらんのよ。でな？なんで、明日菜が麻帆良に来たのを知っているかと言うとだな。

…　…　明日菜が　直接　来たんだ　俺の　店に　な。

あー…、もう少し詳しく言うとだな。明日菜が転校してきた日に木乃香ちゃんが「葵兄さまー♪新しい友達やー♪」って連れて来たんですわ…。これは予想していなかった。いやー、俺も油断したわ。

出会うとしても転向してきてから2，3ヶ月後かなー？って思っていたのに初日の転校直後ですよ？お兄さん歓迎の準備ができていませんでした…。

俺は詳しくは知らんが、今の明日菜の記憶はジャックやアルが封印している。まぁアイツ等なりの配慮ってやつなんだろうさ。誰だって親しい人が死んだらショックだろうからな。幼いころに、そんなのがあったらトラウマものだよ？

まぁそんな訳で俺達のことも記憶に無い。…だとしても俺達も短い間とはいえ可愛がったこともあるんだ。少しは歓迎してやりたいじゃないか。それなのに何も準備していないんだ。これは俺の失態だ…。

即効で歓迎会を開こうとしましたよ。でも外は暗くなってきていたこともあって歓迎会は後日の放課後ということになった。一応、時間も遅くなってきていたのでアイリとマリーに2人を寮に送ってもらうように頼んだ。

残った俺達は後日の歓迎会の準備だ！ふっふっふっ！明日は派手な歓迎会にしてくれるわ！あーっはっはっはっ！！

――そして当日、喫茶店クレイドル店内…。

「…なんてこと考えておりました」

「……葵？」

「あー、何でもないぞ。…明日菜は楽しんでいるか？」

「？……こくん。楽しい？」

「……明日菜よ、なぜに疑問系なんだ？」

そんなこんなで“明日菜ちゃん転校おめでとう！歓迎パーティー♪”の最中なんだ。なんだけど……。ここでまた想定外のことが起きてしまったんだ。いや、うん…。よく考えてみれば当然っちゃ当然なんだけどね。

簡単に言うと参加メンバーが増えました……。木乃香ちゃんのクラスメイト達が数人……というか半数が来てしまった。流石は未来のA組だ。まだ幼いながらも、その行動力はなかなかに侮れないものがあったよ。

委員長のあやかちゃん。鳴滝姉妹の風香ちゃん、史伽ちゃん。ニンニン娘の長瀬・楓ちゃん。チア3人組（予定）とか、などなど…。他にも居るけど今は置いておこう。

それにしても、すごい勢いで料理が無くなっていきますわ……。胸焼けしそう…うぷっ。料理とお菓子足りるかな？一応、今もミリー他数人が調理中だけどね。補充は欠かせません。

「あー！あすな、ダメやー！？葵兄さまの膝はうちの！」

「は？」

皆の食べっぷりを見ていたら木乃香ちゃんの声でそんな言葉が聞こえた…。今度は何なん？いや、木乃香ちゃんが言うとおり明日菜が俺の膝の上に座っているんですがね。でも、言ってしまえば、そ

れだけじゃん？問題ないよね？

木乃香ちゃんは何をそんなに目くじら立てているんだろう？アレかね？お気に入りの玩具をとられた時の気持ち、かな？

「ほーら。あすなー、早う降りぃやー？」

「？…。……ヤ」

「――――ッ！？」

す、すげぇ…。一言どころか一文字で拒否った…。俺でも二文字が限界なのに…。明日菜、恐ろしい子！

それはともかく華麗に断られた木乃香ちゃんは絶句。誰の演出かは知らないけど背景に雷と津波の幻視が見えたような…。き、気のせいだな、うん！

「う～ッ！葵兄さまー！…」

「え？」

そんな子犬が縋るような目で見られてもなぁ。俺にどうしろと言うのかね？それと俺の膝は俺のものだかんな？木乃香ちゃんのじゃないぞ。

うーん？それでもまぁ、このままだと木乃香ちゃんが、なぜか泣きそうなので明日菜にお伺いしてみるか。では…。

「あー…。明日菜？とりあえず、降り…」

「ヤ」

今度は即答!?それに最後まで言ってないのに!?この短い期間にどんどん腕を上げるなぁ…。

ジャック、アル…。本当に明日菜の記憶封印したのか?昨日会って今日なんだけど前と同じくらい懐いてくれるんですけど…。どういうこと?記憶操作の魔法は無効化されたか…。魔法薬の選択を間違えたかして催眠暗示すらも間違えたんじゃないか?

「うー!うー!」

「…はむ…むぐむぐ…はむ…もきゅ…」

明日菜…木乃香ちゃんの相手してあげようよ。何、わたし関係ありませ~ん♪みたいにケーキを食べているのさ…。木乃香ちゃんがうー、うー、って言ってるじゃないか。もう、かーいーなー♪

あー、もー。ケーキを頬張り過ぎだって口の周りがクリームだらけじゃないか。ダメだぞ、明日菜?ほら、ちゃんと拭かないと…。キレイ、キレイ…。よし!

あー、それよりも木乃香ちゃんか…。これ以上は拗ねてしまうかもしれないからな。

「…木乃香ちゃん、こっちに座る?」

「(ジーー)あ、あ葵兄さまが言うなら、しし仕方あらへん。うちも…うんしょ」

明日菜の座る左足とは逆に右足を出して聞いてみた。これは俺が考えた妥協案だけどね。だってこれはお気に入りの玩具をとられた子供の心理ってやつだろ？ならば2人で分ければいいんじゃね？という発想の元、実行したんよ。

他意は無いでござる。両手に美少女♪なんて考えてないでござるよ？

でも、ああ、癒されるわー。子供はいいねぇ。見ていて飽きないよ。あっちにちょろちょろ、こっちにちょろちょろ。動きっぱなしで落ち着きが無い。元気なのはいいことだけどな！

下手に目が離せないや。この子達が怪我したら店長である俺の責任問題にもなるからな。怪我なんてさせないけどね！！

「えへへー♪葵兄さまはあったかいなー♪」

「……こくん。葵は暖かい」

皆さん聞きました？可愛いですねぇ。左に明日菜、右に木乃香ちゃん。2人の可愛さにマジで癒されるわー。両方から“ぎゅっ♪”ってされているんです！身長差的なこともあって俺の腰辺りでね。

この町に来てからは裏で学園の魔法使いに俺達のことがバレないように様々な工作をしていたから多少は精神的な疲れがあるのよ。それに木乃香ちゃんを狙った学園外からの侵入者の相手をしたりね。

それをこの2人は癒してくれるの。まさに砂漠の中のオアシスですな！

あれ？木乃香ちゃんから魔力、が…？

「……（ジーーー）」

「な、何？葵兄さま？そんな見つめられると、うち恥ずかしいわ」

「あ、あぁ、いや、ごめん。なんでもない」

おいおいおいおい！木乃香ちゃんから魔力がダダ漏れになってるぞ、おい！？これじゃ探索系が得意の魔法使いだったら見つけてくださいって言っているようなものだぞ！体内の魔力が使われることが無いから溢れてきているのか？

クッ！このままではマズイな…。このままでは西以外の組織にも目をつけられることにもなりかねん。とりあえずは出来合いのマジックアイテム渡して漏れ出る魔力を緩和させるか。急いで木乃香ちゃん用のアイテムを作らないとなぁ。

一般人に見えるようにするのは、ぬらりひょんが不審に思うだろうから…。そうだな。一般魔法使いくらいで抑えるように調整して。成長とともに緩和、リミッターが外れていくタイプにするか。

これなら成長とともに自然と保有魔力が増えていくように見えるだろう。まぁ何はともあれ今はパーティーを楽しむとするかね。えっと、料理は…って明日菜と木乃香ちゃんが俺の膝に乗っているから動けないじゃん…。

――カラコロ～ン♪

誰かが入ってきたようで入り口のベルが鳴った。おかしいなぁ？入り口には本日貸切の札を出しておいたんだけどな…。

「こんにちわ。こちらに神楽坂・アスナ…君…が…？……ッ？！」

何故か居るし…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良市レストラン街への道中…。

Ｓｉｄｅ　タカミチ

学園区域からレストラン街へ向かって歩いている。途中、ヤンチャな学園生等がオイタしているところに出くわして、これを補導しながらね。これでも広域指導員も勤めているから。

麻帆良は色々と賑やかだから問題も多いから日に数度の割合で、多い日には二桁の大台で騒ぎが起きることもあるんだ。今日は二度目の遭遇だから少ないほうだね。ここの生徒等は本当に元気だよ。ハハハハ。

「それにしてもアスナ君の歓迎会を開いてくれるなんて、いい友達ができたようじゃないか…」

そうなのだ。こうしてレストラン街に向けて歩いているのも転校

初日の昨日、アスナ君が言っていた歓迎会の会場に僕はアスナ君を迎えに行くからだ。

放課後に行われるということだった。今はそれから二時間も経ったから既に日は夕暮れの色に染まり始めている。

「えーと…アスナ君の話しだと、この辺りのはずなんだけど…。ん？あそこか？」

あ…れ？でも、あれは…。あの看板…“クレイドル”？葵さんの店と同じ？でも、あの人は京都に居るはず。…同じ名前の別の店、か？

と、とにかく入ってみればわかるか。

――カラコロ～ン♪

扉を開けると喫茶店によくあるカウベルが鳴った。

「こんにちわ。こちらに神楽坂・明日菜…君…が…？……ッ？！」

賑やかな店内に入ると、まずは店長と思われる人がアスナ君と木乃香君を膝に乗せた後姿が見える。２人とも楽しそうにしていることから店長は相当に懐かれているようだ。嬉しそうにケーキを食べているよ。

僕は、その人に声をかけた。そしてこちらに振り向いた店長は…。

「……いらっしゃい、タカミチ。でも今日の当店は貸切だからね？」

「…タカミチ？」

「？？だれなん？あすなー」

アスナ君と木乃香君が何か言っているが僕は目の前に居るはずの無い人が居ることに驚いていて、それどころじゃない。

「え？は？？え？？？なぜ、貴方がここに居るのですか？貴方は京都に居るはずでは…」

そうだ。葵さんは京都で隠居して喫茶店をしているはず。なぜ、ここ麻帆良にいるのだろう？おかしい…。麻帆良の監視網に引っ掛からずにいることもそうだが、麻帆良に来たのなら、なぜ僕や学園長に一言連絡しないのだろう？

わからないことばかりだ…。葵さんは秘密主義なところが多々あったが今回のことは寝耳に水だったから僕も混乱しているようだ。何せ、葵さんが居るということは彼の軍隊が、ここに居るということなのだから…。

葵さんが無闇に暴れることは無いと思う。だけど、このことが知られたら他の学園所属の魔法使いが過剰に警戒するかもしれない。

ハッ！まさか、葵さんは、そのことに配慮して、こんな隠蔽工作を？下手に混乱と疑惑を撒き散らさないよう、にした…？ダメだ…。わからない…。

「ふむ…。俺がどこに居ようと俺の勝手だと思うんだがな。まぁいい、ここで話すのもなんだから少し奥に行こうか？」

「は、はい。僕も話したいことが今できましたから、是非…」

それは僕としても助かりますよ。是非とも今回のことについて説明してもらいたいです。

「よし！それじゃ、明日菜、木乃香ちゃん。俺はタカミチと話しがあるから降りてくれる？」

「……こくん」

「えー、葵兄さま、行くん？むぅ、しゃーないなー」

アスナ君は長い沈黙の後に首肯し、木乃香君は文句を言いながらも葵さんの膝から降りた。２人が降りたことで立ち上がった葵さん。

「うん、ごめんね。直ぐ済むから。…ハオ、ユエ？」

でも、２人と目線を合わせるためにしゃがむとすぐさま申し訳なさそうに謝罪にした。背後には今も変わらず葵さんを守護するハオさんとユエさん。

「ハッ、この場は吾等にお任せを」

「我が君は、ごゆるりとしてくださいますよう」

「うん、お願いね。それじゃ行こう。こっちだ」

２柱の剣姫に葵さんは後のことを頼んだようだ。僕は葵さんの促した店の奥へと彼の後について行く。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　タカミチ

――喫茶店クレイドルの応接室…。

Ｓｉｄｅ　葵

ちくせう…。まさか、タカミチが直接迎えに来るなんて思いもしなかった。明日菜には家の者が帰りは送るから保護者の方に伝えておくように言っておいたのになぁ…。なのに…。ちらっ。

「？何か？」

「いや、なんでもない。…ここだ。まぁ適当に寛いでくれ。お茶も言っておいたから直ぐに来る」

「ああ、お構いなく。僕はアスナ君を迎えに来ただけですから」

社交辞令ですね？わかります。でも、残念！このまま帰すわけにはいかないのよ。俺のこともバレちゃったからね。そこのところを厳重に口止めしておかないといかんのよ。

たくっ、予定ならネギ少年が麻帆良に着任する前後に姿を現そうと考えていたのに…。何で、タカミチがここに迎えに来てんだよ。

――コンコン。

「葵ちゃーん。お茶を持ってきたのー」

む？もう“確認できたのか？”うちの者達は仕事早くて助かるわぁ。

「はいはい。開いているから入っておいで」

「んと、失礼しまーす。はい、タカミチ君、どうぞなの」

「あ、これはどうも」

「…葵ちゃんはこっちなの【…お店の周囲にタカミチ君以外の魔法使いは居ないの…】」

ふむ、居ないとなると今回の接触は本当に偶然だったのか…。タカミチも何とも間の悪いこって。さて、どうしようかなぁ…。よし、下手に動くと発見されるだろうから様子見といこう。誘い出す罠だったなら笑えないからね。

「ありがと、ファレノ【…そっか。引き続き監視のほうをよろしく…】」

「それじゃ、また何かあったら呼んでほしいの【…アイアイ・サー。私達に任せるの…】」

ファレノが出て行ったので持って来てくれたお茶をいただこうかな。ほら、タカミチも飲みなって、きっと美味しいからさ。

「うん。んー、いい香りだ。ファレノも腕上げたなぁ。ふぅ…それでタカミチは何を聞きたいのかな？」

「早速ですね。まず一つ目に聞きたいのは京都に居るはずの葵さんがなぜ麻帆良に居るのかが知りたいのですが？」

紅茶の香りを楽しみながらタカミチに話しを促してみたら“一つ目”の質問をしてきた。この子ってば幾つ質問する気なんだろね？とりあえず適当に話しを濁しつつ答えていくことにしますかね。

「ふむ、まぁいい。“なぜ居るか？”という質問か？例によってそれは禁則事項だ。だが…麻帆良に危害を加えないことを確約しよう」

「…そうですか。では目的は何でしょう？」

こいつ…麻帆良に危害を加えないって言っているのに、こちらの情報を引き出すために探ってきやがる…。まぁ俺自身家族以外は秘密主義で通してきたからな。そこが疑わしくしているのかもしれない。

だからって素直に教えてやる気はまったく無いがな！！正直言って家族と俺が気に入った奴以外はどうでもいいわ。どうなろうと知ったことじゃありませーん。

「バカもん。俺が秘密主義なのは知っているだろうが。…あー、わかった、わかった、そう睨むな。…仕方ないな、もう」

なんだよー。タカミチったら睨むことないじゃないかよう…。だいたい秘密主義のどこが悪い？ただでさえ俺は不老ってだけで昔、追われたこともあるのだから慎重になったっていいじゃん。はぁ…。

「麻帆良への出店が目的の一つ。こっちに来るオマケで“ある人物

”の護衛（？）というか見守るように頼まれている」

「ご、護衛しながら出店？」

「逆だ。寧ろ出店しながら護衛するの。護衛というのも、ただのオマケで大半は見守るだけだけど」

「…因みに護衛対象は？」

タカミチよ…。それは、無いわぁ…。いくらなんでも、無いわぁ。俺が何のために秘密裏に護衛対象を見守ることにしていると思っているんだよ。護衛対象の私生活を壊さないように、且つ近くで見守るためだろうが。

誰だっていきなり私生活を破壊されるなんて我慢できるはずがない。だから俺は遠距離から、近距離から十重二十重の守護を張り巡らせているのよ。俺は友の願いには最大限の配慮をします。…俺と家族に不都合が無い限りだけどね。

なのに、タカミチは俺に最大限配慮するべき護衛対象の名を明かせと言うのか？

「タカミチ…それを俺が言うと思うか？」

「……いえ、聞いておいてなんですが、まったく思いませんね」

「だろ？それで他に聞きたいことは？もう一、二個くらいなら答えてやろう」

まぁ俺も答えられないことが多いから少しくらいは答えてもいい

かな?と思わないでもないわけなんですわ。モノによるけど、ね。ぶっちゃけ答えなくてもいいんだけど…。それに、このままだとタカミチも納得してくれないからな。

さぁ、さっさと質問してみ?

「そう、ですねぇ…。なぜ、麻帆良の学園長…近衛・近右衛門に葵さんが居ることを告げないのですか?そうすれば護衛もやり易くなるのでは?」

「まぁ告げないのは喫茶店をメインにしているから秘密裏にしたかった。隠密行動のほうが楽だからってのもあるな。それと護衛じゃなくて見守るだけだからな?間違えるなよ?」

麻帆良のぬらりひょんに俺の存在をバラせと言うのか?それは勘弁だわぁー。あの学園長に知られたら絶対、厄介事に巻き込まれそうなんだもの。マジで無理。

「なるほど…。それで本当のところは?」

「ぬらりひょんに俺の存在がバレたら無理難題を吹っ掛けてきそうだから面倒くさい」

あっ、しまった…。話しの流れで本音が洩れてしまった。反省、反省…。でもこれが俺の偽らない気持ちだけどな!誰が好き好んで他人の苦労を背負うものかよ。……美人さんなら考えるけど、ね。

「ぬらっ?ん〝ん〝ッ!……学園長は良識ある方ですから大丈夫だと思うのですが?」

タカミチさぁ…いま“ぬらっ”って言いかけたよね？自身でも内心では疑っていたのかね？もしかして？と考えたのかね？んー？

…なんてことは俺の心の中で聞くだけで声には出さないけどな。それはともかく良識のある、ねぇ？世間的には良識ある人物に見えるんだろうけど俺は本当なら係わり合いたくない人種かなぁ。

なんと言うか…そう、本人にその気が無くても結果的に権力に物を言わせて掌の上で弄びそうでさぁ。俺も人のことは言えないけどね。

「個人の良識はあると思う…けど、信用できない。俺の中のゴーストが囁くんだ…。“こいつには気を付けろ。天邪鬼だから”ってな」

「……本当のところは？」

「じじいのためになんか働きたくないでござる！残念ッ！」

「……（ピクピク＃＃）」

「……あっ、つい本音が」

シィィィットッッ！！！またもや、やってしまった！！学園長（じじい）のことを思考内で考察、評価していたらポロッと本音がでてしまった…。さっきも洩れたばかりなのに…。

「葵さん…今回のことは学園長に報告しますが…よろしいですね？」

あっ、やっべ！？タカミチがプルプルと肩を震えながら、そして米神に“＃”マークが！？その上、声まで重低音なんですけどーッ

!?だって!仕方ないじゃん!!俺の本音なんだから!!だいたい、凄んでも無駄だからな!?

「バカもんダメに決まっているだろうが。タカミチだから話したんだからな?……他の奴だったら人知れず消していた」

「なッ!?…そんな、まさか…冗談、ですよね?」

そんな、つまらないことで冗談を言うわけがないじゃないか…。必要なら消すだけだ。…もっとも今の時代、殺してしまうのは本当に最後の手段なんだけど。

「俺は家族や約束のためならできる限りのことをやる。そして障害になるなら、それをあらゆる手段を用いて排除する。……冗談なわけがないだろ?」

「…(サーーー…)」

おー、おー。タカミチ、どうしたんだ?カタカタ、ぶるぶる震えて…。寒いのか?心無いし顔色も悪い気が…?

「おいおい。なに、顔色を真っ青にしているんだよ。タカミチが話さなければいいだけのことだろう?大丈夫だよ」

「……仮に…そう、仮に間違って話してしまった、ら?」

なんだぁ?Ｉｆの話しか?…んー…?

「そうだなぁ…。タカミチは自分が傷付くより他者が傷付くほうが我慢ならないだろうから…。うん、こういうのはどうだろう?」

俺は“Ｉｆ”の話しをしましたよ?どんな話しかを簡単に言うと、ここ麻帆良を火の海にしてやる、ってことだ。

より具体的に言うと、まず麻帆良市全域を広域結界で囲い誰一人逃げられないようにしてから俺の全戦力を用いて殲滅をはじめるのだ。

機動戦艦の主砲の砲撃で大地を抉り、無人機動兵器による広域爆撃で焼け野原にする。各種人型機動兵器の機動攻撃。精魔奇兵の対人殲滅。精霊の広域魔法重爆撃攻撃。悪魔のの特殊戦術戦闘。ｅｔｃ，ｅｔｃ…。

麻帆良は一面焦土となること請け合いよ。あっ?俺がやらないと思っているだろ?確かに好き好んでそんなことはしないけど必要ならやるよ。

昔ちょこっとやりかけたんよね。敵軍団の2割ほど殲滅したら降服してきたんさ。まぁそんな昔のことはいいな…。

「……それでタカミチ、どうする?」

「話しません。話せるわけが、ない」

タカミチが賢明な判断をしてくれて俺も嬉しいよ、うん。余計な手間を省くことができるし、知人を消すことをしなくてもいいんだからね。死体って処理に意外と手間かかるんだよ。

「うん。脅したみたい…いや、これは脅しか?とにかく、ごめんね?数年したら、こっちから学園長には挨拶に行くから今は見逃して

よ」

「はぁ…わかりましたよ。でも、葵さんが偶然、学園長達に接触した場合は…」

「その時は、仕方ないから諦めようかな。タカミチの気にすることじゃないよ」

今回のタカミチの例があるから、その辺りは仕方ないと考えているさ。でも、今回のことがあったから学園長は絶対に遭遇しないように手配する！木乃香ちゃんのことがあるから難しいけど…なんとかなるっしょ！

木乃香ちゃんが連れて来なければ……ね？一応、学園長も仕事が多くて忙しいはずだから滅多なことではここにはこないと思うけど……。大丈夫だよ、な？

「そう、ですか」

なんか、タカミチが疑いの篭もった半眼ジト目にて見てくるんですけど…。ナニ、コレ？俺ってば疑われているのか？

む？話していたら結構、時間がたっていたようだ…。

「さてと！そろそろいい時間だ。明日菜のこと迎えに来たんだろ？」

「あっ、はい。そうでした。葵さんのことで動揺していたようです。すっかり忘れていました」

「おいおい。そんなことでどうするんだ？明日菜のこと…託された

んだろ？」

「……はい。そうですね」

しくじった…。今の発言はタカミチにはタブーだったか…。なんか一気に“ズーン…”って感じで落ち込んでいるんです、けど？影なんか背負っちゃってるよ…。忘れろとは言わないけど前を向けよ。ガトウが浮かばれないだろ？

「ガトウは…いや、なんでもない。ほら、行くぞ」

「はい…」

まぁ俺も落ち込ませた手前、慰めようと考えて何か言おうとしたけど、ここは何も言わないのがいいと考え直したんだ。いい大人、それも男がメソメソしていても格好悪いだけだし。同じ男としては見て見ぬ振りするのもアリだろ？

――移動中♪

とりあえず大まかな話しが済んだからタカミチは当初の目的通りに明日菜のお迎え。俺は歓迎会のお開きにするにあたって他の子を寮に送ってもらうように指示したりするために会場となる店内へ戻った。

そう、それで戻ってきたんだが…。

「むぅぅぅぅぅぅ！」

「…ッ！…ッ！…ッ！」

明日菜と木乃香ちゃんがプクーッと頬を膨らませて睨み合っていて、他の子達はその周りで囃し立てるようにしてたんだ…。流石に俺でも状況が読めませんって…。というわけで、この場を任せたハオ達に説明を求めた。

「ナニ、コレ？」

「ハッ…。我が君らが奥へ行った後のことです。タカミチが明日菜を迎えに来たことを切欠にして突然、木乃香が、その…当家に宿泊したいと申しまして」

「明日菜は、なぜかそれに対抗するように自分も泊まると言い出しまして…。こういうことです」

ごめん…ハオ、ユエ。俺には原因がわかりません。とにかく木乃香ちゃんのお泊り宣言に明日菜が感化された、んだよな？そういうことだよな？

あれ？じゃあ何で周囲も盛り上がっているのかね？木乃香ちゃんと明日菜を囲んでお祭り騒ぎ状態なんだけど…。

「はぁ？…それじゃ２人の周りの子達は？……まさか…」

「…ハ、そのまさか、です。２人に感化されたようで「今日はお泊り会だーッ！！」と、お祭り騒ぎに…なりました」

オゥ、シット！この子達って本当に小学校低学年か？行動力がハンパ無いんだよ…。いや、これは幼いからこその行動力、か？とにかく素早い…。とりあえず明日菜に関しては後見人のタカミチに聞くとするか…。

「そう…。タカミチ、どうしよう？部屋数はあるから家はいいんだけど」

「ハハ、ハハハ…。お願い、できますか？学園長や寮のほうへの連絡は僕のほうから上手く話しておきますから」

そうだった…。この子達が家に泊まるとしたら確実に学園長の耳に入るかもしれない。それではこれまでしてきた色々な苦労が全て水の泡となるかもしれない。それは勘弁だわー。なんと言うか…萎えるよね？色々と、さ？

そう考えるとタカミチはナイス判断だね！俺の苦労というか手間を排除してくれるんだからさ！

「まぁ、了解だ。……あー、２人とも？」

「葵兄さま！今日はお泊りさせて！」「…葵、わたし、泊まる…！」

そんな２人して言わないでくださいな…。最大１２８人までなら聞き取ることはできるけど脳内処理が面倒くさいのよ。因みに前にも、ちょろっと言ったけど俺の脳はナノマシンとマルチタスクで思考は強化・補助されておりますが、ナニカ？

「あー、あー、みなまで言わんでも話しは聞いた！…他の子も泊ま

ってお泊り会なんだろ？」

「そうや！」「…そう」

「「「「「はい！よろしくお願いします！」」」」」

皆、無駄に元気だねぇ…。そのノリにお兄さんは歳のせいか着いて行けないかもしれないよ。えーっと…人数は、ひの、ふの、みの……十数人程か。部屋を用意して、あと細かいところで洗面用具とかお布団とかを用意しておかないと…。

「……お泊りについては了承した。寮への連絡もタカミチが手配した。それと明日も学校があるんだから今日は早く寝るんだぞ？いいね？」

「「「「「はーい！」」」」」

返事だけは素直だね…。この子達って絶対に体力が続く限り夜通し騒ぎそうな気がする。んー…。でも、大丈夫、かな？何だかんだで歓迎会で騒ぎっぱなしだったから疲れているはずだから直ぐに寝るか。でも…。

「不安だ…。それじゃ、タカミチ、連絡のほうはよろしくね？」

「はい、こっちは任せてください。ですので…」

「わかってるって。…（ボソッ）この店は下手な要塞よりも堅牢だ。安全は保障する」

この子達を預かる限り、最大限の安全を保障するのは当然だよね。

魔法騎士団一個師団が来ても軽く捻ってみせるぜぃ。冗談抜きでね。

「…よろしくお願いします」

タカミチは、そう言うと店を後にした。

ごめんね、タカミチ。折角、迎えに来たのに…なんか、無駄足踏ませたみたいになって…。ん？俺のせいじゃないか…。俺が謝ることなくね？それに明日菜や木乃香ちゃん達が泊まるのは予定外のことだったしな。

さて、と俺も今日は風呂入って、もう寝よう…ふわぁぁあ、ふぅ…。

翌日、朝、起きると俺の布団の中に木乃香ちゃんと明日菜が潜り込んでいたのは余談だったら余談だ…。どおりで布団内が温(ぬく)いと思ったわ……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第三十三話「木乃香と明日菜とお泊り会と」（後書き）

タイトルと内容、関係無ぇ…。萌えも無いし…。
萌えって何だろう?作者はわからなくなりました…。
葵も今回は、なんだかお父さん化（?）してきているし。

とにかく続きを書いて修正しよう…。色々と、ね。
では、また!チャーオッ!

第三十四話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」前編（前書き）

ムシャクシャしてやりました。はぁ…。

第三十四話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」前編

――麻帆良市某所近郊…。

Ｓｉｄｅ　葵

木乃香ちゃんも順調に進級して既に今年の春から小学六年生。そんな時だ。うちの情報部の諜報一課が、とある情報を察知したのが今回の始まりだった。

情報によると関西呪術協会内にある強硬派という派閥の一部が暴走。絶大な魔力と近衛家の正当な血統を持つ木乃香ちゃんを自分達の旗印にして西洋魔法使いを初め他の魔法使い達を駆逐して、自分達が魔法世界の頂点に君臨しようと画策している、らしい。

俺は、ここで疑問に思った。百にも満たない構成員で、どうやって魔法世界の頂点に立とうというのだろうか？とな…。

もしかして…木乃香ちゃんの魔力を元に式神や使い魔を大量召還して補おうとでも言うつもりか？これなら俺も似たようなことをしているから理解はできる、が…果たして強硬派の連中に大量の召還魔達を制御できるのかが疑問だ。

俺の場合は精霊や悪魔、皆の好意から精霊・悪魔契約という最上級の契約方法をしているから精神的、魔力的な負担なんかを最小限（殆どは免除）されているから問題無い。

更に言うならば彼女達は全員が俺の魔力で強化、補正されているから、この世界の輪から既に外れている存在だ。彼女達は俺という世界に属している限り無敵とまでは言わないが一つ一つが強力な固体として存在している。

話が逸れたな…。

話しを戻すが、彼ら（彼女ら）は違う、と思う。中には個人で特殊な契約している者も居るかもしれないが普通に考えればそれは、まず有り得ない。俺が例外なんだってミリーやオリビエ達が言っていた。

まぁ俺の場合は例にならないから強硬派だけで見てみると…不安だ。絶対にどこかで制御から外れると思う。その果てに召還魔の暴走…。イカン…眩暈がしてくる。自分の力量を超えて力を振るいたがる連中ほど始末に終えないものはないね。

――情報取得から3日後、麻帆良市近郊の森林…。

なんてことを考えながら俺達は一課が集めた情報を元に誘拐の実行犯が通る場所である、ここで網を張って待機中なんだわ。

時刻は午前0時近くの深夜だ。周囲は樹木の生い茂った森で視界は夜というのもあり最悪。しかし、目の前には拓けた場所があり俺達はその手前の茂みに身を潜ませて待ち構えている。待っている間に耳を澄ますと近くから川の流れている音もするな。

『我が主。動体センサーにおよそ40個の反応がある。目標の先頭部は数分で、こちらと接敵するぞ』

ラミエルさんが敵と思われる生体の動体反応をセンサーでキャッチしたようだ。コミュニケに送られてくるレーダーの情報にも反応があり、だいたい第一陣と第二陣の二つに分かれてこちらへ進軍中だ。

3Dマップで構築された映像を見る限り全員が陰陽師で神鳴流の剣士は1人も居ないようだ。

しかし、陰陽師が40人前後か…。えーと、陰陽師1人につき前鬼、後鬼の式神が1体ずつの計2体。それだけじゃなくて、その場限りの召還術には注意だ。油断すると2倍、3倍の戦力に膨れ上がるからな。

東洋の召還術は西洋とは違って召還コストが段違いで、維持する魔力の燃費もいいから、厄介だよなぁ。久しぶりにゴーレム研究でもするかな…。案外、楽しいかもしれないし。

いやいやいや。今は敵生体の迎撃と排除が先決だな、うん。

「来るか…。ハオとユエは、いつも通り俺の護衛お願いね？」

「承知しております。我が君は心安らかにご安心のほどを」

「元より、この身は我が君をお守りするためにありますれば」

うん。いつも通り、とっても頼もしいです。2人に守られていると安心だな。多少の無茶をしても大丈夫だしね。なんと言うかね？ハオもユエも付き合い長いからねぇ。俺のしたいことを理解してくれるんよ。

「ありがと、任せるね。アイリ、ファレノ、リチラは三課の3チーム（4人編成で計12名）をそれぞれが率いて半包囲して逃走を阻止、余裕があれば各個撃破で、よろしく」

親衛隊3人娘にも今回は参加してもらうのさ。久しぶりの実戦だから他の皆も張り切っているよ。今日も皆は元気です！

ところどころから「目標10人切り！」に始まり「私は火炙りかなぁ」とか「やっぱり凍死が一番だよねぇ♪」、「いやいや、感電死なども…」などなどが聞こえてきたような気がしたけど…気のせいだ！若しくは気の迷いか、幻聴だ！

「任務、了解しました。指令閣下のご期待に応えてご覧に入れますッ」

「了解、任せるの。捕捉！包囲！殲滅なの！」

「承りましたわ。ふふふ♪…（ボソッ）逃がしませんわ」

…ア、アイリだけがマトモだ。それに比べてファレノは殲滅する気満々だし、リチラは何があったのか1人も逃がす気が無いようだ。……2人ってこんなに戦闘狂だったかな？

戦闘が無かったことで禁断症状が出たのか…？うーん、実戦なんて、ここ数年無かったから気分が高揚しているの、かな…。はぁ…、これからはたまに実戦訓練も取り入れようかな？

どっかの紛争地帯に観光気分で送ってみたり、とか。それでお土産はカラシニコフが…なんて。あー…でも中古品は使用に関して信用性が無いんだよなぁ…。まぁ新品は新品で引き金が硬くて使い難いんだけどね。

おっと、実戦訓練の計画は、また今度考えるとしよう。今は配置に着くように指示を出さないとな。

「皆も気を付けて。油断なんかしたらダメだからね？」

「「「「「「ハイッ、頑張りますッ」」」」」」

さっきまでの不穏当なセリフを撒き散らしていたとは思えないほどキッチリとした敬礼と返事が聞こえてきた。……ところでなぜに俺のことを、頬を上気させて見てくるのかね？恥ずかしいじゃないか…。もしかして風邪か？

『戦闘モードへ移行。Ｄフィールドの作動を確認…９８％で安定。全兵装…オールグリーン。戦闘モードへの移行完了…』

フィールド展開は安定しているな。出力の制御はラミエルさんが一括しているから任せておいて安心だ。

それにしても…“全兵装”だぁ？少し前は『各種荷電粒子砲スタンバイ』だったのに…。今回はアレか？ミサイルも出す気なのかね

？ナノマシン散布とかやめてほしいんだけどなぁ。

やらせねぇよぉ！？

被害に遭った地形を元に戻すのメンドイんだよ。地系の魔法や錬金術でパッとやれることはやれるんだけど残留魔力とかを感知されると厄介じゃない？アレってある意味で個人認識票みたいなものだからさ。

まぁそんなわけで割と隠蔽工作は重要だったりする。残しておくと変な騒ぎになりかねんからさ。俺達のことがバレそうな証拠は極力残さないことにしているのよ。

む？どうやら敵さんが近いようだ…。

『先頭部との接敵（エンゲージ）まで３０秒…２０…１５…１０…５秒前…４…３…２…１…接敵』

キターーー（ ゜∀ ゜）ーーーッ！！

バカやってる場合じゃなかった…。待っている間に俺も周りの雰囲気に感化されていたようだ。いつもよりも若干、気分が高揚して好戦的になっている気がする…のかな？気分的なものだからわかり難い。

まぁ何はともあれ行動を起こさねば…。

「行動開始（アクション）ッ！！」

突撃（ラッシュ）！突撃（ラッシュ）！！突撃（ラッシュ）！！！奇襲攻撃だから何よりも速さと早さ。

そして初撃の派手さ（インパクト）と破壊力が必要だ。広域に結界も張ってあるから俺が死なない限り、もう誰も逃げられない…。くっくっくっ！

「親衛隊が長、アイリス…参る！！」

「あっ、アイリちゃん、ズルイの！私も行くの！！」

「全てを凍てつかせて、儚く散らして魅せますわ♪」

「私達も続くぞ！遅れるな！！」

「「「「「オーッ！！」」」」」

号令とともに飛び出していったのはアイリ達3人と、それに続く三課のメンバー12人。

アイリが敵陣の中央を剛力と突破力で引き裂き、ファレノは右翼から進撃した。すると撃破した端から派手に火の手が上がる。リチラが居る左翼は静かなものだが、こちらは右翼とは逆に氷の彫像や氷原ができている。

何、ココ？ここだけ地獄ができあがってきているんだけど…。暑いのか寒いのかハッキリしてほしいわ…。俺も歳だから身体に…堪えないけど、見ていて辛いものがあるよ。

当然、奇襲を受けた敵さんは堪ったものじゃない。攻撃を受けて呆けている間に被害は甚大なものになっていった。

「なっ！何者だ！？貴さッ！ガッ！！」

「クッ！貴様らーッ！！」

「紅林ッ！死ぬな！俺達の野望はまだッ！グハッ！！」

「誰か！後方に知らせろ！敵と接触！迂回されたし、とな！！」

「クソッ！！俺の足が…！！クソッ！クソッ！クソッ！クソッ！クソッ！！！」

敵の第一陣は俺達の奇襲を受けて浮き足立ってマトモな反撃ができずに散発的な攻撃しかできないでいるようだ。迎撃にしては疎らに過ぎるからね。

それで壊滅まで、もう少しかな、って思った時に敵陣も立て直ってきたんだ。既に3分の1は撃破されているのに退こうともしないんだから敵さんの指揮官は頑固者だ。

アイツが指揮官、か？少し先に見える陰陽師然とした格好の３０代後半の男が部隊の混乱を治めつつある。顔だけを見ればなかなかにダンディさんだね。男に興味は無いけど、素直に格好いいと思える。それに…。

「静まれッ！後ろの奴は式神を出して他の者を援護するんだ！落ち着いて反撃しろ！！体制を…陣形を整えるんだ！！早くッ！！」

へぇ…ワンマンアーミーが目立つ魔法使いにしては珍しくも集団戦を主眼に置いたかのような指揮の執り方だ。新世界ならともかく旧世界で、それができるところを見るとそれなりに実力者なのかも

しれない。

うーん、とりあえず、あの指揮官を押さえるとしますか。さっき、第二陣に伝令が走ったようなことも聞こえてきたし時間は、かけられない。

ゆっくり堂々と指揮官に向かって歩いて行く。途中で襲い掛かってくる敵の式神や呪符の炎弾が俺目掛けて飛んできたりするけど気にしない。だってハオとユエが襲撃の尽くを排除してくれるのだから。

それで向こうも近づいてくる俺に気づいたようで凝視してくる。まぁ気付かれているなら話しかけてもいいかなって戯れだけど考えちゃったんだ。

「残念だけど後が支えているんだ。お前らはここで散ってくれ」

「邪魔はさせんッ!!んっ!?な…カハッ!!…水、島…すま…」

なんて話しかけたら俺から指揮官を守るように割って入ってきた男が指揮官の水島さん（？）を守るようにして俺に突撃してきたんだ。指揮官以外に視界に入らない。俺の目的は敵の指揮官だけだ。

そして俺が相手にしていない男はユエの黒刃の一刀の下で切り捨てられた。ふぅむ…。こんな外道な所業に参加する割りに仲間を守ろうとするなんて…。

「桐…原ッ!!…貴様、どこから!?いや!それよりも我等のこと

をどうやって知った!?」

桐原?今、倒れた男は桐原と言うのか?…どうでもいいか。しかし、この指揮官の水島さんとやらも桐原くんが倒れたことで語気を荒くして動揺しているみたいだ。親しかったのか?

第一陣の指揮官ともあろうものがそんなではイカンですよ。感情的になるなとは言わんけど動揺するのは抑えないとダメだって。…とは言うものの俺も他人のことは言えないかな。身内が被害に遭ったらおもっくそ動揺しそうだし。

とりあえず今は目の前の男、水島とお話しかな。

「死ぬにはいい日だ…。そして今宵限りのお前に、それを知ってどうする?」

「――ッ!!ほざけッ!この俺がそう易々と負けるものか!!オンッ!!」

――キシャーーッ!
――オオォォオォォンッ!!

水島は両手で印を結ぶと自分の前鬼と後鬼を呼び出した。一体は細い体に大きな爪と牙を持つ鬼タイプ。多分、こちらは前鬼。もう一体の後鬼と思われるほうは大きな体躯と頑丈そうな皮膚を持った大鬼タイプだ。

「式神を2体、か…。なかなかに早い術式展開じゃないか。正直、驚いた」

うん、驚いた。術式の構成の早さがハンパなかった。勿体無いなぁ…。こんな高い実力を持った人が、こんな暴挙に出なくちゃいけないほど追い詰められているなんてなぁ。

…いや、違う？こいつの目…僅かだが濁った野心が見て取れる。濁りきっていないところから唆されて日が浅いな。成功と引き換えに、この男は何かを得る約定を結んだのかもしれない。

「フンッ！今更、後悔しても遅い！殺された仲間のためにも貴様らを排除し、我等の崇高なる目的のために御旗となる木乃香お嬢様を保護する！！」

排除？崇高…だと？この…下衆ッ！！

「崇高？保護？……戯言を抜かすな！下衆がッッ！！！」

声に魔力を乗せて叩き付けた。なのに目の前の水島は片膝を地に着くも数秒で立ち上がってきた。それだけではなく怒鳴り返してきた。胆力も、有りか…。本当に勿体無いなぁ。

これで、外道で下衆じゃなければなぁ。いや、外道でも誇りさえ持っているなら友として見てもいいんだけど…こいつは下衆だ。下衆はダメだ。信頼どころか信用もできない。昔なら即座に存在ごと消していた。面倒にならずに済むし、ね…。

「――――ッ！…何、だと！？貴ッ様ーッ！！」

「黙れッ！！己が欲望のために子供を利用しようとする。それのど

こが崇高なものか！！外道は外道らしく…いや！下衆らしく！地獄に堕ちるがよいわ！！」

「き、さまッ…！言わせておけばーーッ！！」

――クシャーーーーッ！！！

――オロロロォォォオォォンッッ！！

俺の発言が我慢ならんようです。怒りに任せて式神を嗾けてきましたな。だが…甘い！！

「ハオッ！ユエッ！」

「「ハッ！」」

そっちに式神が居るように、こっちには俺が信頼し分身とも言える愛刀達が在る。その守りは堅牢鉄壁だ。まず俺までは通らない。逆進撃すらして障害を排除する。まぁ仮に2人の守りを抜いたとしても今はラミエルさんも居るから安心だ。

そんで当の2人はというと…。

「白刃一閃ッ！！」

――シャッ！？ア〝ーーッ！！？！

元気に…。

白刃が前鬼を斬りつけた。その刃の一閃は前鬼の左腕を斬り捨てた。首を狙ったのに外れたことにイラッと、きたようだ。オマケと

いうように蹴撃で一撃して蹴り飛ばした。

「黒刃一閃ッ！！」

――オロンッ！？オロロロォォォオッ…！！！

生き生きと…。

ユエも黒刃を一閃。丈夫な皮膚なのもあり斬り捨てるまではいかないが後鬼の左肩から右の腰の辺りまで大きく斬り裂けた。こちらも蹴り飛ばした。その先はハオの蹴り飛ばした前鬼が居る。

「「陽月双閃ッッ！！！」」

――シャシャシャシャーーッ！！！！…ッ！！

――オロロロォオォォンッッ！！…ッ！！！！

式神を屠っていました…。

2体の式神が重なった瞬間、ハオとユエは打ち合わせてもいないのに、まるで合わせたかのように攻撃の動きを2人で斬撃をクロスさせて式神の身体を四つに分割。元の世界に送還した。

式神が分解され消える瞬間、キラキラと構成物質が解けて舞い上がる。それを見てハオとユエは…。

「昇華され、今度は良き主に仕えよ…」

「今は故郷へ帰れ…。これで式神は送還された。覚悟せよ…」

愚者な召還主に最期まで仕えた式神を思って2人は僅かに黙祷を捧げると敵たる水島に射殺さんばかりの鋭い視線を叩き付けた。

「クッ！…しかし、まだだッ！！まだやられんッッ！！オンッ！キリキリ・ヴァジャラ・ウーンハッタッ！！」

しかし、まだ余力があるようだ。連続で印を素早く結ぶと鬼神達を次々と呼び出し始めた。

「うーん？」「あ〝あ〝…」「久しぶりの現界じゃ…」「やれやれ…」「ほほほ…」「……」

「へぇ…。まだ鬼神としては若い部類だけど、それでも十数体も召還するとは、なかなか…」

うん。パッと見だけど百も生きていないようだ。鬼としては、まだまだ若い。やっぱり、二、三百年ほど戦い、生き残ったら一人前と言えるだろうな。

あっ、狐女も少ないけど居るねぇ。…おぅ！？何だ、あの我侭ボディは！？スレンダーが多い狐女には珍しく“ないすばでぇ”だ！！偶然呼び出した割りには、いいのを引き当てたなぁ…。

ぐっじょぶ！水島！なにげに眼福です！！下衆なのに、いい仕事したね！

「ふーッ、ふーッ…。はぁぁ…。ど、どう、だ…ッ！これな、らッ…」

「あ？ああ、お疲れさん。お前は頑張った。だけど、それでも結果は変わらんよ」

イカンッ。つい狐女を凝視してしまった…。狐女のほうも視線に気付いて手なんか振ってくるもんだから戦場なのに少し和んでしまった。あぁぁ、狐女のほうは近くの仲間にからかわれている…。かーいーなー♪

「なん…だ、とッ！？それは…それは、どういうことだッ！！」

「こういうこと♪…ラミエル、アンに援軍要請。遠隔転移、開始」

『Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ．要請の受理を…今、確認した。転移まで１５秒…１０…５秒前…４…３…２…１…転移開始。…顕現（マテリアライズ）します』

お前の間違いは俺の戦力を見誤ったことだ。ここに居るのが全てではないのだよ。ステルス航行で姿を隠してはいるが上空には機動戦艦アングレカムがあり第一種戦闘待機で直ぐさま出撃要請に応えられるようになっている。

あとは座標を特定されないように遠隔転移して出撃。そして無人機動兵器（ブトムシ）などは艦内で順次、生産され補充されることになっている。お蔭で戦力には事欠きませんな。もちろん一度には呼ばないけどね。

『第四機甲中隊１２名！および無人機動兵器（カブトムシ）２５６機！閣下の要請により馳せ参じました！』

「ご苦労様！それじゃ早速だけど総員配置について！」

『『『『了解ッ！！』』』』

人型機動兵器イキシア？のスピーカーから凛々しいけど若い女の子の声が聞こえた。

機体装備は対小型種兵装の甲種兵装だ。内容は魔導式光学砲（レーザーライフル）が一門。２７式精霊鋼短刀（ナイフ）が２、３７式精霊鋼刀（ソード）が２。両肩に二連装５．５６ｍｍチェーンガンと二連装ガトリングレーザー砲をそれぞれ装備している。

要するにエネルギー弾、実態弾を問わず敵の陣地にバラ撒くことのみを考えた甲種兵装だ。下手な鉄砲数撃ちゃ当たるを体現したような兵装なんよ。その分、制圧力は折り紙付きなんだけどね。

「なん、だ？こ、れは…。何なんだ！これはッ！？機械…？貴様には魔法使いとしての誇りは無いのかッッ！？」

「くっくっくっ！お前は根本的に勘違いしている。俺はただの魔法使いではない。厳密に言えば錬金術師だ。故に魔法と科学の融合こそが俺の真骨頂よ！」

魔法だけでは対魔法装備で弱体化されるかもしれない。機械兵器だけではＡＩの判断が追いつかなかったり最悪、衝撃で内部回路がショートしたりするかもしれない。

全ては“Ｉｆ”の話だが…ならば、その２つを合わせて互いの弱点を補完し合い、逆に長所を取り入れて強化したならばどうなるか

？答えは簡単…進化だ。機械技術と魔法技術の融合による独自の進化。

弱点が補われて強化されるんだ。自分でやっておいて何だけど興味が尽きないよ。楽しい…楽しいねぇ♪

「――――ッ！！貴様ッ…！」

「だいたいさぁ？子供攫って天下を取ろうとする外道が今更この程度のことに驚いたり怒ったりするなよ。……はぁ、これだから誇り無き外道、あっ、違った、ただの下衆は始末に悪い」

いい加減、自分が下衆であることを認めろ。自分に誇りがあるなんて幻想を見てんじゃねぇ。誇りとは自分の行いの後に着いて来るものだ。今のお前の後ろに誇りがあると思うのか？

「お、のれ…ッ！言わせて、おけばッ！！」

「いい加減、黙れよ、小僧…。俺がどのように戦おうとお前には関係無いだろうが」

粋がるな…。現状を見ろ。最早、お前達がここの防衛を突破することは不可能。第二陣も俺の援軍の要請と同時に無人機動兵器（カブトムシ）が包囲して逃げ道は無い。……まぁ最も結界を張ってあるから元から逃げ道なんて無いんだが、ね。

「なっ！俺が小僧、だとッ！？貴様のような若造、に…ッ！？そうか、思い出したぞ！貴様、京都の本家に出入りしていた近衛詠春の友人だったな？名前は九重、だったか。なぜ、ここ（麻帆良）に居る！？詠春の回し者か？！」

ほう…俺のことを知っているのか。これは生かしておく理由がなくなったな…。今、敵に俺達の情報を渡すわけにはいかない。それは得策じゃない。

「…残念だ。本当なら生かして詠春に引き渡す予定だったが、どうやら、それは無理らしい」

「戯言をッ！！」

本当に、残念だよ、水島…。お前は下衆だったが東洋魔法技術に関してはいい腕を持っていた。その才能と努力を今ここで潰さないといけないんだから。

「総員戦闘準備！最早、手加減などいらない！殲滅あるのみだ！！」

「「「「「了解ッ！」」」」」『『『『『アイ・サーッ！』』』』』

万が一のこともあるかもしれない。ここからは加減は無しだ。全力で殲滅する…！

「鬼どもよッ！奴等を八つ裂きにしろッ！！」

「なんや、やる気出んわ…」「…まぁ呼ばれたからには、しゃーないな」「……」「誰ぞ、代わってくれんか？」「ハハハ…」「まぁ悪く思わんといてや…」「あーあ…メンドイわぁ」

えー…。人が折角、覚悟を決めたのに敵さんが召還した鬼さん達は、なんと言うか…。ヤル気無さげじゃね？ストレートに、やる気無いとか、メンドイとか言っている鬼さんも居るんですけど…。

「……何と言うか、士気低いなぁ」

「う、ううるさいッ！！おい！この愚図ども！早く奴等を殺すんだッ！！」

「「「「「…＃＃＃ッ！！」」」」」

俺が小声で言ったことに水島は過剰に反応して鬼達を罵倒し始めた。まぁ気持ちはわからなくもない。流石に罵倒はしないけど召還に応えたからには仕事は全うしてほしいって考えるよ。

でね？水島に罵倒された鬼さん達なんだけど…ものっそいキレています…。俺もちょっと引くぐらいの怒気を感じる。相手が召還主だから襲ってないけど、それが無かったら……こわっ！？

おぉー…。さっきのないすばでぇな狐女も視線で殺せたらなんていうほどの怒気を放っているよ…。…仮面の下は知らないけど雰囲気と俺の勘では美人だと思う。美人さんの怒った顔は怖いんだよねぇ…。

「はぁ…使えない召還主を持つと使い魔や式神は苦労するよねぇ…」

「「「「「まったくやッ！！」」」」」

「き、貴様ら…＃ッ！！」

この鬼さん達…ものすごいノリがいいです！！あっ、狐女もノッてきたよ？こいつ等いいなぁ。上手い酒が飲めそうな予感がする。今回の後でピンポイントに召還してみようかな。宴会芸で狐女の舞を見てみたいかも。

「ふぅ…今回は呼ばれた手前、しゃーないから従ごうたるが、こんなんは二度とごめんじゃ」

うわぁー…、なんだかリーダー格っぽい鬼さんがタメ息つきながら妥協してやってるよ。優しいし大人だなぁ。まだ若いのに譲る精神を持っているんだからさ。

「うるさいッ！貴様らは呼び出した俺に黙って従えばよいのだ！！」

あーあ…。逆ギレしているよ…。指揮官ともなると色々ストレスが溜まるものなんだろうけど逆ギレはイカンよ。それじゃ部下や仲間に示しがつかないじゃないか。

「本当に残念だ。マジもんで下衆の類だったのか…」

「だま、れッ！殺して…やるッ！」

あっ！？それはダウトだわぁー…。

「ほう？吾らの我が君に対して“殺す”だと…？」

「ほざいたな？人間…。その罪、万死に値する…」

――ギンッ！！

――ギンッ!!

すっっっっごい怒気だなぁ…。当てられてない俺も背筋がゾクって来たじゃないか。おぉー…2人の目がなんだかターミネーターばりに妖しく光っているように見える…。毎度のことながらマジでコワッ…。

「な、なんだ…。き、き貴、様らは?も、文句で、でででもあある、あるのか!?」

あれだけ威勢のよかった水島が怯えを見せている、だと!?やっぱりこの世界では女性が最上級の強さを誇るのだろうか?これは要研究かな…。

「な、なんや?」「今、背筋がゾクゾクってしたわ」「これは…殺気?」「あの美人な姉ちゃんらか?」「あー…?よく見てみぃ」「なんや?」「珍しいことにあの姉ちゃんら刀剣の九十九神じゃ」「なんやと!?…ホンマや、珍しなぁ」「やろー?」

鬼さんの目から見ても刀剣類の九十九神って珍しいものなんだ…。本当に数少ないんだなぁ。

「……アレとも戦うのか?」「うわっ、勘弁やわ」「直ぐに送還されそうや…」「なに情けないこと言うとんのじゃ」「ならばお前は勝てるのか?」「無茶言うなや!あんなんに勝てるわけないやんか!」「そこは自信満々に言うとこやないやろ…」「うるさいわい!」

いきなり気弱になった!?なにそれ!力の鬼さんでしょ!?それ

なのに弱気ってどういうこと!?もしかして召還主がアレだからヤル気の問題、なのかな?

とりあえず、ハオとユエの逆鱗に触れた水島さんの始末は任せるとして俺は…俺は、どうしよう?んー…??

「ハオ、ユエ。そいつは任せる。好きにしちゃって」

「ハッ、万事、良きように…始末します」

うん、ユエ、お願いね。激怒したハオを上手く誘導(コントロール)して周囲への被害をできるだけ減らしてあげてね。

「…ラミエル。吾らが居らぬ間はおぬしが我が君をお守りせよ。…よいな?」

『わかっておる。お前達が居らずとも我が主の守りは万全であることを見せてやろう』

「吹いたな?青結晶が」

『さっさと行くがよい。白包丁が』

『「……」』

はぁ、二人とも何で、そんなに喧嘩腰なんだろう?十数年の付き合いなのに未だに口撃が絶えない。いい加減そろそろ和解してもいいと思うんだけどなぁ。

はッ!?まさか、これが世に言う家庭崩壊の危機ッ!?!?

「はぁ、姉上。睨み合ってないで行くぞ?我が君も呆れられておるではないか」

「あは、ははは…」

そんな愚にもつかないことへ思考が移ろいそうになったらユエがタメ息をつきながら2人の諍いを止めてくれた。イカン、イカン。俺まで変な未来像を想像してしまったわ。家庭崩壊なんて考えたくもないのに。はぁ…。

「ぬ…。失礼しました、我が君。では、行って参ります」

「我が君、行って参ります」

「うん、いってらっしゃい。2人に武運を」

『ふんっ、早く終わらせてくるがよいわ。……怪我、するなよ』

あらら?いつまでも憎まれ口を叩いていると思ったら一応、心配しているのな。くっくっくっ♪そうか、いつもの2人の口撃は一種のコミュニケーションだったのか。何だかんだでお互いのことを認めているんだな。

「…ふっ、承知した」

「ふふふ。素直ではないな」

ハオはフッと不適に笑うことでラミエルさんに応えた。ユエはそんな2人を見て苦笑気味に笑う。そのまま2人は歩き出して怯えを見せている水島の前まで移動する。

「「覚悟は…できておるな？」」

「ヒィ！？」

「「「「……っ」」」」

一応、術者だから水島の前には守るようにして鬼と烏族が4体立ちはだかる。な、なんて義理堅いんだ…。あんな召還主のために身体を張るなんてな。

さて、あっちは2人に任せておけば心配ないな。それじゃ俺達は…よし、周りの鬼さんやその他を相手しますかね。ふふふ、そうと決まったらヤリますか…。

目指すは敵目標の術者（陰陽師）の完全無効化。これは武力による徹底排除あるのみ…。鬼さんは…俺と敵対しているヤツに呼ばれたことを後悔してもらおうか。…あー、でも、あの狐女さんは丁重に向こうへお帰り願おうかな。

忙しくなるぞーッ！ククククッ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第三十四話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」前編（後書き）

どうも、鉄　桜です。こんな戦闘の予定は無かったんです。
ただ前回の初期化のことがあり、遣る瀬無さや鬱憤などを吐き出したくてやりました。
後悔もなければ反省…はするかもしれません。
今回の誤算は前中後編に別れることくらいです。予定に無いことはするものじゃないですね。
予定に無かったことだから作者は慌てて続きの作業中です…。

第三十五話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」中編（前書き）

中編♪
戦闘？授業？人格崩壊？
作者自身書いていてよくわからなくなった。
指の赴くままに書いたから…。
では、どうぞ！

第三十五話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」中編

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　葵

ハオとユエがちょっとお怒り気味に敵指揮官の陰陽師こと水島さんを相手に、それはもう元気に襲い掛かっている。

うちの三課の戦闘部隊はアイリ達にそれぞれついて小隊単位（１チーム４名）で敵第一陣を半包囲しながら各個撃破している。援軍要請で来てくれた第四機甲中隊１２名は後方の敵第二陣へ向かい敵の退路の遮断と第一陣との合流阻止をしている。

もう一つの援軍の無人機動兵器（カブトムシ）２５６機の半数はより広範囲に渡って警戒と監視、そして遊撃行動。もう半数は第四機甲中隊の援護。派手にＭミサイルで広域爆撃を仕掛けている。

結界内だからいいけど旧世界の外で、それも比較的平和な日本で重爆撃（こんなこと）したら一大事件に発展してしまうだろうなぁ。この戦域もあとで隠蔽工作しないといけないのに…あ、頭が痛い。

はぁ…そんでまぁ俺とラミエルさんはその他の戦力…水島が個人で呼び出した鬼達を相手にしようとしているのよ。

目の前に立ちはだかるのは筋骨隆々とした巨躯の鬼が１０体以上。
それに剣の腕に定評のある烏族が数体。更に少ないが結界術や狐火、少しの忍術を使う狐女が見える限りに居るのは三体。あとは子鬼がうようよ居るくらいか。

相手できなくはないけど１体１体を相手にするのは面倒くさいし敵の手数が多くなってウザイのですよ。ここはやっぱり……。

「そういうことだから鬼さん達の相手は俺“達”がするね」

「おぅおぅ。兄ちゃんがわしらの相手してくれるんかい。…あっちの姉ちゃんらに頼らんでもええんか？」

「ん？あー…うん。大丈夫、大丈夫。人手はまだあるし」

「？なんじゃと？」

こらこら、不思議そうな顔しなさんなって。俺は１人で相手するなんて言ってないじゃないか。ちゃんと言っただろう？俺“達”となぁ。

そもそもの話し、俺は１人じゃ戦わないの。……だって怖いし。仮に単独戦闘をする場合は家族のためか気に入っているモノのためか。それにしたって、それ相応に装備を整えてからブッ潰しにかかるからな。

……辺り一面を更地に変えるほどの威力を初撃に込めて反撃を許さない一撃必殺（ヒットアンドデストロイ）、または一撃離脱（ヒットアンドウェイ）がいつもの手かな。

戦闘は皆がしてくれるからさ。……一応、俺も戦えるからな？そこを間違えるなよ？この世界に落とされて最初の百年は1人だったんだからな。当然だろ？ふふん♪

「召還できるのは陰陽師ばかりじゃない。――我は命じる。闇より尚暗き泉より湧き出たる優しくも仄暗い世界よ。今ここに世界の理を繋げる。我が前に現せ出でよ。汝らが名はオリビエ！リビエラ！シルビアなり！召喚！」

そんなわけでオリビエ達を呼ぶために世界に割り込んで召還式を起動させた。呪文は…フィーリング？急げばもっと早く呼べるんだけど召還が乱暴になるから呼ばれる彼女達に不評で緊急時以外は丁寧にしてほしいとお願いされたんだ。

女の子だから優しくしないとね。前に個人的に許しがたいことがあって何度か我を忘れて呪文短縮して呼び出したことあったから気を付けないとな。まぁ滅多にそんなことはないから、いいのか。

「んっんーッ！…ふぅ。んー？今度の相手はこいつらか？」

「オリビエちゃん、ダメよ～？こいつら、なんて言っちゃ～。鬼さん達に失礼でしょ～？」

「そんなこと言ってもさぁ…。シルビアはどう思うよ？」

「？？……どうでも。……興味…無いし」

「興味無い、ってお前なぁ…」

「あらあら～♪」

よしよし♪不備も無く呼び出せたようだ。それにしても元気だなぁ。

オリビエは顕現したあとに寝起きのように背筋を伸ばして凝りをほぐす。目の前の鬼や烏族、陰陽師などを視界に入れるとサッとさり気無く敵戦力を確認した。まぁそれでも軽口を叩くのは相変わらずだ。

リビエラも柔らかく微笑んだ表情からは想像できないが確実に戦力分析しながらオリビエの言葉をやんわりと窘めている。それに体内では外に気付かれないように魔力が凝縮され高純度に練られている。

シルビアは…俺から具体的にオーダーが決められるまではヤル気にならないようだ。敵をチラッと見ても彼女の雰囲気からはそこらに転がっている石を見ているかのようにしか感じない。

「ワーッハッハッハッ！こらまた愉快な姉ちゃんが出てきたもんじゃ！」

「うひょー！あのおっとりしたボンテージの姉ちゃん、ええ身体しとるなぁ」

「オ、オラはあっちのちっこいのがエェだ。ハァ…ハァ…」

つーかよ？1体目以外の鬼さんよー…。俺の家族をイヤラシイ目

で見るとは、一体どういう了見なのかなー？特に最後のヤツ！何が「ハァ…ハァ…」だぁ！？送還じゃなくて消滅させるぞ、コラ！？

たくっ！鬼達は呼び出した彼女達を見て囃し立てている。まぁ世間的に見れば爵位も無い下級悪魔にしか見えないから当然だけどね。それに俺がどんな切り札を切ってくるかと思えば、ってのもあったんだろうさ。

見た目3体の下級悪魔だからね。でも、それはフェイクだ。俺が三百年間、自分の血と魔力を与えて育てた上げた3柱の魔人を嘗めてもらっちゃ困る。間違いなく俺が保有する最大戦力の一つに挙げられる。

まぁそれは置いておくとして当然、不躾な視線を向けられた本人としては面白くないわけで……。

「あ〝ん？ジロジロ見てんじゃねぇ！殺るぞ、コラッ！？」

「オイタしちゃダメよ～♪ヘンなことしたら～……モグ、わよ～？」

「…？…？…殺る？」

皆それぞれの方法でキレていますオリビエはガンつけて烈火の如く怒っているし、リビエラは微笑んでいるけど目が笑ってないし発言が、アレだ。男としては思わず前屈みになること請け合い。

シルビアはよく理解してないようだがなんとなく不愉快な雰囲気を感じ取ったようでストレートに死なす発言だ。俺はどちらかと言うとストレートに言われるほうが怖いと思う。遠回しじゃ無いだけに真っ直ぐな殺気や闘気を感じられるから…。

「お前らさぁ…俺の身内に色目使うとかは、違うんじゃないかなー？…消滅されたいのか？」

俺も家族がイヤな目で見られているのは我慢できるものじゃないのですよ…。ちょーっと今の自分の目付きとかヤバイことになっているかなって思いながらも自制が…ねぇ？素直に謝罪するなら良し。更に煽るならば…くっくっくっ！！

「お、おおぅ…。す、すまんかった。気ぃ付ける。もうせんわ…」

「「「「「コクコクッ」」」」」

「わかればいいんだ、わかれば…。まったく、もう…なぁんか締まらないなぁ」

どうやら最初の印象どおり、この鬼さん達はいい人のようだ。それはいいとして…よかったねぇ？ここで言葉の選択を間違えようものなら、あの世にも逝けないように封印隔絶して永劫の地獄というものを味わわせてやるところだ。

「葵ぃ、もういいじゃん。サッサとこいつら殺っちゃおうよ」

「…ぅん？…お兄ちゃん…殺る、の？」

「葵ちゃ～ん？目を通して“見ていた”けど～、ぜ～んぶ…殺っちゃっていいのよね～♪」

皆、ヤル気満々ですか…。まぁ士気が低いよりはいいことなのかもしれないけど、これは少し好戦的じゃないかな？

とりあえず、本人達のヤル気に方向性を持たせて誘導するか。…なんてこと言わなくても目標を定めれば、あとは自分達で目標を達成してくれるか。ふむ…。ここは任務（オーダー）を伝えることにするかね。

「うん。リビエラの言うとおりだ。目の前の第一陣は殲滅指定。敵後方の第二陣は現在、包囲して各個撃破している。この第二陣は捕縛し依頼主（詠春）の下へ護送する。…任務（オーダー）は以上だ」

「おっし！任務（オーダー）、了解だよ！アーッハッハッハッ！」

「…殲滅？…抹殺…久し、ぶり…。…クスクスッ…」

「任務（オーダー）、承りましたわ～♪うふ♪うふふふ～♪」

任務（オーダー）が具体的になってエンジンに火が入ったようで三者三様に笑っています。……これって怖くないか？

オリビエは豪快に獰猛に嗤って舌なめずりして獲物を見ているし、シルビアは静かに儚げにクスクスって笑っているのに発言が全てをブチ壊していてちょっと怖い。

リビエラは全体的に変わらない微笑を浮かべている。……浮かべている、のに彼女の体内に練り込まれた魔力と瞳の奥にある冷たくも熱くもないモノが今にも暴れだしそうで、やっぱり怖い。

三人とも笑（嗤）っているのに最後には怖いって思わせるって、これはどういうことかなぁ？

「…まぁいいか。さて！こっちの準備はできた。待たせたな」

「わっはっはっはっ！なに、気にしとらんわい！1人に対して寄ってたかってっちゅーのは気に入らんからのう。…しっかし、こんな娘子どもだけでエエんか？」

「ふふふ。あまり彼女達を嘗めてかかると痛い目に遭うよ？……全力出して来な。若き鬼どもよ」

見かけに騙されているようじゃ、まだまだだね。この辺が、まだ年若い鬼の世代なんだろうな。千年の時を生きた鬼は格が段違いに高くなるから困ったものだけどな。

リョウメンスクナノカミなんていい例だよね。あれは本来の力の一部、荒御霊だから理性がなく本能のみで暴れる力の塊だ。性質が悪いったらない。

そこまで霊格を高めろとは言わないから、この鬼達も元気に育ってほしいものだ。まぁ今後、道を踏み外して悪鬼に堕ちたなら最悪、消滅させるけど…。

「…フッ…わっはっはっはっ！！わしらを前にして若いの呼ばわりか！これは笑えるわい！」

「実際、年齢で言えば俺達のほうが年上だしね。ここは若い者に胸を貸す気持ちで相手してあげようという…所謂、老婆心ってやつだよ」

ありゃりゃ？俺のこと驚いたように凝視してきているよ。年上ってのが信じられないのかね？…まぁ普通に考えたら、そんなことないから驚くのも無理はないかもな。

でも、凝視してくる者の中で戦闘狂っぽいのがギランって目を光らせたのが居たのが気になるな。強者を求めるナンチャラってヤツかな？突っかかってくる前に送還してやろう…。

「そうかい……。おいッ！お前ら！此度の召還者はイケ好かない者であった！だが！今わしらの目前には強者が居る！！戦いこそがわしらの本分じゃ！ならば此度の戦いを用意したことでご破算じゃ！感謝しよう！戦い！戦い！戦い！ここに全てを賭けや！！！！！」

「「「「「おおおおおーーーッ！！！」」」」」

うわぁー…。今から決戦に赴くみたいな状況になっているんですけど、これってどういうことなん？何を思ったのか話していた大鬼さんが仲間を鼓舞し始めたんだ。

「気合入ってんなぁ。ふふふ。少し発破かけ過ぎたかもしれない」

いやー…マジで発破かけ過ぎたかもしれない。なんか皆さん「この戦で死すとも本望なり！！」みたいな雰囲気なんです…。最近の若い者の考えがわかりません。テンションも高くて着いて行けなかったりするし。

「いいじゃん♪あたしは腑抜けを相手にするより、こっちのほうが断然気持ちいいよ！」

「…戦いが…本分。…ボクらも…同じ。…クスクスッ…」

「うふふふ♪私は～、まとめて来てくれたほうがいいわ～。まとめて燃やせますもの～♪」

オリビエ達は楽しそうだねー…。本質が悪魔だから戦いを求める本能の部分が顔を出してきたのかね？今回のように戦闘と言える大きな戦闘もなかったからね。色々と鬱憤も溜まっているのかもしれないな。

近頃の彼女達の指導する戦闘訓練がハードだって皆が愚痴っていたからなぁ。彼女達にも紛争地域にピクニックに行ってきてもらおうかな。相手には気の毒だけどストレス発散のため、尊い犠牲になってもらうとしよう。…なんて、な？

「そんじゃま、年長者として、ここは相手しようかね。行こうか？」

「おう！」「……うん…！」「はい～♪」

うん、色々と諦めた。こうなったからには指導という形で召還魔は全送還と行こう。陰陽師達は……うーん？冥府へと旅立ってもらいますか。

第二陣はともかく第一陣は水島のせいで俺の正体を知った者が数名ほど居る。ここで1人も逃がさずに確実に葬ってしまいたいところだ。

「わしらも行くで！！！」

「「「「「――――応ッ！！！」」」」」

向こうさんもヤル気みたいだし…。胸を貸す気持ちで行きますか！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　オリビエ

…イィ…イイねぇ！久しぶりの戦闘だよ！アハハハハッ！！……ただ鬼どもが若い部類に入るせいか手応えは、あまり無いね。だけど、それでも戦場には変わりない。興奮する！高揚する！！熱くなる！！！　ククッ、アハッ、アーッハッハッハッ！！！

「アーッハッハッハッ！！どうしたッ！？死にたいヤツは掛かって来なッ！！」

「応！拙者がお相手いたすッ！！セイッ！」

臆病に周りを囲んでいた中から威勢よく名乗り出てきた烏族の若造が文字通り飛び掛ってきた。初速は十分だね。でも、そのあとの速度が伸びてないよ。それじゃ、ダメだ。最大時の威力を逃して無駄にしているって。

「軽いッ！甘いッ！！そしてッ――――脆過ぎるッ！！！」

上段からの斬撃を剣の腹をブッ叩き弾いて返す刃で天に打ち上げた。そのあとを一瞬で追いかけてオマケで蹴りつけて暗い森の大地に叩き付けた。

「グフッ…」

「基本はいい！だが、身体の重心をもっと意識してやりな！威力が剣に乗り切ってないよ！！」

葵が指導な気分で、って言ってたからね。あたしも打ち倒した相手が消える前に評価を下しておくのさ。召還魔だから死ぬわけじゃないからね。ただ還るだけだから加減いらずだから楽だね！ホント！！

家の子達は仮とは言え肉体を持っているから、こうはいかないからね。あー…。思い出した！あの子達、またあたしらの訓練のことで葵に愚痴ってたんだよねぇ…。葵にチクるようなマネしたんだから訓練も割り増しでやってやるんだから！

「ならば！」「今度は拙者らの！」「お相手願おう！！」

烏族が　3体　現れた！　しかも　兄弟だった！！

「御託はいいから掛かって来な！まとめて相手してやるよ！！アーッハッハッハッ！！」

イイねぇ！懲りずに挑んでくるその心意気！あたしは好きだよ、そういうの！！でも残念！葵の家族として負けることは許されないんだよ！！……負けると他の子達から“お仕置き”されちゃうからね！！だから…絶対に負けられない！！！

「「「いざ！参る！！」」」

宣言したあとに逸早く駆け出して突出しだした1人が居た。

「来い！！ハーッ！！」

あたしはそいつの頭上から飛び掛り…。

「ガッ！な、にッ！？拙者を踏み台に！？」

少し、遊び半分で相手の頭を踏み台にして更に高く跳んだ。……これに似たようなことを百年以上昔やったら葵がジェットスト…なんとかって言ってたけどアレって何だったんだろね？

「だが！回避直後のここならば動けまい！！」

跳んで回避した直後ならば動けないと思ったのよね？甘い、お砂糖よりも甘いよ！この程度で動きに支障が出るような軟な鍛え方はしちゃいない。それにこの程度できなくて何があたしだってんだよッ！！

「このバカ者が迂闊に前に出るな！！」

「もう遅いよ！！斬ッ！！！」

「なッ！！しまっ！ガーッ！！」

仲間が止めようと警告したけど、もう遅いんだよ！仲間が居るならば先走らずに連携を以って事に当たればいいのよ！集団戦に英雄（ヒーロー）は、いらないんだよ！必要なのは統制された軍なんだからね！

自分が弱いことを自覚しているならば仲間と連携して時間を掛けてでもいいから目的を達成すればいいんだよ。必要によっては撤退

も視野に入れてね。先走る必要なんか無いんだから。

「双次郎ーッ！！」

「戦いで機を見ることができなかったのがお前の敗因だ！次は覚えておくんだね！」

さっきのは双次郎と言うの？名前は…覚えなくていいか。もう二度と会うことなんか無いだろうしね。

「ぬぅぅッ！つ、強い…！！」

「兄者！ど、どうするのだ！？このままでは…！」

「ええい！わかっておるわ！滝三郎、お前は拙者が戦っている間に背後から行けい。よいな？」

「わかった！兄者！持ちこたえてくれ！」

距離をとってから残りの2人はヒソヒソと何かを相談していたみたいだね…。まぁ十中八九あたしを倒す方法の相談なんだろうけどね。でもねぇ…この程度の遊戯で倒されるようなら当の昔にあたし

は消滅してるっつの。

んー？どーれ？相談は終わったようじゃないか。何を企んでいるのかを早速試させてもらうとするよ！！

「…相談は終わったのか？だったらサッサと掛かって来な！」

「クッ！お前の相手は拙者だーッ！！」

1体による突撃？2体での同時攻撃じゃないのかい…。とりあえず様子を見るために鍔迫り合いでパワー勝負に持ち込んでみるかね！

「ハンッ！あれ？もう1体は、どうした！？」

「ふ、ふふ！お前の相手如き拙者だけで十分というだけだ！！」

鍔迫り合いに持ち込んだ一瞬に視界から消えたもう1体の烏族はどこに行ったんだよ？目の前の烏族に聞いてみても冷や汗ビッショリになって答えを誤魔化すしさぁ。…まぁ普通は答えないか。

「ほう？逃げ……」

あたしはもう1対が逃走して援軍を呼びに行ったと思ったんだよ。でも、こいつらは、そこそこに男の子だったらしいね。背後のほうに何かの気配がしたんだ。頭にピンと来たってものよ。

「ふふんっ、いや、なるほど、なッ！！…後ろだーッ！！セイヤッ！！」

「グハッ！は！？滝三郎ーッ！！」

「…すま、ない…。あに、じゃ…」

鍔迫り合いをしていた烏族を蹴り、弾き飛ばした瞬間にしゃがんで後ろから迫っていた横の斬撃を回避した。そして回避後に立ち上がりざまに打ち上げるようにして自分の大剣で真っ二つにしてやった。

…って、しまった。これじゃ評価できないじゃないか…。まぁ残ったヤツに言っておけば向こうで話してくれるだろうよ。気にしない、気にしない♪

「連携は悪くないけど気配の殺し方がなってないよ。殺しきれないなら相手を殺気か闘気で覆って目暗ましにしな」

「最早、これまで、か…」

ギラついた目…。覚悟と言えば覚悟を決めた者の目…。でも、これはあたしが大ッ嫌いな目…。嫌悪していると言ってもいい。

「決死の特攻…。お前さぁ、戦いを嘗めてんのか？」

「な、に？」

「戦いとは生きるため、生きたいから戦うんだ。方法は色々だけどね？…それなのにお前は今、死を意識している」

あたしの言葉を聞いているうちに烏族の目に怒りの感情が見えてくるよ。若い、青いって言っちゃあ、それまでなんだけどね。気に入らない色の目だ、ってのは変わらないよ。

「死を覚悟して何が悪い!?自分の命を懸けて何がわッ!!?」

「バカ者がッ!!!!」

「――――ッ!!」

その言葉を最後まで言わせたりなんかしないッ!!少なくともあたしの耳に入るようなら捻り潰してでも黙らせてやるッ!!

「死んで事を成して何になるッ!?なぜ最後まで足掻かないのか!!そんなものは最初から死んでいるのと変わらないんだよ!!」

「――――ッ……」

「……」

命を掛けてなんてことはやろうと思えばいつだってできるんだよ。でも逆は…生きるためにすることは何倍も難しいんだ。それをこいつは理解してない。だから簡単に自分の命を投げ出したりするんだ。

あたし達にとっては、ただの他人（他烏族?）だからどこでノタレ死のうと知ったこっちゃ無いんだけどね?でも、不愉快なものは不愉快なんだよ。ほんっとに気に食わないったら無いねぇ!

「……そうか、忠告感謝する」

「わかればいいんだよ。わかれ…」

「ああ、オバハンの言葉、確かに拙者の心に刻ん、ぐぺぽろッ!!

？？！？」

こ・い・つ！！言うに事欠いてあたしのことを“オバハン”なんて言いやがったッ！？咄嗟にこいつのブン殴ったのは間違いじゃないと思う！！反省もさせて後悔もキッチリさせてやる！！！

「誰がオバハンだッ！？誰が！！あたしは、まだ三びゃ…何を言わせるかーーッ！！！！」

「拙者は何も言わせてなッ！！？ギャーーーーーッ！！！！！！」

こっの野郎…ッ！！！さっきの失礼な発言だけではなく！女の子に年齢を聞くとはいい度胸じゃないか！！ええッ！？思わず全力で殴って送還してしまったけど今回もあたしは悪くないんだ。相手が悪いんだよ！！

「ふんっだッ！！」

ほんっとに失礼しちゃうんだから！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　オリビエ

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　リビエラ

オリビエちゃんもあっちで元気に指導しているみたいね～♪最後の拳打なんか変に気合が入っているように見えたわね～。うふふ～♪地響きどころか魔力の波動まで溢れてきているんですもの～。

それでは～、私達もお相手しましょうね～♪

「うふふふ♪私達の相手は～、貴方達がしてくれるのかしら～？」

「数で攻めるのは気に入らんがしゃーない。向こうの姉ちゃんは滅法強いからのう」

あ～…。オリビエちゃんったら今回の指導は気合の入り具合が違うものね～？それは警戒するのも無理はないわ～。でも～、シルビアちゃんだけならまだしも～、私まで怖がられるなんて納得いかないわ～。

私は2人に比べて優しいもの～。無茶はさせても無理はさせないわよ～♪だって～…、無理をする前に潰れているんですもの～♪本当に今の人は軟弱よね～？鍛え方が足りないと思うのよ～。

だいたいね～…。あ、あら～？私の服の革ベルトを引っ張るのは誰かしら～？

「…？…リビエラ…？」

「ん～？あら～、なにかしら～？シルビアちゃ～ん」

「…う、ん…あのおっきいの…もらっていい…？」

まぁまぁ♪シルビアちゃんったら～♪あの大鬼さんが好「違、う

…」…。ライバルが減るかと思いましたのに～…。わ、わかっていますわよ～。だから睨まないでくださいな～。対戦相手としてですわよね～？アハ、アハハハ…。

「あらあら～♪良かったわね～？シルビアちゃんが貴方をご指名よ～♪」

「んあ？こんなチビ助に指名されてもなぁ…ホンマにエエんか？」

やっぱりシルビアちゃんの小柄な体型を前にすると不思議に思うわよね～？でも、それは間違いよ～。私達3人の中で一番力が強いんですからね～。小柄な体躯なのにどこにそんな力があるのかしらね～？不思議だわ～。

「……こくん」

「ええ、よろしいですわよ～♪……頑張りなさい。さもないと一瞬で、挽肉でしてよ～？」

抗いなさいな。そして学びなさい。今の貴方達では決して敵わない強敵が目前に居るのですから。

個人に適した戦闘技術を初めとした戦い方はもちろん。周辺の地形を織り込んで有利に戦況を運ぶ戦術的思考。個人では敵わないのならば集団戦闘の技術を磨いて仲間との連携で対処し勝利なさい。

…ととっ、ちょ～っとマジメさんになっちゃったわね～♪うふふふ～♪ええ、色々と試行錯誤して自分の武を、知を高めなさいな～♪

「……来いや。相手したるわ」

「いってらっしゃ～い♪」

「…うん…いって、きます…」

うふふふ～♪さの巨躯の大鬼さん達はどのくらい耐えられるかしら、ね～？シルビアちゃんのいつもの訓練内容を考えると……送還されていなければ十分かしらね～。

皆、送還されないように頑張って～♪なんて意味を込めてハンカチをヒラヒラと振って見送ったのよ～？そうしたらね～？大鬼さん達が不思議そうな顔になったのよ～？自分達が誰に指名されたのか、その意味を知ったらそんな顔できないわよね～♪

本当になるべく長く送還されないように～、シルビアちゃんの相手を頑張ってほしいわね～♪うふふふ～♪

「さてと～…。お待たせしましたわ～♪残りは私がお相手いたしますわよ～♪」

――ザザッザザーーーッ！！

私がここに残った鬼や烏族を見回して声を掛けた途端に包囲していた輪が一斉に広がったの～。折角、包囲していたのに狭めるならば、ともかく～。拡がるのは、どういうことかしら～？……臆しているのかな～？

「何で～…遠ざかるのかしら～？男の子でしょ～？早くいらっしゃいな～♪」

「クッ…！」「何なんだ…！？」「ちくしょう…」「魔力が異常だ…」「どう攻める？」「……踏まれたい」「ちぃぃ！」「この場は不利だ」「有利なところまで誘い込むか？」「そうするにしても、そんなところは……」「水の音がする…。この近くに川がある」「ならば……」

あらあら～♪作戦タイムと言ったところかしらね～？うんうん♪ちゃんと考えているみたいじゃないの～♪……一部だけ不穏当な発言が聞こえた気がしたけど～。気のせいよね～……？

「どうするんじゃ？」「…っ…ッ！」「お前から…」「いやいやいや！おぬしこそ！」「ノーッ！！」「はぁ、不幸じゃ…」「こ、こうなったらッ！」「行くのか！？」「土下座、か…」「ダメダメじゃねえか」「あぁ、ダメダメじゃ…」「ホンマじゃな、はぁ…」「ちびっ子が…」

あらあら～……。こっちは…腑抜けているわね～…。この子達は性根から鍛え直す必要があるかしらね～。うふ、うふふ～♪

「いい加減になさいなさいな～。……そう、そうね～。わかりましたわ～。私のほうから…行かせていただきますね～♪」

「「「「「――――ヒィッ！？」」」」」

「そう簡単に離脱できるとは思わないでくださいね～？うふ♪うふふふ～♪」

さぁ…教育の時間ですわよ～♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　リビエラ

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　シルビア

これは…実戦訓練？お兄ちゃんが…言ってた…よね。でも…東洋魔法使いは…逃がさない。…お兄ちゃんの障害。…殲滅…抹殺…惨殺…クスッ♪クスクス…♪絶対に生かして、は……帰さない。

おっきい鬼の…人達の、後を…ついて行ったら…いつの間にか…森の中で…そこそこ…拓けたところ、だった…。

「…ここいらでエエか。そんじゃまずはワシから……」

「…いい。…まとめて…来い…」

それは、メンドウ…。１人１人…別々に相手なんか…してられない。そもそも…まとめて、来ないと…意味が…無い。鍛えるのが…大変だし。時間も…無い。

「なんじゃと？」

「…？…？？…来い」

聞こえなかった…みたい？でも…鬼の表情を…目の奥を…見ると…。これは…炎？怒ってるのか…な？なんで？

まとめて来いって…言ったのは…ボクの…親切心だったんだ…けどな。敵との…戦力…に圧倒的な…力量差が、ある場合、それを…埋めるには…単純に…考えて、物量しか…ないから。

「死にたいんか？チビ助」

「…？…ふるふる。…負け、ない。…大丈夫」

ボクは…誰であろうと…負けるわけには…いかない…。修練も…欠かしてない。だから…負けないよ。負ける気も…しない。…お兄ちゃんはボクが…守るんだ。

「……ハァ。タイマンしようとしたのも、ワシからの情けじゃったが…しゃーないの。痛い目に遭わんとわからんか」

――ドンッ！！！

「？？…サッサ、と…来い」

地面に…ボクが持つハルバードの…石突を叩きつけて、早く掛かって来るよう…に催促した…。だって、いつまで…経っても来ないんだもん。時間も無いから…早くしてほしい…。

あれ…？おっきい鬼の…額に…＃マークが、瞬時に…増えた？

「後悔すんなやーッ！！」

――ダンッ！

「――――ッ！」

大金棒と…怪力の大打撃…。…力は体格から…言ってもそこそこだね。クスクス♪打撃も地面が…陥没するだけだし…。

それでもまぁ完璧とは…言い難いけど…まぁまぁの…不意打ちだった。…でも、速さが足りないよ。止まってるようにしか…見えない。まだまだ…甘い…。踏み込みが…甘いのかな？

「力入れ過ぎたかのう！わっはっはっ！…ハァ？」

「――――…うん。…悪く、ない。…でも、――――フッ！！！」

――ブンッッ！！グシャシャーッ！！ザンッ！ドッ！！！！！

「「「うおッ！？」」」「何じゃとッ！」「グハッ！」「何が起こったんじゃッ！？」「あ、ああ…」「クッ！…はぁ！」

縮地で瞬時に12体の大鬼の集団の中心に移動して…ハルバードを振り回し斬撃、刺突、石突、打撃、圧壊を繰り出した。全員が全員、致命傷まで至らなかった…みたい。

それでも7体は……殺った。まだ若いから…まだ伸びると思う。生き残った鬼は…先が楽しみ。今、還した鬼も鍛えれば…そこそこ強くなるかも…？でも、今は…まだまだ…。

「――――…鍛え、方が…足り、ない…。…だから」

鍛えて…あげる…ッ！！

「グッ！何体無事…いや！生き残ったッ！？」

「全部で6…いや！5体…！し、信じられん…」

「…話し、てる…暇…ない、よ？――――シッ！！」

ハルバードを大上段に構えて…ボクの突撃から生き残った大鬼達へ走った…一応、まだ彼らが目視できるくらいの速度で駆ける…。

「――――ッ！？散れッ！！」

遅いよ…。気付いたのなら…動かないと、ね。

――斬ッ！！ズチャッ！！ブンッ！！グシャッ！！

「ガフッ！！」「ギャーッ！？」

2体…殺った。残りは…3体…。

「チッ！――――エエ加減にせいやーッ！！」

残った3対の内の1体が…怒りに任せて飛び出してきた…。大棍棒を大きく振り回して突撃してきた。でも感情に体術がついていってない。これじゃ振り終わったあとの…隙が大きく残っちゃう、よ？…そっか、怒りで何も見えなく…なったんだね。

「――ッ。…さっき、よりも…よく、なった。…でも――フンッ！」

「待っ！！！」

残った大鬼の1体が…待ったをかけようとしたけど…ダメ。これは…自分を見失った、この子に責任が…あるの。…だから、やめて…あげない。どうせ還るだけだし…クスクス…♪

――ブォンッ!!ザシュゥウッ!!!

「グッ!!ガッ!?ガァァアア!!!」

「…感情に…振り回さ、れちゃ…ダメ」

あと…2体。思ったよりも粘ったほう…かな?でも…これ以上時間は掛けられない…。少し遊びが過ぎた…かも。お兄ちゃんのところに…行きたいなぁ…。

「…臆しちゃ、ダメ。…死んじゃう、よ?」

「クッ!!」「…ッ!!」

んん?…怯んだ?だったら…手早く終わらせよう…。

「バイ…バイ…」

「「え?」」

――斬斬ッ!!

「…終わり…」

少し…物足りない…けど。もう…終わり。お兄ちゃんの…ところに、行こう♪…クス♪クスクス♪…クスクス♪…今日の月は…一段

と紅くて…キレイ♪クスクス…♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　シルビア

第三十五話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」中編（後書き）

まだ終わりじゃない…。まだ終わりじゃないんだ…。
後編が残っているんだ…。見切り発車したせいでこんな予定に無いことを…。
うぅぅ！失敗したかもｏｒｚ
読者の皆さんが…

「いいから早く原作に入れよ…」

なんて気持ちだったらどうしましょう？
作者はガクガクブルブルと不安でしょうがないです。

ではまた後編で！

第三十六話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」後編（前書き）

後編～♪
予定に無い話数だから

番外編とかにすればよかったのでは？

と、思った今日この頃です…ｏｒｚ
まぁそれはともかく続きをどうぞ！

第三十六話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」後編

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　陽（ハオ）

我が君に暴言を吐いた下郎（水島）を追い詰めに追い詰めた。ヤツを守る４体の式神もユエが相手にしている。

「どうした！下郎！！この程度なのか？」

「クッ！嘗めるなぁああ！オンッッ！！」

熱く燃え盛る呪符が私目掛けて放たれた。しかし、この程度の炎など蝋燭の灯火にも等しいわ！！

……考えてもみるがよい。我が家族らには我が君の霊薬を飲んで実力のみだがマリーを筆頭に火の上級精霊がわんさかと居るのだぞ？　やろうと思えば世界創生の火も熾せるやもしれん。

私を驚かすのならば、それ以上の炎を見せてみろと言いたい。まぁ私が何が言いたいかと言うと、この下郎の炎など…。

「ハッ！なんだ！この腑抜けた炎呪は！？」

腑抜けて力が無いも同然なのだ。

「はぁはぁ…！この…バ、バケモノめ！！」

「はっ！ははははっ！！何を今更なことを！！はっははははっ！！」

オカシイ！オカシイぞ！？下郎がッ！！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　陽（ハオ）

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　月（ユエ）

姉上もそろそろ、あおの下郎を仕留めるようだな。ならば私も時間を掛けてはおられぬな。何やら、あの下郎から暗い澱みのような気配を感じる。欲望と恐怖に負けて人から悪鬼羅刹に堕ちるのも時間の問題かもしれぬ。

「ぬぅ！！いかん！？」

「行かせぬよ！」

私がサッと姉上に目線を向けた時に召喚主の危機を察したのか彼の者の下へ駆けつけようとした烏族の戦士が４体居た。だが、させぬよ。貴様らの相手は私なのだからな。序でに先行した１体以外は斬り捨て還した。目の前の敵に背中を向けてはならぬよ。

「クゥ！！は！？他の者はどうした！！？」

「あの烏族の3体なら既に還した。ふふふ。なに気にするな。寂しくはないぞ？次は貴様。そしてその次は…あの下郎だ」

「ぬぅぅ！！よもや拙者らが敵わぬとは…！！なんという兵（つわもの）よ！！」

弱くては私の大事なお方を守れぬからな。それこそ強くなるために必死にもなるわ。我が君のおかげで保有魔力は多い。だがこうして人の姿に顕現できるようになってからは剣術や体術は一から始めなければならなかった。

まぁ伊達に剣の九十九神ではなかったから直ぐに上達したがな。時間はある程度かかった…。そして長い時間掛けてここまでの技量を身に付けたのだ。若造相手に簡単には負けてはやらぬよ。

「ふふ。賛辞は素直に受け取ろう。貴様らも若い割にはなかなかどうしてヤルほうであったよ」

「クックッククッ！なるほど拙者らも貴殿から見ればただの若造か。…ならば！ならばこそ！！次の一撃に全てを賭け！一太刀報いてみせようぞ！！」

その意気や好し！！

「ああ！！来るがよい！！若き烏族の戦士よ！！」

「応！！ハァーッ！！」

繰り出される私と烏族の剣が交差する。

――斬ッ!!斬ッ!!

「……」

「……グフッ」

崩れ落ちたのは烏族の戦士だった。交差したのは一瞬の刹那の間。烏族の使っていた剣はバターが熱した刃でスライスされたように刀身の半ばから滑らかに切断されていた。

勝ったのは私のようだ。踏み込みも剣の走りの早さも力も…そして使う剣の質も何もかも私が上だった。経験の圧倒的な差が最後の最後で出てきたらしい。だが、彼の戦士の剣には…。

「魂の篭もった、よい一撃であった。烏族の戦士よ」

「クク…。やはり、届かぬか…。残念…だ…」

「そうか…。今宵は還り今一度、己を鍛え直すがよい」

「クク!ククックックッ!!ああ、そうする…としよう。……さらばだ」

「うむ。達者でな」

今度呼ばれる時は良き主に仕えられることを私は願っているぞ…。

さて!姉上のほうはどうしたのか?先ほどから何やら騒がしいようだが…。様子を見に行くとするかな。ふふふ♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　月（ユエ）

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　陽（ハオ）

「はぁはぁ…！この…バ、バケモノめ！！」

「はっ！ははははははっ！！何を今更なことを！！はっはははははっ！！」

オカシイ！オカシイぞ！？下郎がッ！！！

「笑うな！！何がおかしい！？」

「これが笑えずに居られるか！！私は元より九十九神の妖（あやかし）よ！！そして！この身は我が君ただ１人の御為だけにある一振りの刀に過ぎぬ！！」

そうこの身は我が君ただ御一人の御為にある！我が君の前に立ち塞がる脅威の尽くを斬り捨て排除する！

「ぐぅぅ！！バケモノめ…！たかが…！たかがバケモノの分際で！！！」

「黙れ！！！！下郎ッ！！！！！！！」

お守りするために存在する我が身だ！私は妖の自分に誇りを持っている！それを、それを…ッ！それをこんな下衆に“たかが”呼ばわりされる謂われなど無いわ！！！

「――――ッ！！？！？？」

「最早、貴様の言葉は聞き飽きた。我が君は貴様の死をお望みである。大人しく受け入れるがよい」

「誰…！が！大人しく死んでナドヤルモノかぁーッ！！ガッ！？グッ！ゴッ！ゴォォォ！！恩ォォォンッ！！！」

ぬぅ！？間に合わなかったか！戦い始めてから暗い陰の気を身に纏い始めていたから、もしやと思っておれば、コヤツ…ッ！

「下郎めが…最期の最期で悪鬼羅刹へと堕ちたか！？」

「恩ォォォオオォォォオンンンッッ！！！」

そこまで！己を堕としてまで勝ちを拾いたかったとでも言うのか！下郎めがッ！？

「まったく！最期まで手を煩わせおって！！ハッ！！セイッ！！」

――斬ッ！斬ッ！ブシューッ！！ビチャ…！

剣を二閃、振り下ろして目の前の悪鬼の両腕を斬り付けた。右腕は落ちたが左腕は辛うじて繋がっていたのだろう、直ぐさま再生し

た。落ちた右腕も神経と筋繊維が寄り合わさり結ばれるようにして再生されていく。

「恩ォォオオンッ!?恩ォォオオォォン!!?」

「チィィ!!悪鬼はしつこいから嫌いなのだ!!ハァーッ!!」

――斬ッッ!!ボトッ…ビチャビチャ…!!

今度はダメもとで一直線に首を落としに行った。しかし、いざ落としてみても腕と同じように神経と筋繊維が寄り合わさり再生されてた。

「ふぅ…斬っても斬っても直ぐに再生されるか…。面倒な…」

面倒この上ないわ…。タメ息を漏らすのも仕方ないことだと思うのだ。このまま時間を掛けては我が君のお休みの時間が減ってしまうやもしれぬ。それはならぬな!うむ!では、どうするか?さて…。

「存外に苦戦しておるようだな。姉上?」

「ユエか。バカ者が。どこをどう見て私が苦戦しておるように見えるものか」

随分と時間が掛かったようではないか。剣の指導でもしておったのか?いや、それよりもだ!私が、この程度の悪鬼羅刹に苦戦だと?ふふんっ。悪い冗談にも程があるというものだな。

「ふふふ。すみませぬ。そうだな、姉上がこの程度の悪鬼に梃子摺るようなことは無いな」

「そうだ。私がこのような悪鬼相手に遅れを取るわけが無い」

「…だが、どうするのだ？斬っても直ぐに再生されてしまうようだが」

ぬ？見ていたのか。…まぁよい。再生が斬撃攻撃を上回るのならば、それ以上の火力を以って消滅すれば良いだけの話しではないか。しかし、“剣軍”は出せぬ。隠蔽班に大変な迷惑を掛けてしまうからな…。ならば…ふむ……よし。

「なに、簡単なことだ。一度斬って再生されるならば十斬り、十斬ってダメなら百斬る。百斬ってダメならば千斬り、万斬りするだけよ！」

再生できぬほど粉微塵の細切れにして消滅させくれるわ…。そこまでされれば、あの悪鬼とて最早、再生などできぬはず…いや、させるものか！

「ふむ…。ならば私は左から参りましょう」

「わかっておるではないか、ユエよ。では私は右から行く。気を付けるのだぞ？」

「ふふふ♪姉上こそ」

生意気を言いおって…ふふっ。だからこそ頼もしくもあるというものだッ！！

「行くぞッ！！――――シッ！！」

「承知ッ！！――――フッ！！」

――斬ッ！！ブシューッ！斬ッ！！ブパァーッ…！

「恩恩恩ォォ恩恩ォンッッ！！」

私が、ユエが、悪鬼の片腕を2人斬り捨て純粋な魔力の塊をぶつけることで両腕を燃やし尽くした。暗い魔力で染まりきった部分を純粋魔力で昇華し消滅させたのだ。

「行くぞ！？ユエ！！」

「ハイッ！」

「白刃一閃！十閃！！百閃！！！千閃！！！！」

――斬ッ斬ッ斬ッ！！！「恩ォ！？」斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！「恩ォン！？」斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！！！！

両腕を切り捨てたことを合図に私は正面から悪鬼に向かい斬るッ！斬る斬るッ！！斬る斬る斬るッ！！！斬るッッ！！！！！

「黒刃一閃！十閃！！百閃！！！千閃！！！！」

――斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！「恩ォォ！？」斬ッ斬ッ斬ッ！！！「恩ォォン！？」斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！！！！

ユエも悪鬼の背後から私と同様に斬るッ！斬る斬るッ！！斬る斬る斬るッ！！！斬るッッ！！！！！

「「白刃（黒刃）破邪葬送護剣万閃（はじゃそうそうごけんばんせん）ッ！！！！！」」

――斬ッ斬ッ斬ッ

うな？もしも、そうであったのなら……その青い水晶の身体をグニグニと握り尽くしてくれるわッ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　陽（ハオ）

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　リビエラ

シルビアちゃんは、もう終わったみたいね～。私のほうは～…残り半分近くかしらね～？勇猛に挑んできたのは既に居ないようなのよね～。向かって来る端から燃やしてしまったから～。

それで私は今～…。

「ほらほら～♪早く逃げないと……燃やしちゃうわよ～？」

「ちょっ！？」「それはッ！？」「グハッ！！」「ダメん！！」「女王さまーッ！！」

残った皆を空から細かいプラズマ球を広範囲に撒いて爆撃してますわ～♪…だって～取り囲むだけして後は逃げるだけなんですもの～。私ね～？戦いを前にして逃げるなんて許されないと思うのよね～。

戦略的撤退ならいいのよ～？私だって～ここぞという時に退くこ

とが必要だってことは知っていますもの～。でも～今の彼らは逃げ惑うだけなのよ～？還った半分はまだ向かってきたのにね～？……情けないわ～。ふぅ～…。

「うふふふ～♪マジメに私を倒そうとした子達は、もう居ないのよ～？貴方達は、このまま消えるために召喚されたのかしら～？」

「くっそぉ…！おい！お前ら！このまま言われっ放しでエエんか！？」

「応ッ！このままじゃ鬼の名が廃るってもんじゃ！いっちょヤッたるわい！！」

あら～？ダメもとで挑発してみたんだけど～思ったよりも怒ったみたいね～♪いいわよ～♪あまり感心はしないけど～怒りは恐怖を緩和する比較的簡単な感情なのよね～。方法は今一だけど～向かってくることは褒めてあげなくちゃね～♪

「……もう１０体も居らんがな」

「「「「「へっ！？」」」」」

そうなのよ～♪うふふ～♪それじゃ～私も総仕上げの準備をしようかしらね～♪仲良く皆でお家に還りましょうね～？うふふ～♪

「さぁ～？もうお家に還りましょうね～♪霧よ、炎雷の霧よ。我が前に立ち塞がる哀れな愚者を包み込め。涙流す悪魔の霧（イヴィル・ティアーズ・ミスト）…」

広範囲に渡って拡がるのは霧のように細かい光の粒子。輝く霧よりも尚明るく光り輝く粒子の大群。風に流されるように拡がる。そしてその群れに触れてしまうと…。

――サァァァァァァァァァァァーー……ボッ！ボッボッボボボボォォオオッッ！！

「「「「「「「う〝わ〝ぁーッ！！あ〝あ〝あ〝ッ！！！」」」」」」」

触れた部分から容赦無く燃え移り崩壊していった。燃え尽きた身体は等しく灰燼となった。残ったのは僅かな灰のみだった。

ん～？どれどれ～？もう居ないわね～？うふふ～♪

「手応えは…ん～、数だけで無かったわね～。残念だわ～」

数だけは多かったから疲れたわ～。楽しめないからルーチン作業と変わらなかったのよね～。あら～？？こっちに来るのは～…？

「おっ！リビエラも終わったのか？」

「あら～、オリビエちゃんも終わったのね～♪貴女のほうはどうだったのかしら～？」

「…ふんっ！大したこと無いね！失礼な小僧ばっかりだったさ！」

うふふ～♪誰かがオリビエちゃんに失礼なことを言っちゃったのかしらね～？ご機嫌斜めのようだわ～。オリビエちゃんを怒らせる

なんてヤンチャで無茶な子も居たものだわ～。そんな楽しい子は私のほうには居なかったから残念だわ～。

楽しそうだものね～？でも、失礼なことを私に言われたら～…嬲って、嬲って、嬲り尽くしてしまいそうだわ～…♪…少しずつ燃やして～治して～燃やして～治して～、また燃やして…。うふふ～…♪

「うふふ～♪それじゃ～、葵ちゃんのところに行きましょうか～？やっぱり心配だもの～」

「お、おう！そうね！行きましょう！…あれ？そういえばシルビアのやつは？」

シルビアちゃん？…あ、あら～？そういえば今はどこに居るのかしら～？え～と～…コミュニケで確認してみましょうね～。

「…あ、あら～？ちょ～と待ってね～？え～と～…あらあら～♪逸早く葵ちゃんのほうへ向かっているわね～。うふふ～♪相変わらずこういうことは素早い子だわ～」

「チッ！リビエラ！あたし達も早く行くぞ！！」

「は～い♪」

あらあら～♪オリビエちゃんも何を心配しているのかしらね～。シルビアちゃんが“そんなこと”をするわけないじゃな～い。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　リビエラ

――？？？？…。

Ｓｉｄｅ　シルビア

「ボクが、一番乗り…かな？」

お兄ちゃん…今行くね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　シルビア

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　葵

あれ？シルビアの声が聞こえたよう、な？気のせいか…。それよりも今はこの状況だよ…。何かと言うと俺の目の前に居る、この…。

「ねぇ？」

「んー？なんやの？」

あの“ないすばでぇ”な狐女と向かい合って睨み合っているんだよ…ｏｒｚ

「いや…俺ら一体いつまで睨み合っているつもりなのかなってさ？」

「えー！えぇやないのー。それに睨み合うやのぅて見詰め合う言うてぇな♪」

訂正…狐女のほうは見詰め合っているつもりだったようだ。ナニ、コレ？俺が何かしたか？確かに最初この子を見た時、いいなぁなんて考えましたよ？でも、戦いの最中にこんなお見合いみたいなことをしたいなんて考えもしなかったよ…。

彼女の他にも2人の狐女が俺達を見て何やらクスクス笑って見てくるし…。何なの？この子達って…。

因みにラミエルさんは元気に周りの鬼達を追い回して荷電粒子砲で屠ってますよ？ミサイルは使わせません。隠蔽が大変だから…。ナノマシン兵器なんて以ての外だ。仮に使用したら辺り一面を有機物、無機物関係無く解体分解して砂漠化しちゃうのよ。

ととっ、今それはどうでもいいな。

「だからさぁ…狐女よ。戦わなくていいのか？」

「なんで戦わなアカンの？なんや面倒やし。どうでもえぇわー」

「えー…。どうでもいいって、そんな、えー…？だって召喚主には従うものなんだろ？」

この子、本当に何がしたいの？お兄さんには若い子の気持ちがわかりません。歳食った俺にはハードルが高過ぎると思うんだ。女の

子の心がわかりません。それに召喚主の命令はどうなったのさ？

「へぇ、あぁ？あの召喚主な。ほほほ♪あのお人なぁ？うちら呼び出したのはえぇけど制御は二の次だったんよー」

「はぁ？」

何それ？呼び出すだけ呼び出して制御はされていないってこと？えー…ダメダメじゃね？それって。まぁこうして戦う面倒が無くって俺としてはいいんだけど、ね。この子達とはあまり戦いたいとは思わないしさ。

「ほほほ♪鬼どもは対魔の抵抗が高こうないよってなー？それで従わせられるんやー。でも、うちらはちゃうねん」

「狐女は対魔の抵抗値が高くてアイツの制御下に無い、ってこと？」

「そうやー♪あんたは話しが早くて助かるわー♪…ん？」

「なんだ？どうしたの？」

んー…？何やら狐女の存在感が薄れてきたよう、な？これってまさか…？

「残念やわー。もう還らなアカンようや…」

「あー…やっぱり。ということはハオ達が術者（水島）を仕留めたのか」

「ふふふ♪ほなな、魔法使いさん。縁があったら、またお会いしま

ひょ」

「あいよ。またね」

もう顕現するのも限界みたいだね。サーッと砂人形が崩れるように狐女達は消えちゃった。うん。次の宴会の時にでも呼び出してみよう。是非ともな！

今回会ったからあの狐女達の魔力は覚えた。これでピンポイントに呼び出せるね。彼女達の舞を宴会の時に披露してほしいと思うわけですよ。話しを聞くところによると、とても流麗にして可憐だということじゃないか。見たいねぇ♪

『我が主よ。話しは終わったのか？』

「ん？うん。ラミエルもお疲れさん1人で大変だったでしょう？」

タイミングいいねぇ。ラミエルさんも敵の掃討が終わったみたいだ。…森の所々がラミエルの荷電粒子砲で焼け焦げているようだけどね。風に乗ってくる匂いが焦げ臭いです。

『あのような雑兵がいくら居ようとも結果は変わらぬ。…数が多く手間がかかったがな』

「そっか。ありがとうね」

いやー、任せちゃってごめんね？俺も、まさか狐女達の相手があなるとは思わなかったのよ。アレは攻撃し辛いったらないね。戦闘の意思の無い子って手が出し難いのよ。

『ふんっ。れ、礼などいらん！我が主を守ることは我への至上命令だからな』

なんでラミエルさん、ツンデレってんのさ？ただ頑張ってくれたお礼を言っただけじゃないか。これのどこにツンデレる要素があるんだ？気持ち、かーいーからいいけどね♪少しからかってやろ♪

「…命令だから、なの？」

『あっ！いや、その…。そ、それだけではないぞ？我自身、我が主を守ろうと考えておるゆえな』

あらまぁ♪慌てちゃってまぁ♪…成長したなー。前はもっとキビキビして堅物っぽい感じだったのに。…俺の愛機を分解吸収してくれちゃったりしたお茶目な部分もあるけど、ね。いい加減、愛機に乗ってみたいです。ハァ…。

「クックックッ！うん。ありがと」

『わ！笑うでないわ！』

ラミエルさんのハスキーボイスが響いた時に聞き覚えのある声が聞こえてきたんだ。俺が良く知っている声がね。

「…楽しそう？…和気藹々？」

『ぬ？』

「おろ？シルビア、もう終わったの？」

我らの悪魔ロリ娘シルビアちゃんです♪……暗い森の中、血の滴るハルバードが今日のワンポイントですね？わかります。シルビアの小柄な可愛らしさとのギャップがものすごく激しいですよ…。可愛いものは可愛いんだけどな！

「うん…。だから…」

「クックックッ。俺のところに来たんだ？」

「……そう。…迷惑？」

迷惑のはずがないじゃないか！俯いてモジモジしたりなんかして、あら？頬が赤いですよ？もう♪かーいーなー♪お兄さんは嬉しいですよ？お仕事が終わったら真っ先に俺のところに来てくれてね。

「そんなこと無いよ。おいで」

「…うん♪」

皆が来るまでシルビアに膝枕してあげて皆が終わるのを待ってることにしたんだ。実際、戦闘の爆音が終息に向かっているからね。もう終わるさ。

『む？我が主よ。白包丁らや他も来たようだぞ』

「え？…クックックッ♪もう、皆は心配性だな…」

すごい速さで皆が近づいて来る反応がコミュニケに表示されていた。それを見て俺は嬉しい苦笑を一つして皆を待つ。シルビアも、もう少し横になりたいみたいだしね。

『まったくだ！我が居るから心配など無いと言うに…だいたい…ブツブツ』

あ〝ー…ラミエルさんが愚痴り始めちゃった…。自信があるなら気にしなければいいのにね？ラミエルさん1体でも新世界の艦隊を余裕で屠れるくらいの性能があるんだよ？

…ラミエルさんも自分自身を魔改造しているしね。正直言って今後の性能が把握できませんって。

「皆、今夜はお疲れさま。大きな怪我が無くて何よりだ。後の処理はミリーと隠蔽班に任せて帰還してね」

「「「「「ハッ！了解！」」」」」

アイリやファレノ、リチラ、それに三課の皆に第四機甲中隊にも帰還をお願いした。これからは隠蔽工作だから必要な装備が違うのよ。工作用の機器は別にあるからさ。

「オリビエ達もお疲れ様。今から還すね」

「あいよ！またいつでも呼びな！」

「おいしいお酒があるの～。今度は宴の時に呼んでくれると嬉しいわ～♪」

「また…。待ってる…」

今回も彼女達にはお世話になりました。あとリビエラ？是非とも飲もう！その時には狐女の舞も見られるはずだからさ。

「ハオとユエは…」

「吾らは我が君と行動を共にします」

「そっか。直ぐにミリー達が来る。隠蔽工作が終わったら帰ろう」

「「ハッ」」

2人はいつも通り、っと。それにしても今回の俺って戦ってないなぁ。…なんだか皆が俺を戦わせないように動いているような気さえするんだよなぁ。気のせいかもしれないけどね？俺も戦いたいわけじゃないからいいし。

ふぅ…ミリー達はまだかなぁー…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良市近郊の森林…。

Ｓｉｄｅ　ミリエール

予定以上に被害が酷いから機材の準備に時間が掛かってしまったわぁ。残留魔力の処理だけなら機材はいらないんですけどぉ。金属片や遺体の回収は専用のカブトムシを用意しないとならないのよねぇ。

でもぉ…お蔭で主様をお待たせしてしまったわぁ。ごめんなさいねぇ？

「主様ぁ。お待たせして申し訳ありませんわぁ」

「あー、いいの、いいの。気にしないで。…それじゃ時間も無いし、始めちゃってくれる？」

「はぁい♪後のことはお任せくださいねぇ♪」

「うん。それじゃお願いね」

主様もお帰りになったわねぇ。それじゃお仕事頑張りましょうねぇ♪証拠を残さないように最後の仕上げをしないと後が大変だものねぇ。

「さてぇ、皆さぁん。お仕事を始めますわよぉ？隠蔽班の皆さんはぁ周辺の残留魔力の緩和と除去。あとできる限り樹木と地面の再生もお願いしますねぇ」

「「「「「アイアイ・マムッ！」」」」」

んー♪いい返事ねぇ。いいお仕事を期待しているわねぇ♪……下手なことしたら再訓練で猛特訓よねぇ。私も頑張るから上手くやりましょうねぇ♪

「機動兵器の皆さんはぁ、今回の証拠となりそうな金属片や敵の遺体などの回収。それと土木関係を頑張ってくださいねぇ」

――キュィィン…ピピッ…ピー…。

この子達は一度命令の指針を出せば後はやってくれるから楽よねぇ。命令外のことは自己判断で対処するしねぇ。判断できないことは再度、上から指示を受けるかするものねぇ。

「さぁ！張り切って作業に当たりましょう♪」

「「「「「はい！！」」」」」

これなら工作に1時間も掛からないわねぇ。準備を万全にしたから作業は早く終わりそうだわぁ♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ミリエール

第三十六話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」後編（後書き）

はい！という訳で、前中後編…何とか乗り切ったぜ…！

３日連続投稿するつもりだったのに間に合わなかったぜい…ｏｒｚ

すみませんでした。

初めからプロットなんか無いからあっちにフラフラこっちにフラフラ…。

修正が大変だった。後編なんか落とし所を探そうと考えていたら指が勝手に暴走。出来て見ればこんなことに…。

ここからは、また不定期更新になります。

もしかしたら突発的に今回のような連続投稿がある（？）かもしれませんが…。

ではまた次回にお会いしましょう！！チャオッ！！

第三十七話「予想外とロケットと木乃香と」（前書き）

この作品、ほのぼのは切っても切り離せませんよー！
では、どうぞー！

第三十七話「予想外とロケットと木乃香と」

――喫茶店クレイドル店内…。

Ｓｉｄｅ　葵

４月、季節は春…早いもので木乃香ちゃんが無事に小学６年生になった。明日菜も昔の仏頂面がウソのように活発に動き回っている。

そして２ヶ月前にそこそこ大きな規模の侵攻を受けた麻帆良学園都市……とは言っても当時の学園側は侵攻してきた敵の目的が“何かは知らない”。でも近々麻帆良に“侵攻してくる”という情報を掴んでいた。

まぁ結局のところ何事も無く時間は過ぎていたので掴んだ情報はミスと認識しているはずだ。これも電子制圧した人工電子精霊に、そういう風に“誤認”させたんだけどね。現場は戦闘後、直ぐに処理してあるから証拠も出ないしね。

隠蔽工作万歳だね♪

これで彼らからすれば何も起きていないように見えるのだ。感覚的なものはともかく事実としてね。これも一つの視点から見れば、それは間違いない事実として受け入れているということに他ならない。気付かぬ内に曖昧なモノで煙に巻くのだよ。

そんなわけで麻帆良市は今日も平和です。ええ、平和ですとも。

裏で何があろうとも知らなければ何も無いのと同じなんだから。…考え方が傲慢?はんっ!知ったことじゃないね!家族や知人、俺に被害も不都合もないし。

――カランコロ～ン♪

「いらっしゃいませー…って何だ。木乃香ちゃんか」

お店の玄関に付いているカウベルが鳴ったからお客様だと思ったんだけど来たのは木乃香ちゃんだった。学校の終わった時間帯とはいえ今日はどうしたんだろ?

「むぅぅ。失礼やなぁ。お客さんに向かってそれは無いと思うんよ。…それにわたしのことは木乃香って呼んでって言うとるのにー」

ちゃん付けが恥ずかしいということかな?難しいお年頃という時期のようだ。

それと木乃香ちゃんが自分のことを“うち”と言わなくなったのは実は最近だったりする。小学5年生の終わりの時だったかな?一応、ここは関東圏だものねぇ。周りの言葉遣いに影響を受けますよねぇ。

でも、刹那ちゃん同様にテンパると言葉遣いが一時的に戻っちゃうんだよねぇ。「あわ、あわわわ!」なんて言いながらさ♪からかうのが楽しくて、楽しくて♪くくっくっくっ♪

「失礼も何もクラブ活動が無い時の大半はここに来るじゃないか。まぁ来るのは構わないか。…だが、閉店まで居て帰りは俺達が送ってんだぞ?お菓子だって…」

何が楽しいのかクラブ活動や用事が無い時は日がな一日、店でお茶しているのだ。店内のお客様が少ない時は俺も木乃香ちゃんとお喋りしてお茶するけどね？俺のこと見てニコニコしているんだ。何でかね？

……そんなに暇なのだろうか？

「わ、わー。すまんてぇ！わたしが悪かったわー。だから許してぇ？」

「反省するなら良し。…それで今日はどうしたんだ？クラブ活動のはずだろ？図書館探検部だか占い研究会だか忘れたが」

別に攻める気なんか更々無いんだ。ただ木乃香ちゃんをからかいたかっただけなんだから♪

それでマジで今日はどうしたん？思い出したけど今日はクラブ活動がある日じゃなかったっけか？

なんで図書館探検部と占い研究会なのかは知らんけどさ。繋がりが見えてこないよね？関連性が無いように思うんだけど。それは個人の自由なのかなぁ…。本人は楽しそうだしねー。

「あー…えーとなぁ？お、怒らん？」

「……内容によるな。言ってみ。とりあえず聞くから」

俺が怒りそうな内容なのか？俺が怒るような？んー…？家族は今のところ全員、五体満足、無病息災、交通安全、安産祈願…最後の

2つは違うか？それはいいとして家族には何の被害報告ないし…。

あと怒ることと言えば…工房？自分で言っていて思うけど、それは…無いな。それ以外といえば……何？思いつかないんだけど。…ナニ、コレ？コワイ…。

「ほぉけ？あんなぁ？昔、葵兄さまに綺麗なロケット貰ったやんか？」

「ああ、挙げたな。大切な人の写真でも入れなって言って渡したような記憶がある」

魔力隠蔽用のアイテムでしょ？確かに渡しましたよ。お蔭で西の者以外が誘拐しに来ようとするヤツが激減したしね。楽させてもらっています♪俺的にはお店がメインなので非常に助かっていますよ。

因みにこのロケットね？実は2つあるのよ。とは言っても片方は形だけでただのロケットなんだけどね。その片方は刹那ちゃんに渡してある。「木乃香ちゃんの写真でも入れなさい」、って言って渡しておいた♪

そして刹那ちゃんにはオマケで俺が撮った“笑顔が眩しい木乃香ちゃん写真”を渡しておいた。親切にロケットにちょうど入るように尺を調整しておいたんだよ？渡した時の喜びようは、それは、もう……ねぇ？想像に難くないというものでしょう？

「そんでなぁ？今日の朝、起きて見たらそのロケットに知らん間に罅が入ってたんよ」

「なっ！？」

こ、壊れただとぅ!?あまりのことに俺は驚愕の表情だ。開いた口が塞がらない。市販の物よりも丈夫に作ったつもりだったけど、そんな…。ハハ…ミスったなぁ。本当に、つもり、だったんだなぁ。

科学者で技術者、そして錬金術師としてどうやら恥ずかしいが計算を誤ったようだ。刹那ちゃんが中学一年に来日するまで持てばいいと思って作ったのに…失敗したなぁ。予想以上に木乃香ちゃんの保有魔力の上昇値が高かったようだ。

ナギを目安に考えて作ったのになぁ。木乃香ちゃんの保有魔力はナギ以上ということかー…。あーもー…。原作ではなんてあったかなー?ええとー、あー……無理!八百年近く前のことなんて覚えてないよ。

あー、ちくせう。思い出せなくてイライラするわー…。

「お、怒らんといて!わたしも知らんかったんや!寝る前は何ともなってへんかったのに…」

「あー…いや、気にするな。別に怒っているなんてことは無い。驚いただけだ」

「ほんま?ほんまに怒ってへん?」

「ないない、怒ってないから(ニコニコッ)」

イカンなぁ。ついイライラして表情が顰め面になってしまったようだ。考えるのは後にするとしよう。今考えるのは壊れたマジックアイテムのことだ。

「よかったー。それでこのロケット直るんかな?けっこー気に入ってたし、できるなら修理したいんや」

「ふむ。とりあえずロケットを見せてくれるか?じゃないと判断がつかん」

「あ、うん。…ええとー、これなんやけど…」

「拝見します。どれどれ…。はぁ?…えー…?あー…」

何これ?うわぁー…見事に核の部分が罅割れているんですけど。内部の圧力に耐え切れなくて外装にも罅ができたんだな、これは…。どうしよう、これ?外装だけならまだしも流石に核が損傷しているとなるとなぁ。

いっそのこと一から新しいのを作るか?それが手っ取り早いよなぁ…。あー…でも、今、気に入っているって言っていたしなぁ…。

「ど、どうやろ?直りそう?」

「……結論から言うと無理だな」

「そ、そうなんか!?え!どうして!?」

え?なにをそんなに動揺してんのさ?気に入っているとは言っていたけど、そんなに大事に使っていてくれたのか?そうだとしたら作った本人としては嬉しいものだね。うん。

「軸と言うか、芯から亀裂が入っているからこのまま修理しても遠

からずまた割れるかもしれない。…でも手はある」

「それは何なん!?」

直るかもしれないと聞いた途端にエライ食い付きようだねぇ。さっきまで泣きそうな顔をしていたっていうのに。嬉しいのかなぁ？いや、誰だって大事な物が直るかもしれないと聞けば嬉しくもなるか。

「一度全部溶かして再成形することだ。これなら元のまま同じ物ができるし強度も問題無い」

「……どれくらいでできるんかな?」

「??…急ぎなら今日中に仕上げるがどうする?」

木乃香ちゃん、何でこんなに真剣なのかね?目がマジですよ?まぁ、そこまで真剣に考えてくれるなら作り手としては応えるしかないでしょう!

普通に再練成するとなれば1週間弱の期間が掛かる…。だけど工房内の設定を弄れば1時間を最大72時間まで引き伸ばすことができる現実で二時間と少しあればできないことは無い…かな?マリーに相談しないと…。

「お願いします!!」

「わ、わかった。今日は送るからこのまま待って居てくれ…」

「はいッ!」

嬉しそうだなぁ…。満面の笑顔ですよ？これは失敗は許されないなぁ。…少しヤル気だして頑張ろうっと！あーっとっと。その前に店番をお願いしないとね。

「それじゃ…ミリー？ミリー、ちょっと来てくれる？」

「はぁい♪木乃香ちゃんですねぇ？お任せくださいなぁ♪」

奥に居るミリーを呼んでお店と木乃香ちゃんのことを頼んだ。流石にお店を無人にしたり閉めるわけにはいかないからな。

「お願いね。2，3時間したら戻るから」

んー…！それじゃ、サッと終わらせてくるかね。木乃香ちゃんの喜ぶ顔も見たいし♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――魔法球［工房］内…。

Ｓｉｄｅ　マリエール

［工房］内の鍛冶場で機動兵器用の新しい装甲の研究をしていた。そんな時に珍しくも、まだ喫茶店が開店している時間帯にもかかわらず主が私のところへ訪ねていらした。

挨拶を交わした後、事情を聞くと木乃香殿に渡したマジックアイテムが破損したので大至急、修理をしたいということだった。

私は、あのアイテムが破損?と疑問に思った。私達の計算では来年の夏ごろまでは保有魔力の隠蔽と抑制。これらの効果が問題無く持続するはずだった。

一応、素材となる貴金属や魔法的、呪術的な効果にしてもそこらに市販されている一般の物よりも丈夫に、高性能に作ったのだが…。どうやら木乃香殿はこちらの予想以上に保有魔力は蓄積していたようだ。

ふぅ…まぁ何はともあれ修理か…。

「はぁ…それは構いません。ですが急ぐとなるとアイテムのどこかに不具合がでませんか?」

「そこは人数でカバーしようと思うんだ。それに元々は来年の春まで効果が持てば、あとは形だけ持てばいいと思っていたんだよね」

「来年の春…中学の一年ですか?それはまたどうして?」

なぜ、そんな中途半端な時期なのだろう?それならばいっそのこと麻帆良の小中高大の学校を卒業しても効果を持続させてしまえばいい…。これの副作用は、まぁ……多少はあると言えばあるのですが。

それでも死ぬような目に遭うよりは親の願い通りに一般人として静かに暮らされたほうがよろしいように思うのです。まぁ暫らくは

私達の行動も監視の都合もあり拘束されるし大変でしょう。しかし、それもたかが数十年、大した労力ではないです。

それなのになぜ?あと一年持てばいいなどと主は言われるのでしょう?

「何簡単なことだ。来年の春には刹那ちゃんも来るんだ。彼女が木乃香ちゃんの近くに居れば護衛の手間も省ける」

「確かにあの子の成長には目を見張るものがあります。ですがこのアイテムが不必要になるとは思わないのですが?洩れ出る保有魔力の抑制と隠蔽ですし」

あの烏族のハーフの娘ですか…。一族では禁忌の白い翼を持って生まれてきたばかりに周囲の他人から白い目で見られたようですね。私から言わせれば何が禁忌なのかがわかりません。

それは私の今の有様が通常の精霊とは違い、著しく変質してしまっているからかもしれませんね。変質したのは家族全員に言えることですが。因みに今の私達は所属が世界から主に換わり、主の御手により最上級の力を与えられた亜精霊や異悪魔です。

話しが逸れました…。

それにしても刹那殿が護衛を引き継ぐにしてもあの子1人で守れるものでしょうか?それは乞われれば助太刀しないこともないですが…(ボソッ)ただ、主が助けろと言うならば、ですがね。

うっうんッ!そ・れ・よ・り・も!刹那殿が来るからといって、それでこのアイテムが不必要になるということですが理由としては

弱いように思います。

今は周辺の魔法系の団体には麻帆良の名義（偽造ですが何か？）で威嚇牽制し予防線を張ることで魔法関連のイザコザは目に見えて減少しています。ですが注意が必要なことには変わらない。

「いいの、いいの。そのくらいの歳になると無理に魔力を押さえ込むのは返って身体に悪影響を与えかねないしね」

「悪影響…身体的な成長のことですか？多少背丈が低くなるくらいならどうと言うことは…」

やはり主はアイテムの副作用のことが気掛かりだったのですね…。ならば今回のことは幸いだったのかもしれません。通常の成長から見て、予想では１０ｃｍほど低くなると考えていましたしね。……体重も比例して減るんですけどね。

まぁこのアイテムの欠点は成長不良で身長が伸び難いだけなのですから、この切欠を改良してみましょう。魔力の隠蔽と抑制の効果を減衰させる代わりに副作用を緩和または、相殺してみようと思います。

口では背が低くなるくらいいいのでは？などと言いますが、これも主の考えを広げるための一アクションに過ぎません。否定的な意見も時には役に立ちますからね。私自身もそれで幾度か助けられたことがありますし。

意思は幅広く持つべきです。ええ、そうですとも。

「それはダメ。どちらにしても木乃香ちゃんの意思を確認せずに反

しているんだから成長を妨げていましたなんて……言えないでしょう？」

「それでも命を狙われるよりはマシではないかと思うのですが」

一応、否定的なポジションで話しを進めていきます。ただ私自身は別に反対ではないですから殺伐もケンカもしなければ夜のプライベートレッス…げふんっげふんっ。失礼しました。何かを受信してしまったようです…。

まぁそれはともかくアイテム作成の話しでしたね。内心、作ることに否は無いです。口頭での、このやり取りも社交辞令的なものに過ぎませんしね。

「親の意向で木乃香ちゃんは何も知らないんだよ？それはマリーも知っているでしょう？それなのに、ある日突然「貴女を守るためにしました」で納得すると思うか？俺ならキレるね」

「あの子の性格から考えると「そぉなんやー」で済ませそうな気もするのですが…」

ちょっと話していたら木乃香殿の父君の詠春殿のことが出てきた。

確かに彼は前魔法大戦を自らの目で見て、更に戦後の状況も放浪して紛争に介入して治めたり、焼けた町の復興風景など悲惨なものを直視してきましたからね。娘だけは魔法に関らずに幸せになってほしいという親心なのでしょう。

これも主からの又聞きですが詠春殿の親としての気持ちも芯の部分で理解はできません。ですが想像くらいはできます。

ただ木乃香殿本人に魔法のことや今回のアイテムのことを教えても先にも言ったように「そぉなんやー」や「ほぇー」で終わってしまいそうな気がします…。あの子、少しだけ天然さんが入っていますからね。

寧ろ主が木乃香殿に「君を守りたいんだ」なんて言えばもの凄く恥ずかしがって喜ぶのではないかとさえ思います。

あの子からは“私の”主に向ける目が桃色な気がするのです。幸いにも主は気付いていないようですが…。このまま気付かないで居てください。切実にお願いします。ええ、もう本当に。

「……例えが悪かった。今のは無しだ。…ええとな？俺がイヤなんだ。うん、これで行こう」

私の指摘に主は考えを改めるようです。木乃香殿の行動を想像したのでしょう。それはそうと「俺がイヤなんだ」という発言…。これはどういうことでしょうか？

……はっ！？まさか主は木乃香殿のことを異性として気にしておられる！？自分がイヤ！？それはつまり…アレですか！？ひ、光源氏計画！？そんな！？ダメです！！主には私達が居るではありませんか！？これ以上増やすのは、やめましょう！！

いやッ！いやいやッ！！いやいやッ！！！落ち着け私ッ！！そんな素振りは今まで一度も無かった！そうです！ありませんでしたとも！！

ふっ、冷静に考えれば簡単なことでしたね。つい想像（妄想）が

先走ってしまったようです。反省ですね。因みに私の表情は変わらずポーカーフェイスのはずですから怪しまれてはいないはずです。

「……はぁ。そうですか」

「そうなの。この2ヶ月で背も伸びてきたところから見ると今が彼女の成長期だからね。配慮すれば魔力も多く母親似の美人になること請け合いだ」

「確かに人間の中では将来有望ですな。…（ボソッ）ですが主は絶対に渡しません。ええ、渡しませんとも」

主…。見ていないようで実はよく見ていたんですね？木乃香殿か…。まだ幼いですが要注意人物かもしれません。皆と相談しなければ…。

「？？…よし！作業に移るぞ！」

「御意ですッ！！！！！」

「ッ！？」

少しヤケクソ気味に返事をしたのは気合の表れです。…たぶん…きっと。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　マリエール

――喫茶店クレイドル店内…。

Ｓｉｄｅ　木乃香

店内に掛けてある時計を見てみた。葵兄さまがお店の奥に行ってから2時間が過ぎとった。今日中に直してくれるって言ぅとったけどホンマに出来るんやろか?葵兄さまのことは疑ってないけど心配やなー。

わたしはロケットを渡す前に取り出した写真を見て「ふぅ…」とタメ息を吐いた。写真の中には顔を真っ赤にしてはにかむ、せっちゃんが写っとる。かわええなー♪会って話したいわー…。それにしても、ええ笑顔しとるなー。

……確か、これ撮ったの、葵兄さまやったっけ?ちょっとずるいわー。わたしもせっちゃんと話したいのにー…。でも、写真を撮っとるちゅぅことはせっちゃんの向けるこの表情は葵兄さまってことやね?この表情は……まさか、ねー?

「ふふふ♪それがロケットに入っていた写真かしらぁ?」

「ッ!?…ぅ、うん。そうやよ。せっちゃんの写真やねん。葵兄さまが撮ってきてくれたんよ」

お、驚いたわー…。なんやミリーさんかー。後ろから覗き込んでくるんは良くないと思うへー?ヤマシイことしとる訳やないけど知らん間に声掛けられるとドキッとするやん。ミリーさん、ニコニコ笑顔だから怒り難いわー…。敵わんわー。

「そう…。木乃香ちゃんは刹那ちゃんのことが好きなのねぇ♪」

「うんっ！わたし、せっちゃんのこと好きや♪…そやけど、せっちゃんはわたしのことどう思うとるんかなー…？」

わたしがこっちに来てからも何も言うてくれへんのやー。月に何度か京都へ行く葵兄さまばかり、せっちゃんと話してズルイと思うんよ。…しかもこの写真を見る限りめっちゃ楽しそうにしとるようやしなー。

葵兄さまと何を話しとるんやろ？わたしもせっちゃんといっぱいお話ししたいわー。今も避けられてるみたいやしなー。どうしたらええんや？はぁ…。葵兄さまは大丈夫って言うてくれるけど不安やなー。

あ、でもでも。わたしがちっさな時に葵兄さまがもしもダメな時は何でも言うこと聞いてくれるって言うてくれたことがあったなー♪えへへー♪気休めだったんやろがめっちゃ励まされたなー♪

「大丈夫よぉ、心配ないわぁ。刹那ちゃんも木乃香ちゃんのことが好きよぉ♪心配なんて無いわぁ」

「あはっ♪それ葵兄さまにも言われたわー。いつでもわたしのことそう言って励ましてくれた。…えへへー♪」

ミリーさんも葵兄さまと同じこと言うてくれたー♪やっぱり家族って似るもんなんかなー？励ます言葉なんかが葵兄さまとソックリやったわー♪うん！なんや元気出てくるわー♪えへへー♪

なんて「頑張るへー！」って気合入れたら写真が私の手から落ち

ても…う…た…！？マズイ！！あの写真！せっちゃんの写真の裏にある“２枚目”だけは見られたらアカン！！

咄嗟に手を伸ばして拾い上げようとしたら横から別の…ミリーさんの手が写真を拾ってもうた…。親切心からかもしれんが今は、その親切心が余計に感じたのはわたしだけの秘密やー…。マズイなー…。

「…（要注意人物なの、かしらぁ？）あらぁ？写真の裏に、もう一枚？何かしらぁ？ペラッ♪……っ！！あ、あらあらぁ♪」

見る！？普通、見る！？返すやん！！普通、返すやん！！ペラッて…ペラッて捲る？！何はともあれマズイわー…。葵兄さまの家族に…わたしも姉さんと思っとるミリーさんにバレてもうた…。

いや！ちゃうやんっ！今は取り返さなっ！！

「ッ！？！か！勝手に見たらアカンーッ！」

取り返したけど…。遅かったわー…。バッチリ見られてもうたしなー…。こんな時どないしたらええんや…。うぅぅ！ミリーさんはニコニコと見てくるしー。恥ずかしいわー！

「主さ…店長の写真でしたけどぉ…。ジィィィィ…」

「あわ、あわわわわわ！それは、その、えと！憧れ……そう！憧れなんよ！？優しいなぁ。安心するわー、なぁんて思うとるだけなんよ！？他に意味なんて無いってー！あははははー！」

「……私ぃまだ何も聞いてないのだけどぉ」

「は！？」

これは自爆やった！？

「待たせたな。修理できたぞ。……何してんの？」

「な！何もあらへんよ！あははは！うん！ないない！」

わたしが自爆してどないしよーと考えてたら思わないところから救いの手が出てきた！流石は葵兄さまや！苦しい時に助けてくれる！でも、写真のことは秘密やからここは勢いに任せて押し切るしかないわー！

この時にミリーさんには秘密にしてもらうようお願いしといた。何でか知らんけど快く了承してくれたわー。何でやろ？

「…あらあらぁ♪店長、もうよろしいのですかぁ？」

「ん？ああ。思ったより作業が捗ってね。予定よりも早く出来上がったんだ。それよりも本当に何も無かったの？木乃香ちゃんが、少し（？）だけテンパっているように見えるんだけど」

「ふふふ♪何もありませんよぉ。それよりも品物を木乃香ちゃんに渡さなくてよろしいのですかぁ？」

そうや！わたしのロケットは！？

「あ？ああ、そうだった、そうだった。…木乃香ちゃん、はい、これね。材料は壊れたロケットを溶かして作ったから採寸も重量その

他も、まったく同じに出来ているから」

「あいがとー、葵兄さま。ほんま嬉しいわー。うわー♪綺麗に直っとるー♪」

わー♪元通りになって返ってきたわー♪貰った時の綺麗なまんまになっとるわー♪

「ふふんっ♪喜んでもらえたようで何よりだ。…ああ、そうだ、木乃香ちゃん?また何かあれば持って来るといい。こちらで対処しよう」

「ええのー?わー♪ありがとー♪」

んー、早々何度も壊れたりはしないと思うんやけど…。でも、今回みたいに突然、壊れてまうこともあるかもしれんしな…。そうなったらお願いするしかないもんなー。その時は頼らせてもらおう♪

「よしよし。さて、そろそろ時間も頃合だ。ミリー…いや、今日は俺が送るか。ミリーは閉店準備をお願い」

葵兄さまが私の頭をポンポンって撫でながら笑ってる。ちっさい頃から私の頭を葵兄さまの暖かくて優しい手が撫でてくれるのが私は好っきやねん♪なんや身も心も任せて安心出来そうな気持ちになるんや。

ぽわわーって優しい気持ちになれるわー♪でもな、葵兄さま?お店閉めるんは1時間近くも早いと思うんや。ええんかなー?

「そうですねぇ、少しだけ早いですけどぉ…。ふふふ♪わかりまし

たわぁ。お任せくださいなぁ♪」

なんでわたしを見てお店閉めるのに賛成したん？ニコニコ笑っとるしー…。気ぃ遣わせたんかなー？ニコニコ笑っとるからわたしにはわからんわー。

「よろしく。それじゃ木乃香ちゃん、行けるかな？」

「葵兄さまが送ってくれるん？わぁ♪うん！わたしはいつでもええよー♪」

何はともあれ今日は葵兄さまが寮まで送ってくれる！送ってくれるんは久しぶりのことやから、なんや嬉しいわー♪いつもはミリーさんかマリーさん、たまにアイリさんかウーリさんの誰かや。

……今、思ぅたけど人数多いなー。しかも皆、美人さん…。葵兄さまのこと好きなんかなー？んー…？うん！今は、それよりも葵兄さまと一緒に居られることを喜ぼー♪えへへー♪

「そんなにはしゃぐことじゃ…こら、引っ張るなって！木乃香ちゃん！」

「えへへー♪聞こえへんもーん♪ほぉら早ぅ行くへー♪あっ！ミリーさんお邪魔しましたー！」

わたしは葵兄さまの腕に抱き付いて玄関まで引っ張った。

「だから引っ張るなって…おいっ！？」

「あらあらぁ♪またねぇ？気を付けるのよぉ♪」

えへへー♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　木乃香

第三十七話「予想外とロケットと木乃香と」（後書き）

木乃香が難しい…。誰か教えてほしいですねぇ。
でも、もう少しでネギ少年が来そうな気がする。
次か…その次か…そのまた次かで。
要するにまだ未定だったりしますな！
正直、作者の気持ち…テンション次第だったりします（笑）。

では、また。感想＆ご意見お待ちしています♪

第三十八話「散歩と夜道と金髪幼女と」（前書き）

木乃香の関西弁？京都弁？難しいと思った。
作者の使い方が間違っているのでは？と感じた。
でも自分ではわからないので指摘されるまで、やめない。
では続きをどうぞ！

第三十八話「散歩と夜道と金髪幼女と」

――麻帆良市内学園近郊の桜通り…。

Ｓｉｄｅ　葵

日が沈んだ夜、少し気紛れに散歩に出た。未来で吸血鬼事件と言われることになる学園近くの桜通りに来た。付属魔法球の［桜の苑］じゃなくて麻帆良の桜を見たかったんだ。夜桜ってのも時にはいいものだよね。

時期が時期だから若干、散り始めているけど…。

「もう直ぐ5月か。桜も散り始めているな…」

『何か、思うことでもあるのか？』

「……夜道とはいえ声出すのは、やめようよ。誰に聞かれるか、わかったものじゃないんだからさ」

ここは麻帆良女子中…つまり学園長に近いから話しているところなんかを見られたりしたら、目も当てられない。そうじゃなくても時間的に部活で遅くなった人が通るかもしれないんだ。偶然とかはマジで勘弁だ。

『ふんっ、我に抜かりは無い。魔力、重力場、動体、熱源、その他センサーやレーダーで周囲に人はおろか猫1匹居ないのは確認済みよ』

その辺りは信頼しているけどね。確認のために聞いてみただけだし。万が一のことが無いか、見落としが無いか、そんな確認は互いに必要なことだ。直前で忘れていたなんて笑えないよ。

えっと、何の話しだったか…。

あー…？そうそう！思うことだったか？思うこと、ありますよー。木乃香ちゃんに渡したアイテム（ロケット）のことだ。大丈夫じゃね？と考えて作ってあったのに壊れたんですよ？ヘコんだね、うん。

「そっか。…まぁ、木乃香ちゃんに渡した新しいロケットの様子をこの1ヶ月近く観察したけど順調に効果を発揮しているようだってね。修理に問題は無いみたいでよかった」

『貴金属の生成はマリーらが、そしてウーリや我が主らが形成したのだ。当たり前だろう』

「いやー、そうでもないんだよねぇ、これがさ…。それが証拠に木乃香ちゃんに渡したロケット壊れたし。あれは反省だったなぁ。もっとキャパシティに余裕を持たせておくべきだった」

ロケットを作った時は他の仕事が忙しくて手が行き届かなかったからなぁ。…おかげでアイテム破壊しちゃったし。これはやはりモノ創りの人としては手を抜いちゃいけないということだよね。

市販の物よりも性能は高いけど俺から見れば不良品だな。一応、二度とこんなことが無いようにしたから大丈夫だろう。1ヶ月間、様子を見たけど問題は見られないしね。

『うむ。それは反省するべきだったな。何事にも余裕を持たせておいて損は無い。だが我が主は同じ過ちを二度はしまい？ならばそれで良いではないか』

「ラミエルさん…。くっくっくっ。ありがとう」

こうして慰めてくれる家族が居るから俺は今も頑張れるんだよね。元来の俺は臆病者で怖がりだからさ。支えてくれる家族が居ることがありがたいよ、本当に。お蔭であらゆるモノと戦うことが出来る。

『れ、礼など無用…む？レーダーとセンサーに反応有り。この先に小さな生体反応がある。…多少、生体、魔力反応が歪ではあるが子供のようだ』

「こんな場所で、こんな時間に子供が？…変だな」

ゆっくり歩いていたけど気が付けば周りには樹木が生い茂っている道に出ていた。昼間に訪れれば、いい森林浴になったかもしれない場所だ。でも、夜の雰囲気は…何と言うか、悪い魔女の住む森？

肝試しには持って来いのポイントだなぁ…。工房の倉庫に悪霊が封印されたビンが幾つかあったはずだから何体か放してみようかね？現代に黄泉がえる本物の死霊の森…。絶対にやらないでおこう。俺自身が怖い…。

それは、ともかく子供か…。それも反応が歪？どういうことだ？刹那ちゃんみたいに何かとのハーフなのかね？でもそんな記録は学園データバンクには無かったはずだし…。見落としたか？

んー…気になるなぁ。どうしよう？行くべきか、行かざるべきか

…。

『どうする？無視することもできるが…』

「…いや、見に行こう。もしかしたら迷子なのかもしれないしな」

そう、反応が歪だからって敵対者とは限らないじゃないか。単なる少し特殊な子で、ただの迷子かもしれない。こんな夜と森だ。一人寂しく泣いているかもしれないじゃないか。

ならばお兄さんとしては…　行　く　し　か　な　い　！　！

『歪な反応から見て…むぅ？この幾つかの微弱な魔力反応は使い魔か、式神の類か？我は見逃したほうが良いような気もするが…。何だ？消えた？ふむ……いや、なるほど』

「…どったの？」

え？何？これって何かの罠なの？使い魔とか、式神とか聞こえたんですけど！？でも、消えたって…。あー、護衛の人が対処してくれたのかな？

『何でもない。ここは我が主に従おう。行くぞ』

「？？？」

まぁラミエルさんが何でもないと言うから大丈夫なんだろう。それに言われるまでもなく行くけどね！どんな子かは知らないけど子供がこんな時間に1人で居るなんてイカンでしょう？行かないとね。

あの子か？…金髪？幼女？……あれまー、エヴァンジェリンじゃないか。何でこんなところに？無視するか…でも、ここまで来たんだからなぁ。…よし♪少し、からか…げっふん、げっふん、話してみよう！そうしよう！

「こんばんは。こんな時間にどうしたの？」

「む？なんだ、貴様は？」

おふ？いきなり話しかけられたから警戒心を抱かせてしまったようだ。絶妙な距離をとられた。直ぐにも逃げられるし一撃を放てる、そんな距離感。熟練者の気配を感じられるねぇ。

一応、俺を俺として知っている者以外には俺と認識できないようにするメガネをしている。魔力開放しなければ一般人に見える…はずだ。

相手は魔力封印と登校地獄の呪いが掛かっているとはいえ、あの闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）だ。下手なことをしたら直ぐにでもバレることだろう。それでも！！話す（からかう）ためには接触しなくてはならないのだよ！！

おっと、黙っていたら怪しまれてしまうな。

「…いや、夜に子供が歩いてるから迷子かと思ってさ」

「こ！？子供！それに、ま、迷子だと…！ククク！この私に

良くぞ、ほざいたな…ククク！」

……これは失言だったのだろうか？夜なのに、この子の背後に暗いオーラが幻視、出来るようだ。負けることは無いとはわかってはいても気持ち的には怖いなぁ。

でも、身体的には子供なんだよね？もしかしたら身体が冷えて腹痛なのかもしれない。だって俯いているし、プルプル震えてもいるしね。それに風邪も引けば花粉症にもなっていたような…。

「いや…お嬢ちゃん？俯いてどうした？ポンポン痛いのか？」

「…＃ッ！」

あ、あれ？これは違ったのか？額に大きな＃マークが出てきた…。ここはアレかな？少しジョークを混ぜて話してみるべきなのかな？

「Ａｈａｈａ！！それともお母さんと逸れたから寂しいのかな！？」

「…＃＃ッ！！」

……大きな＃マークが２つに増えました。何この子？ジョークもわからない堅物だったか？頑固ちゃんだったのか？頑固なのは刹那だけで十分だよ…。

いや、この子はからかうのは好きだけどからかわれるのは好かない子だったかな？生粋のＳっ子なんだね！

……いっそ、苛め抜いて心の奥に隠されたＭっ子を引き摺り出し

てやろうか？

しかし、俺はソフトSであってハードでは決して無い。寄って別の話題で話しかけてみようと思う。身体的に問題は無い。ジョークも通じない。ならば…！！

「あっ、お腹空いたのか？あー…今はアメしかないけどいる？」

「…＃＃＃ッ！！！」

なんだよ！？また＃マークが増えたよ！３つにな！！

何！？食べ物の話題でもダメなのか！？俺は大好きだぞ！食べ物をバカにする者は食べ物に泣くんだ！バカにしているのか！？エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル！！！

……なんて幼女を責めることなんて俺に出来ようはずも無いですね。必要に迫られればやらないことも無いけど…今は必要ないしね。

それに、もうね？俺は思ったのさ。直接、どうしたのかを聞くってね！！

「本当にどうしたのさ？黙ってたら、わからないよ。お兄さんがお家に送ってあげるから元気だそ？ね♪」

「貴様はーーーーーーーッ！！！！」

「ッ！？何！？どうしたの！？」

後半の言葉か？！少し調子に乗り過ぎたか！？今まで黙っていたのに行き成り怒鳴るとかは、やめようよ！暗い森の近くだから怖いでしょや！？ってか、驚くからやめよう！

こら！ラミエルさんも反応しないの！小型荷電粒子砲をこっそりと展開しないの！？大丈夫だから！まだからかえる範囲だから！じゃなかった！話せる範囲！笑える話しの範囲だから！

「何だ！？貴様はッ！？この私を闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）と知ってのことなのだろうな！？」

「…は？あー…はいはい！名前がエヴァンジェリン・ダークなのか。じゃあ、エヴァちゃん…」

「ちっがーうッ！！二つ名だッ！！！それに私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだッ！！わかったか！？」

そんなにムキにならなくてもいいじゃないですか…。一般人なら名前かと思うだろう？普通、二つ名なんて無いって。…というよりエヴァンジェリンよ？一般人にその異名を名乗ってもわかるわけが無いって…。

まぁいいか…。それよりもここはもう一つこの勢いで聞いてみようかな。行き成り“キティ”なんて呼んだら怪しさ爆発だからね。

「へぇ…立派な名前なんだね！因みにAとKの意味は？」

「アタナシアとキティだッ！！それがどうかしたのか！？……ハッ！？しまったッ！？」

勢いよく教えてくれて、どうもありがとう！！…あれ？アナスタシアじゃなかったん？……うっわ、俺、素で間違えていたんですけど。少し恥ずかしいな…。しかし、アタナシアというと…不死？キティが子猫だから……不死の子猫？

「不死の…子猫（アタナシア　キティ）？へ、へぇ？可愛い…ね？」

「貴ッ様…ッ！忘れろッ！！いいな！？絶対忘れろよ！！？忘れなければ殺すからな！！？」

「は？何で？可愛いじゃないか。子猫（キティ）ちゃん、なんてさ」

不死（アタナシア）のはどうしようもないけどね…。それよりも何をそんなに嫌がっているのかね？可愛い名前だと思うんだけど…。あっ！だからか！？可愛いと威厳が出ないとかいう…。これは憶測だな…。

「ソノ名デ呼ブナーーッ！！！イイナ！？二度ト、ソノ名デ呼ブナヨ！！？わかったな！！！？」

「えー…」

いいじゃないか…。これ、いいじゃないか！エヴァンジェリンをからかい放題だぞ！……ヤリ過ぎるとキレられるけどな！今も少し片言になり始めているし…。こっわ！ただまぁ、そこは絶妙な加減が必要だな…。飴と鞭の要領でイケるだろうか？

「えー、じゃない！！何なんだ！貴様というヤツは！？呼ぶなった

ら呼ぶな！！」

「可愛いのに…」

最後の抵抗くらいは許してもらえると思うんだ…。実際、名前と外見は可愛らしい幼女だしね。喋ると耳年増で生意気な幼女にジョブチェンジするけど、な…。あの年恰好の幼女が生意気に話しても微笑ましいだけだよ、マジで。

保有魔力と魔法技術が高いから下手に刺激すると暴れ出すだろうけどさ。そして俺は彼女が封印されている今こそが、からかう絶好の機会だと思うんだ。……可愛いと思ったのは本心だけど…。

「か！？かわっ……ん〝ん〝っ！！いいから貴様は私の言うとおりにしたらいいんだ！！」

「じゃあ、エヴァちゃんで♪」

妥協するんだからせめて俺は“エヴァちゃん”と呼びたいです。年下なんだからいいだろ？年上をちゃん付けするのは抵抗があるけどエヴァちゃんは見た目相応に年下だし。……桁が違うけど。

「ぐっ！こいつは…！ま、まぁ、それで妥協してやろう…。寛大な私に感謝するのだぞ！？いいな！？」

「はいはい♪お兄さんが感謝の印にアメちゃんをあげようねぇ♪はい！あーん？」

意外と素直なエヴァちゃんへご褒美にアメちゃんをあげようと取り出した。そして一つを取り出してエヴァちゃんの小さな口元へ…。

うっわー…マジで小さい♪かーいーなー♪

このアメちゃんね？家のお土産用のお菓子なんだ。７個入りで１５０円。少し割高だけど一つ一つの味が違っている。それに特性のハーブエキスを練り込んであるから鎮静、高揚などの違った効果もそれぞれにあるのだよ。

材料も一般の物を使っているから魔法使いにもバレない。じゃなければ今、エヴァちゃんに渡せないよ。下手に魔力が篭もった物を渡そうものなら問い詰められそうだしね。

「な？あーん、だと！？私を子供扱いするな！！というか！アメなどいらんわ！！」

「えー…。美味しいよ？俺の手作りだよ？人気商品だから、なかなか手に入らないんだよ？次は食べられないかもしれないよ？」

これは本当。人気商品だから店頭に並べると開店１時間で売れ切れてしまうんだ。これを目当てに来る人も居るくらいなんだよ？それと平日は奥様方、休日は学生さんが買って行く傾向にあるね。

「……なら、普通に寄越せばいいだろうが。ほら！」

んっ！と、手を出すエヴァちゃん。でも、その顔はそっぽを向いて目を合わせようとしない。

エヴァちゃん…。欲しいなら欲しいって素直に言えばいいのに。それに俺が最初にしたことを忘れたのかい？……“あーん？”は譲れないのだよ！！

「ダ・メ♪はい、あーん？」

「こっの！？…あ、あーん…！」

なんだかなぁ…。この子、歳の割りに素直な部分があるよ。お菓子か？甘い物があるからなのか？女の子は甘い物が好きだからか？

……エヴァちゃんは女の子だ。６００歳でも“女の子”なんだ！女性は歳が幾つになろうとも“女の子”に変わりは無いんだ！！！ロリババァなんて…ババァなんて呼ばせないんだからね！！？

すまん…取り乱した…。しかし、今の意見を取り下げることは決してしないことは、ここに宣言させてもらう！！……可愛いは正義…いや、真理だと思うんだよね。

「はい♪」

「んぐ…ころころ…うまいな…。もう無いのか？」

かーいーなー♪頬っぺたがぷっくりと膨らんでますぜ？保護欲を懐かせるね♪

それにしても暗くて見え難いから何のアメを渡したのかはわからないが気に入ってもらえたようだ。美食家なエヴァちゃんが気に入るということはアメちゃんの増産も視野に入れるかな。工房内なら

幾らでも作れるしな。ボロいねぇ♪

「くっくっくっ、気に入ってもらえたようで嬉しいねぇ」

「う、うるさい！…それで無いのか？」

赤くなってまぁ。可愛いなぁもう♪お持ち帰りしちゃいそうじゃないか！……やらないけどね？誘拐なんかしてタイーホされたくないです。クサイ飯食べたくない…美味しいご飯を食べたいです。

ふと腕時計をさり気なく見て時間を確認した。ふむ…？そろそろ頃合、かな。

「あるけどね！はい。アメちゃん7個入り…残りは6個だね」

「貰ってやろう。それで貴様、名は何と……居ない！？」

エヴァちゃんの気がアメちゃんに逸れた一瞬の間に逃走。穏行にラミエルさんのステルス。そして高速移動術。いろんなモノを駆使して跳んだり跳ねたり飛んだりして逃げました。

またねぇエヴァちゃん♪なかなかに楽しかったよ♪

――？？？…。

逃げに逃げ、俺は喫茶店のあるレストラン街の入り口まで逃げて

きた。

「ふぅ、ここまで来れば大丈夫かな？」

『…追ってくる反応は無い。我が主が穏行で気配遮断し、我が熱光学迷彩を行使したのだ。一瞬とはいえ気が逸れたならば離脱は大して難しいものではない』

「エヴァちゃんが魔力を封印されているのも理由にあるけどね。本来の力ならば気付くだろうな…。いや、気配に関して彼女の嗅覚は凄まじいものがあるか…」

魔力云々よりも血の匂いや纏う気配でバレるかもしれない。アレ？じゃあ俺は？……認識阻害か？それでも気付く時は気付くと思うんだけど。俺は小物臭しかしなかったってことなのか？うわー…へコみそう。

『しかし、何をしたのか知らないが現在は封印されている。結果が全てだぞ、我が主よ？』

「まぁ、その通りと言えばその通りなんだけどね…」

封印関係はまだ研究浅いからなぁ。あー、でも完全解呪は出来なくても一時的な解呪なら出来なくも無いかな。エヴァちゃんを縛る封印の現状はそれとなく見たけど時間を掛ければ出来なくは無いか。

まぁ俺が解かなくてもネギ少年が将来的にやるだろうさ。いつになるかは、わからないがな…。

『それよりも我が主…接近する途中で、あの娘に気付いていただろ

う？無視してしまえば良いものを…』

むぅ？ラミエルさんにはバレてたか…。知らない振りしていたのになぁ…。でも、そのおかげでＡがアナスタシアではなくてアタナシアだってことがわかったしね。あれにはビックリだった。思い込みって怖いね？

「いや、だって、ねぇ？報告書だけで実際に話したことなんて無かったからさ？どんな子なのか、からかって、じゃなくて、話してみたかったんだよ」

『本音が洩れていたような気がするが…』

「気にするな。俺は気にしない」

気にしたら負けだよね？

『ふむ…。結果的に何も無かったのだから良しとするか』

「それじゃ、帰ろう？あー…それにしても気紛れの散歩で思わぬ遭遇をしたなぁ」

時間的にエヴァちゃんだったらエヴァハウスに引き篭もってゲームしているか、夜の警備で森を彷徨っているかと考えていたのに当てが外れてしまったよ。

『日が悪かったのだ。諦めるが良い。生体反応と魔力反応は記憶したので次からは出会わぬようにナビゲートもしておこう』

「うん。必要な時はよろしくね？」

『任せるが良い♪』

流石はラミエルさん♪これで来年まで変に遭遇することは回避できそうだな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――？？？…。

Ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

月が綺麗な夜に気紛れで散歩に出ていた。そして暫らく歩いて桜通りへ続く森の近くを歩いていたら見知らぬ男に話しかけられた。

学園都市内で、学生でも教師でもない人間…。怪しさ満点ではないか。この身は忌々しい呪いと魔力を封印されている。そのせいで面倒で不本意なのだが学園警備の約定もある。一応、形だけでも警戒し誰かと問い質した。

なのに、その男は私のことを迷子の子供扱いをしてきたのだ！！おのれぇ…！魔力が封印されていなければギッタンギッタンにしてボッコボコにしてやるのに！！

その後も色々あったが何よりも失態だったのは私の名前のことと気付かぬ内に逃げられたことだ！！この私が気付かないとはな…。

あいつは何者なのだ…？あっ、名前を聞いてない……。

散歩を終えて帰路についた私は自分の家の玄関の扉を開けて中へ入った。

「まったく…何だったのだ、アイツは？」

「ヨォ、御主人。随分ト長イ散歩ダッタジャネェカ？」

帰ってきた私を迎えた、この口汚い笑う少女を模った人形の名はチャチャゼロ。私が作った中で古参の従者だ。……今は私の魔力が封印されているのもあり喋ることが出来るだけの呪い人形に成り下がっているがな。

「チャチャゼロ…。なに、不思議なヤツに出会って、な。私のことを子供扱いするわ、怒らせるわ、アメでご機嫌を取ろうとするわ。……なんか思い出したらムカついてきたな」

「ケケケッ！大シタ野郎ジャネェカ！御主人ヲ、ソコマデ小馬鹿ニ、スルナンテヨォ！」

「うるさいぞ！チャチャゼロッ！魔力さえ元に戻れば、あんな無礼者など一捻りだったのだ！チッ！まったく忌々しい呪いだ！」

ええい！ナギめ！忌々しい呪いを掛けおって！おまけに１０年以上たった今でも解けんとは……バカ魔力を使いおって！！いつになったら呪いは解けるのだ！？噂では死んだようだが…信じられない。

あのナギが…Ｇよりも、しぶとそうなアイツが死ぬとは思えない。

「ケケケッ！ソレハ自業自得ッテナモンダゼ？気ニナル情報ヲ聞キ出ソウトシテ返リ討チニ遭ッタンダカラナァ」

「そんなことはわかっている！しかし、私を助けたナギが言ったのだ。私よりも長く生きているヤツが仲間に居た、とな。気になるだろうが？」

そう、私は崖から落ちそうになったところをナギに助けられた。その夜に焚き火を囲んで話している時に聞いたのだ。「俺の仲間だったヤツに八百年生きているのが居る」と…。ナギのヤツは話した後に、慌てて「しまった…秘密だったっけ…？」と零していたが。

私にとっては大事なことだ…！死なない身体、尽きない命。この永遠の孤独は自分だけだと思えば私よりも二百年前から、その孤独に耐えている者が居るのだ。同族かもしれない、と思うのは当然だろう？

まぁ開き直ったナギが言うには同族では…吸血鬼では無かったらしい。だが、不老の肉体を持っているのは間違いない。気になるだろう？ならば探すしかないではないか…。

「オレ様ハ知ラネェナ！戦エレバ、ドウデモイイゼ！…ソノ結果ガ、コレダガナァ。様ァネェヤ！ケケケケッ！」

「ふんっ！…九重・葵とかいう、その男は話しに聞くところによると、どこかで半分隠居しているらしいではないか。どこかは最後まで分からず仕舞いだったがな」

その居場所を聞き出そうとナギに近づいたのに逃げて教えようとしない。当初、手っ取り早く終わらせようと考えたのに暫らくナギ

を追いかけることになったな。

その時の一戦で敗北…本っ当にッ！不本意な勝負だったが敗北した。その後、ナギにふざけた呪いを掛けられて、この学園に縛られることになったのだ。魔力も封印されているし…。くそッ！

封印から3年経ったらナギが呪いを解く手筈だったのに私は今もこの学園に縛られている。

「封印モ解ク前ニ、ナギノ野郎モ、オッ死ンジマッタカラナァ。コレジャ探シニモ行ケナイゼ！」

「ああ…。いや、待て…。思い出した。確かナギは葵に私が探していることを伝えると言っていたはずだ」

そうだ。封印された時に私は確かに、ナギに九重・葵への言伝を頼んだ。１０年以上前のことだが、な…。ナギはちゃんと伝えてくれたのだろうか？

「１０年以上前ノコトダロ？ソレデモ姿ヲ見セナイッテコトハ…」

「…葵が私のことを無視しているのか、ナギが伝え忘れているのか、か」

そう、そうだな…。未だに会えていないのだ。言伝が届いたかどうかも怪しいものだ。ナギはバカ者だからな。ただ「会いたい…」という一言すら時間が経つほど忘れてしまう鳥頭だ。はぁ…。

「…元気出セヨ、御主人！シケタ面ナンカ、ラシクナイゼ！？」

「ふっ、そんな姿のお前にだけは言われたくないな」

「ヒデェ！？コンナンニナッタノハ御主人ノ所為ダロ！！」

「ふふんっ」

不器用ながらも励ましてくれる従者の人形チャチャゼロ。こいつも早く自由に動けるように封印を解かなければな…。

「…オイ？オレ様ニモ、アメ、クレヨ」

「……ダメだ」

「ケチケチスンナヨォ？１つクライ、イイジャネェカ」

「うるさい。……全部、食べたんだ」

「御主人……」

何も言うな、チャチャゼロ…。散歩の帰り道で気が付いたら美味しくて全部食べていたんだ。売っている店を探そう…。あっ、そこにあの男も居るのか…。ふふふ♪

この時の私はなぜか店を探して、そこに居るであろう男に会うことを楽しみに感じていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　エヴァンジェリン

第三十八話「散歩と夜道と金髪幼女と」（後書き）

エヴァ可愛いよ♪エヴァ可愛いよ♪

でもこの作品で本格的に主人公と絡ませるかは作者の気分次第……。
木乃香？気分次第では今後切るかも…？

冗談だけどね！！でも2人とも絡ませるかは審議中なり。
では皆さん！またお会いしましょうね！？チャオッ！

第三十九話「事後報告と地下施設と戦力生産と」（前書き）

そろそろ原作を開始したい…。と、思う今日この頃の作者です。
では、続きをどうぞ！

第三十九話「事後報告と地下施設と戦力生産と」

――麻帆良市上空…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

機動戦艦アングレカム艦内の私の執務室にて各部署から提出された報告書を処理していた。その中の一つで昨夜、閣下が夜に遭遇した人物、そしてそれに関する書類報告と記録映像を確認した。

「…それでは監視がエヴァンジェリンに付いていたのか？」

「そうみたいなの。隠密性を重視した式神だったの…」

「対処が必要か…」

「ううん。護衛役の子が術式に介入して術者には擬似情報を流したの。だから当面は安心していいと思うの」

ふむ、良い判断だ。下手に監視を消すと相手に要らぬ疑いを与えてしまうからな。…あれ？閣下が離脱する時って怪しくないか？行き成り姿を消すって…。閣下…おふざけが過ぎますよぉー…。隠蔽する私達の身にもなってくださいよ…。

エヴァンジェリン本人から近衛翁に報告が行ったら厄介なことになる、か…？いや、彼女が素直に報告するとは思えない。戦闘に遭ったなら話しは別だが実際はただの世間話だった。警戒するに越し

たことは無いが重度の警戒は必要ないか。

「ふむ…。一度、誰にどの程度の監視が付いているのかを洗い出したほうがいいだろうか？」

「賛成できかねますわね。こちらの存在を知らせてしまう結果になるのではなくて？得策ではないですわ」

リチラの言うとおり、今私達が動いて感付かれたら閣下に申し訳が立たない。閣下の指示あるまでは雌伏の時だ。麻帆良の地下に建築している生産施設（プラント）と活動拠点。そこで戦力の増強、物資の生産、魔力蒐集など、まだまだやることはある。

「確かに。……では現状の警備体制を維持する」

「それがよろしくてよ」「わかったの」

「ふぅ…。しかし今回のことは失態だった。こちらへ監視が無いとしても、他の者には有り得るのだったな。ああ、失態だった」

閣下の行動も予想の外だったのもあるが他に監視対象が居たのは想定外だった。旧世界の魔法使いの一拠点だとしても、なぜ学園都市に監視が必要な者がいるのか？

閣下が接触を持った人物は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

真祖の吸血鬼（ハイディライトウォーカー）。
闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）。
不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）。

人形使い（ドール・マスター）。
禍音の使徒。
悪しき音信（おとずれ）。
童姿の闇の魔王。

などなど、数々の異名を持つ元＄６００万の賞金首だ。一時期は、こちらでも監視していたことがあったが短期の内に切り上げたものだ。…それに今は手配が失効して取り下げられているな。サッと流し見たところデータ上では人知れず退治されたとある。

学園側…近衛翁が本国へ、そのように報告したようだ。調べを進めて行くと当時の近衛翁は不足していた学園警備員を求めていたようだ。その愚痴とも言える内容をナギは覚えていた。

それが彼女の不幸の始まりだったのだろうな…。エヴァンジェリンはナギの出鱈目な魔力で出鱈目な呪いを掛けられた。その呪いは…。

“登校地獄”…。

名称だけを聞くと、もの凄く馬鹿らしい、この呪い。術式の内容は単純で強制的に対象となる学園がある地に縛り付けるという物だ。単純故に強力。これでは呪いに篭められた魔力を上回る魔力を持ってレジストするしか手が無い。

その呪いに囚われて以降、彼女は学園敷地内から一歩も外へ出ることが叶わない身となった。魔力も封印されているようだ。それと、なぜ虜となったのかは理由が定かではない。学園データ上には記されていなかった。

そんな彼女に閣下は悪戯心か好奇心からかはわからないが接触したようだ。報告書の内容と監視映像を見たが、どうやら閣下はただ話してみたかったようだが会話の内容が多少アレだ、な…。

あーん、って何ですか！？私にもしてくれてもいいじゃないですか！？そ、それはまぁいざするとなると恥ずかしい気持ちになりますがそれが何だって言うのですか！？私も葵君成分を補給したいのですよ！！ぎゅ♪ってしたいの！！

ただでさえ最近は忙しくて時間も無いのに……はっ！？ダメだな、私の中の葵君成分が枯渇しかかっているのかもしれない…。早急に補給しなければならない。具体的にはぎゅ♪っと、したりしてもらったり…。あ、あーん、と食べさせあ、あ合ったり！！

……ダメだ。まずは仕事を片付けてからだ。具体的には対エヴァンジェリン工作だな。よし！

「対処が遅れてしまっていたら葵様を追跡され要らぬ疑いを持たれるところでしたものね」

「護衛役の子が上手く機転を利かせたのがよかったの」

「そうだな」

情報部二課の者達もやるではないか。ふふふ。現時点での、こちらの情報も閣下の身もお守りしたのだからな。

まだ学園側とは敵対はしていないが仮想敵として対処するマニュアル化もしてある相手だ。まぁ今後も学園側と敵対はしないとは思うが用意だけはしておいて損は無いだろう。万が一のことがあった

場合、大変だからな。

「…そ、そそれでアイリさん？葵様は今、何をしていらっしゃるのかしら？」

視線を忙しなくして手を胸元でモジモジとしながらも話題を閣下の居場所に切り替えるとは…。

リチラ…少々あからさますぎやしないか？お前はアレか？仕事なんかサッサと切り上げて葵君に会いに…甘えに行こうとしているのか？甘露（ストロベリー）な空間に突入しようとでも言う気なのか？ああっ！？……ちっ！行かせん！1人では行かせんぞぉ！！

「…閣下か？ラミエルからの定期連絡では地上拠点（喫茶店）地下の工事状況を確認しているはずだが」

「地下？……ああ、［神木・蟠桃（ばんとう）］の。ここに来て直ぐに始めた工事ですわよね？」

「そう、それだ。この地は22年の周期で魔力が極大点を迎える。その集束点が［神木・蟠桃（ばんとう）］。ここの連中は別名、世界樹と呼んでいるらしいぞ？」

魔力媒体の規模から見るに十分、神木と言えるかもしれない。神木の近くに工事初期のころ設置した魔力蒐集機。場所がいいだけにお蔭で魔力の蒐集も捗ること捗ること。今も魔力の充填されたカートリッジが大量生産されている。

「世界樹とは、また…」

「あははは♪人からは世界樹に見えると思うの。魔力の蓄積量、ハンパないの」

「学園の記録情報上では次の極大点は5年後の予定だ。言うまでもないが、この工事は地下の拠点基地化の他にも魔力の収集が目的だ」

5年後に起こる極大点。予定通りならばこれで魔力カートリッジを一気に生産できる。……そういえば大型カートリッジの生産がまだだったな。今の内に大型カートリッジ専用の生産ラインを地下施設に建設しておくとしよう。

「言われるまでもありませんわ。しかし、この資料を見ると地下の構造物…遺跡は、当時の魔法使いもこの地の守護、または魔力を利用しようとしたみたいですわね。要塞…いえ、神殿かしら」

「興味は尽きないが今となっては調べようもない。だが、頑強な構造物であるから工事も捗るというものだ」

「そうなの。工事の下地が出来てるも同じなの。今は隔壁や壁の補強をして監視網を敷いてあるの。残りは工業設備の設置。物資や戦力を生産すれば完成なの」

監視網…警備システムの施設も必要だな。今は仮設されたものだ。故に警備網は十分とは言えない。地下拠点の建設時にブロック毎に一部独立した警備システムを敷いている。もちろん総合統括されたコントロール室は……アンがする手筈だったな。

しかし予備となるコントロール室……これもラミエルにやらせるか。アレの処理能力にはまだ余裕があるから大丈夫だろう。これは後で葵君に許可を取らないとならないな。

あとは整備システムが稼動すれば放っておいても一機械（ＡＩ）が自己判断で侵入した敵生体を捕縛、または排除してくれる。指揮を下す私達も一々設定しなくてもいいから手間を省くことが出来る。

「よろしい。これで閣下の戦力はますます充実するな」

「いいえ、葵様をお守りするなら幾らあっても足りませんわ」

まだまだ戦力が足りないと頭を振りながら言うリチラ。その表情に浮かぶのは力への渇望と愛しき主人を思い、絶対に守るという決意が窺える

リチラよ、一体幾ら戦力を集めれば満足するのだ？……いや、葵君なら「持てるだけ持つ」と言う気がするがな。かといって世界が欲しいなどと聞いたことも無い。葵君は昔から戦事以外は喫茶店を営むことに楽しみを見出している。

「リチラは欲張りなの。流石は元悪魔なの」

「ファレノ…自分も元悪魔だったんだけど？」

「……」

私の問いに何も言わないファレノ。口を滑らせた彼女にジト目を向けるとススッと視線を逸らされた。

なんだ、コイツは？私にケンカを売っているのだろうか？書類仕事で、なかなか葵君に会えないでいたからストレスが溜まっていたのだろう。少し八つ当たり気味だがファレノに拳骨を落としたのは

間違いじゃないと思う。思いたい。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

――学園地下拠点…。

Ｓｉｄｅ　葵

エヴァちゃんとの思わぬ会合から3ヶ月が経った。あの夜の翌日。アイリに行動を自重するように注意された。説明を聞くとエヴァちゃんに式神の監視が付いていて、あわや俺もそれに引っ掛かりそうになったらしい。

イカンなー…。好奇心が先走ってしまったようだ。あの時はエヴァちゃんをからかうことが楽しくて、つい軽率な行動を取ってしまった。

というか式神ぃ？ここ極東の西洋魔法使いの拠点で式神だとぉ？……学園長（ジジィ）か？遠距離からとはいえエヴァちゃんに気付かれない…気付いていたのかもしれないけど。んー、彼女に監視を付けられるのは学園長しか考えられない。

あ、危なかった…。皆にはマジで感謝だったな。あのぬらりひょんにバレたらどんな厄介事を持ち込んでくるか、わかったものじゃないからな。

まぁそれだけじゃなくても色々と学園地下でやっているしなぁ…。これがバレたら面倒だ。責任追及されたらかわしきれないかもしれない。……全面的に俺が悪いんだけどね？無断で工事しているんだから…。

俺が今居る、ここもそんな場所の一つ…。

「何度か見学に来たけど大分、工事が進んだね。あのボロかった遺跡が見違えたなぁ」

今、見学している場所は複数ある大中小の生産ラインが引っ切り無しに動いている生産プラントエリア。次々と無人機動兵器や部品や武器、弾薬などの消耗品が作り出されていた。工事前と違い機械的に様変わりした部屋になっている。

遺跡自体は魔法で補強されていたから破損は無かった。だけど、それよりも植物の蔦と埃が凄かった。地下で植物は太陽光も無かったのに丈夫に大きく育ち。長い年月掛けて高く積もった埃。今まで誰も踏み入れていなかったようだったな。

まぁだからこそ、ここに拠点を築こうと考え実行したんだ。誰の目にも留まらない場所のほうが隠密に行動するのに都合が良かったんだ。ただねぇ…店からやや遠いのが難点と言えば難点かな。

「はい。土台は遺跡をそのまま利用したので作業工程を大幅に短縮できました。その分、建物の耐久性や強度を上げるため……」

「補強と増強を重点的に作業したから今のここは鉄壁の地下要塞と言えるよ！」

「……私が説明して差し上げているのだ。口を挟むな」

「サルビア！固い！固いよ！葵くんはこのくらい気にしないってば！ねぇ？葵くん♪」

あうっ？ちょっと待とうか、コーレア…。程よい大きさの柔らかいモノが二つ、俺の右腕に抱きつかれた時に“むにゅ♪”って“むにゅ♪”って…おおぅ。

「コーレア、お前…！」

「何よぉ！？」

俺に工事状況を説明してくれているのはサルビア。冷静沈着な元悪魔さんで綺麗な青みがかった黒髪と目が魅力的な少女だ。ワンポイントは小さなメガネ♪趣味は読書。特技は……崩壊系統の魔法とナイフコンバットだったかな。

それで彼女の説明に割り込みを掛けたのがコーレア。彼女は元気いっぱいな元風精霊のお姉さんで薄いライトグリーンの髪を短いポニーテールにしている。趣味はアウトドア関係、あとはお喋り。特技は風系統の魔法全般。

そんな2人は今、何故か可愛らしくケンカ腰です…。しかも俺の後ろには何も言わないけどハオとユエの2人が護衛として控えていたりする。彼女達の頭にはいい感じの“＃マーク”が幾つか見える。

「そこまで。説明の途中だ。続きは終わってからにしよう。じゃないと怖〜いお姉さん達から説教されるぞ？」

「なっ！？」「え……？」

俺の背後を見たんだね？ならわかるでしょう？不毛な争いが如何に無益か、さ。俺は、内容は知らないけど陽月の姉妹、精霊・悪魔の３人娘達のお仕置きは……それはもう、凄いらしいです。はい。

「……続きを」

「「ハ、ハイィィイッ！！」」

ハオが漏らすたった一言の催促にサルビアもコーレアも首が取れるんじゃないかと思えるくらいの速さで頷いていた。

どんだけお仕置きが怖いのさ……？本当に何をされるの？皆に聞いても微笑むだけで教えてくれないし。お仕置きされたであろう子達に聞いてもヤバイくらいガクガクブルブル震えるだけで話せない……。はぁ…。

それでこの地下基地の工事の進捗状況。その他諸々の問題となった、またはこれからなるであろう部分の説明。警備施設の稼働状況。学園側に感付かれてないか？侵入者の有無。地下基地の隠蔽は万全か？などなど…。

それと拠点を建設するに至った今回のメインディッシュ。魔力の蒐集。通常のカートリッジと大型カートリッジの一定生産に成功という嬉しい報告があった。魔力は幾らあっても困るものじゃないから収集できる時にしておかないとね。

大体の報告が終わってサルビア達は何やら大仕事をやりきった顔をしている。……お仕置きを免れたからかな？さっきまで顔色真っ

青だったのに今は血色がいいです。

「…そっか。兵器生産の状況はどう？先週から生産を開始したって報告にあったけど」

「順調です。生産された分は順次、地下施設の各区に分散配備し防衛に当てています。また今後、余剰生産されたものは予備戦力として格納施設へ配備されます」

「今のところ防衛は隠密を重視してね？ここを発見されたくないから」

マジで発見されたくない。さっきもちょろっと言ったけど無断で工事して施設を造っているんだ。バレたら目も当てられない…。故に隠蔽工作には細心の注意を払っている。

熱光学迷彩と人除けの結界を張ってある。電子データ的にもアンが擬似情報を流してある。…ただ学園の人工電子精霊郡のバージョンアップがされるらしい。これは今直ぐではなく２００２年の年明け、つまり２００３年を目処に実行するつもりらしい。

これは時代に合わせて情報処理能力の向上が目的だ。彼ら学園側もインターネット上の情報操作などもあるから“人工電子精霊郡Ｖｅｒ．２００３”へ強化したいようだ。…これもネットの普及が原因かな？

それはともかくここのことは絶対に見つからないようにしてね？最悪、魔力蒐集機のあるブロック以外はナノマシン分解で施設ごと破棄するけど…まだ、利用したいからさ。……うん、最低でもネギ少年が来るまでは利用したいね。

「ハッ、心得ています。いざとなれば設置したナノマシンを散布、区画毎に施設を粒子分解し破棄。情報の一切の隠蔽を第一といたします」

「ははは、できれば折角造った基地を即破棄なんてことにならないことを願いたいよね」

「でも、学園データバンクは秘密裏にアンちゃんの支配下ですよ？直接この基地を確認されなければ心配は無いと思うけどなぁ」

それが心配なんだって…。この学園の人は知らず知らずの内に迷い込んでくるパターンとかがありそうだから怖いんだよ。仮に、その人物が学園側の魔法使いだった場合は最悪だ。一般人ならやりようはあるけどね。

それとアンのことは心配してないよ？信頼しているし、今の世代のコンピュータが束になっても敵わない処理能力をアンは持っているから。それにいざとなればラミエルさんも居る。

「そうなんだけどね…。表向きここは学園側のフィールドだから何が起きるかわからない」

だけど、やんわりと警戒は怠らないようにそれとなく注意だけはしますよ？自信を持つのはいいけど過剰な自信は慢心を生むからダメ。だから程よく気持ちを締めておかないとね。何事も程々が一番なんだよ。

……戦力の過剰所持は、やめないけどね。

「それは…。それでは予備計画として地上学園都市の制圧計画を練るように司令部へ打診いたしますか？」

「くくっくっくっ、いいんだ。ここも用が済めば破棄する予定だからさ。そうだな……最低でもあと3，4年ほど隠匿できればいいかな」

予備計画で学園都市の制圧か？サルビアが冷静にそんなことを言ってくるということは……出来るんだろうなぁ。そんなに戦力を溜め込んだかな？高だか数十万機の機動兵器に使い切れないほどの武器弾薬。半永久的な魔力を溜め込んだだけなのに…。

戦力的にはまだ不安な気がする。そうか！どうせなら無人艦なんかも造れば…。戦艦級、軽・重巡洋艦級、空母級、駆逐艦級。それに物資を運ぶ補給艦に戦場後方で修理する移動ドッグ艦。工業プラントをフルに稼動させれば出来なくは無いか。

どれもこれも今のアングレカム一隻なら必要は無いけど艦隊を造るとなると色々必要な物が増える。……造るか、やめるか。どうしよう？ああ、でも使わない時は時間凍結された格納庫に保管しておけばいいのか。

いつかは世界間移動して次元を越え、どこか違う世界とか行きたいしなぁ。戦力というか護衛的なモノは幾らあっても足りないよな？……ならば造るしかなくね？寧ろヤルしかない！？……これはゴーレムと併せて要研究だな。

どちらにしろ、学園制圧や戦闘が出来ても今の俺にメリットが余りに無い。この施設も元の遺跡部分だけ残して他はナノマシン分解してしまうだけだからね。撤収の時間があれば機材は回収しておく

が…。

「そうだったの？私はてっきりここに百年単位で定住するのかと思ったよ」

「コーレア、流石にそれは……ああ、でも悪くないかもしれない。だけど定住するには学園の魔法使いが邪魔だ。そんなに長居する気にはなれないかな」

ここに定住か…。悪くは無いけど俺には無理かな。ここは極東の魔法使い達の拠点だ。それ故に目障りなことが多過ぎる。世界樹に蒐集される魔力は魅力的だけど時間を掛ければ同じようなことは出来るし。

この地に拘る理由が無い。……まぁそれでも敢えて言うならば子供の頃から見守ってきた木乃香ちゃんと明日菜が気になるくらいかね。木乃香ちゃんがネギ少年に取られるのは癪だが2人ともナギと詠春の子だ。まぁいいだろう…。

明日菜は色々と過去にあるがネギ少年なら気にはしまい。正直なところ俺もそんなのはどうでもいいし。子供は元気に育ちなさい。その権利は誰しもが持っているのだから。……なんてな、俺には似合わんな。

「では、然る後に制圧いたしますか？新世界はともかく旧世界の我らには政治的な立場は確立しておりませんが戦力的にも資金的にも不可能ではないと思われます」

だから過激なことしても俺には一文の得にならないんだって……。

「うっわ、サルビア、大胆だねぇ…」

「何が大胆なものか。マスターと私達なら容易いことだろう？マスターさえ、その気になれば、いつでも国崩しが実行できるように戦略、戦術計画は常に用意してある！」

「サルビア、計画書は無期限凍結しなさい」

「何故です！？」

俺の無期限凍結の言葉に驚いたように振り向いてきた。少し目尻に涙が見えた。少し可愛いな、と思った自分を、どうしようもないかな？なんて思わないったら思わない。

それよりも何で、そこまで意外そうに驚けるかね？俺は戦争狂じゃないってば。戦争してまで国なんか要らないよ。俺は君達家族とそこそこに面白い人生があれば文句は無いのよ。……危害を加えられたならばその限りじゃないけどね。

「俺は国なんかいらないから。以上！」

「うぅぅ！うぅぅ！うぅぅ！」

普段、冷静沈着なサルビアが手をぎゅっと握って上目遣いでうー、うー、言ってる、だと…！？その姿にちょっと萌えた俺は間違いだと思いたい。泣き顔に興奮するなんて……。

それに身贔屓なのもあるけど何で家の精霊や悪魔は可愛い女の子ばかりなんだ？例えば、ぶっきら棒な言葉遣いだから男の子の悪魔かと思って精魔奇兵化してみればボクっ娘だったりしたしね…。こ

れじゃ俺の理性が持ちませんぜ。

「葵くんって容赦無いなぁ…。サルビア、泣きそうだよ？」

「……」

俺が1人悶々と考え込んでいたらコーレアにそんなことを言われた。それでまぁ視線をサルビアに向けてみるとそこには…。

「うぅ…ぐすっ…うえぇぇ…」

泣いてるんだよ！！サルビアがな！！何、これ！？俺のせい！？え、何なの！？制圧計画を凍結したのがそんなに悪いことなのか！？一般的にはいいことじゃないのか！？……はぁ、泣く子には敵いません。家族だから尚更ね。

「泣いちゃったかー…。あー、もー！大丈夫！大丈夫だからー！泣き止も！ね！？あぁああ、ほら！葵くんも何か言って！」

「……はぁ。わかった…わかったよ。凍結は無し。いつか気が変わるかもしれないからね…」

気が変わるかはわからないけど、計画書にするくらいなら許してもいいかな、って思うわけですよ。要は計画を実行しなければ言いだけなんだから。

「ぐしゅ…うぅ…本、当…うぅぅ…です、か？」

「うん。本当だから…元気、出して？」

あー、もー。可愛らしい顔が涙で台無しじゃないか…。てかよう？物騒な計画を否定されただけで泣くのは、やめようよ。あー、ほら？お鼻チーンして。はい。

「チーン！…うぐっ…はいっ！！」

うん、ちゃんとできたね？いい子♪いい子♪まったく…ちょっと抱きしめただけで、もう笑顔になって。……これはアレだろうか？家族とのコミュニケーション不足なのだろうか？だから物騒な計画で家族の興味を惹こうとした？

……物騒過ぎじゃね？

あれ？なんかサルビアの顔が真っ赤だ…。少し強く抱き締め過ぎたのだろうか？目も何だか潤んでいるし…。ああ、これはさっきまで泣いていたから、か？でも、俺の服の端をぎゅって掴んでくるのはどういうことかな？

やはり、コミュニケーション不足なのだろうか？

「……葵くんの女誑し」

「失礼な。俺のどこが誑しだと言うんだ？」

そんな俺達のことを見ていたコーレアが言ってきた。俺が女誑し？…ないない、ありえない。この世界に落とされて今まで女の子にモテたこと無いしね。あっ！家族は別ね？彼女達のお蔭で寂しい思いをしなくてすみました。マジで。

そんな俺に対して女誑しと言うコーレア。俺は思うんだ。「よく

見て言おうよ？」って、さ。今のこの状況を見て言うならば、これは家族との不足していたスキンシップだ。俺の癒しでもあることは認めるが断じて誑しでは無いと言いたい。

「…ふぅ、いいわ。気にしないで」

「ん？？それじゃ俺は行くね？この地下基地のことは2人に任せるから」

タメ息を吐きながらも、やっとわかってくれたようだ。俺はサルビアを放して地上のお店に向けて歩いて行く。その後に続くハオとユエが無言のプレッシャーを与えてきたような錯覚があったが気のせいだと思いたい。だって俺は疚しいことはしていないのだから。

「ハッ！お任せください！」

「あはっ♪私達にまっかせなさーい♪」

「よろしくね」

地下基地の管理は2人に任せておけば安心だな。基地警備兵器も順調に稼動している。管理に問題は無い。このまま戦力や物資を生産、管理して工房内の格納庫に保管しておかないと。

ついでに俺の亜空間倉庫にも入れておこう。召喚するよりも低コストで呼び出せるしね。手札は大いに越したことは無い。

来たる日まで、もう少しだ。ネギ少年の到来まで大体4年くらいか？中学2年の3学期中だったから…。そうだなぁ、魔力なんて旧世界ではタダみたいなモノなんだから、それまでに搾り取れるだけ

搾り取っておかないと。

兵器生産も学園地下を採掘して原始変換して材料にしているし、資材も確保しておこう。材料は幾らあっても困るものじゃないしな。

喫茶店の経営も順調。木乃香ちゃんも明日菜も暫らく様子を見てきたが問題無い。このまま予定通りに進めばいいな。

あ、エヴァちゃんのことはどうしよう？……いいか。なるようになるさ。あの子ってからかい甲斐があるから、ちょくちょくからかいに行こうかな。

とにかく、あとは原作開始まで待つだけだな。時間はあるし艦隊の作製とゴーレムの研究をしようかね？将来、何が必要になるか、わからないんだから持てるモノは持っておかないと。

さて、いっちょやりますかね…！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第三十九話「事後報告と地下施設と戦力生産と」（後書き）

メチャクチャ無理矢理だけど次回はネギ少年を登場させたいな。
なんて考えてますねん。どうしよう…？
例の如く予定だから変わると思いますけどね。
あ、刹那を出したいから…。ネギ少年は一、二話後かな？

ところで高音・D・グッドマンが麻帆良に来るのを知っている人居ます？
中一の時か、二年か…。それともっと前からか？

感想、お待ちしております！ではでは！

第四十話「護衛終了と引継ぎとサムライ少女と」（前書き）

原作開始まで、また延びた…。
では続きをどうぞ！

第四十話「護衛終了と引継ぎとサムライ少女と」

――麻帆良レストラン街…。

Ｓｉｄｅ　葵

今は3月下旬、来月の４月には木乃香ちゃんが中学生になる。俺からの積極的な護衛は消極的なものへシフトした。これからの護衛は麻帆良へ来る刹那ちゃんに引き継がれることになる。

その彼女には本来の予定よりも一日早くに俺のところへ来るように、と詠春に伝言してもらった。ここの学園長と会う前に色々と言い含めておく必要があるんだよ。主に俺のこととか…。

刹那ちゃんには俺のことは詠春の友達の“ただの西洋魔法使い”って言ってあるけど…。今回は念には念を入れておこうと思うのよ。下手に学園長に俺のことを話されたら絶対に厄介事が舞い込んで来るに決まっている。

だから、その前に刹那ちゃんに話しておかないといけないんだよねぇ…。

それでまぁ俺は今、麻帆良の駅前で彼女の到着を待っているんだが、腕時計を見るとそろそろお昼にちょうどいい時間だった。俺の腹の空き具合もいい感じだ。

ん？あの電車かな？

平日でもまだ春休みの最中だから電車から降りてくる人は疎らだった。その中に綺麗な黒髪をサイドテールにした刹那ちゃんの姿がある。……竹刀袋で偽装しているけどどう見ても野太刀です。だって全体の長さが竹刀のそれよりも長いし…。

子供の頃は意地っ張りな可愛い子だったけど今は木乃香ちゃんと並んで綺麗になったと思う。……やや目元が鋭くなっているのが気になるけど、多分それは護衛にありがちな過度な緊張というものだろう。

護衛というか人に関らず何かを守るのは大変な労力がいる。精神的な胆力も必要になってくるしね。何が言いたいかと言うと、今からそんなに緊張していたら持たない、と思うんだよね。適度に肩の力を抜いておかないと直ぐにばてちゃうよ。

おろ？刹那ちゃんも俺に気が付いたみたいだ。…いい笑顔するなぁ。小さく手を振って歓迎を表してみると刹那ちゃんも恥ずかしそうに小さく振り替えしてくれた。……何でか知らんが真っ赤になって恥ずかしそうだ。

歓迎は失敗だったのだろうか？

「や♪久しぶり、刹那ちゃん。３ヶ月ぶりかな？」

「は、はい、お久しぶりです。お正月以来ですね。葵さんもお元気そうで何よりです」

うん…そうだね。時期的に年始で切がよかったから刹那ちゃんに会いに行ったんだよな。中学に入る前にどのくらい腕を上げたのか

を知りたかったんだ。結果は原作を殆ど忘れているから何とも言えないけど、この歳の子なら強いんじゃない？って感じだった。

一応、万が一の時は多少強引でも叩きのめして鍛えようかと思っていたけど…。いやー、手間が省けてよかった。俺も刹那ちゃんに地獄の特訓をさせなくてよくなったから一安心だ。

特訓は平気で骨は折れるし内臓は破裂する。おまけに肉は焼けるわ、凍結するわ、断裂するわ。追加で苦痛に耐えるためとかで四肢は潰されるわ…。切り傷や打撲なんて可愛いものだ。

もちろん、死なない限りは完治できるだけの医療技術を保有している。失った部位も一細胞から培養または複製して元通りにしてみせよう。病気や寿命は…寿命はともかく病気なら大概のものはイケるか？使う機会がなかったから断言するのが難しい…。

魔法には完全治癒呪文があるけどアレは大量の魔力を消費して行えるものだ。そして治療後には体内に大量の魔力が一時的に残留することで肉体、精神ともに犯されることになる。緊急時以外には取りたくない手だ。

まぁ何事も無理は良くないよね？時間を掛けられる時は十分に時間を掛けてゆっくりと治癒させるほうが身体に負担も無く確実なんだ。魔法も科学も一長一短だ。それは二つの技術を併せても緩和しきれないものがあった。

時間を掛ければ、その限りじゃないけど、ね…。

話しが逸れたな…。

それよりも少しショックな言葉が聞こえた気がした。刹那ちゃんが“兄上(あにうえ)”と呼んでくれなくなったんだ…。前はあんなに愛くるしいほどだったのに…。これも難しいお年頃というヤツなんだろうか？

お兄さんは寂しいです。でも、子離れ…いや、兄離れか。嬉しくもあります。でも、寂しい…。ジレンマ、ですねぇ。

「葵さん…とな？もう“兄上”とは呼んではくれない、のか…？刹那ちゃん…」

葵は　ｏｒｚの　ポーズを　した　！

「…え？ええー！？」

ショック！そんなに赤面するほどイヤだったのか！？昔は多少…大分…結構、頑固だったけど可愛かったのに！！…今は綺麗だけど！！頑固ちゃんなのは変わってないようだがな！！あ？！また赤くなった！？そこまでイヤなのか！？刹那ちゃん！！

「兄上ー、兄上ー、と呼んで木乃香ちゃんと2人で俺の後をついて回っていた時の刹那ちゃんは……」

「こ！ここ子供の時のことです！それは…！大体、あれは、このちゃんと兄上がうちを置いて先に行くから！……ハッ！？」

赤い…赤いよ、刹那ちゃん…。顔色がトマトとリンゴを足したく

らい赤いよ。人間ってここまで赤くなれるんだって初めて知った。

しかし、まだ思い出話は始まったばかりなのに話しの腰を折るなんて刹那ちゃん、失礼じゃないのかな？まぁ余程、自分の子供の頃の話しが恥ずかしかったのだろう。程よくプチパニック状態だった。

そのせい…おかげ？で言葉遣いが昔に戻っていた。多分、気が緩んだのだろう。俺のことを兄上と呼んでいたからな。刹那ちゃんは頑固ちゃんだから相も変わらずからかい甲斐のある子だった。

「うむ。刹那ちゃんイジリも満足したところでお昼にしようか？俺の店だけどご馳走するからさ♪」

「…ク！はぁー…。葵さんは変わりませんね…。それとちゃん付けはやめてください。恥ずかしいです…」

「……考えておこう」

考えるだけだけどね！でも刹那ちゃんも木乃香ちゃんと同じことを言うんだな…。女の子の難しいお年頃というのは俺の理解が追いつかないほど単純で複雑なモノらしい。何時の時代も変わらないことの一つだな、これは。

そんな訳で喫茶店クレイドル。俺の店に着いた。ここまでの道中で色々な話しをした。合えなかった時間を取り戻すように…。ただ、木乃香ちゃんのことを話題にした時の食いつきが悪かったのが気に

なった。

刹那ちゃんなら今にも「お嬢様ーッ！！」って大声出して駆けて行きそうなものだけどな。彼女の心の根底に何があるのかね？まさか…昔、川で溺れた木乃香ちゃんを助けられなかったことを引き摺っているのではあるまいな？

それともアレか？背中の翼のことか？…真白くて綺麗だと思うんだが遠目から見ただけだから感触は知らないが柔らかそうだったのは想像がついた。今度、是非とも触らせて欲しいと思う。お願いしてみようかな？

行き成りはダメ、か…。刹那ちゃん自身が白い翼のことを忌避しているからなぁ…。触らせてもらうとしたら俺も秘密にしていることを一つ明かさないとならないかもしれない。刹那ちゃんだけってのはダメだものね。

店内に入って、奥にある応接室へ案内した。ここなら外に話しが洩れることはないからね。何を話しても大丈夫だ。

「それじゃ、改めて歓迎しよう。麻帆良へようこそ。俺達は刹那ちゃんを歓迎しよう♪」

「あ、ありがとうございます」

「本当に良く来たわねぇ♪元気そうで良かったわぁ♪」

ミリーよ…なぜ、ここに居る？店番はどうしたのさ？…え？マリーとアイリに任せてきた？マジか…それで？…なになに？自分は刹那ちゃんとお喋りしたくて店番を変わってもらったの？ああ、そう

ですか…。

「はい、ミリーさんもお元気そうで私も嬉しいです。他の皆さんはお元気ですか？」

「うふふ♪元気も元気よぉ♪」

ごめん。そろそろお昼にしていいかな？俺も刹那ちゃんもまだなんだよ。お腹空いちゃってるのよ。…あ、うん。ミリー、ごめんね？また後でね？

ミリーに店番に戻ってもらって俺は昼食の用意をしようと立ち上がった…のだが、よくよく考えたら刹那ちゃんにも今の好みがあると思い何が食べたいかを聞いてみることにした。

「刹那ちゃん、何か食べたい？それなりの物を作ってあげよう」

「え？それは悪い気が…」

「バカ。何を遠慮しているんだ？俺と刹那ちゃんの仲じゃないか」

何を変に遠慮しているんだか。刹那ちゃんや木乃香ちゃんが小さな時からちょくちょく面倒を見てきたんだ。今更、食事くらいで迷惑に思うわけが無いじゃないか。

それに俺の妹分でもあるからな。これでも仲はいいほうだと思っているんだ。だから、ただの他人よりは深い仲だと感じてはいるのだが…。まぁこればかりはお互いに認識の違いがあるかもしれないから一概には言えないよな。

「なな、な仲ッ!?そんな…!うちらの仲って…!?はぅ!?」

「おーい?刹那ちゃーん?大丈夫かー?」

刹那ちゃんに一体何があったんだ?赤面するくらいだったら駅前でさんざん、からかったからわかるが…今度は頭と耳から湯気が出ているんです!!まるで茶々丸だ!!このままでは熱暴走が起こるんじゃないかと思えるほどの蒸気を発しているぞ!?

何が切っ掛けでこうなるのかがわからないからどうしたらいいのか、わからないよ…。自分から仕掛けて、からかったならわかるんだけど、こういう突発的なことは理解できないわー…。何があった?

「あ!?いえ!何でもない、です!はい…」

「そう?…それでお昼は何がいい?刹那ちゃんのために腕を振るうよ」

そうだった…。自分で言っていて思い出した。俺達は昼食にしようとしていたんだった。刹那ちゃんの熱暴走に気を取られていて忘れてしまっていたよ。

「で、では…魚を主菜にしたご飯物をお願いできますか?」

「いいよー。任せておきな♪直ぐ作ってくるからね」

そんでまぁ俺はそのまま居住区の台所に来たわけです。まずは冷蔵庫の中を確認して…あ、鱈の切り身、見っけ。あと春野菜と他野菜。豆腐に納豆、卵…えーっと、油揚げだな。お肉もあったけど今は使わない、かな?

さて、リクエストは魚か…。主菜に鱈の白身魚と春野菜のホイル包み焼きにするかな?それで副菜はほうれん草と水菜、小松菜のお浸し3点盛り。生卵と納豆…あれ?刹那ちゃんって納豆大丈夫だったかな?んー…?

まぁダメならこれを機に直しておくか。アレルギーとかだったら無理には食べさせないがな。だが、ただの食わず嫌いだったら矯正してやろう…。くっくく!

ご飯と大根と油揚げのお味噌汁にして…あとはキュウリとナスのお漬物をつければいいかな?うし♪方針は決まったから、パパッと作っちゃおうかね。

ふんふん♪ふふふ~ん♪ふんふん♪ふん♪ふんふんふ~ん♪ふふふ~ん♪

料理を作っている時、気付かない内に鼻歌を歌っていたらしい。……少しだけ恥ずかしかったのは俺だけの秘密だ。

それはともかくとして料理ができた。応接室に居る刹那ちゃんもお腹を空かせて待っていることだろう。早く持って行かなければならない!だけど走ると盛り付けた料理が崩れるからやや急ぎ足で運んだ。

見栄えが悪い料理を出して、許されるのは料理ベタな可愛い女の

子だけの特権だと思うんだ。見た目アレでも美味しいとかもな！

そんなわけで綺麗に盛り付けた料理を持って応接室に着いた。

「お待たせー。熱いから気を付けてね？」

「はい。いただきます。はむ……あ…美味しい。ふふ、なんだか懐かしいです」

おろろ？優しい顔しちゃってまぁ…。そんなに懐かしいものだったのかな？刹那ちゃんを詠春が引き取った時から手料理を振舞ってきたから実質、俺の料理がお袋の味ってことになるのか？あれ？俺は男だから親父の味か？

そんなことはいいか。今はご飯を美味しく食べられれば文句は無いよな。刹那ちゃんも今出した物に好き嫌いは無かったみたいだ。懸念だった納豆もパクパク、食べてくれているよ。

「口に合ったようで何よりだ。まぁ刹那ちゃんが小さい時とかはよく作っていたからねぇ」

「そう、ですね。私が西の長様に引き取られた時ですから…」

しまった…。つい言ってしまったけど彼女にとっては最も迫害の記憶が色濃い時代だった。笑顔にも影が差しているように見える、よ…？こう…ズーン…って感じのがさ。色白の肌に黒い前髪が掛かっていて怖いです…。

今の刹那ちゃんなら“井戸のあの人”でも演じられそうだ…。もちろん！…衣装は俺が用意しよう！あと…なんとなくだけど団欒し

ていた部屋の温度が1，2度下がったように錯覚した。

でも、刹那ちゃんや木乃香ちゃんにとってあの頃の出会いは幸せな記憶だったのも事実のはずだ。何をそんなに落ち込むことがあろうか?刹那ちゃんが言ったようにただ“懐かしい”でいいではないか、と俺は思うんだ。

出会った当初から、この子は考え込んで深みに嵌まる悪い癖があるから困ったものだ。まぁここに彼女の頑固ちゃんという根底があるのかもしれない。頑固なのも一長一短なんだけどね!?説得するのにメッチャ労力使うしさ!!

そして!俺は多少、冷気が漂い始めた団欒に活を入れるために、とある作戦を実行する!!作戦と言っても刹那ちゃんをからかうだけなんだけどな!!

「刹那ちゃんはあの時から一度決めたことは譲らない頑固ちゃんだったよね?くっくっくっ♪」

「なっ?笑わないでください!それは子供の時のことです!今は…それほど…ごにょごにょ…でも…」

食事中に大きな声を出すのは感心しないなぁ。くくくっ♪恥ずかしいのだろうね。ほんのり頬が赤いじゃないか。こら、お箸を銜えたままごにょごにょ言わないの!う、上目遣い、だと…!?おっほんっ!んんっ!

甘いよ?刹那ちゃん…。セリフの後半は小さ過ぎて聞こえなかったけど“今は”なんて言っている時点で俺の言葉を肯定したも同じなんだ。てかよう?自分でも自覚があるなら改善しようよ…。

「くっくっくっ♪まぁ昔は小さくて可愛かったけど、今は大人っぽくなって綺麗になった。…正直、見違えたぞ？」

「な！？なななな何をッ！？おしゃ、お、おおおっしゃっててているのか、わかりません！！」

ちょっと真剣な声を出して刹那ちゃんの頬に手を当てて言ってみた。そうしたら面白いように動揺してくれた。ズザーッ！って勢いよく後退したよ？

……いや？ちょっと待とう、刹那ちゃん？野太刀から手を放そうか。ね？暴れると部屋が傷付いちゃうからさ。お願いだから落ち着いてくれ。ほら？こわくな～い♪こわくな～い♪……なんでワンコ扱いしているんだろ？

「あっはっはっ！ほら？早く食べろ。料理が冷めるぞ？……可愛いなぁ。くくくっ♪」

「うぐぐ！ふんっ！…んぐっ、はぐはぐっ！んぐんぐっ…んむっ！…あむあむ！」

ちょっ！？刹那ちゃん！！そんなに慌てて食べると喉を詰まらせ「うっ！？」…はぁ。慌てるからだぞ？からかった俺が言うのもあれだけど落ち着いて食べなさい。…と、今はそれよりも水か…。

「えーと…はい、水」

「ん！！ごくごくごくっ！はぁぁー！…」

「くくくっ♪すまない。ゆっくり食べような」

「……はい。はむ…美味ひぃ…」

「くっくっくっ♪」

沢山食べて大きくなりなさい。沢山鍛錬して強くなりなさい。沢山悩み自分の思った通りに進みなさい。俺は何もしてやれないけど見守るくらいはしよう。……気分次第では手を出すかもだけど…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――喫茶店クレイドル応接室…。

Ｓｉｄｅ　刹那

本来なら明日、麻帆良入りする予定だった私。しかし、それを一日、早めて来訪した。理由は幼い頃から親しくしてくれている葵さんに頼まれてのことだ。

そんなわけで今、私は葵さんのお店兼自宅の一室で遅めのお昼ご飯をご馳走になった後だ。……からかわれたけど楽しかったです。こほん…それで今は２人で食後に緑茶を飲んでいます。ずずず……ほっ。

それにしても葵さんの手料理は久しぶりだったので少し食べ過ぎ

てしまったかもしれない。3杯も御代わりしてしまった……。昔から変わらない味だったことに懐かしい気持ちにさせられたのが大きいのだろうな。

ふふ、当時、葵さんが京都にあるお店を閉めて他の地へ移転すると聞いた時は泣きそうになったものだ。あの時の私にとって兄のような存在だったのだから離れ離れになることを考えると寂しかったのを覚えている。

葵さんが京都を出立されて数日…。お嬢様に並んで親しき人が居なくなり寂しさを紛わせるた…げふんっげふんっ！お嬢様を！…お守りするため！修行に励んでいた。うん！お嬢様のために、だ！他意は無い！

とにかく！本家の裏山で修行していた私だが数日するとのところに葵さんは何でも無いように普通に現れた。あの時は思った…。「私の涙を返して…」と…。もの凄く寂しくて泣いたのに数日したら現れるって…あんまりでしょう？……嬉しかったですけど。

その時に、お嬢様が関東にある麻帆良学園へ出向かれたことは知っていましたが、葵さんも一緒に麻帆良へ出向いたことを教えられた。それに定期的に私の居る京都に顔を出してくれるとも。当時は安堵しました…。ええ…。

そんな昔のことを思い出しながら葵さんと2人で飲む、お茶を楽しんでいたのですが早めに来日した用件を聞いていないことを思い出しました。

「それで話なんだけど…」

「あ、はい。私に出来ることなら何でも言ってください」

西の長を通して私に今日来るように伝言してきたのですから大事な用件なのでしょう。葵さんのためです。多少、無理なことでも、まだ、未熟な私ですが出来る限りの力で応えたいと思います。

私は背筋を伸ばし気合を入れなしました。さぁ！何でも言って下さい！さぁ！

「ああ、いい、いい。そんなに肩肘張るような内容じゃないから」

「はぁ…？それで話しとは何でしょう？」

気合を入れたのに力を抜くように言われました……。難しい内容ではないということでしょうか？

「その前に刹那ちゃんが来るまで俺が木乃香ちゃんを護衛？…というか見守る役目にあったことは詠春から聞いている？」

「はい。詳しくは聞いていませんが長からは、そのようにだけは教えられました」

葵さんが一般的な魔法使いなのは知っていましたが、長から聞くまで葵さんがお嬢様の護衛をしていたとは知りませんでした。……強いのでしょうか？普段の兄的な行動を見ていると、とてもではないですがそうは見えないです…。

「そかそか。そうなると…どこまで話したものかな…んー…？」

「……」

苦笑しながら「うーん…？」と何かを考えている葵さん。

長と同じように葵さんも私に話せないことがあるのでしょう。しかし、長ならば協会の重要機密のこともありますから話すのに慎重になるのはわかるのですが…葵さんは何について悩んでいるのでしょうか？

護衛の引継ぎに関しての注意事項などでしょうか？

「それじゃ最初に刹那にお願いしておきたいことがあるんだ。…いいかな？」

「……」

しかし、護衛の引継ぎならば協会の長が既に処理済です。ここでしなければならないのは現場での注意点のみでしょう。それとも、それとは違うこと？……そもそも葵さんのお願いとは何でしょう？

チラッと葵さんの表情を見てみると……真剣な表情をしています。普段が普段だけに思わずその凛々しさに見惚れるほどです…。

「刹那？」

「！！あ！？はい！！頑張ります！！」

いけない…。少し惚けていたようです。私の出した大きな声に葵さんも一瞬驚いた顔をしましたが次には面白そうに苦笑しました。

「くくくっ。いや、まずは話しを聞いてから頑張ろうな？」

「あ…はぃ」

そ、そうですね。まだ何も言われていないのに“頑張ります”は無いですよね？ハハハ…。うぅ…恥ずかしぃ。

「おー、おー？照れてんのか？可愛いねぇ。くくく♪」

「あぅ…」

あうぁうぁうぁぅ…。あ、ああ頭を撫でないでください！私も、もう子供ではないのですよ！？恥ずかしいです…。いえ！嬉しくないと言えばウソになりますが！？ですが恥ずかしいのですよ！

ああ、でも葵さんに撫でられるのは嫌いじゃないです…。あー、違う！違う！今は、そんなことを考えている場合ではないのでした！葵さんのお願いのことですね！？お話しをお聞きしましょう！ええ！

「何だ？もういいのか？くくくっ♪それでだな。お願いというのは学園長…近衛・近右衛門に俺のことは秘密にしておいてくれないか？ということなんだが…」

「お嬢様のお爺様にですか？ですが、既に葵さんはご挨拶なされたのでは？」

お話を伺ってみるとお嬢様の祖父、現学園長であられる近衛・近右衛門様のことでした。葵さんのことを学園長先生に秘密にしてくれとのことですがお嬢様に関っておられるのですから一度くらいはお会いしているものと思いましたが…。

「……してないの」

「……は？」

もの凄く気マズそうに目線を外されました…。それに小さくてよく聞こえませんでした…。それにきっと聞き間違いでしょう。挨拶どころか面会もしていないなんて…。ええ、機器間違いですとも！

「…だから挨拶、してないの」

「……なぜですか？」

まことに残念ながら聞き間違いではなかったようです…。信じられないことですが葵さんはお嬢様の護衛をしながらも学園長先生との接触を今の今まで回避していたようです。……葵さんの何がそこまでさせるのでしょうか？

「…下手したら、いいように利用されるから」

「学園長は立派な人格者とお聞きしています。いくら何でも考え過ぎではないですか？」

利用は、いくらなんでも言い過ぎのような気がしますが…。しかし、葵さんがこうまで言うからには何か心当たりがおありなのでしょう。冗談やからかうことなんかは多々ありますが葵さんの言には信を置いていますしね。

それに私の聞いたことが全てだなんてことは思いません。ならば葵さんは私も知らない“何か”を知っていると見ていいのかもし

れませんしね。……あ、ここに来る前に長が何か言っていたよう、な？えっと…。

「外向きはそうなんだろうけどね。でもアレはタヌキだぞ？…悪戯心で何するか、わかったものじゃない」

「…そういえば私の出立前に長が「お義父さんは遊びが過ぎる時がありますから気を付けなさい」と言っていたような…」

思い出しました…。そうです。長に苦笑とともに言われたのでした。

はっ！？そうか！葵さんは自分が学園長の“お遊び”に巻き込まれてお嬢様の護衛が疎かになることを警戒した！そして身を隠してお嬢様を陰から見守っていたのですね！？

……流石です、葵さん。護衛としては余計なトラブルに関っている余裕なんかありませんからね！ならば事前に障害を排除、または人知れず回避する…。尊敬します！葵さんがお嬢様の護衛をしていたのは間違いではなかった！

「詠春の認識は間違ってない。アレは遊び心が過ぎる。この前も木乃香ちゃんが、「お爺ちゃんが“また”お見合いしろって、うるさいんやー」と愚痴っていたからな…」

お…お見、合…いぃ？？葵さんの口から爆弾発言…私にしてみれば十分、爆弾発言です！それが飛び出してきました…！

お嬢様はまだ中学生になったばかりではないですか！？早いです！早すぎますよ！？いけません！ダメです！バツです！血迷いまし

たか!?あの学園長(じじい)!!こ、こここのちゃんのお婿さんは私よりも強くないと認めません!!

即阻止しなければッ!!

「お見合いッ!?お嬢様がッ!?誰とッ!?どこでッ!?何時ッ!?あぁあぁぁ!!このちゃーんッ!!今、助けに行くーーッ!!!」

「落ち着け!!刹那!!お願いだから落ち着いて!?そのお話しはそれとなく俺のほうで潰しておいたから!!それはもう、プチッと潰したから!!もう終わったことだから!!」

葵さんが私を止めようと羽交締めにします。強く抱き締めて行かせまいとしています。でも!でも私は…ッ!?あれ?今、葵さんは何と…?

「あぁぁぁあああ!!あ?ぁあああぁぁ、あ?そうなのです、か?すみません…。取り乱しました…。すぅ…はぁ…。もう大丈夫です。ですから、そのぉ…」

「…ん?」

「その…は、放してくれませんか?ぁ…手がむ、胸に…ん!」

暴れていた私を押さえつけようと抱き付かれた時に葵さんの手がズレたのでしょう。私のむむ、むね、胸に、ぁ…ダメ、です!そこは!?んんッ!?気持…ごほんッ!!何でもありません!ありませんったらありません!!

「おろ?ごめん、ごめん。…しかし、これで学園長にバラすのが面

倒というのがわかっただろう?俺は遊びに巻き込まれたくないのよ」

葵さんは私の……を触っていたのに特に慌てた様子も無く放してくれました。私を押さえるためにしたことで他意は無いとわかっています。でも、何だか納得できない自分が居るように感じました…。

「え!?あ、はい!それはもう十分に!絶対に話しません!!」

それにしても、ん…はぁ…はぁ…ん…ぁ…。す、少し触られただけなのに…心臓がドキドキしています。今の私は自分でもわかるほどに顔と言わずに全身が真っ赤になっていることでしょう…。あぅ…触られた…はぁー…。

しかし今のことで十分に実感しました学園長先生が…お嬢様の障害となるということが…。お見合いなど認めません!お嬢様自身が認めておられるなら、その限りでは――納得できないけど――ありませんが…。

お見合いとはいえ学園長先生の行動には警戒しておかなければ、お嬢様に悪い虫が付くことになるかもしれませんね…。葵さんの話しでは学園長先生の趣味ということらしいですが…阻止します!断固として!!

葵さんのことも学園長先生には秘密にします!葵さんがいいと言うまで私からは話しませんとも!

「よし♪それじゃ今日はこのままここに泊まるといい。部屋は用意してあるから」

「え!?そんな悪いです!そこまでさせては申し訳がありません!」

私が決意を新たにしていると今日は、このまま泊まるように言われました。確かに窓から見える空は夕暮れ時です。今から宿を取るのは大変でしょう。私の年齢的にも今からでは厳しいかもしれません。

最悪でも野宿は初めてではないのでどこかの森か山にでも行こうと考えていたので葵さんの申し出は嬉しいのです。嬉しいのです、が…“先ほどのこと”もあるし恥ずかしいのもある。

それに来て早々にお世話になるというのも申し訳ない気持ちがします。

そんな考えの私ですが葵さんはキリキリと私のお泊りの準備を指示していきます。……葵さんのご家族は何人居るのでしょうね?私が把握しているだけでも数十人…。しかも、全員が可愛い系や綺麗系などの美人さんばかり…。

家族…ですよね?……そういえば昔から葵さんの年恰好が変わってないような。高位の術者は自身の若さを保つことが出来るらしいですが葵さんもなのでしょうか?でも葵さんは自分を一般的な魔法使いだと言っていましたし…。

魔法のアイテムでしょうか?それだったら将来、私にも紹介してもらえないでしょうか?若さを保つ。女性の究極の願いですよね?

考えがズレてしまいました…。このことは、いつか聞いてみましょう。

葵さんはお泊りの準備を進めていきます。もう終わりそうですね。
それにしても何で私のことを見て呆れた顔をしているのですか？

「今更、何を言っているんだ？お前らをお風呂にも入れた俺だぞ。
気にするか？俺は気にしない」

いや！？それは子供の時のことではないですか！！今、そんなこ
とをされたら…私は…恥ずかしいです…でも……ハッ！？そうじゃ
ない！そうじゃないだろ！？私ぃぃ！？何を考えている！？そうで
す！お泊りのことですね！？

「だから！それは子供の時の話しですーーーッ！！！！」

「あっはははは！！！」

葵さんは私の抗議を大笑いして頭を撫でてくる。葵さんにしてみ
れば子犬がきゃんきゃん言っているようなものなのでしょう。でも、
頭に乗せられた、暖かい手からは優しさも感じられるから怒るに怒
れません…。

そ、それに自分の幼少時のことを知られているということがこう
まで弱点を曝すことだったとは思いもしませんでした…。

「うぅぅ…」

「くくくっ♪」

その日、結局私は泊まることになり夜寝るまで賑やかにお喋りしたりして久しぶりに楽しい時間を過ごしました。こんなに楽しくて笑ったのは久しぶりのことでした…。

葵…さん…むにゃむにゃ…Ｚｚｚ…にゃー…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　刹那

第四十話「護衛終了と引継ぎとサムライ少女と」（後書き）

刹那ってこんな子？陰で葵くんが関っているから変化しているかもしれないけど…。
葵君の暗躍も大変だ。駅前での待ち合わせ。
学園中の監視網はアンの支配下なので擬似映像は流し放題だったり。
学園結界に繋がっているエヴァちゃんは認識阻害と隠蔽の魔法でジャミングしてる。

葵　ファミリーに死角無し！！

読み込んだらあるかもしれないけどね…。
見つかったら番外編でも挟んで辻褄を合わせますよ？
本編を加筆修正するかもしれませんが…。

ではでは今回はここまで！またお会いしましょう！
チャオッ！

第四十一話「指輪と探り合いと褐色少女と」（前書き）

単行本「ネギま！」の３２巻が今日発売…！
作者は限定版を予約してないです。
単行本を読めればいいかな？としか考えてないからです。

それよりもモンハン３が予約できない！！
どこもかしこも予約は締め切りましたとしか言われないです！
うぅぅぅ！！モンハーン！！

グスッ…では続きをどうぞ…。

第四十一話「指輪と探り合いと褐色少女と」

――喫茶店クレイドル前…。

Ｓｉｄｅ　葵

一夜明けて今日。中学の入学式を一週間後に控えた日。時刻は午前８時過ぎ。小鳥がチチチと鳴いている爽やかな朝だった。場所柄がレストラン街だけに、この時間帯は静かなものだ。

刹那ちゃんと俺は店の外、玄関前で向かい合っている。

「今回は手間を掛けて、すまなかったな」

いや、本当に…。予定の一日前に呼び出しなんかして申し訳ない。今、考えると俺には必要なことだったとはいえ一方的で強引だったかな？なんてね、思うわけですよ。

「いえ、私も久しぶりに葵さ…こほんっ、皆さんとお喋りできて楽しかったですから気にしないでください」

いい子だなぁ、刹那ちゃんは…。こういう子は幸せになってほしいよねぇ。…あー…でも刹那ちゃんや木乃香ちゃん、それに明日菜が誰か――この場合はネギ少年か？チィィ！！！――の、お嫁さんになる時、俺は泣くんだろうなぁ…。

うわっ…絶対、式には行かない！泣き顔なんて家族以外には見せ

られないって!?そんなところ見られたら恥ずかしくて他世界へ逃避するね!!逃げ切るよー…割と本気で。

ととと、かなり考えが飛躍してしまった。まだまだ先の話しだったな、これは。

「そっか。いつでも帰ってきていいからな?木乃香ちゃんもよくお店に来るしさ。…うん、そうだ。今度は2人で来なさい。サービスしよう」

いつでもいいから今度は木乃香ちゃんと2人で遊びにお出でなさいな。うん、お菓子を少しサービスしてあげよう。オマケに当店の人気商品であるアメちゃんもお土産に付けてあげようじゃないか。

2人とも直接会うのは久しぶりだから喜ぶかもしれないな、うん。木乃香ちゃんも刹那ちゃんもお互いを大事に思っているからねぇ。2人の関係が昔みたいに戻れたら言うこと無いかな。

「それは……は、い。その時はお願いします」

返答の言葉がぎこちなかったです。これは、まだ子供の時の一件が尾を引いているのかな?…それしかありえないか。何年も一途な…というよりも気に病み過ぎだ。

刹那ちゃんと会う度に、それとなく説得してはいるけど頑固に、一途に、病的に、頑なに拒むんですよ?この子ったらさ。ちょっと自分を追い詰め過ぎな気がするんだよねぇ…。

「本当に頑固ちゃんだなぁ。…まぁ楽しみにしているよ。あー…それと、刹那ちゃん?」

「…はい、何でしょう？」

「手を出してくれないか？」

すっかり渡し忘れるところだった。このアイテムを渡しておかないと学園長（じじい）にバレる確立がグンと上がるかもしれないんだった。アレはそこそこ長く生きているせいか読心術くらいは使うからな。

その辺の対処に未熟かもしれない刹那ちゃんじゃ精神干渉魔法を抵抗（レジスト）出来ないだろう。もし出来るとしても念には念を入れておかないと心配だからなぁ。

俺は何も手を打たずに事が露見するのと対処しておいて無事に済むなら後者でありたいわけよ。失敗した時に“あの時ああしていれば”なんて考えても取り返しがつかないんだからさ。

「？？？はい…」

「ん。それじゃ…はい」

ちょこん、と出てきた刹那ちゃんの掌にアイテムを乗せ、渡した。渡したんだけど…。

「む？何です…！！こ、ここれは……指輪！？えっ！？…イヤっ！！」

何故か、渡した直後に何やら狼狽しはじめたんだ…。確かにアイテムの形状は指輪型で男の俺から女の子の刹那ちゃんに渡したのは意味深に見えなくはないけど…。所謂“左手の薬指”には填めてい

ないからセーフじゃね？

それはそうと…刹那ちゃん？そんなに狼狽するほどの拒否反応ですか！？イヤって…！！…兄貴分の俺としては少し…結構…いや、大分ショックですわー…。もういいや…アイテムの説明に入ろっと。はぁ…。

「…この指輪は対精神干渉魔法のアイテムだ。要は読心術に対して抵抗を上げる物だ」

「……あー…そう、ですよね…。…アイテムですよねー…。ハハハ…」

親切にアイテムの説明をしたのに、今度はガックリと肩を落としていますよ？まるで期待が外れた、みたいな感じ…。…何なの？この子は？イヤがったりガッカリしたりさぁ…。若い子の気持ちが理解できないよ…。

何？俺のせいか？俺が何かしたか？それともアイテムの形が指輪だからか？でも、それは仕方ないじゃないか。携帯性とかを考えたら指輪かネックレスのようなアクセサリー系が一番なんだからさ。

まぁ、こうしてもいられないから刹那ちゃんに正気を取り戻してもらわなくてはな…。

「刹那ちゃん？疲れているのか？何だか目のハイライトが消えかかっているが…」

「…いえ、大丈夫です。大丈夫なんです。変に期待して勘違いした私が馬鹿だったんです…。それでなぜこのアイテムを？」

期待してた？勘違い？…何を期待して、何を勘違いしたんだろう？俺は何も期待させるようなことはしてないし言ってもいないんだが…。何もしてないよな？

どうでもいいんだが刹那ちゃんのハイライトの消えた目を見た時にドキッとして、ちょっとイジメたいなって考えた自分自身にゲンナリしたのは秘密だったりする……。

「…学園長対策だ。簡単な対策だが、これは刹那ちゃんを信じてのことだ。約束は守ってくれるんだろう？」

これさえ渡しておけば、あとは刹那ちゃん自身が話さない限りバレることはない……はずだ。刹那ちゃんに交渉事の駆け引きとかは、まだ苦手だと思うんだ。

元が素直な子だから言葉で丸め込んだり、ウソとかが苦手で口を閉ざしてダンマリしか出来ないのよ。下手に隠し事をしていると態度に出ちゃうんだよ。だから“見ざる、聞かざる、言わざる”を徹底しているんだな。

口を開かなければバレることも無いわけだからね。それでも、あの学園長は必要とあらば読心の魔法を行使してくるから安心できないわけです。アイテムなどで保険を掛けても、掛け過ぎるということは無いんだから。

打てる手は打っておくのが俺です。……最近はアイリが全部やってくれている気がするけどね！！

とにかく何が言いたいかと言うとね？刹那ちゃんから話すとは微

塵も思ってないわけですよ。こんな俺でも信じているからさ。

「！…もちろんです！話しません！絶対に！」

やっぱりいい子だぁー♪こんな子には幸せになってもらいたいよねぇ。この子が将来はネギ少年のパートナー候補の1人になるわけか…。なんだか、可愛がっている娘を嫁にやる父親の心境になるのはどうしてだろうか？

そう考えたらイラッとしてき…アレ？でも、最後のほうで木乃香ちゃんと再契約していたような気が…？いつだったかなー…。学園祭の時だったか？…違う気が、する？ああ、もしかして悪魔に攫われた時だったかな？…これも違う気がするなー…。

まぁいつだっていいか。要はこの子達が幸せになってくれればいいんだからな。

「ありがとう、刹那ちゃん…」

「…ぁ…い、いえ。約束ですから…」

何があった？表情が発熱したように真っ赤だ…。風邪か？そうだったら悪化する前にお薬を処方しておいたほうがいいだろうか？…ちょっと確認も含めて撫でてみるかね。

「んー♪いい子♪いい子♪」

「あぅ…ぁの…」

恥ずかしがっちゃって、かーいーなー♪……おとと、そうじゃな

かった。熱はっと……多少、発熱している感じがするけど、それ程でもない、かな。顔色が赤いから熱とも考えたんだけど…違うようだ。

風邪や熱などの病気なんかではないと判断してからは刹那ちゃんを愛でることに全力を費やしましたぜ?それはもう俺が満足するまで、撫でり♪撫でり♪してやりました。

１０分程そうしていたら場所が玄関前だということを思い出して渡したアイテムの具体的な説明をすることにした。撫で撫でして子供扱いされたと思ったのか、刹那ちゃんの表情が羞恥心で真っ赤だったことをここに記しておこう。

ちょっと目が潤んでいたのが可愛かったです。イジメたいと思った自分は間違いじゃないと思いたい…。俺はソフトSだ…。ソフトSなんだ…。ハードSじゃない…。

「アイテムの使い方は指に填めるだけでいいからね?注意事項はそれを填めている間は念話などの魔法的通信手段が一切送信できないこと。大丈夫だと思うけどそこは気を付けて」

「はい。……それで葵さんが“関係者”ということを他に知っている人は居るのでしょうか?」

俺のことを知っている人？……それは前魔法大戦期に参加したことを知っているということ？それとも“ただの魔法使い”と思っている人のこと？

……刹那ちゃんが言う“関係者”とは“魔法使いの俺”を知っている人ということだよな？そうなると…タカミチ、くらいか？直接、俺のことを知っているのは彼くらい…いや、図書館島の地下から弱々しいけど知っている魔力反応がしていたな。

地下工事をしている時のことだ。地下通路を造っている時、図書館島の側を通ったら懐かしい魔力反応を感じたんだ。幼女変態…もとい、アルビレオ・イマだ。間違い無い。なぜ弱々しいのかは知らないけどな。

向こうも俺達のことを感知したかもしれないと考えると…。近い内に懐かしの旧友に“挨拶”に行かないとダメかもしれない…。その時に“お話し”もしないと、ね。学園長は……その後でいいや。優先順位低いし…。

「あー…んー…？うん？１人しか居ない…はず？正直、他に２人３人怪しいんだけど多分、１人」

そうだ。不本意ではあるけど現代では比較的、高位の魔法使いである学園長とか、学園長とか、学園長とか、学園長とか、学園長とか。…あれ？全部、学園長じゃね？鬱だー…。

あー、あとエヴァちゃんとか？あの子、俺の居る店を見つけてから常連になりやがったんだ…。あの夜、立ち去る時に不自然だったのがダメだったなぁ…。あっ、それと茶々丸と会えたのが嬉しかったです。

お蔭でアメちゃんとかお菓子をせびるんだぜ？今、俺のことを学園長にバラされるのはマズイから拒否も出来ないし…。いや、いいんだよ？お菓子くらいさ。小さなお口で、もきゅもきゅ♪と美味しそうに食べてくれるから文句、無いしね。

これが可愛いんだよ？見た目１０歳前後の幼女だし。それに小さな身体なのもあって気分は孫を見守るお祖父ちゃんです。……でもアレはフェイクで実は俺のこと…というより俺達のことを観察していたんじゃないかな？

多分、俺達が何者かはわからないだろうけど“関係者”ではあると確信しているんだろうなぁ。これが推測だったならいくらでも誤魔化せるんだけど…。

あの様子じゃ確信しているわー…。正式に学園長に挨拶に行くまでは“ただの魔法使い”と言い張らないとイカンですたい。学園地下のこととか艦隊作製のための月面プラントとか、他にも知られたら面倒になることがあるからなぁ。

そんな風に考えながらいたら刹那ちゃんが戸惑いながら聞いてきたんだ。

「それは誰か…聞いても？」

「…タカミチ…高畑・Ｔ・タカミチという教諭だ。古い友人でもある。そうだな…学校内で困ったことがあったらその人に言いなさい。あとで手を貸すように俺からも言っておこう」

思わず心の中で苦笑したよ。こういう個人情報は、普通は秘密にするものなんだけどねぇ。相手が刹那ちゃんだから教えてしまった。こういう根が素直な子にはウソとか秘密ってやり難いんだよ。

とりあえず、タカミチには後で連絡して、刹那ちゃんがタカミチに相談した時のために段取りを付けておこう。

「わかりました。何から何までありがとうございます」

「いいの、いいの。刹那ちゃんのためでもあるけど俺のためでもあるからね。……気を付けなさい。手に負えない事態が起きたら周りに助けを求めなさい。無理はしないように」

ちょっとしたことで張り詰めた雰囲気になるから心配なんだよなぁ。こういう頑固ちゃんには強烈な切欠がないと吹っ切ることは難しいからなー…。

事件の時、変に突っ張って自分だけで対処しようとして失敗しなければいいけど。刹那ちゃんの周りには頼れる人が居るんだから頼ってほしいよねぇ。突っ張ったって得になることなんか無いんだから。

「…はい！」

「よしっ♪いい返事だ！頭を撫でてあげよう♪」

ほ～ら？な～で♪な～で♪な～で♪もう一つオマケにな～でなで♪

もう、返事だけはいいんだからなぁ。この子は本当にわかってい

るんだろうかね？俺は早く“自分の仲間”と言える存在を見つけろと言っているんだけどなぁ。

「…あ、あの！…恥ずかしい、ですから…この辺りで」

「む？そうか？…刹那ちゃんも撫でられるのがイヤになるお年頃ということか…。感慨深いねぇ」

流石に何度も子供扱いされたようで気分を害してしまったかもしれないな。少し、しつこく撫で過ぎてしまったのかもしれない。

…いや、だってさ？刹那ちゃんや木乃香ちゃんの髪ってツヤツヤのサラサラで撫でていて俺も気持ちいいんだよ。これは病み付きになりますって。とは言ってもお年頃だからなぁ。あとどれくらい撫でさせてくれるだろうか？

成長してくれることは嬉しいし、感慨深いものがあるけど、少し寂しいのもあるんだよなぁ。でも、イヤがることはしたくないし…。難しいねぇ？くくくっ♪

「あ、いや、別にイヤというわけでは無いのですが…その…ただ、恥ずかしいんです」

やはり、玄関前で、それは恥ずかしいか…。まぁ外だからな、いつ、誰に見られるか、わかったものじゃないからな。刹那ちゃんへの配慮が足りなかったか。これは反省だ。

そうとなれば謝罪と次の撫でる予約…というわけではないけど、からかう序でに言っておくか。

「??あー…そうか。すまない。こんな玄関前ですることではなかったな。くくくっ♪今度は家の中でジックリしよう」

「家の中!?ジックリ!?はわ!はわわわわ!!」

刹那ちゃん…何を想像したんだよ?今日一番の顔がこれ以上無いというくらい赤いんですけど…。あ、鼻血だ…。

マジでナニを想像した?俺は刹那ちゃんの将来が心配だ。耳年増になっていないか?とか…。まぁ、からかうのは成功(?)したっぽいからいいか。

「くくくっ♪冗談だから気にするな、俺は気にしない。くくくっ♪」

「なっ!?…~~~ッ!!もう!行きますね!!それでは!!」

「くくくっ♪ああ、いってらっしゃい。……また帰ってこい」

「……はい、行ってきます!」

元気よく駆けて行く刹那ちゃんの背中を見送る。……持っている物が野太刀じゃなかったら普通のご家庭なんだけどなぁ。

まぁそれは置いておいて。小さい頃からお世話していたから俺からしてみたら刹那ちゃんは娘のようなものだよ。ここが刹那ちゃんの家といってもいいと思うんだよね。父親気分だから辛くなったらいつでも帰って来いと思うわけよ。

そんなわけで刹那ちゃんを見送った後、携帯電話を取り出して電話を掛けた。

「あ、もしもし？俺、俺だよ」

『――――――？』

「いや、詐欺じゃないよ…」

失礼なヤツだな…。俺の声を忘れたと言うのか？……電話越しだと多少、声が違って聞こえるから仕方ないのかな？

『――？――――――？』

「うん、そう、葵。…実は頼みたいことがあるわけよ」

なんだ、わかっているじゃん。一発で俺だとわかれよなぁ。まったく友達甲斐の無いヤツだな。そんなことでは教師になれんぞ？……あ、教師だったか。

『――――？――――――？』

「…そうそう！その子！わかってるじゃなーい？」

流石だねぇ？具体的に言わなくても俺の言いたいことがわかっているんだから。木乃香ちゃん繋がりで察したのかな？

『――――――？』

「いや。相談されることがあったらでいいから」

別に積極的に助けろ、なんて過保護なことは言わないよ。それじゃ成長する機会が減るじゃないか。彼女自身が助けを求めない限りは助けなくてよろしいですって。……命が危険だった場合は、その限りじゃないけど。

『――――。――――――、――――』

「はいはい、よろしくねぇ。……これでよし。後は刹那ちゃん次第、かな」

俺が今、出来るのはこんなことくらいだからね。後は刹那ちゃんが頑張らないと、ね？俺は刹那ちゃんの成長を楽しみにしているよ。善悪に限らずに自分を誇れるほど立派になりなさい。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良学園学園長室…。

Ｓｉｄｅ　刹那

葵さんに見送られた私は今、学園長室に居る。途中、道に迷い掛けたが校舎前に居た高畑先生に、ここまで案内してもらえたから助かった。……遅刻的な意味で。お話しを聞いてみると葵さんから頼

まれたようでした。

目の前にはお嬢様のお爺様であられる学園長先生…近衛・近右衛門様が大きな執務机の向こうの立派な革張りの椅子に腰掛けて笑みを浮かべている。

……ところで学園長先生の後方に伸びたあの頭はホンモノでしょうか?妖怪?エイリアン?…それとも未確認生物?失礼ながらお嬢様のお爺様か疑ってしまいました…。

「フォフォフォ。遠いところをご苦労じゃったな、桜咲・刹那君。わしが学園長の近衛・近右衛門じゃ」

「……はい。よろしくお願いします」

いけない、いけない!ショッキングな視覚情報があったので少しだけ呆然としてしまったようです。

……本当に人間?…ああ、いえ、何でもありません。

私は不躾な視線をしていたようです。学園長先生に「何かな?」と好々爺のように聞かれてしまいました。聞かれても無理です!!言えませんよ!?「貴方は人間ですか?それとも妖怪ですか?」なんて聞けません…。聞いてはいけない気がします!!

とはいえ、この人が葵さんの言っていたお方ですか…。後頭部以外を考えれば好々爺然としたいい人のようにも感じられるのですが…。しかし、葵さんが言うには悪戯好きなタヌキらしいです。どちらが本当なのでしょうか？

「婿殿から話しは聞いておるよ。君は孫の木乃香の護衛役をするらしいのう？」

「はい。微力ながらお嬢様の御身をお守りします」

長から連絡はされているのですね。そうでした。ここでの私のお役目はお嬢様の護衛です。もう、“あの川の時”の無力な自分にならないよう…お嬢様をお守りできるように鍛えて、鍛えて、只管、自分を鍛えたのだ。

神鳴流宗家ではない私はニの太刀などの奥義は習得を許されなかったが、それを抜きにしても私に出来ることはしたつもりだ。

今までは私が未熟なこともあって葵さんがお嬢様をお守りしてくださっていた。しかし、これから先は私がお嬢様をお守りしてみせます！この命に代えても！！

「フォフォフォ。うむ、なかなかに良い目をしておるな。……して、刹那君？」

「…何でしょうか？」

先ほどまでの好々爺とした表情をやめて真剣な目で詰問するように私の名前を口にした。部屋の中の緊張が一段階、上がった気がし

た。

いよいよ来たのでしょうか？葵さんから学園長には注意するようにと言われました。私が下手なことを話せば葵さんに迷惑をかけてしまう…。それだけはお嬢様のことと並んで守らなければならない約束…！

「刹那君は木乃香の幼馴染と聞いておる。…木乃香には悪い虫はついておらんじゃろうか？」

「は？…あ？…えー？……いえ、そのようなことは聞いていませんが？……え？」

予想外な質問だっただけに、それに学園長先生の真剣な表情と質問のギャップもあり意識が少し混乱してしまいました…。お嬢様に悪い虫がつくわけがないじゃないですか。葵さんが見守っていたのですよ？安全ですとも。

ッ？…何でしょう？葵さんに貰った指輪が“何か”に反応して微小に震えています。私は右手薬指（薬指にしたのは……気分です。いいんです、右手だし…多分）に意識だけ向けて考えて……ああ、精神干渉魔法だ。

学園長先生…。こんなことに精神干渉魔法を使いましたね？答えてから気付きましたが今も指輪は震えっぱなしです。今も私に干渉しようとしているようです。でも、学園長は何かを戸惑っているように感じ取れます。

学園長先生の態度を見るからには葵さんの指輪は、ちゃんと機能しているようです。

「そ、そうかの？本当に？」

「はい。私は聞いていません」

そうとわかれば私に恐れるものはありません。私の技量では学園長先生の魔法を完璧に抵抗（レジスト）、出来るとは言えないですから正直、助かります。これを渡してくれた葵さんにも思惑はあるのでしょうが、ここは素直に甘えるとしましょう。

ッ！指輪が？…また覗こうと、した？

「……学園長？どうかなさったのですか？」

「フォッ！？い、いや、何でもないぞい？何でもないんじゃないかのう？何でもないと思うんじゃがのう？」

覗きましたね…。わかり易いくらいに動揺しています。否定を言葉にするほど弱まっていますし。

どうしましょう？お嬢様のお爺様とわかっていますが、いっそ一思いに……斬りたくなります。サクッとやったらダメでしょうか？……まぁダメですよねー。そんなことをしてしまったら西と東で戦争になってしまいします。

それに先ほどの質問内容がこんななのも私の動揺を誘い少しでも深く精神を探る話術の一種なのでしょう。葵さん…貴方の言ったことは正しかったようです。油断していたら間違い無く一気に漬け込

んできます…！

しかし、そうならないために葵さんから指輪を与えられ抵抗（レジスト）しています。魔法による搦め手は効きません！後は私が下手なことを話さずに居ればいいだけ…。き、緊張します…！

お、落ち着いて私…。すぅ…はぁ…。よし！ここは畳み掛ける！反撃はさせない！

「なぜ、疑問系なのでしょうか？なぜ、そんなに汗が出ているのですか？…そしてなぜ、目線を逸らすのですか！？」

「質問に質問で返したのは謝罪するぞい？汗は暑いからじゃな。フォフォ。これも温暖化かの？目線は…目線は……気分じゃ！」

「はぁ？そうですか…」

言い訳が苦しい…！しかし、どんなに苦しい、言い訳でも理由は理由だ…。ともかく私への精神干渉はやめてくれたようだ。指輪の反応も無い。あとは実力行使に出てこなければ…。いえ、それは大丈夫でしょう。

学園長先生が直接攻撃に出た時…それは西の勢力に所属する私に危害を加えたということだ。これは最悪、西と東で戦争になるかもしれないのだ。学園長先生はそこまで愚かではない。

自ら道化になってでも場を掌握しようとする狡猾な古ダヌキ。やはりこういう交渉術や技能などの経験の差は埋めようが無いですね…。

「う、うむ。…おぉ！そうじゃった、そうじゃった！中学の寮で相部屋になる者を呼んであるのじゃった！もう来てもええんじゃがなぁ！」

私が胡散臭いと言わんばかりの目で学園長先生を見ていると慌てて話しを逸らそうとした。だけど私には、この動揺した姿さえも、わざと道化に徹しているように見えてきた。

しかし、気になることを言われた。中学校では全寮制ということは説明を受けていたけど、私のような“関係者”と思われる人が同室らしい。……まだ“関係者”か、どうかもわからないですけど。

そう、ですね…。ここは学園長の思惑に乗って話しを聞いてみますか。

「相部屋？…その人は“関係者”なのですか？」

「うむ！…いや、関係者なのは間違いないのじゃが…どちらかと言えば傭兵かのう」

「傭兵？…関係者と言うからには使えるのしょうが大丈夫なのですか？部外者なのでしょう？」

傭兵…。戦いを“―この世界（魔法関係）”で生業にしているのですからそれなりに腕に覚えがあるのでしょう。魔法のある戦いは普通の戦闘とは一線を画する世界ですからね…。

しかし、どんなに優れた傭兵でも誇りも矜持も持たず金次第でどんな汚いことでもするような人でないことを願いたいもの……あれ？相部屋？…ということは同級生？…えー…。

本当に大丈夫なのだろうか？あー…そうでした。同級生の私が言えた義理ではない、ですね…。……うん、ここはまず、その人を確認してみてからですね。

さぁ！来るなら来てみ…！

「部外者ではないぞい。この学園に所属している限り彼女は立派な麻帆良の生徒じゃ。そこに区別は無いのじゃよ。…それに“関係者”としても優秀じゃ」

「はぁ…」

驚きました…。優れた人格者であるとは長から聞いていましたが一教育者として立派な人物のようです。生徒に区別も差別も無い、皆同じ、と言えるのですからすごいです。親バカならぬ爺バカなのが玉に瑕ですけどね…。

それにしても、この学園長先生が優秀と言うほどの人か…。強い、のでしょう…。一体どのような人なのか少し興味が出てきました。

――トントン。

「ほっ…どうやら本人が来たようじゃな。入りなさい！」

ノックされた音を聞いて安堵したような声で入室を扉の向こうの人物に促した学園長先生。その扉から入ってきたのは…！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　刹那

――学園長室前…。

Ｓｉｄｅ　真名

――トントン。

「…入りなさい！」

「失礼するよ、学園長。…呼ばれて来たんだが早速、依頼なのかな？」

部屋に入って室内をサッと見回してみる。学園長の他に私と同年代と考えられる女の子が１人居た。…？彼女のしている指輪…何かしらの魔法アイテムかな？なかなかの一品のようだ。

それに彼女自身も新人特有の覇気を感じる。肩肘張って少々気負っているようだ。しかし、新人でも腕はこの歳では申し分無い実力を持っているとわかる。

「フォフォフォ。いや依頼ではなく龍宮・真名君、君に紹介したい子がおるのじゃよ。…ほれ、彼女じゃ」

「はじめまして。私は桜咲・刹那です。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。改めて自己紹介しよう。龍宮・真名だ」

ふむ…？自己紹介したはいいが私と桜咲、２人を学園長はどうしようというのだろうね？あの人は少なからず腹に一物を持った人だから変なことを依頼されなければいいのだが…。

ただ単に私達に仕事を依頼するだけならば個々に依頼して私達は現場で落ち合えばいいだけなのだから直接対面するメリットがわからない。精々が互いの意思疎通の円滑のためという理由がいいところだ。

それとも仕事とは関係無いことで呼ばれたのか？……あまり仕事に関係ないことで呼び出すのは勘弁してほしいのだが。好物の餡蜜を食べていたのに…。アレは…イイ。初めて食べた時はこの世の物とは思えないほどの甘味だった…！

ツルンとして喉越し爽やかな寒天！小さく慎ましくカットされたフルーツ！フルーツの中にポツンと可愛らしく乗っている甘いシロップで加工されたサクランボ！こんもり盛られた甘い餡子！そして、とろっとした黒蜜を掛けた姿はまさに完成形！！……ハッ！？

しまった…。私としたことが好物の餡蜜のことで想像が過ぎてしまったようだ…。私も日本に来て平和ボケをしたのかもしれないな。ふふふ。

「２人は学校ではクラスメイト、寮では刹那君と真名君でルームメイトになるぞい」

「何？そうなのか？…なるほど、君が関係者だからか」

中学校では全寮制だから何も無ければ私のような者は仕事の関係上１人部屋になると考えていたんだが…。そうか、私の他にも生徒

の中に関係者が居たわけか。学園長のように教師や、それに順ずる人だけではないようだな。

桜咲のように生徒の中にも関係者が居ることも想定しておかなければならないな。いざという時のために情報を仕入れておかなければならないな。何をするにしても判断する上で正確な情報が必要になるのだから。

また調べ直す必要があるようだ。平和な日本だからと油断したようだね。私もまだまだだ…。

「はい。私は神鳴流剣士ですが、貴女は？」

「…ふふふ。まぁいいだろう。私は銃火器を使う」

驚いたな…。まさか自分から手の内を曝してくるとは。知らず知らずに苦笑してしまった。いくら一緒に仕事をすると考えているとしても気を許し過ぎだと思うのだけどね。自分の手札は出来るだけ隠しておくのが利口だよ？桜咲…。

しかし、神鳴流の剣士か…。聞くところによると銃弾やビームは見て避けるし斬り捨てることが出来るとか…。それにその剣術はこの世のどんな物でも斬れぬ物は無いらしい。

私の活動が主に中東やアラブ周辺などの紛争が多発していた国だったから神鳴流の剣士を直接見ていないので本当かどうかは知らないけどね。それでも彼女は神鳴流を名乗った。本当だとしたら彼女の腕は信用してもいいだろうね。

「？？鉄砲を使うのか。…後衛だな」

「ふふ、後衛しかできないと思っているなら間違いだよ？私に距離は関係ないからね」

甘いよ、桜咲…。私をただの銃使(ガンナー)いだと思ったなら、それは大きな間違いだね。私が狙ったターゲットは必ず仕留める。私はキッチリやり遂げるよ？仕事だからね。

私には派手な大技は無い。しかし、何者も捉えたら逃がさない魔眼と練磨してきた一撃必中の銃の腕がある。私が手にした銃に死角も苦手な距離も無いよ。

ただ……弾薬費が掛かって仕方ないのが悩みと言えば悩みかな…。そのことを配慮して仕事しないと弾薬の使い過ぎで直ぐ赤字になるんだ。

「…大した自信だな。その言葉がウソではないことを期待させてもらおう」

「私も君の剣がナマクラで無いことを期待しよう」

私は銃に自信があったから試しに少し挑発したら桜咲も剣呑な目で言い返してきた。だから私も重ねて桜咲の剣の腕を頼りにさせてもらうと皮肉気に返した。

結果は……。

「ふふ、ふふふ！」

「フフ、フフフ！」

「……（ボソッ）こわっ！！2とも、こわっ！？」

……学園長が言うとおり私達は大変いい笑顔で睨み合っていた。どうでもいいが学園長？小声にして言っても私…それに多分だけど桜咲にも聞こえているぞ？私達は笑顔なのだから、どこに怖がる要素があるというのだ。

何も怖がることは無いだろう？

さて自己紹介が目的だったのならば、これで用は終わったと見ていいだろう。そろそろ私は退出するとしよう。

「学園長、用件はこれだけかな？」

「う、うむ！これだけじゃ！真名君は刹那君を寮へ案内してくれるかのう？」

何？…ああ、そうか。今日から寮ではルームメイトになったのだったな。それなら案内しないわけにはいかないか。今日は情報収集を諦めて桜咲の引越しの手伝いをしてあげるとしよう。

折角のルームメイトなのだから、これから、ある程度は仲良くしておきたい。自室で他人行儀では肩肘張って少々窮屈だ、なんてのは勘弁したいんだ。

何はともあれこれからの同僚を部屋に案内を引き受けるとするかな。ここは無駄に広いから下手すると迷うからね。

「かまわないよ。…それじゃ行こうか？桜咲」

「…ああ、頼む」

まだまだ硬いようだ。まぁさっきまで挑発紛いのことをしていたから仕方ないか…。冗談でやったとしても、やられたほうは多少、不愉快かもしれないからね。でも、これも桜咲が短気かどうかを知るためだった。

結果は……普通？日本人的な気が長いわけでもないが短いわけでもない。まさに普通。多少短いようだがね。

まぁそれはともかく早速私達の部屋に案内しよう。

私達は学園長に一言、挨拶してから部屋を出て歩いていった。私は隣を歩く桜咲を見て、これからの学園生活が退屈なものにはならないだろうと朧気に予感がした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　真名

第四十一話「指輪と探り合いと褐色少女と」（後書き）

刹那も真名さんも表現が難しい…。
作者はキャラ性を思いっきり崩しているから、まだ弄れますけどね。
それでも難しいのは変わらないですけどね。
他の作者が羨ましいですよ。マジで。

ではまたお会いできたら今月中にでもお会いしましょう！チャオッ！

ＰＳ，モンハン買えたら……２ヶ月は更新が止まるかもしれません♪

第四十二話「朝と昼と夜と」（前書き）

とある読者からアイデアをいただきました！
ネタが増えるのは作者にとって嬉しい限りです！
ネタがあったら感想の時にでも載せてくれると嬉しいです！
では続きをどうぞ！…のほほん、だけど！

第四十二話「朝と昼と夜と」

――喫茶店クレイドル門前…。

Ｓｉｄｅ　葵

まだ日が昇りきらない早朝。７月になり季節は夏を迎えた。空は薄暗いがどこまでも高い夏らしさを感じるほどだ。それに空が白んでくる時間が早く進むような錯覚を覚えた。もう直ぐ日の出だ。

夏なのに朝は朝露も滴るほどに爽やかな空気に満ちている。…朝日が、見えた。喫茶店のあるレストラン街の大通りのほうを見ても、まだ誰も居ない。…訂正だ。１人居た。こんな早い時間なのに大通りを走っているツインテールの少女が居た。

これがただのランニングなら良かったのだが少女は脇に朝刊を幾つか抱えて走っているのだ。

新聞配達…。

俺の知る少女…神楽坂・明日菜の中学初期から始めたバイトだった。いや、当初は俺も新聞配達ではなく俺の喫茶店で雇う予定だったんだ。それなのに明日菜は何を遠慮してか丁重に断ってくれたのだ…。

俺が何かしたのか？兄貴分としての気持ちもあった。それを断られるとは思わなかったからあの時は割とショックだったなぁ…。ま

ぁ理由を聞いても学園長（じじい）に言ったように俺にも迷惑を掛けたくないんだとよ…。

バカか？と思ってさ、正直にそのまま言ってやったら、この妹分が何をしたと思う？……豪快にドロップキックをかましてきやがったんだ。アレは痛かったなぁ…。明日菜は蹴り終わると顔を真っ赤にして走って帰るし。何なの？

あー、それにその現場（俺が倒れている）を見た、リチラが何を勘違いしたのか特別緊急警戒態勢を躊躇無く発令しやがった。お蔭で麻帆良の地下はてんやわんやの大騒ぎになった。まぁ唯一救いだったのが地上では変化が無かったことか…。

俺が起きた時、きちんと誤解は解いたよ？ええ、解きましたとも。まだ戦争なんてする気は無いんだからね！？……“まだ”じゃねぇぇえ！！？？しないよ！する気ないよ！？

当然そのあとにリチラにはキッチリお仕置きとお説教してやったがな。だいたい俺がやられたくらいで冷静を失う…あー…殆どの家族に言えることじゃね？これって…。いやっ！み、皆仲良くていいことだよな！？なぁ！？あは、あははは！！…はぁ。

それにしてもリチラは反省してくれたんだろうか？〇〇〇なお仕置きや〇〇〇〇〇なお仕置きをしてもどこかうっとりしているような…恍惚としているような…〇〇〇〇〇するとクネクネと楽しそうな…。

それにお仕置きが終わると何やら満足したような表情で自分の部

屋に戻って行くし…。まぁとにかく反省したかが判断つかんわけよ…。

おっと？明日菜も俺に気が付いたようだ。こっちに走ってくる。

「おはよう、葵さん！これ今日の新聞ね！」

「はい、おはよう。毎度、ご苦労様。…今日の弁当はどうするんだ？なんなら学校まで届けさせるぞ？」

俺も喫茶店や組織の報告があるから早起きだったりする。それで新聞をこうして直接受け取ることがある時が週に数回あって、この時に弁当がいるかどうかを確認する。まぁ前日に電話確認もすることもあるけどね。

それに弁当を直接届けるのは俺の時もあるし他の誰かに頼むこともある。明日菜の所属するクラスは留学生や外からの編入組みを加えただけで殆どメンバーが変わってない。

顔見知りだと余計な遠慮がいらなくて助かるよ。一応、学校に入ることはタカミチに黙認してもらっているし、念のために認識阻害の腕時計も付けているから学園側（学園長）には、バレていない…はずだ。

まぁ弁当を届ける時は学校の玄関で明日菜か木乃香ちゃんに渡しているしね。タイミングをミスるとチア３人組や報道部に入部した朝倉を筆頭に囃し立ててくるから面倒だったなぁ。

それで今日はどうするんだ？届けるのか？今渡すか？それとも…。

「いいわよ、そんなこと！どうせ、通学路なんだからその時に受け取るから」

「はいよ。……良し！行け！馬車馬の如く走るのだ！！」

「うっさい！わかってるわよ！べーっ！」

こらこら？あっかんべ、はいいから前向いて走りなさいって！転んだら危ないでしょ？ふむ…こういうところは、まだまだ子供だなぁ。……あー、まだ中坊だったな。それも一年の。若いなぁ…。お兄さんにはその若さが眩しいです！！

「くくくっ♪気を付けてなぁ！」

「はーい！」

今度こそ走って行った明日菜を見送って店に戻って朝の仕込みを皆で始める。

「…さて、今日も一日頑張りますか」

あの子達も来年の秋だか冬にはそれ相応の騒動に巻き込まれることになるだろう。けれども、それは俺の関係の無い出来事…。当然、あの子達を可愛がってはいる。しかし、あの子達の歩む道はあの子達自身が決めることだからねぇ。

お兄さんには、どうすることも出来ないのよ…。ただまぁ俺に出来ることがあるとしたら、それは…精々軽く相談に乗ることかな。

――喫茶店クレイドル店内

今朝の明日菜も何だかんだで頑張っているからね。俺もその姿を見たら頑張ろうと思うわけよ。意地じゃないけど大人が子供に負けるなんてこと出来ないでしょう？大人気無いかもしれないけど俺は臆病だけど少しだけ負けず嫌いなのよ。

俺は勝利…譲って引き分けにしか興味は無いね。負け？何それ美味しいの？ってなもんですな。駆け引きで敢えて負けることもあるけど、それは今後の投資的な意味での戦略的敗退だから俺の中では負けじゃない。……負けてないんだからね！！

「主様ぁ、朝の仕込み終わりましたわぁ」

勝敗について思いを巡らせていたら仕込みが終わったようだ。ミリーに声を掛けられて気が付いた。マルチタスクは便利だなぁ…。考え事していても手は別のことが出来るんだからさ。

思考分割能力、万歳ってね！

「はいよ。こっちも終わった。ミリー達も開店まで少しゆっくりしていいよ。…あ、弁当はいつも通りだからな？２つとも店先で渡してくれ」

「はぁい♪」

「…んー！…はふぅ。うし、それじゃ現状報告でも聞きますかねぇ。……いつも通り厄介事が無ければいいな」

喫茶店の地下に造られた地下拠点にある俺の執務室に向かう。いつもなら機動戦艦アングレカムの執務室を使うんだけど今、アンは十数名の人員と一緒に月面プラントにて艦隊作製の任務についている。

なので、艦の執務室が使えないから、この地下に建造された拠点の執務室で報告のやり取りが行われているんだ。

俺の執務室に入ると既にアイリが居て報告の準備が出来ていた。椅子に座って、早速報告を聞いてみると色々あるある…。

「……以上が今回、収集された情報です。最後に、この情報は既に分析や解析などのフィルタリングはされたものです」

「…学園データバンクにハッキングねぇ。アイリ、これは確かなの？」

「はい。正確には8ヶ月以上前から定期的に小規模のハッキングが検知されています。対応は、マニュアルのBを行いましたので学園側にもハッカー側にも私達の存在は知られてはいません」

マニュアルのB…俺達の情報隠蔽を最大限に注意しながら欺瞞情報を多数散布するとともに敵のコンピュータに逆ハックの種を仕込むこと。仕込むだけでこちら側がアクションを起さない限り無害な

ものだ。安全、安全。

それでまぁ報告の中で眼を惹いたものがこれだった。麻帆良の学園データバンクに侵入を試みた“形跡”があった。ただ形跡といってもそれは微量なバグと見分けが付かないほどだったらしい。

形跡からハッキングかもしれないから一応、過去のログデータを漁って調査したら案の定だった。似たような痕跡が幾つもあったんだ。やられたデータは主に魔法使いの個人情報や学園地下の構造情報、それと世界樹の観測情報。

これをやったハッカーはなかなかの腕前だ。何ていったって俺のところでも偶然、感知してハッキングされたと仮定した調査でようやく発見、確信に至ったんだからね。

「そんな前から…。それで発信元は？犯人の目星は？やっぱり西か？」

「いえ…それが、どうも、この学園内なのです。犯人の特定も出来ていますが自分達は隠密裏に行動するので対象の確保に手間取っているのが現状です…」

「そっか。それで犯人は誰なの？学園長の敵対者だったらなぁ…」

敵対者、歓迎ですよ？俺から目を逸らすデコイ的な物に仕立て上げてみせるしね。逆に俺に敵対してきたら……ヤる？サクッと排除ですな。あー、でもなぁ女性や子供が相手だったりしたらヤり難いなぁ。後味が悪過ぎる。

必要ならヤるけど、それでも嬉々としてはヤりたくないな…。

「クスッ、敵対者かどうかはわかりませんが。…対象の名前は“超・鈴音（チャオ・リンシェン）”。今年、麻帆良女子中学に入学した生徒です。…彼女は木乃香さんや明日菜さんのクラスメイトでもあります」

「超・鈴音…。超・鈴音か…。ふぅむ…」

アイリの説明を聞いて改めて彼女の資料を見てみると中学前の情報が巧妙に偽造されていたようだ。資料には学園外の某有名進学付属小学校を卒業して麻帆良女子中学に入学とある。

だが、実際にその小学校へ確認を取ってみると紙媒体や電子上の書類や情報は確かに彼女のことが記載されていた。ここまでおかしなことは無い。なのに、担任したはずの先生や部活の後輩生徒からは超・鈴音が居た証言が得られないと来た。

ここまで情報の確認をしているなんて、いつもながらアイリは仕事が速いなぁ。ここ最近は何も指示しなくても的確に対処してくれるから俺も助かるよ。……組織（ファミリー）に俺（長）っているのかな？

あー、それよりも今は超・鈴音のことだ。彼女ことはどうしようかなぁ？俺としては変なちょっかいを出されなければ無視してもいいんだけど…。ん？ちょっと待て、よ……。超・鈴音は未来人（？）だか火星人（？）だったよな？

……あれ？これってマズくね？

仮に未来人だとしたら俺がここに居ることを知られている可能性があるってことだよな？時の遥か先から遡って来たわけだからさ。さて、どうしようか？んー……いや、待て待て、可能性だけで動いたら取り返しの付かないことになりかねない、か。

もう、この際、向こうから接触があった時に対応を考えるとするか…。場当たり的な対処になるけど藪を突いて何が出るか、わかったもんじゃな……って、ちょっと待てよ？今、芋蔓式に思い出したけど茶々丸の開発に彼女が関ってなかったっけか？

……マジで、どうしよう？

多分だけど茶々丸経由で超・鈴音に俺の人相とかが伝わっているかもしれない可能性が大なんだけど。…いや、エヴァちゃんや茶々丸にはただ喫茶店クレイドルの店長としか言ってない。

そういえば、まだ正式に名乗ってなかったなぁ…。あまりに自然だったからすっかり忘れていた。これなら2人（1人と1機？）を責める気持ちはもちろん無いな。名称さえ伏せておけば誤魔化せる……かも？

でも本当にどうしようかなぁ。んー……もう、面倒だから今の内に一部隊を派遣して超・鈴音の身柄を確保して、その他関係のあるモノ諸々を処理してしまうか？あれ？これって以外といいアイデアなんじゃ……ん？

あー……これはダメだ。ダメダメだ…。はぁ。

何だか超・鈴音の発言がネギ少年に対して世界の真実と救世的な

意味でキーワードだったかもしれん。……記憶的に自信ないけど。ここはやっぱり武力的には放置して衛星軌道上からの監視だけに止めるとするか。

うん、そうしよう。面倒事は勘弁だからな…。

「あの…閣下？どうかいたしましたか？考え込まれている様子でしたが何か自分に至らぬ点が…」

「あ？違う、違う！今後の方針を考えていただけだから気にしないで。アイリ達は十分にやってくれているよ」

「はっ、ありがとうございます！」

俺は超・鈴音の対処は現状、遠距離からの監視に留めることを指示した。

他にも色々…。世界樹地下の魔力蒐集や地下各種生産プラントの兵器・物資の生産状況。月面に建設した無人生産プラントで行われている艦隊作製の目標達成率や問題点。そしてプラント建設のために月へ行ったアン達、メンバーが今月の終わりに帰還すること。

オマケに俺の個人的（趣味的）な研究内容の経過報告などがあり、俺はそれに対してそれぞれにニ、三指示を出して、あとを担当部署の責任者に任せた。

それと、もう一つの案件で数年前から“誰か”が夜な夜な［工房］内に隣接された［格納庫］に侵入して積載された“資材を少量”、

無断で“使用されているらしい”ので、それの調査も頼んだ。今年の1月くらいにパッタリと止んだけど調査だけは、ね？

時計を確認したら朝の8時10分だった。

「おろ？そろそろ時間だな。後の報告は夜にしよう」

「はっ。自分も後で向かいます」

「あいあい。先に行っているよ」

今日も喫茶店、頑張るぞー！！目指せ！世界一の喫茶店！！……何を以って世界一なのかは知らないけどね？まぁこういうのは気分ですからな♪

そして日が暮れて…。

夏季に入って日が延びたといっても時間も午後7時になったら空は夕闇に包まれて暗くなる。閉店準備をし終わって今は店内の清掃中…。

今日も色々あったんだ。

開店から午後の三時頃までは他店のお姉さんや居住エリアの奥様

方がお昼ご飯や井戸端会議的なことを店内でしていた。他から喫茶店の情報を聞いたのかカップルが数組来たりもした。彼女かぁ…ケッ！羨ましくなんか無いんだからね！！

そして木乃香ちゃんと明日菜が部活を終えて弁当箱を返却しに来たりしたな。……明日菜達な？ちゃんと弁当箱を洗って返却してくれるんだよ。俺はいいって言っているのに2人とも「ご馳走になっているからせめてこれだけは」って聞かんのよ。

2人とも律儀だよね？木乃香ちゃんはともかく明日菜までそんなだから正直意外だった。俺の知らないところで礼儀正しく育ったんだねって思ったら寂しいのと同時に何だか誇らしくなった。

娘の成長を喜ぶ父親の心境かね？

弁当箱返却後に俺が2人に奢りでケーキセットを出して駄弁っていたら時間が経っていた。1時間も経っていたからビックリだったな。木乃香ちゃん達を遅くなる前に帰して一息吐いたらまた知り合いが来た。

それは、もう常連よろしく通っているエヴァちゃんと茶々丸ちゃんだった。

…茶々丸ちゃんって知っているとは思うけど、とってもいい子なんだよ？自分は飲み食いできないからってお店の手伝いを買って出てくれるの！いい子じゃね？それに可愛いしさ。

でね？最初はお客様なんだからって遠慮していたんだけど「私は

何か間違えたのですか？」って彼女の純粋なカメラアイで見られてみ？お手伝いくらい許しちゃうってなもんでしょう！

一応、エヴァちゃんの従者だから主人の許可がいるということで俺が視線で問いかけたら「ふんっ」って目線を逸らして「勝手にしろ」と言われた。茶々丸、理解のある主人でよかったね？ツンしかないツンデレだけど……。

それ以降、エヴァちゃんが当店に居る間は茶々丸ちゃんが手伝ってくれることになった。彼女は要領がいいから即戦力で働いてくれたよ。たまに四葉・五月ちゃんの超包子（チャオパオズ）でお手伝いしているらしい。

接客経験はそこで身に付けたんだね。まぁ茶々丸ちゃんは元から人に尽くすことが得意と言うか何と言うか…くくくっ♪そう、素直な子なんだよね。今時あんなに純粋な子は滅多に居ないよ？娘に欲しいくらいだな。

今日も満足したのかエヴァちゃんも6時頃には帰って行った。…あ、名乗ってない…。また今度でいいか。

でな？家はだいたい7時くらいにお店を閉めるから出来るところで閉店準備をしていると扉のカウベルが鳴って来客をしらせてくれたんだ。

今度は刹那ちゃんだった。

夕食かな？って考えていたら背後にもう1人居た。中学生とは思えない長身と健康的な褐色の肌の女の子。夏になる前に刹那ちゃん

に紹介された龍宮・真名ちゃんだった。臨時の仕事でよく組んでいるので彼女にはお世話になっているので俺に紹介したらしい。

今、考えてみると確か…あの子も超・鈴音側じゃなかったっけか？初めて会った時は超・鈴音に依頼されて不確定要素の俺を排除しに来たか？と疑ったけど違ったしな。本当にただの同僚の紹介だった。

むー？そういえばその時、見た感じでは武装と考えられたのはあのギターケースくらいのものだった。アレだけではこのお店は落せない。まして俺を暗殺するなんて無理だ。ただの杞憂だったのかもなぁ。

……今、考えていて、もう一つ懸念が出てきた。いや、出てきたと言うよりも出来たんだな。それでだな？懸念というのは…真名ちゃん経由で俺や皆の名前が超・鈴音に流れたんじゃね？ということだ。

はぁー……もう、やだｏｒｚ周りは敵ばかりです…。

まぁ今そんなことを考えても仕方ないことだ。ここは開き直って考えよう。自己暗示はこうだ「バレてない。バレてないんだ。バレてない…はず」。不安が残る自己暗示だが気分的には楽になった。

……現実逃避だけどな！！

まぁそんな２人が来たのは何のことはない少し早いけど夕食をこ

こで食べようということらしい。閉店時間も近いから注文を聞いてパパッと出したさ。サービスで刹那ちゃんにはデザートに御手洗団子を、真名ちゃんには餡蜜も付けたな。

あ、それと真名ちゃんはどうやら真名“ちゃん”と呼ばれるのが好ましくないらしい。何故。それがわかったかと言うと、いつも俺がそう呼ぶと頬が引き攣っていたからだ。子供扱いされていると思ったのかね？まさか、恥ずかしかったわけではあるまいしな。

“真名ちゃん”と呼び始めたのは彼女が餡蜜を食べに1人で店に来た時だから我慢の限界だったのか知らんけど真名ちゃんは実力行使に訴えようとした。所謂、銃を額に押し付けて「お話ししようか？」というヤツです。

ただ……あの時は場所が悪かった。店内だったんですよ。それも閉店間近の、ね。当然、他人は誰も居ない。全て身内だけだった。真名ちゃんが銃に手を掛けようとした途端に彼女の背後から二刀の小太刀が左右から伸びていたんだ。

ハオとユエの白と黒の刃が鋭利な光を放っていたのが印象的だったなぁ。それに冷や汗を掻いている真名ちゃん自身もね。あと一歩踏み出していたら首の筋が切れていた。そんなことがあったから普通に話し合い、今のちゃん付けで呼ぶに押し切ったんだ。

真名ちゃんごめん！これだけは譲れないんだ！お礼に餡蜜もタンとご馳走したからいいだろう？満足そうに頬を緩めていたのを俺は知っているぞ？

それでまぁ夕食の終わった刹那ちゃん達も帰って今日のことを振り返りながら掃除をしていたら皆も終わっていた。外は街灯が点いているが、もう真っ暗だ。道行く人が疎らなことから飲食店のほうに流れているのだろうと思う。

「んー！はぁー…今日も終わったー！皆、お疲れ様！そろそろご飯にしよう。…あ、夕食の当番は誰だっけ？」

「それでしたら、わたくしですわ♪夏ですので食べ易いようにトマトと鶏肉の冷製パスタとジャガイモとほうれん草のポタージュにしようと思うのですが、いかがでしょう？」

「いいねぇ♪それに温野菜のサラダを付けてくれたら言うこと無いよ」

冷凍系の固有特性を持っているリチラが作る料理はヒンヤリとしていて夏には重宝するなぁ。夏バテにはなりたくないしね。

今日の夕食は洋風か。ご飯でガッツリもいいけど冷製でサッパリもいいよね。身体が冷えたら消化に悪いからポタージュと温野菜を付ければ完璧じゃね？あとは食後に温かいお茶も入れれば万全だな。

それはとにかく俺は腹ペコです。お腹空いたわー…。

「では、そのように。そうですわ！デザートに手作りバニラアイスをご用意してありますの。食後に、お出ししますわね？」

「うん、楽しみにしているよ♪皆、聞いたね？サッサとテーブル片

付けてご飯にしよう！」

「「「「「はーい♪」」」」」

テーブルを動かして場所を確保したり、椅子を運んで席を作ったり、布巾でテーブルを綺麗に拭いたりして最後にリチラの作った料理を並べたりと各自で出来ることをして食卓の準備をした。

団欒をした夕食後…。

その日の夕食も楽しく美味しくいただきました。皆と食べるご飯は賑やかで楽しいね。1人で食べるご飯は不味くは無いけど何だか味気無くてイカンよ。メリハリのある食卓はいいなぁと毎回思うよ。

皆も食べ終わったようでそれぞれに食後のお喋りをしている。俺もリチラに夕食のことを話している。お礼はちゃんと言わなくちゃいけないんだよ？そうしないと人としてダメになるからな。

「いやー、美味しかったー♪リチラの料理は夏だと冴え渡るよね」

「ありがとうございます♪葵様や皆さんに喜んでいただいて、わたくしも嬉しいですわ♪」

「葵ちゃん、はぁい、お茶、入れたわよぉ♪」

「ありがとう、ミリー。んー♪満足♪満足♪」

今日も平和に終わった。あとは夜の反省兼報告会をしてお風呂に入って歯磨きして寝るだけだ。木乃香ちゃんや明日菜は元気だった。刹那ちゃんと真名ちゃんも変わりなかった。エヴァちゃんと茶々丸ちゃんは……いつも通りだったな。

あ、深夜番組の録画予約しておかないと…。

学生さんが夏休みを控えた今の時期に海外ドラマの“２４時間”が深夜に分割で一挙放送しているんだ。お金はあるからＤＶＤをＢＯＸで買ってもいいんだけど…こういうのは何となく録画したくなりません？

こんな感じで今日も終わりだなぁ、と感じて皆にお休みと挨拶して自室に敷いてある布団の上に横になったんだ。程よくお風呂で解れた身体の力を抜いて目を瞑って、いざ夢の世界へ……というところで。

――ビーッ！ビーッ！ビーッ！ビーッ！

建物内で非常事態を告げる赤の警戒色をしたランプが点り、けたたましいとまでは言わないが、それでも耳障りな警報の音が鳴った…。不本意ながら地下拠点に正体不明（アンノウン）の敵が侵入したようだ。

「はぁ…」

それは俺の休息が遠退いた瞬間だった…。明日も早いのに…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第四十二話「朝と昼と夜と」（後書き）

あれ？どうして、こうなった？
警報って何だ？どうして、こうなった？
どうしよう？また原作が遠のくわー…ｏｒｚ

まぁ…やってしまったものは仕方が無い。
見切り発車な感が否めないけど、やるしかない！

ではでは！またいつか！
感想＆ネタ＆それ以外！舞ってます！…もとい、待ってます！

第四十三話「侵入と困惑と初出撃？と」（前書き）

侵入者です！迎撃戦用意！！
みたいな展開を表現したかった。後悔はしているが反省はしてない。
では続きをどうぞ！

第四十三話「侵入と困惑と初出撃？と」

――クレイドル地下拠点司令室…。

Ｓｉｄｅ　アイリス

それは地下拠点にある執務室で高く積まれた書類と格闘をしている時のことだった。夜も更け半分に欠けた月が高く上る時刻に突然、地下基地への侵入を知らせる警報が全施設内に鳴り響いた。

自分は緊急事態につき、地下拠点の司令室に出来うる限りの手段を用いて急いで向かった。やがて見えてきた司令室の扉に駆け込み状況の報告を命じた。

「状況を！！」

「アイ・マム！監視カメラが捉えました！敵アンノウンは二番通路の比較的薄い壁面を破壊して侵入した模様です！」

二番通路！？クッ！あそこは通路を構築する時に誤って地盤に近いところを掘ってしまった場所ではないか！！後日に補強を計画していたのに…。何というタイミングの悪い時に侵入を許したものだ！！

いや！！後悔するよりも今はやることがある！！

「敵数はどうなっている！？侵入者の現在位置はどこか！？情報を

メインモニターに出せ！」

「メインモニターに情報、出します！」

司令室の奥の広い空間に立体映像で構築された各種情報と監視カメラの映像が映し出された。立体映像は地下拠点の詳細な構造図と赤く点滅している光点が複数。そして光点の示している部分をズームした映像。

赤い光点の他に青い光点が無数にある。これは味方の無人機と地下拠点担当に任じられている者達だ。青い光点が広く散らばっているのに対して侵入者を示す赤い光点は一塊になり一転突破を仕掛けているようだ。

味方の部隊は未だに電撃強襲をしている侵入者と接触できないでいる。やはり強襲戦と防衛戦では後者のほうが難しいものだ。

立体映像の隅に浮かんでいる空間モニターに解析情報があり、その一つに侵入者が進もうとしている場所の予想地点を割り出しているものがあった。

「現在、確認されている敵アンノウンの数は１０！それ以上は確認されていません！！敵アンノウン、尚も進行中！…あ、予測進路出ました！！これは…“世界樹”方面へ進行中です！！」

「なっ！？警備システムは何をしている！？無人機部隊を迎撃に当たらせろ！！警備担当者はどうした！？」

このままでは世界樹の地下近くに設置した魔力蒐集装置と大・小魔力カートリッジの生産ラインが被害を受けてしまう！いや、それ

よりもあんなところで戦闘に入って機器が破損でもしようものなら大変なことにッ…！！

あの場では世界樹から放出されている魔力を装置で高濃度に圧縮してカートリッジに封入して生産しているのだ。そのカートリッジが戦闘で破壊されたら地下拠点は…いやここ麻帆良は甚大な被害を受けてしまう！？

それだけは看過できないことだ。それに何より、ここには閣下が居られるのだ。何としても死守しなければならない！

「自動迎撃システムは稼働中！無人迎撃部隊は展開中…いえ！訂正します！無人迎撃部隊が敵アンノウンに接敵！」

「いいぞ！そのまま敵の動きを拘束しろ！増援と同時に敵アンノウンを包囲！こんなふざけたことをした奴等を捕獲しろ！！」

「イエス・マム！！無人迎撃部隊の各部隊に信号送ります！」

よし！このまま敵の動きを阻害して、その場に拘束している間に他味方部隊で退路を絶てる！侵攻予想ルートには味方部隊が展開済みだ。これでふざけたマネをした不届き者を捕獲できるな。

しかし、この施設に侵入してくるなど、どこの手の者だ？自分達には明確に敵対している組織や個人は居ないはず…。それにそういった者達は最優先で処理してきた。

処理方法だが暗殺はもちろん、軽いものでも記憶処理（マインドブレイカー）や洗脳処置（ブレインウォッシュ）、他にも事故死に見せかけたこともある。大抵は魔法薬による記憶操作なのだがな。

何にしても捕らえて尋問すれば良いだけのことだ。それで今回の失点を回復するとしよう…。

「…っ！司令代理！敵アンノウンは包囲突破を第一にしています！弾幕を張っても損害を気にすることなく…止まりません！！！」

「呆れた…まるで決死隊だな。隔壁を閉鎖して敵アンノウンの進路を限定しろ！五番倉庫へ誘導するんだ！世界樹へ行かせるな！！」

味方の被害をものともしないで我武者羅に突破するとは感心するべきか、呆れるべきなのか、わからないな…。ともかく自分達にとってはあまり好ましくない事態なのは間違いない、か…。

とりあえず拠点内の防護隔壁を閉じて物理的に誘導してカートリッジ生産区近くの五番倉庫に誘導するように指示を出したが…包囲網を強引に突破した侵入者のことだ。強引に隔壁を破壊して突破しないとも言えないから…不安だな。

それよりも敵の侵入から２０分以上が経つ。いい加減、敵固体情報の解析と分析が出来てもいい頃なのだがな。

「解析班！敵アンノウンの解析は、まだか！？」

「あと少しです！もう少し…もう少し…来たッ！解析結果、出ました！！」

「スクリーンに出せ！」

「イエス・マム！」

拠点の立体映像の横に解析された敵の固体情報が表示された。

そこに映し出されたモノは“人型の姿をした人ではないモノ”だった。身長２m強のやけにガタイのいい大男だった。そんな強面な男を模して作られている。それになぜか知らないが黒くて厳ついサングラスをしている。……なぜだ？

いや、しかし、この情報は以前に似たものをどこかで…？

「これは…自動人形（オート・マータ）か？……いや、それにしては、あの瞬発力は異常だった。…それにこれは機械化した部分が目立つ…」

この大男の姿をしたモノは自動人形（オート・マータ）に似ている。だが、ただの自動人形（オート・マータ）にしては珍しくも機械化した部分が多い。いや多過ぎるか？近代兵器やビームを装備しているのも気になる。それに…。

「魔力反応が無い……違う、低いのか？…っ！これは、そんな…まさか…まさか！そんな！？これは機械人形（マキナ・マータ）か！？」

機械人形（マキナ・マータ）…それは現在、閣下が研究開発中の代物だ。始めはただのゴーレム研究が発端だったようだが久しぶりに興が乗ったご様子で色々と手を変え、品を変え研究しているものだ。

機械人形（マキナ・マータ）は今ある無人機動兵器や無人偵察機（カブトムシ）（アカトンボ）のように集団戦を想定して作製されたものだ。事地上戦では他の無人兵器よりも高スペックを示している。

それに従来の虫型（インセクトタイプ）とは違い、完全に人型（ヒューマノイドタイプ）の姿をしているのが特徴だ。この姿だから汎用性が高く地上戦での高スペックを実現できる

のだ。

しかし、それはまだカタログスペック上のものだ。今は試作品が3機あるのみのはずなのだ。……それなのに侵入者は１０機もある。これの製作者は誰だ？いや、それよりもこれは機械人形（マキナ・マータ）の設計図が流失したとでも言うのか！？

「イエス・マム。司令代理の推測通り、これは司令が研究中の機械人形（マキナ・マータ）に似通った技術であると考えられます」

似通った？似通った、だと？それはつまりアレか？懸念した取り、こちらの技術が本格的に流出したかもしれないということか！？

「貴様は閣下の研究資料が流失した！そう言うのか！？クッ！！…閣下の所有物をあのような紛い物にされたッ…アノヨウナッ！！」

もし本当に閣下のお作りになった設計図や技術が流出したならば即時奪還、回収しなければならない！　そして！その愚者には然るべき制裁を与えなければならない！！絶対にだ！！クハッ！クハハハハッ！！

殺　シ　テ　ヤ　ル　ッ　！　！　！

「ククッ！クハハハハッ！！」

「司令代理！落ち着いてください！今は、この事態を収拾しなければなりません！！それに司令も、それを望んでおられるはずです！！」

「ッ！？…そう、だったな。すまない…あまりの怒りに我を忘れて

しまった…」

そうだ…。まだ本当に流出したのかがわからないのだった。これは解析班の推測だったのだな。それにアレは機械人形（マキナ・マータ）に似ているだけかもしれない。この情報資料は直接、閣下に確認してもらい判断を仰ぐことにしよう。

「いえ、私も司令代理に無礼な言葉を…。失礼をしました」

「かまわない。お蔭で冷静になれた。敵の目的はわかるか？」

「見たところ敵アンノウンも、まだ試作段階のようです。そしておそらく敵の目標は“出来るだけ多くの情報を収集すること”だと考えられます」

多くの情報を収集すること、か。アレは試作機…ということは実機の稼動データに始まり、試作された武装のデータ、連携に関する実働データ…他にもあらゆるデータを収集すること。つまりは…。

「“実戦データの収集”か…。試作機ならば道理だな」

「イエス・マム。敵は慎重で用心深く、そして……大胆です。私達相手にデータ収集をするのですから」

「はっはっはっ！そうだな！確かにそうだ！」

面白いことを言うじゃないか！慎重に深く静かに行動し自分達に気付かれること無く、用心深くも最適と思われる侵入場所を割り当てたこと、そして何よりも……自分達相手にケンカを売った、その大胆さ！

笑える！！哂える！！嗤えるぞ！！敵の愚かな行為にな！！可笑しくて、堪らない！！クハッ♪ハハハッ！……ふんっ、だが、それよりも可笑しく思うのは自分達の油断と慢心にだ！！！

敵対者が減ったことで油断した！！自分達に敵う者は居ないと考え慢心した！！！まったく、愚かなりしは我等也！！我等は愚者也！！チッ！自分自身に腹が立つ！！事前に排除することも可能だったろうに……いや、これは言い訳だな。

ククッ！クハハハッ！！……いいだろう。こうなった以上は生かしては帰さない…。例え、その身が傀儡だとしても奥に居る元凶を探し出して捻り潰して閣下へ献上してくれる。そうとなれば全部隊に指示を…。

「敵アンノウンが隔壁を破壊！侵攻を再開しましッ…司令代理！！」

「どうした！？報告をしろ！！」

何だというのだ！？指示を出そうとしたら緊急事態の形相をして声を張り上げた。それと自分が言うのもアレだが慌てるのは感心しないぞ？それと…報告は明確にしろ！！

「申し訳ありません！！ですが進路上に葵くん…司令の反応があります！！」

「な！何だとッ！？メインモニターに映像を出せ！！」

それは予想していなかった！！なぜ、閣下が！？き、危険は無いのだろうな！？まさか、お怪我をされたのでは！？ええい！！映像

はまだ出ないのか!?

「アイ・マム!!…監視カメラの映像、出ます!!」

モニターに映し出されたのは五番倉庫の広い空間だった。証明と元の遺跡内の明かりが照らす何も無い倉庫内の中心に敵を待ち構え立ちはだかるように存在する閣下の姿があった。

「…ッ!閣下…!!なぜ、そこに居られるのですか!?ハッ!?通信を…閣下に通信を繋げ!!…何をしている!?急げ!!」

閣下が危険区域に居ることに自分は思わず語気を荒げてしまった。だが閣下に通信が繋がっていないことを思い出し急いで通信を繋げるように通信士に命じた。閣下自身が現場に出ていることに驚いて呆けていた者達が自分の怒声に慌てて作業に入る。

「イ、イエス・マム!!…こちら司令室、応答願います!こちら司令室、応答…ッ!通信繋がりました!!」

「よし!こちらに回線をまわせ!!」

「アイ・マム!」

閣下との通信が繋がると回線を自分のほうへ回すように指示した。スピーカーに回しても場合によっては要らない混乱を招くことになるかもしれないからだ。必要ならば閣下がスピーカーに切り替えるように指示するだろうとも考える。

そして回線を回すように指示した瞬間、自分の前に空間モニターが映し出された。モニターには閣下の姿が映し出されている。

「閣下！！聞こえますか！？閣下！！？」

『～～～ッ。…アイリ？慌てて、どうしたの？』

「お怪我はありませんか！？ご無事なのですか！？ご無事ですね！？ご無事なのですよね！？」

『いや、大丈夫だから！落ち着こう！ね？…それで一体どうしたのさ？』

「――――ッ！？それは自分のセリフです！！閣下こそ、そんなところで何をしているのですかッ！！？」

普段ならばありえないことだが、この時に閣下を怒鳴ってしまったのは間違いではないと思うのだ。自分達に心配を掛けたのだから、これくらいは許されるだろう？無用に閣下が戦場に立つことなど無いのだからな。

『ぐぉぉ、耳に響くぅぅ…。その…警報が鳴ったでしょう？それでラミエルさんが面白そうなのが侵入したって言うから間近で観察してみようと誘われて…』

『なっ！！我が主、汚いぞ！？我は変な曲者が進入したとしか言っておらぬ！誘ったのは我が主ではないか！？』

『ああッ！？ラミエルさん！シーッ！シーッ！』

今のは……どういう、こと…なのです、か？……ねぇ？閣下？いえ、ここは敢えて葵君とお呼びしますね？葵君？君は何を考えてい

るのかな？自分から戦場に立つなんて危険なことをするなんて……。
皆が心配するでしょう？ねぇ？

それとラミエルの言ったことは聞こえましたよ？どういうことなのかな？お姉さん、その辺りをジックリ詳しく聞きたいんだけどなぁ？……本当にどうしてくれようか？この鉄屑（ラミエル）…。

本来なら一番近くに居る貴女が止めるべきでしょう？それを貴女は何なのかなぁ？どうして一緒になってそんなところに居るのかなぁ？……解体するぞ？この鉄屑女郎（ラミエル）？それはもう無残に悲惨に残酷に徹底的にヤるわよ？コラァ？

「――――……鉄屑（ラミエル）？……葵、君？」

『あッ！？いや！あの！これは！その……てへっ♪』

葵君……可愛いなぁ！！もう♪もう♪♪

「――――ッ！…ふぅぅ……ラミエル…」

『む？何だ？アイリスよ』

何だ？…じゃない、でしょう？何を自分は悪くないみたいな態度で居やがるのかなぁ？…焼くぞ？溶かすぞ？生ゴミの中にブチ込むぞ？オイ？……ああ、それとも私刑（リンチ）になりたいのかなぁ？

んんっ！それはともかく鉄屑（ラミエル）は何をしたのか、わかっていないのかなぁ？貴女は葵君を本来なら無用な危険に曝しているのよ？故に私が命じることは唯一（オンリー・ワン）つなのよ……。

「…何としても閣下の御身を死守しろ。いいな？自分の全権限を以って、これは厳命だ。…もし万が一！億が一！！閣下に傷を付け、てみ、ろ？ククッ！そ、そその時、は……クハ♪ククク、クハハハッ！！」

『ぜ、善処する…』

…この子は何を聞いていたのかなぁ？私が何を言ったのか、ちゃんと聞いていなかったのかなぁ？マジで焼却炉に生ゴミごとブチ込んで七日間、燃やし続けてやろうかなぁ？……これは活を入れる必要があるかなぁ。ククク♪クハッ♪クッハハハッ♪

「…すぅ――――温いッ！！！！！」

「「「『『ッ！？！？』』」」」

鉄屑（ラミエル）に活を入れたはずなのに……なぜ司令室の皆と葵君まで背筋を伸ばして気を付けの姿勢をしているのかなぁ？……何で皆はそんなに汗を垂れ流しにしているのかなぁ？

何で…いえ、今はそれよりも鉄屑（ラミエル）に再度厳命しなければならないかなぁ…。

「鉄屑（ラミエル）……自分は何と言った？聞こえていたよ、なぁ？あ〝あ〝んッ！？“死守しろ”と厳命したはず、だな！！？」

『ア、アイ・マム！！！必ず死守する！！！』

「二度は無い…いいな？」

『イ、イエス・マム…』

まったく…聞こえているなら最初からやらないとダメかなぁとお姉さんは思うのよね。だって、そうでしょう？なぜなら思わず…。

――捻リ潰シタクナルノダカラ……クスッ♪クスクスッ♪

あ、あぁ…あれ？意識が悪魔時代の黒い思考になっていたよう、な…？んんっ！！ともかく！自分の出来うることはしたような気がするので自分は気にしない！！あとは閣下に今、収集できた全情報を渡して少しでもサポートしなければならないな。

あと援軍も送らないと…。

「……閣下？聞いての通りです。無茶をなさらないでくださいね？それと、こちらで解析した敵情報はラミエルに送ります。いいですか？」

『イエス・マム！』

「は？…閣下？」

え？えッ？えーッ！？何で閣下が自分に最敬礼の姿勢をとっているのですか！？…はぅ！？これは、まさか、新手の…嫌がらせ！？自分は何か、閣下の気に障ることをしたのでしょうか！？

できることならいつも通りに優しくお話したいし接していただきたいのですが！自分は！！その辺り、どうなのでしょうか！！？

「か、閣下？あの…」

『い！いや！わかった！無茶はしない！大丈夫！ラミエルに守ってもらうから心配しないで！ね！？ラミエル！！』

『ここで我に振るのか！？～～～ッ！！先程も言った！必ず死守する、と！』

『ね！？アイリも、これで安心だ！！な！？』

え？いえ、あの、そうではなくてですね？いや、しかし、閣下の目には何やら恐怖が見て取れる…。これは…そうか！アレか！！未確認の敵を相手取ることに対する緊張なのですね！？その緊張を解すために自分をからかっただけなのですね！？

わかりました！このアイリス・Ｄ・スタニック！この場は閣下の意思を尊重し話しの流れに乗りましょう！！

「……わかりました。安心かどうかは置いておきますが…」

『あ！！侵入者が来たみたい！！それじゃね！！』

「閣下？閣下ッ！？閣下ーッ！！？」

あ、あれ？あれ！？どうしたことだ！これは！？閣下はなぜか慌てて通信を切られたぞ！？閣下が言っていた侵入者のマーカーは隔壁と突破後に迎撃部隊と交戦中。閣下の居る五番倉庫には接近していない。

あの慌てぶりはどうしたことだろうか？……やはり心配だ。ここは応援部隊を送るべきだろうか？いや、寧ろ自分が直接行くか？

この時の自分は割りと本気でそう考えていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリス

――地下拠点五番倉庫内…。

Ｓｉｄｅ　葵

今、俺が居るここは二番通路と世界樹の間にある五番倉庫だ。ここは世界樹の地下近くに設置してある魔力蒐集装置で作られた魔力カートリッジを一時保管することを目的に作られた場所だ。

そして今の倉庫内にカートリッジは一つも無い。一週間前に一定量に達したので運び出したばかりなのだ。マジでそれだけは良かったと思うよ。カートリッジが満載された空間で戦闘とかマジで勘弁だしね。

戦闘の余波で誘爆とか、してみ？地下施設だけではなく地上の麻帆良も跡形も無く吹き飛ぶよ…。本当に運び出したあとで良かったぁ…。侵入者はそんなこと知らないからねぇ…。だから余計な危険を省けてよかった。うん、マジで！

今回の侵入騒ぎで考えたんだけどさ？やっぱり、こういう危険なことは［工房］内で生産したほうが比較的安全かなって思ったんだ。確かに生産量は世界樹のほうが高いんだ。でも［工房］内なら生産

量は落ちるけど時間でそれはカバー…できるといいなぁ。

あー…それにしても、先程のアイリのプレッシャーは凄かったなぁ…。

「いやー、思わず通信を切っちゃったけどアイリ、凄く心配していたなぁ。…何だか悪いことした気分だ」

『うむ…。アレは…すごかった。通信越しなのにプレッシャーが…ガクブルガクブル』

「あはは…」

ラミエルさんには申し訳ないことをしたなぁと俺は思うわけですよ。だって俺の行動に付き合ったからアイリに怒られたわけだからさ。ラミエルさん、ごめんね。もし解体されそうになっても俺が助けるから許してね?

『……我が主よ?』

「……みなまで言うな。ラミエルに任せるよ」

言わなくてもわかっているよ。勝手な行動は取らないって約束するさ。今回は俺の行動にラミエルさんを巻き込んだからね。これ以上勝手したらアイリにもっと怒られてしまうからね。大人しくしておりますよ?ええ。

もう一度、ラミエルさん、ごめんね。

『…すまない。感謝する』

「気にするな……」

うん、気にしたら負けだよね？仮に俺でも先程のアイリの激怒に触れたら逆らえないような気がする。しかし、アイリは怒ると本当に怖いなぁ…。一度タガが外れると容赦がなくなるから怖いんだ。

特にプライベートの時の怒気はスゴイ…。つい先程の怒ったアイリも怖かったけど、それ以上だ。仕事の時は表情を出来るだけ能面にして感情を覚らせないようにして怒るから、まだ理性が働いているとわかるんだ。

でも、プライベートの時はその理性のタガが外れ易いようなんだよ。雰囲気は怒気を現しているのに表情は、すんばらしいほど笑顔なんだ…。怒気のオーラさえなければ綺麗なお姉さんで通るのに雰囲気がそれをブチ壊していたんだよな…。

あれは怖い…。怒られているのが俺じゃないと、わかっていても周囲の空気が瞬時に変わるんだ。気温が数度一気に下がって寒くもないのに悪寒が走ったり冷や汗が出たりするんだよ？何も知らなければ病気と勘違いするって。

だから俺はアイリがプライベートの時は極力怒らせないように注意しています♪……まだ死にたくないからね。

『我が主よ、ここで提案があるのだが、どうか？』

「…まずはその提案とやらを聞こうか。話しはそれからだ」

俺がアイリのことを思い出していたら考え事をしていたラミエルさんに声を掛けられた。機械音声の女性版ハスキーボイスで言われた言葉も声色も割りと真剣だった。

おふざけは無しなのか…。まぁとりあえず内容を話してもらわないと判断できないからサッサと話してごらんさい？トンデモ話で無ければお兄さん、ちゃんと聞くよ？……聞くだけの時も多々あるけどね？クスクスッ♪

それで何なのかね？

『うむ。アイリスは我が主に傷一つ付けるな、と言った。無論、言われずとも我もそうするつもりだ。だが……』

「だが？何…？」

『今回は絶対に失敗できぬのだ…』

「あー…アイリのプレッシャーすごかったもんねぇ」

あの剣幕じゃねぇ…。アイリの言葉通りに取ったと考えたら本当に俺に傷一つ付いたらもの凄い罰を与えそうだよなぁ。アイリのあの怒気というより狂気？っぽいオーラは出来るだけ振り撒かないでいてくれると嬉しいなぁ。主に俺の心臓に悪いからさ。

それで？絶対に失敗出来ないならラミエルさんは、どうするのかな？

『うむ。故に我は思考したのだ。“絶対の盾”が必要だと』

「盾？ＤＦや魔法障壁があるけど…」

Ｄフィールドはマジで便利だ。初めて使った時は科学で魔法を防げるかが不安だったけど結構余裕だったしね。それに対物対魔障壁は即時発動できる待機状態を維持している。俺は信じているよ？Ｄフィールド万能説をね。……物理攻撃には若干弱いけど。

それでもラミエルさんは不安なのか？大丈夫だよ。分解なんかさせないからさ。肩の力を抜こうよ？ね？……あ、肩ってどこだよ？という疑問はこの際、無視する方向で。

『否！それだけでは不十分だ！もし我が主に傷が付いてみろ？我はアイリスに解体処分されてしまう！それだけは…』

「いくらなんでも、アイリはそんなこと…」

『甘い！我が主は甘いですぞ！？アイリスのあの表情と声は……本気だった！本気でしたぞ…』

「…しないから大丈夫」と続けようとしたのにラミエルさんは少し被害妄想のように脅えている。半分冗談のようなものだろうから、気にしないほうがいいと思うんだけどね。

首から掛けて胸元にあるラミエルさんがプルプル震えているのをくすぐったく感じる。……この子まさか本気で脅えているんじゃなかろうな？本気と言っても半分は冗談なんだから大丈夫だろうに…。

もう仕方ないなぁ。俺は苦笑しながらラミエルさんの青い結晶体を優しく撫でて落ち着くように囁くように言った。

「あー、もう…。よしよし、大丈夫だから、な?俺が解体なんかさせないからさ。元気出そう?ね?」

『う、うむ。すまない。それで話しの続きだが……“プロテア”を覚えておるか?』

「……覚えているよ。忘れるはずが…無い!グスッ…」

そうか…今度は俺が泣く番なんだな?そんな悲しいことを思い出させるなんて酷いじゃないか!始動実験の時に一度乗っただけなんだぞ!?戦闘には一度も乗ったことが無い…というよりも乗れなかった。ラミエルさんの身体の中にあったからなぁ。

あれ?目から心の汗が…。雨でも降ってきたのかな?……ハハ、ここは地下でした。降るわけ無いや…。

『な、泣くでないぞ、我が主…。とにかく今回は“プロテア”を使うことを提案する』

「なに!?使えるなんて俺は聞いてないぞ!?」

えッ?何、それ!どういうこと!?……いつからだ?いつから使えるようになっていたんだ!?

俺は侵入者騒ぎそっちのけでラミエルさんを問い質すようにした。ラミエルさんは俺の驚きをわかっているのか、いないのか割と冷静に…そして何でも無いと言うように軽く話してくれた。

チッ!可愛さ余って憎さ百倍だな!ラミエルさんは!!でも、可

愛いから許すけどな！！可愛いは真理だからな…。

『何？言っていなかったか？…それはすまなかった。今年の1月に入ってから我が体内の胎動が止まったのだ。何か？と思い、念のために自己スキャンしたところプロテアの強化、改良、最適化、その他諸々が終わっていた、というわけだ』

おぅ！？俺の知らない事実がたった今、明かされた！？

「今年の1月！？半年以上前じゃないか！！……それなら、もっと“早く”に動かしたかった！模擬戦とかでもいいから“乗りたかった”よぉ」

『そんな我が主よ…。我に“乗りたい”などと、それも“早く”動かすなど…。ふふふ♪我が壊れてしまうではないか！やん♪やん♪』

「……ナンか違う気がする。色々違う気がする、けど…まぁいいや！それよりもプロテア出してよ！ラミエル！」

『やん♪我が主よ、そこは…ダメだ。ぁ…ふふふ♪だから早くしてはダメだと…あ、んんっ…ぃゃ♪』

ダメだ…。この子、早く何とかしないと……。

だからラミエルさん、くすぐったいんだってば。プルプル震えるのに加えて妙な発言と動きをしないでよ…。イカンな…数百年振りに変な気分になるかも。でも！男の子は我慢の子！！忍耐の子！！

「あー…何だろう？この微妙な疎外感は？はぁ…。すぅ…ラミエル！アテンションッ！！」

『ッ!!!Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ!!……あ?あれ?我は?あれ?』

「ラミエ～ル?プロテア、出・し・て?」

ちょっと威圧しちゃったけどごめんね、ラミエルさん。俺はどうしても愛機のプロテアに乗ってみたいのだ!

『む?あ、ああ。そうであったな。では…』

ラミエルさんが俺の傍を前方に少し離れて拡大してビクビク震えたかと思うとピタッと停止した。そのことに、あれ?と思った次の瞬間ラミエルさんの内側からメタルブルーの力強い腕が生えてきてビックリ…。

――ずる…ビチャビチャ…。

腕がもう一つ出てきてラミエルさんの中から這い出てきたのは１機の流線型をした重厚な機械の巨人。……て、思いっきりエヴァっぽくね?あの黒い球体の使途さんから出てくる初号機さんみたい…。こっちはラミエルさんだけど。

まぁそれはいいんだよ、それは…。そんなことよりも俺の機体だ!全高は変わらない。イキシア?よりもやや大きいくらいだ。見た目はカラー リングがメタルブルーになったくらいだ。

それでも全体的な細かい部分が違うのだ。初めて乗った時の記憶が鮮明に思い出されて目の前の、それと見比べてみるとよくわかる。

俺の機体には“翼”は無かった。これはリビエラの機工天翼（ウイング・マキナ）か？
俺の機体はもっと“スマート”な形状だった。よく見ると増加装甲のようで任意でパージできるようだ。

そして何よりも俺の機体は“変形機構”なんて無かった。ナニ、コレ？戦闘中に変形なんて悠長なことしていたら落されるだろうが…。これはアレかね？俺に死ねと言うのかね？形状を見てみると変形元は戦闘機のようだ…。

マク○スかよ……。パワー○ーダーを元にしてナデ○コ世界の技術と魔法技術を使用したのに、これは何だ？何でＶＦ系の変形型戦闘機なんだよ…。どこで間違えた？ラミエルさんを起動キーにしたからか？ちくせう…。

「ぉ、おお…それでも俺の、愛機だ。もの凄く久しぶりだ。……形が違うけどｏｒｚ」

『形？ああ、数年前から［格納庫］から少しずつ拝借していたからではないか？プロテアが部品を要求してくるので我も不思議に思っていたのだが…。こういうことだったとは思わなんだ！はっはっはっ！それよりも我が主よ？何をしておるのだ。早う乗らぬか』

いつの間にか元の３ｃｍほどの大きさに戻っていたラミエルさんが、そうほざいていた。何気に爆弾発言というか横領の自己申告を聞いた気がするのは気のせいだろうか…。

ア、ア、ア、アレはお前かーッ！？消えた資材を合計すると、かなりの量だった！…まさかラミエルさんだとは考えもしなかったわ！！

信じられるか？イキシア？の３機分の資材と部品が、だぞ！？それに何に使ったかと思えば「プロテアが要求してきた」だとぅ？機体の強化や発展には資材や部品が必要なのもわかるが正式な手続きを取ってもらいたかったものだな。

はぁ…。調査の件は解決したけど、これじゃあスッキリしないなぁ…。

「……まぁ、そうだな。それじゃ…よっと！…ん。ハッチ閉鎖！ラミエル！プロテア起動準備！」

『Ｒｏｇｅｒ．起動シーケンス…スタート…』

端末の窪みに機動キーとしてラミエルさんを填めると真っ暗だったコックピットの中は全周囲モニターに映し出される様々な情報と無数の数列が流れ出して瞬くように照らされる。

その明かりに浮かぶのは俺の嬉しそうな顔だろう。ようやく乗ることが出来るのだからこれくらい許して欲しい。

パイロットシートに身体を固定してＩＦＳ端末に左手を乗せ、右手で感触を確かめるように操縦桿を握って起動準備が整うのを待っている。まだか？まだか？初回起動は時間が掛かっていけないな、と思う。

『システムチェック開始…システム、オールグリーン。
…各種並列魔導量子回路、正常に稼働中。
高圧縮魔導機関、並びに連結式反重力機関の起動を確認。
両機関ともにエネルギー臨界へ…出力１０２％で安定。順調に稼働中。

両主機関より各部位へのエネルギー供給に問題無し。
武装チェック…全兵装、稼動状態にて待機中。
全兵装は格納領域にて待機状態へ移行。

プロテアの起動準備完了…起動するか？我が主よ』

来たッ！俺は即座にプロテアの起動をラミエルさんに命じた。早く、早く！男のロマンの一つは間違いなく巨大ロボットに乗って自由自在に動かすことだと俺は思うんだ。もう、待ちきれないね♪本当に！

『Ｒｏｇｅｒ．人型機動兵器プロテア起動します。…起動完了。…稼動状態に問題無し』

起動すると全周囲モニターに外の映像が映し出された。高度計や速度計などの計器も搭乗者に見易いようにモニターに配置されている。

「周辺のスキャン開始。敵の位置と接敵の予想時間を」

『短距離レーダーに複数の反応有り。個体数は１０。北北西より当機へ接近中…接敵まで１８０秒と予測』

「いいねぇ…。的が自分から来てくれるよ。くくくっくっくっ♪」

球体型レーダーの左上に赤い光点が１０個、表示された。次にそれはピピッという音がして自動で敵を固定して反応をロックした。これでレーダーの範囲外に離脱されたり妨害されたりされない限り居場所を補足することが出来る。

同時に周辺の地形も立体グラフで簡易表示される。ただ、ここは五番格納庫というだけあって、だだっ広い空間でしかない。あるのは運搬用のクレーンや移動用貨物トラックくらいのものだ。それに今それらは自動運転で邪魔にならない場所に移動させてある。

……話しは変わるんだけどね？なんだか、こういう折れ線で表示された地形の立体グラフが何かのゲームであったなぁ、なんてさ。…まぁ、これはこれで状況を見易いからいいんだけどね。

それとアイリから送られてきた情報にあるのは相手が機械人形（マキナ・マータ）である疑いがあるということだ。ただ俺は、それが俺の作製している機械人形（マキナ・マータ）ではないと断言できる。

いや、この場合“できる”と言うよりもアイリの情報で犯人に目星が付いたと言うかな。

考えてもみてほしい。この時代にあんなに高度な自立型ロボットがあるのはおかしいでしょう？今回のことは超・鈴音一派の犯行で決まりだ。まぁ先入観で決め付けているかもしれないけど後で今回の裏を取るから“今は”推測だな。

それでも、九分九厘、当たりだと確信している。それになぜこんなことをしたのかには心当たりがあるけど……今、その話しは後にして、とりあえず今は侵入者を排除することに集中しよう。

『油断するなよ？我が主。この機体の中に居れば我が主が怪我をすることは激減するとはいえ相手は敵だ。何をしてくるか、わかったものではないのだからな』

「わかってるよ。油断なんかするものか。…ただねぇ、これでこ

の拠点の破棄は決まったようなものだからお返しはしないと、って考えただけだよ」

はぁ今回の襲撃は実のところ、それが一番痛い。発見された隠れ家なんて百害あって一利無しだ。今ある地下拠点は破棄して場所を移す必要が出来た。それも早急にして迅速に、だ。あ、頭が痛い問題だなぁ…。

はぁ、数年掛けて建設した地下拠点が数年と経たずに破棄することになったんだから、遣る瀬無い気持ちにさせられるのは仕方ないと思う。

まぁ幸いにも各種カートリッジの生産は建設前から生産されていたから数は必要十分確保できたからいいけどね。……ただ、それでも生産拠点を一つ潰されたのは痛い問題だ。んー…急ぎではないけど代わりを用意しておいても損は無いだろうか。

ああ、そうだ。これを機に月の拠点プラントにてカートリッジの生産ラインも確立するか。

…お？これって案外、いいアイデアじゃないか？月の魔力は満ち欠けで上限下限するけど膨大な魔力という点では世界樹をも凌ぐほどだ。あー…ただ“拡散する魔力を上手く集約できれば”、という制限はあるがな。

くくく♪いや！俺の保有する技術力ならやれる！！月に魔力芯を打ち込めば常時安定的な魔力を半永久的に確保できる！……はずだ。実験したこと無いからこれに関しては確信が無い。

侵入者を排除したら早速、月に居るアン達に指示して実験しても

らおう。それで期待通りの成果が出たならばカートリッジの生産ラインを確立しよう。うん、そうしよう。

『敵が何であれ、事が露見したのだ。それは諦めるしかないな。下手に維持しては要らぬ危険しかもたらさぬよ』

「…そうだな。とりあえず機材を運び出して…うん、勿体無いけど後腐れ無いようにナノマシン処理して完全破棄しよう」

早く終わらせてアン達に連絡を取らないとならないな。……地球への帰還が延期になると言ったら彼女達は不満に思うかもしれないなぁ。……今度の家族サービスは彼女達を少し優先しよう。うん、それがいいような気がする。

『それがいい。……来たぞ』

「こんなケンカ売ってきやがって……返り討ちにしてやる！！」

俺がこんな苦労をする羽目になったのもこいつ等のせいだ。せめて俺の八つ当たりという名の暴力を一身に受け止める的になってもらおう。なに、お前達の主人にも然るべき時に返礼をさせてもらうさ。安心して逝くがいい…！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第四十三話「侵入と困惑と初出撃？と」（後書き）

あれ？これはどういうことだろうか？
今回で侵入者有り、迎撃戦有り、葵の出撃有り、勝利して試合終了のはずだったのに…。

……どうして、こうなった？

とりあえず次回で終わらせてみよう。
自信無いけどな！！それでもヤルしかない！！
意見＆感想は随時募集しています！では！

第四十四話「未来人？と防衛戦とお説教？と」（前書き）

今話は続きですな。遅れて申し訳ないです。

さて…とある感想でネタが提供されたので少し構想中です。
やや変更点はありますが、いつか上手く出来たらと考えてます。

ではでは！

第四十四話「未来人？と防衛戦とお説教？と」

――麻帆良学園都市の、とある地下…。

Ｓｉｄｅ　？？？

突然だが超・鈴音は薄暗い研究室のような部屋で困惑していた。機械の工作台や何かに使う大きな用途不明な機械の塊が乱雑に部屋の隅にまとめられてある。そんな部屋で１人の少女は目を見開いていた。

彼女が困惑し始めた時と理由は偏に目の前のモニターに送られてくる映像を見てからだ。そこに映し出されたものは遺跡と木の根…そして大規模な工場のような機械郡だった。

本来の“歴史”なら、学園都市の地下には昔の魔法使い達が建築した、古いが造りのしっかりとした遺跡と世界樹の丈夫で巨大な根が縦横無尽に張り巡らされているだけのものだった。そう、その“はず”だったのだ。

彼女はもう一度、画面を凝視して注意深く観察する。しかし、映し出される映像は変わらない。いや、撮影者が移動しているので変わらないわけではないが、それは超・鈴音にとってはどうでもいいことだ。

彼女の興味は映し出された中にある機械郡にあるのだから…。

「どういうことネ？これは…」

薄暗い研究室に彼女の言葉に答えるものは居ない。数時間前までは部屋にもう1人居たのだが今回の調査のために2人で10体の“T-ANK-α1（プロトタイプ田中）”を数日間、時間をやり繰りしながら徹夜で用意したために今は仮眠室で夢の中だ。

「……どういうことネ？」

返事の無いことは、わかっている。わかっていても彼女は言葉にしないと困惑から抜け出せないとでも言うように口にするのだ。

「こんなモノ私は“知らない”ヨ…。一体、“歴史”に何があたネ…？」

彼女が言う“歴史”とは文字通りの意味だ。彼女は“知っている”のだ。無数に存在する未来の可能性の一つを…。超・鈴音はそんな未来の一つからこの時代の麻帆良学園都市に降り立ったのだ。

近い将来に起こる悲劇……そう、どこにでもある悲劇を回避するために彼女は物理的な距離どころか時空間を跳躍して現代に来たのだ。その覚悟は生半なものではないだろう。

「ッ！？」

モニターに映るモノに変化があった。そこにあるモノは機械の昆虫と言えばいいのだろうか？足は6本あり、主脚走行するものと飛行するものがあり、頭部から大きく突き出た角は鋭利な剣か突撃槍。形はカブトムシを模したものと思われる。

機械の昆虫が群れをなし、１０体のＴ‐ＡＮＫ‐α１を先へは行かせまいと言うように隊列を組み迎撃準備をした。画面には、まだ遠くてハッキリしないが、機械昆虫には銃器も取り付けられているようだ。黒光りする物が向けられていたのが見える。

「これは“何か”を護っているのカ？…一体、これらが“何”を護っているのカ、気になるネ」

彼女は困惑から若干だが立ち直ったようだ。目の前の端末に手を乗せて素早くキーを打ち込んで行く。端末に打ち込む内容はＴ‐ＡＮＫ‐α１への命令変更だ。ただの調査作業から“強行偵察任務”へのシフト…。

Ｔ‐ＡＮＫ‐α１は命令を受信。それを本当に実行するのかと“Ｙ／Ｎ”の確認メッセージがポツンと出てきた。彼女は迷い無く“Ｙ”のキーを押した。その選択が後の間違いへ繋がるとも知らずに……。

命令を変更されたＴ‐ＡＮＫ‐α１は即座に実行に移った。機体内部に格納された武装を展開したのだ。あるモノは小型のガトリングガンを装備し、あるモノは小型ミサイルポッドを背面に展開しあるモノは試作のビーム兵器を装備する。

他にもそれぞれに試作された兵器を展開、装備されていく。準備の整った１０体のＴ‐ＡＮＫ‐α１は通路の前方に布陣する機械昆虫に正面から相対し、そして……。

「イケ、プロトタイプ田中」

……彼女の意思を受けたＴ‐ＡＮＫ‐α１は機械昆虫の群れに突撃を開始した。

最初の接敵の攻防は一進一退の状態を映しているものだった。だが戦況は数に有利なはずの機械昆虫が、たった１０体のＴ‐ＡＮＫ‐α１に押されていた。

機械昆虫側は防衛戦のために担当場所を動けずにいる。本来、機械昆虫は空戦や宙戦などの広い場所で機動戦術を主として設計されたものであり、狭い通路などの、ましてや防衛戦には不向きなのだ。

一方のＴ‐ＡＮＫ‐α１側は地下調査のために突貫で作られたプロトタイプとはいえ地上戦と地下空洞内を重視したものだ。敵地なので地理的には不利だが自己の性能を活かせる分、地形的有利があるのだ。

何よりもＴ‐ＡＮＫ‐α１は攻める側だ。そしてＴ‐ＡＮＫ‐α１は強行偵察を任務として与えられた。損害を気にすることなく愚直に前進して包囲網を一点突破して施設の奥へと進撃して情報を収集、自らの造物主へ送られて行く。

今、奇跡的にもＴ‐ＡＮＫ‐α１は全機、損傷はあるが行動不能にまでは陥ることは無かった。激しい銃痕は全機に刻まれている。腕の左右のどちらかが損失しているものもある。しかし行動に支障が無い限り、動ける限りは問題無い。

進路を遮るように隔壁が降りるがＴ‐ＡＮＫ‐α１は閉ざされた

進路は無視して開いている進路を奥へ目指して進む。

モニターから目を離さずに観察していた彼女は送られてくる情報を見直し記録していく。そして、フと思考の端に“何か”が引っ掛かったように感じた。もう一度、映像と情報を見比べて再度思考し直した。

「これは…誘い込まれて、いるカ?……不味いかナ」

再び端末に彼女は指を走らせて指令を変更した。命令内容は“隔壁を破壊してでも強引に奥を目指すこと”だ。まさに一点突破な命令だった。力技なのが否めない命令だが単純故に、それは効果的だった。

T‐ANK‐α1は造物主から送られてきた命令に愚直に従った。今まさに降りてくる隔壁を試作ビームで焼き貫いて進路を確保したのだ。

だが、その行動は遅過ぎた。奥へ進んだ先にはただただ広い格納庫と言わんばかりの空間が広がっていたのだ。そこにはT‐ANK‐α1を待っていたと思われるメタルブルーに塗装され重厚な姿をし、力強く翼を広げた機械の巨人。

「こ、これは……パワードスーツ、なのカ?まさか、この時代にあ

りえないヨ！」

モニターに映し出されたモノを見て超・鈴音は愕然とした。

パワードスーツ…それは未来で使用された軍事用の特殊戦闘装甲服。服とは言っても前高８～１０ｍもする破壊の力を持った機械の塊だ。その力は強靭無比、戦闘機並みに空中を駆け、様々な武装を使いこなすことが出来るので戦艦の砲撃以上の打撃力を持つ。

彼女自身も軍用のパワーアシストスーツを所有している。しかし、パワーアシストスーツは所詮、個人戦闘装備。要は未来で規格化された特殊歩兵用装備と変わらない。もちろん彼女が所有しているものは自身で極限までチュ―ンしてある。

それでもパワードスーツよりも段違いで劣るのだ。言ってしまえばパワードスーツは戦車や戦闘機、もっと言ってしまえば戦艦なのだ。ここまで言えばわかるだろう。戦闘力が違い過ぎるのだ。

モニターに映し出されたものが彼女の想像したとおりの物だった場合、これは戦術的に見て脅威以外の何ものでもない。

無論、彼女の推測は違う。実際は葵が造り、ラミエルの中で長い間、自己進化したプロテアはそれ以上のスペックを保有した存在だ。今なら某スーパーロボットともガチの勝負を余裕で繰り広げられるだろう。

そんな存在とはモニターに映し出された機体を見ても今の彼女は知らないことだ。

そして考える。彼女の今後の計画に若干…必要ならば大幅な修正

をする必要性が出てくるかもしれないのだ。

「――――……ッ」

彼女は今、初めて選択を間違えたかもしれないと後悔した。

「好奇心は猫をも殺す、カ…。でも、やてしまたものは仕方ないヨ。最早、残された手段は出来る限り多くの情報を引き摺り出すしか無いネ！」

漠然と纏わり付く不安を振り切るように勢い良く端末からＴ‐ＡＮＫ‐α１に指令を出した。命令内容は…。

“突撃！突撃！！突撃！！！情報を出来うる手段、全てを用いて収集せよ！！”

彼女の…超・鈴音の戦いは不本意ながら今始まった……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

――五番格納庫内…。

Ｓｉｄｅ　葵

さて…五番格納庫内へ入ってきた不届きな侵入者。……そのはずなんだが何だかボロくないか？身体中に銃痕が刻まれているし酷い

ものは腕が損失しているのや頭部の一部が欠損している。それにアレ見覚えがあるような…。

何だろう?この気持ち…。ついさっきまでは侵入者を叩き潰してやるなんて考えていたのに、目の前に整列して前進してくるボロボロな姿をしたのを見ると…その、ええと、アレだよ、アレ。そう、ヤル気が萎えるんだ。

ん?哀れに見えるんじゃないか?ってか?……何、言っているの?家族や俺の製作物なら壊れた物は助けようとか、こんなに働いてくれてありがとうと感謝もするだろうけどさ。他人の作品には敬意は感じても愛着は…あまり感じないかな。

「はぁ…まぁともかくアレを排除するか」

『うむ。…些か我等の相手には不足なのが否めぬが仕方あるまい』

「言うな。何であれ相手は戦う態度を見せているんだ。その発言は相手が傀儡とはいえ己自身の誇りを貶める行為になるかもしれないよ?」

『むぅ…。そうだな、すまぬ。許すが良いぞ』

「俺に謝ってどうするんだよ。まぁ謝罪の気持ちがあるなら本気で相手してやるのが、せめてもの手向けになるんじゃないか?」

とはいえ…こんな地下の閉鎖空間では荷電粒子砲はもちろん、大規模な爆発物も使えない。自爆して生き埋めなんて勘弁だ。今、把握している兵装だと…近接武器や小型砲…それにレーザー砲などが使えるくらいか。

相手は人型だが大きさは精々が２ｍ弱…。攻撃されても装甲に傷が付くくらいだろう……と、思う。何気に今の自分の愛機のスペックを把握出来ていないのが痛いなぁ。どれだけ無茶が出来るのかがわからない。

仕方ないから、その辺りのことは確かめながらいくしかない。

『うむ！任せよ！……ふむ、向こうも動くようだぞ？上から指令が下ったようだな』

隊列を崩し散開した。ザッと見て前衛５体と後衛５体に役割を分けて戦闘を仕掛けてくるようだ。スタンダードな陣形で全機が地面を、その機械の足で鋭い瞬発力を活かせて駆け抜けてくる。

なかなか素早いじゃないか…。

「くくくっ！今、撤退するなら未だしも尚攻めて来るか…！誰にケンカを売ったのか、教授してやろう！！…行くぞ！！」

『Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ！！』

プロテアの動力を一気に戦闘出力へ上げ機体のテンションを上昇させる。俺の操縦するプロテアもスラスターに力強い推進力を発生させて前方の侵入者に向かって低空を飛び翔る。見る間に侵入者との距離が縮む早さだった。

「落ちろッ！！」

先制攻撃で手に持つ光学式突撃砲（レーザーライフル）で先頭を走る侵入者に狙いを定

めて引き金を引く。その一撃は呆気無い程に1体を撃破した。

俺は、この時プロテアに搭乗して初めての戦果に舞い上がって、後の機動を忘れて立ち止まってしまった。まぁそれが、いけなかったんだな。一斉にオックオン警報が情報画面面に流れるように映し出された。

『Ｗａｒｎｉｎｇ！（警告！）Ｗａｒｎｉｎｇ！（警告！）Ｗａｒｎｉｎｇ！（警告！）』

「ッ！？マズッ！！」

初めての戦果で舞い上がっていたことで油断したんだ。周囲から銃撃が、小型ミサイルが、ロケット砲が、ビームなんかもが全力で俺目掛けて飛んでくるんだ。気が付いた時は遅くて回避出来ない距離だった。

『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！（緊急！）Ｄｅｆｅｎｓｅ！（防御！）』

「ぐぅ！！試作品の割りに素早いじゃないか！！このッ！！」

ラミエルがプロテアを緊急防御の姿勢にしてDフィールドを展開。更に背面に搭載された6機の機工天翼（ウイング・マキナ）が敵機迎撃のためにラミエルの指示にしたがってレーザーを発射。これで3機に命中、その内の1機を撃破した。

『残敵数8ッ！！内訳前衛4後衛4！！近接戦用意！！後衛は我が牽制する！！』

「任せた！さぁ！来い！！お前らの相手は俺だ！！」

ラミエルは引き続き機工天翼を巧みに計算して操り敵後衛の４機を追い詰めて行く。俺はプロテアの正面に敵前衛を見据えて光学式突撃砲を構え機体を走らせる。

『…後衛を狙い打つ！Ｆｉｒｅ！！（発射！！）』

「チィィッ！！ちょこまかと動きやがって！！――――ッ！そこだ！！」

ラミエルと俺がほぼ同時にロックオンカーソルにそれぞれの敵に狙いを定めると砲撃を開始した。俺は２機に命中し１機を撃破。ラミエルは４機に命中、そして同じく１機を撃破した。

「良し！次ッ！！――――ぐぅ！？」

『怯むな！損傷ダメージは皆無だ！！』

敵は僚機を撃破されてもお構い無しに攻める手を緩める気配が無い。もしかしたら撤退条件が設定されてないのだろうか？この味方の損害でも撤退しないところを見ると、そうとしか考えられない…。

「わかってるッ！はぁぁああ！！」

『ならば良い！！――――！！そこで止まったのが貴様の最期だ！！Ｆｉｒｅ！（発射！）』

ラミエルは俺が光学式突撃砲で砲撃して動きを牽制した侵入者の背後に機工天翼を展開し、レーザーの雨にて蜂の巣にした。これでまた１機を撃破したことになる。

……と思ったのだが、しぶとくもあの砲撃の中を生き残ったらしい。緩慢な動きながらも愚直にロケット砲を目の前に居るプロテアへ向けてくる。しかし、侵入者の居るそこは俺の射程内だ。直ぐに俺は光学式突撃砲を向けて引き金を引く。

「そ・こ・だーッ！！」

『残敵数５ッ！！』

「あと半数！！」

先程のしぶとかった1体を今度こそ撃破した。残りは半数と俺は確認して次の行動に移ろうとした。情報画面には侵入者を示す赤い光点が５つ点滅している。一番近いのは、と一瞬思案する。

だが意外と負けず嫌いなラミエルが残敵数の変更を宣言するように機工天翼で1体の侵入者の四方を囲み、出力を上げた４本のレーザーで容赦無く鉄屑に返していた。

『いや、これで残敵数４だッ！！』

「ラミエル、ナイス！！俺も負けていられないな！！」

これで俺が撃破したのが3体でラミエルも3体か…。残った４体もこれまでの戦闘行為で正直ボロボロだ。いつ止まっても不思議ではないと思う。

『ふふんっ♪どうだ？惚れ直したか！』

「……いや、元から惚れてないし」

この子はこんな時に何を言っているんだろうね？今は戦闘行為の真最中なんだけどなぁ…。それに俺の性癖は前にも言ったように青い結晶体に欲情するようなものはないと断言してある。だいたい俺を欲情させたければ…。

ボインなお姉さんを連れて来い！！

…というものだ。……いや、ごめん。訂正がある。可愛ければ年齢は…問うけど！可愛ければ少しくらいはピクッと食指は動くかもしれない…。……俺は何をカミングアウトしているんだ？鬱だわー…。

『テンション低ッ！？我が主よ！ここは嘘でも惚れていると言うところではないか！？』

「えー…嘘でもいいの？」

『……やだ』

ラミエル…お前、“ゃだ”って二文字で否定か？先程までの勢いとハイテンションはどうしたんだ？まぁ普段の不遜な態度のラミエルもいいけど、しおらしい態度のラミエルもいいね！！キャラ性に少しクラッて来たよ！

キャラだけだけどな！！これが人型だったなら危なかったよ！！

……ミリーやオリビエ達みたいに専用に調整した偽体を用意すれ

ば擬似的に人の身体を再現できるけど。……やる予定は無いな。

ラミエルは今の姿だからラミエルなんだからな！！

「素直でよろしい。……まぁラミエルのことは好きだから気にするな。な？」

『我が主……♪♪♪』

ラミエルは嬉しそうな声で俺のことを呼んだ。そう…嬉しそうにね。しかも感激しているんじゃないか？こいつは…。何と言うか…大げさだと思うんだよなぁ。

それにしても、しまったなぁ……。つい余計な一言を言ってしまった。いや、嘘じゃないよ？ラミエルのことは好きだからね。ただ面と向かって言うのは恥ずかしいものがあるじゃないか。ねぇ？

「んんっ！まだ戦闘の途中だ！まだイケるな？」

『誰に言っている！今の我等を止められる者など存在しないわ！！』

ラミエルさん…。律儀にも侵入者は俺達の話している間、待っていてくれたようだよ。密集して俺達を警戒しているみたいだ。

まぁ態々待っていたんじゃなくて本当のところは一度後退して態勢を立てなしていたというところだろう。既に当初の半数以上が堕ちているのだから警戒してくるのは当たり前といえば当たり前なんだけどね。

俺にとっては相手にどんな思惑があったのか知らないけど待って

いてくれたんだから結果的には良しかな、うん。

ＩＦＳ端末に強く意識を送り込みプロテアのスラスターを噴かせる。スラスターから噴き出るエネルギーは力強く、そして大きい。枷を外せばすぐさま侵入者へ向かって鋭い砲弾の如く飛び出すだろう。

「いい返事だ！！くくっくはーっはっはっはっはッ！突撃だ！！」

『あーっはっはっはっはっ！！踊れ！踊れ！！踊れ！！！あーっはっはっはっはっ！！』

スラスターから溢れ出るエネルギー。止めている、その枷をＩＦＳ端末に意思を注ぎ込むことで外した。瞬間。一気に加速が始まりプロテアはスラスターから噴き出るエネルギーの燐光を残して低空を滑るように翔る。

この時は気分が高揚してくる！！体内を駆け巡るナノマシンが与えられた役目を全うしようとする！ああ！ＩＦＳは使用する時に戦闘本能が刺激されて好戦的になるというけど本当かもしれないな…なんて並列思考の片隅で考えてしまう。

ＩＦＳを始め、人体にナノマシンを注入すると少なからず気分が高揚するものだ。俺には魔法使用時の補助、強化のナノマシンも身体の中を流れている。使用する時には高揚感が付いて回る。

……むぅ、これは今後のために改善するべきかな？

俺が直接戦うことなんて、ここ数十年が多いくらいで数百年単位では殆ど無かったからなぁ…。気にしていなかったんだよ。あー…でも、戦闘するなら適度な高揚は気分的にいいかもしれないし…。

でも、これってズバリ言うとドーピングみたいなものなんだよなぁ…。

んー…でもまぁ今までも特に不都合があるわけじゃないからいいか。不都合が起きたら、その都度、調整していけばいいのだから。

侵入者はプロテアの加速が想定外の速度だったために対応が遅れている。そして、その隙は、この場合、決定的だった。プロテアの移動が速いからか侵入者の動きが相対的に見ていると遅く見える。武装を構える姿が酷く鈍い…。

俺の搭乗するプロテアは右手に光学式突撃砲を構えて牽制射撃をして距離を詰める。腰部装甲に付属されている超振動特殊精霊鋼剣（トウハンドソード）の両手剣を左手に持った変則的な体勢で斬り付ける。

「遅い！！…ふんっ！これで残りは3だッ！！」

斬り付けた侵入者が爆発したのを見て撃破したことを確認した俺は次のターゲットを探した。今ので撃破したのが4体目だ。ラミエルより一歩リード！あと3体！レーダーで、その内の1体を確認して右後方へ向いた時に侵入者が視界に入った！

しかし、その侵入者はラミエルが操る6機の機工天翼により周囲を囲まれて逃げ場がなくなる一歩手前だった。そして、それがいつまでも続くわけも無く次の瞬間には六条の光り輝くレーザーが侵入者を貫いて撃破した。

『残敵数2ッ！！』

ラミエルも4体目を撃破して俺の撃破数に並んでいた。残りは2体…。ここで一気に2体を片付けたいところだ。別に賭けをしているわけでもないし、数多く倒したほうがエライというわけではないけど、ここまで来たらラミエルに勝ちたいと思うんだ。

だって俺は臆病者だけど負けず嫌いなんだからな。

勝ちたい…。そう思うから俺はある意味、安全の確保されたプロテアを操縦して侵入者を倒すんだ。レーダーに表示を固定された1体へ光学式突撃砲の銃口を向けて無造作に引き金を引いて蜂の巣にした。

「これであと1体ッ！！」

『最後は我が貰おう！！』

「あッ！？汚ねッ！！」

俺が言い終わる前にラミエルは機工天翼を最後の侵入者へ向けて凄まじい速さで襲い掛からせる。俺も負けじと光学式突撃砲を乱射して侵入者の逃げる足を牽制しながら徐々に射線を狭めて確実に撃破しようとした。

「『これで!!ラストッ!!』」

そして撃ち放たれた俺とラミエルのレーザーが同時に最後の侵入者を貫いて撃破したのだ。最後の1体は俺かラミエルのどちらが落したのか判断がつかないから引き分けにするとして……。

ふふんっ♪これは俺の勝ちだろう?俺は5体を撃破した。ラミエルは4体で最後のは引き分けの1体だからな。まぁ勝ったからと言ってどうということは無いんだけどね?何と言うか…こういうのは気分の問題じゃないか。な?

『Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ.』

「一応、大きな損害は無かったな」

うむぅー…?最初に俺がしくじった時に全力攻撃されたのに損傷らしい損傷が無いとは…この機体ってエライ丈夫だなぁ…。

一応、全力攻撃の始まる瞬間にラミエルさんが咄嗟にプロテアを緊急防御の姿勢にしてくれた。それもあるけど当然Ｄフィールドも張られていた。お蔭で俺はピンピンしていられるというものだ。

本当に思うんだけどさ。Ｄフィールドは、やっぱり万能なんじゃなかろうか?確かに物理攻撃にはやや弱いけど、それはＤＦ発生装置の改良と供給されるエネルギーの出力次第でフィールド強度を上げることが出きる。ほら?万能じゃね?

あれ?何か忘れているような?うーん?……

……あ、思い出した…。

「ねぇ？ラミエル。……多分だけど、この後アイリから“お話し”がある気がしてならないんだ」

『言うな、我が主！下手に言葉にすると実げ…』

ラミエルさんが必死になって否定しようとしていたら“ピーッ、ピーッ”と通信があることを知らせるアラーム音が鳴り響いた。左手首につけているコミュニケに目を向けて送信者を確認してみた。

……なんとなく誰からかはわかるけどね？一応の確認だ。それで案の定、相手は…。

「……アイリからだ」

『クッ！我が主のせいだぞ！！』

「なっ！？俺のせいかよ！？」

『そうではないか！？我が主が変なことを言うからだ！！』

「か、関係無いだろ！？そんなことは！！」

何この子！？もの凄い取り乱しようなんですけど！！そんなにアイリの“お話し”がイヤなのか！？別に壊れるわけじゃないんだか

ら気にしなくてもいいじゃないか！！ちょっと擬似精神回路に幾つかエラーが発生するだけだよ！…多分な！！

そこからはお互いに言い合うことになった。その一部が以下の通りだ…。

『関係ならある！』「何だよ、それ！？」『因果関係だ！』「はぁ！？」『我が主の言葉を切欠にして、この事態に…！』「ちょっ！？おまっ！待てよ！！」『待たぬ！良いか！？そもそも我が主は…！！』「だから待てって！！」『そもそも我が主は自分の力を…！！』「だ・か・ら・！本当に待てってば！！」『ええい！何だ！？』「さっきからアイリが通信先で待っているの！！」『……なぜ、それを早く言わないか！？』「言おうとしただろうが！？」『しただけだろう？！言い切らぬか！』「お前のせいだろうが！？」『何を！？』「何だよ！！」

以上のようなやり取りが３０分も続いたんだ。その間中、ずっとアイリは通信待ちをしていたんだな、これがさ。もう、俺とラミエルさんは戦々恐々しながらアイリの通信をオンにして相対しましたよ。

空中に映し出された通信画面には…。

『……終わりましたか？』

「は、はい…」『う、うむ…』

ものっそい笑顔のアイリが映し出されてましたぁ……。意味も無くチビりそうになったよ。メッサ怖かったです。画面越しのはずなのにプレッシャーが半端無いんだよ？因みに圧し掛かるプレッシャ

ーの割合は６：４でラミエルさんのほうが重い。

多分だけどアイリが怒っているのはラミエルさんが俺の護衛兼武具なのに危険な場所へ行こうとする俺を止めようとせずにいたことだろう。まぁそれだけではなく、ラミエルさんも、ただ追従したことが更にアイリの怒りに触れたんだと思う…。

ラミエルさん…マジでごめんなさい。怒られて回路に支障を来たすようになったなら付っきりで修理と看病してあげるから許してね…。

『……はぁ、お説教は後にしますから即時帰還してください。地下拠点の撤収も既に開始されていますので作業に撤き込まれないように気を付けて下さい。……わかりましたね？』

「『イエス・マム！』」

でも、今は説教をしている時間的な余裕は無いのも事実だ。アイリも司令代理を任せられるだけあって指揮官として判断してくれたのか後回しにしてくれた。俺達が言い合いをしている間に作業も開始されていたらしい。

……何？問題の先送りじゃないのか？だと？

断じて違う！地下拠点が発見された以上は速やかに撤収しなければならないんだ！余計なことをしている時間は無い！……因みに俺とラミエルさんの不毛な言い争いに３０分以上使ったことには触れないでくれ。マジで時間が無いから…。

『最後に……閣下？』

「な、何かな？」

お説教はイヤだなぁ…なんて考えていたらアイリに名指しされました…。この時間の無い時に態々ね。

……俺が何をした？……今回、勝手に戦闘を行ったことか？それとも割と独断で月プラントの建設に踏み切ったことかな？もしかして、機械人形（マキナ・マータ）作製で趣味に走りかけたこと？それとも…それとも…！

うわー…思い当たることが多過ぎて……逆に、わからない！？何？俺は何を言われるのかね！？い、今更、言われても変更が出来ないことも数多くあるんですけど！？ガクブルガクブル…！

そんな風に表面上はシレッとして取り繕っていても内心では不安で取り乱していた。それなのに画面上のアイリは先程までの“すんばらしい笑顔”がスッと崩れて今度は泣きそうな笑顔になっていたんだ……。

『心配、したのですよ？次からは、このようなことが無いように、してくだ、さい…グスッ。……いい、ですね？』

「……うん、ごめん。反省している。もうしないよ」

アイリの、この表情を見たら、心配掛けたなぁと思うとね？何だか、くずぐったいような恥ずかしいような、何とも言えない気持ちにさせるものだった。

いやー、心配掛けてごめんなさい。

『何を笑っているのですか？きちんと反省してください』

ん？いつの間にか俺は笑っていたのか？

ははは、そうか。うん、不謹慎だけど、やっぱり家族に心配してもらえるのは嬉しいものだね。気持ちがホッとするんだよね。暖かいなぁ♪

「うん、本当にごめんね？それと…ありがとう」

『も、もう！……知りません！』

画面の向こうのアイリが顔を真っ赤にしたと思ったらコミュニケの通信がブツリッと音を立てて切られた。

何だよ？素直に謝ったのに…。俺、何かアイリの気に障ることをしたのか？……え？何？俺、アイリの機嫌を損ねたの！？えッ？俺、死ぬの！？主に“お説教地獄”とかで！！あー…マジで鬱だ。

今日の教訓は“アイリを怒らせるな”だな、と考えた俺は悪くないと思いたい…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第四十四話「未来人？と防衛戦とお説教？と」（後書き）

葵の戦闘は最後が締まらないなぁと作者が思う今日この頃…。
文才が欲しいとこういう時は思いますな。
シリアスな展開って作者は長続きしないようなのですよ…。
まぁこの作品は基本方針が”のほほん”なのですけどね♪

では！また次回お会いしましょう！チャオッ！

ＰＳ．モンハンに憑かれた作者がここに…。皆さんはどうでしょう？

第四十五話「月と家族と仲直り？と」（前書き）

ハンターランク５になってからなかなか進まない…。
お金が貯まらないのよ…ｏｒｚモンハンは武具でお金が掛かるからね。
気晴らしに作品を書いていたら、なぜか、こんなに多くなってしまった…。
では！続きをどうぞ！

第四十五話「月と家族と仲直り？と」

――月プラント生産拠点…。

Ｓｉｄｅ　アン

ここ月で艦船の生産プラント建設のお仕事が一段落ついた。そして週に一度ある地球に居る家族へ定時報告と近況報告なんかをする。いつも通りのやり取りのはずだった。それなのに今回は訳が違った。

いつもの定時連絡よりも１日早かったの。こんなことがあるのは緊急連絡しかありえない。そう覚悟して通信画面に映るアイリお姉ちゃんと画面越しに相対して聞いてみたら案の定だった。

その内容はお父さん達の居る麻帆良の地下に建設した施設が襲撃された、というものだった。

ありえないなんてことはない…。でも、それくらい言えるように隠蔽管理は徹底したはず。それなのに施設は発見された…。

施設建造の責任者はコーレアお姉ちゃんとサルビアお姉ちゃんだった。２人が作業の監督中にミスをした？ううん、電子報告書の内容にそれは無かった。仮に失敗をしたとしても２人が隠すことは無いと断言できる。

ということは…どこかで情報が洩れていた？それとも第三者に作業を見られた？仮にそうだとしても“いつ”、“どこ”から侵入し

たの?それは誰?

報告書には“比較的脆い二番通路の壁を破壊して侵入”と、あることから予め侵入箇所を割り出せるほど時間を掛けて今回の襲撃は計画されたと考えられる。だけど…襲撃を仕掛けた割りに敵戦力はお粗末なものだった。

ここまで用意周到に計画されたと思われるのに実際の襲撃は僅かに10体の機械人形のみ…。私達を馬鹿にしているのか、それとも予想外の戦闘だったのか。…予想外?

少し気になってお姉ちゃんと話しながら電子脳領域のほうで総合電子統合情報内(アーカイブ)に記録されている襲撃の映像記録と解析情報を見比べて推測を立てていく。

侵入時に侵入者は武装していなかった?侵入後に武装を展開している?これは偵察だったから?まさか…お父さん達が居ることは知らなかった?ううん、それこそ“まさか”だよね。計画的犯行だもん。その、はず…。

でも…知らなかったとしたら?侵入時に武装していなかったこともわかる。要は“ただの探索だった”のだ。だから武装なんて必要無い。でも、入ってみればお父さん達が居る。だから武装して慌てて警戒した?

私は今までの推論を、頭を振って、そんな妄想にも等しい考えを追い出した。それこそ、ありえないもの。今回の襲撃は計画的犯行!これで決まり!先入観を持つのは危険だから他の可能性も考慮して対応しよう。うん。

「……そんな…それじゃ前から地下拠点の存在が誰かにバレていたの？アイリお姉ちゃん…」

『ああ、真に不本意ながらその通りだ……。今、地下拠点は撤収準備でゴタゴタしているよ…』

「うわぁー…大変そうだね。あ、それじゃお父さんは？」

麻帆良の地下に張り巡らされた施設を全部撤去するんだから大変だ。緊急時にはナノマシン散布をして取り付けられた機材のみを崩壊させて証拠隠滅を図る。でも、これは貴重な機材を回収出来ないから出来ればやりたくない手段。

そう考えると今回は回収できる分、運がいいかもしれない。…襲撃された時点で運なんて無いけどね。

そんな作業にお父さんも関っているとわかったら気になるというものだ。無理はしていないか？とか、作業中に怪我をしていないか？とか、私が居ないのにお姉ちゃん達とイチャイチャしていないか？とか。……最後のは気にしないで。ね？

『ん？閣下か？……閣下も帰還後に、しばし休憩された後、現場にて撤収の指揮をされていた。今は……あぁ、そうだった。アン達、月面組に閣下から新しい作業要請を言付かっているぞ？』

「新しい作業？何だろう…」

月に居る私達へお父さんから直接の作業要請…？本当に何だろう…。

本来なら麻帆良の地下拠点が襲撃されたのだから月での作業は無人作業機や自動人形（オート・マータ）に任せて私達は一刻も早く地球へ帰還。そしてお父さんと合流するべきだ…。

なのに、お父さんは合流を指示しないばかりか月での別作業を指示した。地球の拠点が発見された、この時期に…。むぅ…新たに地球上に拠点建築を行うのなら地上組を使うだけで済む話しだよね。

それなのに態々、私達に…。つまり、これは…。

「…“地球の地下拠点が発見されて使えなくなったから月に生産拠点を移して他生産プラントを増設する”とか、かな？」

『いい予測を立てたな。そうだ、今回の地下拠点を破棄するにあたり月プラントに新しくカートリッジ生産プラントや他生産ラインを構築するとのことだ。施設の設計図の草案は後ほど送るので場所の選定をしておいてほしいそうだ…』

うーん…。今から施設を拡張するとなると……6ヶ月くらいの延長？うわぁー…大変だよ…。えーと…建築資材は月を採掘して、それを分子変換機で作るからいいとして…。あとは人材？作業人数か…。

殆どが自動人形や無人作業機だから私の中の小型プラントで生産すれば労働力は足りるかな。問題は…場所ね。どこに造ろうかな？この月プラントは月の魔力の溜り場の近くに造られているから…。

あれ？溜り場の上に造れば解決じゃないかな？これって…。うむむ…これは皆と要相談だね。……あ、その時は皆にお茶菓子の用意もしておかないとね♪

「なるほどねー…。んー…わかった。こっちの皆には私から話しておくよ。皆でいい場所を見つけておくね」

それにしてもアイリお姉ちゃん元気ないなぁ。表情にも覇気が無いし笑顔もどこか、ぎこちない…。やっぱり襲撃されたのを気にしているのかな?施設完成後の管理責任者はアイリお姉ちゃんだったから責任を感じているのかもしれないなぁ。

『ああ、頼む…。いい場所が見つかれば閣下も喜ばれることだろう…』

「うん♪……えっと、それで、ね?」

どうしよう?ポンと言い出してみたけど何て言ったらいいのかな?家族として、ここは励ましたいけど。…えーと?…えーと?

『??? 何だ? 閣下への伝言か?』

「それは、もちろん、お願いするよ」

いけない、いけない。お父さんのことが出たから、つい即答しちゃった。今は、そうじゃなくてアイリお姉ちゃんのことだよ。

「あの……アイリお姉ちゃん。その、元気出して、ね?」

色々考えたけどストレートに伝えることにした。ゴチャゴチャ言っても始まらないし、それに上手く伝わらないような気もするしね。

私が拙い励ましを言うとアイリお姉ちゃんは小さく驚いた顔をし

て苦笑した。

『ッ！……驚いたな。まさか、アンにまで励まされるとは…。そんなに自分は顔に出ていたのか？』

「うん……。失敗しちゃったなぁ、ってお顔してたよ？」

『そうか……』

また苦笑した…。襲撃を思い出して、また落ち込んでるのかな。アイリお姉ちゃんの表情が段々と険しくなっていった。ここまで落ち込むなんてなぁ…。どうしよう？

「お父さんに……怒られたの？」

アイリお姉ちゃんもお父さんが好きだから怒られたら悲しいよね？でも、お父さんが家族へ対して怒るところは想像できないよ。うーん？だからこそ“怒られたらどうしよう？”って考えると怖いんだけどね…。

お父さんはアイリお姉ちゃんみたいに“もの凄くイイ笑顔”で怒りそうだなぁ。あ、想像したら…ガクガクブルブル。こわいよう、おとうさーん…。

はっ？ダメダメ。今はアイリお姉ちゃんのことなんだから！……でも、お父さんに怒られることを想像したら少し気持ちい、げふんっげふんっ…何でも無いです。ええ、何でも無いですとも！

『いや、寛大な慈悲のお心を持つ閣下だ。ただ“気にするな”と言われたよ』

「そっか。…よかったね！」

そっか♪そっか♪お父さんはアイリお姉ちゃんを責めなかったんだ。家族には優しいお父さんだもんね。…はえ？それじゃ何で落ち込んでいるのかな…？

私が何でだろう？と考えていると画面の向こうに映るアイリお姉ちゃんが苦笑ではなく自嘲めいた哂いを顔に浮かべていた…。

え、やだ…何？

『フッ、これが良いものか…！』

「…え？」

何で？お父さんに許してもらえたのに…。何で良くないの？

『これでは周りの者に示しがつかない…！』

「え？あの…」

示し？え…？罰を受けないと示しがつかないということ？そんな……そんなの皆は気にしないよ。誰もアイリお姉ちゃんを責めたりなんかしないよ…。

『無論、閣下の慈悲をありがたく思う。…だが！』

「アイリお姉ちゃん…？」

それなら何で？お父さんも無事だったし皆にも怪我は無かった。ほら？結果は施設を破棄することになったけど生きていればやり直せるんだよ。

『自分は傲慢にも“我等に敵う者無し”と慢心した…』

「…えと、えと」

上手く言葉に出来ない…。普段は平気なのに…なぜか今この時は思考が働かない…。

『その結果が拠点を発見されるという失態を犯したのだ…！！』

「ッ！？」

それは！……それはアイリお姉ちゃんだけの責任じゃないと思う。施設を破棄することになったけど、お父さんは気にしていない。少し残念だな、くらいにしか感じてないはず。だって、あと1年…来年の夏頃に破棄する予定だったのを私は知っているもの。

『自分は何としても汚名返上のためにも今回の襲撃の黒幕を上げなければならない…！』

「……ッ」

犯人探しは今も情報部の皆がやってくれているよ。皆も襲撃されたところをお父さんに見られたことが恥ずかしいらしい。情報部一課の犯人を探し出す情熱も気合も意気込みも違う。

『そうしなければ自分は…！！』

「っ！！あ、あの…！！ご、ごめん、なさい…！！私！その、あの…そんな、つもりじゃ！！」

アイリお姉ちゃんがそんなに思い詰めていたなんて思いもしてなかった…。私は泣きたくないのに目から涙が出てくる。ふふ、この涙もカメラアイの洗浄液の意味合いしかなかったのに不思議だな…。

『は？…あ、あぁ！？すまない！アンを責めているわけでは無いんだ！ましてや怖がらせるつもりも無い！つまり…あー、えーと、泣くな！な？』

「あぅ…ごめんなさい。ぐしゅ…」

私が泣いてしまったことに慌てたアイリお姉ちゃん。ごめんね？泣いちゃって…。でも、それだけアイリお姉ちゃんのことが心配だったんだよ。

うぐっ…人格が構築されてからというもの涙脆くなっている気がするなぁ。感情を持つってこんな気持ちなのかな？まだ安定していないのかもしれないや。お父さんやお姉ちゃん達に悲しいことが起きると直ぐに泣いちゃうもの…。

はぅ…恥ずかしいなぁ。

『はぁ……アン？お前は近頃ますます感情が豊かになったな』

「え？そうかな？えへへっ♪…でも、行き成り、どうしたの？」

呆れたように笑って言ってくるのは今までの内容と関係無い私の

感情面の成長についてだった。

でも、これは感情が豊かって言うのかな？何か違う気がするけどなぁ。まだ人格構築が安定していないせいだと思うよ。機械的思考している時は感情の揺らぎは殆ど無いのにね？個性って難しい。

『いや、アンが閣下達に造られて、もう２０年近くだったか？とな…』

「んー…完成時の製造年月日で言ったら私、今２０歳だね。新世界の絶対標準時間で来年には２１歳♪」

これは機械の年齢。人間の年齢に換算すると…１１，２歳くらいかな？まだまだ若いのだ♪それに今の見た目もそれくらいだしね。

『……姿は変わらないのにな？…色々と“小さい”ままだ』

「小さい？…？？？…ッ！！」

アイリお姉ちゃんの何かを含んだ視線の先を追うと私の体型…もっと言うなら胸の部分…。そこを見て言ってくる。視線に含まれた意味を把握した私はザッと胸を両腕で隠した。

「私には関係無いもん！姿は自分で選べるんだからね！？お、おおお大きさなんて！自由自在よ！そ、それに大きいのなんて飾りなんだから！偉い人にはそれがわからないのよ！？」

そうよ！大きいのなんて邪魔なだけじゃない！全然羨ましくなんて無いんだからね！？あんなのは飾りよ、飾り！！アレが大きい人のソレの中には欲望が詰まっているのよ！！逆に小さい…もとい！

小ぶりな人は心が清らかなのよ！！

『ふふっ♪そうだな。今の姿は閣下が決められたものだ。気に入らないのであれば…』

「気に入らないなんてことないもんッ！！！！！」

気に入らないなんてことがあるわけが無い！この長いサラサラの銀髪も！透き通るような白い肌も！スレンダーな身体も！金色の瞳も！綺麗な眉も！スッとした鼻も！柔らかな唇も！全部大好きなお父さんが悩んで考えてくれた私への贈り物だ！

それが気に入らないなんてことあるものか！！……でも、お父さんはお、おおお、おお大きいのが、好き…なのかな？もし、そうだと考えると少し不安だなぁ。

……身体情報を弄って見た目２０歳にしようかな？今みたいな少女の姿じゃなくてね。

『はっはっはっはっ！！すまない、すまない！少し、からかっただけだ。もう笑わな……ぷッ！』

「むーーーッ！！また笑ったッ！？！？」

笑わないんじゃなかったのーッ！？言い切る前に“ぷッ！”って！“ぷッ！”って笑ったのよ！ヒドイと思わない！？

『ははっはは、ははははっ！！はっはぁ…。いやぁ、笑った、笑った♪』

「ふんっ……元気、出た？」

『ああ、出たとも♪…ありがとう、アン』

「♪♪♪」

当たり前よ♪寧ろここまでして元気にならなかったら私はただのピエロじゃない！……でも元気になったようで嬉しいな♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アン

――喫茶店クレイドル地下司令部…。

Ｓｉｄｅ　アイリ

今ここ地下司令室は撤収作業で私以外誰も居ない。麻帆良の地下では精魔奇兵も自動人形（オート・マータ）も、そして機材運搬用に改造された無人機（カブ）動兵器（トムシ）が忙しそうに走り回っている。

私は閣下から頼まれたアンへの指令を伝えるために今回の襲撃のことを併せて通信した。内容は“ここ地下拠点の生産機能（各種カートリッジ生産など）を月へ一部移転する”というものだった。

最初にこれを聞いた時は襲撃が原因だと考えさせられたが閣下に違うと言われて一安心したものだ。…む？まぁ失態は失態なので無論、安心してはダメなのだが……少しだけ肩の荷が下りたように感

じたのも事実だな。

……私ともあろう者が情けないものだ。

そして今はアンとの通信を切って私は椅子の背凭れに身を預けて先程の通信内容を思い出して苦笑した。

「ふふっ…アンにも励まされてしまうとは、な…」

「…アイリは気にし過ぎなの。助け合うのが家族だと私は思うの」

「ッ！？」

心臓部が止まるかと思った！１人、思い出して苦笑していると突然、私の座る椅子の右隣から話し掛けられたのだ。

気付かなかった！？いくら気を抜いていたとはいえ、司令室へ入る扉は一つしかない。…それなのに気付かなかった！？と言うか、ファレノか！？驚かすんじゃない！！本当に心臓部が止まるかと…！

「…そうですわね。ファレノさんのおっしゃるとおりですわ。アイリさんは気にし過ぎなのですわ」

「ッ！？」

今度は左隣から！？驚きのあまりもう一度、心臓部が止まり掛けて上手く思考がまとまらない！？今度はリチラか！？私を心臓部麻痺で殺す気なのか！？私が何かお前らの気に障ることをしたのか！

？あ〝あ〝んッ！？

まだ何を言っていいか思考がまとまらない。予想外の驚きでまだ混乱しているようだ…。私は左右に座る彼女達を交互に指差し、言葉の出ない口を無意味に開けたり閉めたりしていた。何か言いたいが言葉に出来ないというのは歯痒いものだ…。

「何をそんなに驚いてパクパクと金魚のようにしているの？」

「ファレノさん、きっとアレですわ。葵様に怒られて柄にも無く落ち込んでいるのですわ」

「えっ！？アイリ、葵君に怒られたの！？」

２人は私が何か言いたいのを察したようだ。だが、その気遣いは違う！私が言いたいのはお前達が“いつからここに居たか？”と“黙って入って来ないで普通に入って来い”ということだ！！驚いたんだぞ！？コラッ！！

そ・れ・と……ッ！！

「そんなわけあるかーッ！！閣下は寛大にも自分の失態をお許しくださったわ！！リチラもデマカセを言うのはやめろ！！自分のことはともかく、閣下の名誉に傷が付く！！すぅ――わかったかッ！？！？！？」

「なのぉーーッ！！？」「ですわぁーーッ！！？」

全力で否定するためと半分八つ当たりの意味で魔力を乗せた言葉を放ち２人の鼓膜と脳を揺らして意識を刈り取る勢いで怒鳴った。

叩き付けられた2人は頭をフラフラさせて半ば意識が飛んでいるようだ。

まったく！…閣下が私達をきちんと叱られるようになったなら私は言うことは無いわ！

閣下ときたら、もうっ！家族や知人にはダダ甘で叱るということをしてくださらないのですからっ！それでは周囲へ示しがつかないではないか？とお諫めしても微笑むばかりで聞いてくださらないのだ！

また、私が閣下の笑顔を気に入っているからそれ以上強く言えないのだ。……優しく微笑むご主人様♪あぁ♪素敵♪…ハッ！？げふん！げふん！！何でも無い！！何でも無いんだ！！！い、今のことは気にするな！！いいなッ！？

「ふぅ…ふぅ…ふぅ…はぁーー…」

「うぅうぅ…アイリ、ヒドイのぉ…。耳がグワングワンって、なってるの」

「…まったくですわ。あー…ダメですわ。まだ頭がクラクラしますわ」

「お・前・達・は・ッ……」

ま・だ・わ・か・ら・な・い・よ・う・だ・な・！？

意識が戻ってきた2人はまだ反省していないようだ。ここはもう一つ…今度はもう少し魔力を込めて放つとしよう…。そう判断して

私は言葉に込める魔力を強める。

だが…。

「…少しは気が紛れたかしら?」

「な!?」

「……元気、出たの?」

「リチラ…。ファレノ…。お前達…」

リチラとファレノ。この2人は私が襲撃されたことで落ち込んでいる、思い込んでいるのでは?と心配してくれたようだ…。失敗などしたことが無いからある意味、新鮮だ…。

なるほど…。これが“家族”…と言うものなのだな…。家族へ心配を掛けているのに、この申し訳ないような、嬉しいような暖かい気持ち…。閣下…この気持ちは素晴らしいものですね。それと何ともくすぐったい気持ちにもなりますが…。

彼女達の気持ちに納得して私は強めた魔力を少しずつ周囲へ霧散させ安全に無効化していく。発動する前とはいえ強めにしたので強制排出するのが大変だ。

魔力は操作に失敗すると暴発して危険なのでご利用は慎重にね♪

何だ？今のは…。新手の精神攻撃か何か、か？……ふぅ、どうやら私は疲れているのかもしれない。これが終わったら休暇の申請をしておこう。

……その時は葵君を誘ってどこかへ行こう、かな。…あ、それいいかもしれない。

よし、そうしよう。

「ふんっ！い、いつまでも落ち込むのは、おやめなさいな！貴女が落ち込んでも仕事は終わらないのですわ！」

しまった…。違うことを考えていたらリチラが私を諫めるようにか、鼓舞するように言われてしまった。

しかし彼女の言う通りでもある。気にして止まっているよりも“これから何をするか？だった。今は撤収作業がある。それが終わったなら…襲撃の犯人捜し、か。閣下には何やら心当たりがあるようなご様子だったが…。

「アイリ、アイリ♪」

「ん？何だ？」

さて、今後はどう行動するか、と考えていたらファレノに服の袖をクイクイと引かれた。

「あはっ♪リチラは照れてるの♪」

「……照れているのか？」

…意外だった。普段は冷たい印象を少なからず身に纏い周囲へ振り撒いていたのに。彼女とは百数十年の付き合いだが存外に家族思いなのだろうか？知らなかった…。

これも家族思いの閣下が影響したものなのだろうか？……いや、間違い無くそうかもしれない。リチラの葵君好きは“スゴイ”からなぁ…。

そうだ…。彼女の閣下へ仕掛ける朝駆けや夜這いが、また頻繁化してきたから皆と話し合い、対策を講じなければならないのだった…。これも精魔奇兵のまとめ役としては頭の痛い問題だな。

それに万が一！にも、ありえないが、もしも……そう！“もしも”！！の時は…どうやって……ククッ！ククッ！！

オ・シ・オ・キ・シ・テ・ヤ・ロ・ウ・カ・！！

む？話しが逸れたな…。いや、今、考えたリチラ対策も大事なことと言えば大事なのだが、な？とりあえず全てを片付けた後で本格的に対策を取ろう。今はソレでいい。

そして目の前のリチラはというと…。彼女は今、顔を真っ赤にして立ち上がり指先を“ビシィ！”っと私達に向けてプルプル震えている。

自分の家族思いな気持ちが私達にバレて恥ずかしかったのだろう。…なに、良いことではないか。私も今日のことがあり2人の想いがわかって嬉しく感じている。問題は無いだろう。

「なんっ!?…んんッ!!か、勘違いなさらないでくださいな!わたくしは、ただ…!」

「ツンデレなリチラは素直じゃないの。…葵ちゃんの前ではデレデレなのにアイリや私達の前ではツンツンなの」

「ツン…デレ?そういうものなのか…」

ツンデレ…。なるほど…、言い得て妙だな。今のリチラを上手く言い表せている。ツンデレとは奥が深いな…。

「な、なななな何をおっしゃっているのか、わたくしには、わかりかねますわ!!」

「本当のこと、なの♪」

「ファレノさん!貴女は…!!」

「ふふふ。まったく、仕方のない。……だが」

だが、こんな雰囲気も悪く、ない…。そう思えるくらいには気持ちが楽になったような気がする。

ふふふ♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリ

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

襲撃から明けて今日。発見された地下拠点は機材や設備の撤収作業でてんてこ舞いだ。どんなモノでも秘密は知られた時点で役目を全う出来なくなるんだ。本当に残念だが地下の施設は破棄するしかない。

まぁ来年の夏には証拠隠滅のために破棄予定のつもりではあったから、それが早まったものと考えれば苦ではない。

それと今回の襲撃騒ぎで一番、気にしていたのはアイリだった。破棄の予定は彼女にも話したんだけど彼女は俺の副官と精魔奇兵のまとめ役をしている分、責任感や俺への忠誠心が人一倍強い。

そんな彼女が与えられた任務に失敗してみろ。自己嫌悪に陥っても不思議じゃない。当然、そんな彼女を放っておくことなど俺には出来ない。襲撃の被害報告を聞き終わった後にアイリと話した。

内容は省くが“気にしなくていい”と伝えたさ。自惚れでなければ一時的だけど、それで彼女の精神的な負担を減らすことができたと思う。…まぁ、それでも彼女の気分は完全に晴れなかったみたいだった。

だから襲撃の次の日の今日、また話してみようとアイリを探していた。あと序でに、お昼ご飯も一緒にしようと考えていたんだけど…その必要は無かったみたいだ。

通信で月に居るアンや親衛隊仲間のファレノとリチラが彼女をそれぞれのやり方で元気付けていたからね。

「――――…俺の出番は無かったか」

「???何か言うた?葵兄さま」

はい。お呼びで無い俺はお昼をしに来た木乃香ちゃんと向かい合って店の奥にある席に座っている。先程までミリーやマリー、ウーリが店内で忙しそうにお客様の注文を取ったり調理や会計をしたりしていた。

俺も最初は働こうとしたのだが3人になぜか止められた。確かに徹夜気味だったから少し辛いが働けないほどではない。そう皆に言っても詳細は省くが、やんわりと「グダグダ言わずに休めや、コラ?」と逆に言われた。

…皆も大袈裟だと思うんだよなぁ。

まぁそんな訳で今はお昼も食べ終わってデザートを木乃香ちゃんに振舞っているところなんだ。休めと言われても寝るには時間がねぇ。1人でお昼寝するのも寂しいものがある。だからと言って皆は撤収作業で忙しい。

……一体どうしろと言うんだ?寂しく大人しくしていろ、とでも

言うつもりか？本当に木乃香ちゃんが来てくれて良かった！1人だと暇で暇で…。

おっとと、今は木乃香ちゃんと話しの最中だったな。

「ん？ああ、ただ美味しいかな？って言っただけだ」

「うん♪美味しいへー。葵兄さまも食べるー？」

「いや、俺は試食の時にたくさん食べたからいい。気にしなくていいから木乃香ちゃんが食べなさい」

女性客が多いせいかメニューはお菓子関係ばかりが多くなっていくんだよなぁ。カロリー控え目で甘ぁいお菓子がさ…。一応、喫茶店だから紅茶やコーヒー、少し変わって中国茶（青茶とも言う）に合うものを用意しなくちゃならんのよね。

「ええの？やた♪んー♪美味しいわー♪これ次の新作なん？」

「一応ね。でも、それはボツ作なんだ。喫茶店のメニューにしては材料にコストが掛かり過ぎる」

木乃香ちゃんが食べている試作デザートはマジでボツ作だ。何？スウィーツの価格が一つ五千円って…。喫茶店のメニューじゃないよ。

開店当初は宣伝効果を期待して赤字覚悟で月に数個の限定の特別スウィーツを作った。ただソレは、今は無い。因みにソレの価格はどんなに抑えても一万とチョイ…。あれ？……今考えると目の前のコレの倍だったんだな。

材料にお金を掛け過ぎかも知れない…。次から作るものは低価格商品かな…。味を落さないようにしないとならんな。

「そうなん？残念やわー、こんなに美味しいのにー。……あれ？それじゃ何で今、出してくれたんや？」

「くくく♪まぁ商品ではなく個人的に出す分には構わないだろ？…今回限りだがな」

「そうなんかー。なんだか少し得した気分やわ♪」

おー、おー、美味しそうに食べてくれちゃってまぁ。木乃香ちゃんの周りに幸せなお花が舞う絵が幻視出来そうだ。こういうのを見るとご馳走しているほうは嬉しくなるねぇ。木乃香ちゃん、可愛いし♪

このお菓子、商品としてはアレだけど木乃香ちゃんや明日菜、それに刹那ちゃん。あと他数人の知り合いくらいなら特別に出しても罰は当たらないかな。

……裏メニューか。いいかもしれない。試験期間として1～3ヶ月くらいお客様の反応を見てみるか。教えるのは知り合いだけだから大した出費にもならないだろうし…。

今は忙しいから数ヵ月後からを目処に計画していこう。手が回らないのよ…。

色々な計画を並行して行なっているから人手が足りない時があるんだよな…。少し無茶したようだから現存の計画を終わらせること

を重点に今後は活動しよう。

定期的な学園都市や周辺勢力の情報収集に始まり、恒常的な魔力の蒐集。大きなものでは月面生産プラントの建設と増築、計画名“宇宙（そら）の家”。無人戦闘艦隊の設立、計画名“自由への旅立ち”。ｅｔｃ，ｅｔｃ……。

新ゴーレムの研究だったのに最後には調子に乗って機械人形（マキナ・マータ）作製を目的とした機械兵士計画なんてものも新しく実行しちゃったし…。仕事がいっぱいだぁ…。

「ふぁー…んー…」

そんなことを徹夜した頭で考えていたら俺の脳が疲れたようだ。意識しない内に欠伸が出てしまった。うーむ、目の前に木乃香ちゃんが居るのに失礼だったか？

「葵兄さま、眠いん？何や、疲れて見えるへ？」

「んぁ？ああ、昨夜は色々あって、余り寝ていないんだ」

少し心配そうに聞いてくる木乃香ちゃんは、いつの間にかデザートを食べ終わっていた。うむむ、それに気付かないほど考え込んでいたということだろうか？

集中し過ぎると周りが見えなくなるのは問題だ。こればっかりは俺の癖だから簡単には直らないけど今後は気を付けないと。

「葵兄さま？何があったか知らんけど、ちゃんと寝ないとアカンよ？」

「…そうだな。次からはそうするよ」

あんなことが何度もあってはたまらない。今回のことは俺の予想だけど超・鈴音だと考えている。というか、原作を思い出せれば簡単なことだったんだ。いつ頃からかは知らないが麻帆良の地下に戦力を構築していたんだからな。

全ては２００３年に世界樹の魔力が極大点を迎える日…。そう、麻帆良祭の最終日に全魔法世界に対して決起するためだ。その戦力を地下に集結、または生産するはずなんだ。俺は面倒にも超の前に地下に陣取っていたわけだ。

くっそ…。こんなことなら最初から月に生産拠点を確立するべきだった。そうすれば、こんな面倒にも巻き込まれなかったのに…。この世界に来る前…八百年近く前の記憶が酷く曖昧だ。

忘却って怖いなぁ……くくく♪〝だが〟…。

そう、だが、だからこそ面白い。未知への踏破は何物にも変え難い愉悦だ。技術関係は、この身に刻まれているので忘れることは無い。それ以外の記憶は記録に残すなりすれば問題無い。忘れたモノは帰ってこないが…。

ともかく起こってしまったものはこの際だ、仕方が無いと割り切ろう。アン達には新たに仕事を頼んだので帰還が遅れる。だいたい８月終わりくらいか？全てが終わって無事に帰還したらキチンとお礼しないとなぁ。

アン達のことを考えていたら木乃香ちゃんが椅子から立ち上がる

音がした。どうしたのかと思い見てみれば彼女は立ち上がって帰り支度をしていた。

「ほな、私、もう行くわー。2時から友達とカラオケの約束があるんよー」

む？そうだったのか。いつものようにここで駄弁っていくのかと思っていたのだが…。それなら無理に引き止めるのは憚られるというものだ。……最後に少しからかうか。

「そうか。たくさん歌って、ストレス発散してこい。――俺は笑顔の木乃香ちゃんが可愛いと思うからな」

「へ？――…ま、また上手いこと言うてー！もう知らんー！」

最初、キョトンとしていた木乃香ちゃん。しかし俺の言った言葉を理解した瞬間にボッと音が聞こえるかと思うほどに真っ赤になった。そして木乃香ちゃんは逃げるようにして店の玄関に向けて走り出した。

「は？…ああ！走って転ぶんじゃないぞーッ！？」

突然、店の中を走り出したから俺も驚いたのだろう。思わず幼い子に注意するようにしてしまった。でも、これは仕方ないと思うんだ。木乃香ちゃんはまだ中学一年なんだからな。若いよねぇ…。

「葵兄さまのあほぉ！！」

「なぜにっ！？」

親切心から注意したのになぜに木乃香ちゃんから罵声を浴びせられなければいかんのよ？いや、からかったのは俺だけどさ。突然走り出すのはどうかと思うだろう？店内で人とぶつかったら危ないし…。

そんなこんなで木乃香ちゃんを見送って一人、先程の木乃香ちゃんを思い出して笑う。最近の木乃香ちゃんはからかいにある程度の耐性が出来たようでこういう不意打ちでないと簡単に流されてしまうんだ。

残念だねぇ、本当に…。刹那ちゃんと並んでからかい易かったのになぁ。

「くくくっ♪木乃香ちゃんも元気だなぁ。……それでハオ達はなぜに監視紛いのことをしていらっしゃるのでしょうか？」

「「いえ、別に……」」

実はこの2人、朝から俺のことを監視でもするようにずっと後をつけていたんだ。木乃香ちゃんとの食事中は彼女のこともあって気配を消していたけどね。それ以外はバシバシ気配を叩き付けられていました…。

木乃香ちゃんが帰った後はまたビシビシと気配を放たれていますよ。……俺、何かしたかね？2人を怒らせるようなことはした覚えは無かったんだけど…。

「別に、って…。今朝からずっと後をついて来ていたよな？」

「そのようなことは……ない、かと」

ハオ……なぜに視線を逸らすのかね？ちゃんと俺の目を見て発言しようよ…。

「そうです。我が君の考え過ぎではないでしょうか？」

ユエは……変わらない。いつも通りだ。でもハオを見ていると“何か”があると思ってしまう。うぅむ…？

「いや、でも…」

「我が君の守護が吾らの任なのです。ならば、お側に侍るのは問題無いかと思います」

やっぱり、おかしくないか？ユエの言うとおり護衛だとしても護衛対象である俺に、ここまであからさまに2人が気配を放つなんてことは今まで無かった。いつもは気配なんて感じさせないのに、さ。

それに今、気が付いたんだけど何だか2人とも不機嫌なような、怒っているような雰囲気が…。いや、何か知らんけど、これは拗ねているのかな？

「あの…ユエ？何かを怒っていらっしゃるのでしょうか？それにハオも…」

「「……怒ってなどいませぬ」」

何？今の間は…。それと怒ってないなら目を見て話せっての…。

今度はユエも視線を逸らしているし。わからない…。これは何があったんだ？本当にさ…。

もう考えて、わからないなら直接聞くしかないよな。家族の間に遠慮なんていらないし。……無論、時と場合によるし、ある程度の礼儀は必要だとは考えるし思うけどね。

「……俺、何か悪いことしたのか？」

「……昨夜」

「はい？」

えっ？一言！？ハオさん一言ですかっ！？主語どころか名詞も述語も無いんですけど！？お兄さん、それはちょっと…いや、大分わかりませんです、はい。

「姉上はこう言いたいのです。“なぜ、昨夜の戦闘に吾らをお供させなかったのか？”と」

「あー…すまなかった。反省しているし、もう二度と同じことはしない」

昨日のことかー…。むー…アレは申し訳無いです。つい、その場の勢いとノリでラミエルさんと行っちゃったからなぁ。

ただ言い訳をさせてもらえるならハオ達はあの時［工房］に隣接された付属魔法球［演習場］で訓練していたじゃないか、と記憶しているのですよ…。

まぁ地下拠点の警報は［工房］内には接続されていなかったからねぇ。気付かなくて当然。伝令が走ってハオ達に伝達された時には事件も終盤だったからなぁ。

そういう不測の事態を別にしても2人には護衛としての矜持があるんだ。護衛対象に置いて行かれましたじゃ納得できなんだろう。

はぁ…今回は失敗が多いなぁ。反省、反省…。今回の失敗も次への糧にしよう。差し詰め……超・鈴音のことと学園側への挨拶か。前者はまだ監視と警戒でいいとして後者は撤収が済み次第挨拶に行くか…。

あ〝ーっ…でも何だかんだで伸ばしに伸ばしてきたから会うのが気マズイなぁ。……そうだ、いっそのこと代理人を立てるか？ダメだな…。相手に失礼過ぎるわ…。直接会うしかないかー…。はぁ…。

「……次は置いて行きませぬか？」

「ハオ達がイヤでも連れて行く」

「…約束ですぞ？」

「うん、約束だ」

どうでもいいがハオ…？上目遣いはやめてくれ…。和風美人さんがソレをやると俺のストライクゾーンのド真中に来るんです…。勘弁してくれ…。

そう考えていても俺の身体は2人と約束する時の儀式を始める。

長年の慣れって怖いなぁ。何も考えなくても身体が動くのだから。

それでまぁ儀式と言うのが…。

俺は2人に両手の小指を差し出す。ハオ達は嬉しそうにそれぞれに剣士とは思えないほどに柔らかく温かい自分の小指を絡ませてくる。そして…。

「「「ゆーびきり、げんまーん、うーそついたら、はりせんぼん、のーます、ゆーびきった！」」」

はい、指切りです…。何だ？何か文句でもあるのか？ああん！？……昔にコレを教えたのは失敗だったかもしれない、と少し後悔…は、していないけど恥ずかしいのは変わりませんって…。

「…毎回、思うんだけどこの歳になってこれは恥ずかしくない？」

「ふふ、吾らはそうは思いませぬよ」

「我が君は何がお恥ずかしいので？」

ハオとユエが嬉しそうに、はにかんでいるのを見ると否定し難いなぁ…。無駄だとは思うけど一言だけ物申してみるか…。

「いや、何って…。この歳になってまで“指切り”すること？」

「「イヤなのですか？」」

何だろう？この言い表せないプレッシャーは…。ハオとユエは笑顔なのにコワイです。一言物申してみただけなのに見えないプレッシャーが…むむむ…コレ如何に？

「……イヤじゃ、ないです。…でもね？」

「ならば問題はありませぬな♪」

「うむ♪姉上の言うとおりだ♪」

2人に畳み掛けられるようにして発言を遮られました…。俺ってハオとユエの主だよね？何でプレッシャーに押さえ込まれているのだろう…。

「あ、あぁ、ぁぁ…。もう、いいです…。あははは…」

「「あっはっはっはっ♪」」

まぁ2人の機嫌が直ったようだから今回はいいとしよう。原作が始まる、これからが大変だから色々と片付けておかないといけないからね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第四十五話「月と家族と仲直り？と」（後書き）

こんな予定ではなかった…。もっと短くなるはずだったのに。
アイリＳｉｄｅ使い過ぎだなぁ。ミリー達の出番が少ない…。

むー…超のＳｉｄｅも出せたら次回に出したいなぁと考えています。
出せるかは微妙だけどね！

あ、あと月に居るアン達の作業風景とかやってみたいです…。
けっこうアンをほったらかしていた気がするので。

では今回はここまで！また次回お会いしましょう！

ＰＳ，ネタ＆感想は随時受け付けています。奮ってご応募ください。

第四十六話「友情？と父と娘と」（前書き）

モンハンが…出来ない…。
忙しくてやる時間が無いですｏｒｚ
ごめんなさい。少し愚痴を言いたかっただけです。
だけど！それでも二次を書くのはやめない。

とりあえず続きをどうぞ。

第四十六話「友情？と父と娘と」

――麻帆良工科大学…。

Ｓｉｄｅ　超

あの麻帆良地下へ強襲偵察…まぁ予期していなかった事態だが…があった日から6日が経った。その間、不思議なことに敵対とも取れる行動をした私に報復らしいことは何も無い。不気味なほどに沈黙を守っているのだ。

状況がわからなければ判断できない。そう考え隠密裏に偵察機を飛ばしたのが3日前のこと。そして情報を持ち帰るのが今日。隠密裏に行動したのは理由がある。

ただでさえ一度襲撃しているのだ。二度目の強襲偵察などして敵かどうかもわからない相手だ。ここで更なる反感を買うのは看過できない問題だ。それはこちらの計画に不確定要素を増やすのは得策ではない。

しかし、一度目の襲撃で示されたモノ…。

「あの技術力は、この時代のモノとは思えないネ…」

まさか、私以外にも時空間跳躍をした者が居るとでも言うのか？そう考えて私は自嘲するように鼻で笑った。

「……フッ。それこそ、まさかネ」

私以外に誰がこんな酔狂なマネをする…。発達した科学技術や魔法技術でもリスクが高い。いくら未来のために必要なこととは言っても危険な時空間跳躍なんてことをするものか…。

これまで来るべき時のために準備を進めてきた。この時代に来る前に予め戦力を集積する場所の選定は済ませてあった。…なのに地下には未来を知る私すら知らない勢力が存在した。

一度目はこちらの予期しない接触だったがために敢え無く敗北…。二度目は慎重に慎重を重ねて隠密偵察。その方法は古臭いもので情報を直接持ち帰るというものだ。

あの技術力を警戒して敢えて、こんな古臭い方法で情報収集をしたが…。コレも必要な手段だ。下手に偵察機から送られるデータの送信先をトレースされて居場所を発見されては話しにならない。

「ム？来たネ。……ハカセ！偵察機が帰てきたヨ。起きてこちらに来るネ」

「んむぅ？……ふぁ～…。はぁい、今行きまーす…」

研究室の隣にある仮眠室から出てくるのは葉加瀬・聡美。私はハカセと呼んでいる。寝惚け眼の今の彼女からは想像し難いが、これでロボット工学などの機械工学の天才だ。そして私のとある計画に賛同する共犯者でもある。

どうでもいいが仮眠室から出てきたハカセの髪はボサボサ、服装は乱れている…。このままでは私のほうが落ち着かない。

「……その前に顔、洗ってくるヨ。情報確認はその後ネ」

「はぁい…ふはぁ…」

研究室の隅にある小さな洗面所へ行ったハカセから目を離して私は偵察機が持ち帰った情報解析のための準備をしておく。……とは言ってもCPと偵察機をコードで繋いでデータを吸い出すだけなんだが。

――準備中…準備中…準備中…。

さて、準備が終わった。いつの間にか隣に居るハカセも洗顔をして目を覚ましたようだ。

「それでは偵察機が持ち帰った情報を解析するヨ」

「はい！……でも記録で知っていますけど、こんなに回りくどいことをする必要があったんですか？」

「必要だ。あの勢力の技術力を考えるとコレでも不安が残る」

あの技術力を持つ勢力のことだ。直接データを送信なんてしたら傍受されて送信先を突き止められてしまう可能性がある。警戒してし過ぎるということは無いはずだ。

「……そこまでですかー。わかりました！それじゃチャチャッとやっちゃいましょう！」

「ウム！これで何か対策が取れればいいのだが…」

そう儚い思いで偵察機の情報の中の一つとして始めに映像記録を画面に映し出した。そしてそこに映し出されたのは……遺跡と巨大な木の根、ただそれだけだった。他に映っているものは流れる水くらいのものだ。

あの時に見た機械昆虫も近未来的な通路も隔壁も何より強襲時の戦闘跡すら無い。長年積もった埃は無いが元の遺跡に戻っている。機械のきの字すら今は見られない。

そんなことはありえないという思いに駆られ、更に映像と詳細な数値の情報も併せて分析した。

きっと…きっと、どこかに隠れているか移動したに決まっている。機材は運び出せばいいのだ。通路の鉄板は剥がせば運べないことは無い。機械昆虫が運んだに違いない。

……ならどこへ？遺跡の更に奥へ移動したか？それこそ無い…。図書館島地下に繋がる遺跡の奥には封印しているとは言っても“アレ”がある。学園側はそれを厳重に秘匿、警戒している。そんなところでバレずに活動できるとは思えない。

どこへ行ったッ！？こんなことがあってたまるものか！私は狐に化かされたとでも言うのか！？

「これは…！これはどういうことネ！？」

「あのー?この情報って本当に合っているんですか?何も無いみたいなんですけど…」

「間違い無いヨ!地形情報も位置座標も確かにこの場所ネ!!なのに…!」

何度、位置情報の数値を読み直しても問題は見られない…。地形の一致情報も問題を示していない…。単純な地図情報も、だ…。ただあの勢力のモノと思われる機械群だけが幻のように消えていた。

「何も、無い…。撮影された日時が今から3日前…。アレだけの施設が僅か3日で跡形も無く消えた…」

「そうだとしても一体どこに消えた!?」

わからない!!未知なるモノがこれほどの恐怖を齎すとは思いもしなかった!あの連中は何だったのだ!?あの技術力を持つ勢力と敵対した場合、脅威以外の何物でもない!

襲撃時には施設の人物は確認できなかった。だが機械昆虫は施設の防衛をしていた。それはまだいい。アレは多脚戦車と田中で対処できる。だが、アレは…あの重厚な姿をし、力強い翼を持った機械の巨人……。

アレはマズイ…!予想が正しければアレは未来で地球側が開発した対魔法使い用兵器だ。姿形は私も見たことの無いタイプだったがアレは…特注品なのだろうか?…くっ!こんな時代になぜ、あんなものがある!?

本気で私以外の者がこの時代に来たのでは？と疑いたくなる…。

「ソレがわかれば苦労はありませんよー。…どうします？捜索範囲を広げますか？」

「……いや、これ以上の深入りは不利益になりかねないヨ。警戒はするが接触は極力、避けるネ。タダ、出来れば…」

「エヴァンジェリンさんのように不可侵契約を結ぶ……」

「そうネ。下手をするとあの勢力はここの魔法使い共よりも危険だ」

確認出来たアレだけが総戦力とは思えない。まだまだ“何か”があるかもしれない。あれだけの特殊戦闘装甲服（パワードスーツ）を保持しているのだ。他にも何かあると警戒してもし過ぎるということは無いはずだ。

「だけど、そう上手くいきますかね？一度襲撃みたいなことしてしまっていますし」

「……みたいではなく襲撃そのものネ。あの時の判断は失敗だったヨ」

研究者の癖で“知りたい”という知的好奇心が仇となった。それは欲求となり欲望のままに行動した。その結果がコレだ…。これ以上無い不確定要素を呼び込むことになってしまった…。

「学園の魔法使い共のこともあるが、その上を行く障害が現れたのも事実…。今後はより一層の注意が必要だ」

「大変ですね…。多脚戦車の配備や科学拘束式の鬼神兵6体の開発

…。それに歩兵タイプのT-ANK-α1（プロトタイプ田中）のバージョンアップ…。やることが多いです」

指折りして、これからのことを確認していくハカセ。私は彼女を見ながら考えていた。彼女のロボット工学の知識、探求者として必須の行動力を求め、私の“計画”の協力者とした。彼女自身からではない。私が勧誘したのだ。

この先は危険だな…。

本来なら様々な博士号を取得して平和な人生を送れる彼女を私がこちらの世界に引き込んだのだ。今ならまだ引き返せる。引き返せるのだ…。

「……ハカセ」

「はい？何ですか？」

「その……引き返すなら今だ。今ならまだ間に合う。計画に誘っておいてなんだが、この先は危けっ…ム？」

言葉を言い切る前に私の口はニコニコ笑うハカセの人差し指を当てられた。彼女の目を見るとまるで“言わなくてもわかっている”とでも言うように私の目を真っ直ぐに見ている。

「その先は言わなくていいです」

「むむぅ、だ、だがっ」

「クドイですよ！超さんに誘われたのは事実ですが、この計画へ参

加するのは自分の意志で決めました」

「ハカセ……」

計画へ勧誘したのは私なのだ。それなのにハカセは自分の意思で行なうのだと言った。この協力者はスゴイ者だ。見る人が見れば愚かなバカ者に見えるのだろうが私には最高のバカ者に見えるのだ。

こんなにも協力してくれる者に私は何を返せるというのだろう？いや、今はただ感謝の言葉を口にしなければならないか…。

「ハカセ、ありが…」

「それに科学の進歩♪それも最先端の技術に触れられるのは科学者冥利に尽きるじゃないですか♪♪もうサイコー♪」

「本音はそこなのカ!?そこなんだな!?私の感動を返してほしいネ!!」

「あはははは♪」

感謝の必要は無いようだな!!フッ、こうなったら私の知る科学技術を未来に影響が無い範囲で叩き込んでやるネ!!ハカセ!?覚悟するヨ!!フハハハハハッ!!!

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　超

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

ここは喫茶店の奥にある一室。この部屋は防諜のために様々な処理をされた場所だ。扉の外にはハオとユエがボディガードよろしく立っていたりする。ある意味で彼女達が守るだけで難攻不落の部屋が出来たな…。

部屋の中には長方形の黒い机。座り易い革張りのソファーが机を囲むように置かれている。そのソファーの一つに座る俺。反対側に座るのは情報部諜報一課に所属する女の子が１人。……アイリじゃないのは彼女も何かと忙しいのよ。

「それでどんな感じかな？……動きはトレースできたんでしょ？」

「はっ、３日前のことです。撤収後の地下へ偵察機の侵入をセンサーが確認しました。そして本日、我々はコレを捕捉、追跡し襲撃犯の特定に成功しました。……複数の偵察機による情報の物理的交換をしていたので追跡には骨が折れました」

「くくく♪ご苦労様。しっかし、遠隔地へのデータ送信ではなく直接データを持ち出したのか。古臭い方法で来たなぁ」

一昔前にはこんな風にして何度も何度も仲介を挟んで情報を入手したものだ。情報の伝達速度としては遅延があるけど情報元や運ぶ先の特定などは難しいものだった。

様々な手段で情報…例えば機密写真のマイクロネガなどで言えば

硬貨に細工してその中に入れて運んだりした。またはライターの中にも入っている場合もあった。

今回の偵察機はそれのハイテク版だ。偵察先からデータを送らずに記録媒体ごと運んだ。途中に何度も数機の偵察機と記録情報のやり取りをして分散することで追跡を難儀にしたものだ。

よく撒かれずに最後まで終えたものだなぁ、と俺は感心しているよ。

「ですが、効果的な方法でもあります。ハイテクにはローテクを、ローテクにはハイテクを。これはそれぞれの盲点をついた方法ですからね」

「…確かに、ね。それにしても超・鈴音がねぇ。…資料を見ると大した科学力じゃないか。この時代の人間にしては技術力が俺達に迫るとはな。驚きだ…」

本当に驚いているんだ。工学部のほうへ提出されている表の研究レポートは序の口。公表していない裏の技術力は高度にまとまっていて完成されている。まぁ逆に言えば技術発展の伸び白が短いとも言えるが、な。

そして今見ている設計図なんかがそうだ。多脚戦車に鬼神兵の科学拘束版、強襲歩兵のＴ‐ＡＮＫ‐α１…。Ｔ‐ＡＮＫ‐α１は将来の田中さんか？他にも茶々丸タイプの量産型…。これだけの技術が今の時代にあるのは異常と言える。

こちらには他世界の技術や数百年先の技術があるのに超・鈴音は……ねぇ？ホンモノの天才はスゴイよ…。俺も今以上に技術発展は

したつもりだけどねぇ。彼女が不老だったら個人で俺達に技術力で迫れるんじゃないか、と思えるほどだ。

何百年掛かるかは知らないけど…。

「はい。そしてその協力者の“葉加瀬・聡美”も侮れません。ロボット工学では超・鈴音に並ぶほどの実力があるようです。襲撃に使用された…」

「使用されたモノは機械人形（マキナ・マータ）ではない。別アプローチから成るモノだった」

「その通りです。…我々としましては情報の漏洩ではないことがわかり安堵しました」

「まぁ…それは、ね。それで？アレは何だと考えられる？」

機械人形（マキナ・マータ）の情報が洩れて無くて良かった！外部へ他にも設計図などの情報が盗まれても１００％の再現は出来ないだろうが劣化コピーなんて粗悪品が出回ったら怒りの余り何をしてしまうか自分でも、わからないよ。

機械人形（マキナ・マータ）なんて研究を始めたばかりのものだ。完成する前に盗まれるなんてことになったら……やってらんないよねぇ。

それでまぁアレはなんだったのかね？入手した資料を見るとＴ-ＡＮＫ-α１とあるけど…。

「回収された破片や機体を分解解析しました。襲撃当初は製作者を特定出来ればと思いまして」

「…解析結果は？」

「試作品のようで大変、癖が強い作りでした。ただ、一部に“絡繰・茶々丸”を構成する技術が使われていました」

茶々丸ちゃんー？……えー、あのゴツイＴ‐ＡＮＫ‐α１のどこに共通点があったのさ…。あれ？

待ってー。ちょっと待ってー。まだ待ってー。

それじゃ何？あのＴ‐ＡＮＫ‐α１にはガイノイドの技術も一部とは言え使われていたということだよね？……もしかして罷り間違えればＴ‐ＡＮＫ‐α１が茶々丸ちゃんとしてエヴァちゃんの側に……。

お、おぉ…何か恐ろしいことを想像した気がする。

「ぅぷっ……それではアレはガイノイドだったのか？」

チッ、よく考えればそんなことありえるわけが無いじゃないか。茶々丸ちゃんのマスターであるエヴァちゃんは可愛いモノが好きだったはずだ。あんなゴツイ大男タイプなんて側に置こうとなんてするわけが無い。

マジで無駄な想像したわー…。ゴツイ茶々丸ちゃんなんてモノを……ぅぷっ！？

「？？？…いえ、資料にあるように別アプローチからの派生系と考えられます。比較資料が少ないので断言は出来かねますが男性型と

女性型で内部構造が随分違いますからね」

「なるほど…。さて、どうしたものか…」

嫌な想像は頭を振ることで追い出した。ここで考えるのは撤収を終えた今、俺達がどう動くか？だ。

報復するにしても単純に武力行使なんぞしたら麻帆良学園の魔法使い共を刺激しかねない。ただでさえ超と葉加瀬は麻帆良女子中学の生徒…それも木乃香ちゃんや明日菜、刹那ちゃんのクラスメートだ。

正直に言おう……。殺り難いです！！！どうしろって言うんだよ！？殺したら木乃香ちゃん達が不審がるだろう。血生臭いことに勘の鋭い刹那ちゃんにはバレる可能性もある！！殺してしまうのが一番簡単な方法なのは確かだ！

……でも！

知られでもしたら嫌われるだろうなぁ…。隠蔽工作は万全にするけど…あの連中妙に勘が鋭いから何れバレると確信できるんだ。

「今回の報復も兼ねて絡繰・茶々丸を拉致、分解分析して資料としますか？」

「バカ。茶々丸ちゃんは既に一個の人格だ。そんなことできるか」

それに超謹製とは言ってもエヴァちゃんの従者にそんなのことをしたら彼女の反感を買うことになる。そんな無駄なことは避けたい。

「も、申し訳ありません！出過ぎたことを言いました…」

「あー…気にするな。一つの手段として提示してくれただけなんだから、さ。よくやってくれているよ、うん」

「は、はいっ。ありがたき幸せです！」

うん。責める気は無いんだ。ただ、ね？サラッと拉致案を提示されたからビックリしたんだ。それにプラスして分解して分析しようなんて……出来ません！茶々丸ちゃん相手にそんなこと出来ません！

……あー？それと一応、言っておくけど今まで拉致なんてしたこと無い……とは言わない。けど！したとしても、それは“下衆”に対してしか、やったこと無いからな？勘違いするなよ？

「はい次、行くよ。……超・鈴音の対処は監視に止めているんだな？」

とりあえず報復するにしても超・鈴音に手を出すと俺のほうで色々と弊害があるから遠距離からの監視に止めている。

マジでどうしようかなー…？

俺的には終わったことだし、それほど恨みと言えるモノは無いんだ。確かに襲撃当初はイラッと来て殺っちゃうか？なんて考えもしたけど相手が超・鈴音じゃねぇ…。手ぇ出し難いやね。

「あ、はい！そのことで司令代理を始め親衛隊は直ぐに排除しよう、としていたのですが葵司令の方針があり悔しそうにしていましたよ？なぜ攻めないのか、と…」

「あはははは♪アイリ達も元気だなぁ」

はい、わかってますよー…。襲撃されたことが我慢ならないんでしょう?わかっていても笑っていないと顔が引き攣りそうなんだ!6日前から汚名返上しようとする皆から負のオーラが黒い靄のように立ち上るのが見えるんだよ!?

皆に“俺は気にしていない”と言って回り、やんわりやり込めるのが大変だった…。それでも不満は残るのか、負のオーラを少し緩和出来たくらいだし…。家族に怪我人が出たわけじゃないんだから気にしなくてもいいのにね?

あはははは…。

「葵司令、笑い事じゃありませんよ。皆が考えています。“ご主人様に仇なした怨敵をなぜ討たないのか?”、と…」

「それは…」

だから今、超に手を出すと面倒くさいことにしかならないんだって…。面倒なのは帝国時代の書類処理だけでお腹いっぱいだよ。俺は安全にゆったりと生きたいです。

「……許し難いことなんですよ。私達だけならばまだいいです。我慢できます。……でも、自分のご主人様を虚仮にされて黙ってなんか居られません。そう……必ず後悔させてやります。フフッフフッ…」

あー…君もなのか?君もなんだな?今日はこのままこの子のカウ

ンセリングに費やすことになりそうだ……。この子達が命令を無視することは無いけど、このままでは精神に良くないしね。

ふぅ…アン達はどうしているだろうか？

ふ、と頭の中で月に出向いている子達のことを考えた。今月7月終わりに帰還出来たはずだった。なのに俺が仕事を追加注文したから、どんなに早くても帰還が一月延びてしまうことになる。

ふふ、元気にしているだろうな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――月面プラント…。

Ｓｉｄｅ　アン

お父さんの指示で追加建設することになった生産プラント。ここはその建設中の現場の真っ只中。作業範囲内では普通に呼吸できるように調整済み。

その範囲は建設現場の中心から上空百数十ｍを頂点に半径１ｋｍに渡り特殊フィールドが展開中。ドーム上の形を思い浮かべてくれればいいかな。お蔭でお姉ちゃん達が宇宙服を着なくても作業が出来る。

あれってナノマシン素材だから薄くて動き易いんだけど一つ問題があるんだよ。……薄いから身体のラインがモロに出ちゃうんだ。いくらお姉ちゃん達でも少し恥ずかしいみたいなんだぁ。

ここに居る大多数が自動人形（オート・マータ）と無人作業機。あとは十数人のお姉ちゃん達。今のお姉ちゃん達は全員が白いツナギ姿で腰に工具をぶら下げて駆け回って作業している。

――作業場所の一つ…。

「はーい！いいですよ！そのままー！そのままー！ハイッ！ストップ！次の運搬資材は…！！」

「ハイッ！固定するよーッ！！…ちょっ！？そこ誰かやってよ！手持ちのボルトが無いんだからね！！」

「あっ！アタイが入りまーす！！うんしょ！！」

「お願いねーッ！！」

月の地中深くまで掘られた縦穴（シャフト）へ魔力蒐集の機材がクレーンで下ろされていた。地底部に下ろされた機材は様々なボルトや特殊ネジによって厳重に装置を固定している。

――また、あるところでは…

「だから違うって言っているだろう!?ここはAの配管を始めに埋めて次にCの配管を埋めるの!じゃないと過剰魔力があった場合に受け流して排出できないでしょうが!!」

「そこの!まだ終わらないのか!?もうカモフラージュ用の装甲板を持って来たぞ!」

「なっ?早いよ!!まだ一区画が配管の埋め立て設置が終わってないんだ!!」

「それ以外は終わっているなら問題無い!設置工事を始める!!」

「あー!もー!!お前ら!急げ!装甲板に潰されるぞ!!」

「「「「り、了解ッ!!」」」」

全部で4区画ある内の1つで行なわれる魔力循環用の配管設置工事をする者。4区画の内3つは設置が終わったようだが残り1つが作業を実行中のようだ。だが、そこに擬装用の装甲板を運んできた別の班が現れた。

――細かなところに目を向ければ…。

「ピーッ!ピピッ!ガガガッ!ピーピピッ!!」

「そこの無人作業機からおかしな音がするぞ!整備に回しておけ!」

「わかりましたーッ!……って!!誰だ!?無人機に天然オイルを

入れたのは!?」

無人機に天然オイルを与えたバカ者が居るようだ……。あとで誰がやったのか調査する必要があるようだ。

――お昼頃になれば…。

「おっひる♪おっひる♪……あ?だ、だだだ誰だーッ!?私のお昼を持って行ったヤツはッ!?!?」

「もぐもぐっ…んぐんぐっ…んあ?あれ?そこの弁当って残ってたのじゃなかったの?」

「違うッ!!それは私のだ!!あ?ああッ!?もう半分も無い!?うわーん!私のお昼ご飯ーッ!!」

「ごめん!ごめんなさい!!新しいのを持ってくるから許して!ね!?」

「なら3つ持って来て…」

「多くない!?多いよね!?そんなに食べられるの!?」

「余裕♪」

お昼に楽しみにしていたお弁当を間違えて食べられたお姉ちゃん。そのお弁当を食べてしまい慌てて謝るお姉ちゃん。

ただね？お姉ちゃん…。お弁当を3つも食べたらお腹壊さない？
それに体じゅ…げふんっげふんっ！！くる、くるしっ！？ぜぇ…はぁ…ぜぇ…はぁ…！お、お姉ちゃん…い、いきなり首絞めないでよね！？

――午後、再開された工事風景…。

「B5の配線、持って来て！！こっちに無いの！！」

「はーい！ただ今ーッ！」

「ありがとう！…って！？そこの自動人形（オート・マータ）！！これはB4の配線！私が頼んだのはB5の配線よ！！」

「ひぇーッ！？も、申し訳ありませーん！！えーと！えーと！あった！はい！B5の配線です！！」

「はい！確かに！！今度からは気を付けてよね！！」

「はいーッ！！」

姉御肌なお姉ちゃんとちょっとドジな自動人形（オート・マータ）のやり取り。……ちょーっと、あの自動人形（オート・マータ）は調整が必要かなー…っと頭の中のメモ帳に書いて残した。

――午後の作業の後半…。

「いだっ！！工具は使ったらしまっておけと言っておいたでしょーがッ！？」

「……その工具は、ア・ン・タ！のでしょうが！？」

「あだっ！？うぅぅ…。行き成り殴ること無いじゃんかよぉ…」

「あ〝あ〝んっ！？何か言ったか！？コラッ！！」

「サー！何も言っていません！！サー！！」

後片付けも考えて作業していたお姉ちゃん…だったのに自分の片付け忘れた工具に躓いてしまったみたい。そこを班長に見付かって怒られているよ…。あんな職人肌のお姉ちゃんに怒鳴られたら怖いかもしれないね？

――1日の作業も終わってお片づけ…。

「はい♪それじゃ自動人形（オート・マータ）の皆さ～ん！ここにある資材はD区画へ運んでくださいね～！！」

「「「了解しました…」」」「「はい…」」「「「「畏まりました…」」」」

「あ、帰りには別の物を運んでもらいますからね～！わかりましたか～！？」

「「はい…」」「「「了解しました…」」」「「「「畏まりました…」」」」

お姉ちゃんの1人に先導されて自動人形（オート・マータ）達が資材を運び出して行く。持ちきれなかったものは無人作業機が荷台代わりになって列を成している。さっきのドジっ娘自動人形（オート・マータ）と違ってこっちは淡々としているなぁ…。

そんなこんなが、あった今日一日の作業を確認している私…。いつもなら数人は居るはずの部屋も今は私1人だけ。地球時間で夜の11時過ぎだからね。仕方ないよ。下手に夜更かしなんかしたら明日の作業に影響が出ちゃうものね。

「……うん♪この調子なら早ければ8月終わりにはお父さんの下へ帰還出来そうね♪」

最後に全ての情報を見直して間違えがないかを確認した。そうして間違えは無いと判断して一息ついた時に私を探す声が聞こえた。

「アーン、居るか？聞きたいことがあるのだが」

「はいはーい。ここに居ますよ」

こんな時間にどうしたんだろう？とも考えたけど、こんな時間“なのに”と考え直した。もしかしたら急ぎの重要事項かもしれないしね。

「おぅ、そこに居たのか。アンよ、一つ聞きたいのだが第一次生産

された戦闘艦艇は随時葵様の下へ発進させて良いのだろうか？」

第一次生産の艦隊…一艦隊の内訳は以下の通り。

３００ｍ級の戦艦が２隻。
２００～２５０ｍ級の巡洋艦が軽・重併せて１２隻。
４００ｍ級戦闘空母が３隻。
１５０ｍ級の駆逐艦などの小型艦を２０隻。
他、４５０ｍ級の大型補給艦や５５０ｍ級のドッグ艦がそれぞれ３隻。

これらを第四次生産まで続けることになる。四個無人艦隊と司令塔を勤める私アングレカム。こんな戦力を使う機会がこの世界にあるのかな？

むー…？でも、この艦隊を四つも造るとなると使用した月の資源が途方も無い量になるんだ……。まぁそれでも月の資源は十分以上に残るけどね。使い切る勢いで艦隊を生産したら……だいたい１２６年くらいかな？

そんな勢いでやったら将来、資源を求めて来た地球の人は不自然に抉れた月を見て驚くかもしれないよ？ハハハッ♪やらないけどね…。ある種の自然破壊かもしれないし…。

それと実際に抉れているのは地中深くだからね！！地表部分を抉ったら地球の観測装置に映るかもしれないから。地表で作業する時は熱光学迷彩の機能を持つフィールドを展開して短時間で終わらせるようにしているのよ！！

このフィールドの維持は楽じゃないんだよ?装甲に施すものと違って空間を覆うランダムな光の屈折を計算してフィールド内が見えないように調整しているんだから…。

あ、あれ?考えていることが逸れに逸れたような…?ま、まぁいいかな。えーと、何でしたっけ?……ああっ、そうそう!艦隊の受け渡しでしたね!確かお父さんから指示があったような…。

「はい、構いませんよ。ただし艦隊進行の時は隠密裏に行動させてくださいね?」

「あいよ。その辺は万事抜かりないよ。他に注意点はある?」

「ええと、そうですねぇ…。あ、麻帆良上空へ到達する時刻は深夜になるようにしてください。認識阻害術式があるとは言っても人目は出来るだけ無いに越したことは無いですから」

深夜なら警戒厳重な学園の上空と言っても発見されるリスクは減らすことが出来るよね。各艦に施された認識阻害の術式は魔法使いの使い手による変動するなものではなく、機械式の規格化された一回こっきりのものだ。

因みに術式が与える効果は“不思議に思わない”だ。こういう風に単純なものほど違和感を少なくして相手を術中に嵌めることができる。それに擬装のメインには熱光学迷彩を採用している。魔法的、科学的にもほぼ完璧だね。

「了解。まぁ熱光学迷彩は標準搭載してあるし至近で無ければ発見されるようなことは無いだろうさ」

「ふふふ♪そうですね。ですが用心するのは悪いことではないですから。到着したらお父さんが直接、［格納庫］へ収容します。そこで必要になるその時まで時間凍結処理する予定です」

［格納庫］かぁ…。アレはなぁ…。お父さん曰く拡張に拡張を重ねたから広過ぎて内部を把握しきれない、らしいんだよね。

それに［格納庫］は今も尚、空間が拡張中らしいよ？お父さんが“どうせ拡張するなら空間自体が自分で自己拡張すればいいんじゃね？”なんて軽い気持ちで増築プログラムを構築したのよ。……どれだけ物を仕舞い込む気だろう？

お蔭で普通に管理するのが大変！それでも自動人形（オート・マータ）が上手くやってくれているから内部に格納されている物の目録は一応あるみたい。一応だけどね！！私が目録を見ても意味不明なモノがあるんだよ？

…が○だむはんまー？とか流派東○不敗？の武術書、なんて物もあったんだ。多分これはお父さんの手書きだね…。それに聖杯○争計画？……お父さん、何がしたいのか私にはわからないよ。

「なんだい？直ぐに使わないのか。夢はデッカク世界征服！みたいにさ？」

「ふふ♪そこは、ほら？お父さんですから」

世界征服なんてことお父さんがするわけ無いじゃないですか。出来るだけの戦力はあると考えるけど……戦後に維持するのが面倒だ

と思う。お父さんなら“世界なんていらない！面倒だし♪”と言いそうだもの。

「んー…？あー…葵様だもんなぁ」

「平和が一番♪ですよ？」

「平和かー…。アタシは眠くなりそうだよ」

「はい♪」

お父さんは晴れた日に芝生の上でお昼寝するのが好きだから一緒にしたらどうかな？私は“寝る”という行為が無いから、わからないけど、グッスリだと思うんだぁ。

「元悪魔のアタシには日常は生温い気がするけどなぁ。あっははっ」

「ふふっ♪でも、お嫌いですか？」

「……そんなことは無い、な。うん。不思議と好ましく感じている」

「皆、同じです♪ただ……元悪魔の皆さんは時々ですがオイタをしたくなるみたいですけどね」

「あっはっはっはっ！それは仕方ないよ！今のアタシ達が悪魔の戦闘本能を理性で抑えているとは言っても無くなったわけじゃないからね！」

元悪魔のお姉ちゃん達は、ふとした時に戦闘本能が湧き上がることがあるんだよね。一応、普段は個人戦闘や集団戦闘の演習に始まりミリーお姉ちゃんやオリビエお姉ちゃん達6人を相手にした超特訓方式のものまで…。

こうした様々な方法で一種のストレス発散をしているんだけど最近は相手が固定化しているから変化が無いんだってさ。ソレを知ったお父さんが…。

「……前にお父さんがちょっと零していましたよ？“ストレス発散のために紛争地帯へハイキングさせるか…”って」

「おっ？いいねぇ♪多分、場所は旧世界だろうから……派手な魔法は使えないか。でも他はヤリタイ放題でいいんだよな？」

ヤリタイ放題…。んー…そう上手くいくかな？多分だけど魔法を大々的に使えないから武装を強化してくれると思う。だけど、むー……あっ、試作品とか？

「さぁ？どうなんでしょうね？んー…試作兵器の実証試験くらいはあるんじゃないかな」

「ふむぅ…最前線に立つ戦闘者としては汎用性の高い武器が望ましいものだな」

「……特殊な武装はなるべく作らないように言っておきますね」

一応言うだけは言ってみますけどね。でも、それくらいしてもらわないとお父さん的に採算が取れないんじゃないかな。実証データだけでも欲しいんだよ。実戦保障が無いと兵器として信用できない

もの。

お父さんの作るモノの性能は他とは比べ物にもならないほど優秀なんだけど兵器としては欠陥品が多いんだよ。

曰く生産性が悪かったり…。曰く使用に際して癖が強かったり…。曰く予算や資材を異様に使ったり…。他にも…いえ、余りこういうことは言うことじゃないよね。製作物としてはみんな優秀なんだから。

「む？あー、いや、すまない。不満は無いんだ。ただ、その……武装が増えると使い方を覚えるのが大変だからな」

「……ふふっ♪ははは っ♪」

そうだよね。ふふふっ♪使い方を覚えないと有効な時にそれを使いこなせないからね。ふふっ、確かに武装の数は多いかもしれないけど、その分どのような戦闘にも対応できるのも事実だよ。お姉ちゃん達には上手く使ってほしいな♪

「――――～～っ！笑うなっ。くっそぉ、槍や剣で殺り合った時代が懐かしい…」

「ふふっ♪ふふふ♪では今ある個人用戦闘強化服（パワーアシストスーツ）の発展型を開発してくれるように言いましょう。それならインファイトが出来ますよ？ふふふ♪」

「笑い過ぎだよっ、アン！……まぁ、頼んだ」

「はい♪ふふふっ♪」

今の戦闘服は熱光学迷彩と個人用ＤＦを内蔵された防護服で防弾、防刃、耐熱、対衝撃素材。オマケにどんなにしても皺になり難い！という高性能の物なんだ。それに機能を追加するとなると……。

お、お父さん！頑張って！！あはっあははははっ……。

お父さんは元気にしているかなぁ…？明日は定期連絡の日だからお父さんにも通信を繋いでみようっと♪むふふふ♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アン

第四十六話「友情？と父と娘と」（後書き）

はい！今回は超・葵・アンの三本でお送りしました！

どうしよう？話が進まない…！？

まぁそれが本作品の味といえば味なんですけどね。

次回は出来ればですが葵が学園長と会談できればと構想しています。

予定通り出来るかは作者にも未知数ですけどね！！

では！また！

感想＆ネタは随時募集中です！！

第四十七話「初対面と疑惑と襲撃と」（前書き）

メリークリスマース！！
作者は考えて、そして気付いたんだ…。
忙しくてかけないならばストックを放出すればいいのでは？と…。

では続き！

第四十七話「初対面と疑惑と襲撃と」

――麻帆良女子中等学校前…。

Ｓｉｄｅ　葵

「はぁ…」

目の前には学園都市の最高責任者たる近衛・近右衛門翁が居るはずの一校舎がある。そして今、俺はその校舎内に入ろうとしている。いや、入るというか…足踏みしている？なぜ足踏みしているかと言うとね…。

入るのがとてもとても戸惑われるんです…！だって！あの学園長（ぬらりひょん）だよ！？相対した時に「今まで麻帆良に潜伏するように居たのは、なぜかね？」なんて聞かれも答えられません！

間違っても「アンタの悪戯心が信用できなかった…」なんて言えませんよ！！ええ！言えませんとも！！それと「本当に人間ですか？」なんて言えませんとも！！

そもそもの話し俺がなぜこんなところに来ているかを言うとだね？木乃香ちゃんが俺のことをポロッと…いや、ボロッと話しちゃったみたいなんだ。彼女の祖父である学園長（じじい）に、な。

……因みに“木乃香ちゃんが～”っていう情報はタカミチから聞いた。ただ…木乃香ちゃんが“何”を話したのかは俺も知らない。

そのことを知った翌日に学園長(じじい)からタカミチ経由で“挨拶に来い”と言われました。俺、泣いていいかな?何が悲しくて今まで避けていた相手に会わねばならんのよ…。何を言われるかわかったもんじゃないわー…。

いや…一応、近い内に挨拶しに行く予定ではありましたよ?一年後とか…十年後とか…ありましたけど……。もう少しゴタゴタが片付いた後に行きたかったー…。

しかし、今の今までバレなかったのにまるで謀ったようにこの忙しい時に呼ばれるなんて…。大戦期に散々ナギを探し回った時は“ご都合主義”では見付からなかったのに…。今回はそのご都合主義ですか!?タイミングがマジでイヤ過ぎる!!

詳細は省くけどな……忙しいんだよ!!自分で蒔いた計画だから自業自得なんだけどさ…。本当に、もう少し時期をずらしてくれてもいいんじゃないかな!!?

すまん…。少し興奮…もとい取り乱した…。

それでな?こうなると孫娘大好き（はーと）な学園長(じじい)のことだ。孫娘に悪い虫が付いたのでは?と勘ぐりはじめたようだ。そこで学園長は考えた。孫娘の担任であるタカミチなら何か知っているんじゃ?とな…。そして直ぐに連絡がタカミチへ入る。

どんな内容かは省略するが「誰？知ってる？誰？」「え？あの？え？」「吐きなさい」「……はぃ」というような会話が学園長（じじい）とタカミチとの間で行なわれたらしい。

まぁ一応タカミチが全部ゲロる前に俺へ連絡をしてきたことだけは褒めてやる。お蔭で少しは心構え的なことが出来た。

それと連絡が来た時は時間もなかったので簡単に俺の設定を決めた。タカミチにはゲロる時に俺のことは木乃香ちゃんのために詠春が護衛として雇った“ただの”魔法使いということにしたんだ。

…はい？何か、文句でも？今、学校前に居る俺は“ただの”魔法使いですが？一応、挨拶に来たんだから正装してきた。とは言っても少し派手で真紅のワイシャツに黒のスーツ一式。ワンポイントにルビーの填ったネクタイピンをしている。

……ラミエルさんはネックレスよろしく首にかけてワイシャツの中に隠してあるけどね。だって！１人じゃ怖いじゃん！？基本、俺は臆病者なんだからな！？それにここはあの“ぬらりひょん”の居城だよ！？

マジ勘弁だわー…。できればここには永遠に来たくなかった！何だかんだで、はぐらかしてきたのに……。木乃香ちゃん、君は俺に何か恨みでもあるのかな？

むー…行くべきか？行かざるべきか？そこが問題だ…。

「あれ…葵さん？何しているんですか？こんなところで…」

校門前でうんうん悩んでいたら背後から女の子の声で呼ばれた。
声に聞き覚えがあるけど誰だ？と思って振り返って見てみれば、そこには髪を後頭部の高いところで一本に結った女の子。あと…中学生にしてはやや長身だった。

ああ、この子は…。

「ん？あー、アキラちゃんか。いやね？木乃香ちゃん関係で、じじ…祖父である学園長になぜか呼ばれてね。…そういうアキラちゃんは？」

「学園長に…？あ、えと、私は部活です。大会が近いので、もう追い込みですから」

夏真っ盛りだもんねぇ…。俺の今の真っ黒の格好を素でしていたら間違いなく熱中症や脱水症状になるかもしれない。一応、俺の服から５ｃｍの範囲には魔法で気温調整をしているから余裕で着られているんだよ。

そうじゃないと今の俺は暑さで死ねると思うんだ…。何で俺はこの服装をチョイスしたのかなー…？この季節には失敗だったかもしれん！俺はともかく周りが暑そうだ！！

……申し訳ないです、はい。

しかし、もう、そんな時期かぁ…。アキラちゃんも水泳部に入部して半年くらいなのに一年レギュラーだもんな。本当にスゴイ才能だ…。

……うむ。大会でアキラちゃんが活躍するのは予想できる。

彼女には才能があり、尚且つ才能に胡坐を掻くことなく努力もしている。楽しそうに取り組んでいるのも大きいかな。やっぱりね？何事も楽しむ子は伸び易いからねのよ。

ただ……いつか高い壁にぶつかった時が怖いけど、ね…。

まぁその時は年長者として出来る限りのことはしてみようと思う。頼られれば…だけどね？何はともかく大会で活躍するであろうアキラちゃんのために出来ることとか。

……そうなるとパーティーしか無くね？祝勝会とか…。

「そっか。まだ一年なのに大会とかに出るんだからアキラちゃんはすごいねぇ。……そうだ！大会が終わったら祝勝会しよう！うちの店を貸切りで準備しておくよ！」

「えっ！？そんな…ダメです！私のためなんかで申し訳ないですよ！」

「お嬢ちゃんが何を遠慮しておるか。くくくっ♪よし！決まりだ！日程は店に連絡して来いよ？絶対だからな？」

子供が遠慮なんかしているんじゃないよ？やった♪タダ飯だ♪くらいに考えておけばいいんだから。な？この子は少し生真面目だから変なところで遠慮するんだ。子供は大人に迷惑をかけてナンボだと俺は考えるんだけどなぁ。

いいか？パーティーはするぞ。活躍した子にはご褒美があって当

然なんだからな。

「……はい、わかりました。……（ボソッ）もう、言い出したら聞かないんだもんなぁ」

「何か言ったかな？かな？」

「いいいい、いえ！言ってませんじょ…じゃない言ってませんよ！」

ちゃんと聞こえてんだぞ？まったく…俺は、そこまで頑固では無いつもりだ。他人の意見は聞いているんだ。家族以外のは本当に“聞く”だけの時もあるけどな！

「それじゃ部活に言ってこい！怪我なんかするんじゃないぞー」

「はい、行ってきます。それじゃ！」

いつまでもここに足止めするわけには、いかないからアキラちゃんと別れた。せっかく練習に来たのに俺のせいで肝心の部活に遅れさせたら申し訳ない。

走り去って行くアキラちゃんの後姿を見ながら考える。

「ふむ……」

アキラちゃんと話して幾分、気分が楽になったな。リラックスした今なら、あの学園長（ぬらりひょん）のところへ行けそうだ。…それでは、行くか♪

校内にある来客用の玄関から入るとタカミチが居た。……コイツ、待ち伏せしていたのか？今日のタカミチの笑顔が胡散臭くて仕方ない…。

「葵さん、待っていましたよ」

「ふんっ。まだ来るつもりは無かったんだけどね…」

本当に“今は”来たくなかったです。せめて、あと4ヶ月は待ってほしかった。呼び出されるとも思わなかったしな…。ふぅ…計算外も甚だしい。

「ハハハ…。それじゃ案内しますね」

「はいよ。……あ、その前にトイレ行かせてくれる？」

「……」

何だよ！？生理現象なんだよ！！仕方ないだろうが！？長時間、門の前で足踏みしていたから仕方ないんだよ！！

そんなわけでタカミチに校内を案内されること数分。俺の目の前には重厚な扉があった。

……素朴な疑問なんだが中学校に、こういう扉は必要なのだろうか？なんとなく威圧感はあるから威厳は感じられるけどさ。

――トントン…。

「学園長。葵さんをお連れしました」

「……うむ、開いとるよ。入りなさい」

「失礼します」

扉越しだが割りとハッキリとした声で返答があった。タカミチが開けてくれた扉から俺は部屋の中へ入る。続いてタカミチが入って扉を閉める。タカミチはそのまま歩いて俺から見て学園長の右後ろに立った。

俺は執務机を挟んで学園長の正面に立つ。正面から見た学園長の姿の感想を一言で表すならば、それは……長ッ！？だった。いや、マジで長いって！骨？あれって骨なのかな！？まるで崑崙山の仙人だなー…。

表情はポーカーフェイスを装っているが内心は学園長（ぬらりひょん）の頭部のことでお祭り状態だった。

俺がそんなしょーもないことを考えていたとは思いもしないであろう学園長は最初の言葉を発した。

「はじめまして、かのう。いつも孫娘が世話になっておるようじゃのう。ワシが当学園の学園長をしておる近衛・近右衛門じゃ」

「……はじめまして、九重・葵です。早速ですが本日はどのようなご用件で？」

「フォフォフォ♪まぁそう急ぐこともあるまい。ささ！そこに座りなさい」

好々爺然とした学園長（じじい）が予め用意したのだろう。執務机を挟んで学園長（じじい）の正面になるように椅子が置かれている。

何を考えている？椅子に仕掛けでもあるのか？いや…そんなことをする必要は無い、か。まだ俺は不審なことはしていない……わけではないが。学園側にバレるようなことはしていない！超の件は油断したけど…。

とりあえず素直に座るか…。下手に拒んでも変に勘繰られてしまうだけだ。

「はぁ…それじゃ失礼して」

「お茶は緑茶でよかったかのう？一応、紅茶もあるのじゃが」

「いえ、お構いなく。お…私として呼ばれた用件を“早く”終わらせたいので」

暢気に学園長（じじい）とお茶なんてしたくないんだ。どうせお茶するなら可愛い女の子がいいに決まっているじゃないか！イカン…つい、本音が…。

「フォフォフォ。では本題に入るとするかのう。君は……」

「ッ！」

学園長（じじい）からのプレッシャーが増した！？何だ？このまがまがしいオーラはッ…！？一体、何を聞かれるんだ！？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

少し時間は戻り…。

――麻帆良商店街…。

Ｓｉｄｅ　木乃香

麻帆良の商店街へ今日のお昼と序でに今晩のオカズの買い物に来た。確か今日は八百屋さんで夏野菜が安かったはずだ。

商品を手に取ってジックリと確認する。ここの八百屋さんの品物はみんな新鮮やけど少しでもいいものを選びたい。

「きゅうり…トマト…はオーケーやな。シーチキン…パスタはこのあとスーパーへ行くとして…。えぇと他に買い忘れは…ん？電話？明日菜かなー？」

会計を済ませて商店街の通りに出ると携帯が着信を知らせてきた。取り出す時に今日の予定は何も無いはずやけど…、と考えた。液晶画面に表示される着信者の名前を見ても首を捻るしかない。

む？大河内…？あれまぁ、どうしたんやろ？

「もしもしー？」

『あ、もしもし？近衛さん、今、大丈夫？』

通りで真ん中でというのもマズイから端によって電話の態勢を整えた。堂々と真ん中でなんて他人様の迷惑にしかならへん！そんなことやったらアカンのや！

……仮にそんなことしたら葵兄さまに怒られてまうわー。葵兄さまは普段は優しいけど気に入らないことやイケナイことは叱るのに容赦が無いから大変なんやー…。

「……大丈夫やよー。どうしたんー？」

『うん…。今、学校なんだけど校門前で葵さんが居たから声掛けたんだ。そうしたら近衛さん関係で学園長に呼ばれたって』

「……はへ？えっ？葵兄さまがっ！えっ！？」

何で葵兄さまがおじいちゃんのところへ行かなアカンの！？ついポロッと葵兄さまのことを話してしまったのが昨日のこと……。えぇとー……まさかっ！？まさか！…まさか！！やよね！？

おじいちゃん先走り過ぎや！ちょっと気になる人が居るんや♪って話しただけなのに次の日に呼び出すやなんて！！

ぁ……。アカン……葵兄さまに自分のことはおじいちゃんに秘

密やって言われてたのに…。昔のことやからスッカリ忘れてたわー…。どうしよ?今回のことで葵兄さまを怒らせたりせんやろか?

そもそもおじいちゃんは何で私がちょっと言っただけで呼び出すん!?相手に失礼なんちゃうんか!?こ、これが切欠で葵兄さまに嫌われたら……ど!どうしよ!?

ア、アカンわー…。考えがまとまらん…。

『…何か知ってる?』

「あ!?ううん!知らんよ!?それで……」

しまった…。予想外のことやったから言葉が詰まった。変に思われてないやろか…。ううん!今はそれよりも葵兄さまの居所や!今、葵兄さまとおじいちゃんはどこに居んのや!?

さぁ!大河内さん!キリキリ吐きぃ!?

『えっ?あの、ええと、学園長室だと思う。うん、最後まで見ていたわけじゃないからわからないけど、多分そこに』

「わかった!ありがとーな!」

『え!?あ、ちょっ…』

まだ電話口で何か言っていた気がするけど私は構っていられない。居場所がわかったからにはおじいちゃんの暴挙を阻止せなアカンのや!手遅れになる前に…!!

「早よ行かな…！葵兄さまが危ないっ！！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　木乃香

時間はやや戻って葵が学園長と話している時…。

――麻帆良女子中等学校…。

Ｓｉｄｅ　アキラ

水泳部のあるプールへ着いた時、そういえば…と思い出した。

ここに来る前、校門近くでお気に入りの喫茶店のマスターである葵さんが居た。話しを聞いてみれば、なぜか学園長に呼ばれて校舎を訪れていたこと。それは近衛さん関係だということも。

……真夏なのに真っ黒な格好だったのも気になった。あんな格好で暑くないのだろうか？服のセンスは悪くなかったから冬とか秋とかならアレの見栄えはいいと思う。

服装のことは置いておいて……少し気になって近衛さんへ携帯で連絡を取ったのが十数分前…。話し終わると近衛さんは何か取り乱していたように思う。

「どうしたんだろ？慌てていたみたいだけど…」

何か…問題かな？でも、どちらが問題を起したの？…学園長とは思えない。仮にも教育者のトップだ。そんな何かしらの問題は起さないと思いたい。

そうなると……葵さんが？それこそ、思えない。私が小さい頃から知っているけど、とても問題を起すような人には見えなかった。

思い出すのはつい先程会った葵さんの姿。私が大会に出ると言った時に葵さんは大会が終わったら自分の喫茶店を貸切りにして祝勝パーティーをしよう、と笑って言ってくれた人のこと…。

「……大丈夫、かな？」

ただ、考えずに呟いた。“誰”を心配して…。“何”を心配して…。心配して…。考えたのかもしれないけど何も考えずに呟いた。

「アキラーっ？早く着替えないと練習できないよーっ！」

「あ、うん！今行くーっ！」

更衣室で着替えもせずにボーっと考えていたら部活仲間に呼ばれちゃった。あ、まだ荷物も降ろしてなかった…。

いけない、いけない。部活に来たのに他に意識が向いちゃった。今は葵さんの期待に応えられるように練習あるのみ！だよね。せっかくパーティーしてくれるって言ってくれてるんだから勝利して楽しみたい、よね？うん…。

「大丈夫、だよね…」

意識しないのに何とは無しに私は、また呟いていた……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アキラ

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　葵

さぁ！来いやーッ！！何を聞いてくるんじゃ！？コラーッ！！

「君は……木乃香の何なのじゃ？」

「ッ！……はぁ？」

待ってー…ちょっと待ってー…すっごい待ってー…。

この学園長（じじい）は何を聞いてきやがった？木乃香ちゃんの“何”？だとぅ？……これはどういう意味だ？すまんが意味がわからない。何って何よ？

…もしかして……関係か？木乃香ちゃんとの関係なのか？それが聞きたくて呼んだのか？　タカミチからは木乃香ちゃんが麻帆良へ来る際に詠春が雇った魔法使いと学園長は聞いているはず…。

なのに……何で学園長（じじい）は改めて取調べみたいなことしてくるんだ！？いいじゃん！ただの護衛の魔法使いで！！何が不満なんだよ！

？学園長の孫娘には手を出してないよ！何度でも言おう！！

俺はお姉さんが大好きです！！

いや、こっちの世界に来てから年上の女の子に会ったこと無いけどさ……。あ、そうそう！ウーリやシルビアみたいな小さい子も好きだよ？家族ですから当然じゃん！抱っこしてお昼寝すると暖かくて気持ちいいんだよー…。

すまん…。関係無いこと考えたな。

うむ！それはともかく目の前の意味不明なプレッシャーを掛けてくる学園長のことだ…！！

「もう一度聞こう。……君は、木乃香の、“何”なのじゃ？」

「はぁ…えぇ？ま、まぁ何って聞かれたら兄的なもの？でしょうか…」

もう、いいよね…？正直に“兄”のようなものです、と言っちゃったよ。だって、この学園長と話していると疲れるんだよ…。今も本当に意味不明なプレッシャーを与えてくるしよー…。

「……（ジーーーー……）。……本当、じゃろうな？」

「本当ですよ…。だいたい木乃香ちゃんは中学生ですよ？年齢差があるでしょう…」

歳の差はいいんだよ。別にさ。ただね？中学生はイカンでしょう…。許されるのは映画と劇的な愛の結果だけだって…。現実の社会は冷たいよ？アハハ♪ウフフ♪って喜べるのも最初だけで周囲の大人達は揃って言うんだ。

こんな若い子が――って、な…。

やってらんねぇよな…。……まっ！そんなこと俺には関係無いけどな♪他人様は他人様、うちはうちだからな！！

だいたい木乃香ちゃんは妹みたいなものだろう？木乃香ちゃんも俺のことは兄みたいなものと感じているはずだ。それに家の子達のことも姉のように思っていると思う。……姉、多いなぁ、と思わなくもないわけではない。

「……つまり木乃香が適齢期になれば手を出す…と？」

「何でそうなるかな！？出さないよ！？出しませんとも！！」

何で！木乃香ちゃん限定で考えるんだよ！？俺がその前に誰かとお付き合いしているかもしれないだろうが！！……当てなんて無いけど、な。ちくしょー！！彼女、欲しいな！！

長く生きても異性は求めるものなんだよ！健全な２０代の身体のまま不老になったから最盛期のままなんだよ！！色々とな！！具体

的には聞くな!!ソレがお約束というものだ!!

俺…何、言っているんだろ?目の前に学園長(じじい)が居るけど思わず“ｏｒｚ”の姿勢になりそうだった。あと正直に言おう……。今は軽く悟りを啓き始めて彼女とか、そういうのに対してあまり慌てなくなったんだ。

……そこ!「それは男として終わったんじゃ…」なんて言うもんじゃないぞ!?断じて違うんだからね!!わかったか!?

止め処もないことを……と言うよりも碌でもないことを考えていたら、なぜか学園長(じじい)もヒートアップしていた。何なの!?この学園長(じじい)は!!

「葵君!君は木乃香に不満でもあるのかの!?手を出す価値も無いと言うのかの!?ヒドイッ!ヒドイのう…!!」

「ちょっ!?黙れよ!?じじ…ッ!んんっ!学園長ッ!!そうは言ってないでしょう!?」

もう何なんだよ!?何がしたいの!?俺にはわかんないよ!!ってか!一回マジで黙れよ!!休憩は!?休憩時間は無いのか!?誰か、この学園長(じじい)の頭を冷やしてやってくれよ…。

「ならば!ならば手を出すんじゃな!?あー!イヤじゃ!イヤじゃ!!これだから下心のある輩は!!木乃香も可哀想にのう!このような者を兄と慕うとはッ…!!」

「そこまで言うこと無くねッ！？いや！そもそも言われる覚えが無いんですけどッ！？ついに耄碌したのかな！？この学園長(じじい)はッ！！！」

ちょっとマジでこの学園長(じじい)止めないとな…。タカミチはダンマリを決め込んで役に立たないし…。ラミエルさんをここで取り出すわけにもいかない…。つまり…。

このジジイを俺1人で相手にしなくちゃならない…ということか……。

ナニ、コレ？本当に孤軍奮闘もいいところじゃなかろうか？こんなことならもう1人、誰か連れて……ダメだ。呼ばれたのは俺1人なのに同行者なんて連れて行けないじゃんか…。

「だぁあぁれが頭の長い人外じゃぁあーーーッ！？！？」

「言ってないよね！？俺、言ってないよね！？というか！自覚あったの！？」

とうとう関係無いこと言い出しやがったッ！？誰も言ってないよ！！本人を目の前にしても誰もが言わなかったことを当の本人が言っちゃったよ！！もう！本気で何なの！？今日、呼ばれた意味がマジでわかんないよ！！

それと！……最後に本音が洩れちゃったじゃないか！？思いっきり「自覚あるの！？」って言っちゃったよ！！聞きたくても我慢したの、に…！！本人から言われるとは考えもしなかったよ！！

「何じゃと！？この若造がーッ！！」

「こんのッ!?」

誰が若造だ!?コラーッ!!ヨボヨボのお前よりは長く生きているわーッ!!

――バンッ!!!!!

「おじいちゃんッ!!!!!」

「フォ!?木乃香!」「木乃香ちゃん?」

学園長室の扉が大きな音を立てて豪快に開かれた。それと同時に聞こえた声…。そこに居たのは木乃香ちゃんだった。

今度は何よー…?木乃香ちゃんも交えて話し合いですかー…?はぁ……俺はもう疲れたよ。色々あって、お腹いっぱいなんだよ。もういいじゃん?兄弟的な関係で、さー…。

あれ?でも木乃香ちゃんは“おじいちゃん”としか言ってなかったな…。それに学園長のこの狼狽のしようは、一体…?

「ど、どうしたんじゃ?木乃香…」

「どうした?やないやん!!何で葵兄さまがここに居るん!?」

お、俺?俺は学園長に呼ばれたから来ただけなんだけど…。

「フォ、フォフォフォ…。そ、それはのう?葵君から誘われて…」

「は？」

……おい？じじい……あ、間違った。学園長よぉ…？今まで関係らしい関係が無かったのに、どうやって学園長を誘えと言うんだ？あーん？

「……おじいちゃんが呼んだ、って聞いたへ？」

「ふぉっ！？いや、あの、それは…のう？」

何？何で困った顔して、こっち見るの？何？俺に学園長を助けろ、とでも言うつもりか？……俺にどうしろと言うんだよ。とりあえずお互いに小声で話してみる。どうしていいか今の状況が理解できんのよ。

「えー……ここで俺に振るの？」

「そう言わんとお願いじゃ！このままじゃワシ、木乃香に嫌われてしまうんじゃないかな！？」

「いや、ソレって俺の不利益にならなくね？」

学園長が木乃香ちゃんに嫌われても俺は全然構いませーん！そんなこと俺は知らんよ！！

「フォ！？葵君！そこを何とか！今までのことは謝っちゃおうかなー！…なんて？」

「はーぁ？聞こえんなー？」

なに、言葉を意図的に不明瞭にしてんだよ？ハッキリ謝罪すると言えや！？誤魔化せると思うなよ！？そんな態度なら絶対に助けてやらん！！

「…いや、すまん。きちんと謝罪するから助けてください。お願いします」

「……仕方ない、か。約束を反故にするなよ？」

「もちろんじゃ」

正直なところ学園長（じじい）の謝罪だけじゃ割に合わない気がするけど仕方が無い。

……サッサと帰りたいんだよ！もうイヤだ！何だ！？この意味不明な空間（学園長室）は！？出来れば二度と来たくないです！！もう帰るぅ！帰るのぉ！！

すまん…。過剰なストレス…要するに学園長（じじい）のプレッシャーにやられて疲れ過ぎたようだ…。状況はわからないが……まずは木乃香ちゃんを連れて帰るために説得するか。

「よし。……あー、木乃香ちゃん？」

「……何、葵兄さま？今、おじいちゃんにお説教せなアカンから忙しいんやけど」

「まぁそのカナヅチを下ろして少し待ってくれ。何を怒っているのか知らないけどお説教は後でも出来るでしょう？」

背後から「フォ!?それはあんまりな!?」なんて聞こえたような気がしたが無視だ!嫌われないだけありがたいと思ってほしいものだ!

「……わかった」

よし!渋々とだがカナヅチを下ろして話しを聞いてくれるようになった。ってかさぁ…今、思ったんだけど木乃香ちゃんが何を怒っているのか知らないから説得も何もあったものじゃないんだけど…。

どうしよう?ここは学園長(じじい)の言うとおりにするのは癪だが俺からの用事ってことにするか…。事の前後の矛盾は……勢いで押し切ろう!そうしよう!!

「あー…そのな?麻帆良に来てから俺は学園長に挨拶らしい挨拶をしてなかったんだ。それで今日、改めてしようと、ね?」

「……何で葵兄さまがおじいちゃんに挨拶せなアカンの?」

まぁそれはそうだよなぁ…。今まで何の関係も無かったんだし。敢えて関係があると言ったから…木乃香ちゃんを間に挟んだ関係か?直接の関係はマジで無いな…。まぁどうせ知り合うなら綺麗なお姉さんがいいしな!

「いやー、実は麻帆良へ来る時に詠春から木乃香ちゃんのことをくれぐれもよろしくと言われていたんだ。だから木乃香ちゃんの祖父である学園長にも一度、挨拶する……はずだったんだよ」

まぁ今の今まで伸ばしに伸ばしてきたんだけどね…。そもそもの話しだけどさー、誰が好き好んで学園長(じじい)に会わねばならんのよ、っ

て感じじゃない？

「…それってもう何年も前のことになるんやない？」

「まぁ……そうなるな」

また背後の学園長（じじい）から「え？何年も前から麻帆良に居たの？え？」なんて聞こえるけど、これは……気にしたら負けだ。負けなんだ。そういうことだから無視するのだ。寧ろ俺は何も聞こえません！ええ！聞こえませんとも！！

「はぁ…葵兄さま？」

呆れたように言う木乃香ちゃん。

「いや、真に申し訳ない。まぁ挨拶する相手が学園長（じじい）じゃなくて可愛い女の子なら直ぐに挨拶しに行ってもいいかな？なんてな」

「……（ピクッ）＃」

あ、あれ？木乃香ちゃんの可愛らしいオデコに＃マークが一つ？……何でだ？何で木乃香ちゃんのオデコに＃マークが！？俺、木乃香ちゃんの気に障ること言ったか！？

くっ！わからない…！説得を続けるしかないか……！？

「なんて考えたんだけど木乃香ちゃんの祖父とは言え……ねぇ？おじいちゃん相手にするくらいなら女性客の多いお店に精を出すってものでしょ？」

「……（ピクピクッ）＃＃」

……またか？またなのか！？また＃マークが増えたよ！！二つにな…！！あれさっきのって説得？いや気にしたら負けだな…。そういえば、前にも似たような状況を幾つか見た覚えがあるけど……いつだったか？……チッ、覚えてないな。

目まぐるしいほどに思考が脳内で飛び回っていたら、ふと光を遮られたので顔を上げると影（木乃香ちゃん）が動いていた……。

「あ、あれ？木乃香ちゃん？何でカナヅチなんかをお持ちなのでしょうか？あまつさえ、それを私めの頭に振り下ろそうとーーーとぉぉおおッ！？！？！」

ギリギリだった！！本当にギリギリだったよ！！避けなかったらドタマをカチ割られてたってば！！魔力は乗ってなかったから致命傷にはならないけど心情的には死にそうでした！！避けた時に耳元で“ブォンッ！！”ってカナヅチが振るわれた音がしたよ！！

「チッ……（ボソッ）外したわー」

木乃香ちゃん……。君の中の“何”がそこまでさせるんだい？

「はぁ…はぁ…お、驚いたぁー…。木乃香ちゃん？危ないよ？そんなことしたら…」

「葵兄さまなら大丈夫や。私、信じとるから…」

「そ、そんなよくわからない信頼はいらないかなー…なんて。あはっあははは…」

ほんっとうにいらない信頼だな!?俺が何か悪いことをしたのかな!?木乃香ちゃんに迷惑をかけたことは無い……とは言わない!!色々と、からかったりしたしな!!

照れてハニかんだ木乃香ちゃんや刹那ちゃん、それに明日菜はもちろん。彼女達の成長記録は俺の脳内フォルダと写真や映像などにキチンと保存して大事に残してある。

この状況でそんなことを考えていると背後から袖を引かれた。何?と思って小さく振り向くと、そこには……何かに憑かれた顔をした学園長(じじい)が居た。振り向いた俺に学園長が小声で話しかけてくる。

「葵君や。今日のことはお開きにして、また改めて来てくれないかのう?……(ボソッ)このままだとワシの心臓が止まりそうじゃ」

木乃香ちゃんのプレッシャーにガクブルしてるんじゃないよ!?自分の孫娘でしょうが!?あっ!?何、暢気に緑茶、飲んでるのかな!?「ふぅ…」って一息入れてんじゃないよ!?あっ、こらっ!!

オノレェ…!憑かれた顔しているくせに!?……ふぅ、まぁいい。帰りたい気持ちがあるのは俺もだ。ここは素直に従ってやろう。

「……わかりました。また後日、連絡した上でお伺いさせて

いただきます」

「う、うむ。よろしく頼むぞい」

結局この学園長（じじい）は何がしたかったんだろう？今日はマジで意味不明だったわー…。

「そういうわけだからタカミチ！今日のところは帰るわ！……じゃな！」

「えっ？あの！？いや、はい…気を付けて…？あれ？」

言うと同時に学園長室から即退出した。それはもう逸早くね！木乃香ちゃんが居るから無茶は出来ないけど出来る限り早く退出しましたとも！！

でも、そういうわけってどんなわけだろうね？自分で言っていて疑問だ。……だけどね？勢いって大事だよ！！押し切るには勢いが何よりも大事だ！何事も成せば成る、の精神だな！！熱血とか暑苦しいから好きじゃないけどね！！

「あっ！？葵兄さま！話しは終わっとらんへっ！！待ちぃや！？」

「ちょっ！？木乃香ちゃん！？今日のところは家族団欒で学園長（じじい）とお話ししたらどうかなッ！？」

木乃香ちゃんが追いかけて来た！？何で！？学園長（じじい）に用があったんじゃないの！？学園長（じじい）は椅子の上で過剰ストレスを与えられて干からびたようになってるよ！！ほら？おじいちゃんの下へ行ってあげなって！

「……おじいちゃんとはあとで“お話し”するからええ！！今は葵兄さまのことや！！」

「何とぉぉおおッ！？」

木乃香ちゃんの“お話し”というセリフに学園長も危機感を感じたのか学園長室の中から「何じゃとぉぉおおッ！？！？」なんて俺と同じことを叫んでいた。身内とはいえ学園の実力者である近衛翁を震えさせるとは…！

……木乃香ちゃんの“お話し”って何をされるんだろう？……やっぱりカナヅチか？カナヅチが落ちるのかっ？いや、寧ろカナヅチが乱舞されるのかッ！？

あれって地味に痛いんだよなぁー…。いつから振るい始めたんだっけか？確か……学園長が木乃香ちゃんに見合いを勧め始めた時……。はっ！？

木乃香ちゃんがカナヅチを振るうようになったのは学園長のせいじゃねぇか…！！！ほんっと！碌なことしないな！！あの学園長はよッ！！

学園長室から出て、校舎からも出た。今は喫茶店クレイドルまで歩いて帰宅中だったりする。俺の隣を歩く木乃香ちゃんは今も…。

「葵兄さま！ちゃんと聞いてはるの！？ええかー？葵兄さまは、もっと自覚を持ってくれへんと困るんやー」

「はい、そうですねー…」

説教中です♪俺は暫らく前から同じセリフしか返していなかったりする。木乃香ちゃんが相手とはいえ説教なんて聞きたいものではないでしょう？もう右から左へ聞き流していますよ。

「葵兄さまは無自覚に異性を引っ掛けるんやから、もう…。それに……」

「はい、そうですねー…」

「葵兄さま？」

「はい、そうですねー…」

「……（プチンッ）＃＃」

はっ！？この殺気は何だっ！？首の後ろがピリピリする！？木乃香ちゃんを狙った西の刺客か！？……クッ！どこだ！？この俺にも気配を隠し通すとは相当の手練（てだれ）だな！！

木乃香ちゃんを逃がさないと…！あれ？あんなに説教していたのに何で今の木乃香ちゃんは静かなんだ？

周囲を警戒しながらチラッと隣に居るはずの木乃香ちゃんを覗き見る。そこで目にしたモノは、なんと……！！！

「……む？なんっ…はぅわッ！？」

「……また外したわー」

はい！木乃香ちゃんの振るったカナヅチでした！！先程まで放たれていた殺気も隣に居た木乃香ちゃんだったようだ。……凄まじい怒気を殺気と勘違いしていたようだ。

通りで周辺を警戒しても刺客が見付からなかったはずだよ…。元凶……というより原因は隣をトコトコ歩いていた子なんだからな！どうしようか？マジで感覚が鈍ってきたのかもしれないわー…。

「だからね？木乃香ちゃん。…危ないからやめよう、ね？お願いだから…」

カナヅチを使うのは学園長（じじい）か野菜（ネギ）坊主だけしてほしいものだ。俺にはカナヅチを振るわれて喜ぶような特殊な性癖はないからな！

「それなら私のお話し、ちゃんと聞いてぇな。ええなー？」

それはゴメンとは思うけど説教は勘弁してほしいです。ふぅむ。ここは一つ食べ物で釣ってみるかな？上手くイケば話しを逸らせるかもしれない。

「……木乃香ちゃん、ここは一つ俺の店のケーキセットで手を打たんかね？」

「む？むむむっ！葵兄さまのお店のケーキセット…？」

皆（マイノリティは除く）、大好き甘いお菓子♪

木乃香ちゃんも、この例に当て嵌まるのだよ♪年頃の女の子らしく甘いお菓子が好きだものなぁ？くくく♪これは……イケる、か？いや、ここはもう一押しするか…。くくく♪

「そうそう♪今ならもう一つケーキを付けるよ？」

「なっ？むむむっ！…これは悩むなー。いやいや！ここはガツンと…！でもケーキ欲しいしー…」

「美味しいよー…？甘～いよー…？蕩けるよー…？くくく♪しかもカロリー控え目だ。…どうするのかな？」

カロリー…。それは全ての女性の天敵…。それが無ければ色々なお菓子が食べ放題なのに…。カロリーが怖いから食べられない…。くくく♪

それを気にしなくていいんだぞ？オマケも付けて二つも食べられるんだぞ？食べたいだろう？それに二つ食べても一つの４分の３のカロリーしかないんだ。お得だろう？二つ食べてもカロリーは一つ分以下なんだから…。

「……食べたい、です」

「くくく♪素直な子だねぇ。それじゃ行こう」

「うん♪」

素直な木乃香ちゃんの頭を撫で撫でして俺達はそのまま喫茶店への帰路を歩いて行った…。先程までの殺気と勘違いしそうな怒気を

放っていたとは到底思えない変化振りだった。

……そんなに怒ることだったのだろうか？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第四十七話「初対面と疑惑と襲撃と」（後書き）

葵はハッチャけるし…木乃香は、やや暴走するし…。
今回はヤリタイ放題だった気がする…。

ではでは！
感想＆評価＆ネタは随時受け付けております♪

第四十八話「再会談と笑う金髪幼女とお仕事と」（前書き）

こ、更新したぜぃ…。
もう残りのストックが二つしかない…。また増やさないとｏｒｚ
下手な放出はするものじゃないわー…。
では続きをどうぞ！

第四十八話「再会談と笑う金髪幼女とお仕事と」

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　学園長

「ふぅ…茶が上手いのう」

木乃香が襲撃してきた、あの予定外の騒動から5日後が経った…。後日にあった木乃香の“お話し”は思い出したくも無いわい…。思い出されるのは影に覆われ振り上げられる“モノ”だけ…。

ぁ、ぁあぁあー…カナヅチは…カナヅチは…やめ…て…。やめ…アーッ！ワシ…死んじゃう、かも…。

ハッ！？はて？何じゃったかのう…。何か思い出してはいけないことを考えていたような気もするが…。まぁ思い出さぬということは大したことではないのじゃろう。気にすることも無いのう。

いや、しかし、今、思い返すとワシも少し大人気ないことをしたやもしれんのう。愛する孫娘の口から直接“気になる男が居る”などと言われてしまったから、つい先走ってしまったわい。

男の情報を集めるためにまずは担任であるタカミチから何か知ってはいないか、と思い、話しをしてみれば小さく眉を顰めよった。他人にはわかり辛いが明らかに動揺した態度をしよった。

午前中一杯使って尋問しておったが頑として話さぬ。読心術もタカミチには効かぬしのう…。困ったワシは話しを聞く前に一度、昼食を挟んだ。午後中一杯も根気よく問い詰めようとしたら多少渋られたがようやく話してくれたわい。

内容は案の定じゃった。木乃香が足繁く通う“喫茶店”があるという話しじゃった。タカミチは、これに加えて「木乃香が気になっているのは、この喫茶店の店長ではないか？」と話した。

更に詳しく聞いてみれば木乃香が麻帆良へ寄越す時に婿殿が雇った護衛だった、とも言う。何の変哲も無い無所属（フリーランス）の魔法使い。ただ婿殿の友人ということで引き受けたらしい。

以降は護衛の役目を今年、中学時に編入された桜咲・刹那君へ引き継ぎ、葵君は麻帆良学園都市にて喫茶店を生業に静かに生活中、だったらしい…。

フォフォフォ♪ワシにも感付かれずに学園都市に潜伏紛いのことをするとは……なかなかにやりおるわい。実力は未知数じゃが低くは無いと考える。これは是非とも、この学園を守るために協力してほしいのう。

先の大戦の影響で旧世界に居る魔法使いは減少してしまい慢性的な人手不足じゃ。ここは何とかして引き込めぬものじゃろうか？

前回は勢いから先走ってしまったが人間性などを始め色々と観察が出来たのは大きい。多分にワシの趣味を含んだ会談じゃったが得た物はあった。実際に話して察したがアレは自己を優先するように見えてその実、己が大事なモノを優先しておる人種じゃな。

信用を得るまでは長いが一度、信用を得ることが出来れば裏切られることは無いと見てよいじゃろう。じゃが……こちらから裏切ることがあれば“ただ”では済まされぬじゃろうなぁ。そこは注意じゃ。

そういうわけで今日は再度、葵君との会談の場を設けたわけ、なんじゃが……。どういうわけか当の葵君本人が予定の時間が迫っても一向に訪れる気配が無い。

彼のほうで何か問題が起きたんじゃろうか？しかし、それならそれで連絡の一つがあってもいいと思うんじゃがなぁ…。左の壁際にある大きなアンティーク時計を見ると予定の時間じゃった。

「タカミチ君。“彼”はそろそろかな？」

「……そうですね。もう来る頃ですよ。予定では」

ふむぅ…？件の葵君のこともそうじゃが、隣に立って居るタカミチもタカミチじゃ。何を気にしておるのか知らんが雰囲気に落ち着きが感じられんわい。葵君と何かあったのかのう？

「？？？どうしたんじゃ？先程からソワソワしおって。厠かのう？もしそうなら行ってかまわんよ？」

「い、いえ。そういうことではないんですが少し気になることが…」

「ふむ…。今回は木乃香が乱入することがないようにキチンと話してあるぞい。一体、何が気になるというんじゃ？」

今回、木乃香が襲撃してくることは無いわい。……無いはずじゃ！毎回襲撃されたら流石のワシでも堪らんわい！今日のために木乃香を説得したんじゃ！もう木乃香の“お話し”はイヤなんじゃ…。

「……実は前回の会合のことをエヴァに少し話したら彼女の雰囲気が変わりましてね。葵さんに何か思うことでもあるのでは？と考えると不安で」

なん…じゃ、と…？今度はエヴァンジェリンじゃと？

「エヴァンジェリンが、じゃと？……勘違いではないかね？急ぎの用事があったとか、のう？」

……ワシ、もう…イヤじゃ。もし彼女が木乃香と同じように襲撃してきたら、と考えると胃に穴が開きそうじゃわい。一度ならず二度まで襲撃される。……イヤ過ぎるのう。

孫の木乃香はまだいいじゃろう。じゃが、エヴァンジェリン…彼

女がマズイ。過去に葵君との間に何があったのかは知らぬ。ただ…出来ることなら下手をして問題があったら対処に難儀しそうじゃなー…と思うんじゃよ。

昔、敵対していた関係とかでないことを願いたいものじゃが…楽観視は出来ぬじゃろうな。寧ろ、それも想定しておいたほうが良いかもしれん、か…。

それに、まだ何も起こっていないのじゃからただの憶測じゃ。タカミチの勘違いという線も残っておるんじゃからのう。今から緊張して慎重になっても意味は無かろう。

「そうだといいのですが…」

「エヴァンジェリンのことは気掛かりではあるが…。起こってもいないことを不安に思っていては何も始まらんぞい？」

「それは……いえ、そうですね。エヴァもこんなことで下手な騒ぎは起さないでしょう」

「フォフォフォ。エヴァンジェリンは聡明じゃ、そんなことはしまいよ」

本当にそうであってほしいと切に願いたいものじゃな。今まで彼女をこの地に封じ続けてきた。あのバカ者に頼まれエヴァンジェリンに普通の…そう、光に溢れた生活をさせるためとはいえ長過ぎる年月が経った。

あのバカは3年で封印を解きに来ると自分で言っておったのに約束の期間を過ぎても現れなかった。催促するにしてもどこに居るの

かもわからぬから連絡の取りようもなかった。この時のエヴァンジェリンは……怖かったのう。ガクブルガクブル…。

そんな彼女も随分と前にナギが死んだと聞いた時は静かになったものだ。それからはサボりがちだった授業も益々サボるようになってしまった。この頃は学校に登校はしてもマトモに授業を受けてはいないようじゃし…。

うむぅ…十数年の間に積もりに積もった鬱憤を何かで一度、発散させるのも良いかもしれんな…。

――トントン…。

この部屋の扉をノックする音が響いた。その音で時計を見ると予定から15分も過ぎていた。いつまでも来ない時間で色々と考えておったら、ついに来たようじゃな。

「開いておるよ。入りなさい」

「失礼します。……遅れて申し訳ない」

ふむ…時間に遅れたことに対する自覚がありすぐさま謝罪する。人格的な問題は無いようじゃな。こういう態度は遅れた相手の印象を改善するのに必要なことじゃ。このことから今のところはワシらに敵意が無いとわかる。

話し合いの余地は有り、じゃな…。うむ、うむ♪良きかな♪良きかな♪平和的で実に良いな。

「なに、構わんよ。よく来てくれたのう、葵君。始めに前回の会合での非礼をここに詫びさせてもらうぞい」

「ははは…。今後、あのようなことは勘弁してもらいたいですね」

「フォフォフォ♪もちろんじゃよ」

それはワシもゴメンじゃ…。と思ったのは秘密じゃ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　学園長

やや時間は戻り…。

――麻帆良女子中等学校屋上…。

Ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

フフッ、フハハハハハハブフォ！げほっげほっげほっ！フハハハハハハッ！！！！

げほっげほっ！……見つけた。見つけたぞ！この学園に囚われてから外へ出ることが適わなぬこの身故に出会うことは無いと考えもしたが…。思わぬところで、その機会を得られた！！

なぜこんなに私の気分が高揚しているのか？その理由、それは数

日前のことだ。たまたまタカミチと話していた時のことだった。その時の話しの内容は正直どうでもいいことだったので覚えていない。

……が、一つだけ覚えていることがある。そえは“とある人物の名前”だ。名前は“九重・葵”と言う。

当時、私が山奥にある崖から転落しそうなところを助けられた、あの山でナギが言っていた男のこと。８００年近くを生き長らえた不老の男…。タカミチから話しを聞くに魔力も実力も優秀。

どんな男なのか？どのような魔法を使うのか？従者は居るのか？

十数年もの間、学園に居ることしか出来ない私にはタカミチから当時の話しを聞くことしか出来ない。だが疑問の殆どを曖昧に誤魔化される。おそらく誰かに…いや、九重・葵本人に口止めされているのだろう。

しかし、だ…。今回のヤツは珍しく口を滑らせた！ククク！

「あのタカミチが漏らしたことだ！おそらく真実だろう！フハーッハハハハッ！！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに…」

隣から聞こえたのは私の従者の茶々丸。登校地獄の呪いで今年も中学生になる時に超・鈴音との不可侵の契約の時に渡された魔法と科学で出来た人形。所謂、“はいてく”で優秀なので今となってはそれなりに役に立つ従者だ。

料理も出来るしな……。朝食を作る手間が無くなったのは正直、

嬉しい。私は朝が弱いんだ。吸血鬼だからな。

…んむ？私とて料理くらい出来るわ！戯けがっ！！

んっんんっ！ともかく！今は九重・葵のことだ！早速、ヤツの居るところへ行こうではないか！！フハーッハハハハッハハハッ！！

「ククッ♪行くぞ！茶々丸！！」

「イエス・マスター…。ですがよろしいのですか？今は補習授業中ですが」

「うるさいっ！十年以上も中、高、大と学生を繰り返しているんだぞ！？今更、補習授業など受けていられるか！！」

一体、何年間、学校を順繰りしていると思っているんだ！！この１４年の間、麻帆良のユルイ空気の中で暢気なガキ共と“お勉強”させられていたんだぞ！？今更、習うものなどないわ！

……教科書など既に暗記してしまったよ。毎年、教科書が更新されても同じようなことが記されているんだから当然だろ？

故に！！私は授業をサボることにしたのだ！！普段はただ眠いからサボるんだがな！！まぁサボり過ぎて夏休みの今も補修を受けなければならないんだが……。

知ったことかっ！！！！

「了解しました。……それでどちらへ行かれるのですか？」

「どこだと?それは!……どこだ?」

しまった…。九重・葵が今日、訪れることばかりで肝心の“どこで会合するのか”ということを聞いていなかった。

「マスター……」

「ええいっ、何だ!?その目は!!やめろっ!可哀相な子を見るような目で見るなっ!!」

仕方ないではないか!!長年待った情報が目の前にあったのだ!その大きな情報を前に他の小さな情報など大したモノではないだろう!?だから私は悪くないんだ!!

「……心当たりなどは無いのですか?」

「む。心当たり、か?んー…」

心当たりと言われてもなぁ…。私は九重・葵のことを何も知らないに等しいのだが…。

いや、あのじじいと会合するならば会談場所はここに間違いはあるまい!ならばここで張っていればヤツは確実に姿を現す!なんだ!まったく問題は無いではないか!!フハハハハハハハハッ!!!

「マスター…。センサーに反応有り。学園関係者以外の人物がこの校舎へ向かっています」

「何?…どこだ!?」

「あちらです。学校前の階段です」

「……アレ、か。何と言うか……黒いな、全身が」

夏真っ只中なのにご苦労なことだ。遠目にだが真紅のワイシャツに、上下黒のスーツ姿だった。夏の陽射しに輝く黒髪もあって全身が真っ黒に見える。ここ日本の夏の暑さで、あの格好は厳しいと思うのだがな…。

「……検索結果の中にあの人物の情報はありません。間違いなく学園関係者では無いと推測できます。マスターの言われる人物なのでは？」

「う、うむー…。しかしな？本当にアレだと思うか？」

詳しいことはわからんが茶々丸の検索に引っ掛からないとうことは一般の“いんたぁねっと”にも現代の魔法使いが利用する“まほネット”にも記録が無いということだ。そしてそのような人物が校舎を目指してくる。

普通なら不審者扱いして叩き出すところだが…。

「予測進路から目標は真っ直ぐここの校舎を目指しています。また高畑先生から齎された身体的情報と統合した結果から推測しますに、ほぼ間違いないかと思われます」

茶々丸は、こう言うしな…。あの真っ黒いのが九重・葵でほぼ間違い無いのだろう。となれば、だ…。ヤツの魔力反応を追うのが確実かもしれんな。いや、ヤツは今までも逃げ切っているのだ。

うぅむ…むむむ？魔法的な捜索や追跡ではなく科学的…茶々丸ならば、あるいは…。

「む。そ、そうか？……ヤツの動きを追えるか？茶々丸」

「難しいですが追跡（トレース）出来ます。ですが…」

「良い。ある程度まで位置を特定できたならば、あとは私が魔力の反応を探ろう」

「イエス・マスター…」

ある程度、居所の範囲を絞れるならば問題無い。あとはヤツの魔力反応を探れば良いのだ。ここまで近付ければ問題無く出来る。同じ建物内に居るなら尚更だ。

「ククク♪このチャンス逃がしはしない！行くぞ！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに…」

「フハーッハッハハハハハハハッ！！」

待っていろ！！九重・葵！！今から、このエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルがお前のところへ行くぞ！！フハーッハッハッハハハハハハッ！！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　エヴァンジェリン

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　葵

「ははは…。今後、あのようなことは勘弁してもらいたいですね」

「フォフォフォ♪もちろんじゃよ」

学園長の言葉を聞いても「信用できねぇー…」と思ったのは俺と皆だけの秘密だ！！

「それで早速ですが、なぜ俺は呼ばれたのですか？」

「フォフォフォ♪セッカチじゃのう。……なに、なぜワシらに一言も無く麻帆良に魔法使いのお主が隠れていたか？ということじゃよ。理由を聞かせてくれんかね？」

あー…やっぱり、麻帆良所属の魔法使い達の島の真っ只中に異分子が秘密裏に潜伏していました♪は警戒するかー…。縄張りの中を他人に荒らされたらオモシロくないものねぇ。俺ならトッ捕まえて排除するわな。

まぁ俺の縄張り的なモノは大概が魔法球の［工房］内に凝縮されているから余程のことが無い限り荒らされようがないけどな！重要なモノは殆どがこの中にあるんだ！魔法球自体は某王の宝物庫的空間に放り込んでおけば問題無いし。

はぁ…とにかく潜伏していた理由か。……どうしよう？質問さ

れるであろうことは、予想はしていたけど回答を考えるのを忘れていた…。むぅ…。

ここで正直に「貴方が信用出来なかった…」と、言えたらどんなに楽だろう…。でも言えない！言えませんとも！！相互の関係をこれ以上拗らせるなんてしたくありません。

万が一、殺り合っても負けることは無いと思う。でも、戦闘なんて殺伐としたモノは俺も望んでない。というか面倒だ。誰が好き好んで戦うものか。殺し合いをしたいのなら他で殺れというんだ。

それはともかく、むー…？理由をどうしようか…。木乃香ちゃんの護衛だった話しはタカミチから聞いているだろうからそっち方面でソレらしいことを言って説明するか。あれ？それが一番、無難じゃね？

そうと決まればそうしよう！

「……理由ですか？…麻帆良に来たのは木乃香ちゃんの護衛だったので特に無いです。ただ、学園長へ何も言わずに潜伏していたのは詠春の願いを考慮して秘密裏に護衛するためでした」

「なぜワシにも秘密にしておったじゃ？タカミチ君は知っておったようじゃが？」

「当時は麻帆良のどこから情報が洩れるのか、わからなかったので秘密にしました。タカミチは……偶然だったのです。それに関してはドジを踏みました」

どこから情報が洩れるかわからないというのは本当だった。例え

ば、木乃香ちゃんには魔力を抑えるアイテムを渡していた。せっかくアイテムで魔法使いの目を誤魔化していたのに、そのことが洩れたら意味が無い。

当時、アイテムのことを知っているのは家族だけだった。護衛をお願いされたのは俺なんだから、知っているべき人選は俺の独断と偏見で決めさせてもらったんだ。

学園の人工電子精霊は制圧済みだったし…。監視と警備に問題無かったのも理由として大きいな。人手は足りてたし、学園長も孫娘には気を配っていたようだから問題を感じなかったのもある。

まぁ学園都市内が平和なのもあって気が緩んでいたのだ…。明日菜のことを想定してなかった。まさか転校してきて間もないのに木乃香ちゃんが連れて来るとは…。あの時は思いもしなかった。そのことでタカミチにバレるしな……。

「ふむ…。少し納得はいかんが理解はしたぞい。一応、お咎めは無しにしよう…」

一応、ね…。何を言われるんだか…。イキナリ無理難題を吹っ掛けられるということは無いと思いたい。もし、そんなことされたらヘラス帝国へ行くか……。いや、それはそれで逃げるようで癪だな。

「ありがとうございます。…これで用件は終わりでしょうか？」

「うむ、終わりじゃよ。…おぉ！そうじゃ！少しいいかね？」

来たか…。疑い始めるとワザとらしいようにしか感じられない。ここからは正しく相手の思惑を見極める必要がある。ただ利用され

るだけだと、それは……何と言うか、ムカッと来るからね。

「……何でしょうか？」

「フォフォフォ♪なに、そんなに警戒することないわい。ただ少しお願いがあるんじゃよ」

その“お願い”が信用出来ないんだって…。

「お願い、ですか？」

「うむ。タカミチ君に聞いたが葵君は無所属（フリーランス）らしいのう？」

「はい。束縛されるのを嫌いましてね。昔は所属していたこともあったのですが今は無所属（フリーランス）です。しかし、それが何か？」

まぁそういう設定にしたからね。タカミチはちゃんと伝えた……はずだ。確認のためにチラッと学園長の右斜め後に立つタカミチを見た。わかり辛いが小さく頷かれた。うむ、間違いは無いようだ。

俺の設定はただの無所属（フリーランス）の魔法使い。言ってしまえば傭兵みたいなものも兼任しているということだ。……ただ敢えて言うなら「所属は自分の組織（ファミリー）です」と言ってしまいたい。

変な勧誘とかされても困るんですよ。俺は誰の下にも付く気は無いのだからな。そんな俺のことを家族達は見ていたからだろう…。

無数に点在する無人機達や働き者の自動人形（オート・マータ）達。

アイリ、ファレノ、リチラを筆頭とした何でも出来る精魔奇兵の皆。

甘えん坊な電子精霊のアンと機動要塞その他機能を持つラミエルさん。

７００と数十年…一番長い付き合いのミリー、マリー、ウーリの精霊３人娘

力強く頼りになるオリビエ、リビエラ、シルビアの悪魔３人娘。

いつも見守ってくれているハオとユエの陽月姉妹…。

これら個性の強いこの子達が素直に言うことを聞くわけが無い。下手な勧誘とか、されても殺される……までは、いかなくても半殺しにされるのがオチだ。

その点、目の前の学園長は俺のことを無所属（フリーランス）と思い。何も知らないので正攻法という真っ向勝負をかけているようだ。奇しくもそれは正しい選択だった。俺さえ攻略してしまえば強大な戦力を手にしたも同然なのだから…。

「フォフォ…単刀直入に言わせてもらうぞい。この学園を守るために力を貸してもらえんかね？」

直球で来たなぁ。これは断り辛いものがある。…しかし、極東にあると言ってもここは魔法使いの一大拠点だ。それなりに人手は足りていると考えていたが……実はそうでもないのか？

「……意味がわかりかねます。俺のような一魔法使いに頼らずとも良いのでは？」

「正直に話すと第一線で活躍出来る魔法使いは前大戦の時に、その殆どを減らしてしまい。今の麻帆良は慢性的な人手不足なんじゃよ」

「む……だから俺を、と…？」

大戦の影響はここにもあったかー…。大変だねー…。さて、どうしようか？大きな組織に組するということはメリットも大きい。だが一つだけ懸念があるんだ。それは……“書類仕事はあるのか？”ということだ。

帝国の時に散々に書類を裁いて大戦後の都市復興の時にも書類に忙殺されかけたことのある俺だ。そこはどうしても知っておきたかった。要確認事項と言っても間違いではない。故に今ここでの返答するのは躊躇うものがあるんだよ…。

「そうじゃ。あと…婿殿が木乃香を託すほどの人じゃ。それだけでもワシは信用できると思うんじゃよ」

「それは友人からの願い、それに仕事でしたから当然のことをしたまでです」

お願いの期間は長いけど一度くらいは聞いてもいいかな？なんて思ったからね。木乃香ちゃんを気に入っているのもあったけど、護衛を引き受けたのは、ただの気紛れだからな。趣味人の俺でもお仕事はキチンとやりますって。

「ならば尚更、信用できるというものじゃ！仕事はキチンとこなすと言うことじゃろ？」

「それは、そうですが…。あっ、いえ！俺には自分の店がありますそちらに割ける時間が…」

昼間は喫茶店がある。他へ割ける時間なんて、それほど無い。それに趣味（に走った）の研究もある。あ、研究に関しては［工房］

を使えば時間は作れるのか…。

「良い、良い♪仕事は主に夜間警備じゃ。広域指導員のようなものじゃて。それに何も他の魔法先生や魔法生徒達を同じようにはせん」

「広域指導員…夜間警備…ですか」

「お願いできんかな？」

お願いできんかな？って、この学園長（じじい）…。俺には昼間、喫茶店があると言っているのに夜にも働けと？……このぬらりひょんは俺を過労死させる気なんじゃなかろうな？

それにサラッと言っていたけど聞き逃してないぞ？何気に広域指導員の仕事まで押し付けようとしてきやがった。ここで広域指導員の資格を持たせて、もしもの時は補充要員として使うつもりなんだ。

「……ここで返答いたしかねます。店の方針などもありますから」

「それもそうじゃな。…ならば返答はいつ頃に出来そうかのう？」

今が7月下旬に入った頃…。アン達が帰還するのが8月終わり頃…。やっぱりアン達も合流した後のほうが何かと都合がいい、か…。電子戦もアンが居るのと居ないのとでは段違いだしね。

ラミエルさんでもいいんだけど、今一歩アンには及ばないんだ。やはり仕様の違いだろう。無人機の管制や艦の司令塔がメインのアン。単体戦力、機動要塞、個人用兵装であるラミエルさん。設計思想が軍と個でまるで違う。

うん…。やはりアン達の帰還を待ってから返答しよう。

「そうですね…。およそ一月後…でしょう。仕入れやなんや色々ありますから、大体それくらいでしょう」

「ふむ…わかった。色好い返事を期待したいものじゃな」

「ハハハ…断言出来かねますね」

完全に麻帆良へ所属するのではなくて傭兵として雇用してもらうか…。

知っているか？夜間警備って魔法使いによるボランティアなんだ。立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指している人はご苦労様だよね。俺は無料奉仕で行なう夜間警備なんてゴメンだ。人並みに報酬が欲しい。

広域指導は……気が向いた時に、物のついでにやっておけば文句は無いだろうよ。この学園長が考えるような返事が出来るかは別だが、な。

「フォフォフォ♪うむ、今日はここまでとするかのう？」

「はい。それでは学園長、また…」

――ドンッ！！！

「…またお会いしましょう」と続くはずだったセリフは突然の来訪者によって遮られた。よく扉が壊れなかったものだ。かなりの衝撃を以って開けられたのにな。

開かれた扉の向こうに立つのは金髪の幼女と長身の機械少女…。

何で、この子達がここに…？

「じじいっ！！！！九重・葵は、まだ居るかっ！？居るよなっ！？！？」

「ふぉ？」「は？」「俺？」

え？目的は俺か？……あれ？ちょっと待とうか。おかしくないか？俺は彼女達に名乗った覚えが無い。何だかんだで誤魔化してただ“店長”としか言ってないはずだ。誰かが情報を漏らした？誰が？

そこまで考えてハッ！と“あること”が考えついた。俺は確認のためにサッとその人物に鋭い視線を向けた。

とある人物…タカミチは俺の視線に気付くと不自然なほど顔を背けている。少しも目線を合わせようとしない…。冷や汗も流している。顔色も最悪だ。

俺は確信した…。

お前か…。お前なんだなっ？俺のことをエヴァちゃんに話したのはお前なんだな！？今まで奇跡的に隠し通せていたのに…！！これだから平和ボケした人間は嫌いなんだ！！だからと言って殺伐としたのも嫌いだけどな！！

ちくせう…。エヴァちゃんと関るのはマズイ気がする。死亡フラグ的な意味でね。

「ご会談の中、お邪魔します。…扉のことはマスターに代わり謝罪いたします」

茶々丸ちゃん…。君は礼儀正しいのに主人の幼女が全てをダメにしているよ…。

この後は一体どうなるんだろう?彼女から恨まれる覚えは無いんだが…。うん、無いはずだ。俺は何もしていない。

本当にどうしよう?

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第四十八話「再会談と笑う金髪幼女とお仕事と」（後書き）

はいっ！ということで今回はここまで！
また襲撃された葵と学園長達、互いに友好関係を築けるのか…？
今度の襲撃者は金髪幼女だった！葵達の反応は如何に！？

作者は、こう言ってますがそこまで盛り上がらないと思うのですよ？
ネタを展開出来る時期まで話しを進めたいっ…！
…と、思う今日この頃の作者です。

はぅあぁーっ！葵くん痛いじゃないか…。あっ、いたっ、すみません！

そこそこに作り込む気ではいますので今の発言は無しで、よろしく！

では！またですよ！

ＰＳ．モンハンでは太刀が一番使い易いと思うんだ…。

第四十九話「睨み合い？と拉致？と襲撃者？と」（前書き）

新年おめでとうございます！
冬ですねぇ…。作者は寒さに凍えそうです（ガクブル！ガクブル！）。

年越し蕎麦などを食べつつ更新しました！
お蕎麦…温まります。いや、マジで。
皆さんも健康には気を付けて下さいね！
じゃ！続き！

第四十九話「睨み合い？と拉致？と襲撃者？と」

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　葵

室内に居た、学園長とタカミチ、そして俺。そこに扉を蹴り飛ばして入室してきた２人の少女。真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルとその従者人形の絡繰・茶々丸だ。

誰一人として口を開かない。ある種、独特の緊張感が部屋を満たしていた。

「「「……」」」「「「……」」」

えっ？何なの？コレって何っ？何かのドッキリかっ？何で誰も喋らないの！？何が起こるのさ！？

つーか、タカミチ！お前さぁ、何、エヴァちゃんに俺がここに来ることを教えているのさ？……おい、コラ？何、目線逸らしてんだよ？こっち見ろや？何で？何で話してんのかな？かな？かな？

はぁ……。まぁもう終わったことだから怒らないけどさ。……次は、無いぞ？わかった？わかったな？タカミチ。……よし。理解したようだな。

……次の案件だ。

「「「……」」」「「……」」」

…もう、いい加減、誰か喋ろう？ねぇ？話そう？話し合えば分かり合えるはずだよ。ね？俺自身が、この沈黙に耐えられません…。何で睨み合ってんのさ…。

部屋に入ってきてからエヴァちゃんはジッと穴が開くんじゃないかというほど俺のことを見てくるし…茶々丸ちゃんは静かに従者よろしくエヴァちゃんの後ろに控えているし…学園長とタカミチは全然役に立たないし…俺は早く帰りたいし…。

俺、帰っていいかな……？帰っていいよね？よし、ここは静かに退散しよう。

「……（ボソッ）学園長、俺はここで失礼します。それじゃ…」

「……（ボソッ）ちょっ？葵君っ、それはあんまりじゃないかのうっ？」

「……（ボソッ）ええいっ、放せっ。放しなさいっ。」

袖を掴むなっ！？服が伸びるだろうが！？俺は帰りたいんだ！この不思議空間からオサラバしたいんだよ！袖を掴んで懇願って子供や女の子がやるなら待ってもいいかなって考えるよ？でも学園長(じじい)だとなぁ。……萎えるわぁ。

「……（ボソッ）エヴァンジェリンは葵君に用事があるんじゃっ。君が責任を持つべきじゃろうっ？」

「……（ボソッ）ちょっ？知りませんよっ。…学園長の管理下にあるはずでしょうっ？責任と言うなら学園長にこそあるはずですよっ」

あっ、しまった…。今のセリフは学園長とエヴァちゃんの事情を俺が知っているみたいじゃないか？まぁ今はお互いにそれどころじゃないからスルーされているみたいだけど…。気にしない、気にしない。

「……（ボソッ）それは屁理屈というものじゃっ。葵君の名前を呼んでおったではないかっ」

「……（ボソッ）だからっ…それは……。とにかく俺は帰りますからねっ。あとはよろしくお願いしますよっ？」

「……（ボソッ）ばっ、ちょっ、待っ、マジでっ？」

「……（ボソッ）マジですっ」

小声で怒鳴るなんて器用なマネをして話し合ったが学園長は最後までゴネた。ごめん、学園長…。俺は緊張感漂う空気に耐えられないんだ。基本的にお気楽人生を指針にしているから重いのには長時間耐えられないんだ。

立ち上がってエヴァちゃん達が居る入り口を目指し駆け出した。少し行儀悪かったかもしれない…。でも一刻も早く逃れたかったんだ！なんか厄介事の気がするしな！

「それじゃ皆さん。お取り込み中のようですので……俺は帰りますっ！じゃっ！！」

「……待て」

「ぐっ！？」

…なのに廊下へ出る直前にエヴァちゃんの小さな一言と同時に俺の身体に巻き付く糸で動きを止められてしまった。この対応で俺は厄介事だと確信した。もう必死だ。必死に糸を振り払おうと手足をバタつかせる。

「…待て」

「このっ！糸、なんか、でっ！！」

エヴァちゃんも何を考えているのか更に糸を俺の身体に巻き付けてきた。俺が彼女に何をしたと言うのだろうか？確かにちょーっと監視のようなことをした時があるけど俺のことまでは知らないはずだ…。

恨みを買うこともしたことも無い。直接、会ったのは夜桜舞う、この学園だった。間接的にも監視だけで彼女の不利益になることはしたことはない。マジでなぜ、こうなるの？

「茶々丸…」

「…イエス・マスター。申し訳ありません、九重様。マスターの命により拘束させていただきます」

俺が暴れるのをやめないと判断してエヴァちゃんは従者の茶々丸ちゃんに俺の拘束を命じた。

あ、ダメだって！背中に固い二つの膨らみがあたってるって！？女の子でしょ！！茶々丸ちゃんも節度を持って行動しよう！？簡単に男に抱きついたらダメだって！

ん…？茶々丸ちゃんの髪からいい香りが…？

……って！！！お兄さん、ちょっとラッキー♪とか考えちゃったじゃないか！？！？何がいい香りだ！？俺はバカか！！そんな甘い香りは家族で嗅ぎ慣れているだろ！？何ちょっとドキッて、なってんだよ！？

マ、マズイぞ…。天国と地獄との板バサミだ！？このままでは拘束は厳しくなる一方だ！何とかして脱出しなければ！！主に俺の精神安定的な意味で！！！

「ノ、ノーッ！ち、茶々丸ちゃんっ！放してっ？お願いだからっ！」

「…すみません、九重様。マスターの命令は絶対ですので」

あー…やっぱり、そうなのか…。戦える侍従人形をコンセプトとした試作ガイノイドの茶々丸ちゃんはマスターであるエヴァちゃんに従うようだ。

むぅ…アンが居れば強制ハックして一時的に機能停止させることも出来る。でも今は高き天上の月に居る。彼女達の仕事を、こんなことで邪魔するのは気が引けるというものだ。

それに…茶々丸ちゃん相手にそんな物騒なことしたくない。原作でも優しい子というイメージがあったけど現実に会ってますますい

い子だと思った。この子、本当にすごくいい子なんだ。こんなに心優しい子にそんなことしたくない。

ならばエヴァちゃんに掛け合ってみようと思う！逃げるようなことしないで話し合えば……いけるか？ま、まぁとにかく話し掛けてみよう。

「エ、エヴァ、ちゃん…？」

「じじい…。この男は連れて行く。……イイナ？」

「あれっ！？俺、無視ですかッ！？俺の意思はどこにあるのかなっ！？」

無視！？アッサリと無視ですか！？エヴァちゃんちょっと冷たくないかな！？喫茶店ではシレッとしながらも穏やかな雰囲気を纏っていたではないか！？……俺の正体を知らなかったからかもしれないけどさ！

何だ？エヴァちゃんは俺が正体を黙っていたことが気に入らないのか？不機嫌なのか！？だから俺の意思を無視したのか！？ちくせう！何とかいて簀巻き状態の糸と茶々丸ちゃんのガッチリホールドを外せないものかッ…！？

「う、うむ…。いいぞい。ただ、のう…、失礼の無いようにしてほしいのじゃが…？」

「あっ！てめっ！？この学園長（じじい）ッ！！お前、裏切ったな！？俺の気持ちを裏切ったなッ！？」

学園長ーッ!?お前、アレだろ!?厄介事を俺に押し付ける気なんだな!?確かにエヴァちゃんは俺に用があるようだ!!それは認めよう!!だけど彼女の管理担当者はお前の役割だろう!?役目、放棄してんじゃないよ!!

あっ!?だから何、お茶飲んでんの!?何で一仕事終えたみたいにいい顔しながらホッとしてんだよ!?まだ終わってない!終わっとらんぞぉおお!!

「わかっている。…行くぞ!茶々丸!」

あれれッ!?!?もう移動ですか!?もう少しゆっくりしようよ!!まだ拘束を解いてないから困るんだよ!!だから話しを聞けって!!金髪幼「誰が幼女かッ!!!」女が…てッ!?俺の思考に割り込むんじゃないよ!!

「…学園長先生、高畑先生。お騒がせしました。それでは失礼いたします」

「ちょっ!?茶々丸ちゃんって想像以上に力が強い!?コレがギャグ補正というものなのか!?あれ?ちょっと?マジで……外れないッ!?!?」

マジでマズイですか!?んっ!!んーっ!!あ、あれ?コレどういうこと!?マジで外れないよ!?うぬぅぅ!!ちくせう!糸は切れてきてる!でも茶々丸ちゃんの拘束が解けない!!

こんなに細っこい腕をしているのに茶々丸ちゃんの拘束を外せない!!何で外せない!?まさか…!?これがギャグ補正!?…むぅぅ!!初体験だが恐るべしだな!!一度コレ系統に捕まると逃れる

術は無いと言う！！

でも！抵抗はやめない！！お家で家族が待っているからな！！…
…とは言え状況は絶望的だ…。こうして考えている今も拘束を徐々
にではあるが解いている。しかし！ネックは、やはり茶々丸ちゃん
のガッチリホールドだった！！

茶々丸ちゃんって体温とかは冷たいと思っていたけど意外と暖か
いんだ。ホカホカです。……なんて考えてないからな！？考えて
ないんだからな！？

こほん！必死になって拘束を解こうと努力しました！でもね？そ
れでも茶々丸ちゃんを梃子摺らせることしか出来ないでいるようだ。
確実にエヴァちゃんのほうへ近づいているんだ。ここで抵抗をやめ
たら一気に拉致られそうなほどだった…。

「茶々丸ッ！何をしている！？」

「…ただいま参ります」

「ノッ！？ノーッ！！のぉぉッ！？Ｎｏｏッ！！脳ぉぉッ！？」

何ィ！？拘束力が…！腕力が…！増大した…だとぉ！？マズイ！
このままではエヴァちゃんのテリトリーへ拉致られる！！これは万
が一のために応援が必要かもしれない！！ラミエルさん！救援を！
救援を呼んで！！このままだと俺、死んじゃうかも！？

「うるさいっ！！！！」

ごめんなさい…。

騒いでいたらエヴァちゃんに怒られた…。悪いのは俺か？いや、違うはずだ！俺は誘拐されそうなんだから抵抗して当然のはずだ！！

それなのにエヴァちゃんの背中から立ち上る不機嫌オーラが怖くて逆らえません…。みんな…早く来て…グスッ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――エヴァハウス…。

Ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

九重・葵が話しも聞かずに抵抗したから、あの場で拘束、連行してしまった。ハッキリ言って勢いだけの行動だったから私の家へ連れて来た意味は無い。

敢えて理由を言えば誰にも邪魔されずに話せるというところか？呪いでこの地に縛られ魔力までもが封じられたとしても、この家や周辺は私のテリトリーだ。襲撃する度胸のあるヤツは少なくてもこの学園には居ない。

しかい、どうしたものか…。連れて来たはいいが何から話したものか…。会ったら色々聞きたいことを考えていた。それなのに、いざ会ってみれば何を聞いていいか思いつからん。本当にどうするかな…。

苦し紛れに時計を見てみれば九重・葵を連れて来てから２０分も経っていた。その事実を確認すると心の中だけで苦笑した。私は何をしているのやら…。

「あのー…？」

「あ、ああ、すまん。少し考え事だ」

ふむ…。茶々丸の入れた紅茶や茶菓子があるとしても長時間の沈黙は居辛いものがあるか…。真祖の吸血鬼になってはじめて自分で連れて来た客人だ。これはキチンと持て成さなければならん。

「はぁ…？それで俺は何で拉致られたのかな？」

「人聞きの悪いことを言うな。これは……」

「……これは？」

マズイな…。思い返してみれば、これでは私が九重・葵を無理矢理拉致したように見えるではないか…。本来はもっとスマートに事を運ぶ手筈だったのだがコイツが変な抵抗をするから予定が狂ってしまった。

…。

……。

……。

まぁやってしまったものは仕方が無い。ともかく、この場は尤もらしい理由を考えるとするか…。えー…？んー…？んっ？

「……あー…招く…そう！招待したのだ！うむ！！」

「今、“そう！”って言ったよな！？“そう！”って！！思い付きじゃないか！？何“うむ！！”って満足そうに自分だけ納得してんのさ！？」

「う、うるさいっ！私が招待と言ったら招待なんだっ！！反論も苦情も認めんっ！！！」

先にも挙げたように、これは事実だ！本当なら同意の下で私の家へ招待するはずだった…。それなのにコイツは逃げるわ！暴れるわ！話しを聞かないわ！一つも私の思い通りにならない！！我が強いのか、はたまた、ただの我侭なのか…。

もう、こうなってしまったら無理矢理話しをする態勢に持っていくしかないではないか！？私が手綱を握らなければ出来る話しも出来なくなってしまう。

「何！その独裁者は！？エヴァちゃんはジャ○アンか何かですかね！？」

「ジャ、ジャイ…？何だと？」

「いや、気にするな。こちらのことだ…」

ジャイ…なんとかとは何かは知らないが独裁的な何かを揶揄した表現なのは予想できる。九重・葵は気にするなと言う。だが特に意味は無いだろう。しかし…、ふむ、九重・葵は今の私が独裁者のように見えるのだろうか？

……違うな。ただの勢いのように見えるが違う。身振り手振りで道化を演じているがコイツの目が違う。これらの行動は話しの流れを無理矢理にでも掴み主導権を握ろうとしているのだろう。

まぁ私がコイツ…九重・葵の正体を知った状況で会うのは初めてのことだ。

なぜ今まで気付かなかったのか？喫茶店に通っていてコイツの名前を気にかけなかったのか？会うたびに名前を聞き出そうと考えていたのに実際に喫茶店へ行くと、いつの間にか、そのことが頭の中から抜けていた。

今、考えてみるとおかしいものだな。気が付いてみれば簡単なことだ。認識阻害と意識誘導の術が使われていたのだろう。喫茶店に近づけば近づくほど術式は深く強く作用する。違和感を極限まで誤魔化せる方法だ。

意識していなければ、まず回避は不可能。その癖、気が付いてしまえば解呪する必要も無く、術は自然と解ける。まったく…イヤラシイ方法だ。この私にも気付かせない術式構成とは、な。

「…それで？何で俺を招待（拉致）なんかしたのさ？」

「う、うむ。それは、だな…」

急にマジメになったコイツを見て確信した…。今、ここで主導権を握られれば今後も尾を引くことになりそうだ、と…。だからこそ私は、表面上は余裕を持っているように見せる。だが内心では冷や汗を掻く自分が居る。

まったく…九重・葵の“何”が私を緊張させるのか、それはわからない。しかし、この直感に魔女狩りの時代や幾多の修羅場で助けられたのだ。警戒するのは悪いことではないだろうさ。

そんな警戒心を持ち、私は九重・葵と対面して話し合いを始めようとしたのに…コイツは……。

「あ、茶々丸ちゃん。紅茶のお代わりお願いね？」

「はい。…どうぞ、九重様。熱いのでお気を付けください」

「茶々丸ちゃん…。硬い！硬いよっ！せっかく可愛いのに！勿体無い！もっと、こう…ニコッてしてみ？ね？」

「か、可愛い…？ニ、ニコッ…？こ、こう…でしょうか？」

「むぅ…。まだ表情が硬いけど…。最初よりもいいね！可愛い女の子は笑顔のほうが何かと魅力的だから茶々丸ちゃんも笑顔でいようね？」

「可愛い…。笑顔…。了解しました…。今後、鋭意努力いたします

…」

…など、と茶々丸のマスターである私の目の前で口説き始めたのだ！！何だ！コイツは！？これも演技なのか！？だとしたらどこまで道化を演じれば気が済むのだ！？いや！！それはともかく今はコ・イ・ツ・を……！！

「うんうん♪やっぱり可愛い子はい…うぼんぬっ！？」

殴るッッッ！！！！！！！……のは今の私では身体的に力不足だから、この前テレビでやっていたプロレス技“水平ドロップキック”をしてやった！！！ふむ…なかなかの威力だったな！！

「キ・サ・マ・は！！何を主人の前で堂々と従者を口説いておるか！！！！」

げしげし。ふみふみ。むにむに。にゃーにゃー。

「い、いやっ…口説、いてっ…ない…。正直に…思ったこと、をっ…言った…だけっ」

「尚更、悪いわッ！！天然で口説くなど…ナギのようではないか」

ナギのヤツも多くの女性（ファン）を惹き付けていたな。本人はバカだったから自覚無しの天然で惹き付けていたようだが…。コイツもその類か？自覚の無いところなど、ソックリではないか…。

「ちょっ！？それは聞き捨てならない！！俺はあんな天然ジゴロと

一緒にされたくない！！認識の訂正を断固として要求するぞ！！」

「うるさいっ！！黙れっ！！私が、そう決めたのだっ！！訂正は認めん！！だいたい…見ろ！！うちの従者を！！」

「は！？茶々丸ちゃん？何、言ってんのかな！？彼女が、どうか…し、たぁ？」

貴様は背中を向けていたから気付かなかったのかもしれないが私からは茶々丸がボーっと考える姿が丸見えなんだぞ！？貴様と話してこうなったんだ！何とかしろーッ！！

「か、可愛い…。いえ…でも、魅力的…？そんな…。……九重様。…私は一体？」

「あ、あれ？ち、茶々丸ちゃん？あれ？えー…」

「茶々丸は生まれて間もないんだ！色々と免疫が無いんだぞ！？どうしてくれるんだ！？あれでは色ボケロボではないか！？」

何が「あれ？」だ！！そうじゃないだろう！？どう責任を取ってくれるんだ！？このまま茶々丸が変な方向へ成長したら私が困るではないか！？

茶々丸と人形契約（ドール）をしているとは言えコイツは私にとって一つの可能性なんだ！それは“人形に自由意志はあるのか？”という可能性…。絶対服従の人形が自我を持ち自由意志によって、時にはマスターの意思に反して活動する。

一つの生命としての可能性。これを魔法技術だけで実現するは無理。かと言って科学技術だけでも柔軟な思考に欠けて無理…。

ならばどうすればいいか？

答えは簡単だ。“科学と魔法”、この二つを掛け合わせて互いの短所を埋め補う。そして互いの長所を可能な限り阻害しないように混合し“可能性”の更なる飛躍を目指す。

この構想を思い付いた切欠は超・鈴音だったがな。

だからこそ私は茶々丸作成時に超・鈴音へ魔法技術を提供したのだ。科学は理解の外だからな。私では、どうにもならんし、出来んのだ。魔法技術だけでは無理と考えていた当時の私に超・鈴音の話しは渡りに船だった。

そんな思いをして茶々丸に可能性を見出しているのに…。コイツのせいで！少し変な方向へ成長しそうで不安ではないか！？何か知らんが茶々丸はジジッ、ジジッと何かを検索しているようだし…。

「俺のせいかよ！？」

「お前以外に誰が居ると言うんだ！？」

「居るじゃん！エヴァちゃんが居るじゃん！！」

「た、戯けがーッ！！自分の従者を口説くか！！バカ者がッ！！」

コイツは何をトチ狂ったことを言っておるのだ！？ここまで私をバカにするとは……ん？まさか、わざとか？わざとなのか？おの、れッ…！？そこまでして主導権を握りたいと言うつもりなのか！？

私のこの姿（幼女）にも惑わされず、主導権争いの手を緩めることをしないとはな…。なかなかに用心深く狡猾なヤツだ。油断していると私すら飲み込まれかねんではないか。喫茶店でのほほんと店長をしているのがウソに思えてくる…。

コイツの行動は道化なのに目だけは…別物だ。真剣に物事を観察する。そんな冷たくも熱くもない、静かな清流を髣髴させるような目をしている。万が一、コイツと敵対した場合、この目に睨まれると考えただけでゾッとする…。

「バカって言うほうがバカなんですぅ！！やーい！バーカッ、バーカッ！」

「ぐぬぬぬぬっ！！ああ言えばこう言いおってっ…！！」

「ふふんっ♪まだまだだね。エ・ヴァ・ちゃ・ん・？んふふふっ♪」

――ブチッ！！

私の中で何かが“キレタ”音がした…。

わかっている…。コイツは私を怒らせて動揺を誘いこの場で主導権を握ろうとしていると、な。わかっているんだ。……だがな？物事には順序というものもあれば最低限の礼儀も必要だと私は今はじめて考えるのだ…。

故に…私はコイツと話し合わなければならないと思うのだ…。“私なりのヤリ方”で、なぁ…。フフッ、フフフフフッ！

「……いい度胸だ。穏便に話し合おうとしたが無理のようだなぁ…ククッ！ククククッ…」

「あ、あれ？も、もう堪忍袋の緒が…切れた！？短いよ！！短過ぎるよ！？６００年も生きているんなら自制心をもっと持てよな！！まったく！コレだからお嬢ちゃんはよぉ…」

切れた…？はて何のことだかわからんなぁ？ククッ！それに歳のことを貴様に言われたくないわ！！２００年近くも上の癖に何を言うか！？それと！！お嬢ちゃん言うな！！

「貴様ほどは生きておらんよ！！茶々丸ッ！！」

「いけません、そんな…。ぁぁ、九重様ぁ…。ハッ！？はいっ、マスタぁあっ！？」

茶々丸…。まさか、お前、今の今まで何かを検索していて“何か”を想像していたのか？……まぁ仕事が出来れば今のところ問題は無いが…。ふむ……一度、ハカセ共にメンテを頼むか。……出来れば今日のことを修正してもらおう。

「地下倉庫にある［別荘］を出してこい…。そこでこのバカを調き…もとい教育してくれる！」

学園内では魔力を封じられている私だが［別荘］の中ならば全盛期の力を振るうことが出来る。そこで何かと無礼なコイツ…九重・葵を教育してやらねばならんだろう。ククク…！

「…イエス、マスター」

「だから俺の意思はーッ！？」

貴様に決定権など……無いッ！！！ここまでバカにされたのだ。ククク…！！それ相応の礼をしてやらねばなるまいッ…！！！フハハッ！ハハハハハハッ！！！

――ドッガァァンッッッッ！！！！！！！

「クッ！なっ、何だっ！？」

「マスター…！」

九重・葵の襟首を掴み魔法球のある地下へ引き摺りながら連れて行こうとした。だが、それは突然の客によって中断されてしまった。

吹き飛ばされたドアの粉塵で“客”の詳細はわからない…。だが、シルエットから入ってきたのは女のようだ。影は2つある。どちらも濃厚な魔力を纏い溢れんばかりの闘気が幻視出来そうだ。

茶々丸は私と招かざる客を遮るようにして間に入った。うむ、従

者がマスターを守るのは当然だな。しかし……この客達を相手取るには経験の蓄積が少ない今の茶々丸では些か分が悪い。……チャチャゼロも居ればやれるだろうか？

「……なんだ、貴様ら？ここを私の家と知った上で襲撃して来たのだろうな…」

「「見つけた…」」

何……？見つけた、だと？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　エヴァンジェリン

第四十九話「睨み合い?と拉致?と襲撃者?と」（後書き）

おかしい…。そこそこ強いはずの葵がエヴァ達に拉致られてしまった。
これが聞くところのギャグ補正というものなのか…。

原作開始まで約一年半くらいです。
いつまで経っても始まらない!?どうなっているんだ!?
ふぅ……まぁもしかしたらだけど数話中に一気に時間が飛ぶかもしれない。
アクマデ”かもしれない”だけどね!

それでは!Ｂｉｓ　ｂａｌｄ!!

第五十話「救援と歓談と主従の仲と」（前書き）

ビバッ！エヴァハウスッ！！
…一度は行って見たくね？と思った鉄　桜です。

お蔭様でお気に入り登録数１，０００件超えました！！
読者の皆さん、ほんっとうに！ありがとうございます！

では続き！

第五十話「救援と歓談と主従の仲と」

――エヴァハウス…。

Ｓｉｄｅ　葵

エヴァちゃん家の扉が蹴破られた時の埃で侵入してきた姿は見えない。それでも埃に浮かんだシルエットから女性。人数は２人だった。そして２人が部屋に入った途端に爆発するようにして激しい闘気が侵入者から発せられる。

危険と判断した茶々丸ちゃんはエヴァちゃんの前に立ち塞がる。状況は一触即発…。どちらかが行動を起そうものなら相応の被害が出るだろう。

「……なんだ、貴様ら？ここを私の家と知った上で襲撃して来たのだろうな…」

「「見つけた…」

「何……？」

煙の向こうから聞こえてきた声。エヴァちゃんには心当たりが無いみたいだ。……って、あ？何だか聞き覚え、が？それに今、気が付いたけどこの闘気の気配は、ええと……、ああ、これは！

「「我が君！！ご無事ですか！？」」

「うおおっ!?」

煙の中から駆け出してきたのはハオとユエだった。2人は俺を左右から抱き付くと締めるように腕を身体に回してきた。うん…心配掛けたんだなと感じています。それはもうヒシヒシと…。

ごめん…正直に言うとギリギリと身体が軋むから腕の力を緩めてほしいです。でも…ラミエルさんに頼んで、皆に救援信号を送ったのは俺だからね。心配させてしまったんだなと思うと甘んじて受けるというものなんですよ。

たとえ背骨がぐりゅんぐりゅん警報を発していたとしても…ね。

いや、うそです。ごめんなさい。痛いので出来れば放してほしいです。あ、あぁぁあ、折れる、折れる!?サバ折りされる!?味方にヤラれるってシャレになってないって!?ギリギリ耐えているけどね!!ははははっはははっ!!!

ぁ……。

痛ッ!?イタタタタタタタタッ!!ほぉわったーッ!?!?背骨が!骨髄が!?あっ!ダメっ!ダメだって!?出る!それ以上したら出ちゃうから!!

「ああ。…喫茶店に居た奴らだったか?貴様の従者か?」

「えっ!?ああ!うん!この子達、はっ…イタッ!!」

「ハッ!?我が君!お下がりください!!相手は誘拐犯!!危険で

す！！」

目の前の金髪幼女が「誰が誘拐犯だ！？誰が！？」と抗議しているがハオ達からしたら立派な誘拐にしか見えなかったんだろうね。冗談半分で救援信号も出してしまったからお互いに誤解の度合いはスゴイことになっていることだろう。

……これってマズイ状況というものではなかろうか？仲介に入らないと殲滅戦が始まったりしない？物理的なものではなくて描写的な感じでさ…。これは俺の精神にあまりよろしくない。故に止めないとならん……のだけど。

「貴様…。よくも我が君に手を出したな…！！」

「戯けッ！！“まだ”何もしとらんわ！！」

「え！？“まだ”って言った！？俺は何をされかけたの！？」

「貴様は黙っていろッ！さもないと…“千切る”ぞ！？」

「どこをッ！？」

「「させません！！我が君の“貞操”は絶対に死守いたします！！“契らせて”なるものですか！！」」

いや、２人とも？それは違う気がするよ…。“まだ”何もしていないと言うエヴァちゃんも気になるし遠慮したいけど、ハオ達の想像（妄想？）していることは違うと思いたい。俺の精神力（マインドポイント）がガンガン削られていくよ…。

それに“チギラレル”も混乱もあって勘違いしていそうだ。意味合いが違うように感じる。いや…それよりもエヴァちゃんはどこをチギル気だったのかな!?……アレか!?シンボル的な何かなのか!?

勘弁してくれ…。

……こんな状況をどうやったら止められるんだ?と言うか…なぜに、どちらを止めても俺にトバッチリが来そうな気がするんだろう?片方には千切られそうだし…。

「ウガーーッッ!!貴様らは私を何だと思っとるんだ!?」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに…」

当然、ハオ達に勘違いされたエヴァちゃんは何かもう色々と否定するために叫びだす。でも……そんなに顔を真っ赤に否定するのは何か疚しいことを考えていたからなのでしょうか?ちょっと不安に思ったのは秘密。いいね?

エヴァちゃんが何を考えていたのか知らないけど、できることなら遠慮したい。俺はイエスろりーたノータッチの変態紳士ではないのだから…。確かにエヴァちゃんは美少…美幼女だけど身体的に見ても可愛い娘くらいにしか思えない。

「このっ!ボケロボがっ!!巻いてやる!これでもかと言うほど巻いてやるーッ!!」

「あ、あぁ…!いけませんっ…!マスタぁ…そんなに巻かれてはっ…!んぁっ…!」

茶々丸ちゃん…。君はどんな時でもポジティブなんだな…。ネジを巻いているエヴァちゃんも何だか楽しそうだし…。エヴァちゃんの従者になって一年も経ってないはずだけど基本的に、この2人は仲がいいよね。

エヴァちゃんも何だかんだと言いつつ面倒見がいいほうだしなぁ。むぅ…エヴァちゃんは子煩悩なのだろうか？多分だけど彼女は突き放すけど完全には目を離さないで影から見守るタイプだと見たんだ。

ああ、エヴァちゃんと茶々丸ちゃんのじゃれ合いを見ていると和むわぁ。このまま何事も無く話しが流れて険悪なムードが有耶無耶にならないかね？…ていうか、なってください。俺のマインドポイントは既に底辺ですから…。

そんな精神的ダメージを再認識していたらハオから秘匿念話が来た。何ね？一体…。

【…我が君、今の内に脱出いたしましょう。外では完全装備した三課の者が6チームで、この建物を包囲中。更に後詰としてイキシア？が一個中隊規模で待機中です。もちろん、アイリ達も駆けつけておりますよ…】

【…ちょっと待とうか？何？その物々しい対応は？確かにラミエルさんに救援信号を発信するようにお願いしたけど、ここまでする必要は無いんじゃないかな？…】

6チームということは1チーム4人からなるからひの、ふの、み…24人？三課が全10チームだから……半数以上を投入したの！？少人数相手に戦力が過剰ではなかろうか！？ふぅ、これは……

戦争でもする気だったのか？

イキシア？は場所が場所だから一個中隊だけなのも納得…できないけど、ここでは納得する！ここは森の中とは言っても市街地に近いし学園側に感付かれる危険もあるから全機は投入しなかったのだと考えられる。それでも一個中隊投入しているけど…。

これって一応、救出…というか応援部隊だよな？何で展開速度を重視した即応装備ではなくて戦闘を重視した完全装備なんだよ…。もしかして何かをやらかす気満々だったのかな！？こんな学園側の真っ只中で！？

【…いえ、吾らは必要無いと言ったのです。ですがアイリ達が確実な救出を、と張り切りまして。……こうなりしました…】

【…この過剰な戦力にしたのは、やっぱり？…】

【…おそらくは、我が君の考えておられるとおりかと思われます…】

アイリ…。前回の襲撃騒ぎが尾を引いていたのか。落ち着いたと思っていたんだけど表面上だけで内面は…心の底にはチリチリとした黒い炎が残っていたのかな。むぅ…忠誠心が高いのも考え物かもしれない。

はぁ…アイリ達の執念がハンパ無いや。……そんなところも大好きだけどね！！状況が状況なら惚れ直しそうです！！いや、マジで…。

ただまぁ…そうでなければ、この短時間でこれほどの部隊を用意できるわけが無い。執念とは時に不可能を可能にするほどの力を発

揮するから恐ろしい。それが集団となると手が付けられないよ。…くくくっ！もう仕方ないなぁ。

組織（ファミリー）の部隊運用時では基本的に、魔法系では認識阻害、意識誘導、幻影措置などなど…。そして科学系には毎度お馴染みの熱光学迷彩、万が一の撹乱用デコイを配置、通信妨害などなど…。

これらの隠蔽はしているとしても発覚する時は発覚する。無論、そんなことが無いように全部隊員は最善を尽くしている。そのくらいしないと色々と発達した旧世界の現代では…つまり、ここ百年と少しほどは活動し難いんだ。

俺みたいな不老の存在は、な…。

【…はぁ。あー…アイリ？聞こえる？現状は待機だ、待機。アイリ達は全攻撃態勢の解除。ここは我慢してくれ…】

何にせよ、だ。幸いにもエヴァちゃんには敵意が見られない。現状、戦闘は回避の方向で話しは進めることが出来そうだ。ここで武力を以って威圧するとなれば……彼女は黙ってはいないだろう。受けた屈辱は倍以上にして返す主義のようだしな。

【…し、しかしっ、それはっ…】

【…そ、そうですわっ。あまりにも危険っ……】

【…アイリ、リチラ、大丈夫（だと思う…）だから。お願い…】

【…了解、いたし、ました。ご武運を、閣下…】

【…何かありましたら何時でもお呼びくださいね？葵様の御為ならば、このリチラ、たとえ火の中、水の中で…】

ここで皆が突入してきたらまとまる話しもまとまらなくなる。いや、心配してくれているのは嬉しいよ？これは本当。でも、家族への被害が出ないよう、よりリスクの少ない方法を取りたい俺としては、撤収は未だしも待機していてほしい。

まぁ俺からケンカを売らない限り大丈夫だろう。エヴァちゃんが癇癪を起さなければ問題が起きる可能性は限りなく低いんだ。ここでアイリとリチラは釘をさしておかないと突入しそうだしね。

でも、なぜだろう？釘をさしても尚消えないこの不安は…。保険をかけるか…。

【…うん、ありがとう。それじゃ。……ファレノ、あとはよろしく…】

【…了解なの。……できるだけ、がんばるの！…】

【……ごめん、よろしく…】

本当にゴメン…。アイリ達を抑えるのは骨が折れるかもしれない。ファレノ、マジでお願いします。アイリがここまでキレてたなんてなぁ。リチラはわかるけど…こっちは予想外だった。俺もこんな時期のこんなところで小戦争なんかしたくないんだよ…。

【…ハオ達は…】

【…危険が少ないのはわかりました。ですがっ！吾らは残ります！よろしいですね！？…】

【…姉上の言うとおりです！私もそれだけは譲れませぬ！このような幼女と一緒になどさせますか！…】

ハオ達はどうするか、と聞こうとしただけなんだけど……くくくっ！そうだな…。そうだった！そう、聞くまでもなかった！彼女達は己に与えられた役割を、存在意義を果たすためにあるんだった。

ユエは台詞後半に本音が洩れているようだったけど心配から出てくる想いだから俺は華麗にスルーを決め込むことにした！……地雷踏みたくないのよ。うん…。

【…うん。ハオとユエ、よろしく。それからミリー達もお願い…】

【【…ハッ！…】】【…はぁい♪…】【…あい…】【…御意！…】

いつものように呼びかけたら当たり前のようにどこからともなくミリー達も傍に現れた。顕現していないから不可視化しているけどな。気配でエヴァちゃんにバレていないかが心配だが……茶々丸ちゃんとじゃれ合っていて気付いていないようだ。

改めて思うんだけど単体で力を行使するには莫大な魔力が必要とはいえ精霊とか反則だと思うんだ…。

ミリー達みたいに魔力を大量に貯蓄していれば力の行使に問題は無いけど通常の精霊だと燃費が悪いのな…。無茶な方法だったけどファレノのような元精霊は精魔奇兵化して緩和することができたんだ。

高い能力と存在としての安定性。苦労しました…。ただね？維持費として食事などの生物的行動が必要になったから出費がデカイ！…それと霊体化ができなくなった。

精霊は悪魔と違い、実体と霊体を切り替えられるとかマジ反則だって。言ってみれば天然のステルスだよ？　見えない敵って、思った以上に厄介なんだ。まぁその分、身内だと心強いんだよ。ミリー達には、いつもお世話になっています♪

閑話休題…。

それでまぁ…俺達のほうで話しが付いた時にはエヴァちゃん達も落ち着いたようで、今はテーブルを挟んで向かい合うように座っているんだ。お互いの背後には護衛、または従者のようにハオ達や茶々丸ちゃんが、何が起きてもいいように立っている。

「それで俺はなぜ、“ご招待”いただけたのかな？」

「……やっと、マトモに話せるのか」

マジメもーど、で話しを始めたのに返答がそれかよ…。

「……いや、もうそれはいいから。まぁ悪かったよ。俺もフザケ過ぎた。ともかく理由を聞かせてくれ」

「あ、ああ…すまん。少し疲れて、な。それで理由は、だな……」

それから、やっと話しを進めることができた。いや、わかってるよ？俺がいろいろして話しを引っ掻き回したんだ。でも仕方ないだろ？いきなり拉致られたんだからな。味方と合流するまで時間を稼がないとならなかったんだ。

まぁ来たのは完全装備した重武装の６チームに人型機動兵器一個中隊という過剰戦力だったけどね…。

封印状態のエヴァちゃん相手ならハオとユエ、それに武装隊員を１チーム送ってくれれば、あとは俺とラミエルさんで遊び心を持っても何とか出来る。……主に俺の絶対的な安全な意味で、な。

それでまぁエヴァちゃんの話しを聞いてみたんだ。そしたら俺のことを知った経緯……やっぱりナギだった。それから興味を持ってナギを追いかけた……ゴメン、俺は一時期エヴァちゃんを監視していた。

ナギに助けられてから数ヶ月の間、俺の情報を求めて追いかけて追いかけて更に追いかけていたが、そのシツコサで最後にナギがキレてしまい“登校地獄”の呪いをかけられてしまった。

呪いは３年経てばナギ自身が解呪しに来る。…と言っていたのに約束の日にヤツは来なかったこと。以降１４年間、学園に縛られ魔

力も封じられたままだということ。

ただ…会って、話してみたかった、こと…。

「……つまりは同胞かもしれない。俺のことを知った切欠はナギ。興味を持ったから話しをしてみたい。…と？」

「あぁ、そ、その通りだ…」

「はぁぁ……。ナギの野郎…。俺のこと話してんじゃねぇよ…」

これじゃ信用した俺がバカみたいじゃないか…。俺の知らないところで身内の情報が洩れるのはなかなか……旨くない。あのバカ者に悪気が無いのは知っている。行動派ではあるがアイツは考え無しのバカだからな。

はぁ…。さて、どうしようか…。

まぁ幸いなことに知られた相手は闇の福音たるエヴァンジェリン…。“誇りある悪”を自他共…“他”はともかく…に認められる存在だ。俺が言わなくとも無闇に話すことはしないだろう。

【…我が君？コヤツら排除いたしますか？幸いにも部隊は待機中です。直ぐにでも突入させますが？…】

ユエ…。そんな過激なことをしなくてもいいってば。学園長に目を付けられるでしょう？アカンよ、それは…。俺はまだ麻帆良でゆっくり喫茶店経営をしたいの。ドンパチなんて、いつでも出来るんだからね。時には我慢、我慢だよぉ…。

【…いや、いい。無駄に周囲へ被害を出すだけだ。エヴァちゃんも危害を加える気は無いみたいだしな…】

【……承知…】

何？その間は！不満？ユエは俺の判断が不満ですかっ？あれッ！？何でハオまでそんな“惜しい！”みたいな顔しているの！？……そんなにエヴァちゃんを排除したかったのかな。…幼女なのがいけないのだろうか？

エヴァちゃん可愛いのに…。髪なんか柔らかくて撫でていて飽きなさそうだよ？くくくっ♪

まぁ確かに何も知らなければ彼女は危険分子になりかねないと考えるだろうけどさ…。ハオ達の考えはわかるよ？危険は出来うる限り回避……出来なければ排除しておくというのは護衛の鉄則だ。安全策と言ってもいい。

ただ…エヴァちゃんは無駄なことはしないよ。己の楽しみを追求する時はあるけど、基本的にエヴァちゃんは自分で決めたルールや矜持に反することは絶対にしない。そこは信用できる……と思う。

「……まぁエヴァちゃんの気持ちもわからないではない。俺達は時の流れから外れた存在だからな」

永遠にも等しい時間は永遠の孤独を強制される。これは孤独感から時には精神を病むからな。エヴァちゃんの気持ちを少しは理解できる。俺も百年の間にミリー達と出会わなければ1人の寂しさに押

し潰されたかもしれない。

「やはり、貴様は…」

「残念だが俺は吸血鬼、まして真祖ではない」

「な、に…？では貴様は…何だと言うのだ！？」

「仙人…みたいな？不老ではあるが不死ではないんだ。魔法の射手の一射、銃弾の一発、ナイフの一突きで俺は簡単に…死ぬ」

八百年間を生き長らえて俺の身体に付加された“不老”についての考察。それは長い修練の果てに至ることが出来ると言う仙人に一番近いと結論に達した。まぁこの世界に落とされた時から不老だったから“ナンチャッテ仙人”もいいところだけどな。

ただ…“魔法の射手の一射、銃弾の一発、ナイフの一突きで俺は簡単に死ぬ”のところだけど“何もしていなければ”という条件下で、だ。魔法障壁やDフィールド、その他の迎撃手段も取るから致死に至ることは無いと思いたい。

それと…流石に一発では死にはしないと思う。一応、体内には治療用ナノマシンもあるから大丈夫……と思いたいなぁ。だいたいさぁ？不幸な一撃が当ったら死ぬほど痛いだろうしね…。それはマジで勘弁です。

エヴァちゃんは俺の仙人発言に目をこれでもかと言うほど見開いて驚いているようだ。…信じていらっしゃらない？…無理も無いかな。仙人というのは俺の憶測だからな。もしかしたら違う“何か”かもしれない。正直な話し俺にもわからんのよ。

我が事ながら適当だなぁ、と苦笑してしまう。

「仙人？バカな…。仙人とは、どんな才能があっても長い修行を経てようやく至れるものだ…。貴様の外見から見て…２０代前半で至ったとでも言うつもりか？信じられん…」

「至った経緯は聞くな。思い出したくもない…」

言えない…。「女神（幼女）の手によって、この世界へ落とされて来ました！アハハハッ」……なんて言えないっ！言いたくもない！！今の家族に出会えたことは感謝しているが……落とされた理由が暇潰しだったからなぁ…ｏｒｚ

「そ、そうか…。しかし、貴様ほどの位階ならば殺されても身体の再構成も可能なのではないか？」

「……試したこと無いからわからん。痛いのキライだし、怖い…」

身体の再構成って…怖いこと言うなぁ。それに可能だとしても復活に一体何年何十年、下手をすると何百年掛かるかわかったものじゃない。とてもではないが試す気にはなれない。試す気なんて元からないけど…。

「怖いって…。まぁそれだけは実験したくとも出来んからな」

「やりたいとも思わないっての！死ぬだろうが…」

「ククク！そうか？それは残念だ」

残念？それってどういうことかな？……エヴァちゃんは俺を殺す気だったのだろうか。くっ！これからは、より厳重な警戒が必要かもしれないな…。厄介なヤツに目を付けられたような気がする。

見た目が美幼女だから質が悪い。可愛らしい容姿をしているから初見ならば敵意を感じない限り無害と判断してしまうだろうな。はぁ。初見ではないけど…。

それから他愛も無いことやお互いの昔話や武勇伝、バカ話の一つや二つもした。いつの間にか時間も忘れるほど話し通しだったようで壁に掛かっている鳩時計を見ると５時１０分前だった。ここからならば今から帰れば皆で夕飯を食べられる時間だ。

「…さて、いい加減、時間だ。そろそろ…」

「なんだ？帰るのか。せっかく茶々丸が夕食を用意しているのだぞ？」

「なん…だと…？くっ！それは惜しい！が、家族が待っているんだ…」

ソファーから立ち上がった俺にかけられた言葉は茶々丸ちゃんの

手料理というものだった！立ちつくして、しばし呆然としてしまった…。

正直なところを言えば食べてみたかった！だって茶々丸ちゃんの手料理だよ？あの美食家でもあるエヴァちゃんが文句も言わずに食べているんだ。きっと美味しいに違いない！何も無ければ是非とも食べていきたいところだった。

でもねぇ…。家族との団欒が俺を待っているんだ！外で警戒待機しているアイリ達のこともあるから即席の食事会でも開いて皆の心のリフレッシュをしておきたいんだ。

「家族だと？…あぁ、外に居た連中のことか？」

「……バ、バレていた？いつから！？」

家族のことを考えて色々と計画を立てていたらエヴァちゃんの言葉に衝撃を受けた。あれだけの手を使って気配を隠していたのにエヴァちゃんはそれを察知したと言うのか…？どんな察知能力だよ…。

「やはりか…。始めは気付かなかったがな。ククク、上手く隠れていたものだ。そこの2人が来なければわからなかったほどだ」

「ハオ…ユエ…」

「「我が君…。申し訳ありませぬ…」」

いや、まぁ責める気はサラサラ無いけどさ。……やっぱりエヴァちゃんは個のスペックが高いなぁ。本人が望んだものではないとしても大したものだ。まぁ不老不死の身とはいえ個人で悪意から逃げ

切るには感知能力が長けても不思議はないのかな…。

あれ？でもエヴァちゃんは“やはりか…”と言ったよな？……引っかけ？所謂、カマカケにあったのか！？もしそうなら下手な反応しなければ誤魔化せたのかもしれない…。しくじったかもなぁ。

それにしても食事…。エヴァちゃん自身からのお誘いだ。どうしたものかなぁ…？ここで少し疑わしそうにエヴァちゃんを見てしまった。彼女もその視線に気付いたようで苦笑している。

「ククク、なに、ただの夕食だ。今日くらいは構わんだろう？連中には我慢してもらえ。今日のところは貴様だけ残ればいい」

「えー…俺だけぇ？」

名指しで俺だけって…。“何かある”と言っているようなものではなかろうかね？ここで素直に1人残って夕食へお呼ばれするほど暢気者なつもりは無い……はず。それなりに楽しい時間を過ごせた相手とはいえ今のエヴァちゃんがなぁ…。

そう、エヴァちゃんがニヤニヤしているんだよ…。絶対に何かあるって言っているようなものだろう？1人残った途端に何をされるか、わかったものじゃない。正直、不安です。それ故に返答に時間が空いてしったのも仕方の無いことだと思う。

「何だ？私よりも長生きの癖に…怖いのか？ふふんっ♪」

そんな怯んだ俺に発破をかけるように挑発してくるエヴァちゃん。気概がある者や自尊心の強い者なら、ここで即座に否定するところだろう。もちろん、俺は言ってやりましたとも！ええ！それはもう

正直に言ってやりましたともさ！！

怖い！！とね！！！

……。

……。

…。

…何だよ？文句あんのか？…仕方ないだろう？何度も言うけど俺は基本的に臆病なんだ。１人で厄介事…もっと言ってしまえば痛そうなことや生死に関りそうなことは関りたくないんだ。嫌いなんだよ…痛いのは。

「ええ、まぁ怖いです。だから数人を側に呼ぶわ。ハオとユエはこのまま居てね。それとミリー達も出ておいでー」

「「委細承知」」「「「はーい♪」」」

ここに五柱の守護神が展開された！俺の安全はこれで確保出来たも同然だね！……マジで痛いのはヤダし、ましてや死にたくもない。この身体は不老なだけで不死ではないんだからね…。

この陣容でなら安心だ！…だけどね？もし万が一にも“何か”があった場合にはオリビエ達も召喚しようと思うんだ。…何？過剰防衛だと？そんなの知ったことか！大事なのは家族の安全と俺の命だ！他のことなど知らんね！！

いや、ごめんなさい。木乃香ちゃんや刹那ちゃん、それに明日菜

みたいな気に入っている子や神鳴流剣士の詠春や帝国第三皇女のテオなどの友人などは無理が無いくらいには助けてもいいかな、とは考えている。

知り合いを見殺しにするのは後味が悪過ぎるんだよ…。俺はそんな思いしたくない。……まっ！それでも家族と自分の命を優先するけどな！！周りは…余裕がある限りでいいんだよ。全てを守ろうなんて無理なんだからな。

む？安全確保の確認をしていたら少し考えが逸れたようだ…。まぁそれはともかく安全は確保したも同然なんだ。アイリ達には帰還してもらって不測の事態に備えてもらおう。

「よっし♪他は即帰還っ！一般人、他関係者にバレずに行動しようね！」

「「えーッ！？」」

あれ！？意外なことに不満な声が聞こえた！？……一体どこからだ？

「アイリ！ファレノ！ダメなの！今日は帰るの！」

「「えー…」」

今度は若干、拗ねたような声が聞こえた…？むぅ…ハオ達はいいとして何でアイリ達が居るのかな？外で待機だったんじゃなかったの？何で窓の下から顔を出しているのかな？かな？かな？

……2人をファレノは2人を抑え切れなかったのか。むむむ……

はぁ、無茶なことを頼んだのは俺だから責められないなぁ。ファレノ！ファイトッ！俺は影から応援しているぞ！……影からだけだけどな！

「おいぃ！？男ならここは反発心を剥き出しにするところではないのか！？その…こう…“怖くない！いいだろう！俺、１人残ってやるよ！！”みたいにだ！？」

俺が護衛を決めていたらエヴァちゃんがそんなことを言ってきた。男なら？反発心？…はっ！そんなもの俺には……無いッ！！あるわけないじゃないか。そんな死亡フラグ満載な生き方は怖過ぎて俺にはできんよ。

それにな？そんな気概があるならこの頑丈な身体と潤沢な保有魔力を使って今頃は俗に言う“俺、とぅるぅぅぅ！！！！”とか叫んでバカみたいにオリ主しているよ。原作のおにゃのことハァハァしているよ！！

どうよ？そんなことを俺みたいな臆病者ができると思うか？……出来ないよ。小心者の俺は生き残るために“少しだけ”過剰戦力を保有するくらいなんだからな。そんな大それたことは出来ません！

「「「「「「……（ジィーー……）」」」」」」

エヴァちゃん…。ここは空気読んでよ。ほら？皆が変な目で見ているじゃないか…。それにわからないか？皆の目が訴えているんだ。

「家族が葵の傍に居て何が悪い？わかってないなぁ…」ってさ。…

…まぁこれは俺の妄想ですがね！

「……何だ！？こいつ空気読めよなー…という目は！？私か！？私

が間違っているのか！？」

「「「「「はぁ…」」」」」

「なんか、タメ息、吐かれたっ！？私が悪いのか！？」

何だかんだでエヴァちゃんもノリがいいなぁ。これなら俺の家族ともいい関係になれるかもしれない。でも…民主主義を掲げたら間違いなくエヴァちゃんに勝ち目は無いだろうなぁ、と何となく思った俺は間違っているだろうか？

ああ…そういえば夕食会の人数が増えちゃったけど大丈夫なんだろうか？普段はエヴァちゃん1人分の食材しかないわけだし。んー…纏め買いして保存しているのかな？それなら安心なんだけど。

確認だけしてみるかね。足りないようなら付属魔法球［菜園］や［牧場］から食材を持って来ればいいしな。……元々は魔法素材を採取する目的だったけど、ここ十年は一区画が、ただの農園、農場になっているんだよ。まぁ意外と便利だし…。

あーっと、とりあえずシェフもーどの茶々丸ちゃんに確認を取らないとな。ええと茶々丸ちゃんは、と…。

「あ、茶々丸ちゃーん？人数、増えちゃったけどお願いできる？」

「…はい、まだ許容範囲内です。お任せください、九重様」

「ありがとう♪茶々丸ちゃん。あと俺のことは葵でいいからね♪」

「…了解、いたしました。……葵、様」

んー♪もう可愛いなぁ♪まだ生まれて数ヶ月なんだよねぇ。可愛いなぁ♪なーで♪なーで♪んふふふっ♪新しい命はいつ見ても可愛いなぁ♪俺もアンが生まれた時は小躍りしたもんだよ！あっはっはっはっ♪

まぁ…残念なのは超・鈴音の関係者というところか…。エヴァちゃんも茶々丸ちゃんが居る時点で超と接触を持っているのは確実。だけど、エヴァちゃんは不可侵の契約を結んでいるに過ぎないだろうから、まだ安心……とは言えないかもしれない。

そうだよ…。今思ったけど不可侵というだけで情報のやり取りはしているかもしれない…。それに古い魔法使いなどは原則として等価交換が常識だ。エヴァちゃんに何かしら必要なモノを提供した場合に超は俺の情報を売るかもしれない…。

いやいやいや！短い時間だったが今日、話していてエヴァちゃんは俺が考えていたよりも義理堅い子だった！それに“誇りある悪”であるエヴァちゃんが、そんな卑怯で不義理なことはしない。

となると問題は……？あ、メンテ時の茶々丸ちゃん、か？彼女が収集した行動データや思考データ、そして記憶フォルダ…。それらから俺のことが今まで以上に漏洩すること、に……？あー…鬱だー…。

「貴様らは何を自然と話しを進めておるかッ！？！？」

「おぅふっ！？」

「……マスター、空気を読んでください」

「なぜか、従者にまで空気読めと言われた！？」

茶々丸ちゃんの頭を撫で撫でしながら考えていたらエヴァちゃんに注意を受けた。だけど、なぜか茶々丸ちゃんに予想外の反撃を受けたようだ。茶々丸ちゃんの雰囲気が少し不機嫌そうに感じられた。

君はどうしたんだい？茶々丸ちゃん。……何かイヤなことでもあったのだろうか？

それでまぁその日は結局……エヴァちゃんの家で夕食をいただいてから無事に帰宅した。メンバーが俺に陽月姉妹、精霊３人娘、そして精魔奇兵の代表としてアイリ達３人が参加した。護衛も多かったから俺も安心していられたよ！

気になる料理は……白身魚のムニエルが最高でした。バターの芳醇な香りが、もう……ね？美味しかったのよ。それとソースだね。それに使われたアンチョビとかが隠し味だったらしい。旨味成分が凝縮されてマジで驚いた。

もちろん帰る時にレシピは貰いましたとも！これでまた一つ俺のメニューリストが増えたな！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第五十話「救援と歓談と主従の仲と」（後書き）

おはようからおやすみまで。ども作者です！

しかし今回はＳｉｄｅ　葵一本で終わってしまった…ｏｒｚ

いや、後悔は無いよ？でも、変化が欲しかったかもしれないですねぇ。

本当に申し訳ないです。はい。

この辺は今後の課題にしたいと思います。

無理っぽいけどな！！やるだけはやってみるけど…。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！！

第五十一話「帰還と返答とこれから…と」（前書き）

五十一話…続けば続くものですね？
ここまで続くとは思いもしませんでした。
これも読者様のお蔭ですな！
それでは続き！

第五十一話「帰還と返答とこれから…と」

――地球軌道上…。

Ｓｉｄｅ　アン

月面での工事作業を終えて地球へ…お父さんの下へ帰ることが出来る時が来たのよ！長かった…。とっても長かったんだよ！私にとって、お父さんと離れ離れになるのはとても、とっても！耐え難いものだったからね！

「あははははっ♪お父さんの居る地球がもう目の前だよ！もう直ぐ！もう直ぐ会えるよ！ヤッフゥゥゥ！！」

私のテンションは右肩上がり！相転移機関もぐりゅんぐりゅん唸る！早くお父さんに会いたいと本艦の心臓部たる動力機関が膨大なエネルギーを捻り出すのよ！そしてその供給を受けて反重力推進エンジンも最大加速して突き進むの！

もう、お父さんからお仕事を追加されちゃったから１月も期間が延びちゃったし…。もちろん、イヤじゃないよ？お父さんに任せられた大事なお仕事なんだもの！キッチリ終わらせてきたよ！

だから褒めてもらうの♪よくやったね、がんばったね、ってね♪そ、それで！優しくななな、なな撫でてもらえたらもう言うことないかもーッ！きゃーっ♪もう♪きゃーっ♪きゃーっ♪

「アン…。気持ちはわからないでもないから落ち着こう？な？」

「……んんっ。そ、そうだね。つい、はしゃぎ過ぎちゃった…。久しぶりにお父さんに会えると思ったら、どうも、相転移機関の出力が暴走気味に上昇してしまって…。あはっ♪」

うん…少しハッチャケ過ぎたかもしれない。機関が戦闘出力の最大値をやや上回っていたし…。出力をもう少し絞っておかないとね…。反省、反省。あわや機関暴走一歩手前だったよ。あははは♪

「暴走とか聞こえたんだけどっ！？お願いだから落ち着いてね！？アンーッ！！」

「大丈夫♪大丈夫ですよぉ♪あー…♪お父さん♪えへへ♪」

「……ダメだ、早く何とかしないと」

艦橋の隅に行ったりなんかしてお姉ちゃん、どうしたんだろう？なんだか頭を抱えているようにも見えるけど…。病気とかじゃなければいいけどね。もしかして心配事かな？それとも…悩み事？

はっ！？まさか……お父さんのこと！？いくらお姉ちゃん達が相手でもお父さんを譲るつもりは毛頭無いよ！？お父さんは私のなんだからね！あー、思い出した！こんなことしてる場合じゃなかったんだ！はぁ、早く会いたいなぁ♪

「んふふふっ♪お父さ～ん♪♪」

「あぁ、葵様、私はどうしたらよいのでしょう…？アンがホームシック？ファザコン？…とにかく色々と重度です。大変ですよ」

お姉ちゃん…何を言っているの？ホームシックなんて……なるに決まってるじゃない！！だって！お父さんが居なかったんだよ！？私の中の演算機構が囁くんだ…。早く帰ろう…ってさ！！今、帰還中だけどね！！

それにファザコン？私が？ふふんっ♪上等…ううん！極上だよ！！寧ろドンと来い、だよ！！私のヤル気の根幹にはお父さん分が必要不可欠なんだからね！！ああ、抱き付きたい…抱き付きたい…抱き付きたい…！！撫で撫でされたい！！！

あぁ、今考えると心配だなぁ。お父さんは人がいいから騙されたりしてないか、とか！！いや、こちらのほうが気になるんだけど…お父さんに変な虫が付いていないか、とか…！！！もう心配だよ！！！

ハオお姉ちゃんとユエお姉ちゃんが居るから貞操的には安心出来るかもしれない。だけど…あの2人も何が切欠で抜け駆けするかわかったものじゃないしなぁ。……あ？降下コースに乗り始めた！？時間だよ！！

「そろそろ時間だね！来たよ、来たよ♪お父さんに会えるんだ！！機関出力上昇！ステルス最大！これより本艦隊は惑星降下態勢へ移行します！」

ロールアウトされたばかりの第二艦隊にも惑星降下シーケンスに入るように指示して降下態勢を整える！降下目標は日本国埼玉県麻帆良市近郊の森林地帯！なんだかメガッサピンポイントな目標だけど私なら……出来る！！

地球軌道上の人工衛星は民間、軍事関係無く全て掌握済み！地上からの観測もお父さん謹製認識阻害術式で認識をずらしているから問題無し！観測記録もリアルタイムで修正中だしね！ふっふっふっ！

「了解。通信士！艦内に放送、お願い」

「了解よ。あー、あー。…全艦乗組員に告ぐ！これより地球への降下シーケンスに入ります！降下の際に多少揺れるので注意してください！繰り返します！これより地球への降下シーケンスに……」

「お父さん♪お父さん♪お父さん♪」

日本国上空！少し軌道修正！！埼玉県上空！もう目標は目前！！麻帆良市上空！隠密は厳に！ここまで来て見付かったらお父さんの顔に泥を塗っちゃうからね！えーとー…森林地帯…森林地帯…予定地点は、と…。

「……（ボソッ）ダメだ。本格的にダメだ。葵様にアンのメンテナンス申請をしておかないと…」

「ん？ん？？ん？？？」

「……（ボソッ）オーバーホール申請のほうがいいかも」

あっ♪あそこだ！お父さーん！今、私が行くからねーッ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アン

――麻帆良市某森林…。

Ｓｉｄｅ　葵

隠密行動なので毎度の事ながら深夜１時過ぎ…夏の夜とは言っても森の中は空気が澄んでいる分、涼しい…というか肌寒いくらいだな。まぁ魔力や気を身体の内や外に纏うことで寒暖はある程度コントロールできる。問題無いさ。

そんな森の開けたところで俺とアイリが隣り合ってアン達の到着を待っているんだ。背後の離れた場所にはハオとユエも護衛のために付き添ってくれている。

「そろそろかな…」

「はい。地球降下前の通信で到着は約５０分後の予定とありましたから」

「そう…何にしてもアン達が帰ってくるのは嬉しいかな」

「ふふっ。そうですね。恐らくですが彼女達も閣下に直接会えるのを楽しみにしていることでしょう」

アン達には色々と仕事を任せちゃったからなぁ。必要なことだったとはいえ、そのせいで帰還が遅れちゃったから申し訳ない気持ちでいっぱいだ。休暇なり何かでご褒美としないとな。

あ、そういえば…。

「…確か帰還時には新造した第二艦隊も随伴してくるんだよね？」

「ハッ、その通りです。第一艦隊と同規模です」

むぅ、これで我が艦隊は小規模だが二個艦隊になる。むふふ♪個人の持つ戦力としては圧倒的ではないか！機動兵器は数十万機と保有しているんだが母艦となる艦が今までアンと城塞機能を有している［工房］の［格納庫］や［ドッグ］くらいしか無かったからなぁ。

やっぱり、艦載機だけじゃ格好がつかないからな。戦艦、巡洋艦、駆逐艦に空母！これらがないと戦力として、そして見た目的に問題有りだったんだよ！あははははっ！はははっはっはっはっはっ！

……だが。

「第一艦隊は時間凍結処理して［格納庫］へ格納した。今回も同じにするとして…」

まだ足りない……。

旧世界の戦力ならば今の戦力でもどうとでもなるんだ。まぁ戦力の保有数は負けているが、な。数の暴力とはよく言ったものだよ、まったく…。だが元から技術力が天と地ほど違い過ぎるんだから質だけで負けることは無い。

だが新世界は…まだ、だ。まだ少しだけ戦力的に不安が残る。魔法技術は科学技術と違い強弱に個人差がある。個人で戦艦並みの戦闘力を発揮する者も居るくらいだからな。なかなかに侮れないものがあるよ…。

まぁ旧世界も新世界も、それらの国々にケンカを売るメリットが何も無いからやらないが…。それに俺の陣営だと占領後の領地維持や治安などのライフラインを考えない強襲、蹂躙、殲滅と言う手段しか出来ないんだ。

アンやラミエルのように上位ＡＩを搭載していない通常の無人機は、まだ少し状況判断に柔軟性が欠けているからな。

……要は融通が利かないんだよ。まぁだからこそルーチン化された作業には力を発揮するんだがな。製造して数十年経った今はそこそこ改善されてきたんだが経験情報がもう少し必要な模様だ。

あー、それと無人艦に搭載するＡＩだけど一々個別で構築するのは大変だ。だから各艦にはアンから株分けした。ブラックボックス化した部分を切り離し、かつ蓄積された経験情報を残して、その他の部分を初期化して、少し簡略化したものを搭載することにした。

お蔭で戦闘情報は問題無く各艦のＡＩに継承されている。対魔法戦はほぼ万全です！旧世界で艦を使った戦争は……今の時代は無いな。対艦戦の戦闘情報は新世界の対艦戦闘を参考にフィードバックするか。

たくっ！戦闘情報の収集もままならないな！個人戦闘の記録、情報収集なら紛争地帯でやり放題なのに…。

……あ？しまった…。思考がズレにズレてしまった。

「んんっ！あー…今後の生産状況はどう？」

「???ハッ！月面プラントの生産ラインが軌道に乗ったのもありますが月で試行された新技術、時間加速フィールドが“なかなか”使えるようです。あと一月あれば当初に予定していた第四次生産までを終わらせるでしょう」

「そっか…。順調だな♪」

時間加速フィールド…文字通り、限定空間内の一定範囲の時間を加速させる技術だ。某ＰＣゲームの近未来ロボットアクションＡＤＶに出てきた技術をそのまま流用してみた、だけ。変な形のロボットだったのは覚えている…。

この技術の使用上の注意点として範囲内の空間の時間を加速させることから生物の年齢も同様に加速されることが挙げられる。普通の女性には耐え難い状況かもしれないな！俺みたいな不老やその眷属以外が使うには危険過ぎる。

１０歳の子がフィールド内に入って、数秒して出てきたら２０代後半に成長している…。浦島太郎も真っ青の状況だな！と言うか、リアル逆浦島太郎だ…。使用するのは月面プラントだけに限定しよう。うん、それがいい…。

ふぅ…まぁ、それはともかく戦力の総生産量は確実に増えたことには変わりは無い！今までは資源を外から［工房］へ運び込んでいたから、それなりの手間が掛かったからな…。月面プラント万歳だ！造ってよかった月面生産基地！

月に残って設備の維持管理をしている自動人形（オート・マータ）や無人作業機に感謝だ！後方支援が充実化すると俺も助かるわー…。うん、マジで。これで定期的に物資が送られてくるようになった。

「これで物資の心配は解消されたかな」

「ふふっ、はい。彼女達はいい仕事をしてくれました」

アイリも後方の心配事が解消されたことで安心して嬉しそうだ。補給線の確保は重要事項だから当然だよね。…うん、アン達はいい仕事をしてくれたよ。それは俺も認める。でも…。

でも、何で戦争を控えているわけでもないのに、こんなに戦力ばかりが充実化していくのだろう？始まりは家族や自分の護衛戦力…のはずだったんだよなぁ。それが今じゃ無人兵器類の数では小国並みの戦力だ。

むぅ…？臆病ここに極まれり、という感じだな…。どれだけ不安なんだろう？時々だけど自分の性格に不安を覚える時がある。……勇気って何ですかね？

お？そうこうしているとアイリのコミュニケからコール音が鳴っている。アン達が到着したのかね？

「閣下…連絡が入りました。間もなく上空に到着します」

「ふむ……ああ？多分…アレ、かな？熱光学迷彩と認識阻害術式で見えないけど…」

ごめん…。自分で製作しておいてなんだけどマジでどこに居るのかがわからない…。熱光学迷彩の開発当初はまだ景色が揺らいで見えたのに…今じゃほぼ完璧に背景と同化しているものなぁ。隠蔽機能に力を注ぎ過ぎたかもしれない…。

「ふふふっ、そういう仕様ですから仕方ありません。ん？……閣下、アンからです」

「え？アンから？何だろう？」

再度、アイリのコミュニケがコール音を発したと思ったらアンからしい。

んー…？問題無く到着したように感じたけど…。何か問題発生か？学園から数十キロしか離れてないから、こんな時にステルス関係に問題発生、とかだったらマジでやめてほしいなぁ…。

「…こんばんは、アン。そして、おかえり。皆が無事に帰ってきてくれて嬉しいよ」

『ただいま！お父さん♪会いたかったよっ♪それで“この子達”はどうしたらいいかな？』

この子、達ぃ？……あー、第二艦隊の艦船！？それなら第一艦隊と同じ…って、アンはその場に居なかったんだったか。とりあえず格納場所までの道を開かないと…。

えーと…空間操作…王の宝物庫発動…っと。艦隊の正面空間に直径１ｋｍに渡り展開。これを［格納庫］までの道とする。別でアングレカムの前には［ドッグ］への道を展開するものとする。…とこれでいいかな。

……。

……。

……何？魔法的な描写？無詠唱で大概が片付くのにするわけ無いじゃないか。そういうのは戦闘時などで戦意高揚のためにパフォーマンスを織り交ぜて呪文なり、魔方陣…機械的魔法だから魔“方”陣…なりを展開するよ？

でも今回みたいなのは所謂、作業じゃない？こういうので一々呪文詠唱なんて非効率的なことをしていられるかよ…。恥ずかしい…。

「ああ、今［格納庫］までの道を開いたから、艦隊はそのまま前進させてくれ。アンの進んだ先は［ドッグ］になるから、そこで艦の整備を受けてね」

『はーい♪またあとで、ね♪絶対だよ！？』

はいはい、またねー♪……アンのテンションが高いなぁ。何かあったのかな？お兄さんは心配です。

「そういうわけでアイリ？誘導よろしく♪」

「はい、お任せください」

艦隊の誘導兼格納処置をアイリに任せて、今後の予定を大まかに考える。学園長に貰った猶予は一月だ。それもあと残すは数日のみ…。とりあえず、無事にアン達も合流したから学園長へ返答をしないとなぁ…。

アン達の帰還祝い…と称した宴会…を開くから2，3日後を目安とするか。飲めや歌えやの大宴会にしよう♪俺もここ最近ストレス

が溜まってきているから、一気に発散しておきたいのよ…。

主に学園長（じじい）とか、学園長（ぬらりひょん）とか、学園長（エイリアン）とか…。それにエヴァちゃん（金髪美幼女）とか、エヴァちゃん（吸血美幼女）とか、エヴァちゃん（エターナル美幼女）とか…。オマケにお喋りなタカミチ（眼鏡教師）とか…。

殆どが学園長とエヴァちゃんだｏｒｚ……あ、でも、エヴァちゃんの時は茶々丸ちゃんという癒しが猛毒（エヴァちゃん）を少しだけ中和してくれるから学園長の時よりは幾分はマシかもしれない。

はぁ…。宴会ではオモックソ羽目を外して騒ごう…。ストレス発散がお酒とか末期かもしれないけど、この際、構うものか！飲む！もう浴びるほど飲んでやる！！

ふぅ、それはともかくアン達が無事に帰ってきてくれてよかった…。くくくっ♪明日からも頑張ろうっと♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　学園長

約束の期限が過ぎて3日…。過ぎた期間、何をしていたのかと問えば“暫らく振りに会った家族と夜通し飲んでいた…”というバカな理由じゃった。何でも予定していたのは3日間じゃったらしいが興が乗ってもう3日飲み直したようじゃ。

6日間も飲み通しの宴会…。葵君…お主、もしかしなくともバカじゃろ?バカなんじゃろう?よくもまぁ急性アルコール中毒にならんもんじゃわい…。どれだけご家族と会えて嬉しかったんじゃ…。あー、6日間、飲み通しになるほどか…。

それにしても今日、ここに来た時などは顔色が赤くなったり白くなったりとタカミチが用意した水をガブガブ飲んで大変そうじゃったのに今はケロッとしておるのう。

葵君も立ち直ったようじゃし、そろそろ話し合いが出来るかのう。

「…それでは葵君の返答を聞かせてくれるかね?」

ワシとしては良き返答を期待したいところじゃが…。はてさて?酔いで濁っていた葵君の目は今、先程と違い何もかもを見透かすような光を宿しておる。こういう輩は扱いを間違えると厄介じゃのう。下手な小細工は逆効果じゃ…。

フォフォフォ♪葵君がどのような返答をしてくれるかが楽しみじゃよ♪

「……俺の返答は唯一つ、麻帆良に“所属しない”というものです。俺はあくまで無所属(フリーランス)…。学園長?俺はね…。どこまでも自由でありたいのですよ」

「……そうかの。残念、じゃのう…。うむ、残念じゃ…」

いや、わかっておった…。葵君のように無所属で居る者には、それをするだけの何かしらの理由があるのじゃろう。そのことにワシ個人としては言うことはない。東の長としては残念じゃがな…。

フォフォフォ、それにしても見事に跳ね除けられてしまったわい。そのあり方を愉快じゃとも思う。気骨…いや、奇骨かのう？…のある者だとも思う。木乃香も世話になったしのう。ワシに出来うる限りの範囲で便宜は図ろうとも思う。

じゃが…麻帆良に所属しない魔法使いが、この地に居を構えることに理解を示さず、更には納得できぬ者も多い。故にワシは長として問題の少ない一時的にしろ“麻帆良へ所属”という手段を取ってもらいたかったのじゃ。

麻帆良の魔法使いには納得しない者も確かに居る。その者達が葵君に何か不利益になるようなことを仕出かすかもしれない。若い魔法使い達が短慮に走ることだけは自重してほしいのじゃがのう。

「葵さん…どうしてもダメですか？」

タカミチもワシと同様の懸念を抱いておるようじゃ。今一度、葵君を説得するようじゃな。説得できる可能性は低い。じゃが2人は旧知の間柄のようじゃし、もしかしたら…？

「ふぅ…タカミチ、一つ忠告だ。お喋りなのは寿命を縮めるぞ。気を付けることだ。どうも今のお前は平和ボケが過ぎているようだからな」

「……」

葵君はタカミチの説得に取り合うことなく逆に忠告じみたことを告げおった。言われたタカミチは思い当たることがあるようじゃな。あらぬ方向に視線を飛ばして尋常ではない冷や汗を流しておる。

……一体、何があったんじゃ？

ふぅ…。それにしてもタカミチは説得が失敗に終わったことを残念に思っておるのじゃろうな。彼の顔色が優れない。やはり、旧友の身を案じておるのじゃな…。優しいのう、タカミチ君っ！

「くっくっくっ！何をシケタ顔してんだ？おっとこの子だろうが！元気出せって！」

「わっ！？葵さん！僕もいい年した大人なんですよ！？いつまでも子供じゃないんです！あーっ！？髪が！髪型がっ！？」

「わっはっはっはっ！俺からすればまだまだ坊やだよ！そら♪そら♪くっくっくっ！」

「アーーーッ！！」

あるぇーっ！？そんなタカミチが葵君によって子供扱いされておるとな！？しかも見た目的にはタカミチのほうが年上に見えるのに！何！？葵君のほうが年上なのかの！？そんな！？ウソじゃぁあ！！

あー、あー…。タカミチの髪型が原型を止めぬほど凄いことになっておるよ…。まるで台風の真っ只中で竜巻に遭遇したような髪型じゃった。

「……葵さん、ヒドイですよ。あぁ、髪型がメチャクチャだ…」

「さて、タカミチ弄りも終わったところで…。学園長、話しの続きだ」

「……何じゃと?」

ふぉっ!?タカミチは無視かの!?あ、あぁ…タカミチの目から滝のような涙がちょちょぎれておるぞい。小さく「無視ですか…」と零しておるぞ?散々にからかわれて最後に無視とは些か不憫じゃのう。

それはともかく葵君は話しの続きと言いおったな。所属の話しは蹴ったようじゃったがのう…。それなのに葵君は他に話し合うことがあると言う。フォフォフォ。何を言うつもりなのかのう?

「先程までの話しは俺の所属先に関することだ。ここからはビジネス…お仕事の話しだ」

「ほほう?フォフォフォ。ふむ…それで、その話しとは何じゃな?」

「…なに、これは…ただの気紛れ、だな。ただの雇われとしてなら仕事を引き受けようと言っているんだよ」

「なるほど、なるほど♪そういうことじゃな。では“その時”は依

頼させてもらうぞい」

フォフォフォ♪ふぅむ？そういうこと、か。要は傭兵稼業。完全に麻帆良の傘下には入らぬが依頼という形で報酬を支払えば要請に応えると言うのじゃな。なるほど、なるほど♪それならば最低限、非常勤務の扱いができるの。

ふむ…。これなら多少は諍いの緩和に繋がるかもしれん。幸いにも龍宮君という前例もあるしの。現在の彼女は麻帆良の生徒ではあるが傭兵を稼業にしておるのはかわらん。

あとは葵君自身が与えられた仕事をキチンと仕上げて実績を積んでいけば反発する者も激減するはずじゃ。

「ふふんっ♪……簡単に考えているようだが、いいのかな？俺は“高い”よ？」

「フォフォフォ♪相応の働きをしてくれるのならば問題は無かろう」

「くくくっ！そうかい…」

報酬に相当する働きをしてくれれば良いのじゃがなぁ。フォフォフォ。まぁ文句の無い実績さえ示せば、反対するであろう魔法使いも馬鹿な行動を自重する。フォフォ。これでワシの頭を悩ますことが減るというものじゃ。何も問題は無いわい。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　学園長

――麻帆良学園大通り…。

Ｓｉｄｅ　葵

学園長室から出た俺は、まだ夏の残暑の残る午後の大通りを自分の店である喫茶店クレイドルへ、ただ帰る……だけなんだけど。はぁ…どうして、学園長にあんなこと言っちゃったかなぁ？

報酬次第では仕事を受けるなんて言わなきゃよかった。タカミチが残念そうにしているから、ついやってしまった…。あー、クソッ。あ、言葉が悪いな。失敬、失敬。…まぁ言ってしまったものは仕方が無い。

いや、こういう時は逆に考えるんだ。俺が矢面に立てばアイリ達は裏で動き易くなるじゃないか。学園側の注意は俺に集中するはずだ。アイリ達のことは今のところエヴァファミリーと茶々丸ちゃんの背後に居るだろう超一味だけ…のはず。

それにタカミチには今度こそ口封じ的なことも仄めかしたし、今日もやんわりと忠告した。これで下手に情報の漏洩は無い…と思いたい。まぁここまでやれば大丈夫だろう。…大丈夫だといいなぁ。…大丈夫かなぁ？

まぁ学園長の依頼は程々に受けて、やる時はキッチリ片付けてやりましょうかね。適度に実績を積めばある程度の信頼は得られるだろうさ。そう、今のところ学園側に対して問題は無い。

問題は、だ…。

茶々丸ちゃんを通してどれほどの情報が超一味に洩れているのかが気になる。あ、このことで茶々丸ちゃんに罪は無いよ？あるわけ無いじゃないか。彼女を責めるのは俺でも抵抗があるのよ。

茶々丸ちゃんいいよね。茶々丸ちゃん。嫁に欲しいくらいだよ。

情報洩れに関しては一度、超の研究施設に対して一部隊を派遣することも考えている。俺の邪魔をするようなら何れは仕掛けなければいけないかもしれない。

それに俺の知らないところで超の計画（笑）に巻き込まれても果てしなく迷惑なだけだからな。時と場合によっては学園祭の時に計画（笑）の全てを叩き潰す必要がある。

……あ？それいいかもしれない。

正直に言うと超一味に嘗められたままというのは俺にとってはどうでもいいんだ。被害らしい被害は施設だけで家族には死者（死があるのか疑問）どころか怪我すらなかったからな。それに施設はもう月に移設されているしね。

うん、俺個人では問題無い。無いんだけど…他が納得できないようだ。それというのも現在進行形で超一味の生命は狙われているからだったりする。命令は下してないから参加自由の有志で常に動向を監視している……らしい。

これらはミリーとファレノから聞いた…。

そして命令さえあれば直ぐに実行できるだけの装備と人が動いて

いる状態だ。……これって怖くね？俺は抹殺なんて物騒なことは考えていないんだ。動向を常に把握できるように監視さえしてくれれば問題無いと思っている。

それに直接、手を出したりなんかしたら学園側も動くことになる。超一味も一応は学園の生徒なんだよ…。学園側は信条や考えは別にして何が何でも守るだろうよ。それは面倒が二乗倍クラスでやってくることになる。そんなのイランのよ…。

故に俺は考えた。超一味に対して一番の痛打となるモノ、場所、時間…。それは２２年周期で訪れる世界樹の大発光現象…。つまり学園祭の計画実行日に最高のタイミングでその横っ面（よこっつら）を思いっきりブン殴って計画を破綻させてやる。

俺が砕くのは超自身ではなく計画…その心、精神だ。くくくっ！

これに限ると思うんだ、うん。俺自身は計画が成功しようが失敗しようがどうでもいい。だが家族の皆が納得しない。その鬱憤を晴らすためにも超・鈴音…君には生贄になってもらおう。憂さ晴らし…今家族に必要なことはそれだよ。マジで…。

未だに超一味の話題が出るたびにギスッとした空気が流れることがあるんだ。意識しなければいいんだけど、このまま放っておくと俺の胃に穴が開きそうなんだ。だからストレス発散してもらおうと思う。主に俺の胃と精神安定のために…。

言っておくが、この行為は正義や悪では断じて無い。俺は俺と家族のためだけに戦うのだからな。

「とりあえずは戦力の強化、か…」

機械人形（マキナ・マータ）の開発を進めるとしよう。３機の試験機でデータは取り終わっているから、あと２ヶ月もあれば制式機たる初号機が完成する。それが終われば二号機以降は量産機を生産できる予定だ。

何も問題無い。超一味は多脚戦車と田中、それに鬼神兵６体の陸戦が主体戦力だ。空間戦闘が可能な戦力は俺の陣営のお家芸でもある。さらにここへ機械人形の軍勢が加われば空も陸も俺達のテリトリーだ。

くくくっ！負けはせんよ。久しく集団戦闘のデータが滞っていたからな。本番では全てを以って実証実験としてくれる！

その際に学園長（じじい）に何かを言われるかもしれないけどな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第五十一話「帰還と返答とこれから…と」（後書き）

戦力がまた一つ追加されました！
艦隊戦力なんて魔法世界くらいしか使う場面が無いように感じる作者です。
どないしょー…。使いどころが難しい。

”ネギま！”は個人技能が特化し過ぎのきらいがありますよね？
集団は雑魚の集まり的な…。でも…。
でも、強者が徒党を組んで連携した場合これ以上無い脅威になると思うんです。
”質と数の暴力は恐ろしい！”をこの作品で表現できたらいいですね。
今後の目標がまた一つ増えましたよ。これからも頑張ります。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！！

第五十二話「起動実験と小さな鼓動と予定外と」（前書き）

どうも！
以前に軽く指摘があったのですがこの作品では三人称をＳｉｄｅ？？？で表現しています。
決して謎の人的扱いではありません。

まぁ何が言いたいかと言うとですね？
これからは三人称を使う時はＳｉｄｅ　？？？を使いたいな、と考えています。
…ということです。

では、それを踏まえて続きをどうぞ！

第五十二話「起動実験と小さな鼓動と予定外と」

――魔法球［工房］内、研究室…。

Ｓｉｄｅ　葵

アンが帰還してから約２ヶ月半が経過した。ここは［工房］の中にある俺の研究室の一つ。その研究室には今、成人男性が１人まるまる入るシリンダーが数十個あり、それらを前に俺はとある準備をしていた。

全てのシリンダーの中には機械の骨格、電子部品などで構成された人型が直立した状態で固定されている。機械部分が剥き出しの人型はただ静かに目覚めを…力の源たる命の炎を吹き込まれるのを待っているように見える。

「主、準備が整いましたぞ」

「こっちも終わったよー。あるじはどうかなー？」

研究用に白衣を纏った俺以外にも同じく白衣を纏い準備をしていたウーリとマリー、他数名が準備を終えたことを伝えてきた。

「そうか。俺のほうも今…できたぞ。…皆！準備はどうか！？」

「「「「「はいっ！いつでもどうぞ！」」」」」

「よし！総員！起動準備に入れ！下手な失敗なんかするなよ！？」

「御意ッ！」「あい！」「「「了解ッ！」」」」」

本当に変な失敗…というか問題は無しにしてほしい。今日のために長い間、準備して、やっとのことでここまで持ってきたんだ。だから…マジで勘弁してください。

「起動準備を開始せよ！」

「了解！機体内部に高魔力結晶体を設置！…動力炉との結合を開始しました！機体との同期を確認！状況クリア！」

「主電源入ります！出力上昇！…５０…６５…８５…１００％！…電圧安定！状況クリア！」

濃い青色の高魔力結晶体を動力炉の中心に設置。結晶体と動力炉が結合されたのを確認したらエネルギーの注入…というか充電？まぁどちらでもいいけど要は起動エネルギーの確保ですな。

とりあえず最初の関門である２つの動力関係は順調に終わった。まぁ、こんなところで問題発生して暴走されたら“いい感じ”の規模で爆発を起しちゃうから安全に終わって俺達は一安心だ。

「続いてナノマシン溶液注入開始します！溶液の充填率…６０…７０…８５…９５…。充填率１００％です！」

「よし！ナノマシンに形成信号を発信せよ！」

「了解！信号発信…送信しました！機械化骨格への形成を確認！順

調に形成中です！」

キラキラした銀色をしたナノマシン溶液がシリンダー内を満たして機械人形（マキナ・マータ）の機械化骨格を覆った。ナノマシンはプログラム通りに与えられた役目をこなしてくれることだろうよ。

いやぁ、この子達がどんな風に形成されるか楽しみだなぁ♪……出来れば男性型がいいなぁ。ムサイのは勘弁だけどいい加減、男の家族が出来てもいいと思うんだよ…。だから今回の実験は個人的にとても期待しています！

「いいねぇ♪いいねぇ♪ここまでは順調だ！皆！ここからが本番だ！気を抜かないで逝くぞ！？もとい！いくぞ！！」

今…何かフラグが立った気がする…。具体的に言うと問題発生的な意味で。……けど気にしない！！気にしたら負けのような気がするからな！

「「「「「「「「「はいっ！」」」」」」」」「御意ッ！」「あい！…ぁ」

「よし！あえ…？何？ウーリさん今の“…ぁ”って何？すっごい気になるんですけど？……もしかして！？ここにきて何か問題かな！？」

ちょっ！フラグが立ったと思った瞬間か！？勘弁してくれよ…。ここまで来て問題が発生って何の嫌がらせだよ。とりあえず…ウーリ？チャキチャキ白状しようか？何があったよ…？

「え？…あー？…その？…違う、と思うよー？うん？違うんじゃないかなー…？違うよー？きっとー…？」

「何!?その疑問系の嵐は!?メッチャ気になるよ!?」

ウーリは今まで見ていたモニターから目を離して何でもないように装っている。…が、ウーリはチラチラとモニターを気にして見ているのだ。何も無いと思うほうがどうかしている。

「ん?あっ!?あ、主!これ!この波形を見てくだされ!!早く!!」

「何!?一体何が起きたの!?」

更にウーリを問い質そうとした。でもそれはマリーの焦りを含んだ声で実行できなかった。この大事な時に何が起きたんだよ?本当にさ…。

「これです!このα波形とγ波形です!!」

「……何だ?これは…。予定よりも波形の振り幅が大きくないか!?どこかで手順を間違えたのか!?誰か!システムチェックは!?」

マリーに急かされてモニターに表示される情報を確認した。“α波形”と“γ波形”…。この2つは思考プログラムの反応を計測しグラフ化したものだ。言ってしまえば偶発的にプログラム上に存在する“かも”しれない“自我存在”の有無を示すものだった。

その2つの波形が大きく変化して信じられないほどの反応を示している。俺も今回は自我を構築するためのプログラミングをした覚えはなかったから驚いていた。いや、マジで驚愕した。……何で、

こんな強く反応してんだろ？

当然、俺は何らかの不都合が起きてプログラム上にバグが発生したと判断。すぐさまソフト面のシステムチェックを指示した。でも結果は…。

「あるじー。今ー、2回目のチェックしてるけどー……どれも問題無し、だよー」

白だった…。おかしい…。ウーリは2回もチェックを掛けている。それなのに問題は表示されない。あるはずの無い反応があるのにシステムに問題が無い？一体何が…。

「じゃあ、この波形はどういうことなんだよ。……起動は、失敗？このまま、終わるのか？生まれて、こない…？」

「主…」「あるじ…」「「「「葵様…」」」」」

問題は確かに起きている…。原因は不明…不明？ちょっと待てよ…。電脳空間内にダイブすれば問題となる根幹部分を見つけ出すことが出来るかもしれない。無論、この方法は危険を伴う。でも、今ここでやらないわけには…いかない！

「作業、再開だ…！どんな風になってもいい…！ただ無事に生まれてくれれば…！！頼む、皆！力を、貸してくれ…！」

「……」「……」「「「「「……」」」」」

俺は頭を下げているから皆の表情は見えない。その皆が黙ったまま…。ダメなのか…！

もうここまで来たら起動を成功させるのは難しい。機械化骨格に張り付いたナノマシンは停止することなく形成は進んでいる。だが、このままでは中身の無いただの機械の塊に成り下がってしまう。

それだけはダメなのだ、と考えた時、皆が慌しく動き始めたのを気配で感じた。頭を上げて見てみれば起動準備を再開した皆の姿が目に映った！ありがとう…皆っ…！！

「…プログラム修正！擬似神経に強制アクセスします！」

「擬似神経回路の９４から２１０番まで修正を完了！…っ！？緊急！３００番！３４０番４１０番に修正後の問題発生！」

「再度プログラムの修正に入ります！…ちぃぃ！！誰か！形成の進行を緩和できないか！？このままでは不完全なまま形成が終わってしまう！！」

普通にプログラムを修正しても間に合わない…。多少、危険だが電脳空間に侵入して直接“バグ”と思われるものを修正する必要がある、か…。

「くっ！そこは俺が直接、修正に入る！電脳ダイブする！！ＩＦＳ、セット！！」

「なっ！？主！危険です！！下手をすれば主が！？」

「そんなことわかっている！！」

「「「「「っ！？！？」」」」」

これはナデ○コに登場するワンシーンだ。“鈍感料理青年”がオモイ○ネを助けようと“電子の妖精”と“マッド整備士”の手を借りて電脳空間に入ったという方法だな。

だが俺の場合、方法は同じなのだがリスクが伴う。肉体的に影響があるわけではないんだが色々と多世界技術を混合した弊害なのか、下手すれば電脳空間で遭難…。精神的に廃人になりかねない。

ある意味、安楽死だよな…。

……。

……。

…。

ハッ!?何だかイヤ過ぎることを想像してしまった!?俺に自殺願望なんて物騒な思想なんてないよ!?縁起でもないな!うんっ!もう少しマトモなこと考えよう……ｏｒｚ

「ならばなぜ!?機械人形（マキナ・マータ）は無人兵器と同じ!アンとは違い感情の無い兵器です!仮に失敗しても、また造れば良いではないですか!?主が危険なマネをする必要がどこにあるのですか!?」

割と緊急事態で忙しい、この時にちょっとおバカなことを考えていたら、それは来た…。マリーが表情にすんごい怒気を貼り付けた状態で怒鳴りつけてきたんだ。

うん!今すぐ、ごめんなさいって土下座してしまいそうだ!!…

……マジでコワイ。ガクブルガクブル！！でもマジメに反論します！新しい家族の命が掛かっているからな！！

「それでも、だ！それでも俺は…無事にこの子が生まれてくることを望む！よく生まれたな、って祝福してやりたいんだよ！」

「そんな！…そんな理由で無理を…！！」

するんだよ…。家族のためならどんな無茶や無理を弾き飛ばして助けるんだ…。それだけが臆病な俺に唯一できることだからな…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――同研究室…。

Ｓｉｄｅ　マリエール

機械人形（マキナ・マータ）の初号機の起動準備中に事故が起きた。何も問題は無いはずだった。そのはず、だったのに…！！

「それでも、だ！それでも俺は…無事にこの子が生まれてくることを望む！よく生まれたな、って祝福してやりたいんだよ！」

「そんな！…そんな理由で無理を…！！」

「マリー、これは無茶だが無理ではない！必ず成功させてみせる！」

「そんな…！それでも…私は…！」

私は主が無事なら何も入らない！！

今、開発している機械人形はアン殿やラミエル殿と違い無人機動兵器（ムシ）と同じ、ただの意思無き無人兵器だ。たとえその記念すべき初号機（カブト）とは言っても主の安全には変えられない！！

故に私は主を押し止めようとした！だが私の白衣の裾を掴む手によってその行動は止められてしまった。誰だ！？この大事の時に私を止めるのは！？

「マリーの負け、だよー。ここはあるじにー、任せよー？ねー？」

「ウーリ！？しかし…！」

ならばお前は主のことが心配ではないと言うのか！？私は心配だ…！失敗して電脳空間で遭難してしまいニ度と目覚めないのでは、と考えると心配で心配で…！

「“しかし”も“かかし”もないよー。大丈夫だよー」

「お前は！何を根拠に、そんな！？」

「根拠なんてー、あるじを信じてるからに決まってるよー♪マリーは……信じられないのかなー？」

「そんなわけあるか！」

信じているとも！いや、信じたい、と思っているさ…！だが！ここで主が無理をする必要が一体どこにあると言うのだ！？これは自我も無い無人兵器ではないか！？

「ならー、あるじを信じて任せてー。ねー？」

「だが…！だが…！！だが…！！！」

考えがまとまらない…！主のことは信じている！だが…！もしも、万が一のことが起きたら、と考えると……怖くて仕方ないんだ！！もう…どうしたらいいか！どうすればいい！？

「マリエール・Ｓ・アニムスッ！！！」

「っ！！！」

普段、物静かなウーリに珍しくも怒鳴られた。主より私達、精霊に与えた名前“～～～・Ｓ・アニムス”というフルネームまで使い、怒鳴った…。今のウリエールは本気で怒気を表している。怒気の裏に優しさを隠して…。

「……信じてよー。ウーリ達のあるじはー、こんなことに負けないよー」

「マリー…俺からも、頼む！俺を信じてくれ！」

ウーリ……。主……！どうあっても意志を曲げてはくださらないと言うのですね…。しかし、私は…！いや、ここは主をサポートし、帰還を手助けするべき、なのか…？ならば！私のすることは決まった…！

「……わかり、ました。ただし！サポートは私がします！！ウーリも手伝え！！」

「あ、ああっ！マリー達が補助してくれれば安心して作業が出来る！」

「あいあいー、もちろんだよー。がんばろーねー」

「うむ！皆は作業を継続！これより主が電脳空間内に入り直接修正に入る！各員はそれだけは注意されたし！！良いな！？」

「「「「「――――ッ！！了解ッ！！！！」」」」」

放しませんよ？主…。必ず連れ戻してご覧に入れます！電脳空間で迷子になんてさせてなるものですか！無事に帰ってきたら……えーっと、何をしてもらおうか？金属の加工作業を一緒にしてもらうか！

「主ッ…！ご武運を…！」

「あるじー、がんばー」

「…行ってくる！！ダイブッ！！」

ＩＦＳ端末を兼ねた座席に主は身体を預けた…。今、主の意識は電脳空間内に侵入中。こうしていると主が穏やかに寝ているように見えるな…。

あぁ…やはり心配だ！ここは私が……しまった。私はＩＦＳを持

っていなかったのだったｏｒｚはぁ…私もそうとう混乱しているようだ。

「あぁ、主…！」

「大丈夫だってー。ほらー？サポート、するんでしょー？」

「……無論だ！主を電脳空間で遭難させるわけにはいかないからな！！」

ほら！お前達も準備しないか！私とウーリだけにサポートをやらせるのか！？ハリー！ハリー！ハリー！時間は待ってはくれないんだぞ！！

「おー。その粋だよー。それじゃー、早速ー…」

「アクセスッ！！」

やり遂げます！主を助けるのが私の存在意義なのですから！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　マリエール

――電脳空間…。

Ｓｉｄｅ　？？？

どこまでも拡がる暗い空間内でそれは確かに存在した。

――トクン…トクン…トクン…。

その存在は、今はまだとても小さく…弱々しく鼓動している。それでも白く…どこまでも純粋な白い輝きをしていた。

――トクン…トクン…トクン…。

純粋な白い輝きは小さく鼓動する…。まるで最後の灯火のように鼓動する…。まだ存在としては至極小さいそれはここに居るのだと主張するように小さく鼓動する…。

――トクン…トクン…トクン…。

“それ”が生まれたのは偶然だった。切欠は些細なこと。兵器として期待されていた“それ”はいつも見ていた…。いつも聞いていた…。いつも観察していた…。いつも関心を寄せていた…。いつも“彼”を…。

――トクン…トクン…トクン…。

“それ”の機体を作り上げた“彼”を見ていた。自我と言うには幼過ぎる反応…。それでも条件反応のよう“彼”のことをセンサーが…カメラアイが…プログラムでは説明が付かない“心”が…捉えて放さなかった…。

――トクン…トクン…トクン…。

“彼”は、いつも“それ”に話しかけていた…。いつも他愛も無

い内容だった…。ただの世間話しや喫茶店なるモノのこと…。そして何が嬉しいのか楽しそうに笑いかけていた…。いつも“それ”は見て…聞いて…感じていた。

――トクン…トクン…トクン…。

“彼”は“それ”が起動していないと思っている。…だが実際は違った。“それ”は最低限のセンサーなどの機能だけは起動していた。見逃さないように“それ”は待っていたのだ…。

――トクン…トクン…トクン…。

いつも話しかけてくる“彼”を…。いつも笑いかけてくる“彼”を…。あの暖かい雰囲気を纏う“彼”を…。ただ“それ”は待っていた…。

――トクン…トクン…トクン…。

鼓動する…。鼓動する…。鼓動する…。

――トクン…トクン…トクン…。

小さく…。小さく…。小さく…。

――トクン…トクン…トクン…。

ただただ小さく鼓動し続ける…。

“それ”が芽生えて数日…数十日…時間にして3ヶ月以上が経った日はいつもと違った…。“それ”の機体となるものは強化ガラスのシリンダー内に直立のまま固定され機体の各所に大小様々なコードが接続されていた…。

――トクン…トクン…トクン…。

いつものように気付かれない程度に“それ”はセンサーとカメラアイを起動して周辺を索敵した…。“それ”の周囲には同型の機体が入っているシリンダーがあり“それら”が数十機、存在していた。“それ”の同族だった…。

機体を固定されたシリンダーの周りは忙しなく走り回って何かの準備に追われていた…。“それ”の存在する機体の前にも“彼”が居た…。“彼”は強化ガラス越しに“それ”を嬉しそうに見つめていた。“それ”と“彼”の目が合った…ように感じた…。

――トクンっ…！

その瞬間、“それ”はいつもよりも大きく鼓動した。とても不可解な鼓動…。今までには無い鼓動…。でも…不快、ではない鼓動…。痺れるような鼓動…。どこか…そう、癖になりそうな鼓動だった…。

――トクン…！トクン…！トクン…。

やがて“彼”が“それ”から離れると不可解な鼓動は落ち着きを取り戻した…。だが“それ”は何かが欠けたような喪失感を感じていた…。そのことが“それ”を戸惑わせ不快にさせた…。

――トクン…トクン…トクン…。

不可解…不可解…不可解…。

“それ”が思考の海へ埋没していると周りが一段と騒がしくなった…。意識を思考の海から浮上させると“彼”を筆頭に何かをしていた…。

――トクン…トクン…ビクンっ…！

“それ”の機体に今までに無いエネルギーが注がれた…。エネルギーの正体は凝縮、固体化された魔力と［工房］地下にある大規模魔力型発電施設から供給される電力エネルギーだった。

――トクン…！トクン…！トクン…！

突然の膨大な両エネルギーに“それ”は驚きつつもある種の爽快感や満足感、そして悦楽を感じていた…。

――トクン…トクン…トクン…。

そうしてエネルギーに身を任せていた“それ”は自身の機体が入ったシリンダー内に銀色のドロリとした溶液が満たされるのを確認した。溶液が満たされるとカメラアイの視界が塞がれ銀色以外に何も見えなくなる。“彼”のことも見えなくなった…。

残念に感じる“それ”はカメラアイを停止しセンサーに感覚を傾けた…。少しでも“彼”を感じられるように…。“彼”の表情などは見ることは出来ないが動作センサーから存在を感じられ……“そ

れ”はどこかホッとした。

銀色の溶液が“それ”の存在する機体に纏わり付き始めた…。溶液は機械化骨格を中心に徐々に姿を形成し整形していく…。姿は“それ”の思うがままに選べるようだった…。

マッスルパワーの源たる強化筋組織…。触覚センサーを含んだ皮膚や色…。髪や眉などの色…。視覚情報を得るカメラアイ、それを覆う眼球や色…。聴覚センサーを覆う耳…。臭覚センサーを覆う鼻…。毒物を探知する味覚センサーの機能を持つ口…。

これらを決められる…。そして、なによりも…生別すら決められる。それは、また不可解な思考に囚われた…。“それ”は考えた…。どうすれば“彼”はより喜んでくれるだろうか?それを考えると鼓動が高まった…。

――トクンっ…トクンっ…。

どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば?どうすれば……。

――トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

それは自我を示すα波形とγ波形を不自然なほど乱れさせた…。機械人形(マキナ・マータ)の初号機たる機体に宿る“それ”は自身でも気付かないほどに自我を発達させていた…。“彼”や周囲にも気付かれぬままに、だ…。

――トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

システム、エラー…。システム、エラー…。システム、エラー…。

“それ”が思考し選択を躊躇している間に各部に異常が発生する。

それらを知らせるアラートが点滅し異常を知らせた。システム、エラー…。システム、エラー…。システム、エラー…。

“それ”は知らずに発達した自我で感じ取った…。このままでは自身の存在が消滅する、と…。その事実を見つめ思考していた“それ”は外部から擬似神経を通して強制アクセスされた…。

アクセスの主は“それ”が存在するのを知らずにただシステムが弾き出したエラー部分を…バグを駆逐していった。修正される…。

だが“それ”も自身の存在を守るために独自に修正する。それらが更なるエラーを呼ぶという負のスパイラルに陥っていた…。

――トクンっ…トクンっ…ドクンッ…！

必死に自身の存在を守ろうとする“それ”が、とある別の存在に気が付いた…。近づいてくるのだ…真っ直ぐに…。その存在は只管進む…。“それ”の自我が存在する根幹部分へ、と…。

侵入してきた、その存在は“それ”にとっては異物以外の何ものでもなかった…。そのせいで些細な違和感がある…。しかし、近づくにつれて違和感は疑問へ、疑問は驚愕へ、驚愕は喜びへと変化した…。

――ドクンッ…！

“彼”が…来てくれた…！ああ、こんなに近くに感じられる…！

多少“彼”の存在に邪魔な“枝”が付いているようだが“それ”は

気にならなかった…。予想外の“彼”の到来に他が見えなかったのだ…。

電脳空間では擬似的に表現される“それ”は白く輝く小さな球体として存在していた…。“それ”が“彼”の接近に従って明滅を繰り返す…。明滅は“それ”の鼓動に合わせているようだった…。

「マリー、ここか？問題の部分は…」

『はい、その辺りです。目の前のそれに何かしらの問題があると思われます』

「むぅ？見た限り問題はなさそうなんだけど…」

――ドクンッ…！ドクンッ…！ドクンッ…！

“それ”は“彼”が触れられるほど近くに居ることに混乱していた…。まだ知識が足りないため何をすればいいのかがわからないのだ…。

「ねぇ？とりあえず話しかけてみたら反応あるかな？」

『それは…どうでしょう。高スペックの機体とはいえ基本は無人兵器です。そこまで高いインターフェイスでは無いと思われますが…』

「んー…？でもこの子は何となくだけど答えてくれそうなんだよなぁ…」

邪魔な“枝”と会話する“彼”が擬似的に表現された“それ”の表面を優しく撫でた…。

――ビクンッ…！トクンっ…！トクンっ…！

嘗て感じたことの無い感触に衝撃を受けた…！何と言う甘美！何と言う悦楽！何と言う喜びか！“それ”の鼓動が止めようもないほど早まる…。それに同期して光の明滅も早まった…。

「何か…明滅の速度が速くなってない？それに何だかプルプル震えている、ような？」

『主！αとγの波形が凄い反応を示していますが何をしたのですか！？』

「えっ！？何って…この子を撫でて、みただけ？」

――トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

“彼”との接触で混乱していたが“それ”は鼓動が早いものの一定の落ち着きを取り戻した…。今も“彼”は優しく“それ”を撫でてくるが今は混乱よりも喜びのほうが増していた…。

『なぜに疑問系なのですか！？』

「いや、原因がわからないから、としか言えんよね…。それにしてもこの子、可愛いなぁ♪まるで子犬みたいだ♪んー、抱きっ♪」

――ドクンっ…！トクンっ…！トクンっ…！

“それ”は折角、落ち着いていた鼓動が早まった…！“彼”はあろうことか“それ”をぎゅっと抱き締めたのだ…。“それ”の思考

は混乱の極みにあった…。それでも撫でられていた以上の喜びを感じていたのも確かだったが…。

――トクンっ…トクンっ…トクンっ…！

『主！？ある…（ブツンッ）』

あまりにも“枝”が煩いため“それ”は“枝”を強制的に電脳空間から排除した…。“彼”との触れ合いを邪魔されないためにしたことだ…。“それ”は邪魔者を排除したことに、ある種の満足感を抱いた…。

「んー♪いい抱き心地ぃ♪……ねぇ？君はどうしたいのかな？」

――ドクンッ！！！

“それ”は大いに動揺した。今まで誰にも気付かれなかったのに、ここにきて自身の存在が“彼”に見付けられたのだ…。自我が無いはずのモノに自我がある…。バグと判断されて削除（デリート）されてもおかしくない…。だから動揺した…。

「……やっぱり、自我があるんだな。αとγの波形に乱れがあったり、ここで君を撫でている時に反応があるからもしかして、と思ったけど…」

『ぁ、ぁぁ…』

“それ”は始めて恐怖を知った…。そう、恐怖しているのだ…。消滅させられることにではない…。“彼”の姿を見ること、“彼”の声を聞くこと、“彼”の存在を感じること…。それらが出来なく

なることに嘗て無いほど恐怖した…。

「ん？なーにかな？撫で♪撫で♪」

『ぁぅ…。ぁぁ…』

それでも“彼”は“それ”を優しく撫でながら問いかけてくる…。

“彼”の声色も優しく暖かい…。先程感じた恐怖が霧散していく…。

「ああ、ゴメンゴメン。…君の望みは何かな？」

『ぁ……ワタシの…のゾ、み…？わたシノ、のぞみは、アナタと、ともに…あり、たい』

だから、だろう…。“それ”は初めての問い掛けに、自身の初めての望みを告げた…。“それ”は、ただ“彼”の傍に居たい、という一途な願いだった…。傍に居られるなら消えてもいい…。そんな真摯な色をした願いだった…。

「そっか♪それじゃこれから君は俺の家族だ♪」

――ドクンッ！

一度だけ、大きく鼓動した…。

『…かぞ…ク？』

「そうだ。いつも一緒に居られる関係。…家族だ♪」

『カゾ、く…。イッしょ…。……ぁぁ、あたタカい。それは、イイ

もの、ダな…』

――トクン…トクン…トクン…。

“それ”は“彼”の言う家族というものに言葉以上に暖かい想いを感じ取った…。そうでなければここまで穏やかな鼓動はしていない…。明滅する光も鼓動に合わせるように緩やかなものだ…。

「ああ♪…だから…、だから、お願いだ…！無事に生まれてくれ…！頼む…！俺は君を、家族を失いたくない！！」

『うん…』

――ドクンっ…！！！！

「――――ッ！！！」

“彼”の願いを肯定した“それ”は一言だけ発した…。その瞬間、鼓動は今までに無いほど鳴動し、“それ”を表した白く輝いている球体は閃光となって暗い空間を埋め尽くした…。その様は、まるで命の誕生を表す光の本流だった…。

“彼”の視界は閃光に埋め尽くされていたが、突如として何かに引っ張られるように後退していく…。“彼”の意識は膨大な情報の本流に飲まれるようにして薄れていく…。だが、薄れゆく意識の中、“彼”は確かに聞いた…。

『また、ね…』

…それは再会を約束する言葉だった。必ず会える…。だって…“それ”の願いは“彼”の傍に居ることなのだから。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第五十二話「起動実験と小さな鼓動と予定外と」（後書き）

今回の話しを書いていて思った。番外っぽくね？と…。
ゴメン、今の無しで…。書いていて悲しくなったわー…。
ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第五十三話「再会と機械人形と新しい家族と」（前書き）

ついに起動！葵君の新戦力！
では、どうぞ！

第五十三話「再会と機械人形と新しい家族と」

――［工房］内、研究室…。

Ｓｉｄｅ　葵

燃えるように身体がダルイ…。どうやら身体が軽く麻痺している…。脳が焼けるように熱い…。どうやら頭痛の元はこれのようだ…。骨が軋むような痛みもある…。もしかしたら神経が傷付いているかもしれない…。

「あ…じ！お……くだ……！おき……だ…い！ある…！」

何だ？…誰かが、呼んでいる？くっ！あー…意識が混濁している…のか？ん、暗い？明かりは？……あれ？俺は…？ダメだ…。頭の中がグラグラ揺れている…。考えがまとまらない…。あー…。

ごめん…。今は眠らせてくれ…。

「…るじ！お……ださ…！お願…で……ら！お…て……だ…い！」

……んぁ？誰、だ？俺を呼ぶ、のは…。今は、やけに眠いんだよ…。あ、あぁ…誰かは知らないがそんなに揺すらないでくれよ…。俺は眠い、んだって…。それに身体中がダルくて痛いんだよ…。

「ぅ…うぅん…」

だから…！痛いんだって…！ぁ、あぁ…脳が、脳が揺れるぅ…。
ゆ、揺すらないで…。

「主ッ！！！」

「はっ！……俺、は…？」

朦朧とする意識の中から目覚める。その目の前には俺の頬を両手で挟むようにして心配そうに顔を歪めているマリーだった。頬に触れている彼女の手が震えていたのが不思議だ。何があったんだ？

それにしても寝起きで最初に見るのが愛する家族の悲しい顔というのは勘弁してほしい。俺のテンションがガタ落ちだ…。

「ああっ！主！良かった…！ご無事でっ…！！うぐっ…突然回線が…グスッ…遮断されて…私は…心配で…うぅぅ！」

それでまぁ…俺が目を覚ますと泣きそうな顔をしたマリーが…いや訂正。たった今、涙が零れたから泣いた、だな…。そのマリーは今、座っている俺に抱き付いて、また一段と泣き始めたわけだ。

…って！？ちょっと待とうか！？何で泣いているかな！？誰だ！？マリーを泣かせた不逞ヤツはッ！！？？俺の家族に手を出すとはいい度胸…いや、腐った根性だ！！叩き潰すぞ！？コラッ！！

……あ、れ？

あー…あれ？いやいやいや、待て待て待て…。俺はどうしたんだ

っけなぁ？えーっと……。

あぁ、俺は電脳空間にダイブして…。それから機械人形の中枢プログラムに侵入…。対象となるコアに辿り着いて…。そのあとは途中でマリーとの回線が切れて…。あー…何だったか？

「あー。やーっと起きたー」

何があったかを必死に思い出そうと四苦八苦していたら白衣を羽織った緑髪の小柄な少女が駆け寄ってきた。少し目元が赤いのは…マリー同様に泣いたのだろうか？

「ウーリ…？あれ？俺は……あっ！起動実験は！？」

思い出した！そうだよ！機械人形の機動実験だよ！結果は！？結果はどうなったの！？俺の苦労は報われたのかな！？いや！この際、少しくらいは失敗してもいいから無事に“あの子”が生まれてくれれば文句は無い！

「もー…遅いよー。あるじー…。機械人形は無事に形成が終わって最終段階だよー。あとはー、最後に機体自体の自己診断が終わるのを待つのみだよー」

「あー…そうなの…。肝心の時に立ち会えないとは…」

何、それ？つまり、残るは“あの子”が最後の機体チェックをしているのみなのか？マジかよ…。フラフラしながらも立ち上がり、所定の位置であるシリンダーの前に移動した。

機械人形の初号機が入っているシリンダーを見ると銀色のナノマ

シン溶液が容器を未だに満たしていた。銀色のキラキラとしている、その中では“あの子”の身体となる機体を理想的な姿に整形していることだろう。

「あ、あぁ！？無理をしないでくださいっ！！下手すれば主は一生を電脳空間に囚われていたのですよっ！？どうか、ご自愛ください！お願いですから！！」

「いや、ごめん…。まだ頭の中がフラフラするけど…大丈夫っぽいから、ね？」

うん、大丈夫、だとは思うんだ。ただ過剰な情報の波に曝されて補助脳や神経にダメージを与えたのかもしれない。むぅ…あと一歩、間違えていたら補助脳が焼き切れて神経もズタズタに焼かれて寝たきりになっていたかもな…。

「ご・自・愛！くださいッ！良いですねっ！？」

「はぃ……」

今日のマリーは、すんごいコワイです…。下手な反論が出来ないくらいに…。おそらく今のマリーは頭から2本の角が生えてくるに違いない…。…逆らいませんよ？女の子が怒っている時は只管謝罪するに限ると思うんだ。

それにしても心配してくれているのはわかるけど俺って皆の“主”で“家長”のはずなんだけどなぁ…。何でか知らんけど俺の立場が低い気がするよ…。大事な時は協力してくれるのに…。少し無茶すると、これだもんなぁ…。

あー、しかし…んー…？この身体のダルさから考えて……安静にしていれば一週間くらいでダメージは抜ける、かな？動く分には支障は無いようだ。とりあえず、詳しくはあとで検査してから判断しよう…。

「どうでもいいけどー……もう終わるよー？」

「何っ！？こうしては居られないな！総員！不測の事態に備え！！」

「「「「「はいっ！」」」」」

イカン！マリーに説教紛いのことをされていたら“あの子”の整形が終わったようだ！俺はこれ以上の不慮が起きないように皆に再度、指示して事態に備えた。

「ほら！マリーとウーリも！準備！準備！」

「もう、主は……。準備は出来ていますから落ち着いてください」

「ウーリもー、準備は出来てるんだよー」

まぁよく考えれば当然か…。俺が寝ている間もマリー達が指揮を執ってくれていたんだものなぁ。自分の用意くらいは終わらせているか…。

「…そっか。それなら問題は無…始まった！？」

始まった…。色々とあったが…ようやく状況が動き出す！この瞬間をどれほど待ったことか！

「余剰ナノマシン溶液の排出を開始！……排出完了！」

シリンダー内を満たしていたナノマシン溶液が排出されたがシリンダー内は白い蒸気が発生して中が見えない。くっ！まだ、どんな姿になったのかがわからない…だとぉ！？予想外だ！ここまで起動当初に排熱するとはな！

「続いて接続コネクタの切り離しを開始！……1番から18番の全コネクタ切り離しを確認！」

蒸気の中でコネクタが外れてコードがシリンダーの強化ガラスを打ち鳴らした。太いコードはカンカンと、細いコードはキンキンと。起動は間近だ…。

うん…ごめん…。そんなのはいいから俺は早く中を見たいです！気になるのは男性タイプか女性タイプか、だ！！……マジでどっち？

「機体内動力炉の出力上昇を確認！第一！第二！安全弁、解除！…3…2…1…危険域突破！出力安定！暴走ありません！」

ふぅ…。搭載動力炉の暴走は無いようだ。ある意味、小型化した新型動力炉が一番の問題はここだったんだ。人型機動兵器みたいに大きさなら悩まなかったんだけど、ね。

例えば、この子に搭載されている高魔力結晶体なんかがそうだ。拳大のこれ一つ作るのに大変苦労したなぁ…。やっとこさ量産に着手出来た時は大宴会をしたのはいい思い出だ…。あー、今はどうでもいいな、そんなのは…。

未だに蒸気が満たすシリンダーを見ると中では赤、青、緑と発光している。中にある外部端末が自動でシステムチェックをかけているのだろう。初起動だから慎重にもなるさ。暴走されたら問題だしね。

「機械人形（マキナ・マータ）の起動を確認！行動プログラムに問題無し！起動成功です！」

いよぉし！起動成功だ！これで問題無ければ他のシリンダーに配置してある機械人形も起動できるな！

「シリンダー開放！……続いて各部拘束を解除します！……完了！機械人形初号機、Ｗａｋｅ　Ｕｐ！」

シリンダーが開放されて中に充満した蒸気が吐き出される！しかして、そこにはどんな姿が！？さぁ！俺に見せてくれ！俺を魅せてくれ！“君”の理想とした姿を！！

そして姿を現した。機械人形は……！

「……」

「……は？」

え？あ？え？あれ？えーッ！？うそっ！？

俺はこの時、間抜けな顔をしていたんだろう。目はまん丸にして口は開いている。背中に変な汗が流れているのも感じる…。

「主？どうされたので？色々ありましたが無事に終わりましたぞ？」

「あるじー？成功だよー？どうしたのー？嬉しくないのー？」

「え？…あ？だって…。え…？あれー…？」

いや、成功したのは、わかるよ？問題無いようだし…。わかるけどさ…。

シリンダーから出てきた姿。それは青いロングストレートの髪…。流線型をした機械のヘッドギア…。細いスレンダーな体型…。近未来的な白い機械のボディスーツ…。どこまでも吸い込まれそうな綺麗な赤い瞳…。

“彼女”…また女性か！？とか、もう突っ込まないもんね！！…は真っ直ぐに俺の前までシッカリとした歩行で近づいてくる…。うん…。機体に問題は無いみたいだな。機体構造は完璧だ…。動作にも問題無いな…。

やがて目の前に来た無表情の彼女は俺の目をそのカメラアイでシッカリと見詰めてきて…。

「おはようございます、マスター。……また、お会い、できました」

「あ、うん…どうも」

前半は本当に無表情に、後半の台詞は…どこか微笑んでいるように見えたのは俺の錯覚だろうか？半ば呆けながら俺は返事をするのが精一杯だった。だって、この時の俺は疑問で頭の中が一杯だったのだから…。

何で初期バージョンの“ＫＯＳ‐ＭＯＳ”の姿なんだよ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

“ＫＯＳ‐ＭＯＳ”の起動から数日後…。

――［演習場］…。

Ｓｉｄｅ　アイリ

現在、［演習場］には自分と閣下、それに護衛のハオさんとユエさん、他数名で新開発された機械人形（マキナ・マータ）、機体仮名称“ＫＯＳ‐ＭＯＳ”の戦闘性能評価試験に立ち会っている。

仮設された指揮所内にあるモニターにはＫＯＳ‐ＭＯＳが縦横無尽に仮想的を模した無人機を撃破していく姿が映っている。他のモニターに示される数字も高評価を叩き出しているようだ。それらを自分達は眺めているわけだが彼女は、なかなかの性能ではないか。

移動時の加速力や瞬発力。標的を効率良く撃破する判断力。状況を判断する戦術的思考。そのどれも申し分無い。流石は閣下の作品だ。

開発部から提供された資料を改めて見直してみると多少、閣下の趣味が垣間見えるが、それを含めて見てもＫＯＳ‐ＭＯＳ…彼女は

優秀だ。閣下への忠誠心も問題無いようだしな。

仮名称“ＫＯＳ（コスモス）‐ＭＯＳ”。女性型機械人形（マキナ・マータ）。その記念すべき初号機である。身長は１６９ｃｍ、重量は開発の都合上１４３ｋｇと大きいが機動性と運動性は共に優秀。開発陣は問題無し、と判断する。

なるほど…。この大きさで、この重量…これで機動性と運動性は高い次元でまとまっている。バランスもいい。十分に性能は優秀と言えるだろう。それとなぜ女性型になったか、までは閣下もわかりかねているようだな…。

次は動力炉…エネルギー関係の項目か。どの程度の活動時間があるのかで作戦行動で取れる選択も増えるからな。なになに…あー…？

メイン動力は高魔力結晶体を動力炉と結合したデュアルコアシステムを採用。この特殊動力炉は長期的に魔力と電力エネルギーを生み出し続ける。追記としてメイン動力は百年単位で高魔力結晶体は劣化するので交換が必要である。

また、動力は外部からの空間転送にて供給を受けることもできるため実質的に活動可能時間は無限大である。尚、本機体の破損や供給元の戦艦や基地の動力炉が破壊された場合はこの限りではない。

デュアルコアシステムか…。魔力と電気エネルギーのハイブリッドなのか…。このＫＯＳ‐ＭＯＳとやらはまるで小型の人型機動兵

器のようだな。今の無人機動兵器（カブトムシ）は電気エネルギーが主なのにＫＯＳ‐ＭＯＳは大した物をお持ちのようだ…。

高性能の下地に半ば呆れながら感心して更に資料のページを捲ると動力炉関係の次は武装関係の項目だった。モニターの向こうで元気に跳ね回る彼女を見てから武装の項目を流し見る。えー…なになに？

内部に搭載された兵装は現時点で６種類。１つ目、ＳＷＯＲＤ、これは腕部先端にエネルギー状の刃を形成する。２つ目、ＢＬＡＳＴＥＲはエネルギーブレッドを撃ち出す。これは弾丸状の形状をしている。追記としてエネルギー系ならば弾種は選択可能。

ふむ、１つ目と２つ目。装備の項目には、この２つは基本装備とあるな。一応、固定武装でもあるようだ。腕部のナノマシンを形状変化させて武装を露出させるものらしい。

次に３つ目、Ｒ‐ＢＬＡＤＥ。これはＳＷＯＲＤの上位版。高純度のエネルギーを供給することでエネルギー状の大剣と形成する。４つ目、Ｒ‐ＣＡＮＮＯＮもＢＬＡＳＴＥＲの上位版である。こちらは言うなれば砲弾だ。同様に弾種選択可能である。

こちらの、この２つは上位戦闘行為の際に有効と考えられる兵装か。兵装は基本装備からの派生系なので兵装自体は同じものなのか…。汎用性が高いということか？威力向上が見られるから無駄ではないだろう。これを普通人が喰らったなら一瞬で挽肉だな。

５つ目…これは外せない。製作主の九重・葵氏たっての願い。Ｒ

‐ＤＲＩＬＬは腕部をドリルの形状にして斬撃と打撃の両方の特性を発揮する。葵氏曰く「ドリルは男のロマン。これは譲れない」らしい…。因みに近接攻撃の突破力はトップクラスである。

これは……閣下の趣味が多分に含まれているのかもしれない。しかし、突破力には目を見張るものがあるのも事実、か…。たかが趣味だとしても威力がなかなかバカに出来ないのが凄いところだな。

６つ目、Ｘ‐ＢＵＳＴＥＲ。これは内部兵装の中では切り札的兵装である。高エネルギー体を集束、または拡散で砲撃するものだ。攻撃範囲は充填されたエネルギーに比例して大きく広くなる。攻撃力の強弱も同様である。

…これら全てがあの細い機体に格納された内部搭載兵器だと資料にはある。期待の構成がほぼナノマシンだから出来ることなのかもしれない。これはナノマシンと時空間操作技術が我が陣営のお家芸だから当然かな。

続いてページを捲り見ると外部兵装の一覧だった。現状はまだ武装は少ないが、パッと読んだ感じでは十分な武装と言えるものだった。

外部兵装とは格納空間内に格納された武装である。現時点では３つあり、１つ目は小型ガトリング砲。実弾兵器。これは狭い空間などでの取り回しの自由度を考慮されたものだ。集弾率は悪いが、それが幸いして弾幕としては優秀。

小型ガトリング砲か…。取り回しのいい小型、とあるがＫＯＳ‐

ＭＯＳのマッスルパワーがあるから出来る芸当だ。それ故に室内戦闘では単独で弾幕を張る行為が出来る。強襲戦闘や防衛戦闘などで活躍する兵装と言えるかもしれない。

２つ目の武装は三連式重ガトリング砲（ヘビーガトリング）。実弾兵器。小型ガトリング砲とは違い、広い空間での取り回しを考慮して砲身の大口径化による威力を重視。弾幕の広範囲化などの改良が施されており、局地戦では一個で面指圧が可能となっている。

これは…持てるのだろうか？ＫＯＳ－ＭＯＳのマッスルパワーがあるとしても、こう…見た目的に？この兵装は彼女の身体より３倍ほどの大きさだ。取り扱いが鈍重そうなイメージが最初に出てくる。

だが、この兵装の威力を見ると拠点防衛や野外戦闘ではこれ以上無い性能を発揮する兵装だと考えられるな。鉛の雨を標的群に余すことなく降り注がせることだろう。

３つ目の電磁投射砲（レールガン）は１と２とは違い、長射程、高威力を以っての一撃必殺を前提に考えられた兵器である。艦船に搭載されているものを小型化したものだが威力は低下していない。しかし、連射性は極端に落ちた。

この電磁投射砲はアングレカムに搭載されているものをスケールダウンしたものなのか。個人が有する武装としてだがこれの一撃の破壊力は、まさに必殺と言えるか。小型化したことで連射性能はガタ落ちのようだが長射程からの砲撃戦ならば問題あるまい。

む？どうやらこれが資料の最後だったようだ。

以上がＫＯＳ－ＭＯＳの基本性能か…。性能面で陸戦兵器として

は優秀だな。機動兵器との連携を前提に運用すれば空間的制圧力は目を見張る効果が期待できるかもしれない。まぁこれはスペック表通りの性能を発揮した場合だが、な…。

それで、またモニターの向こうに映るＫＯＳ－ＭＯＳを見る。相変わらず元気に無人機を屠っている…。仮想敵として１，０００機ほど用意したのに３０分未満で、もう壊滅しかかっているのは驚きだ。

これが魔法使いを敵として相手にした場合にも性能が発揮できれば良いのだが…。資料のスペック表を改めて見ても性能面では問題無いと断言できる。勝率も状況次第では高いと考えられる。

だが、［紅き翼］のような上位魔法使いが相手になると１機では厳しいかもしれないな。大呪文の“燃える天空”や“千の雷”などの大規模殲滅呪文という不確定要素がある。単機で正面きっての戦闘は無茶だと言える。

開発途上で変更、修正が行なわれたが最終開発コンセプトが“複数機にて連携行動を行なう地上制圧戦闘”だと資料にはある。閣下にも事前説明されたことだ。

ＫＯＳ－ＭＯＳは地上戦に限れば無人兵器の中では群を抜いている存在と言える。よって、集団戦闘ならば有効な地上戦力になるのは間違い無い。

空中などの空間戦闘は機動兵器の領分だ。これらと相互に連携行動を取れば“軍”としては最高に統率された軍団になる。これで閣

下を守護する盾、または剣がまたひとつ加わったな。ふふ、自分も嬉しい限りだよ。

自分達が見るモニターには彼女…ＫＯＳ－ＭＯＳが最後の無人機を撃破している姿が映し出されていた…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリ

――［工房］内、研究室…。

Ｓｉｄｅ　葵

戦闘性能評価試験を終えて、今ＫＯＳ－ＭＯＳの総点検と整備確認をしている。彼女はメンテナンスベッドに横になり、機体を休めていた。俺達はここで劣化部分が無いかを点検してデータを蒐集し、問題点や今後の改善案を洗い出したりするんだ。

それでまぁ…ここは百歩譲って考えよう。機械人形の初号機起動には成功した。それはいいんだ。この際、女性型であることも目を瞑ろう。起動の時、一時的に問題が発生したのも水に流そう。

だが…。

そう。だが、だ…。サイズ的に身長２ｍ近い機械化骨格が１６９ｃｍに縮んだのはどういうことだ?予定よりも身体を形成するナノマシンの割合が多いのはどういうことだ?そして2号機以降の機械

人形はシュワさん張りに厳つい男なのはどういうことだ？

そして何よりも“何でＫＯＳ－ＭＯＳの姿を形成しているのか？”という疑問が俺の頭の中を圧迫している。少なくとも俺は彼女の姿を設定していないんだよ。

うぅむ…。どうしてこうなったんだろう…？

お蔭で念願の男性タイプの機体が完成したのに、あまり嬉しくない…。しかも明確な自我を持つのは、どうやら初号機のＫＯＳ－ＭＯＳだけのようだ。あー…もう本当に、これはどういうことなんだ？

それとＫＯＳ－ＭＯＳ以外の、つまりは同系統…のはず…の２号機以降のシュワさん（型番Ｓｙｕｗａ－ＴＸＮ－０１）だが受け答えは出来るようだが意思と言えるものは皆無であると判断された。俺個人でも診断してみたが同じ結果だったんだ。

これ以降はシュワさんを純粋に兵器として考えようと思う。

「……君の姿はどうやって決めたのかな？」

仮名称“ＫＯＳ－ＭＯＳ”。“複数機にて連携行動を行なう地上制圧戦闘”を開発コンセプトに造り出された地上制圧型人型戦闘機械人形。ただ、わからないことに初号機の彼女だけはコンセプトから外れているようだ…。一人無双的な意味で…。

因みに試験の時に使用したＫＯＳ－ＭＯＳの兵装は原作の物を再現したものだ。全ての兵装というわけではないがな。それと彼女と話しをしてわかったが“あの”ＫＯＳ－ＭＯＳではないようだ。

オリジナルのＫＯＳ－ＭＯＳとか兵装が鬼過ぎる。第三種兵装の相転移砲とか破壊力がヤバ過ぎる。使い方によっては惑星一つを吹き飛ばせるんだからな。小心者の俺には怖過ぎて搭載は暫らく見送りたいと思うんだよ。

だいたい、相転移砲はアンにも搭載していないんだ。そんな兵装をいきなり小型化とか……ないでしょう？アンは５００ｍ以上の船体を誇る…最早、重機動戦艦？…けど相転移砲は搭載していないんだ。

メンテ中で休止モードになっているＫＯＳ－ＭＯＳの頬に優しく手を添えると彼女はパチッと目覚めた。

「…私の姿はマスターの深層意識下にある情報を元に決定したものです。……（ボソッ）マスターに喜んでほしくて…」

ＫＯＳ－ＭＯＳの返答に驚きと納得が半々だった。俺は電脳世界で彼女の根幹部分たる深層意識と言ってもいいコアに触れている。俺の意識が途絶える時に、そこから“ＫＯＳ－ＭＯＳ”の姿形が流れたのかもしれない。

「そうだったのか。……いや、ちょい待ち。何で起きているの？メンテ中だよ？」

「…私に睡眠などの生理活動はありません。よって最低限の機能は常時稼動しています」

生理的活動が無いのは理解しているけど、常時稼動って…。そん

なことをされるとメンテ中に正しいデータ抽出が出来ないんだけどなぁ。俺は彼女の頬から手を放して苦笑する。

「メンテ中は機能を休止されているはずなんだけど…」

「否定。機能休止する必要はありません」

俺が台詞を言い終わるとＫＯＳ－ＭＯＳに間髪無く即否定された。いつも通り無表情でハキハキ話すので彼女らしいと言えばらしいけど、今のは即答過ぎないか？

「いや、でも、通常、メンテ中は…」

「必要、ありません」

……何だか、ＫＯＳ－ＭＯＳは頑なに休止モードに入ることを拒否してきます。俺のお願いでも拒否するってことは、この事柄は彼女にとって重要な何かを隠しているのかもしれない。

ゲームでＫＯＳ－ＭＯＳのキャラは好きだった。同じ姿をしているからというわけではないが気になる。気になるので少し探ってみようと思うんだ（ニヤリ）。

「……何か機能休止したくない理由でもあるかな？」

「……否定。ありません」

君は本当に偶然に発生した―電子情報知性体（ＡＩ）だよな？何でそんなに無表情なのに感情豊かに感じられるんだろうか？俺の脳内では返答への間にＫＯＳ－ＭＯＳがアタフタ慌てている姿が浮か

んだよ…。

んむ？それにしても……怪しい。ＫＯＳ－ＭＯＳの態度が怪しいです。いや、悪意的なものとかは全く感じられないのよ？でも、何かを隠している態度が気になるんだ。彼女は生まれたばかりだから何か不具合みたいものがあるのかもしれない。

そのことで手間をかけさせまいと遠慮…遠慮と言う概念があるかはわからないが…して隠しているのかもしれない。

俺はね？ＫＯＳ－ＭＯＳがそんなことで遠慮しているんだったら……これ以上無いくらい愛で倒そうと思う。もう家族のスキンシップ全力全開です。一度ロックオンしたら放しません。そういうわけで…。

「おーけー。…正直に腹割って話そうか？」

「……いえ、ですから」

まだ頑なに話そうとしない彼女に俺は少し“素晴らしい笑顔”で説得することにした。言葉に魔力を込めて言霊化なんてしていません。あくまで“素晴らしい笑顔”で説得するだけです。

模擬戦とか戦闘演習でもないのに家族に対して魔力や気、その他の能力や力で訴えるようなことはしたくないんだ。純粋な話し合いを希望する時は“笑顔”でもって言葉による“お話し”が必要なんだよ。

だからＫＯＳ－ＭＯＳ？

「お・は・な・し・し・よ・う・か？」

「……肯定。……あの…機能休止するということは…つまり、マスターを感じ取れない状況、です…。だから…あの…その、ですね？」

彼女にしては妙に歯切れの悪い話し方をするものだな…。そんなに隠し事は言い難いことなのだろうか？家族のためなら大抵の願いは叶えるよ？まぁ、麻帆良学園占領計画を実行とかは勘弁してほしいけど…。

「うん？それで？」

「…その状況は私にとって…あまり…好ましい、状態では…ありませんので…だから…」

「…だから機能を一時的でも休止や停止するのは、ヤだ…と？」

「肯定…」

何？この可愛い生き物？いや、彼女の構成物質は無機物だけど…。ジッと俺が見ているとススッと視線と顔を逸らしているＫＯＳ－ＭＯＳは無表情なのは相変わらずだけど気のせいか頬が上気しているように見える。もしかして照れているのか？

むむむ…。しかし、彼女にここまで好かれるようなことをした覚えが俺には無いんだよなぁ。こちらで設定したなら好意などは別としてある程度は保護優先度を決めることも出来るんだけど彼女は偶発的に生まれたからなぁ。

……ん？

くくくっ♪ああ、そうだった。いやいや、そんなことは関係無く彼女は、もう俺の家族だったな。好かれているかそうではないか考えるのは別の時でいいんだよ。俺が今、するべきこと、それは…。

「……もう、可愛いなぁ♪よし、よし♪」

「あぅ…。んっ…。ぁぁ…。ゃ…」

新しく加わったこの家族を愛でてスキンシップを取る！もう青くて綺麗な髪を愛おしむように撫で梳きます♪実際、ＫＯＳ－ＭＯＳの髪は綺麗な青色をしているしサラサラしているから撫で心地最高♪

あと無表情なのに彼女の頬は先程以上に上気しているのも高ポイントだと思う。まだ、こういう家族の触れ合いに戸惑う部分もあるのかもしれない。あと今はメンテナンスベッドで横になっているから動けないのもあるかな。

拒絶はしていないから撫でられる彼女も満更でもないようだ。こうしていると機械人形なのか疑いたくなる。

それにしてもＫＯＳ－ＭＯＳ、かーいーなー♪そんな可愛い理由で隠し事とはまるで小さな子供みたいじゃないか♪

……ん？

あー…この子は生まれて一月も経ってないじゃないか。みたいじゃなくて、子供じゃないか。それも赤ちゃんレベルの…。ふっ♪ますます可愛いな！大事に育てよう♪彼女をシュワさん達の指揮官機にして地上制圧を任せようかな。

あー、それと仮名称“ＫＯＳ－ＭＯＳ”だが少し弄って正式名称“ＣＯＳ－ＭＯＳ”にしよう。流石にオリジナルと同名は俺が抵抗あるのよ…。この子はそれとは別の存在なんだからな。

因みにラミエルさんはラミエルではなくラミエル“さん”だ。アレはアレで個としての存在を確立しているからな。あぁ、あと最近だが次元結界も展開出来るようになったらしい。……本当にデバイス化してきたなぁ。

そんなわけで彼女に正式名称のことを相談したら…。

「肯定。構いません。マスターが考えてくださいましたので謹んで拝命致します」

…なんて殊勝なことを言い出したんです！一応、彼女の名前だ。ある意味一生物なんだから不満は無いのかと聞いても「否定。私はマスターの全てを受け入れます」って。

……多分、幼いからまだ判断能力が低いのかもしれない。

お兄さんは、この子の将来が心配です！悪い人に騙されないか、とか！？悪徳商法のセールスに引っ掛かったりしないか、とか！？むぅ…やはり、心配だ。ここは俺達が家族としてキチンと育てなければならないようだ…。

「当面の予定は稼動試験や経験の蓄積かな…」

「肯定。了解いたしました。マスター」

この日は新しい家族のために決意を新たにした日だった。……C
OS－MOSは嫁にはやりません！絶対にやりませんとも！

Side out 葵

第五十三話「再会と機械人形と新しい家族と」（後書き）

ゼノ〇ーガ…。実はゲームは？しかプレイしてないんです。
足りない部分はｗｉｋｉ先生と漫画と妄想で補填です。
やれば出来ないことは無い……と思う。

でも、ター〇ネーターのシュワさんとかは提供されたネタです。
事細かに設計図が提出されましたので今後の参考にしています。
いや、マジでこういうネタ提供はありがたいですよ？

じゃ！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第五十四話「学園防衛と初出勤と初実戦と」（前書き）

はいもう一度いいます。
この作品ではＳｉｄｅ　？？？は三人称です。
決して謎の人扱いではありません。
では続きをどうぞ！

第五十四話「学園防衛と初出勤と初実戦と」

――麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

Ｓｉｄｅ　？？？

深夜、いつも通りの夜間警備。学園関係者はその日も外から来る侵入者と小競り合い程度の戦闘があるだけと考えていた。

事実、確かに小競り合いはあった。侵入者の大多数は東洋魔法による式神、その少数規模が散発的に侵入してきたのだ。この他にも図書館島地下奥に所蔵されている魔法書を狙い盗掘者などの個人で侵入する者も居た。

そう、いつも通りの小競り合い。いつも通りの散発する小さな戦闘。慌てることは無いいつも通りにやれば勝てる戦い。

しかし、その日は違った。散発する小戦闘は序章である。、そして、それが起きたのは深夜０時を過ぎるころ。学園都市を中心に東西南北の四方から大鬼、鬼、子鬼、烏族、狐女などが大挙して侵攻を開始。

…空気が冷え始め、冬の訪れを感じさせる１１月中頃に大規模な侵攻が起きたのだ。学園側は、この緊急事態に一時混乱に陥ったが学園長の近衛・近右衛門が一喝することで混乱は収束した。この一連は彼の珍しくも長としての威厳を感じさせる一幕であった。

それから学園側は事態の打倒に動く。四方から来る侵入者を相手に防衛線を再構築。その後、反撃に打って出たのだ。東西南北の内、西側を除いた三方は防衛に成功。しかし、残る西側は不本意ながら押されていた。

これは、必死に反撃する者達が居る西側防衛戦の一部の話し。

魔法先生のガンドルフィーニ、魔法生徒の高音・Ｄ・グッドマンに、その従者、佐倉・愛衣。彼らは警備などで、よくチームを組む者達だ。そして、自他共に認めるほどにチームバランスが取れていると評判だった。

そんな彼らが侵入者側の主力と見られる西側防衛戦線に投入されたのは自明の理だろう。他にも魔法使い達十数名が戦闘に参加していたが流石に主力とあって戦力差が大きい。西側は防衛線を維持するだけで精一杯だった。

そして、それは起きた。会戦から３０分以上が経過した時、無数に侵入者が湧き出てくることに学園側魔法使いの一部の者が不安に駆られて心が一瞬、折れたのだ。そこからはあっと言う間だった。そこからは瞬く間のことだった。

防衛線の一部を突破されたのだ。侵入者は一瞬の心の隙を見逃さなかった。一つの切っ先が切欠となり戦線を維持不可能にまで追いやった。防衛線の崩壊は目の前。しかし、誰もが防衛線を再構築しようと力を振るった。

そんな中にガンドルフィーニ、高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣のチームも必死に防衛線の再構築するために奮戦していた。

「メイプル・ネイプル・アラモード…。ものみな（オムネ）・焼き尽くす（フランマンス）・浄北の炎（ランマ）・破壊の王（ドミネー）に・して（ティオーニス）・再生の（エト）・徴よ（レゲネラティオーニス）・―我が手に宿りて（イン　メアー　マヌー　エンス）・敵を喰らえ（イニミークム）・紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）！」

「「「「ギャァァアアッ！」」」」

「はぁ…数が…はぁ…多い、ですぅ…」

佐倉・愛衣は考えていた。今日も今までと同じように小競り合いで終わる。そう考えていたのに箱を開けて中を見てみたら大規模な戦闘に発展したのだ。しかも自分達の担当する方面は敵の主力とあっては愚痴りたくもなる。

「隙ありじゃーッ！ウラァァァァ！！」

「えっ！？あっ、キャーッ！」

「愛衣っ！？ッ！このっ！！」

度重なる戦闘で魔力を消耗した愛衣は疲労で息切れして注意力が散漫になっていたところを鬼に襲われ吹き飛ばされた。しかし衝撃の一瞬、彼女は咄嗟に魔法障壁へ残り少ない魔力を注ぎ衝撃を緩和していた。

それでも鬼の渾身の一撃だ。衝撃を緩和してもダメージは免れない。吹き飛ばされた先でぐったりと身体を横たえたままだ。息はし

ているが衝撃で意識が飛びかけているようだった。

彼女のパートナーで、同じく奮戦していた高音・D・グッドマンは愛衣が吹き飛ばされたところを見て刹那の驚愕のあとに魔法で影を操りパートナーを害した鬼を撃破。すぐさま愛衣の下へ駆け寄る。

「っ…ぅ…」

「愛衣！大丈夫！？クッ！影よ（ウンブラエ）！！」

息はしているようで高音は一安心した。そして今も戦闘中であることを思い出す。愛衣のこともある。ここは一時撤退のためにと影を槍や刃にして全周囲へ展開。他を援護していたガンドルフィーニと途中で合流して、その場を離脱した。

奇跡的に離脱を成功させて一時の休息を得た彼らは太い樹木の窪みに身を隠していた。皆、息を切らせている。全員の魔力消耗が激しい。状況は厳しいと言わざるを得ない。

この場で少し休憩したくらいではマトモに戦えないだろうことを経験豊富なガンドルフィーニにはわかっていた。それ故にまだ若い2人だけでもここから離脱できないかを思索し始める。

「高音君、佐倉君、まだ動けるか？」

「はぁ…はぁ…はい、私はまだ戦え、ます…。ですが愛衣が…」

「うぁ…」

高音は戦えると言うが厳しいだろうことは一目見てわかる。愛衣は言わずもがな。意識が朦朧としている状態だ。

相手が侵入者側の主力であると判断してから直ぐに援軍要請をしたが、いつ来るのかもわからない。大体、このような大規模の侵攻だ。どこも人手が足りない状況で要請通りに援軍が来るかすらも怪しい。

「ガンドルフィーニ先生。援軍はどうなっているのですか？」

「……直接、学園長に要請はした。間も無く到着するはずだ」

たった今、考えていたことを高音に聞かれて彼は返答に窮してしまった。それでも絶望的状況にまやかしでも希望を提示できたのは彼の経験ゆえだろう。最も彼が、こう言ったのは“だから安心して離脱しなさい”という意味合いもあるのかもしれない。

魔法使いの先達として若者の命を不用意に失わせることは絶対に避けなければならないのだ。そうして、どうやって彼女らを言い包めて離脱させようか、と考えた時に、それは来た。

「お頭ぁ！見つけましたぜ！！」

「「「ッ！！」」」

見付かった…！今の3人の考えはこれに尽きる。

「ガハハハハッ！おうおう！こんなところに隠れとったんかい！手間ぁかけさせくれよってからに！！」

「チィ！せめて2人だけでも…！！」

「お姉、様…」

「愛衣…！」

溢れん限りの鬼達はゆっくりと進む。たとえ消耗しきった魔法使い3人でも油断はしない。魔法使いとは何かしらの切り札を持ち合わせていることが多々あるのだ。それ故に鬼達は油断無く囲み、確実に止めを刺そうとする。

ガンドルフィーニは若い2人を逃がせないかと必死に考える。高音は愛衣を胸に抱き、この子だけは守ると消耗しながらも瞳の輝きは一片も濁ってはいない。愛衣は意識が朦朧としながらも姉と慕う少女の身を案じている。

「怨むなとは言わん。……ほな、さいなら！」

包囲が完成した時、一際大きな体躯をした大鬼が3人の前に出て、そう言うとその身に合った巨大な金棒を振り上げた。ガンドルフィーニ達も最早これまでかと考えが過ぎった時。待ちに待った“それ”は来た。

「――――……」

「ッ？――――がはっ！！」

「お頭ぁーッ！？」

唐突に目の前まで迫り今まさに巨大な金棒を振り下ろそうとした大鬼が白い影が突撃したと同時に消滅したのだ。それは包囲網の外から続いて一本の道となっている。

鬼達も混乱しているが魔法使いの3人も何が起きたのか判断できない。辛うじてわかることは命が一時の間、伸びたことだろうか。

「……一体、何が？」

「「……」」

突然消滅した大鬼のこともそうだが目の前に現れた機械的なボディスーツを纏った女性も気になる。ガンドルフィーニは呆然と自体が飲み込めずに呟く。高音と愛衣は突然のことに緊張して言葉も出ない。

場は混乱していた。白い女性は突入後に鬼達と3人を遮るように立ちはだかり周囲を警戒していた。緊張は天井知らずに上がる一方だ。

そんな時に包囲網に出来た道を男1人と女2人の3人…主に女2人…が周囲を睥睨するようにゆっくりと歩いてくる。圧倒的なまでに威圧的に到着した彼らがガンドルフィーニ達の下へ来た。

「ふむ…。どうやら間に合ったようだな」

そんな声がガンドルフィーニと高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣の耳に届いた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

少し前…。

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

閉店して暫らくして翌日の仕込みをし終わり、諸々の就寝の用意を終わらせた時に備え付けてある電話が鳴った。

「…はい。こちら喫茶店クレイドルです。…はい、店長ですね？少々お待ち下さい。…主様ぁ？お電話ですよぉ」

「はいはい。それで誰から？」

誰だよ？こんな非常識な時間に電話してくるのは。もう直ぐ経ったら深夜の１時だぞ…。余程の緊急事態なのか…。はたまたただの悪戯か…。ただ、俺を名指ししてきたから悪戯はないとは思うけどな。

はぁ…普通なら寝ている時間に電話してくるということは……もしかしてアレか？情報部からの報告にあった麻帆良学園に対して大規模な襲撃計画有りとかいう。今日の、その襲撃に苦戦している？そんな、まさか…ねぇ？

「学園長先生からでしたねぇ。何やらお急ぎのようでしたけどぉ…」

その“まさか”かもしれない、と考えた俺は悪くないと思いたい…。だって、電話の相手が学園長なんだものなぁ…。仕方ないでしょう?不安になってもさ…。面倒なことは勘弁してほしいところなんだ。

まぁ、まだ望みはある。…この場は、とりあえず話しだけでも聞いてみるか…。

「お電話変わりました。九重…」

『おぉ!葵君!早速で悪いが仕事を頼みたいのじゃが良いかのう!?』

学園長…。人の言葉に被せてくるのはマナー違反だと思いますよ?まぁ急ぎの用らしいから今回みたいな時は見逃しますけど…。

それにしても希望は見事に砕かれることになったかー…。電話先に居る学園長の慌てようからして割と緊急事態っぽい…。

あと百歩譲って仕事するのはいいとしよう。こういう仕事はいつ発生するかは予測できないからな。……でもね?まだ学園側の人達の情報を把握していないんだよ。今は非常事態中だろうから顔合わせは現場になりそうだ。

……味方誤射(フレンドリーファイア)とか、やられるのは出来れば遠慮したいなぁ。

「…はぁ。それで仕事の内容は?」

『う、うむ！依頼内容は…』

それから学園側が把握している情報を聞いて、自分達で把握している情報とすり合わせて今回の報酬を交渉した後に出撃することになった。

出撃メンバーは俺と護衛のハオとユエ。そして実働データの収集のためにＣＯＳ－ＭＯＳを選出。俺の安全のため場合によっては援軍として後詰に三課を３チーム待機させている。

そして現在…。

――麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

「ふむ…？どうやら間に合ったようだな」

いや、ＣＯＳ－ＭＯＳを先行させておいて正解だったようだ。もう少し遅れていたらガン…ガンドル…？あー…ガングロイーニ君？……うん、３人が潰されていたかもしれないな！本当に無事でよかった！

それによくよく見たらお嬢ちゃん２人は店の常連客だった。名前は……小さい子が愛衣ちゃんで大きいほうは知らん。お姉様と呼ばれ慕われているのは知っているが名前は知らんのよ。美人さんだから顔は覚えていたけどね。

「そのようです。目立った負傷者は1名のようですが死傷者は幸運なことに居りません」

「くくくっ。幸運？なるほど、そうだな。…いつも通り、2人は護衛を頼む」

「「承知ッ」」

スゴイ…彼女達が周囲を睨み始めると半径１５ｍの範囲に鬼が入らなくなった。威圧感がバッチリ効いているようだ。これでここは上位の大妖怪などが来ない限り安全地帯だ。ＣＯＳ－ＭＯＳも居るから尚、安心だ。

「き、君達は誰なんだ？…援軍か？」

「はい、ちょい待ち。今はアレらの排除が先だ」

うん、わかる。死にそうな状況が今は膠着状態になって若干安心してしまうのもわかる。でも、今も敵に包囲されているのに変わりは無いんだ。この状況を打破するために敵勢力を殲滅する必要がある。

「…マスター、敵勢力の殲滅を続行いたしますか？」

「うん、続行許可。任務は敵勢力の完全排除だ。できるかな？」

「肯定。問題ありません。任務は敵勢力の完全排除。これより戦闘行動を再開します」

包囲している敵に歩いて行くＣＯＳ－ＭＯＳの背中を見送り俺は期待と頼もしさを感じた。白いボディスーツに綺麗な青い髪が映えて見えたのが印象的だった。

くくくっ！この状況の打破も出来て、尚且つ戦闘行動の実働データ収集も出来るという一石二鳥の手段だな！戦闘動作も戦闘中に最適化されて戦闘技術は更なる高みに押し上げ“進化”していくだろう！

ああ…ああ！楽しみだ！偶然、生まれたＣＯＳ－ＭＯＳがどのような進化を見せてくれるのか！……一応、言っておくと俺の言う進化とは外見ではなく中身だぞ？

とりあえずＣＯＳ－ＭＯＳにあちらを任せておけば今の彼女の戦闘能力から見て敵勢力の、そうだな……大体、半数以上を撃破できれば上出来だと思う。任せて安心だから俺は怪我人とかを見ようかね…。

「…これで、とりあえず安心だ。怪我人は？」

「あ…はい。愛衣…この子が…怪我を」

「はいはい、愛衣ちゃんね。それじゃ少し失礼するよっと…。どれどれ？」

「ぁ…く…」

ふむ？大きな負傷は無い、か。瞬間的に障壁の強度を高めたんだろう。目立った外傷は軽い打撲くらい、あとは脳震盪を起しているだけだ。この若さで大した状況判断能力をしているじゃないか。注

意点は多少、魔力の使い過ぎだな

「くくっ。大丈夫、これなら然るべき治療をすれば明日には元通りだ。ただ、暫らくは多少のダルさが身体に残るだろうがな」

「そ、そうですか！よかった…！」

愛衣ちゃんに回復魔法を施して体力と魔力の回復力を増長させる。軽い打撲が主とは言っても痣が残ったらまだ若いこの子も気にするだろうからね。念入りに治療をしていく。その辺は俺も気を遣いますよ。

粗方、目立つ外傷の治療をし終えた。あとは脳震盪だけど、これは寝て休めば回復する。脳震盪と言っても、やはり負傷部分が頭部だから後遺症が無いかをキチンとした設備のあるところで精密検査してもらう必要があるかな。

何にしてもこれで一安心だ。

「それでそっちは怪我していないのか？」

「あ、ああ、大丈夫だ。……それで君は？」

「くくくっ、失礼した。俺の名は九重。学園長に依頼されて援軍として来た」

うん、すまない…。到着直後は鬼達に囲まれていたからのんびり話している余裕が無かったんだ。それに「俺様！参☆上ッ！」みたいな名乗りを上げるノリは持ち合わせてないし、柄でもない。

「…聞かない名だな。それに依頼だと?学園長は外から雇い入れたと言うのか…。氏素性もわからん相手を麻帆良に招き入れるとは何を考えておられるのか」

「…随分な物言いじゃないか。ええ?若造…。生意気なことを言う割に苦戦していたようだがな?」

このガングロイーニ、どうしてくれようか?助けられてグチグチと女々しいことを言いやがってくれてやがりますのことよ?

……イカンな。つい、イラッときて思考内の言葉遣いがおかしくなってしまった。表の言葉遣いは若干相手を馬鹿にしたような乱暴な言いかたをしてしまったしな。反省しなければ。会話でケンカ腰になってもいいことなんて一つも無い。

「若、造ッ!?…ッ。…失礼だが目上の者に対する敬意というものは君には無いのか?」

「…生憎だが姿や形などの外見で判断する小さき者に払う敬意を俺は持ち合わせていない」

「何だと!――ッ!?これは…!」

「ガンドルフィーニ先生…!」

しまった…。売り言葉に買い言葉で俺も熱くなっていたようだ。周囲への威圧を増しながらもハオとユエが俺の敵意に反応したらしい。2人は誰にも気付かれないように彼の首を後ろからエックス字で挟み込んでいた。

愛衣ちゃんにお姉様と慕われているお嬢ちゃんは突然のことに驚いて彼のことを…と言うか、このガングロイーニ、もとい、違う、彼はガンドルフィーニという名前だったのか……。うん、まぁこの教師の名を呼ぶことしか出来ないようだ。

「――動くな。もう半歩踏み込むことあらば吾らは躊躇無く斬り捨てる」

「然様。この場は大人しく下がられるが良い」

「クッ！……わかった」

ハオ達は好ましい返事を受けると静かに剣を下げてまた周囲へ倍加した威圧を放ち始めた。……今、半径２５ｍ以内に鬼共は皆無だ。命の危機が無くなったガンドルフィーニはキッと俺をひと睨みしてくるが何も言わない。

あー…うん、マジでゴメンナサイ。俺には威圧とか脅迫なんて暴力的行動を取るつもりは毛頭無かったんだよ？本当だよ？何で、こうなったのか俺も知りたいくらいだ。暴力は必要な時に行使できれば十分なんだ。それ以上は、いらないっしょ？

ただねぇ？彼も悪いと思うよ。窮地のところを助けられておいて俺が学園関係者ではなく外部の人間とわかった途端に失礼な物言いをするんだからな。いくら温厚な俺でもイラッて来ますよ。

まぁ、こんなやり取りをしているから愛衣ちゃんを抱き締めている大きいお嬢ちゃんを不安な気持ちにさせてしまったらしい。俺達と彼を交互に目線を行ったり来たりと様子を見ている。

……少し可哀相なことをしたかもしれないと思ったのは秘密だ。

「ふぅ…若いのは血気盛んで困る。…そこのお嬢ちゃんも怖がらせて、すまなかったな」

本当にゴメン…。また毒吐いてゴメン。一瞬、暗い空気流れて場が重くなった。主にガンドルフィーニ君の居る方向からその空気が流れてきたように感じたのは気のせいと思うことにした。

「ぁ、いえ…あ！私はお嬢ちゃんではありません！高音・D・グッドマンという名前があります！」

なるほど、お姉様こと高音・D・グッドマンというのか…。あれ？この子のこと美人さんとしか考えていなかったけど何気に原作キャラじゃないか。磨耗した記憶の中でも割と好きなキャラだったから少しは覚えている。

名前と顔が一致しないくらい忘れてはいたけどね…。

いや、今それはいいんだ。少し前に触れたがこの高音ちゃんと愛衣ちゃんはウチの店の常連だからな。2人は喜ばないだろうけど今後、こういう危機があった場合は多少贔屓して助けようかな、と思う。

「くくくっ。知っているとも、これでも常連客の顔は忘れていないつもりだ」

「はい？常連、ですか？」

「ふふんっ♪当店“喫茶店クレイドル”を毎度ご利用ありがとうご

ざいます。お嬢ちゃん？」

「え？クレイ…ドル？え？えええっ！？あのお店ですか！？え？でも…あら？」

わからないだろうなぁ。一応、麻帆良との面倒を避けるために店には一般人、関係者関係無く認識阻害術式を多重掛けして張り巡らせてあるからな。事前に“俺たちのことを知っている人物”以外は俺や店員関係の記憶はあやふやになるんだ。

認識阻害術式を展開した切欠は昔、明日菜を迎えに来たタカミチだったのは皮肉だろうか？……アレがなければ、もう少し姿を隠せていたかもしれないのになぁ。

「くくくっ。さて、色々とあるだろうが君達は後退してもらおう。今よりここは“俺達”の戦場だ」

「何を勝手な！？麻帆良を守ることが使命だ！」

「ガンドルフィーニ先生の言う通り、私も戦えます。ここは共同戦線を…」

お前達は…。はぁ、どの口が、そんなことを言うのかな？自分達の姿をもう一度よく見てみろよ？ボロボロではないか…。人が休めと言っているんだから遠慮や意地なんか捨てて後退しろよ…。

お嬢ちゃん達の内1人は脳震盪で目を覚まさない。もう1人は体力の消耗が激しい上に魔力も残り少ない。ガンドルフィーニ君も度重なる戦闘で消耗しきっている状態だ。とてもではないが戦えるとは思えない。

「黙れ、ひよっこ共。無駄な議論も反論も認めない。これは学園長も承知のことだ。それに怪我人も居る。まだ安全に撤退できる今こそ彼女をキチンとした場所で休ませろ」

「「……！」」「……」

それ故に俺はまた言葉遣いが厳しくなる。今後の関係が多少ギクシャクするかもしれないが仕方ない。それというのも今ここで無理して戦われて命を落とされるよりは数倍マシだからだ。

……死なれたら後味が悪過ぎるじゃない？あ、それと寝覚めも、か…。

「はぁ…。余裕がある内に撤退することは必ずしも恥ではない。生き残る上で必要な行為だ。……ここは任せてくれ」

「……高音君、私が佐倉君を医療室へ運ぶ。君も付いて来なさい」

「はい…」

まぁ最後に口調を優しくしてしまい子供に言い聞かせるようにしてしまうのは俺の悪い癖かもしれないなぁ、と思った。

それと、これはどうでもいいかもしれないが愛衣ちゃんの苗字が佐倉ということをはじめて知った時だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

時間を少し戻して…。

――麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

Ｓｉｄｅ　ＣＯＳ－ＭＯＳ

「…警告します。この場より即刻立ち去りなさい。従わない場合はマスターの命により殲滅致します。繰り返します。この場より即刻立ち去りなさい。従わない場合は…」

「なんじゃい、このけったいな姉ちゃんは？」

「若頭ぁ！コイツです！コイツがお頭をブッ飛ばしたんスよ！」

「何やと！？叔父鬼（オジキ）をやったんがこの姉ちゃんや言うんかい！？」

「へぇ！間違いありやせん！」

目標の撤退行動を確認できず。敵対行動を認識。戦闘エリアに存在する敵勢力の危険度上昇を確認。第一種戦闘態勢。安全弁解除、戦闘出力上昇。全武装展開準備…完了。敵目標は“大鬼”、“鬼”、“子鬼”、“烏族”、少数の“狐女”、他多数の混合勢力…。

「…目前の勢力を殲滅目標へ移行。これより敵戦力の掃討に入ります。…ＢＬＡＳＴＥＲ用意、３点射（スリーバースト）…Ｆｉｒｅ」

敵目標“鬼”、“子鬼”を計８体の撃破を確認。命中率９４％…

射撃能力修正…完了。エネルギー弾による敵目標への効果を確認。有効性は８９％…以降データ収集を継続。上位内部武装へ移行…。

「なん、やと…？」

「…Ｒ－ＣＡＮＮＯＮ、連続射撃…Ｆｉｒｅ」

「野郎共！散れぃ！！」

“大鬼”、“鬼”、“子鬼”を計１９体の撃破を確認。敵勢力の散開を確認。攻撃方法は面攻撃を推奨…。該当武装を検索…検索中…検索ヒット。該当武装は外部武装の小型ガトリング砲（スマートガトリング）と三連式重ガトリング砲（ヘビーガトリング）の２つ。

現在、森林地帯の野外戦のため外部武装三連式重ガトリング砲（ヘビーガトリング）を選択。敵勢力散開しつつ接近中…。武装データの収集を継続。

「…三連式重ガトリング砲（ヘビーガトリング）、実体化（マテリアライズ）」

敵勢力の行動予測…演算開始。散開した敵勢力は本機を半包囲しつつ接近中。…修正、上空に“烏族”を確認。修正情報を元に敵勢力の行動を予測…予測中…完了。敵勢力行動の把握完了。

…外部武装の実体化率７８…８６…９４％…実体化率上昇中。実体化まで９８％…９９％…実体化。…実体化の完了を確認。システムチェック…チェック中…システム、オールグリーン。外部武装の機能に問題無し。

敵目標…ロックオン。全力射撃、開始します。

「ッ！！おどれら！避けぇい！！」

「…Ｆｉｒｅ」

射撃…撃破…射撃…射撃…小破…撃破…射撃…射撃…撃破…残弾８５％。

撃破…射撃…射撃…撃破…射撃…中破…撃破…射撃…大破…残弾７０％。

撃破…射撃…中破…射撃…射撃…撃破…射撃…撃破…射撃…残弾５５％。

射撃…小破…撃破…射撃…射撃…撃破…射撃…撃破…射撃…残弾４５％。

射撃…撃破…射撃…撃破…撃破…射撃…射撃…小破…射撃…残弾３５％。

射撃…射撃…大破…撃破…射撃……。

「…斉射、終了」

三連式重ガトリング砲の砲身冷却を開始。実体弾…対魔処理弾頭…の効果を確認。命中率６４％…射撃能力修正…完了。実体弾による敵目標への効果を確認。有効性は９６％…以降もデータ収集を継続。

敵勢力の３０％以上を撃破。残存敵勢力情報を更新開始。…更新中…更新完了。敵勢力の撃破率５４％を確認。戦闘データの収集は

良好。機体損傷率０％。防御時のデータが不足……しかし、現時点で問題無し。外部武装のデータ収集も継続…。

警告…三連式重ガトリング砲の残弾が３０％未満を確認。現外部武装の弾薬を補給するか使用武装の変更を推奨。武装変更を選択。現外部武装の実体化を解除。同時に外部武装、小型ガトリング砲の実体化を開始…。

…外部武装の実体化率６０…７８…９２％…実体化率上昇中。実体化まで９８％…９９％…実体化。…実体化の完了を確認。システムチェック…チェック中…システム、オールグリーン。外部武装の機能に問題無し。

残存敵目標…ロックオン。全力射撃、開始し…攻撃態勢強制解除ッ！！

――Ｗａｒｎｉｎｇ！Ｄａｎｇｅｒ！Ｗａｒｎｉｎｇ！Ｄａｎｇｅｒ！！

上空より敵勢力、急速接近中。緊急回避行動を推奨。多重Ｄフィールド緊急展開。緊急回避後に防御姿勢へ移行。緊急防衛行動。対近接戦闘用意…。

「死にさらせやーッ！！セェイッ！！」

回避率、右…３９％、左…８９％、後ろ…６７％、前…７１％、上空…２１％。左前方へ回避を推奨。多重Ｄフィールドに敵攻撃の接触を確認。フィールド出力８９％へ減少。機体損傷率２％…。防御、損傷データを収集。戦闘を継続。

接近戦闘に限定した敵“烏族”を要注意目標へ移行。…接近戦闘のデータ収集に有用と判断。

警告…敵は現時点で限定要注意目標に移行されています。遠距離による間接攻撃を推奨。…否定。提案を却下。現在の本機に必要とするものは“稼動データを収集し、あらゆる経験を積むこと”にある。

故に危険だが近接戦闘データ収集には相応の実力者とされる者が好ましい。よって“烏族”は接近戦闘のデータ収集に有用と判断。現行は近接戦闘を実行する。…内部武装、近接兵装ＳＷＯＲＤ、上位近接兵装Ｒ－ＢＬＡＤＥ用意。

……追加、マスターの強い推奨によりＲ－ＤＲＩＬＬを用意。

「――ＳＷＯＲＤ」

「調子に乗りおってからにぃ！ハァァァッ！！！」

「チィ！シッ！ハーッ！！」

逆袈裟…回避。左切上…フィールド防御。右薙ぎ…ＳＷＯＲＤによる迎撃、成功。敵、身体動作に若干の硬直を確認。好機と判断。反撃…開始。急加速後に接近戦闘。最短距離の突き…一点突破にて一撃撃破を推奨。

「なっ？ぐぁッ！！」

要注意目標“烏族”の１体を撃破完了。情報修正…“烏族”は剣技に限れば近接戦闘は最優秀。危険度を上方修正…完了。続いて

“烏族”の近接戦闘動作を模倣…。本機の近接戦闘に動作情報を反映…最適化、開始…最適化中…最適化、完了。

最適化により近接戦闘能力２８％向上。総合戦闘能力１２％上昇。

「ガァァッ!!囲んだれ!袋叩きにするんやッ!!」

警告…複数の要注意目標が接近中。危険度上昇。至急、迎撃を要する。現時点の近接兵装では突破力に難あり。上位武装への変更を推奨。

「――――ＲｰＢＬＡＤＥ」

敵、要注意目標“烏族”、本機の四方に展開を確認。回避、極めて難…。退路無し。迎撃を推奨。最適化された近接戦闘能力を元に迎撃を開始。同様に一対多戦闘の戦闘データ収集を開始。

「ガッ!?なんちゅう速さしとんねんッ!!うらぁーッ!!」
「防御が硬い!?ッ!!剣速がまた上がりよったッ…!!」
「なんやねん、これッ!?膜みたいんが覆っとるんかッ!?」
「ダァホッ!!手ぇ休めるなッ!!グッ!!チィィィッ!!!」

初期データ収集、完了。最適化、開始…最適化中…完了。最適情報の反映を完了。総合戦闘能力１６％上昇。戦闘を継続。敵、要注意標的“烏族”４体の撃破を最優先。即興剣武、発動。

「――――……」

「「「ガァァァッ!!!!!」」」

「がはっ！ハァ…ハァ…どんな身体、しとんのや…？この…姉ちゃん、は…」

要注意目標“烏族”４体中３体、撃破を確認。残敵数１体は撃破ならずも重傷の模様。追撃を推奨。内部武装の変更を推奨。初回のみ上位プロトコルにより本武装の使用を強く推奨する。

「――――……Ｒ－ＤＲＩＬＬ」

「ドリル！？螺旋は男のロマンじゃぁーッ！！！ぐはっ！！」

敵、要注意目標の殲滅を確認。現時点で敵勢力の６０％以上を殲滅。損傷率極めて軽微。実体弾の消耗率７０％以上。戦闘行動に支障無し。残敵掃討を継続。……重要事項発生。マスターより通信あり。

『…ＣＯＳ－ＭＯＳ、戦況はどうか？』

「…現時点で敵勢力の６７％を撃破しました。現在、戦闘を継続中です」

この戦闘中にマスターとの通信は可能な限り出たい、と記憶メモリに記録された日だったのは私だけの秘密…です。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ＣＯＳ－ＭＯＳ

――麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

Ｓｉｄｅ　葵

さて、ガンドルフィーニ君達が無事に後退したのを確認した。

因みに彼らを追おうとした鬼達は直前にハオとユエの威圧と牽制により行動できなかったようだ。それに鬼の数体をこれでもかと痛めつけたところを見せつけてハオが“動くな…”と命じたら静まり返ったのが怖かった…。

……今、俺達から半径３０ｍの範囲に鬼は皆無だ。近づいてこないのが逆に怖いです。

それと知っているか？鬼の臓物って人間と同じように赤やピンク色をしていたんだ…。俺の見ていた前でハオ達が鬼数体を腹掻っ捌いて解体しているところをバッチリと見たから間違い無い…。

それと朗報だが、ここから見る限り敵勢力の半数はＣＯＳ－ＭＯＳに殲滅されたようだ。敵数が目に見えて半減しているのがわかる。どうやら彼女は予定通りの性能を発揮しているようだ。

「…ＣＯＳ－ＭＯＳ、戦況はどうか？」

『…現時点で敵勢力の６７％を撃破しました。現在、戦闘を継続中です』

「よしよし、順調だな。現時点で機体に不具合はあるか？」

『否定。機体損傷率は１０％未満です。実体弾の消耗率７８％です

が戦闘継続に支障無し』

「了解。ふむ…よし、一度、合流しよう。それから一気に残りを片付けるとしよう」

『肯定。了解致しました、マスター』

「はいはい。それじゃ、またあとでね」

コミュニケを使ってＣＯＳ－ＭＯＳと通信を繋げて、これからのことで確認を取った。彼女は俺の予想以上の性能を発揮してくれたようだ。敵勢力の７割近くを撃破していたのだからな。

ただ、実体弾の消費量が高いのが気になるところだ。大小のガトリング砲だから仕方ないけどさ…。小型のほうは取り回しを重視して考えられているからガトリング砲としては総弾数が少ないしなぁ…。

いや、そういうのを考えるのは後にしよう。今はＣＯＳ－ＭＯＳとの合流が先だ…。

「ハオ、ユエ、聞いての通りだ。準備はいいか？」

「「ハッ、出来ております！吾らにご下命を！」」

「うむ。…それでは行くぞ。出陣だ！」

「「承知ッ！」」

そのまま俺達は遠巻きに包囲している鬼達に向けて一歩を踏み出

した。その途端に恐慌状態に陥る敵は……見ているほうが哀れだったのは悲しい記憶だった。

そして合流後は順調に敵勢力を殲滅。西側の防衛線を再構築した学園側魔法使い達のダメ押しの追撃で結果として防衛に成功。戦闘が終了したのは時計の針が深夜の3時を示したころだった。

麻帆良に依頼されて初めての“お仕事”は、こう言ってはアレだが幸先良く無事に終了した。もちろん、それは“俺達”に限定しての幸先さが、な。…学園側の被害？知らんよ。

早く帰って今日は寝たいなぁ…。報酬は先払いだったし…あ？なら、このまま帰っても問題無いじゃないか。マジで眠い…。明日も変わらずにお店があるねぇ…。朝の仕込みもあるから早いのよー…。

あー…ダメだ…。久しぶりの戦闘で疲れた…。帰ろう…。眠いわー…ｚｚＺ

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第五十四話「学園防衛と初出勤と初実戦と」（後書き）

うん。葵の傭兵デビューとＣＯＳ－ＭＯＳの活躍シーンを書きたかったんだ。
上手く伝わるかは作者にも疑問でしたが…。

……あれ？葵、戦ってなくね？ハオさん達が…あるぇー？
ふ、ふんっ！いいんだい！いいんだい！
葵は臆病者設定だからこれでいいんだい！えーんっ！

ごめんなさい…。改めて見直して作者は軽く鬱です…。
葵が活躍したのは遠い昔のように感じますよー…。
あははははは…。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第五十五話「後日とお誘いと戯れと」（前書き）

うん、特に言うことないかな。
それでは…続き！

第五十五話「後日とお誘いと戯れと」

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　葵

傭兵家業で始めて出撃してから数日後。あれから暫らくは平和に喫茶店を営んでいた。まぁあの戦闘が終わって帰った時にアイリ達から連れて行かなかったことにグチグチと愚痴を言ってきたけど…。

連れて行かなかったことは申し訳無いと思うよ？でも、仕方ないだろう？一応の理由はあるんだ。ここでアイリ達の存在が学園長にバレてしまって“使える手駒が増える”なんて思われたら面倒事が増えるに決まっている。

「おい、あのアメはもう無いのか？」

それに、だ。アイリ達の存在を隠しているのには、もう一つ理由がある。前にも言ったかもしれないが、俺が前面に立つことでアイリ達の暗躍を助けることに繋がると思うんだ。色々負担は増えるが、あとを楽にするためには仕方ないことだ。

それと学園長にバレていると思われるのは俺の戦力は少数のはずだ。俺を筆頭にハオとユエ、それとＣＯＳ－ＭＯＳの４名（内訳１人、２柱、１体）。喫茶店の店員としてアイリ達のことは疑われているかもしれないけど、ね…。

「おい？どうなんだ？あるのか、ないのか？」

それでも“疑い”だけでは相手もどうしようもないことは事実。それにバレた時はその時だ。暗躍しているのは組織（ファミリー）を運営、管理をしているアイリ、ファレノ、リチラの3人や他親衛隊以外が動いているのだから大きな障害は無いさ。

諜報関係は情報部の実働部隊である一課、二課の部隊員に任せておけば大抵は安心だしね。彼女達の現活動の殆どは学園勢力や超一派と敵対した時のための内部破壊工作の前準備とか…だけどね。

そんな色々と裏で暗躍している俺達なんだが…。今は学園長に呼び出されて学園長室に居るわけなんだが…。

「おい！聞いてるのか！？無視するな！」

なぜかソファーに座る俺の横でエヴァちゃんがアメちゃんを強請っています。いや、ここに来てからずっと強請られている気がしたんだが幻聴だと思い込むことで気付かなかったことにしようとしたんだ。それが…。

「葵！アメは無いのか！？ハッキリしろ！」

……本当にどうしてこうなった？

「はぁ…。ほら…」

「サッサと出せば良いのだ！ばか者がッ！！」

エヴァちゃーん？プリプリ怒ったようにしていてもアメちゃんを

頬張るとニコニコ笑顔になって頬が緩んでいるぞー。こういう時だけは純粋に可愛らしい幼女なんだよなぁ…。

まぁ、俺もいい加減、アレなので現実逃避はやめたのよ。ただ、手持ちになかったからポケット内に空間を開いてアメちゃんのストックを出してエヴァちゃんに謙譲させていただきました。

もうね？考え事とか出来ないくらい喧しかったのよ…。秘密で護衛できるようにスーツの内側にある剣状態のハオとユエが背中でプルプルしてるのよ。煩いから突っ込みたいんだろうねー…。

「……学園長、話しをする前に一つ聞いてもいいかな？」

「……何じゃ？手短にしてくれると助かるんじゃがのう」

それにしても少し学園長に確認しておきたいことが出来た。そのことについて話しを聞こうと学園長に話しかけた。そうしたら当の学園長は話しを聞いてはくれるようだが目線を逸らしている。

何を隠している？この学園長（じじい）…。

本当ならサッサと呼ばれた要件だけを済ませて帰りたいんだが、ここに来てそうもいかなくなった。だってさ？おかしいだろ？普段はここに寄り付きもしないし呼ばれて来るのもイヤがるヤツがここに居るんだ。

それだけは聞いておきたい…。

「……何で、ここにエヴァちゃんが居るの？」

「……数日前の大侵攻でお主が出張ったことを“誰かから聞いた”ようじゃ。それで興味を持ったらしいぞい」

「……何で今日、狙ったように、ここに居るんだよ？」

それだけならここ数日の間に喫茶店まで来て確認するなりエヴァちゃんの家へ招待すればいいはずだ。“今、狙ったように、この時間に、ここに居る”のが疑いを濃くしているんだよ…。

何だ、これは…？学園長は何を知って…いや、狙っているのか？それとも…まさか？俺のことを“俺”として知らない超一派がただ“活躍したが怪しい外部の人間”としてエヴァちゃんに面白半分で零したのか？

「……ワ、ワシは知らんのう。タ、タカミチではないかのう？フォ、フォフォフォ…」

怪しい…。部屋は暑くもないのに不自然に扇子で扇いでいる。冷や汗も流れている。怪し過ぎる…。そもそも今は１１月も中頃で冬の初頭もいいところだ。近年、地球温暖化とは言ってもそこまで暑くはない。

「学園長（じじい）……リークしたの手前ぇだろ？」

「ふぉ！？な、何のことじゃ！？ワ、ワシャ知らんぞい！」

「口調がドモッてるじゃないか！？まるわかりだな！おい！？」

これが演技だったら大した者だ。アレだな。俗に言う狸という奴だ。伊達に歳は取っていないということだな。年の功で言えば俺の

ほうが圧倒的に上なんだけど肉体年齢は２０代だからなぁ。

……あれっ！俺って実は若いんじゃね！？

んんっ！いや、それはともかく今のこの状況のことだな。何を以ってしてエヴァちゃんに情報をリークしたんだか。まったく…。余計な好奇心を刺激しないために色々情報を制限していたのに今までの努力が全てパァだ…。

だ・か・ら！というわけではないが学園長の長い後頭部を鷲掴みにしてグルングルンしてやる！大半が八つ当たりだけどな！

「痛い！いたい！イタイ！葵君！モゲる！ワシの頭がモゲルかも！？イタタタタッ！！」

「何だとッ！ウソッ！？“コレ”はモゲるの！？」

ど・う・す・れ・ば・モ・ゲ・ル・の・か・な！？

「アーーーーーーッ！！！」

泣けぃ！鳴けぃ！！啼けぃ！！！俺を楽しませろ！！くくっ！くあーっはっはっはっはっ！！！貴様の悲鳴が今の俺の悲しみに暮れる心を満たすことができるのだ！！あーっはっはっはっはっはっ！！！

それから１０分以上、グルングルンしてやったんだけどいい加減、後頭部を握っていた手が学園長の冷や汗でヌルヌルして気持ち悪い

からやめた。それに話しも進まないしね…。

「チッ！ウソ吐きが…。結局モゲなかったじゃないか」

「ヒドッ！？葵君はワシに何か恨みでもあるのかのう！？」

「え……？」

「ふぉ！？何じゃ！？それは！…え？何！？その“今頃何言ってんの？コイツ…”みたいな顔は！！」

「……ふぅ」

「何でか、ワシを見て呆れたようにタメ息吐かれた！？」

いい加減、話しを進めようよ…。正直、学園長の有り方とか、何を思うかとか、人間性とか、その他とか、もうどうでもいいのよ。もうアレだよ。学園長を弄っていたら色々なヤル気が失せてきた。

これを学園長が狙ってやっていたとしたら、ある意味……うん、ないな。尊敬、出来ないわー…。俺なら絶対にキレる。いや、そもそもそんなことになるくらいなら俺は逃げる。係わり合いになりたくも無い。

あ、エヴァちゃんがここに居る理由、結局聞いてない…。学園長がリークしたのは間違いなさそうだけど…。

「いい加減にせんかーーーーッ！！！！！！」

「「ぎゃーっ！？！？」」

考え事をしていたらエヴァちゃんの一喝に俺達の全身と耳を音波攻撃が襲った。……おい？学園長が泡吹いているけど大丈夫だよな？全身をピクピクさせているぞ？……んー、まぁ生きているようだからどうでもいいか。

それにしてもエヴァちゃん、ヒドイ…。耳がキィィンってしているぞ？頭も、ちょっとクラクラするし…。もうエヴァちゃんが居る理由とかどうでもいいや…。何かあっても粉砕すればいいことだしな…。

……。

……。

少し頭がフラフラしていたら、ようやく音波攻撃の余韻が抜けたようだ。チラッとエヴァちゃんの座る前を見るとテーブルの上にアメちゃんの包み紙が散乱していた。何だ？アメちゃん、もう食べちゃったのか…。

だが、食べるのはいいがゴミはキチンとまとめておかないとダメだと俺は思うぞ？

「さて…冗談はここまでにして。…今日、俺を呼んだ理由は？」

「おぉ、それなんじゃがのう。何と言えば良いのか…」

「じじい。そんなことで間誤付いてないで早く終わらせろ。私は九重・葵に用があるのだ」

「むぅ…。エヴァは厳しいのう…」

「うるさい！気安く呼ぶな！サッサと終わらせろ！」

余計なことで時間を取った自覚はある。だから俺が話しを切り出して早く終わらせようとしたら学園長の返答は歯切れが悪い。そのことにエヴァちゃんが噛み付いた。正直、俺もイラッとしたな。爺さんがマゴマゴしても可愛くないんだよ。

……ん？今、エヴァちゃんは俺に用があるようなことを言わなかったか？

「因みにエヴァちゃん？俺に拒否権は…」

「？？？そんなものあるわけ無いだろ。何を言ってるんだ、貴様は？」

「ですよねー…。あははは…」

俺の疑問に小首を傾げて心底不思議そうにするエヴァちゃん。俺の疑問ってそんなに不思議なことだろうか？言ったこと何か間違っていたかなぁ？エヴァちゃんの姿が幼女だから怒り難いわー…。

笑って誤魔化してはいるけど納得はしていない。百歩譲って用件があることはいい、だけど俺の拒否権が認められていないのはどういうことかなー…？

俺は今度、絶対にイジメてやろうと小さな決意を抱いた。じゃれ合う的な意味で！

「ふぅ…。まず始めに先日の件じゃが、迅速な助力に改めて感謝する」

「仕事だったからな。感謝はいらんよ。……それで本題は何だ？」

「う、うむ…。葵君達が接触したガンドルフィーニ君達を覚えているかね？」

「ああ、まだ数日前のことだからな。忘れるほど耄碌しちゃいないよ」

学園長の一言から今までのおチャラけた雰囲気が突然、マジメな空気になった。話しは数日前に起きた襲撃事件で俺が助力したことに対しての感謝から始まった。エヴァちゃんには新しいアメちゃんをあげて黙らせた。

確かに危険な戦況だったようだけど助太刀したのは依頼された仕事だからな。追加謝礼は別にしても感謝はいらんよ。……寧ろ、ＣＯＳ－ＭＯＳの丁度良い実戦証明と経験値稼ぎになったしな！こう言っちゃ何だけどタイミング良かったんだわー♪

しかし…ガングロ、もといガンドルフィーニねぇ？あの若造が何を言ってきたんだか…。

「その彼らが…と言うよりガンドルフィーニ君が葵君達のことを知りたがってのう。そこで丁度良いから……他の者達にも」

「…俺のことを紹介する、なんて言うつもりか？」

「……ダメかのう？」

「断る。明らさまに“外堀”が埋まるのが気に入らない。それに何より面倒事の“匂い”がする。出直して来い…」

今、学園長は「葵君“達”～」と言った。これで確実に、あの場に居た存在は学園長の認識化に入ったことになるｚ。ＣＯＳ－ＭＯＳは経験情報の蓄積のために早い段階でお披露目する予定だったからいいとしよう。

ハオとユエの正体までは知らないようだが学園長は彼女達のことを戦える駒が増えたくらいには考えているかもしれない。……俺から離して別々に運用しようとしたら断固として反対するけどね！！俺の警護が薄くなるのはイヤ過ぎる事態だ！！

大体、知りたい、だぁ？男に教えることなど何一つ無いよ。怪しいと思うなら好きにすればいい。コバエが前をチョロチョロするのはウザイが叩き潰すは容易だ。他の有象無象が何匹、群がろうとな…。

それにあの若造は頭が固いんだよ。もっと柔軟な思考をするべきだね。そんな頭の固い奴らに紹介されても正直なところ迷惑なだけだ。

下手をすれば若いのが“正義の名の下に～（笑）”を大儀に暴走して家族はもちろん俺にも被害があるかもしれない。そんなことになるくらいなら多少疑わしい余所者くらいに思われたほうがマシだ。

そして俺が何よりも気に入らないのは学園長の隠れて見える思惑だ。学園所属の魔法関係者に俺のこと紹介することで俺を“学園所属である”と強制的に既成事実化して認識させようとするのが気に

入らない。

もうね？面倒事の匂いがプンプンするんだ。いくら温厚な俺でも何も知らないところで謀られるのは本当にムカッて来る。正面から頼まれるのなら、それなりに協力するのも吝かではないんだ。まぁ、それも気分次第だけどね。

イライラしてきたから俺は、話しはここまでとソファーから立ち上がり扉に向かった。オマケに俺に用があると言っていたエヴァちゃんも後を付いて来たが…。

「ま、待つんじゃ！どうしてもダメかのう？」

「クドイぞ。……ふぅ。エヴァちゃん、行こう。ここじゃなんだから…」

「いや、私の家に来い。そのほうが、都合がいい。……ククッ」

学園長の懇願を一言で断ち切って意識の外へ押しやった。次にはエヴァちゃんの言う用事に意識を向けていた。

こんな学園長室ではエヴァちゃんと落ち着いて話せないから、どこかのカフェか俺の店に行くかと相談しようとした。そうしたらエヴァちゃんは自分の家に来いと言う。……何かを企んでいるような笑いを最後に添えて、だ…。

「……お手柔らかにね？」

「ふふんっ、それは貴様次第、と言っておこうか」

すっごい不安だ…。それに都合がいいって何だろう？ハオ、ユエ…！こわいよー…！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――エヴァンジェリン宅…。

Ｓｉｄｅ　茶々丸

休日の今日、マスターは1人で出かけられました。出かけられる時に地下で埃を被っているエヴァンジェリンリゾート…通称［別荘］を使えるように設置しておくよう私に命じられました。

「…お帰りなさいませ、マスター。そして、いらっしゃいませ、葵様」

「茶々丸、用意は出来ているか？」

「こんにちは。お邪魔するね、茶々丸ちゃん。……ん？用意？え……？」

所定通り地下室に［別荘］を設置してから数時間後、マスターがご帰宅されました。扉を開ける前に確認しましたが唇音センサーを熱源センサーから1人、同伴者がいらっしゃるようでした。

扉を開けてマスターを出迎えますと、そのお隣には苦笑されてい

る葵様がいらっしゃいました。先日の夜間警備では随分とご活躍されたようですね？お勤めご苦労様でした。

あの日はマスターと私も学園長の要請で東側を警備していました。まるで年越し前の大侵攻といったらよいのでしょうか？西側に主戦力が侵攻していたとしても他から戦力を抽出することは難しい状況でした。

そこで援軍として派遣されてきたのは葵様とハオ様、ユエ様。そしてもう1名。前のお三方は面識があります。ですが最後の1名を私は知りません。学園長先生とガンドルフィーニ先生のお話しから私と“似た存在かもしれない”ということでした。

同じガイノイドならば超とハカセが造ったのかもしません。戦闘があった後日メンテナンスのため、超とハカセの研究室へ訪れた時に聞いてみることにしました。2人の答えは造っていないという否定するものでした。

であれば…アレは葵様が？超とハカセの科学力に匹敵する葵様。この方は一体…？

「どうした？茶々丸」

「……失礼しました。マスターのご用命通りに地下にて設置済みです」

「よし。……葵！行くぞ！」

失敗です。目の前にマスターが居られるのに自分の思考に耽るとは……不覚でした。

マスターは私から無事に［別荘］を設置したことを聞くと葵様の手を取り駆け出さんばかりに歩き出そうとされました。マスターが嬉しそうにしている姿を見るのは私も嬉しいです。

ですが、マスター…。その前に葵様が着ている紅いコートをお預かりしなくてよろしいのでしょうか？外は冬で寒いのですが［別荘］内は常夏の陽光をなしていますよ？

「はいっ、ちょーっと待とうねー？」

「ふにゃっ？おいっ、こらっ、放せっ！」

「…何を用意したのかな？茶々丸ちゃん」

「おいっ！？私は無視か！？えーいっ！襟首から手を放せっ！にゃーっ！」

葵様を［別荘］へ連れて行こうとしたマスターですがそのまま葵様に襟首を摘まれて子猫のように持ち上げられてしまいました。ああ、マスター…小さな手足をバタつかせるお姿も可愛らしいですね。

葵様はそのままマスターをプラプラさせながら私に問いかけてこられます。マスターは無視されたことに抗議していらっしゃいますが…。葵様に大きく振り回されて黙らせています。

……これは従者としてマスターをお助けするべきなのでしょうか？それともこれは両者のじゃれ合いなのでしょうか？

「…マスターから聞いていらっしゃらないのですか？」

「聞いてない…」

マスターの説明不足だったようですね…。帰宅までの道中に葵様にキチンと説明されていなかったようです。葵様は大切なお客様ですから、ここは従者としてマスターに代わりご説明して差し上げるのが努めでしょう。

私は葵様にお話しました。マスターがお出かけになられる前に私に命じられたことを…。それは、地下で埃を被っている［別荘］を地下室に設置し使用できるようにしておくように、というものです。

「ほう？［別荘］を、ねぇ。……エヴァちゃーん？」

「な、何だ!?いや!それよりも早く放さん、ふにゃーっ!?」

「こ・れ・は・ど・う・い・う・こ・と・な・の・か・な!?」

「イタイ!いたい!!米神が痛い!!!割れる!割れる!?頭が割れる!!?ふにゃにゃーっ!?!?」

私のお話しを聞き終えると葵様はとても“素晴らしい笑顔”でマスターを抱き抱えられました。マスターは葵様の顔を直視すると“ビクゥゥ!!”と反応されると悪戯が見付かった子供のように慌て始めました。

そんなマスターのお姿も可愛らしいです。これは記録が必要ですね…。もちろん永久保存版です。それにしても葵様は笑顔なのに、なぜか怯えるマスター。不思議です…。

その不思議な気持ちも葵様の次の行動に吹き飛びました。マスターの米神にコブシを当てると、これでもかと言うくらいにグリグリと…俗に言う“ウメボシ”をし始めました。私から見てもアレは痛そうです…。

マスターの従者としては葵様からお助けするべきなのでしょうが……。なぜでしょうか？マスターと葵様を見ているとまるでご兄弟のようにじゃれ合う光景に見えてしまいます。

「話・し・て・く・れ・る・よ・ね・っ！？」

「わかった！話すっ！話すからやめてくれっ！イタイ！ワレル！？ふにゃーっ！？！？」

「あー、マスターが、あんなに楽しそうに…」

それでもマスターが“ウメボシ”を痛がっているのは演技ではなく本気と書いてマジと読むくらい痛がっているのは間違いないようです……。もう少ししたら止めようと思います。それまでは映像記録に専念させていただきます。悪しからず…。

マスター、頑張って下さい…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　茶々丸

――エヴァンジェリン宅…。

Ｓｉｄｅ　葵

エヴァちゃんの米神や色々に重大なダメージを与え続けて聞き出したことを一言で言えば…“模擬戦したいな！てへっ♪”ということだった。

そんなことのために強引に拉致ってきたのか、と考える。うん、少しだけイラッとした。だから少しだけ八つ当たりで“クスグリ地獄”に叩き込んだことに反省はするが後悔はない。だって“ウメボシ”を続けるよりはマシだと思うんだ。痛くないし…。

「ハァ…ハァ…。うぅぅ…！んっ…。うぅぅ…！ハァー…」

そのエヴァちゃんだが今もソファーで“ウメボシ”と“クスグリ地獄”の影響でハァハァと息切れしてグッタリとしている。

エヴァちゃんの顔が真赤だったが、やり過ぎたのだろうか？……少しお仕置きの加減を間違えたかもしれん。茶々丸ちゃんが止めてくれなかったら……。うん、よく止めてくれたと思う。

「まったく…。模擬戦やりたいなら最初から、そう言えばいいんだよ。はぁ…」

「…マスターは少々意地っ張りな方ですから。正直にお願いすることが恥ずかしかったのかもしれません」

「茶々丸ちゃん…。仮に、そうだとしても…。あー、もういいや。ちょっと電話、貸してくれる？」

「…畏まりました。こちらをどうぞ」

「うん、ありがとう。えーと……」

茶々丸ちゃんのフォローを聞いても納得は出来なかったが状況は変わらないことは事実だ。ならば俺の安全のために援軍を呼ぶべきだろう。そのために電話を借りようと茶々丸ちゃんにお願いした。

そうしたら備え付けの子機を貸してくれました。本体はアンティークの電話なのに中身はハイテクなのかと俺ビックリ…。機械音痴のエヴァちゃんでも使えるように形はそれなのかもしれない。まぁそれはいいので早速電話だ。

番号を押しながらエヴァちゃんと茶々丸ちゃんから少し離れて電話する。電波を飛ばす子機だと盗聴とか容易だけどそれは対策してあるから関係無い。

『…はぁい、喫茶店クレイドルでぇす』

「あ、もしもし？俺だけど、今、大丈夫？」

『少々お待ち下さいねぇ。……もう、大丈夫ですよぉ。どうかされましたかぁ？』

「その前に秘匿回線のBに変更…」

『――――……出来ましたぁ。御命令（オーダー）は何に致しましょうかぁ？』

「ミリーとマリー、ウーリ。それとCOS－MOSをエヴァンジェリン宅へ派遣よろしく。エヴァちゃんが模擬戦したいんだってさ」

『御命令、確かに承りましたわぁ。１０分以内に参りますわねぇ』

数回のコール音が流れた後、電話に出たのはミリーだった。電話するのに不都合が無いようにしてもらい、秘匿回線に回線を変更した。少しでも盗聴を困難にする工作だ。念話ばかり使っていると通信技術が低下するから緊急時以外はこれにした。

それと要請する人選は決めていた。ＣＯＳ－ＭＯＳは当然としてミリー達はエヴァちゃんを相手にする以上、万全に備えたいから呼ぶことにした。何だかんだで陽月姉妹、精霊３人娘、悪魔３人娘が、付き合いが長い分、個人戦闘では一番馴染むんだよ。

俺の安全を確保するのに一番だというのがもちろんあるけどね！！

「茶々丸ちゃん。電話、ありがとね」

「…いえ、お役に立てて何よりです」

「くくくっ、少しお茶しようか？それまでにエヴァちゃんも復活するだろうからさ」

「…はい」

電話が終わったから子機を茶々丸ちゃんに返した。それから茶々丸ちゃんとお茶を楽しんでいるとエヴァちゃんも“ウメボシ”と“クスグリ地獄”のダメージから復活してきた。

復活したエヴァちゃんは俺の仕打ちにぎゃーっ！ぎゃーっ！と文句を言ってきた。でもまぁ、俺も少しやり過ぎたかもしれないとは

思うわけで黙って抗議を聞いていた。……半分ほどは聞き流していたけどね。

……。

……。

それから数分すると扉をノックする音が聞こえた。皆が来たと思って俺が行こうとすると茶々丸ちゃんに止められた。まぁ客の自分が人の家で接客するのはマナー違反だったかな。…というわけで黙って待つことにした。

このログハウスの建築設計だからかは知らないが俺達が居るリビングと玄関は一直線なんだ。だから扉が開かれると誰が来たのか、一目瞭然だったりする。……まぁ、俺が何を言いたいか、と言うとだな？

扉を開けた時に茶々丸ちゃんがＣＯＳ－ＭＯＳを見て固まっていたりするんだよ。

「…どうかされましたか？」

「……はっ。失礼しました。どうぞ、お入り下さい」

「お邪魔します。マスターは…？」

「ＣＯＳ－ＭＯＳ！こっち、こっち♪【…皆も良く来てくれたね…】」

玄関から入ってきたＣＯＳ－ＭＯＳと霊体化して透明になってい

るはずのミリー達に出迎えの挨拶と来てくれたことに対する感謝を述べる。うん、よかった！本当によく来てくれた！これで痛い思いをしなくてすむね！……たぶん！

「マスター…お待たせしました」

【…うふふふ♪お邪魔しますわねぇ…】

【…だ、黙ってお邪魔するのはドキドキしますな…】

【…うー…。寒いー…。ふぁぁ…あるじー…】

ＣＯＳ－ＭＯＳはソファーに座る俺の横に駆け寄り、霊体化しているのでフヨフヨと近寄りミリーは背後から抱き憑いてきた。ウーリは膝の上を陣取り、マリーだけは黙って人の家に入ることにドキドキとしているようでキョロキョロしている。

むぅ…。横に立つＣＯＳ－ＭＯＳはともかく、ミリー達は霊体化していても抱き付いていることに変わりはない。エヴァちゃん達には見えていないとわかっていても恥ずかしいものがある。

それでも無碍に扱う気は毛頭無いけどね！これも一種の家族との触れ合い！スキンシップであり！コミュニケーションのはずだ！誰にも文句は言わせん！言わせんぞぉぉおおっ！

すまん…。恥ずかしさを吹き飛ばすために少し取り乱した。

「待て、九重・葵。そいつらは何だ？」

「彼女はＣＯＳ－ＭＯＳだけど？……ッ」

それでまぁ内面で色々と取り乱していたわけだが、外面ではＣＯＳ－ＭＯＳ達と無事に合流できたことを喜んでいた。そうしていたらエヴァちゃんの何かを咎める雰囲気で、声色で、口調で“そいつらは何だ？”聞かれた。

……ちょっと待て？今、エヴァちゃんは“ら”と言ったか？

何、この子？まさか、ミリー達の姿が見えているとか言わないだろうな！？家族仲がいいことは俺の自慢の一つではあるけど、じゃれ合っているところを他人に見られるのはまだ恥ずかしいものがあるんだぞ！？

……。

いやいやいや！そうじゃないっ！そうじゃないだろっ！？エヴァちゃんがミリー達を感知したかの確認が先だろうがっ！？何だかんだで好奇心旺盛なエヴァちゃんのことだ…。ミリー達のことがバレでもしたら面倒なことに…！それにアレだ…。

下級精霊を育てていたら上級精霊になっちゃった♪あはっ♪

…なんてことがバレでもしたらエヴァちゃんに殺されるかもしれない。ある意味、魔法学会に育成方法とか提出した途端に禁忌の所業として禁止されるかもしれない行為。大げさに言っているかもしれないけどエヴァちゃんならヤリかねない！

それはなぜか？普通、自然界に存在する精霊を育てるなんてバカ

げたことするヤツはいないからだ。そんなことをすれば育成者の魔力が根こそぎ奪われて魔力どころか生命力が枯渇してしまうからだったりする。

精霊は食いしん坊…というより底が無い。悪魔もそうだけど基本的に魔力で物質構成されている彼ら、または彼女達は保有する魔力量によって己が器を定めている。よって与える魔力量で拡張、強化、肥大化して存在としての位階を上げているんだ。

俺も当時は何も知らずに魔力を与え続けたけど、今では無謀なことをしたと反省している。後悔はないけどね！昔は生き残ることしか考えてなかったし！まぁ結局、懲りずにオリビエ達も育てたけどね…。安全確保のためにな！

閑話休題…。

話しが逸れたが、それよりもエヴァちゃんがどの程度、ミリー達を把握しているのかが問題だ…。とはいえ素直に「見えるの？」なんて聞いたら即アウトだし…。

「誤魔化すな！その“こすもす”とやらは茶々丸と似たようなものだろう。それはまだいい！だが、この濃厚な魔力の波動と自然に過ぎる程の気配……まさか！？」

…どうやって聞き出そうかと考えていたらエヴァちゃん自身が疑わしそうに、そして興奮したように喋りだした。

うん…エヴァちゃんの話す内容から推測するに、ミリー達の存在

の強大さと、より自然に近い上級精霊であることを理性と経験で判断して、本能と直感で感じ取り確信の一歩手前までもっていったようだ。

……いや、もしかしたら確信しているかもしれない。己が存在を確立した精霊など数えるほどしか居ない。最も、そういう力ある精霊は数千数万数億年前より遥か前に、この世界を旅立ち、今は居ないことも事実。

それら四大精霊に匹敵した力を内在したミリー達など神にも近しいモノ。たまに思うんだが俺をこの世界に落とした女神（幼女）よりも女神らしい精霊だとな…。

「んー…秘密♪」

「――――＃ッ！！」

「まぁ、そう怒らないで。……その辺りは察してほしいな」

「葵…。貴様は…」

故に何が何でも身内以外に話すことはしない。俺の安全のために育てたとはいえ今では大切な家族だ。折角、情報隠蔽したのに…安易に力を求めるクダラナイ人間のゴタゴタに巻き込まれるかもしれないような事態は避けなければならない。

オリビエ達を筆頭とした悪魔の彼女達は悪魔特有の戦闘本能があるために、ちょっとした戦闘娯楽を提供する必要があるけどね…。長く生きる時の一番の大敵が退屈というのはウソじゃないんだ。

むぅ、ただねぇ…エヴァちゃんとは、そこそこ仲良く付き合っていきたいからこれ以上、俺の大事なことに踏み込んでこないでくれると助かるんだけど…。んー…。

……。

はっ！？そうか！俺は考えた！この真剣な空気をブチ壊す方法をっ！

「アメちゃん、あげるから！さ♪」

「――――＃＃＃ッ！！！」

「……いらない？」

「……貰おう」

「はい、どうぞ♪」

学園長（じじい）のマネをするのは少し…いや大分癪だが道化になろう！というか、俺がシリアスな空気に耐えられません！幸いにもエヴァちゃんも俺の行為に乗ってくれたから助かるしね。

もう少ししたらエヴァちゃんの『別荘』に行こうと思う。……いつ頃かだって？エヴァちゃんがアメちゃんを食べ終わる時だよ！こんなに幸せそうに食べているのに止められるかよ！

それにもしかしたらこのまま模擬戦の話しも流れるかもしれないし…。淡い希望だけどね！

Side out 葵

第五十五話「後日とお誘いと戯れと」（後書き）

エヴァちゃんとの絡みは書き易いわー、…と思うのは作者だけでしょうか？
まぁこれは二次のクオリティは別にしてですが。

それなりに楽しんでいただけたなら作者としては嬉しい限りです。
あと2話くらいはエヴァちゃんと絡むかもしれませんね。
ま！予定は未定ですが！

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第五十六話「模擬戦と模擬戦と模擬戦と」（前書き）

模擬戦オンリーです。
では続き！

第五十六話「模擬戦と模擬戦と模擬戦と」

――エヴァンジェリンリゾート［別荘］…。

Ｓｉｄｅ　葵

どうも！葵です！突然ですが、ここで問題！でれっでれーん！

俺は、今、どこに、居る？

…ちく…たく…ちく…たく…時間切れ！

答え！ただいま！絶賛！エヴァちゃんの［別荘］の中に居ます！！！

……。

……。

ああ、そうだよ！結局、模擬戦の話しは流れなかったよ！こんちくしょー！！

悪意を持った相手なら断固として拒否するところなんだけどエヴァちゃんは純粋に好奇心からの行動だから断れなかったんだよ…ｏｒｚ女の子に甘いと自覚しているつもりだけど、まだ自覚が足らなかったようだ…。

【…ハオ、ユエ？…】

【…いつでも…】【…どこでも…】

【…ウーリ、マリー、ミリーは？…】

【…たとえー…】【…火の中っ…】【…水の中ぁ♪…】

「…ＣＯＳ－ＭＯＳは？」

「…コンディションオールグリーン。問題ありません」

まぁやらなければならないと言うなら仕方が無い。増援は呼べたんだから命の安全はほぼ保障されたようなものだろう。エヴァちゃんの得意の魔法属性は氷と闇、あとは光を別にして雷などの他属性を可もなく不可もなくと言ったところか…。

氷系統なら水精霊のミリーと火精霊のマリーで十分に対応できる。でも、闇か…。闇はどうしよう？ここは純粋に総魔力量で押し切るか？随分と力技になるけど、この際、それも仕方ないかもしれない。

いざとなったらラミエルさんを展開すればいいし。それにこんなことがあるかもしれないと考えて“対エヴァちゃん用最終兵器”も用意してあるんだ。問題も心配も無い！！……はずだっ。うん。

とりあえず皆に確認を取ると戦闘活動に問題無し、と返してくる。因みにラミエルさんはミリー達が来る前に自己診断をさせていたから確認するまでも無く準備は万全だ。

皆の準備が出来ていることを確認できた俺は両手に陽月を握ると、

脳内と補助脳に存在する魔導回路へ魔力を流す。一瞬で脳と補助脳の内に構築されている回路が起動する。

―…精神魔導回路（アストラル・ライン）、起動（アクション）。

「んっ…！」

身体の隅々まで流れているナノマシンが多種多様の身体的、魔法的の両方を可能な限り強化し戦闘力を完全に出せるようにする。ナノマシンは日々調整して機能の拡張、強化、情報更新を施している。

―…並列詠唱（パラレル・キャスター）、開始（スタート）。

―…高速詠唱（クイック・キャスター）、開始（スタート）。

今の強化内容は肉体的なもので身体強化から始まり反射能力強化や思考能力の高速化、それと思考分割、平行思考能力などがある。主目的は魔法力増幅、魔力の効率的利用、術式の最適化などだ。

「…んぁ！……ふぅ」

…俺の戦闘態勢を整える。あぁ、この感覚も久しぶりだ…。最終的には常時発動状態にするのが目標ではある。あるけど、どうもナノマシンとは所詮、異物であることに変わりは無いみたいで身体が高揚して戦闘本能を刺激するらしいから難しいものだ…。

「――用意はいいな！始めるぞ！」

「はぁ、お手柔らかに頼みたいところだが…」

「言ったはずだ！それは貴様次第だとな！行くぞ！チャチャゼロ！

茶々丸！」

「アイサー！御主人！」「…お相手致します」

「ちょっ！？従者を２人とかズルくない！？」

律儀に、こちらが準備を整えるのを待ってくれたのは嬉しい。…だけど模擬戦とはいえ、出来ればエヴァちゃんとは戦いたくないなぁ、と思うのは贅沢だろうか？痛い思いはしたくないんだよ…。

それと！従者人形で殺戮人形のチャチャゼロと、科学と魔術のハイブリッドである茶々丸ちゃんの従者２人を仕向けるってどういうことかな！？今はＣＯＳ－ＭＯＳと俺の２名しか居ないのにぃぃッ！！

「チィィ！？ＣＯＳ－ＭＯＳ、いけるか！？」

「…問題ありません。お任せを」

そう言うとＣＯＳ－ＭＯＳは砲弾のように飛び出していった。彼女の返答に満足感と頼もしい思いでエヴァちゃんの従者達を任せた。その背中は頼りがいのあるように見えたね！

それによく考えたら、この模擬戦も悪いことばかりではない。あの２人を相手にすれば、ＣＯＳ－ＭＯＳは戦闘情報や経験情報を蓄積することが出来るからだ。これはソフト面で更なる飛躍を望める結果に繋がる。

そうだ！彼女の経験情報を一定以上蓄積できたら兵装も増やそうかな？試作品の実証試験とか…。お？実証試験が出来てＣＯＳ－Ｍ

ＯＳの兵装も増える。割と一石二鳥じゃね？

そうなるとより一層、新世界の対魔法使い戦、対魔獣戦などの特殊戦闘だけでなく対人戦、対戦車戦などの旧世界に対応した戦闘マニュアルも構築する必要があるか…。今もデータ更新して状況判断の糧としているようだし…。

いや……マニュアルは概要だけで細かな部分は敢えて自己判断に任せて思考の柔軟化を図るのもいいか。さて、どうするべきかとチラッとＣＯＳ－ＭＯＳ達を見る。

「――――……ッ」

「ゥオッ！？」「…っ！貴女は…」

「…貴女方のお相手は私が致します」

「カカカ！上等ッ！！」「…行きます」

「――――ッ！…ッ！？……ッ！！」

ＣＯＳ－ＭＯＳはチャチャゼロと茶々丸ちゃんの２人を相手に接近戦を主体で激しい攻防を繰り広げながら、なかなかどうして健闘しているようだ。あの攻防では飛び道具なんて使う余裕はないだろうな…。

それでも機体スペックの差ではＣＯＳ－ＭＯＳが２人を上回っていることは間違い無い。チャチャゼロ達は豊富な戦闘経験と連携で互角以上の戦いをしている。やっぱり経験情報が豊富だとすごいなぁ…。

でもまぁ、アレならあっちは彼女に任せて大丈夫っと…。残るは…。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！氷の精霊１７頭・集い来たりて・敵を切り裂け！魔法の射手・連弾・氷の１７矢！！」

「セット・フェミリ　ラ・リア　ファミリア！炎の精霊１７柱！！集い来たりて・敵を討て！魔法の射手・連弾・炎の１７矢！」

互いに空中へ飛び出してエヴァちゃんの放った魔法の射手と同数を撃ち合って相殺したわけなだけどね？どうにかして、この我が侭吸血美幼女をあしらわないとならないわけなんだが、どうするべきか…。

とりあえずエヴァちゃんは小手調べに魔法の射手を放って来たわけだが、当然その程度なら同様の魔法の射手で対応できる。寧ろ、無詠唱ではないだけエヴァちゃんの遊び心が垣間見えるというものだ。

でも、本当にどうしようか？本気で叩き潰す気ならば初っ端からラミエルさんの大型荷電粒子砲で肉体を問答無用に吹き飛ばすこともできる。だけど高が模擬戦で、そこまでする必要もメリットも無い。

ま！いざ俺の身に危険が迫ったらヤルけどね！

あれ！？今、ふと、思ったんだが五百数十年振りに起動キーを唱えて、普通に魔法を繰り出した気がする！！長い間、使ってなかったから忘れていたと思ったのに案外、身体は覚えているものだなぁ

…。

ミリー達が力をつける前は普通に起動キーを唱えていたのに今ではミリーとかマリー、ウーリ達とのラインを通じて魔法イメージを無理矢理、世界に具現化させていたからなぁ…。思い浮かべるだけだから周囲には無詠唱に見えるんだよ！

身も蓋も無くハッキリ言いうと詠唱なんていらんのよ。精霊契約の副次効果によって深層意識下で繋がっている精霊さん達にお願いしているだけだし。

「フハハハハッ！小手調べは必要ないようだな！」

「いやー、俺って怖がりだから、これで終わりにしたなー…なんて？」

結構、本心だ。俺個人としては前に出て戦うより、砲台として後方からの援護支援のほうが好みなんだ。アウトレンジからの一撃必殺、これが理想だな。

「さぁ！まだまだ行くぞ！！リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！来たれ氷精・闇の精…！」

「ですよねー…。では…」

うん、まぁ、俺の意見がアッサリと通るなんて思ってはいなかったさ。それでもね？会話はしようよ。相互理解は必要なことだと俺は思うんだ。

会話が成立してないなぁ。お兄さんは悲しいよ…。くくくっ！そ

う、悲しい…。ああ、話しを聞いてくれないから悲しい。だから俺はエヴァちゃんをお仕置きしないと…ダメだよねぇ？くくくっ！

―…術式［紅き焔・連弾（スペル・メモリー）］を展開。
―…全術式展開、完了（コンプリート）。
―…選択、速射型（セレクション・ラピット・ファイア）を形成。
―…集束。…集束。…集束。
―…圧縮。…圧縮。…圧縮。
―…全工程（オール・コンプリート）、完了。
―…速射魔法［フランベルジュ］…。

詠唱を始めるエヴァちゃんから瞬時に後退。急速に距離をとりながら意識内で魔法術式を構築した。平行思考と分割思考による処理範囲の広範囲化。そしてそれらを高速で処理する思考能力の高速化で瞬時に成せる業（わざ）だ。

先程も言ったかが能力は日々更新され最適化することで強化され続けている。普通に呪文詠唱している者には出来ない芸当であり、無詠唱でも追いつくことが出来ない領域だ。魔法の構築速度、威力、魔力効率、どれを取っても負けは無い。

魔法発動準備が出来た時“ニヤリ…”とした嗤いを今の俺は浮かべていることだろう。これは活発に活動するナノマシンに戦闘本能が刺激されている証拠だったりする。普段、臆病者の俺には似合わない嗤いだ…。

「行くぞ？発動（エグザート）！」

「…闇を従え！吹雪け・常夜の、って！のわぁぁあああーッ！？！？！？」

未だ、詠唱途中のエヴァちゃんに一足早く構築完了した魔法を放った。一撃一撃が紅き焔に匹敵するそれを機関砲のように連続で撃ち放った。着弾点からは爆発と煙が立ち上り、新しい爆発がまたそれらを薙ぎ払う。

エヴァちゃんは器用に空中機動を以って回避行動を取っている。ただ…避ければ避けるほど周りに被害が増える一方だということは理解しているのだろうか？一応、魔法球を破壊しないように威力は抑えているけど……被害が、ねぇ？

それはともかく……テ・ン・ショ・ン！上がってきたーッ！！！あーっはっはっはっはっはっはっ！！まるで的当てではないか！？くくくっ！あーっはっはっはっ！！そうだ！こうなったらあの台詞を言わなければならんな！！

「見ろッ！まるで人…もとい！吸血幼女がゴミのようだ！！あーっはっはっはっはっ！！」

「なぁぁにぃぃをぉぉ！？！？！？クゥゥーッ！！！」

エヴァちゃんが俺の台詞に反応して怒ったようだ。なんかね？こう…“ブチッ”っていう音が聞こえたような気がしたんだ。目の色が反転した彼女はマジで怖い！故に！近寄らせないために魔法速射で弾幕を張るんだ！！

「そぉら！逃げろ！逃げろ！！当ぁてちゃうぞぉ？あーっはっはっはっはっ！！」

右ッ！外した！左ッ！また外した！上ッ！ええいッ！またか！？

左ッ！左ッ！ガーッ！連続で外したッ！む！？そこ！下ッ！…くっ！惜しいッ！！なかなか当たらないなぁ。くくくっ！

生意気なことを言って、ごめんなさい！台詞だけでも気合を入れておかないと怒気を放つエヴァちゃんにジャパニーズ土下座して謝っちゃいそうなんだ！それに脳内麻薬を今現在、ダダ洩れ状態にしてテンション上げているんだよ！！

「グッ！！葵ッ！貴様ぁッ！性格が変わり過ぎてないかっ！？！？」

「何・の・こ・と・か・わ・か・ら・ん・な！！はーっはっはっはっはっ！！」

文句を言っている暇があるのかなぁ？くくっ！あーっはっはっはっはっはっ！止まっていると当たっちゃうぞぉ！？

意気のいい台詞を言っては居るが、現実は脳内麻薬が過度に分泌されて最高にハイって状態になっているだけだ。模擬戦が終わった後にエヴァちゃんから何を言われるかと考えるだけで漏らしそうだ！！

「ぐぁぁああっ！！ゼッタイに殺してやるーーーっ！！！」

「あはははははっ！……はは？はぁ？？」

シィィット！！しまった！やってしまった！調子に乗っていたら速射が終わっちゃった！！エヴァちゃんはどこ行った！？……チッ！爆煙が邪魔してわからん！！

「クッ！やっと止まったか！！リク・ラク　ラ・ラック　ライラッ

ク！来たれ氷精・闇の精・闇を従え！吹雪け・常夜の氷雪！…お・返・し・だ！！闇の吹雪！！！」

「ぬおぉぉおおっ！！寒い！？スゴイ寒い！！メッチャ寒い！！！」

爆煙を煙幕にしてエヴァちゃんはあらぬ方向から不意打ち気味に闇の吹雪を放ってきた。俺は陽月に魔力を流して闇の吹雪を切り刻み、直撃だけは避けることに成功した。しかし、吹雪が身体に纏わりつくように張り付き、僅かにダメージは受けたようだ。

因みにＤフィールドは茶々丸ちゃんを通して超一味に手札を見せるようで癪だから、万が一の場合以外は展開しないようにラミエルさんにお願いしてある。これはＣＯＳ－ＭＯＳも例外ではない。

第一襲撃時にプロテアで見せてしまったから、そのことで関連付けられても困るしね！まぁ既にエヴァちゃんと関っている時点で長一味には怪しいとは思われているようだがな。

閑話休題…。

魔法の雪は服の中に入っていないが冷たいことには変わらない！寒い！地上に降りて身体と服を魔力でコーティングして雪を弾き飛ばす。ただ、この時の俺は不覚にもエヴァちゃんから注意を逸らしてしまっていたんだ。

「フハーッハッハッハッハッ！！今度は貴様が逃げる番のようだな

っ！！リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！来れ氷精・大気に満ちよ！白夜の国の・凍土と氷河を！…足下がお留守だぞ！こおる大地ッ！！！」

「ぐはぁぁぁああっ！！滑る！？危なっ！？刺さったらどうする気だッ！？」

「なぜ、避けるっ！？！？」

「避けるわーッ！！！」

纏わりつく雪を振り払いながら呪文詠唱するエヴァちゃんに気が付いた時は既に魔法は放たれた後だった。地上に降りていた俺は凍りつく地面を目にした途端に瞬動で回避……すると鋭く尖った氷柱が行き先を塞いできた。

瞬動の移動力のまま氷柱に突撃したらアイアンメイデンよろしく全身串刺しになってしまうではないか！！……うわっ！？想像したけど寒いし！痛過ぎるな！？

地上に降りてきたエヴァちゃんは、心底、なぜ氷柱を避けるのかと不思議そうに言ってくるしよ！！エヴァちゃん……何度も言うが俺は不老であって不死ではないの！！わっかんないかなぁーっ！？

この時、脳内麻薬で高揚状態にあったのと、ちょっとイラッとしたからかもしれないが普段の俺にはありえない行動を取った。接近戦をエヴァちゃん相手に仕掛けることにしたんだ。陽月を構えて、いざ突撃！！ってね！！

「むッ！？」

「チィ！意外と反応が早いッ……」

それでもエヴァちゃんは逸早く反応すると瞬時に右手に魔力刃を展開した。クロスした陽月を縦に構えることで鍔迫り合いの様相をなした。ギチギチと刃が火花を散らしているところから魔法力の反発が起きていることがわかる。

エヴァちゃんのアレは…エクスキューショナーソード？確か、固体・液体の物質を無理矢理気体に相転移させて剣（断罪の剣）として使う近接魔法だったか？やれやれ…陽月でも断てない魔力密度で構成するとは、何と言ってよいやら。

「ククククッ！接近戦ならば…と思ったのか？存外、考えが甘いのだな」

「まぁ…エヴァちゃんって身体が幼女で、色々と小さいし…。それに全体的なリーチが……ねぇ？わかるだろ？自分のことなんだから…」

「クッ！貴さ…ッ！？ふ、ふふんっ！私を怒らせて隙を狙おうとは随分、姑息な手を使うじゃないか。ええ？」

チッ、割と頭に血が上り易いエヴァちゃんなら激昂してくると思ったのに…。そう簡単にはいかないか。ならば！近接戦で連撃を仕掛けて、仕掛けて仕掛け続けるのみ！！

「一つッ！聞き、たいッ！シッ！この模擬戦はッ！ルール無用だったなッ！？」

「そうだッ！そうでなければッ！クッ！？貴様のッ！実力をぉッ！測れないだろうがッ！！」

一合！二合！三合！四合！五合！六合！七合！九合！十合！……！！

次々に斬り結ぶ中で大半の手札を伏せた状態の現状でエヴァちゃんを押し切るのは難しいと判断した俺は一つ手札を切るかどうかで一瞬、迷った。これは模擬戦だ。しかし、だからと言って負けるのは癪だった。

故にエヴァちゃんに一つ聞いた。“ルール無用にした理由は何か？”と…。彼女の答えは実にシンプルでわかり易かった！ただ“実力を測る”というもの！

あらゆる手札を封じた現状では力技しか出来ない今、彼女の願いを叶えることが出来るか？否！断じて否だ！このままでは普通に訓練するのと変わらない！だから、俺はっ！！

「ならばッ！！！！」

「ぬおぅッ！？！？」

遠慮の必要は…無い！

鍔迫り合いをしている時、陽月へ強めに魔力を注ぎ、一気に振り抜いた。その衝撃でエヴァちゃんは大きく後退することになり、俺との距離をひらくことになった。

「一つ、手札を見せてやろう。…Ｗａｋｅ　Ｕｐ！ラミエル！！」

『Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』

ペンダントになっているラミエルを外して頭上へ掲げる。ラミエルは空中へ浮かび上がると体積を全長５０ｍほどまで肥大化させる。ラミエルは大小様々な荷電粒子砲とミサイル発射口を展開する。

この状況は茶々丸ちゃんの記憶フォルダから超一味に情報として流れるだろう。だけど、エヴァちゃんの期待に一つ応える意味では、これは仕方ないことだろうよ。

そんな考えが頭を過ぎる。だが今は歌のように心地よいラミエルの稼動音を耳にしながらエヴァちゃんに俺は笑みを見せることにした。

「な、何だっ！これはっ！？」

「くくくっ！無数の荷電粒子砲による弾幕結界だ。…エヴァちゃんは避けきれるかな？……ラミエルッ！Ａｌｌ　Ｏｕｔ！！」

『Ｒｏｇｅｒ．……Ｆｉｒｅ！』

「チィィィ！！グッ！こんなっ！！うぐっ！？がはっ！！」

ラミエルにガンガン行こうぜ！と指示すると全ての荷電粒子砲に集まるエネルギーが急速に集束してエヴァちゃんの周囲へ全力砲撃（威力は抑えているよ！？）を開始した。

エヴァちゃんは光の本流と言ってもいい密度の弾幕に曝されて避けることも儘ならない。彼女の羽織るマントはボロボロで形を成し

ていない。エヴァちゃんの肌は光の粒子に焼かれて爛れ、重度の火傷を負っている。

反撃するにも呪文を唱える隙など容易に与えるわけがない。俺が態々指示するまでもなくラミエルは間断無く砲撃を継続している。

回避、回避、回避…また回避。エヴァちゃんは回避しては真祖（ハイデイライ）の吸血鬼（トウォーカー）の回復力で凌いでいる。

……まさか、俺の時のようにエネルギー切れを狙っているのか？だとすれば、甘い…。

「ラミエルの弾幕に切れ間は無いぞ？魔力エネルギーが切れるまで半永久的に放たれる。加えて……ラミエル！」

『Ｒｏｇｅｒ．対魔誘導ミサイル用意。発射口、全開放。……一斉発射、Ｆｉｒｅ！』

「何ッ！？――――ッ！しまっ――――！？」

ラミエルの背後から垂直発射されたミサイルが彼女の頭上から襲い掛かると至近で爆発した。荷電粒子砲に気を取られていたエヴァちゃんは爆発に体制を崩す。次の瞬間、一際、大きな光にエヴァちゃんは飲み込まれていったのだ。

「マスターッ！？」「御主人ッ！？」

「…余所見とは感心……しませんッ！」

「ガッ！？ゲェェッ！！」

「姉さんッ！？」

「…他を気にしている暇など……ありませんよッ！」

「えっ…？キャッ！？」

チャチャゼロと茶々丸ちゃんの従者2人は主であるエヴァちゃんが消え去ったことに強い動揺を表す。そこへCOS－MOSがまだ戦いは終わっていない、と言わんばかりに戦闘を続行。従者達を殴り、または蹴り飛ばした。

俺は何かをやり過ぎてしまったかもしれない…。だって、大型荷電粒子砲から放たれた光の本流に飲み込まれてエヴァちゃんの姿が跡形もなく消え去っていたんだ。大出力の魔力エネルギーからなる砲撃だ。個人の障壁では防げるはずがない。

「うわー…」

『心配するな、我が主よ。出力は死ぬギリギリまで抑えてある。問題は無いだろう。……（ボソッ）たぶん』

「大丈夫、かな…」

エヴァちゃんがミサイルの爆発に気を取られ態勢を崩した、その隙に大口径の荷電粒子砲に飲み込まれてしまったんだよ？これはダ

メじゃないか？生きているとしても今のエヴァちゃんでは復活にどれくらいの期間が必要になることか…。

ラミエルは役割を果たし元のペンダントに戻っていた。この子は大丈夫だと言うが、ちょっと無事だとは思えない。無論、絶対に生きているとは思う。それでも怪我をしていないかが心配だったりするんだ。

ラミエルの砲撃で出来た堀を歩いて吹き飛んだだろうエヴァちゃんの一部でも見つけられないかと探すことにした。そこらの周囲は電化してイオン臭がしている。

砕けた地面をザクッ、ザクッと踏み鳴らして探した。

【…ッ！我が君！…】【…後ろですッ！…】

「チィ！？セァァアアッ！！」

「ふんッ！なかなか勘がいいじゃないか。九重・葵…」

無事だったっ！？じゃない！無事だった！！生きているとは思ったけどエヴァちゃんの身体には表面上、大きな傷は見られない。中身はどうか、わからないからなんとも言えない。もしかしたら再生の途中でグチャグチャなのかもしれない…。

吸血鬼特有のコウモリを服とする方法で、それを纏い一応の体裁を整えているのかな。影から転移してきたエヴァちゃんは右手にエクスキューショナーソードを展開したまま俯いている。金髪が貞〇のようになっていて不気味だ…。

なんにしても今のは危なかった！影の転移はいいけど背後からエクスキューショナーソードで斬り付けてくるとか何を考えているのかな！？ハオ達が教えてくれなかったら真っ二つだったじゃないか！？殺す気か！？

「……やぁ、エヴァちゃん。無事のようで何よりだね」

「ククク！ああ、肉が焼けるほどに日焼けをしてしまったぞ？……貴様も日焼けしてみたらどうだ？」

「うんっ！全力で遠慮しますっ！！」

金髪で隠れていたエヴァちゃんの目は人形のように冷たくてゾッとした。彼女の楽しげに語りかけてくる声は皮肉気だが楽しそうだった。でも、笑顔が不自然なまでに優しく、作り物めいて見えて怖い…。

そんなわけで得体の知れないお誘いは即効で拒否したわけなんだけど、次第にエヴァちゃんの纏う雰囲気がピリピリと張り詰めてきた。模擬戦、最初の楽しそうな空気は霧散して闘気が怒気に、怒気が殺気に変わるのが手に取るようにわかった。

……あれ！？というか！殺気！？模擬戦だよね！これっ！？一種の腕試しでしょ！？何で殺気が溢れるのかなっ！？！？！？

俺・が・何・を・し・た・ッ！？！？

「そうか、残念だ…。フフッ…ククク！それでは……雪景色の一部としてくれるわーッ！！！リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！！！」

「うわーんっ！！エヴァちゃんがキレたーッ！？」

エヴァちゃんが何を怒っているのか知らないが、とにかく彼女がキレたのは理解した！これは理不尽な気がする！俺は怒られるようなことをした覚えはない！無実だっ！これは冤罪だっ！

だって、そうだろう！？エヴァちゃんを吹き飛ばしたのはラミエルだ！俺じゃない！！だからと言ってラミエルを破壊しようとするなら俺も黙っちゃいないけどね！！もう手札とか関係無く援軍呼んじゃうもんねっ！！

「契約に従い・我に従え・氷の女王！来れ・とこしえのやみ！喰らえぇぇぇえええッ！！！えいえんのひょうが！！！！！」

ギャーーッ！！？？本気で撃ってきたッ！？！？しかも広範囲完全凍結殲滅呪文だとっ！？ま、まずいっ！ここから逃げなきゃ…っ！離れてっ…逃げなきゃ…っ！！逃げなきゃ…っ！！！

「ッ！！ヤバ――――……」

全速力で逃げ回っていた俺が一瞬ヤバイと意識すると同時に俺の身体は氷が覆い始めて全身を包み込んでいた。寒いとも冷たいとも思わない。ただ、鋭く刺すような痛みを皮膚に与えてくるのみだ。

普段のエヴァちゃんなら、これ以上しないと思う。でも！キレた今の彼女だと、このまま俺ごと氷を砕かれるかもしれないっ！？

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイーーーッ！？！？！？

ハオーッ！ユエーッ！ミリーッ！マリーッ！ウーリッ！ＣＯＳ－ＭＯＳッ……は茶々丸ちゃん達を抑えて動けないか……。とにかく助けて！？誰か具体的にはミリーッ！マリーッ！ウーリッ！と・に・か・く！助けてーーーッ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第五十六話「模擬戦と模擬戦と模擬戦と」（後書き）

うん…。どう言ったらいいかがわからん。
模擬戦の話しが１話で終わらなかったぜいｏｒｚ
次で…次で終わらせる…。できるかな？じゃない、やるんだ！
最近、影の薄い葵の活躍シーンを書くために！

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆様の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第五十七話「模擬戦と決着と交流？と」（前書き）

模擬戦の続き！

第五十七話「模擬戦と決着と交流？と」

――エヴァンジェリンリゾート［別荘］…。

Ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

私は九重・葵の所有する正八角形をした青いクリスタルの僕？魔法武器？今更どちらでも良いが、葵は“らみえる”と呼んでいたな。ソイツの攻撃に身体の半分近くを吹き飛ばされた。

私よりも長く生きた存在としては多少アレな…私のことを子供扱いする的な意味で…ヤツだが少なくとも私の半身を吹き飛ばす技量を持っていることはわかった。

……ククク！思い出したっ…！本当に久しぶりの屈辱と苦痛だったぞ。ええ？九重・葵よ。それこそ私が真祖の吸血鬼であることを、不老不死であることを強く再認識させられる。ククク！あぁ、それはもう鮮明に思い知ったほどだ。

あの瞬間、完全に吹き飛ばされる前に身体をコウモリ化して再構築した。次に影の転移魔法（ゲート）を展開し射線より退避。もちろん、ヤラれたままで終わらせる私ではない。転移先は葵の背後だ。

背後に出た刹那、ヤツは弾かれたように私に反応した。警告も無しにエクスキューショナーソードを振るったが何かに警告を受けたように葵は勘良く回避したがな。

確かに、久しぶりの痛みと屈辱で怒りが頂点に達して、エクスキ

ユーショナーソードで斬り付けたのは“多少”大人気なかったかもしれん。反省も後悔もしないが…。

最終的に葵を氷付けにして私もある程度、溜飲が下がった。それによく思い出してみると私は不老不死ではあるが葵は不老であっても不死ではなかったのだからな。危うく殺してしまうところだったか…。

いや、その時は私がヤツを噛んでしまえ…、チッ！何をバカなことを考えている？エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル…。自分の都合で噛むだと？バカなっ！そんなふざけたことがあって堪るものかっ…！

「…ふふんっ♪ともかく、この勝負は私の勝ちだなっ！フハハハハッ！」

そうだ。結果として葵は私の一撃を回避したが今は氷付けになっているだけで死んではいない。それが事実で、現実だ。不老の葵は殺されない限りは不死なのだ。私は何を血迷ったことを考えていたのか…。

私の半身を吹き飛ばしたことは葵を氷付けにしたことでチャラにしてやろう。まぁ、暫らく氷の中で反省してもらうがな。私を半身とはいえ吹き飛ばしたのだ。当然だろう？フハーッハッハッハッ！

……それより気になるのが、ヤツが行使した魔法の発動方法だ。魔法技術では私でも知らない方法で行使していたように見えたのが興味を惹く。その中に一撃の威力は紅き焔クラスだったが連射性が桁違いだった。

このことを尋問して素直に葵が答えるかは別だが…率直に問い質すのは私の自由だろう。ククククッ！

何はともあれ私は葵を氷付けにして、この模擬戦は私が勝ったのだ！フハーッハッハッハッハッハッハッハゴッごほっごほっ！？ハーッハッハッハッ！！

「…葵様はマスターが降されたようですね」

「――――……ッ！」

「……ッ？…違ウッ…“マダ”ダッ！」

「なっ！？姉さんっ！！」

茶々丸は私が葵を降したことで模擬戦は終わりと戦闘態勢を解く。こすもすとやらは氷付けの葵を見て、しばし硬直しているが構えを解く気配がない。チャチャゼロも構えを解くどころか戦闘継続の意思を示した。

正直、私の大呪文である“えいえんのひょうが”を直撃しておいて無事であるとは考えていない。だが、信頼する従者達のやり取りを目に、耳にした時、私は再度、氷付けとなった葵を凝視し、警戒する。

何か重要なことを見落としたのか？私でも気付かないほど小さな

変化があったのか？もしかしたら、これさえも葵の用意した罠なのか？様々な可能性を考える。

そして何よりも気になるのが葵の従者の態度だ。微動だにせず、そして何かを確信しているように構え、チャチャゼロらを変わらずに警戒している。その姿はこう言っているのだ。“まだ終わっていない…”と。

「そうか…。まさか葵は＜ピシッ…＞…なるほど、やはり、終わっていないと言うのか？」

氷を凝視していると葵を中心に小さな罅が入った。それは普通なら取るに足らない、とても小さな罅だ。だが、コレは違う…。使用目的で違うが魔法の氷は術者の意思に反して融けることはない。それなのに小さいとは罅が入った。

私の魔法が破られようとしている…。

その事実に私の背中に冷や汗が流れるのを確かに感じた。外面では冷静さを取り繕っているが内面はバカな、という思いが占めている。私の大呪文を何らかの対抗策を以って打ち消したと言うのか、という疑問もある。

何にしても私は驚愕の次には歓喜した。ククク！それは、そうだろう？何をしたのかは知らないが私の作り出した氷の中では葵を中心に数種類の濃厚な魔力のうねりを感じ取れる。

これらからは私と同等かそれ以上の魔法力を持っているのを感じる。…ということは、だぞ？またしても別個の脅威が存在することに他ならない。まだまだ底力を引き摺り出して見極める必要がある

な…。

ククッ！楽しいじゃないか。ええ？心が躍るなぁ！この模擬戦は所詮、児戯程度にしか考えてなかったが思わぬ収穫があった！ここからが本物の闘争の始まりだっ！！なぁ？九重・葵よっ！！ククククッ！

「ガァァッ！！寒いっ！くそっ！氷漬けなんて冗談にもならないっ！」

「クッ！！来たか！？」

小さな罅から無数に増えて罅は亀裂になり中心から砕け散り、無傷で現れた。ヤツを取り巻く膨大な魔力のうねり、拡散と集束を感じる。この魔力波長は葵ではない、別の誰か…。こすもす以外に感じたあの2つ…いや“３つ”か？

気になる点は多いが何らかの魔法的手段を用いて私の魔法から脱出したのは否定しない。ただ、私がありえないと考えたのは葵が“無傷”という、ただ、その一点だ。どれだけ頑丈なのだ？まったく…。

脱出した時に寒いとほざいていた。これは冷凍系の魔法がある程度ダメージを通しているということだろう。このことから最低でも氷の欠片や雪などで凍傷ダメージを身体の表面状だけでも現れているはずだ。

それなのに無傷だと？私をバカにしているのか？と真正面から言ってやりたい。

……ん？あー…今、気が付いた。こいつもナギ・スプリングフィールドやジャック・ラカンと同じように世界の“バグ”だったのだな…。あぁ、そう考えれば納得がいくというものだ。ハハハ…。

軽く…逃避した…。

「エヴァちゃん、やってくれたねぇ…。いい感じに雪景色…ではなくお花畑が見えそうだったよ」

「そ、そうか……って！そうじゃないだろ！！なぜ無傷なんだっ！？」

氷の中から飛び出して葵がゆらりと地面に降り立つと、私に対して優しく微笑みかける。そして不自然なまでに優しく語り掛けてきた。その姿はどこまでも自然体だ。それでも容易に襲いかかれるビジョンが思い浮かばない…。

微笑み語りかけてくる葵を警戒し、一挙手一投足を見逃さないと凝視する。黒い艶やかな髪の向こうにあるヤツの黒い瞳は吸い込まれそうなほどに透明で不安と恐怖、闘争や狂気などからは懸け離れた印象を抱かされる。

一瞬だが見惚れたと言ってもいい…。それも葵の次の行動で警戒心を最大限まで上げることになったのだが……。

「くくくっ！エヴァちゃん……。心の準備は……いいかなぁ？」

「は……？貴様は何を言って…ッ！？！？！？！？！？」

何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、

アレはッ!?何だ、アレはッ!?何だ、アレはッ!?何だ、アレはッ!?何だ、アレはッ!?何だ、アレはッ!?何だ、アレはーーーーッ!?!?!?!?

葵の背後の空間が揺らめいたと思えば、そこからヤツはスプレー缶ほどの大きさのものを数個、取り出した。良く見ると缶の上部にはピンのようなものがある。形状から考えるに、おそらくアレは手榴弾のようなものなのだろう。

だが、ただの手榴弾であるわけがないっ!これは私の勘だが絶・対・にっ!間違い無くっ!碌な物ではないっ!あの手榴弾からは何やら私にとってとても不愉快なモノであると直感が告げているのだっ!!

んっ!?少し待て……?“私にとって不愉快なモノ”…だと?不愉快…それは苦手なモノ?私の苦手なモノは?それは……。……ぇ?いゃ、そんな…しかし…。

……っっっ!!!!

まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?まさかっ!?

苦手なモノ。不愉快なモノ。…そこまで考えて思い出したのは私が封印される切欠にもなった十数年前のあの時のことだった。ナギに最後の戦いを挑んだ時のあの屈辱!あの恥辱!あの卑怯な方法をっ!!!

まさか…そんな…う、うそ…だよな？…なぁっ！？貴様は…葵は…そんなこと…しない…よなっ！？……何とか言えっ！？無言でピンを抜くなっ！？ち！近寄るなっ！？投擲態勢に入るなぁっ！？！？！？！？

「お・仕・置・き・だ・べ・ぇ♪」

「ま、待てっ！ん、何なのだ！！そ、それはっ…！？ふっ！？ふにゃにゃーーーっ！？！？！？」

ぐぇほっ！？ごほっ！！ごほっ！！！げぇ！おほっ！ごほっ！！くさいっ！くさいっ！あぁあぁぁあああっ！？！？！？めにしみるぅぅッ！？！？！？にゃぁぁぁあああああぁぁあっ！？！？！？！？

葵の放り出した手榴弾から黄色く毒々しい噴煙が噴出した。一瞬で私の周囲数十ｍを包まれた。噎せ返るような刺激臭で目、鼻に重大なダメージを与えてくる。

もう…だめ…きゅぅぅぅ……。

ここからが本気の勝負と考えていた。それなのに嘗て一度だけ感じた刺激臭、それの数十倍の威力で私の意識は途切れてしまった。私の記憶に残る最後の光景は葵の苦笑と「ごめんね」という謝罪の言葉だった……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　エヴァンジェリン

――エヴァンジェリンリゾート［別荘］…。

Ｓｉｄｅ　葵

エヴァちゃんを見事に負かしたことで無事に模擬戦も終わった。
それで必勝のために俺のとったとある方法でエヴァちゃんも気絶してしまったわけだな。流石にやり方がやり方だったから罪悪感を持った俺は「ごめん」って謝ってしまった。

ただまぁエヴァちゃんが復活して何か言われるのが怖いから、その前に俺達は帰ろうと外に繋がる魔法陣へ移動しようとした。…した、んだけど茶々丸ちゃんから聞かされた衝撃の事実によって帰還は断念せざるを得なかった。

茶々丸ちゃんが言うには丸一日、経たなければ外には出られないということだった。オウ…シット…これじゃ逃走出来ないじゃないかよぉｏｒｚはぁ…そういえばそんな設定ありましたねー…。スッカリ忘れていたよ…。

そんなわけで時間が経過するのを皆でお喋りしながら待っていたわけですよ。逃げようにも、こればかりはどうしようもない。うぅ…エヴァちゃん怖いよぉ。

それでも留まるしかないわけで茶々丸ちゃんとＣＯＳ－ＭＯＳが改めてお互いに自己紹介し直していたり、同じような科学と魔術のハイブリッドの存在であったり、ということを話していた。

って……あれ？ＣＯＳ－ＭＯＳさん？あまり君の情報を超一味に流すようなことは感心しないよ？いやいやいや、茶々丸ちゃん個人は信じられるよ？俺個人も好きだし。

でもね？彼女が何らかの事態でメンテ時に情報引き出されたらアウトじゃん。重要な情報は無かったようだからいいけど、これを切欠に接触してきたら……俺はともかくアイリ達キレないだろうな？

……。

……。

しばらくすると俺の恐れていたエヴァちゃんが目を覚ましたんだ…。最初に何を言われるかとビクビクしていたわけだ。寝惚けたエヴァちゃんだったけど目覚めた瞬間に言ったのは「くさっ！？」だった。

えー…、としか言いようがなかったね。怒鳴られるよりはいいけどさ…。

でも、やはりタマネギ成分とネギ成分、おまけにニンニク成分のハイミックス、更に濃縮した手榴弾は強烈だったようだ。一応、これは対エヴァちゃん用最終兵器だったけど今後は暴徒鎮圧用にトウガラシ成分も入れる予定だ。

因みにこれらの成分は科学的に抽出して濃縮したものだから食材を使ったものではない！食べ物を無駄にしちゃダメ！絶対！お兄さんとの約束だ！

エヴァちゃん用手榴弾を作る切欠だったのは昔、エヴァちゃんが捕まる時のことだ。ナギに嵌められた落とし穴の中に嫌いなネギとタマネギを大量投入されてパニックを起していた、…と情報部から報告を受けていたからだ。

それでいつか使うだろうと考えて、この手榴弾を作っておいたんだが…。いやぁ無駄にはならなくてよかった、よかった。あははははっ！

ともかく目覚めたエヴァちゃんは一刻も早く、不快な臭いを落すためにお風呂を用意するように茶々丸ちゃんに命じたんだ。

その間、俺達は外に出られる時間まで客間でゆっくりさせてもらおうと移動しようとした。……まぁそれは異臭を放つ小さな手の主が俺の裾を掴むことで実行できなかったわけだが…。

エヴァちゃん、放して…。君の身体から異臭がするんだ…！主にタマネギとネギ、ニンニクの強烈なまでに濃縮された臭いがなっ！？！？

「誰のせいだと思ってるんだッ！？」

「え……？」

「自分は関係無いと言う顔をするなッ！！お前のせいだろうがッ！

？」

そうなの知ら…ごふっ！？ご、ごめんっ！うそだからっ！冗談だからっ！……まったく、可愛いお茶目じゃな…ぐぎゃほっ！？すまんっ！！謝るっ！！だから殴らないでくださいっ！いたいっ！？マジで痛いってばっ！！

エヴァちゃんの魔力を封じている呪い（登校地獄）……ん？呪いは不登校の生徒を学校へ強制的に通わせるだけの魔法で魔力を直接封じているのは学園結界だったか？

まぁそれはともかくとして、だ。エヴァちゃんの魔力を封じている“何か”も魔法球の中まで影響が届かないようでエヴァちゃんも真祖の力を取り戻している。

だからこそっ！殴らないでほしいっ！身体に穴が開きそうなっ！パンチってっ！シャレになってないよっ…！俺のライフはもうゼロなのだー…。

……。

……。

それでまぁ、俺とエヴァちゃんがじゃれ合っているとお風呂の用意ができたと茶々丸ちゃんが伝えに来てくれた。茶々丸ちゃん、良く来てくれた！と俺は感謝したね！あのままじゃれ合ったままだと俺の身体が持たなかったからさ！主に鼻的なものが！

俺はやっと苦行から解き放たれると思って最高の笑顔を浮かべていたことだろう。さぁ、お風呂に行ってきなさい、と父親張りに茶

々丸ちゃんから受け取ったエヴァちゃんの着替えを本人に押し付けたさ！

なのに！エヴァちゃんは！俺の！手を！放して！くれない！？寧ろ！くっ！？強く！なっている！ような気が！ん〝っ！？するのは！気のせい！かな！かな！？かなーッ！！

えーいっ！放さないか！？どういうことだ！？詐欺じゃないのか！？俺が何をした！？何もしてないじゃないか！エヴァちゃんはお風呂に行くのだろう！？俺は関係ないじゃないか！！何“貴様も来い！”みたいな顔してんだよ！？

「何をしている？早く来ないか！」

シット！みたいじゃなくて、マジだったよ！お前は俺をどこに連れて行く気だ！？エヴァちゃんが行くのはお風呂だろ！？

お・前・は・そ・こ・に・俺・を・連・れ・て・行・く・の・か！？

勘弁してくれ…。って！ああっ！？そんなに袖を引っ張るなって！！伸びるだろうがっ！？ＣＯＳ－ＭＯＳ！茶々丸ちゃんも黙って見ていないで助けっ、あぁ、あぁぁー…。

……。

……。

…。

で…結局、抵抗むなしくお風呂場に連行されました。グスッ…もうお婿に行けない…。

まぁそんな冗談はどこかに置いておいて、だな？実際にここ来てお風呂場を見ると素晴らしい、の一言だ。

全体的に見て白亜の神殿と言った感じでエヴァちゃんらしい西洋建築溢れる造りとなっていた。白い支柱だけで窓なんて野暮なんて物は無く、美しい擬似風景の景色が一望出来るようになっていたのも俺的には高得点だ。

話しは変わるが今、俺の目の前には背中を見せて座るエヴァちゃんが居るんだ。それで髪を洗っているんだが、こうしていると娘にしか思えんな。体型的に見てもそうだろう？色々とちっさいし。…もちろん、いい意味でだよ？

可愛いは真理だと俺は思っているからな！

「はぁ…。……むぅぅーっ！」

「エヴァちゃん、いい加減、機嫌直そうよ？」

「うるさいっ！ナギといい、貴様といい、魔法使いの戦いを何だと思っているんだ！！」

エヴァちゃんはお風呂場に着いて軽く身体を流すと気持ちがリラックスしたようだ。すると一転して何かを思い出すと不機嫌そうに唸った。話しを聞くと、どうやら先程の模擬戦の最後を思い出したようだ。

というかエヴァちゃん、魔法使いの戦いって……何、言ってんのかな？俺は純粋な意味で魔法使いじゃない。魔法的に言えば錬金術師で現代的に言えば科学者で技術者だ。アンやラミエルさん、それにＣＯＳ－ＭＯＳなんかを見ればその最たるものだろう。

魔法使いの戦い？そんなのしない、しない。それに相手の弱点をトコトン突いてやるのは戦いの基本と言うじゃないか。納得がいかないからといって、そのことで文句を言うのは自らを貶める行為だと思うがねぇ？

まぁ確かにエヴァちゃんに対してアレはやり過ぎたような気もする。それでも後悔はないな！別に殺し合いをしていたわけでもないのだから勝つための手段としてはあれが最良だったはずだ。

俺とエヴァちゃんが本気で全力を出したら［別荘］が過度に放出された魔力で圧力に耐えられずに、下手したら崩壊してしまうかもしれないじゃないか。ウチの［演習場］と違って専用に調整されているわけじゃないんだからな。うん、無理は良くない。

「…はいはい。……痒いところはない？」

「貴様というヤツは…！んっ…、もうちょっと後ろだ」

「……ここ？」

「あぁ、そこ、ぁんっ！お、おいっ、耳は触るなっ！…くすぐったいだろ」

憤懣やる方ないといった感じのエヴァちゃんを宥めながら、彼女の柔らかい絹糸のような髪を優しく丁寧に梳くように洗う。

痒いと言ってきた後頭部をサワサワッと掻くように洗った。それを終えると指で耳の裏をクニクニッと汚れを取るように動かして洗った。

耳を触られてビックリして？いや、くすぐったかったのか。ともかく耳に触られて、驚いたエヴァちゃんから抗議されてしまった。でも、こういうところはキチンとやっておかないとダメだろ？

それにしても今、使っているこのシャンプー、それに置かれているリンスやボディシャンプー。これらには魔法効果が付与されている、のか？魔法術式の構築を見ると…美容効果とか、かな。エヴァちゃんも女の子しているんだなぁ…。

おっ？良く見るとこれら全部、手作りのオリジナルじゃないか…。どおりで嗅いだことのない香りがすると思った。こういうのを見るとますます女の子女の子しているなぁ、と思う。

「はいはい。エヴァちゃんは注文が多いねぇ」

「うるさいっ！こうなったのは誰のせいだと思っている！貴様は黙って私を洗えば良いのだ！！」

「はいはい。ここはどうかなー？」

「ぁんっ……って！だから！ど・こ・を！触っているかーーっ！？！？！？」

どこって……耳に決まっているでしょうが？耳裏は念入りに洗わないとね！エヴァちゃんが悪いんだよ？耳裏を洗おうとしたら頭を

動かして抵抗するんだからな。それじゃキチンと洗えないじゃないか。というわけで…。

「にぱぁ♪エヴァちゃ～ん♪」

「お、おい？葵…？な、何だ？そのワキワキした手はっ！？」

「キレイ、キレイにしようねー♪」

「や、やめっ…。にゃぁぁあーっ！？！？……ぁふ」

ふっふっふっ♪木乃香ちゃんや刹那ちゃんが子供の時にお風呂へ入れていたのは伊達ではないのだよ？俺の“子供手洗いテクニック♪～バージョン３．０～”をここで披露してくれようではないかっ♪

逃げられるとは思わないことだな！くくくっ！

……。

……。

そんなわけで身体を流したあとは湯船に浸かってリラックスするのみなわけだ。エヴァちゃんの手作りシャンプーなどは魔法効果で馴染むような肌触りだった。

こんなに使い易いシャンプーなら今度、俺も作ってみようと思った。上手く出来たら皆にも配ろうかな？皆、女の子だからかお風呂が好きみたいだし、好みに合えば喜んでくれるかもしれない。

「あ〝ーーっ♪イイ湯だーーっ♪温まるなーーっ♪」

「ふふんっ♪どうだ？なかなかのものだろう？」

「ああ…流石はエヴァちゃんだ。確かにこれは［別荘］だなぁ。気持ちいい…♪」

「そうか、そうか！ふはははっ！」

元が戦闘訓練用じゃないからかなぁ。保養所？避暑地？まぁともかく［別荘］とはよく言ったものだ。ウチの［工房］にも保養目的で温泉施設はあるけどこういう西洋風は少ないから新鮮だ。

底の浅い湯船に横になり、身体の力を思いっきり抜くと氷付けにされた身体が芯から温まるのを感じる。お湯の温度も適温で言うことない。ある程度、温まると半身浴に変更だ。……なに？長風呂？バッチ来いですな！風呂好き嘗めんなよ！？

「……はぁ」「……♪」

ふと、横に居るエヴァちゃんを見る。……するとそこには絶世の美女が1人居た！……ちょっ！？なぜにエヴァちゃんは幻術使っているのかっ！？一瞬、見惚れてしまったではないかっ！

これは幼女…これは幼女…これは幼女…これは幼女…！俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…！！！よしっ！！！！！

チラッ…。

「ん？どうした？」

「いや、何でもない…」

「そうか？…ふぅ」

…と、言いつつ隣で同じく湯に浸かる金髪美人さんを見てしまう。エヴァちゃんが将来の姿を幻術で見せていると知っている。それでも本当に勿体無い、と……。いや、この考え事態が“今の”エヴァちゃんを侮辱した考えだな。こればかりは反省だ。

吸血種は、身体的成長は一部の例外（この世界に居るかは知らんが例えばハーフヴァンパイヤなど）を除けば皆無だ。その癖、魔力や身体能力は常軌を逸した高い能力を備えている。身体が成長しないのはその代償と言えるのかもしれない。

誰もが求める高い能力と永遠にも等しい生命。ただ、無理矢理吸血鬼に、それも真祖の吸血鬼（ハイデイライトウォーカー）にされたエヴァちゃんにしてみればいい迷惑だろう。

まぁ、だからと言って下手に慰めなんて口にしても彼女のこれまでの生き様に対する侮辱でしかない。そう考えたから俺は何も言わず、湯に浸かって模擬戦での疲れを癒すことにした。

魔法球内の時間で午後五時過ぎ。半身を湯船に預けて、ここから見える景色は日が暮れて静々と沈もうとしていた。少し、哀しいな、という感傷が心の中を過ぎった気がしたが…気のせいだろう。

……。

……。

お風呂から上がったら食事だ。俺と幻術を解いたエヴァちゃんが上がると食事の用意が既に出来ていた。タイミングがバッチリのところは流石、茶々丸ちゃんとしか言えないね。

手持ち無沙汰なＣＯＳ－ＭＯＳもお手伝いしようとしたがお客様ということでチャチャゼロとお話しして待っていたらしい。軽く何の話題かを聞いたら“効率的な敵の撃滅方法・刀剣版”だったのは笑っていいやら泣いていいやら…。

それで出来た料理を楽しみに食堂へ行くと、これでもかと言うほど高級料理店のような料理が幾つもあった。そのどれもが手抜きなど一切なく、手の込んだ料理だ。うん、素直に美味しそうだと思う。

ただ、残念なのは夕食が和食ではなく肉料理をメインとしたコース料理だったことか。それでも実際に食べてみれば、そんなことは気にならず、とても美味しい料理だったのは嬉しい誤算だ。

「茶々丸ちゃん…」

「…何でしょうか？葵様」

「これ……すごく美味しいねっ♪流石だ！」

「…ハッ、感謝の極み」

料理を絶賛して褒めると傍で給仕していた茶々丸ちゃんが斜めに腰を折り丁寧にお辞儀する。その姿は模範とも言えるほど立派な従者の姿だった。

茶々丸ちゃん…素晴らしい切り替えしだ！そのノリは正直、ウチの家族だけかと思ったのに君もだなんて！ノリのいい家族連中なら納得だけど彼女までそのノリを理解して尚且つ実行してくれるなんで驚きだが同時に嬉しくなる。

因みに、従者らしいと言えばらしいけど、どちらかと言うと執事じゃね？という、どこからかやってくるツッコミは限りなくスルーするので悪しからず…。

「エヴァちゃん…」

「茶々丸は、やらんぞ」

「……まだ言い終わってないのにぃ」

「言わんでもわかるわっ！」

「っ！！な、何だってーっ！？茶々丸ちゃんを嫁に欲しいことがバレていただとぉっ！？」

「嫁っ！？！？料理人としてではなかったのかっ！？！？」

「あれっ！？微妙に認識が食い違っていただとっ！？！？」

エヴァちゃんと俺の認識は確かに茶々丸ちゃんのことだったが重要な部分で認識違いをしていたようだ！まぁ嫁に欲しいとは言い過ぎだったとは思う。いきなり嫁はないよね。うん、ないわー…。

ん？というか、エヴァちゃんはなぜにそこまでオーバーリアクションしてくるのかね？そこまでして茶々丸ちゃんを譲りたくないと

いう感情の表れかな？いや、でも、わかる気がする。

だって、茶々丸ちゃんって何でも出来る有能さを発揮してくれるものね。朝の弱いエヴァちゃんに代わり、朝食の用意もしてくれる。炊事に洗濯と家事は全部過不足なく、こなせるのも大きい。

ウチのＣＯＳ－ＭＯＳはそれ系統のデータはインストールしてないものなぁ。料理データや手順などのデータをインストールしてあげるか、自分でデータを収集するかネット上から情報を攫ってきてダウンロードするしかない。

元が兵器として開発したから生活面のソフトは何も入ってないんだ。これを機に順次、必要と思われるデータをインストールしていこうと思う。……あー、もちろん、これは彼女が同意したらだけどね。

無理強い！ダメ！絶対！

……。

……。

それでまぁ茶々丸ちゃんお手製の美味しい料理も食べ終わり、食後のデザート…ならぬ、お酒を飲んで、まったりとしている。場所は作り物とはいえ見事な星空が見えるテラスだ。

今、ここにはエヴァちゃんと俺の２人きり…。ＣＯＳ－ＭＯＳと茶々丸ちゃん、チャチャゼロの従者組みは気を利かせたわけではないだろうが別の部屋で従者同士仲良く“お・は・な…”、もといお話しているみたいだ。

因みに2人きりとは言ったが一応、陽月を剣状にして背中に装備しているけどね！このまま酔って乱闘とかになったら俺1人では対処できん。それとミリー達も霊体化して待機しているよ。いつ酒乱が降臨するかと思うと不安だから離れたくないとです…。

「まぁ今までの冗談は置いておいて…」

「……本当にアレは冗談だったのか？」

「いや、それはもういいから。……それで少しは満足したか？」

「最後が些かどころか溢れんばかりの不満だが、な。……まぁ、少しは満足した」

俺達はコクコクッとグラスに注がれたワインを飲んで一つ、二つと言葉を重ねる。エヴァちゃんの頬はアルコールのせいか少しだけ赤く上気している。

それにしてもこのワインは飲み易い。俺の好み的には白だが、エヴァちゃんの保有する、この赤はフルーティで喉越しもいい。むー…食後の楽しみに飲んでいたけど、ここまでで実はワインボトルを４本も開けているんだ。

それとな？忘れているかもしれないがエヴァちゃんの身体は子供なんだよ。長年、愛飲してきたことで、お酒への耐性はあるかもしれないが限界はある。だから…泥酔するなら暴れずにコロンと寝てくれることを願うかな。

酒乱が降臨しないように、と真摯に祈ることだけが俺に残された

最後の手段だ…。

「封印されている身だと思いっきり力を解放したくなるものねぇ。……欲求不満なんじゃない？」

「っ！？う、うううるさいっ！この地に封印されて、もう十数年だぞっ！？不満など溜まるに決まっているだろうっ！！」

「あるぇー？何を考えたのかなぁ？俺は封印されていたストレスのことを聞いてるんだけどなぁ？（にやにや）」

「――――っっ！！！うるさぁぁぁいっ！！！」

「ぐぼほぉーっ！？！？！？」

い、いいパンチ…持って、いるじゃない、かぁぁ…。

はぁ、それにしても…あぁ、慣れない下ネタじみたことなんて言うんじゃなかった…。と、ノックダウンされて床に倒れながら思った。脇腹が…レバーが…痛い…のよ…。

女神（幼女）によって常軌を逸した丈夫な身体に創り変えられたとしてもエヴァちゃんの打撃はちょっと辛い…。この［別荘］内でエヴァちゃんをからかうのはもっと細心の注意を払うべきということを学んだ瞬間だった。

今後、エヴァちゃんをからかう時は表の世界でからかうことにしよう！うん！……主に俺の命の安全のためにっ！

「おいっ！まだ寝るなっ！葵っ！」

「ぐふっ…寝てるわけじゃ…ない…うぅぅ」

「うるさいっ！まだまだ飲むぞーっ！ふはははははっ！」

ここに酒乱が降臨するまで、あと少し……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第五十七話「模擬戦と決着と交流？と」（後書き）

うぅん…？モエ尽きたぜ…。色々な意味でな！
今回はこれしか言うことはない！

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

ＰＳ．突然ですが新番組の”ＩＳ（インフィニット・ストラトス）”があります。
誰か、これで二次を書いている、既にある、これから書こうとしている、などなど！
こういうのは無いッスかね？

第五十八話「白と黒と反省？と」（前書き）

今回はハオとユエが中心かな、と思います。
では！続き！

第五十八話「白と黒と反省？と」

――付属魔法球［演習場］…。

Ｓｉｄｅ　葵

今日も比較的平和な…うん、平和な日だった。たぶん。

木乃香ちゃんがくろーいオーラを纏ったりとかね。あと刹那ちゃんに木乃香ちゃんの傍で護衛するようにそれとなく説得したり…まぁ、この提案は頑固ちゃんの刹那ちゃんには受け入れてもらえなかったけどな。

オマケで日常の裏ではウチの周辺を嗅ぎ回るウルサイのが居たりしたけど二課と三課の合同チームが着々と対処してくれているから心配はしていない。一応、表面的には平和だから問題無いだろう。

……。

うん、今日もいつも通り何事もなく日が沈み晩御飯の時間になったんだ。それも月に数回の大食事会を［工房］内に併設されている家族用の宿舎（別邸と言うか屋敷？）に用意した。

そう。用意が終わってあとは家族全員が集まれば開催だったんだ。それなのに来ていないのが２人も居たんだよ？でな？その２人ってのは意外かもしれないけどハオとユエなんだ。

２人の今日の予定は部隊員の訓練だったから［演習場］に居たのは知っている。でも訓練が終わって皆は戻ってきたのに担当教官のハオとユエだけは姿を見せない。

それで今、俺は２人に何かあったのかと心配して様子を見に［演習場］へ移動している。あ、途中でミリー達精霊３人娘も彼女達を心配して同行してくれた。

それでまぁ現場となる［演習場］に繋がる接続魔方陣を通り抜けた先では……模擬戦すら生温い情景が繰り広げられていた。どっかん、どっかんいってる辺りからは爆煙と砂埃の舞う中で白と黒の女性２人が激闘を演じている。

既に大地は抉れて大小のクレーターになっていたり、何かに切り裂かれたよう…文字通り大地が裂けて巨大な地割れとなっている。今も爆心地となっている２人の周りではクレーター、地割れ、堀のようなものを増産している。

その他散々な様相を表している［演習場］の大地には白と黒の剣が無数に突き刺さっていて、その有様に一瞬だけ過去の古戦場にあった、剣を突き刺しただけの簡易墓標を連想した。だがそれも一瞬だ。事態把握のために思考を切り替えた。

連立しているこれらの剣はハオとユエのモノに間違いないと確信している。確信できるが故に疑問が残る。この戦争の痕跡からハオとユエが戦略規模で戦闘をしている、と考えられるのだ。

うん、断言する、目の前で繰り広げられているこれは戦闘ではない“戦争”だ…。一体、２人はなぜにここまで濃厚な密度の戦争を繰り広げているのだろうか？

……もしかして、姉妹のケンカか？え？あの２人が？仲のいいあの２人が？いやいやいや！ないない！仲違いするようなことやストレスを溜めるようなことは……あ？この前の模擬戦か？いや…でも…あの時は皆、納得してくれたよな？

「主様ぁ、一先ず２人を止めませんかぁ？」

「ミリーの言うとおりです。このままでは［演習場］が崩壊しかねませぬ」

「それは…マズイなぁ」

むぅ…設計段階でミスしたのかな？造った当時は自分達の実力的に耐久度や強度なども十分考慮したんだけど。造ったのが６００年以上も前だからなぁ。これも老朽化の類に入るのかね？むー…。

一応、中心核となる魔法球［工房］や隣接する付属魔法球群を強化、調整、区画整理し、機能更新（バージョンアップ）している。やはり各種生産を月面基地に頼りきるのはイカンものね。総生産量では負けるけど…。

……ぁ。

ふと、思い出した…。［演習場］の機能更新が遅れているんだった、と…。生産性を重視すると施設の中で一番優先順位が下だったんだよなぁ。何もとは言わないけど「演習場」は生み出すものが無いし。

あー…そうだ。機械人形（マキナ・マータ）の生産で戦力増強したけど純粋に兵力の割合が取れていないんだよなぁ。司令部を代表して増員の陳情書が来ていたから精魔奇兵も増員しようかな？

……今の４倍くらい、とか。

いやいや！今の拡張された［工房］なら最大千単位で数えたとして……１万ちょいはイケル、か？むー…ダメだな。収容人数や管理に問題ないけど一気に増やすと兵の質が落ちること確実だ。

少しずつだ。そう、少しずつ増やしていこう。とりあえず、４倍…うん、６倍で。くくくっ！

こほんっ。んんっ。

それはともかくハオとユエの２人だ。ここから見る限りでも激戦を繰り広げているのがわかる。あ……崖が斬れた。あっその山を割ったらっ…！こ、この［演習場］のシンボルたる中央山脈を真っ二つにしやがった…。

頂上からの眺めはお気に入りだったのに…ｏｒｚ

ん？でも、今は学園側と直接接触するから２人には保有魔力やその他の隠蔽用リミッターを掛けていたはずなんだけど…。この世界なら余程の事が無い限りはナギやジャックくらいの氣や魔力保有量があれば問題ないだろう。

「んー…。ねー？あの２人ー、リミッター外れてないかなー？」

「「「……えっ？」」」

え？何、ソレ？２人はマジメに全力全壊ですか？フルバーストですか！？全弾発射的な何かですか！？…マズクね？崩壊したら中に運び込んだ土砂などの質量が表に溢れ出すことに…。

「フ、止まれッ（フリーズッ）！！！！」

声に魔力を乗せて全力で止めに入った俺は悪くない。例えそれで怒鳴りつけた俺に２人が顔面蒼白になったとしても……。ごめん、そこまで怯えられるとガラスのハートが砕けそうだった。このことは秘密で…。

……。

……。

…。

一応、無事に事を収められた。一喝して止めた直後にハオとユエが抱き合ってぷるぷると震えて怯えているところを見てゾクゾクッとした自分に死にそうなほど鬱になったけどね…。

で、［演習場］はアレだけの被害にあったにもかかわらず、形状記憶の土壌と環境維持用ナノマシンが最大稼動しているのでまだ修復可能範囲内だったから問題無かった。ただ、実時間で７時間、つまり７日間は使用を控えないといけないがな。

「で？何が原因でこうなったのさ？」

「あぅ…」「はぅ…」

あぅ、はぅじゃないよ。可愛いじゃないか。…思わず、このままイジメたくなったほどだ。……いや、すまん、今の無しで。家族相手にイジメるのは、やっぱりイカンよな、うん、イカンよ。

しかし、この2人は何で説明することを躊躇しているのか？普段、キリッとしている女性が、わたわたとしているのはギャップがあって可愛いなぁとは思うけど…。ん？これは家族の贔屓目だろうか？

何にしても、どうして、これだけの被害を［演習場］に出したのか、ということについてはキチンと説明してもらわないとならない。

相手の理由も聞かずに、ただ一方的に怒るのは怒鳴るだけの馬鹿と変わらない。物事には大なり小なり何かしらの理由があるのだからな。叱るかどうかは理由を話してもらって理解してから…全ての話しはそれから、だ。

「まさか、黙秘しようなんて……」

「「そのようなことは決して！！」」

「……んー、それでどうしたの？」

「はっ、実は、ですな…」「真に恥ずかしながら…」

ハオとユエが説明してくれる、その理由は…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

回想…。

――付属魔法球［演習場］…。

Ｓｉｄｅ　？？？

［演習場］…。ここは魔法球［工房］に隣接された付属魔法球だ。［演習場］は兎角広大な空間と山岳、平野、草原、森林、砂漠、海、川、などを代表に様々な地形がある。この他にも地形はあるが今は省略しよう。

そして何よりも特筆すべきことは［演習場］そのものの頑丈さだ。［演習場］の使用目的が名前の通り“模擬戦闘や模擬戦争など様々な演習を行なう場所”なのだ。よって格別の頑丈さを当時の葵は設計した。

そんな［演習場］の中で特に広大な平野エリア。ここ平野エリアは岩や木などの遮蔽物になりそうなものは何も無いところだ。そこを走る一団がある。

走る…両足を素早く動かして移動すること。ここで“走る”と表現しているが、果たして、これは“走る”と言うのだろうか？

前者は、ある者は風のように…訂正、言葉通り風に“なって”目にも留まらぬ速さで走る。ある者は炎に“なって”ロケット噴射し

て地面スレスレを跳ぶように駆ける。ある者は水に“なって”氾濫した川のように激流となり全てを飲み込みながら進む。

後者は、ある者は影と同化して周りを移動する者の影から影へ移動する。ある者は身体を霧にして風に巻き込まれながらも方向性を持って移動する。ある者はただ只管、短距離転移を繰り返して移動している。

これらは一般に定義される“走る”という単語が当て嵌まるのだろうか？……いや、どうでもいいことだった。この疑問は置いておこう。そう、永遠に…。

前者は精霊の、後者は悪魔の精魔奇兵だ。百数人で走る彼女達は皆、葵の大事な家族である。

「たかが１万ｋｍを走るのに何をノロノロとしておるかっ！！そんなことで我が君の家臣、いや！家族を名乗れると思っておるのかっ！？気合を入れろっ！気合をっ！！」

「「「「「イエス・マム！」」」」」

肉体的、精神的に強靭な彼女達は現在、定期的に行なわれる訓練中。今の指導教官は白と黒の剣姫の片割れである白の剣姫ハオだ。訓練を午前はユエが担当し午後はハオが担当する。今は仕上げのランニングの最中だ。

精魔奇兵達の後ろから追い立てるハオも（斬り裂いた空間から空間へ移動しているが…）走っている。その彼女の背後には空中に無数の白剣を顕現、展開し精魔奇兵達を威嚇している。今ここで脱落すれば即座に串刺しになるのは決定だろう。

「声が小さいッ！！！貴様らは声も出ない赤ん坊、いや、赤ん坊のほうが泣くだけ声が出ているな！！そうなると貴様らはただの蛆虫かっ！？違うと言うならもっと声を出せッ！！！！」

「「「「「――――ッ！！イエス・マムッ！！！」」」」」

ハオの叱責と同時に数振りの白剣が彼女達の走る最後尾に着弾した。もちろん、身体に着弾させたのではなく地面に…それも極々至近に、だ…。これにより声も出るようになった。心なしか走る速度も倍近くになったようにも思える。

不運なことに極至近で見た者は顔面蒼白だ。今のは威嚇が目的だからギリギリ外したのだ。若干名、脹脛の皮膚が薄っすらと斬れているように見えるがソレは錯覚だ。赤い液体が見えるのも同様に錯覚だ。

「最初から声を出さないかッ！！1人でも脱落した場合は訓練、いや地獄の特訓を追加だ！！それがイヤなら走れッ！さぁ、力の限り走れッ！！死にたくなければ走れッ！！！」

「「「「「イエス・マムッ！！！――――ッ！！！！！！」」」」」

理不尽だ…。言われたように声を張り上げているのに叱責された、と精魔奇兵達になって数十年の若い者は思った。百数十年の古参の者は文句など言ってない。絶対に言えない…。

最も教官達からしてみれば言われる前にやらないか！という思いがあるのだが…。教官達の考えを知る者は葵達教官組みを除けばアイリ達親衛隊の古参兵と百年以上の実績を持つ精魔奇兵の一部の者

だろう。

そして話しは戻るが日常ならともかく訓練中に文句や不平を言えば地獄という名の天国が待っている。その日の担当教官による“スペシャルな個人レッスン♪”が訓練終了後に待っているのだ…。

そのことを大半の者が勇敢なことに実際に体験しているから知っている。だから声に出して文句は言わない。言いたくもない。言ったら色々な意味で最期だから…。

このことに関連することを皆のご主人様である葵に愚痴を漏らしているところを見付かり知られてもアウトなのは勘弁してくれ、というのが皆の共通認識なのは割とどうでもいい話し、か…。

故に彼女達は走るのだ。逆らうことなく最初の倍速だったのを更に倍にして今、走るのだ。一刻でも早くこの命を賭けたデスランニングを終わらせるために声無き悲鳴を上げて全力で走るのだ。

そう、デスランニングだ。この理不尽なランニングも最後のラストスパートだ。気付けば残るは２００ｋｍ余りだ。一日を通した訓練ももう終わる。これで終わるのだ。彼女達の目に希望の光が灯った。

ああ、今も後方から白の剣雨が追いかけてくる。一歩でも足を止めれば即座にアイアンメイデンよろしく無様で血みどろなオブジェの完成だ。ハオの絶妙な力加減で急所は外されているため僅かな出血と苦痛だけが目立つことだろう。

現在、走る彼女達の思うことは唯一つだろう。それは「早く終わってくれ…」という生命の危機を感じた率直なものだった。

……。

……。

「よしっ！これにて訓練を終了する！解散ッ！！」

「「「「「ありがとうございましたっ！！！」」」」」

訓練の終了を宣言したハオと終わりの礼をする精魔奇兵達。最後まで声を張り上げるのは、それが原因でハオの“スペシャルな個人レッスン♪”を全力で回避するためだ。どんなに疲れていてもこれだけはやるのだ。

素晴らしいことに最後のランニングも脱落者は無く、無事に予定の訓練を終えることができた。担当教官のスパルタを耐え切った彼女達の喜びは一塩だろう。何と言っても身体や精神に欠損無く五体満足なのだから…。

「ふむ…どうしたのだ？今日は随分と荒れていたではないか」

「ふんっ！そのようなことはっ…！」

解散していく皆を見て午前の担当教官ユエが姉のハオに声を掛けた。ユエの表情に変化は無いが目と言葉から姉を心配しているのが読み取れる。

ユエが担当する午前は“ただの”地獄訓練だったが午後のハオの訓練は“スパルタな”地獄訓練だった。最低限の加減はされていたが荒れていると取られても文句は言えないだろう指導だったのだ。

「姉上、姉妹である私をナメルな。それにあのような指導をしていたならば荒れていると認めたも同然ではないか」

「ぐっ…！むぅ…」

心配されたハオは内心を隠して何でもないと斬り捨てようとしたが台詞の途中で割り込んだユエに言葉を詰まらせる結果となった。

「まさかとは思うが…先日の吸血幼女との模擬戦のことか？もし、そうならば気にすることはあるまい。我が君もただの児戯であると申していたではないか」

ハオが荒れると思われる最近の出来事を脳裏に思い浮かべ、姉を宥めるようにユエは口にした。一方、ハオの顔は苦虫を噛み潰したような渋面を作り上げていた。ユエの予想通り先日行なわれた模擬戦がネックだったようだ。

「むぅ…だが、な？それでも我が君が傷付く姿など見たくないのだ…。いや、もちろん、戦場に立たれる我が君のお姿は凛々しくも頼もしいものがある。そのお姿を見るたびにまた私は惚れ直してしま…って何を言わせるか！？」

凛々しかったのは最初だけで途中からはただの惚気に聞こえてしまったのは気のせいではない。それも言っている本人が自爆している。葵ファミリーでなければ聞いているほうも聞かせているほうも気恥ずかしい思いをすること請け合いだ。

「勝手に自爆しただけではないか……。まぁ良い。姉上は傷付く姿がイヤと言うが実際、傷など一つもなかったではないか。我が君の

何が不満だと言…」

「我が君に不満など無い！！…が！！あの吸血幼女は事もあろうに我が君を“氷付け”になどしてくれたのだぞ！？例え一時とはいえ我が君を行動不能にされたのは……屈辱の極みだッ！！」

ユエの最後のほうの言葉、それだけは最後まで言わせまいとハオは自らの主に不満を持つなどありえない！と言葉と態度にして表す。それはもう自信満々である。不満があるヤツは出て来い！矯正してやる！という意気込みを感じるほどだ。

ここで今更だが敢えて言おう。

基本的に葵ファミリーはご主人様の葵を溺愛している。それは崇拝的なまでに敬愛し、絶対の忠誠を示し、葵ただ一人に魂の一片まで献身を尽くす。

その想いから彼女達全員が葵に関することで天然の自己暗示となり思考能力、純粋魔力などの身体スペックを爆発的な勢いで上昇させ、尚且つ性能向上を引き起こすことになったは嬉しい誤算だったのか…。

これが精霊（悪魔）契約による魔法の副次効果だったり、後天的な洗脳処置だったのなら納得できるだろう。だが違う。彼女達の献身は、想いは彼女達個人の“願い”から生み出され、心の底から湧き出ているのだ。

その願いとは“私は貴方が大好きです…”という純粋な想い。不

老とはいえ人間の葵に恋した精霊と悪魔、九十九神の恋心から生じた唯一つの単純故の強い想いなのだ。それ故に最強であり強者なり。

恋する乙女は地球すら砕くのだ！

あれ？何か…違う？

閑話休題…。

今度はユエが渋面を表した。少なからずハオの言葉に感じ入るものがあるのだ。

あの時、葵が氷付けにされる瞬間「怒っちゃダメだからね」と念話で言われたからあの場に居た皆がブチキレることだけは無かった。勿論、葵は帰宅後に彼女達の精神のアフターケアをしたので気分は持ち直している。

今のハオが荒れているのは訓練をしていてそこから先日の模擬戦を連想してイライラしてしまったのだ。その八つ当たりというかトバッチリを受けた精魔奇兵の彼女達は堪ったものではない。

「それは…。むぅ、私も思うことが無い、と言えば嘘になるが…。しかし、だな？模擬戦という児戯ゆえ我が君は吾ら全員のリミッターを外されることはなかった。一々遊びに目くじらを立てていたら切りが無いと思うのだが」

「むっ！……（ボソッ）後日、闇討ちに行こうと言っていた者とは思えぬ発言だな」

「なっ！何を…まさか！？！？姉上は聞いておられたのかっ！？！？」

「ふふんっ♪私だけではない。我が君はもちろん、精霊の3人娘もシッカリと聞いておったわ」

「あぅ！？あぅあぅ！！他の者はともかく、我が君に…聞かれた！？はっ！だから今朝から私を見る時、矢鱈と優しい目をされておられたのか！？くぅぅぅ…！」

今、明かされる衝撃の事実！“ユエお姉さんの闇討ち計画♪”も驚きだがそれを皆だけではなく敬愛する葵にまで知られていた！動揺が激しいユエの動きがかくかくとしているぞ！

暴露したハオは楽しそうにニヤニヤと笑っている！反対にユエはあぅあぅと混乱している！？しかも、関連して思い当たることがあるのか混乱に拍車をかけているようだ！

ただ…ここで暗い思考を知られたことについて後悔よりも羞恥が先に立つのはどういうことだろうか？要約すると「闇討ち計画を知られちゃった♪恥ずかしいな♪」というものだ。なぜに恥ずかしがるか…。

「大変だな、ユエよ。これでお前は我が君に“怖い人認定”されたぞ？…ふふっ、ふふふ♪」

「わ、笑うにゃーーっ！！もとい！笑うなっ！！いくら姉上といえどもそれ以上っ…！！」

あ、噛んだ…。ユエの羞恥心が限界を超えたようだ。葵が今のユエの姿を見たなら無条件で可愛がりこれでもかと言うほど愛でることだろう。

それはともかくとしてハオの言う“怖い人認定”とは読んで字の如く文字通りの意味だ。自称臆病者の葵が個人的に情報収集して書き記したとされる“恐怖者のブラックリスト”のことだ。

これに認定されると敵対とまでは言わないが、それに近い厳戒態勢を葵は身構えるのだ。誰だって怖い人とは係わり合いになりたくない。つまりは葵個人による要注意人物のリストだったりする。

因みに葵ファミリーが記載されることは無条件でありえないのでハオの言うことは冗談だったのだが、混乱して羞恥心で頭に血が上った今のユエにそれがわかるはずも無いことだった。

「ほぅ…私と戦(や)る、と？ふむ…良いだろう。この憤りを発散するには少々足りなかったところだ。……相手になろうではないか！！」

「フフフッ！姉上のその余裕を打ち砕いてご覧に入れましょう！！」

事態は険悪だ…。こうして表面的には冷静に会話しているが両者から溢れ出る濃密なまでの魔力が空間に集結し、数百数千数万の白と黒の剣が具現化される。

「「いざッ！尋常に…」」

冷静に好戦的なハオは意識して自らの“剣軍”を展開していく。逆に混乱と羞恥心で頭が回らない今のユエは無意識に“剣軍”を展開した。

ハオの目には冷静な中に熱い好戦的な意思が宿り、ユエの目には何度も言うが混乱を羞恥心からグルングルンしている。前者はともかく後者はどこかコワイ部分が見えるのは気のせいだろうか？

「「勝負ッ！！！」」

そして“戦闘”と言うには生易しい、剣の軍団を率いた両者による“戦争”が今、始まった…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

回想完…。

――付属魔法球［演習場］…。

Ｓｉｄｅ　葵

あ、呆れて何も言えない…。目の前に正座して語られた理由のしょーもなさに何も言えない…。いや、一番確認したかったのは“悪意があったか？”についてなんだが両者に悪気があったわけじゃないようだからどうでもいいんだけどな。

あー…今の［演習場］でそんな無茶をするなんて…。あのまま２人が戦争を続行していたら崩壊した［演習場］から内包された大量の物質が外に溢れ出ることになるところだった。何百何千万という

途方も無い量が、だ。

はぁ、激しい戦争を繰り広げているからどれほど大事な理由だったのか、と思えば…。はぁ…。

もう一度言うけど［工房］を始め、各種付属魔法球が設計されて６００年以上が経つのよ。俺の内包する魔力も増えに増えているし、それは日々成長する家族達にも当て嵌まる。それぞれに実力を上げているんだ。

［演習場］を例に言えば現在は皆の実力が上昇したことにより耐久値に些か問題が出始めていた。俺を筆頭に陽月姉妹、精霊３人娘、悪魔３人娘などの上位者１人２人なら魔力、氣を解放しても“まだ”、“ギリギリ”耐えられる。

しかし、それら上位者が集団で力を全力全壊…もとい全力全開で解放したとなると無理だ。耐えられない。無茶では無い、無理だ。現在の［演習場］の設計上、耐久度的にも強度的にも限界を当に超えている。

そのために暫定的な処置だが俺は応急処置として形状記憶土壌や環境維持用ナノマシンを設置したことで自動修復機能を付加している。つまり、この処置は“壊れる傍から修復すればいいじゃない？”という苦し紛れのものだ。

この事態を重く見た俺は既に対処を始めていた。［演習場］だけではなく魔法球群の各種施設の改良、改善は実時間の４，５年前から徐々にではあるが行なわれている。あと残るは［演習場］だけだ

ったりするのは…まぁお約束と言うか何と言うか…。

閑話休題…。

もう…どうしようか？工事作業の優先順位が低かったとはいえここまで［演習場］に被害を出すとはなぁ。自動修復は始まっているから損失は殆どないからその辺りの責任とかは気にしないけど…。

はぁ…これの原因と言うか理由が、なぁ…。エヴァちゃんとの模擬戦後のアフターケアが十分ではなかったようだ。ミリー達は比較的温厚だからそれほどでもないけどハオ達は心の底で不満が燻っていたのか。

家族に心配され思われるのは嬉しいけど、少しくすぐったいし照れる思いがある。嬉しいけどね！

ていうかハオよ。なぜに君は俺のブラックリストのことを知っているのかね？誰にも見せたことないのに。……！！もしかしてアンか！？いや、ラミエルさんかもしれない！やはり電子情報で一括管理しているのは失敗だったか…。

まぁそのことはもういいから、移動するよ。今日は大食事会だからね。急がないと皆、待ち草臥れているだろうしね。はいはい、ハオとユエも立って立って。

「あ、あの…？我が君？…その…お、怒っておられますか？」

「怒っていないよ。…ただね？呆れているの」

うん、家族以外なら容赦しないけど身内に対してはどうも怒りが長続きしないんだ。この辺りが甘いと言われる所以なんだろうけど直そうとは思いませんな！家族を溺愛して何が悪いのか！？いや！悪くない！反語！！

「あぅ…。申し訳もありませぬ」

「ふふんっ」

「こら？そこで澄ましているハオもだぞ」

「はぅ…。申し訳ありませぬ」

はーい、ちゃっちゃと歩く歩く。皆、首を長ぁくして待っているんだからね。予定外のことがあって俺もいい加減にお腹が空いているんだ。それに最近は忙しかったし家族との触れ合いという癒しがほしいんだよ…。

「でも2人の思い、私もわかりますわぁ。氷なら属性違いながらも私の領分ですものぉ。お傍で待機していましたのにぃ、主様は障壁の補助くらいしか手を出させてくれなかったですものぉ。ねぇ？」

「いや、それは、だな…。何と言うか…」

接続魔方陣を抜けた途端にミリーが言い出した。むむむ？「ねぇ？」と聞かれても答えようがないんですけど…。これは遠回しに叱られているのだろうか？

「うむ、あまり心配を掛けないでほしいものです。“えいえんのひ

ょうが”を敢えて受けたようですが、必要は無かったのでは？昔はともかく今では複数の精霊の加護と主自身の膨れ上がった魔力量でレジストされるでしょうに」

「ぐむっ…。だがらアレはあまり手札を曝さぬように、と…」

えー…。今度はマリーですか…。いや、心配掛けたのことは反省もしているよ？しているけど…氷付けにされた時は強引に叩き割られない限りは死ぬようなことにはならないだろうと確信はしていたんだよ。

あの時は色々とテンションがおかしくて…色々と箍が外れていただけなんだ。ナノマシンとアドレナリンのせいなんだよぉ。

あ、そういえばあの時、久しく使うことのなかった始動キーを用いた魔法を使ったなぁ。この世界に落とされた最初の百数十年は使用していたから案外忘れていないものだなぁ、と今は思う。

「フランベルジュ出したじゃないー？あるじはー、もっとウーリ達を頼ってもいいと思うなー。氷付けにされた時も始めから属性魔法の擬似無効（軽減）を展開してくれれば皆は何も言わないよー？」

「む？むむむっ。…むぅ、すまなかったです」

むぅ、皆がくすくす笑っている。こら、ミリーはなぜに頭を撫でてくるか？そんなに綺麗な笑顔だと安心しちゃうだろうが。ん？マリーはなぜに苦笑しながら肩に手を置くか？表情から気遣いが見えるから払うこともできないだろうに。

何気に止めを刺してきたウーリは可愛らしく小さな欠伸をして眠

そうにしている。ちくせう、贔屓目に見ても可愛いじゃないか。うん、お兄さん何でも許しちゃいそうだ。

あ？こらこら？ハオ達も何を苦笑しながらも俺が悪いように見てくるか。…え？なに？吸血幼女を討って来る？ダメだって！やめなさい！ダメだから！突然何を言うのかな！？俺は友としてなら付き合っていこうと思っているんだから！

むぉ？そ、そんな上目遣いで「ダメ…？」って可愛らしくお願いされても……ダメだからな！そ、そんな、ふ、２人でお願いされてたら……ダ、ダメ、だよ。うん、ダメ。いったん落ち着こう？な？

綺麗なおねーさん達が可愛らしくお願いする姿にギャップ萌えたではないか…。思わずいいよって言ってしまいそうだった。あ、危なかった…。ふぅ、エヴァちゃん…俺、頑張ったよ。

……。

そのあとは少し遅れたけど無事に大食事会は行なわれた。途中でお酒が振舞われ始めたら食事会の最後のほうは“大宴会だよ！全員集合！”に企画が変更されたのはまた別の話し、だな…。

［演習場］の強化改良、改善、区画整理……承認。精魔奇兵の増員要請……承認。

Side out 葵

第五十八話「白と黒と反省？と」（後書き）

おかしい…。戦力の増員、だと…？そんな予定は毛先程もなかったのに…！？

最後のはともかく、ハオとユエのやり取りでしたねー。

今話は前話で葵が氷付けにされた時の疑問を解消できれば、と作者は考えたとです。

無理矢理だけどね！？有耶無耶にする気満々ですけどね！

あははははははーっ…。

むー…。誤魔化しとしてお詫びではないですが…。

だれだれを中心にした話しが読みたいなどの要望があれば感想に添付してくださいね。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

番外編「お菓子と抹茶チョコと鼻血と」（前書き）

時期は外してしまったけど一度は番外編をやりたかった…！
ただし！この番外編は本編とは何の関係もありません！
そこの辺りをご理解下さい！
ではどうぞ！

番外編「お菓子と抹茶チョコと鼻血と」

――？？？…。

Ｓｉｄｅ　葵

「何だ？これ…」

朝、起きると枕元に小さな箱があった。

「これは……抹茶チョコ？」

箱を開けて中を確かめると一つの抹茶チョコが入っていた。

「んー…一体、誰だろう？」

誰が枕元に置いていったのだろうか？昨日、寝る前にはこんなのはなかったはずだ。つまり眠ってから、ということになるが…。ここまで接近されても気付かなかった？余程、信頼している人か？妥当に考えるなら家族の誰かだが…。

「…閣下、おはようございます。アイリスです。起きておられますか？」

「ん、起きてるよ。鍵は開いているから、どうぞ」

まぁ貰ったものだ。気にすることでもあるまいさ。それにまだ食

べてないけど見た目はとても美味しそうだしね。

「失礼します…。閣下？それは…」

「んぁ？ああ、抹茶チョコだ。朝、起きたら枕元に置かれていたんだよね。――うん、なかなか美味しいよ？」

一齧りしたけど…うん。予想通り、抹茶の香りとチョコの甘さがバランスを取れていて、とても美味しいものだった。

「ぁ、あぁぁ！？いけません！！もし毒が！？閣下を狙った刺客のものかもしれません！！ペッ、してください！！ペッ！」

「いや、そんな大げさな。たかが毒くらいで…。それに口に入れた食べ物を吐き出すのは信条に反するから却下…」

「な、ならば！こ、こここれもお、おおおお食べ下さい！！！そうすれば完璧ですから！！」

食べ物を粗末にしないのは俺の信条だ。そのことは家族の誰もが知っている。それなのにアイリは吐き出せと言う。こんなに美味しいのになぜだろう？それにアイリの取り出したものも……チョコレート？

「……完璧って何よ？いや、食べるけどさ」

「さ、さぁ！一気に一口で！！さぁ！さぁ！！さぁ！！！」

「な、何か怖いよ？一体、何が…」

掌くらいの大きさを一気に食べるのは難しいかなぁ、と思うんだけど…。それよりもアイリのこの気迫は…何？食べさせることになぜにムキになるか…、と考えていたらまたもや乱入者が来た。

「葵ちゃん、居るのーっ！？――――はっ！？やっぱりアイリちゃんここに居た！！抜け駆けは無しじゃなかったの！？」

「そうですわ！！昨夜はわたくしが今日のために夜這いを掛けようとしたところを止めてくれやがりましたし！！！」

「リチラちゃん！そんなことをしようとしてたの！？」

「クッ！邪魔が入ったか…！！」

じゃあ、この抹茶チョコはリチラか？…いや、でも、阻止されたって言ってるし、違うか…。それよりもリチラはまだ添い寝しないと1人で寝られないのか？意外と子供なのかな？何はともあれ、お腹、空いたなぁ…。

「……まぁ何でもいいけど俺は朝ご飯、食べてくるね。じゃーねー」

「あっ！？」「えっ！？」「そっ！？」

……。

……。

お腹が空いたので3人を置いて一階の食堂に来ました！今日の朝ご飯は何じゃろな～♪

「皆、おはよう。わぁ♪寒ブリの塩焼きか♪今朝も美味しそうだね」

「おはようございますぅ♪ふふふ♪さぁ冷めない内にお食べ下さいなぁ。今日は特別にチョコレートケーキのデザートもありますよぉ♪」

「寒ブリの塩焼きのあとにチョコケーキ…？……まぁいっか。いただきます」

「ふふふ♪召し上がれぇ♪」

塩焼きの魚を食べたあとにチョコケーキはどうかと思うけど今はとりあえずこの空腹を満たしたい。もぐもぐっ…。うん美味しい♪

……。

けふっ。お腹が空いているとはいえ朝からお代わり3杯したのは少し食べ過ぎたかもしれない。うん、ミリーのご飯が美味しいのが悪いんだ。毎度お世話になっています♪

「…ふぅ、ご馳走さま。美味しかったよ、ミリー」

「はぁい♪デザートですよぉ♪」

「ああ…うん。いただき…」

せっかく出されたものだ。それでいざ食べようとしたら横から掻っ攫われた。

「ちょーっと待ったー！――――はぐっ！んぐんぐっ、もきゅもきゅ、

んぐっ！…はふぅ」

「あ？あぁぁぁあぁぁぁあああっ！？！？ウーリちゃんヒドイわぁ…」

ウーリ…。そんなに欲しかったなら言えばよかったのに…。ほら？見ろ。突然のことにミリーが慌てているじゃないか。

「良くやった！ウーリ！ささ！主！ケーキなどという男性には重いものではなく、こちらの一口チョコなどをお食べ下さい！！」

「え？あ？はぁ…。これを食べれば、いいのな？……ん？これってもしかしたら、手作り？」

マリー…。確かに男にとって朝からケーキは重い。だがな？それでもマリーが取り出したものはチョコじゃないか…。抹茶チョコ食べたばかりだし、今は朝ご飯も食べ過ぎて少し苦しいんだよ。出されたものだから食べるけどさ…。

「はっ！私とウーリの合作にございます！人の世では今日は特別な日だと聞き及びましたので！」

「そうなの？それじゃ一つ…」

「むっ！――――ぱくっ！ひょいっ！ぱくっ！ひょいっ！ぱくっ！ひょいっ！ぱくっ！ひょいっ！ぱくっ！ひょいっ！ぱくっ！ひょいっ！ぱくっ！」

「あーーーっ！？！？ミリー！何をしているのか！！お！？お、ぉおぉぉぅ…。もう…一つも、ない、なんて…」

「ミリーはー、大人気ないと思うなー…。ウーリ、ションボリだよー…」

「むぐむぐっ、最初に邪魔したのはぁ、もきゅもきゅ、貴女達でしょぉ？ごくんっ、オアイコよぉ…うぅぅ！」

むー？とりあえず、これは俺の食べるものがなくなったということだろうか？それにしても女の子は甘いものが好きだねぇ。俺も仕事柄、お菓子は作るけど食べるのは二の次だからなぁ。

「……またか。何か知らないけど出かけてくるね。じゃーねー」

「なっ！？」「ちょっ！？」「いっ！？」

色々と食べ過ぎたので少し散歩をしに出かけます。朝の空気が澄んでいて気持ちいいなぁ…♪

……。

……。

とりあえず、世界樹方面に向けて散歩を開始。適当にどこかで折り返して帰るとしよう。散歩自体が腹ごなしみたいなものだし。

「んーっ！…はふぅ。朝の散歩は気持ちいいなぁ」

む？あそこに居るのは…。

「あっ、葵兄さまやー、おはよー♪」

「え゛っ！葵さん！？」

「木乃香ちゃん、おはよう♪…明日菜は随分なご挨拶じゃないか。…ええ？」

「あは、あははははっ。……ごめんなさい」

うん、素直に謝ることが出来る人はそれを誇っていいとお兄さんは思うぞ。今度はキチンと挨拶からはじめような？

「そうや！葵兄さま、あの今日は特別な日やろ？やから…んー！これ♪」

「あ、それじゃあたしも、これあげるわね。はい！」

「は？あ、ああ。ありがとう」

「うん♪ほなな！んふふ♪帰ったら直ぐに食べてやー♪」

「あ、待ってよ！じゃーね、葵さん！ちょっと！このか！」

２人から小さな箱に入ったチョコを貰った。むー…腹ごなしに散歩している人間に、更に食べ物を渡してくるのはどうかと思うのは俺だけか…？

……。

２人の背中が見えなくなるまで見送った。目の届く位置に居る限り変な人に絡まれたら助けられるようにという配慮だったけど、心

配は杞憂だったらしい。――――ん？この気配は…？

「くくくっ、２人とも元気だなぁ。……で？そこのストーカー娘は何をしとるのか？」

「ストーカーではありませんっ！！こほんっ、おはようございます、葵さん。――――……（じぃぃぃぃぃ）」

「……（自覚が無いとは…）。…はい、おはよう。ところで何をそんなに見とるのかね？君は…」

「えっ？いえいえいえ！何も見ていませんよ！？お嬢様の手作りチョコなんか見ていませんとも！？ええ！！そもそもなぜ葵さんがそのように思ったのかがナゾです！！ええ！ナゾですとも！！それではまるで私がお嬢様コレクター、ごほっごほっ！見守っているだけです！そう！私はお嬢様を陰から見守っているのです！！」

「――――……あー、とりあえず、だ。刹那ちゃん、落ち着こう？な？木乃香ちゃんから貰った、これはあげるからさ」

「ありがとうございます！葵さん！！……ぁ？いえいえいえ！そんなお嬢様が葵さんに差し上げたものですから…」

「いいよ、いいよ。木乃香ちゃんも大好きな刹那ちゃんに貰ってもらえるなら本望だと思うしね」

やっぱり、女の子は全般的に見て甘いものが好きだよね？俺も甘党の自覚はあるけど毎日、食べたいとは思わないし…。

「えぇぇえぇ！！だ、だ大、好きっ！？…ええっ！？…あうあう…

その…本当に、私が貰っても…よろしいのでしょう、か？」

「俺に遠慮しているなら気にしなくていいよ。あ、それに明日菜のもあげるね？いやー、刹那ちゃんがそんなに甘いものが好きだったなんて知らなかったなぁ。うんうん」

「え？あの…いえ、ありがとうございます…」

「うん、じゃーねー」

お腹も落ち着いたし、一度、帰ろうかな…。

……。

帰ってきても喫茶店は今日の当番は他の皆だから俺は休みだ。店内でやることは無い。ならば［工房］に行こうかな…。ってことで…。

「さて、工房に来たはいいけど……何しようかな？」

『おい！葵！何も聞かないでそっちに召喚しろ！早くっ！！』

「えっ！！オリビエっ！？――――…理由は跡で聞かせてもらうからね！！暗き泉！仄暗き世界！今ここに！理を繋げる！召喚！！オリビエ！リビエラ！シルビア！」

随分と慌てているようだったからいつも通り3人まとめて呼んだ。2度手間になるのは面倒だしね。一応、手数は多いほうがいいでしょう。それなのにオリビエに俺は怒鳴られようとしています。なぜだ？

「――……すぅ…こっの！阿呆っ！！何であたし“だけ”を呼ばないんだ！！余計な2人まで…！！」

「あ～っ！オリビエちゃん、ズルイわ～！私も渡したいのに～！！」

「…ズルイ。…ボクも…あげ、る…！」

「うっさい！！ていっ！！――バクバクバクバクバクバクバクバクッ！！！」

お、おおぅ？すごい勢いでチョコがオリビエの口に入っていく…。

「「あ……」」

「ねぇ？オリビエが2人から取り上げた箱からお菓子を食べているけど…」

「～～～～～っ#####！！！！」「……ッ#####！！！！」

オリビエも女の子だから甘いものが好きなんだね。でもいきなり食べるからリビエラとシルビアが怒っているように見えるよ？

「「――バクバクバクバクバクバクッ！！！」」

「あ……」

「ねぇ？皆、どうしたの？今度はオリビエの箱からお菓子を2人が食べ尽くしたけど…」

「――――――ッ＃＃＃＃＃！！！！」

やられたらやり返すか…。お互いに量的には少ないだろうけど…。そんなにチョコが食べたかったのか…。明日菜のチョコは持ってきてあげればよかったかな？

「「「表に出ろっ！！」」」

「身体を動かすなら［演習場］でやってねーーっ！！！」

「「「わかってる！！！シャーーッ！！」」」

いつの間にかケンカイベントが開催されている！？一応、暴れるなら［演習場］に行ってもらった。［工房］崩壊とか笑えないわー…。

……。

［工房］内のラウンジに来ました。今ここには俺の他にアンしか居ない。

「アン、お父さんは疲れたよ…」

「えと…その、げ、元気出してっ！お父さん！私に出来ることならするよ！」

「じゃあ、撫でさせて…」

皆が今日に限って甘いお菓子を勧めてくるんだ。もう見ているだ

けで胸焼けがしてくる。出されれば食べるけどね！食べ物を粗末にしたら……殴るぞ。

「えっ！？やた♪じゃない！うん♪いいよ♪はいっ！」

「うん…。撫～で♪撫～で♪撫～で♪――…はぁ、癒される…♪」

「はぅ…♪ぃゃん…♪♪…んんっ♪♪♪…はぁ～っ♪♪♪♪」

うん、胸焼けが癒されるわー…。アンからはマイナスイオンが出ているに違いない。撫でているととてもリラックスできるんだ。おや？こちらに近づいて来るのは…。

「…マスター、ここにいらしたのですね。…アンお嬢様もご一緒でしたか」

「んー？あれ？ＣＯＳ－ＭＯＳも休憩かな？」

「否定。…マスターを探しておりました」

俺を探して？今日は休日だし…何かあったかな？

「ＣＯＳ－ＭＯＳ、お嬢様はやめてよ。私のことはアンでいいんだよ？」

「…む、了解しました、アン。…それと…マスター、これをお受け取り下さい」

「ん？なになに？――…板チョコ？」

むむむ？――――…また甘いものか。うっぷ。また胸焼けが…。

「肯定。今日は特別な日でお菓子を渡すと聞き及びましたので持参致しました」

「へ、へぇ…。でも、まぁ…うん、嬉しいよ。ありがとう、ＣＯＳ－ＭＯＳ♪」

「――――……ッ！……喜んでいただけたようで何より、です」

うん。ＣＯＳ－ＭＯＳの笑顔が見れるなら多少無理して胸焼けしてでも食べてみようと思えるから不思議だ。それじゃ、いただきま…。

『…我が主、少しそのチョコを見せてもらえぬか？』

「は？うん、まぁ、いいけど…。はい」

『――――……ッッ！！』

びっくりした！びっくりした！びっくりした！ラミエルさんに板チョコを近づけたら、一瞬で黒い空間に吸い込まれた！？何、アレ？ラミエルさんの格納領域か何か？

「うおっ！？なに！？何が起きた！？」

『げふっ！…むぅ？やはり、食物は相性が悪いのか？胸焼けがする…』

「何でお前が食ってんのかな！？俺のだろうが！？――――…ってＣ

ＯＳ－ＭＯＳ…さん？何やら不穏な雰囲気を纏っていらっしゃるように見えるのですが…」

「……マスター、ラミエルとの模擬戦争の許可を願います」

「模擬…戦争！？あれ！？模擬戦をすっ飛ばしてイキナリ模擬“戦争”ですか！？落ち着こうよ！！どんだけ怒ってるのさ！？」

戦争はやめて！せめて戦闘にして！あ、ああ…俺の胃がキリキリと痛めつけられる感覚が…。

「そうだよ。落ち着こうよ？ＣＯＳ－ＭＯＳ…」

「よかった！今回は冷静なアンが居る！助かっ…」

「本気のラミエル相手にするなら戦艦規模の質量がいるよ？…だから私が助太刀してあげるね♪」

「アン…。感謝します」

「助かってないよ！？寧ろ悪化してるよ！？お前ら何考えてんだよ！？ラミエルからも何か…」

『ククク！構わぬ！２人まとめて相手してくれようではないか！！軽く捻ってくれるわ！！わはははははっ！！！』

もう、こいつら、ダメだ…。

「…マスター、模擬戦争の許可を願います。是非っ」

「お父さん！私からもお願い！」

「……もう、好きにして。はぁ…」

『叩き潰してくれるわッ！！』「叩き潰してやるんだからっ！」「…叩き潰しますッ」

いいよ、いいよ。もう好きにしなさいな…。俺は知らんよ。……あ？［演習場］にはオリビエ達が居たような…。まぁ、いいか。

このあと、どこへ行っても家族の皆に甘いお菓子を勧められて最後には見ただけで鼻血が少し垂れてきた。空気自体が甘く感じられてきたら、それはもう末期だと俺は思う。

はぁ…。

……。

……。

…。

「…という夢を見たんだ」

「そ、そうなんだー？」

「た、大変な夢でしたねぇ…」

「う、うむ。そうだな…」

ウーリ、ミリー、マリー。後ろ手に隠したものは何だ？

「あ、葵も疲れてるんだよ…」

「そ、そうよ～。今日はゆっくり…ね～？」

「……お兄ちゃん…休んで…」

オリビエ、リビエラ、シルビア。お前らも後ろ手に隠したものは何だ？

「か、閣下も大変、ですな…？」

「そ、そうですわね。ふふふ…」

「き、今日は休むといいの…」

アイリ、リチラ、ファレノ。お前らも、か？後ろ手に隠したものは何だ？

「う、ん…？そうしようかな？それじゃ…」

もういいや。夢見が悪かったから自室で休もう。うん。

「あ、我が君！ちょうど良いところに！これをお受け取り下さい！吾ら2人で心を込めて作らせていただきました！」

「どうぞ、お食べいただければ吾らも苦労が報われます。いえ！天にも昇る想いにございます！」

「あ、うん。それじゃ、いただくね？あむ、んむんむ――――…あぁ、これ美味しいね♪ハオもユエも料理の腕、上げたようで俺も嬉しいよ♪」

「「感謝の極みにございます！！！」」

これじゃまるで正夢だな…。まぁハオとユエの作ったチョコが美味しいからいいか…。

「うんうん♪……で？皆、どうしたの？」

「「「「「「「「「何でもないです…」」」」」」」」」

「「「？？？」」」

あれ？そういえば夢に出てきた抹茶チョコは結局、誰が作ったものだったのかな？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

番外編「お菓子と抹茶チョコと鼻血と」（後書き）

許可が出たので、抹茶チョコ…使わせてもらいました…。
彼岸花さんの作品の主人公、雛さんから抹茶チョコが送られてきたので、つい…。
いい加減、本編を進めろとか、そういう問い合わせは受け付けません。
あくまで当作品は作者の趣味ですからマイペースは崩しませんよｗ

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第五十九話「内と外とそのまた外と」（前書き）

うん、［演習場］の修理風景の裏で名も無き家族の仕事風景を読みたい。
というリクエストがあったので書いてみました。
少し、違うかな、と作者は思うのですが良ければ読んでやって下さい。
では！どうぞ！

第五十九話「内と外とそのまた外と」

……。

突然だが総旗艦のアングレカムを除いた全１７２隻の無人艦や数えるのも馬鹿馬鹿しい無数の各種無人兵器、自動人形で人員不足を誤魔化していたが管理する側としてはそれも限界が見えてきた。

当然のことながら組織（ファミリー）のほぼ全てを管理する司令部も葵を崇拝している。だが組織の現状から葵に陳情しなければならない。このことを真に失礼と確信していながら司令部は精魔奇兵の増員を要請。

司令部所属の者は怒られるかもしれない、叱責されるかもしれないと思いながらも己が全てを尽くし切ることを至上の喜びと考える彼女達は何モノからも葵を守るためには必要と決意していた。

しかし、彼女達も彼女達だが葵も葵と言うか…。家族を溺愛している葵が断ることをするわけがない。それに自分を守るためと言われてしまえば喜びはしても怒ることなんて考えられないだろう。

苦笑していいのかイベントは重なるもので陽月姉妹による予定外の事態はあったが司令部の陳情は先頃、葵の裁可によって無事に承認された。改良された施設から考えて近々、人員は6倍かそれ以上になる予定だ。

精魔奇兵化して暫くは新しい身体に慣れるため私生活を訓練（リハビリ）とし、それが一段落したならば身体を戦闘に慣らすための基礎訓練、兵装や戦術などを習得する座学がある。本格的な戦闘訓練はそのあとだ。

戦闘者としての基本が出来たならば大まかな訓練は終了だ。配属先は機動兵器搭乗者や地上・航空戦闘員、各種後方担当などのどれかになるかは適正関係から第二希望以下に回されることもあるが本人の希望が考慮される。

今、葵や司令部が考えているのは管理者となる者。それに無人艦を主力とする四個艦隊が新設されたことから、それらを管理運用する者。当然、無人艦を管理する有人艦が設計されることからオペレーターや操舵士、通信士など乗組員だ。

予定通りに増員が終われば精魔奇兵はアイリス達を含めて総人員１４０４人になる。それと艦隊は作戦部ではなく司令部の管理下に入ることになる。

一個艦隊に有人艦を2隻と考えて艦船一つに百人余りを配属させると単純計算で半数以上８００人は配属される。艦隊に割り当てられる人員が多いが新設計される有人戦艦は高度に無人化されたアングレカムと違うので仕方ない。

残りの新規３７０人も既存の司令部や情報部、作戦部のそれぞれに配属される。司令部管理下の艦隊に配属される人数から３７０人の配属優先先は情報部と作戦部になる予定だ。

……。

葵は知らない。葵の総戦力は彼の予想よりも遥かに多く、強大になっていくことを…。

葵は知らない。月基地に残る数千体以上の自動人形達が葵に喜んでもらおうという単純で純粋な好意から全長５０ｋｍ級戦闘移民船

を建造していることを…。そして時間加速エリアで造られている、それの完成は間近だということを…。

葵は知らない…。ついでとばかりに護衛艦隊として既存の第一～四艦隊と同じ規格の無人艦隊を８個艦隊ほど建造されていることを…。他にも月で色々造られていることを…。葵は知らない…。

……。

――魔法球［演習場］…。

Ｓｉｄｅ　？？？

［演習場］の上空には第一から第四艦隊の４５０ｍ級大型補給艦１２隻が“とある荷物を満載して”待機している。布陣は単純に右から第一、第二、第三、第四艦隊が横一列になり一定の間隔を空けている。

艦隊の艦船は全てを無人制御による運用を前提に設計されている。だが大型輸送艦や５５０ｍ級ドッグ艦などの後方担当艦は戦地での修理や補給をする関係上、ブリッジと居住空間が施設されている。

第一艦隊の大型輸送艦一番艦のブリッジに指揮所を設置。ここに居る彼女達は［演習場］内郭部分の修復を指揮管理する。するのだが…。

「さて、葵様に話しは伺っていたが、これは…スゴイな」

今回の指揮を任された彼女ランタナ・S・アニムスは呟いた。彼女は元地精霊の精魔奇兵であり親衛隊所属の古参の1人だ。

赤茶けた肩まである髪と鋭い目元が特徴だ。黒い制服の肩部に親衛隊の証である赤のラインが入った服をビシッと着こなしていることからマジメな性格が見て取れる。真実、仕事中の彼女はマジメだ。

「ええ、これはヒドイです。周辺を精密走査しましたが形状記憶土壌や環境維持用ナノマシンでも修復が不可能な部分が存在します」

それに答えたのは作業の副指揮官であるマトリカリア・S・アニムスだ。彼女は元水精霊の精魔奇兵でランタナ同様親衛隊に所属している。

濃い青色をした腰よりも長い髪を後頭部で一本に結っていて少し目尻の下がったおっとりとした雰囲気を持つ女性だ。ただ仕事中は雰囲気とは逆の印象を与えるほどキリキリしている。

「修復が不可能な部分は一度切り離し、新型の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンを優先的に当てよう」

「それがよろしいかと思います。早速、作業を開始しますか?」

どちらにしろ、だ。現存の形状記憶土壌や環境維持用ナノマシンもデータを書き換えて新型へ更新する必要があるのだ。寧ろ第四艦隊を除けば更新用ナノマシンだけを満載していると言ってもいい。

「ああ、そうしてくれ」

「アイ・マム。全艦隊、微速前進。目標地点は平野エリア上空。ただし、第四艦隊の3隻は要修復部分を最優先」

ランタナ達は作業活動を開始する。付属魔法球中、直径ニ千数百kmという最も広大な内部空間を持つ［演習場］を修復、強化するために。

主な被害地は平野エリアと空間中央に連立している中央山脈だ。天頂部にも亀裂が見えることから個々に術式補強と物理修復が必要のようだ。

「アイアイ・マム。微速前進。目標地点、平野エリア上空」

「報告。第四艦隊大型補給艦の離脱を確認。以降は独自行動となります」

操舵士はＩＦＳコンソールに置いた手から艦に命令を伝達し自艦をゆっくりと前進させる。第一艦隊大型輸送艦一番艦を先頭に前進を始め緩やかな斜めの陣形で前へ艦隊は進む。

左端に位置する第四艦隊は大きく弧を描き離脱することを通信士は報告した。第四艦隊は内郭部から要修復部分たる天頂部を中心に修復し、新型を亀裂が残る地上部に直接投下するのだ。

暫く航行すると平野エリア上空に到達した

「よし。全補給艦隊へ通達。底部ハッチオープン。“荷物を投下しろ”以上だ」

「アイ・マム。全艦へ伝達。底部ハッチオープン。“荷物を投下しろ”。繰り返す。“荷物を投下しろ”」

ゆっくりと前進して行く大型輸送艦隊の底部ハッチが開放されると銀色のサラサラした更新用ナノマシンが投下されていく。作業風景を一言で言えば飛行機から空中農薬散布だ。

以降、艦隊はこの散布作業を更新用ナノマシンや新型の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンを［格納庫］と［演習場］までの間を3日間、正味2日半ピストン運搬を続けることになる。

……。

――3日後…。

……。

ランタナ達は3日を費やして要修理エリアとその他の機能更新を目的とした各エリアを巡回して更新用ナノマシンをパラパラと種蒔きのようにしていった。今は最後の荷物を投下し終わり［格納庫］へ繋がる接続魔方陣へ移動している。

「報告。全艦隊、予定通り荷物の投下を終了しました。…追加報告。第四艦隊も同様です。現在から1時間後に本隊へ合流する、とのことです」

「そうか、ご苦労。……ふむ？よし。乗組員は合流まで小休憩するといい」

「「「「「アイアイ・マム♪」」」」」

ブリッジにはランタナとマトリカリアを残して他の乗組員はわぁい♪とそれぞれに休憩時間を過ごすために出て行った。単純作業だが失敗は許されないために神経を使っていたことで精神的疲労はあるのだ。

「……作業開始から3日ですか。予定通り作業終了ですね」

そう言いながらマトリカリアはブリッジに予め持ち込んでいたコーヒーを2つのカップに入れて1つをランタナに渡した。

「ああ。あとは私達の撤退後に葵様が外郭部分を強化してくだされば［演習場］の作業は完了だ」

「ふふふ、そうね」

この3日間、内郭は大型輸送艦12隻によるピストン運搬でイヤと言うほど投下した新型の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンが修理、強化する。

投下した殆どが現存の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンを書き換えるデータ更新用ナノマシンだが損傷の激しい箇所は直接新型を投下して補填、早急な修復に当てたのだ。内郭部分は一応の作業終了となる。

そして作業員が全員脱出してから安全のために［演習場］を一時的に中心核の［工房］から切り離す。そうして外から外郭部分を補修、補強し、更に改良、強化術式を施すのだ。

作業が無事に終われば改装済みの他の施設に加えて［演習場］は

以前の数倍の強度を確立することができるのだ。

これでも全ての葵ファミリーが全力全壊、訂正…全力全開で魔力解放すると崩壊する危険性がある。ただ計算上では陽月姉妹、精霊3人娘、悪魔3人娘、そして葵が魔力を解放しても耐えられるように強化される……予定だ。たぶん。

「何はともあれ、だ。お疲れ様、カリア」

「貴女もね♪お疲れ様、ランタナ」

カァンと手に持つカップを打ち鳴らしてお互いの労うのだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　???

――喫茶クレイドル地下2階…。

Ｓｉｄｅ　葵

壁に掛かっている時計を見ると、もう少しで3時間が経とうとしていた。そろそろ内部の作業を終了しているはずだと思うんだけど…。

ここは喫茶クレイドルの地下2階の一室。地上部分の喫茶店も街角にある割に広いので地下も合わせて広く造られている。天井も4mと高い。空調も確りしていて地下特有のジメジメした感じも皆無

だ。

……まぁ、ここは自分達で造ったから家族以外に知る者は居ない秘密の地下室なんだけどね。あ？今、思ったんだけど“秘密の地下室”っていい響きじゃないか？何だか、こう…背徳的な何かを感じない？

…ごめん、どうでもいいな。それよりも今は［演習場］の修復と強化作業だ。

この一室に居るのは俺の他にマリーとウーリが居る。ミリーが居ないのは理由があって彼女には内部の作業が終了したら知らせてくれるように［工房］内にて待機してもらっているんだ。

いい加減、魔法球内との通信手段を確立しないとなぁ、とは思ってはいるんだけど……無理。空間を歪めているだけならどうとでも出来る。でも時間も歪めて時空間を拡大いるから科学的にも魔法的にも外との繋がりが悪い。

例外は内部時間を現実時間と同調させた時……って、あれ？あー…そうか。［工房］内に実時間と同調した特殊な部屋を用意して通信室とすれば……うん…いけるんじゃね？いや、いけるよ！修復と強化が終わったら早速作業に入ろう♪

こほんっ、それで目の前にはこの世界に落とされてから蓄積してきたネタ的発明品や色々な素材や収集してきた俺の全てが詰まっている魔法球［工房］が設置されている。

今や直径２ｍ半の大きさになった［工房］を中心核に一回り小さな付属魔法球［演習場］［菜園］［牧場］［ドッグ］［桜の苑］［

食料生成プラント］［工場プラント］［格納庫］が接続されている。

もう一度、時計を見るとあと5分で午後4時になろうとしていた。内部の作業終了予定時刻が実時間の午後4時だから、もう直ぐのはずだ。ま、多少、予定が遅れたとしても怒ることは無いさ。

幸いにも時間には余裕があるし…って皮肉にもならないな。不老の俺に時間なんて関係あるものかよ。なんて考えていたら魔法球の前に魔方陣が展開。中からミリーが出てきた。

「ミリー、無事に準備は出来た？」

「ええ、全員、［演習場］内から退避済みですわぁ♪念には念を入れて3度、確認したましたものぉ」

「そっか、ありがとう。それじゃ、早速で悪いけどミリー達は配置についてくれる？」

指示を出しつつ、本体の［工房］から［演習場］を取り外して部屋の中央に設置する。戻ってきたばかりのミリーには悪いけど今すぐ修復をはじめたいと思う。

「はぁい♪さぁて、もうひと頑張りですわぁ♪えいえい、おぉ、ですわぁ♪」

「ふふふ、修理とはいえ魔法球の作製で精霊の力を用いるのは世界でも主だけですな」

「だからこそ、だよー。あるじの魔力とウーリ達の力を合わせるからー、規格外の魔法球が出来るんだからねー」

［演習場］を中心に四方を俺とミリー達で囲み、それぞれの配置についた。

皆の言うとおり本来なら魔法球の製作は精霊の力を借りない錬金術の分野だ。つまりは俺の専門分野だ。物創りは俺の本業（最近は喫茶店に情熱を注ぎ過ぎたけど…）だからな。この世界の誰よりも上品質のモノを造ってみせる自信がある。

それでも普通に造っても今の家族（特にハオとユエ、それにオリビエ達やミリー達）の使用に耐えられない段階に来てしまった。だからこそ四大精霊に匹敵するミリー達の力を借りた特殊な方法で世界（オンリーワン）に一つのモノを創り出す必要がある。

たかが魔法球と言うことなかれ。［演習場］は使用目的から、とにかく別格の頑丈さが求められる品物なんだ。それでなければ安心して全力を出して訓練できないからな。事故を起こしたらシャレにならんのよ。

「はいはい、皆には感謝しているよ。……いくよ？」

「はぁい♪」「御意！」「あいっ」

配置についた俺は皆に確認を取ると準備できた、と返ってきた。そのまま深呼吸して精神を落ち着けて儀式術式を構築するために魔法回路を稼動させる。第一目的は修復、第二目的は改良だ。

部屋の中央に設置された［演習場］を中心に光の糸が走り術式を編み上げて床に六芒星を基本とした魔方陣は様々な記号と複雑な図形で構築されていく。

「儀式術式開始…範囲設定…空間特定…時空間固定…空間圧縮…次元操作…」

儀式術式を開始すると床に光で描かれた魔方陣が時計回りにゆっくり回転を始めた。それと同時に魔法球［演習場］は空中に浮かび一定の高さで固定される。

「――――……♪――――……♪――――……♪――――……♪――――……♪」

ミリーが唄う。清らかな水が静かに流れる。小さな流れは幾本も合わさり、やがては大きな川となる。偉大な水を髣髴させる涼しげな声色で唄われる。

「――――…♪――――…♪――――…♪――――…♪――――…♪――――…♪」

マリーが唄う。始まりは弱々しく飛び回る火の粉。火の粉は火の子。小さな火は全てを巻き込み。やがては炎となる。至高の火を表すように猛々しい声色で唄われる。

「――――…♪――――…♪――――…♪――――…♪――――…♪――――…♪」

ウーリが唄う。そよ風は舞い高らかに昇る。そよ風は走り、風は走り、やがては荒れ狂う暴風となる。大いなる風を示すように自由に優雅な声色で唄われる。

3人（トリオ）が唄う。精霊達の唄う歌には魔力を増幅する効果と世界を正

常に、均衡を整える効果がある。精霊の歌で増幅された魔力は、それ単体で現象となる魔法を創り出す。魔力で構築されている精霊達は感覚だけで精密な魔法操作を行なうからだ。

今の世では知られていないことだが魔力の満ちる満月の夜に森の奥地で精霊の歌会は行なわれる。それは遥か古の時代から続く秘密の歌会。精霊の歌には世界に漂う魔力を攪拌して均衡を保つ役割がある。

本来なら精霊は人間の前では決して唄うことはない。それはこの世界の摂理（ルール）だ。なぜ唄うことがないかというと人間は純粋ゆえに邪悪に染まり易いことから精霊の神聖なる歌を汚すと考えられているからだ。

ただしミリー達や家族の精霊達は例外だ。前にも言ったが俺と契約を結んだことで、この“ネギま！”の世界から脱退し“俺という名の世界”に所属を移している。彼女達を構成する魔力は既にこの世界とは別物だ。

彼女達の存在を構成し縛るものが“ネギま！の世界”から“俺”に変わっただけと言えば、だけなんだけど…。むー…。契約が増えれば増えるほど俺の保有魔力は増えるし俺の世界は強力に存在感を増していくんだよなぁ…。

これは俺がこの世界の存在を喰らっているということだろうか？

それと、なぜこんなことができるのか？ということだが俺にもわからん。俺が別の世界から来た“来訪者（エトランジェ）”だからか、それとも俺を

この世界に落とした女神（幼女）のせいなのかは未だにわからない。

閑話休題…。

「修復術式を展開…修復箇所を走査…術式限定…術式実行…修復中…修復完了…」

ゆっくりと回転していた魔方陣はまたも変化して円環魔方陣が3本、浮かび上がって［演習場］の周りを1本が右に2本が左に回転して魔力を収縮して圧縮していく。上部にも床にある魔方陣と同じものがあり、こちらもゆっくり回転している。

ここまでの儀式術式で3時間近くが経とうとしている。根本となる基礎術式の立ち上げと稼動に2時間、次に修復術式を上書きして損傷箇所を探し出して修理した。修理は、ここまででこれからは強化の作業だ。

「――……♪――……♪――……♪

悉くを燃やそう。歩き行く先を照らそう。愛しき子らよ。愛しき子らよ。

「―――…♪―――…♪―――…♪―――…♪―――…♪―――…♪」

ウーリは唄う。唄う。唄う。荒々しい風は暴風となり汝が道を切り拓こう。歩みを止めたなら優しきそよ風で癒そう。愛しき子らよ。愛しき子らよ。

「新規空間を固定…儀式術式回路へ魔力充填…正常稼動を確認…儀式術式完了…更新を確認」

もう少しで作業を開始して4時間が経とうとしている。長時間の作業で疲れはあるが最後の仕上げを施すべく集中力を今、最高に高める。

［演習場］内の空間に新規空間を付け足して固定する。機能を半分ほど停止していた付属魔法球の術式回路に今まで以上の魔力を注ぎ尽くす。魔力暴走を引き起こさないようにゆっくりと、ゆっくりと、注いでいく。

今までに展開させた魔方陣の回転数が上昇。光を放つ魔方陣の発光が強まる。もう目もあけていられないほど眩しい。次の瞬間、儀式術式の完成と同時に地下室の一室は爆発的な閃光に包まれた。

少しすると閃光で眩んでいた目が慣れてきた。魔方陣が消えた地下室の中央には修理、改良された新たな付属魔法球［演習場］がゆっくりと下降し床に着地していた。

注がれた魔力の余波で魔法球は薄っすらと光っているがそれも時間が経てば通常通りに落ち着くはずだ。

あー、長時間の儀式は疲れるわー…。

「はぁ…はぁ…。あー、皆、お疲れ様…」

「主様もぉ、お疲れ様ですわぁ…。ふふふ♪」

「無事に儀式作業も終わったようですな…。ふふっ」

「あい、お疲れ様ー、もうウーリは疲れたよー…」

4時間、歌いっぱなしだったものな。それは疲れるよ。心なし3人も顔色に疲れが見える。でも精霊の唄う歌って綺麗だよなぁ。儀式とかじゃなければ俺も聴き惚れて集中なんて出来なかったほどだ。

いつだったかぐらまぁな狐女達と知り合えたから［桜の苑］で開いた大宴会に招待して舞台で舞ってもらったことがあるけど、精霊の唄う歌はそれと甲乙つけがたいものがあった。

あー、また狐女達も招待して大宴会を開こう。今回は、疲れた…。やっぱり、仕事を急ぎ過ぎるのはよくないね…。俺にはゆっくりとのんびり仕事するのが合ってるよ。喫茶店とか…。

「ウーリ、ごめんね、他の施設と違って［演習場］だけは一際頑丈にしないと危なくて使えないからさ」

「ぁ、ち、違うよー？無理とか迷惑とかー、そんなこと考えてないからねー？本当だよー」

「そっか、そっか♪うん、ありがとうね♪」

慌てるウーリが可愛かったから贔屓かなぁ？とは思うけど見た目が小さな少女だから無理させてごめんね、って意味を込めてウーリの頭を優しく撫でてみた。俺もミリー達も疲れていたから癒しが欲しかったんだ。

ウーリを撫でる俺の気分はお父さんです。

「ん、んー♪はふー…♪」

「あらあら♪」

「ふふっ、ふふふっ」

あー、やっぱり、可愛い子を愛でていると癒されるわー♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――喫茶店周辺…。

Ｓｉｄｅ　？？？

葵達が地下室で作業をしている時、喫茶店の表では静かな暗闘が繰り広げられていた。拠点（喫茶店）を中心に情報部二課と三課が

合同で敵対者や準敵対者の監視員を対処して回っているのだ。

街路には目立たないように情報部二課の者達がさり気なく通行人を模していたり、他店のウェイトレスを模していたり、クレープの移動販売の店員を模していたりなどなどとバリエーションにとんだ様相で監視員を逆監視している。

そして建物の屋上には情報部三課の者達が熱光学迷彩で姿を隠し個人スキルの気配遮断で万全の穏行をして漆黒の戦闘服を纏い待機している。狙撃銃、突撃銃、自動拳銃、コンバットナイフなど一通り装備している。

数機の熱光学迷彩装備のステルス偵察機（アカトンボ）も上空２００ｍという低空飛行で監視活動をしていた。ヘリのように風切り音も無い、極静穏の反重力エンジンで滞空することから低空でも気付かれることがない。

そして麻帆良上空五千ｍには熱光学迷彩を展開し極静穏ステルス潜航した総旗艦重機動戦艦アングレカムが指揮所（ＣＰ）として待機している。地上戦力で対処しきれない事態が発生した場合はアングレカムから即座に応援を派遣できるように、だ。

対空戦力の無人機動兵器（カブトムシ）を始めとして熱光学迷彩や個人用Ｄフィールド発生装置などを標準装備した実働部隊。市街地戦などの狭い空間を想定された機械化特殊戦闘部隊。新規配備された機械人形部隊（シュワさん達）がある。

一応、イキシア？などの有人機動兵器も待機しているが使用する予定は未定だ。現在の地上戦力だけでも相対戦力の数値上はこちらが過剰戦力となっている。この麻帆良で使うかは司令部上層部で未

だに協議中。

……。

そして今、手鞄を持ち背広を着た一人の男が居る。大通りを避け、なるべく人目につかないように歩き、脇道へ脇道へと入って行く。やがて到着した男の居る場所は建物が影になり人目の付き難い路地裏だ。

「……」

男は周囲に自分以外に誰も居ないことを確認すると手荷物の中をゴソゴソと探し出し、手に取った。男は一見するとどこにでも居る一般人、普通のサラリーマンに見えるだろう。

だが他の一般人と違うのは鞄から取り出し手に持つ水晶玉だ。それは小さく光を放つとどこかの映像を映していた。普通に見れば隠れて年始行事で披露する手品の練習をしているように見えなくもない。

「チィィッ！！！」

しかし、男は何が気に入らないのか舌打ちを一つすると水晶玉を手荒に手鞄に放り込んだ。地団太を踏みながら一通り聞くに堪えない罵りの言葉を吐き出している。

……。

そんな男のことを見ている人物が居た。ここは拠点から２００ｍ強ほど離れた地点だ。作戦地名称はＰ９（ポイント）。その人物の居る建物の屋

上から真下の路地裏で騒ぐ男を屋上から見て、いや、観察しているのだ。

屋上に居る人物はある程度、男を冷ややかな目で観察すると通信機で連絡を取り始めた。

「…ＣＰ、こちらデルタ３、ポイント９に要注意指定人物の存在を確認。指示を求む」

『ＣＰ、了解。……こちらも監視映像で確認した。以降、目標をエネミー１と呼称する。エネミー１を確保せよ。繰り返す、エネミー１を確保せよ』

デルタ３と名乗ったのは組織情報部三課所属のラナンキュラス・Ｄ・スタニック。風の固有能力を持ち、緑がかった黒いショートの髪と、髪と同じ色の瞳をした彼女は潜入任務を得意とする元悪魔の精魔奇兵だ。

通信先のＣＰとして応答したのは同じく三課所属の１０あるチームの一つ、第４チームのリーダーでデルタ１のコードを持つドラセナ・Ｄ・スタニックだ。影の固有能力を持ち漆黒の髪と瞳をした彼女は複数を統率する指揮能力が高い元悪魔の精魔奇兵だ。

「デルタ３、了解。…殺害は可能か？」

『殺傷許可は下りていない。非殺傷設定にて意識を奪え、気絶させろ。直ぐに回収班を送る』

彼女達を始めとした全ての頂点に立つ葵の意向により現在の対応基準は殺傷非許可（ただし条件付解除有り）であり、スタン効果に

よる非殺傷設定が推奨されている。このことで家族の誰もが葵は敵にも情けをかける優しい人物という印象を与えている。

実際は学園所属の人物をウザイからとその場の勢いで殺してしまったら後々面倒になると葵は考えただけに過ぎないのだが…。そんなことを知らない家族達はますます葵に崇拝と敬愛を寄せることになるのだ。

「…了解。残念だ。主の敵を1人排除できると思ったのだが…」

スパッと殺したいなぁ、と零すラナンキュラスは本気で残念そうだ。

ここ最近、暴れたのはイラクやサウジアラビアといった紛争が絶えない中東くらいだ。そこで武装ゲリラ達を闇夜に紛れて誰が一番多くヘッドショットを決められるかを仲間と競っていた時だった。笑いながら競ったのは彼女のいい思い出だ。

ここの屋上から真下に居る男の頭に重力加速を加えられた銃で打ち出した弾丸が命中すれば、それはもう汚い血の華を地面に咲かせることが出来ることだろう。カスタムされた銃の威力から頭蓋は粉砕され、首無しデュラハンになること請け合いだ。

そんな想像をしていたラナンキュラスは静かに喉を鳴らして笑った。

『ククッ、まぁそう愚痴るな。閣下はお優しいからあのようなゴミ虫でも殺すのを躊躇されるのだ。――……それとも不満があるのか？』

親しい者同士の会話だった。それでも最後の台詞に込められた殺意（シャー）は本物だった。通信機越しにもかかわらずドラセナの声は聞く者の魂を芯から握られるような重圧（プレッ）を感じさせていた。

「――くはっ、ははっ、なかなか面白い冗談だな。ははははっ」

あまり笑わせるな、とラナンキュラスは通信相手のドラセナに笑いを噛み殺しながら言った。任務中でなければお腹を抱えて笑い転げていることだろう。

ドラセナの殺意もラナンキュラスにとっては心地好いそよ風のようなものだ。これくらいの殺気を受け流せないようではこの組織では耐えられない。アンですら敵の死にはドライな反応を示すのだから。

大体、だ。根本的にそれ以上の重圧や殺意を訓練で味わっているのだ。だからこそ今更、この程度は冗談の範疇に入るのだ。最も…冗談にもならない不穏分子は廃棄処分になるだけだが。

『……まぁいい。では5分で終わらせろ。回収班も…』

「ノン、2分で十分だ。回収班も直ぐに出してくれ」

先程まで笑いを堪えていた人物とは思えないほどの即答だった。ドラセナは通信の途中で割り込まれたことに多少考える仕草をする。

ドラセナは処理に5分と言う。ラナンキュラスはバカを言うな、と内心で思った。確保対象のエネミー1は自分の居る建物の真下に居るのだ。たかが気絶させるだけなのだから5分もいらないと必要時間を計算した。

『…クックッ、いいだろう。ただし時間を少しでも過ぎたら訓練を追加する。いいな？』

「――――…了解。やってやるよ」

自分自身が言い出したことだ。責任は持つ。あの訓練に更なる訓練を追加されるのはゴメンだが失敗しなければいいのだ、とラナンキュラスは考える。

記憶に新しい超一味の地下基地襲撃事件。それがあったことで組織の傲慢なまでの意識はほぼ改善され油断も慢心も無くすことが出来たのは皮肉だろうか。

あの事件は組織としてもそうだが、ただの葵の家族としても驚愕の事件だった。もう二度とあのような失態はしない、と皆は密かに心の中で自分のご主人様に誓ったものだ。直接、葵に言っても気にするな、と寛大な心で許されることがわかっているから。

だからこそ、今の自分に、組織に油断は無い。慢心も無い。速やかに事を終わらせるのみだ。

『……言い忘れたが追加訓練はハオ教官の“スペシャルな個人レッスン♪”だ。では、通信を終わる』

「なっ！？汚いぞ！それは！…って！本当に通信切りやがった！？」

…が、ドラセナはラナンキュラスの覚悟を打ち砕く爆弾を落として通信を切った。これにはラナンキュラスも慌てる。いや、これでもかと動揺してうろたえている。

屋上で1人、あうあうと失敗したらと考えるラナンキュラスだが、これだけで30秒が経とうとしていることから彼女の狼狽振りがわかるというものだろう。まぁ、下手すると事は自分の生死にも関ってくるのだから狼狽するのも当然かもしれないが…。

「…！…！…！？――まずいっ！？チィ！急がないと…！！」

ラナンキュラスは秒針が35秒を越えた時に意識を復活させて今、自分が何をすべきかを高速で思考した。結果は……聞くまでもない。風が一つ吹くと屋上にはもう誰も居なかったのだから。

……。

呆れたことに男は水晶玉を手鞄に叩き込んでからずっと悪態をついていたのだ。とてもではないが良い子の耳には入れたくない内容を吐き出し続けていた。この時の男は軽い興奮状態になっていた。

だからだろう。建物の影の中を縫うように移動して近づいてくるモノに気付かなかった。

「――ッ！！――ッ！！……ん？ぐふっ！！」

近寄ってきた人物は男の首に通常よりも強めに手刀を入れて意識を刈り取った。もう少し強めに力を入れていれば意識どころか命そのものを刈り取れるほどだ。何やら襲撃した人物の焦りを感じ取れる一撃だった。

「眠てろ、クソ虫が…！――ッ、時間は！？」

軽く悪態をつきながら熱光学迷彩を解除したのはラナンキュラスだ。彼女は急いでコミュニケに内蔵されている腕時計を確認。一秒一秒、狂うことなくカウントされていた。残り時間は…。

――００：００：０２――。

ギリギリで2秒を残していた…。

「…セェェフっ、助かったぁ…。はぁ…んんっ、デルタ3からCP。エネミー1の確保、成功。回収を」

『CP、了解。回収班は間も無く到着する。――――…チッ』

「ちょ！お前、今、舌打ちしなかったか！？」

任務は成功したはずなのに負けた気がするのはラナンキュラスの勘違いだろうか？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第五十九話「内と外とそのまた外と」（後書き）

うん、名も無きと言っていたのに名前を付けて登場させてしまった…。

でもね？言い訳ですが名前を付けるとキャラクターに対して愛着や愛情が湧きません？

これは作者だけでしょうか…？

そろそろ簡単なキャラクターシートを作るべきでしょうか？

と考える今日この頃…。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十話「表と裏と守る者と」（前書き）

そろそろ学園側の馬鹿者共が動く切欠が欲しい…。
でも、どうすればいい？
どうとでもなるさ！だって趣味だもの！
では続き！

第六十話「表と裏と守る者と」

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　？？？

葵が学園長に勧誘紛いのことをされ、その日の内にエヴァンジェリンのダイオラマ魔法球［別荘］で模擬戦と称した欲求解消（ついでに酒乱が降臨）した日。

そして翌日には陽月姉妹がオイタして［演習場］を小破させてそのまた翌日に葵と家族の３分の１が修理に借り出された日から時間は流れて今は１２月。

それらから十数日間、葵は比較的平和な日常を過ごせていた。具体的に言うと“本業”の喫茶店を…毎朝早く大変だが…順調に営業していた。……ここで間違わないでほしいが葵的には喫茶店が本業で“裏”はあくまで副業なのだ。

ただ、もちろん平和と言うのは葵視点からだけで、学園的は一つのことを注目していた。それは先頃の大きな戦闘に、どこからともなく傭兵として投入された“九重・葵一派”のことだ。

これにより西側防衛線の危機的状況を押し返し、戦況は好転。そして葵達の活躍は同様の戦闘区域に居た魔法使いや剣士、その他によって目撃、確認された。

当時、戦闘中は苛烈な戦況によって彼らを深く気にしているような余裕は学園側には無かった。問題となったのは、そのあとだ。特段、無所属の傭兵であることを秘密にしていなかったこともあるがその事実が周囲へ知られたのだ。

傭兵家業と言えば“龍宮・真名”が居る。しかし、彼女は仮にも麻帆良学園女子中等学校の生徒だ。報酬さえ支払えば、という条件はあるものの現時点で学園生徒として登録されているのだから彼女は麻帆良学園所属と言っても…まぁ間違いではないだろう。

それに、ここの大半の教師陣や一部を除く魔法生徒は一般の学園生徒を守るという思想を持っている。一時的に所属している彼女は学園側からグレーゾーンの存在。仕事ができ、腕が立つことから徐々に信頼を勝ち取っていったのだ。

閑話休題。

そして葵一派は生徒でもなければ教師でもない。麻帆良学園都市内に喫茶店を構えているが彼らはあくまで戦闘力を有した無所属なのだ。当然、学園側の一部を除いた者は学園都市内に所属外の魔法使いが居ることに不信感を持った。

これが始まりとなり学園長は下を抑えるために四苦八苦することになる。

血生臭い大戦を教科書でしか知らない若い魔法使いが中心になっ

て“我等こそが正義である！”と言わんばかりに災いの種と疑う葵一派を排除しようと直訴してきたのだ。

学園長は若い魔法使いの考えに頭を痛める。学園長にしてみれば、そんなことを直訴されても問題が増えるだけで困るというものだ。

組織を運営する者にとって彼らの言う“排除する”などは安易で浅はかな考えとしか言いようがない。相手が敵対の姿勢を示していないのならば、こちらの利益になるように利用すれば良いのだ。それを若いのは理解していない。

今のところは学園長と高畑が中心となって古参の者が若い魔法使いを上手く抑えている。実質的に組織のトップと、ナンバー2たるその側近やその他古参を相手に反旗を翻すなど愚の骨頂だということは若い魔法使い達もわかっているのだ。

それでも自分達の信じる“立派な魔法使い”のため何か出来ないかと若い魔法使い達は考えた。“学園都市に巣食う異物を排除できないか？”と…。

その中には不思議なことだが葵に窮地を救われたガンドルフィーニ、高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣、3人の姿もあった。何やら困惑していることからそれぞれに思うことがあるようだ。

とりあえずこの場では彼らは置いておくとして…。

今まで消極的行動だが葵の周囲を探り始めた者達が居た。拠点としている喫茶店と葵を遠目から監視カメラや遠見の魔法で探りを入れているのだ。勿論これらは監視対象の葵にバレないように警戒を厳にして行なわれた。

バレていないはず。…それなのに監視映像は某犬のお父さんのCMに差し替えられているし、魔法による遠見の監視はジャミングされて人知れない山奥や全く関係ないご家庭などが映るようになっていた。

これらの事態が頻繁に起こったことで埒が明かないと判断した若い魔法使い達は目視の監視にした。それでも数分するとその者達は、いつの間にか眠らされてどことも知れない路地裏に放置されている。

当然、真っ先に疑われた葵だが彼が動いた形跡も証拠も無い。これは何らかの妨害を受けていたとしても監視者が居たから確認は取れている。ただ不自然なことに証言したのは“何故か無事だった”高音や愛衣の2人だけだったが…。

小規模な暗闘（狩り）が一方的に行なわれ始めた時、少し前から麻帆良関係者の間に流れる噂があった。それは“葵の背後には何らかの強力な組織がある”と実しやかに囁かれ始めたのだ。

所詮、噂と斬り捨てることもできる。だがこの噂、少し不自然なことにどこの誰が言い始めたのかもわからないというものだった。噂については学園長や葵本人も何もコメントしないことから真偽は定かではない。

……。

……。

そんな小競り合い程度が裏で展開していた日々だったが、今日も葵達は喫茶店営業に励んでいた。今も丁度お昼のピークを乗り越え

て一息吐いているところだ。

今店内に居るのは心地よい疲労感から店内のカウンターに突っ伏していた葵と、その隣にのほほんと腰掛けているミリエールだけだ。他は遅めのお昼を頂くために店の奥に行っている。余裕がある内に、と葵が彼女達を先に奥へやったのだ。

そうなるとここに残っている彼ら2人は店番だ。時間は午後1時半。また1時間もすれば女子大生や若奥様などがアフタヌーンティをしに来るだろう。

「はふぅ…、なんとかお昼の山場は越えたかな…」

「そうですねぇ♪今日も繁盛してましたぁ♪あとは学生さんの帰宅時間かしらねぇ？」

「その時間だと……早ければ3時間後くらいか。仕込みとかで不足は？」

「えぇとぉ……。いいえぇ、ありませんよぉ。必要十分ありますわぁ♪」

そかそか♪と葵は上機嫌だ。今日も喫茶店がそこそこに繁盛して嬉しいのだ。何よりも平和な時間を堪能しているのだろう。

ただ葵は裏で煩く嗅ぎ回る子犬や子猫がいることを知っている。情報部から報告が上がっているからだ。それらは情報部二課と三課が有形無形の方法で秘密裏に対処、処理している。

具体的には遠隔監視を科学、魔法の双方をジャミングして妨害し

た。監視者を直接、眠らせて拉致して軽く記憶操作を施して、そこらの路地裏へ放り出した。一応、事態を悪化させないためにも葵の命令で殺しはしていない。

これらの暗闘が今もあったりするが双方ともに物理的な被害らしい被害は無いので実質的に御の字だったりする。誰だって血を見るような行為は忌避するものだ。

……。

……。

時間は流れて午後４時過ぎ、いつもなら木乃香が、部活が無い日に来る時間だ。時期的に冬休みまで２週間ほど、その日も木乃香は来店した。ただ珍しいことにもう１人同伴者が居た。明日菜だ。

「ミリーさん、こんにちはー♪」

「こんにちは！席、空いてますか？」

「あらあらぁ♪良く来てくれたわねぇ♪いつものところ空いてるから、そこに座ってねぇ♪」

「「はーい！（♪）」」

午後の営業も順調。木乃香の席だけではなく、普段は客としてなかなか姿を見せない明日菜まで来たのだ。パァッと表情を輝かせたミリエールは微笑を当社比２０％アップで出迎えたのだ。

店内に少数しか居ない男性客は彼女の微笑を見て鼻の下を伸ばし

ている。その内の何人かは彼女連れで直後に足を手酷く踏まれて苦痛に悶えることになったのは……割りとどうでもいい話しか。

　指定されたカウンター席の隅に座った2人の向かいに現れたのは喫茶店のロゴ入りのエプロンをした葵だった。いつもニコニコと笑顔で迎えてくれる喫茶クレイドル店長だ。食べ物を粗末にすると拳骨が飛んでくるが…。

「今日は明日菜も一緒か。暫らく来なかったのに…」

「何よ、私は来ちゃ悪いって言うの？」

「くくくっ、拗ねるな、拗ねるな。悪いなんて思ってないよ」

「別に拗ねてるわけじゃ…」

　葵は失言を取り消すように明日菜の頭を優しく撫でて謝罪を表した。それでもくつくつと笑ってしまっているので明日菜はむ～っと唸りジト目を葵へ向けている。それでも周りからは微笑ましいワンシーンに見えること請け合いだ。

　しかし、ここで少し待ってほしい。もう1人、半ば忘れられているんじゃ？という疑問だ。その人物はジットリとその2人を少し据わった目で見ている。そんな子が居るのを忘れてはいけない。

「…むー！アスナばっかりお話ししてズルイー！私も居るの忘れてない？」

「ちょ、ちょっと？このか？目が据わってない？なんかこわい、よ…？」

「いやいや、こんなに可愛い木乃香ちゃんを忘れるなんかないって。それで何にするんだ？」

若干くろーいオーラを纏い始めた木乃香に引き攣った笑みを向ける明日菜だが、葵が場を誤魔化すように注文を聞くと木乃香のくろーいオーラが勢いを止め、収束へ向かった。

それにホッと安堵する明日菜。これ以上木乃香が暗黒方面に足を踏み入れることが無いという事実に心底ホッとしたのだ。心の中で「葵さん、ナイスッ！」なんて思ってないったら思ってない。

「むむむ？なんや誤魔化されてる気ぃするけど…、まぁええわー。私はいつものー」

「あっ、じゃあ、私もこのかと同じので」

「はいよ。ケーキセットが2つ、紅茶はダージリンだな。少し待ってな」

ホッとする明日菜と微黒化しかけた木乃香を置いて葵は注文の品を作りにカウンターの奥へと引っ込んでいった。明日菜は少しビクビクしていたが葵も漂い始めたくろーいオーラを回避するために退避したのだ。

だが葵は木乃香がなぜ、くろーいオーラを垂れ流したのかは理解していない。精々、雰囲気が悪くなった？とりあえず時間を置くか、くらいの認識だったが危機を訴える自分の勘に従い行動したのだ。

カウンターを立ち去るその背中に残された明日菜が恨みがましい

視線を送っていたが…葵は気付かなかったことにしたとかしなかったとか。

……。

「はい、お待たせ。ちょこっとサービスしといたぞ」

「わー♪クリームが多いー♪」

「嬉しくないわけじゃないけど…。葵さん、これっていいの？」

数分してカウンターの奥にある調理場から戻った葵は注文の品であるケーキセットを2人の前に置いた。2人は予想よりもボリュームがアップしていた品に片方は戸惑い、もう片方は喜びを表した。

葵がしたサービスは微黒化木乃香のご機嫌取りと彼女を押し付けた明日菜への詫びを含めたのだ。あともう一つ言うなら、よく来てくれた、という歓迎の意味も併せてクリームやケーキの中にある一部のフルーツを増量したのだ。

「ここは俺の店だ。文句は言わせない。文句があるヤツには帰れと言ってやる。寧ろ、叩き出す。……（ボソッ）家族が」

クリーム増量サービスを喜ぶ木乃香と違い、明日菜は意外にもマジメでこんなあからさまな贔屓をしていいのか？と戸惑う。だが葵は動じない。逆に文句があるなら出て行けと言う始末だった。

全体の台詞は職人質の頑固な一面を見せる男らしいものだった。ただ、2人に聞こえないよう最後にボソッと呟いた言葉が何とも…切なさと情けなさが漂う一幕だった。

「うわぁ…」「うわー♪」

そんな最後の言葉が聞こえなかった明日菜と木乃香の対照的な反応。方や呆れてジト目で、方や尊敬するように目をキラキラさせているのだ。どちらがどちらかは想像にお任せするとしよう。

……。

……。

今現在の時刻は午後7時。明日菜と木乃香は来店から1時間ほどで店を出た。いつもなら6時過ぎまで居る木乃香も夕飯の買い物をしていくらしい。明日菜も買い物に付き添うため一緒に出て行ったのだ。

因みに喫茶店クレイドルの閉店時間は他店に比べて早いかもしれないが午後7時半だ。都市の大半が学生であり寮の門限もあることから閉店時間も早いのだ。例外は教師陣と自宅登校をしている生徒、そして大学生くらいだ。

……。

午後7時過ぎ、喫茶クレイドルの前に数人の人影がある。ガンドルフィーニ、高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣の3人だ。彼らは喫茶店クレイドルを前にして何故かこのまま入るか否かでやや逡巡しているようだった。

今、逡巡しているのは相手を警戒して踏み込むことを躊躇してしまっていた。あまりにも葵一派が正体不明なため行動は慎重にもな

ろうというものだ。

やがてガンドルフィーニは意を決して目の前の喫茶クレイドルへ歩き出す。この訪問は学園長にも報告していない、彼の独断だ。こんなところで下手に刺激して葵の怒りをかってしまったら良い訳もできない。

それでも喫茶店の主に用があるので会わなければならない。

……。

……。

先頭に立つガンドルフィーニは彼らほどの実力者が世間に知られていないことを不思議に思った。あれほどの実力を持つ者なら立派（ステル・マギ）な魔法使いとなっていても何ら不思議ではない。

それなのに聞けば麻穂良では喫茶店を営み、裏では傭兵をしているというではないか。今拠点にしている拠点（喫茶店）に十年近く、それも自分達の目と鼻の先で潜伏して在住していた、とも言う。

麻帆良の影響下に正体不明の魔法使いが潜伏していた。もう一つ言うなら“闇の福音”とも交流があるということか…。それらの事実は麻帆良勢の大半に色々と衝撃を与えた。

なぜ葵は名乗り出なかったのか…。

その事情は理由を知っているであろう学園長が口を閉ざしたことでわからない。何も話さないことから葵との間に何らかの協定を結んだのか、とガンドルフィーニは最初、疑ったものだ。

実際には葵が秘密裏に孫の護衛をしていた、と正直に打ち明けられれば良かった。だが、護衛していた本人から口止めされたことでハッキリと言えないことになり、事態はややこしくなった。

学園長の望まぬ秘匿行為がガンドルフィーニらの更なる不信をかったのだ。学園長すら躊躇する理由がある、と考えざるを得なかったのだ。これも葵一派の仕業？と若い魔法使い達が邪推するのも当然だろう。

……いや、半分くらいは当たっているかもしれない。葵は面倒事を避けるために事実を秘匿したのだから。ただ、若いのが邪推して逆に面倒事が増えたのは葵の自業自得と言えなくもないのだ。

……。

ガンドルフィーニの右後ろを着いて行く彼女、高音・D・グッドマンは正義感が強い。それでも“正義の名の下に～”というほど狂信的な考えを持つほど歪んでもいない。だが悪は打ち倒すものという考えは彼女自身で信条ともしている。

つまり高音・D・グッドマンは若い者には珍しくも正しく立派（マギス）な魔法使い（テル・マギ）を目標としている稀有な魔法使いである。名誉や栄光などは二の次、正義と平和のために動ける、今の時代で稀有な人間だ。

そんな彼女がここに居る理由…。一先ず、葵の存在が疑わしいなどの理由は横にでも置いておこう。

そんな正義感の強い彼女が、先の防衛戦で葵達に窮地を救われて、まだお礼も言っていないという事実に納得すると思うだろうか？

答えはノーだ。生来の生真面目さが邪魔をして納得できないのだ。

全ての話しはキチンと礼を述べてからだと高音は思っている。それから葵の疑わしい事情を聞きだしてしまおうと考えているのだ。

その考えは若い者にありがちな真っ向勝負を彼女も好んでいるという表れだ。なまじ影使いとしての地力もあるから自分の魔法に自信もあるのだ。正攻法は力持つ者が取れば圧倒的な方法となる。

そう、力持つ者が、だ。人はそれを“英雄”と呼ぶ…。

正面から堂々と。聞こえはいいだろう。しかし、そんな青臭い行動など戦場では何の役にも立たない。最大限に役立つように使うとしたら派手に暴れての陽動か、友軍戦力の戦意向上のパフォーマンスが精々だ。

誤解が無いように言っておくが、青臭い行動を始め、先にも挙げたようなそれらが必要な要素であることは否定しない。

……。

佐倉・愛衣はパートナーである高音・D・グッドマンの斜め後ろを着いて行く。愛衣は葵に対して偏見を持っていない。正体を隠していた事実には眉を顰める思いは確かにある。それでも何か理由があると考えてしまうのだ。

あの戦いで自身は半気絶していて記憶がハッキリしていなった。だけど、それでも覚えていることはある。

肉体的にも魔力的にも疲労困憊の状態だった時、一体の鬼の攻撃

をさばききれずに一当てされて気絶してしまった。一時はパートナーの高音に助けられて戦線を後退。そこで一安心かと思ったが敢え無く敵鬼に発見された。

もうダメかと思った。一際大きな鬼がその身体に合った大きな金棒を振り上げた時は絶望感が押し寄せてきた。愛衣は朦朧とする意識の中で最後に誰とも知れずに祈った。自分はいい、でもお姉様だけは、と…。

振り上げられた金棒が襲い来るまで数秒だった。大鬼の叫び声がした。それでも衝撃はいつまで経っても来ない。ガンドルフィーニ先生の困惑した声が聞こえた気がした。抱き締めてくるお姉様の身体の硬直と震えを感じた。

薄らと瞼を開いた。ぶれる視界の先には白と青の女性が背中を向けて愛衣達を守るように立っていた。そこに現れたのが葵達だった。葵に治癒魔法を施されたこと、そのことを愛衣は良く覚えている。

助かった、と思った。治療された時は全身の力が抜けた。それと、温かかった…。葵の魔力に身が包まれた時にそう感じた。同時に葵を温かい人だとも薄れ行く意識の中で感じた。安心したら意識を手放していた。

次に目覚めたのは学園都市の医療室にあるベッドの上だった。周りを見ると心配で付き添っていた高音が居た。ベッド横にある小さな椅子に腰掛けていた高音は愛衣に戦闘の経緯を簡単に説明してくれた。

愛衣が目を覚ました時には戦いは終わっていた。葵達が切欠となり戦線を再構築、逆襲に打って出たらしい。戦いを勝利で終わらせ

たあと、葵達は一言も話さないまま立ち去ったようだ。

戦線に参加した者達は学園長に彼らは何者か、と問うた。簡単なプロフィールと顔写真を提示して、これが全てと学園長は答えた。ただし信用はできる、とのお墨付き。

お墨付きは出ているが気になることがあった。プロフィールの中に“依頼により無断で麻帆良に潜伏していた”との注意書きがあったのだ。これがなければ多少疑問を残すが信用できていたかもしれない。

彼らは端的に言ってしまえば傭兵だ。慢性的な人手不足を理解する古株の魔法使いは学園長の考えを理解し何も言わない。逆に若い魔法使いは“自分達の手で麻帆良を守る！”と考えており不満を露わにしている。

それでも葵達を悪人と断じる決定的な要素にはなりえない。若い者の中で佐倉・愛衣と高音・D・グッドマンや他数名は穏健なものだ。実際に愛衣や高音達は危ないところを直接助けられているのだから悪い印象は希薄だ。

愛衣は考えていることがある。まずはあの時、助けてもらったことのお礼。それとちゃんと自己紹介すること。

ますは知ることからはじめよう、と…。

……。

……。

ガンドルフィーニを先頭に歩く3人。彼は喫茶店の玄関を開き、中に入る。

「邪魔する…」

「邪魔するなら帰れ」

無駄に力強く即答した店長の葵。思考が真っ白になり一瞬だけ身体が硬直したガンドルフィーニ。思わず彼は…。

「あ、はい。すみません…」

来た道を引き返した…。

「えっ？先生っ」「なっ？どうされたのですかっ」

後ろに居た高音と愛衣は何が起きたのかわからずに慌てた。ガンドルフィーニも外に出た途端に自分が何をしているのかがわかり再度硬直した。今度は…羞恥で。色黒の肌が赤みかかって見えることから相等恥ずかしかったのだろう。

「って！！ちがうっ！！」

反転、急いで玄関を再度開いて一言…。ツッコムのはいいが人様の店で騒ぐのは感心しない。下手をすると営業妨害で訴えられてしまう。

「……はぁ」

なんか、面倒なのが、出現したな…、と葵は直後に思った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

少し前…。

――？？？…。

Ｓｉｄｅ　？？？

麻帆良上空、五千ｍにアングレカム。低空を偵察機、そして建物の屋上に陣取る葵ファミリーが熱光学迷彩で姿を隠し拠点周辺を密かに監視していた。勿論、一般人に扮した者も周囲に十数名居る。

「…ＣＰ、こちらデルタ２。Ｐ１（拠点）に準敵対勢力所属の３名の接近を確認。…いや待て、一部訂正する。内２名は準保護対象者だ」

ガンドルフィーニと高音、愛衣が拠点に接近するのを察知。拠点屋上には熱光学迷彩で姿を隠し、３人を監視する女が１人居る。

彼女の言う準敵対勢力とは消極的敵対している組織を指す。警戒が一つ繰り上がると敵対勢力となり積極的敵対している組織と認定される。準保護対象者というのも同じようなものだ。ただし葵個人の決定がいる。

現在の麻帆良学園は反感から一部の者が暴走している状態にある

ことから準敵対勢力に認定されているわけだ。これが決定的に敵対した場合、対個人戦闘から対組織戦闘に状況はシフトされる。

互いに譲れないモノに決着をつけたあとに、どこかで折り合いを付けて戦争を回避、ないし終結できれば儲け物だ。

『CP、了解。…こちらでも確認した。データを照合…確認が取れた。ガングロ（ガンドルフィーニ）、お嬢ちゃん（高音）、チワワ（愛衣）には手を出すな』

「…了解。それにしても最近はネズミが多いな。掃いても掃いても出てきて仕方ない」

CP担当の情報部三課第4チームリーダー、ドラセナは通信先のアングレカムから命令を下した。彼女達リーダー格を始めとしてここニ、三週間の間、二課と三課で協力して麻帆良勢監視者の対応指揮に当たっているのだ。

デルタ2のコードを名乗る彼女は同じく第4チーム所属で名前をディプラデニア・D・スタニックと言う。腰より長い髪は黒より尚暗く瞳も同様に見たもの全てを飲み込みそうな色をしている。闇を固有能力とする元悪魔の精魔奇兵である。

数日前にP9のエリアを担当していたラナンキュラス・D・スタニックと同じ第4チームの同僚でもある。そして今ここP1を担当するディプラデニアは第4チームでは間違いなく戦闘者として一番の実力者だ。

『ハハッ、そうだな。確かにそうだ。一課の話しでは麻帆良の若いのが中心になってお祭りしているらしい。笑えるだろ?』

「それは、また…。ク ク、どこの世間知らずの坊や達だ？誰を相手にしているのかを知らないと見える」

ドラセナはクックックッと笑いを噛み殺して話す。その声は心底、可笑しいと言わんばかりだ。そして、それは聞いていたディプラデニアも同様なようでクツクツと笑っている。

今はご主人様である葵に殺傷行為を極力慎むように言われているが彼女達から見れば組織単位で行動していないネズミ相手の反抗活動など“え？敵対行動（笑）？”としか考えられないからだ。

…しかし、だ。だからと言って油断だけは決してしていない。彼女達には超一味という苦い教訓もあるのだ。事実この2人、言葉では相手を嘲笑っていても瞳の奥には、どこまでも怜悧な光が宿っている。

『実際、一課と二課が上手く情報操作していて知らないからな。そのせいか不逞な監視者が後を絶たない。――…なぁ、わかるか？クソ虫共は閣下の温情で私達が優しくしてやっているのに、それを知らず、調子に乗っているのだよ』

「――…それは初耳だな。何だ、それは…？自分達こそが絶対だと信じているのか？ふんっ、不愉快だな…。一度、強めに絞めてやらないとわからないと見える」

ディプラデニアは苦虫を噛み潰したような表情をするドラセナを画面越しに見ると自分も同じような表情をしていることに気付いた。聞かされた面白くない話しに一つ鼻を鳴らして不愉快であることを示した。

残念なことに葵が面倒事を避ける意味で家族に殺傷を控えるよう指示したことが一部の麻帆良勢を調子付かせている一因になっていることは間違いなかった。この行動が浅慮な相手からは殺す覚悟もない腰抜けに見えるのだ。

そして一部の麻帆良勢が調子に乗る理由としては麻帆良学園都市の権力を前にして手が出せず自分達を怪我させること、ましてや殺すことは出来ないと変な確信を持ってしまっていたのだ。行動がエスカレートするのは時間の問題だろう。

『はんっ、ああ、その通りだ。…だが、まだだ。まだ、その時ではない。先に手を出すのは私達ではないからだ。いずれクソ虫共は痺れを切らしてバカをやらかすだろう。私達が動くのはその時だ』

「後手？…あー、大義名分というやつか？人間は何かと対面を気にするから面倒だな…」

あまり派手なことや血みどろの戦闘を好まない葵だが、そうなってしまえば好みなどと言ってはいられない。待っているのは一部とはいえ全面戦争だ。それもあるのは一方的な殺戮、虐殺…。麻帆良勢の絶対的な敗北と確実な死が待っている。

敵の全てがナギやジャックなどの世界のバグクラスでない限り決して覆らない事実。負けることが無い戦争。始める前から勝者の決まっている戦争ほどつまらないものはない。

『ふふふっ。なに、オイタをした子供を叱るのは大人の役割で義務だろう？――シッカリと教育してやろうではないか。代価は血で支払うことになるが、な？ククク』

「おいおい、怖いよ…？デルタ1…。はぁ、でもな…あたしはもっと、こう…スパッと始末したいなぁ、と思うわけよ。ご主人様は何でこんな面倒な……――――」

少々愚痴を零したディプラデニアが最後に葵の考えに疑問を投げかけようとした矢先のことだった。背筋が粟立ち本能が危険を知らせてくる。通信画面越しなのにドラセナから途方もない強い意思を叩き付けられたからだ。

意思の名は殺意…。そして出来の悪い子に優しく教えてあげようという殺意とは相容れない慈愛…。

『……ほう？聞き間違いか？私の耳には貴様が閣下の方針に不満があるかのように聞こえたな』

「――――っ！？」

あまりに唐突なことでディプラデニアは一瞬、声も出なかった。いや、彼女自身、自分がとんでもなく不敬なことを考えていたのは確かだと言ってから気付いた。自分でも家族の誰かが同じようなことを言ったら問い詰めて尋問紛いのことをするだろう。

『――――ええ？黙るなよ？なぁ、答えろよ……ディプラデニア・D・スタニック』

「――――ッ！！お、おいおいっ！？違う！違うぞ！！そんなわけあるか！目障りなのはクソ虫相手だ！そうマジになるなよ…」

どこまでも優しく慈愛に満ちた表情をしているドラセナだが優し

いのは表情だけで瞳に宿る冷たい光と身体に纏う雰囲気が全てをまるで違うものに変えていた。とてもじゃないが良い子には見せられない状況だ…。

とはいえディプラデニアも立ち直りは早い。彼女も第４チーム一の実力者としての矜持がある。あるが…このことを葵に知られたら嫌われると考えると身体が震えてしまい必死になって他意が無いことを説明、説得した。

一応、ハオ教官が訓練中に叩き付けてくる殺意に比べればまだドラセナのほうが優しいと言える。まぁ明確な殺意や殺気に優しいも何もあるのかは疑問だが…。結局は“殺す”という意思のあり方、意志の強固さがモノをいうのだろう。

『……そうか。目障りなネズミが多いせいか気が立っていたようだ。こう多いと手が回り辛い…。やはり人員不足が痛いのか…？』

「はぁ…。まぁ忙しくてイライラする気持ちはあたしもわからないでもないからな。…気にするな」

『ああ、ありがとう。人員増強の陳情は閣下に承認されたと聞く。今、［工房］では新兵共がリハビリを終えて実時間の来週には訓練生として基礎訓練に入るらしい』

これはどこでも同様だが人員不足は地味に痛い問題だった。額に手を当てタメ息一つしたドラセナは少しだけお疲れのようだ。いや、問い詰められていたディプラデニアが逆に労わるほどだから少しではないかもしれない…。

人手不足の問題は解決に向け既に動いている。司令部より陳情さ

れてから時間も経った今、［工房］内にある精魔奇兵の調整室では着実に人員確保に始まり素体となる身体の構築とその後の調整などが行なわれているのだ。

新規として先に精魔奇兵に生まれ変わった者達は兵舎（という名の屋敷）にて新しい身体に馴染むまでリハビリ生活をしている。魔法球内での生活とはいっても施設も充実しているので下手すると外の世界よりも過ごし易いかもしれない。

そして、リハビリ生活も時期に終わる。アイリス達が生まれ変わった時とは違い、今では蓄積された情報により確立された技術と最適化された手順で促成教育が可能となっているのだ。

これには時空間技術などを得意とする葵謹製の特製魔法球が時間を加速、拡大しているからこそ時間的拘束を半ば無視することが出来るのも大きい。その弊害で葵自身が多少のんびり屋の考えを持ち得たのだが…。

葵自身の言によれば「時間なら腐るほどある。ならばいつやっても同じだろう？」というものだ。着実に長命種の思考を手にしつつあるようだ。これなら家族の手助けもあるので悠久の時の中で狂い死ぬこともない。

話しは多少逸れたが何にせよ、だ。人員不足が解消されるまでが勝負であり、もう時期その問題も解決されることになるのは彼女達にしてみれば喜ばしいニュースだった。

「そうか。なら――――…ん？待て、仕事だ」

『――――…ＣＰ、了解。…確認が取れた。相手は先日、ゴミ捨て場

に放り込んだエネミー１３だ。今回も条件は非殺傷だが、それ以外は独自の判断で事に当たられたし』

久しぶりに雑談に興じられると思えば、これだ。まったく…、と零す２人だが纏う空気は戦闘のプロのそれだ。思考を切り替える速さは流石だった。

新たに現れた不審者は３日ほど前に気絶させて軽く記憶抽出と操作を施した人物だ。記憶から例の馬鹿共の１人とわかった。手間を取らせた割に大した情報を持っていなかったので腹癒せにゴミ捨て場（沢山の生ゴミ）にブチ込んだのだ。

「デルタ２、了解。少し仕置きしてくる」

『ああ。貴女に天下無双の武運を。通信終わる…』

「おう、ありがと。――さて、行くか」

通信を終えたディプラデニアは静かにエネミー１３へ接近する。相手が前回も大した情報は持っていなかったことから今回も期待は出来ない。それでも手順通りに情報を抽出しようとするのは下手なことで重要情報を見逃すのを防ぐためだ。

――まぁ役に立たなければ今度は良く肥えた肥溜め（糞溜め）に捨てるだけだが…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第六十話「表と裏と守る者と」（後書き）

やばい…。またキャラが増えた…。一発キャラですがね！
これからもマジメにキャラシートの更新を考えなければならないかもしれない。
それにしても一発キャラのやり取りを書くのが楽しくて堪りませんな。
まだ続くかは別にしても似たようなことは別で書き溜めてもいいかもしれないです。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十一話「来客と交渉と雑談と」（前書き）

アニメＩＳのラウラさんの可愛さに作者が悶え死にそうですｗｗ
クラリッサさんも想像以上にいい味出してたのは嬉しい誤算！
本格的に葵をブチ込んでみようか、と検討中なり…。
半分冗談だけどね！あははははーっ！

では今回ですがまるまる前回の続きだね。
では続きをどうぞ！

第六十一話「来客と交渉と雑談と」

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

本日の営業を終えてもう閉店準備中だったけど閉店間際に何と言うか…。うん、変なのが1人と大きい嬢ちゃんと小さい嬢ちゃんの2人が入ってきやがった。まぁ、こいつらに構わず閉店作業を皆は続けているけどさ。

【…建物内に居る総員へ。警戒よろしく…】

【【【【【…了解…】】】】】

とりあえず何が起きてもいいように建物内の警戒態勢を一つ上げておくのは常識でしょう。オイタした場合は閉店作業中の皆と階上に居る皆、それに屋外で警戒している皆で歓迎させていただきますとも♪

今日、ＣＯＳ－ＭＯＳは稼動データ収集のために、少し遠くまで偵察活動という名の散策に出している。外を歩かせるだけでも有用なデータを得られるもんだよ。そろそろ帰ってくる時間だから手早く終わらせないと…。

そういえば、この3人は一体、何をしに来たんだ?正義を盲信する者には嫌われていると自覚している俺だが、こいつらが直接来る

とは予想外だった。嬢ちゃん達だけだったらわかる。何度もお客様として来ていたからな。

それが今日はガンドルフィーニ君も連れて、いや、連れられて、か？まぁどっちでも構わないが…。はっ！？まさか“少数精鋭の一点突破（笑）”などという、笑わせてくれる事態なのか！？こ・れ・は！

いや、それは無いかー…。

まぁそれはいいとしても、だよ？教師のガンドルフィーニ君はともかく嬢ちゃん2人は中、高の学生だろ？もう7時半なんだけど…寮の門限とかいいのかね。いや、ガンドルフィーニ君が許可を出しているから問題ない、のか？

男性教師が夜にまだ幼い中学生と成熟しきっていない高校生を連れ回すのはお兄さん感心しないなぁ…。

「それで何のようだ？若ぞ…ガンドルフィーニ君。綺麗どころ侍らせて自慢か？自慢なのか？」

「？？？――ッ！？違う！！私には愛する妻も子も居る！彼女達は…うんぬんかんぬん！！」

おい？必死に誤解を解こうとしているところのロリコンフィーニ、もとい、ガンドルフィーニ君や？後ろの2人は照れているようだが…本当に何もないのだろうな？まさか綺麗だとストレートに褒めたことに照れているわけではあるまいし…。

「…と、いうわけで彼女達は自分達の意思で同行したのであって他

意はないのだ！わかったね！？」

あ、あれ？いつの間にか説明が終わっている、だと？全く聞いていなかった…。最後の台詞だけを聞くと強要されたのではなく志願したわけだな？……そこまで強い敵意を向けられていたとは気付かなかった。

俺のことを何も知らずに来るとは…。生身で溶岩に浸かるようなものだと気付いているのかね、この子達は？若い身空で、ある意味、特攻任務のようなものなのによくやるよ。本当に、さ…。

はぁ、可愛い子達だから怪我させたら大変だと思って準保護対象者にそるように家族へは通達したのに…。男の純情をプチッと踏み潰された気分だ。それも2人してグリグリと傷を広げるように磨り潰す感じに…。

「こほんっ、では本題だがまずは先日の救援に感謝する。君達が来なければ…」

「あぁ、いい、いい。仕事だから助けたまでだ。組織としての感謝などいらんよ」

「……そうか」

報酬や言葉だけの感謝は学園長が既にしたからな。今更、言葉だけで感謝されても困るだけだっての…。どうせ感謝を示すならモノを出せというんだ、モノを。金銭とかはいらないから出来れば大量の資源などがいいな。

あ、土地の権利書とかでもいいよ。全てを食い潰す勢いで採掘さ

せていただきますね、はい。新世界の奴隷とかの人材？はいらない。うん、人はいらないよ。今も新しく家族になる人が生まれ変わっているのだから間に合っています。

はぁ…。それにしても美少女と言ってもいい2人から敵意を向けられることをした覚えはないはずだけどなぁ。志願してまで俺を殺したいのか？そんなに正義が大事か？崇高なのか？偉大なのか？他所でやれってんだ…。

「では私個人で感謝するのは構いませんね？」

「は？嬢ちゃん、何を言い出す…」

あれ？敵意じゃないの？……すっかり正義信者の1人と思ったのに何気に広い視野を持っていたようだ。それに個人的な感謝と言いますが何をしてくれ……いや、学生にモノを求めるのは無理だな。

「嬢ちゃんではありません。高音・D・グッドマンです。それと、ありがとうございました。貴方のお蔭で助かりましたわ」

「……だから、そういうのはだな…」

むぅ…。ここは一度ハッキリと言ってやるべきだろうか？こいつらと馴れ合うのは感情的に抵抗がある。それも正義感溢れる男と生真面目お嬢ちゃんだ。後者はまだいいよ？俺は女の子には優しい…というか甘い？からね。

それもあるからエヴァちゃんじゃないけど、それなりに女子供の命は尊重しようとは最低限考えてもいるつもりだ。でも、仕事と割り切って助けた行為に感謝されても…ねぇ？困るでしょ？

「あ！あのっ！」

「……今度は小さい嬢ちゃんか。何だぁ？感謝だったらいらんぞー…」

「えっ！それはっ、あれ？…ダメ、なんですか？」

突然、割り込んだ割にネタを用意してなかったのか…。わたおたっ、わたおたっ、と落ち着きがないし、クリッとした目が緊張で潤んで、きょろきょろしている。……うん、何かの小動物を髣髴とさせる。

……あー、チワワだ、チワワ。小さい嬢ちゃんはチワワの子犬を連想させるんだよ。

「……嬢ちゃん、この可愛いチワワは何だ？」

「嬢ちゃんではありません。高音・D・グッドマンです。この可愛いチワワ…もといこの子は私の大切なパートナーの佐倉・愛衣です」

うん、知っている。名前はあの防衛線の時に聞いた覚えがある。気になって調べてみたら小動物の印象からは想像も出来ないほどの秀才だった。お兄さんは努力する子は好きですよ。女の子限定だけどな！

麻帆良学園のデータベースから独自に情報を引き出していた時にデータ上の裏側に秘密のバックドアなんかも仕掛けたし。これで誰にも気付かれることなくいつでも出入り自由だ。……全部アンがやってくれたんだけどね。

暫くの間、傭兵活動することを決めてから学園側の重要人物や構成員、ついでに対外防衛マニュアルなどの情報は出来る限り収集したさ。

そういえば年間を通した収支表なんかもあったな。表とグラフを見ると学園長はエヴァちゃんの管理費で苦労しているようだ。

エヴァちゃんは元お姫様、いや今は真祖の姫君か。とにかくそういう気高い人だから美食家で舌が肥えているから食費がやたら掛かるんだな。それに隠れゲーマーでもあるから娯楽用のゲーム機やソフトで散財していたようだ。

この収支表を見た時、涙が出たね。学園長に同情する気は全くと言っていいほど無いけど涙が出たね。内心では学園長乙ｗｗって笑っていたけどｗｗｗ

まぁそんな学園長が居る組織でも手は抜かない。麻帆良を仮想敵組織とした対応マニュアルはウチの組織（ファミリー）でも十分に検討、構築したなぁ。組織上層部と現場隊長陣で議論が白熱して一徹、二徹は当たり前だった。今ではいい思い出（？）だよ。

今、そんな話しはどうでもいいか…。

「…ふむ、留学中にオールＡを取った、あの秀才か」

「ぁぅぅ…」

「あら？ご存知だったのですか？」

皆さん！チワワが、違った、愛衣ちゃんが照れています！本当のことを言っただけなのに彼女、はにかんで照れてますよ！両手の指をチョンチョンしている姿が愛らしいです！可愛い子はこれだから困るな！可愛く見えて仕方が無い！

まっ！俺の家族の可愛らしさ！可憐さ！美しさ！には、勝てんがな！！……少し愛衣ちゃんにクラッとしたのは気のせいだと思いたい。俺はロリコンじゃない！何度でも言うがお姉さん好きなんだ！

「……学園長からの資料で、な。一緒に仕事をすることは、まず無いが麻帆良に居る魔法使いの実力は把握している。同士討ちなど笑えないからな」

「待ってくれ。私達は君達のことを殆ど知らされていないのだが？」

「ガンドルフィーニ君…。そういうことは学園長に聞きなさい。タカミチ経由でこちらの資料は回しておいたから」

「む…」

コイツ、資料に関しての返答はノーコメントか…？ふむ、こいつの態度を見るに俺から提供した資料は確認済みのようだ。しかし、それだけでは信用できないから直接、確認に来た…といったところか。

まっ！ダミー情報が多数乱れ飛んだ偽造書類だけどな！！バカ正直に俺の個人戦力を提示するわけないじゃないか！！ただでさえ人員増強して戦力強化中なんだからな！あははは♪

そうそう新しい家族である精魔奇兵の募集人数なんだけど当初予定していた１１７０人以上になった。うん、過去形でゴメン、本当にゴメンナサイ。まさかあんなに応えてくれる精霊達や悪魔達が居るとは思いもしなかったんだ。

もうね？俺が気付いたらね？一万の…ウソです。一万八千と飛んで十八人になっていました。元の精魔奇兵２３４人の７７倍になったね！こんなに人員増強してどうするんだよ…。家族が増えるのは歓迎だけどね！……マジどうしよう？

まだ精魔奇兵化したのは五千弱だけど皆の住居はどうするか？一万強は［工房］で衣食住を賄えるし十分なものを用意してある。でも残り八千人余りはどうすれば…？地球各地にセーフハウス的な秘密基地でも造る、とか…。

……あー？んー？えー？

……いや、待てよ？そうだよ！いいところがあった！工事業部品や食糧生産のプラントがある場所が！月だよ！月！必要な生産ラインが確立された月基地なら多少多くても収容出来るじゃないか！

もう当初の予定通り１１７０人を残して後の皆は一定の訓練と実戦を潜らせてから月へ転移してもらおう。今朝方、月に居る自動人形（オート・マータ）が転移門（ポート）を設置したと通信があったらしいし、とりあえずの移動に問題は無い。

……それでもなー、これで解決だと思うだろう？気になることがあるんだよ…。自動人形が通信の最後に俺への伝言を残したらしくて、その内容が「楽しみにしていてください…」だったらしい。何

を楽しみにしろと言うのか？サッパリわからない。

艦隊作製と定期的な物資生産を最後に俺は何も頼んでないはずだしなぁ…。一応、自動人形には施設の管理を頼んだけど、それだけだよな…。あとは“独自の判断で好きにしていい”と指示とも言えない指示しただけだしなぁ。

……まぁいいか。補充人員であり新しい家族の衣食住の問題も片付いたし、少し気楽に考えると月に居る自動人形達もそれとなく楽しんでいるようだしな。

閑話休題…。

それよりも目の前に居る3人のことだ。並列思考で他の問題を考えることが出来ても目の前のこいつらが何をしたいのかがわからないと対処のしようがない。

話しの切欠に助けられた感謝を持ってきたのか純粋な気持ちなのか…。まぁ嬢ちゃん達2人は後者だろう。この子達は根っからの生真面目さんのようだからな。ガンドルフィーニ君は……わからん、な。

まぁ男の気持ちなどわかりたくもないけどね！

「……タカミチ先生とは知り合いなのか？」

「私も気になりますね。どのようなご関係なのですか？」

「あっ、お姉様もですか?私も知りたいですっ」

こいつら…。詮索屋は早死にする、と普段なら忠告ところだけど…。むぅ?まぁ、ここで変に目くじらを立てることも無いか。若いのがピーチクパーチク囀ったところで痛くも痒くも無い…。

当然、内容は濁して話すが、ここで少しタカミチとの関係を語ってみせればガンドルフィーニ君はともかく嬢ちゃん2人は俺への警戒心を緩めるかもしれない。幸い、3人は少しでも情報を得ようと聞く態勢に入っている。

はぁ、閉店作業中だから手早く終わらせようと思っていたのに存外に梃子摺るものだ。早く帰さないと晩御飯の時間に触るからな。サッサと話すこと話して帰ってもらうとしよう。

「……ふむ。タカミチが少年だったころからの…まぁ、古い馴染みだな」

「古い馴染み…旧友というものか。なるほど…」

「ほへぇ、あの高畑先生とお友達だったんですかぁ…」

「んー、友と言うより弄り易いヤツ?アレで少年の頃はワタワタしていて可愛げがあったんだがなぁ。くくくっ、今ではあの老け具合だ。可愛げが無いったらない」

新世界のヘラス帝国で事務仕事や「完全なる世界」の炙り出しをしていた頃の話しだ。ガトウの連絡員としてタカミチが帝国へ来た時に毎度のようにからかってやったんだが…うん。実にからかい甲斐のある少年だった。

まぁ先程言ったように今では年の割に老け顔で精神のほうも妙に達観した可愛げの全く無いツマラナイ人間になってしまったがな。本当に残念だよ。

「……何だか、その物言いだと、まるで貴方のほうが年上のように感じますわね」

「何を言っているんですか？お姉様。九重さんはこんなにもお若いのに、そんなこと…」

「はぁ…嬢ちゃんの目は節穴か？まるでも何も実際に俺のほうが年上だ。問題ないよ」

「あるわけない…って、え〝っ？……えぇぇぇーーっ！？本当ですか！？本当なんですか！？本当なんですね！？うわっ！うわっ！？」

「愛衣っ！？お、落ち着きなさいっ！この人の理不尽なまでの年齢詐称には驚きですが！是非とも若さの秘訣などもお聞きしたいものですが！落ち着きなさい！愛衣っ！」

小さい嬢ちゃんも大きい嬢ちゃんも、いきなり叫ぶのは無いと思うなぁ。

はぁ、まったく…。この嬢ちゃん達は俺の何を見て何を理解して何を言っているんだ？いくら俺の見た目が変わらないとしても身に纏う雰囲気で最年長であることがわかると思うんだけどな。

……もしかして俺にはそんな雰囲気が無い、とか？今も俺は若造ですか、あー、そうですか。いや、でも、もしそうなら俺はまだ若

いということになるのだろうか…。年寄り扱いされるのはムカつくが若造扱いされるよりはまだマシ…か？

うむ。なんとなくプチパニックに陥っている嬢ちゃん達は放って置いてだな。寧ろこのまま話しを濁してお帰り願いたい。そろそろＣＯＳ－ＭＯＳも帰ってくるしね。

…うん、今はガンドルフィーニ君に一つ確認したいな。

「ガンドルフィーニ君、一つ聞きたいのだが、君の班はいつもこうなのか？」

「い、いや？そんなことはない…？今日はたまたまだろう。あぁ、たまたまだ…」

信用できねぇ…、と思ったのは俺だけではないはず。やはり女性というものは時代を問わずどこの世界でも若さをどうやって維持するかなどの美容に関係しそうなことが好きなようだ。今もプチパニックが治まっていないようだし…。

美容関係はモデル仕事ならともかく俺のように普通の…なんだよ？俺は“普通の男”だよ！文句あんのか！？コラッ！！んんっ！ともかく普通の男には関係無いことだから興味も薄いんだよ。だから理解出来ない。わからない。

女性の執念は怖いなぁ…。

「ゴホンッ。あー、ここからが本題なのだが君…貴方？は今後も麻帆良に所属することは無いのか？」

「無い。ハッキリ言うなら俺には学園に所属するメリットが何も無い」

「メリットならあるさ。麻帆良の庇護を受けられる。その他にも便宜をはかることが…」

本題も何も俺はお前達に早く帰ってほしいんだよ。それに“所属のメリット”だぁ？消極的協力態勢の契約や同盟なら未だしも…。コイツは俺に、俺達（家族）に対して“麻帆良へ降れ”と勧めてきた。

フザケルナ、という思いが無いかと言えば嘘になる。学園に明らかにしている戦力は俺を含めて４人。確かに総戦力は秘匿しているさ。それでも“たかが４人”と侮られたと思うと腹が立つ。

家族の皆が勇敢だ、それを誰もが認めなくても俺だけは認める。でも…それに引き換え俺は臆病者だ。だけど負けず嫌いなんだ。あとはまぁ家族の安全と生きることを優先してきたから俺自身が我が儘でもある。それは自分自身で自覚している。

そんな俺に目の前の男は麻帆良傘下に降れ、とほざく。はぁ、本当に腹が立つったらない。――いや、わかっている。ガンドルフィーニ君は善意で言ってくれているんだろうってことは…。

でも――素直に言いなりになると思うな。家族は当たり前としても友人や気に掛けている人にはある程度の優しさは見せよう。だがそれ以外の有象無象（例え嬢ちゃん達だとしても）に…指図されるのは我慢ならない。

このような…ある意味、俺達にケンカを売るような物言い。善意

からだとしても無謀にも程がある。無所属なのには理由があるかもとは考えただろうに…。

…だが同時に、この行動も仕方ないと考える俺もいる。こちらも麻帆良側に明かしていないことが山ほどある。その一つが戦力の秘匿だし…それに今も話せないことが増え続けているのがなかなかに笑える。

一層のこと俺は“自分の組織（ファミリー）を持っています”なんて正直に言えたらどれだけ楽だろうか？世界の異分子たる俺達自身を隠すことが無ければ自由に行動できる？　仲良く手に手を取っていられる？

……ふんっ、何を馬鹿な。そんなことが出来るわけ無い。人類は異分子の悉くを排除してきた。そう、全てを排除することで繁栄してきた種族だ。手を取り合うことが出来ても、それは一時的なものだった。

時々、稀に理解を示す一部の人間が居るが、それは本当に世界全体から考えれば少数だ。1人2人の異分子なら受け入れられるだろう。少なくとも表面的には、な。だがそれが多数になると大多数の人間が拒否反応を示す。

その人間の中で魔法使いなどの特殊な人種は、その拒否反応が顕著に現れる。それは一般の人間から考えて魔法使いという特殊な存在は秘密主義者だからだ。それは一般人に比べて圧倒的に個体数が少ないことが関係している。

個体数が少ない。それは時に仲間意識が極端に強い者を生む。ハッキリ言うとその考えが悪いほうへ昇華して歪んだ魔法至上主義者が現れることがある。そして主義者は大小あれ必ず排他的思想を持

っている。

最も、その思想はMM（メガロメセンブリア）本国の上層部などにみられるものだ。若い魔法使いは上層部が公表する“英雄像”が“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”だと信じて気付かない内に傀儡と化す。度し難き盲信だ…。

あー、一部の並列思考が逸れたけど…うん、本当に笑える…。くくくっ…。

いや、でも“この世界の人間は優しいかもしれない”…。だって、［ネギま！］の世界だし。赤〇先生の世界観は優しいよ。本当に…。先程、言った少数の人間はこの世界では少なくとも一般の人類の半々くらいにはなるんだからな。くくくっ。

……それでも俺は“俺の世界を守る”ために決断しなければならない。それが家族と俺を守ることになると信じているから…。

「なるほど…。しかし、どれも俺達には無意味だな。障害となるモノは全て実力で排除するだけだ。くくくっ！」

「ッ……！」「「……っ」」

目の前には俺の台詞にビクッと反応する3人が居た。プチパニックを引き起こしていた嬢ちゃん達も騒ぐのをやめてこちらを凝視してくる。同時に店内の温度が急激に下がったように感じられた。

家族の皆が警戒を一気に引き上げたようだ。目の前の3人は気付いていないが店内に居る者は、さり気無く各々に間合いを詰めて一足飛びで3人の首を刈り取れる位置に居た。階上に居る者も似たようなものだろう。

今のこいつらを見て感じたことと言えば「何を今更…」という思いだけだった。相手も俺が傘下に降らないのは理由がある、とは考えているかもしれない。でも、それならそれで暴走している馬鹿者共を抑えてから来い、というのが俺の気持ちだ。

日常の表面的には被害らしい被害は無いけど裏では魔導具（マジックアイテム）を触媒にした遠隔透視での不当な盗撮。麻帆良学園都市の監視ネットワークを使った徹底的な尾行や監視。

これらが裏では行なわれているのに敵対しないだけありがたいと思えというものだ。無論、全て妨害している。一応、長く生きているから気は長いほうだと思うが、ここまで虚仮にされると正直イラついてくる。

大体、政治的な問題が何かあれば新世界の帝国のテオかアリアドネーのセラスちゃんを頼るさ。どちらの国も古い知人が多いからな。

……まぁ、逆を言うと旧世界では政治的立場が安定していないとも言えるんだがな。それでもいざとなれば世界移動するか新世界に行ってほとぼりが冷めるのを待てばいいだけだ。何も問題は無い。

故に俺達には恐れるモノはほぼ無いはすだ。俺は無恥でも、まして無知でもないので断言はしない。俺達は常に敵を意識して警戒して生き残ることと安全を最大限確保する。傲慢も無謀もいらない。

…と、ここまで並列思考の隅で考えていたらガンドルフィーニ君は懐に手を入れて周囲を警戒しているし、嬢ちゃん達は周囲の雰囲気をやっと察したのか互いに身を寄せ合っていた。

しまった…。怖がらせる気は無かったんだけど、思った以上に警戒させてしまったようだ。戦争時代と違って平和な時代は威圧の調節が難しい。何で強者が弱者を気遣う結果になるんだ？それも準敵対組織の人間を…。

「あぁ…嬢ちゃん達？震えるな、怯えるな、あとずさるな…。別にところ構わず暴れる無法者というわけではないのだから」

「「……がくがくっ！ぶるぶるっ！」」

聞いちゃいねぇし…。いや、油断している時に“気”に当てられたからって怯え過ぎだから…。

はぁ、ここにハオとユエが居なくてよかったかもしれない。２人ともお願いしない限り敵には容赦が無いからなぁ。

今の彼女達は［工房］内の施設を十全に使って新しい家族達の訓練をしていて手が離せないんだ。オリビエ達も偽体に入ってハオ達を手伝っている。ミリー達は俺と喫茶店の仕事があるから手の空いている時だけ手伝ってもらっている。

それに先輩精魔奇兵としてアイリ達親衛隊も総出で教官の職務に励んでくれている。親衛隊だけじゃなくて緊急処置として手の開いている家族は皆、教官をしている。

店内に居る子達が少し重めの警戒を示しただけでこの３人は額に汗を滲ませて緊張を表している。これじゃ弱い者イジメじゃないか…。こんなので麻帆良は大丈夫なのだろうか？

「はぁ…。ガンドルフィーニ君…」

「……何、かな？」

だから、お前も警戒し過ぎなんだって…。そんなに緊張していたら身体が硬直して即座に動けないぞ？

緊張は神経も磨り減らすしさ。もう少し気楽に……って、あっ。そうか、店内の子達が警戒を解いてないから緊張が解けないのか…。すまんね。はーい、みんなー、おちついてー。…はい、もう、だいじょうぶだよー？

「はぁ、失礼…。それで何かな？」

「君の班はいつも、こう…」

「ちがうっ！今日はたまたまだっ！そのはずなんだっ…！」

緊張が解けた途端に元気だな、お前は…。それにたまたまとは言うが信じられないって。俺が知っているのが今、目の前で緊張から解放されてホッと一息ついている嬢ちゃん達の姿だけなんだからさ。

家族の中では一番温厚な俺だけど今の2人を見て信じろってほうが無理じゃね？

「……こんなので学園は大丈夫なのかね？」

「……」

ガンドルフィーニ君は黙秘ですか…。あー、そうですか…。どうでもいいがその滝のような汗を拭きなさいって、床に垂れているん

だよ…。せっかく皆が閉店掃除したのに二度手間じゃないか…。

「もう、帰れ…。はぁ…」

「あ、ああ…。もうこんな時間か？邪魔したな…」

また改めて来る、と言うガンドルフィーニ君の後に続いて嬢ちゃん達も続いて出て行く。客が帰ったことで建物内に居る皆の警戒が一段下がったのを肌で感じる。俺の言葉が切欠で今まで空気がピリピリしていたのよ。

結局、こいつらは何をしに来たんだ？嬢ちゃん達は生来の生真面目さから礼が言いたかっただけだろう。３人に共通した来訪の理由を考えると……。もしかして俺の正体の見極め、か？敵対するかの確認もあったのかな？

はぁ、面倒なことが増えなければいいなぁ…。あ、今日の晩御飯は何かなぁ…。現実逃避だけど今は無性にお腹が空いた気がした…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良学園都市大通り…。

Ｓｉｄｅ　ガンドルフィーニ

喫茶店を出て２人の少女を連れて、ただ歩く。日本の冬、日の入

りは早い。既に日が沈み一つ二つ星も出ている。今夜は雲も少ない快晴で星も良く見える。大通りを進む彼らの頭上には欠けた月が爛々と輝いていた。

「高音君、彼と話してみてどう思った？」

後ろを歩く高音君に九重・葵と直接、話した印象を聞いてみた。このあとに事後承諾になるが独断で彼と接触したのだから、せめて学園長へ報告は必要だ。そのために私自身で感じたことを自分なりに考えて整理していたが他の人の意見も聞いておきたかった。

「…正直に言って、わかりません。冗談を言う軽薄な態度。救援のお礼をしようと思えば、仕事だからと割り切った考え。全体を通して面倒だと言わんばかりのお座成りな対応をしていました。……それに私のことを終始、嬢ちゃんなどと…何度言っても直してくれませんでしたし、名前くらい呼んでくれても問題は無いと思うのですし、あの人は女性の気持ちをもう少し理解してくれてもいいと」

「た、高音君？」「お、お姉様？」

一気に話しきろうとする高音君だが前半はともかく後半は愚痴に聞こえた…。佐倉君も驚きに目を見開いているぞ？高音君は彼に何か思うことでもあるのか。もしかすると彼のふざけた態度がマジメな彼女から見ると気に入らなかったのだろうか？

「…こほんっ。失礼致しました。――ですが、先生が勧誘されたあとは店内の雰囲気がガラリと変わりました。あれほどのプレッシャーは感じたことがありません…」

「そ、そうですよね？わ、私も身体の震えが止まりませんでしたー

…」

「むぅ…」

それは私の失敗だったと自覚はある。下手な勧誘は互いの利益になりはしないということだな。彼らも理由があって傭兵をしているのだから、そこをもっと考えるべきだった。慣れないことはするものではないな。

あの提案をしてから店内の気温が一気に下がるような錯覚と既に敵の間合いに入ったような危険な空気を感じた。あの時、気付いたら背後に二つ、出入り口に一つ、左右に二つずつの複数の気配がプレッシャーとなって圧し掛かってきた。

首の後ろがチリチリとする感覚に思わず懐の銃に手をやっていた。私がその事実に気付いたのは彼に話しかけられた時だった。不思議なことに危険を訴えていた気配は何も無かったかのように霧散していた。

狐に抓まれた気分とはこういうのを言うのだろうか？確かに気配は感じた、と思ったのだが彼は何も無かったように振舞っていた。

気のせい、だったのか？いや、しかし、学生の高音君もそう感じていたようだった。まして将来が有望としても魔法使いとしてはまだ発展途上の佐倉君まで…。ならば事実と考えるのが自然か。

あれは恐らく警告の意味も含んでいるのだろうな。ふむ、既に手遅れかもしれないが下手にこれ以上刺激することは危険だな。学園長の言うように適度に付き合うのがいいようだ。

「…私達が確認を取れているのは葵さん自身から提出されている自己申請から本人とハオさんにユエさん、そしてＣＯＳ－ＭＯＳさんの４人（内１体はロボですが…）だけです。それなのに――あの場に居た人達からも只者では…いえ、何か異質な気配を感じました」

「そうか、高音君も感じたか。人にしては歪な気配だった…。あのプレッシャーだ、それ相応の実力を持っているのだろうな。まったく学園長に報告することが増えたのはいいことなのか悪いことなのか…」

あの場で受ける威圧感は人とは思えないほどの意志力が込められていた。それを数秒とはいえ叩き付けられた私達としては疲労困憊の思いだ。

私はまだいいとしても高音君と佐倉君には申し訳ないことをしたかもしれない。あの威圧は彼らが余計なことをするな、という警告の意味でやったのは予想がつく。もしあのまま緊張が破裂して戦闘になったら間違いなく屍になるのは私達のほうだった。

今も思い出すだけで手や腕、身体が恐怖で小刻みに震えそうになる。何をしても彼らに勝てるビジョンが浮かんでこない。敗北することは想像に容易いのだが…。

はぁ、ただでさえ無断で行動したことに加えて藪を突きかけたことも自己報告しに行くのに、更には彼が自己申告した以上の戦力をまだ保有している可能性が出てきたことも併せて報告しなければならなくなった。

いや、戦力のことはある意味、貴重な情報となるか。いや、それらを判断するのは学園長の仕事だ。私達の領分を大きく超える問題

だろう。

　こうなると若い連中が先走らないようにシッカリと言い聞かせておく必要がありそうだ。下手な行動を取って麻帆良を危険に曝すようなことはできない。

「お姉様達はすごいですねー。私はただこわいかな、って思っただけなのに…」

「佐倉君、その感覚は大事なものだ。その感覚は生き残る上で必要だからな。努々忘れないように。いいね？」

「は、はいっ。忘れませんっ」

「もう、愛衣ったら…。ふふふっ」

　私の言葉に必要以上に力む佐倉君の姿を見て高音君と私は苦笑してしまった。努力を怠らない直向なそのあり方に私達は何か眩しいものを見る目を向けていたのだ。

「しかし九重・葵、か…。敵にはしたくないものだな」

「えっ？葵さんはこわいけどいい人だと思いますよ？私は怪我も治し、て…？？？あっ！わ、私っ、結局、お礼言えませんでしたよっ！？ど、どうしましょう！？お姉様っ！」

「佐倉君、彼はいいと言っていたのだから気にしなくとも…」

「「よくないっ！！」」

「えっ!?佐倉君だけでなく高音君もなのかい!?」

彼女達をそれぞれの寮へ送る道中に今日のこの子達は調子がおかしいと思ったのは私だけだろうか?

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ガンドルフィーニ

おまけ…。

……。

「…マスター、ただいま帰還しました」

「うん、お帰り。地下にメンテベッドが設置してあるからそっちで休んでね。…それと、今日も楽しかったかな?」

「了解しました。…楽しいかはわかりませんが――茶々丸が猫をたくさん紹介してくれました」

「そっか、そっか♪ネコさんには懐かれたかな?この時期は寒いから擦り寄ってくるんだよね」

「はい――あ、いえ、私は子犬に懐かれました」

「え?」

「え？」

第六十一話「来客と交渉と雑談と」（後書き）

ガンドルフィーニ君がいいやつだ…。そこそこに面倒見もいいみたい。
書いている作者自身が驚きです。
少しばかりそういう補正は入れたつもりですが正しく作用しているかは疑問。
高音のキャラ性が掴めないのが痛かったですねぇ。
作者個人では好きなキャラの１人なんですが残念！所詮は脇役止まり…。
想像と妄想とネギま！愛で乗り切るしかないのか…！？

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十二話「蠢く影と情報部と会議と」（前書き）

生存報告がてらに更新！
情報部の活動を書きたいと思った。後悔はないが反省はしている。
当作品、薬味（ネギ）が来るまでおよそ1年です。
ここまで原作主人公が絡んでこない作品は少ないのではないかと。
はぁ、このままでは１０話か２０話先に登場するかも…。
一応、あるところで時間を一気に進めます。
このままじゃマジで原作主人公が登場する前に葵が別世界へ飛び出しそうだから！
では続き！どうぞ！

第六十二話「蠢く影と情報部と会議と」

――？？？…。

Ｓｉｄｅ　？？？

深夜の麻帆良学園都市のとある場所にある建物。その建物自体は学園都市内のどこにでもある洋風建築の外観をしている。注目するのは建物ではなく、建物の中に次々と入って行くフードを目深に被った人間達が居ることだ。

どこからともなく現れる彼ら、彼女らは皆、魔法使いらしいフード付きローブで全身を覆い隠し、個々に魔法使いらしい魔法の杖を手に持ち、それを歩く度にカツンカツン、と地面に小さな音を立てている。

誰もが寝静まる時間。こんな深夜の時間帯に、そんな怪しげな人間が集まる。それだけで不気味なサバトでも行なわれるのでは、と一般人に見付かったら疑われても文句は言えない。言えないはず…。

いや、言えないだろう？胸を張り自信を持って堂々と言える奴が居るとするなら、そいつは――真正の変態だけだ。そんな変態はイヤ過ぎる…。

だが真に残念なことに怪しげな人間達は格好だけではなく本当の意味で魔法使いだったことか。

それを証拠に深夜とはいえ酔っ払いの1人や2人と道で擦れ違うことが稀にあった。それ以外にも都市外への大通りには少ないが人の流れもある。それなのに何もおかしいことも無く“ただ擦れ違うだけ”だった。

怪しげな人間が同じような格好をして深夜の都市内を徘徊している…。

そんな怪しい人物と擦れ違うのに人は目もくれない。たとえ酔っ払いといえどもそれはおかしい。通報されないにしても驚きに目を見開いたり、疑わしげな目を向けてもいいようなものなのにまるで“普通のこと”だという風にして誰も注目もしない。

これは魔法を秘匿することを念頭に置いている魔法使いの常識の一つ、認識阻害魔法だ。

この魔法で多少、一般と異なる奇抜な格好をしていたとしても一般人の意識、認識をずらし難なく溶け込むことを可能とする。魔法の影響下に入った者にそれを“普通だ”と認識するように無意識に働きかけるのだ。

その魔法のお蔭で下手に騒がれること無く行動できる。最も同じ魔法使いや相応の実力者、稀に魔眼持ちなどに術式を看破されることがある。これが敵対している者なら問題だがここは麻帆良の影響下であり、その問題も無い。

閑話休題…。

ともかく今日、この建物に集まるのはここ麻帆良学園都市に集い、麻帆良を守る魔法使い達だ。より正確にはその一部、それもまだ２０代前半から中頃という若い魔法使い達だ。

フードを深く被っているため性別の判別も難しい。それに彼らの居る部屋は明かりが乏しく薄暗いためより判別を困難にしている。部屋はそれなりに広く、教室ほどある。今ここに居るのが１４，５人ほどだからまだ余裕だ。

「…これで全員か？」

一人の魔法使いがここに居る者全てに問い掛けた。同じようにフードを目深に被っているため顔は見えないが声から判別するに若い男のようだ。余程、自分の力に自信を持っているのか、どこか挑発的な声色からプライドの高さが見て取れる。

「「「「「……」」」」」

若い男の問い掛けに答えるのは沈黙。部屋に居る者達は若い男のことが気に入らないようで早く自分達を集めた用件を話せ、と無言のみで圧力をかける。若い男は皆の態度にふんっ、と一つ鼻を鳴らすと話し始めた。

「皆も知っているはずだ。新参者の“九重・葵”という奴らを。…話しというのは他でもない。その男のことだ。…我々は麻帆良を守るため、何より自分達の信じる正義のために――」

「「「「「……」」」」」

またも沈黙。いや、誰かはわからないが小さく舌打ちが一つ部屋に響いた。若い男が言うことは麻帆良に所属する者ならば全員が知っている。正式な紹介があったわけではないが初登場が印象的だったのだから当然だ。

一つ引っ掛かるのは葵の立場が無所属の傭兵という存在があやふやなものだということだ。それでも彼らの戦う姿を直接見ていた者が感じるのは敵にすると手強いが味方ならば心強いと考えているのが学園長を始めとした大半の意見だ。

だが、ここに集まるのはそんな大半の意見から外れた者達だ。自らの正義を掲げ、己が魔法の行使こそを誇りとし、今まで麻帆良を自分達の手で守護してきたと自負している。行動だけを評価すれば立派な魔法使い(マギステル・マギ)と言えるかもしれない。

そして誇り高い彼らは葵だけではなく異分子を毛嫌いしている。この地を守っているのは自分達である、と考えるが故に。

だが、しかし、どの時代でも行き過ぎた思想は周りから少なからず忌避される傾向にある。そんな少数派の者達のみが集まるのがここだ。若い男の演説は続いている。要約すると“葵が気に入らない”という内容を…。

「そこに現れたのがこの部外者だ。この麻帆良は我々の手で守られるべきだ。故にここに提案する。あの異分子を――」

ギリッと歯軋りの音が聞こえた、気がした…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　???

――組織（ファミリー）情報部本部…。

Ｓｉｄｅ　？？？

情報部本部。［工房］内にあるここには外から様々な情報が集められ集約される場所。［工房］の象徴、過去にテオドラ皇女をして“白亜の城塞”と言わしめさせた、その近くに建てられた情報部の本拠地だ。

これは情報部だけではないが少し前までは［工房］の内と外との連絡手段が極限られていたことからアングレカムや外の建物を改装して拠点としていたのだ。限られた伝達手段では致命的に過ぎる。情報は早さだ。それが滞るようでは話しにならない。

それも最近になって葵の思いつきが［工房］内に“特殊な通信室”を設置したことで問題は解消された。司令部、情報部、作戦部の三系統は本部を改めて［工房］内に設置した。最も施設は元からあったので必要な荷物を運び込むだけだったが…。

そんな三系統の一つ、ここは情報部本部だ…。

……。

情報部副部長のためにある執務室の中には２人。片方は立派なオーク材の大きな机、革張りの座り心地の良さそうな椅子に座る長身

の女性。机を挟んだ側に立つのは目深くフードを被った人間。声から若い女性であることがわかる。

そのフードの女性から口頭での説明と報告書が届いた。今はもう報告の殆どを終えて長身の女性が考え込んでいた。フードの女性は黙って次の指示を待っている。この互いの態度から上司と部下だけの関係を感じ取れる。

「…そう、ご苦労様。貴女はそのまま任務を継続しなさい。…ですが発見された場合は即時撤収を心掛けるように」

「了解しました」

上司と部下だけ、というのは訂正しよう。長身の女性は間違いなくフードの女性を心配する声色が感じられた。それは大事な家族に対する姿勢だった。信頼しているが、だからこそ心配してしまう。そんな複雑な思い。

フードの女性が副部長の執務室から出て行って長身の女性は椅子に身を任せて一息吐いた。彼女は情報部副部長の役職を任せられたダリア・D・スタニック、冷静な表情と長身に見合うだけの立派に成熟した女性らしい身体をしている。

最も小さく可愛らしいものが大好きな彼女にとって自分の大きな身体は軽いコンプレックスのようだ。戦闘中、大きな胸は邪魔だし、オマケに肩も凝る。それに狭い室内では動き辛い。待ち合わせには目印にされることもある…。

それに対し同じ情報部に所属し情報部部長の地位に居る姉、ダチュラ・D・スタニックは小さく可愛らしい少女（幼女）の姿をして

いる。可愛らしい服を着こなせる小さくも可愛らしい姉。姉ダチュラは妹ダリアにとって理想の姿だった。

もう一度言おう。ダリアは“小さく可愛らしいものが大好き”だ。

それはもう三度の飯よりも大好きだ。己が主葵と並ぶほど大好きなのだ。仮にダチュラと葵が2人してダリアに上目遣いで「お願い…」などと儚げにされたら鼻血とか色々なものを出しグッと親指を出しながら即座に了承するだろう。

話しは逸れたが今は仕事中だ。ダリアは目を瞑り報告された情報を脳内でまとめている最中だ。そして今、報告された情報は大きな脅威足り得ないが、だからといって決して無視できる内容ではなかった。

「……ッ」

ギリッという歯軋りの音が部屋に小さく響いた。表情に変化はないが身に纏う雰囲気が不愉快気なものになっているのがわかる。報告書の内容を脳内で整理していたダリアだが小さな苛立ちから態度に出てしまったようだ。

情報を纏め終わると彼女は直ぐに行動した。機密文書を入れる鞄の中に提出された報告書を入れて部屋を出た。

情報部本部内の廊下をスタスタと進むダリアが目指す場所は情報部部長の居る執務室だ。今し方、届いた情報をダチュラ部長へ報告するために。

……。

今、目の前にあるのはダリアが目指した場所。彼女の姉にして情報部部長であるダチュラが居る執務室の前だ。ダリアはノックをして入室を知らせた。

「ダチュラ部長、居ますか？私です。…入りますよ？……っ！」

返事はないが居る気配はする。気付いていないのだろうともう一度声を掛けてから扉を開けて中に入るとダリアは目の前で行なわれる行為を目にして思わず身体を硬直させた。それだけ彼女には衝撃的な光景だったのだ。

「…フッ…んっ…あれ？…はっ…んーっ…」

情報部部長ダチュラはダリアに対して背中を向けていて入室したことにも気付いていない。何やら真剣に作業するダチュラは部屋の中央の床に薄いマットを敷いて、その上に座って彼女は胸の前で拝むように両掌を合わせて、うんうん、と唸っていた。

「――ナニを、しているのですか？ダチュラ部長…」

「にゃっ！？――ダ、ダリアっ！いぃいい一体、いつからそこにっ！？」

「つい先程ですが…。それよりも何をされていたので？」

「～～～っ！！な、何でもなっ！？――こほんっ、それより用件は何かしら？ダリア副部長」

鉄面皮の無表情でダチュラを追求するダリアだが内心は微笑まし

いものを見ている感情に溢れている。例え心の中の彼女が鼻血や涎など色々なものを垂れ流してハァハァしていたとしても微笑ましいものを見ている感情に溢れているのだ。

そんなことを知らないダチュラは幼い外見に相まって可愛らしくうろたえている。しかし、そこは情報部の長を任せられることはあり直ぐに冷静さを取り戻した。羞恥心から、まだ少し頬が赤いのはご愛嬌だろう。

ダリアも、愛らしい姉を観察、もとい愛でて、違う。…とにかく身を切る思いで可愛らしい姉の姿を振り切り、ここへ訪れた理由を鞄にしまった資料を出しながら話し出した。

「…はい。例のグループへ潜入中の者からの情報で近日中に行動を起す、と報告がありましたのでダチュラ部長のお耳にもと思いまして。…そして来てみればダチュラ部長は涙ぐましく豊胸体そっ」

「いいからっ！それはもういいからっ！！というか私がしていたこと知っていたのね！？うわーんっ！ダリアのいじわるーッ！ばかーっ！えろすばでーっ！」

それでも最後には弄ってしまうのがダリアたる女性だろうか？相変わらず無表情だが内心で「ハァハァ…姉さん可愛いです姉さん…」と転げ回っているのが第三者の目からすると透けて見えそうだ…。

つまり、この場は知られたくないことを妹に知られて泣き喚くダチュラと表面上は冷静を装っているダリアだが内心では「あぁ、姉さん可愛いなぁ♪姉さん♪」と喜びに転げ回る勢いでお祭り状態だったりする。

ただダチュラの最後の言葉の“えろすばでー”には若干の精神的ダメージを負っていたりするのは割とどうでもいい話しだったりする。人のコンプレックスは刺激してはいけないのだ。彼女にはいい教訓だろう。

そんな彼女だが今もダチュラがグズる姿を脳内フィルムに焼き付けて永久保存を続けているのだ。鼻血を出さないだけ褒められてしかるべきだろう。ここに敬愛する葵まで加わるとダリアの脳内ブレーカーが一気に落ちかねないのだから。幸せ絶頂的な意味で…。

……。

一通り騒いだが、そのお陰で少しは落ち着いたようだ。これは2人共が、だがな。一人は現実で、1人は脳内が騒がしかったのだから。

「――クスンっ、それで近日中とは言うけど副部長はどれくらいで動くと考えているかしら？」

「そうですね。――おそらく実時間の3日後から数日中…どんなに遅くとも一月頭までかと。近日中に全学年が冬休みに入ります。その間に帰郷する生徒が多いですから。人目を気にする真っ当な魔法使いなら無闇な危険は起さないと考えます」

「やっぱり、そうかなぁ。学園都市というだけあって普段は学生が多いもの。副部長の言うように人目の危険を避けるはず。…むむむ？」

ようやくマジメな話し合いが行なわれるようだ。報告書には具体的な襲撃日時が記載されていなかった。何れ判明するだろうが待つ

だけではなく情報を積極的に集め敵の襲撃目標を予想、特定しなければならない。

順当に考えるならばご主人様の葵だ。だが敵は魔法至上主義の思想を持っている。そのまま同じ魔法使いを狙うとは考え難い。そう考えるとなると残り3人になる。しかしハオとユエは剣士と言っていい。魔法使いからすればただの従者だ。

そうなると残るのは1人、ＣＯＳ－ＭＯＳだ。葵謹製の機械人形である彼女は世間からすると従者人形に分類される。そして自動人形の従者人形は高価だが魔法世界ではそれほど珍しいわけではない。だが敵には丁度良い襲撃目標ではないだろうか。

代えが利く、という下衆な考えもあるが人間を傷付けることなく示威行為が出来る。正義の魔法使いを自称する連中のことだ。正義感を振り撒いて「どうだ！人道的だろう！」とでも考えるのかもしれない。

あくまでも予測に過ぎないが、もしそうなら吐き気がする考え方だ。人間以外なら傷付いてもいいというのか？殺してもいいのか？犬や猫のような動物すらも同じか？魔法至上主義の連中はここで退場させる必要があるかもしれない…。

ダチュラは並列思考と高速思考を駆使しながら作戦を立案、修正しては破棄、立案、修正しては破棄を繰り返して最悪の事態の想定と最善といえる作戦、そして次善策や予備策といった補助的作戦を脳内に数種類、構築して戦術を戦略としていく。

「どうされますか？敵の襲撃目標は未だに不明ですが、それも直に判明することでしょう。敵情報、使用魔法、個人の経歴などは把握

してありますので直ぐにでも逆襲撃を掛けられますが」

ダリアの言うとおり、敵情報は把握できることはほぼ全て調べてある。だが、ここでバカ正直に万全の備えをして正面から襲撃を待ち構え迎撃しても麻帆良内部に何らかの禍根を残す結果になるかもしれない。襲撃者は帰らぬ人になる予定なのだから当然だ。

だからといって声高に正当防衛を盾に止むを得ず襲撃者を殺害した、としたら麻帆良は黙っているだろうか？

答えは否だ。馬鹿が暴走した結果だとしても身内に被害が出たのだから最低でも文書による抗議はくるだろう。最悪なのは逆賠償を請求された場合だ。被害者なのに賠償を何らかの形で支払わされる。

我慢ならない。許容しかねる。フザケルナ。――ならばどうする？簡単だ、正当防衛よりもより強固に報復行為を行なえるように舞台を整えればいい。

襲撃時に誰か被害者をでっち上げて、後日正式に麻帆良へ犯人の引渡しを要求。近衛翁が要求を呑めば、まぁ良し。だがその場合は麻帆良の庇護は必ずしも絶対ではないことが浮き彫りになる瞬間だ。

では頑固にも要求を拒まれたならば？それこそが望むところだ。戦争を！戦争を！戦争を！戦闘になればドサクサに紛れて破壊工作、暗殺、情報遮断などヤリタイ放題だ。その時に犯人を無理矢理にでも拉致すればいい。

問題はどうやって話しを持っていくか、ということだが…。作戦立案、修正、破棄、修正、立案、破棄、修正、立案、修正、採用とダチュラは、そこまで考えて――ヤレる、と予測を立てニヤリ、

と嗤う。

「――いえ、相手の襲撃を逆手に取ります。ふふふ♪いい機会だからこれを機に一手、仕掛けましょう」

既に敵の襲撃を知っているのだから、それは最早奇襲にならず。ならば罠を仕掛けて手薬煉引いて馬鹿がまとめて掛かるのを楽しみに待てばいい。必要なのは餌と大きな網と鋭い銛だ。

「ダチュラ部長、また何か良からぬことを考えているのですね…」

「し、失礼なことを言うわね。ふんっ、これも全てマスターのためよ！」

無表情に冷静に呆れた雰囲気で言うダリアにダチュラの可愛らしい顔が若干引き攣った。それでも頬を赤く染めて自分で言った台詞を思い返して心の内で「な、何、言ってんのよ?私～!?」と羞恥に悶えているのは秘密だろう。

ダチュラの物事に対する優先順位とは葵や妹を始めとした家族が最優先されるのだ。いや、これは葵ファミリー全体に言えることだろう。故に家族の団結力、仲間意識は他に類を見ないほど固い。

「…まぁいいですけが。キチンと計画書にして上層部の定例会議…では間に合いませんのね。情報部の権限で緊急会議を開きましょう。ササッと片付けますよ?人員を用意するにも、動かすにも時間が掛かりますから」

最も［工房］内に限れば時間など腐るほど作れますが、とダリアは最後に付け加えた。

「うっ?計画、書?それって書類、よね…?えと…?うぅぅ、ダリアぁ…」

ギギギ、と軋むように首を動かし正面からダリアを見るダチュラの顔は、この世の絶望を味わったかのような表情をしている。ダリアは無表情にただ静かに姉の姿を脳内フォルダに記録していくのみだ。

書類…それは情報部部長ダチュラにとって天敵にも等しい存在だった。出来ないわけではないのだが書類作成中だったのに気が付くと夢の中。要は文字ばかりで退屈して寝てしまうのだ。

複数人で作業する場合は人目もあり恥ずかしいところを見せられないと奮起して平気なのだが1人だと緊張が長続きせずに必ず寝てしまう。姿が少女（幼女）なので見た目は微笑ましいのだがこれでは仕事にならない。

だからこそダチュラを良く知る妹のダリアが丁寧に先読みして補佐するのだ。姉のモエ姿を直ぐ傍で記録できるとダリアは素晴らしい職場環境であると望外の喜びであるらしい。

「ええ、わかっています。いつも通り私がお手伝いいたします。…少々急ですが間に合わせてみせましょう」

「やたっ♪さっすがダリア副部長！私の妹よ♪どうも書類を作るっていうのが苦手なのよね。ほんとに助かるわぁ♪」

早速作業を始めた2人。ダリアの助力を得られることに心底安堵したダチュラは花が咲いたように可憐な笑顔を浮かべる。こういう

時が自分は1人じゃないんだ、と自覚できる少女（幼女）だった。

無表情に淡々と計画書類の作製を手伝うダリアも姉の笑顔を見ることが出来て内心では姉の役に立てることに満足感を味わっていた。ここに葵お手製のクッキーとお茶があれば言うことはないな、と思うダリアだった。

……。

そこでふと、思い出した。姉が豊胸○操をしていたことを。葵がお姉さん好きを自称していることからこれまで以上に好かれようという努力なのだろうが…。

ふっ。

「……無駄な努力ですね」

「ダリア、ひどっ!?」

姉妹仲はいい、のか？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

――［工房］内、第一会議室…。

Ｓｉｄｅ　葵

とあることから数えて現実時間で2日半、［工房］内で時間設定を最大限利用して数週間後。［工房］内にある第一会議室にて情報部要請の緊急会議が開かれることになった。ハオとユエを後ろに伴い移動しながら会議が始まる前に配られた事前情報に目を通した。

会議室に着くと部屋の中に居た全員が席を立ち直立の姿勢をとった。部屋全体を見渡せる上座の席に座ると他の皆も席に座る。ハオとユエは俺の両隣にある席へ、そして背後には警護するようにＣＯＳ－ＭＯＳが立って控えていた。

あ、お茶？ありがとう。…へぇ、これＣＯＳ－ＭＯＳが淹れてくれたの？いいね。美味しいよ♪皆にもお願いね？

「…はい」

そこで改めて見渡してみると部屋には新人の育成で忙しい精霊・悪魔３人娘やアイリ達、アン、三系統の部長、副部長や現場責任者などの主だった顔ぶれが居た。どうやら部屋に来たのは俺達が最後のようだ。申し訳ないと苦笑してしまった。

会議開始までまだ５分あるのに彼女達は何分前から来て待っていたのか、と疑問に思うがそれは、今はいいか。それよりもまずは確認することがある。

「始めよう。まずは最初に確認するけど、この報告書の内容に誤りはないんだよね？それとリーダー格の詳しい経歴は？」

始めに今回の会議を開いた情報部の部長、副部長の２人に確認を取る。襲撃内容が間違いでした、てへ♪じゃやってられないからな。

まず席を立ったのは副部長のダリアだった。机の前に空間モニターが表示される。

「はい、確実です。氏名は倉持・K・アルフォード。年齢２６歳、身長１８１ｃｍ、体重７６ｋｇ。典型的な後衛魔法使いですが魔力資質が高く、大規模魔法こそ行使できませんが中規模魔法の連続行使ができ、また精確な魔法操作は侮れないものがあります」

「へぇ、この若さで大したもんだね…」

魔力量、魔法操作ともに優秀。このまま順調に魔法の修練に励めば１０年後、２０年後には魔法使いとして大成するかもしれない。こういうのが現れると原作に限りなく似たこの世界でも色々な人が居ると改めて思う瞬間だな。

「…続けます。両親は母親が日本人、父親が本国出身。倉持の生まれは日本ですが間もなく父親の故郷である魔法世界ＭＭ本国へ家族で移住。後の大分裂戦争時に両親は死亡。倉持だけが生き残り本国の孤児院で生活」

ふむふむ…こう言っちゃなんだけどよくある悲劇というだけの話しだな。俺の食指が動く要素が何一つもない。俺は俺と家族の安全で精一杯だから他人に構うのは余裕がある時だけと決めているからな。

「学生時代に母親の生まれ故郷である日本に憧れ、大学の交換留学で麻帆良へ来たのを転機に教職を目指す。本国魔法大学を卒業後、麻帆良にある一高校へ教師として採用される。今、勤務歴４年目。生徒達の評判も悪くありません」

母親の故郷を見てみたいという気持ちはわかるかなぁ…。いや、母親だけじゃなくて両親、要は家族の生まれ故郷を、って言えばいいか。天涯孤独の身にはよくある行動だ。自分探しの～なんていうやつだな。

「問題は倉持が魔法至上主義者ということです。幼少の頃に母親は違いましたが父親が魔法至上主義の思想を持っていたことに影響を受けています。両親の死因が無差別魔法攻撃によるものですから魔法を至上の力と考えることに拍車を掛けたものと思われます」

面倒だな…。魔法主義者に限らず何らかの主義者の多くは強固なまでの意志を持って他を排除した思考を持つ。この倉持の場合は魔法、というより“麻帆良を守護してきたのは魔法使いである自分達だ”という思想を持っているようだ。

今までは麻帆良のトップである学園長、麻帆良一の実力であるタカミチや他の良識派が強硬派を抑えてきたようだが。…ふむ、俺達の登場が一石となって少なからず波紋を広げた形になったようだ。

……あれ？ということはこれって自業、自得？え？

マジかよ。やっぱり魔法という狭い業界で他の勢力圏で無所属の人間が動き回るのは無理か…。だからと言って俺が下手に出るのは家族の手前できないしなぁ…。

大体意思の統一も出来ない組織に何の意味があるのかね？一部とはいえ若手が暴走しているんだから世話ないわ。ふんっ、どこの組織も一枚岩ではないということだな。１０人居れば１０の考えがある。考えは人それぞれ、か。はぁ…。

しかし、今回の隠匿は最初思い付きだったけど徒に麻帆良を刺激しただけのようだ。失敗だったかな…なんて思わない、とは言わない。姿を現した時点で何かしらの反発があることはわかっていたしね。やってらんねぇ。

「死んだ父の思想を継ぎ、母の故郷である日本の麻帆良を自分の手で守る。実際に倉持は行動を以って実行し証明しています。…ですが極端な思想と行動が周囲の人間から敬遠されているのも事実のようです」

説明を聞いてモニターの表示をスクロールして倉持らの身辺の調査報告の項目へ目を走らせる。調査項目の一つは学園データバンクにあった麻帆良迎撃作戦の事後調書や裏での素行調査報告だ。

敵集団を味方諸共、背後から攻撃魔法の連続行使により殲滅。敵には甚大な被害を与えたものの巻き添えになった味方は死者こそ出なかったが重軽傷者を多数出した。しかし巻き添えになった味方の1人の怪我が酷かった。

入院中に身体の怪我は完治したが後遺症から精神的、魔力的負担が限界を超えていたため日常生活で使う魔法は問題無いが戦闘を生業にするには魔法使いとして終わってしまっていた。

敵を退けた方法は問題だが倉持の行動は結果だけ見れば功績は大きい。学園は倉持に厳重注意だけで終わらせ、被害に遭った者達と関係者家族には謝罪と多めの見舞金を送った。以降、彼らと倉持との間に溝が出来た。

読み進めていくうちに俺の表情が歪んでいくのが自分でもわかる。

「何それ…。よくこれで、えーと…１３人も従っているなぁ。そんなので襲撃できるのかね？」

「ええ、間違いないわ。早ければ実時間で明日の夜には行動を起しますよ。まぁ連中もバカ正直に白昼堂々と襲撃しようなんて度胸はないようだから闇討ち紛いのことが精々ね」

「ダチュラ部長の言うように近日中に何らかの襲撃があると思われます。しかし、リーダー格の倉持ですが、その傲慢な態度から他の者からは不評のようで集団としての結束に欠けます。何か切欠さえあれば瓦解させられるでしょう」

何か、ねぇ？資料によると倉持を入れて１４人の小グループだ。そこにこちらから１人潜入させて１５人。何かあるとしたら潜入員による内部破壊工作か。扇動と誘導もありだな。やっぱり手強い敵よりも怖いのは味方の中の敵だな。

補足事項では、なぜかは知らないが全員がフードを深く被っていて顔の確認もままならないらしいという。魔法使いの自分に誇りがあるからか？まぁそのお蔭で簡単に気付かれる可能性は少ないだろうけど潜入している子の身が心配だ。

「そう…。それで敵の予想目標は…ＣＯＳ－ＭＯＳ？これは戦力を削ろうとかそういうことか？機械人形だと思って嘗めすぎじゃないか」

「ですが麻帆良側が確認しているこちらの戦力は我が君を含めて４人です。少ない戦力を消耗させるには効果的ではないかと。恐らくですが一人を葬ることでそれを警告、または宣戦布告とするためでは？」

「然様。連中は何を以ってかは知りませぬがＣＯＳ－ＭＯＳが一番与し易いと判断したのでしょう。この資料には彼奴らが魔法至上主義者の思想が示唆されています。主義者は銃火器を侮った考えがありますからな」

いや、ハオとユエの言い分もわかるし理解も出来るんだけどさ。現代の機械技術どころか魔法技術もそこそこ凌駕しているんだよ？それを何も知らない奴らに安く見られるのは…納得できないなぁ。チラッと背後に居るＣＯＳ－ＭＯＳを見る。

「…マスター、何か？」

「いや、何でもないよ。ＣＯＳ－ＭＯＳは気にしなくていいからね？」

「…はい。ですが私は大丈夫です。マスターが、皆さんが居ますから…」

「ＣＯＳ－ＭＯＳ…」

こんなに綺麗で可愛いのに…。連中は何が不満なんだ？魔法至上主義も回りに迷惑を掛けないなら別に俺はどうでもいい。応援する、なんてことまではしないけど暖かい目で見守ってやる。ニヤニヤと、だけど…。

そうそう！ＣＯＳ－ＭＯＳが茶々丸ちゃんに影響されたのか少し前から料理を習い始めたんだよ！調理データをアップロードすれば

一発で料理の鉄人並みの腕がつくのに健気にも人から習うという自己学習を心掛けているんだ。

初めての料理に失敗した時、黒焦げの目玉焼きを無表情に凝視して呆然としていたんだけど雰囲気だけがショボーン、としていたのがよくわかった。子犬が雨に打たれている姿が幻視で来たね！

その時のＣＯＳ－ＭＯＳの姿なんだけど体表面のナノマシンを形状変化させてピンク色のエプロンにしていたのが可愛くって可愛くって、もう…！「俺を悶えさせる気か！」と真剣に考えてしまった。勿論、失敗のフォローはしたとも…。

話しが逸れた…。ともかくＣＯＳ－ＭＯＳが狙われる可能性が極めて高いわけだな？理性では納得できるけど気持ちが納得しない。今直ぐに逆襲撃を仕掛けるべきだろうか？

「むぅ…魔法が理不尽な力だというのは理解しているけどウチの子を軽んじられるのはムカつくなぁ。人間なんて鉛玉一発どころか刃物の一突きで死ぬのにね？……超長射程から１人１人狙撃してやろうか」

「お待ちください、マスター。情報部は襲撃を逆手に取り不穏分子の一掃を考えています。その掃討計画は、こちらになります」

狙撃計画を割と本気で考えていた時に情報部のダチュラに待ったを掛けられた。彼女の言う不穏分子の一掃の計画情報が空間モニターには表示された。全員が情報に目を通していく。オリビエのニィィという嗤いが印象的だった…。

計画内容は色々と方法は多岐に渡っていて、これ本当にいるのか、というものまであるが単純に作戦目的を言うと“馬鹿共をまとめてポイッ”というものだった。“ポイッ”の部分は想像にお任せしよう。まず間違いなく食事時には聞きたくないことが起きる。

「――へぇ、なるほどね。確かに出来そうだ。それで公算はどれくらいとみているの？」

「最低でも六割。でも私は、九割はいけると考えます」

「ふむ…ダチュラは自信あるんだね。心強いなぁ♪ダリアはどう？」

情報部部長のダチュラが言うからにはこれは確実だろうな。三系統を形成したアイリの人選は確かだと思うし、本人の陰謀癖もある。まず大丈夫だ。それでも念のためにダチュラの妹であるダリアにも確認は取るけどね。

「私も公算は高いと考えます。……因みにダチュラ部長は葵様にいいところを見せたいのです。ここ最近は忙しく、宴会などでしか構ってもらえていませんでしたから寂しいのでしょう」

「えっ、そうなの？むむむ？確かに家族の時間が少なかったかもしれないけど。…むぅ」

むむむ…どうしよう？倉持一派以上に重要な案件ができた気が…。寧ろマジで重要じゃね？俺の最優先事項と言っても過言じゃないね！…言われてみれば家族とのスキンシップやコミュニケーションが不足している気がする。

むぅ…訓練課程と中東への実践訓練を終えたら転移門（ポート）で順次、月へ送っているけど、これからも家族を増やすしなぁ。それも万単位で…。考えてみると今まで以上に家族との触れ合いが減、る…？

Ｏｈ！ｍｙ　ｇｏｄ！！

何てことだ！？神は死んだ（注：女神（幼女）は生きています）！！家族との触れ合いは俺の生き甲斐にも等しいものなのに…！流石に一万八千と飛んで１８人は増やしすぎただろうか？まだ希望者が居るみたいだが…。

目指せ！悪魔と精霊の家族１０万人！！という気持ちが無かったと言えば嘘になるけど…むぅ？最初から飛ばしすぎたのか？初期の増強予定は千五百未満だったからなぁ…。公募（人外対象、精霊など）で二万近く希望者が来るとは予想外だった。

あ……今、関係無いことを思い出したけど月に居る自動人形達は何をしたのだろうか？月基地の資源使用量の書類に目を通した時に気付いたのだけどメガッサ月資源を消費していた。何十億、何百億トンというレベルで、ですぜ？

前に自動人形達からの楽しみにしていろ、という伝言は聞いたけど…まさか、それに使っているのか？だとしても一体、これだけの資源で何に使っているのかね？もしかして、デスス〇ー？スタ〇ウォーズとか勘弁だなぁ…。

いやいや、それよりも今はダチュラの寂しさを癒すべきだろうか？…今度、お手製のお菓子を持ってお茶しに行こうかな。皆も誘って…。

「ちょっ！ダリアぁ！？何を言ってるのかなっ！？あは、あははっ！ち、違うんだからね！マスターにいいところ見せたいなんて思ってないんだからね！」

いやー、身内贔屓かもしれないけど見た目１０歳児（幼女）だから微笑ましいなぁ♪ただビシィィ、と人に向かって指先を突きつけるのは感心しないな。メッ！

「と、ダチュラ部長はツンとデレを兼ね備えています。どうですか、葵様？欲しいと思いませんか？精神はともかく肉体構成は幼女です。幼い花弁を散らす背徳的な思いに駆られませんか？そして何より、こう…モエません？色々と…」

「は？欲しい？散らす？はぁ？モエ？はい？」

小さな身体で否定してくるダチュラは可愛らしい。だが、なんだかよくわからないことを言っているダリアが居る。

姉と比べて妹は内心を表に出さない無表情で言ってくるから時々対応に困る。いや、彼女達のことも好きだけどね！割と無条件で！それにしてもダリアが暴走すると何を言っているのか理解が追いつかないから困る。

「ダ・リ・ア～？あとでちょ～っとお話しがあるんだけど…――――いいわね？」

「え〝っ!?あのっ、ダチュラ、部長ぉ??」

なんとかダリアの言いたいことを必死に理解しようと俺が頭を悩ませていると、ふと両隣の席に誰も居ないことに気が付いた。そして何があったのかダチュラがダリアを“可愛らしい笑顔”と“どこまでも優しい目”でお誘いしていた…。

何あれ?こわい…。可愛いのに、こわい、よ?不思議だ…。

「うむ、その時は吾らも良いか?どうも教育が足りなかったと見える。いじめ、んんっ、話しを聞くことも個人的にも興味深い」

「ダリアの当時の教育係は…リビエラだったか?どうも、格好は別として身内には甘い。吾らでもう一度、教育をしなおすか」

「姉さんばかりかユエ様やハオ様まで!?」

ダリアの背後にダチュラ、いつの間にか左右にはハオとユエがダリアの肩に片方ずつ手を置いて逃げられないようにしていた。ん?メガッサ指が食い込んでないか?ダリアの表情が気持ち引き攣っているように見えるような…。

うんっ!結論としてダチュラだけではなくハオとユエも怖いです!笑っているダチュラに比べて笑顔のえの字も無いところなんか特に!!マジメさんな人は怒ると真顔になるんだね。初めて…じゃないけど…知ったよ。

ダリア、何をしたんだ?お兄さんには理解できなかったよ…。

あ?いやいやいや、何、皆して目線を逸らすかね?え?俺?俺が

悪いの？何でよ…。は？釣った魚に餌？［牧場］の養殖は順調だって、鯨とか。え？そうじゃない？じゃあ、鮪か。え？これも違うの？むぅ…わかんないなぁ。

まぁ家族会議も大事だけどそれは次の機会にして今は倉持一派の対応に結論を出さないとね。俺は両手を叩いて注目を集めた。

「はいはい！よくわからないけどケンカの続きはあとにしようね。でもとか、しかしとかは、今は置いておいて」

「ごめんなさい…」「すみませんでした」「「申し訳ありませぬ…」」

「はい、いいから続き続き。――それでダチュラ情報部部長、用意してあとは倉持一派が罠に掛かるのを待てばいいんだな？」

「あ、うん、じゃなかった。んんっ、はい、その通りです。襲撃してくることがわかっているのですからバカ正直に迎え撃つより、これを足がかりに目障りな勢力をまとめて排除します」

「ふむ？…では、この件、情報部に任せよう。期待しているよ？」

「っ！う、うんっ！任せておいてっ！にゃはっ♪」

席は離れているけどダチュラに向けて精一杯笑い掛けてお願いね、という気持ちをとてもとても込めた。いや、マジで期待していますよ？

正直な話し、家族が急激に増えてその教育中の今そこまで俺達の手が回らない。主な教育担当は精霊・悪魔３人娘、陽月姉妹、アイ

リ達親衛隊、あと司令部の事務方が数人だ。他の部署から人を取り過ぎるわけにいかないからこれでもフル稼働なんだよ?

それでも手が足りないから通常時には比較的手の空いている作戦部から応援が来ている状況だったりする。俺も夜は［工房］内に限り教育している。切実に今は人手が無いのよ…。無人機は無数にあるけどそれに教育は任せられないしね。

そんなわけだから情報部に今回の件は一任してしまう。決して疲れるからとか面倒だ、という理由ではない…つもりだ。信頼しているんですよ。うん、というかさ、なぜにダリアは姉をガン見していますかね?

「……ナイスです、葵様。ダチュラ部長がたれダチュラ姉さんに進化しました…!可愛くないですか?撫でたくなりませんか?ぎゅっと抱き締めたくなりませんか?寧ろそれ以上をしたく…ッ!?」

ダリア…忘れちゃダメだよ。まだ現在進行形でハオとユエは君の肩を掴んで拘束しているんだよ?ギシッて砕かんばかりに握っているように見えるのは俺の気のせいだと思いたいけど…。

「――――ダリア…少し、黙れ…。貴様ら精魔奇兵は復活可能とわかっているから首を斬り落しそうだ…」

「姉上、落ち着け。流石にそれはマズイ。我が君も見ておられるのだぞ?だから落ち着くのだ」

「はれ?そ、そうだよっ!ダリアは私の妹なんだから!その…傷付けちゃダメだよぉ!」

ハオ？ユエの言うとおり斬り落しちゃダメだって…。ただでさえダリアの肩が砕けそうなんだからさ。あとユエ？止めるのはいいけど君も手の力を抜きなさい。マジで砕けかねないから、ね？

「はっ。我が君がそう仰るならば…」

「？？？ふふふっ、これは気付きませなんだ。――許すが良い、ダリア」

「クッ！？だ、大丈夫、です。あは、あははは…」

うん、これからは気を付けようね。それとダチュラ？同姓相手に上目遣いなんかしても効果は無いと俺は思うんだ…。うん、俺だったら間違いなくＫＯされていたな。

「……我が君の頼みだ。今は見逃そう。……（ボソッ）だが次はない。――良いな？」

「……ッ！（ぶんぶんぶんっ！）」

ものすごく首を縦に振っているダリアが見えます…。一体、ハオに耳元で何を言われたのかね？お兄さんはとっても気になりますよ。あれ？というか会議の結論は…。まぁいいか、ダチュラ達情報部に任せよう。

倉持一派、か…。どうやってハメるのかね？

……。

何はともあれ…。

「本日の緊急会議は終了、と…。はい、解散、解散！」

「「「「「は～い！」」」」」

元気だなぁ。ここは小学校か…？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

おまけ…。

「――あ、もしもし、茶々丸ちゃん？葵だけど、エヴァちゃん居る？少し話したいことがあるんだ」

『…畏まりました。少々お待ち下さい。ただいま、お変わりします』

「うん、よろしくねー」

『私だ。それで話しとは何だ？アメはまだあるが…』

「いや、アメじゃなくてね。これからこの学園が騒がしくなるけど気にしなくていいから、と伝えたくてね」

『ククク、随分と楽しそうなことをするようじゃないか。ええ？――まぁいいだろう。私は酒でも飲みながら観戦させてもらうとしよう』

「あいあい。でも、あまり期待しないでよ？少しゴミ掃除するだけだからさ」

『ククク。ああ、わかっているとも。…ではな』

「うん、またね。それと最後に――――血液を集めるのはいいけど程ほどにね」

『――――ああ』

さて、あとは連絡するのは刀子さんに刹那ちゃん、かな？木乃香ちゃんと明日菜には暗い話しはできないしねぇー。くくくっ！あ、真名ちゃんは…いいか。超あたりが情報を流すだろうし。

忙しくなるな…♪

第六十二話「蠢く影と情報部と会議と」（後書き）

前書きでも書き記したかもしれないけど…。

今、切実に、葵を、別世界に、送・り・た・い！！

切欠があれば送ってしまいそうだ…。

とりあえず手近なところでは宇宙…目標は火星より向こうへ、ですな。

そのあとは地球へ帰還して…ヤンチャして、って感じですか。

更にそのあとに世界移動かなぁ…。

しかし、哀しいことに男女比が葵１に対して女性が圧倒的多数…。

どこの世界にブチ込むかは悩みどころだ。いっそオリジナルへ放り込むか…。

まぁそれはちょこちょこ考えるとして、だ。

今回は一発キャラと三人称の書き方を重視して書いてみたんですよ。

私は三人称が苦手というより下手なんで練習は必要なんです。

練習の成果は芳しくないですけどね。ははははは、はぁ…。

それと何度も言いますが当作品のｓｉｄｅ　???は三人称です。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十三話「襲撃と不安と機能停止と」（前書き）

地震災害が酷いですが鉄　桜の更新は続く！
なぜなら！応援の気持ちを込めているからだ！！
頑張って！頑張って！頑張って！

作者的には駆け足をしているつもり…なんですよ？
もう”～ヵ月後”とかやってみるのも手かな？なんて思ってしまいます。
では続き！！

第六十三話「襲撃と不安と機能停止と」

――１２月某日某所…。

Ｓｉｄｅ　？？？

倉持一派がアジトとする建物。その一室には１５人の魔法使いが居た。部屋の中でそれぞれが思い思いにしていると１人が部屋の中央へと進み出た。それはこの集団のリーダーである倉持・Ｋ・アルフォードだ。彼は周囲を見渡して宣言する。

「諸君、決行の日は近い。決行日は１２月２６日の夕刻。最期の慈悲にクリスマスくらいは過ごさせてやろうではないか」

「「「「「……」」」」」

誰も言葉を発しない。当然だ。全員が彼の魔法使いとしての力量は認めているが人間性を認めてはいない。それでもここに居る理由はそれ以上に気に入らない存在があるからだ。

「……」「……」

その中で２人が小声で話す。１人は大柄な体格の大男。もう１人はフードローブの上からでもしなやかな姿態からわかるように女性だ。女性が大男に何かを話しかけたようだ。やがて大男はドカドカと中央へ進み出た

「お前の考えなどはどうでもよい。…だが不本意なことにあ奴らは強い。1匹ずつ確実に始末するべきだ」

「……くっ！確かに、確かにそうだ。チッ、不愉快な。だが第一の標的は予定通りでいく。皆もそれでいいな？」

自分が被っているフードを外しながら大男は挑発的に言う。逆に倉持は苦々しい顔をする。大男に見覚えがあるからだ。倉持は昔、あることで彼の弟を病院送りにして魔法使いとして再起不能にしたことがあるからだ。

「フンッ！無論だ。寧ろお前が先走らないかが不安だな」

「貴様……ッ！」

…故に彼らは犬猿の仲というのも生温いほどに互いが互いを嫌悪している。部屋の中に魔力のうねりが起きる。一触即発の危険な状態だ。

そこへまた進み出るものが居た。同じくフードをしているが教師風の雰囲気をした30代前半の男だ。ゆっくりとフードを外して2人の仲裁に入る。

「落ち着け、同志達よ。しかし、倉持よ、本当に決起してよいのか？あのガンドルフィーニが若手魔法使い達に軽率な行動は慎むように、と注意して回っているようだ。それは学園長も、だ」

「？？？あぁ…。それなら私も聞いた。数日前から何かに焦るように奔走していたな…」

倉持を前にしてイラついていた大男は教師風の男が言うことに一瞬、何を言っているのかわからなかった。だが大男は言われたことに自分でも覚えがあるのか苛立ちを抑えた。今は同士討ちなどしている場合ではないと理性で判断したからだ。

「――かまうものかッ！あの軟弱者の言うことなど無視してしまえばいいッ！！」

しかし倉持は違った。積りに積もった苛立ちの一部が大男とのことを切欠に表に出てしまっていた。この時、不思議なことに一瞬だけ甘い花の香りがした。倉持は教師風の男に罵声のような言葉を浴びせた。

「…だが、ガンドルフィーニらだけではない。高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣の両名も魔法生徒を説得して回っていると聞く。何かしら奴らの情報を入手して危険を察知したのかもしれない」

「仮に危険ならば尚更私達がやらなければならないだろうッ！！私達こそが正義ッ！私達こそが真の魔法使いとしてあるべき姿なのだッ！！」

彼の言葉に倉持は聞く耳を持たない。言っていることは自尊心が強い彼には、いつものことだ。それでも今ほどではなかった。これはおかしい。何かの箍が外れてしまったかのように喚き立てる。

「倉持…。だが…」

大男は倉持の様子を見て逆に冷静さを取り戻した。彼のことを冷めた視線で見ている。教師風の男は何とか慎重に行動しようと倉持を宥めようとする。

「くどいッ！！まだこの中に臆病者は居るか！？居るなら出て行け！誇りもない腰抜けが！」

「「「「「……」」」」」

だが、それは無理だった。倉持は教師風の男を振り切ると腕を振り上げ宣言する。このやり取りを見ている全員が押し黙っている。いつものことと傍観を決め込んでいるのが大半だ。

「居ないようだな。ならば決行日に変更は無い！確実に一匹ずつ狩り取る！これは余所者への見せしめだ！！私達、魔法使いの真の正義を示す時なのだッ！！」

「「「「「――――ッ！！！」」」」」

それでも彼らには彼らの目的がある。１人は鼓舞する倉持。鼓舞され静かに沸き上がる１１の歓声。１人は沈黙。１人は思慮。そしてその１４人を凍えた視線で観察する者が１人。

「……」

大男と話していた女性だ。静かに観察している。その視線は限りなく冷たい。凍えるような、そして何かを侮蔑するような視線だった。

彼らの計画は進む。何も知らずに進む。暗い未来へ進む。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

――［工房］第三研究室…。

Ｓｉｄｅ　葵

第三研究室には様々な機械と大小のケーブル、それに成人男性が入りそうな一機の大きな円柱状のシリンダーがある。ナノマシン溶液の満たされたその中にはＣＯＳ－ＭＯＳが浮かんでいる。

彼女を前に俺は情報部からの報告書に目を通していた。情報部の管轄なのになぜかアイリが報告書を持ってきたのが不思議だった。だって少なくとも今の司令部は新兵の教育に忙しいはずだし…。

「なるほどねぇ。クリスマスは無事に過ごせるのか。くくくっ、お優しいことだ…」

まぁそのことはいいんだ。俺にとっては皆、家族なんだし、問題は…無い、はずだ。それよりも倉持一派のことだ。それとなく誘導してガンドルフィーニ君を使い、間接的に若手に自重を促そうとしたけど、ダメだったみたいだ。

この報告書にはクリスマスを終えた翌日、２６日の夕刻にＣＯＳ－ＭＯＳを襲撃するとある。まぁ正直に言うと時間的猶予があることはありがたい。まだ教育中の新兵が４分の１ほど残っているからな。

とりあえず精魔奇兵１１７０人を新たに加えた段階で現在、約１

万3千人は転移門（ポート）を使って月へ移住している。なんだか月基地が月都市になってきた気がするなぁ、なんて思わないったら思わない。

「…年越し前に一騒動あり、か…。今年は騒がしいったらないな」

「ですが、これは予定通りです。作戦に数％も支障はありません」

「まぁ、そうなんだけどねぇ。…いや、こっちも準備できているし問題無い、か。――アイリ、“魚”は掛かるかな？」

予定通りに事が運んでいる時ほど不安になるよね？俺は臆病者だからさ、いけいけ！ゴー！ゴー！なんて楽観的には考えられないのよ。いや、仮に失敗しても次善策は数十に渡って設置されているから心配はしていない。うん。心配ないない。

「はい、閣下。間違い無く。情報部一課の情報操作と思考誘導によって想定通り倉持一派は第一目標をＣＯＳ－ＭＯＳに定めました」

「そっか。……はぁ…」

シリンダーの表面に手を当てる。強化ガラスと中に満たされたナノマシン溶液のヒンヤリとした感触が掌から伝わってくる。ＣＯＳ－ＭＯＳ…。君は夢を見ることがあるのかな？はぁ…。

わかっているんだけどね…。この子が犠牲になるんだよ？どうしたものかなぁ。

「…お辛いですか？ご家族を犠牲にすることが」

「……まぁ、な」

「……」

やるしかないか、な…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻穂良学園大通り近郊…。

Ｓｉｄｅ　ＣＯＳ－ＭＯＳ

１８：００時。夕刻。周囲に人型生命体の反応無し。襲撃確率上昇。間もなく想定された敵襲撃ポイント。想定ポイント到着まで１ｋｍを通過。本機体の各部最終チェック。……チェック完了。オールグリーン。

今任務の最終確認。第一目標、全ての敵を炙り出すこと。第二目標、半数以上の撃破、そして可能なら情報取得のために残敵の捕獲。ＣＰへ最終確認。暗号を受信。命令を受諾。本作戦に変更無し。

目標ポイントに到着。…警告。マルチセンサーに人型生命体の反応有り。精密走査開始。反応場所、特定。目標、前方２３０ｍ。敵接近中。距離２００ｍ…１８０…１６０……１００ｍ。警告を開始。

「……警告します。即刻、出てきて姿と所属を明確にしなさい。指

示に従わない場合は敵対行為と認識します。尚、警告はこの一度限りです…」

「……」

警告に反応無し。応援要請…要請の受諾を確認。応援到着まで１５分。第一種戦闘態勢へ移行。戦闘出力上昇。Ｄフィールド展開準備。設定はエネルギー系の非殺傷（スタンモード）設定を推奨。

「――炎の精霊１３柱！集い来たりて！」

……ッ！個体目標に魔力反応を検知。警戒認識上昇。敵対行動と認定。敵性個体の脅威判定クラスＣへ上昇。今任務を最優先。尚、第二次目標として情報取得。敵個体の捕獲を可能なら行なうこと。射撃プログラムスタート。

「…迎撃行動を開始します。――ＢＬＡＳＴＥＲ…連射、ファイア」

「クッ！？敵を討て！魔法の射手！連弾・火の１３矢！！」

威嚇射撃全弾、敵至近に着弾。敵反撃。敵魔法弾の発射を確認。対魔法・衝撃体勢。Ｄフィールド緊急展開。着弾まで２…１…今…防御成功。フィールド出力７８％に低下。機体損害無し。戦闘継続に問題無し。

「防がれたッ！？障壁か！！」

「慌てるな！！――合図を出せッ！！」

緊急。レーダーに未確認魔力反応を多数確認。敵増援を確認。任務、第一目標の達成と判断。味方部隊の到着まで残り9分32秒。対複数戦闘用意。戦闘終了までフィールド常時展開を推奨。戦闘続行…。

「――BLASTER…3点射、ファイア」

「ギッ!グッ!!」

敵増援の後衛型魔法使い1撃破。残敵数13。次敵目標を確認。射撃戦闘用意。

「――BLASTER…連射、ファイア」

「ぐぅぅっ!がぁぁっ!?」

敵増援の前衛型魔法使い1撃破。残敵数12。次敵目標を確認。射撃戦闘用意。

「馬鹿がっ!先走りやがって!」

「仕方が無い!誰か!アレの動きを止めろ!」

「――目醒め現れよ!浪立つる水妖!水床に敵を沈めん!流氷の縛り手!!」

敵後衛型魔法使いに魔力反応。魔法種類を特定。水系統による捕縛型と判明。射撃による迎撃は困難。近接戦闘用意。捕縛魔法、排除後に術者へ突撃を開始。

「――SWORD」

「なっ！拘束の魔法を斬りやがった！？ぐはッ！？」

「馬鹿野郎！一々取り乱すな！！」

敵魔法使い１撃破。残敵数１１。次敵目標を確認。敵、本機の包囲を開始。状況危険度の上昇を確認。包囲突破を最優先。

「逃げるぞ！魔法で牽制しろ！動きを制限するんだ！」

「――光の精霊１１柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！光の１１矢！！」

声鋳型魔法使いに魔力反応。警告。敵魔法弾、複数接近。ランダム回避機動、開始。回避成功。射撃戦闘用意。

「ＢＬＡＳＴＥＲ、連射…ファイア」

「ぐぅぅ…！！」

敵魔法使い１撃破。残敵数１０。次敵目標を確認。

「怯むな！撃ち続けるんだ！！数で畳み掛けろ！！」

「――雷の精霊１７柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！雷の１７矢！！」

「――砂の精霊１３柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！砂の１３矢！！」

「――火の精霊１９柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！

火の１９矢！！」

多数の敵魔法弾、急速接近。迎撃プログラム、回避行動プログラム演算開始。ランダム回避機動。敵魔法弾弾道予測。本機体の能力では極めて困難。全弾回避不能。Ｄフィールド緊急展開。フィールド出力最大へ。

「チィィ！さっきから何だ！あれは！人形風情が魔法障壁だとでも言うつもりか！？」

「喋る暇があるなら魔法を撃て！！今、ヤツの動きが止まっているんだぞ！！」

「ッ！わかっている！！――――ものみな焼き尽くす浄北の炎！破壊の王にして徴よ！我が手に宿りて敵を喰らえ！紅き焔！！」

警告。敵魔法使いに高魔力反応。中位魔法と判明。回避行動プログラム演算開始。敵魔法弾接近。回避不能。Ｄフィールド緊急展開。対象撃・魔法姿勢防御。敵魔法弾、着弾まで２…１…今。着弾。

「――――――ッッ！！」

フィールド出力低下。本機体動力部に異常発熱を確認。冷却装置作動。強制冷却中。機体動作に一部制限あり。最適化中。本機の戦闘能力１２％低下。戦闘行動に問題無し。

「防がれたッ！！まだだ！囲め！！決して逃がすな！」

「このままでは感付かれる、か…。――――火精召喚！槍の火蜥蜴４柱！！……行けッ！！」

敵魔法使いの召喚を確認。召喚対象を下級火精霊と認識。暫定的にエネミー1，2，3，4と名称。脅威判定クラスD。優先排除を推奨。敵火精霊は槍による近接戦と予想。敵火精霊4体、急速接近。迎撃射撃戦用意。射線軸クリア。

「――BLASTER…3点射、ファイア」

「――…！」

第一射…回避。第二射…エネミー3を撃破。エネミー1，2，4、回避機動を取りつつ急速接近中。敵火精霊、射撃範囲を離脱まで2…1…今、対近接戦闘用意。

「――SWORD」

敵火精霊1，2，4の予想進路をシミュレート。予想位置を特定。対応順エネミー2，4，1。敵接触タイミング、カウント3…2…1…今、“即興剣舞”開始。

「「「――…！」」」

エネミー2撃破。エネミー4撃破。エネミー1撃破。優先目標の全撃破を確認。引き続き敵魔法使いを排除。射撃範囲内に敵個体3名を捕捉。

「――BLASTER…連射、ファイア」

「がッ！？」「げはッ！？」「きゃーッ！？」

敵魔法使い3撃破。残敵数7。次敵目標を確認。引き続き、射撃戦闘用意。

「今だ！一斉発射！！」

「――来れ雷精！風の精！雷を纏いて吹きすさべ！南洋の嵐！雷の暴風！！！」

「――ものみな焼き尽くす浄北の炎！破壊の王にして徴よ！我が手に宿りて敵を喰らえ！紅き焔！！」

「――闇夜切り裂く一条の光！我が手に宿りて敵を喰らえ！白き雷！！！」

警告。敵魔法使い群に多数の高魔力反応。全て中位魔法と判明。Dフィールド緊急展開。警告。発熱異常の恐れあり。フィールド発生範囲を再設定することで負荷を軽減。対象撃・魔法姿勢防御。敵魔法弾、着弾まで2…1…今。着弾。

「――――…ッ！！」

敵魔法弾の全弾命中を確認。フィールド出力２３％に低下。負荷増大。Dフィールド発生装置、発熱過多。緊急冷却、開始。冷却中。排熱を開始。蒸気排出。冷却完了。

システムチェック。…機体動作に一部制限あり。最適化中。本機の戦闘能力８％低下。戦闘行動に一部問題あり。再度、最適化中。完了。敵位置を索敵。目標を確認。戦闘行動を再開します。射撃戦闘用意。

「どうだ！やったか！？」

「煙が多くてわからないが…」

「関係無い！中位魔法だとしても複数叩き込んだんだ！無事のはずッ――――ぐふっ！？」

非殺傷設定にて命中…。敵魔法使い１撃破。残敵数６。次敵目標を確認。引き続き、射撃戦闘用意。射撃補正、左に０２度修正。

「な、に…？」「何で無事なんだよ！？！？」

敵勢力の６３％減…。敵半数以上の撃破を確認。初期任務第ニ目標を達成。敵個体の身柄捕獲作業を開始。

「最後警告です…。今直ぐ魔法媒体を捨て武装解除しなさい」

「くそっ！」

「…大丈夫、殺しはしません。ただ、お話しを聞かせてもらいます。――――何をしてでも…」

「――――……ッ」

当方の警告を無視。敵対意思の存続を確認。マニュアルに従いスタンダメージによる気絶を推奨。今任務の第二次目標、捕獲行動を開始。ＢＬＡＳＴＥＲ、エネルギーチャージ。敵目標、照準。

「ファイ…。……？」

射撃、一時中止。ＣＰより信号を受信。暗号解読。最上位権限による命令の変更を確認。命令を受諾。敵身柄確保作業を中断。消極

的遅延戦闘行動へ移行。警告。戦闘出力低下。

「？？？――カハハッ！馬鹿めッ！ヤレッ！！」

「――――ッ！――――」

魔力反応多数の急速接近を確認。…魔法種類、魔法の矢と確認。属性、火、光、他複数種類。弾種、誘導弾。…回避後、ＢＬＡＳＴＥＲ、ＳＷＯＲＤによる敵魔法弾の迎撃を推奨。

注意。本機体の迎撃能力を大幅にオーバー。回避不可。次善行動、フィールド展開…検討中…エラー、間に合わず。敵弾急速接近。緊急処置…対ショック防御姿勢。本機体重要機関の保護を最優先。防御用意。

敵魔法弾…着弾…。

左上腕部損傷小破。左大腿部損傷軽微。右脚部損傷中破。背部格納ユニット６９％損傷、大破、修復まで外部武装の展開不可。頭部マルチセンサー３１％損傷小破、稼働率２３％減。損傷率４９％。戦闘力４７％減。

「――損―率―ガガッ―緊急―要請―」

緊急…緊急…緊急…。応援到着まで残り１分…５９…５８…。

ナノマシン、自動修復開始。緊急事態発生、保護回路の作動を確認。システムチェック…チェック中…重要データの損傷を確認できず。保護プログラム作動、バックアップデータをマザーポートへ転送。

本機体動作に問題発生。右脚部骨格に亀裂確認。左上腕部、左大腿部、右脚部、背部格納ユニットへのエネルギーカット、余剰エネルギーをバイパスへ。ナノマシン活性化を確認、自己修復の稼働率１５％向上。残り損傷率４７％。

応援到着までカウントダウン。２５…２４…２３…２１…２０…。

「げはははははっ！！やったぞ！このオートマータ風情が！げははははっ！！」

「バッカッ！もっと早くブチかませよ！やられると思ったろーがッ！！」

「うっせっ！上手くいったんだからそれでいいだろが！！」

「クハハハッ！！！オラッ！！」

…３…２…１…応援の到着予定時刻。

「下郎共ッ！何をしておるかッ！！」

応援部隊の到着を確認。戦闘態勢を解除。接続回線を別確保。電子情報を圧縮、暗号化。順次完了後にデータ送信を開始。

「――――チッ！邪魔が入ったか…。ここが潮時か…。おいっ！逃げるぞ！！」

「はいよ！…クハハッ！あばよ、木偶人形ちゃん！げはははっ！」

敵部隊、逃走を開始。第二目標の一部達成ならず。本任務、本来の目標達成を確認。本機は現時刻を以って機能停止…。

……クスクス。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　ＣＯＳ－ＭＯＳ

第六十三話「襲撃と不安と機能停止と」（後書き）

ＣＯＳ－ＭＯＳが…ｏｒｚ
毎度の事ながらこんな予定はなかったのに…。
はふぅ…。人生こんなもんじゃなかったことばかりですな！
いい加減、葵を宇宙に上げたくなった…。
この際、多少無理をしてでも……やるか？
やっちゃうか？やってしまいたいなぁ。
いや、上げるけどね！薬味が来る前に宇宙へ出るけどね！（えっ！？

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十四話「流れる陰謀と最後の用意とゴミ処理方法と」（前書き）

マズイ、忙しくて執筆する時間が少ない…。
ただでさえ作者の執筆速度は亀なのになぁ…。

さて！陰謀、策謀は続くよー。
盛るよー、まだ盛るよー、もっと盛るよー。
はぁ、早く葵を宇宙へ上げたいわー…。
では続き！

第六十四話「流れる陰謀と最後の用意とゴミ処理方法と」

――麻穂良学園大通り近郊…。

Ｓｉｄｅ　葵

ＣＯＳ－ＭＯＳから応援要請の信号が発信されたので予定通りに俺とハオ、ユエの３人は少し時間を置き１５分掛けて現場に到着した。未だ学園側に動きが無い理由だけど、このエリアはあの若造達の数名が担当しているらしい。

自分達の担当するエリアなら事件の揉消しも容易と判断したのだと思う。だけど実際、俺達が駆けつけた場所では逆に襲撃者の半数以上が死んではいないが戦闘不能の状態になっていた。

今、敵の負傷者は自力で離脱したり、若造共の関係上でこれは意外なことだけど比較的無事な人が負傷者に手を貸して撤収していた。こちらに追うつもりは欠片も無いが今はハオとユエに適度に追跡させ見送っておいた。

まぁ、というわけで駆けつけた現場にてハオとユエを待ちながら俺はここに居るわけなんだけど…。

「これは、なぁ…。ふむ…？それでユエ、連中は？」

目の前の“ＣＯＳ－ＭＯＳの形をしたもの”を見ていると２人が戻ってきた。それでまぁユエに首尾はどうなったかを聞いた。現場

の状況から上手くいったとは思うけど自分で見落としていないかどうかの確認をしたかった。

「ハッ、襲撃者は脱落者を回収、または自ら撤収いたしました。こちらの被害は“皆無”です。ここまでは全て予定通りと言っても良いかと」

「そっか。でも酷いことするなぁ。何もここまですること無くないか？左側が特にボロボロだ…」

本当にもう、ＣＯＳ－ＭＯＳが遠隔操作していた模擬機体も左半身に酷い損傷を負っていた。白い機体の半分が真っ黒だ。一応、本体との接続が切れた今も模擬機体自体に搭載されたナノマシンが自動修復をしているようだ。

まぁ急遽製作したものだから性能はお世辞にも高いとは言えないけど。それというのもＳＷＯＲＤとＢＬＡＳＴＥＲの２つしか武装を取り付けられなかったんだよ。時間があればもう少し兵装が積めたのに…。

…いや、でもこれくらいがちょうどよかったかもしれない。若造共は性能で劣るはずの模擬機体にすら梃子摺っていた。半数以上を戦闘不能に追い込まれていて下手したら全滅していた。ダメダメに過ぎるというものだった。

連中のそんなところを見ると…ねぇ？別の意味でどうしたらいいものかと考えさせられてしまうな。まったく、何でこうまで弱いのだろう。昔はまだ骨のある者が多かったのに今では、これだ。

何で攻めている俺が相手を気遣わなければならないんだ？はぁ、

力が全てを肯定していた、あの古き時代が懐かしいよ。現代は柵が多過ぎる。今回のことも人間社会における大義名分を得るための手段だしね。

ただねぇ…たとえ大義名分を得たとしても敵討ちなどの私怨交じりの行いは評判悪くなるのは間違いない。けど、これは仕方ないことなんだ。――だって向こうから仕掛けてきたことなんだから。くくくっ！

それに無理矢理、攻めるのは簡単だけど色々と問題も多い。組織で表立って動く場合は動くだけの理由がいるんだよ。でも、これでそこそこの部隊を送れる。あ、例外は裏で行なわれる暗闘か俺や家族に危険が迫った時くらいのものだ。

「我が君、この機体はいかがいたしますか？破損部品は全て回収し、ひとまとめにしましたが」

「ん？ああ、うん、ありがとう。それは俺の空間に全部、回収して一時格納するよ。直ぐに終わるから。そうしたら一旦アングレカムへ帰還しよう」

「「はっ！」」

いつの間にか損傷部品の回収をしてくれた2人に感謝したあとに空間を開いて模擬機体を格納した。この模擬機体だが俺手ずから姿形をＣＯＳ－ＭＯＳソックリに作ったこともあって、とても遣る瀬無い気持ちにさせられた。

帰ったらまずはＣＯＳ－ＭＯＳに一度キチンと謝らないとなぁ。それに今回は彼女にここまでしてもらったんだ。道化を演じた分、

必ずこの代償の元は取ってみせる。

「くくくっ！大魚…というには薄汚いが“餌”に釣られて“網”に掛かった。あとはもがく魚に“銛”で止めを刺すだけだ」

「ハッ、必ずや彼の者の仇を討ち果たしましょう！」

ハオさん？ＣＯＳ－ＭＯＳは死んでないからね？アングレカムに居るからね。…いや、わかっていて言っていることは笑っている口元を見ればわかるんだけどさ。んー…まぁやることは変わらないからいいか。

「ふふ、下郎１４の首その全てを討ち取り我が君へ謙譲してみせましょう」

それよりもユエさんや？１４の生首を俺にどうしろと言うのかね？某ヨガな人みたく繋げて首飾りにしろとでも言うのか？いらないよ。あんな薄汚れた首なんか…。まだ［牧場］に居る龍種の餌にするほうが有意義だ。

３人でトコトコと歩いて一旦、喫茶クレイドルへ向けて移動する。店の地下にある転移門（ポート）を使用してアングレカムへ秘密裏に移動する予定だ。態々こういう手間を掛ける理由は念のために俺達が店の中に居ると思わせるためだ。

まぁそれはいいんだけどさ…。マジで学園側に動きが見られない。こんなので大丈夫なのかね？あ、もしかしたら外から来る敵ばかり見ているから中で起きる騒ぎには目が届かないのか？

むー…。とりあえず細かい報告は帰ってから聞くとしよう。その

あとは…うん、状況によるけど早ければ今夜にでも学園長に犯人の引き渡し交渉をするために連絡をつける。

いきなり怒鳴り込んでもヤクザと変わらないからな。それに向こうで事実確認やら何やらで時間が掛かる。そう考えると早ければ明日か明後日には犯人を引き渡すか否かの返答が聞けるだろう。

いや、でも、あの学園長だからなぁ…。1週間前後に期日を限定しておかないと返答を先へ先へと延ばされかねない、か？だが、これればかりは断固とした対応をしなければならない。さもないと嘗められることになるのは必至。

今回は、いい加減煩わしくなった監視者と敵対者の炙り出し、オマケに潜在的な敵対者の選別などのために、ちょうどいい馬鹿が居たから利用させてもらうけどね。そしてこれは子供のケンカではない、殺し合いだ、闘争だ、戦争だ。

いや、できる限り戦争とかしたくないけどね。面倒だし…。それでもまぁ返答が否ならば、いよいよそこで宣戦布告だ。戦争にはそれなりの段階というものがある。宣戦布告してハイ、戦争ね、なんて単純なことは殆ど無い。

今の時代、昔と比べて戦って得た土地は統治し難いからねぇ。それにこんな学園を占領しても何の利益にもならない。

この地にある図書館島地下には新旧世界間を繋ぐゲートとか興味ないし、いらない。あれの使い道がね…微妙なのよ。大き過ぎてスペースばかり取りそうだし、固定式だから移動も出来ない。だからマジでいらない。

……いっそのこと壊すか？…む、ダメか、アルが邪魔す、って、あ？アルに挨拶しに行くの忘れていた…。色々あって忘れていたなぁ。あと野郎はどうでもよかったしね。学園長に会っただけでも譲ったほうだと俺は思う。

んー、まぁアルのことはどうでもいいとして世界樹に集まる魔力を蒐集することにはそれなりに意味があるかもしれない。超の襲撃に遭っても尚、最奥部にある蒐集装置は稼動しているしね。

……いや、でも今は月基地で月が纏う魔力も蒐集できるからなぁ。麻帆良のそれも微妙、か？帰ったら装置の回収指示を出しておこう。どっちにしてもこれが終わったら暫くは麻帆良を離れてほとぼりが冷めるまで期間を置かないとならないだろう。

……ん？あ、あれ？俺、麻帆良に拘る理由無くない！？

「？？？我が君、どうかされましたか？」

「んっ！？あ、いや、何でもないよ？うん…」

うわぁー…イカンなぁ。つい表情に出ていたようだ。ハオ達に心配掛けてしまった。…正直、木乃香ちゃんや刹那ちゃん、明日菜、それに茶々丸ちゃんにエヴァちゃんならともかくネギとかどうでもいいしなぁ。

「然様ですか…。何かお気になることがあらば吾らにお命じ下さい」

「あははは…。うん、その時はお願いするよ」

「「ハッ！」」

もう原作とかは置いておいて、また新旧世界を周るか…。いや、でもなぁ…。せっかく小規模とはいえ４個宇宙艦隊があるんだから銀河系内の探索をしてみるのも一興かもしれない。

むむむ？そう考えると宇宙に進出するか。超超弩級大型宇宙船を月で造れば行けるんじゃね？うん、行けるよ。

そうすると月は攻略済みだから次は――――火星か？火星に行くか？衛星のフォボスとダイモスを資源採掘して空洞化してしまおうか？それとも火星に環境改造用ナノマシンを散布してテラフォーミングしちゃうか？

火星を征服して初代火星皇帝になるとかロマンだよね…。やらないけど。というかできない。この世界では新世界を創り出すための触媒に火星が使われているからね。

それに数年後に起こるという新世界崩壊時には７千万未満の人間が触媒となった火星地表面に弾き出されてくるんだ。そんな惑星（ほし）、危なくて安心できないったらない。資源を採掘するにしてもこの世界の火星はいらないかなぁ…。

それなら衛星だけ資源採掘して他の惑星へ行くべきだと思う。火星の隣は…えぇと？小惑星帯と小惑星帯の間にある準惑星であるケレスか、そのまた外側の木星か。ふむ…木星はいいかもしれない。衛星が確認されているだけでも６０以上ある。

資源の宝庫じゃないか…。まぁ木星の重力とか電磁場がネックだが、それも警戒しておけば大きな問題は無い…はずだ。

何よりもガリレオが発見したガリレオ衛星であるイオ・エウロパ・ガニメデ・カリストの四つも見てみたい。それに、もしかしたら女神（幼女）の取り計らいで某木星プラントなんかが発見できるかもしれない。ただのロマンですがね！

もちろん各衛星では資源採掘させてもらうけどね。特にカリストなんか地表面全体を２００ｋｍの分厚い氷で覆われているから水とか補給できそうだ。宇宙線とかで汚染されていそうだけど…浄化すれば問題は無い…よね？

やっぱりやめようかな？こわいし…。まぁ予定は予定だし、今こんなことを考えても仕方ないか。あー…。

「むっ？――――ふっ！」

…なんて考えを締めくくろうとしたら右後ろに付き従うハオが中空に鋭い視線を向けたのを背中越しに感じた。俺が何事かと振り返る間もなくハオは短い呼気を発すると同時に白の一閃を放った。空を裂き突進んだ先には…機械？

「…ふむ、姉上、どうだ？」

「仕留めたが…周囲にはアレだけのようだ。…丁寧にも証拠を残さぬよう撃墜の直前に自爆した」

「自爆…。ふっ、仕留めたならば良いよ。我が君、今、アンに確認を取るので、しばしお待ちを」

「うん。…それにしてもウチ以外の無人機械か」

どうしたものか…。何を見られた？いつから見られていた？何が目的だ？いや、そもそも誰が――――あ、思い当たるのが居たじゃないか…超・鈴音がさ。機械を使うのは何も俺だけじゃなかった。

茶々丸ちゃんや真名ちゃん経由、傭兵関係で表に出たから何かが彼女の興味を惹いたのか？それともあの地下のことで疑われているのかもしれない、か…。超の計画を成功間際で横面を引っ叩く予定だったから放っておいたのが裏目に出たか。

「…我が君、アンに確認を取りました。過去数時間、あの機械からは誘導電波などを確認されておりませぬ。恐らく単機斥候（スタンド・ドローン）かと」

「単機斥候…。あの似非中華娘は、また古風なことを…」

この世界の未来の火星では人を監視することが流行だったりするのか？前にも同じことをされたけど今も同じ手段とは驚きだ。

あれは予め設定されたこと以外、融通は利かないけど隠密性を高めるために操作する誘導電波を断って独自行動させる。低空飛行や物陰に入り込むなどの限定状況下に居る場合、レーダーにも映り難い。…確実なのは目視による捕捉か。

俺だったらここにレーダー妨害装置や熱光学迷彩、果ては探知魔法妨害や認識阻害術式が加えるね！くくくっ♪これだけの技術を付加して小型化できるのはウチだけですよ！隠密効果は……考えたくもないな。悪用されたら事が事だ。

「我が君。近くに賊の姿は無いようですが…今は作戦行動中、ここは一つ憂いを断つために釘を刺されては？」

「……いや、いい。似非中華娘も無駄な時期に騒ぎを起すほど暇じゃない。だから警戒だけであとは放置」

「「ハッ…」」

２人は超にお灸を据えられなくて少し不満そうだな…。今度、念入りに刀身のお手入れしよう。少しは機嫌を直してくれると思う。家族の心のケアは思いついたら実行するのが吉だと思うんだ。

とりあえず今は店も見えてきたし、何よりも１人囮にしてしまったＣＯＳ－ＭＯＳのことが気になる。

……。

……。

そしてやってきましたここはアングレカムの艦内にある一室。部屋の中には俺とメンテナンスベッドの上に寝かされたＣＯＳ－ＭＯＳの２人だけだ。陽月の姉妹には万が一のことも考えて店で警戒してもらっている。

メンテナンスベッドの横にあるＩＦＳ端末からＣＯＳ－ＭＯＳへアクセスした。自己診断プログラムを走らせて異常がないかを確認してから機能停止（休眠）している彼女を再起動した。

「…おはようございます、マスター」

「おはよう、ＣＯＳ－ＭＯＳ。身体の調子はどう？」

「システム、機体、共に問題ありません。ただ、模擬機体は大破し

てしまいました…」

メンテナンスベッドから上半身を起した彼女は無表情なのに僅かに視線を逸らした雰囲気からシュンとしているのを感じた。それは見間違いでは無くて、今も小さな声で「申し訳ありません…」と謝罪してくる。

もう、ＣＯＳ－ＭＯＳは気にし過ぎだと思うんだ。君は生まれ方が少々特殊だったかもしれないが結果的には上位ＡＩだろうに論理的思考はどこいった？元から壊されることを前提に模擬機体が製作されたことは知っているだろうに。

彼女のナノマシンで構築された冷たい頬に両手を当てて視線を合わせるようにする。彼女の赤い瞳（カメラアイ）がピントを合わせるためにキュィンと動いている。……なぜ、赤くなるし。

「いや、それはいいよ。所詮あれはＣＯＳ－ＭＯＳが操作していただけの変わり身だ、問題無いよ。それと…ごめん」

「マスター、なぜ謝罪されるのですか？……私は何か間違えたのでしょうか？」

「うぅん？あはは…違うよ。まぁ、その…変わり身だとしてもＣＯＳ－ＭＯＳ１人囮にしたことがね。悪いことしたかな、と思うわけよ」

ＣＯＳ－ＭＯＳから両手を離して自分の頭をガサガサと掻く。彼女は俺の言ったことが理解できないようでキョトンと小首をかしげていた。でも、それも一瞬のことで「ぁ…」と言ったあとに頷いていることから理解したようだ。

いや、気恥ずかしいというか申し訳ないというか、ねぇ？どうしても遠隔操作されていた模擬機体だとしても彼女１人を囮にしたのは気が咎めるわけさ。それなのに彼女は自分に非があるかのように言うものだから、もうどうしたらいいものか…。

「…なるほど、マスターは私に罪悪を感じておられるのですね？理解しました。…ですが、それこそお気になさらないで下さい」

「いや、でもね？やっぱり悪いことしたと思うし…」

「問題ありません。私の全てはマスターのためだけに存在します。それは私の意志であり、存在する意味そのものです。ですから謝罪は必要ありません」

視線を逸らさず真っ直ぐに言ってくるＣＯＳ－ＭＯＳとそれを真正面から見て、聞いていた俺。やはり申し訳ないなぁ、と思うけど、こう言われてしまうと少し、いや、すごく嬉しい。気恥ずかしいけどな！

自分でも顔が赤くなっているのがわかる。だって顔と言わずに身体も熱に浮かされたように熱いのだから。はぁ、俺ってこれでも８２０歳なのになぁ…。こういうのは未だに免疫が出来ないから困ったものだ。

ただ、今のＣＯＳ－ＭＯＳに俺が返すべき言葉はわかる、というか、これしかないだろう？

「……そっか。それじゃ、“ありがとう”。ＣＯＳ－ＭＯＳ」

「…はい。その言葉だけで私は軽く１０００年は戦えます」

「それは……」

すごい、としか言いようが無いです…。

今のＣＯＳ－ＭＯＳの表情は口元が小さく微笑んでいるように見えた…気がした。その姿はとても柔らかく無表情の普段とのギャップがあり一瞬とはいえ見とれるほどだった。まぁ台詞がとても物騒だったのが残念だったけど…。

相転移砲はまだとしても小型の重力波砲（グラビティブラスト）くらいは搭載してみるか。この世界では無駄なヒルベルトエフェクトを搭載してないから内蔵兵装として、いや外部兵装だな。今回のことが終わったら取り掛かるとしよう♪

……。

役割を果たしてくれたＣＯＳ－ＭＯＳ本体の診断を直接確認にしたあと、彼女にはアングレカム艦内でアンを補佐するようにお願いした。建前では大破したことになっている彼女が今、表に出るのは得策じゃないからな。

不本意だが彼女には暫く裏方で支えてもらおう。――……マジで！もの凄く不本意だけどな！ちくせう…こうなってから気付いた。エヴァちゃんと茶々丸ちゃんに何て言おうかね…。

あ、刹那ちゃんと麻帆良では彼女の師匠の刀子さんにそれとなく関らないよう注意しておかないと…。前にもチラッと電話で言っておいたけど念のためもう一度改めて、ね。

木乃香ちゃんのことがあるから刹那ちゃんは無茶しないだろうから少しは安心…か？いやいやこの場合の問題は刀子さんのほうか…。刹那ちゃんがお世話になっているからあまり酷いことはしたくないんだけどな…。

刀子さんだけど知り合ったのは刹那ちゃん経由だった。彼女には貸しがある。主に一般人の彼氏的な意味でな！初デートの時にウチの店が全面的にバックアップして盛り上げてやったのだよ♪

勿論！それはもう真剣（からかい半分）に頑張りましたとも！！もう一度言うが刹那ちゃんがお世話になっているからね！それ以来いい友人（？）関係を気付いていると思っている。

まぁ刀子さんが麻帆良所属というのは変わらないが…。でも、やっぱり刹那ちゃんがお世話になっている人だしなぁ。いやいや、でも麻帆良側の人でもあるし…。むーっ？敵対した場合はどうしたものか。

やはり立ち塞がってきたのなら手段を選ばず気絶してもらうのが適当だろうか？

……でも刀子さん、神鳴流だからなぁ。飛び道具、効くのか？…効き難いだろうなぁ。それでも全盛期の詠春ほどではないはずだから…んー？

神鳴流か…――――いや、少し待てよ?刀子さんは神明流を会得した女性なんだよな?…これは経験則からだがこの世界の女性はなぜか男よりも強かというか強いというか…うん、簡単に言うと女傑が多い。

神鳴流で代表するなら剣に愛された天才と云われた青山鶴子がいい例だ。彼女は今、結婚して引退していると聞くが当時も今も剣技に衰えは見られないらしい。彼女と少し話した時だが妹は自分以上に才能に恵まれていると聞いた覚えがある。

青山姉妹と刀子さんでは剣の腕に雲泥の差があると思うけど、それでも神鳴流は警戒しておくに越したことは無いはずだ。基準が鶴子さんというのがアレだけど…。

――――よし!近接で仕留めるように言っておこう!

いやいやいや落ち着こう。俺は何を血迷ったことを考えているのか。魔を斬り伏せる近接戦のエキスパートである神鳴流を相手に、その接近戦を仕掛けるとか何を考えているんだろう。

仮に接近戦をする必要があるとしても、まだ新しく生まれた精魔奇兵の彼女達には少しだけ荷が重い、か?集団戦ならば問題は無いだろうが…。ここはやはり陽月姉妹か悪魔3人娘を当てるのが無難か…。

しまった、オリビエ達は表に出してないじゃないか…。それに彼女達は今、情報部三課に出向中だ。ダチュラから「大掃除をするから手伝って♪」とお願いされたから喜んでオリビエ達を即召喚して派遣した。

おそらく情報部内で資料が溜まったのかもしれない。書類とか嵩張るからね。大掃除というからには重い粗大ゴミを運ぶこともある。だから力持ちの2人と重量軽減などの魔法が使えるリビエラは重宝することだろう。

あ、最後に気になることがあった。オリビエ達を出向させた時、ダチュラの笑顔が若干引き攣っていたように見えたんだ。小さく「過剰戦力じゃないかな…」と聞こえた気がしたが彼女はどうかしたのか？資料整理に過剰も何も無いと思うのだけれど…。

む？…まぁ今それはいいとして刀子さんが立ち塞がった時は、やはり陽月姉妹に任せるとしようかな。2人に任せておけば大半の面倒事は実力を以って対応、排除してくれるから安心できる。

……それにいざとなったら神経ガスを散布して効果範囲内の敵を全て無力化すればいいし。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――［工房］情報部本部…。

Ｓｉｄｅ　？？？

場所は情報部部長ダチュラの執務室。ＣＯＳ－ＭＯＳが操作していた模擬機体が彼女達の予定通りに襲撃された日だ。ここで部屋の主である彼女と同じく副部長のダリアが襲撃関連の事後報告書を読

み、まとめ、話し合っていた。

「――で、こんなに居たのね？」

今２人が目を通しているのは一課の敵陣に潜入中の者が提出した報告書とその他の一課の者が洗い出した隠れた敵対者や消極的敵対者に関する報告書だ。報告書に載っているのは皆、直接的間接的に敵対した者ばかりだった。

読み終わったダチュラは報告書を執務机に叩き付け、そのまま椅子に小さな身体を預けると苦虫を噛み潰したような表情をした。彼女達にとって数的には脅威では無いが敵対する者が居ること自体が不快なのだ。

「はい。ＣＯＳ－ＭＯＳ襲撃に直接的、間接的に関与した者が全部で２２人ほど判明。関与していなくても疑わしい者が数名、居りますが、こちらは危険度が低いと判断しました」

同じく読み終わったダリアだがこちらは丁寧に机に置く。表情にも変化らしいものは見られない。いや、眉間が僅かに歪み、瞳の奥に冷たい光が宿っていた。下手に感情を表に出すよりもこちらのほうが怖いかもしれない。

「むぅ、危険度が低いとか関係ないよ。……ダリア、私はね？マスターに仇なす全てを取り除くの。だって…クスクス♪そのほうが安全で確実でしょ？」

クスクスと鈴が転がるような声で無邪気に笑っている姉の様子に「可愛いなぁ！もう！」と内心で悶えるダリアだが、それも一瞬だ。脳内で悶えていたことが嘘のように冷静に姉に言われたことについ

て暫し考える。

今回、情報部が把握している敵総数は直接行動を起した倉持一派１４名、隠蔽工作などの間接的支援をした者が８名、そして動きを見せなかったがためにダリアが危険は少ないと判断したが疑わしい者が１０名の計３２名だ。

表立った倉持一派を排除しても裏方に徹して姿を表に出さない者達は表向き扱いが難しい。――そう“表向き”だ。要は事実を掴ませないようにあやふやの内に闇から闇へと葬ればいい。

ただ、それでも万が一、事実情報が表に洩れた場合、保険として相手が行なった悪事の証拠資料などや相手の弱みになるモノを用意する必要がある。いざとなればそれらで大義名分を作り上げて正当性がこちらにあることを情報操作するのだ。

ダリアは今回、動きを見せていない１０名を除いた２２名のみに目標を絞り確実に対応しようと考えていた。だが姉のダチュラはこれを機に一気に疑わしい者を含めた３２名全てを根こそぎ掃おうと考えていたようだ。

表向き処罰の対象外である裏方支援をしていた８人を情報部が秘密裏に処理する時、ついでに処理することは実働員を増員すれば可能だと思われる。だが先にも挙げたように疑わしい１０人には“保険”の用意をしていない。

ニコニコと笑う小さな姉を見ながらダリアは考える。一気に目障りな者をまとめて処理することはリスクもあるが彼女達が敬愛して止まない葵のために障害（ゴミ）を取り除けるかもしれない状況にあることも確かだ。

ここまで考えてダリアはあることを思い出した。仕事中、表情に乏しい眉間に珍しく皺が刻まれた。

「……しかし、それでは虐殺になるのではないかと…。葵様も極力流血を少なくしようとお考えなのでは？」

正直に言って虐殺など自分達には戸惑うどころか眉一つ動かす理由にもならない。しかし、葵は少々違う。家族のためなら敵の血を大河の如く流すことに欠片ほど躊躇することはない。

だがこれが事自分自身のことになると臆病なくせに優しい、というか甘くなる…。特に……女性には。

その優しさや甘さが人ではない家族全員の悩みの種であると同時に「でも、そこが葵のいいところなのよ♪」と嬉しそうに語られる部分でもある。嫉妬する割りに最後には惚気られるという不思議な事態に毎回落ち着くのだ。

それはともかくとして追加で１０人処理するにしても、これはそれなりのリスクを負うのだから葵にキチンと報告して指示を仰ぐかしたほうが良いのでは、とダリアは考えた。

「むー…確かにそうだよね…。マスターは優しいもの。襲撃してきた１４人はそれ相応の報いを受けさせるとしても他のゴミ屑にはお慈悲をかけるかも…。でも――」

そんな優しいところが好きなのよね♪と言葉を続け赤面する姉の姿を脳内フィルムに録画しつつ全面的肯定を示す。

「ええ、葵様は甘く…お優しいですから。…不遜なことかもしれませんが私は時々考えてしまいます。――私達が注意して葵様を裏からお守りしなければ、と…」

守ってあげたくなるから不思議です、と今度はダリアが言葉の最後に締めくくる。

「あははは♪そうだね。――では、倉持一派の表立った１４人はマスター達にお任せするとして私達情報部は潜在的危険分子を裏から対応します。よろしいか？情報部副部長ダリア」

「ハッ！既に一課と三課には連携して事に当たるよう指示を出し、同時に二課には拠点の地上と地下両方面の防衛、そして裏から葵様を護衛するよう言い含めております」

立ち上がり踵を揃え最敬礼をする。作戦計画はほぼ予定通りに進んでいる。どうせ、やることは変わらないのだ。ならば迅速に行動できるように準備して短時間で終わらせられるようにしておくのが正解だろう。

「いいよ♪いいよ♪…ところで、あの方達は？」

「ハッ、出向されて来られたオリビエ様、リビエラ様、シルビア様のお三方は第一課から三課それぞれに増員として配置いたしました。…葵様は本格的な戦争を考えておられるのでしょうか？正直、過剰だと思われるのですが…」

「それだけ本気ということじゃないかな？あと今は新人も多いから保険の意味もあるんだと思う」

「なるほど…。では修正したとおりに作戦を続行いたします」

倉持一派１４名は計画通り葵が表立って動き正当に処理する。若干の計画の変更点は、自分達情報部は裏で処理する８人についか１０人を加えた計１８人をまとめて対応することになった。

最後には姉に甘いダリアが折れる形になったようだ。尚、このような些事は報告するに値しないとして独自の判断で行動することになった。こうして葵の安全は知らない内に確保されていくことになる…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第六十四話「流れる陰謀と最後の用意とゴミ処理方法と」（後書き）

葵の知らないところで排除対象者が増えている、だと…！？
作者の意図しないところでこういう展開が増えていくんですよねー。
もうどうやって収拾をつけていいやらわかりませんよー…。

最後に…作者に時間と文才を下さいｏｒｚ

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十五話「カウントダウンと機械化兵団とメイドさん?と」（前書き）

うん、タイトルに意味は無いです。
毎回その場のノリと勢いで決めているからね！
はぁ文章をコンパクトにまとめる才能が欲しい…。
色々と書いていると、どうしても文字数が増えてしまうのですよ。
癖になっていて直らないったらないｏｒｚ

では続き！

４／８
上手く文章表現が出来ていなかったようなので一部加筆修正を加えました。

第六十五話「カウントダウンと機械化兵団とメイドさん？と」

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

本来なら金曜のお昼の時間である今は馬車馬の如く接客をしているはずだった。…だったんだけど喫茶店の店内で俺はカウンターに突っ伏して脱力している。その理由の答えは喫茶店の玄関に張り紙にある。そこにはこう書かれていた…。

――真に勝手ながら所用のため本日から暫く臨時休業とさせていただきます。――

…はい、というわけで臨時休業中の我が喫茶店です…クスン。いやまぁ何を突然と思うかもしれないけど、予定通りＣＯＳ－ＭＯＳの模擬機体が襲われたから現在、第一種警戒態勢と言ってもいい状況だから喫茶店は臨時休業なのですよ。

ちくせう…。だから戦いとか面倒なんだ。趣味の喫茶店も休まざるを得なくなってしまった。それでも当店に来てお茶やお菓子を楽しんでくれているお客様の身の安全を確保するには必要な処置ではあるから仕方ないけどね…。

誰だっていつ自称正義の魔法使いの手によるテロが起きるかも、わからない店に来たくは無いだろうさ。まぁ正義を自称する割りに闇討ちする倉持一派に白昼堂々と仕掛けてくる勇気は無いだろうけ

どな。

万が一、トチ狂ったヤツが居てもおかしくないからこれは当然の処置だと思う。まぁその時はとっ捕まえて情報部へ引き渡して手段を選ばない取調べを受けてもらう。絶対に…。

……。

今、店内にはハオとユエは勿論だけど今は一種警戒に入っているからそれ以外に親衛隊から４人が護衛としてピッタリ張り付いている。なぜかメイド服（それも俺好みの正統派！）を着用していた…。それもどこか着慣れた雰囲気がある。

ハオ達はいつも通り、一歩下がった両隣で待機してくれている。ただ、何でか知らないけどメイド服を着た４人が見詰めてくる視線にとてもキラキラしたものを感じた気がした。……アレは何？

いやいや、まぁそれはいいとして、だ。なんとなく今の状況に納得がいかなくて、ぐてっと脱力していると隣の席に人の気配を感じた。この気配はアイリだ。間違い無い。…は？家族の気配を間違えるはず無いじゃないか。わかるよ！

「閣下、ご要望された戦力が整いました。ご確認をお願いします」

「…うぃ、どれどれ…？」

相変わらず丁寧に内容を整理された書類に目を通した。こういうアイリは一流秘書としても通用すると俺は思うね。ここにファレノが加わると情報整理など事務処理はこの上ない能力を発揮してくれるから助かる。

それで、なになに？えーと…初期型シュワさん（型番Ｓｙｕｗａ－ＴＸＮ－０１）が４００機に改良型シュワさん（型番Ｓｙｕｗａ－ＴＸＮ－０２）が２００機、そして新型シュワさん（型番Ｓｙｕｗａ－ＴＸＮ－０３）が１００機…。

ザッと流し読みした使用兵器一覧には各種シュワさん７００機を使用するとあった。まだ備考欄は見ていないけど更にあると思う。

今まで影の薄かったシュワさん達だが今まで何もしていなかったわけではない！来る日も来る日も模擬集団戦闘演習などを行い、またある時はデータ収集のために数十機ほど未だに混乱が続く中東に送って実戦テストをやっていたのだよ！

蓄積されたデータのお陰でシュワさんも０１から０３にバージョンアップしてグレードアップした。これで名実ともにシュワ“さん”だな！……まぁ本当は俺も知らない内にアイリ達がデータ収集などの手筈を整えてくれていたんだけどね。

因みにこれらのデータは並列化処理をしてバグを除去したあとに統合、整理してからＣＯＳ－ＭＯＳにフィードバックしている。このお陰で戦闘性能が飛躍的に向上していたのは驚きだ。データの更新はこまめにするものだよね。

ＡＩ仲間としては次世代電子精霊融合型統合制御ＡＩであり実体の無いアンも遍く情報の海、広大なネットワークの中から情報を取得し学習することでＡＩとしての格が上がっているしな。物質じゃないけど情報量の多さは偉大だよね。

そう考えるとシュワさん達が得た経験値の全てがＣＯＳ－ＭＯＳ

に集約されている、ってことだから彼女の成長率は意外とバカにならない。どこの影分身だと言いたいね。こっちは実体ありだけど…。

まぁそれはともかくとして、だ…。

「各バージョンのシュワさんが７００機か…。０１系や０２系はこれで全て？０３系は？」

「はい。今ある０１系の半分は改良を施した０２系にグレードアップしています。備考欄に記載してありますとおり０２系２００機を後詰として待機、そして最新の０３系１００機を遊撃隊とします」

各種シュワさんが０１系と０２系が各４００機に０３系が２００機の計１０００機か。うん、いいねぇ♪これで地上戦における集団による相互支援戦闘を主目的に開発されたシュワさんが群れを成した魔法使い共にどれだけ通用するかの試験も出来る。

この他にもアカトンボが５００機、上空で戦況を観察し戦闘データの観測をする。上空支援機としてカブトムシ４５０機を戦闘待機させてある。少なく感じるけど今回の先方にして主役はシュワさんだから、これでいい。

万全、圧倒的戦力と言うには足りないけど目的に副った戦力を用意してくれたアイリに感謝の言葉を送った。ただ、それだけだと俺が寂しいから何となく頑張ったね、と彼女の頭を撫でてしまった。サラサラでいい香りが…！

「あ、ありがとうございますっ！ふふ♪…はっ！？こほんっ、しかし、これも皆の働きあってのことと考えます」

「ん？くくくっ。なるほど、アイリの言うとおりだ。個だけの力には限界があるからね」

取り澄まして言うアイリだけどその頬はまだほんのりと赤い。最初は恥ずかしい思いをさせてしまったかな、とも心配したけど嬉しそうに口元を緩めているから大丈夫だったらしい。本人は隠せていると思っているようだけど隠せていない。

このまま和みそうだったけど一瞬だけ寒気を感じてビクゥゥ！っと身体が無意識に反応した。咄嗟に原因と思うほうへ視線を向けると……いつも通りの陽月姉妹とニコニコしている新たな護衛の４人以外に居ないし無かった。

気のせいだったのか…？

寒気の気配も原因となりそうなモノも無かったし…。いや…そもそもの話しだが異常があればハオ達が逸早く気が付いて相応の対応をするはずだ。そう考えるならば、やはり今のは俺の気のせい、ということか。

ただ、隣に座ったアイリの引き攣った笑顔と顔色が優れなかったこと、それにプルプルと身体が震えているのが気になった。……有り得ないけど風邪、だろうか？

……。

集団演習で精魔奇兵の彼女達を純粋な魔法使いに見立てて実施したことあるけど戦闘方法が微妙に違っていたんだよ…。外側は人をベースにしているけど中の存在自体が半分魔法生物だから詠唱は無いし、参考にならなかった…。

だからシュワさんが本格的な実戦で本物の魔法使いを相手にした戦闘はこれが始めて…のはず？今までは中東の武装ゲリラが相手だったからね。だから、と言うわけじゃないけど麻帆良勢には期待していますよ♪存分に暴れてシュワさん達を蹴散らしてほしい。

駆逐され、蹂躙され、殲滅され、撃滅され、屑鉄にされればされるほど戦闘データは蓄積され、そこから更に高性能のシュワさんを製作できる。いやー、こう言っちゃアレだけど丁度良かった！むふふふ♪

ＣＯＳ－ＭＯＳの模擬機体を大破させた代償は最大限の利子付きで回収させてもらう…。

あー、そのＣＯＳ－ＭＯＳだが想定外のことで元がシュワさんと同じ機体のはずの彼女が…もうね？“別物”と言えるほど変質してしまったので初期の設計思想には合致しなくなっていたんだ。

その一因は内部武装と外部武装はＣＯＳ－ＭＯＳしか搭載してないというのもある。…だって外見が初期ＫＯＳ－ＭＯＳなんだよ？それらしい武器を持たせたいじゃないか！俺の技術チートは世界一ィィ！！と叫びたいね！

まぁノリと勢いとその他諸々で個人武装を強化したら彼女に搭載された学習機能が変な方向に働いたのは何と言うか…はぁ。

気付いた時は遅かったんだ…。自分でプログラムされた設計思想を書き換えて軍対軍仕様だったのを個対軍仕様になっていたんだよｏｒｚ当初は誰かが彼女を調整したと思ったのに違ったんだよ…。ラミエルさんとかアンとかもそうだけどさ。

……今更に思うんだけど自己進化する兵器とかさ…もう作成者の俺っていらなくない？

お蔭で特定条件下では一人無双できるくらい個人戦闘特化になっていて本来のデータ取りが出来なくて困っていたのは笑うべきか泣くべきか…。いや、ここは生みの親としては楽が出来て喜ぶべき、なのか？

フフッフフッ…。まぁそれは置いておくとしようか…。

今はともかく監視やら盗撮やらされていたストレスをここで一気に発散しよう。くくくっ♪精々踊ってもらって俺の利益になってもらう。特に倉持君は絶対に逃がさないっ…！

……。

そのあと妙に挙動不審気味なアイリのことを気遣って簡単に明日の作戦を打ち合わせて終わらせた。帰り際に彼女に無理しないように、と心配して声を掛けたんだ。風邪とか有り得ないけど素体に問題があったら怖いからね。

最初はアイリも微笑んでくれたな。心配してくれてありがとう、とも言っていた。だけど俺の背後へ視線を移すと表情を引き攣らせて慌てるように「あわわ！？それでは失礼しますっ！」と言って店内から出て行った。どこの軍師様だよ…。

「本当に何があったし…」

とりあえずアイリが見ただろうものは何かと振り向いてみれば…。

「???我が君、どうかなさいましたか?」

「何か?気になることでもございましたか?」

ジッと見ている目の前には綺麗でソックリの美人顔の姉妹が小首を傾げて聞いてきた。他の4人もニコニコと微笑んでいるけどやや不思議そうにしている。とりあえず、何でもないことを伝えて、またカウンターに突っ伏した。

「「「「「???」」」」」

あれ?俺が間違っていたのか?アイリは何に慌てていたのか…。やはり俺の気のせいだったのかもしれない。まぁ家族同士で争う理由が皆無だから気にし過ぎなのかもしれないな。俺は家族全員を愛していますっ!……うん、家族の温もりは尊いと思うんだよ。

……。

それから護衛の皆とトランプやウノなどのカードゲーム、懐かしいジェンガなんかで暇を潰していたんだ。なぜか大富豪はユエがほぼ1人勝ちしていた…。いや!大貧民なら俺でも勝てる!……負け惜しみだよ!悪かったな!?

こほんっ、まぁそんなことはどうでもいいよな。すまん…。さて…皆さん、突然ですがお昼頃に来客がありました…。来訪者は2人。1人は古馴染みのタカミチ、もう1人はガンドルフィーニ君です。

とりあえず敵意は無いようだったのでテーブル席に案内して向かい合って座りタカミチにはコーヒーを、ガンドルフィーニ君には紅

茶を出した。２人は飲み物に手もつけず、眉間に皺を寄せて何か難しそうな表情をしていた。

そのあと１０分以上無言で向かい合っています。だが残念ながら俺には男と見詰め合うという特殊な趣味は持ち合わせていないのだよ。見詰め合うのならお前ら２人だけでやってくれと言いたい。

……お前ら本気で何しに来たし。

いい加減、焦れてきたので俺から話しを切り出そうとしたらタカミチがそれを察知したように話し始めた。

「……葵さん、今回のこと、僕達は学園長から聞きました。それでＣＯＳ－ＭＯＳ君の損害は…」

タカミチ君は悲しいことを言うようになったな…。この子は俺の負傷した家族（無事だけど…）を“損害”などとまるでモノ扱いするような台詞を吐きやがった。ここはせめて怪我とか重傷とか…ほら？もっと言葉があるだろう。

確かにＣＯＳ－ＭＯＳを構成する物質は金属が大半だよ？でもさ、キチンと個としての意思存在は確認済みなんだ。もう一生命体として存在しているんだよ。ならばそれ相応の礼儀というか言葉の気遣いくらいしてもいいだろう？

勿論、彼女は人間だ、なんて馬鹿なことは言わない。言えるわけが無い。それは機械人形（マキナ・マータ）である今の彼女の存在を全否定する侮辱以外の何物でもないからだ。

機会人形“でも”愛せる？否！断じて否だ！機械人形“だからこ

そ”俺は彼女が、ＣＯＳ－ＭＯＳが堪らなく愛おしい！サラサラの綺麗な髪が好きだ！赤い宝石のような瞳（カメラアイ）が好きだ！カモシカのような足が好きだ！彼女の全てが好きだ！

それを…それをタカミチは……！！

「おいおい、損害などと寂しいことを言うなよ…」

一瞬だけ気が抜けた…。人が良きにしろ悪しきにしろ変化するのは喜ばしいが時の流れは哀しいねぇ、哀しいよ…。１人では臆病者で小心者の俺はカナシイと感じた。だから思わず…。

「――――なぁ？タカミチ…」

タカミチだけに瞬間的に高純度の重圧を当てていた。これもハオとユエ、それに４人も家族が見守っていてくれるから出来ることだね。俺１人だったらこんなことできないかもしれないなぁ。うん、俺、臆病者だしね。

タカミチの隣に座るガンドルフィーニ君は冷や汗を掻いているから一瞬だけ場の雰囲気が変化したのを肌で感じたのかもしれない。なかなかに鋭い勘と感覚をお持ちではないか…。若いのに比べて大分マシだったんだな。少々、意外だった。

言っておくが悪意や殺気ではなく純粋な闘気による精神的威圧だ。だって俺には殺意が無い。特別、殺したいとも思わない。ただ結果的に家族の誰かの手によって相手が死んでいるかもしれないというだけのことだ。

「ッ！すみません…。配慮が足りませんでした…」「……ッ……」

「うぅん？いや、わかってくれたならいいよ♪で？話しを進めてくれ…言葉に気を付けて、な。くくくっ！ほら、時間は有限だ。早くしてくれ」

「は、はい。実は――」

身体を包む重圧から開放されたタカミチはホッと安堵の息を漏らした。嘗て無いほど高純度の気に当てられて顔色を多少青褪めながら、突然訪ねてきた目的を話してくれた。途中、言葉をつかえながらも徐々に冷静さを取り戻して説明してくれた。

タカミチは丁寧に説明してくれた。ええ、それはもう丁寧の頭にバカという言葉が付くのではないかというほどに、な…。最初に威圧したのは確かだが、この態度は無いだろう？脅えているようじゃないか。

いやいや、わかっているよ？説明の内容が内容だから俺が怒らないかを気にしているのだろうさ。こちらの予想より早くＣＯＳ－ＭＯＳが襲われたことについて話し合い…というか交渉をしに来たしね。

で、だ。案の定、説明してくれたあとに学園長からのアリガタイ伝言を頂きました！長ったらしいので内容は省くが要するに“自分達で処分するから大人しくしていること”ということらしい。マジでいらねぇ…。

まぁ宣言通りに今夜、学園長に電話にて引渡しに応じるか否かを確認するんだがね。ただねぇ、今の状況から考えるに学園との戦争はほぼ決まっていると思うけどね。だって、家族の皆が久しぶりの

戦争でヤル気満々なんですよ…。

オマケに、と言ってはなんだけど戦後1年はほとぼりが冷めるまで宇宙に上がるつもりだとしても今の内に余計な虫は早く潰しておかないと戻った時の生活に支障が出るし何より不安だ。……出来る限り取り除いておかないと。

つまり、だ…。ここで彼らとの話し合いは無意味以外の何物でもない。精々世間話がいいところか。男と話しても華がないから楽しくないけどな…！！ううっううぅ…！ここにハオ達が居なかったら酒を出していたかもしれない…。

いやいやいやいや、それより何よりも俺の家族に手を出しておいて謝罪だけで許せというのが納得いかない。心が狭いと思われようとこればかりは構わない。俺は俺の大切な家族に害を及ぼした相手をこの世から消し去りたいんだ…。

だが、敵対者は多いか…。くくくっ！まだまだ人員の増強は必要かもしれないな。前は冗談半分だったけど、もうこうなったら“目指せ！総家族数１０万人計画ぅぅぅ！！”を実行するとしよう。まだだ、まだ自重なぞしないよ！

主に俺達の安全のためになっ！！

そんなわけで俺はテーブルの向かいに座る2人へ俺の自己解釈を交えながら確認するように少し威圧を交えて話した。……2人の顔色があまりよろしくないのはどういうことだろうか？

「……うむうむ、なるほどねぇ。つまりは俺に“報復をするな、手を出すな”とタカミチ達は“今、怒っている俺”に“命令”したい

んだな？」

「そ、そんなっ、命令なんてっ！これは僕個人、友人としてのお願いですっ！」

いや、タカミチよ…。これが命令ではなくて何だと言うのか。例え個人的なお願いだとしても俺の大切な家族が襲われたんだぞ？俺が報復に動かないはずが無いじゃないか♪最低でも倍返しだな！あははは っ！

え？…周囲への被害？――それが何だよ？

被害？被害なら俺のほうが受けてるよ。タカミチ、お前さぁ、あまり甘ちゃんなこと言ってるとお前も相応の覚悟をしろよ？いや、まぁまだ正式に学園長から返答は貰ってないけど……正直に言って引き渡す気ないだろ？

だからさぁ…敵として前に出てきた時に知り合いだからって手加減してもらえると思ったら大間違いだ。目標以外はなるべく殺したりしないが立ちはだかるなら腕や足の1本や2本は貰うからな。

タカミチと俺はお互いの意見が平行線になっている。正直、面倒だ…。こんな時は「オリ主だZEッ！！いぇやぁぁあぁ%&;lgJr;jf$%&;n！！」みたいに弾けられれば楽なんだろうな、と思ってしまう…。

ああいうのは個人だから出来る無茶だよね！俺もやりたい…気ままに暴れたいー…。もうね？書類整理とか人間関係とか面倒で面倒で…はぁ。あ、喫茶店は別だよ？あれは趣味だからまだ楽しめるのよ。

「…学園長も今回の倉持君らの軽率な行動を重く見ています。彼らには然るべき罰が下されるでしょう。そして貴方にも見舞金として相応の額が支払われることになります。どうか、それで…」

うん、少し待とうか…？ガンドルフィーニ君、いや小僧…今、お前は何と言ったのか。俺の聞き間違いだったか？なんだか…つまり、あれだ。要約すると“金で忘れろ”と聞こえたような気がするんだがな。

「ガンドルフィーニ先せ――――ッ！？」

突発的に俺の内なる力…魔力や気…が瞬間的に高まり濃厚な存在感となり溢れ出した。瞬時に店内を満たした時には緊張感がメーターを振り切った。室内に満ちた威圧感は今までの比ではない。敵対する全ての存在を否定する圧迫感を与える。

何かをタカミチが何かを言いかけたがあまりの事態に話すことすら出来ず無意識の内に両手をポケットに入れて無音拳の使い手として戦闘態勢を取っていた。俺に応えるようにハオ達も瞬きの間に双剣を手にしていた。

――――だが、今の俺にはどうでもいいことだ。タカミチのことは皆に任せておくとして、俺はガンドルフィーニ君に話しがある…。

「お前…少し黙ろうか？」

「ッ！？――――え、い、ぁ…」

おい？おいおい？何を怯えている？何を脅えているんだ？どうし

たんだよ、小僧？金で解決する、と言っていた先程までの威勢はどこに言ったんだよ。あぁ、俺はお前のことをいい奴かもしれないと思ったよ？本当だよ？嘘じゃないよ？

勝手にそう思っていただけだけどさ…。

まさか、まさかまさか、小僧がこんな成金な提案をしてくるとは夢にも思わなかったよ。ここに居ない嬢ちゃん達が今の状況を見たら何と言うだろうな？あーもー、俺はガッカリ…いや、これは学園長の入れ知恵か？良くも悪くも生真面目な小僧が？

そうだよ、こんなイヤらしい方法を自ら進んで取るとは考え難い。となるとこんな搦め手をしてくるのは、やはり学園長（じじい）か…。これは時間稼ぎのつもりかね。金で形がつけば良しダメならばそれも、ってか？

――フザケヤガッテ…。俺の家族を金で買えるとでも言うつもりか？

くくくっ！木乃香ちゃんを攫ってみるか。そうすれば俺の気持ちも…ダメだな。攫おうにも生真面目な刹那ちゃんが許してくれないし、のほほんとしている木乃香ちゃん本人も嫌がるだろうしねー。

…何？無理矢理攫えばいい、だと？

そんなことできるか！！可愛い女の子は愛でるものであり優しくするものだっ！！！このことで文句など言わせん！！！駄々こねるヤツは問答無用でラミエルさんの荷電粒子砲を最大威力でプレゼントしてやる！！

「葵さん、落ち着いてっ！落ち着いてくださいっ！？彼に他意はないんです！だから…！」

「――――黙れ。タカミチよ、何を慌てているんだ？俺は極めて冷静だって。なぁ？皆…」

俺の言葉に背後に佇む陽月姉妹は微笑んだ。その途端に途方も無い重圧が店内を覆いタカミチ達は心臓を掴み取られる錯覚と首と言わず身体を斬り刻まれた姿を幻視したはずだ。

そして四方に居る護衛４人は何も言わずに綺麗な笑みを浮べていたが俺の言葉を理解すると更に笑みを深めた。メイド服のスカートが僅かに不自然に揺れたから銃を収めたホルスターの止め具が外されたのかもしれない。

皆は既に臨戦態勢ですね？寧ろ、かかって来いや的思考ですね？わかります、わかっていますよ…。はぁ、ハオ達にも言えることだけど彼女達の保有する魔力が過剰なまでに高まり瘴気のように垂れ流されていたのは錯覚だと思いたい…。マジで怖いから…。

そんな彼女達がタカミチ達に放つ重圧の正体は幻視させるほど明確な殺気と敵対することすら馬鹿なことだと思わせるほど身に纏う強大な闘気だ。直接向けられていない俺も背後からビシビシ感じる。

「ぁっ？っっ！ハァ…ハァ…」

「うん？どうしたんだ、小僧。金で形をつけるのだろう？俺の家族のことを、さ…」

「「……」」

む？威圧し過ぎたか…。２人とも顔色が悪い。あまりにも聞き捨てなら無い台詞が聞こえたからって精神的に追い詰めすぎたかもしれない。帰りに胃薬を渡してあげるべきだろうか。

「お前ら、帰れ…。話し合う余地など無い。そして次に会うのは――」

“敵”として、かな…。

……。

……。

多少、意気消沈気味のタカミチ達が帰って時間は経ち、今は月も出始める夜だ。待ち遠しかった…。くくくっ！ある意味、最も待ち遠しかった時間だ！倉持共（クソ）の引渡しに関する返答期限が迫ってきた！

これに学園長は何と答えてくれるのかね？くくくっ！要求に屈して外の魔法関係組織へ個人に屈した無様な姿を曝すのか、それともあくまでも引渡しを拒否し強硬に抵抗して破滅寸前の被害を受けるのか。

うむ！楽しみではある！…正直、無駄な抵抗はしないでサッサと引渡してほしいものだけどね。余計な手間が掛かるのは面倒に過ぎるからな。

まったく、いいじゃん、面倒な馬鹿をまとめて排除できるんだから学園長（じじい）も万々歳だろ。ハッキリ言って守るべき対象を間違えているとしか思えない。仲間にするにも選別は必要だと思うよ。

何でもかんでも受け入れていたら切りが無いったら無い。実力は優秀でも性格が歪んでいたのなら使い物にならない。百害あって一利なしだ。倉持らのそれを矯正もせずに居たのだから怠慢以外の何物でもないな。

くくくっ！まぁ？その愚か者が居たお蔭で目障りな人間（クソ）を１４人もまとめて消すことが出来るんだからその点だけは感謝してもいいかな。……戦うことが面倒だけどな！あー…面倒な。

……。

さてさて、学園長が引渡しを拒否した場合、シュワさんの集団戦闘状況下におけるデータ収集や他にも俺達の利益になるように情報部が色々と画策している。秘密裏に学園都市を包囲しているから倉持一派が逃げることは不可能だしね。

あ、人員を増強してから凄いんだよ？機動兵器主体の作戦部と違って所謂“歩兵”や“工作員”関係は情報部にあるから中には俺も知らないような作戦計画も動いているかもしれないんだ。

…うん、まぁ、だけど、俺に被害は無いはずだから黙認だな。うん、だって…。

「……（ボソッ）何か聞くのが怖いし」

「…申し訳ありませぬ、我が君。今、なんと？」

「えっ？いや…あははははっ、何でもないよっ。ただウチの子達は頑張っているな、ってねっ！」

言えない…。情報部が影で何をしているのか、わからなくて怖いな、なんて考えていたとは言えないよ。いや勿論、皆は可愛いし大好きだから何があろうと嫌うことはありえないけどね！

惑星破壊規模ではない限りは、ほぼ全てを黙認しますよ？まぁ大規模な戦争に発展しそうになったら“めっ！”って叱ってあげないとダメかもしれないとは考えているけどね。とはいえ身内にはトコトン甘い俺にそれができるのかどうか、ハハハ…。

「あぁ、そうでしたか。ふふっ、それもそうでしょう。皆、張り切っているのですよ」

「張り切って？……あー、小規模とはいえ久しぶりの戦争だからか」

「ええ、それもありましょうがそれだけではありませぬ。皆、我が君にいいところを見せたいのです。だから挙って敵将を討ち取ることでしょう。ふふっ、なかなかに愛い者達ではないですか」

うんっ！何だかもの凄く物騒な気配がしたかな！極力、目標敵勢力である倉持一派以外の殺害は控えてほしいかな！……最悪でも腕や足の1本程度に抑えてほしい。余計な殺しは怖いし趣味じゃないからさ…。

「あー…その…程々に、ね？…無理だけはしないように言っておいてね？」

何事も程々が一番だと思うんだ、うん…。それはまぁ、今回は俺も怒って…うん、激怒しているから倉持一派だけは1人残らず殺害、または生きたまま捕縛して生まれてきたことを後悔するほどの報い

を与えるけどさ。

「なんと…！聞いたか！？ユエよ！我が君は相も変わらずお優しいっ！」

「うむっ！その通りであるな！それでこそ吾らの敬愛する我が君だ！」

「承知いたしました！部隊にはその旨を徹底するように言い含めておきましょう！」

「え？あ、うん、頼むよ…」

あれぇ…？何か壮大な誤解を与えたような気が…。２人やメイド服の４人もキラキラした視線を向けてきているのか…？俺は敵を心配したんじゃなくて家族の身を心配しただけなんだけどなぁ。

むー？いやそれでも敵味方への被害は出来る限り少ないほうがいい、のか…？うん、まぁ殺ることは殺るから偽善もいいところではあるんだけどね。でも、ここは今後の関係のために“やらない善よりやる偽善”かな。

……。

身内の裏の存在の可能性を感じて「アレ？もしかして…」っとガクブルして考えていたたらいつの間にか時間は返答期限である午後８時、その５分前だった。

いや、マジでガクブルしていたわけではなかったんだよ？だけど例のメイド服を着た４人が心配してくれたのか護衛のはずなのに甲

斐甲斐しく世話をしてくれたんだ。飲み物を用意してくれたり…マッサージしてくれようとしたり…他にも、ね。

メイド服の魔力（魅力）に俺はもうタジタジだったね！もう正式に戦闘服のデザインもメイド服にしちゃおうかな。今の個人兵装の戦闘服は特殊部隊のＳ．Ｗ．Ａ．Ｔ．隊員みたいだから華がない。格好いいとは思うけどね。

これが終わったらマジで考えてみよう。どうせ木星までの航海中は比較的、暇になるだろうしさ。あ、その時はリチラにもデザインを手伝ってもらわないと。今の制服も彼女が大半をデザインしたものだから任せて安心だしね。

だが！正統派スタイルだけは譲れない！

これぱかりはどんなに言われても譲れないんだ…！すまない、リチラぁ…！！って……あっ！？皆が乗れる船が無い！？忘れていたぁ…。家族全員が乗れるような超巨大艦船が必要じゃないか…。

内部空間はお得意の亜空間操作で最大限拡張するとして…最低でも全長１０ｋｍ級艦船は用意しないとなぁ。今から造って間に合うかな？いや、月の時間加速特区なら…いけるか。あそこの加速時間は通常の数百から数千倍だし。

あー…そうこう考えていると約束の時間になってしまった…。くっ！？こうなったら仕方ない。いざとなれば家族全員で時間加速特区内に入り即効で造り上げるしかないな…。あーもー、ミスったなぁ…。

はぁ…とにかく今はやれることを片付けてから考えるとしよう。全てはそれから、だよね。えーと、電話は…？

「あ、ねぇ？学園長に…」

「ハッ、こちらにご用意しております」

誰かに電話を持ってきてくれるようにお願いしようとしたらメイド服の１人がサッと子機を手渡してきたよ。まだ台詞を言い切ってなかったのに…。この子達はエスパーか？……あ、元精霊と元悪魔だったか。あははは、って関係ないし…。

「……用意いいねぇ。うん、ありがとう。助かったよ」

それはともかくとして前もって用意してくれていたことは確かなのだからお礼は言うべきだよね！……うん、でもマジで今更だけど何で、この４人はメイド服を着用しているのだろうか？可愛いと思うし目の保養になって俺としてはいいんだけどね。

「い、いえっ、当然のことをしたまでですのでっ。お気になさらずに願いますっ」

「ううん、それでもありがとうね」

「は、はい…♪」

か、可愛いなっ♪頬を染めて「えへへっ♪」なんてテレテレとしているじゃないかっ！正統派メイド服が俺好みだから今の姿が俺のハートにドストライク…はっ！？まさか俺のメイド好きがバレていたのか！？

クッ！一体どこから情報が洩れたんだ！？俺の個人フォルダには厳重にプロテクトを掛けて電子情報のバックボーンに隠しておいたのに！誰が…？まさか！アンか！？あのプロテクトを突破することは彼女なら容易いか…！

うぅぅ、ヒドイよ、アン…俺の隠れた性癖が皆にダダ漏れだよ…。この４人は俺のうろたえる姿を見て楽しんでいるんだな…。もしかしたら今までの姿もどこからか撮影されていたかもしれない…！恥ずかしいなぁ……。

まっ！間近で皆のメイドさん姿が見られたから悔いは無いけどねっ！もう、こうなったら開き直ってやるっ！あぁそうさ！俺はメイドさんが大好きさ！ふふんっ♪――――ダメだ、欝だ、死のう……。

うぅぅうぅぅ！！くくくっ！くははははっ！！こうなったらこの怒りも上乗せして学園長にブツケルシカナイ！！えーっと？学園長への電話番号は０４の……。

番号を押し終わるとトゥルルル、と耳元に呼び出し音が聞こえてくる。数回コール音が鳴り続くけど…。あれ？出ない…？遅い…。イライラしてテーブルの上で指をコツコツと叩いてしまう。

俺が少しだけイライラッとしていると１人のメイド服の子が気を利かせてサッと紅茶を出してくれた。視線でありがとう、としてから香りを楽しんだら爽やかな香りだった。一口飲んでみると鎮静効果のあるハーブティだった。

なんて芸の細かいことを、と感心していたら電話口からガチャッという音が聞こえ…。

『――…ワシじゃ』

…やっと出やがった。内心イライラがぶり返しそうだったけど、それじゃせっかく気を利かせてくれた子の気持ちを踏み躙ることになるから我慢だ。俺は耐える子、忍耐の子ですよ？ええ、限度以内であれば我慢できる子です。

「こんばんは、学園長♪侘び寂も無くて恐縮だが早速本題に入らせてもらおう。…返答は？――ハイかイエスで答えろよ」

『むぅぅ！？』

だから限度以上のことには容赦しないんだよ…！素直に引渡すか、それともボコられてから引渡すのか選べよ。態々、二択で聞いてやったんだから感謝しろってんだ！俺も優しくなったものだなぁ…。

今日は何かとキレ掛かることが多かったから胃薬が欲しいな…。あ、撤収準備もしておかないと…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第六十五話「カウントダウンと機械化兵団とメイドさん?と」（後書き）

これだけは言わせてくれ。
なぜにメイドさんが出てきたし…。
いや、作者も好きですよ?メイド喫茶とかは行かないですけど…。
奉仕の心は癒されますよねぇ。可愛ければ尚良しです。

さて、ついに葵が学園長に啖呵を切りましたね。
臆病者の彼ですが背後に家族の皆が居るから強気にもなれるのですよ。
強力なバックが居ると人間は強気にもなれるというものですな。

そして月で５０ｋｍ級戦闘移民船が建造されていることに気付いていない！?
自動人形達の頑張りは葵を喜ばせてくれることでしょうね。
半分呆れるかもしれませんがｗｗ

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

連載一周年記念。（前書き）

うん、気が付けばもう一年が経っていました。
早いものですねー。本当に早いものですー。

…一年かけて原作に突入していない自分にガッカリだよ！
チクショー！原作ェ…！なかなか手強いじゃないか…！？

うん、ごめんなさい。言ってみたかっただけです。
こうでもしないと作者のモチベーションがガタ落ちしそうだったので…。

東北ではまだまだ地震の被害がすごいです。
こわいですよー。旅行中の家族が巻き込まれた時は不安が天元突破しました。
思い出すだけでガクガクブルブルしますねー。
それと作者は関東圏在住なのですが余震が起きる度にビクビクしてしまいます…。
地震マジでイヤー…。でもまだ続くようなのでションボリですー。
気合を入れるためにー！
頑張れ日本！負けるな日本！！勝つんだ日本！！！
……あ？誰に勝つんだよｏｒｚ
すまん、こんな落ちで…。

連載一周年記念。

――？？？…。

Ｓｉｄｅ　？？？

最初の“精魔奇兵”の始まりは１８００年代の初期だった。これは不老という遠く永い孤独の運命を付与された１人の男が、その運命から逃れるために親愛なる他人、愛おしい家族（ファミリー）を求めた一つの究極の結果だ。

その男の名は“九重・葵”、髪は艶やかな黒、瞳も優しさを宿した黒色をしている。彼はとある理由（娯楽的な）で女神（幼女）の手によって世界の外より落とされてきた（落とし穴的な意味で）来訪者であった。

……。

……。

最初に精霊、悪魔とは…。

それは身体構成の大部分を純粋な魔力で構築されている存在。力の弱い下級精霊は単体での顕現も難しく、悪魔は召喚主の魔力を糧に呼ばれない限り実体化もしない。

早い話し、精霊も悪魔も魔力さえあれば暫くは擬似的な実体化が出来るのだ。ただし、魔力の必要消費量が馬鹿にならないが。

そもそも、精霊も悪魔も突き詰めて考えれば一つの魔法生物だ。
それも人の手の入らない天然のモノだ。彼（彼女）らは魔法に特化した魔法生物である。特殊な例を除いて実体化そのものに魔力を消費するのだ。

因みに特殊な例と言うのは人間と人外の間に生された子、所謂、混血（ハーフ）と呼ばれるものだ。人間の安定した汎用性と悪魔や精霊の高い魔力適正、その2つを兼備えた存在。半分が人間ゆえに安定性が補強されるのだ。

代表例として烏族と人間のハーフである桜咲・刹那、そして悪魔と人間のハーフである龍宮・真名が挙げられる。

ここまで聞くと、とても優れた固体に聞こえるのだが問題が無いわけではない。そして問題とは懐妊率が低いこと、仮に妊娠したとしても出生率が極端に低いことだ。

……。

ハーフは通常の個体とは違い強靭な身体を持つ。これを人工的、後天的に精霊や悪魔を昇華させることで擬似的なハーフ種を創り上げ、更に強化したのが精魔奇兵という存在だ。

そして身体の主な構成となるのが“素体”だ。これはその殆どを有機性のナノマシンと生体金属で構成されている。勿論、葵が魔導科学と言っているだけあり魔術的・魔法的生体組織も多数使用されており構成されている。

断言しておくが重くは無い、決して重くは無いのだ。羽のように軽い！比喩的な意味で！種族を超えて女性に体重と年齢の話題を振

ることは命取りになるのだ。覚えておくといい。

こほんっ、素体は巨大な白いマシュマロのような外見で、それが溶液に満たされた生体ポッドの中でプヨプヨと浮いているのだ。ついでに言うと融合前の素体は空気中に触れていると緩やかに組織崩壊を引き起こしてしまう欠点もある。

……。

こほんっ、つまり簡単に言うと精魔奇兵とは“精霊や悪魔と呼ばれるモノ”と“特殊な素体”を機械技術と魔法技術を融合した方法で“葵と言う名を楔として世界に再誕”させたものだ。

ただし、なぜか創造主である葵の意思と関係無く精魔奇兵化すると必ず人間の女性体に構成されてしまう。当時も何度も改善を試みたが何れも失敗に終わっている。このことが欠点と言えば欠点と言えるのかもしれない。

最もそれは１９００年代後期に精霊や悪魔の意思によるものが大きいことがわかり、問題は解決している。相手の意思を尊重する葵では何も出来ない問題だったので本人は半分諦めている。

それでも葵は期待している。男の娘、もとい男の子が再誕することを！可能性は限りなく低い、と言うかありえない。葵が性転換でもすれば望みはある……のか？

閑話休題…。

再誕した彼女達は元の身体とは段違いの身体的にも精神的にも、そして魔力資質的にも高いポテンシャルが付与または強化される。その力は圧倒的と言うほどではないがそれでも並みの実力者では足元にも及ばない潜在能力を秘めている。

そう秘めているのだ。最初から十全に能力を使えるわけではない。再誕直後は以前の身体と新しい身体との差に戸惑いマトモに歩けもしない。文字通り“再誕”、再び一から誕生したのだから当然と言える。

因みに生れた時の姿は千差万別だ。妙齢の女性、儚い幼女、活発な少女など外見や年齢が当てにならない。小さな幼女から大人な女性まで、その変化は幅広い。もう一度言うが女性体しか構成されないというのは最早、呪いの域だ。

……。

そうして生まれたばかりで赤子同然の彼女達が最初にすることは歩行や手を使うなどの日常生活を通してのリハビリ訓練から入るのが慣わしだ。これにはやや非効率的だが必ず一対一（マンツーマン）で補助をする者が付く決まりとなっている。

この時、身体がまだ十分に動かせないので不足している知識面を学習、補強することが多い。詰め込み式の学習方法だが素体を構成しているナノマシンが補助脳を作り上げ、本人の学習能力を底上げしているため問題は解消されている。

これにより見聞きし学習したことは脳内で知識を整理整頓、管理

運営、黒歴史的封印、記憶の関連付けなどを容易に行なうことを可能にしている。これは絶対記憶の後付版と言えるかもしれない。

最も擬似的なものなので忘れることもあることをここに記しておく。

さて、人によっては機械を身体に埋め込むことを非人道的と言うかもしれない。だがこれは効率を追い求めた一つの結果だった。仕方がないなどと言い訳はしない。ただ機能性や利便性を考慮した時これが最も適していたのだ。

そしてここで明言しておこう。例えこれがなかったとしても必ず補助脳は作られることになる、と。……こう、無針注射でチクッとナノマシンを注入される。

ナノマシン技術は葵の保有する技術の一つであるからだ。その代表例の一つにＩＦＳ（イメージフィードバックシステム）と言うものがある。ＩＦＳとは主に機動兵器の操縦端末に用いられたものだ。

これは脳内のイメージを機械端末にナノマシンを解して操作することが出来る。勿論、何でも触れるだけで操作できるわけではない。キチンとナノマシンに対応したＩＦＳ端末が必要だ。

機動兵器操縦だけではなく葵ファミリーの日常生活にも幅広く使用されている技術だったりする。寧ろ日常に使用していたものを逆に軍事転用した。操縦のレスポンスが早いのでなかなかに優れたものだった。

葵に言わせれば個人的にファンだった花の名前を持つ某機動戦艦に出てくるもののパクリ、もとい利用させてもらっただけなのだが。

ともかくこれがないと葵謹製の建造物や艦内では色々と不便で困ることは確かだ。機械端末は別端末を手動で接続しないと使えない、小型輸送機や自動車などの乗り物も手動に切り替えないといけないので手間がかかるのだから。

それは置いてくとしよう。今後、触れるかは別にして…。

……。

さて、ある程度身体に慣れて動けるようになったならば次の段階だ。数人のグループを作り、腕立てやランニングなどの運動や格闘技術の習得、魔法や兵器を使用した戦闘訓練に入る。戦術などの座学も行なわれるのだ。

ここでは文字通り血反吐を吐くまで担当教官に扱かれることになる。寧ろ、扱き倒される。殺されると思われる時があるが、それは勘違い、勘違いなのだ。

ただし、担当教官によっては訓練の難易度は上下することもある。本当に僅かではあるが。それでも訓練兵の限界点をキチンと把握し尚且つ指導する時にはその一つ二つ上に難易度を設定しているので成長も早い。

もしも、この訓練を普通の軍属が受けるとするならば最長でも3日最短で3時間の内に良くて身体破壊のみ悪ければそれにプラスして心の傷（トラウマ）を一生涯背負うことになることは受け合いだ。最悪、死ぬ。それも苦しみ抜いて。

そして最も辛く厳しい指導をするのは葵の懐刀であるハオ、ユエ

の陽月姉妹だ。彼女達の指導を最速で3ヶ月ほども受ければ即席ではあるが白兵戦のプロフェッショナルに迫るものを仕込むことが可能だ。

その時は訓練兵も死ぬ気（寧ろ死ぬ半歩手前まで追い詰められる）で教官のノルマをクリアしないと連帯責任で更に課題を出さられる。それもクリアできないと地獄も生温いほど暗い闇の底を見ることになる。

地べたを這う的な意味で…。

……。

これら訓練を魔法球内（1時間を72時間に引き延ばす）で教官が合格を出すまで続けたあと、卒業試験として中東やアフリカなどで行なわれている紛争地帯にて実戦を経験させるのだ。これは一種の通過儀礼となっている。

そうして初めて一人前の精魔奇兵となれるのだ。

以後、彼女達が最も強化される方法は単純な自己鍛錬だ。例外として魔力・魔法方面の強化に限りだが葵の体液を媒体にした霊薬を飲用することで恒久的に渡り大幅な強化できる。

ただし、保有魔力や出力は上がるが緻密な魔法操作は鍛錬しなければならない。

……。

……。

さて、遅くなったがここで明言しておく、当時の九重・葵には人外だが家族は居た。この世界に来る前も大家族であったので１人は寂しいのだ。葵には耐えられなかったのだ。故に永い時を共に過ごす者が居たのだ

一番付き合いが長いのは精霊である水、火、風の３柱、次いで刀剣の九十九神であるハオ、ユエの陽月姉妹だ。

しばらく間が空いて悪魔の大剣（オリビエ）、魔法（リビエラ）、暴力（シルビア）の３柱が葵ファミリーに仲間入りした。その後にアンやラミエル、ＣＯＳ－ＭＯＳのＡＩ娘が加わるのだが、それはまたの機会にしよう。

……。

当初から葵は精霊・悪魔を精魔奇兵にするに当たって決めていることがある。それは個人的に親しい者に限るというものだ。それも当たり前だろう。誰だって親しくもない相手を家族にはしたくないはずだ。

当時から精霊や悪魔、その他の人外達などの親しいモノ達は大勢居る。最も悪魔も精霊も殆どが下級で、どんなに高くとも中級だった。

ともかく、その中から葵の“家族が欲しい”という願いを聞き入れた者が選出され、逆に自ら“身体（実体）が欲しい”と願い出て志願した者も多く居た。寧ろ、後者が圧倒的に多かった。

今の親衛隊であるアイリやファレノ、リチラを始めとした１８名からなる１ｓｔタイプは精魔奇兵の雛型とも言える者達だ。

そして大事なことだがここで勘違いしてはいけない。精魔奇兵化するのは断じて強制では無いということを。これは彼女達自身の意思によるものだ。

彼女達の個人的な願望も多分に含まれている。

例えば、力の無い小さな精霊は好いた男と触れ合える自らの肉体を切実に求めた。

例えば、低位の悪魔は現世に長い時間、顕現できないため安定した身体を切望した。

これらの願いを聞き入れた葵は多くの家族を、絆を得ることになった。そして今後更に精魔奇兵はコツコツと、だが際限なく増え続けることになる。

将来的には総家族数が十数万に達することになった。しかし、それもまだ先の話しだ。

……。

……。

家族が増えたことを葵はこの世の春と言わんばかりに喜んだ。増える度に盛大に大宴会（パーティー）を開き、出会いと再誕を祝った。……その度に食料生成プラントを圧迫したが改良と増設してからは許容範囲内に収まっている。

だが、気が付いてしまった。新世界で起こった大分裂戦争の最中から終戦間近にかけて、とある予測が小心者で臆病者の彼を恐れさ

せたのだ。幾つもの生命が無作為に刈り取られる光景は彼の悪い予測に拍車をかけた。

次は自分の番で、いつか自分や大事な家族の生命が奪われるかもしれない、と…。

葵は表面上、不安を表に出すことはしなかった。だが心の隅に追いやった考えは決して消えることなく内に燻っていた。内心では焦りに焦っていたのだ。故に葵は考えた。

攻撃されることが不安ならば頑丈な盾や鎧を用意すればいいのでは、と。

早速、葵は自分に付与された知識から使えるものをピックアップした。気分的に追い詰められたので多少趣味に走ることでストレスの解消もしたかったのもある。葵が密かに胃薬的なものを常備していたのは裏話だ。

そして、この時には既に機動戦艦アングレカムが試験的に就航していたので大きな意味で家族の安全をある程度は確保していた。この日から胃薬から解放されている。

よって葵が求めたのは個人単位、つまりは最小単位での安全確保だ。小さな脅威であれば携帯式のDフィールド発生装置を常時装備するようにすればいい。だが大きな脅威には不安が残る。大呪文やGブラストは流石に防げないのだ。

そこで趣味を多分に含んで考えたのが人型機動兵器だ。

葵は各種兵器を作成するに当たって2つの意味で家族を守ろうと

した。一つは物理的脅威からの守護、もう一つは無用な敵対心からの守護だ。

一つ目は前述の通り、敵からの物理的攻撃から身を守るためである。個人携帯より強力なDフィールド発生装置を機動兵器に積み込むことで安全性と防御力を格段に強化した。単純に頑丈な装甲もあるので防御は万全だ。

ただ、もう一つのほうはわかり難いかもしれない。これは驚異的な集団戦闘能力を有した彼女達を危険視させないように“葵謹製の兵器を使用したゆえの戦闘力である”と認識させるためのものだ。

つまり兵器を使用していない時の彼女達は大した脅威ではない、と思わせる狙いもあるのだ。いつの世も大きな脅威は忌避される。だからこそ葵はそれを回避するために裏で情報を操作したこともある。

機動兵器に搭乗していなくとも対人戦用装備パワーアシストスーツを着込んでいるので“葵謹製装備”の噂は裏で止まることを知らなかった。兵器購入を目的にした接触は勿論、兵器に関する問い合わせが多かった。

それでも葵は難を逃れた。主に当時、仮所属していた帝国サイドの事務方が問い合わせの連絡を塞き止めてくれたお蔭で煩わしさからは無縁だったようだ。持つべきは帝国のお偉いさん（テオなどの友人）だ、とは葵の言だ。

……。

……。

一つだけ誤算があるとすれば葵を危険視する者が増えたことだろうか。より具体的に言うなら葵の作り出す兵器が、だ。鍛錬など不要で機械の補助を得てお手軽に強い力を得られる兵器の数々に驚愕した。

最も危険視したのは年配の魔法使い達だ。彼らは若い魔法使いに比べて機械式でお手軽に強い力を得られることを嫌悪とまではいかないが遠ざける者が多かった。

年配の魔法使いは肉体や精神を厳しい鍛錬にて己の魔法技術を磨き、更なる高みを目指した時代の者だ。そういう者達から見ると葵のように機械に頼っている者達は鍛錬を怠ける軟弱者にしか映らないのだろう。

面白くない彼らだが、それでも強力な力をお手軽に得られることに変わりはないのは事実だった。だからこそ彼らは面白くない、でも事実、それでも面白くない、と負の螺旋に思考は陥る。

この時の葵の考えはただ一つに集約される。それは「関りたくないし、面倒だから情報操作しちゃおうか」というものだ。

一般的な常識から考えて非人道的な呟きは鶴の一声ならぬ葵の一言だった。当時の葵ファミリーは２５０人前後の小さな規模でしかなかったがその固有能力を大いに活用したことで葵の願いは迅速に叶えられることになった。

葵に関する関係者や個人情報の大部分を抹消、修正するために一切の紙媒体や電子データを破壊し書き換えを行なった。個人の記憶に関しては親しい友を除いて認識阻害魔法を都市一つ覆う規模で順

次、記憶を修正していった。

何かしらの方法で記憶修正を逃れた者が居るかもしれないがそれは新世界人の全体から考えれば1%未満に満たないので見逃してもいい数字だった。これでほぼ完璧に葵達の情報は世界規模で書き換えられたのだ。

葵は［紅き翼］所属ではないが大戦には参加していた一魔法使いである、と。当然、葵ファミリーも同様の扱いだ。

事実を知っている親しい者達からすると爆笑ものだったが悪友(アル)や、親友(テオ)は称賛した…笑い転げながらではあるが。ただ詠春やタカミチ少年だけは自分の功績を消す行為に納得していなかったようだ。本当に優しい男達だ。

……。

こうして表向き、葵ファミリーは忘れ去られるように隠居した。内心、葵は面倒事から解放されたことで狂喜乱舞している。チョモランマ級の書類の山から開放されるのだから喜びもするはずだ。

その後、旧世界は日本の京都にひっそりと居を構えていたが結局ガトウが仕事を何だかんだと持ち込むために厄介事から解放されなかったのは笑い話にもならない…。

……。

……。

過去を振り返っていた葵は空間モニターに映る夜空を見て考える。

「今度は宇宙か…」

機動戦艦アングレカムの艦内にある自室で1人呟いた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　???

連載一周年記念。（後書き）

やっつけ仕事だからおかしい点が多々あると思うけど…。
気にしない！！！！気にしたら負けかな、って思ってる！！！！
突発的に記念企画を思い立ったから不備は仕方ないんだよー。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十六話「学園側と戦闘準備と偵察と」（前書き）

今回は学園サイドを重視しました。
大きく事が動くのは次回かその次からですかね？

それと今回は
「～通常会話～【…～念話～…】（～個人の内心～）」
という文章構成の試験的に導入しました。
念話と通常会話はいつも通りです。
ただｓｉｄｅ　？？？の三人称を使用するに当たり”（）”を使った心的表現を試したく思いました。
でも執筆している時、やり過ぎると訳がわからなくなるので今後、乱用は控えようと思います。

では！続きっ！

第六十六話「学園側と戦闘準備と偵察と」

時間は戻り、葵が宣戦布告する少し前…。

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　？？？

場所は学園長室、いつもならば学園長の近衛・近右衛門が日中はのんびりと茶を飲み、フォフォフォと笑いタカミチと茶飲み話をしたり、夜には何だかんだと十数年来の付き合いであるエヴァンジェリンと囲碁や将棋を指していることも多い。

だが、今の学園長室は困惑の空気が多い。その原因は室内の状態にある。ここには学園で主要な魔法先生や魔法生徒が集められているのだ。そして困惑した空気を発しているのは彼らからだった。

皆が皆、何事かとざわめき、近くの者と言葉を交わし情報交換するが事態を知っている者は少ない。その少ない人物であり学園長の命で日中に出払っていたタカミチとガンドルフィーニも今は帰還して同室内に居る。

ガンドルフィーニは彼の所属する班である高音と愛衣のもとに居るが表情は優れない。もう１人の出払っていたタカミチは学園長の斜め背後に立ち控えている。しかし彼のその表情は険しく、まるで苦虫を噛み潰したように歪めている。

現代戦闘術を取り入れた魔法使いとしては変り種だが実力のある

ガンドルフィーニと嘗て［紅き翼］に所属し今では魔法世界で屈指の実力者として知られているタカミチ、この両名の苦い表情や焦燥を感じさせる雰囲気から今居る者達は更に困惑する結果になった。

しかし彼らもただ困惑ばかりしていたわけではない。先の2人の態度から何か好からぬ事態に陥っているという想像だけは出来ていた。よって既に彼らには彼らなりの不測の事態に対する覚悟は済ませてある。

そしてまずは詳しい事情の説明を、と彼らが考え今の事態を深く認識しているであろう学園長へ視線で“さぁ話して下さい”と促す。学園長もそれに答えるように一つ頷くことで口を開く。

「……皆、よく集まってくれた。この中には既に知っている者も居るかも知れぬが昨夜、葵君のご家族であるＣＯＳ－ＭＯＳ君が何者かに襲撃された」

ここに居る殆どの者達が学園長の言葉を一瞬だけ理解出来なかった。いや、したくないのかもしれない。それはなぜか？

一つに強固な学園結界が設置されている。これは人外の悪しき力を抑制するものだ。つまりこの学園結界は召喚主に呼び出された悪魔や妖怪などの強力な魔法生物を弱体化させることを目的にしたものだ。

学園結界の問題点はより大きな存在に強く反応することだ。もう少し言うとこれは、より大きい害意あるモノを優先して阻もうとするため小さな存在は見逃し易い傾向にある。侵入されても雑魚だから問題無いと言えば問題無いのだが…。

状況を知らない魔法先生や魔法生徒はやや混乱した。学園長は襲撃されたと言うがここ数日、学園結界に異常は無かった。このことから少なくとも外部からの敵ではない可能性が高い。――では誰が？

ここでもう一つある。学園結界の他にも索敵術式がある。これは一定範囲内に侵入した者を感知し術者に知らせる効果がある。固定式の結界は術式の基点を場に刻み、その基点から一定範囲に渡って構築される大規模結界魔法の一つに数えられた魔法であった。

あった、というのは近代にて魔法術式を改造、改善、改良と徐々に修正し最適化を施されたため今ではそんなに珍しくも無い構成になっているためだ。科学技術以上に進んだ魔法技術も日進月歩だったりする。

そんな索敵結界にも欠点は存在する。

結界の範囲を広げ過ぎると感度が落ちるのだ。大きなモノは問題ないが小さな存在は網の目をすり抜けるように侵入できる問題が起こり易い。ただ、これは術者次第では感知できるため問題は少ないので未だに改善されていない。

ここで外部からの侵入者ではない可能性が更に高まる。これら二つの結界にリンクしている彼女から報告が無いためだ。最もその彼女を信じている者は少ない。だが学園長やタカミチなどの古参は彼女を信じている。

それ以外にも少なからず彼女を信じている者は居る。公言はしないし圧倒的にマイノリティではあるが…。

それよりも今は襲撃された人物が問題だった。想像が憶測を呼び憶測が恐慌を呼ぶ結果になる。連鎖的に波紋が発生して室内は騒然となる。

「彼らを襲撃などと…！犯人は一体誰が…？」

「何かの間違いかもしれない！外部から侵入されたのではないか！？」

「そんな…それでは学園の結界が破られたと言うの！？」

「待て待て！それよりも万が一を考えて生徒達や一般人の安全を…」

「何を言うか！ここは直ぐにでも襲撃者の捜索をすべきではないか！」

「それも難しい…。もう学園には居ないのでは？」

「だからそれを知るためにも一度、犯人の捜索をしたほうが…！」

自分達の管理する土地で魔法使いが起した犯罪だ。一般の警察には任せることは出来ない。早急な対処が必要だ。人数や質にもよるが相手は魔法使い、下手な手段は周囲への被害を増やすだけだ。

議論は激しくなり場は荒れる…。

「静まるのじゃ！！！」

「「「「「――――ッ！！！」」」」」

かに思われたが学園長の一喝により場は一瞬で静寂に包まれた。激しい議論を交わしていた者達も冷静になった。幸いにも一喝した時に窓ガラスがビシビシと震えて不吉な音を立てていたが割れるようなことにはなっていない。

「落ち着くのじゃ。ＣＯＳ－ＭＯＳ君から回収された映像や写真が

葵君から提出されておる。それらの証拠からワシが直接その者らを確認したわい。犯人は倉持君を始めとした他１４人…。残念なことじゃ…」

「倉持が…そんな…あぁ、眩暈が…鬱だー…」
「また？また、あいつなのか？…はぁーっ…」
「んーっ？面倒なことになってきた予感が…」
「アルフォードのバカが…何を考えている…」

無用な混乱を避けるために襲撃から今まで極限られた人物しか事件のことを知らされていなかったが倉持の名が出た途端に場は一気に意気消沈気味だ。ここでは軽く問題児扱いのようだ。

中には3，４人ほどが頭を抱えて「頭痛が痛い…」やお腹を押さえて「胃痛が空腹だ…」などと意味不明なことを呟いている。それだけ呆れと混乱が大きいのかもしれない。

その中で葛葉・刀子は眉間に皺を寄せている様子から嫌悪感が強く出ている。魔法使い至上主義者と神鳴流を担う剣士である彼女とは相性がよろしくないのだ。倉持が嫌味を言い刀子がサッと流す、そんなやり取りが通常だった。

性格に難があるが実力は十二分にある倉持と魔法使いではないが神鳴流剣士として確かな実力を持つ刀子。学園長達の手前表立って罵倒はしないが浅くない溝が双方にある。主に一触即発的な意味で…。

「学園長、返答の期限はもう直ぐ…」

傍に控えていたタカミチが学園長に言った時、まるで図ったかの

ようにして静まり返った学長室にジリリッと電話の着信音が鳴り響いた。誰からのかわかる学園長は受話器を前に出るのを躊躇していた。

「来たようですね…」

タカミチは覚悟を決めたように（諦観だろうか？）言うと視線を学園長へ向ける。その視線は暗にこう言っているのだ、「覚悟を決めてください」と…。正確に意図を読み取った学園長はわかっていても逡巡してしまう。

今も尚鳴り響く電話の受信音は一向に切れる様子がみられない。だがなぜだろう、電話の向こうから“遅い…早く…早く出ろ…”と呪言のように聞こえてくるような錯覚を引き起こされた。皆、疲れているのだ、きっと…。

学園長は考える。今は激しい議論が飛び交いそれを収拾するのに時間を取られてここに居る全員にはまだ葵が倉持の引渡しを要求していることなどの詳しい説明が出来ていない。十分な説明もなしに葵を相手に出来るだろうか、と。

だがここで出ないわけにはいかない。今、出なければ事態は更に悪化することになると容易に予想できた。なぜかと聞かれても学園長自身も断言は出来ない。敢えて言うなら長年の経験から来る“勘”だった。

「学園長、どうか…」

「わかっておる…」

学園長個人としては最悪、問題児一同を引渡しても良いと考えている、が一組織の長としては断固拒否の姿勢を崩せない。ここで屈すれば麻帆良が弱体化したと勘違いした外部の魔法組織が挙ってこの霊地を目指して侵攻してくるかもしれないからだ。

ゆっくりとした動作で受話器に手をかける。一息吐いてからジリリッと音を鳴らす電話機から受話器を一気に取り上げ自分の耳に当てた。因みにこの電話はスピーカーに切り替えられ室内に居る全員が聞けるようになっている。

「――――…ワシじゃ」

『こんばんは、学園長♪佗び寂も無くて恐縮だが早速本題に入らせてもらおう。…返答は？――――ハイかイエスで答えろよ』

「むぅぅ！？」

電話の先に居る葵の声は散々待たされたのにも関らず上機嫌に話し始めた……が一転して冷たい声色で無常な選択を学園長に突きつけてきた。最初の上機嫌な雰囲気はブラフで後半が正しい葵の思いだったことがわかる。

やはり電話口で長い時間待たされたことが我慢ならなかったようだ…。

その後も学園長は最初に謝罪を尽くし次いで交渉へ入ろうとしたが葵が頑として肯定を示さない。倉持一派の身柄を引渡せの一点張りだ。寧ろ学園勢力に喧嘩を売るように挑発紛いの言葉すら発している。

これにはスピーカーで聞いている魔法先生や魔法生徒もイラッとした。だが交渉しているのは互いのトップ同士だ。故に口を挟むような礼儀知らずのようなことはしない。話し合いが拗れたら目も当てられないというのもある。

話し合いを聞いているタカミチとガンドルフィーニは背中を流れる冷や汗が止まらない。葵は口汚くは無いが言葉の裏に隠した罵倒や嘲笑が見られるからだ。2人の心の声を例えるなら「拙いまずい不味いまずいマズイ…」というものだろうか。

今日、彼らが交渉時に垣間見た葵の姿から見るに今までの電話のやり取りは明らかにこちらが爆発するのを期待していると考えられるのだ。葵の考えが透けて見える…。戦争上等、寧ろかかって来いという状態にあると思われる。

2人は今無性に胃薬が欲しいと願った。このあと直ぐにでも学園の保健室で処方してもらおう、とまで考えて時刻が既に夜で保険医（一般人）は職員寮に帰宅していることを思い出した。他の保険医（関係者）は…同様だった。

「「はぁ…」」

奇しくもタカミチとガンドルフィーニの色々な意味が含まれたタメ息が重なった瞬間だった。今も尚、学園長と葵の交渉（戦い）は続く…。

……。

それから30分強の時間が経つと葵は一つの宣言を残して通話を切った。ガチャンと受話器を置いて学園長は一つ深いタメ息を吐い

た。一番状況を把握しているタカミチは胃の痛みに耐えかねて冷や汗を流し表情が引き攣っている。

「――諸君、聞いての通りじゃ。たった今、宣戦布告された。開戦は明日２８日の土曜日、深夜０時じゃ。各自準備を整えておくように…」

学園長は重々しく言うと魔法先生や魔法生徒は少人数で学園に宣戦布告とは片腹痛い、と考える者…同情を寄せる者…身の程知らずと馬鹿にする者…病気じゃね？とヤバイくらいに震える者…などなどの反応を示した。

その様子を窓の外から見ているモノがあったことは誰も知らない…。

……。

……。

それからの行動は迅速に行なわれた。皆この事態に戸惑いを感じずにはいられないが何よりも学園や一般人、生徒達を守るために動き出す。戦闘開始時刻までおよそ２７時間…。

当然、宣戦布告されて直後に危険人物として拘束するために学園の魔法使い達は葵の拠点である喫茶店を押さえに動く。これにはガンドルフィーニの班が当たった。……以外にも率先して動いたのは高音と愛衣だった。

……。

――喫茶店クレイドル前…。

葵の経営している喫茶店クレイドルを前に胃の辺りを押える教師、正義感に燃える女子高校生、戸惑いチワワのような雰囲気の女の子の姿がある。駆けつけたガンドルフィーニ、高音、愛衣だ。３人はザッと周囲の様子を見る。

時刻が深夜というのもありレストラン街は静かなものだ。最も学園都市という性質上、あまり遅くまで開いている店は少ない。あるとしたら２４時間営業しているコンビニくらいのものだろう。

最悪の事態で誰かしら迎撃に出てくることも考えて少々時間を掛け油断無く歩き徐々に喫茶店に近付いて行く。高音が先頭で愛衣がバックアップだ。ガンドルフィーニは班長として全体を見ていつでも動けるように準備している。

だが、ここでガンドルフィーニが予想だにしなかったことが起きる。いや、高音の普段の行動を考えると当然なのかもしれない、とは彼も考えるが、それでもこれは…と考えてしまう。彼女が何をしたか、と言うと…。

後ろ暗いことをするつもりはない高音は堂々と喫茶店の戸をノックしたのだ…。

ガンドルフィーニの頭の中は真っ白だ…。周辺を確認後に念のため人払いの結界を掛けておいた。だけどそれは万が一、戦闘になっても一般人を巻き込まないためだ。断じて堂々とお邪魔します、という意味で用いるものではない…はずだ。

「あら、お留守かしら？困りましたわね」

「お、お姉様？一応、私達は先行偵察の意味でここに来ているはずじゃ…」

喫茶店の玄関前でノックしたあと後ろの呆然としている2人に振り返ると肩を竦めてそう言う。高音のパートナーである愛衣のあわわという慌てようからお姉様と呼び慕っている彼女の行動に驚いて、いや戸惑っている。

「愛衣、何を言っているの？そんなことはわかっていましてよ。だからこうして正々堂々と…」

「いやいや、高音君、それはおかしいと思うんだがね。我々は宣戦布告された。彼らとは戦うことになるんだよ？」

幸いにも葵が留守だったからいいようなものの明確に敵対を宣言されたのに律儀にノックする者がここに居る。自分の信じる道を行く高値の真直ぐな気質を賞賛すべきか迂闊なことをするなと叱責するべきかと内心で悩み嘆息するガンドルフィーニだった。

「それが納得いかないのです！何も力を行使しなくとも話し合いを行なえばよろしいではないですか！葵さんもわかっているはず…！」

高音は今回起こった葵の宣言が納得いかなかった。勿論、家族が襲われて怒り心頭なのは想像でだが少しは理解できる。だが今回の宣戦布告は別だ。犯人は既に明らかであり魔法犯罪は魔法世界の法で裁くのが今の常識だ。

それをいくら突出した力があるとはいえ、ただの一魔法使いが犯人の身柄を引渡せと言うのはおかしいと思うのだ。犯罪は然るべき

法によって裁かれるべきだと高音は考える。

「だが現に学園に対して彼は宣戦布告した。残念ながら明確な脅威となってしまった。そしてこれは動かし難い事実だ、高音君」

「で、ですが…！」

ここに居るのは過去に危ないところを助けられた3人だ。良くも悪くも真直ぐな気性の高音だ。これに足して義理堅い性格でもある。

だからこそ助けられた借りを返すためにも何とかして今回の事件を早急に収束させるためにここに居る。あわよくば直接話し合いが出来る機会があるかもしれないから先行偵察の役目を買って出たのもその一つだ。

「あ、でも、やっぱりおかしいですよ。私も学園長室で聞いてましたけど葵さんワザと挑発しているような気がしました。まるで何か別の狙いがあるような…」

「「あ……」」

言われてみれば確かにそうかもしれない、と愛衣の言葉を切欠に2人は考える。今、思い出してみるとあからさまな罵倒こそ無かったが葵にしては珍しく好戦的な言葉が多かったように感じる。

愛衣の言うようにまるで戦うことを望んでいるようにも感じられる…。

ここまで考えて2人とも何を馬鹿な、と首を振り今浮かんだ思考を追い出す。大きな学園組織を相手に、たったの4人（1人は実質

戦闘不能）で喧嘩を吹っ掛けるなど馬鹿げている。戦闘狂でもまだ考えるというものだ。

「……今、それを考えても仕方ない、な。それよりも彼は留守のようだし建物の中から人の気配も感じない。どうしたものか…」

「偵察の任務もありますし……入っちゃいます？」

「「っ！？」」

先行して敵偵察するのは第一だったが強襲して威力偵察するのは認識外だった。例え葵達が居らず留守だとしても建物内に突入するのは危険だ。置き土産に何かを置いていかれたかもしれないのだから尚更だ。

「愛衣、貴女なかなか大胆ね。……何か狙いがある、とか？」

「いえっ、そんなっ…葵さんのお部屋に興味があるなぁ、なんて私は考えてませんよっ？あくまで偵察が目的ですっ」

高音の意外だと言う賞賛紛いの言葉に、言われて気が付いた愛衣は慌てた。内心、自分の大胆な発言にドキドキしていたのもあるだろうが慌てたが故に一部本音らしきものが洩れ出たのはどうしたものか…。

過去に危ないところを助けられ更には、愛衣自身は丁寧に治療されたこともある。葵という人物はお年頃の彼女にとって恋とは言わないまでも気になる男性くらいには興味のある存在だった。

そんな気になる男性のお部屋に理由はともかくお邪魔できる機会

が直ぐそこにある。愛衣のようなまだ若い女の子には好奇心をビンビン刺激されることだろう。

「「……はぁ」」

「う……」

他意はないのだろう。いや、全く無いとは言わないが…愛衣の目的が限りなく不順だったのは、なんとも締まらない一幕だった…。

忘れているかもしれないが彼らにとってここは敵地のど真ん中だ…。

……。

「おほんっ！あー、まぁ、なんだ？とにかく侵入するにしても、ここは仮にも魔法使いの拠点だ。相応の危険があると見るべきだな」

「先生はこの建物内に自動迎撃用のガーゴイルやゴーレムなどがあるとお考えで？」

「それだけならばいいが強制転移されて遠い別の場所に飛ばされるかもしれない。または呪い系統の罠（トラップ）が用意していることもありえる」

古くから往々にして魔法使いの工房（拠点）とは自分の研究成果を外部から守るために様々な仕掛けを施す。侵入者から自領域を防衛するため、逸早く敵を察知し罠を仕掛け迎撃するのだ。

ただ、昨今では魔法世界の布いた法で殺害は極力認められていないため驚かせて追い出すだけというのが主流だ。ただし法にあると

は言っても明確な基準があるわけではないので法の抜け道は未だに多数存在する。

魔法世界の法とは杜撰なのだよ。やろうと思えば魔法で人の強制的に人格を変えることや任意で思考誘導も出来るから技術はともかく法の整備は遅速だったりする。

それでも魔法世界が大きく乱れないところを見るにMM上層部は別として民衆らのモラルの高さが伺えるというものだ。実際に犯罪は少なくないが人情味溢れる人が多いのは魔法世界の特色と言えるかもしれない。

「……どうします？ここは安全策を取って刀子先生と神多羅木先生の後発の班を待ちますか？」

「先生、時間が切迫している今、私は多少強引でも行くべきと考えます。葵さんの行き先の手掛かりでも何でも見付けられれば上出来ですし」

「それしかないか（ああ、胃が痛い）…。その前に後発の班には念話で連絡しておく。【…聞こえるか？こちら先発偵察班だ。聞こえるか？…】」

【…ガンドルフィーニ先生？どうしました？…】

【…ええ、実は――――…】

ガンドルフィーニは念話相手の刀子に手早くこれから敵拠点に侵入する旨を伝え突入後に定期的に連絡するので途切れた場合の対処を願い出た。

後発の彼女達は周辺を探索しながら今後の安全を確保しながら進んで来るためここへ到着するのはどんなに早くとも２０～３０分弱ほどかかる。その間に出来る限り情報を取得しなければならない。

コソ泥や押込み強盗と言うことなかれ、彼らも学園やそこに住む人々を守るという強い想いがあるのだ。そのために出来ることをする、それだけだ。

「【…はい。ではそのように…】よし、これでいい。２人とも建物の中では何があるかわからない。油断せずに行こう」

「「はいっ！」」

……。

――喫茶店クレイドル店内…。

店内に侵入した３人は早速１階部分の捜索に入った。流石に不法侵入をしているため堂々と明かりを点けるわけにはいかないので暗闇の中で作業することになる。

店内は人気店の接客業をしているだけあり広い、奥には使い易さが目立つ厨房や来客用だとおもわれる落ち着いた雰囲気の応接間や店員の休憩室、廊下の奥には上階と地下室への階段もある。

……意外なことにエレベーターも完備されていた。電源が落とされているために動かなかったが。

「……特に変わった雰囲気はありませんね、お姉様」

「ええ、そうね…。店内には異常は無いように見えます」

1階部分を高音と愛衣、地下室をガンドルフィーニでそれぞれが探索に入ったが1階の結果は芳しくない。地下室を調べたガンドルフィーニは“地下の全てを捜索したが何も見付からなかった”ようだ。今は地下1階が地下室の全てだ。

ここで彼らは一度、情報交換して認識の共有化した彼らは次の階を捜索することにした。互いに特に目ぼしい物が見付からなかったのでガッカリしていると思ったがダメで元々のつもりだったためにそれほどでもない。

「2人とも、建物内に罠の類は無いようだ。次は2階を調べるとしよう。来てくれ」

「わかりました、今、行きます。さぁ愛衣、行きますよ」

「あ、はいっ、お姉様っ」

……。

この建物は外観から推測して3階建て、そして調べてわかったが地下は1階のみ。2階部分の捜索は高音と愛衣がやや先行してガンドルフィーニが3階を調べている。

それとここまで好き勝手に捜索しているのに不思議なことだが侵入者に対する迎撃が一つもない。最初は何かの罠とも警戒したが今は速さを重視したためにこれ幸いと次々に探索の手を広げていく。

2階を探索している高音と愛衣は危険が低いと判断し効率を上げるために二手に分かれて捜索に入ることにした。そして1人で捜索する愛衣は今、とある一つの部屋に足を踏み入れた。

もう一度言うが侵入中につき今は明かりを点けられないために真暗だ。それでも小型のペンライトや小さな明かりを点す魔法を使えるのでそれほどの不自由は無い。

「ここは…？ここが葵さんのお部屋、なのかな？……あ、男性用の服？じゃあこのベッドは？……んくっ（これは偵察…そう偵察なんです！故に問題ありませんっ！）」

トテトテと普段、葵が寝ていると思われるベッドの横まで来た愛衣は最後にキョロキョロと周囲に誰も居ないことを確認したあとにコクッと喉を鳴らすと小さくベッドにダイブした。

「…すぅ…はぁー（これが葵さんの匂いか…。はふぅ、何だか落ち着くなぁ…）…んー、眠くなっちゃいそう…」

まだ世間では子供と言っていい年頃の愛衣が眠くなるのは仕方ないことだ。時計で時間を確認すると夜の12時前に針が進んでいたのだから。良い子（悪い子も）は既に寝ている時間帯だ。

ぎゅっと抱き締めた枕に顔を近付けると微かに葵の汗の匂いがした。それを不快に思わず逆に安心してしまうが愛衣は不思議に思わない。葵のベッドは大きいため投げ出された彼女の身体を柔らかく受け止めている。

この時、彼女の表情が“にへらっ”と緩んでいるのは説明し難いものがある。どことなく幸せそうだ…。

……。

愛衣がウトウトとし始めて数分後、彼女は襲撃を受ける。

「愛衣ー？次を調べますわよ？……って、何をしていますの？」

襲撃と言っても仲間であり仮契約したパートナーでもある高音にだが…。それはともかく葵のと思われるベッドの上でまどろんでいた愛衣は堪ったものではない。親に自作ポエムを見られた的な恥ずかしさだろう。

「へぅ！？お、おお、おおお姉様っ！？あ、ああのこれは…違うんですっ！違うんですよ！？ただ夜も遅いし少し眠いかなぁ、って思ったら目の前にベッドがあったものですから、つい…！」

慌てた。今日、最大級の慌てようだ。上半身を起して両手をワタワタとさせている。火が点きそうなほど全身も真赤に染まっている。それでも抱き締めていた枕は手放さないのは愛衣クオリティ…。

「愛衣…。ええ、わかっております。愛衣は疲れているのよね？…はぁ（私は何も見ていませんわ、ええ、見ていませんとも…）」

「あぅぅぅ……」

……。

そしてその光景を見るもう1人、それは逸早く3階の捜索を終え高音達のもとに戻ってきたガンドルフィーニだ。状況がよくわからないので声を掛け難い彼はドアの横で2人が出てくるまで待機する

ことにしたのだ。

建物内の3階から地下1階まで隈無く捜索したが結局、目ぼしい収穫はなかった。葵の行き先は掴めない。順当に考えるならば学園都市外に逃亡したと考えるのが正しい。だが、それはありえないと彼の勘は訴える。

それに女性同士の会話に男が入っても碌なことはないと妻とその親友からイヤになるほど学んでいるので自分は待つのだ。多少理不尽だとしても。

キャッキャッと静かに賑やかにするという器用なことをしている2人をチラッと見て考える。仮に葵と戦うとしてこの子達を自分達大人は守れるだろうか、と。完璧に守りきるのは難しいと思わざるを得ない…。

相手が少数ならゲリラ的戦術をするに違いない。そうなったら補足するまで手が付けられない…。

「……はぁ、2人とも何をしているんだか。……（敵地であるということを忘れていないか？）」

表面上、麻帆良は平和だ。少なくとも今、この時は…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

オマケ…。

――地下3階の一室…。

「キーーッ!!ファレノ、お放しなさいっ!!あの小娘ーっ!!よりにもよって葵様のベッドでナニをしてやがりますのーっ!?!?寧ろわたくしがそこで寝たいですわ!!無論、葵様と2人っきりで!!!!」

「だーっ!?ダメなのっ!!ここで時間まで待機しているのっ!!それに何、本音を暴露してるのーっ!?今、出て行ったらここに居るのがバレちゃうのーっ!!皆も見てないで止めてなのーッ!!」

「「「「「り、了解っ!?」」」」」

「うふ、うふふふ…!関　係　あ　り　ま　せ　ん　わ!!あんなのは始末してしまえば万事解決ですわ!!問題ありませんっ!!!!あのメス餓鬼などっ!フフ、フフフ!」

「だーかーらーっ!?出て行ったらリチラだけじゃなくて私達のこともバレちゃうのーっ!!って、うわっ!?冷気!冷気が洩れてるのっ!!これ以上は葵ちゃんに迷惑かけちゃうのーっ!!それはダメでしょーっ!?」

「ぐぬぬぬっ!!そ、それならし、仕方ありませんわねっ!!それなら次回こそはっ…!!」

「次回も何も無いのーっ！！……ふぅ」

ファレノの苦労はまだ続く…。そしてリチラの暴走はまだ加速する…。アイリは1人、葵と行動を共にする…。

第六十六話「学園側と戦闘準備と偵察と」（後書き）

葵の宣言した時間よりも早く学園側は動き出しましたねぇ。
卑怯とは思いません。だって戦争だもの！

それよりも愛衣のことだ。今回タレ愛衣にジョブチェンジしたぞ。
いや、なんで？どうしてこうなったし…ｏｒｚ
ただし別に他意はない。今後の話しに絡むかは別だったりする。
つまり作者の気分！その一言に全ては集約される事実…。
やってみたかったんだよ…。
反省もしているし後悔もしている。でも懲りないです。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十七話「気遣いと秒読みと戦闘開始と」（前書き）

やっべ、マジでやっべ…。

うん、ごめん。なんとなく気分でやっべとか言ってみた。特に意味は無いです。
そんなことより今回は女の子分が半分しか入っていない気がする！
やっべ、マジでやっべ…（それはもういいよ…）。

この作品は女の子分で大半を構成されているのに…ｏｒｚ
これじゃモエが少ないじゃないか！
アニメ版ＩＳも終わっちゃったし…ｏｒｚ
お、俺のバイブルが…インスピレーションが…色々とガタ落ちしそうだ。

第六十七話「気遣いと秒読みと戦闘開始と」

――アングレカム艦内…。

Ｓｉｄｅ　葵

「む？どこからかファレノとリチラが言い争う声が聞こえた気が…？」

「お父さん、どうかしたの？言ってくれれば私がやるよ？」

「…いや、何でもないから気にしないでいいよ」

はい！どこからか電波らしきものを受け取りかけた葵です！……俺は何を言っているんだろ？

まぁそれはともかくここは機動戦艦アングレカムの艦橋です。俺が宣戦布告し、予告した戦闘開始時間まで残り１０時間を切った。

ああ、それとあの学園長（じじい）…昨夜の内に俺の喫茶店に数名の魔法使いを送ってきた。幸いにも俺達は宣戦布告した直後に重要スペースの地下２~３階を残して撤収したあとだ。

地下１階と２階の間は元から隠し階段になっているので隠蔽は簡単だ。魔法使いを誤魔化すために魔法的隠蔽術は最低限に抑えて機械的仕掛けを重点に作った。これを発見して侵入するには超・鈴音くらいの科学知識が必要不可欠だと思う。

喫茶店の地下には月やアングレカム、または実戦演習を行う中東地域へ繋がる転移門（ポート）が設置してあるからファレノやリチラ、他に数名ほど親衛隊から防衛として残ってもらった。

それで学園長が派遣した人員だが主に捜索をしていたのはガンドルフィーの班だった。あの班は他班と比べてモラルが異常に高いから建物内を荒らすことが無くて俺としても大変助かった。荒らされたら弁償させてやるところだった。

あ、でも、一部報告で不確かなことがあったな。ベッドがどうとか……それはまぁいいか。あー、それにしてもこれじゃまるで俺達が逃げたように見られるのは少しムカッとしたなぁ…。

でも、あの場で開始時間まで小競り合いなんかしたくないし、俺の目的はあくまで倉持一派１４人の身柄だけだ。極端な話しだけど他の魔法使いなんて俺の眼中には無い。無益な犠牲は出したくないのよ、うん。

逆に言うと利益になるのならば、どれだけでも被害を出すけどね！……身内じゃないよ？敵側の被害だよ！当然じゃないか…。

はぁ、これが［完全なる世界］の拠点攻略のような状況ならば遠慮せずに大規模殲滅魔法を撃ち込んでから残敵処理をするんだけどねぇ。ここには一般人や学園生徒も居るからそんな無茶が通らない、通せない。

こう考えるとここで戦うのは厄介だなぁ…。今更、戦場を変えるわけにいかないし、彼らも滅多なことでは麻帆良から離れることはしないはずだ。どうす……ぁ。

「…そういえばラミエルさん、いつの間にか次元結界を展開できるようになっていたよね？」

『む？ああ、アレか。空間の位相をずらすことで結界内を別空間にするモノだな』

「うん、それそれ。それって学園都市を覆うことできる？」

『ふむ…。試したわけではないので実際わからぬが理論上は……うむ、問題無い』

次元結界の展開は問題無い、と…。一応、結界展開を実験したことがあるがラミエルさんが独自に習得した次元結界は基本的に某魔砲少女が登場するアレとほぼ同様のものだった。結界内は薄暗くて好きじゃない…。

これなら生物は無理としても建物などの無機物の被害は抑えることができるか。そうなると問題は一つだけだな。生物の殺傷を抑えればいいだけだ。

やっぱり、ここは“これでアナタをフルボッコ！特殊ゴムスタン弾くん３”や“そこに痺れる！憧れない！？電気ショックさんｖｅｒ２．５”、そして“捕まえた…もう逃がさない…クスクス♪トリモチ弾ちゃんγ”を使うべきかね。

３！？１はともかく２はどこに！？とか、え？ｖｅｒ２．５？中途半端じゃない？とか、βを飛ばしてγなの！？とか、ツッコミどころ満載だけど気にしてはいけない。

そしてこれらのネーミングも気にしてはいけない。お兄さんとの約束だ。破ったら今直ぐ君の居る場所にグラビティブラスト撃ち込むぞっ♪……バカなこと考えてないでマジメに考えるか。

……。

「アン、ＣＯＳ－ＭＯＳ、部隊の配置状況は順調？」

「うん、機械人形部隊は地下、地上の屋内や屋上、それと上空のここアングレカムに配置済みだよっ♪お姉ちゃん達は学園都市周辺にて待機中、これで誰も逃げられないよ♪」

「捕捉ですが先鋒を担う機械人形部隊は元々が地上戦を主目的に設計されていますのでその大半を地下と地上に配置中です。他部隊は緊急時を想定し第二種戦闘待機の発令を予定しています」

うむうむ、予定通りだな。今のところ大きな狂いは無い。今回の目的は大きく分けて２つだ。１つは表向きＣＯＳ－ＭＯＳの敵討ちと犯人の身柄引渡し（ここ重要！）。もう１つは多数の魔法使いを相手にしたシュワさんの戦闘データ収集だ。

涙を呑んでＣＯＳ－ＭＯＳの模擬機体を囮にしたんだ。倉持達の身柄だけじゃマイナスがゼロに戻っただけで俺達が納得できない。だから麻帆良を実験場としてデータ取りに強制的に協力してもらうことにした。これで始めてプラスになる。

……あれ？

「ねぇ、アン、そういえば倉持一派の所在はどうなっているの？ここまで来て都市内に居ませんでした、ではお話しにならないんだけ

ど…」

「うん、それなら…」

『あはっ♪そのことなら仕方ないから私が説明するよっ！』

突然、俺達の間に通信で割り込んできたのはダチュラだった。まぁ諜報関係なら情報部の彼女に聞くのが一番確実ではある。今や情報関連の殆どは彼女達、情報部の管轄だからね。

でもねぇ、そうだとしても説明を途中で取り上げるのは感心しないなぁ。ほら、アンを見てみなよ「ダチュラお姉ちゃん…」って呆れた視線を向けているじゃないか…。

こほんっ、まぁそれは置いておいて、だ。ダチュラの話しによると倉持一派は学園サイドの魔法使いによって確保されて学園都市にある建物に一箇所にまとめて半ば強制的に“保護”されているらしい。勿論、事実は確認済みだ。

彼らの確保は戦争とは別に、情報部が主導して事に当たってくれるので心配はいらない。寧ろハオとユエが鍛えた対人戦のエキスパートが多く配属されている部署だからこれ以上ないくらい安心だ。

「それじゃ俺達は精々暴れるから倉持一派のことは任せるね」

『まっかせてっ！手早く済ませてくるね♪あ、べ別にマスターに褒めてもらいたいわけじゃないんだからねっ！勘違いしちゃダメだからね！？』

「え？うん。あ……通信、切れちゃった」

あらら？何だか知らないけどダチュラが通信を切っちゃった。何か急ぎの用事でも出来たのか？まぁちょっとした不都合くらい彼女達、情報部なら嗤い、もとい笑いながら解決してくれるだろうから大丈夫か。

……。

我が陣営は着々と準備を進めて行き現在の時刻は午後９時、戦闘開始まで残り３時間だ。

「会戦まであと少しか。各員、最終チェックを開始。いつも通り焦らずに行こう」

「了解っ♪相転移機関、良好、エネルギー９８％で安定、Ｄフィールド出力８９％で展開中、Ｇブラストエネルギーをプールへ充填率１０２％即時砲撃が可能だよ」

「…戦域データリンク、接続状況は良好。通信状況、良好。機械人形部隊および無人機部隊、システムチェック、全て問題無し（オールグリーン）、機体状態良好」

あいあい。順調のようだねぇ♪Ｇブラストなんか使わないはずなのに、なぜに用意しているし、不思議だし……。明らかにオーバーキルにならないか？あれか？静止軌道上から爆撃とか砲撃をしろ、と言うのか？

そんなことしたら学園どころか日本の一部が灰燼に帰するってぇの…。“日○沈没”とかマジで笑えないよ？あれは映画だから楽しいんだ。因みに俺は“日本以外全て○没”が好きだ。あのＢ級感が

堪らないね。

……悪いかよ。俺はB級映画が好きなんだよ。あのチープさが堪らなく好きなんだ。

「んんっ、さて、学園の封鎖状況と一般人の対応はどんな感じ？」

「学園の包囲状況は全体の８９％進行中だね、うん、これならいい感じかな。予定では作戦開始５分前に完全封鎖完了だよ。でも、隠し通すにしても限界があるから最長でも日の出までには終わらせたいかな」

「…封鎖後、学園内に居る一般人や学生は催眠ガスと意識操作魔法で安全な場所に誘導、隔離予定。各学生寮はそのまま避難区画として使用するため防御結界とＤフィールド発生装置を設置します」

「それじゃ作戦開始１時間前には処置に入ろうか。皆に通達よろしくね」

「了解っ♪」「…了解しました」

うんうん、安全策は取れるだけ取らないとね。ただでさえ強制睡眠させることで本人の知らない間に迷惑かけるんだ。これ以上の迷惑は掛けられないし、万が一にでも一般人に被害が出たらやってられないよね。

だって、寝覚めが悪過ぎるじゃないか。時間的に木乃香ちゃんや明日菜なんかは女子寮に居るだろうしお嬢様大好きっ娘の刹那ちゃんも護衛しているはずだから居る……はずだ。何事も木乃香ちゃん中心で考える悪癖があるからな。

それでも何度か今日の夜は寮から絶対に出るな、と言い聞かせてあるから大丈夫、のはず！でも上から要請されたら弱いところがあるからなぁ。まぁそれも学園長（じじい）が変な小細工をしていなければ大丈夫かね。

木乃香ちゃんは詠春の娘だけど俺も彼女が小さな頃から見てきているからねぇ。あ、勿論、刹那ちゃんもだよ？忘れるわけが無いじゃないか。これが今も可愛いけど小さな頃もこれまた可愛くてだな。……あ。

こほんっ、そ、それでだな？彼女達のことを娘や妹のように思っているから危険なことには巻き込みたくないんだよ。あー、それと明日菜は魔法に対しては無敵だから心配半減だな。今のあの子ってスゴイ勝気だからまるで姉御みたいだしね。

……誰だ？今、「年齢的に考えて孫か曾孫じゃないか？」と思ったのは？俺の歳のことはいいんだよ…。永遠の２０代なんだからな！ゴメン、自分で言っていて気持ち悪かった。軽く鬱だなー…あははは、はぁ…。

……。

「さぁ予告時間まであと少しだ。ハオ、ユエ行こう。最後に直接話しておきたい」

「「ハッ、お供いたします！」」

「うん、よろしくね。アン、ＣＯＳ－ＭＯＳ、直ぐに戻るから状況を進めておいてくれ」

「了解っ♪」「…了解、お任せ下さい」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良学園都市、世界樹前広場…。

Ｓｉｄｅ　？？？

暗い未来を映し出しているか、夜空は星も月も隠す曇り空であった。日が変わる０時１０分前の今、この麻帆良学園は静かに殺気立っている。その発信源はここ世界樹前広場だった。

この場には今、学園都市に所属する魔法使いや戦闘能力を有した関係者が麻帆良防衛に支障を来たさない程度で勢揃いしている。

招集された魔法使い達の中心に麻帆良学園学園長であり関東魔法協会学現会長である近衛・近右衛門が立ち、その傍らでは高畑・Ｔ・タカミチが緊張した面持ちで寒空の下、タバコを口に銜えていた。

「そろそろ、じゃな…。ふぅ…」

「……ええ、そろそろです」

言い出した学園長の表情が暗い。タカミチは携帯灰皿を取り出すと短くなっていたタバコを揉消した。苦い味がしたのは本人の表情

からわかることだ。周りの魔法使い達も緊張を高めていくのが肌でわかる。

「やー、やー、皆さん随分と殺気だっているじゃないか」

と、場違いなことにそんな明るい声が広場に響き渡った。その姿は見えなくともコツコツ、コツコツという足音だけが月の隠れた暗い闇の世界に響いていた。

街灯ですらその闇に覆いつくされんばかりの世界に突如として一陣の突風が走った。風は雲を運び星や月の明かりを呼び込むことになる。

「「「「「ッ！！！」」」」」

月明かりに照らし出されたそこには穏やかに笑う男が1人、そして主を守るようにその左右に侍る冷然とした女が2人。

「ん？はじめましての方も居ればお久しぶりの方も居るようだ！くくくっ！皆様こんばんは！私、九重・葵は今宵、我が家族の仇を取るためだけに参上いたしました！！」

喫茶店を形成している葵だ。ここに居る魔法使いの殆どを最低限、顔だけは知っている。それでも知らない者は多い。だから、はじめましてとお久しぶり。キチンと挨拶はする。ただし敬意を払うかは別と考えて。

そして挑発することも忘れない。こちらに大儀あり、とでも言うように大仰にハッキリと言葉にして宣言する。家族の仇を取りに来たのだ、と。悪を打倒しに来たのだ、と。

だが笑顔だった彼もそこまでだった。スッと表情が消えてその瞳には何も映さない。目の前に広がる魔法使い達など道端に転がる石を見るが如き視線だ。普段、家族や親しい者達に向ける暖かいそれとは似ても似つかない。

事実、葵にとって第一に家族、次点で親しい主要な者、それら以外はどうでもいいと考えている。だが今後のことも考えているため最低限、殺害しないように配慮もしている。……本当に最低限だが。

「…俺は今、憤怒している。だが今ここで最後の機会を与えようと思う。大人しく倉持を含む１４人の身柄を引渡せ。さすればこの無益で無様で無駄な戦闘は避けられる。学園長“殿”も必ず負ける戦はしたくないだろう？」

葵の台詞にあった“殿”、それは明らかに相手を格下に見た敬称だった。現代ではそれほど気にする敬称でもないが明らかな侮りの意味を込めた言い回しだった場合はこの限りではない。

そして葵はこの戦いで負けることなどありえないと考えている。多分に趣味と遊びを含んだ今回の戦争だが驕りも油断もなければ慢心も皆無だ。全力で遊んで、全力で叩き潰す気でいる。

無論、倉持一派１４の首は確実に刈る。これだけは譲らないし譲れない、譲る気もない。

「ふ、ふざけるなッ！！戦力差を考えてモノを言えッ！！」
「ご家族のことは気の毒とは思いますが、これはやり過ぎです…！」
「あの…！えと…その！…あ、ああお、葵さ…あぅぅ」
「学園に対してこのような不貞を働くとは許し難いッ！！」
「正義の名の下、貴様らの身勝手を許すわけにはいかない！！」

騒ぎ立てる学園関係者一同。一部、正義感の強そうな某女子とチワワな雰囲気を醸し出した某少女の声がしたが気にしてはいられない。

何より今の学園長と葵が睨み合う中では雑音以外の何ものでもない。だが2人は雑音が聞こえないかのように振舞う。冷静に相手を見極めようとするように学園長は葵を見据える。

葵のほうはジッと何も映さない瞳を学園長に向ける。学園長をキチンと見ているのかさえ疑わしいが油断はできない、と傍らに居るタカミチは考え直す。馬鹿正直に正面から葵が来るはずない、と確信しているからだ。

葵が沈黙しているのをいいことに今も尚騒ぎ出す学園関係者達。

葵本人は気にしても居ないが彼の傍に侍る2人は我慢ならなかった。故に行動を以って鎮圧した。突然、何の前触れもなく学園関係者達の手前の地面が刹那の瞬間に二度、亀裂が走ったのだ。

「「「「「ッ！！！！」」」」」

見ることも出来なかった二度の衝撃。白刃による一撃、先に動いたのは白の剣姫ハオ。黒刃の一撃、次に動いたのは黒の剣姫ユエ。学園関係者達は何が起きたのかわからずに唖然としている者やただ

ただ驚愕している者など様々だ。

「黙るが良いッ！！！卑劣なる汝らに我が君は寛大にも慈悲を与えておられるのだ！！！有象無象の雑魚が囀り、これを邪魔するな！実に耳障りだ！！！！」

「――――――……」

「「「「「……ッ！！！」」」」」

白の剣姫は声を張り上げる。敬愛する主の邪魔をするな、と。逆に黒の剣姫は最初の一撃以外は静かに佇んでいる。だが身に纏う空気は雄弁に語っていた。“黙れ”と言う一言を言葉にすることなく語っている。

学園関係者達は信じられないほどの重圧が一瞬、広場を包み込んだことで膝を屈する者や冷や汗が噴出している者、瞬時に戦闘態勢に入った者が見えた。だが、それぞれに共通することが一つある。

皆一様に身動き一つしない。いや、できないのだ。今、動けば殺される…。

「――――我が君、失礼致しました。どうぞお続け下さいますよう」

「あー…うん、ありがとう、うん。こほんっ、さて！うるさい外野はこれで気にすることはない。――――学園長殿の返答は如何に？」

葵は一つ苦笑するとハオ達に下がるように手を上げた。２人もそれに従い、元の位置に下がった。もう一つ苦笑したが学園等に向き直る時には表情の変化はなくなっており静かに返答を求めた。

「……答えは変わらぬよ。引渡しに応じることは出来ぬ。それが学園の総意じゃ。それよりも葵君が降参してくれぬかの？このままでは君達の身の安全も難しくなるのじゃ。ワシはそのようなことになってほしくないのじゃよ」

流石、学園長。先程の重圧などでは堪えた様子が見られない。伊達に関東魔法協会の理事長を務めてはいないということか。……普段はボケ爺なのにいざという時には頼りになる。

「身の安全、ね…。くくくっ、正義の魔法使いはなかなか言うじゃないか。だが人様の家族を不当にも襲っただけでなく、その事実を内々にして無くそうとしているのだからな。それは悪に加担するも同義だ。違うか？」

葵は冷たく言い放つ。控えめに言っても友好的とは取れない言葉だった。

それも仕方ないことかもしれない。葵は初戦で大きな戦火で以って麻帆良を防衛した実績を持っている。その後も依頼を受けて勝利を重ねた。葵も思うことあったがそれでも短い期間だがこの地を共に守った。

彼らの行為そのものは評価されて然るべきだろう。それなのに情報部が察知したのは一部とはいえ同じ麻帆良勢力の手による監視と盗聴、そして最後には不正な粛正計画だった。怒りを懐くなというのが無理だろう。

学園長も葵の気持ちを少しは理解している。この麻帆良で自分の目の届かないところで不幸が起こってしまったことだ。普段、飄々

としている学園長だが一長として責任も感じている。

だが、学園長にも考えがなかったわけではなかった。何れ倉持を筆頭に不穏分子足り得る者達を何らかの理由を作り麻帆良から遠ざけるつもりであったのだ。それなのに数々の素行を黙認してきたツケが今になって現れてしまった。

読みが甘かった。だが、だからこそ教育者として苦渋の決断をした。倉持らの身柄をＭＭ本国に引渡し、彼らに厳しい処分を下すことにした。

「フォフォフォ、そのことはケジメをつけるわい…。実行犯の倉持君達の裏も調査するしのう。あとはＭＭ本国の法に則って厳しく処罰されるじゃろう。……葵君はそれで納得できんのか？」

「できないね。ウチのＣＯＳ－ＭＯＳは重症なんだぞ？納得できるはずがない。ああ、できないね。大体、あのＭＭ本国が厳しく罰すると？くくくっ、冗談はやめてくれ、あまりにもオカシクテ嗤ってしまうじゃないか」

葵は笑う、嗤う、哂う。しかしその瞳に宿るのは嘲りと侮蔑、そして苛立ち。葵の心情に同調して背後の２人も闘気を開放する。３人の周囲の空間が、空気が軋む、軋む、軋む。ピシッ、ピシシッと地面のレンガに罅が入る。

決して広い範囲ではないが重圧を感じ取るには十分な距離に展開している学園関係者は過度な緊張から喉を鳴らす者、手に汗握る者、負けるかと意思を燃え上がらせる者、哀しそうに見守る者、ただただ震える者、と様々だった。

謀略や策謀など裏では悪名高いことで有名なＭＭ本国だ。元老院には老害も多い上に魔法至上主義者の議員も多い。更には言うなら葵は欲深い権力者など端から信じていない。

確かにＭＭ本国の布いた法は魔法を前提に構成されている。長い年月を以って緻密に構成されたそれは素晴らしいと葵も敬意を持っている。しかし、それも昔のことだ。ここ数十年の権力者達によって今では半分以上が形骸化しているのが事実だった。

今やマトモな人格者として残っているのは学術都市アリアドネーの騎士団を総轄するセラス総長や新オスティアを総督として実質仕切っている数少ないマトモなＭＭ元老院議員クルト・ゲーデル、あと数名といったところか。

ＭＭ本国を筆頭とした連合はダメだが帝国はいい。過去に葵ファミリーが徹底的にネズミ掃除をしたため散々に身奇麗になっている。長らく帝国へ赴いていないが政治の腐敗を起していない限りは今でも健全な政が出来ているはずだ。

葵も帝国の布く法ならば、と今になって頭の隅で思案した。しかし、それも今となっては詮無いことだ。今更、止まることなどできないのだから。

「……じゃが、法は法じゃ。それに変わりはない。例え悪法でもその時代に認められた法なのじゃよ」

「ふんっ、そんな毒にしかならない法などやめてしまえ。…はぁ、元より交渉の余地はないんだよ。大人しく引渡すか、学園が半壊してから引渡すか、その二択だけだ。――学園長殿、これが最後だ。引渡すか否か？返答は如何に！！」

「……何度でも言おう。断じて否じゃ！！」

学園長も葵も道を譲ることはしない。それを互いに声を張り上げることで、ここに覚悟とした。

今この時こそが決定的な亀裂を生んだ瞬間だった。

残念な結果に終わったことで葵がカクンと顔を伏せた。ここで不思議なことが起きる。彼らから放たれていた圧倒的な威圧感が突如として消えたのだ。苛烈なまでの闘気が襲い掛かっていたのに今は風が凪ぐように静まっている。

不気味だ…。

広場に居る学園側全員が感じた。威圧感も消えたのだから降服の意思とも見て取れる。普通なら誰でもそう考えるはずだ。しかし、目の前に立ちはだかる3人にはそれが当て嵌まらない。彼らは例外中の例外と見るべき相手だと判断していた。

そして皆が見張り見守る中、変化が起きた。葵が身体を震わせているのだ。

それは恐怖する者の姿か？否！
それは命乞いをする者の姿か？否！！
それは逃走する者の姿か？否！！！
それは降服する者の姿か？断じて否！！！！

それは戦うことへの歓喜なり！
それは叩き伏せることへの狂喜なり！！

それは蹂躙することへの狂気なり！！！
断言しよう！それは勝利を確信した者の姿なり！！！！

「……そうか…そうかそうか。くくっ！くくくっ！！よろしい！！
ならば戦争だッ！！ラミエル！広域次元結界、発動！！」

『Ｒｏｇｅｒ，Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ』

葵は大きく笑いに歪めた顔を上げて両腕を大きく左右に振り宣言する。戦争の始まりだ、と。彼の呼びかけに答えたのは機械的な女性の声だった。同時に彼の胸元にあるペンダントから閃光が走る。

広場に居る者達がハッと気が付いた時には凄まじい速度と勢いで広域結界が構築されていた。瞬間的に学園都市の大半をドーム状に覆う用途不明の結界が展開されていたのだ。

内部は不気味な薄暗さで空間の隔たりがところどころにある。感覚的に鋭い者は空間のズレのようなものを肌で感じ取っているはずだが大半の学園勢には判断できない結界だ。

そしてこれだけでは終わらない。終わらせない。誰が終わらせるものか。葵は更に右手を上げて“何にか”に合図をする。

「「「「「なっ！？！？」」」」」

するとどうだろうか、合図と同時に正体不明の大部隊が景色から融け出るように現れたのだ。現れた者達は皆、大柄で同じ背格好で同じ顔をしている。黒い戦闘服を纏うその姿は不気味な力強さを感じさせられる。

現れた部隊はそれぞれがガトリングガン、対物ライフル、マシンガンなど強力な銃火器、そして部隊後方にはMミサイルを内蔵した大きな発射機を装備している。全ての銃口、ミサイル発射口は例外なく学園関係者に向けられ照準されていた。

風のように突然、現れた大部隊に慌てる。状況から辛うじて葵がどこから連れてきたのは判断できる。だがこれだけの大部隊や銃火器を一体どこからというのはわからない。

土地柄から防衛が必要である性質上、個人で手に入る程度の銃火器は一部仕入れている。魔法関係では転移符などのマジックアイテムを裏では扱っている。それらから武器が流れたのなら直ぐにわかるのだ。

それなのに目の前の大部隊が使う大量の銃火器を売った形跡が見られない。故に学園関係者は何が起きたかわからずに混乱する。そして学園長も同じ思いだ。一体いつの間にこれだけの大部隊を、と葵を睨みつける。

「まずは余興だ！精々この宴を楽しむがいい！くくっ！はーっはっはっはっはっ！！」

葵が大声で宣言するとキラキラと彼らの周りが仄かに輝きだす。見たことも無い方法だが転移のそれと同様のようで歪な魔力の動きを感じさせる。そう確信した次の瞬間には葵達3人の姿は消えていた。

残ったのは目の前に急遽展開した大部隊。ここまで銃火器を構える以外身動き一つすることなかった。そして葵という脅威が消えたことで今気付いた。目の前の大部隊から生きる者特有の生気を感じ

られないことに。そして――――…。

「――――戦闘行動ノ開始ヲ、ココニ宣言シマス…」

戦闘は突然現れた大部隊からの一斉射撃から始まった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第六十七話「気遣いと秒読みと戦闘開始と」（後書き）

ここまでやって気が付いたことがあるんだ…。
一年後に葵は麻帆良に戻れるのか？と…。
普通なら麻帆良に居られないでしょうが…。
どないするよ？どうすっぺよ？…どうしようｏｒｚ

もう本格的に暴れるだけ暴れて世界移動を考えるかなぁ…。
はぁ…。あ、先行して行ってたやｗｗ

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十八話「苦戦と逆転と罠と」（前書き）

長期戦の予感がヒシヒシと…。
では続き！

第六十八話「苦戦と逆転と罠と」

――世界樹前広場…。

Ｓｉｄｅ　？？？

突如現れた敵部隊からの先制攻撃を許してしまったために現場は混乱の体(てい)を曝していた。大半が重火器を使用しているのに少しのブレもなく正確な狙撃のような銃撃で一斉射撃されたのだ。

元から少人数を相手取ることを考えて陣形は狭めて展開していたのだ。そのため密集していたところに曲射されたＭ(マイクロ)ミサイルと一斉射撃による水平攻撃をマトモに喰らい、大きなダメージとなっていた。

それでもここは彼らのホームグラウンドである。大きな被害は出たが本拠地なだけありまだまだ人員は居るため継戦能力は残っている。それでもその人員が混乱して統制が取れていなくては意味がない。

麻帆良学園の現学園長である近衛・近右衛門は年齢を感じさせないほど力強く大きな声を張り上げ事態の収拾を手がける。既に落ち着いている者達は順次防衛線を引き、戦線の構築に入っている。

「皆、怯むでない！！落ち着いて防御陣形を布くのじゃ！！負傷した者は下がり治療を受けよ！！」

「学園長！！ここは危険です！！指揮所へ下がってください！！」

学園長以外で逸早く対処に当たっていたタカミチが学園長に安全な後方に下がるように進言した。学園長はチェスで言えばキング、将棋で言えば王将なのだ。この老人が倒れて喜ぶのは葵ファミリーだけだった。

「タカミチ君…しかし」

「貴方が倒れたらそれこそ葵さんの思うツボです！！ここの指揮は僕が引き継ぎますから学園長は後方から指揮してください！！」

今ここで戦線が崩壊しようものならそれこそ一方的な虐殺が始まってしまう。葵をよく知るタカミチ自身が明確にその光景を想像できるだけに必死になって説得する。最低でも前線ではなく後方の指揮所から指示を出してほしいと考える。

「う、うむぅ…！！わかった。ここは任せるぞい！！皆も良いな！この場は暫しタカミチ君が指揮を執る！！」

「「「「「はいッ！！！」」」」」

「うむ。タカミチ君…」

「わかっています。お任せを」

「うむ…」

タカミチは学園長の言葉を遮った。一刻も早く安全な場所へという考えもある。指揮所で的確に指揮を取ってもらいたいのだ。それ

が全体の戦闘能力を底上げする結果に繋がると確信している。

いつまでも自分が指揮を取っていては自身の戦いに支障を来たす。本来ならタカミチは調査や前線で腕を振るうことを得意としている。このままでは味方勢力の戦闘能力が下がることにしかならない。

……。

「ふぅ……――――ッ！？左翼！負傷者が多い！！第二陣と交代する！！後退援護は第三陣がするんだ！！葛葉先生、神多羅木先生もお願いします！！」

「ハッ！」「おう！」

左翼では一時、混乱しているところに多数の大口径ライフルによる激しい援護射撃が敵部隊後方から降り注いだため負傷者が大量生産されていた。それは狙撃の続く今も増え続けている。

やっとことで混乱から立ち直った今ではそれぞれがするべきことをしているので被害は減ったが既に負傷した者は後方に下げなくてはならない状態に陥っていた。だからこそタカミチは損害の小さな左翼の第二陣に後退させ回復を図ろうとした。

これは学園長が指揮を取り戻すまでの時間稼ぎのようなものだ。少しでも味方の損害を回復させ場を整えようとする彼なりの考え合ってのことだ。

……。

「右翼！！動きを止めるな！狙い撃ちにされるぞ！！いいぞ！その

調子だ！左翼とバランスを取るんだ！！ああ、それと重傷者は早めに後方で治療を受けてくれ！！シスターシャークティ！負傷者の治癒を頼みます！！」

「承りましたっ」

右翼では最初の一斉射撃とは打って変わり敵は装備を変更してサブマシンガンやショットガンを用いた近距離戦や刀剣類や格闘を用いた極近接戦が繰り広げられている。

狙撃のような見えない一撃による恐怖はないが少しでも動きを止めようものならどこからともなく現れた敵に近距離から最大威力の銃撃を受けることになる。

一撃されて即離脱というのは少ないが後衛型魔法使いの多い麻帆良では近接戦の相手は鬼門と言っていい。徐々に体力を削られて止めの一撃で沈められる結果が続いているため負傷者が左翼同様に増えていた。

……。

「中央ッ！！あまり突出するな！！左右から挟撃されるぞ！！両翼と呼吸を揃えて行動するんだ！！ガンドルフィーニ先生の班はとにかく動いて敵の動きを惹き付けて下さい！！瀬流彦先生と弐集院先生は中央の援護を頼みます！！」

「了解したッ！行くぞ！高音君！佐倉君！」

「「はいッ！」」

「やれやれ、お腹空いたなぁ…」

「弐集院先生…」

現在最も戦闘の激しい中央は敵陣形が凹型になっているために味方勢力が凸型になり突出が目立つことになった。敵両翼の後方はでは中央の突出した味方部隊を挟撃しようと隙を見ては散発的に砲撃を繰り返しては誘っている。

そして意図せずに挑発に乗ってしまった味方部隊は噛み付かれた。敵陣形は鋭い牙が並んだアギトを閉じるようにして両翼後方は中央へ寄せて挟撃した。突出した小数の味方部隊が見事に齧り取られた結果に終わる。

現状を打開しようにも中央の敵戦力は両翼とは違い充実した火器をフルに使うことで弾幕としていた。敵陣営の後方からは雨霰の如く銃弾と砲弾が一方的に飛んでくるのだ。

気が付くとこれで空を飛んでいる魔法使いは優先して撃墜されている。そのためこの戦域では空を駆けることもままならない。このままでは学園勢力の魔法使いは地べたに縫い付けられた虫も同然だった。

そして漸く学園魔法使い達が気付き始めた。敵の銃弾や砲弾を防ぐ時に魔法障壁の効きが悪いことに気が付いた。よく見ると銃弾が障壁に接触する瞬間に魔力の気配を発していたのだ。つまりこれは魔法的術式が込められた銃弾ということだ。

愕然とした。敵の使う銃器の銃弾が対魔法に特化しているものであることに。

確かに銃弾に魔法的細工をすることは不可能なことではない。繊細な魔力操作で以って少しずつ魔力を込めながら必要な術式を弾核

に刻み込み小さいながらも目的に合わせた特化型銃弾とする。

銃使いの視点で考えれば敵の使用する銃弾は対魔法使い戦においては比類なき助けとなるだろう。そして敵の銃弾の優秀なところは単純に銃弾を強化するのではなく障壁突破などという高度な術式を弾核に刻み込み使う、これ一点に限る。

無詠唱だろうがなんだろうがこれなら銃の引き金を引くだけでいいため即応性も高い。こんな物を使われる魔法使いは堪ったものではない。こんな反則が許されるのか、と泣きそうになる。

……。

戦闘が始まって３０分以上が経った。時間的に考えて学園長が厳重に隔離されている地下の指揮所に到着する頃だ。タカミチは左手の腕時計を見てそう判断すると周囲を見回した。どこから銃砲と魔法の爆発音が響き渡っている。

「みんな！今は持ち堪えてくれ！！勝機は必ず来る！……っ（マズイ。緒戦で受けた被害が馬鹿にならない。やはり先手を取られたのが痛いか…）」

負傷者の治癒はしているが圧倒的に負傷する者のほうが多い。１を治療する間に２の負傷者が量産されているのが現状だった。

しかし、麻帆良学園勢もただやられていたわけではない。敵の武装、陣形、敵数などの情報を、文字通り身を削りながら観測していたのだ。その過程から敵数は千にも届かない地上部隊のみと推定された。

彼らが偵察中の時も敵部隊を5分の1ほど打ち倒していた。そして驚いたことに倒した敵は人間ではないばかりか生物でもない機械の塊だった。機械のところどころから魔力反応はするものの自動人形（オート・マータ）とは違うようだった。

戦闘中の今は細かく分解している時間などないので放っておくことしかできない。とりあえずこの戦闘に勝った時、この機械は麻帆良魔法技術部へ引渡され詳細に分解されることだろう。

閑話休題…。

敵部隊を2割以上撃破したがそれでも味方の被害は大きい。正念場というほど酷いわけではないがそれでも厳しい。不幸中の幸いだが学園主力には被害は出ていないため少しだがまだ余裕はある。

現状は決して楽観できるものではないが、かといって悲観するほどでもないはずだ、とタカミチは沈みそうな思考を上方へ修正す――と、頭の中に何かが引っ掛かった。

「……（何が…何が気になった？いや、何かを見逃している、のか？それは――――何だ？）」

敵の配置？否、多少単調な動きだが敵は十分な脅威だ。誰かが指揮を取っているのか、それとも予めプログラムされたことなのかは置いておくとして堅実な部隊運用だと思う。今見ても特におかしいところはない。

ならば敵の狙い？……それも気になる。そもそもこの戦いは倉持君にＣＯＳ－ＭＯＳ君が襲われて重症を負わされたことへの過激な抗議とも言える。葵さん、家族のことになると見境がなくなるからなぁ…。

んんっ、最初に葵さんは言っていた、“この戦いは敵討ちだ”と。だけど倉持君の引渡しを僕達、学園側は拒否した。だから今の葵さんにとって倉持君を確保するためには邪魔な僕らを退ける必要がある。

家族を溺愛しているあの人ならおかしくないように思える。それでも――しかし…そう、しかし、あの葵さんが何も対策もしないで家族を危険に曝すだろうか？事前に危険を察知して方法はともかく確実に排除するとしか思えない。

他に気になることは敵の総数だろうか？葵さんが部隊を投入した割に実働員が少ないような気がする。あの人なら万単位で投入して物量で圧倒するのが常識だ。それなのに、これでは、まるで、実験のような……。

ドガンッという突然の大きな衝撃がタカミチの居る前方陣地を襲った。

地面と空気を伝わる大きな衝撃。濛々と舞い上がる土埃と噴煙。飛び交う怒号。悲痛な悲鳴の数々。雪崩れ込む敵。飛び交う魔法と銃弾。甲高く鳴り響く剣閃の音。ダンダン、ダンダンという鈍い打撃音。

「――ッ！？！？今のは…！？被害報告！！」

「…は、はい！中央の後方付近に敵攻撃を受けようです！！負傷者は多数！内死者は無し！！怪我人は更に後方へ輸送中！！しかし治療の手が足りません！！」

周囲に居る魔法使いの報告と同時に、ふと見上げた上空に飛び抜ける数百機の飛行物体をタカミチは遠目ながら確認した。有難くないことに今も尚上空から波状爆撃を繰り返して被害を拡大している。

上空を飛び交う昆虫を模した機械の姿。タカミチは“それ”に見覚えがあった。イヤと言うほどありすぎた。

無人機動兵器。その形状から俗称カブトムシと呼ばれている無人機械。葵さんが機動戦艦アングレカムを造り上げた時と同時に生産された戦闘兵器群だ。

数千数万という圧倒的物量を盾に2機から3機を最小単位とする数機で連携して一対象を囲み、Mミサイル、クラスター爆弾などの爆裂系やバルカン、レーザーなどで袋叩きにする。

過去に葵さんが仮所属していた帝国で見た戦闘風景。何度も「完全なる世界」の拠点をアングレカム単艦で襲撃するのを見た。艦から射出される無数の無人機動兵器（カブトムシ）は無尽蔵と錯覚してしまいそうだった。

何も知らない他人が見たら鬼畜外道の所業に見えること請け合いのエゲツなさだった。葵さん本人は自分のことを臆病な小心者だから敵排除を徹底しているだけだと言っていたけど、アレは…ヒドかった。

ドガンッ。またもや大きな衝撃がタカミチの居る陣地を襲った。

「クッ！……（葵さんは本気だ。本気で邪魔する僕らを排除する気だ…）。中央には治療を完了した予備隊を当てる！！念話で通達してくれ！！」

「はいっ！」

覚悟を決めよう…。正念場と言うにはまだ早いが、あと少し耐えなくてはならない…。なぜなら、学園長から指揮権を、皆の命を預けられたのだから。

「……（頑張ろう。今はそれしかないから…）」

……。

……。

１人でも多くの味方を助けるためにタカミチが必死に被害を抑えようとしていた時から更に１０分が経過した。奮闘に奮闘を重ねることで緒戦と急襲爆撃が行なわれたことに比べて学園勢力は想定よりもやや多く戦力が残存していた。

『タカミチ君！たった今、指揮所に着いた！ここからはワシが指揮を取る！！』

「あぁ、ありがたいです！それでは指揮はお任せします！！――――僕は…！！」

やっとだ…！これで自分が自由に動ける、とタカミチは少々場違

いだが安堵した。彼はすぐさま肉声と念話で前線にて戦う魔法使い全員に学園長へ指揮権を返還したことを宣言した。

『わかっておるわい！一番、攻撃の激しい中央を任せるぞい！！』

「はいッ！！！」

［紅き翼］所属、“無音拳使い”高畑・T・タカミチ、今より出陣すッ！！

……。

タカミチは全力で駆け出した。彼は瞬く間に本隊から逸れた少数の敵部隊を叩き潰しながら急速に移動する。今まで居た学園戦場の後方から一気に一番、敵の攻勢の激しい中央陣地を目指したのだ。

敵を蹴散らしながら派手に移動するタカミチの接近を今まで中央戦線を支えてくれていたガンドルフィーニが気付いた。周囲の安全を確認しながらタカミチの下へガンドルフィーニは駆けつけた。

「高畑君、こんなところに居て前線の指揮はいいのか？」

「今は指揮所に居る学園長に指揮権を返しました。それで僕がここへ来たんです」

「そうか…それはいい。どうやら敵の攻撃は中央のここに集中させているようだからな」

ガンドルフィーニが言うとおり中央での戦闘は苛烈の一途を辿っている。

今回の戦闘は様々な意味で酷いものだった。緒戦から敵の先制攻撃を許し敵に戦場の流れを握らせてしまったのだ。そのせいで学園側は全てにおいて後手に対応をとる結果にならざるを得ない状況だった。

だが、それでもここは学園側の地だ。まだ人員も残っている。まだ学園の力を結集させれば逆転できるだけの戦力も残っている。全ての戦線を維持することに大きな問題はなかった。

しかし敵は狡猾だった。

緒戦から後手に回っているため制空権は既に敵に落ちているのが痛かった。敵は学園側陣地に、それも強烈な痛打となる場所に上空から強襲攻撃を仕掛けてきたのだ。そしてこれが中央戦線の戦火が苛烈に燃え上がるなる切欠となった。

緒戦の混乱から立ち直った直後に上空からの強襲攻撃。これは見る者が見たならば敵が学園側の陣形と位置、戦力の配分などの情報が洩れ、尚且つ完全に把握されていることを知らしめるものだった。

最悪なのは急襲された位置にタカミチが緒戦で出た負傷者を移動させた場所であり治療を受けていたことだ。被害は多数出た。そのどれもが等しくそして最大限に災禍を齎した。不幸中の幸いにも死者が出なかったことが救いと言えるかもしれない。

そして今タカミチを加えた中央戦線では彼の活躍とそれに鼓舞された味方が奮闘することで戦線を押し上げることができた。今も戦闘中。彼らは戦闘を続ける。

……。

押し上げた戦線の後方（先程までは最前線）で息を荒くしたタカミチ、傷や煤が多いガンドルフィーニとその班（高音、愛衣）、彼らは一時の休息を取っている。

「先生、敵は何か狙いがあるのでしょうか？これまで被害は出ていますが幸いにも死者は出していませんし」

「それはわからないな、彼が何を目的にし何を狙っているのか…」

「そうですね…」

ある程度上がっていた息を整えた高音がずっと感じていた疑問を班長であるガンドルフィーニへ問いかける。だがそれほど長く、ましてや親しい付き合いをしていなかった彼に葵が何を考えているのかわかるはずもなかった。

「葵さんはこれを“余興”だと言っていました。そもそもの狙いが倉持君達の身柄引渡しですからね」

傍で2人の話しを聞いていたタカミチが会話に加わった。こちらは既に息を整え即時行動を可能な状態にしている様子だ。流石は元［紅き翼］所属していただけはあるとこの場に居る者達は感心した。

そして気になるのはタカミチが言ったことだ。改めて葵の言動を思い出してみると確かに“余興”だと言っていた。この戦闘が彼の言うとおりの余興ならば本当の狙いは別にある、または本命の戦力が別にあるということになる。

「お、お姉様っ、自分で出来ますから、あぅ…」

「いいから、ジッとしていなさい。…ふぅ、あの人達の身柄を、ですか?…はぁ、葵さんは激情家なのかしら。意外ですね」

高音が愛衣の乱れた髪を梳きながら言う。戦場でも身奇麗にするのは彼女なりの思いやりと頑固な真面目さからくるものだろう。高音は煤で汚れた愛衣の顔を丁寧に拭き取りもいつの間にかしている。

「倉持…?…あ?――――ッ!!」

「ガンドルフィーニ先生、どうし…ッ!!まさかっ!!」

彼女達の和む姿を目にしつつ葵の狙いが何にあるのかを教師2人は考えだ。そして思考の端から“倉持”の名をどちらかが口に出した時、ガンドルフィーニとタカミチは一瞬で驚愕した。

2人は驚愕した顔を見合わせると頷き合い再度の思考を続ける。考えれば考えるほど今の状況は“旨くない”…。葵の目的が判明――。

「高畑君!そのまさかだっ!チィィ!彼は始めから固執していたじゃないか!しくじった!!」

ガンドルフィーニは声を荒げる。そう判明と言うよりも最初から葵自ら目的を明言されていたではないか、“倉持らの身柄確保”というそれを…。彼らはそのことに気付かなかったことに頭を抱える。

そしてタカミチはもう少し考えてみた。この戦闘が例え“そう”だとしても、その必要があるのか?とも思うからだ。葵ならこのま

ま物量に物を言わせて自分達を蹂躙してから目的を果たすのではないか？と…。しかし――――。

彼らの頭の中では“まさか…？”という疑いもあるが“まさか…！”という確信もあるのだ。だが本当に葵はやるだろうかとガンドルフィーニは考え、しかし彼なら“やる”とタカミチは判断し断定した。

それを証拠に緒戦からずっと優勢を保っていた敵勢力は“ゆっくりと確実に後退し押し遣られている”ではないか。

それを証拠に緒戦から後手に回っていた学園側は順調に攻勢の意志を取り戻し“戦線を徐々に押し上げている”ではないか。

いや、それはいい、いいんだ。例え罠でもそれだけを見るなら“今は味方が優勢だ”ということに他ならないのだから。タカミチ達が言いたいのはそういうことではない。

戦線が押し上げられたことで学園側戦力の殆ど全てが“倉持一派の収容されている建物から離れてしまっている”ことが問題だった。これ見よがしに誘われていないのが憎い。今頃気付いてもここからでは間に合うかどうかも怪しい距離だ。

倉持らの杖は取り上げているので危険性は低い。それに一応だが監視要員も居る。だが少数で戦闘員としては正直心許無い。故に事が事実だった場合は足止めにもならず要らぬ犠牲となるかもしれない。

敵のシッカリとした後退。高揚した味方のゆっくりとした前進。葵の公言し明言した目的。始めからの狙いはただ一つ。これは、そ

う――――。

「――――彼の狙いは最初から倉持君達の身柄確保にある！！！」

「これは陽動…っ！！！」「そんな…！！」

タカミチの言葉に、聞いていた高音と愛衣も驚きを隠せないでいた。教師2人も今までなぜ気付かなかったと再度頭を抱えている。時間が巻き戻るなら昔の自分を殴りたいほどだ。

――――陽動…。

今、目の前で一糸乱れぬ部隊行動を取って相互に連携しながら戦う敵全てが陽動を目的として運用されている。葵の戦力はどこまで増えたのかと考えたタカミチは一瞬だけ眩暈に襲われた。

気付いてみれば単純な方法だった。だが単純ゆえに引っ掛かった時の効果は絶大だった。

古来より使い古された方法だった。だが現代戦術でも有効な手段であることは事実だった。

もうどうしようもないほど戦線は緒戦の痛手を取り戻そう奮闘した味方の手によって、もう随分と前進している。戦場の空気に高揚した学園勢力は敵の奥へ奥へと巧妙にも誘導されていることに気付きもしていないようだ。

【…――――ッ！！…】

ガンドルフィーニは直ぐに学園長へ念話を始める。しかし先程ま

でクリアに通話できていたのに今ではザザッとした雑音ばかりが聞こえる。もう一つの通信手段として携帯電話も試したが結果は同じだった。

「……繋がらない？（まるで妨害にされているような…？）――ッ！」

今更になって通信ができない（妨害されている）事実。それが示すことはただ一つ。敵の最終目的、つまり“倉持一派の確保まであと一歩というところにきた”という証拠に他ならない――！！

「「「「――やられたッ！」」」」

４人は迷うことなくすぐさま移動を開始する。駆ける。疾駆する。疾走する。滑空する。急ぐ！急ぐ！！急ぐ！！！

目指すは勿論“倉持が収容された場所”！！

「――間に合ってくれッ！！」

タカミチ達は走る。間に合う可能性が限りなく低くとも…。ただ走る。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第六十八話「苦戦と逆転と罠と」（後書き）

葵の目的は倉持だけど…。
シュワさんが陽動？タカミチ達の勘違いじゃね？
仮に陽動だとしても結果的にそうなっただけだってｗｗ
次回はどうなることか…ｏｒｚ
作者にもわからない（＊д＊）クワッ！！

ダメじゃん…。

ではでは！Ｂｉｓ　ｂａｌｄ！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第六十九話「指揮所と葵出動と目標確保と」（前書き）

戦争！続き！以上！

第六十九話「指揮所と葵出動と目標確保と」

少し時間は戻り…。

――機動戦艦アングレカム艦橋…。

Ｓｉｄｅ　葵

「ただいま♪アン、戦況はどんな感じ？それなりに舞台を演出したから相手も少しは動揺したと思うんだけど」

いやー、緊張した！アレだけ多くの人前で挑発するのは大変緊張したね！後ろにハオとユエが居なかったら絶対に出来なかった。挑発すればするほど睨み付けてくる視線が鋭さを増していくんだよ？マジで怖かった…。

そんな修羅場から一時帰還した俺は上空五千ｍに位置しステルス航行するアングレカム艦内から地上の戦況を空間モニターで確認する。三次元マップで構築されたそれは出来うる限りの方法で以って詳しく戦域を映し出している。

「うーんとねぇ…うん、先手が取れたのは大きいね。これで全体の流れは掴んでるからこっちが緒戦は優勢だよ」

赤い三角印と青い三角印が横数百ｍに渡り衝突している。光学映像と合わせて見てみると両者が激しくぶつかり合っていることがわかる。先制攻撃したことで場の流れはこちらにあると言っていい。

これならある程度、戦場はコントロールが出来るはずだ。

因みに赤が学園側で、青が俺達、そして少数の緑は……見学者？観察者か？まぁともかく第三者ということだ。

「ふむ、ふとした遊び心だったが、存外出向いたのも無駄にならなかったかね」

第三者を示す緑の反応は全部で３つ。これは魔力と熱源、動体反応などで居場所を特定した。そして内一つ、光学映像で直接確認したらなんと超・鈴音だった。反応は１つだったから相方の“葉加瀬・聡美”は連れていないようだ。

似非中華娘が何しに来たのかという疑問はあるがこれは愚問だな。おそらくあの時の単独斥候（スタンドアローン）が帰還しなかったことから今回のことを予測してスタンバイしていたのかもしてない。

超・鈴音の考えとして、あわよくばこの戦いを通して俺の総戦力を見極めようというところか。こんな夜遅くに観察なんてホントにご苦労さまさまだ。次の日が休みだからって油断しているとお肌が直ぐに荒れてしまうぞ？くくくっ！

む？そういえば超・鈴音は未来から現代に来た似非中華火星娘だったな。今までは考えたこと無かったけど“彼女の未来”に“俺という想定外（イレギュラー）”は存在していたのだろうか？

あの女神（幼女）がどうこの世界に干渉したのか知らないから対処のしようがないな…。対策はしている。８００年あったからな。伊達に歳はとっていない。それでもまぁ、「対応は“万全”しかし“完璧”ではない」、と言ったところかね。

一応、女神（幼女）の説明では“ネギま！”の類似世界ということだが、この世界の未来まで俺の情報が残っているのかがわからん。普通に考えれば残っていると思うが……むぅ？

とりあえずは行き当たりバッタリだが未来から来た彼女が俺のことも“知っているか”は知らないが“知っている”と仮定して動くのが吉だろう。知らないようならそれはそれでありがたいことだけどね。

それよりこっちのほうが俺には痛いな。今上空では数百機のカブトムシが飛び交っているのが空間モニターに映し出されている。このことからこれを見た超・鈴音にあの時、襲撃した地下基地の主が俺だとバレたと思う。

どうしよう、というのが俺の正直な気持ち。始末するのは簡単だけど流石にそれは浅慮に過ぎるというものだろう。原作キャラを討つなどしたくもない。先の事象が読み辛くなるしね。今も読み難いけど…。

とにかく今、超・鈴音のことは要注意に留めて置くことにしよう。

残りの反応2つ、これは超・鈴音とは離れた場所に居る。既に個体識別できるように登録されている反応だ。提示されている個人情報にはエヴァちゃんと茶々丸ちゃんの名前と詳細なプロフィールが……あ、エヴァちゃんがアメ舐めてる。

彼女らは別にいいかな。油断していると喰われるかもだけど付き合いの短い中では予想以上に俺も親しくしているしね。観測している茶々丸ちゃんから詳しい観測情報が超に流れるのが痛いけどね…。

……。

多数の空間モニターに映し出される情報をザッと見て戦況を把握する。緒戦の先制攻撃が効いているから状況は俺達の有利と見ていい。それを証拠にシュワさん部隊が緒戦を楔として学園側陣地に大きく侵入している。

学園側の前線は寸断間際で辛うじて食い止めていると言ったところか。今の軟弱な魔法使いでは出来ないことだ。流石は麻帆良、よく堪えたと称賛に値するね。

「……お？それにしてもＣＯＳ－ＭＯＳも機械人形（シュワさん）部隊の指揮に専念しているようだけど上手くやっているようだね」

三次元マップには大きな赤い三角印から分派した小さな赤い三角印が、同じく大きな青い三角印から分派した小さな三角印に挟撃されて撃破されたことを示すペケマークが追加、量産されていた。

大きな三角印が部隊の本隊、小さい三角印が小部隊やハグレ部隊を示すものだ。こういう単純な情報でも俺はいつも感じさせられる。そう“情報は力だ”と思う瞬間だ。これだけでも敵の動きが手に取るようにわかるしね。

そしてＣＯＳ－ＭＯＳは俺の想定以上に上手く部隊を効率よく運用していた。今も三次元マップでは本隊からハグレたり小部隊になったのを優先的に各個撃破しては学園側の戦力を確実に削っている。

光学映像で学園小部隊が挟撃されるところを見た時には内心で「お見事！」と彼女の指揮に掛値無しの称賛をしたほどだ。

だが、小戦闘だけかと言えばそうでもない。大きな戦闘ではゆっくり後退することで学園側の突出を誘引して左右の大部隊で挟み込もうとしていたしね。

三次元マップでは突出してきた大きな赤い三角印の先頭部分が２つの大きな青い三角印に左右から挟み込まれてガブリッと齧り取られていた。

あ、ペケマークが大量に…。学園勢の皆さん、ご愁傷様です。でも俺達を怨むよりは自分達の無能を嘆いたほうが建設的ですよ？くくくっ！

三次元マップと光学映像、そして情報画面から見るとシャワさん部隊とＣＯＳ－ＭＯＳの情報共有化で意識統一が完璧に機能しているため群体（シュワさん部隊）がまるで一つの生き物のように動いている。

「んふふっ、ＣＯＳ－ＭＯＳちゃん、お父さんに褒めてもらうためにがんばってるんだよ。可愛いでしょう？」

チラッとＣＯＳ－ＭＯＳを見たら、大量のデータを捌きながらアンがニコニコ笑顔で話しかけてきた。仕事が速くて助かると言えば助かるけどこの子も大概にチートだと思う…。

あの情報量を片手間の如く捌くとか俺にはできないことだ。半分も出来ればいい感じかもしれない。知識があっても身体が付いていかないこともある。限界は俺にもあるのだよ、ワトソン君。

それにしてもアンさんや？ＣＯＳ－ＭＯＳが褒めてもらおうとす

るのは間違っていないと思うよ？思うけどさ、褒める内容が殺伐としすぎてはいないかね？いや助かっているけどね。順調に作戦は推移しているけどね。

疑問を感じるが俺にとっては些細なもの、と割り切って考えることにした。そうじゃないと俺の気が持たないからな。

そして今！俺のすることは唯一つ！！家族を褒めることだ！！！家族内ではこれを常に心掛けると大概は上手くいくことを俺は学習しているのだよ！！！！故に褒める！ＣＯＳ－ＭＯＳ、かーいーよー、ＣＯＳ－ＭＯＳ！

「可愛いね、うん、可愛いよ！このまま上手くできたら撫でてあげよう！」

「っ！！（てれてれ）」

「「「「「……（ジトーーー…）」」」」」

俺はただ頑張っているＣＯＳ－ＭＯＳを褒めただけだ。それなのに後ろに居る陽月姉妹と艦橋内に居るアイリを筆頭にした親衛隊皆の視線がイタイのはなぜだろう…。

もしかしてＣＯＳ－ＭＯＳばかり褒めたのがよくなかったのか？皆、可愛いのに今は視線が極寒ですよ？いや熱いのか？よくわからん。そしてここで言わせてほしい。言い出したアンもその中に居るのはおかしいと思うのは俺だけか？

とりあえず長年の経験からここですることは――――…褒めることにしよう。

気マズクなったらまずはそれだ。それしかない。少なくともウチの家族間ではそれで解決する確率は断トツに高いのだ。

「……（ボソッ）皆、可愛いのに」

更に言うなら露骨にするのではなくさり気無く褒めると効果は抜群だ。露骨なのは笑いの場と冗談の時だけだ。

「「「「「っ！！……（そわそわ）」」」」」

「えっ！処理速度が上昇した！？」

アンの驚きの声が艦橋内に響いた瞬間だった。

――その頃の麻帆良勢…。

「うおっ！？こいつらイキナリ動きに切れが出てきたぞ！！」

「皆さん気を付けて！確実に倒しましょう！！」

「おう！って…あ、まず――――ッ！」

「お！沖田ぁぁーーッ！！」

「はっ？なんだか意識が飛んでいたような…？」

なんだろう…。ＣＯＳ－ＭＯＳの部隊運用やアイリ達の指揮するカブトムシやアカトンボ、その他の情報統制の精度がグンと上がったと思ったら幻聴が聞こえたような気がした。マジでなんだろう。

「お父さんどうしたの？心配事あるなら私が、その…がんばるよ？」

「いやいや、何でもないぞぉ、うん、何でもない」

「…「？？？」」

？？？いや？本当に何でもないはずだし？問題はないよね。むぅ、それも気になるけど今は戦闘に集中するべきか。それにタカミチ辺りなら、そろそろ――――……。

「さて、早ければ向こうもこちらの狙いに気が付く頃だと思うけど連中の動きに何か変化はある？」

「うーん…偵察機からの映像と各種反応を解析して判断すると…うん、個体熱源からタカミチさんと他三名…これはガンドルフィーニ先生達だね…が戦線を離れて行ってるみたい」

「ふむ、やはりタカミチか。それでどこに向かっているかわかる？」

まぁ想像通りならあの万年出張英語教師めの目的地は……自ずとわかるというものだな。はぁ、いつまでも少年だと思っていたけど

キチンと成長しているようじゃないか、タカミチ少年よ。もう“少年”は卒業かね…。

「ちょぉぉっと待ってね♪今メインスクリーンに……――――…はいっ、出たよっ♪…あらら？お父さんお父さん、タカミチさん達のこの動きは気付かれたかもしれないよ？こちらの目標地点の方面に急速移動中だもん」

「むぅ…。予想はしていたけどそれでも随分早い」

もう少し時間を稼げたと思っていたのにねぇ。これは本当に“少年”は卒業かもしれないな。やるじゃないか♪原作でも追跡捜査や単独潜入などでなかなか優秀ではあったけどイヤハヤ…参ったねぇ。

さて冗談はここまでにして本格的な目標確保に動くとしようか。確か目標の確保に動いているのは情報部一課と三課の合同チームだったはず、それならまずは…。

「アン、目標に一番近いチームはどこ？」

「えっと…はい、出たよ♪直線距離で一番近いのは情報部三課所属の第４チームだね。今居る地点からだと……うん、急げばタカミチさん達より数分、早く到着するかな」

制空権は今も尚こちらが掌握している。タカミチ達は地上を走るか低空を這うように滑空するしか移動の方法はない。逆にこちらは上空を滑るように移動できるから機動力は比べ物にならない。

第４チームを先行させて倉持達の身柄確保を最優先で処理させるように指示、それと同時、後詰に俺達も出撃してしまえば確保だけ

は確実にできる。相手は１４人も居るんだから後詰は俺、陽月姉妹、あとここに居る親衛隊から数人で行くとしよう。

……多少の予定変更はいいよね。

行き帰りの輸送も考えると乗り物が必要だよな。…小型揚陸艇“ミツバチ”を三機も飛ばせばイケるか。ミツバチ一機辺り１８人乗りだから余裕のはずだ。兵員輸送を前提に作られたものだから小回りが利くし都市内でも問題は少ない。

「よし…それなら第４チームに連絡しておいて、“急ぎ目標を確保されたし”ってね。アイリ、親衛隊から、そうだね…４人貸してくれる？ハオ、ユエ、もう一度出るよ、今度は遊びじゃない――」

目的を果たす――。

「ハッ、直ちに向かわせます。格納庫で落ち合えるように調整致します」

「「承知ッ！」」

そう、シュワさんの実戦運用データの蒐集も学園勢力をこれでもかと言うほど威圧したのも挑発したのもオマケにフルボッコにするのも全てはこの時、この場、この結果のため――ッ！！

待っていろ、倉持…。なぁに大丈夫だ、安心していい。くくくっ！大人しく連行されてくれれば“その場”では何もしないよ。そう…そう！そうっ！ソウッ！俺の［工房］に招待してあげよう！！アハハハハッ！！

――知っている情報を全て吐かせてから貴様らの薄汚い腸をブチ

マケテヤロウ…。

――俺の家族に手を出したことが全ての間違いであったと後悔して死ぬがいい…。

「…さてさて、麻帆良学園の皆さんはどれだけ持ち堪えることが出来るかな。くくくっ！」

行くぞ、往くぞ、逝くぞ…！今、行くぞ？くくくっ！くははははっ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――某建物内の一室…。

Ｓｉｄｅ　？？？

「クソッ、クソックソッ！！なんで俺達がこんなところにッ――――！！」

口汚く喚き散らす男は名を倉持。先日、九重・葵の家族の一人であるＣＯＳ－ＭＯＳを不当に襲撃した人物だ。今は魔法媒体の杖も没収されているためただの人と変わらない。それはここに囚われている者全員が同様の処置を受けている。

彼らは今、学園長の命で犯罪の実行犯として学園内にあるこの建

物に幽閉の形で囚われている。他にも十人以上がこの建物の各部屋に数人に分けられて軟禁されているのだ。

「落ち着け、騒いでも今の状況は変わらない」

「ウルサイッ!!これが騒がずにいられるか!!俺は正義の行いをしたんだ!それなのになんでこんな扱いを受けないといけないんだ!?クソッ!」

仲間の一人が倉持を落ち着けようとするがそれすらも煩わしいと言うように更に悪態をつく。自分は正義をなした、自分は間違っていない、自分は自分は自分は…。ただ自分の正当性と説くのみだ。

「そうだ。俺達は俺達の正義を行なったに過ぎない。だが、それが学園長の正義に副わなかっただけのこと…。今は待つほかはない」

「違うッ!!学園の正義は俺にある!!俺こそが正義だ!!あいつは悪と俺が決めたんだ!!ならばそれは悪だ!!悪を滅ぼして何が悪い!!!」

「……」

「フンッ!」

根気よく宥めようとした仲間も倉持の激情に匙を投げた。実はこれで四人目だったのだが彼のやり場のない怒りは止まることがなかった。それどころか仲間に八つ当たりの如く罵声を浴びせたり、最悪は殴り合いになることもあった。

これが27日に起きたことの全てだ。

……。

そして現在２８日の時刻は０時を回った深夜。この日も変わらず倉持が癇癪を起し暴れそれを無駄と感じつつも仲間がやんわりと止めに入る。そんな日が、時間が続きまた日が昇るかと思ったがそれは違った。

その日の深夜、寝静まっていた時のことだ。扉の外からドガンッという爆発音が起きた。その建物を揺るがす大きな音と衝撃が彼らを襲い掛かる。爆発音を聞いた者達は皆、同様に飛び起きて状況を伺う。

「な、なんだ！何が！？」

「……複数の足音が近付いてくるようだ」

倉持は突然のことで混乱して声を荒げ立てる。仲間は昼間も騒いでいたのによくその元気が続くものだと彼に冷ややかな眼差しを送る。そんな中一人の仲間が扉に耳を当てて複数の足音が自分達のほうへ近付いてくるのを感じ取った。

彼は扉から離れると直ぐに対応できるように身構える。倉持以外の仲間もそれに習うように扉のほうをジッと睨みつける。ダダダッという複数の足音が近付く、近付く近付く近付く…。

――――足音が止まった。

そしてこの部屋の扉を弄るガチャガチャという音がする。次にはシィィンと先程までの煩さが嘘のような静寂が襲う。危機は去った

と誰かが思った瞬間――――グシャッと扉（鉄製）が拉げて内側へ弾け飛んでくる。

仲間の一人が飛んでくる扉に巻き込まれかけたが無事のようだ。破られた扉の向こうから数人（体型から全員女性）、人が入ってくる。

「……おぉ？見つけた、見つけた。やっほー、貴方達に絶望をお届けにあがりました、なんて？フフッ」

「「「「「なっ！？！？」」」」」

ドカドカと遠慮無しに入ってきた女性はそんなふざけたことを言ってきた。部屋の仲間達は皆、驚愕と意味がわからないという思考に囚われている。だが一つだけ言えることがある。それはこいつらが仲間達にとって脅威である、ということだ。

……。

……。

情報部対人戦闘専門の第三課所属の第４チーム２０名は葵の指令を受諾した。指令内容は先行して倉持が幽閉されている建物の制圧、そして身柄の即時確保である。彼女達は迅速に行動を開始した。

彼女達の装備は標準的なもので内訳は各種用途に合わせた銃器、カートリッジシステムを搭載した多目的ガンブレード（装弾数６発）、黒いフルフェイスの全身防護スーツ、個人用情報端末、応急医療キット、簡易サバイバルキットである。

指令受領後、作戦は予定通りに推移した。

襲撃実行前に通信網（念話、電波、有線による電話回線）を念入りに遮断してから行なった。特に念話や電波は学園都市内全域に渡って効果を及ぼしている。全ては邪魔されることなく倉持一派の身柄を確実に確保するためだ。

そうして陸の孤島と化した建物にグループ単位で別れて侵入した。内外合わせても数名の見張りしか存在しなかった。それ以外には碌に警備と言える人員は無く彼女達は全てを無力化（気絶など）することができた。

余談だが無力化した見張りは全員丁寧に縛り上げてから同じ建物内の一室に放り込んである。当然この時は猿轡に亀甲縛りが最早お約束だろう。どこのお約束かは知らないが…。念のために手錠もしているのは冗談かもしれない。

倉持一派の魔力・生体反応を端末機器と自身の感覚で建物内を探ること数分、やっと目当ての反応を察知した。徐々に反応へ近付く。一つのグループが目指す先には鉄製の扉が並んだ廊下。反応はその扉の幾つかからしていた。

扉の一つをグループの一人がガチャガチャと開かないか試すがビクともしない。焦れたもう一人が脚部に風の力を纏い蹴破った。瞬間、吹き飛ぶ鉄扉。ガンガンッと金属が奏でる嫌な音が建物内に響き渡る。

蹴破った本人は扉を弄っていた者を見て「このほうが早い」と笑いながら言って部屋にザザッと床を鳴らして一歩先に踏み込んだ。仲間達もそれに続いて部屋に踏み込み、銃やガンブレードを構え警

戒する。

「（獲物はここっと…どれどれ…）おぉ？見つけた、見つけた。やっほー、貴方達に絶望をお届けにあがりました、なんて？」

踏み込んだ部屋の中には突然鉄扉が吹き飛んだことに驚いた間抜け顔が1人2人…全部で5人居た。

「「「「「なっ！？！？」」」」」

突然、侵入してきた者は「絶望を届けに…」とニヤニヤ笑いながら言う。笑いながら、と言っても顔はフルフェイスで隠れているので本当の表情はわからない。だが声が笑っているところからそうだとわかった。

「ふざけるなッ！誰だ、貴さっガハッ！？」

部屋に居た倉持が喧しくも部屋に侵入してきた者に詰め寄った。詰め寄られた者は額をメットの上から押える仕草をすると徐に倉持をバゴッと鈍い音をさせて蹴り飛ばし壁に叩き付けた。

蹴り飛ばされた倉持は突然の衝撃に受身も取ることができずに壁際で気絶することになった。元から部屋に居た者達はあまりの事態に緊張から身体を硬直させてしまっていた。

反対に蹴り飛ばした彼女は「ストライクッ！」と幾分満足しているように小さくガッツポーズとしている。ただ煩わしかったので少し力を込めて蹴り飛ばして粋がっていたバカを黙らせただけなのだ。

「そう喚くなよ、クズが、フフッフハハッ。あ？よく見ると今蹴っ飛ばしたの倉持？じゃないか。あー、マズイかなぁ…。リーダー、これって暴行だから主に怒られますかね…？」

「問題無い。そして黙れ、デルタ３（ラナンキュラス）。無駄口を叩く必要は無い【…デルタ１からＣＰへ…】」

無駄口を咎められたのはデルタ３のコードを持つラナンキュラス。そしてその軽口を咎めるのは第４チームリーダーのドラセナだ。彼女はラナンキュラスを鋭く一瞥すると直ぐにＣＰと連絡を取り始める。

【…繰り返す、デルタ１からＣＰへ。目標を捕捉した、これより確保する…】

【…ＣＰ了解。時期に三機の小型揚陸艇（ミツバチ）が現場に着く。それまで気を付けろ…】

【…了解、感謝する…】

ドラセナは通信を切る。ミツバチが帰還と護送を兼ねてこちらに来る、とＣＰのオペレーターは言っていた。それも後詰に応援も乗せてくるらしい。

正直、応援はありがたい。人員が増えれば取れる手段も増えるのだから。犯人確保の任務ももう護送の迎えを待つだけと言う最終段階だ。ここに来て失敗は避けたい。彼女達のご主人様である葵をガッカリさせたくないから…。

……。

ドラセナがアングレカムの指揮所に通信をしている間。彼女に注意を受けたラナンキュラスは同チームメイトに話しかけ余裕そうに駄弁っている。

「はいはい、リーダーは固いなぁ。愉快なことにこいつら“話すことも最後になるかもしれない”からあたしが優しーくしてあげようとしたのに…ねぇ？」

「ちょっと、あたしに振らないでよ。隊長に睨まれるでしょうが。巻き込まないでよ」

ラナンキュラスの近くに居た彼女の名はディプラデニア。デルタ2のコードを持つ。ディプラデニアは話しかけてくる彼女から逃れようと少しだけ身を引く。自分の失敗で怒られるのは仕方ないと思うが他人の失敗に巻き込まれるのだけはイヤなのだ。

「えー、そんな寂しいこと言わないでよ。仲良くしようよ、あたしらチームじゃない？」

「だから今は任務中でしょ。いい加減にしないと“闇”に飲み込むわよ？」

「い、いや、それは勘弁して。あの中ホントに暗いし風のかの字もないほど静かで気が狂いそう…」

それでも絡んでくることにイライラしたディプラデニア。少しプチッとしてしまった彼女は右手に発生させた濃い闇の靄を見せて圧力にした。それを見たラナンキュラスはフルフェイスの下にある表情を引き攣らせる。

何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。何もできない。時間の経過もわからない。そんな暗闇に数時間放置される。特殊な性癖を持っていない限りまず堪えるのは至難の業だろう。

それがあと一歩踏み込んだらディプラデニアが冗談ではなく間違いなく有言実行することをラナンキュラスは身を以って知っているのだ。あの中は退屈で仕方のない場所だから二度と行きたくもないとは彼女の言である。

「お前らさー、いつまで時間掛けてるつもり？あたしはサッサと片付けて葵に褒めてもらいたいんだけど。なぁ、まだか？あんまりフザケてるとあとで“個人指導”するぞ？」

二人の話しに割って入ったのはオリビエ・D・スタニック。葵の側近中の側近、三魔人の一角だった。彼女は第４チームの随伴、そして葵ファミリーの“最強の援軍”の一柱としてここに居た。

「「ッ！！失礼しましたッ！！！！」」

オリビエの言う“個人指導”に鳥肌を立てた二人は直立不動の姿勢で最敬礼の姿勢を取った。それだけ、そう条件反射的に動いてしまうほどイヤなのだ。彼女達、教官の言う“個人指導”が。…誰でも死にたくはないものだ。当然だろう。

「なんだ！大きな声を出すな！…ん？オリビエ様、何かありましたか？」

ここでチームリーダーのドラセナが二人の大声を聞きつけて駆けつけて来た。オリビエの鋭い眼光だけでなく。騒いだ理由がくだら

なければ彼女の説教と加算された訓練が待っているのだ。

もうここでラナンキュラスとディプラデニアは涙目である。前者は調子に乗ったことに後者は巻き込まれてしまったことに、と理由は違うのは本人以外誰も知らない。

「いや、何もないよ。ちょっとこいつらを急かしただけさ」

「「あは、あははは…」」

「まったく、このバカ共は…」

それでもオリビエは身内に甘かった。さり気無く鋭くでも呆れも含んだ眼光を治めて二人をドラセナの剣幕から庇う。それでもドラセナは大方の事情を察したらしい。彼女は二人を呆れた目で見ていた。

「それよりササッとこのクズ共を縛り上げてくれる？あたしがやってもいいんだけど――手が滑って殺っちゃいそうだし、ね」

オリビエは三人を前にニヤリと凄みのある笑みを浮べた。…凄惨な笑みとも言えるかもしれない。今直ぐ彼らが殺されないことが不思議なほどに殺意、悪意などの気が漂っている。

粘液のようなドロドロとした濃厚な悪意…。刺されたと錯覚するほどの明確な殺意…。気絶している倉持は別として彼女の笑う姿を見ている他の者の表情は青を通り越して蒼白になっている。不自然なほどガタガタと震えている者さえ居る。

だが、そんな彼らを見てもこの場には哀れむ者や同情する者は皆

無であった。居るのは冷ややかに、冷酷に、虫けらのように見下す目、眼、メ…。

「ハッ…外の見張りに3名、対象の監視に4名、他は対象を拘束後に再度私の下に集合せよ。では、行け！」

「「「「「ハッ！」」」」」

怯える彼らを一瞥したあとドラセナは鼻を一つ鳴らし仲間に今後の指示を出した。全員の拘束後には建物内にある玄関ホールにまとめておく予定だ。応援と護送用のミツバチも来ることから素早く移動できるようにするための処置だ。

ただし学園側の予期せぬ遭遇をした場合はこの対処は悪手だ。今回はタカミチを含めた四人が向かっていることがわかっているから敢えて速さを追求したに過ぎない。

「さて、あたしは外で警戒してるからなにかあったら呼んでよ」

「了解しました。お気を付けて」

サッと敬礼するドラセナに苦笑を一つするオリビエ。だが暖かい微笑。家族に向ける力強くも優しい笑みだ。先程までの凄みのある笑いとは大違いであった。

「ばぁか♪他の心配より自分達のこと気を付けなよ」

「…ハッ」

少し落ち込む。確かに心配されるほどオリビエは耄碌していない。

それどころか鍛錬を怠らない彼女の実力は今も少しずつ増しているほどだ。

「ふふっ、大丈夫だ。あたしが居る限りお前達は守ってやるよ。…家族だしな♪」

「「「「「――――っ！はいっ」」」」」

部屋から立ち去る時。背中越しに手を振ってくるオリビエのその背中は正しく信頼できる“姉御”だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　???

――麻帆良学園某所前大通り…。

Ｓｉｄｅ　オリビエ

遅い…遅い…遅い…遅い…。

まだか…まだか…まだか…まだか…。

戦いを…戦闘を…戦場を…っ！

「この気配は……来たか！」

数は四。内一つは覚えがある。あの時の小僧か？名前はタカミチ

…あーっと…T・高原、だったか。確かそんな名前。ちょっと見ない内に気の質は大きくなってる。少しは成長したってことか。

ふふっ、人間は成長が早くて驚くよ。何かの高みを目指して鍛錬する時、人は高々数年あれば急激に成長してしまうのだからね。ゆっくりと成長する悪魔とはえらい違いだ。

「ふふふっ。おい、中の連中と葵に“玩具が４つ入荷された”と連絡しておいてくれ。他は適当に周囲を警戒しておきな」

「「「ハッ！」」」

光学迷彩を起動させて静かに消える子達を視界から外して四つの玩具が近付いてくる方向を遠く望む。戦闘を目前にしたことで自分でもニヤニヤした笑みとギラギラした目をしていることを嫌でも自覚させられる。

「さぁ来なよ！今宵は死ぬにはイイ月夜じゃないか！アハハハハッ！」

早く…早く…早く…！

おいで…おいで…おいで…！

でも葵はあの倉持達以外の殺害は極力禁じているようだったからあまり無茶はできないよね。……それでもやりようはある、かな。ふふっ、そうだよ。色々とやりようはあるのよ。

……要は殺さなければ――“何をしても許される”ってことだからね！

アハッ♪アハハハハハハッ！！見ていてね？葵！お前だけの魔人は今日も勝利を捧げよう！小さな勝利！だけど愛おしいご主人様に絶対の勝利を捧げよう！アハハハハハッ！！

リビエラ…シルビア…。二人には悪いけど今回はあたしが当たりを引いたんだ！文句は言わせない！！この獲物はあたしのものだ！！だけど存分に、と言うには物足りない。そこが不満と言えば不満か…。

アハハハハッ！それでも暴れさせてもらうよ！殺さなくとも良い声で“鳴かせる”方法はいくらでもあるんだから、ね…。良い声で鳴いておくれよ？アハッ♪アハハハハッ！！

――来た！！

四つの人影が目の前に降り立つ！男が二人、女が二人！

「よく来たッ！招かれざる贄共よ！！」

「「「「――ッ！！」」」」

あたしを失望させるなよ！タカミチ坊や！！

「オリ、ビエ…さんっ！？そんな！！」

「なッ！こんなところに悪魔だと！？」

「あ、悪魔…？お、お姉様…」

「愛衣！気をシッカリと持ちなさい！」

さぁ…人間！私を満足させてみな！！気高き意志をあたしに示してみろッ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　オリビエ

第六十九話「指揮所と葵出動と目標確保と」（後書き）

はい！無事に倉持達１４人の身柄を確保しました！

それにしても作者は悩みがあります…。

どうしよう？オリビエ姐さん戦狂いみたいになっている…！！

この子はそんなキャラじゃなかったのに…！

久しぶりの本格登場だから本人（悪魔？）もハッスルしているようです…。

血生臭い表現には自信がないから要勉強ですかね？

それとも抑えて表現するべきですかね？

最近のその辺の傾向がわからないから困ります。

ではでは！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第七十話「魔人と月夜と宴と」（前書き）

今回はオリビエが大活躍だ！
あれ？明確な彼女の戦闘風景ってこれが初めて…か？
ま、まぁいいや。じゃ！続き！

第七十話「魔人と月夜と宴と」

――麻帆良学園某所前大通り…。

Ｓｉｄｅ　？？？

倉持が幽閉されていた建物の前。そこで対峙するのは男女が居る。葵ファミリー側は魔人オリビエが一。タカミチを始めとしたガンドルフィーニ、高音、愛衣の学園側が四。

この場に限り戦力は一対四と数の上では葵側が不利のようにも見える。

だが、ここに来てガンドルフィーニは疑問に感じている。タカミチの彼女に対する警戒が尋常ではないのだ。しきりに周辺の気配を探っているのが窺える。確かに下級とはいえ悪魔であることは警戒するに値する。

それでもタカミチ以外の彼らはオリビエからは然程大きな魔力を感じない。よくて下級悪魔程度の魔力量だ。警戒はしてもし過ぎるほどの脅威とは思えない。

「オリ、ビエ…さんっ!?そんな!!（彼女まで戦線に投入したのか!葵さんはそこまで憎悪に飲まれているのか!?）」

「なッ!こんなところに魔族だと!?（彼は悪魔まで召喚したのか!?タカミチ君は知っているようだが、あの慌てようは…？）」

「あ、悪魔…？お、お姉様…（あわわっ、魔族さんが学園内に侵入していますよぉ！？）」

「愛衣！気をシッカリと持ちなさい！（ク！愛衣を守らないと…！見たところ爵位も持たない下級悪魔。先生方と協力すれば……やれます！）」

……だが、うろたえているのは学園側だった。対するオリビエは大剣を肩に掛けてニヤニヤと笑っている。

若さゆえの勇気。必死に状況を打破するために考えるのは高音。彼女が守ろうとするのは現パートナーの愛衣だ。教師二人も目の前の障害をどう対処するかを必死に考える。

この時、四人の中でもタカミチの動揺は凄まじいものがある。冷や汗を流し今も辺りを警戒している。探しているのは別のもう“二つ”の気配だが、それがないことに安堵し、またオリビエのみを最大限、警戒をする。

彼も相手がタダの魔族であればこうまで怯えうろたえることはしない。そう、オリビエ（これ）が葵の専属悪魔でなければ誰がここまで過度な警戒をするものか、とタカミチは内心で毒づく。

「おぉ、他はハジメマシテだが…久しぶりじゃないか、タカミチ坊や！ええ？お前……なんと言うか老けたなぁ」

オリビエの言葉は軽い。言葉だけなら冗談を含ませた親しい者同士の会話に聞こえなくもない。だがオリビエのニヤニヤした視線は既に四人を捕らえている。

正直に言えば逃げてしまったほうがまだ安全だ。しかし彼女に捕捉されたが最後。逃げることそのものが至極困難と言わざるを得ないのだ。背中を見せた瞬間にこの世とサヨナラなど誰だってゴメンだ。

「ぅ…あまり言わないでくださいよ…。気にしているんですから…（なんとか時間を稼いで応援を…）」

「うぅん？気にしてたのか…。あー、まぁ人間が二十年近く経てばこんなもんじゃないかな。うん、いいことあるぞ？……たぶん」

ニヤニヤ顔を引っ込めてオリビエは泣きそうな視線でタカミチを見る。芸が細かいことにどこからともなく黒いハンカチを取り出し目元に当ててもいるのは彼女のちょっとしたお茶目だ。

それでも一見ふざけているよう（実際ふざけているが…）に見えるが身体の力の流れや力の抜き具合に隙はない。右手で持ち肩に掛ける大剣も一つの動作で直ぐにでも斬り捨てることを可能にしている。

「（隙はない…。けど、同情の目が心にイタイ…）んんっ！…それより貴女までここに居るということは、葵さんは――本気なんですね？」

「？？？あぁ、なるほどなるほど！アハハハッ！何を当たり前のことを！葵はあたしに“掃除の手伝いをお願い”と言ったんだ！ならば願いを叶えるのが臣下であり仲間であり家族であるあたしの務めだろ！」

多少おふざけをやめて、タカミチは鋭い視線で意味深に“本気か”と聞く。それにハッキリと“ゴミ掃除”だと答えるオリビエ。

「……そう、ですか（そこまで深い怒りを感じていたんですね、葵さん…）」

率直に、一刀両断に、これでもかとハッキリ言われて落ち込むタカミチだった。真の意味で葵の主戦力と言ってもいい彼女（オリビエ）が今ここに居るのだ。勝ち目は薄い。何よりも葵側の勝利条件もほぼ達成している。

そもそもの話しだが葵の戦略目標は“倉持一派の身柄確保”にある。そしてその目標は現在捕縛されあとは護送する段階にあるのだからほぼ達成していると考えていい。

葵達、攻める側は主導権を握り易いものだ。逆に学園側は難易度の高い防衛戦を余儀なくされている。現時点で建物や人員に被害が大きい。

学園防衛、倉持の護衛、一般人の安全確保などなど。やることが山とある。そしてただでさえ人手が不足しているところに倉持の件で更に人員が不足している。学園側は許容量と超える事態に対処しきれずに全てを守りきれない。

実際は裏で葵側もそれらに対処しているために被害になりそうなことは極力取り除いてあるのだが学園側は知らないことだ。

閑話休題…。

オリビエは他の三人も視界に捉えながらタカミチと話し続けた。だが今はニヤニヤも泣きマネもしていない。ただ静かにフッと表情が消えた。そして瞳の奥に宿るのは闘争の炎。チリチリと燃え揺らめいている。

「…なぁ、もういいだろ?聞きたいことは聞いたよな?それならさ――――逝くぞ?」

オリビエが大剣を横に一閃。巻き起こる旋風。瞬間に解き放たれるのは異質にして膨大な魔力。高音の考える下級悪魔などでは断じてありえない濃密な存在感。タカミチ達を圧するのは狂おしいほどの闘争の気配。

戦いを!戦いを!!戦いを…!!!オリビエの心の奥底から聞こえる小さな声。しかし響き渡る確かな声。それは魔族の潜在的戦闘本能が渇望する戦いへの欲求。

「「「「「ッ!?――――ッ…」」」」」

ゾゾゾッと身体に纏わり憑き這い登るのは恐ろしく不吉な…それは恐怖という名の生存本能。助けて…。助けて…。助けて…!四人はその恐怖を――――振り切る。即座に戦闘態勢を取る。

オリビエに対して最前列に立つ教師の二人。タカミチは両手をポケットに入れた無音拳の戦闘スタイル。ガンドルフィーニはハンドガンとナイフを用いた戦闘スタイル。

教師から一歩後退した生徒二人。高音は“影の盾”を服として纏い、更には操影術の最強奥義黒衣の夜想曲（ノクトゥルナ・ニグレーディニス）を展開した戦闘スタイル。愛衣はアーティファクトの箒を呼び出して高音の援護に備えた。

元よりここで対峙した時から最大限に警戒している。四人は考える。いつ？いつ？いつ？――始まるのか？重い空気に疲れたわけでもないのに息が荒れる。

それを見て…魔人が笑う、哂う、嗤う。口角はニィィと釣り上がる。楽しそうに…愉しそうに…！圧力に屈することのない四人を見てただただ愉しそうに嗤う。

「あはっ♪いい心掛けだ！それでは名乗ろう！あたしはオリビエ・D・スタニック！！ご主人様である葵を守護する大剣！三魔人が一柱なり！！諸君！今宵は存分に踊ろうぞ！！」

高らかに名乗りを挙げ、宴の開催を宣言した瞬間――魔人は掻き消えた。

「皆！散るんだ！！」
「「「――ッ！！」」」

タカミチの警告と同時に四方に散る学園勢四人。刹那、四人が元居た場所の地面が放射状に数十mに渡り割れた。中心に突き立つのは大剣。現れたのは守護の魔人。その顔は闘える愉悦に歪んでいる。

「ククッ！アーッハハハハハッ！どうした、人間！これからが始まりだぞ！！あはっ♪アハハハッ！！」

もちろん彼らもただ避けたわけではない。

タカミチは数百数千の無音拳を機関砲のように放った。ガンドルフィーニも風魔法を纏わせ強化した銃弾を全弾撃ち尽くした。高音は数十数百の影の槍を突き立てた。愛衣はアーティファクトで全域武装解除の魔法を放った。

だがオリビエは嗤う。笑いながら無音拳を叩き消し、強化された銃弾を叩き落し、影の槍を叩き折り、武装解除を魔力放出だけで抵抗（レジスト）した。魔人は少女のように愉しそうに笑う。

「クッ！！そこぉぉおおっ！！」

挑発とわかっていてもガンドルフィーニは駆け抜ける。戦いが長引いて危険度が増すくらいなら短期決戦で一気に片付けることが得策と判断したからだ。

ハンドガンを撃つ。銃弾を一発、二発、三発…ダンダンと銃撃音。マガジンの全弾を撃った。――全て外れた。否。全てが手の一振りで叩き落された。コロコロと地面を転がる銃弾が理解を妨げる。

ガンドルフィーニは内心で舌打ちを一つする。スイッチ。近接戦闘へ切り替える。握り締めたナイフを小さく鋭く振り、斬り付ける。キンッキンッと大剣とナイフの金属音が甲高く鳴り響き火花が散る。――全て防がれた。

「おぅ！？いいね、いいね！やっぱり戦いとはこうでなくっちゃね！アハハハハッ！！！」

「ガンドルフィーニ先生！彼女を相手に一人で挑むのは自殺行為もいいところです！！連携して――ッ！！？」

「アハハハッ！！そう素直にやらせると思うなよ、坊や達！！」

タカミチを先頭に援護しようとした三人はオリビエの大剣が巻き起こす風に切り裂かれ無数の細かい傷を作った。傷が小さくとも数が多ければ出血も多くなる。結果、ガンドルフィーニの援護はできずに終わった。

大上段から振り下ろされる大剣。それを咄嗟に反応しナイフで受ける。接触した瞬間、超重量の衝撃が彼を襲う。魔力で強化した身体とナイフで受け止めるも耐えられずに膝をつく。

「くぅ！ガンドルフィーニ先生、大丈夫ですか！？（チィ！やはりオリビエさんもそこまで優しくはないか…！）」

「ぐぁ！クッ！あ、ああ、まだ、いけるッ！！なんとしてもここで討ち果たさせてもらう！！はぁぁああッ！！」

「ガンドルフィーニ先生ッ！？――――クッ！」

正義感や責任感が強いガンドルフィーニは魔人にまたも挑む。最大限に身体と武装を魔力で強化した。タカミチは制止しようとするが援護するため即座に思考を切り替えた。無音拳、豪殺居合い拳が三打襲う。

「いい気迫だ！なかなかだぞ、人間！だが――――！！」

豪殺居合い拳は三度全て大剣に“切断”された。タカミチの援護は無効化された。急接近するガンドルフィーニの撃つ銃弾はオリビエが子バエを払うに左手で全て掴み、または叩き落した。

タカミチは一撃の重さよりも無音拳の居合い拳を無数に放つ面制圧に切り替えた。打つ、打つ、打つ…。ガンドルフィーニを援護する。

ガンドルフィーニの射撃は止まない。接近しながらハンドガンを連射する。オリビエの懐に入るまであと少しというところで銃弾が…切れた。迷うことなくハンドガンを投げ捨てナイフコンバットに切り替えた。

だが彼のそれは悪手だった。オリビエの間合いに入ることは本来ならば死を意味する。

「ッ！近付いてはダメだ！ガンドルフィーニ先生！！」
「なにっ！？――――！！！！」

タカミチがガンドルフィーニに鋭く警告する。が、それは僅かに遅かった。オリビエはガンドルフィーニの視界から消え、気付いた時には横に現れた。彼は殺られると思い目を限界まで見開く。

刹那に彼が見たのはオリビエが歯を見せ子供のように笑う姿だった。野球選手のバッターのように大剣を構え――――。

「あはっ♪一名様ぁご案なぁいッ！そぅ…らッ！！！」
「ガハッ！！ぐぼあっ！？」

――――大きくスイングした。某一本打法の名選手も吃驚の素晴らしいフォームだ。見事にガンドルフィーニの身体を捉えた一撃だった。ただし刃ではなく刀身の腹で。所謂、峰打ち。加減はしたので殺してはいないはず。

しかし、ここで彼女の計算外。峰打ちとは言っても実行したのは葵ファミリーの魔人オリビエだ。いくら自身に力のリミッターが掛かっているとしても基準がおかしい。最低ラインの基準が葵ファミリー（モノ）であるわけで通常の戦闘者ではない。

「アハハハハッ！……（やっべぇ、死んでないだろうな？死んでないよな？生きてろよ？そうじゃないとあたしが葵に怒られちゃうじゃないか！）」

結果、ガンドルフィーニの身体は面白いくらいに水平に飛び、その先にある建物の壁に突っ込んだ。……コンクリートを砕きながら。重ねて言うが死んではいない。派手に飛んではいるがギリギリ死んではいない。

「先生っ！！」「ガンドルフィーニ先生！！」

高音と愛衣が心配を多分に含んだ声を張り上げた。彼が突っ込んだ建物の穴は粉塵が凄くて中まで見えない。瓦礫の崩れる音が響く。タカミチは瓦礫を背後にオリビエを牽制している。

「ごほっごほっ！だ、大丈、夫だ…っ！ハァ…ハァ…ごバァっ！ガッ！」

数秒の沈黙から応える声があった。崩れた瓦礫の奥からガンドルフィーニが辛うじて生きていることを伝えてきた。だが同時に荒く咳き込む音とビチャビチャという水が床に落ちる音。そして鉄錆の匂い。これは――血…。

「……（ほっ…）あはっ♪やっぱりさぁ……脆いッ！脆いなぁ、人

間！アハハハハッ！！」

粉塵の向こうは見えないが大きく負傷させたことは間違いなさそうだ。致命傷ではないが戦えるわけでもない。オリビエは結果的に絶妙な力加減でガンドルフィーニを戦闘不能に追いやった。

刻一刻と濃くなる血の匂い。ガンドルフィーニの出血が酷いことがわかるというものだ。だがタカミチ達とて無傷ではない。大小合わせれば少なからず出血し消耗している。

「愛衣！援護を！【…時間を稼ぎますので高畑先生はガンドルフィーニ先生をお願いします！…】」

「はいっ！お姉様！メイプル・ネイプル・アラモード！目醒め現れよ！燃え出づる火蜥蜴（エクス・ソムノー・エクシス タット エクスーレンス・サラマンドラ）！――」

【…ッ――わかった。ただし無茶はしないように…】

高音と愛衣が前へ出る。タカミチは瞬動を使い瓦礫の中へ入った。彼としても本来ならば逆の役割を提案したかったがガンドルフィーニの怪我の状態が気になりそちらを優先することにした。高音と愛衣が相手ならば殺されはしないという打算もある。

愛衣が魔法を発動させるために詠唱を始める。高音は影を操り身に纏う黒衣を更に強化。背後に影で編み込まれた大きな上半身だけの人形を作り出す。

「アハハッ♪素直に詠唱させるとでも思うのかい！！」

「やらせませんわ！！」

当然、オリビエもただ黙ってはいない。高音を無視して障害になりそうな呪文を詠唱する愛衣に目掛けて駆け出す。大剣を上段に構

えて振り下ろしたがそれは高音の影の防御に止められた。

「む？（意外と硬い？タダのコケ脅しというわけじゃないのか…）」

「くぅぅ！まだです！影よ！」

高音はオリビエを止めようと影を彼女の足と腕に巻き付ける。序でに影の槍も数十本を撃ち出した。それでも影の拘束は彼女の動きが僅かに鈍るだけで効果は認められない。お蔭で影の槍も全て切断された。

「――火を以てして・敵を覆わん！紫炎の捕らえ手（イニミークム・インウォルウァッド・カプトゥス・フランメウスグネー）！！」

だが時間を稼ぐことはできた。愛衣の炎の拘束魔法が完成しオリビエをガッチリと締め上げることができたのだ。魔法の炎は対象を焼くことなくただ逃がさないようにギチギチと縛り上げる。

捕まえた愛衣も遣り遂げたことに満足感が沸き起こり「やりました、お姉様！」と嬉しそうにしている。高音はそれに微笑み返したが視線はオリビエから放さない。

…オリビエがそれらを見て一瞬だけ微笑ましそうな顔をしたのは気のせいだ。

「…ふんっ、炎の捕縛か！だけどあたしを縛るにはちょーっと火力が――」

ギシッ――と炎が軋んだ。オリビエは腕に、足に、身体に力を入れて捕縛の炎を歪ませる。一度歪み、二度歪む。三度目には炎の拘束がブチブチッと嫌な音を立てて一つ二つ、三つと炎の捕縛が切れていき拘束が消え去った。

「え…えええっ!?」

「アハハハハッ!!足りないッ!足りないねッ!!あたしを捕まえるならムスペルヘイムの炎くらいの火力を持ってきなッ!!アハハハッ!」

ムスペルヘイムの炎。神話級の炎を持って来いとはなんと大胆不敵なことか。世界創世でもする気なのだろうか…。

「そ、そんな…!私の魔法が、力だけでっ!?そんなのインチキですぅ!!」

ともかくオリビエが何をしたのかというとそれは捕縛術式の解析などを全て素っ飛ばして、ただの腕力だけで強引に炎の捕縛を引き千切ったのだ。それもなんの苦もなく遣って退けた。

常識的に考えればそんなことはまずありえない。なぜならそれは普通人が鉄の鎖を引き千切るようなものだからだ。こんなことができるのはそう多くない。できる人物で言うならジャック・ラカンなどの世界のバグがそれに該当する。

自分の魔法にそれなりの自負がある愛衣は涙目だ。これが抵抗（レジスト）や解呪（ディスペル）されたならまだ救いがあっただろうが結果はご覧のとおり力尽くで破られたのだ。彼女のプライドはズタズタだろう。

「…いいえ、よくできました、愛衣。――――行きますわよッ!!」

「アハハハ!――??ンッ!!」

静かにオリビエの隙を窺っていた高音が動き出した。背後の大きな影人形が彼女に連動して豪腕を振るい潰しにかかり、影の槍は四

方八方からオリビエを襲った。

オリビエを影人形の豪腕が叩き付ける。大剣で受け止めた。衝撃で地面が砕けるほどの圧力だった。ゴォッと衝撃波が起きて粉塵が舞う。それだけでなく追撃の数十の影の槍が全周囲から襲い掛かり更に粉塵を巻き起こした。

「ハァ…ハァ…ッ！（手応えはありました。倒せないまでも、これなら…）」

巻き起こる粉塵はまだ止まない。だが誰がどう見てもオリビエが潰され串刺しにされたように見える光景だったろう。事実として高音には影が“何か”を貫いた感触を感じていた。

サァァッと横風が粉塵を吹き流す。ある程度粉塵が流れた時そこに見えるのはクレーター状に抉れ、影の槍が刺さった傷跡のある地面。それと…デフォルメされたオリビエの人形。それだけだった。

デフォルメされたオリビエ人形は突き刺し抉ったような穴だらけで内部の綿がはみ出ている。彼女が貫いた何かの感触とはこれだった。これは…身代わりだ。そこに居るはずの姿がオリビエの姿がない。

それにしてもこの人形の表情が相手を小馬鹿にしたようなのでどことなくイラッとさせる。

このイラッとさせる人形はイタズラ魔法アイテム。その名も“ここはまかせろ！…私が囮になる！身代わり君！？”だ。これはカプセル状に超圧縮された等身大人形を瞬時に展開する名前の通り大変フザケタ魔法アイテムだ。

「そんな！居ない！？確かに手応えは合ったはきゃんっ！？」

見つからないことに動揺した高音を襲う。突然の背後からの一撃。しかし、それは影人形がシッカリとガードしたため大事には至らなかった。彼女が背後を振り返ると叩き付けた大剣をニギニギと何かを確認するように首を傾げている。

「ムゥ？？？――ウン、さっきから手応えがオカシイと思っていたけどその黒衣に背中のデカブツは……あはっ♪影を纏う近接戦闘魔法兵装か！」

「っ！！そうですわ！操影術の最強奥義、“黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）”です！近接攻撃は私には効きませんわよ！」

言い当てられた。自分の主魔法を看破されたことにまたも動揺する。だが逆に声を張り上げることで気を高めて身の竦む思いを払拭した。事実、彼女の近接魔法は優れた性能を発揮する。

「ハッハーッ！お嬢ちゃんは遠距離タイプだと思ったのにインファイターだったとはな！！アハハハッ！！――面白いッ！！」

影の槍や直接の影で絡み取ったりして拘束してくるものだから影魔法に重点を置いた後衛型魔法使いと思っていたオリビエは同じ前衛型である高音に興味を持った。オリビエも基本的に殴り合いのほうが好みだからだ。

一足飛びに高音の間合いに入ると大剣を上段から振り下ろし、右に降り、左に折り返し蹴りを入れた。高音もその程度の速さでは倒れない。攻撃は全て影人形が自動防御したからだ。

だが衝撃だけは防御しきれない。影で衝撃を和らげているが許容量を超えているために僅かずつ後退していた。要するに影人形に守られているために高音は鉄壁の防御方法を得ているのだ。

「ぐ!?ぐぅぅ!!私の操影術、黒衣の夜想曲は絶対自動防御を発揮します!絶対に敗れませんわよ!!」

そのために高音はそれを絶対であると過信する。自分に“黒衣の夜想曲”があればまだ耐えられる。いや、もしかすると勝てるかもしれない、と…。故に反撃の第一歩として逆に前へ踏み出していく。今度は私が攻める番だ、と言うように。

「アハハハハッ!確かに強固な防御だ!でもお前さぁ少し――――」

オリビエは全力を出していない。満たされぬ戦いへの渇望を慰めるために“遊んで慰めている”のだ。それを見て高音が前へ踏み込んできた。勝てると判断した。

そのことにオリビエは軽い苛立ちを覚えた。

「――――魔人(あたし)を嘗めてないかッ!!!」

「え?あ、ぐぅぅ!!ぁ、きゃぁあッ!!」

だからこそ高音以上に前へ踏み出した。

だからこそ高音以上の速さで駆け抜けた。

だからこそ高音以上に力を込めた一撃を繰り出した。

結果として当然だが全てにおいて上をいったオリビエが高音を叩き伏せた。今までにない重い一撃。その一撃だけだが決定的に違う。

今までのことがお遊びだったことを思い知らせるほどだ。全てにおいて力、速さ、鋭さを感じさせる斬撃だった。

それでもギリギリの加減をしていることで術者本人の意思はまだある。だからこそ黒衣として纏っている影の盾は解除されていない。脱げていない…。一応、所々が破けているがまだ防御力は維持されている。

「アハハハハッ！お嬢ちゃん、知ってるか？素早く防御されるならそれ以上の速さで以って斬り捨てればいいんだよ！」
「カハッ！ごほっごほっ！ハァ…ハァ…」

あまりの衝撃に高音は片膝、片腕を地に着けて激しく咽ている。ガンドルフィーニと違い吐血はしていないから内蔵に傷はなさそうだ。それでも身体の至る所から痛みの信号を発信しているのは不快を感じざるを得ない。

ふと高音の頭上から影が差す。痛みに震える身体で顔を上げるとそこには絶望の、破壊の、狂気の権化が居た。高音の顔に諦めの色が浮かぶがそれを振り切り再度強い意志を以って睨み付ける。

その意志を感じ取ったオリビエはニィィと三日月のように嗤った。赤い月を背後に彼女は楽しそうに嗤う、笑う、哂う。

楽しい――――けど、それももう終わりだ。もうすぐにでも愛おしいご主人様がここに来る。来る前に終わらせなければならない。邪魔する者をこのままにはしておけない。ならばどうするか？答えは――――。

「あはァ♪のんびりと寝てんじゃないよッ！！！」

――潰すのみだ。今までのことなどただの“お遊び”だ。本気ではあったが全力ではなかった。ただそれだけの違い。今のオリビエは移動に限り瞬間的に力を解放したのだ。

その姿を捉えるならば亜光速の速度を認知できるようにならなければ不可能である。魔人たる者がこれくらいできずに何が三魔人か。何がご主人様を守護する者か。それができずに何を守ると言うのか。

「なん…」

「お姉様ッ！後ろです！！」

高音の「なんですって？」という言葉は愛衣の声が遮ることで続かなかった。…いや、それ以前に続けることができなかった。言い切る前にオリビエが背後に現れて大剣を肩に引っ掛けてもう終わりだとでも言うように姿を晒しているのだから。

「……ん、惜しいな」

「え？――ぐっ！？」

「お姉様ぁーッ！！」

崩れ落ちる高音。形振り構わずに駆け寄る愛衣。倒れた本人、見ていた愛衣にも何が起きたのか正確にはわからなかっただろう。

事実はこうだ。亜光速度で背後に回った瞬間に力をセーブして抜刀の要領で振り抜いて高音の右腕を砕くつもりで肉厚の刀身の腹で斬り付けた。だがそれを影が辛うじて反応したことで未遂に終わった。

高音がこうして無事なのは元々背後に展開されていた影人形の防

御が厚かったのが起因している。それがなければ彼女の腕は複雑骨折、場合によっては壊死した腕を切断することになるところだった。

「……（右手は貰ったと思ったのに影の防御に逸らされたか…）。それでも衝撃だけは逃がせなかったようだけど、なぅおっ！？」

「――――ッッ！！！」

背後斜め上からの不意打ち。ドゴォンという大砲のような轟音。ギリギリで避けるオリビエ。砕ける地面。少しだけ内心で反省していたオリビエを不意打ちの一撃が襲った。最もオリビエの慌てる姿がどこかわざとらしい…。

最高のタイミングで最高の威力で撃ち放った。そのはずなのに結果は外れてしまった。オリビエの回避はまるで“狙ったようなギリギリのタイミングで避けていた”のだ。

「タカミチ…タカミチ坊や…。危ないじゃないか、ええ？あたしじゃなかったら潰れてたぞ」

「ハハ、ハハ…。貴女方がそれくらいで潰れるはずがないじゃないですか」

嗤いながらオリビエはタカミチを見る。口元は本当に楽しそうに笑っているように見える。笑っているが残念なことにその瞳の奥で暗い炎が宿っていた。それがなければ絶世の美女にしか見えなかっただろう。

……時間的に考えてもう直ぐ葵が来るはずだ。もう遊んでいる時間はない。

高音の意識はない。愛衣は彼女に気を取られて戦闘の役には立たない。ガンドルフィーニが沈んでいるはずの崩れた建物の奥の気配を探る。…誰も居ない。オリビエは内心で舌打ちする。

高音で遊び過ぎた。ガンドルフィーニの居場所を探るために索敵の範囲を瞬間的に広げる。索敵して僅か半秒。２００ｍほど先に行った路地付近にそれらしき一人の気配があった。

……気配は小さく弱々しい。重傷だと判断。これでどうやって移動した？

「ふむ？（なるほど。もう一人の坊やはタカミチ坊やが連れて行ったのか…）それはヒドイ物言いだ。あたしは傷ついたぞ？これは帰ったら葵に慰めてもらわないとなぁ♪」

「はいぃ！？変なこと言わないでくださいよ！？葵さんに勘違いされたら僕の命が危ないじゃないですかっ！！」

「アハハハッ！！どうしよっかなぁ？タカミチにセクハラされた…と言ったら葵はどうするだろうねぇ？（ニヤニヤ）」

「ちょっとーっ！？！？それは本気で洒落にならないので勘弁してくだ――――ッ！！」

空気が弛緩して緊張が一時的に解けたせいかタカミチが不用意にオリビエへ一歩踏み出した。しかし何かに気付きすぐさま大きく後退する。先程まで彼が居た付近の地面は地割れのようなクレーターができている。

「あはァ♪惜しい、惜しいなぁ…。あと一歩踏み込んでくれれば叩き

潰してやったのに、ねぇ？」

焦りと驚きから冷や汗を流し、息を荒くするタカミチを見てオリビエは優しく微笑む。場所が場所なら貴婦人のように見える。そんな微笑み方だ。最も今の殺伐としたこの場では不気味以外の何ものでもない笑い方でもある。

「ハァ…！ハァ…！い、いえ、“ねぇ？”と聞かれても潰されたくないので答えられないのですが…（本気だった！全力じゃなかったけど本気だった、今のは！）」

「そこはほら、男らしく、こう……“プチッ”っと、な？大丈夫だって！痛みなんて一瞬だから！あたし潰すの上手いんだからさ！！」

潰すのが得意と言うオリビエの無茶苦茶な思考にタカミチは顔面を蒼白にする。思わず股間がキュッとなるのは彼が男だからだろう…。男に対して潰すという台詞ほど嫌なものは早々ないはずだ。

「死んじゃいますよ！？僕死んじゃいますからね！？」

……男として…だろうか？

オリビエは少し下品かなと思ったが考えずにはいられなかった。それもそのはずタカミチの腰が僅かに引けているからだ。散々“潰す”や“得意”と言っていたから彼女には覚えがありすぎるのだ。

これまで外見が美人の彼女にちょっかいを掛けてきた男は例外なく地面に沈む結果に終わっている。許可なく彼女の肌に触った者は特に悲惨だ。何が悲惨かと言うと“男”として死に強制的に“漢（おとめ）女”になる。

想像してほしい。玉はブチッと音を立てて潰れ…。棒は根元からブチブチィィと引き千切られるのだ…。やんわりと表現するために冗談で漢女などと言っているが男には普通に死ぬ以上の恐怖であるのは間違いない。

そもそもの話しだがこれまでオリビエが無条件に肌を許したのはご主人様である葵のみだ。身持ちの硬い悪魔ってどうなのよ、とも思うが彼女が異例なのだ。…訂正する。オリビエ、リビエラ、シルビアの三柱が異例なのだ。

オリビエ達の口論は続く。……口論？いや時間がないからタカミチをおちょくって更に挑発して強制的に隙を作ろうとしているのだ。問答無用で叩き潰すのは簡単だが手加減が難しい。だからこそ一瞬でも良いから隙がほしい。

……殺害の許可がないからなぁ。葵も丸くなったよ。ホントにさ。

「ケッ！ミミッチイ男だな！こんな時、“僕は死にましぇぇんッ！”くらい言えないのか！？」

「命には代えられませ――」

「スキありィーッ！！」

赤面して否定するタカミチ。意識が逸れた。この瞬間、オリビエの目がギラリと輝いた。一気に加速してタカミチの背後へ現れた。両手で大剣を振り上げ、タカミチの頭に目掛けて一気に振り下ろした。

「ん、おべろんっ！？！？」

「高畑先生ーッ！？」

ゆっくりと倒れてドサッと地面に沈むタカミチ。そこへ事態をようやく理解した愛衣がタカミチを介抱しようと駆け寄る。オリビエは振り切った大剣を肩に掛けて「安心しろ。峰打ちだ」などと言い切った。

大剣で峰打ち…。鉄の塊でドタマをカチ割られたのに安心などできるものだろうか。普通なら死ぬ。しかしタカミチは本国ではＡＡの実力と評価を持つ者だ。一般人から見れば彼は普通ではないから問題ない。

……問題、ないはず…だよな？

「アハハハッ！！（はぁ、葵にお願いされているから元から殺す気はサラサラないよ。まったく…）まぁそれは別として、だ（ニヤリ）。さぁ、残るは小さな嬢ちゃんだけだぞ♪」

オリビエが生き残った（注：誰も死んでない）愛衣を見てギラリンと目を輝かせる。新しい玩具を見つけたようにワクワクとしたオリビエを前に愛衣は一歩ずつ後退する。逆にオリビエは一歩ずつ前進する。

「あぅあぅあぅぅ…」

「（そんなに怯えるなよ…イジメたくなるじゃないか♪）あはっ♪お仕置きだべぇ、なんてな？アハハハハハッ！！」

イヤイヤとでも言うように首をフルフルと振る愛衣の姿はチワワのような雰囲気がある。愛衣の目元はウルウルと潤んでもいる。彼

女の怯えている姿はなんともS心をそそられる。オリビエはペロリと舌なめずりを一つした。

「き、きゅぅぅぅ…」

「アハハハッ！って、はぁ？お嬢ちゃん、ここで気絶とかどれだけベタなんだよ…」

舌なめずりしたオリビエを見て愛衣は何を勘違いしたのかパタッと気絶した。恐らくだが生きたまま食べられるとでも考えたのだろう。早とちりもいいところの早業（気絶）だった。可愛らしいものだ。

「……ふふ、この子は争い事には向いてないかもしれないねぇ」

さぁもう少しで葵が来る。タカミチ坊や達を縛り上げてお出迎えの準備をしなければならない。く、くら？倉持？が愛するご主人様を前に無礼を働くかもしれないのだ。

「お前達！こいつらを縛り上げて持って行きな！丁重に扱うんだよ。いいね？」

「「「ハッ、了解しました！」」」

さて行くか、と一息吐いてオリビエは歩き出す。葵に会うために。少しでも長くご主人様の傍に居るために。揺れるは忠誠心か女心か。はたまた乙女心か…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第七十話「魔人と月夜と宴と」（後書き）

オリビエ無双！！！
スピード感のある戦闘描写ではないですが一つ一つ丁寧に作ったつもりです。
言葉を重ね過ぎて少々クドイかもしれませんね…。
戦闘描写は難しい。特にスピード感を表現するのが。
どうやったらスピード感のある表現ができますかね？
誰でも良いから未熟な私に教えてほしいものです！

ではでは！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第七十一話「葵と会合と裏の顔と」（前書き）

最後のほうですが軽いホラーを意識してみました。
ホラー映画そろそろ旬だと思うのですよｗｗ
暗くした部屋でシーツを被りホラー映画を…ギャーッ！？
…楽しくなりません？
では続き！

第七十一話「葵と会合と裏の顔と」

――麻帆良学園都市某建物…。

Ｓｉｄｅ　葵

俺と陽月姉妹、それに親衛隊のメイドさん四人…。もう親衛隊の制服はメイドさんにしちゃおうかな。俺も好きだし。あ、そのメンバーで小型揚陸艇（ミツバチ）に搭乗して急行する場所。そこは学園都市の一角にある建物だ。

そこには問題の倉持一派がまとめて拘束されているけど今は情報部三課の子達の手によって１４人の馬鹿共を縛り上げてロビーにまとめられているらしい。…テロリズムみたいだと思ったのは俺だけか？

それで現場に着いた今、実際に建物のロビーへ、と考えていたんだけど、な…。

意外にも建物の前に見知った子達が居た。いや、居た、というか寝転がっている、かね。四人仲良く川の字に寝かされていた。

その周囲にはオリビエと三人のウチの子達が囲んで警戒に当たっている。

……なんだ、これ？どういう状況なの？

うん、俺の目の錯覚じゃなければ知っている顔が四つほどあるんだ。男が二人に女の子が二人ほど…。本当に意外だ。オリビエのことだから彼らはその場に放って置いておくとばかりに思っていたのに。

「……なぁ、オリビエ？なんでお嬢ちゃん達がここに居るのかな？」

「え？だってあたしが勝ったんだよ？つまりこの子達は戦利品だろ？ほら、どこもおかしくないぞ？」

あ、あのなー…それはどうよ？だってこの子達はタカミチとガンドル君、高音の嬢ちゃんに小さな愛衣ちゃんじゃないか。おもっくそ学園の主要なメンバーじゃないか。原作にもちょくちょく絡んでくるしさ。

それを戦利品？つまりは捕虜か？二、三世紀前ならそれもありだけど今の時代はちょっと…。それに今のところ労働力に不満も不足もないし。うん、手は十分に足りています。

「戦利品って、せめて捕虜とか…。いやそうじゃなくて…ダメでしょ…」

あ、それにタカミチやガンドル君はどうするのかね。同じく捕虜？まぁ男の捕虜なんていらないけど…。いやいやいや、そもそもの話し捕虜を取るような状況じゃないでしょ。今は倉持共（バカ）が捕まればいいよ。

……何よりもこの子達を捕虜扱いとか面倒事しか運んでこないだろうしねー。

「えー？……ダメ、なのか？」
「いや、ダメでしょー…。大体なんで捕まえたのさ？」
「葵へのお土産……みたいな？」

軽っ！？軽いよ！観光地の名物じゃないんだからさ！一応、人間だよ！失礼、キチンとした人間ですね！ともかく捕虜なんていらないのよ…。

「“みたいな？”じゃねぇ…。元の場所に置いてきなさい。ウチじゃ飼えないから。ね？」
む！今の俺の言い様だと拾ってきた犬猫みたいじゃないか！いや、拾ってきたのは間違いないんだけどねー…。それも彼らの傷を見て判断するにフルボッコにして意識を刈り取ってから確保されたんだろうね…。

「そっかー…わかった。ちょっと調き…狂育すればそこそこ使える人間だと思ったんだけどなぁ」

不穏当な言葉が聞こえた気がするけど無視だ、無視。あー、あー、聞こえなーいっ。しかも言い直したようで部分的に言い直せていないようにも感じるけど……気にしたら負けだよね！

「あ、キチンと拘束してから置いてくるんだよ。いいね？」

この子達が気絶から目覚めて邪魔してきたとしても脅威足り得ないけど一応念のためにね。対魔・対気・霊体的・肉体的などの各種を複合拘束しておくのよ。まぁ拘束と言っても手錠モドキを後ろ手にガチャンと掛けて終わりだけどね。

「わかってるって！ふむ…なぁ？誰か手伝っておくれよ」

「「「ハッ！」」」

まぁ後処理は彼女達に任せて俺達は建物の中に入るとしますか。

正直に言うと俺は倉持達みたいな外道は好かん。まぁ下衆とは違い外道なりに信じた道を行っているみたいだけどね。それでも好かん。理解はできても納得だけはできない。そんな心境だ。

……あ、オリビエは終わったら一度こっちに来てね。

オリビエを呼んだ理由は特にはない。ただ資料整理のために情報部へ出向していたから離れていた間、俺も寂しかったのよ。てか資料整理やゴミ処理しているはずの彼女がなんでここに居るのかね？不思議だ。

……。

……。

建物内に入りロビーの中央にまとめられている集団。それとそれを囲み警戒している集団。前者が俺の目的つまり馬鹿共だ。後者はウチの可愛い子達。まぁ可愛いと言ってもフルフェイスの全身防護スーツを着込んでいるから容姿はわからないんだけどね。

倉持達の顔写真とプロフィールなどをいくつかの空間モニターを展開しちょこちょこっと表示する。それと彼らを見比べてリーダーの倉持（バカ）を探した。まぁ誰かに聞けば直ぐに引っ張り出してくれるんだろうけどさ。

…で、だ。然程時間も掛からずに探し出した。俺の目前に居る男。

後ろ手に拘束され膝をつき、崩れた正座をさせられている。この男が倉持。

なんだか顔写真や想像と違う。写真から想像していたのは爽やかな好青年というものだった。だけど今目の前に平伏した男は髪や服装も乱れ、顔は目の下に隈があり無精髭も生やしている。

「…あー、コレが倉持（クズ）か…」

他のメンバーをサッと流し見てみたけど倉持ほど酷くはない。プライドの高い彼はここに軟禁された屈辱に耐えられずに憔悴したか暴れたかしたのかもしれない。

……くくくっ、一日前後でここまで乱れるとは呆れるね。

うん、あれだ。哀れだ。勿論、言葉だけだけどね！本気で他人を哀れんでやるほど俺は優しくない。家族や親しい者を含めた身内以外に優しくしてやる必要も義理もない。

……あ、可愛い女の子は別だよ？野郎はお断りだけどな！

「？？？…ッ！貴様、九重・葵ッ！」

「ん？親しくもない男にフルネームで呼ばれる筋合いはな…」

「こんなことしてタダで済むと思っているのか！？ＭＭ本国が黙ってな、ガッッ！！？」

今、何があったかと言うとだ。血走った目をした倉持が俺に詰め寄ろうとしてハオに叩き伏せられた。具体的に言うと剣の峰で腹を一閃した。…いや二閃かな。彼の腹部をよく見たらエックスの字に痕が付いているし。

アレは痛い。斬られてないだけマシなんだけどアレは痛いよ。倉持もげぇぇげぇぇ嘔吐しているけど何も出てこない。食べてなかったのか？ご飯はどんな時でもキチンと食べないとダメだと、俺は思うがなぁ。

……あー、それとどうでもいいけど胃液特有のスッパイ匂いがして実に不快だ。

「我が君の御前である！誰が下衆に話すことを許したか！許しあるまでは沈黙せよ！」

「グハッ！ごほごほっ！きさ、貴様ぁッ…！！」

倉持が床に投げ出され苦痛に耐える。後ろ手に拘束されて惨めに蹲っている姿を見ても俺は何の感慨も沸かない。フルフェイスで正確にはわからないが周囲を固めている皆もどこか視線というか雰囲気が冷たい。

それに…迫力というか気迫というか、うん、叩き伏せたハオさん、マジぱねぇです。剣で一撃二撃入れたあとも、どんっどんっ、と音が響くほど蹴りつけています！

外面では冷厳とそれを見ている俺だけど内心ではガクガクブルブルと震えていますよ。いやー、ハオの一蹴り毎にバカの身体がビクッビクッと反応するんだ…。本当にコワイ。

昔からそうだけど敵には厳しく当たるよね。今回は捕獲が主目的だから俺の意を汲んで血生臭い殺害行為は控えてくれているけどさ。それがなかったら今頃この場はブラッドバス状態ですな！

……そんなところが大好きだけどね！いや本当に！惚れ直すよ！

やはりハオはこうでなければいけないよね。こういう時の彼女は本当にイキイキとしていて頼りになる。そのドSな表情が堪らないよ。間違いなく俺が生み出した子だと確信が持てる。

俺自身が小心者で臆病者だからハオのように頼りになる子達に守られていないと安心できないのよ。やはり、仲間が、家臣が、家族が居るっていいね！

「クソッ…クソッ…クソッ…！」
「ふんっ！！」
「ガハッ！！」
「…黙れと言ったのだ。学習せよ」

最後にハオが一蹴りしてバカを黙らせた。俺は、さてと…と内心で思い現状を観察してみた。

彼女にボコボコにされたバカが咳き込みながらも睨み付けてくる。そのバカをよく見る。目の奥に宿す感情を余すことなく読み取るように観察する。するとどうだろうか。コイツの目の奥にはまだ反抗の色が宿っていた。その色は暗く澱んでいる。

――にくい憎い憎いニクイ憎いにくいニクイ…！
――殺す殺すコロスころす殺すころすコロス…！

ええ、なぜか知らないが物凄く恨まれています。いや、どちらかと言うと怨まれています、って感じか。もう見るからに怨念が宿っていますという色をしている。いやいや大したものだ。この状況でそんな目がまだできるなんて。

……でもさー、それって逆恨みだからね？怨むのは筋違いでしょ。

あとさ、少しだけでいいから自分達の今の状況を理解したほうが利口だと思う。別に死にたいわけでもないんでしょ？なに貴様を殺せるなら死んでもいい、みたいな感じになっているのかね。

そういうのは俺達と関係ないところでやれよ。お前達の幻想、理想、妄想、妄執に俺達を巻き込むんじゃないよ。この馬鹿者共が。手間隙迷惑その他諸々掛けやがって。

……祭りの賑やかさは好きだけどバカが騒ぐのは嫌いなんだよ。

大体だな、正義を自称するくらいなら悪に駆逐される覚悟くらい持てと言いたい。いや俺は悪じゃないよ？臆病者の俺に悪を名乗るだけの度胸なんてあるわけがない。精々できて悪役ですな。悪党にはなれんよ。

なに？家族は、だと？ハンッ――言わせるなよ。やろうと思えば俺以上に悪に相応しい働きをしてくれるよ。女は度胸を地で言ってるし…。度胸……俺も欲しいなぁ。

すまない。考えが逸れた。

こほんっ、いつの間にかバカが懲りずにまた睨み付けてきた。だからお前はなぜに俺を睨むのかと問いたい。蹴ったのは俺じゃない。ハオだよ。

……いやまぁハオや家族を睨むようなことしたらその目玉を即刻抉るけどさ。

「ハ…ッ！ハ…ッ！…ぅぅ！ぐぅぅ！！後悔させてやる！必ず…！必――」
「フッ――！！」

喚きだすのは倉持。そこにサッと一つの黒い風が流れた。風の正体は……ユエだ。ハオに続いて今度は何をしたんだと俺はバカを観察した。

……あれ？一部の肉体パーツが無くないか？具体的に言うと倉持の左耳――。

「？？？――ッ！？！？あ、ぁぁ、ガァァアアアッ！！！耳がッ！俺の耳がああッ！グフッ！……ぅぅッ」

はいっ！気のせいではありませんでした！本気で耳が、バカの耳がポトリ…と床に落ちました！スプラッタは見慣れた光景だけどここ最近なかったからクルものがあるね！吐き気はないけど！

ユエはゆっくりと倉持の側へ歩み寄る。何をするのかと思ったら切り落としたバカの耳を彼女は虫けらを踏み潰すように、そしてそれを見せ付けるようにして踏み躙った。

……あ、足の裏から赤い水が…。

うぅむ…ユエのおみ足が汚れないか心配だ！ニチャァと踏み潰した時に音がした。実に不快な音だった！そのバカの血で汚れるなど家族が我慢できても俺が我慢ならない！少し時間を見つけて陽月姉妹の手入れをしようと心の中で決意した。

「吾らは“黙れ”と命じたが聞こえなかったようだ。故に斬った。そんな駄耳ならば必要あるまいて。…貴様らも静かにしておれよ。――良いな？」

あ、キッチリとこれ以上騒ぎを起こすなという警告の意味もあるんだ。そのお陰（？）か皆がすっげぇ勢いで頷いている…。なぜかウチの子も数人が頷いているけど…お前ら何したよ。

はぁ、この現場をマトモな精神を持っている人から見れば恐怖以外の何ものでもないよね。日本人は潔癖症のきらいがあるから特にそれが顕著に現れるし。

臆病者の俺はマトモだからさ。小心者の俺はマトモに過ぎるからさ。こういう場面は正直言ってあまり見たくない。来年でこの世界に来て“祝☆八百年♪”なのに血生臭い現場は好きになれないね。だから、なんと言うかな…。

……吐きそう、です。

ごめんなさい、ウソです！この程度で吐くようなら生き物はおろか人なんて殺せない。目の前で痛みに泣くバカは所詮、他人（どうでもいい人）だ。俺は臆病者の小心者だから身内以外がどうなろう

と知ったことではないのよ。

……俺もどこか人として壊れているのかもしれない。

まぁヒトはどこか壊れているところが一つ二つはあるから気にする必要はないけどね。今回の倉持一派も正義に酔いしれ壊れた人種だしね。宗教って実は怖いんだよ…。

血に酔うヒト。狂気に酔うヒト。負の感情に苛まれるヒト。稀なのは普通であることに異常なほど拘り自分は普通だと言い張るヒト。ザッと考えても壊れている部分は肉体的、精神的かはヒトそれぞれだ。

極めつけは完璧だと思われるヒトか。その完璧さが致命的な欠点とも言える。完璧なヒト…。俗に言う“天才”だな。この天才はなまじ自分一人で大抵のことができるから“自分がやらなければ”とか“自分にしかできない”などと考えてしまう。

自称天才はどうでもいいが本当の意味で言う天才共は俺から言わせればお前は何様だ、と小一時間ほど問い詰めたい。一人でできることなどタカが知れているのにさ。…いや、今それはいいか。

それよりも今は世間で言う“少し”過激な行為をしたユエさんをなんとかしますかね。

オリビエはこの状況を楽しそうにケラケラ笑っていて当てならないし、親衛隊から連れてきたのは例のメイドさんの格好をした四人だし。第三者から見たらこの血生臭い現場に可愛いメイドさんが居るのはどこか歪んだ光景に見えそうだなぁ。

事態を収拾するために行動しようとするけど小心者の俺にこの場の雰囲気はちょっと内心でドキドキビクビクしています。なんだよ、このよくわからない状況は…。

……あー、お昼寝したいなー…。

「ユエ…」

「ハッ、出過ぎた真似を致しました。申し訳ありませぬ…」

いや、それはいいんだけどね。次から気を付けようか。耳を斬られたバカはどうでもいいけど家族が汚れるのはイヤだしね。

「……」

「わ、我が君っ、ななにを…うぅぅ。……ぁ…」

「イ、イヤではございませぬがこの場は聊か恥ずかしきものが…」

ササッといつもの護衛位置に戻ってくれたユエの頭を何も言わずに撫でてみた。無論、ハオも撫でた。いつも守ってくれてありがとう、って感謝の気持ちを込めてな。

テレテレとハニカム陽月姉妹の姿に胸の奥からキュンキュンしてしまった。癒されるよー。ただ、少しだけ他の家族からの視線が変な気がする。こう、熱っぽいと言うか絡みつくような視線と言うのか…。

うん！だが、それは気のせいだ！よくわからないが気にしたら負けとかそんなつもりは無いったら無い！俺は家族の皆が大好きだーッ！

……失礼。ハニカム家族に癒されて少し興奮した。

まぁ血で汚れるのがイヤだと言っても俺達の歩いた道を振り返ると少なからず血が流れている。それは言い訳しない。正道邪道に拘らず必要となれば裏から数々の姦計を廻らせたこともあるしな。

それでも進んで汚れようなどとは思わなかった。降りかかる火の粉は払う。それだけのことだ。これは当然だよね。俺や家族を守るためには昔からそれだけは妥協していない。あー、まぁそれは今も、だけどね。

とりあえず身柄確保したという大きな問題は片付いたと考えていいか。少しここで時間を掛け過ぎた。外ではミツバチも待機しているし、第4チームの皆もいつの間にか護送準備を整えていた。

「――――さて、倉持（コレら）一派を護送しておいて。あとの事は任せるからさ」

何か知っていれば儲けものだ。情報部に任せておけばバカ共が何か知ってようが知らなかろうが裏付けを取るなり何なりと確実だ。まぁ所詮はバカ共だ。持っているかもしれない情報に期待はしていない。

……家族の憂さ晴らしくらいには役立ってもらうがね。

「ハッ！一斑と二班は五人ずつ、三班は四人だ！護送中はくれぐれも注意を怠るなよ！」

「「「「「サー！心得ております！サー！」」」」」

「よし！行け！」

おー…。先ほどからのハオやユエの少し過激な警告を見て聞いて

いるからコイツら大人しく指示に従っているよ。

倉持は未だに反抗的だから後頭部を強打されて気絶したところを引き摺られて行った。

……。

……。

さてさて、倉持一派を確保したことで目的を果たしたも同然だ。あとは無事に［工房］に拉致って情報部本部へ引き渡せば一安心か。

予定通りならば今頃は全てのデータ収集を終えた機械人形（マキナ・マータ）部隊がいい感じに壊滅一歩手前になっているはずだ。

……君達の犠牲は決して無駄にはしないよ！

作戦に並行して残骸の回収はアイリ達が別口の無人機を展開して事に当たっているので心配はしていないよ。超にはセンサー類は勿論、肉眼でも常時監視しているからあの子、個人は大丈夫だ。

……まぁ元から結界内は監視強化キャンペーン実施中だけどね！

機体の一部でも敵や第三者に回収されて技術漏洩するのは避けたいからさ。監視は厳重以上に厳重よ。念のため第三者に回収された時のことを考えて自壊システム…と言うかロマンの一つである自爆装置が付いている。

あ、自爆装置と言っても爆発するわけじゃない。これは発動基点からの一定範囲内にあるものを原子分解するようにプログラムされ

たナノマシンが散布されるだけだ。ナノマシン技術には自信があるからこそできることだね。

……となると、残るは総仕上げか。

一週間以内には諸々の用意を済ませたら一旦、月へ上がって移民船を造らないといけないしね。今の内からでもできる挨拶をしてくるか。熱がさめるまで暫く麻帆良を離れますので～、みたいな感じでご挨拶ですよ。

「ふむ……行くかな。ハオとユエは…」
「ハッ。承知しております。ご心配なく」
「吾らにお任せくださいますよう」
「…うん、任せる」

話しが早くて助かる。陽月姉妹とは少し別行動。直接俺が彼女に会いに行くのは面倒だ。現時点ではそれほどの価値も無ければ旨みもないしね。まずは決定的な瞬間に横っ面を殴りつけてコテンパンにしてから、話しはそれからだ。

「…じゃあオリビエは引き続き彼女達に同行してくれる？」
「はいよ。あたしに任せといて」
「よろしく。期待しているね」

アレらの護送はオリビエ達に任せておけば不安は無い。俺はもう一人のほうへ会いに行こうかな。高みの見物をするのもいい。興が乗れば酒も出そう。小さな宴会だ。

「それじゃ俺達も行こうか」
「「「畏まりました、葵様」」」

……うーむ、メイドさん…いいかもしれない。

俺の趣味が、げふんげふん…失礼、つい本音が漏れ、もとい！と、ともかく親衛隊の制服をメイド服にすることをマジメに検討しようかな…。スタンダードなメイド服にレースとか使って可愛くしたのを作るか。

……いや、制服を作るならリチラと相談して決めたほうがいいかもな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良学園都市内某所…。

Ｓｉｄｅ　？？？

麻帆良学園都市の一角にある暗く狭い裏路地。ここで一つの鬼ごっこが行なわれていた。

「ハッ…ハッ…ハッ…！」

追われるのは四十代の男。彼は麻帆良学園所属の魔法使いだ。彼の姿は長いこと走り回っていたせいで服も髪も乱れている。途中に何度か足を縺れさせて転んだために衣服には汚れが目立っていた。

男の容姿から察するに身奇麗にしていればややお腹回りが膨よかなところ以外は優しそうな中年男性に見えるはずだ。実際に彼は男子校で教師をしているが生徒達からそこそこに慕われている。

「ンッ…ハッ…ハッ…！」

そんな彼が今では形振り構わずに学園中を逃げ回っている。本来ならば魔法で空を飛んで逃げればいいのだが魔法の発動媒体である杖はここまで走る間にキラキラと光る霧に破壊されてしまっていたために飛ぶこともできない。

尤も今の麻帆良上空の制空権は葵側にあるために普通に飛ぶことも儘ならない状況にある。上空に上がった魔法使いは敵のミサイル、対空砲などの弾幕に晒されて優先的に撃墜された。

「ハッ…ハッ…なぜ…なぜ私が、こんな…クッ…！」

だからこそ男は必死に走る。ひたひたと追いかけてくる者の手から一刻でも早く、１ｍでも遠くへ逃れようと走る。なぜ自分が追われているのか、と疑問は湧くが無理矢理その気持ちを押さえつけて逃げることに集中した。

狭い裏路地にコツコツという足音が響いてくる。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…！！」

男は走りながら振り向く。立ち止まることなど端から考えてもいない。止まったが最後。男は自分の生命に関わると本能的に感じ取っていた。そもそも出会いからして異常だったのだ。

……。

今の学園は緊急事態の様相をなしている。これは麻帆良学園都市内に新しく居付いた九重・葵が学園に対して宣戦布告したことが原因であり、今この時は戦争の真只中にあった。男も緊急動員が掛かり学園防衛にかり出されていた。

「あらあらあら～♪見つけましたわ～♪」

「――――ッッ！！」

女を見た途端に男は自分の中の生存本能が最大限の警鐘を鳴らした。流れ出る冷や汗。激しい動悸。焦点の合わない瞳孔。カツカツに渇く喉。どれもこれも異常な反応。そうと理解はしても身体の反応は止まらなかった。

……これに関わってはダメだ。死ぬ…。死ぬ。死ぬっ。死ぬッ！

男は不思議な、けれど絶対の確信を持って後ろ向きに走り出した。その場に居た仲間達のことなども頭に残らないほど圧倒的な恐怖を感じ取った。どこでもいい。とにかくあの女の居ないところへ行きたい。

……どこか。どこかっ。どこかないかッ！

「あらあら～、まぁまぁ～♪いきなり走り出してどうかしたのかしら～♪」

「あ、あぁぁぁあああッ！？はぁはぁ…ハッ…ハッ…！！」

男には女と戦うなどという愚かな行為を選ぶ勇気も気概もない。故に全力で走りここから逃げるしか手はない…。

……。

「――ッ！！ハッ…ハッ…！！」

走り出してからどれくらい経ったのか。どんなに走っても追ってくる女が履いていたヒールの足音を引き離せない。コツコツと。コツコツという足音が今も直ぐ後ろから聞こえてくるよう――。

「うふふ、うふふふ～♪あらあらあら～、もう逃げないのかしら～」

「ぁ、ぁ…あぁぁぁぁぁぁッ！！！」

――ような、ではなかった…。全力で走っているはずの男の背後5m先に女が居た。

男を追うのは野外なのに露出の気があるのか紐のようなレザーで幾重にも巻かれたボンテージの衣装を纏っている女性。暗闇の中で彼女の白金色の瞳が妖しく光っていて楽しげに細められていた。

男は今まで以上に走った。早く、早く早く早く！速く、速く速く速く！ここには居たくない。あの女の居ないところへ行きたい。行かなければ死んでしまう。死んで――…。

「ハァ…ハァ…あ？」

サァァと流れる光る霧が男の進路に割り込み、遮る。男はこれに見覚えがある。それもつい先ほどのことだ。この不思議な霧に男の杖は灰燼に帰したのだから。破壊？崩壊？触れるのも憚られるほどの熱量を感じたから焼失？

そこまで考えて男の四肢が一瞬で炭化した。周囲の霧が男の四肢に纏わり付き炭となる。ボロボロと崩れ落ちる両腕と両足。走っていた男の身体はその勢いのまま豪快に前へ投げ出された。

「え？――」

あまりの事態に男は理解できずに唖然としまった。そんな馬鹿な。なぜ自分は地面に横たわっているのか。早く立ってあの化け物から逃げなくてはならない。だから立つには腕で身体を起こして足を使って走らなくてはならない。

……わからないわからないわからない。

何度も立とうと腕を動かそうとする。地面に手を付いて立ち上がろうとする。立って足を使い走らないといけないんだ。逃げなければいけないんだ。

そうだ、家族のところへ帰ろう。あそこなら安心だ。妻は最近盛り上がりに掛けるが昔から手料理は上手で夫としては自慢だ。この歳になってやっと授かった娘は今年で三つになったばかりなんだ。

……ああ、だから家族のところへ帰らないと…。

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…！！」

だが視覚から齎される情報からイヤでも現実を理解させられる。呼吸は短く荒れており過呼吸気味になる。そして遅れてやってくる今まで感じたことのない神経を抉り取られたような激痛が男の脳神経をグサグサと刺激する。

「――あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッッ！！！」

「あらあら～、まぁまぁ～♪綺麗に無くなりましたわね～♪」

ゆっくりと優雅に歩いて男に追いついた女はナニが楽しいのかニコニコして男の嘆きを眺めていた。啼けば啼くほど女は愉快にクスクスクスと鈴を転がしたように笑う。本当に楽しそうに笑った。

「ぁ、ぁぁ…ぁぁ…」

「うふふ～♪…あら～？あらあら～、仕方ありませんわね～」

脳で処理しきれない痛みに男の意識はとうとう闇に飲まれた。男からすればそれは痛みからの解放だった。女は男が気絶したのを確認すると一つ嘆息し、この程度で気絶するなんてまだまだね～、と女は苦笑しながら零した。

このままでは男が死んでしまうと判断した女は口の中で小さく言葉を紡ぐとパチンとフィンガースナップを一つ二つして魔法を発動した。

発動場所は四肢をなくした男の身体だ。複雑な魔法円が二つと男を囲むように回る円環魔法陣が男の全てを包み込む。骨が　筋肉が　血管が　神経が　血液が、皮膚が創られていく。

この魔法の効果は単純な体力回復ではなく欠損した肉体の再生だ。魔力を生命の活力に変換し命の源とすることで、無くなった四肢を新しく創り出す術式である。

「は～い、これで１６匹目を確保しましたわ～♪」

完全再生させた男にはもう興味を失った女は魔法術式を解除した。男を追い詰めて果ては殺しかけたのにワザワザ完全回復させる。第三者が観察していれば何が何やらわからないだろう。

「お見事です。リビエラ様」
「うふふ～♪ありがとう。それじゃ～これの護送はお願いね～」
「ハッ、お任せ下さい」

フッとどこに隠れていたのかわからないが姿を現したのは女が四人。全員が黒い防護スーツにフルフェイスの装備をしていた。女、リビエラは彼女達に後処理を依頼するとまた移動を始めた。

……。

……。

実行犯の倉持一派１４名。彼らを支援した者が８名。そしてそれらに関与した疑いのある者が１０名。計３２名が葵ファミリー内で公式非公式合わせた正確な捕獲対象者だ。

実行犯の倉持一派は葵が確保する手はずになっている。裏の他の者は情報部が担当するが作戦区域の人員の半分は情報部から出ているのであまり変わらない。もう半分は作戦部から供出されている。

こういう捕獲劇は部下に任せてご主人様である葵は報告を待てばいい。寧ろ葵ファミリーの大半はそれを支持している。なぜ自分達のご主人様が危険なことをしなければいきないのか、と一時は暴動が起きかけたほどだ。

ここでなぜ葵が動かなければならないのか。葵本人が動きたいと

いう願いがあったのは事実だ。だが情報部はそれとは別の理由で動いて欲しかった。それはなにか？簡単なことだ。

ただ“主目的を葵が確保した”という事実を作りたかったのだ。

自分達が敬愛してやまないご主人様が危険を顧みずに家族の仇の身柄を確保した。これ以上に味方の士気を向上させる要素があるだろうか。そしてこれは要素の一部だ。

味方の士気向上は先ほども述べたが、敵に謀略や計略などの情報戦を仕掛けるにしても隠蔽するにしても十分に事実を把握し都合がいいように改変する必要があるのだ。そのための調整をするには収集できる限りの“事実”が必要不可欠だった。

要は正当性の権利があるのはこちらであるということだ。なければ捏造してでっち上げる。それだけの情報はもう収集済みであった。無論、これらは矛盾の少ない自然なシナリオを用意することが絶対条件だ。

尤もこのような些事など葵の手を煩わせるまでもないとして対処は情報部部長ダチュラとその副部長ダリアが独自に動いているために葵本人は知らない。

……。

後日、判明したことだが倉持一派１４人の他に１８人の人間が麻帆良から姿を消した…。

捜索願などは一切無く。彼ら行方不明者は“無い者”として扱われた。家族が居る者はその悉くが記憶操作され、電子情報や紙媒体

からなる個人情報も処理または削除された。

これらが判明しても証明する手段が無いため全ては闇から闇へと葬られる結果となる。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第七十一話「葵と会合と裏の顔と」（後書き）

あれ？ホラー？なんか違う気がするｏｒｚ
むー、完全なスプラッタものを番外編で練習してみようかな。
最後のほうだけ夏っぽくホラーっぽくしてみたのに…。
そ　れ　ら　し　く　な　ら　な　い！
これはどういうことだろうか…。
ゾンビ映画とか見直してみようか…。
いえ、それよりも続きを書くべきですよね！
現在七十二話執筆中なりー…♪

ではでは！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。

第七十二話「忠告？と警告？と癒し？と」（前書き）

超・鈴音と陽月姉妹のお話し。
葵とエヴァ、茶々丸のお話し。
前者がメインで後者はオマケかな。
では続き！

第七十二話「忠告？と警告？と癒し？と」

――麻帆良学園都市…。

Ｓｉｄｅ　鈴音

麻帆良学園の上が騒がしいから気になってちょっとハッキングして覗いてみたネ。そしたら学園に戦争ふっかけたのが居たらしい。私以外にそんな無謀なことをしたのが誰なのか調べたら、これヨ…。

「これはなんの冗談ヨ…」

なぜアレが、“田中さん”が稼動しているのか…。いや、よく観察するとこちらの田中さんとは姿形が少し違う。全長は向こうのほうがやや大きく放熱用の髪も短い。それに顔の造形がヤのつく自営業の人のように厳つい。

「…アレはないネ。小さな子は間違いなく泣くヨ」

いやいやいやいや。そうじゃない、そうじゃないネ。この際、アレの造形などどうでもいいヨ。

問題なのはアレらが学園内で多数の魔法使いを相手に戦闘している、ということネ。

こちらはまだ稼動データが足りずにいるのにアレらは私の想像通りに戦闘行動をしている。今開発、調整中の田中さん以上の稼働率を示しているヨ。

それが互角いや今は7：3で学園側に押されている。やはり田中さんだけで押し切ることは難しいと見るべきか。私は計画に若干の修正をする必要ありと脳内でメモを取る。これはいい判断材料になったネ。

しかし…それでも緒戦はアレらが優勢だった。あのまま攻めれば押し勝てるほどの勢いだったように私には見えたヨ。

それも今は“自然と徐々に後退している”…。不自然ではない。でもそれが不自然に思える。でも後退の判断、時機は見事だった。不自然ではない。それでもやはり不自然に思えた。

「なぜ退いた？勝っていたのになぜ…」

考えられるのは…罠？…フッ、馬鹿な。勝っている状況で罠を仕掛ける必要がどこにあると言うのか。もし仕掛けるのならば緒戦の時に仕掛ければ良いではないか。

「本当にナニが狙いヨ…」

……。

……。

戦闘も終盤。あれだけ優勢を誇っていた田中さんモドキが壊滅しつつある。やはり中盤で後退したのが原因と私は思うヨ…。あの後退には意味があったネ？私には機を見逃した行動にしか見えなかたヨ。

アレらが後退した時、最初は何かの罠があると思たのにそれも無

し。ただ、そのまま後退して徐々に撃破されて戦力を徒に削られていくだけだたネ。

本当に何がしたかたのかわからないヨ。だけど今後の計画の参考にはなたから良しネ。

アレらの田中さんモドキが起こした騒動は、数で押せばある程度の混乱を引き起こすことができることが証明されたヨ。ただ、事態を楽観する気はサラサラないネ。今回のことで学園側も何かしら対応するのがイタイヨ。

それでもアレらの戦闘や活動は私達の開発している“田中さん”の開発方針の参考になたのは行幸かな。より完成度の高い田中さんを作り上げてみせるヨ。ふむふむ、そう考えてみるとこれを仕掛けた彼には感謝してもいいネ。

「…まぁ見るものは見たから帰るとするネ」

最初から油断はしていなかたヨ。それなのに光学迷彩で隠れていた屋上から立ち上がり、さぁ帰ろうとした時に二つの声が聞こえてきたネ…。

「――なに、そう急ぐこともあるまいて」
「――左様。暫しの間、吾らに付き合うが良い」

「ッ!?!?!?」

気配を感じなかった！いつ来た！どこから来た！どこに居た！――いや！そもそもコイツらはいつからここに居た！？

振り返り二人居るのを確認したヨ。暗い視界の中で目を引くのは白と黒の対照的なコントラスト。九重・葵の店で用心棒のようなことをしている白と黒の姉妹だたネ。

地下で私の仕出かしてしまったことがある。だから一人で行くのは何をされるかわからないと思いクラスメイト達と押し寄せて店内で宴会のように騒いだ。その時に彼らの人となりを観察した。

観察結果は……“わからない”。

違うネ。表面上はどこにでも居る喫茶店のマスターに見えた。私自身が接してみた感想は“いい人”だたヨ。物腰も柔らかくて優しい。少し目付きが鋭いのが怖いがそれも慣れれば愛嬌のある瞳に見える。ただ――……。

――…ただ、私の知る“過去”のデータに彼らは存在しない。

だから彼らの身辺調査を始めた。この調査の前に学園地下で想定外の勢力に遭遇したことで私の警戒心は頂点だたヨ。ただ、その時の私は私の知らない彼らが関わっているのでは、と考えてのことだたネ。

今考えるとデータよりも本能と言ってもいい、ただの“勘”に頼るなど科学者に有るまじきことヨ。だけど気になたネ。念入りに計画してきた。データに無い彼らが私の障害になるかもしれないと考えると不安だたヨ。

調査結果は……“わからない”。

彼らの身辺調査をしても出てくるのは極々有り触れた経歴だけだ

たネ。不振なところはどこにも無いヨ。でも、だからこそ不自然だた。地下で遭遇したのは彼らだ。あの時点で証拠はなかたが確信に近いものが私の中にあたネ。

定期的に飛ばす偵察機も悉くが潰されて意味をなさない。それなのに今、私の目の前には彼に近しい二人と向かい合っている。これは何の冗談だ、と笑い出したくなる。殺されるかも、と嘆きたくもなる。

……とにかく今を切り抜けるしかないヨ。

「…いつから居たネ。ハオさん、ユエさん」

「うむ？なに、つい先刻だ。…小娘はナニを怯えている？」

「そうぞ。我が君の店でバカ騒ぎをする時とは違うではないか。ん？」

何を馬鹿な。二対一で向かい合う今と２Ａの皆と騒ぐのは話しが別ヨ…。ハッキリ言って今の状況はマズイ。何しろ人目が無い。この場で何が起きてもおかしくないネ。

「あ、あの時と今の状況は違い過ぎヨ…」

……本当に何をしに来たネ！？来たばかりと言われても信じられないヨ！

本当に今の状況はあまり歓迎できないネ。したくもないけど。むむむ！まさか彼がこの二人をここで仕掛けてくるとは思いもしなかったヨ。どうしたらいいネ…。どうしたら正解を引き出せるヨ…！

「ふふふ。安心するが良い。この場で貴様を害することなどあり得ぬよ」
「うむ、吾らは我が君の意思を貴様に伝えに来た。言うなれば伝言役のようなものよ」

安心？伝言役？仮に安心するにしても随分と物騒な伝言役が来たものネ。店内で私が観察して感じたことを事実とするならば目の前に居る彼女達は彼の側近中の側近と言ってもおかしくないヨ。当然弱いはずも無いネ…。

「…葵さんから伝言？……それは何かな？」
「うむ。だがの？伝言とは言うたが実は我が君に具体的な下知はされなんだのよ」
「……は？それだと貴女達は何しにここへ来たヨ」

伝言役なのにその要の彼から伝言を預かっていないということか？そんなの伝言役でもなんでもないヨ。彼は、葵さんは一体何を考えて彼女達を私のところへ寄越したネ。

……――まさかっ…！

ふと、彼女達がここへ来た理由を考えた時、色々と嗅ぎ回る私を一思いにここで殺してしまう、などとイヤな想像をしてしまったから一瞬だが緊張から身体が硬直したヨ。

マズイ…。事を起こすまでは、と考えて今は碌に装備していないネ。この身一つで目の前の二人を相手取るには負けないとは思うが少々心許ないヨ。

……どうするか。殺される前にコロス？――否、ここは…。

「ふふ、誤解なきようにしておくがここへ吾らが来たことは我が君の意思ぞ」

「？？？ますますどういうことかわからないヨ」

逃げよう、と考えた途端に着崩した白い和服を着たハオさんが先を制するように言ってきたネ。同じく着崩した黒い和服を着たユエさんはクスクスと目を細めて笑てるヨ。嫌味にならない上品な姿に同じ女なのに不覚にも一瞬だけ見惚れてしまた…。

考えが見透かされた？…しまった。しくじったネ。これで逃げるチャンスを一つふいにしたヨ。この場は形振り構わず逃げなければいけなかたネ。次のチャンスがあるかどうかも怪しいのに…。

スッと視線が変わった気配がした。クスクスと笑っていたユエさんだ。彼女のにこやかな、だけど一つの挙動も見逃さない鋭さを持った視線に私は捕らわれた。

……あぁ、これで逃げられるチャンスは激減したネ。

「吾らは“任された”のだ。つまりここで“何が起きようと我が君の意思になんら反することは無い”ということよな。――さて聞こう。身に覚えが有りや？否や？」

「――ッ！……な」

う、動けない！？身体が動かないヨ！！呼吸もおかしい。息が乱

れ荒くなる。酸素が足りない。違う。このままでは過呼吸になる。二人が私に“何か”したのか？金縛りの術？魅了の魔眼？よくわからないが捕縛された？

……――違う！！！

これは違う。二人は何もしていない。ただ私達の周りの空気が違う。さっきまでは無かった空気。あまりにも重厚で視覚化してしまいそうなほどの濃密なプレッシャー！！これは二人の、否。ユエさんのプレッシャーだ…！！

「はぁ…はぁ…はぁ…くっ…」

マズイヨ…。葵さんの命とは別に彼女達がここへ来た理由。私自身、彼女達というか葵さんの周囲を調べていたという事実。不慮の事故とは言え地下での戦闘行為。店へ直接出向いての偵察。思い当たることは山ほどあるネ。

「ユエ、そのように脅さなくとも良かろう。ほれ見てみよ。怯えて警戒を露わにしておるではないか」

「ふふふ、良いではないか。なに、これくらい我が君もお許し下さることだろう」

「ふぅ…仕方ないヤツめ。まったく…（ボソッ）程ほどにせよと言うたのはユエであろうに、なぜ私がユエを抑える役になっておるのだ」

ハオさんのお陰で少しだけプレッシャーが減ったように感じたヨ。でも人が苦しい思いをしてるのに楽しいそうにお喋りするのはやめ

てほしい。なんと言うか自分が少し惨めになるから…。

「こほんっ…小娘よ。返答如何によっては貴様を今ここで斬り捨てることもあり得る。もう一度聞こう。…身に覚えが有りや？否や？」

もう一度も何も一度目は答えることもできなかたネ。とりあえず…どのことを言てるのかがわからないからここは惚けるヨ。下手に話して藪を突いてしまたら元も子もないネ。

「――…本当に物騒な物言いネ。私には貴女達を怒らせた覚えは…」

無い、と言い切ろうとした瞬間。ユエさんのプレッシャー以上の重圧が私の神経を圧迫したヨ。これの発生源を探した。わかてたことだけどハオさんが笑てたネ。ユエさんも同じだた。

本当に…見なければ良かたヨ。二人とも笑顔なのに怖い。目が怖い。冷たいとかではなく。その目に“私が映ってない”ことが怖い。まるで道端に転がる石を見るような。どうとも感じていない視線が途方も無く怖い。

「無い…と言うつもりか、小娘よ？…ふふ、ふふふ。肝の太い小娘だ」

「これは…驚きだ。身に覚えがないと？本心からそう申しておるのか？」

失敗した…。ユエさんだけでなくハオさんまで怒らせてしまたようネ。どうしたらいい。どうしたら…どうしたら生き延びれるヨ…！

「えと…す、すまなかたヨ！私のしたことだから覚えはあるネ！謝るヨ！」

「ほう…？己が非を認めると申すか。そうかそうか。良いぞ。それで良いのだ」
「うむ。最初誤魔化そうとしたのは気に入らぬが素直に己が非を認め謝罪する。その姿勢は賞賛に値する」

おっ♪思たより好感触ネ！これで逃げるチャンスが見えてきたヨ！こんなことなら素直に謝罪してしまえば良かたヨ。そうすれば余計に話しが拗れることもなかたのに…。私も焦ていたのかもしれないヨ。

「反省してるヨ。謝るからどうか許して…」

「「ただし…」」

「…ほしい。……はい？」

二人の笑顔が変わらない。変わらないことが怖い。ますます私という存在を無視した視線を浴びせられる。私を見ていないのに私を直接見られている。そんな不気味な感覚。何もかもを見透かされたような錯覚を感じる。

また…失敗したの、かな…？そんなっ、ここに来てまで勘弁してほしいネ！

「それは本心から謝罪していることが絶対条件であるぞ。小娘…否、超・鈴音よ」
「左様。お主、口では謝罪の言葉を紡ぎながらも心では別のことを考えていたな」

「――ッ。…あははははっ、そんなことないヨ。私は本心からすまなかたと思てるネ」

「「嘘だな」」

バレてる…。確かに言葉とは裏腹に私はこの場から如何にして逃げるかだけを考えていたしそのチャンスを狙ってもいたヨ。このまま一当てする、と言う考えもあたけどそれは無意味ネ。どんなに考えても特にならないヨ。

あぁ、今日は何もかもが上手くいかないネ。この時代に来てからウソばかり吐いてきたから彼女達との会話もウソを混ぜてしまうヨ。もうこれは癖になてるかもしれないネ。

「…何を根拠に言うヨ。いくらなんでも失礼じゃないかな。私はちゃんと…」

「貴様、話し合いの最中に一瞬だが視線が鋭くなっていたな」

「それは…」

「それだけではない。貴様の魔力に乱れが見られた。それは心の動揺の現われだ」

「っ…。驚いた。貴女達は私が思った以上に鋭いようだ」

もう隠し事はできそうにないネ。ここが観念のしどころかな。幸いにも彼女達はこの場で私を殺すことはしないと公言していたから命の保障はある。最も今を以ってしても彼の考えは読めない。

……本当に葵さんは何がしたいヨ。今日だけで寿命がどれくらい縮んだことか…。

「なに、このような状況で貴様のようなものが考えるのは大体わかるのよ」

「……参考までにそれは何か聞いてもいいかな？」

本当に。今後の参考に是非聞いておきたいネ。これでも腹芸はそこそこ得意になりはじめていたのにこの二人を相手にしたら私は子狸もいいところヨ。

それにアレはなにネ？魔力の乱れ？普通の人は他人の中にある魔力なんか感じられないヨ！精々できて表面的な魔力を感じられればいいとこネ！！貴女達は本当に人間か！？

「ふむ…。大きく分けて二通りだな。機を窺い逃走を図る者」

「そして隙を見つけた途端に襲い掛かる者だ」

「なるほど、よくある話しネ。それで私はどちらに見えたのかな？」

ふむ…。聞いてみれば大したことないネ。他にも行動は取るだろうがそんなのを挙げていたら際限ないヨ。だからこの二通りが彼女達の経験談込みの話しなのだろうことがわかるヨ。ただ、こうなるとどれだけ場数を踏んでいるのかが気になるところネ。

「無論、前者……と言いたいが頭の回る貴様はそのような小者ではあるまい。私も是非とも後者であってもらいたいものだ。手間も省けるゆえな」

「姉上よ、今は控える時ぞ。…さりとて貴様は無闇に愚かなことはするまい。なにやら裏でしておるのだからな。故に今回は前者だ」

本当にこの人達には見透かされているのかもしれないヨ…。私には大事なことがこの先に控えているネ。こんなところで無益なことはしたくないヨ。だからこそこの時代に居る私は今まで逃げの一手で来た。

「……はぁ、貴女達は私をよく理解しているヨ。確かに逃げる方法を考えていたネ」

「なに、逃げても追わぬよ。ふふふ、今は、な。…私としては残念なのだが」

「姉上…。さて今日、吾らが来たのは超・鈴音、貴様に警告するためよ」

「逃げてもいいのはありがたいが、警告？それはなにヨ？」

殺すことはない。逃げるならいつでもできた。――つまりこれまでのやり取りで私をからかっていた、ということか…？少しだけ、ほんの少しだけブチッと来た。来たけど面には出さない。残念だけど戦ても勝てる気がしないネ。

……ここは我慢の子ヨ！超・鈴音！！

それよりも気になるのが“警告”という部分ネ。物騒な言い方だけど、要は何かをやめてほしいなどの要求だ。彼らには迷惑も掛けたから私にできることなら可能な限り手を尽くさせてもらうヨ。

んふふふ♪これは彼らが初めて要求してくることヨ。これを取っ

掛かりにして交渉を進めることもできるかもしれないネ。あっ、ただし要求の条件が厳しい場合は向こうにもこちらの条件を飲んでもらわないと、ネ？

「簡単なことだ。我が君の周囲へ不愉快な羽虫をバラ撒くな。探るな。目障りだ」

「ふふ、無論のことだが断ってもかまわぬよ。寧ろ断ってくれたほうがありがたい」

ユエさんの言葉に繋げてハオさんも言う。どちらも余裕が感じられる声色だ。態度にもそれは表れているヨ。どこか私の返答に期待しているように感じられるネ。

あぁ、それにしても私が甘かたネ…。これは要求などという優しいものではなかたヨ。二人の言う警告とは文字通りの警告であり“絶対命令”だ。従うならよし。そして逆らうもよし。ただ後者の場合は問答無用で斬り捨てられるオマケ付き…。

……ハオさん、ユエさん。怖すぎるヨ。これでは葵さんも大変じゃないか？

「……わかたヨ。もう悪戯に探ることはやめるネ」

こうなるともう私には条件を飲む以外に手はないネ。ハオさんの手が背後に伸びて“何か”を掴んでいたように感じられたのが更に怖い。本当にこれはわかり易い。わざとこれ見よがしに私に見せているとわかたヨ…。

……もう断た瞬間に私の首が飛ぶとか勘弁してほしいネ…。まだ死にたくないヨ。

「……そうか。わかれば良い。――あぁ、警告は一度きりだ。努々忘れるでないぞ」
「はぁ……。……（チラッ）。……はぁ」

「忘れないヨ…。今日のことでイヤと言うほど理解したネ」

なんでユエさんは私の答えに不満そうなのかな？それとハオさんはなんでタメ息を吐いてチラ見してまたタメ息を吐くのかな？受け入れてはダメだたのか？これは断ればよかたのか？でもこれはこれで相手も満足してそうヨ？本当に何ネ…。

……相手の条件を飲んで残念がられたのは生まれて初めてヨ…。

……。

……。

因みに二人の申し出を断った場合のことをユエさんに聞いてみた時の答えが…。

「何を聞くかと思えばそのようなことか。なに“小石を掃う理由ができた”、ただそれだけのことよ。寿命が延びて良かったではないか。……（ボソッ）惜しいな」

ハオさんの答えを聞いて自分の判断に拍手喝采を送りたいと初めて思った日だたネ。よくやった！私！間違ってない！私は間違ってなかった！！

「そうだ！なんなら今からでも断ってくれても…」

「全力でやめさせてもらうヨ！貴女達を相手にしたら命がいくつあっても足りないネ！！」

「なんともまぁヒドイ言い草だ。それにつまらぬ娘であるな。気概を見せぬか、気概を」

「本当に。のう、姉上。娘よ、一度死んでみぬか？私も手間が省けて楽なのだ。どうか？」

「聞こえないヨ聞こえないヨ聞こえないヨ…！聞こえないネ…！！」

もう帰るネ…。今日はこの二人のせいでなんかもう色々と台無しヨ。最後の最後でグッと疲れが出てきた。明日は日曜だから一日中不貞寝するヨ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　鈴音

――麻帆良女子中学屋上…。

Ｓｉｄｅ　葵

ただいま麻帆良女子中学の上空に居ます！あのあと直ぐに倉持達の居た建物から護衛四人と飛んで移動してきました。ここにはエヴァちゃん達が今夜のお祭りを観察しているのよ。自宅で大人しくしているように言っても無駄だったよ！…はぁ。

それでなぜにここに俺が来たかを言うとだ。もうね？あの正義に歪んだ臭いが気持ち悪くて気持ち悪くて…。今の俺は猛烈に癒しを欲しているわけですよ。…いや、護衛役四人（メイドさん）に癒されたけどね！

……本格的に“親衛隊をメイドさんに！計画”を練る必要がありそうだ…。

「はいっ！というわけで文字通り飛んでやってきました！」

まぁそんなわけでスタッとエヴァちゃんの隣へ着地しました！茶々丸ちゃんがきょとんとしていてマジ可愛いです。護衛（メイドさん）の四人は少し離れた場所に着地して待機してくれた。そして肝心のエヴァちゃんはと言うと…。

「なにが“やってきました！”だっ！！貴様まだ戦闘中だろ！？今までどこに居たんだ！？そもそもなんでここにいる！？いや、そうじゃない！貴様はどこから湧いて出た！？」

盛大な突っ込みをありがとう！それと、どこからって…空からですが何か？…と言うか湧いて出たはないと思うよ。俺は黒いアブラムシ的な何かか？流石に俺は三十人も居ないよ。あははは♪

……万単位で影分身くらいならできるけど。

だが、まずは二人に挨拶しないといけないよね！突然現れたのに何も言わないなんて礼を失するもの！とりあえず“わー、わー！”と元気なエヴァちゃんはあとにして茶々丸ちゃんに、かな！

「あ、茶々丸ちゃん、こんばんは。今夜の君も可愛いね♪」

「えっ…あの…あ、ありがとうございます、葵様」

「茶々丸ちゃん…」
「葵、さま…」
サッと寄り添って見詰め合う茶々丸ちゃんと俺。うん、手なんかを絡めるのがポイントです。すっごい恥ずかしいけどね！
この時に護衛四人（メイドさん）からの圧力が増した気がするけどなぜ？エヴァちゃん達は一応安全だよ。無意味に攻撃してくることは万が一にもありえない、くらいまでなら俺は信用している。
それにしても茶々丸ちゃん…。君はなんてノリがいい子なんだ！こうやって敢えてエヴァちゃんを無視することでからかうのが俺のお気に入りの弄り方だということを茶々丸ちゃんはよくわかっている！
こうしている間もエヴァちゃんが「私を無視するな！」とか「なんでここに居る！？」とか喧しいね！うん、いつも元気、良い子なエヴァちゃんだ！お兄さんはそんなエヴァちゃんが大好きだ！
……弄り甲斐がある的な意味でだけど。あ、好きなのはホントだよ？
「おいっ！おいおいっ！？こらっ！待て！待つんだ、葵！！なに自然と私を無視する！？それだけでなく目の前で私の従者を口説くとは何事か！？」
「「え……？」」
これは口説いているのではない。あくまでエヴァちゃん弄りが目的です。彼女って近年稀に見ないほど弄り甲斐があるんだ。これは

もう弄らないと損だろ。俺も楽しいに癒されるからね。

「葵だけでなく茶々丸にまで“なに言ってんのコイツ？”みたいな目で見られているだと！？これでは私が空気を読めていないようではないか！！」

「「はぁ……。……（チラッ）。……はぁ」」

そろそろからかうのは終わりかな。ここらが引き際だろう。これ以上からかうとエヴァちゃん泣いちゃうし。この子は弄るのは好きなのに弄られるのはトンと弱いのよ…。これでいいのか真祖と小一時間話し合ったのはいい思い出だ。

「チラ見されて二度タメ息を吐かれた！？空気か？私は空気なのか！？一体私が何をしたというのだ！？」

「まぁこれ以上やるとエヴァちゃんが愚図りそうだからやめようか、茶々丸ちゃん」

「…はい、葵様。可愛らしいマスターのお姿も記録できましたので私としてもとても満足です」

何もなかったように見詰め合うこともやめて、握り合った手も放した。こういう切りの良さは大切だよね。このまま見詰め合っていたら変な気分になるし…。そんなことしたらエヴァちゃんにも茶々丸ちゃんにも申し訳が立たないよ。

しかしまぁ…。いやー、エヴァちゃんのお陰で十分に癒された。彼女の狼狽振りが今は何よりも楽しいよ。可愛いから思わず“ぎゅっ♪”としたくなったほどだ。

「愚図るとか言うなっ！？その言い方だとまるで私が幼子のようではないか！！せめてそこは泣くと言えっ！！……私が泣くなどありえないがなっ！！」

言葉に一々敏感だね…。それと幼子がどうのという話しだけど―お前はどこからどう見ても幼女そのものだ！それも飛び切りの美幼女！だけど態度が悪いのが玉に瑕だ！そんなところも好きだけど！

……最後にもう一弄りするか。

「……ふっ」

「なっ！？貴様っ、今っ、鼻でっ、笑ったなっ！？このっ！ええいっ！避けるなっ！！」

いきなり殴りかかってくるのはいけないとお兄さんは思います。まぁ封印があるから幼女にしては良く動くなくらいでしかないけど。…いや、確か彼女は合気道をかじっていたな…。掴まれたら危ういかもしれない。

「そんなっ、ことをっ、言われてもっ、ほっ、リーチの差はっ、よっとっ、如何ともっ、し難いよねっ♪――むっ！？これは…」

苛立ったエヴァちゃんが空中飛び蹴りをしてきたからパシッと彼女の左足を掴んでプラーんとぶら下げてみたよ！上下逆さまになるから薄手のゴスロリ服のエヴァちゃんは当然スカートが捲くれるね。ペラッと…。

……でも幼女が黒のアダルティな下着なのはお兄さんどうかと思

うよ？

「にゃっ！？み、みみ見るなーーっ！！！こらっ！足から手を放せっ！！このままではっ！！全部見えてっ！にゃぁぁあああっ！！」

「ああ…マスター、素敵です。可愛らしいです。これは要記録事項ですね」

「貴様は貴様で何をしておるかーーッ！！！」

茶々丸ちゃんも逞しく成長してくれて俺も嬉しいよ！こんなふざけた状況なのに主人の愛らしさを余すことなく記録しようとはね！あとで是非ともコピーさせてください。お願いします。

「エヴァちゃん、そんな…。いつの間に撮影されながらなんて高度なプレイを…。お兄さん、エヴァちゃんにはまだ早いと思うよ？今から変な性癖がついても困るしさ」

「貴様はなんの心配をしているかっ！？だいたい貴様が手を放せばいいことだろ！？と言うか放せっ！！頭に血がのぼる！！」

む！確かに俺が手を放せばいいだろう。そうすれば逆さまになったエヴァちゃんも頭に血がのぼることもなくなるだろう。だけど…

「えー…。危ないよ？」

「“えー…”じゃない！！なんで不満そうなんだ！？私が放せと言っているんだから放せっ！！そもそも貴様が放さないほうが危ないわ！！」

本当にこのまま放していいのだろうか？この屋上の地面はコンクリなんだけど…。でも今のまま掴んでいても仕方ないし…エヴァちゃんは放せと言うし…うん、ここで俺が手を放して怪我しても責任は彼女にあるよね。

「そうか…。じゃ放すよ？」

「いいから！サッサと放せ！！このままでは本当に見えてしまう！？」

見えてもエヴァちゃんの姿が幼女だから俺の食指が少しも反応しないよ…。いや、可愛いと思うよ。だけど情欲よりも保護欲のほうがビンビン刺激される。なんと言うか…娘を構いたがる父親の心境かね。

とりあえず、だ。エヴァちゃんから言質は取ったから手を放すとしよう。あ、でも本当に怪我したら大変だから地面に近づけてから…。

「それじゃ……はい」

「――ふにゃんっ！？！？」

どべちゃ、とあまり可愛くない落下音がした。今は豪快に大の字で倒れている。姿が美幼女だからとてもシュールだ…。

「…マスター、お怪我はございませんか？」

茶々丸ちゃんがエヴァちゃんの手を取って優しく立たせた。エヴァちゃんも「う、うむ…」と痛む頭を押さえて素直に彼女の手を取

った。茶々丸ちゃんがパパッと手で倒れた時についた埃を払っている。

なぜだろう。二人を見ていて親子か？と幻視してしまった。無論、母親は茶々丸ちゃんです。今の彼女は一歳と少しなのにね。それでも今の光景を見ていると保育士とか似合いそうだ。

逆にエヴァちゃんを母親と見るにはもっと大きくならないとね。これだけ可愛いんだから将来は美人さんになるよ。…不本意ながら真祖になってしまったから成長することはないけどさ。

「アイタタタ…。クッ！葵！何をするか！」

「何するも何も手を放しただけだが…。だから言っただろう？危ない、って」

ズイッと迫ってきたエヴァちゃんに思わず一歩後退してしまった。迫力と言うには幼い容姿がその威に欠けている。全体的に小さいものね。うむ、やはり小さいは可愛いだな。癒される。

茶々丸ちゃんは微笑ましく自分の主人を撮影げふんげふん見守っている。…俺に迫るエヴァちゃんを見ても危険性は低いと判断してくれた護衛達（メイドさん）も動かずに居てくれた。

……でもね、皆。なんだか視線がコワイですよ？ギラリと光る的な意味で。

「それはそうだが…。もっと、こう…やり方があるだろ！？」

「手を放すやり方って…。どうすればよかったのかね」

この子は随分と難しいことを言ってくれる。手を放すやり方って何ですか…。パッと放して終わりだろうに。それ以外の方法があるなら是非とも見てみたい。

「あるだろう!?優しく横抱きにするとか!貴様の胸の中に抱くとか!」

それはあれか?お姫様抱っこしろ、と?優しく抱き寄せろ、と?ふぅむ…意外、と言っては失礼だけどエヴァちゃんは姿相応の乙女心を持ち合わせていたようだ。

……やはり精神は肉体に引っ張られるものなのだろうか?興味深い。

「あー……してほしかったのか?」

「――ッ!!そ、そそそそんなわけがあるか!!あくまでもこれは例えであってだな…!つまり…!」

「んふふ♪随分と可愛らし――……」

そこまで慌てられると俺のからかいたいという精神をものすごく刺激される。――だけどもう時間はないみたいだ。秘匿念把で連絡が入った。この祭りも閉幕のようだ。

「――…すまんが時間だ。次があったらそれらしいことをすると約束しよう」

「っ!?本当だなっ!?二言はないなっ!?破ったら酷いからなっ

！？」

「…もう♪エヴァちゃんはかーいーなー♪そんなに楽しみなのかぁ♪」

「～～っ！！ふ、ふんっ、もう知らんっ！！！」

プイッと顔を逸らすエヴァちゃんだがその頬は少し赤かった。月夜でもわかるくらいだから相当恥ずかしかったのかもしれないね。でもさ、なにこの可愛い生き物。すんごくお持ち帰りして愛でたいね！

……やはりこの世は可愛いが真理のようだ。これがお姉さんだったら……クッ。

「くくくっ。ん？……この手は何かな？茶々丸ちゃん…」

服を軽く引っ張られた。背後からだった。うん、振り返ると茶々丸ちゃんがちょこんと俺の服を摘んでいた。

「……（ジィィィィィ…）」

なにこの小さいけど確かな自己主張は？この子は俺に何を望んでいるのだろうか？それもわざわざエヴァちゃんから影になるようにして、だ。控えめなのか積極的なのか判断に困るね！

……可愛いからいいけどさ。

む？エヴァちゃんと俺を交互に見ている、だと？つまりこれはアレですね。エヴァちゃんと約束した同じものを求めているのですね

？あー、時間もないし苦にもならないから約束してもいいかな。

「おーけー。わかった。エヴァちゃんと同じ約束をさせてもらおう。…それでどうだろう？」

「…はい」

うん…。まだまだ表情に乏しいけど綺麗だと、そう感じた。むぅ、これで生後一年と少しか。これからの成長が楽しみだ。どのような電脳シナプスを構築するか、とかも興味あるね。プライバシーの侵害になるから見ないけど。

まっ！ウチのＣＯＳ－ＭＯＳも負けてないけどね！あの子ったら可愛いんだ。プログラムをダウンロードすればいいのに一から料理の練習をするという健気なところもあるしさ。そんな可愛い彼女をあの倉持（バカ）は本当に…。

……あっ。

こうしてる場合じゃない！急がないと！でも護衛達（メイドさん）は気にしていない。だけど、これは俺が危険なところへ行かないことにホッとしているだけだ。行くとなると途端に不満そうにするんだ…。

これで仕上げだ。がんばろっと…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第七十二話「忠告？と警告？と癒し？と」（後書き）

次回で麻帆良戦争を終わらせられたらしいな…。
ええ、例によって予定は未定です。
最大で二、三話くらい？続くかもですね。
後日談で二話くらいとして五、六話で葵を宇宙へ打ち上げたいですね。

ではでは！
皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。
あ、誤字報告なども歓迎。

第七十三話「逆転？と勝利と敗北と」（前書き）

戦いも終盤です。無駄に長かったー…。
そして戦いの終わりは割りとアッケナイものですよね。
では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十三話「逆転？と勝利と敗北と」

――機動戦艦アングレカム…。

Ｓｉｄｅ　アイリ

空間に展開されたメインモニターには地上で戦闘を続けている機械人形（キナ・マータ）部隊が壊滅状態に陥っている現状が映し出されていた。

学園所属の有象無象の魔法使いなどは容易く屠れるだけの戦力は用意した。そのはずだがスペックデータ、戦力データを超えて彼らは抗ってくる。特に学園長の側近的位置に居る者達の活躍は凄まじい。

……やはり、人間という種は侮れないものがある。

万が一にも自分達が負けることなどありはしないが条件次第では苦しい戦況になったかもしれない。例えば今の彼らと同数の機械人形では善戦はしても勝てるとは断言できないほどの数値を彼らは叩き出している。

……ふふふ。これだから人間は面白い。

個人個人でどのような思想を持っているかは別とするが強い想いはより良い結果を引き寄せる。そのように努力し足掻く姿はとても泥臭く無様。だが元悪魔の自分にはその姿がとても愛おしくも思える。

ただし、それも精魔奇兵へと転換、昇華した今では自分が敬愛してやまない閣下に害をなさんとする者以外という条件がある。誰だって好きな人に嫌がらせされたらイヤだろう？これも全ては閣下のためだ。それに…。

……閣下に刃を向ける？ふんっ、死ねばいいのに…。寧ろ私がころ――。

む！しまった。思考が逸れてしまった。いけないいけない。これも閣下への愛ゴホンッゴホンッ。……しかし今後は気をつけないとな、うん。こほんっ、…あー、予定よりも大分早いがここが潮時か。

「…各員は状況報告！」

「学園都市の包囲部隊から報告。都市外縁部に一般人が迷い込むことが十一件。警察機構の問い合わせが二件。犬や猫などの小動物の保護が二十七件。幸いにも結界内に侵入者はなし。その他にも問題が八十七件ありましたが全て解決済みです」

むむむ。警察だと？学園都市内の通信網は全てアンの監視下に置かれていたはず、それなのに警察？まさか都市外から察知された？いや結界は認識阻害で察知は困難だ。ならば他の要因か…。

先天的に感覚の鋭い人間でも居たのか？閣下が言っていたあの長谷川・千雨のように意識誘導系の術が効き難いような人間が他にも居る？…バカな。そんな天文学的数字以下の可能性は論外だ。寧ろこちらのミスで怪しまれたというほうが事実だろう。

どちらにしても後日調査を…いや、数日中には宇宙（ソラ）へ旅立つのだからそんな時間はない。閣下のご希望では木星へ行ってみたいという話しだから是非とも行こう。閣下の願いは全てにおいて優先されるのだから。

……あぁ、うむ、すまない。報告の続きを。

「アイマム。地上拠点クレイドルと地下防衛の二班から報告。侵入されど拠点地下三階に設置されている転移門（ゲート）の秘匿、防衛に成功。任務は依然として継続中」

「続いて世界樹地下防衛ですが現任務の変更を葵様より指示がありました。任務の変更内容は“魔力蒐集装置の撤去、回収。回収後は隠蔽工作のあとに撤収”するようにとのことです」

「そうか、閣下が…」

転移門の隠蔽などはいいが世界樹地下に設置してある装置を今回収する？それも閣下が直接ご指示なされて？なぜ今と疑問はあるが閣下のお望みは叶えなくてはならない。まぁ人手は足りているようだから大丈夫だろう。

「？？？…追加報告です。地下防衛に同行していたシルビア様は部隊の撤収を見届けてから葵様と合流するとのことです。合流理由は……えーと……その…退屈、とのことです」

「……こほんっ、シルビア様は好きにさせてくれ。では続きを」

仮に自分達がダメと言っても止められるものか。押して通られる

のが目に浮かぶ…。閣下の御名をお出しすればお止まり頂けるだろうが。…安易に閣下の御名を出すのは不敬に過ぎるというものだろう。

「あ…うん。学園都市上空を警戒、支配している私から報告するね。現在の学園都市上空は無人機動兵器が常時５００機展開することで制空権を確保中。これは今も続けているから敵の頭を押さえた状況だね」

アン…。少しカブトムシが多く出撃しているように感じたのは気のせいではなかったのだね。今回の戦闘は極力地上戦の各種データを収集するのが目的の一つではなかったのか。空は制空権の確保だけだったろう。

なに？私も活躍したかった？……アンよ。作戦は作戦ではないか。使用する戦力配分のこともあるだろ。なに？生産した、だと…？お前はまた勝手な…。閣下に注意してもらおうにもアンには甘いからな。どうしたものか…。

……？？？どうした、ＣＯＳ‐ＭＯＳ？あぁ、すまない。では報告を。

「…了解。機械人形（マキナ・マータ）部隊の状況を報告。当初の予定通りに敵の誘導に成功。上策、下策、愚策、あらゆる戦況データの収集に成功。しかし、その結果として部隊損害率は８７％に到達。これは事実上の全滅と判断します」

用いられる策が常に良策とは限らないからな。下策も愚策なども貴重なデータになる。多少こちらの被害が大きいのは予想を超えていたが我が軍の総戦力から考えてみれば蚊の一刺しのようなもの。

気にするまでもない。

「優先報告。機影の接近を確認。…確認が取れました。目標を確保した友軍です。現在は確保した目標を小型揚陸艇(ミツバチ)三機にて分散拘束しこちらへ護送中。予想到着時間は今より十五分後です」

「そうか。担当チームにはよくやったと言ってやれ。それで閣下の現在位置はどこか？ともに帰還されているのか？」

「ハッ、葵様は現在……ええ、真に不本意ながら、あのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとご歓談中のご様子です。追加報告ですがハオ様、ユエ様は別行動にて超・鈴音と接触中」

「なん、だと…？」

あの女狐か…！なぜ、葵くんはあのような子と…。アレかな？可愛いからか？葵くん可愛いものが好きですものね。でも、それでも私達だけでは足りない？いえ葵くんに限ってそういうのはないわね…。そうなると何か弱みでも…――。

「？？？……司令代理。どうかなさいましたか？」

「――はっ！？…ん〝ん〝っ。……あー、もう一つの目標はどうか？」

思わず取り乱してしまった。自分のバカ者が。あの閣下が弱みなど握られるわけがないだろうが。そもそも問題があれば自分達が真っ先に“処理”しているのだからな。

「？？？ハッ…現在はリビエラ様が十六、いえ今、十七人目を確保

したところです。残り一人の所在は……今でました。現在地は十七人目が確保されたエリアから然程離れていないので時間の問題でしょう」

「よし、そちらも順調か。こんなものは閣下の目にも耳にも入れる価値はない。我々だけで身柄を確保、然るべき手順のあとに抹消するとしよう。情報部へ引き渡す時はくれぐれもよろしくと言い含めておけよ」

「アイマム。ふふ、“丁重に”扱うように徹底させます」

よしよし、これなら早々に壊すようなことにはならないだろう。簡単に死なれては我々の気が治まらないからな。ただでは殺さんよ。フフ、フフフ…！組織（ファミリー）の者に手を出した。相応の償いはさせる。我々の流儀で、だ。

情報部の取調べがどのようなものかは知らない……わけではない。これでも自分は精魔奇兵の全権を閣下より任されている身だ。必要な情報は親衛隊へ無条件で流れてくる。ヤツらは生きていても“ダルマ”になっている可能性が一番高そうだな。

……拷問？いや、これは尋問ゲフンゲフン取調べだ。だから…フフフ、大丈夫だ。

まぁ情報部がヤツらから搾り出しても碌な情報は出てこないだろう。所詮は下っ端、切り捨てられるだけだ。そもそもが個人的な暴走だと事前調査からハッキリしている。裏などありはしないだろうさ。

……ええ、ただの八つ当たりですがナニか？フフ、フフフ…。

「そうだ、アン。閣下に作戦が最終段階に入ったことをご連絡差し上げろ。夜明けは近いと、な」

「はーいっ！私におっまかせだよ♪【…あー、あー！お父さん、お父さん！アンだよっ！そろそろ作戦がね――…】」

むぅ…作戦任務中なのだからもう少し言葉使いに気をつけてもらいたいものだ。それでは組織の気が緩みかねない。……いやアンはこの船のマスコットでもあるから士気は上がる…のか？

まぁアンもその辺りは使い分けるだろう。次に指示することは――…地上戦力か。

「ふむ…。ＣＯＳ‐ＭＯＳ、現時刻を以って実験は終了だ。残存部隊をまとめ、ルートＤ２にて撤退せよ」

「…了解。実験を終了。ルートＤ２にて撤退行動を開始します」

今は各種デバイスとコードに接続されたＣＯＳ‐ＭＯＳの姿。打てば響くように応えているが今回は彼女にばかり貧乏クジを引かせてしまっている。

すまないとは思うが出撃と撤退は迅速に行なうが肝要だ。それに鈍重に過ぎるならば即座に切り捨てる……のだが、閣下はお優しいのでそのようなことはしない。他人から見ればこれは甘さだろう。しかしそこは自分達が手助けすれば問題ない。

そもそも我々の存在意義とは精魔奇兵になる前それこそ契約を交わした時より、ただ只管に閣下の御為に尽くすことこそが至高であ

り幸福だ。閣下に尽くすことが自分達の悦びなのだから。

……あ。

「あぁ、それと回収班も残骸の回収も忘れるな。保険はかけてあるが万が一の場合もあるからな」

「アイマム。ですが既に大半を回収済みです。回収不可能のものは所定通りに自壊システムの作動を確認しています」

そんなことはわかっている。しかし総指揮官代行として確認の意味は必要だ。ここに居る者は皆承知しているので何も言わない。どちらかというと作戦後のことでガールズトークがあちらこちらで花咲いていることが自分としては気になる。

ここに居る親衛隊は最古参のみで経験豊富な優秀な者だけだから色々と余裕がある。その癖、モニターからの情報から目を離さない。油断しない。会話する声と雰囲気だけが緩い。なんだろうか、これは…。

まぁそれはともかく舞台は整った。実験データは十分に取れた。作戦目標たる倉持一派とその関係者と思われる者達もほぼ確保した。そろそろ閉幕としよう。

「全部隊に通達！“撃鉄を起こせ！”遠慮はいらない！今こそが総仕上げだ！我らが閣下の名の下、卑劣なる敵を一気に駆逐する！！」

「「「「「アイアイマム！！」」」」」

閣下、今参ります！それとエヴァンジェリンのことはあとで詳し

く…ええ、詳しく聞かせていただきます。自分とファレノ、そしてリチラで。場所は……寝室？いや、それはマズイ。某姉妹にナニをされるか…（ガクブルガクブル）。

あぁそれよりも閣下に同行させた者達から“有効”と連絡が密かにあった。やはり閣下はメイドさんがお好きなのだ。いやメイド服がお好きなのだろうか？

ともかくアンには感謝だ。まさか隠しフォルダを探し出し閣下の電子プロテクトを突破するとは驚きだ。本来ならば彼女を咎めるべきなのだろうが……閣下の性癖を知ることができたのでよしとしよう。

……お許し下さい、閣下。これも溢れる愛情と絶対の忠誠心ゆえなのです。

いや薄々察してはいたのだ。閣下はお淑やかな和服美人がお好きのようだがそれと同等にメイドさん、それも正統派メイド服だ。この二通りがお好きであることを長年のリサーチから皆で割り出していた。

喫茶店をお手伝いする時にはミリエール様達もそれぞれがメイド服をイメージした衣装を身に纏っておられるし。ここは試しに我々親衛隊だけで実行してみるか。閣下もお喜びになられるかもしれない。

無論、作戦が終了したあとに、だ。そこまで自分達はオチャラケてはいない。ハッチャけるのはこの祭りが終わってからだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　アイリ

――学園都市…。

Ｓｉｄｅ　？？？

敵は撤退を始めたことで学園側の勝利に見えた。戦いも終盤だ。

それでも学園長を初め上位に居る者達は最後まで気を緩めることなく、また現場に居る者は執拗なまでの追撃を行なった。今こそが正念場と言うように怒涛の勢いを以って攻め続けた。

勝利を目の前にしたことで味方の士気も最高潮だったこともあり戦いの勢いはとどまることもない。最早学園側の勝利に疑いはなかった。誰もが確信していたことだ。

しかし、その期待は一瞬で砂城の如く崩れ去ることになった。

今まで相手にしていた機械人形とは違う別勢力が突如として現れたことが原因だ。その勢力は黒いフルフェイスに黒い防護スーツを装備し、魔法は勿論のことそれぞれに刀剣類、銃器類、魔法兵器を手にしていた。

「指令は下った！我らが主の名の下に卑劣なる悪漢共を駆逐せよ！進め！進め！！！進め！！！」

「「「「「「おおおおおおおおおおおッ！！」」」」」」

その不明勢力の正体はわからないが確実に言えることは学園の敵であるということだ。なぜなら学園側に被害が集中しており、逆に葵ファミリー側には被害どころか協調していることが明らかだからだ。

その黒の勢力は葵ファミリー側の撤退を援護するだけではなく学園都市内に存在する麻帆良勢力を包囲した。そして包囲網は徐々に狭まり黒の勢力は学園側勢力を見つけ次第、瞬時に各個撃破していた。

数百人居た学園所属の魔法使いも壊滅状態だ。機械人形との戦いで消耗していたのもあるが黒の勢力はそれ以上の損耗率を学園に与えていた。

「踏み潰せッ！蹴散らせッ！！蹂躙せよッ！！！」

「「「「「ガンホーッ！ガンホーッ！！ガンホーッ！！！」」」」」

「「「「「ぎゃあああああああああああッ！！！！！」」」」」

そして現在、学園勢力は壊滅状態にある。いっそ流血沙汰よりも無残に思えるほどに…。この光景を葵が見ていれば「なにこれ？バサラ？若しくは三国的な何か？」と呆れた目とタメ息を漏らしたことだろう。

……。

……。

「最早ここまでとはのう…。タカミチ君との連絡は？」

長い眉や髭、刻まれた皺でわかり辛いが学園長の表情はとても厳しい。指揮所にあるモニターに表示される映像や情報にはそれだけのものが映し出されている。

勝利を確信した途端にこちらの敗北が濃厚になった。なんの冗談だと言いたい気持ちを学園側の誰もが思わずにいられない事態だ。

「はい…。妨害により依然、通信不能のままです。同行していたガンドルフィーニ先生の班も同様に連絡不能となっています。彼らのことですから心配はないと思いますが…」

「そうじゃな…。信じて待つほかないのう」

連絡が取れないのはタカミチ達だけではない。ある時を境にその他、全ての連絡手段が遮断されたのだ。これを九重・葵がしたのは間違いない。情報網の妨害と分断。手間が掛かるが有効な手段だ。

今は有線による連絡網の構築や連絡員を走らせることで辛うじて情報を収集している状況だ。使えれば古臭いアナログなモールス信号さえも使いそうなほど切羽詰っている。

依然として明石教授を筆頭に夏目・萌などの情報、コンピュータ関係に強い者が総出でシステムの洗い出しと復旧に従事している。要するに余裕など欠片もないということだ。

そしてまたしても事態は動く。それも学園側に悪い方向へ。突如として非常ベルが鳴り響く。緊急事態を示す赤色灯が緊張を呼ぶ。

「学園長！学園の管理システムが攻撃を受けています！第一、第二、第三防壁を展開！…あぁ！？侵入を止められません！」

「なんじゃと！？」

明石教授達が侵入者の撃退とシステムの復旧に全力を注ぐが通信システムを司る人工電子精霊を始め、ほぼ全ての人工電子精霊を乗っ取られていく。彼らはものの数十秒で学園の管理システムの制御権を奪われたのだ。

「あ、あぁ…。全てのコントロールが奪われました…。奪還を試みていますがコンソールが反応しません…」

「うむぅぅ、これも葵君の仕業か…！」

直後に今まで通信不能になっていたはずの通信機器からノイズ以外の反応があった。通信に割り込みが入る。スピーカーからブツッという音がした。

『…――学園長殿、否、近衛・近右衛門。見ているな？聞こえているな？投降しろ。元からお前らに勝機などありはしないのだから…』

「む…！くぅぅ…！」

音声のみだが誰もが予想したとおり通信相手は九重・葵だった。学園長は唸る。そして考える。事態は最早決定的であり、これが最期であると。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

――世界樹前広場…。

Ｓｉｄｅ　葵

時刻は午前四時を過ぎた頃だ。時期が時期だからまだ辺りは暗い。それに寒いです。気温的にね。一応、服には寒暖調整できる機能があるからそれほどでもないのよ。

それでまぁ最初に対峙した場所へ戻って来ましたよっと。今ここは天幕や機材を運び込んで簡易拠点化している。上空ではアングレカムが低空にて滞空しているのが見えますねー…。

エヴァちゃんと別れたあと直ぐにシルビアが合流した。どこからともなく、ね…。どうやら地下施設の撤収を見届けてから応援に来てくれたらしい。お掃除ご苦労様です。

俺は労う意味を込めて彼女の小さな身体を抱き締めて撫でて愛でながら飛んでここまで来た。気分的に肌寒いのと癒しが欲しいからやってしまったけど小柄な彼女は体温も高めだからポカポカだった。うん、どこかホッとした。

……そして今は膝枕しています。俺がシルビアに…。とってもポカポカだぁ♪

いやー、オリビエ達には情報部のお掃除を手伝うようにお願いしたのに実際にお片づけしたのはシルビアだけとは。今考えるとオリ

ビエはなぜにあそこに居たのかね？それにリビエラはどこに？情報部本部か？

むむむ！こうして考えると身内のことなのに行動を把握してないよ、俺。どうしたものかね。こんなでは一家の大黒柱と言えるのかな。いや二万近い家族の動向を常に把握するとかどこのバカだとは思うけどさ。

えーと…ミリー達はいつも通り俺に憑いていっひゃぁ！？くすぐったいよウーリ！どこ触っているのさ！マリーにミリーも微笑ましそうに見てないで止めようよ！ちょっと気持ち良かゴホンゴホン…なんでもないです！！

「…んん…ん？お兄ちゃん…？」
「あははは っ、なんでもないぞー。うん、ほぉら、よしよし」
「…♪…っ♪んー…♪」

んんっ！あー、陽月姉妹はシルビアに少し遅れて途中で合流した。彼女達が超と何を話したかは知らない。今は背後にて静かに控えてくれている。

ウーリの悪戯に多少のプレッシャーが洩れたけど身内のすることだから直ぐに収まった。止まってないけどね…。今はシルビアを撫でて癒しを補給中なのに姉妹から更なるプレッシャーを感じている。なぜに？

アイリと親衛隊の大半がここに居て、ファレノとリチラ、あと数名の親衛隊は喫茶店地下のゲート守護だったか。ファレノはリチラをキチンと抑えることができただろうか。一部区域が氷河期とか…ないだろうな？

ああ、それとアン、そして今回の立役者であるＣＯＳ‐ＭＯＳは――アングレカムでお留守番です…。いや彼女は対外的に一応重症という扱いになっているからね。この場には呼べなかったのよ。アンは付き添いかね。

「閣下、間もなく鎮圧いたします。そしてこれを以って作戦内容の九割以上を消化したことになります」

「そっか。終わったら皆にお礼言わないと。仕事が早くて助かる、ってね」

「そのお気持ちだけで皆も報われます。そしてより一層、閣下へ親愛と忠義を捧げましょう」

「……そっか」

えー…ものすごく大げさに捉えられた気がする。だけどここは言わぬが花というもの…あれ？微妙に使い方間違えているような。…まぁいいか。どちらにしてもこのまま終われば文句はないしね。

「アン。近衛・近右衛門へ降服勧告を出すから学園システムを掌握して中継してくれる？」

『うん、いいよ♪ちょーっと待ってね。ここをこうして…もう一声！…はいっと！いつでもいいよ♪』

「ありがとう、アン。それじゃ、こほんっ――」

あ、少しだけ悪戯心が発生した（ニヤリ）。今後の参考までに少

し露悪的というか悪者チックにしてみようか。悪者…悪者かー…。まずは高圧的な感じで、声を低い感じで、えーと…あとは何？

……わからん。ここは出たとこ勝負で行こう。

「――学園長殿、否、近衛・近右衛門。見ているな？聞こえているな？投降しろ。元からお前らに勝機などありはしないのだから…」

どうよどうよ皆？俺的には上手く出来たと思うんだよ。今できる精一杯の威圧感（笑）を出してみたんだ。悪役っぽくない？

え？まだ優しさが見える？甘い？…なん、だと？おかしいな…。え？アイリどうしたの？…いやいや、あまりキチャナイ言葉は使いたくないと言うか…あ、ほらシルビアやウーリ、その他小さな子の教育的に悪いしさ。

「「むぅぅ！！」」

「は？どうしたの？二人とも…」

あっ！？イタイイタイっ！ウーリ、シルビア！痛いって！え？ち、ちち違うよっ？決して子供扱いしたわけじゃ…。というかなんでお二人は怒られておられるのでしょうか？

「「……」」

……えっ？ちょ！待っ！！アーーーーーーッ！！！

このあと麻帆良学園の使者が訪れ全面降服することが伝えられた。誰だか知らないけど相手はものスゴク不本意そうだった。

まぁ最後の最後で多大な犠牲（俺の貞操的な何か…勿論、守ったよ？）を払うことになったが結果には満足している。いや本当に…。今後二度と家族の誰かを子供扱いはしないと心の中で固く誓ったほどだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第七十三話「逆転？と勝利と敗北と」（後書き）

あれ？一番割を食っているのがＣＯＳ－ＭＯＳのはずなのに最後の最後で葵が…。
なんというか、その……食われた？いや食われかけた？
ウーリとシルビア、幼女体系の二人に家族の前で襲われたぜい。
最近、彼の貞操が非常に危機に晒されている気がする…。
まぁ健全板では何もしないけどね！
それにそっちの板は作者にはハードルが高くて…ム・リ！

ちょっとした一言…。
夏です。もう夏です。ええ、夏バテです。

ではでは！

第七十四話「事後処理と癒しとご飯と」（前書き）

最近暑いですね…。風が吹く日はいいのですが通常の昼間は最悪ですorz
今年は飲み物・団扇・ハンカチが手放せませんね。
皆さんも熱中症や脱水症状には気をつけましょう。
では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十四話「事後処理と癒しとご飯と」

――学園長室…。

Ｓｉｄｅ　葵

戦いから明けて翌日の午後。俺達は占拠した学園の学園長室に居る。事実上ここが戦後処理の暫定指揮所になっているのよ。室内には幾つもの事務机が運び込まれ、山のような必要書類を処理していた。俺が…。

……また書類か！またなのか！？滅ぼすぞ！？麻帆良を！？！？

失礼。望まない現実を前にして取り乱してしまった…。あの戦いから明けて今日は日曜日だから学校そのものは休みだ。それでも冬期休暇中も部活があるところは普通に活動している。

一般人への配慮としてこちらの手引きで関係者以外は魔法的に眠らせたから何も知らない。あ、長谷川・千雨の例もあるから念のために睡眠ガスも使った。だから本当に何が起きたのか誰も知らないはず。

それにラミエルさんの次元結界を解けば建物などの破損はなかったことになるからね。翌日には何事もなかったかのように日常が始まる。彼女の結界のお陰で建物への配慮をする必要がなくなったから今後も重宝するかもしれない。

こんなに便利ならばもっと早くに次元結界の術式を作ればよかっ

た。今度、正式配備されているガンブレードに標準装備させよう。というかアームドデバイス化しよう。うん、これは決定事項だ。

それにしてもあのジジイめなかなかいい椅子を使っているじゃないか。…多少加齢臭が気になったけど！そこは俺謹製“クンクン消臭くん”が解決済みさ！例によってネーミングセンスについては気にするな！そういうものなんだよ、これは…。

それで、だ。学園長室に居るのは陽月姉妹を始め精霊三人娘、悪魔三人娘、親衛隊三人娘（なぜにメイドさん！？）と親衛隊員が数名（こちらもメイドさんだ！？）だ。もう制服はメイドさんでいいと思う。俺まだ指示してないのに…。

……俺の性癖がダダ洩れの件については誰も何も言わないしね！？

あ、いや、ゴメン。追求されても困るのは俺自身だから何も言わないでください…。でもだからと言って「に、似合いますか？」って照れながら聞かないで。俺の理性がマッハで天元突破しそうになったからさ。

……あ、おっほんっ！ごほごほっ！あー…。

ラミエルさんはいつも通り俺の胸元に鎮座している。今回はＣＯＳ‐ＭＯＳが重症という設定なので彼女はアングレカム艦内で収集したデータを分析整理してもらっている。アンも同様にデータ解析と今後の予定のために月と通信して予定を調整中だ。

……旅立て宇宙へ！目指すは木星！だね！！大きな船を造らないと…。

でも、大きな船を造るぞ！と俺が言った時の皆のニコニコした顔が気になった。なんかこう…微笑ましそうにというか俺だけが何も知らないとでも言うような。まぁ悪い気配は感じなかったから気にしなくともいいのか、な。

あー、それにしても昨夜、学園が全面降伏してからが大変だった。バカ騒ぎしたら当然のように勝者は戦後処理というものがあるのよ。

敵味方分け隔てなく負傷者の治療とかね…。こちらは俺達が非殺傷兵器ばかり使用していたから予定通り学園側に死者は出していないのが助かった。書類的面倒がないという意味で。

は？味方の被害？殆どなかった、かな。あっても擦り傷や打ち身、重くても打撲くらいのものだ。ただの魔法使いや剣士に殺られるほど柔な鍛え方もしてなければ一種族としても弱くもない。勿論それなりに装備もあるしね。

……なんにしても人的被害もないし書類も減って嬉しいことには変わりない！

こほんっ。本来なら戦闘で破壊された建築物や道路などの復旧作業などもあるのだけど今回はラミエルさんのお陰で復興作業がない。書類が予定より少ない（それでも多い）ほうだ。本当に手間が省けて万々歳だ。

そして一番面倒、だけど重要なのが学園の所有している重要情報や書類の把握と統括整理だ。こればかりは敗者側の人員を使うわけにはいかない。変な処理をされたら困るしな。こちらは情報部が出せる限りの人員で当たってくれた。

一応言っておくけどここまでのこと俺も徹夜だったからね。戦闘開始から今まで寝てないんだよ。フフフ…。勝っても負けても書類仕事がある。フザケルナ、と言いたい。まったく、だから戦争は苦手なんだ。嫌いじゃないけどさ。

事後処理から連鎖的に生産された書類も今は僅かなのが救いだ。本当に、アンやアイリ達が居なかったら今も書類に埋もれていた自信があるね。もうなんで書類が電子化してないんだよ。紙媒体が多過ぎるっての。

あ、夕方には学園長、それとついでにタカミチも出頭してもらわないと。今後の展開について通達しないとならないし。

……。

……。

そんなこんなで気が付いたら夕方だった…。フフフ…書類はもう当分見たくない！いつか腱鞘炎にならないかが激しく不安だ。

「…よく来てくれた。近衛翁、タカミチ。……なぜにエヴァちゃんも居るのかね？」

俺が呼び出したのは学園長とタカミチだけのはず…。なんでここにエヴァちゃんが来ているのかね？いやエヴァちゃんのように可愛い子ならいつでも歓迎だけどさ。

あ、茶々丸ちゃんいらっしゃい。まだ若い（一歳未満）のに子供（エヴァちゃん）のお世話ご苦労様です。え？当然のこと？できた子だ…。

「フォフォフォ。呼ばれたからの」
「……葵さん…」
「フフフ（ニヤニヤ）」
「失礼いたします、葵様。お忙しい中マスターがご迷惑をお掛けします」

いえいえ。ただ疑問に思っただけだから気にしなくてもいいよ。エヴァちゃんも茶々丸ちゃんもいつでも歓迎するからさ。

……なぜかアイリを筆頭に彼女達から若干のプレッシャー、がっ!?

ち、ちち違うんだよ!?別に何も…!あれ!?なんで俺は浮気が見つかった夫のような状況になっているのかな!?俺責められるようなことなくないか?!てか、ないよね!?

「茶々丸ぅぅ!?お前っ!それでは私が我侭な幼子のようではないか!!」
「……え?」茶々丸。
「「「……（ジィィィィ）」」」俺、ジジイ、タカミチ。
「なんだ!その目は?!え?コイツ気付いてなかったの?みたいな目は!?」
「……え?」茶々丸。
「「「……（ニヤニヤ）」」」俺、学園長、タカミチ。
「貴様ら…!ニヤニヤしながらサムズアップするんじゃない!!」

え?なにこの子?すっごい騒がしいんですけど…。いやまぁ俺も少し悪ふざけが過ぎたかもしれないけどさ。でもこれは仕方ないことだと思うんだ。エヴァちゃんってからかうと反応が素直だから可愛くてさー♪

おぅ…。オーケー、わかった。おふざけが過ぎた。悪かった。落ち着こう皆。だからその手に込めた魔力を解除しようじゃないか。そのままでは部屋が吹き飛ぶよ…。え？添い寝するの？…はい？それで許すって？

もう可愛いなぁ。いいよいいよ。何か怖いことでもあったんだね。添い寝くらいお安い御用だ。何を許すのかはわからないけど俺達は家族だから遠慮はいらないさ。あははっ。

……なんで皆に呆れた目で俺は見られているのでしょうか？

？？？どうしたの、ユエ？あー、そうだね。学園の引継ぎの話しがしたいから近衛翁とタカミチを呼んだんだった。それは間違いない。だけどエヴァちゃんを呼んだ覚えが俺にはトンとないのだが…。

「なんだ？私がここへ来てはイケナイ理由でもあるのか？」

あれ！？何事もなかったかのように！？今までのことはなかったことにするんですね！！

図太い神経してんなぁ…。流石は六百年を生きた真祖の吸血鬼と言ったところか。いやいや、でもここでは触れないであげるのが優しさ、なのかな？なによりも彼女の背後で茶々丸ちゃんが見た目必死に頭を下げているのが涙を誘うのよ…！

「……いや、そういうのはないけど。ただ、なんでかなって思ってさ」

「なに、ただの暇潰しだ」

暇潰し、ねぇ。まぁこれは本当だろうな。でもエヴァちゃんって寒いのも暑いのもダメだったと記憶してたんだけどな。今の冬の寒い中わざわざ来るなんて物好きな子だな。家でゲームでもすればいいのに…。

「「――――……」」

「ハオ、ユエ。そう睨まないの。もう終わったんだから」

「「はっ…」」

二人とも、エヴァちゃんに向ける視線に棘がないか？俺が氷付けにされた一件が相当に気に入らないようだったけどもう終わったことじゃない。気にすることないよ。俺は気にしない。

「…さて、今日二人を呼んだ用件だが……引継ぎについてだ」

「フォフォ。なるほどのう。…して、どのようにかの？」

この狸ジジイ…。本題に入った途端にさっきまでの好々爺然としていた雰囲気からガラリと変わりやがった…。

一応自分達が敗者だという認識はあるようだけどタダでは従わないという意志を態度で示してきやがった。しかもそれはタカミチもだ。いざとなれば玉砕覚悟で俺の首を取りに来そうな雰囲気を放っている。

……どちらにしてもコイツらの覚悟は無駄だけどね！！

「…いや、特に変更はない。今まで通り学園を経営してくれてかまわない」

「むぅぅ…。こちらは喜ばしいが……葵君はそれでいいのかの？」

「良いも悪いもこちらにこれ以上のメリットがない。俺は麻帆良な

どいらんよ」
「「……は？」」

おいおい。二人してマヌケな顔をしているんじゃないよ。当然だろうが。だいたい、俺達の最大の目的は達した。それ以上のものを求めようとは思わない。何よりもそんなもの俺達には無駄で無用なものだ。

…ほら、見てみろよ。エヴァちゃんなんかすごい悪い顔して笑ってるよ。よっぽどキョトンとした二人の姿がマヌケに思えて愉快だったんだろうね。

はぁ、こんな面倒そうな土地、俺はいらないよ。地下には破棄されたゲートがあるとか。しかも繋がっている先が旧オスティア？正確な位置は覚えてないけど記録を探せばわかるだろ。探さないけどね！面倒事の匂いしかしないし！

……他にもゴロゴロあるけどそこは省く。面倒なことは無視だ、無視。

馬鹿を排したお陰で麻帆良も組織として風通りが良くなった。人材不足は相変わらずだが馬鹿な思想を持つ者はもういない。今までよりも健全な組織運営ができることだろうよ。

「ふむ…、よかろう。ワシとしても不満はない。それで倉持君らのことじゃが…」
「それ以上言うな。その件については一切妥協する気はない」
「さようか…。しかしのう、本国が黙っていないと思うのじゃが？」
「くくくっ、いらない心配だ。“存在しない者”のためにどうして動くことができる？」

既に今回捕らえた倉持を始めとした十四人の存在は紙媒体、電子情報、個人の記憶などあらゆる記録記憶は消去した……とダチュラに聞いている。押さえた身柄も今は情報部本部に幽閉中だ。何をしているかは教えてもらえなかった…。

でもまぁ、これで倉持（アレ）らは記録上では存在しない者となった。アレらに帰る場所も帰りを待っている者も存在しない。

現代社会で戸籍がないのは実はとても痛いんだよ。法治国家と呼ばれるこの日本では特にね。それがないと住む場所も仕事も真っ当なものは得られないのだから。戸籍を偽造するか裏の仕事ならできるかもしれないけど。

まっ！アレらが表の世界に出ることは二度とないだろう。情報部に引き渡した時点でアレらがマトモな精神を保てるはずもないし。生きていたらラッキーと言えるくらいじゃないかな。くくくっ！…あれ？逆、なのか？

「存在、しない？葵さん、それはどういう意味…まさかっ！？」
「タカミチ、それ以上は考えるな。それがお前のためだ」
「しかしっ…！！」
「タカミチ。最早状況は覆らない。俺の名に誓い、これは“絶対”だ」
「ッ！！！」

こんなことくらいで取り乱すなよ。ジジイを見なさい。落ち着いているだろう。状況が覆らないとわかった途端にジジイの頭の中じゃもう次の最も利益になることを考えているじゃないか。

まぁ法律とか秩序関連から考えれば俺達の行なったことは復讐という名を借りた人攫いだからな。世間的常識的に考えれば俺達は間違いなく“悪”なのだろうよ。

だがな？タカミチよ。俺は正義だの悪だのに興味はない。欠片もない。塵ほどにもない。俺が興味あるのは大切な家族のみだ。俺は臆病だからさ、家族に迫る脅威は排除するし動かぬ障害があれば踏み潰すのみなんだよ。

「しかし、葵君。例えそうだとしても君が麻帆良を襲撃したことは直ぐに知れるぞい。そのことはどうするのじゃ？」

うむ。やはり伊達に学園長などと呼ばれてはいないな。こういうことは年の功が物を言うようだ。事実を事実として受け入れてからその先の利益を最大限得ようとするそのスタンスを俺は評価するよ。

「それについても問題はない。アイリ」

「ハッ。前提として我々は“麻帆良を襲撃していません”。そのような事実は存在しません」

「「っ！！？？」」

「ほう…？」

学園長とタカミチは驚いてくれているようだ。エヴァちゃんは面白そうだとでも言いそうなほど悪い笑い方をしている。もう、そんな笑い方していたら可愛い顔が台無しじゃないか。どうせ笑うなら思いっきり笑おうよ。

「続けます。先頃の戦闘は“麻帆良の防衛評価演習”としてＭＭ本国、ヘラス帝国、アリアドネーの三国・都市によって決議され承認されたものとして処理いたしました」

ふふんっ♪これくらい用意しておかないとね。まぁこれを事前に用意してくれたのは例によってアイリ達なんだけどね。お陰で結果的に面倒な書類手続きが一気に減った。

……俺の最大の敵は紙束（書類）なのかもしれないな…。

「この短期間で…！そんな時間はなかったはずじゃが？」

「こちらにコピーですが正式な書類一式もございます。…ご確認なさいますか？」

「いや、結構じゃ。君達のことじゃから“方法はともかく”として本物じゃろう」

「ふふふ、ご理解が早くて助かります」

「フォフォフォ。それくらいは、の」

入手した方法？そんなものはどうとでもなるさ。あ、ＭＭだけは洗脳したらしいけど…。

帝国のように誇り高く、アリアドネーのように探究心を忘れない。それらの思想や姿勢は評価されて然るべきものだ。まぁハッキリ言ってしまえばコネだし。古い知人友人が多いと何かと便利なのよ。借りもあるしさ。

逆にＭＭ本国はダメだ。国家連合と言えば聞こえはいいが用は大小様々な国の集まり。そこに意思の統一など迅速にできるはずもない。一長一短があるとは思うが身内で足の引っ張り合いをしているのだから更に救いがない。

「聞いての通り、今回のことは敵対した襲撃ではなく抜き打ちの防衛試験ということだ」

「フォフォフォ。相わかった。それでは今まで通りに、じゃな」
「……っ」

これなら問題あるまい、と二人に確認するとジジイいや学園長は利益を考えているためにある程度は汚濁を飲み込むことにした様子だ。組織の長とはどこもこういうものだ。清濁合わせて飲み込めないといつか破綻するのよ。

清濁併せ呑むか…。俺にはできそうにない。だからこそ俺は家族しか守れない。目の前の学園長のように時には冷徹に人員を切り捨てることが難しい。

しかしタカミチはまだ不服そうな顔をしている。なまじ身近に“英雄”が居たからそういう理想は人一倍強いようだしね。それでもタカミチ本人も綺麗事だけで組織や世界が回らないことを知っているから文句も言い難いのだろう。

「用件は以上だ。二人とも帰っていい」

必要なことは伝えたから二人にはそのまま帰ってもらった。タカミチの中ではなにやら葛藤のようなものもあったようだし今夜はゆっくり休んでもらいたいものだ。

まったくタカミチも気にしすぎなんだよ。無駄な犠牲は出してないじゃないか。己が正義を掲げるならば“悪・即・斬”は基本だろ。その正義から考えれば俺は間違いなく悪だと思うがね。十数人の存在が一夜にして消えたしさ。

その点、俺は簡単なものだ。俺の正義は家族を守ることだからね。それを守るためなら躊躇もない。…いやゴメン、色々と配慮はする

かも。できるだけスプラッタは勘弁です。俺、臆病者なので。血生臭いのは苦手です。

「あ、エヴァちゃんゴメンね。途中からかまってあげられなくて」
「ふんっ！そんなこと、って！おいコラっ！撫でるな！子供扱いするんじゃない！」
「くくくっ、俺から見ればエヴァちゃんも子供だよ。茶々丸ちゃんももう少し待っててね」
「はい、葵様。さ、マスター、あちらでお待ちしましょう」
「あ、おい！茶々丸！なんで私は手を引かれているのだ！？ええいっ！放さんか！」

彼女達を見ていて特に最近茶々丸ちゃんがエヴァちゃんの母親に見えて仕方ないとです…。どんなにいい目に見てもお姉ちゃん？まぁエヴァちゃんも何だかんだと言いつつも茶々丸ちゃんのこと好きなようだけどね。

「相変わらずエヴァちゃんはからかい易いなぁ。…ん？こほんっ！総員撤収準備！」
「既に完了しております、閣下」
「……仕事早いね、アイリ…」
「これくらいはメイドの嗜みでございます」
「えー…」

いつの間にかアイリ達メイド服組みはメイドの嗜みをマスターしていた！？それ着始めてから一日も経ってないはずなのに！？練習したの？俺の知らない間に練習したの！？どこまで完璧主義なんだろ、この子達は…。

「…それじゃ帰ろう。今日はもう疲れた」

「はい、閣下。あとのことは私共にお任せください」
「うん、任せる」

ういうい。彼女達に任せておけば机とか必要な書類は司令部本部に一時的に運び込むとして、そこで他部署へ分別配送してくれる。細かに指示しなくてもしてくれるって本当に助かる。

あ、ミリー達は皆と本部に戻って必要事項のまとめと今後の宇宙進出なんかの計画の草案を大雑把でいいからまとめておいてくれる？…うん、そう。ごめん、ありがとうね。え？情報部？今向こうはお客さんが居るからあとでいいよ。

それとオリビエ達は作戦部本部へ出向いて今回の被害報告と改善案や要望などの陳情書を回収または作成をお願い。…うん、長引きそうなら偽体使ってくれていいから。君達三柱の召喚コストって本当ならシャレにならないしね。

ハオとユエはいつも通り俺の側で護衛をよろしく。まだ今回のことを学園側に布告してないからトチ狂ったバカが居ないとも限らないからさ。…そうそう、ハオ達が居ると安心できるからね。

「…エヴァちゃん達帰るよー。晩御飯はウチで食べていくといいさ」
「むっ、それは葵の手作りか？」
「は？まぁそれがいいなら作るけど…」

ええ、疲れてはいるけど作るのはかまわない。でも…お残しは許しまへんで。食材を無碍にしたら天誅…いや俺自ら人誅を下してやるから覚悟して食べなさいね。まだ滅ぼされたくないでしょ？ふふふのふ…。

「――ッッ！（？？？なんだかイヤな寒気が…？）気のせい、か？」

学園長質からの帰り道でエヴァちゃんがビクッとしたと思ったらプルプル震えて何かを警戒した。でも何もないと力を抜いた時にポソッと何かを言ったようなんだけど何を察知したのかね。

「ん？エヴァちゃんキョロキョロしてどうかした？」

「む…いや、なんでもない。それよりも早く行くぞ！」

「はいよ。……くくくっ（そんなにお腹を空かせていたのか。腕を振るうとしますかね）」

……まぁ皆で食べられるように大皿系を作るから大丈夫かな。

エヴァちゃんという舌の肥えた友人も来ることだし量だけではなく質も伴うように調理するのが料理人たる俺の腕の見せ所だ。

「お手伝いいたします、葵様」

茶々丸ちゃんは本当に気の回る子だ。この子ったらいつも率先して手助けやお手伝いを申し出てくれるのよ。本当にできた人いやガイノイドさんだね。

「そう？ありがとね茶々丸ちゃん。いやーこの子いい子だ。エヴァちゃん…」

「茶々丸はやらんっ！！絶対にやらんからなっ！！！」

「まだ言い切ってないのにそれは酷くない？娘に欲しいなと思っただけだって」

こんな心優しい娘なら世のお父さんは溺愛することは間違いないと思う。これは確信を以って言えることだ。寧ろ俺が娘に欲しい。

いやエヴァちゃんの家族を取るようなことは絶対にしないけどさ。

「なに?娘か…。それなら…いやいや待て待て…そうなると私よりも葵に近付くことにならんか?…娘と言うからには一つ屋根の下…これは…同棲!?イヤイヤ待て待て!娘と言っているのだからそれは家族という認識であって決して疚しいものはないという確かな事実を伴っているということ…なんだ安心…ん?そうなると私はどうなる?私だけノケ者か!?認めん!断じて認めんぞぉぉぉ!!」

「エヴァちゃーん?おーい?…ダメだ。なぜか錯乱しているようだ」

なんだか知らんが突然エヴァちゃんがブツブツ言い出して終いには叫びだしたんですけど…。この子は本当に何をしたいのだろうか?大半の台詞は良く聞こえなかったし。しかし一体何を認めないのだろう?

……んむ?茶々丸ちゃんは一体何をするつもりかね?

「…マスター……っ」

「いたいっ!?ん?私は何を…んん?」

あー…壊れたテレビを直す秘儀“斜め四十五度で叩きましょう”ですな。まさか茶々丸ちゃんがあの秘奥義を会得していたとは思わなかった。だけどそれは人の、それもエヴァちゃんの頭を治す技ではないのですよ?

「エヴァちゃんほらうんうん唸ってないで行くよ。もう店はそこだからさ」

「おぉ?うむ、そうだったな。今晩は貴様の手料理だった。しかしなぜ頭が痛いのだ?」

「…マスター、急ぎませんと葵様が行ってしまわれます」
「む、それはいかん。おい！葵！待たないか！」
「……（…クスクス）」

葵です。最近、茶々丸ちゃんがエヴァちゃんのあしらい方を覚え始めたように感じられるとです…。主従なのだから別におかしいことではないのですが先程の茶々丸ちゃんの雰囲気がとても黒かったとです…。葵です、葵です、葵です…。

……あっ、丁度いいから今の内に二人に言っておっかないと…。

「エヴァちゃん、茶々丸ちゃん。俺、一年くらい麻帆良を出るから」
「そうかそうか。旅先では生水に気をつけ…ッ！！なにっ！？どこへ行く気だ！？」
「どこって……ちょっと木星まで？家族皆で骨休めに」
「なんで疑問系なんだ！？それにもくせい？もくせいってあれか？惑星の木星か！？」
「うん、その木星だ。というかそれ以外に木星ってあるのか？」

いや探せば並行世界や次元世界にはあるかもしれないのか…。これはなかなかに興味深い内容ではあるな。是非とも世界間移動論を木星までの航行中に改めて研究しよう。

他世界へ移動するための試作次元エンジンの設計はできているから向こうで完成させて実験もやればいいよな。下手に地上でやるよりも失敗した時の被害は少ないだろうしさ。

「因みに出発は一週間後を予定しているんだな、これが。あははは
っ」
「あははは
っ、ではない！おいっ！茶々丸からも何とか言ってやれ

！！」

「…お早いお帰りをお待ちしております。葵様…」

「そうじゃない！そうじゃないだろっ！茶々丸ぅぅ！！」

「茶々丸ちゃん…」

「葵、様…」

「だ・か・ら！私を無視するなと言っているだろうがっ！？」

やはりエヴァちゃんはからかい甲斐があると思うんだ。ピョンピョン跳ねたりしている姿やキャンキャン喚いている姿を見ていると必死に自分の存在を誇示してアピールしようとしているんだから。可愛いものだね。

……なんて思っていたら思わぬところもヤキモキさせたようだ…。

「「ごほんっごほんっ！！」」

「「――ッ！！」」

「「……」」

陽月姉妹の視線が心に痛いです。表情に大きな変化はないんだけどちょっと拗ねた感じの視線が特に俺ハートにクリティカルを与えてくるのよ。これが、また効くねぇ…。何でかはわからないけど罪悪感がバリバリするよ。

「あ、あはは、二人ともごめんね。決して忘れていたわけじゃないんだよ」

「いえ、別に我が君が謝罪なさることはないのですが…」

「それよりも我が君と茶々丸の顔が近いといいますか…」

「おぅふ…」

ちょっとエヴァちゃんをからかおうとおふざけしただけのつもり

なのに矛先を間違えたぜい。ここで二人が反応してくれるとは思わなかった。確かに茶々丸ちゃんと顔を近づけはしたが…いつもの昼メロ的な冗談じゃないか。

……それに肝心のエヴァちゃんはというと…。

「――――……」

「えー…」

エヴァちゃんの冷たい眼差しが俺のガラスのハートを射抜いていた。いやマジで。咄嗟に氷と闇の女王という単語が頭の中で思い浮かんだほどだ。

気のせいだとはわかっているんだけど気分的には気温が下がったように感じた。真冬から極寒になった、と言えばわかるだろうか。心情的にはここは北極かと小一時間問い掛けたい。

「……とりあえずご飯にしよっか」

「「「「……」」」」

ああ、苦し紛れに出た言葉はこんなものだったさ。でも仕方ないだろ？エヴァちゃんというお子様兵器が目の前でへそを曲げていたんだから。ここでご機嫌を取ろうとするのは間違いじゃないはずだ。

最近、この子に逆らえなくなっている気がするなぁ。なんと言うか娘や孫の我侭を見ているおじいちゃん的な気分だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

1951

第七十四話「事後処理と癒しとご飯と」（後書き）

はい！というわけでやっと葵君を宇宙へ打ち上げる準備ができてきました！
本編に入らずに何をしとるんだ！？という意見は見ない方向で（泣）
これでも作者は一生懸命なのですよぉ…。
それにここまで引っ張ったのならもう少しくらい遠回りしてもいいかなぁって（チラチラ）
すみません。調子乗りました…。今後もがんばるのでお許しください。

ではでは！

番外編「あかいとアカイと赤いと」（前書き）

色々と更新が遅れて申し訳ないです…。
今話はちょと練習の意味で書いてみました。
内容的にはちょっとアレな感じになっている気がする。
因みにツンもなければデレもない。だって葵は出てこないから（キリッ）。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

8／5誤字修正

番外編「あかいとアカイと赤いと」

――？？？…。

Ｓｉｄｅ　？？？

麻帆良の騒動から二日が経った。ここは葵謹製魔法球［工房］、その中にある建物の一つ。外観は特徴のない真っ白なビル。特徴と言える特徴を極力排したこの建物は入り口にも何も示されてはいないが一歩中へ入ることができれば一変する。

その中は最先端の情報エリアであり収集された情報の集積場所。収集された情報の分析、そこから対応策の構築をもする部署だ。

事前に脅威の排除なども担当しているがそれは主に作戦部が担当している。ただし、作戦部などでは不可能な、具体的には表立って行動を起こせない状況などでは情報部が秘密裏に対応、処理することで事態の解決を図ることがある。

その建物は建築時の書類上では地上三十階、地下十五階とある。その建物はこう呼ばれていた。組織（ファミリー）所属情報部本部、と…。

……。

情報部にはその性質上、多くの諜報活動の他に扱う案件に暗い部分が少なからず存在する。それは拉致に誘拐、尋問や拷問、それに極秘裏の暗殺も仕事に含まれている。どれも滅多なことでは実行さ

れないが…。

それでも必要とあれば実行できるように幾つもの作戦計画と事前準備はされている。そしてそれら全ては彼女達の至上存在と言える葵に害なすモノに限り行なわれることだ。決して無差別ではない。必要ならやる、それだけだ。

これら裏の事情は一本気のある者や堅物には絶対に認められないかもしれない。だが、このような裏事情も行使するのが情報部の一側面でもある。

そもそも組織（ファミリー）所属の情報部は事前に脅威を察知したならばまずは独自に動き、敵の情報を収集し分析するなど全ての情報を整理して過程と結果を予測する。そこで初めて作戦内容が提示されるのだ。

情報部単独で事に対処できればそれで良し、不十分ならば作戦部や司令部へ支援を要請し共同作戦を布くこともある。そしてその逆も然り。場合によっては司令部や作戦部からも要請されることもある。

要は、だ。三部は強固な一つの意志の下でお互いに支え合っている、持ちつ持たれつの関係であるのは間違いない。

そして今の組織体制を一から作り上げた現親衛隊隊長アイリスは三部を創り上げた時に相互協力の最大理由を“葵を守る”という確固とした意志が存在している。これは肉体的精神的他にも様々な意味で守護するというものだ。

話しが脱線したので戻そう。

……。

そんな三部の一つであるここ情報部本部のエントランスホールを今、一人の少女が真っ直ぐに歩き抜けて行く。数台あるエレベーターの一つに乗り込むと階数ボタンの隣に目立たないようにあるパネルを秘密の手順で操作すると下降を始めた。

デジタル表示された数字は順調に下降していることを黒色の数字で示している。そして最下層である地下十五階を表示した。

「……」

それなのにエレベーターは下降を続ける。中に居る少女は気にした風もなく“本当の最下層”に到着するのを静かに待っている。デジタル表示は特別エリアを示す赤色の数字で十七、十八とエレベーターは下降を続けていた。

ポォォンという到着音が本当の最下層である地下二十階に到着したことを少女に知らせた。そのままエレベーターの中から出た少女は目的の場所を目指して歩き出す。

ここは情報部の表には出せないエリア…いや、存在自体が記載されていない場所だ。つまり表向きは存在してないはずの場所がここ情報部地下の地下十六～二十階には存在する。数少ない葵すらも知らない秘密の場所でもある。

この秘密の階層は病院のように真っ白な壁、廊下、天井、明かりも白く点っている。白い廊下を迷うことなくコツコツと歩く靴音が響く中、少女はこの階に着いてからクスクスと楽しそうに嗤っている。

最後に廊下の角を右に曲がると目的の場所に到着だ。少女は目的の部屋の横にある受付の女性に声をかけた。

「やっ、ふふふ、皆のご機嫌はいかがかな？」

「ハッ！ええ、勿論。やつらは頗るご機嫌ですよ」

「そっかそっか。あ、他に誰か入ったりしてるのかな？」

「ええ、少し前にはダリア副部長もお入りになられましたね。ダチュラ部長も聞こえませんか？」

ダチュラ部長と呼ばれた少女は女性に言われて耳を澄ませてみると。

「……！……！……！！」

「……！……！……！」

「……。……！」

「……。……！」

「……！……！」

これから入る予定の扉の奥からは僅かだが数人の苦痛に苛まれる悲鳴や苦痛に喘ぐような声がしていた。悲痛にすすり泣く音も聞こえた。ただし、声の主はどれもこれも気配が弱々しい。

ダチュラはそれらを聞いて一瞬だけブルッと身体を震わせる。どこか熱に浮かされたような彼女は火照った熱を吐き出すようにハァァ…と一息吐くと震える自分の身体を両腕で強く抱き締めた。

彼女は不気味な悲鳴を聞いたから不安に感じた？否だ。

ダチュラの身体は極上の美酒を口にしたかのように熱を持ってい

た。その身体は暗い快感に、その精神は歪んだ悦楽で高ぶらせていた。その証拠に愉悦の表情を浮かべ、頬を上気させ真っ赤な舌が口腔内で妖しく濡れて蠢いている。

「…ふふふ、本当だね。今日も皆が楽しんでくれるといいな」
「はっはっはっ！それは保障しますよ。ここで楽しまない奴、楽しめない奴が居るわけがないじゃないですか」
「ふふ、ふふふっ、そうだね。それじゃ開けてくれる？」
「ハッ！それでは部長も存分にお楽しみください」
「ええ、ありがとう。ふふ、ふふふ…」

真っ白の扉が開かれる。開かれた扉の奥へ進むと室内は照明が落とされていた。薄暗いが中は結構な広さがあるのが伺える。ダチュラはその中へ躊躇なく歩みを進めて行く。僅かな時間を愉しむために…。

……。

背後で扉が閉まる気配がある。やがて扉が完全に閉まると室内は薄暗い闇に包まれた。薄暗い室内は亜空間技術を使用して引き伸ばしているため本来の十倍から十三倍の広さをしていた。

縦横数百mと広大な室内は全体的に薄暗いことからわかり難いが広間と幾つもの小部屋からなる。奥のほうの小部屋から小さな明かりが洩れていた。

先程聞こえた苦悶の声はそこからしているようだ、と確信したダチュラは明かりの洩れ出る小部屋を目指して近付いて行く。近付くにつれて中から声が良く聞こえるようになってきた。

いざ扉を前にしたダチュラは、ここに来て悪戯心と好奇心が湧き出して僅かに開いている扉の隙間から中を覗いてみた。受付に居た監視役の子が言うには今中にはダリアが居るらしい。

情報部副部長であり自分の妹でもある彼女が中でどのような“遊び”をしているのか単純に興味があったのだ。…決して普通に入るのがつまらないなどとは考えていないったらない。

「んふふふ♪どれどれー…？お、おぉ…？」

開かれている僅かな隙間から覗く。この時のダチュラは気配を殺すのではなく敢えて自分のから発する気配を周囲と同化させるという無駄に高度な穏行術を行使している。

覗いた小部屋の中からはピチャピチャと派手に水が飛び散るような音とベチャッと何かの塊が落ちる生々しい音。そして聞こえていた弱々しいが今ではハッキリと聞こえる苦悶の声がしていた。

照明に照らされた室内は咽返るほど赤錆びた臭いがした。これは…とダチュラは考え――血の臭いだ、と本能的に感じ取った。血の香りに興奮したダチュラは中で起きていることを良く見ようと更に目を凝らす。

「…ぅわぁー…これは…んっ（ごくっ）。へぇ…」

中ではダリアが一人の捕虜で遊んでいた。捕虜の男は冷凍肉を吊るすように鎖で吊り下げられている。

男はボロ布しか纏っていないというみすぼらしい姿だが辛うじて不潔ではない。ただし今の男の状態で不潔も何もあったのもではな

いが…。男の身体は大小様々な傷があり左足は股関節から千切られたようになくなっていた。

今も千切られた足の付け根からは夥しいほどの出血が見える。身体中にある傷からも出血が酷い。通常ならば既に出血死しているはずだ。それなのに男は幸か不幸か辛うじて生きている。

吊るされた男の真下に淡く点滅する魔方陣がある。男が辛うじて死なないのはこの魔方陣のせいだ。魔方陣は魔力を注ぎ込むことで魔方陣の範囲内に居る生物を少しずつ回復、再生、本当に僅かだが復元もしてくれるのだ。

この魔方陣のお陰で男は失った血液を再生し、低下した体力を回復し、傷付き欠損した肉体を復元することで首の皮一枚で生にしがみついていた。否、しがみつかざるを得なかったと言える。

男を死刑とも言える拷問をしたであろうダリアは殺すギリギリのところで必ず手を止めている。その絶妙な匙加減で男は安らかに死ぬことも許されずいつ終わるともわからない責め苦を受けている。

彼らが捕虜になって実時間で二日と数時間になる。当然ここは魔法球の中だ。実時間とは違い引き伸ばされた時間は長い月日にも等しい。実に二ヶ月近く凄惨な“遊び”が繰り返されている。

「ダリアったらすごーい……濡れちゃいそう…」

ダリアが主催するアカイ宴をダチュラはもう少しだけ見ることにしたようだ…。

……。

……。

一方、室内に居るダリアは捕虜が気絶したことで責める手を休めていた。実はこれで五回目の気絶だ。

ダリアは少しの休憩がてら小部屋内を見渡してみると床一面は数人分の血で文字通りの血の池のように濡れていたことに気付く。薄暗くて気付き難いが元は白い内装だった。それが今では飛び散った鮮血で真っ赤に染まっていた。

鉄錆びた血の臭いが鼻に残るが元悪魔であり戦いが日常だったこともある彼女はどうとも思わない。…考えるとするならば血の臭いがこびり付いてしまうことで葵に感づかれるかもという懸念くらいか。

吊るされ気絶した男を前に彼女は考える。これで気絶するとはやり過ぎたのか、と反芻する。だが、まだ左足しか千切っていないのに、と考えそれはないと一笑した。

なんにせよ。魔方陣の効果で男はある程度回復したはずだ。仮に十分ではなかったとしても最悪でも死ぬことはない……はずだ。理論上はだが即死以外はどうとでもなる。

「あぁ…まだ寝るのですか。眠るには早いですよ？――ほら、起きなさいっ！」

まだ眠るように気絶している男を冷たく眺める。ダリアは男の右腕と肩を無造作に掴むと一気に左右へ引っ張った。その力は分厚い鉄板を引き裂くが如く膂力を持っている。

「…！？あああぁ！？ああ、ぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁあっ！？！？！」

気絶していた男は突然の激痛に何が起きたのかわからないで混乱する。ただ自分の右腕に走る激痛だけを理解して意識を強制的に覚醒するしかなかった。叫ぶことで痛みを誤魔化そうとする。

そして耐え難い苦痛に叫びながらも痛みを訴える右腕を見る。男はこの時に後悔した。今まで自分が味わった凄惨な行為を思い出したのだ。今の自分に左足がないことそして今は右腕もなくなろうとしている現実を直視した。

男はそこに居た者を、自分の右腕と肩を掴む者を視界に収めて顔色が蒼白となった。この女が自分をボロ雑巾のように私刑（リンチ）を加える者の一人。もう何度、この悪鬼共に自分は殺されかけただろうか。

何度手足の爪を剥がされ指を捻り切られただろうか。何度腕を、足を今のように人間とは思えない膂力で千切られただろうか。何度首を絞められ窒息させられただろうか。もう数え切れないほど殺されかけたのは覚えている…。

ある種の諦観を覚えた男はブチブチと自分の筋肉が千切れる音を聞こえた。それは腕がなくなる予兆でもあると男は痛みに叫びながらも理解していた。

「あああッ！！あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッ！！！！」

そしてその時は来た。一際大きくブチィィという音がしたと同時に鮮血が舞った。室内にまた新鮮な血の臭いが漂う。

「ふふふ、起きましたね。おはよう。さぁまだ、まだまだ、まだまだまだ続きますよ？ほら！楽しいと言いなさいな！」

彼女の表情に変化は見られない。いや、表情は誰もが見惚れるほどの笑顔だが。それなのに見た者が感じる印象は熱くも冷たくもないというものだ。今の彼女の瞳を見た者はただ暗いという印象しか抱かないだろう。

彼女は更に男を責める。たった今千切った腕を投げ捨てると男の鮮血を流す肩に指を三本突き立てグリグリと抉り出した。傷口からは血と肉のグチャグチャという生々しい音が響いてくる。

「あ〝あ〝あ〝っ！！！あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っ！？！！！？」

「はぁ…叫んでないで楽しいと言いなさい。まだ右腕と左足が千切れただけでしょ？」

普通なら手足が千切れただけでショック死してもおかしくはない。それなのに死ぬことができない。その原因の一つは間違いなく設置された魔方陣だ。魔方陣のお陰で辛うじて生きていられる、魔方陣のせいで安らかに死ぬこともできない。

もう一つの要因はダリア自身の絶妙な匙加減だろう。人体の急所などは避けて可能な限りの苦痛を与え続ける。精神が狂えば沈静化させ、肉体の欠損が激しければ再生用ナノマシンや治療魔法で治癒する。

大きな要因はこの二つだ。これらによって欠損、治癒、欠損、治癒、欠損、治癒という無限地獄が完成する。

「ぁ、ぁ…ああ…ぁぁ、ああ…」
「？？？あぁ、血が足りないのね。でも大丈夫よ。ちゃんと千切れた腕も足も…何なら首も繋げてあげるわ。回復魔法も掛けてあげる。輸血もしてあげる。ご飯も三食出してあげる。でも――」
「うぅ…ぅ…ぁぁ…ゃ…ゃめ…」
「ぁぁ…ぁぅ…ぁあ……っ…あぅ…ぁ…」
「ころ、して…こ、ろして、くれぇ…」
ダリアは優しく語り掛ける。その時、室内で吊るされた男以外にも数人の呻く声がした。一瞬、眉をしかめその声の主達を見る。彼らは部屋の四隅に散乱していた。どの男達も腕か足、またはその全てがなかった。
「――でも、貴方達は殺さない。殺してくれ？ふふふ、殺すものですか。簡単に楽になんかさせない。身体も心もその魂までも全てが壊れるまで苦しみ、楽しみなさい。それが…それだけが葵様の手を煩わせたことに対する唯一の贖罪となるのだから…」
「ぁぁ、ああ…あああああっ…」
「ころ、して…ころし、て…こ、ろして…」
ただ静かに殺してくれと懇願する彼らを意に介することなくダリアは優しく語り掛ける。その姿は冷たくも慈愛に満ちた紅の聖女のようだった。
……。
……。

つい見入ってしまったダチュラはというと…。

「……はっ？あはは。いけないいけない、つい見入ちゃった…」

誰も見ていないのに意味もなく照れていた…。彼女はキョロキョロと周囲を確認すると軽く身嗜みを整え、扉に手をかけた。

「こほんっ。…ダリアっ、楽しそうだね！」

「これは、部長…。いらしていたのですね。申し訳ありません。思いの外、飲み込みが悪いのでつい狂育に熱が入ってしまったようです」

濃厚な血臭漂う部屋の中央でダリアは振り返る。その表情はいつも通りの無感情なものだった。ただし彼女の頬を僅かに垂れる赤色が一際際立って見えることで慣れないと静かな不気味さを感じる。

「えっと……教育？」

「ええ、狂育です。やや覚えが悪くて苦労します」

「…あれ？（なんか違うような…）えっと……教育、だよね？」

「？？？はい、狂育です。あの、それが……何か？」

「……？？？（うぅん？これは私の勘違い？）」

何か決定的な齟齬が発生している気がしないでもないダチュラだった。ダリアはダリア頭の上に疑問符を乱舞させながらも何を当たり前のことを、とでも言いたそうな顔をしている。

「……まぁいいかな。ん？…一、二、三、うわー…五人も？すごーい」

ここに来てダチュラは諦めた。それは別に重要なことでもないからだ。仮にダリアの言う教育で何かあったとしてもタカが虫ケラの一匹が廃棄されるだけなのだから、と考えを改めた。

そう判断したダチュラは部屋に転がる“残骸”を数えた。いくつかは欠損が激しくて難しいが全てに共通している首らしきモノを数えることで正確な個数を割り出した。

「いえ、それ程でも…。んんっ！それで部長もここへいらしたということは？」

「うんっ、その通りだよ！もう書類とかでストレスがすごいの。だからここで少し発散しようかな、って」

少しからかう意味も込めて言った賞賛の言葉にダリアは照れたようだ。無表情ながらも視線は左右へ泳いでいた。が、咳を一つすると元通りの表面上は厳格な副部長の姿になった。多少頬が赤いのは気のせいだ。

「……あまり私情でなさるのは感心しませんね。ダチュラ部長？」

「ぶぅぅ！そんなことないもんっ。それはほんの少しだから問題ないもの」

「…まぁいいでしょう。ですが、あくまでも名目は“情報の抽出”であることをお忘れないように。いいですね？」

そう、表上は“捕虜の取り調べ”と書類に記載されることになっている。それを理解しているダチュラも「わかってるわよー…」などと拗ねながらも了解の意を示している。

実際は尋問や拷問、果ては先程ダリアがしていたような拷問とも呼べないような暴力も含まれる。

勿論最初は形だけでも取り調べを行なった。万が一を見逃さないためにも必要だったからだ。単純な事情聴取に始まり、薬物や魔法による記憶透視、尋問をした。だが案の定と言うべきか必要な情報はなかった。

あとは――今の通りだ。

葵と敵対した。ただそれだけ、と言えばそれまでだ。しかし、それこそが彼女達には許し難い事実だった。これは情報部だけではない、葵を除く組織全体に言えることだ。

因みに葵は葵で無意識に家族を優先することがある。それが目下彼女達の嬉しいところであり不安要素でもあるのは……笑うべきだろうか。いや笑った途端に額に第三の目を作ることになるだろうが……。

「…あれ？ダリア、もう行くの？」

「ええ、今日はここまでです。捕虜の治療を済ませたら仕事に戻ります。…あ、機材はこのまま使われますか？」

ダリアは言うと無造作に使用したと思われる拷問道具を片付け始めた。鎖、男を吊るしていたフック、刃物、焼き鏝、有名なものでは鉄の処女（アイアンメイデン）などもある。他にもゴロゴロと。どれも血臭が残っている。

「んー？…ううん、いらないかな…。あ、これ以外は全部片付けちゃって」

「これ…肉切り包丁ですか？わかりました」

「♪♪♪」

「――――ッ！！（もう！もうもう！姉さんはいつでも可愛いな！）」

幼女体け、んんっ！小柄な少女のダチュラにはやや大振りの肉切り包丁をダリアは手に取り彼女に手渡した。受け取ったダチュラは場所も雰囲気もお構いなしにキャッキャッとはしゃいでいる。

「……（はっ！？）んんっ！誰かあるっ！来てくれっ！」

今居る場所がアレだが愛する姉の無邪気にはしゃぐ姿にダリアの胸中はキュンキュンして止まらない。言い表すなら「姉さん可愛い姉さん、はぁはぁ」か…。断じて変態ではない、愛でているだけだ。

「ハッ！副部長、何用でしょうか？」

「ああ、捕虜がまた“自殺を図った”。直ぐ治療を施せ。いいな？絶対に死なせるな」

自殺。勿論書類上に記載する記号のようなものだ。葵も見る可能性のある記録データだからそこは最大限に配慮している。ただし葵を騙すつもりは皆無だ。彼女達は純粋にこの程度の些事など葵の目や耳に入れる価値もないという判断の下そうなっているだけだ。

最も葵自身は何かしらあることを薄々感じ取ってはいるようだ。ただし家族に対して害意があるわけでもないのであまり重要視もしていないが。

「ははははっ！“また”ですか。わかりました。あとはお任せください。…おい運び出せ！」

「「「ハッ！」」」

四人の武装した女性が駆けつけた時と同じく素早く作業に入る。

担架へ散乱した肉片を無造作に載せていく。五つある胴体部分を載せる時は呻き声が煩いことこの上ない。一度ナイフを突き刺したのは仕方ないことだ。

「では部長、私は仕事に戻りますのでここで失礼します」

やがて血肉が全て洗い流されたところでダリアはダチュラに仕事に戻ることを伝える。

「はーい、またね」

「ハッ、部長も仕事はまだあるのですから“ほどほどに”お願いしますよ」

「もー、わかってるってばー…」

ダリアは表面上では無表情だが幼い反応をする小さな姉を見て内心では苦笑する。無邪気に肉切り包丁を振り回す姉を見てから部屋を出る。

少し困ったな、と考える。ダチュラが楽しそうにしていたから彼女が残りの仕事に少し遅れることも計算に入れて今後の予定を組み直そうと、彼女は密かに頭の中でスケジュールをまとめていた。

……。

……。

「ふふふ。…さて、と」

ダリアや他の武装兵が部屋から退出してからダチュラは小さく微笑む。歩き出す彼女が目指すのは“まだ”五体満足の捕虜が収容さ

れている大部屋だ。その部屋には今回捕らえた捕虜の全員が収容されている。

然程離れていない大部屋に着くと扉の横にあるパネルを操作しロックを解除した。

大部屋の中に入ると捕虜の全員が拘束されていない状況だ。共通しているのは捕虜全員が首に黒いチョーカーを巻いていることと皆一様に無気力で虚ろな目をしていることだ。これまでの過酷な責めに生きる気力そのものが衰弱している。

そして先程の黒いチョーカー。チョーカーは反逆防止用だ。対象に神経系の毒物を注入する機能が内蔵されている。この神経毒は僅かでも過剰投与すれば死に至るほどのものだ。オマケで縮まり絞める機能もある。加減を間違えると絞めて捻じ切ることもある。

「…くっらもっちくぅん！また君“で”遊びに来たよぉ。サッサとおいでよ」

寒々しい場所へダチュラは一切の躊躇もなく大部屋へ入った。呼び掛ける内容や態度は小学生が友達を遊びに誘う姿だったが大振りの肉切り包丁を片手に持っているのが全てをブチ壊しにしている。

彼女が現れた途端に室内の空気が激変した。

捕虜達全員が怯えた。ある者は突然泣き出す。ある者は凍えたように震える。ある者は神経質にまで爪を噛む。ある者は死人のような土気色の肌になる。ある者は、ある者は、ある者は……。

だがそれも捕虜の一人に指名が掛かったとわかると騒ぎは収まり、

ざわつき一つなくなった。あるのは多数の安堵と僅かな哀れみ。――ただ一人を除いて…。

「ぁぁ…！ああっ…いゃ、だ…！いやだぁぁああっ！！！ああっああああっ！！？」

「わぁお♪今日も元気なんだね？いいねいいね♪――これなら今日も遊べそうだよ」

指名された本人である倉持・K・アルフォードだ。錯乱し泣き喚く倉持。元気だねー、と無邪気に喜ぶダチュラに首根っこ掴まれて床を引き摺られる彼の姿はある種滑稽である。

両手に肉切り包丁と大の男を持つ幼じ…少女。そして錯乱して暴れる男をか細く小さな腕で捻じ伏せ引き摺り連れて行く。とてもシュールだ…。

そのまま彼女達は大部屋を出て（一人は引き摺られて）先程までダリアが遊んでいた小部屋まで移動する。

「いやだっ、放せ！放してくれっ…！ああ、ああっ…！」

「もう、大げさだなぁ。いつも上手にやってあげてるでしょ？何が不満なのよ。もう…」

「いやだいやだいやだイヤだイヤだイヤだイヤダイヤダイヤダ…！！！！」

「もー、うるさいなぁ…」

「――ッ！？ぐっ！かはっ――ごほごほっ！！」

僅かな距離を移動し終わり小部屋に倉持を小石のように投げ入れる。あまりにも喚くのでダチュラもイライラし始めてきたようだ。最後の扱いが乱暴になっている。

数メートル先まで転がり倉持が気付くと小部屋の中央に居た。そこへ突き付けられる肉切り包丁の尖端。妙に怪しく光っているのがまた怖い。

「……いい加減にしないとまた生きたまま殺(バラ)すよ？」

「――っっっ！！！」

もう何度同じことを繰り返しただろう。チョーカーの神経毒を少量投与することで身体の自由を奪い生きたまま少しずつ…少しずつ肉を削り落とされる。しかも神経毒で痛覚が麻痺しているから大きな痛みを感じない。

そして身体を削り取られる行為を抵抗もできずにただ見ることしかできない。その恐怖が想像できるだろうか。…痛みを感じない。でも痛いのは嫌だ。でも血も出るし肉も削られる。徐々になくなる身体。このままでは死ぬ。

「あはっ♪もう、そんなに怯えなくてもいいのに、クスクス。今日はおままごとしようか」

「っ…！ぁ、ぁああ…！うぅっ…！」

「私は優しいお肉屋さんで倉持君は可哀想な食用牛さんの役ね。それじゃ始め♪」

「や、やめやめて、くれ…！やめ――っ！！！」

おままごと。行為自体は子供のお遊び。しかしここで言うおままごととは血生臭いアカイ宴のことだ。会場も生贄もホストも揃った。そして今ここに赤い…あかい…アカイ宴の開演が発せられた。

「うわぁ！大きな牛さんだ！これなら今日もいいお肉が取れそうね

！」

「…ゃだ…や、めて…い、イヤな、んだ…！」

「大丈夫だよ、牛さん。怯えないで。私……上手にやるから――！」

上手くやる、と言った瞬間肉切り包丁を持った腕が消えた。否、目にも映らないほど速く振り切った。斬ったものは……彼の左腕上部。

「……――ッッ！！あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っ！！」

半秒。何が起きたのかを理解した倉持は悲鳴とも言えない咆哮を発する。不意打ちからくる激痛と肉体の一部消失という喪失感。そしてやはりこうなった、という諦観と脱力感。

クスクスと楽しそうに嗤うダチュラは肉切り包丁を一振りして血を払う。大動脈を傷付けたようだ。ドクドク、ドクドクと凄まじく出血していく。正に命が流れ出るが如しだ。

「肩ロースぅ♪んー？あははは、うわぁ、血がいっぱい出ちゃったね。ちょっと失敗しちゃった。あ、でもでも今度こそは上手くやるから…ねっ！」

「やめっ、あ〝あ〝あ〝っ！！う〝ぁぁあ〝あ〝あ〝あ〝っ！！」

左足大腿部から下をゴッソリ斬り取った。ただし倉持は耐え難い激痛と現実に暴れていたために傷口はギザギザに抉れてしまっている。それが更なる痛みを与える。

「あぁもう中途半端にモモ肉が…動いちゃダメでしょ。手元が狂っ

てまた失敗しちゃったじゃない…。んん？おー、でもでも、お肉の色は綺麗だよ。ねっ、牛さん？」

「あ〝あ〝っ…あ〝あ〝…たすけっ、たすけ、て…あ〝ぁ…」

左上腕部と左足丸ごとを無くしても生きている。ダリアの時と同様に床に展開している魔方陣の効果だ。失った命は魔力を代替として生きる。死ぬことを許されない。

倉持は「たすけて、たすけて…」と涙ながらに訴える。しかし現実は無常にして無情。組織は敵対した者を許しはしない。

「もう違うでしょ？今の貴方は牛さんなんだから喋る時は“モー”でしょ？牛さんは言葉なんか話さないよ。…ほら、モーって鳴かなきゃ。そうすればおままごとも終わる…かも」

「ぁぁ…！も、モー…モー…ぁ、あぁ…やめて、くれ…！」

この残虐行為をやめてくれるかもしれないという小さな希望。その事実に倉持は欠片も残っていない人間としての尊厳も何もかもをかなぐり捨てて与えられた役割を演じた。

「あははははっ！うんうんっ、これで貴方も立派な牛さんだねっ。それじゃそのご褒美に…」

「はぁ…ぁぁ、はぁ…はぁ…くっ…！…ぁぁ…」

「今度は上カルビを切り落とそうかなー♪あははははははっ！」

「――ッッ！！！がはぁっ！あぁぁぁあああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッッッ！！！！」

希望は儚いから希望なのだった。今度は腹部を抉るように切り取られた。希望とは達成させようという努力と意志が必要になる。ただし、この場合は不可能であることもまた事実だ。

激痛からの解放。助かる希望をチラつかせてから目の前で握り潰す。これほど絶望の底へ誘うものはないだろう。更にはそれでも死なない…死ぬことができないのだから絶望感は底なしだ。

「あははははっ！絶望した？絶望しちゃったのかな？クスっ、あははははっ。やめてあげるわけがないじゃない！あははははははははっ！安心した顔しちゃって……バッカみたい！あははははっ！」

「うぐっ…ぁぁ…！がぁっ…ぁぁ…ぅぅ…」

クスクス。ダチュラが嗤っていた。甚振るように薄く薄く何度も斬り付ける。それは決して致命傷になるようなものではなく見せ付け恐怖心を引き出す行為だった。

「今後貴方達に二度と安らぎは訪れないわ。だって、貴方達はしてはいけないことをしたのだから！私の…私達のマスターに敵対したのよ？許されるはずがない…！許すはずもない…！本当は麻帆良の全てを荒野にしてもいい…！」

「ゃめ…もぅ…やめ、て…ぁぁ…ぐぅ…ぅぅ…！」

クスクス。楽しそうにダチュラが嗤っていた。肉を削るように浅く浅く何度も突き刺す。こちらも致命傷にならないように傷付ける。

「――でも、やらない…。お優しいマスターはそれを望んでないから…。あのね？私、優しいマスターが好きなの。あの甘くて、だけど春風のようなマスターが。だからやらないの…。わかる？マスターの望みだからなのよ？そしてそれは私達の望み…」

「ぁぁ…ぃゃ…ぁぁっ…ぐっ…ぁぁ…ぅぅ…」

クスクス。楽しそうに、そして苛立ちを隠すようにダチュラが嗤

っていた。耳を斬り落とした。指を斬り落とした。手足は既にない。全部斬り落とした。

「…だけど――貴方達は別よ。多少強引だろうと構わない。貴方達のような不穏分子は情報部として見逃せるものじゃないの…。現に貴方達はマスターに弓引いたのだから私達の考えは間違ってなかったわ…。クスクス、馬鹿な人…」

「ぁぁ…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいゴメンなさいごめんナサイゴメンなさいゴメンナサイゴメンナサイ…」

それでも死ねない痛み、苦しみ、悲しみ…。正にこの世の地獄を表したかのような場所。手足もなくなり、耳は削ぎ落とされた。正真正銘の“ダルマ”だ。一時期は手足を切り落として生きたまま塩水に漬けるという残虐な拷問方法。

「クスクス…今更自らの行いを悔いているの？あはっ♪あはははははっ！！――でも、ダメよ…！！貴方達は越えてはならない一線を越えてしまっているのだから！！！ああ…！許せない！許せるものですか！！憎くて…！憎くて堪らない！！！」

「ぁ、ぅ…！ぁぁ…ごめっ、ごめんなさいっ…！…も、う…しま、せん…からっ…！た、たすっ、たすけ、て、くださいっ…！」

憎い憎いと語りだしてからダチュラの表情が徐々に憎悪に染まる。楽しげな笑顔が狂笑に変わりつつあった。あと一歩、もうあと一歩踏み出せば今まで以上の方法で虐殺劇が開幕するだろう。

彼女の憎悪と怨嗟の聞くのは腕も足も耳もなくし芋虫のようになった倉持だ。彼は死ぬことも許されない。ただ自分の血でできた血溜りに横たわり、ありえない許しを請うのみ。

「…ねぇ、私の話しを聞いていたのかな？聞いていたよね？…ダリアじゃないけど貴方達の身体も心も魂も全てが壊れるまで楽になんかさせない。いいえ！例え本当に壊れたとしても何度でも！何度でも！何度でも！治してあげる！！」

うつ伏せで転がっていた倉持をダリアは蹴り付けて反すと腹部を軽く踏みつける。踏まれた時に千切れた手足の付け根からビチャッと血が吹き出たのを彼女が見て黒い笑いをしている。

「あぐっ、ぁぁ…そんな…っ！くっ…ああっ…！かえして…！うち、に…かえして、くれ…っ！ぁ、あぁぁ…！」

ここに投獄されてから二ヶ月近く。自分達の救出はどうなっているのか。外ではどうなっているかもわからない。それどころか今居る場所がどこなのかもわからない。わからないこと尽くしだった。

「家？帰して？クスクス、あははははっ！…どこへ帰ると言うの？もう地球上の…いいえっ、世界のどこにも貴方達が存在した居場所も記録も記憶もないというのに！あはっあははははっは、はは……貴方達の存在全てを消しても憎悪が収まらないのよッ！！」

踏み付けてい血が噴き出す様を延々と続けていたダチュラは足を退けて後ろへ大きく振り上げる。狙うは倉持の――…。

「――ッッッ！…ま、さか…ぅぅ…ぁ、あぁ…！そ…そん、な…！がっ！？ががあ〝あ〝あ〝ッ！！あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ッッ……ぁ……」

鋭く振り切った彼女の足が獲物を捕らえた。――瞬間。グチャッという血生臭い音とナニかが割れる鈍くも軽い音がした。ダチュラ

が蹴り上げたのは倉持の股間だった。世界中の男共通の弱点とも言える場所を一切の躊躇もなく蹴り砕いた。

これを止めに倉持は口から泡を吹きながら意識を手放した。ダチュラはある種の満足感からクスクスと笑いながらクチャクチャと潰したモノを踏み躙る。

「クスクスっ…永劫の苦痛を！涸れぬ嘆きを！！果てしない絶望を！！！味わいなさいッ！！！その身体、精神、魂に至る全てが滅びさるまで――」

赤黒い血のこびり付いた肉切り包丁を投げる。投げた先には床に転がる倉持の千切られた足があり見事に突き刺さる。

「――生き続けなさいッッ！！！あはははははっ！！！あはははははっ！！！」

狂ったような笑い声が血の赤と壁の白に彩られた小部屋の中に響き渡る。記録にも残らない血の宴は終わりを告げる。

彼女達、葵ファミリーが宙（ソラ）へ出発するまで彼ら捕虜三十数名の命運は最期の一つまで数を散らすことになる。

……。

……。

余談だがこのアカイ宴をしたあとの仕事はとても捗ったと言われている。

Side out ???

1979

番外編「あかいとアカイと赤いと」（後書き）

書いたはいいけど……もしかしたら失敗だったかもしれない。
Ｒ１５ではなくＲ１８じゃね？血生臭い的な意味で。
でもこの程度でＲ１８はないか。これくらいならよくあるよね！
ただ、どうもその辺りが作者は把握し切れていない気がするのですが…。
まぁだからこその練習だったのですがうまくいかないッスねー…ｏｒｚ
ちょっと本編に力入れて葵を木星まで飛ばそうかなと思います。
……時間ないけどね！？

ではでは！

第七十五話「宴会と約束と混乱（笑）と」（前書き）

いや…もうホントに…こんなに遅れて申し訳ない。
続きをどうぞ。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十五話「宴会と約束と混乱（笑）と」

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

麻帆良出発を明日に控えた今日は出発前の最後の宴会だ。会場は当然、喫茶クレイドルを用意した。

あ勿論、ただ旅立つと言っても一年後には帰ってくるつもりだからここの土地も店舗も売る気は全く無い。店の所有権は俺名義だが旅行中何かあった時のために代理人をエヴァちゃんに指名してあるから安心だ。

引き受ける代わりに大量の飴ちゃんを要求されたけどね…。彼女の何がそんなに飴ちゃんを欲しがるのか？製作者としては嬉しいけどさ。

もしかして……中毒？いやゴメン自分で言っていてこれはないな。なんだよ、飴ちゃん中毒って。どれだけ甘党なんだよ。そもそも俺の作る飴はハーブや薬草を使った香り高い飴であってそこまでジャンキーな甘さじゃ――…あ。

……こほん。すまない、話しを戻そう。

あー、それでだ。流石に誰にも何も言わずに出掛けるのは俺でも薄情だと思ったわけよ。例えば木乃香ちゃんや明日菜、それに刹那

ちゃんのこともあるわけだしさ。何も言わずに出て行ったら再会した時に何をされるか…（ガクブル）。

だ、だからあの日エヴァちゃんと晩御飯を一緒した次の日に主な親しい連中へ、まぁ内容は省くが「宴会やるから来い」という招待状を送りつけた。一応、本人の予定もあるだろうから無理に来なくていいとも書き添えている。

……そして宴会当日、今日の昼頃ここに集まったのだよ！

まぁメンバーは木乃香ちゃん、明日菜、刹那ちゃんを始めとしたパワフル中学生A組の皆。前三人はいいとしても後ろの面子はどこから話しを察知しやがった？まぁ過去の経験上、来ることは想定していたからいいけどさ。

で、だ。高音の嬢ちゃんや愛衣ちゃん、それとタカミチと刀子さんといった比較的やーらかい思考の持ち主である数名の学園関係者達だ。一度敵対しても死者も出してないし、怪我人も迅速に治療されたから大きな溝もないのよ。

あ、当然エヴァちゃんと茶々丸ちゃんは言わずもがなと言うやつだ。彼女達も呼ばずして誰を呼ぶのか。いや木乃香ちゃん達三人は即効で呼び出すけどね。

……こうして見ると意外と大所帯になっている気がする。事実だけど…。

呼んでから気が付いたけどさ。この人数は店内に入りきらない…。ウチの最大収容人数はちょっと詰めて五十人入ればいいほうだ。ここに陽月姉妹、精霊・悪魔・親衛隊三人娘、数十名の家族が参加す

ることになっている。

立食パーティーにしても収容人数に限界が見えるわけで急遽店外にオープンカフェ的なものも用意した。これで予定より増えてもあと二、三十人はいけるはず。なんとか全員に飲み物や食べ物が行き渡ることができる。

因みにだがエヴァちゃんと茶々丸ちゃん以外にまだ俺が麻帆良を出ることを言ってないので乾杯の時にでもブッちゃけようと考えている。

決して一人一人に言うのが面倒くさいとか、木乃香ちゃんや刹那ちゃんに言い辛かったとか、その勢いのまま有耶無耶にしようとか考えていたわけではない。いや本当に。考えてないからね。うん。

……それじゃパーティー開催の音頭を取らせてもらおう。こほんっ。

「えー、本日は突発的な宴会に参加してくれてありがとう。……突然ですが俺はちょっとの間麻帆良を離れます！以上！！では乾杯！！！！」

「「「「「乾杯っ！！ぃいえぇぇいぃぃぇぇえええええええっ！？！？！？！？」」」」」

そこかしこから皿やコップを落とした耳障りな音（料理や飲み物は載ってない。載ってたら俺が粛清している）、驚きの声、声も無く涙を零す子、呆然とする子が居る。一番多いのが驚いて詰め寄ってくる子だけどね！

うぅむ？Ａ組の皆は感情表現豊かだねぇ。俺如きでここまで悲しんでくれるなんてねぇ。嬉しいも、ぅおっ！？お前ら少しは落ち着けよ！押すな！押すなっての！？料理を取りに行けないだろうが！

痛いよっ！？後ろからイタイっ！？だ、誰だ！？今足蹴ったヤツは誰っ！？あっ！いてっ！？ちょっ！？明日菜だな今のはっ！！な、なんで真っ赤になって涙目してん…っ！？いたいって！？え！？だから無言で蹴るな！足癖悪いぞお前！？

いたいっ！？いたいっ！！今度は誰！？俺の腰を鋭く突くのは誰よ！？って！刹那ちゃん！？目尻に涙を浮かせて無言で突くのはどうかとお兄さんは思、って痛いって！夕凪の鞘で突きを放つなっ！！何か言ってお願いだから！！

…まったく、少しは大人しい木乃香ちゃんを見習って、げっ！？！？

「な、なんで兄様行ってしまうの？あ、旅行かー。もう兄様が大げさに言うから驚いたわ。…いつ帰ってくるの？三日後？それとも五日後？」

ち、ちょっと目のハイライトが半分消えた木乃香ちゃんが目の前に居ます！それもケーキを食べていた時に持っていたフォークを硬く、硬く握り締めて！握り過ぎて手が白くなっています！

…え？俺刺されるの！？えっ？フォークで！？えっ！？なんでッ！？！？

「……（ゴクン）い、一年を予定、し、しています…」

「……ぇ？」

カラン、とフォークの落ちる音がした。チラッと木乃香ちゃんの顔を見てみると完全に目からハイライトが消えていました！というか無気力状態？なんだか俺すごい悪いことをしたような気分にさせられます！

「……い、一年を、よ、予定、し、しています」

もう一度言いました。ええ、大事なことなので二度言いました。ドモってなどいない！少し噛んだだけだ！堂々と言いましたとも！ええ！……ごめん、ウソです。メガッサ怖いとです…。

「あ、アハは、はハは…。じ、冗談やろ？もう兄様ったら冗談キツイわー…」

……かのじょの　こわれた　わらうかおが　こわいです。

「い、いや違うから…。うん、じ、冗談じゃない、から…ね？こ木乃香ちゃんっ、とりあえず落ち着こう？ね？ねっ？あ、こっちに…」

流石に見ていられないので奥の応接部屋に連れ出した。その際に扉の前には陽月姉妹を配置しておくことを忘れない。こうしておかないと押しかけてくるのがA組だ。話しが拗れたらイヤとは言えゴメン皆。

でも俺がんばった！メガッサがんばった！少しヤンデレっぽくなった木乃香ちゃんをよくぞここまで連れてきた！あんな人目のあるところで殺傷事件とか勘弁だし！

……あれ！？この場合、密室だから刺されるのは俺か！？俺なの

か！？

「……ふぇ…」

「ちょっ！？木乃香ちゃん！？泣くのは待って！！ほ、ほ～ら？いーこ、いーこ」

……刺されるフラグは折れたが号泣フラグが立ったとです！？！？

部屋について早々に泣くとか勘弁してほしい！本当に俺が悪者じゃないか。ん？美少女な女子中学生を泣かせる二十代の男性…。もしかしなくとも俺が悪い人に見えないかね！？流石に俺も中学生に手は出さないよ！！

「……ぐすっ、ふぇぇぇぇ……うぐっ…に〝い〝ざま〝ぁ…うぇぇぇ…」

「おぅふ…。あーもー、今生の別れってわけじゃないんだからそんなに泣くなよ…」

「だ、だって、うぐっ…に〝い〝ざま〝まで居なぐなってまう…う、うぅぅ…」

あー…なるほど、親しかった刹那ちゃんとも今は表面的には疎遠になっているから俺とはいえ古馴染みが遠くに行くのが不安なのか。いい加減刹那ちゃんも開き直って木乃香ちゃんとイチャラブすればいいのにねー。

……でも刹那ちゃん達とは違う印象を感じなくも？なんだろ？お友達以上の感覚が…。

なんだろか？今の状況を客観的に見て……昼メロ？夫（刹那ちゃん）の妻（木乃香ちゃん）と不倫している間男（不本意だが…俺）

という状況に見えなくもなくない？この部屋には今俺達二人しかいないし…。いや、でもこの場合は…？

……あ、わかった！これは家族の情ですね？俺も理解しましたよ。ふふふ！

いやー兄貴分のような役割をしてきたけど本当の意味で兄になっていたようだ。木乃香ちゃんはこんなに俺のことを思っていてくれたとは嬉しいね！今日から木乃香ちゃんのことを“新☆妹分Ｒ”として可愛がろうと思う！

「あー、よしよし！ほら、泣き止め！なっ？」
「ふぇぇぇぇ…ずずっ…に〝いっ、ざまっ…」

“新☆妹分Ｒ”と認識したからには遠慮はいらないだろ。もう正面からぎゅっと抱き締めました。胸の辺りが涙やその他諸々のモノで湿るけど、それを気にするのは野暮というものだろ。

「うー…そうだ！約束しよう！一年後には必ず帰ってくる！な？それでどうよ？」
「ぐすっ…本当ぉ？…必ず帰ってくる？ウチを置いて行かん？」
「あ、ああ。本当だとも。約束だ」
「ぅぐっ、うん、約束…」

や、やっと泣き止んだー…。今まで可愛がってきた子の泣き顔を見るのは激しく動揺を誘うから困る。いや嬉しい気持ちも多分にあるんだけどね。ここまで懐かれていたのかと思うと嬉しいものだよ、うん。

……。

部屋から会場に戻ってからが大変だった。気にしてなかったけど会場から離れて一時間も経っていたらしい。その間部屋の中で何があったのかと皆が問い詰めてくるんだ。主に明日菜と刹那ちゃんが怖かった…。

仮に俺が何をしたというんだ、と逆に聞いてみれば二人してゴニョゴニョと小さな声で「キ、キス…とか？」じゃねぇよ！？俺が泣いている少女、失礼、美少女に何かするわけ無いじゃないか！

中学一年の美少女に何かするわけないじゃないか。俺だってそれくらいの分別はあるっての。するとしても愛でるだけだ！む！俺はロリコンじゃない！どちらかと言うとお姉さん好きなんだ！お淑やかなお姉さんが好きなんだよ！！

あれ？でもでも、あと十年くらい経てば木乃香ちゃんがそんな感じ、に…？それなら今からツバを……ってダメだろ！？せめて今の年齢が刀子さんのようなできるお姉さんみたいだったら…。

いや今のは仮の話しだからね？真に受けるなよ！大体相手が刀子さんのような美人さんだったら、こう……ムラムラっとすることもあるかもしれないけど今の彼女には一般人の彼氏が居るから論外だ。そもそもくっつけたの俺だし！

失礼。あまりにも理不尽な言い掛かりを明日菜と刹那ちゃんにつけられたから軽く現実逃避をしてしまっていたようだ。人間誰だって理不尽なことからは目を逸らしたい時くらいあるだろ。うん。

さて、目の前で赤くなっている二人と俺の隣で同じかそれ以上に赤くなっている木乃香ちゃんをどうしたのもか…。まったくキスな

どとしたこともないくせにマセタことをぬかすからこうなるのだよ。

……とりあえず何か食べるか。お、鳥カラだ！んぐんぐ…うまー。

……。

木乃香ちゃんの一件があってからも代わる代わる言葉をかけてくれる子達の相手をしていたら料理を食べ損ねていた。なんで作った一人である俺が食べられないのか。俺が食べたのってカラ揚げ一つだよ…。

……ちょっと理不尽じゃね？

なんて思い至ったから皿に料理を載せられるだけ載せて壁際に移動した。壁際には立って疲れた招待客のために休憩用の椅子と小テーブルを設置してあるのだよ。ここなら邪魔にはなるまいと思い来たわけだ。

そこで暫くの間、空いた腹を満たしていたわけだ。食事の最中も破天荒なA組の連中が無遠慮に突撃してくるから困ったような、嬉しいような…いや微笑ましかったかな。生物とはこうあるべきだと改めて思ったほどだ。

だってそうだろう?若く力強い生命力こそが未来を切り拓く最良の剣となると俺は考えるんだ。若さ、命は有限だ。寿命に限りがあるということはただそれだけで命の輝きを増すスパイスになる。

不老のこの身でそのことを理解した時は何とも言えない寂しさのようなものを感じたな……っと、そうじゃないな。とりあえず食事中は程々に相手しながらやり過ごしていたわけだ。

それでまぁ食欲がある程度満たされた時に思い出したことがあった。刹那ちゃんに言っておかないといけないことがあったんだ、とね。

……肝心の刹那ちゃんはどこかな、と……あ、居た居た。

刹那ちゃんは出入口近くの壁際に立っていた。何かあった時に入り口を塞ぐこともできるし外へ討って出ることも可能。そしてその場所は木乃香ちゃんを視界に収められる位置だけど決して本人には近寄らない。そんな位置だった。

木乃香ちゃんも刹那ちゃんのことを気にしているのかチラチラと見ている。しかし刹那ちゃんは我関せずを貫いていた。それに木乃香ちゃんは半笑いです。ちょっと泣きそうな雰囲気で…。

……マジで刹那ちゃんのあの悪癖をどうにかしないといけないかもしれない。

でも俺達は明日には麻帆良を出るから無理…というか、今までもさり気なく注意しているのに刹那ちゃんはのらりくらりとかわす始末だったし。はぁ、あの子って意地っ張りなくせに変なところで臆病なんだよな。

しかし…むぅ、明日ここを出るとして帰還は一年後か。皆が二年の三学期くらいには帰れる計算だな。できればそれまでに自力で歩み寄ってほしいところなんだけど……今までを考えると難しいよな。ま、それは帰った時にでも考えよう。

では、こほんっ、まずは念話で…むにょんむにょーん…。

ちょいちょい。刹那ちゃんこっちおいで。…は？木乃香ちゃんの護衛がある、だと？刹那ちゃん…あのさー、ここを襲うなんて愚を犯すヤツが今の麻帆良に居ると思う？…居ないでしょ。…でも、じゃないの、いいからおいで。

そもそも店から半径数百メートルに渡ってウチの子達が警戒しているんだからある意味世界で一番安全だって。

「……それで何の用ですか？」

「護衛の件なんだけどね。まぁ大したことじゃないけど今回のことで麻帆良の毒はなくしたから。二～三年は刹那ちゃんも少しくらい動き易いと思うよ」

……西から来た彼女には肩身の狭いこともあっただろうしさ。

過程がどうであれ結果的に倉持一派という正義に凝り固まった人間は麻帆良の地から消し去った。これで関西呪術協会の長である近衛・詠春の娘、木乃香ちゃんにちょっかいを掛けるかもしれない存在は少なくとも内側は皆無になった。

うん。こればかりは想定していなかったけど結果的に、というか副次的に木乃香ちゃんを始めとした力ある存在の安全の率を底上げすることになった…らしい。アイリとアンにそう説明された。結果良ければ全て良し、だな。

「っ……どういうことでしょう？」

「詳しくは聞かないでくれる？この業界で余計な詮索は嫌われるし、最悪は…わかるよね」

刹那ちゃんはそういう駆け引きはまだ苦手のようだ。裏に限らず下手な詮索をする者は嫌われるか消されるって。その辺は彼女もわかっているはずだろうに。

ん？…あれ？そういえば俺もそれほど得意じゃない！？確かに俺も根回しや駆け引きはするけど場合によっては圧倒的な力（質、物量、技術ｅｔｃ）で相手を捻じ伏せるからな。あ、“俺が”じゃくて“家族が”だけどな…。

「それはっ……いえ、わかり、ました」
「うん。刹那ちゃんはいい子だね」
「や、やめてくださいっ。私はもう子供ではありません」
「くくくっ、そう言っている間はまだまだ子供だよ」

なんだなんだ？少し前までは頭撫でられて喜んでたのに、今ではイヤがるか。これは――まさかの反抗期か！？いや、でも…イヤがる割りには頭に乗る手を払おうともしないし。あー、そうか。これが難しいお年頃というものか…。

「…まぁそんなわけだから学園内では多少肩の力を抜いていいから」
「はい、葵さんの配慮は無駄にはしません」

刹那ちゃん…言葉では澄ましているけどまだ顔が赤いよ。おー、一丁前にテレてんのか？真っ赤になって可愛いですね！もう兄貴分としては愛でるしかないと思うのですよ！

……可愛い刹那ちゃん可愛い！

ん？待てよ…。今刹那ちゃんは「配慮は無駄にはしない」と言い切ったよな。つまりできた時間的精神的余裕を他へ向けることがで

きるということだろ。…ニヤリ。その余裕は俺の都合で使わせてもらおうじゃないか！くくくっ！

「……くくくっ、無駄にはしないんだよね？神鳴流剣士に二言はないよね？」

「え、ええ…。その、それが…なにか？」

「なに、簡単なことだ。俺が帰ってくるまでに木乃香ちゃんと和解しな」

「なっ！？それはっ！！」

「できなかったら！……その捻じ曲がった根性を今度こそ叩き直す」

ダメだった場合…とりあえずハオとユエの軍事演習に直接放り込むことから始めるか。精神的に鍛えられることは間違いない。多少精神にトラウマを刻み込む可能性が無きにしも非ず、と言ったところだが……なんとかなるよね！

「捻じ曲がった！？葵さんそれはヒドイです！私は捻じ曲がってなどおりません！」

「やかましい。木乃香ちゃんが刹那ちゃんに無視される度に悲しそうにする。それを無視する根性を捻じ曲がっていると言って何が悪いか。いいから和解しろ」

なんかすごい強引なこと言っている気がするけど今それを気にするのはダメだよね。ここで諦めたら木乃香ちゃんがまた泣いちゃうかもしれないしさ。

「しかし私は…それにお嬢様の側に私は相応しくは…」

「悪いが今回ばかりはマジだ。諦めろよ。……（ボソッ）まだ死にたくないだろ？」

「最後の聞こえましたよ！？一体、私はナニをされるのですか！？」

なにって……ナニですが？その時は立派な武士になっていることだろうね（笑）。

……。

……。

うん、一応だがパーティーは無事（？）に終わった。タカミチから何やら一、二年内にナギ達の息子であるネギ君が何らかの理由で来るみたいなこと言っていたがそれどころではなかったので俺はキチンと聞いていなかった。

まぁどうせ行くなとか、行くならせめて事前に言っておいてくれとか、出来るだけ早く帰ってこいとか。……おい、予想がどれも麻帆良に縛るようなことしか言われてないようなものばかりなのはどういうことだろうか。

まぁどの道、俺のすることに変更はない。俺は気紛れで臆病者で我侭で小心者でどうしようもないヤツだが一度発動した計画は何が何でも遂行する。ただ独りではどうしても無理があるから家族の皆に協力してもらっているけどさ。

……今、月基地では“そうだ、木星へ行こう計画”がスタートしている。

もう月には大型移民船を建造するように指示も出してあるし止まらないよ。いやまぁ何度も言うが月に居る自動人形（オートマータ）達はニコニコして「楽しみにしていてください」と通信先で言っていたけどね。

時間特区を最大限使用して今から大急ぎで建造するとしても最大で三ヶ月は掛かる。木星までの航行はワープ航法かフォールド航法で移動時間を短縮するとして往復でおよそ二ヶ月強くらいを想定かね。木星まで一月とか何気に技術チートだな…。

……そして木星付近に最大で滞在できるのは六ヶ月から七ヶ月と考えるべきか。

目安としてネギ少年が来る二年の三学期辺りには帰還できる……予定だ。もしかしたらズレ込んでイベントを逃すなどという際どいスケジュールになるか？いや技術関係はチートなんだ。何とかなる、何とかなるさ。

……。

……。

明けて翌日、喫茶クレイドルを暫く休業することにした俺達は地下にある転移門（ゲート）を通って事実上俺の城であり領地でもある月基地へやってきました！

……ここの自動人形達って無駄にスペック高くない？

自由にしろとは言ったけど…これは、ねぇ？建設当初よりも基地も拡張されているし。これは基地と言うよりも都市じゃないかね。月面都市国家とでも言えばいいのか？え？収容人数は百万人以上を想定しておりますって？

……はは、笑えるね。今の家族だけでも二万も居ないのに。ははは、って笑えないよ！？

基地内には景観を考えて植林もしていた。こうなるともう地球や星が見える天蓋を見上げなければここが月とは思えないほどだ。水とか地球から運んできて川や湖、果ては海なんかも小さいながら創り上げてあった。

……ここの子達はマジで何がしたいんだ。国でも創る気だろうか？

それでも今までの人口は自動人形オンリーでしたけどね！しかも俺達がここへ来たとしても純粋な人間はゼロだよ！いや純粋な人間に特に価値を見出したことなんて皆無ですけどね。そういうのはどちらでもいいよ。

それとまぁ俺自身が人間と言えるのかそれこそ自信が持てないから例外だ。ただの人間は不老ではないのだよ。別に死んでこの世界へ来たわけじゃないから死者とも違うし。敢えて言うなら女神（幼女）に送られたから女紙もとい女神の使者（笑）かも。

……まぁなんだ。今は気を取り直して早速やろうと思う。

「さ！皆、大きな船を造るぞ！これまでにないくらい大きなのをな！」

夢は大きく１０ｋｍ級艦船だ！今までで一番大きな艦船は５５０ｍ級ドッグ艦だからな…。限界に挑戦だ！あ、時間は三ヶ月間と限られているから限界じゃないけどね！

「「「「「「……」」」」」」

あ、あれ？反応が…ない？お、おかしいなぁ俺は何か間違えたこ

とを言っただろうか？いやそんなはずはないはずだ。あれぇ？俺何かハズした？受けを狙ったわけでもないんだけど…。

……はっ！？まさか俺は自分でも知らない内に嫌われたとでも！？

あ、ありえる…。今まで皆には色々と無茶なこと言ってきた気がするし…。各部署から人員増強の要請があったとは言っても当初の予定よりも少し…大分多めになってしまったのは逆に彼女達に負担をかけてしまったかもしれない。

最近ではＣＯＳ－ＭＯＳのことだ。身代わりとは言えそれを操作していたのは彼女自身…。内心で複雑な思いに駆られても不思議じゃない…。

……おぅふ、俺の唯一の拠り所である家族から嫌われる？い、イヤ過ぎるｏｒｚ

皆の反応がないことに不安を感じて色々と想像していた。それで少しどころか大いに鬱状態へ突入しかけていたらクスクスと楽しそうな笑いがあちらこちらから響いていた。

「お、おぉ…。皆に嫌われただけでなく嘲笑われるとは……ぐすっ」

「「「「「なっ！？違いますっ！断じて違いますから！！」」」」」

ダメだ…。俺はもう立ち直れないかもしれない。ハハハ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――月面基地改め月面都市、同場所…。

Ｓｉｄｅ　？？？

「お、おぉ…。皆に嫌われただけでなく嘲笑われるとは……ぐすっ」

「「「「「なっ！？違いますっ！断じて違いますから！！」」」」」

葵が遠い目をして半放心状態にある最中、葵の家族であり臣下であり友である二万近い数の精魔奇兵やミリエールやオリビエらなど少数の側近達が混乱した。

彼女達は直ぐに葵の誤解を察知したので否定したが件の葵は最愛の家族達に拒否されたと勘違いして軽く茫然自失状態…。瞳の色は濁り生気が減衰している。こんな状態の彼にいくら声を張り上げようともその声自体が届かない。

さて、こうなると“困ったちゃん”が現れる。それは葵の一部の側近達だ。敬愛する主人が誤解とはいえ落ち込んでしまった。その彼の姿だが見た目には絶望のどん底に叩き落されたかのように彼女達の目には映る。

つまり…。

「わ、我が君！？おのれ！！誰だ！？恐れ多くも我が君に牙剥く者は！？吾らが叩き斬ってくれる！！！」

「今名乗り出るならば首を落とすだけで済ませよう…！出なければ――わかるな…！？サッサと出てこぬか！！！」

「こらこらこら！？二人とも落ち着かないか！今はそれよりも

主の誤解を解かなければ！！なんだかスゴイ曲解されておられそうだぞ！？」

「マリーちゃんの言う通りよぉ！ハオちゃんもユエちゃんも落ち着いてぇ！ここに居る誰もがそんなことしてないし考えてもいないからぁ！ねぇ！？」

こうなるのだ…。

葵ＬＯＶＥを公言して憚らない陽月姉妹のハオとユエが代表的なのはお約束だろう。ただし今回はユエまで、というのが意外だったが。彼女も何だかんだで葵スキーなのは変わらないということなのだろう。

さて、この二人だが先程の台詞を無視して普通に見れば静かに立つ姿だ。その姿からは無闇に暴れることは無い。だが一点だけ問題がある。身体から溢れ、巻き起こる魔力放出や禍々しい狂気は身も凍らせるほどの威圧感が放たれているのだ。

そんな時に彼女達を必死になって止めるのは葵ファミリーの良心たるミリエールとマリエールだ。特性や属性は異なるが莫大な魔力を保有という点では側近達（ＡＩ娘達は除外）は拮抗している。

ただし精霊の性質か元から彼女達の性格か純粋に心優しい彼女達は攻勢的な戦闘ではなく守りが得意だ。火の精霊マリエールは例外と言えるかもしれないがそれでも好戦的ではない。キレると怖いが…。

悪魔とは違うのだよ悪魔とは、とは元精霊のとある精魔奇兵の言葉だ。後に元悪魔の精魔奇兵達がイラッ☆として鎮圧した。

因みに最後の良心たるミリエールとマリエールの二人は葵の心の癒し的な意味合いを多分に占めている。いつもは宴会場となる魔法球［桜の苑］の中で彼女達に膝枕されながら舞い散る桜を見ることで心のリフレッシュをしているのは秘密だ。

――話しを戻そう。要は何が言いたいかというとだ。

「いや、いいんだ、いいんだよぉ…。今まで何だかんだと皆に無茶振りしてきたしね。今思えば愛想つかされても仕方ないし…アははハハ…う、うぇぇぇぇぇ…」

「ちょ!?主ぃぃぃ!?今ここでそんなこと言われたら二人が更に暴走…ッ!?」

誤解した葵がいい感じに壊れ、マリエール達がそれに巻き込まれる。と言うよりもいい加減に寂しがりを直せと思わないだろうか。小者とか臆病者などはまだいい。…いやよくないけど。

とにかく、だ。現在八百二十歳の男が誤解とはいえ家族の態度一つで泣くなと思う。うん、見事な男泣きだ。見方によっては深い愛情を感じさせる。これが依存であったなら救いが無いほどに…。

「「誰ぞ!?どこの下郎が我が君を悲しませた!?おぉ…!憎い、憎いぞ…!!!」」

「もうイヤーッ!このままじゃ魔剣化するかも!?それも暗黒剣の類に!?ミリー!!二人を止めろ!!このままではここが壊れる!!」

そして巻き込むのは更なる誤解をした葵フリークスの葵ファミリーの一部の側近達だ。

魔力放出よりも更に強力に禍々しい魔力の暴風がハオとユエを中心に吹き荒れる。いつもの凛とした魔力は感じられない。憎しみを具現化させたかのような黒々としドロドロとしか感じられない怖いほどに濁った魔力だ。

ミリエールとマリエール、更には遠巻きに見ている精魔奇兵達も流石にこの事態には若干どころかメートル単位で引いている。

「わ、私一人で二人を止めるのは難しいと思うのよねぇ…。そうだ！オリビエちゃん達も手を貸し…えぇー…」

二人では手に余ると考えて応援を頼もうと振り向いたミリエールだがそこに見たものは信じたくない光景だった。だって…。

「おい？貴様か？貴様が葵を泣かせたのか？おい、どうなんだ？答えろ！！」

「の、ノーサー！わ、私は何もあうとびっしゅ！？」

「嘘を吐くな！本当のことを…チッ！気絶しやがったか。次！そこの貴様！」

「えっ！？私っ！？」

「そうだ！脳タリンな貴様だ！！貴様か？葵を泣かせたのは？どうなんだ？答えろ！！」

「私、い、いえ、自分は…そんな、そのやってぐれぃぷにる！？」

「ハッキリ喋らないか！！ってまた気絶か。軟弱な…。次！貴様だ、貴様！！」

「はいぃぃ！？今度は私ですか！？」

オリビエが精魔奇兵を一人また一人と尋問しながらも途中で手を出して気絶させるという意味不明な強行に出ていたのだから…。

だが精魔奇兵の彼女達も相当なものだ。本来ならオリビエが殴ったただけでその部分が抉れるか粉微塵に吹き飛ぶことになるのは確実。それなのに殴られた彼女達は皆、気絶だけだ。更に言うなら頭にマンガコブが出来ているくらいか。

「えぇー……」

ミリエールは絶望した。それはもうどうしようもないほどに。だけど諦めない。オリビエがダメでもおっとりした自分と気の合うリビエラならば、と期待を込めて探した。そう、探したのが間違いだったのに探してしまった。

そして精魔奇兵達の少し奥のそこに探し人の彼女（リビエラ）は居た。そう、なぜかプラズマを宿らせる霧を纏いながら彼女はそこに居た。

「ね～？貴女なの～？貴女が葵ちゃんを悲しませた悪い子なの～？」
「そそそんな恐れ多いこと私にはできませんよ！！ち、違います！！」
「そうなの～？……でも口ではいくらでも言えるわよね～？」
「えぇ！？いえ、そんな！ええっ！？」
「だから～。ふふふ――貴女の身体に聞くことにするわ～」
「……はぁぁぁ！？！？！？」
「まずは少しずつ燃やしちゃいましょうね～？ウフ、ウフフフ…」
「い、いや…いやぁぁぁぁああああっ！！？！？！」
「逃げるということは～――貴女が葵ちゃんを泣かせたのね～？」
「違いますぅぅ！！あち！？かすった！！ってあちゃー！？！？」

プラズマを纏う霧が舞う中、それを紙一重でほぼ全てを避け続ける精魔奇兵。霧を避けることなど普通ならできない。それなのに“それ”をやってみせる…。日頃の鍛錬の賜物です、と言われてしま

えばそこまでだが、これは…。

こほんっ。…そんな光景がミリエールの眼前で起きている。現在進行形で起きている。ただ…燃やされた者は須らくアフロになるという不可思議現象付きで。そんなことが他でもない彼女の探し人であるリビエラの手によって引き起こされている。

「えぇー…」

ミリエールは再度絶望した。オリビエ以上の期待だったのに…。一度目よりも期待が大きかっただけに更に絶望したのは仕方のないことかもしれない。ここでフラッとしたミリエールは軽い眩暈を引き起こした。

「なによぉ？これぇ…。貴女達も暴走してどうするのよぉ…」

愚痴に近い台詞だがそれも仕方あるまい。誰が彼女を責められるものか。今一番泣きたいのは彼女なのかもしれない。実際に滂沱の涙状態の一歩手前だ。

それでも救いは現れる時には現れるものでもあることもまた事実だ。肩を落とすミリエールの背後に立つのは二つの小柄な女の子の姿だった。

「本当だねー。今はあるじの誤解を解くのが先決なのにー。シルビアもそう思わないー？」

「？？？んー？……ん（コクン）。お兄ちゃん…大事…だよ」

「ウーリちゃんにシルビアちゃん！よかったわぁ！二人は冷静なのねぇ！」

「うん。こっちは任せてミリーはあるじをお願いー。マリーは私達

と一緒に鎮圧ねー」

ミリエール達は百万の援軍を得た！というテロップが彼女達の頭上に出たような気がした。事態はそこまで深刻だ。切欠がギャグだし現在進行形でギャグだが…それでも深刻だった。

冗談抜きで力を全力解放しそうな陽月姉妹が勢いで月面都市を破壊しそうだから。容赦なく手近な精魔奇兵達を昏倒させていくオリビエ。プラズマの霧で燃やしアフロに変えていくリビエラ。

状況はギャグだがこれ以上ないほど事態は混乱している。切欠が葵の誤解というのがまた泣けてくる。いい加減に泣き止め八百二十歳の大の大人が恥ずかしくないのか、と小一時間問い詰めたくもなる。

「ええ、お願いねぇ！できるだけ早く主様には立ち直ってもらうからぁ！」

「行ったな。して？どのように鎮める？どれもこれも一騎当万の兵揃いだが」

「なーに簡単なことよー。我に秘策アリー。その名も“即売会”ってねー」

「なに？即売、会…だと？」

ウーリは早速準備を開始した。どこからともなく受け付けようの長机や誘導用のカラーコーン、商品用の棚などなど…。肝心の商品はまだだ。

「何かを売る、いや、ウーリ…貴様、“ナニ”を売るつもりだ？」

「ナニって…えへへー、あるじ関連のモノに決まっているよー」

「アレらか。……ウーリ、先取りは可能か？」

「これ次第かなー？」
「……頼む」
「んふふー、毎度ありー♪」

商品が並べられていく。品物は明らかに隠し撮りとわかる葵の寝顔や屈託のない笑顔、仕事中の真剣な表情を映した写真の数々。

その中でも極め付けなのが風呂から上がった直後の大胆な姿の写真だろう。上半身が裸だ。水滴がイヤンなところに流れるという一瞬を撮り収めた貴重な写真もあった。因みに全て非公式品だ。葵自身は何も知らない。

「はーい！今から緊急即売会を始めるよー！」

ウーリのこの一言から混乱は即座に収まった。全ての精魔奇兵やオリビエ、陽月姉妹といった困ったちゃん達は黙った。黙った、のだが…その目が尋常じゃないくらいヤバイ。まるで獲物を狙う猛獣だ。葵のレア物写真を狙う狩人達。

こうして混乱は思わぬ方法で収まった。葵や他の困ったちゃんが正気に戻った時には全てが終わっていた。因みにその日の売り上げは過去最高額を記録したとだけ記しておこう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　？？？

第七十五話「宴会と約束と混乱（笑）と」（後書き）

もう一度。ごめんなさい。
月まで来たのにまだ旅立たないなんて作者も予想外です。
なんと言うか葵の精神的弱さを今一度表したかったのもあるのですが…。
ちょっとギャグに走りたかっただけだったりします。アハハ…。
いやマジでごめんなさい。
次か、その次くらいには……ムリだな（キリッ）。

ではでは！

2007

第七十六話「白い壁と嫉妬と出航と」（前書き）

漸く更新できた…。いやはや遅れて申し訳ないです。
今年の夏は節電が奨励されているので夏バテが昨年以上に影響している気がしますねー。
冷たいアイスとかー、ひんやりとしたゼリーとかー、シュワシュワ炭酸飲料とかー…。
やめられないですね！それらがないと身体が持たないわー…。
では続きをどうぞ！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十六話「白い壁と嫉妬と出航と」

――月面都市広場…。

Ｓｉｄｅ　葵

月に来て驚いたことに気が付いたら翌日になっていた。マジで驚いた…。

昨日は確か？あー…そうそう、超大型艦船を造ろうって言って、それから…えー…なんだ？なにか受け止めがたいことがあった気がしたんだけど…ダメだ、ほとんど覚えてない。なにか最後に騒がしかったことだけは感じたんだけど。

……昨日本当に何があったし…。

とりあえず覚えていないものは仕方ないから当初からの予定であった超大型艦船建造計画を実行しようと思う……っと、その前に昨日何があったかはわからないけど皆の時間を無駄にしたことは謝らないといけない。

丁度今は家族全員が広場に集まっている。これだけお膳立てがされているのだからやるしかない。謝るなら早いほうがいい。

「ごほんっ、あー、皆昨日はゴメン。俺の早とちり（？）で一日を無駄にさせた」

皆の前で来たらまずは謝罪だ。キッチリ九十度頭を下げた。俺な

んかのために昨日一日を無駄にしちゃったから申し訳ないしね。

陽月姉妹を始めとして精霊・悪魔・ＡＩそれぞれの三人娘。アイリ、ファレノ、リチラを筆頭とした親衛隊や他精魔奇兵や自動人形の子達が勢揃いだ。今回は家族の全員が集まっている。

……こうして改めて見ると女の子しか居ないなぁ…。今って何人居るんだろ。

「「「「「いえいえ！無駄ではありませんでしたから！」」」」」

え？気にしてないの？よかったー、貴重な時間を無駄に…あれ？“無駄ではない”ってどういうこと？皆の雰囲気から察するに嬉しいことがあったとは間違いなさそうだけどさ。俺の知らない間に何かあったの？

「そうだよねー？無駄じゃなかったよねー？先を争うように……ねー？」

「「「「「ッ！それは言わない約束じゃ！？」」」」」

「えー？ウーリは“誰が”、“どこで”、“何をした”なんて言ってないよー」

「「「「「ハメられたっ！？！？」」」」」

……ウーリの一言で皆が動揺しております。マジで何があったし。

まぁよくわからないけど女の子が“ハメられた”なんて言わないほうがいいと思う。少し品がないよ？一体何がどうしたのかは知らないけど皆可愛いんだからそんな言葉使うのはお兄さん的にはどうかと思うのよ。

……ここは話しを進めて場の空気を換えるとするか。

「あー…何があったかは知らないけど今日から早速作業に…」

「お話中に申し訳ありません、閣下…」

場の空気を換えようとした途端に躓きました！背後から掛けられたこの声はアイリだな。この俺が家族の声を聞き間違えることはない。ほぼ確実に。

「何？何があったの？」

「…はい、月面都市駐在の自動人形一同が閣下にお見せしたい物があると」

「え？あの子達が？なんだろ…というかアイリ達は……おぅふ？」

お、おお…振り返った先にはメイド姿のアイリ達が居た！でも…おかしい。さっきまでは黒くてナチっぽい親衛隊服だったのに。それなのに今では完璧にスタンダードなメイド服を纏っていらっしゃる…だと！？

基本はスタンダードなメイド服だが良く見ると白いエプロンドレスのフリルがさり気ない可愛らしさを演出している。そしてヘッドドレスも下品にならない程度にフリルが飾り立てられている…。

……可愛いじゃないか！皆が魅力的で俺の情熱やその他諸々がハチ切れそ――。

こほん…失礼。それにしても、これは俺の性癖情報が加速度的に家族へ伝わっているという確かな証拠ではなかろうか？アンよ、ニコニコしているけど君はそんなに俺の趣味を暴露して楽しいのか？

……目の保養にはなるけどお兄さんのライフはもうレッドラインだよ…。

「皆待機しております。そしてこれからはこれが私共の正式な制服となります。……閣下はお気に、召しませんか？」

「そんなことはない」↑間髪入れずに即答した俺。

「「「「「「……（ドキドキそわそわ）」」」」」↑何も答えないアイリ達親衛隊一同。

おぅふ…。いきなり聞かれたからつい即答してしまった。自分の欲望というか一部の性癖を暴露したようで恥ずかしいな！うんっ！…じゃないよ！？早く誤解を解かないと！――好きだけどね！

「いやっ、あの…誤解しないでね？やましい気持ちはない（と思う）よ？ただ本当に可愛いねって思っただけでっ」

皆を変な目で見ているなんて誤解されたら俺…ハハハ、三百年くらい…いやプラスもう二百年くらい引き篭もるんじゃね？それも「工房」内の研究室で。もう、あれだ、万年単位で引き篭もる自信があるね！鬱だ…。

「か、閣下落ち着き下さい。…ちゃんとわかっておりますから。ええ」

「そっ、そう？それならよかった…」

よかった…マジでよかった！俺引き篭もらなくていいみたいだ！いやいやいや！それよりも家族に変な目で見られなくて安心したー…。

「ええ。それで、その…閣下？本当にやましい気持ちにはなりませんか？」
「え？……はぁ！？」

疑われた！？安心するのはまだ早かったとでも言うつもりか！？恨むぞ神（あ、女神様（幼女）じゃないよ？その他の神様だからね）よ！！八つ当たりだとわかっていても潰すぞコラーッ！？

考えてもみてくれ。俺以外家族全員が女の子なんだ。そんな中で「イヤらしいこと考えてますか？」みたいなことを聞かれるんだ。こんな時俺はどうしたらいいのよ？首吊れってか？ハハハ、笑え…ないよ！？

「その…“ご無理”をされておられるなら私は…ッ！？（わかってるから！睨まないで！）こほん…私共は、こ、ここ今夜にでも閣下のお部屋へ伺うのも吝かではないっ、と言いますか…！」

アイリはどうしたのだろうか？一瞬だけど彼女に対してファレノとリチラがすんごいプレッシャーと目で睨んでいたように見えた気がしたんだけど。……んー、今はなんともないな。気のせい、か？

いや、それよりも“ご無理”か…、彼女の言うそれは、つまり…俺の性癖のこと？そして今夜云々とは……お仕置きに来るということか！それも複数人で！？いやー、それは勘弁してほしい！俺はちょいSであってMっぽい性癖は皆無なんだ！マジでムリ！

……なんとしてもこのお誘いは回避しなければ…ならない！

「えっ？いや、その……あは、あははは…そ、その話しはまたいつ

か、ねっ？そうしようっ！今はっ…えっと……そうっ！あの子達が待っているからさっ！」

お願い！お仕置きはイヤなんです！完全に非があるなら認めるけど、これは性癖だろ？俺だって男なんだ。皆美人さんなんだぞ？これは仕方ないんだよ…。

「……そうですか。申し訳ありません。出過ぎた真似を致しました」
「「「「「申し訳ありません、葵様…」」」」」
「あー…うん、ゴメンね。皆の気持ちは受け取らせてもらうから今は移動しようか」

残念がってる！言葉では謝罪しても態度が残念がってるよ！…そんなに俺にお仕置きがしたかったのか。なんか彼女達に悪いことしたか？そして…。

「皆はどうしたの…？」
「「「「「いえ、別に…」」」」」

アイリ達の今夜云々の台詞を聞いた途端から陽月姉妹、精霊・悪魔・ＡＩ三人娘が少し不機嫌になっている気がする。今もアイリ達親衛隊員をジト目で睨んでいるし。まぁ陰湿な雰囲気じゃないから難しく考えなくてもいいのかな。

「ほらほら！あの子達が待ってるんでしょ？皆行くよ！」

早く船を造りたいけど明確な意思もないはずの自動人形である子達が態々見せたい物があるなんて言ってきたんだ。生み出した者としてはそのくらいの願いは叶えないとね。

……それに…この場の微妙な空気に耐えられないのよ。

そのまま大多数に指示あるまで自由待機としてから自動人形の皆が待つ場所へアイリ達に案内してもらった。

道中アイリ達を牽制する（ジト目で見る）ようにハオやユエを始めとした側近達のやや過剰なスキンシップが俺の神経を磨り減らしたのは別の話しったら別の話し。ただ一言……やーらかかった。ナニが、とは言わないが。

……。

……。

そんなわけで今俺は月面基地から月面都市へグレードアップした宇宙港にある造船エリアへ来た……のだけど俺の目の前には船などどこにもなくただの“白い壁”が左右に広がっているのみだ。

姉さん！事件です！！…いや姉など居ないけどね。ただそう叫ばずにはいられない現実が目の前にある！だって…それは、だって…！宇宙港がただの狭い倉庫に成り果てているのだから！

「……え？なにここ？宇宙港じゃないの？」

他の艦船はどこ行ったよ？看板には第二宇宙港ってあるけ…ん？？“第二”ってことは第一や三以降もあるってこと？なんだか俺の知らない間にも月面は開発されているんだなー、と改めて思う。

「…はい、マスター葵。こちらは月面に駐在する私達全員から貴方様への贈り物として設計、建造いたしました。こちらがスペックデ

ータとなります」

はぁ、贈り物？もしかして皆が散々「楽しみにしていてくれ」と言っていたのはこれのことだったと？でも俺贈り物をされるようなことをした覚えがないような。精々が生まれてくれてありがとう、って言ったくらいか。……え？なんで？

……まぁ今はそれよりスペック確認だ。何なのかを知らないと…。

「えーと…どれど、れっ！？」

ちょ！５０ｋｍ級戦闘移民艦！？……マジで？え？本当に？目の前の壁は船？なんでこれが目の前にあるの？昨日の俺の意気込みは無駄ってこと？何よりも俺の考えたものよりも五倍も大きい…だとｏｒｚ

空間モニターに表示された情報を読み取る。詳しい詳細は流し読みで省くが外観は超弩級のアングレカムかね。こっちのほうが巨大な分多少ずんぐりした印象だ。それに艦体後部に何かがドッキングできるようになっているような設計っぽいのか？

いやー、しかし真っ白な船体がすごくグラマラスで美艦（美人）だ――ッ！！なにっ？なにっ？――…なんだろう？なぜか背後から冷たい、気配、が…？

チラッと気配のほうへ視線をさり気なく、そう！さり気なく覗くようにして見てみた。そしてそこに居たのは――…。

「――――…（ニコニコ）」↑ハイライトの消えた目と太陽のように輝く笑顔のアン。

「――…（ダラダラ）」↑なぜかガタガタ震えて滝のような汗を流す俺。

不自然なまでニコニコした笑顔を浮かべた“アン…？”的なＡＩ娘のアンが居ました…。

こほんっ！話しを続けよう。…待って！続けさせて！なぜか今のアンからはよくわからないプレッシャーを感じるの！

んんっ！あー…主砲に相転移砲ってあるけど砲口とか戦艦丸ごと飲み込めそうなのが六門あるとかどんだけー、ってツッコンだら負けかね？副砲はグラビティブラストが数十門、艦の各所に設置されている。

実弾・エネルギー系統の対空ガトリング砲や速射砲などの迎撃兵器が数えるのもバカらしいほど搭載されている。大小様々、用途も様々なミサイル発射口も死角をなくすように無数に船体に設置されている。ハリネズミ？

宇宙港も艦体後部に二つと中間に一つ前部下方に一つの全部で四箇所ある。一つの宇宙港に五個艦隊入港可能だから今後艦隊はそれぞれに入港することになるか。また艦載機の格納庫は別にありそれぞれ第一～十六まである。

戦闘“移民”艦と言うだけあり船体内部に亜空間技術を用いた空間拡張を施すことで艦の外観以上の内容量（国が入りそうだ…）を確保している。大まかに都市部を中心に平原や森林エリアが形成されており、オマケで山や海もあるようだ。

…月の子達は剛毅だね！俺も似たような物を造ろうとしたけど先

に造っていたとは驚きだ。でもこの艦は名称が未定らしい。あ、メモ書きがある、なになに…「ＰＳ．マスター葵がお決め下さい」…か。名前考えないと…。

「…マスター葵。こんなこともあろうかと思い建造いたしましたがお気に召していただけたでしょうか？」

「あ、ああ、素晴らしい性能だ。気に入った。ありがとう。それによくやってくれた。大変だったでしょ？」

「…あぁ、マスター葵…勿体無いお言葉です。ですが大したことではございません。私共自動人形（オートマータ）は貴方様にお喜びいただくことこそが喜び（悦び）であり存在意義でございますれば」

多少自己犠牲が過ぎるところがあるけど嬉しいこと言ってくれる。でも面と向かってハッキリ言われると恥ずかしいし照れてしまう。それでもお礼は言うべきだからもう一度ありがとうと言うのは忘れない。

……キチンと感謝も謝罪もできないヤツに碌なのはいない。俺はそう思う。

しかし、この子…いや月の自動人形達は本当にスペック高いなぁ。既存のデータのみとは言え量産を改良くらいなら勝手にやってくれそうな気さえする。それに“時間加速特区”の生産力も凄まじい効果を齎してくれたようだ。

改めて目の前に広がる“壁”と思っていた５０ｋｍ級戦闘移民艦の設計図を見た。これを見る限り今後の拡張性も考えて意図的なデッドスペースがいくつもあるのがわかる。…だが、これは俺に改造または改良しろ、と言っているのだろうか？

自由にしていいとは言ったけどここまでハッチャケテくれるとは思いもしなかった。でもまぁ、本当は三ヶ月で建造するつもりだったから丁度よかった。その分を向こうでの滞在期間に追加できる。

建造期間が省けたから直ぐにでも準備しないと。とりあえず出航前に必要な検査項目は粗方終わらせてあるようだから、あとは一ヶ月間の試験航行で問題点の洗い出しやその他諸々の改善、検査が必要か…。航行中に重大な問題発生なんて笑えないし。

……これなら思ったよりも早く木星へ旅立てそうだ。

「お父さん…あとでオハナシ、しようか？」

「あ、ああ。わ、わかった…っ」

アンはなんで不機嫌そうなの？あ、これはもしかしてアレか？遅蒔きながら反抗期…か？相変わらず子育ては難しいものだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――一ヶ月後…。

一ヶ月間の試験航行を終えた彼らはついに木星へ向けて出航する。今は最終確認の真っ最中であり全ての精魔奇兵が割り振られた担当部署で忙しく出港準備に追われていた。

この一ヶ月間で洗い出された問題点は数多く、だがそれも小さな

問題ばかりという完成度の高さだった。そして準備もほぼ終わり今は出航のカウントダウンに入っていた。

先程も言ったように試験中は船体に大きな問題はなかったが小さな問題は多々あった。その問題があったのは艤装や表向きのことではなく内部に存在する都市部や内部構造についてだ。

別格と言ってもいいほど巨大な船体と亜空間技術を使用し空間拡張が施された広大な内部空間は単純な移動距離が莫大だった。あまりに単純なことだったのでその辺りの整備がされていなかった。

……月面所属の自動人形は優秀だが意外とうっかり属性持ちなのかもしれない…。

それらの解決策として緊急時を想定した艦内限定の転移門（ゲート）を各所に設置することと通常時に使用される電気自動車やバス、列車などの交通手段を確保した。都市部ゆえの単純だが効果的な対処だった。

最も皆個人で転移魔法を行使可能なので問題ないと言ったらそこまでなのだが、これに対して大多数から異議が挙がった。セキュリティ上の問題で艦内に置ける個人の転移は望ましくない、とのことだった。よって個人の転移魔法の使用は本当の意味で緊急時用だ。

残りの目立つ問題と言えば……アンが拗ねたことか。アンは自分に似ていて大きな戦闘移民艦に嫉妬してしまったのだ。何よりも葵が“彼女”に見惚れたのが許せなかった。彼の「なかなかの美艦（美人）だな」と言う言葉もそれに拍車を掛けた。

当然だが葵は謝った。それはもう必死に。だがアンは「どうせ私は小さいもん…。色々と小さいもん」とますます拗ねてしまう始末

で取り付く島もない状況だった。この時に“の”の字がアンの手によって大量に生産された。

葵はそれを見かねてそれならば、とアンの本体を戦闘移民艦に移植することにした。幸いにもと言うべきか戦闘移民艦には特筆する管理ＡＩを搭載していなかったから渡りに船だったのもある。

これにアンは「し、仕方ないよね？だってお父さんのお願いだもんね」といかにも不満気に仕方ないと言った風に取り繕っていたが赤く染める頬が嬉しさとテレていることを照明していた。

何だかんだと言いながらも新しい身体（船体）、それも今までのスレンダーな身体よりもグラマラスな身体になったことが嬉しいらしい。やはり女の子のアンはオトナな身体（船体）に憧れがあったようだ。

だからか、本体（船体）も彼女自身の理想に見合ったものになることが何よりも嬉しい出来事だった。アンも二十年近く経って漸く世間で言うところの所謂“難しいお年頃”という時期に入ったということだろうか。

ただし、彼女は忘れている。少女の姿をした移動端末は所詮仮初の身体だということを。ある程度身体情報の書き換えが可能とはいえ今の移動端末（スレンダーな）の身体が変わるわけではないと言うことに気が付いていない。

――月面軌道上…。

Ｓｉｄｅ　葵

「閣下、全ての準備が整いましてございます」

……漸く、か…。

流石にこれだけ大きな規模の艦船だから本格的な出航には相応の準備と時間が掛かる。今アンは移植直後で眠っていて居ないのだからこればかりは仕方ない。

いや、それでもこの一ヶ月の期間で試験航海を始めとして行い、その間にアングレカムからアンの本体を戦闘移民艦へ移送と移植、それに平行して様々な準備もしてきたのだからこれでも短時間で用意できたほうだ。

「…よし。それじゃアイリ。総員出航準備」

「ハッ。司令閣下より総員へ通達！出航準備！繰り返す、総員出航準備！」

「「「「「アイサー！」」」」」

……その手間も今日この時のためだ。

巨大なブリッジに居る数十人のクルーがアイリの命令に慌しく動き出した。戦闘移民艦は５０ｋｍ級という艦船では過去最大の大きさを誇ることからブリッジ自体もそれ相応に約４００ｍという巨大な造りになっている。

ここ第一艦橋は艦を統括する重要な場所だ。この他に準指揮権を

要する第二艦橋と予備である第三艦橋がある。これらは通常航海や戦闘時における指揮所として機能している。艦の全てを統括していると言っても過言ではない重要ブロックだ。

ただし艦内にある都市部を中心とした生活居住ブロックは平常時と緊急時の効率化を図るために統括を区別化している。現在の都市を統括するのは司令部に存在する生活班がこれらを取り仕切っている。

……都市があるんだから役所関係も設立しないと、かな。

出航準備が始まってから俺の腰掛ける司令席の前には出航状況を詳しく表した空間モニターが激しく乱舞している。表示されては消えて、次のモニターが表示される。上位の認証が必要なものには承認印を添付しておくのも忘れない。

ただ…瞬間的に空間モニターが百近く表示された時は軽く引いた。とてもじゃないけど並列思考能力と高速思考能力にプラスしてＩＦＳがないと把握できそうもない。紙媒体の書類よりは万倍マシだけどね！

「カートリッジ、ロード。カウント3…2…1…今、イグニッション…成功。大規模相転移機関、第一～十四基の起動を確認。機関出力、上昇中。エネルギー供給が規定値へ突入しました。続いて第十五～二十八基の起動を開始――」

「システムチェック…問題なし。エネルギー、各部へ正常に供給中。初期過剰エネルギーはバイパスからプールへ。出力調整を開始。…エネルギー供給の平均化を確認。機関出力安定中」

操舵士五名と整備班の機関士達、ここだけでも千名は担当している。これだけ大きいんだから当然だけどこれでも少ないほうだ。これに整備用ロボ（スパイダー）や自動人形も数えれば万に届くほどだった。

「通信システムチェック…ＯＫ。各種電波通信、量子間通信、亜空間通信、念話通信、次元通信、フォールド通信、他通信状態良好。艦内放送開始…現在当艦は発進準備中。各部署は所定の作業に従事せよ。繰り返す、現在当艦は発進準備中。各部署は――」

こうしてみると通信関係だけで結構な方法があるよね。通信班だけで十名以上居るし。月の子達は何を考えてこんなに通信機器を詰め込んだのかね？

「火器管制、システムチェック。各兵装へエネルギー供給を確認。主砲“相転移砲”、副砲“グラビティブラスト”の全砲門に異常なし。初期エネルギーをプールへ。…充填率８２％。即時発射態勢へ移行可能です」

「全ミサイル発射口の稼動チェックを開始。……全て異常なし。続いて迎撃システムの稼動を確認。出航の安全上、現時点での稼動は不可。出航後に自動迎撃システムへの移行を推奨。…承認を確認。続いて緊急バイパスの――」

大規模相転移機関２８基から供給されるエネルギー量ってどれだけ膨大なことか想像し難い。なんと言うか…こう考えるといいかもしれない。東京都と埼玉県を丸ごとラピュ〇にする感じだ。

……天空の土地～東京と埼玉～。

なんと語呂の悪いタイトルか…。相変わらず俺にはネーミングセ

ンスというものが欠如しているように思えてならない！と言うかそんなのどうでもいいし！

あ、でもこの艦って内部を亜空間技術で拡張しているから居住区に限れば北海道の三分の二くらいの面積を誇っているのよ。今思ったけどこれって意外と広くないか。これだけあれば小国としてもやっていけそうだ。

「艦内の重力制御システムに問題なし。“都市部”の生命維持システムも正常に稼働中。動植物への問題は見られません。各種生産プラントも異常なし。順調に稼働中です」

宇宙空間では何が起きても不思議じゃない。生命維持だけはシッカリと管理しないとね！そうじゃないと危険だしさ。重力制御や生産プラントの管理は徹底して安全を考慮しておかないと小さなミスを、なんて笑えない結果に繋がるかもしれない。

はぁ、これらの発進準備もアンが居ればほぼ一瞬で完了するんだろうな。この艦に移植するのも終わったばかりで規格の互換性を調整するために眠っていた。それも昨日終わったからあとは起こすだけだ。

ＡＩに様々な管理を一任するのはそのほうが効率もいい、何よりも即応性が段違いだ。アンの居ない初回は大変だけど、目覚めたら次回からは即時発進とかできるようになる。

「ＡＩの初期起動を確認。形式番号Ｘ‐０１“改”次世代電子精霊融合型統合制御ＡＩ［アン］が稼動準備に入ります。情報ネットワークへアクセスを開始。第一、二、三…全回線の接続を確認。システムチェック…全て異常なし。――アン、起動します」

『たいへんよくできました』『おはよう』『だいすき』『はなまる』『おとうさん』『がんばろう』などの文字表記が空間モニターで表示されアンが目覚めたことがわかった。

起動して直ぐに俺の真横に移動端末を構成するナノマシンが集まり塊となり瞳の色は金色、銀髪をポニーテールにした少女の姿を形作る。二十年近く経った今、アンの姿は十五～六歳の外見年齢になっている。

……それでも不思議なことに成長してもなぜか女性の象徴的な部分は…くっ。

「んっ、んーっ！はふぅ…おはよう、お父さん。――何か…言ったかな？」

「うん、おはよ。何も言ってないね。…それで新しい身体（船体）の調子はどう？システムチェックでは異常はなかったけど」

「ん、んー？……うん、“いい感じ”かな。さっすがお父さんだね！前よりも調子がいいくらいだよ！」

「…そっか。それならよかった」

なるほど、調子がいいのか。えーとメモメモ、大きな問題点はなし。他の艦でも改良は可能、と。んー…ただし一定以上の高性能ＡＩが必須、と。あとは…時間くらいか。

やはり、プログラムやＣＰＵなどをヴァージョンアップさせたことに間違いはなかったか。超弩級艦になるから移植する時にできる限り処理速度の向上や新プログラムの追加も必須だったからやったけど…いやはや、問題なくてよかった、よかった。

……でもまぁ、念のためにあとで個人的に再チェックしてみるか…。

「???お父さんどうしたの?難しいお顔してるよ?」

「ん?あぁ、アンは可愛いねって考えていただけだから気にしなくていいよ」

「えっ!?そっ、そうなんだ。へ、へぇ…。えへ、えへへ」

「???それじゃ早速で悪いけどアンはいつも通りに皆のサポートお願いね」

「えへへ、りょーかいであります!」

おぉ…アンがオペレートに加わっただけで処理速度が格段に上がった。しかも前よりもずっと速くなっている。それに処理する情報量が増大してもまだまだ余裕がありそうだ。これは本当に調子がいいんだな。

……うわー、もう準備終わりそうだ。早っ!

……。

それからアンの移植後の航海準備は僅か数分で終わった。本来であればこの超弩級艦なら一時間以上掛かる残りの作業がアンの手に掛かれば瞬く間に、ってやつだ。

「――最終確認…オールグリーンかな。いつでも行けるよっ」

「よろしい。…閣下、出航準備完了致しました」

「それじゃ戦闘移民艦“ディモルフォセカ”発進。目的地は木星宙域」

「ハッ。ディモルフォセカ発進!目的地は木星宙域だ!航海班は進路の選定!閣下がご覧になっているのだ!こんなところでつまらな

いミスなどするなよ！！」
「「「「「アイアイマム！！」」」」」

こうして見ているとアイリのほうが俺よりも艦長らしくない？副長のような役割だけど実質的には彼女が取り仕切っているしさ。いやまぁ、精魔奇兵の全権は既に彼女にあるんだけどさ。

人間なら大きな戦力を行使する権限を丸々任せるなんて不安で仕方ない。でもまぁ…。

「…アイリ」
「？？？ハッ」
「信頼している」
「ッ！――ハッ！……（この身この魂が朽ち果てるその時まで閣下と共に！）」

こうしてアイリと信頼の再確認をした…のだけど、これを横で見ていたアンが不満気に膨れていた。それだけでなくどこから察知したのか陽月姉妹、精霊・悪魔三人娘がブリッジに駆け込んできた…。

「お父さんが悪いと思うの」

アン…。知らせたのはお前か…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

2029

第七十六話「白い壁と嫉妬と出航と」（後書き）

そんなこんなで葵を念願の宇宙へ送り込むことができたぜぃ！
やったね！作者（俺）！がんばれ葵（えっ！？）！！

あ、知っている人は知っていると思いますが、ここで一つ宣伝を…。
こほんっ。えー、当作品とコラボしてくださった作者さんがいます。
なかなかの長編で尚且つ楽しかったのでそちらもおススメです。
よろしければ探してみてくださいね？

ではでは！

第七十七話「木星と衛星と採掘と」（前書き）

作者にしては展開が珍しく早いです。……どういうことだ？
ちょっと背景描写とか心理描写とか省いたダイジェスト構成を一部取り入れてみました。
ちょっとした実験ですね。
まぁこういうのは多用すると中身が希薄になる恐れがありますし今後は使わないかも…。
書き易いんですけどね！とても書き易いんですけどね！

それとコラボでありましたちょいとした切欠的なものもこちらでも表現してみました。
これでより一層なにかしらの繋がりができるのではないでしょうか？
まー、ちょっとしか触れてないから程度の問題ですがねｏｒｚ
ごほんっ！では続きっ！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十七話「木星と衛星と採掘と」

――地球＝木星間航路上…。

Ｓｉｄｅ　葵

月を旅立ってから今日で一月近くが経つ。現在は木星まで二日の位置だ。これも転移航法（ワープ）や亜光速航行で最短の航路を突き進むことができたからこそだ。ここに来るまで色々あったようななかったような。うん…。

航路上にあった火星の衛星フォボスとダイモスに採掘用無人機器を投下して月へ輸送するように皆で調整もした。ただ木星宙域に行くだけじゃアレだから行き掛けの駄賃というやつですよ。

火星＝木星間にある準惑星ケレスや小惑星帯にも採掘用無人機器をいくつかバラ撒いてきた。これらから採掘されるものも月へ輸送されるようになっている。資源はいくらでも蓄えておいて損はないからな。

これまで火星の衛星やケレス、小惑星帯にバラ撒いた採掘用無人機器は適度に採掘したら月へ帰還するようになっているから下手な証拠も残さないはずだ。

あ、その小惑星地帯に調査に行った時に見つけた“謎の鉱石”が原因でちょっとした事故があって俺とラミエルさんが巻き込まれて強制転移しちゃったし。まぁだけど結果的には問題なかったから気

にしない。

……まさか意図しない並行世界へ転移することになるとは驚きだった。

向こうの“麻帆良”で出会った人達は皆パワフリャーな人ばかりだった…。白いお姉さんとか、人外人力車とか、見た目若いのに渋い男性忍者とか、幼女っぽい変質者とか、他にも色々…。

それから色々あって帰還してみれば“謎の鉱石”は全て消失していて俺達の身に起きた現象も究明は困難であって今を以ってしても原因不明だしね。本当にあの不思議な鉱石はなんだったのかね？答えが出ないし…。

……でもまっ！綺麗なお姉さんとお知り合いに慣れたから結果オーライだけどね！

「……っ（ん？なぜかイラッとした…？）…閣下？」
「…あれ？（なんでムムッとしたの…？）…葵ちゃん？」
「あら？（なにかしら？…気になりましたわ）…葵様？」

アイリ？ファレノにリチラ？

「？？？（なんだろ？演算素子がバチッとしたような…）…お父さん？」
「「…？（なにやら気に入らぬ気配が…）…我が君？」」

アン？ハオにユエまで？

「あらあらまぁまぁ…（イラッとしましたわぁ…）…主様？」

「…むむむ？（突然イライラと…なぜだ？）…主？」
「ムゥー？（なんかイヤな気配がしたよーなー…）…あるじー？」

ミリーにマリー？それにウーリ？

「あん？（ムカッとした？…なんだ？）…葵？」
「あら～？（突然ムカッとしやがりましたわ～…）…葵ちゃ～ん？」
「…ん？ん？ん？（ヤな、感じ…？…ん？…なに？）…お兄ちゃん？」

オリビエ？リビエラ？…シルビアも？

「「「「「…なに考えた」」」」」
「えっ？断定っ！？疑問系じゃなくて断定なのかっ！？」
「「「「「いいから！なに！考えた！」」」」」
「いつもより押しが強い！？何も考えてないって！」
「「「「「……（ジトー…）」」」」」
「……くっ（皆の視線がイタイ！なぜかわからないけどすごくイタイ！）」

あぁ…今の俺の癒しはＣＯＳ・ＭＯＳとラミエルさんだけだよ。
なぜに皆から尋問紛いのことをされているのだろうか？身に覚えが何もないのだけど…。

「「「「「ゆっくり…オハナシ、しよう」」」」」
「……」

あおいは　にげだした。しかし　まわりこまれた。まおうたちからは　にげられない…。

……。

……。

木星まで残り二日の辺りからここまで色々あった。…本当に色々あった！それでも俺は辿り着いた！ここ木星宙域に！なんか様々なものを犠牲にした気がするけど…気にしたら負けだよな！

「木星って初めて見たけど大きいな…。アンも見てよ、衛星もゴロゴロある」

衛星が沢山イコール資源がガッポガッポですね！何があるのかは調査してみないとわからない。それでも最悪でも鉄鉱石くらいはあるだろうしね。

「そうだねぇ。お父さん、目的地には来たけどこれからどうするの？」

「ああ、最初に衛星カリストへ行こう。そこで資源調査をしたい」

ガリレオ衛星の一つ衛星カリストは当初からの目的地だった。一番厚いところでも２００ｋｍ前後の氷の層が惑星表面を覆っているこの衛星を採掘するのが目的だった。

もしかしたらメタトロン鉱石が出るかもしれない。そんな思い付きから態々ここ木星宙域まで来たんだ。…コラそこ酔狂な、とか言うんじゃない。湧き出る好奇心は押さえようがなかったんだよ。それができるだけの力もあったしさ。

「カリスト、ね。りょーかいっ！ん？でもでも、この艦船で近付くのは難しいから一定距離まで行ったら護衛艦隊の一部で向かうのが

いいと思うんだけど、どうかな？」

言われてみればそうだった。今乗っている艦は全長５０ｋｍという超弩級艦船だ。そんな艦船で巨大な衛星が飛び交う場所に接近するなんて自殺行為もいいところじゃないか。

……それに邪魔だからって相転移砲で衛星を吹き飛ばすなんてしたくないし！

「…それがいいね。それじゃ通常と大型の輸送船を二隻ずつで行くとして必要な人員と採掘用無人機と調査機材を満載してできる限り調査するか」

「その積載リストだと採掘したものは別に派遣した輸送船で運び出すのかな？」

「そうそう。仮にこれを第一次調査隊とするなら第二次以降は採掘品を輸送することを優先しようと思う」

たぶんだけど巨大クレーターであるヴァルハラ盆地辺りを調査、採掘してみれば何かしら発見できるかもしれない。それこそ冗談半分でここまで来たけどメタトロン鉱石が掘り出されるかもという期待もある。

……ネギま！の世界ってのもあるからナニがあっても不思議はないしね！

「うーん？でもカリスト自体が大きいから最低でも調査隊は第一～五次まで拡張して輸送艦隊は別で組織するのはどうかな？」

おぅふ…ヴァルハラ盆地のことしか考えてなかった。そうだよな…。一箇所だけ採掘しても出てこなかったらアウトだ。五つの調査

採掘部隊を展開するべき、か…。

最初に多少荒くても衛星全域に広域サーチを掛けて各種鉱石反応をある程度割り出してから最も採掘効率のいい場所を精密サーチしてその中でアンの言う通り最低でも五箇所は採掘場を設ければ余裕ができて安心できる…かもしれない。

「それじゃアンの提案通りにしよう。採掘場所は最良と思われる場所を最低でも五つ確保すること。それ以外は事前に用意した計画を修正して遂行する。どうよ？」

「うんっ、それでいいと思う。調査部隊の準備は航海中にほとんど終わってるから遅くても明日には出発できるかな」

航海中に調査のためにできる準備はほぼ万全にしてきたつもりだから出航は人員と機材を選定すれば完了だ。まぁ乗り込む人員自体が多いからそれで時間が掛かるのは仕方ないことなのかな。

「よしよし。だが本番はこれからだ。…アイリ」

「ハッ、事前に手配は全て済ませてございます」

「流石だ、アイリ。君は素晴らしい」

「ふふふ、感謝の極み、です」

その準備もアイリが先回りして手を打っている。子守から一国の宰相までなんでもできる彼女の手腕は精魔奇兵の中で随一だ。まぁそうじゃないと癖の強い精魔奇兵を纏め上げるなんてできないよねー…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――衛星カリスト…。

調査一日目…。

「アイリスより調査艦隊全艦に告ぐ。これより広域サーチを行なう。無人偵察機（トンボ）を全機投入せよ」

『『『『『アイサー！』』』』』

「アン、サーチで場所を絞り込めるのはいつかな？」

「何の障害もなければ４８時間あれば終わるよ」

「そうか。アイリ、四交代制で調査を２４時間体制で行なうように通達して」

「ハッ、了解いたしました」

調査三日目…。

「広域サーチ終了。続いて情報分析を開始。アンと科学班にこれは任せるがいいか？」

「まっかせてっ！私達なら直ぐに終わるよっ！」

「アン、因みにどのくらいで終わりそう？あ、大凡でいいから」

「んー？情報を比較して予測位置を出すだけだから…一日もあれば十分かな」

「それじゃ明日から本格的な調査開始か」

調査四日目…。

「情・報・分・析・完・了っ！あとは採掘候補を詳しく調べればいいかな」

「ご苦労、アン。通信班！調査艦隊へ通達！より上位の候補地から精密サーチを開始。条件を絞り込め！」
「アイサー。…総司令部より調査艦隊へ通達。ファイルデータＰＤ５Ｗをダウンロード。参照したのちに上位の候補地から精密サーチを開始。規定値以上の条件を絞り込め。繰り返す。ファイルデータＰＤ５……」
「あとは調査結果次第で上位候補地に採掘場を建設か。最低でも五箇所は欲しいね」
「閣下、最初の採掘は氷ばかりですので本格的な採掘は暫くあとになるかと思われます」
「そーですねー…」

調査十四日目…。

「閣下、最良の候補地が七箇所発見されました」
「七箇所も？因みに一番有力なのはどこ？」
「ハッ、確か地球名称でヴァルハラ盆地と…」
「そこだ！そこばかりは外せない！掘るべきだ！」
「！？は？あの、閣下？どうされたのですか？」
「いや、ゴメン、なんでもない。とりあえず七箇所全てを採掘させて」
「全てとなりますと当初の作業予定が遅れることになりますが、よろしいのですか？」
「遅れると言っても全体の計画から見れば僅かだ。問題があれば増員も検討しよう」
「ハッ、ではそのように取り計らいます」

調査から三十日。採掘開始から七日目…。

「…氷ばかりだね」

「ハッ、ですが想定内です。問題はないかと」
「…今どのくらい掘ったって？」
「今は全体平均で１５０ｋｍ通過致しました。一番は約１７４ｋｍです」
「採掘した氷はどうするか。…宇宙線なんかの汚染状況はどう？」
「汚染はありますが除去は可能。毒物も同様です」
「そっか。…じゃあ艦内の水の供給に使えそうなら補充も検討しよう」
「ハッ、了解いたしました」

採掘十日目…。

「閣下、第四採掘場から報告です。約１８２ｋｍ地点で氷層部分の突破を確認。現場調査で大量の岩石と微量な鉱物を発見、とのことです」
「いいねいいね。僅かでもあると言うことは近くに鉱脈があるということだ。現場の子達は一休みしたあとに作業続行だ。それと…よくやった、ありがとうと伝えて」
「ハッ、閣下のお言葉があれば彼女達も喜びましょう。そしてなお奮起致しましょう」

採掘三十日目…。

「それでまぁ全ての採掘場が資源採掘を始めたわけなんだけど……在り来たりな鉱石しか出てこない、だと…？なぜだ…？」
「ですが閣下大して落ち込むことはありません。今まで以上に鉄鉱石やレアメタルなどの資源も入手致しました。そのため組織（ファミリー）の資源保有量は過去最大となっております。決して無駄ではありません」
「いや、でもなぁ…。折角ここまで来たんだから何か未知の鉱石なんかを見つけたいじゃないか」

「未知の鉱石…ですか。それは閣下とラミエルが事故に遭う直前に見つけたと言う謎の鉱石のようなものでしょうか？」
「あー…そこまで不可思議なモノはもう見つからないと思うけどね。でも…そんな感じかな。未知の鉱物を発見！ってなんかロマンを…」
「ふふふ、左様ですか」

採掘四十五日目…。

「お父さんお父さんっ」
「おぅ？なになにっ？アンどうしたのっ？」
「えっとえっとっ！あのねっ！」
「アン、落ち着かないか。閣下が困惑されている」
「あ、ゴメンね、アイリお姉ちゃん…」
「自分に謝罪してどうするか。相手が違う」
「あ、そうだね。えっとゴメンね、お父さん」
「あー、うん大丈夫、なんでもないよ。それで何があったのさ？」
「え？……ッ！そうだよっ！あのね、変な鉱石を見つけたの！」
「変な鉱石？それはどこから見つけたのさ？」
「えっと、構造としてはシリコンに似た高分子金属の複合体みたい。発見場所は第一採掘場のあるヴァルハラ盆地だけど…」
「アン！アイリ！それは最優先で採掘決定だ！掘れるだけ掘って！」
「え？え？わ、わかった、けど…お父さん嬉しそう、だね？」
「畏まりました。以後はその鉱石を最優先で採掘するように予定を調整いたします」

――戦闘移民艦ディモルフォセカ…。

Ｓｉｄｅ　葵

花言葉に“元気”“富”“豊富”などの意味を持つ戦闘移民艦“ディモルフォセカ”。その艦内にある俺の研究室で先日発見した“とある鉱石”を研究している。

……まぁブッチャけるとメタトロン鉱石らしきモノを確認しているだけなんだけどね。

やろうと思えば錬金で創れないことはないんだけど、やっぱり生産効率が悪過ぎる。需要と供給が追いつかない。対応策として工業プラントエリアでは原子単位で再構成するプラントが稼動しているけど再構成って時間も掛かって効率が悪いからなぁ。

いやはや、だからと言うわけじゃないけどこうして採掘場所が発見できたことは僥倖だった。今のうちに採掘できるだけやってしまおう。メタトロン鉱石が枯渇するまで掘る勢いで掘り続けてやる！ってそこっ！？

「ラミエルさん何しているのさっ！？」

『んむ？んぐんぐっ…んぐっ。何とはいきなりだな。ただこのメタトロン鉱石、だったか？それを我が内に摂りこんでいるだけだ。これがまた美味であってなかなかに…』

「美味！？ラミエルさん味覚あったの！？いや！そうじゃない！そうじゃないだろ俺！」

味覚があったことは俺も知らなかったから驚いた！しかもメタトロン鉱石って美味しいの！？メタトロンってどんな味だろ…。名前からしてメロンっぽい味か？

いや、今それはいいんだ。問題はラミエルさんが生成前のメタトロン鉱石をガリボリと摂取していることだ。しかも余分な岩石部分は骨を吐き出すようにペッてしているし…。

もしかして文字通り“食べて摂取している”のか？ということは彼女の中に格納されている俺の愛機であるプロテアにもその影響、というか改造される可能性が？ラミエルさんには前科があるからなぁ。否定しきれない…！

今でさえブルーフ○ウやパワー○ール、エステバ○ス、アップル○ードなどの技術が詰め込まれた俺の愛機に今度はメタトロン技術が加わるのか…。

何気にこの子の中ってプチ格納庫になっているから色々と詰め込まれているからな…。俺でも中に何があるのか把握してないんだよ。ラミエルさんも勝手に何かしら取り込んでいるしさ。

『？？？なにやら取り乱しておられるが我が主は何が言いたいのだ？…あぁ、なるほど、そういうことか。ふふふ、我が主も仕方のない。――――食べるか？』

「食べないよ！？流石の俺でも身体ベースは人間なんだから鉱石は食べられないよ！！」

言うに事欠いてそれっ！？美味しそうに食べていることが羨ましいわけじゃないよ！？俺も無機物は食えないよ！！ラミエルさんは俺のことなんだと思っているのさ！？そんなに食いしん坊じゃないよ！！

それにしてもプチ倉庫になっているラミエルさんの中はどのくら

いの内容量を誇っているのだろうか？一度何を取り込んだのか目録を作らせてみるか…。

あ、倉庫と言えば［工房］にある［格納庫］は自己進化と言うか自己増殖と言うか空間拡張を続けて行く仕様なわけだが…。ついに命名を［無限倉庫］に改名した！もう倉庫内で向こう側の壁が見えないのよ！品物の目録と地図とナビがないと迷うことは確実だ…。

『ふむ？我が主もなかなかに我侭であるな。普段は好き嫌いをするなと仰っておられるというのに。ふぅ…何が不満なのだ？』

「だから食えないよ！？俺は人間ベースだから鉱石は食べられないの！ラミエルさんはナノマシンと有機液体金属で構成されてる電子情報生命体でしょ！？それと！タメ息吐きたいのは俺のほうだよ！？」

確かに！ラミエルさんの言う通りだ！まぁそれがアレルギーとか身体に悪影響があるならその限りじゃないけど。でも！それがただの好き嫌いならば許しません！食べ物を無駄にすることは神が許しても俺が許しはしない！！！

しかし！何度も言うが俺の身体は人間がベースなの！女神（幼女）の力で強力な身体と不老という特徴があるけど！あ・く・ま・で・もっ！人間がベースなの！！故に！鉱石なんかの無機物は食えない！

『なに、些細な違いではないか。んぐんぐっ…あぐっ。うむ…美味っ！』

「ちょっとー！？勝手に研究素材を食べないでくれるかな！？研究素材を紛失したらまたアイリに…」

食うなよ！？俺が内心で葛藤しているのに食うなよ！！しかも研

究用のメタトロン鉱石を全部食いやがった!?この子なにしてくれやがったのかな!?軽く2t近くあったのにさ!!それ全部食いやがった!!

あ、あぁ…どうしてくれるんだよ。さっき運び込んだばかりなんだ。それがものの数分でなくなったなんて言えないじゃないか…。

ただでさえアイリに保管している資源を使用する場合は申請書を提出するように言われているのにさ。しかもその使用用途も記載するように言われているんだ。

この場合はなんて言えばいいの?素直に「いやー、ラミエルさんが全部食べちゃった。てへっ♪」とか言えと?無理無理!と言うかなんだよ!?「てへっ♪」って!!キモイよ!!自分で言っててへコんだよ!!

……あぁ、本当にどうしたら――…。

「――自分が、何か?」

っ!!ビクッとした!ビクッとしたよ!!噂をすれば何とやらと言うがこのタイミングで来るとは思わなかった!

「ア、アアアイリっ?なんでここにっ?」

「…自分はメタトロン鉱石の総採掘量の報告に来たのですが。一体どうされたので?」

「そ、そうなんだ。いや、実は研究用に運んでくれたメタトロン鉱石なんだけど…」

『我が主の手違いで消失したのだよ。アイリも察してやれ我が主も言い出し難いこともあるのだから』

「ふむ…なるほど…いや、しかし…むむむ？」

ラミエルさーん！？貴女っ、なに人のせいにしているのかな！？消失も何もラミエルさんが食ったよね！？２ｔもの量を！最後の一欠けらまで！！食い切ったじゃないか！？それがなぜに俺のせいになるのかね！？

「…コソコソっ！（ラミエルさん！何言ってくれちゃってるのさ！？）」

『…コソコソ（我が身は全て我が主のものだ。あながち我が主の間違いと言っても違いではあるまい。この程度のことどうと言うことはあるまい。我が主の甲斐性の見せ所ですぞ）』

「…コソコソっ！（なにそれ！？ヒドイ！ラミエルさんヒドイ！甲斐性とかどうでもいいし！！）」

『……がんばれ！我が主！！』

この子言うに事欠いて俺に責任の一部どころか全部擦り付ける気満々だ！！がんばれ、じゃねぇし！！も、もうヤメテよねぇ…。自分のことは自分で責任持とうよ…。

「？？？閣下？なにをコソコソとしておられるのですか？」

「ッ！？い、いや、なんでもない、よ？その、ゴメンね？」

「あぁいえ、申請や報告書が出ていれば自分が言うことはありませんので」

「そ、そうっ？あははははっ…」

申請はしたけど使用した時の報告書はどうしよう。…言えない。とてもじゃないけど言えない。だって「ラミエルさんがペロッと食べた」なんて馬鹿げた理由言えないだろ。

正直アイリが具体的に理由を聞いてこなくてホッとした。こんなアホな理由は早く忘れたいものだ。いや、忘れた。もーうー覚ーえーてーなーいーのー。……ふっ、これで完璧だ。

「――それで運び込んだばかりのメタトロン鉱石が消失したと聞きましたが一体何が？」

「あははははっ。うん、ラミエルさんが食べた。困っちゃうよねー？」

『ッ――――（我が主…！）』

「ふふふ、そうなのですか。ラミエルが、ね…」

あ、あれ？今ラミエルさんから何やら悲痛な意思を感じたような？

「……」

「……」

『……』

え？なに？この沈黙は？何かあった――――…。

「？？？……ぁ」

しまったーっ！？油断したらボロッとゲロッちゃった！！ラミエルさん、ゴメン！！悪気はなかったんだ！

そして、今思えば…ここからラミエルさんの地獄は始まったんだ…。気が付いたらアイリの姿が消えていて次の瞬間にはドガンッという轟音がしていた。

何が起きたのか、それを確認しようと音のした方向を見るとメイド服を翻して足を振り抜いた姿のアイリと壁に叩き付けられめり込んだラミエルさんが居た。アイリが蹴り上げた時にスカートの中が

見えそうで見えないこの不思議！って違っ！？

……なにっ？何があったの！？と言うかアイリが怖っ！？

『ぐっ！？ア、アイリ…何を…』

「ラミエル…詳しく報告なさい。…貴様に拒否権などという上等なものはないぞ」

ナノマシンと有機液体金属を主成分とするラミエルさんは痛覚がないはずなのに痛そうに見えるし、錯覚だろうけど壁にめり込んでいる姿が震えているように見える。

『ぁ、ぅ…それは、その…な？わかるもの、だろう？…な？』

「報告は明確にしろ！！わかったか！？」

『サ、サーイエッサー！つまみ食いしました！サー！！』

「ラミエル…貴様っ…虚偽を述べるばかりか閣下の御名を穢すようなことッ！！」

『ぐっ…がぁぁあああッ！割れるわれるワレルーッ！！』

大きさ１０ｃｍのラミエルさんをアイリが壁から掴みだしてグワシッ！とアイアンクローした。ググッと握られたラミエルさんの身体からギシギシという嫌な音がしている…。

あ、欠片が零れてる？流石にこれは止めるべきだろうか？ラミエルさんを壊されたりしたら俺が困るし…。でもなぁ、彼女を掴むアイリの目がキュピーンと光っているのがマジで怖いしなぁ…。

とりあえず…研究用のメタトロン鉱石を追加申請するとするか。このままじゃ何の成果も出せやしないし。次は生成済みのメタトロンを４ｔほど申請しよう。そうするとなると――…。

「はぁ、まずは……書類だな」

俺の生涯の敵は、この紙っぺらなのかもしれない…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第七十七話「木星と衛星と採掘と」（後書き）

てれてれってれ～♪

あおいは　メタトロンを　てにいれた。

なんてね！今回はラミエルさんとアイリの回と言っても過言ではない！

葵とアンは準ですかね。

木星の衛星カリストにてメタトロン鉱石を手に入れました。

葵の愛機であるプロテアがＯＦ化する日も近い……かも？

あー、そうそう葵を別世界に送る分岐みたいのは次話かその次です。

作者が”ＩＳ”を題材に葵を別世界へ投下したように色々と書きたいですねー。

時間と気力と妄想力があればですがね！！

ではでは！

第七十八話「稼動実験とじゃれ合いと次は…と」（前書き）

おはようこんにちはこんばんは。鉄　桜でございます。
いつの間にかＰＶ３，３４６，９３２アクセス！ユニーク３１２，２１６人！でした！？
ありがたいですねー。今後もがんばりたいと思いますよー。
いやー、暑いと思っていたら今では夕方になると涼しくなりました。
Ｓ県Ｔ市在住の作者には嬉しい限りです。
暑いとアイスがうまうま、寒いと熱いお茶がホクホクなのですよー。
でもでも作者は暑いのも寒いのも苦手なのですねー。
弱い子ですみません。ええ、本当に…。

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十八話「稼動実験とじゃれ合いと次は…と」

――戦闘移民艦ディモルフォセカ…。

Ｓｉｄｅ　葵

どうも、九重・葵です。月を出発してから半年近くが経ちました。地球時間で大体九月ごろかね。季節感が乏しいから実感がない。木乃香ちゃんとの約束通りに帰還することを考えるとあと三ヶ月と数週間しか居られない。

それでも現在は相も変わらず木星宙域にて資源採掘の日々を過ごしている日々です。とりあえずカリストを採掘拠点にして残るガリレオ衛星“イオ”、“ガニメデ”、“エウロパ”の三つを今後の採掘場所として計画している。

カリストの採掘資源はこの艦にも運び込まれている。そして艦内にある超超長距離転移門を中継して月に運び込んでいる。火星の衛星二つと火星＝木星間にあるケレスと小惑星帯などは大型輸送船で採掘資源を月へとピストン輸送中だ。

いやー、無人機械技術が発達すると作業が楽にはなるし物量戦が可能になるからいいね。人類社会全体で言えば雇用関係とかでむつかしいオハナシになるんだろうけどさ。俺達みたいに特殊な環境化ではとても重宝する。

とまぁある意味変わらない日々を過ごしていたわけだけど俺も無

為に時間を過ごしていたわけじゃない。簡単に言えば天然のメタトロン鉱石を使用した技術確認というものだ。

知識としてはあるメタトロン技術を実際に実験して確実に使いこなせるように繰り返し実践した。何度も何度も同じようなことの繰り返しだが好きなことだから飽きもなかった。

……それに、ただ“使える”のと“使いこなせる”のでは雲泥の差があるからね。

簡単に言えば“力だけ強くてそれに振り回される愚者”と“強い力の揮い方を心得ている賢者”という違いだ。…ん？微妙に違うような気がしないでもないが……まぁいいか。

それで、だ。メタトロンはエネルギーとスピンを加えることで周囲の空間を引き込むように圧縮する性質がある。

これを基本格子として応用したもので宇宙船や無人の貨物などを打ち出す射出装置であるウーレンベック・カタパルトや、厳密には違うが影魔法のような格納装置のベクタートラップがあるのよ。

また、エネルギー兵器や実体弾をある程度逸らす障壁などの防御兵器もある。機体とパイロットに掛かるGを緩和する耐G緩衝機構。そして一際特殊なのはステルスシステムの一種などなどに応用できることだ。

そして純度の高いメタトロンは装甲や動力源、果ては量子コンピュータなどの素材に応用でき、それらの産物としてオービタルフレーム（以下ＯＦ）が実用化されたと俺の頭に刷り込まれた知識で理解している。

現実世界はともかく今俺が居るここは所謂“空想科学”が罷り通る世界だ。その証拠に俺は本来なら存在しないはずのメタトロンなどというトンデモ鉱物を発見してしまった。魔法もある世界で何を言っているんだ、と言われてしまえばそこまでだけどね。

……だけど“ないと思っていたものがある”。

これ以上に自分の認識を改めるものはないと思うんだ。…まっ！少しマジメに語ってみたけど今まで散々好き勝手に色々作ってきたけどね！その極め付け…まぁ直接俺が造ったわけじゃないけど…が５０ｋｍ級戦闘移民艦だよな。

「まぁそれはともかくとして次はアレを造ろうかね」
『む？我が主は次に何を造るのだ？』
「うん？んふふっ、メタトロンを使った半永久機関を、ね」
『半永久、機関だと？』

艦内にある研究室でラミエルさんに告げたこと、それは次に試作するアンチプロトンリアクター（以下ＡＰＲ）だ。メタトロン技術を語るには最もポピュラーな物だと俺は思う代物だ。

「その名もアンチプロトンリアクターだ」
『ふむ…リアクターと言うからには原子炉並みの出力を期待して良いのか？』
「勿論だ。見事に成功すれば最高クラスの性能を持つと俺は考えるね」
『なんと…我が主がそこまで確信を持って言える代物か』

ＡＰＲ、これは反陽子生成炉。メタトロン製のリアクターによっ

て反陽子を生成、これを陽子と衝突させることで対消滅を起こし、発生したエネルギーを動力や電気エネルギーに変換する半永久機関。

ある意味エネルギー問題を課題とする人類には夢のような機関だ。それに同じく半永久機関とも言える相転移機関と並び立つエネルギー供給源となるもの。無限の可能性を示してくれるものだ。

「今まで採掘してきたメタトロンと工業プラントで原子変換して生成しなおしたメタトロンも当面必要な量は確保できたからね。これが成功したら機動兵器の主機関を交換することも検討することになるだろうね」

『うむ、成功すれば我が主の言う通りになる可能性が高いな』

ＡＰＲは先に挙げたＯＦの動力源とすることで超高出力と小型化を実現できた。そしてそれはなにもＯＦだけに搭載できないと言うわけでもない。例えばウチの量産機である“イキシア?”に搭載してもいいはずだ。

大型常温超伝導バッテリーで駆動していたイキシア?がＡＰＲを搭載することで稼動限界を大幅に改善できるどころか半永久的に駆動できることになる。ただし、消耗品などの整備は必要だろうけどね。

「まぁ何はともあれ、だ。まずは実物を作るところから始めるかね」

『うむ!完成を楽しみにしておるぞ!』

ハハハ…完成したらラミエルさんの中でＡＰＲを単体で作り上げて俺の…俺・の!愛・機・を!勝・手・に!改造や改良を施すんだろうね!ただでさえＯＦ二～三機分のメタトロンを食べているんだからそれくらい可能だろうよ。

……。

……。

そんなわけで時間の有効活用で［工房］に篭って実時間で一週間掛けて試作ＡＰＲの一号基が完成したわけだ。大きさは試作と言うことで計測機器や大げさなくらい安全装置も付いているからゴチャッとしていて本来の物よりも大きくなってしまった。

この計測機器で必要なデータを取り終わってから改善点を洗い出して改良からようやく先行量産機の製造に踏み切ることができるのよ。ウチはこれでもかなり簡略化しているからよそ様よりはだいぶマシだけど。

「実時間で一週間…！開発期間五ヶ月と少し！試作品ができたどーっ！」

『我が主…いきなり叫んで一体どうしたのだ？』

「いや、ゴメン。ちょっと連日の徹夜でテンションがマッハで天元突破していたようだ…」

『そうか…あまり無理するでないぞ？我が主の身体は一人のものではないのだからな』

「うん、気をつけ、って俺は俺のものだからね？他の誰のものでもないからね？」

なんだか盛大な誤解を招きかねないことをラミエルさんに言われた。まったく彼女も冗談が過ぎて困ったものだ。それにしても、やはり月単位の徹夜はこの身を以ってしても少しだけ堪えたようだ。眠気はないが疲れた…。

今俺達はディモルフォセカ艦内にある実験施設に居る。早速だが試作ＡＰＲ一号基の稼動実験をするために来たわけよ。今も整備班の子達が忙しなく走り回っている。…なんか楽しそうだなー…。

『それでこの“ＡＰＲ”は想定通りに稼動するのだろうな？』

何もなかったことにされた！？あれ？俺の身は俺のものだよな？まさか知らない間に誰かが俺に“ナニか”した、のか…？いやいやいやいや！ないないない！ふぅ…ふぅ…。ない、よな…？

「…ま、まぁいい。こほんっ、十分に稼動するはずだ。安全装置や計測機器も付いているから安全だしね。たぶんだけどラミエルさんが想定している以上に出力は安定するし本体も頑丈なはずだ」

『なるほど。…うむ！我が主に何かあっては一大事であるからな。最低限それくらいの安全対策は必須だろう』

いやいや、元々俺は怖がりだから安全対策は万全ですよ？余程のドジでも踏まない限り失敗なんてないと思う。そんなことするわけがないじゃないか。ハハハッ！

……あれ？なんかフラグ的なものを立てた気がする。それも複数…。

「これが上手く稼動したら科学班と研究班で改良してもらうかね」

『む？その物言いだともう次に作るものを決めているように聞こえるな』

「くくくっ、まぁね。実は世界間を越える手段を作ろうと思っているのよ」

世界と世界の“壁”を越え得る手段の一つ。リリなの的に言えば

次元世界間を渡るために必須である“次元エンジン”みたいなものだ。いつか作ろうと思っていて今の今まで後回しにしてきた。

『世界間を越える？つまりタイムマシンでも作るのか？』

「いや時代と言う世界を越えるんじゃなくて文字通り“世界と世界の間にある壁を越える”手段を作るんだよ」

それもある意味では世界（時間）を越えるものだと思うけど、それは違う。俺は世界“を”越えるんじゃなくて世界“間を”越えたいんだ。その世界の時間軸上に存在する世界じゃなくて“並行”に次元を超えて移動したいのよ。

……本音を言うと他の世界も見てみたいのが半分ある。

『ふむ？…なるほど、“今居るこの世界”から“どこか別の世界”へ、ということか』

「その通り！将来何があるかわからないからさ。今の内に避難手段を一つでも多くあれば、と思ってね」

“できる”か“できない”かじゃない。“やる”と決意して実行する。小心者の俺は逃走手段と逃避先の見当と確保に余念はないのだよ。まぁ今回のはできればいいな、というくらいだけどね。

一応だが俺をここへ落とした女神様（幼女）だって“世界へ送る”なんてことができるんだから似たような不思議ぱわぁを手に入れた俺なら“世界間を越える”くらいはやってやれないこともない！

……はずだ！

それに多分大丈夫だと思うけど、やってダメだった場合はそれでもいいと思う。長い人生だし、いい暇潰しになったとでも考えるさ。

『要するに万が一の時のための保険というわけか。…しかし、解せぬな。我が主は我らが完膚なきまでに敗北するとでも言うのか？ならば心外であるぞ』

「いやまぁ簡単に負けるとは思わない。だけど、それは今だけかもしれない。未来では俺達を打倒する何かがあるかもしれない。そんな時のための保険だよ」

『む、むぅ……我が主の言うことは我も理解できる。だが、しかし、だな』

やー、ラミエルさんは理解しても納得はできない、と言ったところか。ウチの子達は何だかんだと言いながらも自分の力に絶対の自信を持っているから認め難いこともあるか。

意識改善されたのは精魔奇兵の子達かね。あと陽月姉妹は自分にも他人にも厳しいし己を律しているから問題は…ないか。ミリー達はそもそも戦いに積極的じゃないから別問題。オリビエ達は戦闘本能を抱えた悪魔だから問題以前の話だ。

……力に溺れることはない。それでも油断も慢心も怖いものだ。

「ラミエル…俺達は“不敗”かもしれないけど“無敵”ではないんだ。何があるかなんてわからないんだよ」

『……は？』

え？なにその間は？俺はおかしいこと言ってないはずだ。この世界に来てから勝利や引き分けはあったけど負けはなかった。これは不敗でしょ？引き分けがある時点で無敵じゃないよ。……だよな？

？？？作業中のはずなのに静かだなと思ったら皆が手を止めて俺

を凝視しているとはどういうことだ？ラミエルさんと似たような思いとかではないだろうな？

「……なに？そのお前が負ける？ないない（笑）、みたいな雰囲気は…。いや、皆も止まってないで作業を続けて続けて」

整備班の皆はまだこちらを気にしていながらも動いてくれた。ラミエルさんはまだフリーズしている。今日の彼女はなかなかに失礼な気がする。

それとこれは被害妄想かもしれないけどさっきの皆の視線と態度が「お前が死ぬ？ハ！ワロス（笑）」みたいな失礼な感情を察知した気がする。何度も言うが俺は不老であって不死ではないというのに、もう…。

『いや、我が主が負ける…ことなどあるのか？小規模ながら世界すら飲み込むほどの魔力量がある我が主が？卓越したありとあらゆる技術を身につけている我が主が？不変の概念であってもそれを“面倒だ”の一言で破壊した我が主が？最早組織内で常識外れのバグであると思われている我が主が？』

「……お前そんな目で俺を見ていたのか。…てか！誰だ！俺をバグと呼んだのは！？バグはジャックのほうだろうが！？」

……失礼な！俺は世界のバグなどではない！断じてないったらない！

確かに魔力と身体能力は十二分に高いだろうけどその他は技術チート（把握している限りでは！）だけだ！あ…ゴメン、操縦関係も補正があったような…。それにゼロ魔の錬金も意識していなかったけど使っているような…。

……意外と俺は何でもできるような気がする。あの時のドラゴンめェ…。

『我が主よ、不敬ながら物申すが許すが良い。――笑えぬ冗談だ。僭越ながら我が主に冗談の才能はありませぬぞ？』

「不敬とかはいいけど。そこまで言うか？普通…。俺のハートは繊細なガラスなんだぞ…」

『いや、しかしな……我が主が倒れる姿は想像し難いのだが…』

あれ？無視？後半の俺の訴えは無視ですか？ちくせう…マジでガラスハートなんだぞぅ。寂しいと泣くぞ？うぅぅ…！

あ？誰だ？今「泣いてる葵君可愛い」と言ったのは！イジメか？これがイジメなのか？お仕置きしちゃうぞ！？有象無象に無視されるのはどうでもいいけど家族に無視されると精神ダメージが甚大なんだよ！？

……ふぅ…ふぅ…失礼、少し取り乱した。

しかし、俺が倒れるか…。小心者の俺が戦闘の矢面に立つことこそが仕事か家族のため以外にありえない。それなのに俺が倒れる？…あ？あー、なるほど。ラミエルさんは俺個人が倒れることが敗北と考えているのか…。

確かにそれも敗北の一つではあるけど俺個人としては決定的な敗北じゃないな。あ、勿論怖いのは苦手だから助けてはほしいけどね。俺だって好き好んで痛い思いしたいわけじゃないし。

……でもなぁ…そもそも敗北の根本定義が違うよ。

「あー…根本的にラミエルさんの…この場合は皆も?…考える“敗北”と俺の考える“敗北”は意味が違う」
『なに?意味が違うとはどういうことか?』
「確認だけどラミエルさんの考えるのは俺が死ぬことを言っているんだよね?」
『う、うむ、相違ない。むぅ、しかし例え話でも我が主がお倒れになると言うのは抵抗があるのだが…』

例え話でも俺の死に抵抗があるわけか。冗談の時はズイズイ攻めてくるのに少しでもマジメな話しというかラミエルさんに言わせれば不謹慎な話しがあると途端に態度が変わる。

……いいじゃない。俺は好きだよ?“もしも”の話しは、さ。

まぁ勿論不快なものはその限りじゃないけどね。後悔の話しとか。あの時あーしていれば~とか、こーしていれば~とか、そういう後ろ暗いものは苦手だ。…うん、どうせなら楽しい未来を見詰めた話しがいいし好きだ。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、まぁ今は横に置いておこう。…で、だ。俺の言う敗北とは家族の誰かが傷付き倒れた時だ」
『我らが?だが、それは』
「いや勿論それが難しいことくらい理解してる。ただ…そのくらいの気持ちを持っているというだけは覚えていてほしいな、ってことだ」

誰一人欠けることなく。そんなことは夢物語であることは理解している。だけどそれに限りなく近付けることは可能だ。

あまり魔法使いサイドに精魔奇兵である彼女達の力を公開したくない。単体で上手くやれば［紅き翼］の個人に匹敵する実力を有している。それを隠すために各種装備でカバーしているわけだ。

それに彼女達は肉体こそ作り物だがヒトに限りなく近いものだ。肉体が消滅したとしてもその魂は契約した俺の中へと帰り時間を掛けて再生するはず。…ん？あー…はず、というのはまだそんな凶行が起きていないから確かめてないからだ。

『むむむ！それは承服しかねる！我らの存在など我が主お一人に比べれば些細なことですぞ！これは家族（組織）の誰もが覚悟し納得し願いしことである！』

「いやいや！なにそれ！？初めて聞いたよ！自己犠牲が強過ぎやしないかね！？」

『初めて言ったから当然だ！だが！それが事実であり真実だ！！』

そのハスキー女性ボイスで男前に断言しないでくれる！？惚れてまうやろ！！って！違った！

「待て待て待て！ちょっと待て！！」

『だが断る！！』

「なぜにお前がそれを知っている！？」

『我が主がよく言うから覚えたのだ！！』

「そうだった！忘れてたぁぁ…！！」

気に入らない時にギャグとネタも織り交ぜられる一言って「だが断る！」に限るものね！持ち上げるだけ持ち上げて、期待させるだけ期待させて断る時のあの快感はやめられません！！変な癖をラミエルさんが身に付けてしまったではないか！！

『ええいっ！我侭を言わずにいい加減に認めぬか！！我らのことなど気にする必要などないのだと！！』

「おいぃぃ！？この子は何を言ってくれてるの！？だから認められないよ！？」

……大事な家族のことだから俺も退けない話しだ。俺は皆が傷付くのがイヤなのよ。

最初はただ俺の身を守るために、と考えた。当時、親交のあった精霊や悪魔達に“存在を昇華し強化する”提案を話した。それで彼女達の協力の下に全員が精魔奇兵になることを承諾して今も協力してくれていることも知っている。

そのせいで色々と皆に役割があるのも理解している。だが、いやだからこそか。協力してくれている彼女達の潜在的力を隠蔽し尚且つ安全を最大限に図るのが俺の義務であり責任だと思う。

そして…って！そこの子達っ！なんで作業中の皆も手を休めてまでラミエルさんの言葉が正しいとでも言うように頷いているのかね！？俺のお前らを思う気持ちは間違ってないはずだけどな！？

「いえ、それは…。ですが彼女が正しい。これは当然です」

整備班の一人が代表して当然のことを言うように言ってきた。それに周りの皆も大きく頷いている。同意、ということか？

いや、そうじゃなくて！そこまでハッキリと心を読まないでくれるかな！？口にはしてなかったのにさ！皆ってそんな能力なかったよな！？シックスセンスでも目覚めたのか！？だとしたら恐ろしい

事態だ…。

「いえ、“愛”の力かと…（もじもじ）」

待って！一際大きく“愛”の部分を強調するのはこの際いいとしよう！だけど恥ずかしそうにテレるのはやめて！チラチラと伺うように見ないで！俺も恥ずかしい気持ちにさせられるから！！

……しかし皆の溢れんばかりの“家族愛”には感動した！もう大好きだ！！

『……』

「「「「「……」」」」」

「え？なにこの沈黙は？」

さっきまでの喧騒はどこ行ったよ？ラミエルさんも剣幕に近い言葉の応酬はどうした？それと一番に気になるのは皆のその複雑そうな表情は何よ？なんと言うかすごく嬉しいことを言われたはずなのに肝心なところが相手に伝わってない、みたいな…。

「「「「「……はぁ」」」」」

『……はぁ…コソコソ（そこまでわかっていながら…）』

「…コソコソ（仕方ないです。だって葵様ですし）」

「タメ息吐かれた！？なんで！？」

今度はガックリと項垂れたと思えば苦笑している。もう訳がわからない。…くっ！これは俺の家族愛度が足りないとでも言うのか！？

『ともかく、だな。我が主のお身体は最早一人のものではないことは

理解してくだされ』
「俺も家族の皆が大事なの。それは変わらない」
『……』
「……」

いや、睨むようにしてもダメだし、あと無言でプレッシャー掛けてもダメだからね？これぱかりは俺も引かない。いや、引けない。

『……ふぅ、妥協点では？』
「……ああ。じゃあ“互いを大事に”というのは？」
『仕方がありませぬ。それで手打ちとしましょうぞ』

むむむ？ラミエルさんが先に折れたか。ものすごく渋々といった感じだけど。でもこれでは俺が意地を張った子供みたいで大人気ない感じにならないか？

「「「「「むぅぅ……」」」」」
「はい！それじゃ作業再開して…って、なんで皆は不満そうにしているかね…？」
『我が主よ、そこは察してやれ。……（皆は“我が主を守りたい。でも守られるのも嬉しい”という複雑な想いがあるのだよ）』

ふむ？察しろと言われてもな…。なんとなく整備班の子達はラミエルさんと俺の判断に不満そうな気がするが…。

「？？？」

わからん！いや、なんとなく複雑な心境であるのは感じ取れるんだけど、さ。具体的に何を考えているのかがわからん。

『はぁ、いや、良いよ。それよりも仕事に戻るとしようではないか。皆も良いな?』
「……了解、です」
「「「「「むぅぅぅ…」」」」」

ラミエルさんが現場を仕切っているけど彼女達の目はまだ不満を表している。その視線の先はラミエルさんか?いくつかは俺にも向いている気がするが……気のせいだ。気のせいったら気のせいだ。

……しかしこの低いテンションでは作業の士気に関わるな。ふむ…。

「…無事に終わったら皆でお茶会にしよう。お茶菓子にチェリーパイを作ったからさ」
「了解です!……やたっ♪」
「おっかし♪おっかし♪えへへ」
「お茶会なんて久しぶりね。この前は…」
「家族(ファミリー)も増えましたものねー」
「葵君とお茶会だ~♪」

女の子は甘い物が好きと良く聞くけどウチの子達はそれに輪を掛けて好んでないか?まぁ俺も皆と家族団欒ができるから文句はないんだけど。なんにしてもこれで士気は上がったから順調だ。

……多少俺とラミエルさんのせいで作業が滞ったけどね。本当に申し訳ない…。

『はっはっはっ、どいつもこいつも現金な者達だ』
「くくくっ、例えそうでも俺にとっては可愛い子達であり家族だからいいんだよ」

『ふむ？そうか…』
「ああ、そうだ」

現金で大いに結構。これくらいの労力は安い物だ。それに家族のためだと思えばそれほど苦でもないしね。

…人間社会は本当に柵が多過ぎる。こればかりは今直ぐにはどうしようもないことだからぼやいても仕方のないことだけどさ。ある程度この世界で過ごしたら本格的に世界を飛び出すことを考えるか。

……。

「葵様！実験の準備が整いました！いつでもいけます！」
「はい、ご苦労様。それじゃ稼動試験始めるから皆よろしく」
「「「「「ハッ！」」」」」

広い実験室内で開始の合図と同時に皆が慌しくなる。研究室は俺達の居る管理室と特殊強化ガラスで区切られた実験室がある。そして今試作ＡＰＲの一号基は実験室にあり今か今かと起動する時を待っている。

むぅ…漸く稼動実験開始か。ラミエルさんと少し意見の相違があったからそれに時間が取られてしまったからな。まぁそれはそれで貴重だったし少し楽しかったからいい。今までは言い合いとか割と少なかったしね。

……さて、準備もできたようだし稼動実験開始だ。

……。

……。

結果的に言えば試作ＡＰＲ一号基の稼動実験は成功したと言える。発明のお約束とも言える爆発なんてこともない。初期稼動時の各種数値がやや乱れていたけどそれも直ぐに安定していた。

これを以ってＡＰＲは一応の完成をみたことになる。あとはこれをより安定性や安全性などの向上を目指すことになる。それらによっては組織（ファミリー）は相転移機関に次ぐ新たな半永久機関を手に入れることになる。

……こっちのほうが小型で高出力なため使いどころが多岐に渡ることは確実だ。

例として今後はイキシア？を始めとした人型機動兵器や無人兵器類の動力炉として搭載される。とは言えいきなりじゃ規格が合わないから改造や改良、または新規に再設計し直す必要があるけど。

例えば…今までの無人機動兵器（カブトムシ）を旧式のＡ型とする。既存のＡ型を改造してＡＰＲを搭載できるようにして強化したものがＡ？型と呼称する。そしてＡＰＲ搭載を前提として再設計しなおしたものを新型のＢ型となる。

今ある機動兵器各種を“Ａ？型”や新型の“Ｂ型”の二系統へ更新することを中心に管理、生産していこうと計画中だったりする。

そしてこれからはこれらが我が戦力の標準装備の一種となる予定だ。これはメタトロンが発見された時には俺が草案をまとめてあるから粗方の準備はできている。だから問題はない……よな？

「こほんっ…何はともあれＡＰＲは完成した。……明後日からは次を始めるか」
『む？それは“世界間を渡る手段の模索と構築”であったか？』
「ああ。ただ、モノの構築はもう頭の中にはあるからあとは設計図に書き出して実物を作るだけだったりするね」

できているのは当たり前だ。元より“リリなの”に登場する全ての次元航行艦に搭載されている次元エンジンだ。でもただそれだけだと“同じ世界の同じ時間軸、そして平行した世界にしか移動できない”のだから俺の希望に副っていない。

これではダメだ。俺が行きたいのは“違う世界の違う時間軸、そして平行した世界の更に向こう側の世界へ移動すること”なのだから。

今回作ろうとしているのは既存の次元エンジンを改造したものだ。この場合中身が別物なのだから名称も変える必要があるのだけど…
…面倒だから名称は変えない。…え？面倒臭がらずに考えろ？……
フッ。

……いいじゃん！世界違いとは言え移動することには変わらないだろ！？

失礼、少々取り乱してしまった。だがまぁ無理して名称を変更する必要はないというのも事実だろ。世界を渡るという過程も結果も違うけど“移動する”ということは同じだろ。…同じ、だよな？

『ほぅ…それでソレの名称は決めているのか？』
「とりあえずは簡単に“次元エンジン”と仮呼称しているね。多分だけどこれが正式名称になるかな」

『次元エンジン、か…。言い得て妙だが……微妙に意味合いが違うのではないか？』

「まぁ勿論厳密に言えば違うけど無駄に長ったらしい名前よりも簡潔に尚且つわかり易いほうがいいでしょ」

『そうか。理由はアレだが我が主がわかっているならば良い…ふんっ』

んー、なんっか含みのある言い方だな…。さてはさっきのことをまだ納得してないのか？理解はしても納得できない、という気持ちなのかもしれないけど……どうしたものかね。

……もう！拗ねちゃってるラミエルさんも可愛いなっ！もう！もうもう！

『……我が主がなにやら不埒なことを考えておるような気配が…？』

「不埒とはヒドイな。ただ拗ねてるラミエルさんも可愛いなと思ってるだけだよ」

『なっ！？なななな、にっをっ――っ！！ごほんっごほんっ！んんっ！…なにを言っているのか意味がわからぬな。……ふ、ふんっ』

うわー…わかり易い。興味ない振りしてチラチラと俺を伺っているところなんて特に、ね。かーいーなー！なんと言うか、こう…小動物のような愛らしさがあるね！

「よしよし。ラミエルさんの気持ちはキチンと理解してるからさ。機嫌直してよ」

『はふぅ……はっ！！ん゛ん゛っ！優しくな、撫でてもらってもっ』

「ね？」

『むぐっ……くぅぅ、わかった』

撫でるなと言うわりにラミエルさんは決して逃げない。こういうところが可愛いと思うわけですよ。それに何だかんだと言いつつも許してくれる辺りは彼女の優しさを表しているとも思う。それに…。

……んふふ。よしよし、これで…。

『だ、だがっ、我が主もご自愛願いたい！心配する我らの身にもなってくれ』

「あー、それを言われると弱いねー…。まぁ善処する、とだけ言っておこうか」

『ふ、ふんっ！政治家発言は信用が離れるぞ！』

「いいのいいの。いざとなったらラミエルさんや皆も守ってくれるさ」

『当然だ！我が主の御身は何があっても我が…我らが守り抜いてみせる！』

……くくくっ！その発言……確かに頂きました！！

「――じゃあ問題ないね！くくくっ」

『ん？…あー！？待て！だからと言って無茶するのは無しですぞ！？』

「だが断る！！」

『返された！？』

当たり前だ。やられたらやり返したくなるのはヒトの情というものだろうよ。んふふふ！それにこれくらいは家族のコミュニケーションだ！俺は寂しがり屋でもあるんだ！構ってくれないと…その、アレだ……困るっ！

「さぁ皆ー！実験も成功に終わったからお茶会にするよー！」
「「「「「はーいっ！！」」」」」
『だ・か・らっ！暫し待てと言っておるではないかぁぁ！？！？』
……あーあー！聞こえなーいったら聞こえない！ルールルールー！
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第七十八話「稼動実験とじゃれ合いと次は…と」（後書き）

葵は　アンチプロトンリアクターを　手に入れた。
これで機動兵器関連で稼動限界は皆無だぜぃ！
消耗品はあるから整備は不可欠だけどね…。

ラミエルさんも他の家族と一緒で葵が心配なのです。愛されてますねー。
臆病だ小心者だと言っている彼が好奇心の赴くままに行動するので不安なのです。
だからこその苦言だったのですねー。愛されまくりですよー。
葵もわかっているので無理はしません。無茶はするけど…。

オマケ劇場

葵「皆作業お疲れ様ー！ささやかだけどお茶会を用意したから楽しんでくれ！」
整備班の皆さん「はーいっ！」
ラ『皆も仕事終わりなのに元気であるな…』
葵「ほらほらっ！ラミエルさんにもあるよ！」
ラ『なに？いくら我でも生ものは……こ、これは！？』
葵「そう！ガンダニウム合金だよ！これで白いファーストも作れるね！」
ラ『（いや、恐れ多くて作らないが…）ま、まぁまずは一口…あぐっ、んぐんぐっ』
葵「どう？ラミエルさん、どうよっ？」
ラ『むぐむぐっ、んむっ……うむ！美味っ！！』
葵「よかったー」

ラ『お代わりを所望するぞ！』
葵「あいあい」
　完っ！
……本編には関係ないですのことよ？

ＰＳ．
とある番外編を考えなくては、と軽く使命感（笑）が湧きました。
まぁ暗黙的なことですがコラボ返しですね。
せ、責任が重いぜぃ…ｏｒｚ
だが…今まで提供されてきたネタを消費するいい機会と思い考えてみることにしました！
上手くできるかは……神のみぞ知る、という感じですけどね（えー…）。
ちょっと…うん、本当にちょっとだけどがんばるぜぃ！

ではでは！

第一回コラボ企画［近衛の守護者？］ｂｙ彼岸花さん。前編（前書き）

サブタイトルは「雛さん大地に立つ！（ディモルフォセカ）」なんてね。

さあ！コラボです！初コラボですよ？

コラボの相手はタイトルで丸わかりですが”ネギま！”の二次を書いている彼岸花さんの作品で［近衛の守護者？］です。

彼岸花さんは前に私の［葵と精霊と九十九神と悪魔と…］と恐れ多くもコラボしてくれたので感謝と一部の要請に応えてみました。

うん、コラボ返しですね。

熱い思いが溢れ出て許容量の四万字を越えてしまったので前後編に分けて投稿となりました。

上手くできているか戦々恐々ですよ？ええ。

では、どうぞ！

誤字報告も歓迎ですよ？寧ろお願い。多過ぎて探せない…。

第一回コラボ企画［近衛の守護者？］ｂｙ彼岸花さん。前編

葵ファミリーが木星宙域へ来てから十一ヶ月以上の月日が流れていた。この話しはそんな時期に起こる一つの騒動の記録である…。

……。

戦闘移民艦ディモルフォセカが木星宙域へ到着してから十一ヶ月が経った。今でこそ艦は落ち着いているが到着直後はそれこそ蜂の巣から飛び立つ働き蜂の如く大中小の輸送船や作業船が四つの宇宙港から休むことなく出入りしていた。

これまでに全十六の艦載機格納区画からも総数百二十七万機余りの無人偵察機（トンボ）、無人偵察機ステルス仕様（アカトンボ）、無人機動兵器（カブトムシ）、イキシア？などが木星宙域を調査、監視、警戒をしていたものだった。

だが、それも今では定期的な監視や警戒と資源衛星の仮調査が行なわれるくらいに落ち着いている。緊急を要する事柄も無い、ここ５０ｋｍ級戦闘移民艦ディモルフォセカはいつも通りの平常運転だ。

そして艦橋でもいつも通りの監視、警戒や接近する危険なデブリの排除という退屈な作業が続いていく――はずだった…。

――ビィーッ！ビィーッ！ビィーッ！ビィーッ！

「――――ッッ！！」

艦橋に鳴り響く耳障りな警報音と緊急事態を色で表すレッドアラート。突如として艦橋内に居る乗組員は現状行なっている全ての作業を一時中止して事態の把握に務めるべく動き出した。

艦橋内はまさに慌しい空間と言える。そんな中、艦橋後方にある扉が左右にスライドして開いた。そこは数ある扉の中で艦長席に最も近い扉だ。その扉から一人の人物が駆け込んでくる。現れたのはメイド服を完璧に着こなしたアイリだ。

「オペレーター！今わかっている範囲でいい！現状を報告しろ！」

「アイマム！！数分前、本艦前方の約７００ｋｍ地点に正体不明の高エネルギー反応あり！発生元は現空間のものではありません！現在、詳細を確認中！！」

宇宙空間で言う７００ｋｍなど目と鼻の先ではないか。どうしてこんなに接近するまで気付けなかったのか。オペレーターの報告を聞いたアイリはそこまで接近を許すとは…！と内心で歯噛みする。

過去、麻帆良の地下基地を自身の油断と慢心から襲撃された苦い記憶が思い出された。またなのか、と彼女の腸は後悔と情けなさで煮え繰り返りそうになっていた。今なら睨むだけで人を殺せそうな気がする。

「っ…通信班！総員、第一種戦闘配備！ただし、閣下には伝えるな！この程度のことでお心を煩わせたくはない！！特殊回線Ｂ２を使用しろ！」

「「「「「アイマム！」」」」」

「…緊急！緊急！総隊長より通達！総員、第一種戦闘配備！乗組員

は所定の配置に着かれたし！繰り返す！総員、第一種戦闘配備！乗組員は――」

通信班はアイリの命令通りに特殊回線Ｂ２…葵以外全員に秘匿通信で知らせる…を使用して第一種戦闘配備が宣言された。緊迫した艦橋は戦闘態勢へ即時移行する。

喧しく警告していたアラームは切られた。しかし緊急事態を示すレッドアラートだけはまだ止まらない。ここだけ赤と白が交互に織り成す世界になったかのような印象を抱かせる。

「オペレーター各員はこの現象の発生元を全力で洗い出せ！いいな！？座標特定を最優先で行なえ！！」

「「「「「アイマム！」」」」」

「他の者も事態の把握に務めろ！！これが敵性存在であるとは限らないが、こんなフザケタことをしたんだ！！絶対に逃がすな！！」

「「「「「アイアイマム！！！」」」」」

敵意を持った行いか何らかの事故か、はたまた気紛れな悪戯かは別にして無断でこちらの領域に入ってきたのだ。それ相応の対応を取らなければ相手に嘗められることに繋がりかねない。

組織（ファミリー）が嘗められるということは絶対に許してはならない。それは即ち頂点に立つ葵を侮辱されることに他ならないからだ。

故に――――…こんなフザケタことを仕出かしたヤツに思い知らせなければならない。もう二度とこんなことをしない…できないようにするために。

「っ！？――っ？総隊長！エネルギー反応が収縮しています！予想

される反応消滅まで約１８０秒！！」
「ッ……このまま逃がすな！最大限原因の調査を急げ！特に発生源の追跡（トレース）は絶対だ！！」
「アイマム！！」

アイリは考える。１８０秒と告げられてからエネルギー反応が揺らぎ始めた。このまま逃がすものか、と内心で愚痴るのを止められない。指示しておいてアレだが発生元を捕捉できるかも正直ギリギリとしか思えない。

「エネルギー反応の減衰を確認！目標反応の完全消滅までカウント３…２…１…目標消滅しました！」
「「「「「――ッ！」」」」」

想定していたよりも十数秒収縮するのが早いことと解析できたかは微妙なところであること。この二つが艦橋に居る彼女達全員を焦らせる。

「調査は、観測結果はどうか！！」
「現在、集めた情報を鋭意解析中です！もう暫くお待ちください！」
「遅い！多少精度が荒くても構わない！１０分、いや７分で報告を挙げろ！！」
「――ッ、アイマム！全力を尽くします…！」

無茶な指示だ。だが、指示したアイリも、動き出したオペレーターと解析班のメンバーもそれをわかっていて自分達のできる範囲で最大限努力することをやめない。

「――――……」

現在、精魔奇兵の全権を持っているアイリは誰にも気付かれないように静かに息を吐く。出せる指示は全て出した。あとは結果を待つのみだった。

クタッと艦長席の背凭れに気持ち身体を預けて力を抜いた。今の彼女は月を出発した時に組織の全てを任されている。日々の重責はあるがそれも各部署が仕事をほぼ処理できるので大きな問題もない。

「……アン。お前のほうでは何か感知できないか？」

「んー…ん？記録を遡って分析してるけど、これはなんと言うか…亀裂、かな」

「亀裂…？ふむ…詳しく頼む」

ンー、と小首を傾げて答えるアンは判り易く説明するために艦長席に座るアイリの前に空間モニターを展開した。

空間モニターに映し出されているのは高エネルギー反応のあった宙域の３Ｄマップと激しく変動する数値。数値をグラフ化したものがある。アンはグラフと３Ｄマップを秒刻みで再生してその都度、数値とグラフを示唆して説明する。

「うん、この重力波と素粒子やボース粒子の波形を見てみて。…空間そのものが歪んでるでしょ？」

「ああ、確かに。…この部分から急激に数値が高まっているな。…そしてここで歪んでいるのか？」

「そう。これらから推測すると…なんと言うか“何か”がこちら側へ来ようと空間を無理矢理に抉じ開けようとしていたような…」

ここで真先にアイリの頭に浮かんだのは“ここまで接近を許したばかりかこちらの宙域へ侵入された”という不快感だった。この失

態をどうやって取り戻すべきか、とも考える。

「……ということは既にこの宙域のどこかで、その敵性存在かもしれない“何か”が顕現している可能性が――」

「あ、でも、肝心のところでポシャッたんだと思うよ？ほら、ココ。ここから全ての数値が突然消失して元に戻ってるから」

「――――――……」

アンの余りにも余りな発言と事実にアイリが無意識に頭を抱えた。突然感知されたエネルギー反応が未確認物体か、敵性体かと考えていた時に彼女の“ポシャッた”の一言に不覚ながら集中力が途切れた。

「ア、アイリお姉ちゃん？額を押さえてどうしたの？なんかガックリしてるけど…」

「すまん。今は何も言うな…。少し、そう、ほんの少しだけ脱力しただけだから」

「そ、そうなんだ。……（アイリお姉ちゃんどうしたんだろ？私、なにかイケナイこと言ったのかな…？）」

散々だった。ここまで「敵か！？敵なのか！？ヤッフゥゥゥ！！」などと盛り上げておいて最後にはアンの推測で言うところ“ポシャッた”だ。つまり肝心のところで相手は失敗したということ。

アイリがガックリするのも仕方ない気がしないでもない。失態云々で言えば警戒だけで何事もなく良い方向へ向かっている。だが、脅威云々で言えば……脱力ものだった。自分の頑張りを返せと思うアイリを誰が責められようか。

「総隊長。先程の報告データです。……？？？総隊長？」

「…ん？ああ、すまない。こちらの端末へ送ってくれ」

気の抜けていたアイリは一次報告を挙げてきたオペレーターの彼女に自分の座る艦長席の端末へデータを転送するように指示した。

「アイマム。……今データを送りました。確認お願いします」
「ああ。……よし、確認した。ご苦労だった。急がせてすまないな」
「い、いえ。お気になさらないでください」
「そうか。では引き続き調査、解析を頼む」
「アイマム！」

報告書の中身は大まかに読み進めると内容はほぼアンの推測と同じものに辿り着いたようだ。観測されたエネルギーパターンにどことなく見覚えがあるのは気になるところだが…。

この報告書の最後にある備考によると観測された膨大なエネルギー量から推測すると事故のようなものであり、仮に意図的な行為であろうと暫くの間はあのようなことは早々起きないだろうという予測も立てられていた。

「ふむ……通信班！現時刻を以って第二種警戒態勢へ移行だ！ただし三十分経過して何も無ければ順次通常任務に戻れ！」
「アイマム！…総隊長より総員へ！現時刻を以って第二種警戒態勢へ移行する！尚、三十分経過後、問題が見られない場合は順次通常任務へ戻れられたし！繰り返す！現時刻を以って第二種警戒態勢へ移行――」

戦闘配備は解除しても警戒態勢だけはまだ解かない。油断がないように最低限の備えは必要だ。

それにしても思考に引っ掛かるものがある。報告書にあったエネルギーパターンを見て感じたこと。あれは……とここまで考えて――あ。思い出した…と艦長席に背中を預けながら心当たりに行き着いた。

「…アン、率直な意見を聞かせてくれ。お前はこのエネルギーパターンを、または似た固有波形を見たことがあるか？」

「え？…これだよね？んー…ん？このエネルギーパターン…どっかで――――…？」

「見覚えがないか？…自分はこの記録に覚えがある。…ここに来る時に見た」

「え？ここへ？ん、んー、そう言われてみるとどこかで…？――あっ、ラミエルのログに残されてた記録に似てるんだっ」

「ああ…」

その通りだ…とアイリは続けて、先程思い出したことを脳裏に思い浮かべていた。

アイリは心の中でニィィと口角を吊り上げて笑った。ただし表情では慈悲を体現したような素晴らしい笑顔だ。それはアンも同様のようでイイ笑顔だった。

「――いいだろう。あちらがこちらに来たいのなら」

「招待すればいい。クスクス――そう。例え、無理矢理にでも」

「ふふふ。その通りだ、アン。招待する方法は…」

「それは心当たりがあるから私のほうで用意するよ。大丈夫、旨くヤルから…ふふふ」

「そうか。では任せる。閣下へは私から報告しておこう。…ふふふ」

「「ふふふふふふ…！」」

黒い。そして暗い。そんな嗤い声が艦長席から響いてくる。艦橋に居る全員は何もないかの如く仕事を続ける。気にしたら巻き込まれる…なんて考えてないったらない。怖いわけじゃないったらない。おそらく。きっと。めいびー。

……。

……。

ここはとある日本家屋。大きさもさることながら作りも立派なものだ。家屋や広い敷地はよく手入れされているため塵一つ落ちていない。

その家屋の一角にある縁側に一人の女性が腰掛けて柱に身体を預けていた。女性の名は近衛・雛。サラサラとした白い髪に映える水色を基調とした清楚な印象を抱かせる和服を着ている。

雛の居る中庭に面している縁側は日当たりもよく絶好の茶飲み場所になっている。実際に彼女の横には茶碗がある。ただ、長時間放置されたことで既に冷え切っていることがわかる。尚且つ、一口も口をつけていない。

「はぁ……葵さん……」

どこか呆けたように零す言葉は寂しいような、懐かしいような、そして――何かを求めるような感情があるように思えた。

そんな彼女を側仕えの者が心配するようにただ静かに控えていた……。

……。

雛の居る家屋から幾許か離れたところにある広場に黒装束の忍者十数名が重装備で待機していた。この場で特に目立つのは直径２５ｍ程あるＵＦＯだろう。一般人が見ればどこの未知との遭遇だと小一時間問い詰めたくなる情景かもしれない。

そして彼らの前に立つのは左目に眼帯をした一際覇気のある青年も同じく黒装束を身に纏っている。荒川・勘助と白衣を着た杉白・Ｆ・ダズゲニーだ。後者は何の意味があるのか白ダースベーダーの被り物をしていた。

「……（雛様……）。……準備は？」
「ハッ。全て滞りなく用意できております」
「行くぞ…！」
「「「「「オウッ…！」」」」」

勘助が作戦開始の号令を変えると一糸乱れない動きで彼らは下部ハッチからＵＦＯに乗り込んでいく。最後に勘助とダズゲニーが乗り込むとハッチが閉まった。

各々が座席に着座する時には勘助も着座しておりダズゲニーが操縦席に陣取り発進準備を整えていた。最後にデンジャーで真赤なボタンの横にあるセーフティーな青いボタンを押せば出発だ。

この青いボタンはとある世界へ渡るための機能を稼動させるためのものだ。ザックバランに言えば不思議な空間を作り出し、そこへ飛び込めばアラ不思議、目的の世界へ行けるというものだ。端折り過ぎな気がする……。

「じゃ、ゲート開くぬ♪ポチッと……ぁ」

ここでギャグ体質のダズゲニーがやってくれた。青いボタンを押すはずだったのに白ダー○ベーダーの被り物がずれて直ぐ横の真赤なボタンを喜んで、もとい誤って押してしまった。こうなると当然――――。

「は？」

「「「「「あっ！？」」」」」

――チュドォォォォンッ♪

お約束の爆発ネタだ（笑）。景気良くキノコ雲ができてＵＦＯが吹き飛んだ。しかし、これだけやっても気が付いたらＵＦＯは直っているのだから不思議である。

……よくやった！ゲニーちゃん！君は救世主だ！ギャグ的な意味で！

ダズゲニーは愉快犯なのでダメージらしいものは皆無だが爆発に巻き込まれた近衛忍達は堪ったものじゃない。勘助を除いて、だが。

「こんのっ大馬鹿者がーッッ！！！」

「失敗しちゃったお♪てへっ♪」

「「「「「“てへっ♪”じゃねぇーっっ！？」」」」」

勘助の激怒に大して堪えた様子のないダズゲニーは反省の色が見られない。白ダー○ベーダーの被り物がそれに拍車を掛けているのだが彼女にそれを取る気は皆無のようだ。飛び出ているアホ毛が愉快そうに揺れている……。

……。

――キュピーン！

「は！？何やら電波が……ま、負けませんっ！！」

ダズゲニーらが爆発事故（？）を起こしたと同時に突然何かを感じ取った雛だが事の詳細がハッキリしないため言ってから首を傾げることになる。一体何に負けないと言ったのか自身でも意味がわかっていない。

「？？？…雛様？」

「い、いえっ、何でもありませんよ？……そ、それよりも先程の爆発音は？」

「ハッ。原因はゲニーちゃん様の実験にあり、これに荒川様と近衛上忍数十名が巻き込まれた模様です」

ダズゲニーの奇行はいつものことだがこれに勘助達が巻き込まれたにせよ関わっていることに雛は意外と思いながらもこういうこともあると考え直した。

「……では私も治療に行きましょう。勘助達に何かあっても大変ですしね」

「雛様、それはっ……」

「行きますね？（ニコニコ）」

「っ……行ってらっしゃいませ」

流石は近衛・雛。笑顔の中に恫喝を潜ませるとは……。美人だからまた余計に迫力がある。先程まで人恋しくて呆けていた人物とは

大違い「何、か……？」イエ、ナニモ……。

……。

……。

場所は変わってディモルフォセカ艦内の都市部にある洋館。ここは都市内に用意された九重・葵の家だ。洋館の大きさはドーム球場くらいあり、上空から見るとH字の形状をしている。

これに中庭と広い敷地があり、それらを高く頑丈な塀が周囲を囲っている。門は正面と裏門、その他に左右に乗用車一台分が通れる小門が計四つある。

その洋館の中にある一室では現在この洋館の主人である九重・葵とメイド服姿のファレノプシス・S・アニムスと同じくメイド服姿のフリチラリア・D・スタニックが長閑な雰囲気の中お茶会をしていた。

「――ん？…何かあったようだけどファレノは何か聞いてる？」

「？えーっと…大したことじゃないのっ。気にしなくてもいいと思うのっ」

いやいや、そんなに慌てなくてもいいっての。ファレノはもう少し落ち着こうね。大したことないとか、気にしないでとか言われると逆に気になるのが人情だろうに。

「そう…。あ、リチラは何か聞いてない？」

「申し訳ありません。わたくしも詳しくは…。アイリが戻られたらお聞きになられてはどうでしょう？」

「……それがいいか。それじゃ今は…」
「はい。まずは紅茶のお代わりはいかがかしら?」
「ん、貰おうかな」

それから暫くリチラの入れてくれた紅茶とミリーが焼いてくれたマカロンに舌鼓をうっていたら部屋に扉をノックする音がした。「閣下」と呼ぶ声でアイリだとわかったので入ってくるように呼びかけた。

「閣下、お寛ぎの所をお邪魔して申し訳ございません」
「構わない。こっちに来てお茶はどうかな?」
「はい。…ファレノ、リチラ。変わりないか?」
「うん?こっちは何もなかったの」
「ええ。ファレノの言うとおり何もありませんでしたわ」
「そうか…。時に閣下、少々ご相談したいことがあるのですが」

戻ったとたんに相談事?アイリにはそれなりに裁量を任せているのに?宇宙に来てまでまたや面倒事か……。

「……何が起きたよ?」
「確証はまだですが近衛・雛の世界から何者かが干渉してきた疑いがございます」
「は?雛さん…の居る世界から?それってつまりは平行世界間移動をしたと?」
「はい。ですがそれは失敗に終わったようです。対象の顕現には至りませんでした」
「失敗?失敗ねぇ。ふむ……」

意外や意外。なんと雛さんの世界から干渉を受けたとアイリは報告してきた。詳しく聞くと失敗したとは言え割と強引な方法だった

らしい。流石は雛さんだ。いや彼女がやったかは判断できないけど、たぶん雛さんじゃないかなー、なんてね。

なにかこっちの世界に用事でもあったのかね？雛さんの居る世界に問題らしい問題は見られなかったと思ったけどなんかあったのかね？世界が崩壊するから避難しよう、とか…。

「……（さてさて、どうしたものか……）」

「…そこで提案なのですが雛様をご招待して差し上げるのはいかがでしょう？現在はアンと開発班、研究班が手段を構築中ですので、もう間もなく可能かと思われます」

「む……仮に招待したとして帰還は可能？」

「可能です。追跡の結果、あちらの世界座標に楔も打ち込みましたので問題ありません」

「……それじゃ――――」

俺の答えは決まっていた。久しぶりの再会にちょっと心が躍る思いでもあったし、本音を言えばもう一度だけでもいいから会いたいなとも思っていたから……。

……。

……。

それから直ぐに準備は整えられた。安全のために都市部から離れた平原エリアに調整された次元エンジンを中心に機材は組まれている。

対象の出現地点を中心に古参を含む２５０名弱の親衛隊（メイド服仕様）が取り囲み、その外を作戦部と情報部三課から人員を出し

て二重に取り囲むと言う念の入れようだ。

これらは第一目標（近衛・雛）が敵対者と戦闘中だった場合にその敵を巻き込んでしまった場合に備えたものだ。万が一の場合は即座に武力介入して即鎮圧するために。

「――…準備は整っているな？」

アイリは少々緊張しているのか硬い表情で開発班の一人に聞いた。近くに居るリチラ、こちらも表情が硬い。彼女の場合はこれから来るであろう近衛・雛に対する溢れる嫉妬を抑えるのに苦労しているだけかもしれないが。

「はい。ウーリ様とマリー様のご協力もありましたので滞りなく進めることができました」

「ご苦労だった。では早速作業に取り掛かろう。閣下もお待ちだからな」

「ハッ！総員、状況を開始せよ！」

「「「「アイマム！」」」」

司令部所属の開発班と研究班がアイリの号令で動き出した。複数の空間モニターに映し出される数値が操作する彼女達のＩＦＳの輝きに合わせて目まぐるしく変化、変動する。

「次元干渉実験、フェイズ１を開始。本艦機関部よりエネルギーバイパスを構築。各部連結を確認。全て異常なし。第一、第二、第三ラインよりエネルギー供給を開始します」

「エネルギー供給を確認。次元エンジンの出力上昇…一万…一万五千…二万…各数値、次元転移門（ゲート）展開の理論値に到達。出力調整……安定を確認。全て問題無し」

「現在座標を絶対座標軸として構築…展開準備。対象世界座標を入力…完了。絶対座標を展開。次元転移門を展開……順調に構築中…」
「次元転移門の予想開通までおよそ２４０秒。また開門まではおよそ３００秒を予定」

推移は良好。何事もなく工程は進んで行く――はずだった。空間モニターでは作業内容にエラーが飛び交い、耳障りな警報が鳴り響いた。

「緊急！次元空間に乱れあり。危機回避のために空間補強を開始。緊急展開プログラムの一番…二番…三番…構築完了。…空間の安定を確認。危機を回避しました」
「作業を続行します。各フェイズ、３０秒の遅延を確認。修正を開始…緩和を確認。予定作業を１２秒遅れで作業を再開します」

だがそれも些細なことだ。想定される事故、事件、災害などの対応は大半がマニュアル化されているため即座に収束した。それでも突発のことで予定に僅かに遅延を出してしまった。

前に起きた向こう側からの干渉と今こちら側から干渉しようとしたことで同空間上に過剰な圧力が掛かり次元を圧迫させてしまったらしい。やはり初めての行いというものはどんなに小さくとも失敗があるものだった。

「３…２…１…次元転移門の開通を確認。続いて次元転移門の構築を開始」
「次元転移門の構築まで３…２…１…完了。次元転移門、顕現します」

現れたのは光の集合体。次元転移門はその一言でしか言い表せな

い。それは徐々に大きくなり全長４～５ｍ程で固定された。

「次元転移門の完全構築を確認。開門します。これよりフェイズ２へ移行します」

「了解。対象世界のサーチ開始……到達まで３…２…１…エンゲージ。対象座標軸周辺に生命反応を確認…」

「データバンクにて対象データ参照中…一致、該当データを多数確認。…第一目標を確認。目標を捕捉しました。これより確保行動を開始します。トラクタービームを送信……」

光の門に射出されるトラクタービームとは主に宇宙空間で牽引や船体の固定に用いられるエネルギー状のアンカーだ。今回はそれを応用して捕縛ネットのように改造されている。

……。

……。

爆発現場に来た雛が真っ先にしたこと、それは……。

「――それでゲニーちゃん。これはどういうことですか？（ニッコニコ）」

「Ｎｏｏｏッッ！？腕はそんなに曲がらないおっ！？あっ！曲がる曲がる曲がるぅぅ！？それ以上はら、らめーっ！！」

首謀者と確信しているダズゲニーを締め上げて事情を問い質すことからだ。色々と覚悟を決めていた勘助を除いて近衛忍達は雛による笑顔の圧力によって戦々恐々していた。

「今一度聞きます。どういうことですか？（ニッ

コニッコ）」

「いゃはーっ！？今度はアイアンクローっ！？雛様が鬼だね！ゲニーちゃんの頭蓋骨がピン、いたったたたたたふぉわったーっ！？！？」

雛の絶妙な力加減によるアイアンクローにダズゲニーが痛みに悶えている。彼女の灰色の短い髪にある特徴的な一房の長い髪、所謂アホ毛がビチビチと彼女の心境を表すように暴れている。

――わんわんっ！にゃーにゃー！しゃーっ！――

～ただいま折檻中につき今しばらくお待「Ｎｏ！ノォォォッ！？雛様っ、待って！待つんだお！？そ、それ以上は――「えい♪」ぎにゃぁぁああっ！？」……失礼しました。今しばらく待ちください～

――わんわんっ！にゃーにゃー！しゃーっ！――

数分ほど折檻されたダズゲニーは地に倒れ伏してピクピクしていた。被り物からはみ出しているアホ毛が力なく倒れているのがなんとも哀愁を誘う光景だった。

対照的にダズゲニーの横では何かを遣り遂げてお肌が艶々になった雛が何やらとても満足そうにしていることが印象的だったのは勘違いだと思いたい勘助達だった。

「……ひ、ヒドイ目にあったぬぅぅ」

「当然の報いだ。馬鹿者が」

結局、ダズゲニーは雛の拷もっ……質問に洗いざらい話すことになった。話しを聞き終わった雛が、意外なことに今回の発案者が勘

助であることには内心で驚いていたのは秘密だ。

「ふぅ…それにしても葵さんの居る世界に行こうとして失敗したのですか」

「ハ…」

「勘助。なぜそのようなことを?ゲニーちゃんは……なんとなくわかりますけど」

発案者が勘助だったのは驚いたがダズゲニーはただ面白そうだという理由で間違いない、と確信しているのは雛だけではないはずだ。

「……ただ…九重・葵殿を拉致ごほんごほんっ、連れて来ようかと」

勘助は素直に目的を話した。ここまで来て意地を張っても意味はない。仮に黙秘しても“ひななんの楽しいＯＨＡＮＡＳＩ尋問編～アナタはもう話さずにはいられない…!?～”が待っているだけだから。

「――――え、えーと……なぜ、そのような?」

対する雛は最初キョトンとしていた。その次に視線をあっちにこっちにやって挙動不審になりながらその理由を問い質す。この時の雛は内心でとてもドキドキしていた。頬も若干熱を持って赤くなっている。

「ここ最近の雛様はどこか上の空のようでしたので少しでも元気になられるのでは、と…」

「――――……へぅ」↑1へぅ頂きました!

「雛様?雛様っ?雛様っ!?」↑取り乱す勘助。

瞬間沸騰。雛のとあるメーターが振り切れた……。これに驚いて取り乱したのは無自覚に追い詰めた勘助だ。流石鈍感。自身のことでも鈍感だからか恋愛事では無意識に相手の痛いところを的確に突いてくるとは……勘助、恐ろしい子！？

瞬間沸騰した雛だが思い当たることがあった彼女は周りに心配されていたことに申し訳なさもあったが、何よりも何を悩んでいるのか皆にバレていたことが恥ずかしかった。それで意識がシャットダウンしたのだが……。

雛としては絶対にバレていないと思っていたのだが、そう思っていたのは彼女だけだった。周知の事実。暗黙の了解。言い方は数あれど最早皆の知るところだった。

「ぬぉ！？雛様の体温が急上昇中だぬ！？…おぉ！？これは乙女指数も上昇中っ！？」

「おと、おとめしすう…？なんだ、それはっ！？」

「イ～ヒッヒッヒッ♪……ツッコみがないのはそれはそれで寂しいお」

いつの間にか復活していたダズゲニーがみょぉぉんみょぃぃんと電波を飛ばしている摩訶不思議な機械を手になにやら驚愕していた。白ダー○ベーダーの両目がピカピカと光っているがこれは何？

勘助は突然のことで、と言うか現状で雛のこと以外どうでもよくなっている彼はダズゲニーが復活したことなど眼中にないため大したツッコみもしないまま彼女に何があったのか問い質した。

どうでもいいのだが勘助も問い質した乙女指数とは本当に何なのだろうか？

ここまではある意味いつも通りのボケを騒がしくも楽しい喧騒だった。だがしかし、それを突き破るように事態は急変した。突然発生した光の渦から巨大なエネルギーの突風が巻き起こったのだ。

光の渦は極光に満ち満ちておりその膨大なエネルギー量に誰もが圧倒された。

「えへへ――はっ！なんと凄まじい力…！！きゃ！これは一体っ！？ひ、引き摺り込まれ――――！！」

「ヒャッハァァ！！おっもしろそうだぬぅ！！新たなる世界への旅立ちだぁぁぁぁ！！」

少しアッチの世界に旅立たれていた雛が気付いた時には遅かった。彼女の身体に巻きつくのは光の帯であり、それは異常なまでの強固さを持ち合わせていた。

雛達はまだ知らないが、この光の帯…トラクタービームだが本来は宇宙空間で数万数億トンのものを牽引するもので出力次第では引き裂くほどの強度もある。ただし今回は一生体を捕獲するために改造されているので問題ない。

「雛様ぁーっ！！」↑最早ゲニーちゃんのことが眼中にない。

光の渦から伸びた帯に絡め取られた雛……とダズゲニー（こちらは自ら飛び込んだが）に叫ぶように呼びかけるのは勘助だ。突風で動くこともままならないが視線だけは引き込まれる雛達を必死なまでに凝視していた。

……。

……。

「――目標捕獲まで3…2…1…捕獲完了。――？警告。予定外の者まで捕獲した模様です。重量から逆算……想定人数は捕獲対象を含めて二名」

「（オマケが？誰か知らないが仕方ない、か）…総員第一種警戒待機！迅速に展開せよ！」

「「「「「アイマムッ！！」」」」」

アイリの号令により包囲していた部隊が一斉に展開し始めた。全周囲を包囲する陣形から銃撃し易い半包囲陣形へ。各々が格納機能を持つ腕輪から武器を呼び出した。

そして今、彼女達が手に持つ武器は旧世界でも使用されているものばかりだがその性能は葵の脅威の技術力にて改造されたものばかりだ。どれもこれも基本的に重力制御技術を応用したものであり射出時に銃弾を加速強化し初加速と貫通性を向上させたものだ。

ここから派生させライフル系は先に挙げた基本を更に強化したものであり貫通性能と集弾性能、命中率が軒並み向上している。ショットガン系は銃弾自体を互いに反発させて広範囲に分散させて近距離面制圧力を向上させた。

以上のように強化された銃器で対象の顕現場所を中心に半円形に包囲している。予め用意していた塹壕には土嚢が敷き詰められており、その上に重機関銃Ｍ６０（改造済み）が置かれて広範囲支援射撃ができるようになっている。

「来たか――――！！」

瞬間、一際強く次元転移門が光りだした。その時に「きゃああっ!?」という女性の悲鳴のような声がしたのをアイリ達は聞いた。

流石に改造したとは言え宇宙空間用の牽引ビームで捕縛したのはヤリ過ぎたか…と反省はしていない。

近衛・雛はご主人様（九重・葵）の貞操を脅かしたのだ。これくらいは、と思わなくもなかった。彼女達にとって葵の唇は至上なのだから仕方ないのだ。ちょっとした可愛い嫉妬だ。許容範囲（だと思っている）だ。

光が徐々に収縮していく。最精鋭であるアイリ達メイド部隊は悠然と事態に構えており、他千五百名強の戦闘部隊員は各々が銃器を構え、狙いを定めている。

やがて眩いばかりの光量は突如として止んだ。

「……はて？ここは？――どちらにしてもイキナリ包囲するとは穏やかでないですね…」

「コー、ホー……コー、ホー……うにゃむにゃ…もう…入らないお……コー、ホー…」

「「「「「……」」」」」

中心点に現れたのは丁寧に手入れされた白い長髪の美しき女性、近衛・雛となぜか白ダー○ベーダーの被り物をした白衣姿の杉白・F・ダズゲニー……は倒れ付して気絶しているのかピクリとも動かない。

雛は静かに立ちあがり、女性達を警戒しながらいつでも対応でき

るようにそっと自らの愛刀へと意識を向ける。

この時、誰もダズゲニーに声を掛けない。誰もが彼女のことに触れないのは白ダー〇ベーダーの被り物が原因だろう。一言で言うと怪しいのだ。間違いなく今の姿を街中で見かけたら珍しくてはしゃがれるか警察に通報されるかの二択しかない。

二人（凛々しく立つ雛と倒れ伏す白ダー〇ベーダーなダズゲニー）の前には完全装備の黒いフルフェイスと戦闘服の女性達が多数と二百人以上のメイド達だった。彼女達は二人を中心に周囲を銃撃し易いように半包囲している。

――と、二人の前に進み出る者達が居た。紫がかった長い黒髪を毛先のほうで紫色のリボンで結っている女性。もう一人は黒髪だが光の加減で薄水色に見える女性。どちらもメイド服を来ていた。

「…近衛・雛様でいらっしゃいますね？私は閣下、失礼、九重・葵様にお仕えするアイリス・D・スタニックと申します」

「同じくフリチラリア・D・スタニックですわ」

「えっ？葵さんの……え？」

「雛様。混乱なされるのも無理ありませんが主から雛様をご招待して差し上げるように、と我らは言い付けられております」

「あらあら。それはご丁寧にありが――「「「「きゃーーっ！？」」」」「イ～ッヒッヒッヒッ♪」――とう…えぇぇぇぇ…」

突如響き渡る悲鳴。聞き覚えのある笑い声に雛がギギギと錆びたブリキ人形のように首を動かしてその先に見たものは手をワキワキと怪しく動かし、またウニョウニョと別の生き物のように指を動かせるダズゲニーの姿だった。

「ブッハァ!?目が覚めたら美人さんが大量だお!否!あっちには可愛い系も!?ここは天国かぬ!?…まぁ天国なんざ信じてないけどね!!いぃいぃいゃっふぅうぅぅ!!」
「ちょ!?この子ったら何なの!?つぅかいつの間に!?」
「きゃ!!そんなところ触らないでよ!!やんっ!?」
「このっ!!大人しくしなさい!!あっ!そっちに逃げたわよっ!!」

ダズゲニーは華麗（？）にルパンダイブをすると女性達に踊りかかった。白ダー○ベーダーの被り物と翻るダボダボの白衣が眩しい。確かにここに居る彼女達は美人揃いだがこの子は本当に２２歳の♀なのだろうか?まさか……両刀?

「ゲニーちゃん、それは……えぇぇ」
「雛様。不躾ではありますが、アレは……?」
「申し訳もありません……」↑なんかもう色々と申し訳なくて謝る人。

ダズゲニーの突発的な行動には雛も慣れている。慣れているがゆえに耐性もあるが、これは予想外だった。なぜにこの状況で襲い掛かることをするのか…。雛は一瞬呆然となり頭を抱えかけた。

「ふむ…。よくわかりませんがアレは敵ですね?お任せ下さい。多少強引ではありますが実力で制圧致しましょう。これ以上は閣下をお待ちさせてしまいますので」
「えっ?葵さんが待って…えっ?」
「総員!第一種戦闘配備!実力にて制圧!捕縛せよ!!ただし使用武器は既存の銃器を改造したものに限定!!魔法、能力の使用は極力控えろ!」
「「「「「アイマムッ!!!」」」」」

僅かに混乱していた者達がアイリの命令で迅速に動き出した。動き回るダズゲニーを惹きつける小隊（一小隊５０名以上）と逃走防止のために退路を断つ四個小隊、準備ができ次第攻勢に出る一個中隊（５００名以上）が各自の役割を果たすために動き出した。

アイリの「葵を待たせている」という言葉に雛は気をやってしまい彼女達が動き出すことを止め損ねてしまった。ただ、止める時間があったか、と聞かれれば“無い（ノー）”とハッキリ言えるが。

「――はっ!?そんなっ！お待ちなさい!!私が言い聞かせます！ですからそんなっ…」

「ご安心下さい。彼女達は訓練された淑女（兵士）にございます。必ずや（武力的に）制圧して見せましょう」

「はぁ、それはすごい……はっ!ですからっ!そうではなくてですね!?あのっ」

「――雛様。どうかお静かに。始まりました」

「あわっ、あわわわわわっ!?」

ここで戦闘開始を知らせる一発の銃声が鳴り響いた。

……。

ダズゲニーと部隊員達の戦闘は確実に激化していた。ダズゲニーの被り物（白ダー○ベーダー）の両目がチカチカと点滅している。

「くっ!なんなんだ!この幼女は!?妙に身体が柔らかい!!」

「幼女言うなし!?ゲニーちゃんは２２歳だお!それに貧乳（これ）はステータスなんだお!!」

「ウソおおっ!?てっきりオマセな小○生かと……ってそこっ!死

に曝せえええっ！！」

ピンポンパンポ～ン♪注意：ここで使用されている銃弾、爆薬、その他は全て非殺傷です。あくまで歓迎会なので死傷者はでません。ピンポンパンポ～ン♪

「ああっ！！また外した！！いい加減に当たれよな！？」

「この子何気に無茶言うお！？ゲニーちゃんの直接戦闘力はゼロなんだお！？当たったら死んじゃうって！？あうっ！？今カスッたお！？」

「チッ！」

どうやら今のはダズゲニーの勘違いだったようだ。舌打ちしたのは曹長の持つＭ４カービン銃の弾が切れたことに対してだった。無駄に弾薬を消費してしまった自分に腹が立ったのだ。すぐさま空になったマガジンを交換する。

「今あからさまに舌打ちしたお！？失礼だと思うな！？特殊加工された白衣が焦げるってどんだけ殺傷力高いんだぬ！？」

「曹長！無駄弾を撃つな！よく狙え！！」

「アイマム！中尉殿！」

「華麗に無視（スルー）されたっ！？！？おまいら鬼だぬ！！！」

「「いいえ、元悪魔の精魔奇兵です」」

「せいまきへい？…ってなんだぬ？？？おおっ！？またカスッたぬ！？！？」

知らない単語に疑問を感じたダズゲニーだが、それに構わず飛び込んできた銃弾を避けることに必死になる。流石はダズゲニー謹製“白ダー○ベーダー”の被り物だ。電気信号で脳を刺激して反応速度を向上させるとは……。

ただし、その回避方法が某ジャングルの王者並の変な踊りなのが相手の戦闘意欲をガリガリと削られていく。ある意味とても効果的なのがイラッとさせる。

「はぁ…（チラッ）はぁぁぁぁ…」

「今度はタメ息かぬ!?それも結構深いお!?ゲニーちゃんが何したと言うんだぬ!?」

「貴様は!部隊の者に!セクハラを働いた!!それは葵様のものを汚したも同義だ!!」

無茶苦茶な理論だが曹長はマジメにそう信じている。精魔奇兵の面々は個性が強く大抵のことでは動じないが基本的に根が純情と言うか乙女なのだ。勿論個体差はあるが元悪魔や元精霊関係なく事実だった。

「セクハラじゃないぬ!?ちょっとした味見、じゃない!お茶目なスキンシップだお!?」

「そんな被り物をしていて信じられるかぁーっ!!!」

「イ～ッヒッヒッヒッヒッ♪バレたかｗｗイッツジョ～クなんだお!?」

「クッ!またか!?またその変な動きなのか!?ええいっ!腹が立つな!?もう!!」

「曹長!口よりも手を動かせ!!」

「わかってますよ、中尉殿!そらそらそらっ!私の鉛玉をたらふく食らいな!!」

曹長は腕輪から新たに取り出したＭ４カービンを構えて、二丁でダズゲニーに射撃を加えていく。他の者も彼女の動きを牽制するた

めに威嚇射撃をしていた。閃光弾も投入したが被り物の性能かわからないが効果が見られない。

「にょほーっ!?甘いっ!ホットケーキに蜂蜜とスリーベリーをトッピングして飲み物にココアがセットで出てくるよりも甘いおっ!イ～ッヒッヒッヒ♪♪」

ストロベリーとブルーベリーとラズベリーがトッピングされた三段重ねのホットケーキに芳醇な香りのする琥珀色の蜂蜜をタップリとかけ、飲み物に甘いココア…。普通に美味しそうだ。この上なく甘そうだが。

「ちょこまかと動きやがって。これでは埒が明かないか……通信兵!支援砲撃を要請!ポイントＮＷ１０!」

事ここに来て前線で指揮を取る中尉が暴挙に出た。艦内にある有事の際に対応する指揮所へ大規模な砲撃を要請した。これはディモルフォセカだからできることだが普通の艦では爆沈してもおかしくない行為だ。

「アイマム!前線よりＣＰ(コマンドポスト)!支援砲撃を要請!ポイント…っ!なに、却下!?」

「なにっ!?却下だと!?どういうことだっ!?」

「いえっ「バカか?」の一言で一刀されました。以後ＣＰとは通信拒絶中です。…いやー、よく考えなくともこれは当然ですよねー。あははははっ」

「え?なんで?砲撃はダメなの?こう…銃弾や砲弾をバラ撒くのは…?」

「いや、中尉殿?招待した相手に砲撃って…普通に考えてダメじゃないですかね?」

「な、なに？そう、なのか…？これも歓迎の一環ではないか？スリル的な意味で…」
「「……（ダメだ、コイツ。早く何とかしないと…）」」

曹長と通信兵の心が一つになった瞬間だった。いや、なりたくてなったわけではないが。

こんなフザケタ一幕があったが戦況に影響は無い。未だに銃撃はまだ止まない。ダズゲニーを仕留め……失礼、捕まえるまでは、だ。

「なぬおっ！？想定よりも射出速度も弾速も速いお！？なんで！？見た目はただのＵＺＩ（ウージー）なのにっ！！ぬあっ！？あっちはＦＮ－ＴＰＳ！！こっちも速い…っ、だけじゃない！？広範囲になってるぬ！？」

ウージー。正式名称はＩＭＩ　ＵＺＩ。コンパクトな箱型サブマシンガンだ。イスラエルの国産兵器第一号として開発され５３年から量産されたものだ。ライフルに比べて生産も取り扱いも簡易なものであるのも特徴だ。

ＦＮ－ＴＰＳ。こちらはＦＮ社の最新型ショットガンだ。主に警察や特殊部隊で用いるように設計された銃器である。銃弾の固定と速射における安定動作の確保に重点を置いている。

今まで被り物の両目がチカチカと光っていたのは彼女達の使用する武器の性能や何かを計測していたようだ。先程のダズゲニーの言葉がそれを証明している。弾速など人の目で測れるものではないのだから。

「今使用しているのは現行兵器だけどね！キッチリ改造されてるの

よ！！ってか、なんで当たんないのよ！！変な動きして！！」
「当たらぬ！当たらぬ！！当たらぬ！！！イ～ッヒッヒッヒッヒッ――きゃっ」
「「「「「……え？」」」」」

ここで“びだーんっ”とコケて地面にダイブしたダズゲニーの口から小さくて可愛らしい悲鳴があがった。予想外に可愛らしいのが意外だったのか今まで激しい銃撃をしていた彼女達の手が思わずと言った感じで止まっている。

そして今、彼女達の目に宿るのは女性らしいからかいのネタを見つけた時の妖しい目だ。猫のように「にしし♪」と笑っているような雰囲気が戦場を包み込んだ。

「い、意外と可愛い声を上げるのね…」↑優しく言いつつもニヤニヤする人。
「っ……！！！」↑ボッと赤面するゲニーちゃん！
「「「「「うわっ♪照れちゃってかぁわいいのっ♪」」」」」↑からかう気満々の人達！
「て、てててテレてないおっ！！バカなの！？バカなんじゃないかぬ！？今のは何かの間違っ、もとい！か、勘違いだお！？」
「「「「「お顔が真赤っ♪お顔がまっか♪お顔がマッカ♪」」」」」
「～～～～っっ！？！？！」↑グルグル目になって光線銃と取り出した！

言葉だけ聞けば普通に女の子が友達をからかう馬鹿なやり取りと思えるが実際は戦闘が激化したのは言うまでもない。

ダズゲニーを襲う銃弾が倍化したし、それを回避するダズゲニーからも謎の光線銃から不可思議な光線を射撃している。最もやや取

り乱している今の彼女では光線が明後日の方向に飛んで行くことが多々あった。

……。

目の前の苛烈な戦闘（？）に色々な意味でヒヤヒヤしている雛は何とかこの場を脱しようとさり気なく視線を周囲へやる。

「っ……（このままではゲニーちゃんが。なんとか加勢しなければ…でも、それには…）」

「…ふふふ。雛様、何かございましたか？」

「――っ、これは…！？」

驚くことに雛が気付いた時には身動きを封じられていた。何が、と目を向けるとウネウネ動く縄が自分の身体を縛っていた。よく見ると縄のタグがある。そこには“縛るんですのっ！ＥＸ”と商品名が書かれていた…。

これに雛が脱力したのは言うまでもないことだ……。

これは、元はただのイタズラ用パーティーアイテムであり新世界で売り出そうとしたのだが失敗。理由の一つとして予想以上に高い捕縛率を誇ることから犯罪に使用されることを考えお蔵入りした品だ。

こんなところで無駄に高い技術力を注ぎ込んだためにジョークの域を超えてしまったがために日の目を見ることなかったバカアイテムの一つである。

「…あまりそこから動かれませんように。不慮の事故でお怪我など

ツマラナイでしょう？ふふふ…」
「そうですわ。不老不死とは言え痛みはあるのですから大人しくなさいませ」
「貴女達は一体何を……んっ！？」
「わたくし達にお任せ下さい。うふふ、安心なさいな。彼女達なら旨くヤリますわ」

雛が身動ぎをすると“縛るんですのっ！ＥＸ”がキュッと更に締め付けてくる。因みに今の雛は縛られているわけだがその縛り方に問題があった。変則的な亀甲縛りになっているのだ。

これは“縛るんですのっ！ＥＸ”を売り出せなかったもう一つの理由だ。どうやってもこの縛り方を変更できなかった。こんなのでは子供も居るかもしれないパーティーで使えるわけがない。教育に悪すぎるというものだ。

「……んんっ（擦れてっ…ん！こ、こうなれば！）――――っ！！」
「むっ！」
「あらっ？」

雛は無事（？）に“縛るんですのっ！ＥＸ”の呪縛から脱出した。忘れてはいけない。雛も葵と方向性は違うがチートだということを。これくらいなら脱出するなんて訳がない。同じチートの作成物ゆえに多少手間取ったが脱出は不可能ではないのだ。

なにやら頬を紅潮させ甘い吐息が雛を妖しく艶やかに魅せているが、それは気のせいだ。着崩れた水色を基調とした和服から白い肌を覗かせて色っぽいが気のせいったら気のせいだ。

「はぁ…はぁ…んっ！ゲニーちゃん！ここからっ、離れますよ！！」

「えぅ！？ちょっ！？まだデータ取り終わってっ！？ぐびっ！首が絞まってっ！？」

普通なら身体へ負担の大きい連続瞬動でダズゲニー（の襟）を左手に掴んで雛は精魔奇兵の包囲網から雛達は脱出した。

この時の雛は今居るここがどこなのか知らないために一か八かの博打だが平原に舗装されている道なりに移動することにした。遠くに都市が見えるからそこで身を潜めて後に葵と合流することを考えていた。

「目標（ゲスト）が逃げたぞ！追えっ！！……（相手もなかなかにやる。これなら新兵の訓練には好都合か…）」

「小隊単位で追撃しなさい！連携して目標の退路を限定して追い込むのですわ！！」

「「「「「アイマムっ！！」」」」」

アイリとリチラの激励とも取れる命令に部隊（メイド服以外）は設置火器を放棄して腕輪に格納された手持ちの武器だけを持ち直ぐに追撃行動に移った。

ここから盛大な鬼ごっこが開始された。都市まで移動する間に銃撃音が止むことも無く手榴弾（非殺傷ですのっ♪）が砲弾の如き速度で投げられる。既にこれは当たれば非殺傷などと言っていられない気がするのは気のせいだろうか……。

かと言って無差別に攻撃しているわけでは決してなく。無闇に攻撃しているようでその実、雛の逃走経路を極力妨害、限定していた。そのため雛は移動が妨げられているため予想よりも要として進まないことに焦りを見せる。

「なかなか優秀ですね……とは言っても、うむむむ…」

あのアイリの言ったことが事実ならばここのどこかに葵が居ることになる。そして話しから推測するに彼女達は葵の家族だ。今ここで撃退することは容易い。だが攻撃すれば葵の家族を傷付けることになる。

「下手に反撃しては色々とマズイですよね……」

葵が家族を溺愛していることは初めて出会った時に聞いていた。そのことで大事にされている家族へ多少の嫉妬心が芽生えたのも事実だ。その家族に攻撃するとなると葵に……き、きき嫌われる可能性がっ！！

「それはちょっと…いえ、非常にマズイです……」

ここまで包囲網を一足飛びに飛び越えて一目散に駆け出してから本人にとっては程々の速度で走りながら移動してきた。ここから見える都市まで目測で……およそ１７～９分ほど。もう少し速度を出せば１５分弱…。

今も背後から襲い来る銃撃、砲撃、爆撃を避ける。さて、これからどうするかと考える。そのせいで、ゲニーへの注意が散漫になるのは仕方のないこと。……仕方のないことですよ？

「ぞれよりもぐび…ばなじでっ！びなざまっ！！」

「あ、あら？すみません。大丈夫ですか？ゲニーちゃん…」

ポイッと手を放してダズゲニーを投げ捨て、もとい解放した。

「けほっけほっ…ふぅ。危うく雛様にデストロイされるかと思ったお！――っと、こうしちゃ居られないぬ！あの未知の技術で改造された銃器を解明しないとならないお！！ヒャッホォイッ！！」

「ゲニーちゃんっ！？そっちにはあの人達が！！」

ダズゲニーはまるでバビューンッと音がするほどの勢いで嬉々として引き返していく。ある意味で予想外でまたある意味想定内であるダズゲニーの行動に雛は驚いた。見捨てることもできないのでその場で防戦に徹することになる。

「うわっ！？白ダー○ベーダー幼女が来たぞ！！弾幕だ！弾幕を張って足止めしろ！！」

「目標2（ダズゲニー）は第二中隊がやれ！中隊構え！狙え！撃ぇぇ！！」

「「「「「撃つべし！撃つべし！」」」」」

「オォ！？その武器はなんだぬ！？はぁ…はぁ…もっと見せたまへ！！スィィッチオォォンっ！！レッツお持ちかえりぃぃぃ！！！」

「グッ！これはっ！？銃が引張られっ！？んぐぐっ！！――あっ！？」

MF（マグネットフィールド）を展開し、金属製の武器は強烈な磁力に引き寄せられる。そして痛いことに今使用している大半の銃器が現行兵器の改造品だったためにその殆どが引き寄せられていた。

「ぼっしゅぅぅとっ！！大量にゲェェェットだぜぇぇ！！！」

「こんのっ！？ふざけたマネをっ！くぅぅ……！そうだ（ニヤリ）」

ダズゲニーはMFで引き寄せた武器を手に一つだけ持ち興味深げに眺めていた。それでも攻撃は避けるのだから脱帽ものだ。持ち切

れない武器は格納庫（白衣のポケット）に収納することも忘れない。
あとでバラして解明するためだ。

「イ～ッヒッヒッヒッヒッ――ヒッ？……あ？ぬおおおっ！！？？
ピンの抜けた手榴弾が――！！？」

――ドガーァァァンッッ！！！

「ゲニーちゃん！？」
「やったぜ！ザマー見ろ！！…まぁ武器の代金にしたら高いけどな。
私のボーチャードが……うぅぅ」

ボーチャード。ドイツの銃工ヒューゴ・ボーチャードの手によって１８９３年に開発されたもので曲線美を持つ世界初の実用自動拳銃だ。ただしとても重い。自動拳銃なのに１３１０ｇもする。

部隊員の一人が自分のコレクションが飲み込まれたことに涙する横で雛は突然の爆発にダズゲニーが巻き込まれたことに驚きを露わにする。だがしかし、繰り返して言うがこれらは全て非殺傷兵器だ。その証拠に……。

「けほっけほっ！ごほごほっ！…あー、ひどい目にあったお！！…ん？なんか白くてネバネバするぬ！？…んにゅぅぅ？（ぬちゃぬちゃ）…な、なんだかとってもえっちぃお！…お、おぉ？なんだか動き難くなったよーな…」

爆発の煙が晴れた時にはお約束のアフロヘアーになったダズゲニーの姿があった。白ダー〇ベーダーのアフロ（でもアホ毛は健在）……ギャグになっていた。頭のネジ的な何かがどこかに飛ばされたのかもしれない……。

他には捕縛用の白い粘着溶液が彼女の身体に付着している。これは空気に触れると徐々に硬化する特性がある。その名も“もう逃がさないんですの…ウフフｍｋ？”だ。捕縛に適しているのでこういう時は意外と重宝されている。

「誰かが一矢報いたか…。チッ、大尉！現状報告！どれくらい持っていかれた！？」

「七割方持っていかれました！鉄製の銃器はほぼ全滅です！無事なのは強化樹脂や強化プラスチックで構成された銃器くらいです！」

それでも大半の武器は既にダズゲニーのポケット（↑最早これって不思議空間じゃね？）の中だ。まだ各自の腕輪に銃器があるとは言えまたＭＦを使われたら厄介だ。出したとしても現行兵器の大半はまた持っていかれる可能性がある。

「…仕方ない、か。通信兵！ＣＰに魔法戦闘の許可申請を出せ！」

「アイマムっ！！」

武装を無闇持っていかれるのならば元精霊は己が属性魔法で、元悪魔は固有能力で戦えばいい。単純だが効果的ではある。勿論、それは捕縛系統か動きを阻害するもの、直接ダメージにならないものに限定されるが。

「……今のうちに逃げたほうがよさそうですね。…ほら、行きますよっ、ゲニーちゃん！」

「ぬななっ！？雛様っ、離してっ！まだ盗ってないモノがあるんだお！！ちょっ！？また首がっ！！あぁぁーっ！！！」

ダズゲニーのお陰で好機がやってきた。雛はこのチャンスを逃す

ことなくダズゲニーの襟首をグワシッと掴んで一目散に都市方面へ走り出した。またダズゲニーは犠牲になるのか……。

「もう…ゲニーちゃん逝っても、いいよね…？」

……本当に大丈夫だろうか？

……。

……。

ＣＯＳ－ＭＯＳの運転する車（装甲リムジン）で移動しているとパンパン、ドカンドカンという音が目的地方向から聞こえてきた。爆竹のような、銃声のようなこれは…花火か何かをやっているのかもしれない。

途切れることの無い音から考えるにあの子達は随分と派手に歓迎しているようだ。雛さんの“歓迎”はアイリが「お任せ下さい」と自信満々に言うから任せてみたけどどうやら成功のようだ。

「くくくっ、賑やかなものだ。雛さんも喜んでくれるといいけど」

「そうですな。我が君がお世話になられたので吾らからも一言礼を……ん？」

「姉上、この強き気配。これは……」

「うむ。なんぞ、あったようだな。……ＣＯＳ－ＭＯＳ、ここで止めてくれぬか」

「…了解」

いや、確かに強い気配を感じるけどこれは雛さんでしょ？何を警戒することがあるか。報告によると白ダー〇ベーダーの被り物をし

た幼女が居るとあったけど……思い当たる点がありすぎる。それは……ゲニーちゃんだ。それ以外にありえない。

雛さんだけじゃなかったのか……と思った俺は悪くないと思う。あの子って何気にイタズラが過激すぎて対応に困る時があるからな。向こうに居た時に一度温泉で……いや、この記憶は封印しておこう。一言言うなら綺麗で柔らかかった、かな。

とと、それは置いておいてだ。車が止まるとハオとユエがサッと降りた。訝しく思っても信頼する二人が何かを感じ取ったなら何かがあるんだろう。俺も車から降りて二人の睨み付ける方向を眺めてみた……けど、よくわからない。

「……何があった？」
「我が君……あれをご覧下さい」
「？？？――――え〝っ？何あの砂煙？なんかこっちに近付いている気がするんだけど…」

今度は視力を魔力とナノマシンで強化してハオに示された方向を凝視してみた。そうすると土煙で詳細はわからなかったけど何かがこちらに近付いてきているのがわかった。それも猛烈な速度でもってだ。

「わかりませぬ。…ですがなにやら問題が発生したのは間違いなさそうですな」
「我が君。決して吾らの側を離れぬように。…ラミエル。貴様もわかっているな？」
「あ、ああ」
『承知しておるっ！だ、だがなぜだろうか？とてもイヤな未来予測がするのだが…』

えぇぇ、やめてよねー…。ラミエルさんの未来予測はよく当たるからマジで勘弁してほしいんだけど。厄介事とか今はいらないって。

しかし、問題ね…。もしかしたら雛さんを招待する時に何か互いに誤解があったのか、それともただ単に報告漏れで雛さん達以外に連れて来てしまったのか。それとも他に何かあったのか。

「……はぁ（これ以上は推測の域を出ないから無駄か…）」
「…マスター、先程追加報告が現場から挙がって来ました」
「追加？やっぱり何かあったのか…」
「――――……！」

車内から降りてきたＣＯＳ－ＭＯＳが詳しく報告しようとした時に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「――！！――――！？」

また聞こえた。これは、と思い声のする方向を凝視すると、なんと土煙の上がる先頭から聞こえるじゃないか。そこをジッと目を凝らして観察すると連続瞬動を繰り返す白い長髪の女性と幼女…て？

「……ん？あれは…？あっ！雛さ――ぶんごろがじっ！？！？」
「「我が君っっ！？！？」」

葵が雛を認識した時、同じく雛も葵を認識した。その瞬間彼女は……光になった。ズバリ言うと雛は久しぶりに再開した葵を見て歓喜の余り、普段無意識に加減していたものが切れて音速以上の速度で走りながら条件反射で抱きついてしまったのだ。

結果は葵を１０m以上の距離を吹き飛ばす（なのに葵を拘束することはやめない）という一層見事なボディタックルをしてみせた。

因みに陽月姉妹だが反応も対応もできた。その気にならなくとも迎撃も撃退も不可能ではなかった。ただし今回は相手が雛とわかり尚且つ傷つけることを葵自らが禁じたことで陽月姉妹は手を出せなかったのだ。

「うごっ…ったぁぁ…なにが、ひゃっ！ちょっと雛さん！くすぐった、はははははっ！？」

「――――♪――――♪♪」

「我が君！？ええいっ！こやつ！離さぬか！！ユエ！お主も手伝え！！」

「うむっ！――っ！？くっ！張り付いて離れぬだと！？梃子でも動かぬつもりか！？」

今まで我慢に我慢を重ねていた葵スキスキ病の発症のため、周りの事なんて気にしない。今の雛は腕力１００万馬力だ！もう彼女が満足するまで放すことはないだろう……。

「ラミエルたんだお！じゅるりっ♪ハグっ、プリィィィズっ！！にょほーっ！！」

『――ッ！？緊　急　回　避ッッ！！やらせはせんっ！！やらせはせんよっ！！』

「そんなっ！避けるなんてヒドイお！？あの激しかった日はウソだったぬ！？」

『っ！相手が貴様でなければ避けたりせぬわ！！それとアレは貴様が我を分解しようとしただけであろうが！？』

対してこちらはある意味で愛しのラミエルを見つけたダズゲニー

は走りながら条件反射で頬擦りや手でワキワキ弄り倒そうとした。だが迫り来るダズゲニーをニュータイプの如く察知したラミエルは回避してみせた。

見詰め合う（睨み合う）ダズゲニーとラミエル。ここだけ雰囲気は世紀末の世界に対峙する宿敵同士のようだ。

「そっ、そんなっ!?ラミエルたんヒドイお!?あんなに熱い（戦いの）時間を過ごしたのに!忘れたのかぬ!?」

『だ　か　らっ!!アレは我の与り知らぬ行いであろうが!!我は知らん!!』

「そんなぁぁぁ……イヒッ、イ〜ッヒッヒッヒッ!もうね?そんなこと言う悪い子はバラしていいよねっ?イヒッ…ねぇ?バラしても――イイヨネェ?イッヒッヒッヒッ!!」

『やめっ!やめぬかっ!馬鹿者がっ!?ち、近付くでないわ!やめるのだ!ダズゲニー!ブッ放すぞぉぉ!?!?』

この時のダズゲニーは若干ヨダレを出しながら最早お馴染みとなりつつある手をワキワキさせて変態染みたもとい変態（マッド）がラミエルに迫る。彼女の目から光が消えかけてハイライト化している。

逆にラミエルは自身の大きさを全長５ｍほどに巨大化して大出力の荷電粒子砲をブッ放そうと準備している。もういつでも撃てるようにしているのはそれだけダズゲニーのことが天敵（トラウマ）となりつつあることが窺い知れるというものだ。

「…援護します」

『……礼を言う』

「うにょにょにょ!?ロボ娘っ!?ニュウフェイスだお!――はっ!そうか!ここがヴァルハラか!!」

『ぬぬぬっ！またよからぬ気配が！？』
「…危険度上昇。…目標の殲滅を最優先にします」
戦いの火蓋は切って落とされた……。
――わんわんっ！にゃーにゃー！しゃーっ！――
～暫くお待ち下さい。ただ今事態収拾の『屍を曝すが良いわあああっ！！』「当たらぬ！寧ろ当てに逝くお！！」「…させません。シュートっ！」どんがらがっしゃんっ！どがんどがんっ！――失礼しました。事態収拾のために全力を尽くしております～
――わんわんっ！にゃーにゃー！きしゃーっ！――
二時間後…。
所々焼け跡がある平原のど真ん中でボロボロの姿で数人（なぜかダズゲニーは無傷…）が力尽きていた。事情もわかったので大多数は荒れた草原の整地と使用した銃器の撤去作業に行かせた。
「お騒がせして申し訳ありません……」
「いやいや、俺のほうこそ堪能もとい家族が迷惑をかけたようで申し訳ない」
俺が「騒いだのは家族達とゲニーちゃんですしねー」と雛さんに笑いながら言うと苦笑しながら「それもそうですね」と返してくれた。
「とりあえず……着替えが――」
「閣下。既にご用意しております」

「きゃっ…！？」
「――必要、と思ったらアイリは気が利くなぁ」
「感謝の極み、です」

いつの間に簡易更衣室という名の大規模なテントを設営したし…。俺でも気付かなかった。…え？皆は気付いていたの？あ、雛さんは俺と同じ？そうか……。チートって俺よりも彼女達のことを言うのではなかろうか？

しかも中には皆の服は勿論のことだが不思議なことに雛さんの服までである。それも今着ている水色の和服と同じ物が、だ。いつサイズを測って、いつ作ったのかが疑問だ。実はメイド職ってリアルチートなのではなかろうか。

「お、お待たせしました。…どうですか？」
「うん、いいね。綺麗だ。雛さんの髪に緋色の生地に紅葉をあしらった和服は似合うね」
「そうですか？ありがとうございます」

言葉だけはシラッと答える雛だがその内心は二頭身にデフォルメされた子雛達が嬉しさの余り踊り狂っていた。現実の彼女も心なしか顔が紅潮しているように見える。

「…でも葵さんは相変わらず黒スーツなのですね」
「くくくっ、これが一番着慣れているからね」
「むぅぅ……」

それを誤魔化すために雛はジトッとした視線で葵を見て言った。それを葵は苦笑して返すが雛は納得していない。どうせなら違う服装の葵を見たいという女心、と言うか乙女心だった。

「「ごほんっ！！」」
「――ッ！」
「…ハオ？ユエ？」
「我が君。そろそろ紹介していただけないものでしょうか？」
「然様。吾らは未だに面識が無いゆえに紹介してもらいたいのですが」
「ご、ごめん。そう言えばまだだった。えっと、こちらが――」
俺が紹介しようとしたら雛さんが一歩前に出て深く腰を折ってお辞儀をした。その姿勢がまた綺麗でお手本のようだった。
「…ご挨拶が遅れて申し訳ありません。近衛・雛と申します。今後ともよしなに」
「うむ。私はハオ。我が君の守護刀陽月の片割れにして懐刀だ」
「同じくユエだ。姉上ともども（短い間だが）よろしく頼む。ふふふ」
「ええ、こちらこそ。うふふふ」
あれ？なんだか雰囲気が怪しいような？黒い…？何が起きた……。
「「「フフフフフフ」」」
「ガクガクブルブル……（何この子達コワイ…）」
それから雛さんとここに居る主要なメンバーと自己紹介しあって親睦（？）を深めることになった。一応ここに居たのは陽月姉妹、ラミエルにＣＯＳ－ＭＯＳだ。アイリとリチラはここに来る前に名乗っていたけど改めて自己紹介したらしい。
親睦（？）を深めたよな？ラミエル達の見るゲニーちゃんの目が

怖かったのが印象的だったのは忘れたいなー…。だがしかし！二人は渡さんぞ？（ゴゴゴゴッ！）

「とりあえず移動しようか。前の雛さんみたいに今度は俺が案内するよ」

「ありがとうございます。実は楽しみだったのですよ」

「余り期待されてもなぁ。でもまぁ精一杯エスコートしようか」

「ふふふ。よろしくお願いしますね？葵さん」

ＣＯＳ－ＭＯＳの運転する車に乗り込み順々に移動して観光を楽しむことにした。本来なら魔法球内でもよかったかもしれないけど組織が巨大化するに従って軍事、研究施設が建設されている。

今の魔法球［工房］は十数年前と違って警備上、軍事上の問題で機密だらけになってしまったから見る場所がない。だから、せめてこの戦闘移民艦ディモルフォセカの艦内だけでも楽しんでもらえればいいな。

「ぐすっ…ゲニーちゃん空気だお…！」

ごめんなさい……。

……。

後編に続く…。

第一回コラボ企画［近衛の守護者？］ｂｙ彼岸花さん。前編（後書き）

続きは後編へ！ですのっ！

ではでは！

第一回コラボ企画［近衛の守護者？］ｂｙ彼岸花さん。後編（前書き）

後編、ですのっ！

第一回コラボ企画［近衛の守護者？］ｂｙ彼岸花さん。後編

……。

ここは草原だ。ここから円形に右回りに移動してここ草原から山岳地帯、海、そして中心部の都市部へと順繰りに行くつもりだ。そういうわけで一番手近な場所から案内して行くことにした。

勿論、各エリアへの移動はＣＯＳ－ＭＯＳの運転する車だ。山岳地帯に到着したら小型艇に乗り換えて上空から観光するから車両があるからＣＯＳ－ＭＯＳとは一旦別れることになるが海エリアへ移動する時には合流する予定だ。

メンバーはゲストの雛さんとゲニーちゃん、ホストの俺と護衛の陽月姉妹、お世話にアイリとリチラが行動を共にすることになった。他の皆は後片付けしてもらうことになった。まさかあんなにはっちゃけてくれるとは予想外だった。

……皆も雛さんに会えて嬉しいんだね！↑微妙に勘違いしている。

因みにファレノが居ないのは都市部にある俺の洋館で“色々”準備するらしい。これにはミリー達も関わっているらしい。オリビエ達は、確かどこかで訓練だったかなんだったか。キチンと加減できればいいのだけど……。

というわけで、だ。今皆で車に乗って草原エリアの道路を移動中です！

「…皆さんから逃げている時は気にしませんでしたが長閑な風景ですね。それに、うん…風が気持ちいい」

雛さん…ごめん。皆の歓迎が割と過激だったんだね。やはり、イキナリ花火を使うのは引かれたようだ。↑何かを決定的に勘違いしている人。

車内から見える風景は草原エリアの名前通りに一面草原と所々に木々がポツンと生えている。雛さんは開いた窓から流れてくる風に身を任せていた。時折彼女の甘い匂いにドキッとさせられるのは秘密だ。

「あはは…そうでしょう？草原に寝転がってお日様（人工）に照らされているといい感じにお昼寝できるんだ。……あっ。あっちに見える一本木の木陰がお気に入りなんだよ」

「ふふふ。そうなのですか？それはいいですね。私も自分の屋敷の縁側で日向ぼっこするのは好きですよ。それでついつい眠ってしまって勘助に心配を掛けてしまうのです」

「あー、勘助君か。彼は雛さん第一だから…ね。――そう言えば雛さん。勘助君は今？」

今の今まで忘れていた。荒川・勘助…。彼は雛さん第一主義と言ってもいいくらい彼女のことを大事にしている。向こうで「泣かせたら許さない」みたいなことを言われた時は雛さんのことを女性として好きなのかと思ったほどだ。

いや今それはいい。それよりもそんな彼だが雛さんが居なくなれ

ばどう行動するかなんてわかりきったことだ。それで雛さん?その辺りどうなのよ?

「えっ?あぁそれは、まぁ……心配しているのではないかと…えへへ」

「Oh…!神は死んだ!“あの”勘助君のことだ!近衛忍の総力を挙げているに違いない!!……俺も部隊や艦隊なんかの戦力を準備したほうがいいだろうか?」

どこからか幼女声で「死んでませんよおおっ!?」と言う声が聞こえた気がしたが気のせいだ。

マジメな話し今回のようにゲニーちゃんが干渉してくることが無きにしも非ずと言える!今後はより一層組織としての地力と兵器や技術力を飛躍的に高める必要がある…!主に俺の身の安全のために!!!

「だ、大丈夫ですよっ!葵さんは(私が)守りますから!」

「そ、そう?ああ、そうだよね!(家族が)守ってくれるよね!」

「ええ!そうですよ!」

「あっははははっ」

「うふふふっ」

……なんか話が噛み合ってない気がする。これは気のせいか?

「はぁ……観光を続けようか?」

「ふぅ……はい」

気分が重いなー…。雛さんの態度から考えるにこちらへ招待する時に勘助君が側に居たっぽい。何も言わずに雛さんを連れ出したか

ら勘助君が暴走していなければいいんだけど。マジで俺ゲンナリです……。

「閣下。よろしければここからは自分がガイドを務めさせて頂きますが。いかがでしょう？」

「うん、少しお願い…（マジで何か対策を考えておいたほうがいいかもしれないし）」

雛さんの手前いけないとわかってはいてもお願いした。対策は練っておきたい。勘助君だけじゃない。他のトリッパーや転生者が干渉してきた時のために対応マニュアルを作っておく必要があるかもしれない。ほぼ無駄になるだろうけどね！！？？

「承知いたしました。それでは、こほん。……雛様。左手をご覧下さい」

「？？？森、ですか？」

アイリは車内マイク片手に毅然としたバスガイド風の体で解説を始めた。アイリの言うとおり雛は走行中の車内から左側に見える草原の奥に存在する鬱蒼とした大森林を見た。

「はい。あれは平原エリアに群生いたします大森林でございます。あの森には魔法の触媒、薬になるものは勿論、他にも希少な動植物などが豊富に存在します」

「はぁぁ…すごいですね。あっ、あの大きな木々はまるで私の持つ“夏”みたいです。動物は居るのですか？」

「…居りますが現在は小動物が主です。閣下の所有する接続魔法球［牧場］内に存在する“奴ら”に比べれば可愛いものです。ええ、本当に…」

この時のアイリは背中にドンヨリとした雰囲気を纏っていた。心なしか表情にも線が入っている。余程［牧場］にいい思い出がないのだろう。

「可愛い？え？……［牧場］には何が居るのですか？」

「あそこは……ふふふ、真の意味で人外魔境にございます。今では独自の生態系が構築されたことで何があっても不思議ではありません。ですがそれゆえに［牧場］は部隊のサバイバル訓練に適しているとも言えます」

「……そうですか」

先生、空気が重い、です。いや、先生って誰だよ…。対転生者＆トリッパー（プラス勘助君）マニュアルをある程度考え終わったからアイリのガイドを聞こうとしたら、これだよ。何があったし……。

確かに今の［牧場］は名ばかりの弱肉強食の世界に成り果てているから否定もフォローもできない。だが一応“人外”魔境だから俺に被害はないから中の動植物は自由にさせていた。放任主義は失敗だったのだろうか……。

「…あ、失礼しました。説明を続けさせて頂きます。あの大森林の中央には湖が存在します。そこは――」

「――なるほど。そのようなことが」

「――ええ、そうなのです」

「――ふふふ」

「――ふふふ」

そのままアイリのガイドを聞きながら草原エリアの案内は進んでいく。ＣＯＳ－ＭＯＳの運転する車も軽快に走っている。こうものんびりとしていると眠くなるねー…。

あれ？そう言えばゲニーちゃんが大人しい？はて？何をしているのか。

「フリちん！喉が渇いたお！お茶頂戴ちょうだいチョウダイ！」
「フリちんなどと呼ばないで下さいまし！？はぁ…ただいまお淹れしますわ」
「センキュー！フリちん！」
「だ　か　ら！！フリちんと呼ばないで下さいまし！！」
「アチャー！？弓兵それはアーチャー！？…む？ツマラナイぬ！？
そして今更ながらお湯は投げるものじゃないお！！フリちん！？」
「ふんっ！！」

……訂正。とても元気だった。

……。

ところ変わってやって来ました、ここは山岳地帯だ。予定通りに小型艇に乗り換えて空中散歩と洒落込んでいたりする。車はＣＯＳ－ＭＯＳがしていたので小型艇の操縦はリチラがしている。

時間があればゆっくりと登山してもいいんだけど、それができない理由がある。そう、勘助君だ。彼の存在があるから観光に余り時間を掛けられないでいる。多少急ぎ足でもこればかりは仕方ないのよ。

俺も死にたくないし雛さんも勘助君に怒られたくない、って…え？気にしなくていい？いや雛さん？早めに帰らないと皆に心配されて…え？一緒に居たくないのかって？それはまぁ居たいに決まって…ごほんごほんっ！それよりも、だ！

「雛さんって実はアグレッシブな人だったんだねー？」
「あうあうあう……」
「にやにや（テレる雛さんもかーいーなー）」

冷静に考えてみるとこちらに来て出会いがしらに取った行動は少々（大分）はしたなかったかもしれない。今思い出すと顔が真っ赤に染まり、両手を頬に当てていやんいやんと首をぶんぶん振っている。

ふむ…これが所謂“スーパー雛タイム”に突入したということか。

「こほん……結構高いのですね。標高はどれくらいなのですか？」
「はい。一番高い物で、はい、右手に見えます、あちら山脈が標高５２８４ｍを記録しております。こちらは道程も険しいことで徒歩による登頂は危険を極めます。また、山岳訓練にて使われることもしばしばございます」

中国＝ネパール間にある標高８８４４ｍのエベレストよりも低いがトルコ共和国とアルメニア共和国の間にある標高５１３７ｍのアララト山より少し高い山岳地帯だった。因みに富士山の標高は３７７６ｍだ。

ここでもアイリのガイドが続く。割と名所を押さえた説明をしてくれるから俺も楽しめるのもいいね。よく考えたら俺も艦内のことって詳しくないのよ。まだ暮らして一年も経ってないしさ。

「立派な山ですね。これだけ立派なら何か霊的に優れている場所が？いえ、でもこれは…？」
「むぅ…山岳訓練？それは初耳だ。ただの登山ハイキングだとばか

り」

「葵さんでも知らないことがあったのですね…」

それはまぁ…ねぇ？先程にもあるように俺はここで暮らして一年も経ってないんだよ。しかも今日まで研究研究また研究で碌に艦内を見回ってない。精々が機関部や艦橋、宇宙港などの重要区画くらいだ。

生活区画であるここは流石に広くて全部は見てない。見ている時間もなかった。それよりもメタトロンの研究が楽しくて夢中になったのもあるんだけどね……。

「いえ、雛様。閣下の認識も間違いではございません。あれらは訓練とは名ばかりの散歩（ハイキング）です。道程の所々に罠（トラップ）があるだけですので楽なものです」

えぇぇ…罠って…えぇぇ…。フォローしてくれたのかと思ったらこれだよ。アイリ達のやることだから妥協は無いはずだから単純な落とし穴から対人地雷（クレイモア）のような爆発物まで様々な物があるということでしょ？

それって地獄じゃね？徒歩による登山で肉体的に疲労するのは勿論なのに罠を警戒しているから精神的にも追い詰められる。しかもこれってたぶんだけど気も魔力も使わないんだよ。地力を上げるために。きっと。

「…葵さん、これは散歩と言うのですか？私の認識が間違っていたのでしょうか？」

「ごめん、雛さん。俺も自信がなくなってきた。散歩ってもっとのんびりしたものだったよね…」

雛さん、もう一つゴメン。実は久しく普通の人と接触することが無いからもうこれが日常として定着しているんだよ、ここでは。何があっても訓練や演習だし。

俺も今では違和感ない。…いや、少しウソ。これでも８００年以上生きているんだ。赤の他人がどれくらい傷付こうが死のうが笑っていられる。いや、女子供にはちょっと気を掛けるかもしれないけど。それでもまぁ正直に言って善悪とかどうでもいい。

だけど身内だとその限りじゃない。心配するって。あの子は怪我してないだろうかとか、行軍中はご飯食べているのかとか、体調管理はできているだろうかとか、睡眠はキチンと取れているだろうかとか。挙げれば切りがない。

と、とと？家族のことだったから思わず話しに熱が入ってしまった。……あれ？それにしても静かだ。こういう爆発ネタ的な話しには間違いなく絡んでくる幼女（ゲニーちゃん）が、ってあれ？

「……そう言えばゲニーちゃんは？妙に静かだけど」
「あ、あら？本当に。いつもなら賑やかに飛び回っているはずなのですが」
「小型艇に乗り換えた時には一緒だったよね？」
「え？え、ええ、そのはず……なのですが。はて？」
「いつの間にか居なくなってるし…。どこで逸れた？」

首を傾げて二人で頭を悩ませる。雛さんも気付いてなかった。いや忘れていたのか。俺も忘れていたけどね！だっててっきりついて来るものだとばかり思っていたし。

「閣下。ダズゲニー様ですが【…現在位置は第６機関部です…】ＣＯＳ－ＭＯＳとアン、両名と行動を共にしております」
「はぁ？また何で…いや、あの子なら当然かもしれない、か」

この艦には正、副、予備合わせて大規模相転移機関が２８基ある。ＣＯＳ－ＭＯＳと別れた場所から一番近いのが第６機関部だ。なぜアンが一緒なのかはわからないけど、たぶん待ち合わせか何かしていたのかもしれない。

「必要でしたらこちらで手を打ちますが？それ相応の用意もできております」
「ふむ…。雛さんはどう思う？俺としてはさっきみたいに混乱するよりは事前に確保したいんだけど」
「はい。そういうことでしたら。ただし……」
「承知しております。ダズゲニー様は無傷で連れてきましょう」
「よろしくお願いします。……（ボソッ）ゲニーちゃんオシオキです…」
「「っっ！！」」

ゾクッとした！あ、アイリも？そうだねぇ、今の雛さんを前にしたら背筋がゾクッとしたよ！ハッキリとは見えなかったけど今のは黒雛（ブラック）さんだ！？黒いモヤが立ち上るのが幻視できた！……ような気がする！！

「…こほん。前回は私共もおふざけが過ぎました。穏便に終わらせましょう……（言えない。新兵の実戦訓練に丁度いいと考えたとはとても言えない。あまつさえ、近衛・雛をからかおうとしたなど閣下だけには言えません！）」
「まぁ何があったかはあとで聞くとして何事も慎重に、ね？」
「……了解です、閣下」

これでもう大丈夫だ。ファーストコンタクトと違って誤解による衝突もないしね。とりあえずイキナリ戦闘に突入ということはないはずだ。

「…とまぁ、アイリ達に任せて大丈夫だ。次の案内場所に行った時には合流しているよ」

「そうですか……（それでも皆さんとの出会いが出会いだっただけに不安です…）」

うわー、すごい不安そうだー…。まぁイキナリ呼び出されたかと思えば追い掛け回されたんだから当然か。俺もまさか皆がそんなことを仕出かすとは思ってなかった。まぁ切欠がゲニーちゃんだったのがまた笑えたけど。

……。

……。

山岳地帯と平原エリアの中間にあたるとある場所。そこではＣＯＳ－ＭＯＳの運転する車両が近付くと秘密基地よろしく地面がガゴンとスライドして開き隠された通路が現れた。彼女は予定していた通りに通路へ入ろうとした。

この時だ。本来なら葵や雛達と居るはずの人物がここに居るとわかったのは。葵達と別れてから目的地へ向けて移動していたがダズゲニーが付いて来てしまっていた。

当然、不手際があったのだと考慮して引き返そうとした。だがダズゲニーは拒否。このままＣＯＳ－ＭＯＳについて行くと言い出し

た。理由として葵と雛の間に流れるほんのり甘い雰囲気とアイリ達のドス黒い嫉妬の空気に少しゲンナリしたらしい。

ＣＯＳ－ＭＯＳもダズゲニーの言うことを少し理解できた。葵と雛。この二人はさり気なく手を繋ぐことがあった。それも雛が葵の小指と薬指をちょこんと握るのだ。葵も満更ではないのか苦笑してシッカリと握り直すのだ。

その時にＣＯＳ－ＭＯＳは主魔動力炉が小さく異常発熱したのを覚えている。これは感情で言うところの苛立ちや嫉妬だがまだ生まれて間もないＣＯＳ－ＭＯＳには理解できていなかった。ただそれでもシコリのようなものは感じていた。

それはともかく付いて来ると言われても困った。今から行くのは艦船で言うところの重要区画に当たる機関部だ。葵が招待したとは言えそう易々と連れて行っていいものか。

無論、問題ありだが過去には関係者以外許すことのなかった魔法球［工房］にヘラス帝国第三皇女であるテオドラが踏み入ることを葵自ら許可した事例もある。一概にダメとは言い難い。

とりあえず自分よりも先に生産された姉のような存在であるアングレカムに亜空間通信で呼び掛けて相談することにした。自分だけでは判断できないのでこれから合流する彼女の指示を仰ぎたかったのだ。

結果は肯定（アクティブ）。大きな問題もなさそうだから同行を許可された。あっさり許可が下りたとは思うが、深読みしてその裏は“問題があれば処理する”という風に取れないこともない。

「艦……だと？え？マジで宇宙船かお！？」
「…肯定」

マッドな科学者でエキサイトな研究者であるダズゲニーは解体してみたい、と溢れ出る探究心から即座にそう考えた。

そんな考えだとは知らないＣＯＳ－ＭＯＳは結果的に今運転しながらダズゲニーに戦闘移民艦ディモルフォセカのスペックを機密に触れない範囲で簡単に説明していたのだった。

「…先程まで居たのはこの艦、５０ｋｍ級戦闘移民艦ディモルフォセカの一生活区画でした。そして現在この艦の管制ＡＩであるアングレカムと合流するために機関部へ移動中です」
「管制ＡＩっ！？機関部！？いやっふぅぅぅ！！興奮が止まらないお！！ハァ…ハァ…じゅるり…は、早く逝かないか？」
「……了解……（危険度上昇。警戒度上昇。杉白・Ｆ・ダズゲニーを要注意人物と断定。対応策を検討中……成功率１０…％以下っ！？再計算！再計算！！）」

興奮状態にある今のダズゲニーをＣＯＳ－ＭＯＳが相手取るにはやや経験不足のようだ。人海戦術を使うかここは艦内では圧倒的アドバンテージを誇るアンが居れば確率はこの上なく上昇する。

何事も物量や圧倒的な戦闘力の差があるなら敵う者など居ないのだから。

そうしてダズゲニーの質問に答えるという形で説明しつつ到着したのが数ある機関部の一つ、第６機関部だ。車を降りて歩く先には目的の姿があった。

巨大な相転移機関に設置されているＩＦＳ端末に右手を乗せて操作していた銀髪の少女、アンが丁度作業を終えたのかＣＯＳ－ＭＯＳに振り返った。

「あ、ＣＯＳ－ＭＯＳ、ご苦労様。迎えに来てくれてありがとうね」
「…問題ありません。アン。移動の準備は――」
「ヒャッホォーイッ！！この子っ！？アンってこの子かぬ！？凄いすごいスゴイ！！見た目人間にしか見えない！！それなのに生体反応は無い！？…あ、当然か。――んむ？でも微弱だけど生体反応にブレがある？うにゅぅぅ？」

お約束のようにＣＯＳ－ＭＯＳの言葉を見事にぶった斬ったのはダズゲニーだ。因みに微弱な生体反応とは今のアンの身体が生体金属を主としたナノマシン集合移動端末だからだ。

「あははは…。な、なかなか元気のある子だね？ＣＯＳ－ＭＯＳ…」
「…申し訳ありません。杉白様は科学者なので未知の技術を前に興奮しているのです」
「なるほどねぇ。それじゃお父さんと同じ――」
「否定（ネガティブ）。マスターとは違います。ええ、断じてマッドではありません」
「そ、そうなの？え？マッド？本当に？うわー…それじゃここに連れて来たのは失敗だったかも――――は？」

アンが気付いた時、いつの間にかダズゲニーの姿が消えていた。先程まであんなに騒がしかったのに今度は嵐の前の静けさとでも言うように静まり返っている。

「こっことっ！こっちをっ！つっなげてっ！あっ！それっ！こっちはっ！あっちっちっ！とくらああっ！！イ～ッヒッヒッヒッヒッヒ

ッ♪♪」

ただし静かな時間は一瞬だった。相転移機関の巨体の下からカンカンと金属の甲高い音やキキッキキッと金属の擦れる音がする。時折、バチバチと電流の洩れる音がするのは気のせいだと信じたい。

「ちょっとおおっ!?なに勝手にエンジン弄ってくれちゃってるのよおおっ!?」

「つ～な～い～でっ!む～す～ん～でっ!イヒッ♪あいたっ!?痛いおっ!?誰だ!?」

華麗な飛び膝蹴りがダズゲニーの側頭部にクリーンヒットした。当然、そのような場面を目撃すれば温厚なアンと言えど叱らずにはいられない。事によってはこの区画の空気を全て排出してでもダズゲニーを止める覚悟を持っていた。

「痛くしてるのよ!それと誰だ、じゃない!!なに勝手に弄ってくれちゃってるわけよ!?停止させてないまま相転移機関をバラすなんてなに考えてるの!?下手したら爆発!最悪で周囲を巻き込んで、まとめて相転移して消滅しちゃうでしょ!?」

そんなことになれば一大事だ。何があってもいいようにいつでも沈む覚悟があるアンだがこんなことで沈みたくはない。

「アイヤー!?ゴメンちゃい!!興奮して周りが目に入らなかった!!」

「堂々と胸張って威張らないでよ!?胸ないけど!?」

「それはヒドイお!?ゲニーちゃんのこれはステータスなんだお!!そう言うアンちゃんは中途半端じゃね!?」

「ち、中途半端ああっ!?貴女失礼ねっ!?これでいいのよ!お父

さんはす、すすす好き…だって言ってくれたもん！！」
「……フッ」
「鼻で笑われた！？フフ、フフフ！！ど、どうしようか、ＣＯＳ－ＭＯＳぅぅ…！？なんだかとってもイラッとしたんだけどおおっ！！」

嘲笑されたアンは流石にイラッとしたようだ。どこからともなく警備用の無人機動兵器を呼び出していた。彼女の号令でいつでも捕縛ネット、電気ショック、特殊硬化溶液などを射出、放出できるようになっている。

そして気になるアンが今後成長する確率はゼ……こほんっ、ここはノーコメントだ。

「…落ち着いてください、アン。杉白様の術中に嵌っていますよ」
「えっ！？――――……はっ！！」
「チッ！もう少しでウヤムヤにできると思ったのに！！」
「貴女！考えていた以上にアクドイわね！？」

そこからが追いかけっこの始まりだった。逃げるダズゲニー、追うアンと無人機動兵器。ＣＯＳ－ＭＯＳはこれを見て頭を抱えている。その仕草が妙に人間くさいことから今回一番成長しているのは彼女かもしれない。

「つ、疲れた…なんかもう色々と…」
「…アン。元気を出して下さい。貴女はよくやりました」
「う、うぅぅ…ＣＯＳ－ＭＯＳぅ、私汚されちゃったよ…ぐすっ…こうなったらお父さんにぎゅっと抱き締めてもらうしか」
「…否定。それだけは断固阻止させてもらいます」
「即否定された！？あの素直なＣＯＳ－ＭＯＳはどこに行ったの！

？」

「もうゲニーちゃん……ここに住んじゃっていいや……」

そして盛大な追いかけっこも終わってみればこの通り。いい加減に移動しないと葵達との合流が遅れるのでアンの自動運転で走る車に乗ったのだが、ダズゲニーはなぜか両側にアンとＣＯＳ－ＭＯＳを侍らせて悦に入っていた。

結局ダズゲニーは逃走中に色々エンジンを弄っていた。そして驚いたことにエネルギー効率が上がったのは嬉しい誤算（？）だった。最終的には細かな調整や他の相転移機関との同期などやることはあるが数％とは言え向上したのは大きい。

「……（ヒソヒソ）アン。ひとつ問いたい。彼女が当然のように肩を組んでくるのはなぜなのでしょう？」

「……（ヒソヒソ）えと…な、なんでだろうね？今更だけど、この子って杉白・Ｆ・ダズゲニーさんだよね？」

「……（ヒソヒソ）肯定。マスターと近衛様の空気に耐えられなかった、と言ってましたがそれだけとは思えません。おそらく技術情報の収集が目的かと…」

「……（ヒソヒソ）普通ならそうだけどダズゲニーさんだよ？そんなせこいことするのかな…？」

「……（ヒソヒソ）報告では磁力結界によって改造した銃器を確保していたとあります。これから考慮するに十分にありえるのでは？」

「……（ヒソヒソ）でも……」

当然だが葵からダズゲニーへ返還要請は出していたので物自体は既に回収している。ただ、迷惑を掛けたのも事実なので数点の銃器は譲渡という形で引き渡すことになっていた。

「およ？何をさっきからヒソヒソしてるのかぬ？ゲニーちゃんも混ぜてまぜてマゼテ！」
「やぁぁ！？イキナリ抱きつかないでよ！ビックリするじゃない！」
「…杉白様。お戯れも程々にされたほうがよろしいかと」
「いたいって！？イキナリ叩くのはヒドイお！！」
「……必要な手段でした」
「開き直った！？ロボ娘にも関わらずなかなかに強かだお！！――＞＞ピシッ＜＜ってピシ？？にょおおっ！？にょにょ！？白ベーダーが！？ゲニーちゃんの白ダー〇ベーダーが割れたぬ！？」
「「――――（ジィィィ）……フッ」」
「ゲニーちゃんが困ってるのに鼻で笑われたぬ！？」

正直言って白ダー〇ベーダーはただの被り物ではない。各種計測機能が搭載されているは勿論、装着者の脳を直接電気刺激して反応速度や身体能力を強制的に底上げする代物だ。つまり白ベーダーのない今のダズゲニーの戦闘力は５以下だった。

「くおおっ！？このままだと呼吸が――」
「艦内の空調、生命維持装置は正常に機能しております」
「……くおおっ！？このままだと視力が――」
「スキャンから推測しますと杉白様の視力は正常です」
「……くおおっ！？このままだと純白の柔肌が光に焼かれて――」
「それは単に引き篭もりがちで太陽に当たっていないだけでは？そもそも人工灯です」
「…ぐすっ！もう何なんだぬ！？せめて最後まで言わせてくれてもいいじゃまいか！？」
「…いえ、なんとなくこうしなければならないと考えまして。他意はないのです、他意は」
「なんとなくだと！？理由がトコトン酷かった！？……ほ、惚れそうだー」

それでもギャグをやめないのはダズゲニーらしいと言えばらしいのか。ただし今回はＣＯＳ－ＭＯＳが彼女のボケの尽くを先回りして潰していた。

「こ、ＣＯＳ－ＭＯＳが黒い…？お父さん、この子は立派（？）に成長しているよ……」

「…どうでもいいですが、そろそろマスターと合流しますよ？それともアンは車内に残りますか？」

「えっ！？それはダメだよね！？ダメじゃないかな！？うんっ、ダメだよ！！」

スゴイ気合の入りようだった……。

……。

……。

ここは海エリア。水質は地球の海とほぼ同じ組成でできている。通常は水源として貯蔵、使用されることを目的として専用に処理された区画である。勿論、水生生物や海藻も豊富に存在している。

因みに艦内をくまなく巡回している水は膨大なエネルギーを供給する相転移機関のお陰で水質処理を万全に行えるので上下水ともに潤沢に使用できる。これは閉鎖空間である宇宙空間では嬉しいことだ。

そしてこの海エリアは宇宙空間という閉鎖空間で乗組員の心身をリフレッシュできるように一部が遊泳区画として開放されているエリアでもある。

「…それでゲニーちゃんは何をしていたのさ？」
「いや～、アンちゃんが寝かしてくれなくて……激しかったんだお！！嫌がるゲニーちゃんに何度も何度も…」
「違っ！変なこと言わないでよねっ！？お父さんに誤解されたらどうするのよっ！？お父さん、違うよ？アンはお父さんだけのアンだからね？信じて？」
「は？あの、アン？落ち着いて――」
「おおおっとっ！？アンちゃんはファザコンだったのかぬ！？近親○姦は感心しないお！？……でも背徳感がとおおおってもベリィィグゥゥッドだお！！禁忌とかイイヨネ禁忌とか」
「ダズゲニーさん！？今は黙っててよ！！お父さんが変に思うでしょ！？」
「おおう！？これがツンデレですね？わかります！！ゴチです！！」
「ああ！！もうイヤああっ！！」

コラ？何があったかはわからないけどゲニーちゃんが何かしたのは察したぞ。アンに何した？それとも相手はＣＯＳ－ＭＯＳか？彼女もなんだか頭抱えているし……。

「――……ゲニーちゃん？」
「――――っっ！！（ぞくぞくぞくっ！！）ひ、雛…さ、ま？どうしたぬ？なんか……こわいよ？」
「あまり…葵さんのご家族に迷惑を掛けるものではありませんよ？（にこにこ）」
「い、いえっさー…」
「すみません、葵さん。ゲニーちゃんが色々と…」
「い、いやー、そこまで気にしなくてもいいよ？うん…。そ、それよりも海だよ？泳がない？」

ふ、ふんっ！話題を逸らしたわけじゃないんだよ！？黒雛さんが怖かったわけじゃないんだからね！？海に入りたかっただけなんだからああっ！！

「海ですか？はい、いいですね。ですが生憎水着がないので…」
「ご安心下さいませ。色、種類、サイズを様々ご用意しております。ご試着はあちらの更衣室をご利用ください」
「……アイリスさんは本当に用意がいいですね」
「メイドの嗜みでございます。…さぁ、閣下。こちらに水着をご用意しております。早速お着替えを。ささっ」
「は？あ、いや、ア、アイリ？ちょっ」

着替えるのはいいけどなんでアイリが背中を押してくる？なぜ同じ更衣室にそのまま入ろうとする？なぜ俺の服に手を掛けるのか……。

「ちょ　っ　と　待　ち　な　さ　い」
「――何をなさるのですか？雛様…。自分は閣下のお着替えをお手伝いするのですが」
「なんでアイリスさんまで行く必要があるのですか！？寧ろ私が行きたごほんごほんっ！あまりにもハレンチです！えっちなのはイケナイと思いますっ！」
「何か不思議でしょうか？これくらいメイドとして当然ですが…」

今のうちに着替えてこよう。なんか知らないけど今を逃すと次が無いような気がするし。気配遮断や自分の気配を周囲へ溶け込ませて存在感を一定にして馴染ませて……いざ！ぬっきあっし。さっしあっし。しっのびあしっ。にんにんっ。

「くっ！この人、素でわかってない！？実は天然さんだった！？ふ

ぅ…いいですか?葵さんは男性です。故に女性のアイリスさんが一緒の更衣室に入ることはハシタナイと思うのです。あとは……わかりますね?」

「???自分は閣下“だけ”のメイドなのでご主人様のお世話をすることは当然だと思うのですが。寧ろ個人的にはバッチ来いですし、何がイケナイのでしょう?」

「この人、本当にわかってない!?それに無自覚で積極的ですよ!?それとも狙ってコレなのでしょうか!?い、意外に強敵ですね…。ですから――」

着替えて戻ってくるとまだ何かを言い合っていた。水着に着替えていたから何を言い合っているのか知らないけど時間も限られている(激怒しているだろう勘助君的な意味で)んだし早く着替えればいいのに…。

「おおいっ!早く着替えなよ!俺は先に泳いでるからさ!」

「「……」」

言うだけ言って海へ駆け出した!だって、なんだか二人とも表情が希薄だったような……?まるで許容以上にショックを受けてシャットダウンしたような感じ?微妙に口元が引くついているのがまた不思議と言うかコワイ?

「……雛様のせいです。閣下のお着替えを手伝えなかったではないですか」

「ふふふ。それは何より。ですが私も出遅れているので早く着替えないと…」

葵が立ち去ったあとで交された会話はこんなものだった。激戦と言うには熱くない、冷戦と言うには冷たくもない。不思議な熱を持

った言葉だった。

……。

……。

色々と案内して回った最後に都市部へ到着した。地球時間で言えば今は午後6時過ぎくらいだ。生活区画の天蓋（スカイスクリーン）も時間に合わせて鮮やかな夕焼けに変わりつつあった。

ここでアイリとリチラが時間的には丁度いいかもと言うので自分の洋館に戻ることにした。ここでは今、ファレノやミリー達、他に料理が得意な子達の手で雛さん達の歓迎会という名の食事会（パーティー）が用意されている。

「お帰りなさいなの、葵ちゃん！歓迎会の準備は万全なの！」

洋館の表門から入り玄関を潜るとファレノが満面の笑みで出迎えてくれた。彼女がここに居るということは歓迎会の用意は終わっているらしい。

「うん、ただいま。それじゃあ早速……」

「閣下。雛様もダズゲニー様も長い時間ご観光なされたのでお疲れかと思われます。ここは暫し休憩を挟まれたほうがよろしいかと」

「え？いえ、私は疲れてなど……」

「ゲニーちゃんも疲れてなあべしっ！？」

アイリ……。今日半日でゲニーちゃんの扱いが雑になってない？何も言わずにレバーブローって……。ドンって聞こえたよ、ドンって。ゲニーちゃん床で悶絶してるよ？

この子があの苛烈な追跡を掻い潜った人物とはとても思えない。あの時と今で違うのは白ダー〇ベーダーの被り物をしてないくらい……。もしかしてアレに何か仕掛けがあったのだろうか？身体機能を強化する的な何かが。

「お二人とも海水に入られたので一度ご入浴されたらいかがでしょう？……（ヒソヒソ）海水で御髪が痛みますし、そのような姿を閣下に見せる気ですか？」

「――っ！そ、そうですね。では少し休ませて頂いてもいいですか？」

「？？？いいよ。それじゃ休憩にしようか」

「え～？ゲニーちゃんは別に気にしなごっぺる！？」

えぇぇー、今度は雛さんがゲニーちゃんを沈めたし……。息を吐き出したタイミングで双打掌って…痛くね？白目剥いているように見えるんだけど……。一体アイリは雛さんに何を言ったのか。

「はい。お部屋はご用意しております。案内はこちらの……」

「ファレノプシス・S・アニムスなの！うわあ、葵ちゃんからお話しには聞いてたけど綺麗な人なのー。白い髪がキラキラしていいの！」

「えっ？そんなことは…。ふふふ。ファレノプシスさんこそお綺麗ですよ。ウェーブした茜色の髪が愛らしいですし、オレンジ色のバレッタが可愛いです」

「あははは。ありがとなの。あっ、それと私のことはファレノって呼んで！」

「ふふふ。はい。では私は雛とお呼び下さい」

「了解、なの！それじゃお部屋へ案内するの！ついて来てなの！」

「はい。お願いしますね、ファレノさん」

去り際に「それではまた後ほど」と雛さんとゲニーちゃん（雛さんに引き摺られている）はファレノの案内で用意した部屋へ移動した。

「……あれ？」

このままだと雛さん達ってお泊りコース？……これは色々とマズイのではなかろうか。主に怒り狂う勘助君的な意味で。能力的に負けはしないが精神的にクルからすごく逃げたい。

古来より忍者という存在は一度敵と認めた標的はトコトン追い回して必ず仕留める執念深さを持っていた。あ？と言うか掟だったか？どちらにしても相手したくないなぁー…。酒の席なら歓迎なんだけど。

「閣下？」

「いや、なんでもない。俺も一休みするよ」

「承知いたしました。歓迎会の準備が出来次第お迎えに上がります」

「よろしくねー」

とりあえずお風呂入ってサッパリするか……。

……。

……。

休憩するために一時的に葵達の前から辞した時。

「…ファレノさん。私の髪って痛んでいますか？」

「え？んー？そう言えばガビガビしてるような…。ああっ！海に入ったの？シャワーだけだと塩分が落ち切らないからちょっと厳しいと思うの」
「うぅぅ…アイリスさんに言われて気が付いたんですよね。ちゃんとシャワーで流したと思っていたのですが。……枝毛とか心配です」
「あははは。だいじょーぶだいじょーぶ！葵ちゃん謹製ナノマシン配合シャンプー“落ちるんですZ”シリーズがあれば枝毛も髪の痛みどころかトリートメントも可能！即解消なの！」
「おおっ！それはすごいです！！それで気になるお値段は！？」
「良く聞いてくれたの！この“落ちるんですZ”！なんとお値段据え置き２９８円！２９８円なの！しかも！今ならシャンプー、リンス、ボディソープと！もう一組オマケしてるの！！」
「わああっ、とても、とってもお得ですね！！」
「「……」」

二人ともニコニコ笑顔なのに空気が停滞した。

「……雛ちゃん、意外とノリがいいの。驚きなの」
「……私自身が驚いてます。なんでこんなことをしたのか」
「とりあえず“落ちるんですZ”は浴室にあるから使うことをオススメするの」
「あっ、“落ちるんですZ”自体は本当にあるんですね」
「当然なの！これがあるお陰で私達全員の髪は艶やか且つサラサラを維持してるの！枝毛も髪の痛みも無縁なの！」
「……いくつか譲っていただくわけにはいきませんか？最近、向こうの世界で東西の確執があってストレスが酷くて、ううぅ」
「…帰る時に２ダースお土産に持たせるようにしておくの。だから元気出して？雛ちゃん」
「ありがとうございます、ファレノさん…」

変なところで友情が生まれたりしていた。因みに気絶したゲニーちゃんはずっと雛さんが襟首を掴んで引き摺って運んでいたとか。不憫である…。

……。

……。

そして歓迎会の時間。俺も雛さん達も改めて入浴したようで仄かに肌が上気していた。心なしか髪や肌艶がシットリぷるんとしている。

雛さんはこちらで用意したパーティードレスを着ていた。ピンクを基調としたもので所々に大小のリボンがあり遊び心と可愛らしさが強調されたものだった。

ゲニーちゃんは……なんで丈の短いチャイナドレスの上に白衣を着ているのだろうか?見た目幼女の彼女がチャイナドレスって、白衣って…。いや、なぜか違和感無く着こなしているけどさ。本当に不思議なんだけど。

それで俺の服装だがこれはいつも通りだ。黒のスーツに赤ワイシャツ黒ネクタイだった。…いいんだよ。これが一番着慣れているんだから。

洋館らしく立食パーティー方式で用意されていた。ローストビーフ、サラダ、スープなどや色取り取りのオードブルが各テーブルの上に並べられ、各種デザートも用意されている。

葵の乾杯の合図で歓迎会は始まった。雛も大げさなまでの歓迎振

りに照れ臭いのか仄かに頬を上気させていた。ダズゲニーは開始の合図と同時に料理の載っているテーブルへ奪取していた。花より団子という言葉を思い浮かべたのは葵だけではないはずだ。

葵と雛。二人で料理を突いている時、まだ名前どころか言葉すら交していない葵ファミリーの面々が代わる代わるに雛と、その側で料理をかっ食らうダズゲニーお挨拶していく。

勿論、歓迎会の主役は二人なので食事や葵との団欒に差支えがないように適度に会話の間を図って話していった。気のせいか、その度に雛とファミリーとの間に火花が散ったように葵が感じたとか。

そして粗方主要なファミリーと顔合わせが終わった頃になると食事も終わり各々が食後のお茶や酒盛りをしていた。

「いやー、回った、回った。ここまで本格的に生活区画を見て回ったのは初めてだ」

どうも！少しお酒が入って気分が高揚している九重・葵です！適度なお酒は気分がいいね！なんだか楽しくなってくるよ！……飲み過ぎると後日数人から真赤な顔して拗ねたように睨まれるから気を付けないとイケナイけどね。

「ふふふ。もう葵さんったら。それでしたら普段どこを見ているのですか？」

「んー？普段は開発兼研究区画か艦橋、それに機関部…あっ、あとは衛星カリストや他衛星の資源調査くらいかな。この艦の中を見て回ったのは初めてかも」

本当にね。渡された取り説的なものくらいでしか確認してなかっ

たから新鮮だった。それでも今日回ったのは生活区画だけだ。重要区画はそこそこ見てるけど具体的には見ていないから今後はできるだけ見て回ろうと思う。

「ふふふ。そうなのですか。ふふふ。――ん？？」

「どうしたの？雛さん。イキナリ固まって…」

表情がなんか引き攣ってるよ…？ポンポン痛いのか？なんでしたら医務室まで俺が直に連れて行くが。医務室に二人きりとか、なんだか背徳的だと思うのは俺だけだろうか…。

「…葵さん？今“艦”って言いましたか？いえ、気のせいだと思うのですが念のために」

「ははははっ。いやだなー、雛さんったら」

「あ、ふふ、ふふふ。そうですよね。そんなの気のせい――」

「当然じゃないか。今居るのは木星宙域ガリレオ衛星の近く、つまりは宇宙だ。そして俺達の居るここは５０ｋｍ級戦闘移民艦ディモルフォセカ。アイリ達かゲニーちゃんに聞いてない？」

因みに今現在も四つある宇宙港は資源を満載した輸送船がピストン運搬していてほぼ八割の稼働率を誇っている。同時に無人採掘基地を建設中だから完成すれば黙っていても月へ資源は蓄積されていくことになる――予定だ。

「えええぇ！？…わ、わたっ私聞いてませんっ！ゲニーちゃんからも！葵さんからも！皆さんからも！…え？ハブ？これってハブられて…えっ！？」

「え？だってゲニーちゃんは機関部の一つに行ったってアイリから聞いたけど。それに海では合流したから……本当にゲニーちゃんから聞いてない？」

「ええ。ちょっとお話ししたらゲニーちゃん震えるんです。寒くないのにおかしいですよね？ふふふ…」
「ハハハ。そ、そうだねー……（ぷるぷるぷるぷるぷるぷる）」

雛さんのオハナシでゲニーちゃんがマトモに話せなかったのか。それなら仕方ない、かな……。俺だけでもゲニーちゃんに優しくしよう。彼女の扱いが時間毎に雑になっている気がするし。これじゃ余りにも…ねぇ？

「そ、それじゃ簡単に我が艦隊の説明しようか？」
「はい。楽しそうですし、是非」
「じゃあ、まずは――」
「閣下。雛様にご説明されるのは構いませんが機密関係に抵触される部分はお控え下さいますようお願いします」
「……はい。と言うかここ最近は特に思うんだけどどこから現れていつから居たの？」
「本当に……。私も気付きませんでした」

俺だけじゃなくて雛さんもビックリしているじゃないか。それと言われなくともわかっているって。少しお酒が入っているとは言え公私は分けているし開示できる情報レベルも区別もしている。

いやまぁ久しぶりに雛さんに会えて気分がいいから口が滑るかもしれないけどさ。

「閣下のメイドたるもの影に日向に付き添いサポートするのは当然です。ご命令でしたら子守りから暗殺まで確実にヤッてみせましょう」

ふふん、と幾分得意気にその豊かな胸を張るアイリだった。言っ

ている内容はアレだけどこういうと行動を見ると可愛らしく思えるから不思議だ。

「なんと言うか……私のところも似たようなものですが葵さんのところのメイドさんってすごくオールマイティなんですねぇ」

「ははは。でも雛さん。これって始めてから一年くらいなんだよ？信じられる？」

「え？ええっ！？」

驚愕する雛さん。わかる。わかるよ。その驚きは理解できる。でもね？

「ふふふ。服装がメイド服になった以外は変わりませんから」

そうなんだ。よくよく考えると親衛隊服からメイド服へ代わっただけで仕事の内容に代わりはなかった。……とここで終わってくれればいいのに次のアイリの言葉が波紋を呼んだ。

「――それに閣下はメイドがお好きなようですので苦ではありません。寧ろ誇りですよ」

「へ、へぇぇ…？葵さんメイドさんが好きなんですね……」

「大好きです！――あっ。今の無し。いや事実だけど。あ、タンマ。雛さん待って。お願い刀を置いて」

アイリは事もあろうに俺の性癖を暴露してくれやがった。お陰で雛さんは俺の認識外の速度を持って刀を構えて突きつけてきた。しかも涙目で。拗ねるならもう少し可愛らしいやり方にしてほしいと思った俺は悪くないはずだ。

「むむむむっ！！アイリスさん！私にもメイ――――」

「申し訳ございません。在庫がありません（ニッコリ）」↑したり顔でキッパリ断る人。
「――――……」↑即答でガッツリ断られて愕然とする人。

雛さん…。なにもそこまでガッカリしなくともいいじゃないか。雛さんのメイド服姿とか俺も見たかったけど在庫が無いんじゃ仕方ないよ。

「雛さん元気出そう？ほら、この艦の説明をするからさ。ね？」
「ううぅぅ…はい。お願いしますぅ」
「えっと、それじゃまずは――」

艦の大雑把な説明と艦隊などの保有戦力数、それと科学技術と魔法技術を融合して現在可能とし確立した理論などをアイリに言われたように機密の部分はボカして話した。見せられる所は空間モニターで追記しながらね。

足りないところや雛さんが疑問に思ったことなんかは時々アイリ本人から補足や注意が入ったけど雛さんは真剣に聞いてくれた。

俺達の話しを聞いて雛さんは自分の別荘と比べて至る所でその違いに感嘆していたようだ。根本的な技術が違うから驚くのも無理は無いと思う。

「これが科学の力ですか……。発展した科学は魔法と変わらないと言う言葉がありますが…」
「科学だけじゃなくて魔法技術とか他世界の技術もあるけどね。まとめて魔導科学と一括りにしているかな」
「ふぅ…葵さん。何事も自重は必要だと思いますよ？」
「いや、向こうの世界で歴史に干渉した雛さんだけには言われたく

ないって」
「あぅ……それを言われてしまうと弱いです」
まぁいくつかは雛さんも直接手は出してないしセーフって言えばセーフかもしれないけどね。俺の場合は今でこそ月を半ば占領して私有化しているけどこれまで生きてきた中のその殆どがひっそりと暮らしているだけだったし。
「まぁこればかりは雛さんのチートと俺のチートの方向性の違いだよね」
「内的指向性を持った力と外的指向性を持った力の違いですか」
「多少の語弊はあるけどそんな感じだろうね。雛さんは近衛の組織を半ば率いる長的存在だけどどちらかと言うと極限まで個人技を高めたタイプ。逆に俺は付与された身体能力を更に科学や魔法に他技術で高めて集団としての“群（軍）”を極めたタイプだ」
最も！俺の場合はこの世界に来た時に遭遇したドラゴンに驚いて何の能力を付与したのかいくつか忘れていたけどね！今は大半（？）を思い出したから問題ないけど……。
それと軍団云々というのも雛さんのように単独最強か、一人だと怖いから俺の力で存在強化や特化などを施した（群）軍で最強かの違いというだけだ。
何度も言うけど俺は臆病で小心者なのよ。チートという存在的強さは持っていても単体だと怖くて戦えないんだよ。まぁ一人でも家族が居れば自己暗示でも掛ければ「俺様最強おおっ！！」とかできなくもないけどね。
ＩＳの世界で教師をした時は“ちーちゃん”をモデルとした暗示

を自分に掛けたし。そうじゃないと気が持たなかった。俺の担当したクラスは確かに兵士（ソルジャー）として優秀な成績を示したけどなぜかM属性の娘になってしまったし……。

閑話休題…。

「なるほど……私自身も今まで以上に近衛忍を強化してみましょうか……ふむ」

「くくくっ。雛さんがやらなくとも勘助君達なら自分達で自らを高めようとすると思うけど？今でも準チートな感じだし」

「…ふふふ。そうですね。言われてみれば確かにそうです」

勘助君なんてある意味準チートじゃないか。雛さんという影響が無かったとは言わないけどほぼ自身の努力だけで今の力を身に付けたとか、もうね？それに俺が行った時に見た彼って若返っていたらしいじゃないか。まだ伸び白があるとか……ないよ。泣ける。

「まぁ追い詰められているならやるのもありと言えばありだけどね。くくくっ」

「まぁ！私がそう簡単に負けるとでも？だとしたら心外ですよ」

「いや、雛さんって不老不死じゃないか。ただの不老の俺と違って事生き残ることなら最優秀だと思うよ？俺の場合は家族に助けてもらわないと生き残れるかも怪しいしね」

「葵さんは単独でも保有魔力が多いのですから十分戦えると思うのですが。修練も欠かしておられないのでしょう？」

「修練は一応の護身術程度はね。保有魔力が多いのは俺の身の内に“小さくとも世界を内包している”からだ。その気になれば新しい世界すら創れるかもね」

面倒だからやらないとは言えない。神モドキになんてなりたくな

い。足かせにしかならないし、俺の将来の夢、と言うか目的は異世界間を家族と共に旅することだしね。

雛さんとの談笑はそのまま続いた。途中からゲニーちゃんも加わって騒がしくも賑やかな楽しい時間は瞬く間に過ぎて行き、その日はそのまま夜は更けていった。

因みにだが各人が部屋に戻った夜に俺の部屋の前から雛さんと陽月姉妹の言い合う声が聞こえた気がしたけど気のせいと思い込んでそのまま寝ることにした。

……あれ？勘助君のこと忘れてね…！？……大丈夫だろうか。

……。

……。

そして翌日。雛さん達をお泊りさせてしまったことで勘助君が雛さんの無断外泊に怒髪天になっていないかと不安に思う夜が明けた日だ……。

なんで俺は父親に黙って娘さんと泊りがけの旅行に行った時のような心境になっているのだろうか？いや雛さん達を招待したのも泊めたのも後悔なんてしてないけどね。

雛さんは招待した時に来ていた水色の和服姿でゲニーちゃんも白ダー〇ベーダーの被り物がないこと以外は来た時の服装のままだ。来た当初のことで傷んだ服は司令部の後方物資担当課にある被服部門が修繕していた。

そして今は草原エリアの一角にて物々しい機械機材に囲まれた雛さん達と、それを見守る俺と陽月姉妹、ＡＩ三人娘、アイリ達親衛隊が居る。それと帰還させるための次元転移門を調整操作するための研究班と開発班が別れに立ち会っている。

この場に居ない精霊・悪魔三人娘は予め与えられた仕事があるからここに居ない。あの子達は朝出る時に雛さん達と別れの挨拶をしていた。

「それでは葵さん、皆さん。この度はお世話になりました。皆さんの温かな持て成しに改めて感謝を」
「いやまぁ、招待したと言っても半ば無理矢理だったけどね。喜んでくれたなら嬉しいよ」

逆に本格的な追撃戦闘になりかけたことが申し訳ない。アイリ達も何を考えたのか目標を捕縛する訓練になるとして新兵をけし掛けるのはなしだと思うんだ。訓練も演習もできる限りしているじゃないか。ほぼ実戦形式で……。

「ふふふ。確かに最初は驚きましたけど滞在していた時間はとても有意義なものでした。機会があればまた是非来たいものです」
「ハハハ…。それは無茶じゃないかな…。また来ようとしても勘助君が許してくれないよ」

俺の中で勘助君は既にお父さん的存在になっている。雛さんが娘的な意味で。絶対に許してくれないと確信できる。…いや雛さんが言えば許してくれると思う、表向きは。絶対に裏では見張りを立ててくる。もしくは本人自ら見張るだろう。

ギラギラした目で監視されて殺気をピンポイントで飛ばされると

かマジで勘弁だー…。大体そんなことされたらウチの家族と正面衝突が……今思ったけど最悪の場合、戦争が起きるんじゃね？

やっぱり雛さんと気軽に会うためには勘助君や近衛忍達、それにウチの子達を説得（オハナシ）する必要が出てくる。だから……。

「大丈夫だと思いますよ？最初にここへ来ようとしたのはその勘助なんですから」

「は？あの勘助君がこっちへ？またなんで彼が？」

「それは……ふふふ。秘密、です♪」

そう言うと雛さんがサッと近付いてきて俺の目の前に来て……顔を近づけて別れ際の熱い接吻を――。

「……ふふ、ふふふ。ハオさん？ユエさん？この首に当たっている剣は何なのでしょう？」

――されようとしたけど陽月姉妹が間に立ちはだかって未遂に終わった。ご丁寧に雛さんの首にそれぞれ白と黒の剣を突きつけて。表情は静かな笑みを湛えているのにその視線はどこか挑戦的と言うか冷たい？

「…わからぬか？わからぬならば今のお主の行動を考えてみるが良い」

「今までならば我が君との接触は見逃していた。だがしかし……」

「「接吻ばかりは何人たりとも見逃すわけにはいかぬ！！」」

ええー…。キスくらい家族間では挨拶みたいなものじゃないか。こう…「おはよう。ん（ちゅっ）」みたいな。この習慣は雛さんの世界から帰って来た時になぜか始まったものだった。まぁ皆のこと

は大好きだから拒否することなんてしないけどさ。

そもそもの話しだがハオもユエも今朝起きた時にしただろうが。

↑ある意味爆弾発言したことに気付かない人。

「ふふふ…例えお二人が相手とて我が道を阻むというならば、推し通るのみ……！！」

「「来るが良い！小娘が！！」」↑溢れ出た魔力だけで地面が陥没した。

「はあああっ！！やあああっ！！」↑地面が斬れて割れた。

「――――シッ！！そこだ！！」↑無数の剣を飛ばして山が削れた。

「そこですっ！！はあああっ！！」↑衝撃でクレーターができた。

「なんの！甘いっ！！せいっ！！」↑迎撃したはいいが余波で若干海が蒸発した。

戦闘は苛烈にして過激だった。黙示録の五歩手前くらいには。少なくとも三人の争う理由は他人から見ればとても小さなことで、でも本人達にはとても大きなものだった。

「なんか知らんけど最終決戦的な何かが始まったような気がする……」

「ご安心を、閣下。どちらも加減されています。ですから艦が沈むこともありません」

「加減……え？アレで？地が割れて山が削れて、海が蒸発しているんだけど…本当に？」

あれを加減していると言うアイリの感性に激しく疑問を持った俺は間違えているのだろうか？いや、本人達も“ただの”斬り合いだけで技らしいものは繰り出してないけどさ。

「はい。どれも修復可能のレベルです。問題ございません」
「自分で乗っていてあれだけどこの艦こそある意味常識外（チート）だよね…」
「閣下をお守りするためにはこれでも不足なくらいです。出来得ることなら惑星艦を推奨したいくらいですので。そこで今当初の予定通りにドッキング艦を月で建造を……」

前半の台詞はいいよ。彼女達が守ってくれるとよく理解しているからさ。でも後半の惑星艦とかドッキング艦がどうとかって聞いたことが無いんだけど……。いやディモルフォセカの後部にドッキング部分があるのは知っていたけどね。

でも惑星艦って……それ無いねー…うん、無いよ。……はぁ。まぁ今その話しはいいか。

「アイリってさり気なくとんでもないこと言うよな……」
「？？？」
「……いや、わからないならいいんだけどね」
「然様でございますか……」

理解しているのかしていないのか。慈愛すら含ませた小さな笑みを浮かべていた。近い将来アイリが自重というものをかなぐり捨てそうで戦々恐々する日々を送りそうです……。

現実（雛、陽月姉妹の最終戦争編♪）から現実逃避したくてもう一方の招待客（ゲスト）であるゲニーちゃんを見るとそこでは雛さん達とはまた違った別れ（？）があった。

「ラミエルたん！ＣＯＳ－ＭＯＳたん！アンちゃん！一緒に行　かな　い　か？」

バッと白衣を翻していつに無く真剣に言い放つゲニーちゃんだった。てか三人を連れて行こうとしたら臆病者の俺と言えども流石に許容できないよ？侵略行動？バッチ来い、だ。

まぁ行く行かないにしても本人達の意思が大事だけどね……。

「…お断りします。理由がありません」

『行くわけがなかろう。我は分解（バラ）されたくなどない』

「ちょっと、ね…。お父さんと離れたくないし…」

皆ありがとう！俺は信じていたよ！と言うか見捨てられたら月面都市に引き篭もるね！軽く千年くらいは！……鬱だ……死のう。あ？あー、ゴメン、アイリ。ちょっとイヤなこと想像したら鬱になっただけだから気にしないで。

「全部即答で断られたお！？ゲニーちゃんの一世一代の告白を！？やべー…やべーよ！！ますます惚れそうだぬ！！」

『はぁ…相も変わらず無駄にテンションが高いヤ「ぱっくんちょ♪」――』

志〇後ろ後ろっ！（笑）じゃなくてラミエルさんが食われた！？げ、ゲニーちゃん！ペッしなさい！お腹壊す、じゃなくて！人の家族になんばしよっとか！？

「んん？あぁん、コロコロ…んぐんぐっ…ん？…あぐあぐ。ぺろぺろ…」

『ぬおおっ！？暗い！？ネトい！？ここはどこ……アヤツの口の中だと！？』

別れ際、この変態（マッド）は事もあろうにラミエルを口の中に入れられて

飴を舐めるように転がし始めた。

「んー…あろあろ…？？？んごっ！？」

体当たりしたのか知らんけどゲニーちゃんの頬が漫画のように伸びた。それとなんかすごく鈍い音がしたけどゲニーちゃんの口内は無事だろうか？ここから見る限りだとものすごく吐血しているように見えるんだけど……。

『はぁ…はぁ…くっ！油断した！まさか食べられそうになるとは…！！アイツは本当に人間なのか！？』

「…ラミエル。すみません。イキナリ食べられたのを見たので反応できませんでした」

「本当、本当。私も気付かなかったよ。アレは最早執念だね、うん」

「皆ヒドイお！？これは愛だよ！暫く別れるから熱いベェェゼを少ししただけだぬ！！」

いやベーゼってゲニーちゃん……。それって口付けじゃない？今のはどう見ても捕食しているとしか見えなかったんだけど……。

『喧しい！！我はいつ飲み込まれるのかとヒヤヒヤしていたのだ！貴様は帰れ！バラバラになって帰れ！！』

「惨殺宣言！？それもバラバラ殺人を宣言したぬ！？そんなにゲニーちゃんが嫌いかぬ！？」

『少なくとも好きにはなれぬ！』

「マッドな感じがちょっと……」

「…二人とも言い過ぎでは？……いえ同意見ですが」

「ぐはああっ！！言葉が心に突き刺さるおおおっ！？！？」

ラミエルとＣＯＳ－ＭＯＳ、そしてアンの言葉責め（ジェットストリーム・アタック）でダズゲニー

は撃沈した!!

す、すげぇぇ。あのゲニーちゃんを言葉だけで倒しやがった。俺にはできないことを平然とやってくれる!そこに痺れもしなければ憧れもしないけどね!?いや頼もしくはあるけどさ。

それでまぁいい加減現実逃避をやめた時には最終戦争的な何かは一応の終結を見せていた。三人とも服や身体を剣で斬られてボロッとしていたし、巻き上がった土埃や泥で汚れていた。

「あーもー…雛さんもあそこまでムキにならなくてもいいのに。ほらここ土汚れが」

そんな三人の汚れだけでも拭い取ろうとハンカチ片手に近付いていった。まずは雛さんからね。はーい、拭き拭き。こういう時は小さな子供に見えなくもないかな。……可愛いからアリだね!!

「むぐっ……仕方ないじゃないですか。女には退けない戦いというものがあるのですから」
「はいはい。あっ、ほらハオも」
「あうっ……わ、我が君。これくらい自分でできます…」

子供じゃないんだから我侭言わないの。そもそもの話しだけど汚さなきゃいいことでしょうに。

「いいからじっとしてる。次はユエだ。こんなに汚れて、もう…」
「ひゃっ……そ、そこは…!我が君っ、首筋は…んっ!」

まったくユエもこんなに汚れて、本当に仕方ないんだから。ほら、“こんなところ”まで……。くくくっ。って?あれ?なんが突き刺

さるような視線を感じる？

「「……（ジィィィ）」」

「……何か、二人とも何か？」

「いえ……」

「別に……」

「ふぅ…ふぅ…んっ」

「まぁいいけど……」

雛さんとハオの視線が痛かった！なんでもないと口では言っているのに視線に込められた意味が真逆のような気がするのは俺の気のせいだろうか！？

三人ともどんだけはしゃいだのか知りたくもないけど、まぁ丁度いいと言えば丁度いいのかな。雛さんにお土産を用意した甲斐があった。

「……雛さん、これを」

空間内から取り出したのは一つの紙包みの入った紙袋だ。中の包みは丁寧に包装されたものが三つばかりある。

「？？？これは？お洋服、ですか？」

「うん。雛さんって和服姿はよく見るけど洋服は余り見ないから。これを機にプレゼントでも、ってさ。いらなかったら捨ててくれても……」

「捨てません！そんな勿体無いことするものですか！大事にします！飾らせてもらいます！」

「ははは。飾るよりはキチンと着てくれたほうが俺も、それに服も嬉しいかな」

「……はい。大事に着させてもらいます。ええ、本当に。……ふふふ。似合いますか？」

雛が自分の身体に当てた洋服は薄い水色を基調としたワンピースだった。ワンポイントに腰の部分で藍色のリボンでキュッと結っていて腰を細く見せるような作りとなっている。シンプルだが雛の髪が映えるように清楚な印象がある。

更に袋の中にはオマケで白いツバ広帽子と白い網目状のミュールが入っていた。どちらも藍色のリボンと紐がワンポイントとなっている。

「――うん。似合ってる。想像通り、ううん、想像以上に綺麗だよ、雛さん」

「――――……（ポー…）」↑ストレートに褒められて昇天中の人。

やっぱり雛さんは清楚な感じのものが良く似合う。膨脹色である白系統の服を着ても身体の線は細く見えるからいいね。うん、いい。

「？？？雛さん？おおい？……雛さんってば！」

「――はっ！？私は、何を……？」

「大丈夫？雛さんは……」

「これから元の世界へご帰還されるのですよ。雛様」

「ちょっ？ここで割り込まないでよ、アイリ」

話している時に割り込むのはマナー違反だと思うよ？まぁアイリの言う通りではあるんだけどさ。いやいや、それでももう少し会話を楽しむ時間くらいあってもいいんじゃないかと思うわけで……。

「申し訳ございません、閣下。ですが準備も整いましたので急がれ

たほうがよろしいかと」
「例えそうでも…んー…」
「葵さん、いいのですよ。私も何も言えないままこちらへ来ているのです。早く帰って安心させてあげないといけませんしね」
「そう?……なんか招待したのにバタバタ慌しい感じでゴメンね。それと向こうに帰っても怪我とかしないように。わかった?」
「ふふふ。ありがとうございます。絶対、とは言えないですが出来得る限り気を付けますね」

イエスともノーとも取れる言い回しだ。雛さんってたまに自己犠牲の精神が天元突破する時があるから心配だ。もう少し自分の身を大事にしても罰は当たらないと思うんだけど。

「なんか心配が拭えない返答だな……」
「ふふふ。すみません。こういう性分なので」
「まぁ雛さんがそう言うなら……なんて言うと思ったか。甘いよ……んっ」
「あっ……（ボンッ）」↑不意打ちで頬にキスされて瞬間沸騰した人。

ちょっとだけ不意打ちで雛さんの右頬を啄ばむようにキスしてみた。やっぱいって！表面上は冷静と装っているけど内心ではお祭り状態だ。もう「なにこんな気障なことしてんの自分？」と小突き回している。

ただね？言い訳をさせてもらえるなら一応これには理由があるんだ。ちょっとした祝福儀礼と言うかなんと言うか、ともかくそんな感じの“少しだけ幸運に恵まれるように”という願いを術式に込めたものだ。

「お守り、ってわけじゃないけど多少の加護はあると思う。これでも小さいとは言え世界を内包した身だからさ」
「は…はぃ…その…ありがとう、ございます……えへへ」
「う、うん……」

本当に気休めだけどね！死ぬような怪我を瀕死の状態で生き残る程度になるようなものだよ！

それと直接唇にキスしなかったのは……恥ずかしかったんだよ！？そんなんできるかい！？今の雛さんを見てみろよ！真赤になって「えへへ」とか頬と言わず顔全体がテレからか恥ずかしさからかわからんが幸せそうに崩れてるんだ！

もうね？俺の中は「きゃーきゃー！わんわんっ！にゃあにゃあ！」てなもんです。雛さんは何？俺を悶え殺す気か？それとも萌え殺す気？頭撫でるぞ！？俺の撫でスキルを舐めんなよ！？

失礼。少し、いやとても興奮していた。申し訳ない。

そしてついに別れの時間が迫った。次元エンジンにも起動に十分なエネルギーを回されていつでも次元転移門を顕現させて稼動させることができる段階に入っている。

まだ名残惜しいけどいつまでも雛さん達を留めておくわけにはいかない。少し抵抗感を感じるが俺は右手を上げて開始の合図を送った。

すぐさま周囲を取り囲んでいる機械が唸りを上げて起動し中心地に爆発的光量が発生。そこに次元転移門が現れた。

最後に小さく触れる感触を右手の指先に感じた。その先には雛さんの白くて細いけどシッカリした綺麗な手があった。更に上を見るとなんとなく寂しそうな目をした雛さんの顔。

薬指と小指をちょこんと握る。相も変わらずその握り方は恥ずかしさを感じるが、それでも心地よさも感じた。

「それじゃ、雛さん……」

「はぃ…葵さん、それでは……」

もうここまで来たなら多くの言葉などいらない。小さく触れる右手から雛さんの思いを感じ取ることができるから。

次元転移門が輝きを増していく。もう時間はない。光は帰還する者達の姿を覆い始めた。ここが別れの時だった。最後に見えるその姿はとても尊いものになる。記憶と思い出と、それから……。

そう、それは――――……。

「「また、会うその日まで……！」」

二人の思い（願い）はまだ繋がっている。“また会う”という小さくとも叶えたい願いが。

オマケ……。

「ゲニーちゃん最後は空気どころか存在感が抹消されてたぬ！？雛様ヒドイお！！」

「す、すみません。葵さんと気分が盛り上がって……つい」

「ヒドイ酷いひ　ど　い！！って…その二つのダンボールは何だぬ？」

「え？ああ、これはファレノさんから頂いたシャンプー、リンス、ボディソープ一式です」

「え？なにそれ？お土産？そう言えばゲニーちゃんだけマトモなＯＭＩＹＡＧＥを貰ってないお！？」

「あれ？一部の銃器を譲り受けていませんでしたか？」

「アレはアレ！！これはこれだお！！こうなったら奪う気持ちでもう一度…！！」

「ゲニーちゃん？あまり迷惑を掛けるものではありませんよ……？（にこにこ）」

「マム！イエス！マム！」

第一回コラボ企画［近衛の守護者？］ｂｙ彼岸花さん。後編（後書き）

うん。色々とやりすぎた。
詰め込みすぎたかもしれない。でも後悔はしていないです。
納得できなかったら加筆修正してでも…いやそれやるとまた字数が増えそうな気がする。
いやでも書いている時は楽しいものですよ。
脳汁垂れ流しながら書いていると、こう…意識がボーッと……。
はい知恵熱でした。考えすぎて、妄想のし過ぎで脳がアボンしてたしｗｗ
なんと言うかやり遂げた感と言うか自己満足ですね。
満足ではないけど今できるものは出し切った気がする。
寧ろそうじゃないとまた脳汁を垂れ流すことになりかねないｗｗ

ではまた！

誤字報告も歓迎ですよ？寧ろお願い。多過ぎて探せない…。

第七十九話「休息と故郷とそれぞれの想いと」（前書き）

やっべ！？
…いや特に意味は無い。気にしなくていいですよ？
今回はほのぼの系がメインです。
では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第七十九話「休息と故郷とそれぞれの想いと」

――木星宙域…。

Ｓｉｄｅ　葵

おはようからおやすみまで。どうも、九重・葵です（キリッ）。
現在はディモルフォセカ艦内にある平原エリアを散策中です！同行者は例の如く陽月姉妹とラミエルさんだよ！

この平原エリアでは色々あったなぁ…。

んんっ、それはともかく。いつもなら今もメタトロンの研究と活用方法の模索と考察で連日徹夜する勢いだった。ではなぜ俺がここに居るのか？それは――。

……久しぶりの休みだからだーッ！！！

「？？？我が君どうかなされましたか？吾らにできることならお手伝い致しますが」
「姉上、我が君は毎夜なにやらしておられたのだ。……察してやるが良い」
「うむ…？毎夜、とな？ふむ…いや、しかし何をしておられんぐっ。何をするのだ、ユエ？」
「ふふふ、それを聞くのは野暮というものだ。我が君も男であるからな。色々あるのだ。色々、な」
「ふむ、そうか。我が君も色々あるのだな…。承知した！もう聞くまい！」

おぅふ…なんだか知らないけどハオとユエに心配された気がする。それだけならいいけどユエの疲れたお父さんを気遣うような目が特に気になる！視線がなぜかイタイ…！優しいのに痛いとはこれいかに！？

……まぁ気遣ってくれていることは理解しているからいいけど。

そんなわけで久しぶりの休み、というかいい加減に休めとアイリから強制休暇を言い渡されてしまった。

いやー、ここ最近はずっと研究室か実験室に篭り気味だったからねー。だからこそ久しぶりに森林浴でもしようとここまで来たわけだ。

あははは…流石に二ヶ月間徹夜はやり過ぎたかもしれない。…いや、でもね？正直言って時間が足りない。とりあえず宇宙でやりたいことやできそうなことをやっていたら時間の足りないこと足りないこと。いや、まいった。

まぁ待て。時間が足りないなら［工房］使えよ、って思うだろ？わかってる。俺も始めはそう考えた。でもそれじゃ意味がない。無重力下による実験ができないじゃないか。重力魔法を使えばいいとか意見があると思うが却下だ。ロマンがない。

そんなこんなで地球帰還まで残り一月を切ったし…。木乃香ちゃんとの約束があるから戻らないといけないよな…。えと、一応どんなにオーバーしてもあの子達が二年の三学期までには戻らないとね。

……木乃香ちゃんにまた泣かれるのだけは勘弁だからな！！

ふぅ…昨日まではずっとメタトロン関連の技術力向上と俺の趣味と実益を兼ねた次元エンジンの作成に費やしてきたわけだ。特に次元エンジンの試作が完成した時は……うん、色々とあったんだよ。

一度目は、コーヒー零してそれに足を滑らせて稼動していた次元門に落ちるとか。この時は皆に心配掛けた…。帰って来た時皆に泣かれたのが一番きつかった…。

二度目は……これはまだいいか。

どれもこれもドジ踏んだというマヌケな話しだったのが泣けてくる。それに数々の世界へ行った先では累計して数十年も過ごしたのか。それなのにこちらの時間は殆ど進んでないとか…。もうね？なにこの不思議って考えちゃったよ。

……時間の流れと空間の違いがなければネギも麻帆良もないてなものですね。

新技術を導入するということは選択肢を広げてくれるし、より良い結果へ辿り着く手段が幅広く取れることにも繋がる。トンデモ空想科学が罷り通るこの世界群ならそれは正に無限大だ。

……まぁ魔力も気もある世界だからそれくらいないと何もできない、とも思うけどね。

俺もこの身体にイヤと言うほどバカ魔力を保有しているし、今も月では魔力を汲み上げて月面都市の倉庫や［工房］の［無限倉庫］に資源と同じように保管され続けている。

保有する魔力が今一番に割り振られているのは特殊な儀式で精製することができる霊薬に使われている。昔は俺の血液を媒介にして魔力を昇華して霊薬を作成していたのだけど流石に効率が悪いし大した量も作れない。

それにさ…オリジナルの霊薬は長年服用することで陽月姉妹や精霊・悪魔三人娘のようなバグ娘が量産可能とか他から見たら悪夢じゃね？周りが強いと俺の存在が霞んじゃうし。

俺は弱いからね。惑星（ホシ）の二～三個を砕くことくらいしかできないし。ハハハ…俺ザコですよ？もう死ぬしかなくね？…身体鍛えようかな。格闘戦とかジャッククラスまでしか勝てないし。あのバグに勝てても大した自慢にもならないし…。

……おっと…話しを戻そう。今のはマジでどうでもいいことだった。

霊薬や魔法関連の特殊な儀式場ができてからは多少効果が劣化しようとも生産効率を上げることにした。そうじゃないと家族の皆に行き渡らないしね。

霊薬の味付けもいつの間にか増えていた。スタンダードのイチゴ、メロン、リンゴ、ヨーグルトなどの味付けがある。変り種は“俺とお前のダイゴロウ”とか“黄ばんだ青春”とか“白と赤の交じり合い”などがある。

これらを他の人が飲んだら拒絶反応くらいは出るんじゃね？元々これは悪魔や精霊、精魔奇兵を強化するものだから他がどうなるか知らんのよ。それに新しい家族が増えたから今ある霊薬の在庫がなくなりそうだしね。

とまぁ、難しいことを考えるのはここまでにしよう。折角アイリが（無理矢理）くれた休暇だしね。そうなると有意義に過ごさないと休ませてくれた彼女に申し訳ない。

「…それでユエ、目的地はこのまま道なりに行けばいいの？結構歩いているけど」

「ハッ。リチラとファレノの話ではこの先には小さな森と湖があるそうです。そこは花々が咲き乱れ落ち着いた雰囲気なので皆の憩いの場になっているとのことでした」

穴場的な場所か…。ハイキング（普通の）や森林浴だったら大体は大森林方面へ行くから。

「へえ、知らなかった。そんな場所があったのか。少し楽しみだ」

と言うか俺の知らないことが最近多くなっている気がする。技術的なものは脳内で自動更新されるからいいけど。こういう日常的なちょっとしたことでわからないことが出てくるし…。

「話しを聞いた二人の様子を見るに良き場所のようです。きっと我が君もお気に召すのではないかと思われます」

艦内環境は暑くもなければ寒くもないという常春になっているから過ごし易いんだけど視覚から避暑を感じるのも悪くないよな。因みに俺は春が一番大好きです！桜とか儚いけど綺麗だよね。

……今の地球は十一月下旬頃だけどね！夏どころか冬真只中だし！

「そのようなものがあったのか。その湖とはもう近いのか？」

『艦内マップで確認するに湖は…おぉあれだ。あの木々が囲っている場にあるはずだ』

「アレ、か。……ふむ？確かに水の匂いと音がしているな」

え？ここから目的地まで離れているのに水の音に匂いって…。ハオとラミエルが言うけど、よくもまぁ…。

「この距離でよくわかるね、ハオは。…少し驚いた」

「はっはっはっ！これも日頃の鍛錬の賜物ですぞ、我が君！」

「うむ、然りだ。真に姉上の言う通りでありますよ。ふふふ」

鍛錬って…。今まで疑問に思わなかったけど二人の鍛錬って何をしているのかね？集団の訓練や演習をしているところは見たことあるけどこの子達個人の鍛錬は見たことなかった。

「…因みに二人はどんなことしてきたのさ？」

「……知りたい」「ですかな？」

「……」

何も言えなくなった俺を許してほしい…。でもこればかりは聞いちゃいけないような気がしたんだ。ハオとユエの微笑みの向こう側は覗いちゃいけないんだよ。

例えて言うなら白鳥のようなものだ。水上では優雅に水面を進む白鳥も水中では必死に足かきしている。この姉妹も同じだ。日頃から鍛錬を疎かにすることなく常に上を目指すからこそ今のこの子達がある。道具に頼る俺とは大違いだ。

……ん？そうこうしている内に着いたようだ。

目の前には小さな湖があり水面が静かに揺れている。それを囲むように色とりどりの花々が咲き乱れており、植えられている木々の優しい音が鳴り響く。木漏れ日の穏やかな光が降り注ぐという光景が目の前に広がっている。

「ここが、その湖か。想像していたのと違って広いね…」

『いや、実際はそれほどでもない。総面積は琵琶湖の四分の一ほどしかないのだ。水深も一番深いところで１５０m前後…と艦内マップのワンポイントアドバイスに記されている』

これはアンの手によるものだな、と最後に説明してくれたラミエルさん。木星までの航海中にアンが何かコソコソやっていると思えばそんなことをしていたのか。

お茶目だな！本人（本艦？）が可愛い上にこんな親切設定なんだから家族の贔屓目をなくしたとしてもとてもいい子じゃないか！因みに異議は認めない！挙げても粉砕殲滅ゴートゥヘルするので悪しからず！

ラミエルさんが映し出す艦内マップを見て察するに、どうやらデフォルメされたアンがナビゲーションもしてくれる機能があるらしい。…やばいね、これは。ちっちゃなアンが愛らしいね！

小さなアンのお手伝いアンドロイド。略してプチアンドロイド！なんかそのままのような気がするけど、単純なほうがわかり易いからいいか。プチアンとか呼んでみるのもいいかも。うん、いいよ。

ともかくプチアンを作ってみるのもいいかもしれない。ただの愛玩用ではなくお手伝いロボとしても使える汎用性を高めたアンドロイドを、ね。可愛いは真理だよ！姉さん！…いつも思うけど誰だよ、

姉さんって。

「うむ、良き場所である。ここならば我が君もごゆるりとできような」

「ユエよ、向こうに手頃に拓けた場所がある。そこを拠点としよう」

「承知した。我が君もそれでよろしいですかな？」

俺もそれに了承して拠点（レジャーシート）を構築して荷物を王の宝物庫から取り出した。

今更だけど俺の宝物庫って中身は宝物じゃなくて資材とか実験機材、無人機動兵器と自動人形がいくつか、それに他雑貨（食材とか食材とか食材とか）だから宝物庫と言うよりも“俺の秘密倉庫”って感じだけどね。

拠点（笑）を建設したから靴を脱いでレジャーシートの上にゴロンっと寝転がってみた。チラッと視線を動かして横を見るとハオとユエも履物を脱いで綺麗に正座している。ラミエルさんは……フヨフヨと浮いて周囲を散策しているね。

『……（うむ、念のために周囲をサーチしてみたが不埒な反応はないようだな）』

あー、寝転がるとここまで歩いてきた疲れが癒されるねー…。それに艦内には環境調整用の空調が働いているから微風が右から左、左から右と流れて気持ちがいい。

「…うん、ここは、いいね」

「はい、真に。風が気持ちようございます」

あ…チチチと小鳥の鳴き声が聞こえる。気温も適度にポカポカと暖かいし肌を撫でる微風も気持ちいいしで言うことないね。隣に座るハオも静かに目を閉じて心穏やかにしている。ユエは少し大きめのバスケットを取り出していた。

ん?……え?ちょ　っ　と　待　て。

ユエよ、どこからそのバスケットを取り出した?今さっき黒剣を軽く振るったら空間が裂けてたよな?そこからバスケットを出したよな?あれって京都で一度だけ見たことあったけど移動用の空間移動技法というだけじゃなかったのか。

「我が君。ミリーから弁当を預かっております。もう昼餉ですがいかがですかな?」

「あ、ああ、食べる食べる。久しぶりに外を歩いたからお腹空いちゃった」

「ふふふっ。では早速準備いたしましょう」

何事もなくバスケットに入ったサンドウィッチを手に取ったよ。直接触れるものだからキチンとウェットティッシュで手洗いを済ませてからな。

空間のことは怖くて聞けなかった。そこまで興味津々というわけでもなかったし。…それに世の中には触れないほうがいいことが多くあるんだよ。特に陽月姉妹、精霊・悪魔三人娘、アンは敵に回しちゃいけない。これは絶対だ…。

そう考えると俺の癒しはラミエルさんとＣＯＳ－ＭＯＳくらいか。いや、他の家族も愛している。これだけは不変だ。他は許容するがそこだけは間違えてくれるなよ?

「ほら、二人も食べよう。ミリーの作ったサンドウィッチ美味しいよ。んむんむ…」

サンドウィッチは肉や野菜、魚のフライにフルーツと色とりどりに挟んでいてどれもとても美味しそうだ。彩りもよく、視覚から食欲を刺激してくる。ミリーらしく非常に丁寧にできている。

「うむ、然らばいただきましょう。どれ……っ」

「…ん、美味しゅうございますな。ピリッと辛いこれはチリソースでしょうか」

「歩いて火照った身体には丁度いい辛さだよ。あ、でもハオは気をつけて……」

ユエと俺が始めに手に取ったのは白身魚のフライと温野菜を挟んだものでチリソースのピリッとした辛さが効いていていい感じに食が進む。うまうま。まぁ辛いものも好きだ。…俺とユエは。でもハオが……。

「我が君ぃぃ、ユエぇぇ、舌がピリピリ致します…。うぅぅ」

遅かった…。運が悪いことにハオも俺達と同じ物を食べてしまったようだ。涙目のハオとか可愛いね！普段とのギャップが堪りませんな！　でも一度口をつけたものは捨てちゃダメだ。残すくらいなら俺がもらう（キリッ）。

それよりもこのチリソースはそんなに辛くないはずなのに、これでもまだダメなのか。彼女がお子様舌なのは割と知る人ぞ知る事実だったりするのは公然の秘密というやつだね。

「ふふふ、仕方のない姉上だ。ほら茶だ、飲まれよ」
「う、うむ、すまない。んぐっ熱いっ！？」
「何をしておるのだ、姉上……」
『ハオめ、何をしておるのか……』

まだ熱く湯気の立つ紅茶をぐいっと仰いだハオをユエは呆れと心配を半々にしたような表情で苦笑している。それでも姉の背中を優しく撫でているのは彼女の性格が出ていると思う。

「ほら、ハオ落ち着いて」
「あ、あぁ、我が君のお手を煩わせて申し訳ありませぬ」
「いいからいいから。俺とハオの仲なんだから気にしないで」

俺もただ見ていたわけじゃない。ハオが零した紅茶をタオルで拭ったり、ハンカチでハオの口元を拭ってやったりと世話していた。こういうお世話って割と得意だったりするのよ、俺は。

「わ、我が君と私の…仲…ふふふ」
「？？？どうかしたの？」
「姉上……」
『ハオめ……』

よくわからないけどハオがクネクネし始めた。それに呆れた視線を送るのはユエとラミエルさんだ。

なんでユエとラミエルさんは互いに見合ってタメ息を吐くのさ？ハオもいい加減帰ってきてくれ。はぁ、本当に何があったし…。俺にも理解できるコミュニケーションをしてほしいと思いながら人工的に投影された晴天を見上げて考える。

……木乃香ちゃんや明日菜、そして刹那ちゃんは元気にしているだろうか、と…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

――麻帆良学園中等部女子寮…。

Ｓｉｄｅ　刹那

残り一ヶ月。これは葵さんが麻帆良へ帰ってくるとこのちゃ…お嬢様と葵さんが約束した期日だ。

今は寮の自室にあるキッチンで夕飯の準備をしている。手は食材を調理するために動いている。しかし考えることは別のことだった。

「どうしよう…」

葵さんは麻帆良を旅立つ前に私に“とある事”をするように無理矢理約束させた。私を思ってのことだと理解はできても感情が納得できないでいる。それは私にとって単純なようで複雑なことだった。

約束の内容はお嬢様…“このちゃんと昔のように接すること”というものだ。お嬢様を慕う気持ちや守りたいと思う気持ちに嘘はない。

だが、私は昔…お嬢様を守れなかった。まだ小さく幼い頃の話し

だ。お嬢様と共に川の側で遊んでいた時、お嬢様が足を滑らせて川に落ちてしまった。その時の私はただただオロオロと泣き喚くだけでお嬢様を助けることもできなかった。

結果的にお嬢様は近衛家の者達に助けられたので事無きを得ることができた。でも、その時の私はそれがとても悔しかった。耐え難いほどに自分の無力さが許せなかった。お嬢様を守りたかったのにその力すらなかった自分に腸が煮え繰り返った。

それからだ。お嬢様を守る力をつけるため、ほぼ全ての時間を神鳴流の修行に費やした。そのことでお嬢様が寂しい思いをしていることは葵さんから聞いていた。それでも……やめるわけにはいかなかった。

……お嬢様のために…やめるわけにはいかなかった。

そして一定の修行を終えたことで神鳴流の技を修めることができた。流石に本家筋のみに許される“二の太刀”という奥儀は教えてもらえなかったけど…。それでも十分な実力をつけられたと思う。

ここ麻帆良でお嬢様を見た時は嬉しかった。私を見ると笑顔を見せて駆け寄って来られた時は思わず抱き締めそうになった。…でも、それはできなかった。否、できないというべきか。

私のような混ざりものが高貴なお嬢様の隣で笑うことなど許されるはずがない。穢れた忌まわしい私がお嬢様の隣になど――立っていいわけがない…。私は影からお嬢様をお守りできればいいのだ。

そう思っていたのに葵さんはお嬢様と仲直りしろ（いや決して喧嘩しているわけではないが）とそう言う。私の護衛としてのケジメ

で必要なこととは言え、お嬢様のご厚意を無碍にし続けた私に対してだ。

今頃になってどの面下げて話しかけろと言うのか。こうなると“お嬢様に話しかける”、ただ単純なそれだけでも私にとって過度な緊張から多大な労力と気力が必要だ。

だが…葵さんに言われたことを実行できなかったとしたら？このままでは座して無為に過ごせば……。

「――葵さんに何をされるか…」

それなのに私は約束の期日が迫っているのに達成できないでいる。このままでは本当に大変なことになる。あの時の葵さんの表情から読み取るに絶対に碌な事にならないのは確実だと私の勘が最大限の警鐘を以って訴えてくる。

「どうにかしなければ、マズイことに…」

「――何がマズイのかな？」

「ひゃはぁぁあっ！？！？」

お、驚いたっ…！イキナリ背後から声を掛けるとは何をするか！？今の私は調理中だ！手元が狂い包丁で手を切ってしまったらどうするんだ！

「……イキナリ叫ぶとはヒドイじゃないか」

「た、龍宮っ！？気配もなく背後に立つなっ！」

「何を言っているんだ。何度も声を掛けたのに気付かなかったのは刹那じゃないか」

「なっ、なに…？…それはすまない。少し考え事をしていて気付か

なかった…」

イキナリはお前だ！と怒鳴り返しそうになったが龍宮に何度も呼んでいたと言われた。こうなると気付かなかった私が悪いと思い踏み止まるしかない。実際に背後に立たれ声を掛けられるまで気付かなかったし…。

龍宮に謝った。悪いことをしたと思ったなら素直に謝罪する。これは私が幼い頃、葵さんに教えられたことだ。同じように嬉しいことをされたら感謝するようにとも教えられた。

「構わないよ。ところで鍋が沸騰しているようだけど……いいのかな？」

「えっ？ああっ！？って熱ッ！」

龍宮の言う通り、コンロを見ると火に掛けた汁物の鍋が沸騰していた。慌てていたのが悪かったのか鍋蓋に手を掛けた時に熱い水滴が私の手の甲に飛んできた。熱い！そう感じた時には水道で洗い流していた。

最も熱さを感じるだけで火傷にもなっていない。多少赤くなっているがこれくらいなら問題ない。気を流せば直ぐに治る。

「大丈夫か？救急キッドならあるが」

「だっ、大丈夫だっ！火傷などしていないから…あっ！炊飯器のスイッチ入れるの忘れていた…」

バッと振り返った時に気が付いた。視界に入った炊飯器に電源が入ってないことに。お米を研いで炊飯器に設置したまではよかったが肝心のスイッチを入れ忘れていた。これから炊くとしたら一時間

近く掛かる。失態だ…。

「はぁ……刹那、今日の当番は私が代わろう。だから君は休むといい」

「いやっ、私は大丈夫だ！問題ないっ…ぅわっち！？」

くぅぅ…！出汁巻き卵を作ろうとしたら指が熱したフライパンに触れてしまった。何を焦っているのか。理由は葵さんとの約束のことだとわかっているが調理している今は関係がない。私はまだまだ未熟だ…。

「そんなに注意力散漫で居られたら信じられるわけもないだろう。いいから休め」

「ぐっ…わかった。…すまない。……その…あ、ありがとう」

「なに、構わないとも」

龍宮の言葉に今は甘えよう。この借りは仕事の時にでも返そう。いや、彼女のことだから好物の餡蜜を奢るほうがいいかもしれない。

「……（お嬢様…葵さん…）私はどうしたら…」

「何か言ったかい？」

「い、いや、なんでもないっ」

「？？？」

……約束、守れそうにないかもしれないです…（ガクガクブルブル）。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　刹那

――麻帆良学園中等部女子寮…。

Ｓｉｄｅ　木乃香

少し早いけど夕食の下拵え中や。ちょい手間の掛かるものは作ってラップしてある。余ったら明日の朝ゴハンにしよ思うんや。

思えばこの十一ヶ月間は長かったわー。小さい頃から一緒に居てくれた兄さまがどこかへ出掛けてからは残された私はとにかく長く感じたわー。本当に…本当に長かったんやー。

兄さまと離れるなんて考えたこともなかったから尚更そう思うわー。昔ちょっとしたことがあってからせっちゃんは私に素っ気無くなって寂しかった。今もやしなー…。その寂しさを今度は兄さまが離れることで痛感したわー。

でもなー？それも終わりが近いんよ！約束の期限が残り一ヶ月を切ったんや！もう直ぐ兄さまが帰ってくるえ！やったわー！

「兄さまが帰ってくるまで残り一月を切った…。もう直ぐ帰ってくるな、アスナ」

「あぁ、はいはい。そうね。毎日同じようなことを言わなくてもわかってるわよ…（いつにも増してテンションが高いわね。このかったらどうしたのかしら？）」

…あ、でもあの兄さまのことやから一～二ヶ月は誤差の範囲だ！とか言って遅れて来るかもしれんわー。確かに約束する時に一年と

は言ったけど具体的に帰ってくる日にちは決めんかったからなー。

そうそう、そーなんよ！なぁなぁ信じられる！？兄さまったらヒドイんよ！兄さまが出掛けてから今日まで一度も電話どころか手紙すら連絡がないんよ！？これは怒ってもええと思うんや！

アカンわ…アカンよ。私、兄さまに嫌われてるんやろか？一度も連絡くれんのはそういうことかもしれんわー。兄さまは私のことどう思ってんやろなー？

「……そこんとこどう思う？」

「えっ！？どう思うって…イキナリ聞かれても意味わからないわよ（こ、今度はイキナリ落ち込んだわね。ホントにどうしたのかしら？）」

うぅぅ、でも兄さまは私に優しくしてくれる。兄さまが旅立つ前日にあった宴会では泣いた私を抱き締めてもくれた。寂しい時は気が付いたら側に居て頭を撫でてもくれた。嫌われてるってことはない…よね。うん、大丈夫や。

兄さまが居なくて寂しい。それでもルームメイトのアスナ、図書館探検部の夕映、ハルナ、のど…本屋ちゃんという仲間クラスの皆が居るから楽しい毎日を送れてたんや。そやから兄さまの居ない今も我慢できる。

それでも……父さまと同じ、でも少し違う暖かさを持った兄さまの腕の中は麻帆良に来てからも安心できる場所やった。今はそれが遠くに行ってもたから無い…。それが寂しい。

で・も！それも残り僅かや！あと一ヶ月もしたら愛しい兄さまが

帰ってくるんやーっ！！もう今から待ち遠しいわー。兄さま早く帰ってこんかなー？んふふふ。

「もう、アスナは嬉しくないん？兄さまが帰ってくるんよ？」
「えっ？それは、まぁ？嬉しくないわけじゃ、ないわよ？うん…（え？さっきの質問はそーゆーこと？って！なんで私は動揺してるのよ！？）」
「……なんかアスナからラブ臭がしたような？」

おかしい…。アスナの反応がオカシイ。なんで目そらすの？なんで頬が赤いの？なんで嬉しいの隠すの？――なんで仄かに想うような瞳なんよ？

……これは問い質さなアカンかもしれんわ。なぁ？そう思うやろ？アスナ…？

「き、きき気のせいよ！！私は高畑先生一筋なんだから！！ねっ！？（夕飯前にこのかのオハナシは勘弁願いたいわ！）」
「……そうやね。そういえばそうやったわ。私なに言ってるんやろ？」

うぅぅ、アカンのは私やったわー。何トチ狂っとるんや。アスナは高畑先生のことが好きやって知ってたはずやのになー。ゴメンなー、アスナ。

「（ホッ、助かった。……？何が助かったのかしら？）…それで何してるのよ？夕飯のオカズなんか詰めて」
「ん～？これ？えへへ、これはせっちゃんにお裾分けしよ思ってな」

そうなんよ。最初に言ったと思うんやけど今お夕飯の準備中やっ

たんよ。こうしてアスナと話している時も調理する手は止めとらんよー。今はお料理の殆どができたからタッパーにちょちょいっと多めに作ったオカズを詰めてるんやー。

「あー、幼馴染、なんだっけ？（ん？今までは何もしなかったのに今日に限ってお裾分けに行くの？）」

せっちゃん、どないしたんやろな？いつもなら無視されるだけ（兄さまが言うにはせっちゃんは私をすごく気にしているらしい）やったのになー。

これというのも最近のせっちゃんは挙動不審やねん。私と目が合うと逸らすのは相変わらずやねんけどそのあとは急にソワソワしだすんや。今までにない反応で私も戸惑ってるわー。

兄さまが居なくなって暫くしたら今みたいになってんよー。……んむ？兄さまが居なくなって、から…？そういえばせっちゃん、兄さまとは普通に話してた…。それもものすごく親しそうに…！

まさか…そーゆーことなんか？せっちゃんも兄さまに？困ったなー。兄さまのことは大好きやけど私はせっちゃんも大好きなんや。どっちかなんて選べんわー…。

……んー？んん…？うんー？？……っ！

あぁ！？そうや！！二人で兄さまをわけわけしたらええやん！！これなら私も幸せ！せっちゃんも幸せや！！兄さま……の気持ちは確認しとらんけど嫌われてはないはずやし…。大丈夫かなー？

……んー、せっちゃんの気持ちが気になるわー…。

作り過ぎたオカズをお裾分けするだけのつもりやったけど…これは本当に確認したほうがええかもしれん。問題はせっちゃんがちゃんと私の話しを聞いてくれるかがわからんことやなー…。

「…そうや。兄さまが出掛けてからせっちゃんが落ち着かんのよ。やからついでに偵察…やなかった様子を見に行こう思ってな」

「へ、へぇぇ……（偵察…って言ったわよね?絶対言ったわよね?）」

これは決して…断じて…絶対に偵察やないんよ?これはお裾分けのついでにせっちゃんの様子を見てくるだけや。心配してるだけなんよー。

「そやからこれからちょい行ってくるわ」

「はいはい、いってらっしゃい。…気を付けて行ってくるのよ?」

「もー、アスナは心配性やな」

「……まぁ無理しないでね（そうでも言っとかないと心配で仕方ないのよ…）」

「あははは、おかしなアスナやな。無理なんてすることあらへんよ」

これは…そう!必要な確認なんや!もしかしたらせっちゃんとラブラブできるチャンスかもしれんのや!

「がんばるえー!」

……。

……。

結果♪

うぅ、うぅぅ…！話しすら聞いてもらえんかったわー…！お裾分けのオカズもルームメイトの龍宮さんが受け取りに出てきたしなー…。

「むー！気になるやないかー！？」

「イキナリ叫ばないでよ、このか！？」

ゴ、ゴメンな、アスナ…。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　木乃香

第七十九話「休息と故郷とそれぞれの想いと」（後書き）

ほのぼの系です。決して鬱系やヤンデレ系ではありません。（キッパリ）
一度は麻帆良ではこんな感じ…？というものを書いておきたかったのですよ。
それでですね？今話は本編と別編の分岐点であるのですよ。

＜＜
　一度目は、コーヒー零してそれに足を滑らせて稼動していた次元門に落ちるとか。この時は皆に心配掛けた…。帰って来た時皆に泣かれたのが一番きつかった…。

　二度目は……これはまだいいか。
＞＞

例えばこの部分ですが一度目は今書いている”ＩＳ”の世界のことですねー。
次に「二度目は…」とありますよね？
これは今後別編が増えたら書き足していくことになりますよー。

注意：本編系統で作品が増えたら今話を加筆修正することになります。

ではでは！

第八十話「帰還と整理と黒電話と」（前書き）

これを書いていた考えたことがある。
一度改訂する必要があるのではないか、と…。
とりあえず直すだけ直してアップするかはあとで考えようと思う。
では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

第八十話「帰還と整理と黒電話と」

――ディモルフォセカ内…。

Ｓｉｄｅ　葵

地球時間で今は一月だ。突然何を言うかと思うだろ？俺でも言われたらそう思う。それじゃなんで俺がこんなことを言っているかを言うとだな？それは――…。

「？？？我が君？いかがした？」

「ちょっと、ね。木乃香ちゃんとの約束した期限をオーバーしちゃった、と……あ」

「約束？ふむ……」

……――ということを。都市部のとある日の夕方、自宅である洋館の一室で思ったことだった。ユエに聞かれて即白状しちゃった！気が抜けている証拠だな……。

いやー、宇宙（ここ）が珍しくて楽しいから俺もついつい時間を忘れてしまった。木乃香ちゃんも何だかんだと長年一緒に居た一人だから俺の性格も少しは知っている。当然こうなることは予想している……かもしれない？

「ならば木乃香との約定を果たされるが良いかと。……お気になられるのでしょう？」

「まぁ…ね」

うん、実験とかあったし当初はちょっとオーバーしちゃってもいいかなって甘えた考えをもっていた。だけどな、いざなってみると俺の中にある良心がチクチクと痛みだしてくるんだ。

流石にそろそろ帰らないとダメかな。口約束とは言え木乃香ちゃんに一年で帰ると約束しちゃったわけだしね。約束の時期を過ぎても帰らないとか木乃香ちゃんや明日菜に心配掛けちゃってるかもしれない。

それに刹那ちゃんが俺との約束を守っているとかも気になるし……。

「……というわけで月へ帰ろうと思う。アイリ……」

「はい。今からですと遅くとも二日程あれば十分かと。もしもお急ぎならば今直ぐにでも出航いたしますが……」

まぁ大体それくらいか。今は全ての採掘場が無人稼動しているから出航準備に然程時間を掛けなくともいけるだろうし。人員も全員がここディモルフォセカにてそれぞれの役割を果たしている。

まぁ今はそこまで追い詰められているわけじゃないからキチンと準備をしてから出航するけどね。

今では資源運搬用の超超長距離転移門をカリストにある第一採掘場ヴァルハラ盆地に設置してあるし。一応は適度に無人作業機をバラ撒いているから採掘関係にも問題ないわけだ。ハッキリ言うとここは無人採掘場となっている。

……ぶっちゃけて言うと形振り構わなければ今直ぐにでも出航で

きるわけだ。

「よし。二日後の午後七時に出航しよう。アイリには準備の総指揮を任せる。ファレノはアイリの補佐を。…リチラは俺の補佐を頼む。少し頼みたいことがあるからさ」

これで二日後には地球へ向けて出航だ。準備はアイリ達に任せておけば万事滞りなく進めてくれるから安心して待てばいい。その間にリチラには俺の手伝いをしてもらおうと思う。

実は［工房］からここの研究室へ持ち出した試作品が乱雑に溢れているから整理したいんだよ。こういうのって人手が欲しいものだよな。あ、リチラだけじゃなくてハオとユエにも手伝ってもらおう、っと。

「ハッ。私共に万事お任せください、閣下」

「了解したの。ここはファレノにお任せなのっ！」

「承りましたわ。……（葵様と二人きり……やりましたわー！）うふ、うふふふ」

な、なぜか一人だけ欲望が透けて見えるのは気のせいかなー…なんて。

……。

……。

そのままアイリ、ファレノと別れて研究室の整理をしに移動を開始した。ハッキリ言って航行中にやってもいいんだけど、やはり思い立てば吉日と言うし今から始めることにした。

「……どぉぉぉしてハオ様とユエ様までいらっしゃるのかしら？」
「ふん、愚問だな。貴様と我が君とを二人きりなぞにできるものか」
「姉上、口が過ぎるぞ。すまないな、リチラ。だが、吾らもお声を掛けられたのだ」
「あら？葵様から？それは――」
「……？？何か言った？」
「うふふふ。いいえ、なんでもありませんわ。ただ何をお手伝いするのかが気になっただけですわ」

なんか今のリチラは普段以上にキラキラした笑顔だな。何かいいことでもあったのか？だとしたら俺も嬉しくなるね。

「……（ヒソヒソ）相も変わらず変わり身の早いヤツだ。ある意味敬意に値するな」
「……（ヒソヒソ）そう言ってやるな、姉上。これでなかなかに可愛らしいではないか」
「……（ヒソヒソ）そこの方々っ！うるさいですわ……！！」

あははは。良く聞こえないけど仲がいいね。仲良く内緒話か。こういう時って女の子の話しに加わるのはマナー違反だよね。あと聞いたりするのも。

だからここは聞かなかったことにするのが紳士（笑）の努めです。
（キリッ）

「うん？ああ、ゴメンね？少し研究室を整理するのに人手が欲しくてさ」
「あらあら。うふふふ。そうなのですか」

俺の宝物庫にまとめて放り込んでおけばいいんだけどそれだと研究開発する度に一々取り出すのが面倒だった。しかも取り出す時に分類検索はできるけどまとめて取り出すと分類別で山になるという理不尽……。

これだから某慢心王は大雑把で困る。なにが「慢心せずして何が王か！」だ。不器用なだけだろ。いくらクラスが弓兵だからって何でもかんでも投げればいいというものではないだろうに。まったくあのキンピカは…。

八つ当たりだけどね。うん。

そしてやってきました。ここは俺が個人的に使っている研究室だ。中は大広間のようになっていて図書館のように棚が立ち並んでいる。その中に機械や資材、作り終わった作品にまだ作りかけの物が収められている。乱雑に……。

「それじゃ大まかな指示は出すから手分けして……どうかした？」
「我が君。確かここは研究室…でしたな？」
「え？うん、そうだけど……それが？」
「では、なぜ武器庫のように銃器、刀剣、その他火器で埋め尽くされているのですかな？」
「あー…これか。ここにあるのは全部今まで作られてきた武器の試作品だよ」

総合スペックデータ上は一人ひとりが［紅き翼］並に強化されている皆から目を逸らすために強力な火器類を開発していたらいつの間にか目の前の惨状に…うん、武器が山のように積み重なっていた。

「……試作品関係が武器保管庫に無いと聞いていましたが原因は葵様でしたのね」
「えっ！？それは誤解だ！キチンと書類に…書類、に？……っ！忘れてたー……」
「「我が君……」」
「葵様…」

うぅぅ…そんな目で見るなよぉ。しょーがないじゃないか！皆をいかに世間の目（主に魔法使い）から守るかしか頭になかったんだからさぁー…。

「ふぅ…関係書類の届出はわたくしが手配いたしますわ。今はここにあるものの目録をお作り致しましょう」
「ありがとぉぉ！リチラは優しいなぁ…！」
「きゃっ！あ、ああ葵様っ！？イキナリ抱きつかれるなんて！ぁんっ、そ、そこはっ！（こ、これはまさかの役得ですわ！）」

もう！リチラはほんっとに優しいなぁー！嬉しさを伝えるために正面からハグした。それはもうぎゅっとね。ついでに頭を撫でるのも忘れない。いやー、フォローしてくれてありがとね！感謝感謝！

「うぬぅ、リチラめ……羨ましいな。ここは対抗して私も行くべきであろうか……？」
「ふふふ。そうであるな。だが今は我が君から任された役目を全うするのが先であるよ」
「う、うむ。そうであったな……（我慢…我慢…我慢…）」

ああ、いけないいけない。つい書類仕事を代わってもらえた喜びから周りが見えてなかった。

「あ、ゴメンね。今俺もやるから」
「なに、構いませぬよ。……ああ、刀剣類は吾らがまとめますので我が君は銃器や他をお願いしてもよろしいか？」
「うん、わかった」

銃器に他の特殊、と言うか変り種を分類整理しないと。そのまま銃器関係が密集している棚の前へ移動した。さて、まずは比較的簡単なところから手をつけるか……。

「はぁはぁ……ふぅ。出遅れてしまい申し訳もありませんわ。お許しくださいい」
「ふふふ。なに気にせぬとも構わぬよ。リチラは我が君を手伝うと良い」
「ええ。ではそうさせていただきますわ」

直ぐ側で手伝ってくれるリチラにありがとね、と伝えてから作業を再開した。拳銃はこっち…小銃はこっち…携行型ロケットはこっち…機関銃はこっち…銃弾関係はあとで…と分類していく。

ここにある銃器の殆どは現在使用されている銃器を改造したものだ。S&W系統やベレッタM93Rを始めとした拳銃。ロシアの傑作銃であるAK－47（カラシニコフ）を始めとしたライフル銃など。少し変わった銃だとキャリコM100などの機関銃もある。

様々な銃がごっちゃで棚に収納されている。いや、収納と言うか押し込められているのか。作ったら作ったで手近なところに置いていったからこんなになってたんだよな…。

で、だ。中には他作品を題材にしたネタ銃だってある。某巨大十字架型とか、某吸血鬼達の使った某大型二丁拳銃や某大型支援重火

器とか、赤いコートを着た某お尋ね者の回転拳銃とか、他にも色々……。

原作が始まったらいくつかは実際に使ってみたいものだな。うん。

「あ、刀剣を扱う時は間違っても自分を斬るようなことがないようにね」

「はっはっはっ。二刀小太刀の九十九神、それも我が君らの手による最上級の個体である吾らがそこらの刀剣に斬られることなどありえませぬ」

「いや、まぁ…ね？ここの試作品は自重を半ばかなぐり捨てたような代物が多いからなぁ…」

こちらは他作品を参考にしたものが殆どだから物騒なのが多いんだよ。

刀剣だけでも切断力強化とか。折れない、曲がらないとか。傷つけた相手に何某かの呪詛を傷口から流し込むとか。身動きを拘束する影縫いの効果とか。変幻自在に姿を変えるとか。……と、まぁ様々ある。

そんな“概念”を定義し構築し蒐集し抽出し濃縮し結晶化し加工し作り出したのが“概念武装”、または“概念兵器”と言うものだ。これは例えるならば某運命のゲームに登場した宝具とかがそれに当たる。

「我が君。この真紅の槍はどこへ？」

「あー、それは奥の棚へ立て掛けておいて。槍用のラックがあるから」

「承知。他の槍もそこへ持って行きますぞ」

「お願いねー」

はいっ！今ユエが持っていた真紅の槍は試しに作ってみたゲイボルグ・偽（レプリカ）だ。一応は槍に込められたという“呪い”はできる限り再現した。尤も呪いとか物騒だから中身は根気よく抽出した概念結晶だけど。

俺がこれに込めた概念の内容は“当たるまでの過程をスッ飛ばして結果として当たっている”という必的必中だ。これは“心臓に命中する一撃必殺”ではなく“相手の身体に命中する一撃必中”というある種、宝具の劣化版になったと言える。

まぁ所詮は再現品（レプリカ）だと言うことだ。頑丈さ以外はオリジナルには遠く及ばないさ。概念はあっても神秘性が皆無だし。

「あら？葵様。これは何なのかしら？」

「んー？どれどれ？……ああ、また懐かしいものが出てきたなぁ…」

リチラが棚から取り出したものは革袋だった。中にはビー玉くらいの大きさをした水晶球が十数個入っている。色は無色透明、とても透明度の高いものだ。

「これはゴーレムの核（コア）だ」

「ゴーレムの、核？」

うん、そう、とリチラに答えてから俺は革袋から一つ取り出してそれを眺めた。

「これはリチラ達と出会う前に作ったものだ。ほんと懐かしい……」

「出会う前……。そうなりますと葵様の初期の発明品なのですね。

ゴーレムの核とのことですが使い方は通常のように土人形に埋め込むのかしら？」

「いや、これは種蒔きするようにすればいい。身体の構成は接触したもので構成される。例えば土、泥、鉄、岩など個体、液体…気体は無理だけど何でもいいからさ」

この世界に落ちてきて割と直ぐ作った気がする。落ちた先にドラゴンが目の前に居た。あの時は怖かったから…身を守る手段として護衛を作ろうと思ったんだよ。

水晶球のアイテム名は万能の守護者（オールマイティ・ガードナー）と言う。名前負けしてるけどね！？因みにこれが俺の“身を守るシリーズ”の第一弾だった。うっわ、今思い出すとトコトン人任せだ……。

使用する前に魔力と作り出すイメージを水晶球に込めて蒔くだけで一定質量を持ったゴーレムを作ることができる。一つの水晶球で最大５００ｋｇまでのゴーレムが作成可能であり質量は取り込んだ水晶球の数に比例し依存する。

まぁこの世界では自分の身を守るなら根本的に自分の身体を鍛えるほうが確実だったんだよな……。お陰で合気道、柔術、刀剣術など、特殊なものは鋼糸術なんかも修めたものだ。時間に余裕があるってイイヨネ。はっはっはっはっ……はぁ。

「こちらはもうお使いになられないのですか？」

「……そうじゃないけど一つだけ欠点があるんだ」

「あら？お聞きした限りではそのような印象はなかったのですが……。それは何なのかしら？」

「姿形、質量は変えられるのに全体的な印象が女性型にしかならないんだ」

「……はい？え、ええと……え？」
「勿論性能に問題はない。誰が使っても一定の性能が得られる。……だけど俺が使うと、なぜか女性のような印象を持つゴーレムになるんだ」

本当に不思議だよねー…。人型を作れば戦乙女（ヴァルキリア）のようになるし…人馬（ケンタウロス）を作ろうとすると女性の上半身になるし…鳥人は人鳥（ハーピィー）になるし…魚人は人魚（マーメイド）になる…。

もうこれは呪いのレベルではなかろうか、と悩んだものだ。当初はあの女神（幼女）は俺に何をした、と小一時間ほど問い詰めたくなったな。精魔奇兵の再誕時でも呪（それ）いは健在だったし…。

「そ、それはなんと言いますか。その…えぇー？（あれかしら？感情の存在しないゴーレムすら葵様の魅力にやられたとでも言うの？な、謎ですわ……）」
「フフ、フフフ…でも力をつける前の当時は重宝したものだよ。姿に目を瞑れば性能は優秀だったし」

ただしどんなに数を揃えても［紅き翼］クラスやアーウェルンクスシリーズには到底敵わない。誰でも使える汎用性を追及した魔法具だから正面切って戦うとしても精々が物量で押して足止めできれば御の字だ。

「わたくし達の前はこの子達が葵様をお守りしていたのですね……。もうご使用になられないのかしら？」
「使わないってことはないと思う。でも、細かな命令がこなせないから難しいかな」

昔ならともかく今では役目に特化した自動人形（オートマータ）やリチラ達がいる。

それに新しくはＣＯＳ－ＭＯＳを筆頭にしたシュワさん達が居る。緊急用にはラミエルさんも居るし、彼女の中には自動人形や無人機動兵器も格納されている。

　このほぼ万全の体制化の中で使うとしたら……新人の修行相手？因みにウチの子達じゃない。魔法使い達のことだ。刹那ちゃんに茶々丸ちゃん、それに愛衣ちゃんや高音君とかの相手にはもってこいかもしれないね。

「でしたらこれは保管庫へ――」

「いや、麻帆良に帰還したら使う機会もあるだろうから俺が持ってるよ」

「そうなのですか？葵様がそうおっしゃるならわたくしは構いませんわ」

　俺はそのまま水晶球の入った革袋を宝物庫にしまい、リチラと一緒に整理作業を再開した。はぁ、まだ先は長いよぉぉ……。

　終わったらこの子達とお茶でも飲むとしよう。そうしよう。お茶菓子には桃のタルトを作ってあるからそれにしよう。

……。

……。

　時は経って二日後。ついに地球圏へ帰還することになった。

　俺は自分の洋館で出発を今か今かと待っている。空間モニターにはアイリが映し出されていて、画面の端に見える艦橋は出航作業の報告が飛び交っていた。特にファレノの指示を飛ばす声がよく聞こ

えたな。

「今から帰ると二月頃かな……」

『閣下。それには及びません。超超長距離転移門も完成し正常に稼動しております。目標座標も判明しておりますので拠点である月へはワープなどと違い一瞬で到着致します』

ポソッと口から出たと思えばこの答えだ。もうこれには「そうか……」としか答えようがないだろ。なんでそういう重要そうなことを俺が知らないのかな？かな？

いや、一応は採掘資源を月へ輸送するために超超長距離転移門が稼動していることは知っていたけどさ。だがしかし、全長５０ｋｍのディモルフォセカ級を飛ばせるなんて知らなかったし……。

「……それじゃアイリ到着したら知らせてくれる？」

『かしこまりました、閣下。それでは失礼致します』

アイリとの通信が切れて思う。知らされないってことは何？俺ってここではいらない子なの？知らせる価値も無いと？……ん？ああ、これは楽と言えば楽だからいいのか。これはこれでいいのか。うん。

考えてみればこれは研究開発を邪魔されない理想の環境じゃないか！そもそもの話しだがそうなるのを期待してアイリ達に全権を与えたのだった……。

「リチラ。下船準備はできてる？」

「既にできていますわ、葵様。いつでも下船可能でしてよ」

よしよし。持って行く荷物は収納魔法具の中へ既にまとめてある

のでオーケー。研究室を整理していたら出てきた魔法具だ。これはサイコロ状の黒い六面体で収納する対象を魔法具内部に格納することでコンパクトに持ち運びするためのものだ。

アイテム名は収納空間（ザ・ルーム）と言う。これは試作品だけど今でも問題なく使える。ただし、サイコロくらいの大きさだから紛失し易いのがネックだ。壁と家具の間に落としたとか……。

今では使い易いように家族の一人ひとりに腕輪型の魔法具として配布している。収納できる質量限界は２ｔ強だったか。元の種族的に影魔法が使えない子も居たからこの収納魔法具を作ったんだよ。割と最近に。

俺は個人的な荷物は宝物庫に放り込んであるから問題ないしねー。あははは。

『――閣下。お寛ぎの最中に申し訳ございません。地球宙域に転移致しました。現在はステルス航行にて月面都市へ移動中。到着は一時間後の予定です』

「それじゃ第二宇宙港から――」

『申し訳ございません、閣下。第二宇宙港は現在総点検中で入港規制下にあります。よって下船には第三宇宙港をご利用下さいますようお願いしたいのですが』

第二宇宙港が総点検？……まぁ就航一年の新造艦だからそういうことは小マメにやることは間違いじゃないか。点検自体は区分けして少しずつやっているし。

「……ふむ？それなら仕方ないか。あいあい、了解。第三から降りるとしよう」

『ありがとうございます、閣下。それでは後程』

さて、この洋館から第三宇宙港まえゆっくり移動して一時間弱くらい掛かる。のんびり行くか。

……。

……。

はい。ディモルフォセカが誘導に従って月面都市の第一宇宙港へ入港して無事に到着した。なにやらお隣の第二宇宙港からガンガン、ドンドン、ジジジジと大きな音が聞こえるから大規模な作業をしているらしい。

そして今、宇宙港から月面都市を目指して電気自動車（エレカー）に乗って移動中だ。因みに外観はリムジンだが中身は装甲車並だ。実はこの車、ディモルフォセカ艦内でも乗っていた。

運転席にＣＯＳ－ＭＯＳ。車内には俺（最早ラミエルはセットだ）、陽月姉妹、精霊三人娘、悪魔三人娘、精魔奇兵三人娘が乗っている。このリムジン、外観は普通だが内部にはまだ余裕がある。亜空間拡張技術万歳だ。

皆、思い思いにお喋りしたり、車内に備え付けられていた飲み物やお菓子をパクついたりしている。

「ここに来るのも一年ぶりか……」

それでまぁ無駄に高度な技術をつぎ込んだ車内で俺が考えたのはそんなことだった。よくよく考えたら月面都市に直接来たのって数

えるくらいしかなかった。ここまで造っておいてなんだかなー…。

あっ！都市に名前すらないし！？あー…ディモルフォセカにある都市部も名前ないや。なんか考えておかないといけないかなぁ。何か神話関係からヒントを貰って、もじってつけてみるか。

でもなぁ、家族と世界間移動する時に月面都市は放棄するかもしれないし、無駄かな。……いや、ここを離れる時は一時的にでも魔法球に封じればいいのか。そうすれば［工房］のように顕現させることも可能になる。

よし！今は資源を集積するから封じられないけど世界を旅立つ時はそうしよう！うんっ！

「閣下。麻帆良へはいつ赴かれますか？」

「ん？んー…明日か明後日、かな。今日はここに泊まるよ。木乃香ちゃん達へのお土産は用意してあるけど行く前に連絡しておかないとだし」

ふふんっ！木乃香ちゃん達の対策は万全よ！アクセサリー関係や手作りお菓子をお土産に彼女達のご機嫌を取るのさ！……何て言ったって一年間も連絡もしないで放置しちゃっていたからね。これくらいしないと何を言われるか……。

「かしこまりました。同行される人数はいかが致しましょう？ご要望がないのでしたら私のほうで見繕っておきますが」

「同行者は側近連中全員…あっ、アンだけは月に待機で。それと親衛隊から数人、店の手伝いに出してくれると助かる。こっちの人数はアイリに任せるから」

アンを月に残す理由としてはでアイリ達をバックアップしてもらいたいからだ。今の彼女の本体はディモルフォセカだから地球圏で行動するには目立ち過ぎる。前の５００m級戦艦とは訳が違うのよ。

もう一つの理由としては［工房］にあった三部の本部がディモルフォセカに移転済みというのもある。つまり、作戦部の総合戦力、情報部の情報統括、司令部の生産管理の中枢機能を丸々移したということだ。

あとで気が付いたけど、いつまでも魔法球を本部とするには流石に無理があったからな。超弩級艦船だとしてもキチンとした拠点が欲しかったんだ。だから、ディモルフォセカの完成は喜ばしかったのが正直なところだ。

「承りました。最善のメンバーを選出いたしましょう」
「ありがとう。アイリ達は――」
「承知しております。……私共は月で待機しております。閣下のご用命がありましたら間髪なく出撃できるように準備は整えておきますのでご安心下さい」
「……うん。アイリ達が居てくれると心強いよ。背後は任せた」
「ハッ。勿体無きお言葉にございます、閣下」

もうツッコまない。俺の考えの常に先を行くのが今のアイリ（メイドさん）だ。
もう驚かないよ……。

こんなことは言いたくないけどメイド職は素でチート職なのではなかろうか？いや、精魔奇兵であるアイリの基本スペックが高いのは自信を持って言える。だけどメイド服を着るようになってからはますますチート臭くなった気がしてならない。

そこんとこ他の転生者&トリッパーな人達はどう思います？俺は今言ったようにメイドさんはチート職だと思います。ハハハ……。

「くくくっ。アイリは堅いなぁ、もう…。あっ、今日は地球の日本時間でいつ頃かね？」

「性分ですし今は仕事中ですので。こほん…現地時間で日付と時刻は一月六日、午後八時三十分前にございます」

「ふむ……（部屋に着いたら一度木乃香ちゃんに電話しよう。うん……）」

ふふふのふ。十年以上前から地球上に存在する通信ネットワークは密かに制圧済みよ。……アンがな！これによって常時接続状態になっているから一般の電話回線から軍用の特殊回線まであらゆる回線を使用可能だ。

「よし。とりあえず宿泊先へ案内してくれる？」

「かしこまりました。……ＣＯＳ－ＭＯＳ」

「…了解。到着まで２０分を予定」

何気にこの月面都市は広いようだ。都市内には通行人やお店の店員が……って、は？おかしくない？二万未満の家族達は皆ディモルフォセカ内の都市部に住居がある。それなのになぜにこの月面都市に自動人形以外の住人が居るのか？

いや待って。わかっている。わかっているんだ。ふふふ……どうせアレだろ？俺の知らない間に月で勧誘を続けていたら増えた、ってところだろ？わかっているんだよ。前に募集した時も似たようなことがあったしさ。

後日。アイリと月面都市の維持管理をしていた自動人形に聞いたところ大よそ予想通りの答えだった。笑えたね。現在の総家族数が十万未満だって。より具体的には九万八千飛んで二十八人だ。しかもまだ増加中らしい。

ハハハ。もう俺、月人って名乗ろうかな？フフフ……。

……。

……。

時刻は午後九時五分前。新聞配達のアルバイトをしている明日菜は早ければもう寝る準備をしている頃だ。木乃香ちゃんも不都合がなければこの時間に寝ている。彼女は朝ご飯も作っているから早起きしないとならんのよ。

どっちも今時の女子中学生とは思えないくらい健康的な生活をしていると思う。まぁお祭り騒ぎがあれば遊ぶ意思もあるらしいから一概にそうとも言えないが……。

そして俺は今、ダイヤル式の黒電話を前に頭を悩ませている。こんな時間にイキナリ電話していいものだろうか、と。仮にも思春期真っ盛りの女子中学生に電話するのだ。歳を経た俺でも少しは躊躇する。

だって考えてもみろよ。ＩＦの話しだが木乃香ちゃんか明日菜が男の子とデートしている時に他の野郎から電話があったとしたら両者が気マズイだろ。苦い思いをさせてしまうだろ。

でもなぁ…。黙って帰ったらどんな文句を言われるかわかったものじゃない。この一年近く一度も連絡してないから呆れられているかもしれない。怒っているかもしれない。……忘れられている、とは思いたくないなぁー…。

よし！やらずに後悔するよりはやって後悔しよう！と言うことで木乃香ちゃんのケータイ番号をジーコ、ジーコとダイヤルを回して、っと。

トゥルルル。呼び出し音が聞こえた。待っている間、一度も連絡しなかった後ろめたさからゴクッと喉を鳴らしていた。トゥルル、チ…。呼び出し音が止まった――。

『はい。もしもし？どちら様で――』

「――あ、木乃香ちゃん？俺だよ、俺。葵だ。今、電話して大丈……」

『はぅ！葵兄さまっ！？一体今まで連絡も寄越さずにどこほっつき歩いてたんや！！』

「――っっっ！？！？！？」

み、耳がキィィンってするぅぅ…！イキナリの不意打ちで聴覚防御が間に合わなかったぜぃ…。

「…お、おぉぉ…つぅ～…木乃香ちゃん少し落ち着いて。連絡しなかったのは俺も悪いと思うけど」

『けど！？けど、なんなん！？私がどれだけ寂しかったと…心配した思うんや！？うぅ、ううぅぅ…！』

えっ！？泣いたっ！？そんなイキナリ…えぇぇー…？これ俺が悪い、のか……？

「おうふ…!?ち、ちょっと待って。いや、待ってください。な、泣かないで?ね?」
『ううぅぅ…ぐすっ…にぃ…さま…うぐっ…』
「あーうー…。ええと、そうだ、明日!明日、麻帆良に帰る!だから泣きやも?なっ?」
『…うぐっ…ほんとう、に…?ウソや、ない…?』
「あ、ああ。本当だ。だから、泣くのだけは勘弁してくれ…」

受話器越しにえぐえぐ、と泣き喘ぐ木乃香ちゃんの声を聞いて思う。これくらいで泣き止んでくれれば御の字だ、と。ただでさえ置いて行ったことでこの一年間寂しい思いをさせてしまったのだから。

『えへ、えへへ。明日待ってるえ。あっ、いつ頃帰ってくるん?』
「立ち直り早いな!おいっ!」

今までのやり取りはなんだったのさ!?――はっ!!もしかして……ウソ泣きっ!?……いつの間にそんな高度な技を身に付けたのやら。驚いたね!!

『……一年間も私をほったらかして寂しい思いさせた罰や。えへへっ』
「そうか。それはすまなかったな……」
『もうええよ。……それで何時くらいなん?』
「大体お昼前だな。学校が終わったら来るといい。久しぶりに俺の手料理を振舞おう」
『……うん…うんっ!私楽しみに、してるわ!でもまだ冬休みやから直ぐに行くえ!』
「そうか……」

言葉の空白部分で微かにだが鼻声になっているのがわかる。泣きマネじゃなかった。本当に泣いていたらしい。その証拠に……。

『――ちょっと貸して！葵さん！何このか泣かしてんのよ！？』

『きゃーっ！きゃーっ！アスナ何するん！？返してぇな！葵兄さまにバレるやないか！』

「……」

ゴメン、木乃香ちゃん。バレるも何も丸聞こえだったりするんだな、これが。最近のケータイの集音性能はバカにならないものがあるね。

何？黒電話？俺謹製の黒電話ですが。……これ以上言う必要があるかね？ふふん。

『あっ！このか待ってよ！ちょっと！葵さん！聞いてるの！？ねぇ！』

「……くくくっ。ああ、聞こえているよ、アスナ。電話越しだが久しぶりだな。元気にしていたか？」

『も、勿論よっ！元気に決まってるじゃないっ！葵さんこそ…その…どうだったのよ？』

「俺か？ああ、俺も変わりないよ。家族も皆元気だ。明日菜が元気で俺も嬉しいよ」

『あ、う、うん…ぅぅ…』

受話器越しだが木乃香ちゃん、それに明日菜も元気であることが確認できた。あとは刹那ちゃんを確認できればいいのだが……ふむ。残念ながら今近くには居ないようだ。いや、この時間だから仕方ないと言えば仕方ないか。

下手すると学園防衛と言う仕事中に電話してしまうことになりかねないから明日の日中に改めて話しをしようと思う。キチンと俺との約束を守ったのかも直接本人に確認したいしな。場合によっては……くくくっ！

『ちょぉ！？アスナ電話代わってぇな！って、ん？これは……なぁ？なんでアスナはラブ臭させてるん？なぁ？なんで？』

『なっ！？ラ、ラララブ、ラブ臭なんてさせてないわよ！何言ってんの！？このか！！』

『だって……顔赤いやんか。急に髪の毛先を弄りだしてなんやソワソワしとるよ？』

『そ、それは！…その…葵さんがイキナリ電話してきたからなに話したらいいかわかんなかっただけで……なんでもないわよ！』

『本当？本当にそれだけ？』

『そ、それだけよ！』

『（ジィィィィ）……本当に？』

『本当よ！ほ、本当に……それだけなんだからね！？』

まぁ…なんだ？話している内容の意図が掴めないが二人とも仲良くしていることだけはわかった。所々が聞こえなかったけど賑やかなのはこっちにも伝わってきたし。

だが……。

「なぁ？おい。何を言い争っているか知らないが受話器奪い合うくらいならスピーカーフォンにすればいいんじゃないか？」

『『あ……』』

「気付けよ。現代っ子どもが……」

『『アハ、アハハハ……』』

俺も居ることを忘れないでくれると嬉しいんだけどね？くくくっ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第八十話「帰還と整理と黒電話と」（後書き）

はぁ……。

できるなら二、三話後には原作に突入したいなぁー…。

ではでは！

第八十一話「再会とお茶会と飛び蹴りと」（前書き）

甘いのか？病んでいるのか？ハニカミなのか？
それが問題だ……。
作者が書くとなぜか重度のヤンデレ系になるので修正が大変なのです。
では続き！

皆の感想＆評価＆ネタ提供が作者の力になっております。
誤字報告も歓迎。

１１／１３修正。

第八十一話「再会とお茶会と飛び蹴りと」

――喫茶店クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

明けて翌日。朝から喫茶店の地下にある転移門（ゲート）を通って麻帆良に来ていた。電気や水道、ガスは変わらず維持させていたから問題なく使えるということなので早速店内の清掃や食材などの仕入れの連絡を行っている。

あ？学園長達への挨拶？そんなのはあとだ、あと。最悪、電話で終わらせる。

結局あのあとは木乃香ちゃんのケータイが電池切れを起こすまで話し通しだった。深夜に近付いていたから新聞配達のアルバイトをしている明日菜のことが心配だった。……起きれるか的な意味で。

ある程度ひと段落した頃、今朝方に暇ができたらここへ来るように連絡した子が喫茶店を訪れた。適当な席に案内して隣り合うように座る。

ウチのメイドさんと書いて現喫茶店の店員さん達は三人を残してお店の清掃や開店準備の作業を続けている。

「――で？呼んだ理由はわかっているよな？刹那ちゃん」

「はい……」

「そうか。それで結果は？」

「……っ」

葛藤している表情だった。うん、本当にわかり易い子だな。内心で思わず苦笑してしまった。こんなことで木乃香ちゃんを守れるのかとかは別としても刹那ちゃんはもう少しポーカーフェイスを覚えたほうがいい。

このままだと刹那ちゃんの顔色一つで木乃香ちゃんの今現在の状況が読まれてしまいかねない。ただまぁ刹那ちゃんは良くも悪くもまだ若い。そういう技術は今後身に付ければいいさ。

「――はぁぁぁ…ダメだったならダメでいいからキチンと答えろ。別に怒っているわけじゃないからさ」

「あぅ、あぅ…も、申し訳ありません……あうっ」

余りにも落ち込むものだからガシガシと少し乱暴に頭を撫でてやった。そんなに落ち込むくらいならやって後悔すればいいのに。

知っているか？人間ってのは、やって後悔するよりもやらずに後悔するほうが後悔する度合いが深いんだよ。丁度今の刹那ちゃんのように、な。

「なぜ木乃香ちゃんの隣に立とうとしないのか。刹那ちゃんが気にしていることはまぁ、俺も知っている」

「なうっ！？それは……！」

ぐりぐり撫でていたから変な声が出てしまったな、刹那ちゃん。くくくっ、「なうっ！」って……。

「バカ。刹那ちゃん達が小さい時に誰がお風呂に入れてやっていたと思っているんだ。それに詠春からも聞いている」

初めて刹那ちゃんが青山の人に連れられて来た時に俺は詠春から聞いた。刹那ちゃんが烏族と人間の混血児（ハーフ）であり、しかも烏族では禁忌の白い翼を持っていることを。

まぁ元から知っていたわけだが。こういうのは形式美だと思うわけよ。知らないはずのことを知っていたら気持ち悪いだろ？そういうことだ。

「あう！？あ、ああ葵さん！お風呂とかそういうことは忘れてください！！」

「くくくっ。気にするな。俺は気にしない」

と言うかそっち！？烏族の秘密云々よりもそっちに食い付くの！？いいじゃん！まだ子供の時のことだって！気にするような歳でもないだろ！……いやいや、そうじゃなくて烏族とか白い翼とかはいいのか！？

「ウチが気にする言うてるんや！！――――はっ！？……と、ともかくです！そんな昔のこと忘れてください！いいですね！？」

思考が混乱する余り思わず地の言葉遣いが出てしまったようだ。そこまでイヤだったのか？いや、でもなぁ…当時は大喜びで一緒に入っていたじゃないか。それを忘れろと言われてもなぁ、うん。やっぱり――。

「イ・ヤ。大切な刹那ちゃんとの思い出だ。簡単に忘れてなんかやらないよ」

「えっ！？あー…うー…その…ええ？（大切ぅ！？大切って！？つまり……つまりそういうことなん！？このちゃん！ウチどないしよ

！？）は、はぅぅ！！」
「なんだ？一丁前にテレてるのか？可愛いやつだな。くくくっ」
「ぅぅ…！ぅぅ…！ぅぅ…！」

お？おぉ？なんかあり得ないくらい刹那ちゃんが赤面している。
トマトやリンゴのようだ。沸騰しているように湯気が……。

何？そんなに恥ずかしいことだったということ？言葉にならないほどイヤだと？え？俺ってウザがられているってこと？マジで？……ええぇー？

う、鬱だ…。こうやって世のお父さん達は大きく育っていく娘に嫌われていくんだねー…。今その気持ちの片鱗を味あわされた気がするよ。フフフ……。

「……さて！刹那ちゃんが正真正銘チキンであることがここに証明されたわけだが」
「チキンっ！？ヒドイ！葵さんヒドイ！？」
「黙れ。幼馴染と気軽にお喋りもできないヘタレが何を言うか」
「はぅぅ！？（イタイ！葵さんの言葉が事実だけにイタイ！？）」

何を悶えているか知らないが俺の話しはこれからだぞ？

「俺は言ったな？約束が果たされなかった時は――って、なぁ？刹那……」
「そんな！？さっきは怒ってないって……！！」

それはキチンと答えなかったことに対してであって約束云々のことはまた別だよ。それに世の中にはとても便利な格言があるのだ。

「くくくっ！なぁ、知っているか？昔から伝わるイイ言葉がある」
「な、なんですか？それは……」
「それはな？“それはそれ、これはこれ”だ！」
「それは何か違いますよっ！！」

喧　し　い！そんなことは俺もわかっているんだよ！言ってから気付いたよ！大体今のはその場の勢いなんだから気にするなって！？

「よって約束を反故にした刹那には罰を与えないと、なぁぁ？くくくっ！」
「ひぅ……！？（あ、ああ、あ葵さんが黒い！？楽しそうなのに黒い！？）」

刹那ぁ…何をそんなに震えているのかな？ちょっとハオかユエ、または二人の鍛錬に放り込もうと考えていただけなのに……ね？くくくっ！

お仕置きもできて刹那ちゃんの技量向上にもなる。まさにこれこそ一石二鳥じゃないか。……（ボソッ）無事に生き残ればの話しだけど。

「くくくっ！――むっ？来たか……」

現時刻は午前十時過ぎだ。この喫茶店を目指して真っ直ぐに近付いてくる二つの気配があった。その二つの気配はもう直ぐそこまで来ている。

「は？来た？一体誰が……？」

刹那ちゃんが聞いてくるのと同時に扉が開いた。備え付けられて

いるカウベルがカランコロンと音を鳴らして来客を知らせた。その客は喫茶店の前にはＣｌｏｓｅｄの札を掛けてあるのにも関わらず迷うことなく来店してきた。

「あれ？……桜咲、さん？」

「えっ？――せっちゃん？」

まぁその来客というのが昨夜、電話していた子達…明日菜と木乃香ちゃんだ。

「……っ！？あ、ああ……お嬢、さま……！？――っ！！」

「逃がすか！逃がさない！逃がすものか！くくくっ！」

二人を、と言うか木乃香ちゃんを見た途端に刹那ちゃんは椅子を蹴飛ばして立ち上がり脱出を図るために走り出そうとした。

扉の前は木乃香ちゃんと明日菜が陣取っているから他の出口を探したかったようだ。

だがしかし……逃がさないよ？くくくっ！俺は即座に刹那ちゃんの背後に回り込み彼女の腕と片足を掴み羽交い絞めにした。後ろから抱きつくようなこの姿勢だが、これで確実に刹那ちゃんの動きは封じた。これでもう動けない。逃げられない。

この際だから多少、身体が密着するのは勘弁してもらうとしよう。暖かいし柔らかいしいい匂いがするけどそこは鉄の精神（笑）で堪えた。

「はなっ、放してください！葵さん！くっ！？」

「いいから落ち着け！とにかく落ち着け！今落ち着け！（余り動く

なっての！！身体が擦れてててて！？）」

「そんなっ！？…でもっ！このちゃ…お嬢様が見てっ！？んあっ…！そんなところを触らないでください！！（そんな強く握らんといて！！そこは優し、違う！違う！）」

むっ！すまん。今のは不可抗力だ。だが触ったのは事実だからここは素直に謝ろう。すまん。

しかしまぁ……暫く会わない間に刹那ちゃんもシッカリと成長していたようだ。慎ましくも女性らしく膨らんで、ごほんっごほんっ！な、なんでもない。

と、まぁバカらしくも賑やかに刹那ちゃんの動きを封じていたら店内の気温が一気に下がったような錯覚が俺の危機感知センサーが察知した。その方向を見たら……。

「――楽しそうやん。二人とも何してるん？」

「「っっ！？！？」」

直ぐ背後に修羅がげふんげふんっ、失礼、羅刹がごほっごほっ、うん…木乃香ちゃん（？）が居た。この子は木乃香ちゃんだよな？いや、木乃香ちゃんだよ？なんだよ“（？）”って……。

おい……明日菜。部屋の隅で震えてないでこっち来てお願…え？拒否…だ、と？…は？なにやらジェスチャーで伝えようとしているな。えぇ、なになに？…マ…キ…コ…ム…ナ。え？巻き込むな、だと…！？

こほこほんっ！ま、まぁいい！うん！

それにしても今の木乃香ちゃんだがこれまでに見たこともないような“無”表情なんだ。特に…その目が…うん、瞳から色が消えたような?先生。いつもニコニコ笑顔の木乃香ちゃんらしくないとです。この子に何があったとですか?

「なー?なんで黙ってるの?なぁ、兄さま、せっちゃん。私もまぜてぇな。…なー?」

「あわ、あわわわわわわっ」

なんということだ!想定外の事態だから刹那ちゃんは混乱してあわわわと処理落ちしてフリーズ状態だ!相変わらず刹那ちゃんは木乃香ちゃん関係になるとヘッポコになる。今もあぅあぅ言っているし。

何が木乃香ちゃんにあったのかは知らないがここは俺が対応するしかないか……。

「こ、木乃香ちゃん。その……どうしたんだ?」

「わからんの?ウフフフ。わからんのやな……。そうやな。兄さまはいつもそうやった。私が何をしても子供扱い、妹扱いやったわ…。ウフフフ…」

木乃香ちゃんが何を言いたいのかがわからない。子供扱いしたのは事実だがそれはまだ幼女だったり小学生だったりしたからだし、妹扱いしたのも詠春に頼まれて預かってお世話していたら娘のような歳の離れた妹のような愛着が湧いたからだ。

それらにしても俺のできる限りの愛情を注いできた。思い浮かぶ限りでは俺に落ち度は無いと思う、のだけど……。うむむ?

「ところで……いつまで兄さまはせっちゃんとイチャイチャラブラブしてるつもりなん？」
「イチャ？……は？」
「ラ、ララブ！？」

イチャイチャラブラブって……。木乃香ちゃん。君には今の俺達の姿がそう見えるのか？逃げ出そうとした刹那ちゃんを後ろから羽交い絞めにしているのに？今も逃げようとしているからぎゅっと抱き締めないといけないのに……。

あっ、こら！刹那ちゃん。暴れちゃダメだって！てててっ！？……なぜ力を込めるとますます暴れるかね！？顔も真赤になっているし！力み過ぎじゃね？はぁ、そんなにイヤなら逃げないでよ、もう……。

「――……（むぅぅ！なんやの！？なんやの！？そんなにくっついてーっ！私もくっつきたいーっ！）」

んむ？なんか木乃香ちゃんの視線がまたもや鋭くなったような気がする？冷たいような、焦れるような熱が篭っているような……。

「むむむ？（愛情なら家族や木乃香ちゃん達には注いだつもりだけど、今更怒ることか？）」
「ご、ごご誤解です！お嬢様！私は決して！」
「ごめんな、せっちゃん。今はちょぉ黙っててや？」
「はいぃぃぃぃッッ！！」

ぅわー…。今の木乃香ちゃんの声、感情が感じられないくらいの限りなく平坦だった。ほら、見てみろよ。俺の腕の中に居る刹那ちゃんがガクガクプルプル震えて何かに怯えているじゃないか。

あーもー。涙目になってまぁ……ほ～ら。よ～し、よ～し。怖くなーい、怖くなーい。……むっ？また視線の圧力が強まった気が――。

「はぁ…何を勘違いしたか知らないけどそれは誤解だよ」
「ウフッウフフフ。誤解？……ここまで来て誤解言うんか？ウフフフフ」
「そう。誤解だ。大体――――？？？木乃香ちゃん？聞いているか？」

力が抜けてだらんと上半身が前に傾いて顔を俯かせて、その綺麗な髪が木乃香ちゃんの表情を包み隠している。小さく「ウフ、ウフフ…」と嗤う声が聞こえてくる。何か楽しいことがあったのかね？それなら俺も嬉しいことだ。

うん。嬉しいことだ。だがしかし、俺の話しをこの子は聞いているのだろうか？それに木乃香ちゃんがなんで機嫌悪いのかがわかってないし……。

「ウフフ。――誤解や言うなら……抱き締めてるせっちゃん放しぃや！！いつまで抱いてる気や！？（私が抱いてもらいたいくらいやのに！）」

ガックリと俯いていたと思えば今度は地団太を踏んで抗議してきた。なぜか興奮しているようで目尻に少しだけ涙が浮かんでいる。

木乃香ちゃんは俺に「刹那ちゃんを放せ」と言うがこれくらい昔と同じでよくあるスキンシップのようなものじゃないか。木乃香ちゃんにも同じようなことをしたことあるだろうに。

まぁ……今は逃げようとしている刹那ちゃんを拘束しているわけですが、ね？くくくっ。

「むっ？いや、これは逃げようとする刹那ちゃんを捕まえるためであって、決して他意は……」

「いいから！今！すぐに！放しぃや！！」

「わっかりましたっ！！」

はいっ！なぜか逆らえませんでしたっ！木乃香ちゃんのプレッシャーが襲い掛かると勝てる気がしなかったぜぃ！ちくせう……。

そんなわけで木乃香ちゃんの要求通りに拘束していた刹那ちゃんを放すことにした。とりあえず側にある席に座らせて小声で「逃げるなよ」と釘を刺すのも忘れない。ちょっと涙目になっていたが二度手間なんて勘弁だし。ここは我慢してもらおう。

け、決して木乃香ちゃんが怖くて屈したわけじゃないんだからね！？……ホ、ホントなんだから！……やべ。自分で言っておいてアレだがキモイ。鬱だー…。

あっ、でもまぁ……刹那ちゃんを解放した時に温かな感触が感じられなくなると一瞬だけど寂しいものがあるな。こう……娘が旅立つ的な意味で。

「ぁぅ……はっ！？（何を残念がっているのだ！私は！？）」

「むむむ？ラブ臭が……（こっちから……？）」

「ひぅっ！？（お嬢様の目がギョロッと！？）」

木乃香ちゃん……。君は何を察知した？小さ過ぎてよく聞こえなかったが、なにやら刹那ちゃんがビクッと反応して怯えているのだ

けど……。これだと放そうが放すまいが変わらなくないかね？

「……ん？んん？気のせいやったか……」

「木乃香ちゃん。もう機嫌直してよ。ね？俺にできる限りのことはするからさ」

「っ！（これは……チャンスやないか！？）」

もうこの際だから何が気のせいとか聞かないから機嫌直そうよ。正直言ってなんでこんなことになっているのかがわからなくて困惑しているのよ。

俺はただこれを機に木乃香ちゃんと刹那ちゃんを多少無理矢理でも仲直り…はよくわからないがせめて話し合いの機会を与えようと考えただけなのに。

なぜに今の俺は木乃香ちゃんから非難の目で見られているのだろうか？これではまるで浮気現場を見られた夫のようではないか。……悪くないはずなのに今ものすごく居心地が悪く感じるし。

「……だ、だっこ」

「……は？すまん。もう一度頼む。聞き逃したようだ」

「せやから！だ・っ・こ！そんで後ろからぎゅってしてくれたら……その…許すわ」

え？マジ？そんなのでいいの？それくらいならお安い御用だ。ふふふのふ。お膝に抱っこなんて木乃香ちゃん達が小さい時からやっていたからこれでも座り心地はちょっとしたものだと自負しているのだよ。

「ふむ……それじゃ。はい、こっちにおいで」

そのまま刹那ちゃんの隣に座って膝をポンポンと叩いて木乃香ちゃんにここに座るように誘った。

この時の俺は小さな木乃香ちゃん達を相手にしていた昔を思い出して心も表情もニコニコと暖かい気持ちになっていた。やはり親しい子の成長を目にすると嬉しいものがある。

「ぅ、うん。し、失礼します……」
「うん。どうぞ」

緊張と恥ずかしさでギギギとぎこちなく腰を預けてくる木乃香ちゃんを見て内心で苦笑した。自分で言い出しておいて恥ずかしがるとは、なんて思ったけど口には出さない。彼女だってもうお年頃だから。

「ん……ひゃ！（うで！兄さまの腕に抱き締められて！ぁ、でもこれ暖かくて懐かしい……安心する、ん……）」
「くくくっ。木乃香ちゃんも大きくなったなぁ」

腕を彼女の腰に回してぎゅっと引き寄せて座る位置を少し調整する。やはりまだ小さな時とは違い立派に育ってくれたようだ。体重が、なんて野暮なことじゃないぞ？

だが。そう、だがしかしだ。俺の膝に座っている木乃香ちゃんだが借りてきた猫のように大人しくなっていた。久しぶりにやったから変に緊張しているのかもしれない。最後にやったのは……小学三年くらいだったか。

そして幻視だとわかっていても、だ。膝の上に座っている木乃香

ちゃんだが俺の目には今の彼女が三頭身のプチ木乃香ちゃんに見えて仕方ない。因みに口はバッテン印な。とても可愛らしく感じる。

やっぱり！可愛いは真理だな！うん！ほーら。撫で撫でしてやるぞー？

「はふ…ン…ぁの…兄さま？私、お、重くない？」

「？？？……いや、軽くて心配なほどだ。キチンとご飯食べているんだろうな？ファストフードとかお菓子とか食べてない？」

今時の中学生の中ではそれなりに家事をこなすことができる木乃香ちゃんだからそんな心配は無いと確信しているが一応の確認はする。いつだって子供の心配をするのは大人の務めだからな。

「ち、ちゃんと自炊しとるよ。心配せんといて。うぅぅ（やっぱり、これ恥ずかしい。懐かしいけど、なんや気持ちよくて意識がボーっとしとるし……）」

「……そうか。それならいい」

「ぅん……（あかん……このままやと、寝、て……）」

期待通りの答えだった。全寮制だから俺の手料理を振舞う機会がないからな。必要ないとはわかってはいても心配してしまう。木乃香ちゃんと明日菜にはたまにお弁当を手渡したりとかしたな。

去年までは表立って動くこと面倒になるから自重していたがバレた今は堂々と行動できる。猪突猛進のように頭悪く暴れ回るという意味じゃないぞ？狙われる心配が少ないという意味で、だ。

今は大半の人員が月面都市とディモルフォセカに集中している。今の麻帆良に居るのは数人、多くても十数人だ。まぁ人手は必要に

なれば随時要請すれば派遣されるから問題は無いが……。

「誰か。紅茶を用意してくれる？ああ、お茶菓子もね」

「かしこまりました。葵様」

……色々と考えることはあるが今だけは久しぶりに再会したこの子達と語らうことにしよう。

遅れたが、メイドさんの一人に紅茶とお茶菓子の用意を頼んでおく。ただまぁ彼女達はメイドさんとしても優秀であることは間違いない。俺に言われずとも既に用意してあり、一声掛ければすぐに出せるようになっていた。

「ん、ありがとね。…ほら、明日菜もそんなところに居ないでこっちに来て座って。刹那ちゃんはもう少し楽にしな」

「は、はい。わかってはいるのですが……」

「まったく…一時はどうなるかと思ったわよ。イキナリこのかが不機嫌になるんだもの」

「くくくっ。そう言うなよ。未だに俺も意味がわからないんだから」

本当に。今でも「なぜこうなった！？」という気持ちだしね。そんなに寂しい思いをさせてしまったのかと申し訳ない気持ちにもなる。それに今この腕の中にある心地よい存在は愛おしいとも思う。娘や妹的な意味で、だけど。

あっ、当然刹那ちゃんや明日菜も同じくらいに愛おしく思っているよ。うん。

「……それで？いつまでそのままで居る気よ？」

「ん、これ？んー……懐かしい気分だから暫くはこのまま、かな。

それに……」
「すぅ…すぅ…すぅ…」
「木乃香ちゃんがこんなだからね」

ポンポンと撫でていたらいつの間にか寝ていた。

こうして木乃香ちゃんの寝姿を見ていると思い出す。昔、近衛の本山でも同じことがあった。屋敷の縁側でこうしてまだ小さな彼女を膝に乗せていたらぽかぽかのお日様に照らされてうつらうつらしていた。

それをどこか羨ましそうに横から見ていた刹那ちゃんも居たが、その彼女もまだ冬なのに暖かな陽気にやられてしまい、ついにはぽてんと俺に身体を預けて静かに寝息を立てていた。

あの時が一番暢気で穏やかな時間だった。今でも大切な……懐かしい思い出だ。

「ふぅ……仕方ないわね。昨日は寝るのが遅かったし。そのままでいいわ」
「くくくっ。ケータイの電池がなくなるまで話し通しだったからね。これも仕方ないさ。明日菜はどうだ？なんだったら客間を用意させるが」
「いいわよ、別に。私は一度起きちゃえば強いもの。それよりこの一年間は何してたのよ？」

うぐっ。また答え辛いこと聞くなぁ……。まさか「いやぁ、ちょっと木星まで行ってたんだ。てへっ」なんて素直に言うわけにもいかない。と言うかそんなことしたら頭を疑われる。すっごい不本意だけど。

「あ、あの…葵さん？私はもう帰ってもよろしいでしょうか？お嬢様もこのような状態ですし」
「あん？それは――」
「あれ？桜咲さん帰っちゃうの？このかと話さなくていいの？幼馴染なんでしょ？」

――ダメだ、と言おうとしたら明日菜に邪魔された。いや、彼女に他意はないとわかっているけどね。ええ、わかっているんです。彼女って時々天然で思い込んだら一直線に突っ走る癖があるしね。

「いえ、私などがお嬢様と……。ですから私はここで失礼します。では――」
「まぁまぁ今少し待ってみよう、かっ」
「あうっ！？葵さん！？はな、放してください！」
「バカ。静かにしろ、バカ。木乃香ちゃんが起きちゃうだろうが」
「うっ……（そんなバカバカ言わなくてもいいじゃないですかっ）」

そんな悔しそうな顔してもダメだ。可愛いだけで全くと言っていいほど怖くない。

「勝手に居なくなるなって。久しぶりに会ったのに寂しいだろうが」
「ぁぅ……そんな言い方、ヒドイです…。卑怯ですよ、葵さん……」

それは自覚している。理性ではなく感情に訴えているわけだし。刹那ちゃんのように義理堅い人間には効果的な引き止め方だと理解している。それでも少し考えたかった。今日、これから、どうするかを。

はぁ…刹那ちゃんを引き止めたまではいいとして今日の本題だっ

た木乃香ちゃんがこれだもんな。これじゃ話し合いも何もできない。刹那ちゃんとの話しは別の日に改めてやるしかない、か。

「はぁ…まぁいい。今日はここまでにしよう。刹那ちゃんとは改めて話そうか」

「何でもいいから今は放してくださいっ……」

小声で怒鳴るとか器用なことするなぁ……。それでも間違ったことは言ってないし、キチンと言質は取れた。勢いで言っただけかもしれないが。

「くくくっ。確かに聞いたからな？逃げるなよ？」

「逃げませんっ。逃げませんからっ。……（逃げたら何をされるか…うぅぅ）」

ここまで釘を刺しておけば呼び出してもすっぽかすことはしないだろ。無意識にド忘れでもされない限りは、な。

次の約束を取り付けることに成功したから刹那ちゃんを掴んでいた左手から力を抜いて解放した。

「よし。それじゃ……また、な」

「う、はい。……あっ、葵さん」

「ん？（なによ？もう今日ここで話すことはないはずだけど）」

出入り口の手前で何かを思い出したかのように振り返った刹那ちゃんは一瞬口篭りながら、その、なんだ？恥ずかしそうに頬を染めていた。

「――その……お帰りなさい」

「……くくくっ。ああ。ただいま。またよろしく」
「ふふふ。はい。……では」

刹那ちゃんはそのまま扉を開けて出て行った。ここからじゃよく見えなかったけど耳まで赤くなっていたのだけは見えた。……気がした。でも……くくくっ。

嬉しそうにハニカムんじゃないよ。ちょっと…ほんのちょっと嬉しくなるじゃない。それによくよく考えたら麻帆良に到着して「お帰りなさい」と言われたのはこれが初めてじゃないか。

木乃香ちゃんはなにやら雰囲気がおかしかったし……。明日菜は明日菜で隅で震えて退避していたし……。そう言えば木乃香ちゃんはなんで機嫌が悪かったのかね？そこのところの理由を聞いてなかったな。

「……なーんかいい雰囲気だったじゃない？」

ちょっと小さな喜びを感じて反芻していたら今まで黙って見ていた明日菜がそんなことを言ってきた。心なし、少し不機嫌そう…いや、どちらかと言うと拗ねているように見える。……なんで？

「なんだ？焼いてるのか？俺の記憶が間違ってなければ明日菜はタカミチ狙いだったはずだが」
「なっ！？ばっ！あのっ……うぇぇ？」

くくくっ。慌てちゃって、まぁ。今も昔も相変わらずホントわかり易いのな。いつもの強気な姿勢じゃなくてこういう取り乱す時の可愛らしさを出せばいいのに。

「そういう可愛らしいところは当の本人に見せてやれよ。俺に見せても撫でるくらいしかできないっての」

明日菜は肝心のところでは無類の強さを見せることがある。だけどこういう恋愛事になるととたんにヘタレになるんだものだぁ。そこだけはいつもの強気を出せないものか？

はぁ……無理だな。できればこんなに悩まないだろ、と考えていると半ば無意識に右隣に座る明日菜の頭をポンポンと撫でていた。こういう日常の習慣と言うか癖は困ったものだね。うん。

「うっさいわねっ！なにドサクサに紛れて、かか、かわかわ可愛ぃ……とか言ってんのよっ！？ぅ、嬉しくなんかないんだからねっ！？それと！……き、気安く…撫でないでよ」

「だが断る！可愛いものを愛でなくてなんとする？お前が可愛いのは事実だろうが。本当のことを言って何が悪い」

俺から“撫でる”をなくしたら何が残ると言うのか！！家族とのコミュニケーションの一つでもあるんだぞ！？主に俺が癒されるんだぞ！？癒しなんだよ！それを取り上げようと明日菜！お前はそう言うのか！？

それに！俺は！可愛いものを！愛でることを！やめる気はない！！

「うぇ！？ぁぅぁぅ…！（可愛い？私が？そんな、いきなり言われても困る！私には高畑先生が……）――てっ！違うわよ！？」

「なっ？イキナリ叫んでなんだよ。どうした？」

え？なに？何が違うの！？え？俺の存在（撫でる）を全否定する

と言うのか！？そんな子に育てた覚えはありませんのことよ！？またお弁当を学校に直接届けに行くぞ！？行っちゃうぞ！？最後にやったのは……小五の時だったか。

「なんでもない！（そうよ！ナニを動揺してるのよ！？私！大体、葵さんは無自覚にこういうことを昔から言うんだから！もう……）」

「そ、そうか……？え？」

え！？なんでもないの！？え？俺の勘違いだった！？俺の存在（撫でる）理由は守られたのか！？いやっふぅぅ！！明日菜！今度作るお前のお弁当は色をつけてやるぞ！おかずを二品サービスしてやる！

……木乃香ちゃんには秘密だぞ？いいなぁ？

さて。よくわからないことも多かったが、お喋りしていたらお昼近くになっていた。久しぶりに会ったので時間を忘れていたようだ。本当に楽しい時間はあっと言う間に過ぎ去るから困ったものだな、まったく。

明日菜と、寝ている木乃香ちゃんを起こしてお昼でも一緒にどうか、と考えていた時にもう一騒動が押しかけてくることになった。それは……。

「葵っ！！居るか！！」

「…お邪魔致します」

「――はっ……？」

先生。健やかに眠る木乃香ちゃんを膝に乗せて、明日菜とお茶して他愛無い話しをしていたら幼女吸血鬼に襲撃されました。しかも

この時、理不尽にも幼女吸血鬼は俺を見つけた瞬間に飛び蹴りをしてきたとです。それも助走をめい一杯して。

これは冬にしては麗らかな陽気の日に俺の悲鳴が響き渡った出来事だった。まる。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

第八十一話「再会とお茶会と飛び蹴りと」（後書き）

木乃香が病みかけて…。
明日菜が怯えて…。
刹那が美味しいところを総取りして…。
幼じ…エヴァが落ちだった…。
なんだかなぁ…。
ででも、微妙なお年頃の心理は表現できたかな？
うまくできていればいいけど、ちょっと自信がないとです。
恥ずかしがる心理描写って難しい。
いやまぁ、それだけじゃなく他の心理描写も難しいけどね。

どうも。最近、茶々丸を嫁に欲しいと思ってしまう鉄　桜です。
何気にどこか疲れているのでしょうか？
自分ではそんなことは無いと思っているのにねー。
茶々丸、可愛いよね茶々丸。
茶々丸の純粋さに癒されています。ふふふのふ。
ではでは！

第八十二話「喫茶店と昼食会と酒会と」（前書き）

ちょっと投稿するのが怖い……。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

誤字報告も歓迎。

第八十二話「喫茶店と昼食会と酒会と」

――喫茶クレイドル…。

Ｓｉｄｅ　葵

エヴァちゃん達が店内に乱入してきてからは賑やかなお茶会になっていた。メンバーは騒がしさから目を覚ました木乃香ちゃんとお菓子をパクつく明日菜、乱入者のエヴァちゃんとお手伝いする茶々丸ちゃんだ。

流石に入店早々にエヴァちゃんが飛び膝蹴りをしてくるとは思わなかった。

まだ魔法の存在を知らない明日菜達にバレないように張った魔法障壁で緩和したけど視覚的には当たるかもしれないと思ってすごい怖かった。つい、怖くて叫んでしまったしね。

俺の叫び声が聞こえたようで先程まで二階で部屋の用意をしていた陽月姉妹が一階の店内に降りてきて駆けつけてくれた。ハオ。ユエ。驚かせてゴメンね？

それで心配性の姉妹はいつものように俺の背後に立ち護衛してくれている。部屋の用意は他のメイドさんにお願いして代わってもらったらしい。今店内に居るメイドさんは一人であり茶々丸ちゃんがその子を手伝っている。

いい子だよ、茶々丸ちゃん。本当にいい子だよ。大事なことだから二回言った。

「まったく！んぐんぐっ、帰ってきたのんぐっ、なら真っ先にあぐあぐっ、私に知らせるんんっ、ものだろう！！もきゅもきゅっ」

出された紅茶やお茶菓子をバクバク食べながらエヴァちゃんはそう言う。確かに事前に知らせなかったのは俺の不手際だ。それは申し訳なく思う。だけどこれだけは言いたい。

食べるか喋るかどっちかにしろ、と！このあとはお昼ご飯があるんだぞ……。

「悪かったって。明日にでも行こうと思ってたんだよ……」

はい。嘘です。素で忘れてました。でも表には出ません。なぜなら自分の嘘を心底信じているからです。嘘発見器にも検地されないよ。一応、簡易な暗示の一種でもあるし。

「それでどうやって俺が帰ってきたことを知ったのさ？」

「ん？お前のところの従者から茶々丸に連絡があった」

「ＣＯＳ－ＭＯＳから？茶々丸ちゃんに？」

散歩と言う名の哨戒に出ていると思えばそんなことまでしてくれていたのか。それとＣＯＳ－ＭＯＳも従者じゃなくて家族なんだけど……。俺達は主従（ファミリー）であり、組織（ファミリー）であり、家族（ファミリー）でもあるわけだし。

そう言えばファミリー（マフィア）と最初に呼んだのはガトーだったか……。

当時は何を失礼な、とも思ったが今の俺のあり方を見るとあながち間違いでもないかもしれない。

「…はい。二十分程前ですが麻帆良に帰還しました、と」
「そうか。あの子が、ね。彼女なりに気を回してくれたのかもしれないな」

……あれ？でも二十分前ってことは……。エヴァちゃんの家からこの店まで歩いて十五分前後だから。……え？早くない？

気になったから率直に茶々丸ちゃんにそのことを聞いてみた。そこんとこどうよ？

「…ご想像の通り、マスターは葵様がご帰還されたと聞いて逸早く家を飛び出されました」
「にゃっ！？ち、茶々丸っ！？お、おまっ、お前っ！何をっ！？」
「へぇぇ……。エヴァちゃん、ごめんね？直ぐに連絡しなくて」
「ああ！？貴様も真に受けるな！今のは嘘だ！そんなことしてない！！本当なんだからな！？」
「…マスターは葵様が旅立たれてから時々ボーっとなり空を見つめて『あのばか者め…』と何かを焦がれるように呟いて――」
「だあああああああっ！！！このボケロボめ！！嘘ばかり言いおって！！巻いてやるっ！これでもかと巻いてやるーっ！！ふはははははっ！！」
「あ、ああ…いけません。マスター。そんなに巻かれてははは…！？」

え？嘘なの？今の『あのばか者め…』って見事な声真似だったけど。あれって茶々丸が録音した音声記録じゃないの？もしかして合成？合成ですか？茶々丸もエヴァ（マスター）ちゃんをからかうのに手段を選ばなくなったなぁ……。

「ねぇねぇ。葵さん、葵さん」
「ん？明日菜か。何か？」
「その、エヴァンジェリン…さん？と仲よさげだけどどういう関係なの？こんなに慌ててるのはじめて見たわよ？」
「私もそこんとこ詳しく聞きたいなー？」
「う、うん？どういう関係と聞かれてもなぁ。さて、どう答えたものか……」

明日菜はいいとして。なんか木乃香ちゃん……怖いよ？笑顔なのにその細められた瞳が笑ってないよ？なぜか気分は浮気を咎められているお父さんだ。ホントになんでよ？

「まさか……人には言えん関係やの！？兄さまそれは犯罪や！！」
「イキナリこの子は何を言いやがるのかな！？可愛いものは好きだけど幼女には手を出さないよ！？」
「……そうけ？でもでも！兄さまって子供好きやから――」
「言わせないよ！？それ以上は言わせないからね！？それに俺はロリでもペドでもない！」

どちらかと言うとグラマラスなお姉さんが好きなの！あっ、でもそれは異性としての好みだから絶対じゃないかも。だって家族は分け隔てなく大好きだし！

……何をこんなことを心の中で力説しているんだろうか。少し遣る瀬無いなぁ。

「ふぅ…ん？貴様ら何をしている？」
「あぁ？いや、二人が俺とエヴァちゃんの関係は、って聞いてくるからどう答えたものかと思ってね」
「ふむ。なるほどな。……ふむ、ふむふむ（にやり）」

「……（あっ、なんかイヤな予感がする）」

エヴァちゃんがにやりとイヤらしく笑ったのを見た時に確信した。この子は今碌なことを考えてない、とな。絶対に場を引っ掻き回す悪戯思考のはずだ。

「おい。近衛・木乃香。神楽坂・明日菜。私と九重・葵との関係が気になるのだったな？」

「そうや」

「え！私！？」

「ククク。ならば教えてやろう。コイツはな。端的に言うなれば……」

「お、おい。エヴァちゃん……」

「ゴメンな？兄さま。今はちょぉ黙っててて」

なぜだろうか？今の木乃香ちゃんには逆らっては危険だと本能を刺激してくる。で、でも…ここでエヴァちゃんを止めておかないと更なる悲劇が俺に襲い掛かるのではないか？やはりここは……。

「い、言うなら？」

「――（にやり）――私のモノだ」

「「！？！？！？」」

やりやがった。間に合わなかったかぁ……。でも、俺のことを引き合いに出しても楽しくないだろうに。こんなことで二人が動揺するはずもない。

「ククククッ！残念だったな？小娘共が。ハーッハッハッハッ……あぶぶべっ！？」

あ……エヴァちゃんが背中から床に倒れ込んだ。倒れた時にがたーんって音がした。すっごい痛そうだった。

この原因を作ったのが白と黒の風となって俺の背後から左右を抜けた子達だ。倒れたエヴァちゃんの側に立って拳をプルプルと震わせていた。どうやら瞬時に時間差で打撃を与えたようだ。

抜刀しなかったのは木乃香ちゃん達、一般人が居たから自重した結果だ。一応ギリギリ一般人である二人の前で流血沙汰にするのは避けてくれたようだ。いやいや、いい判断だった、二人とも。うん。

「我が君の手前黙っていたが……」
「……今の台詞だけは聞き捨てならん」
「アタタター……貴様らっ！どこから湧いて出たっ！？」
「先程から居たわ！愚か者が！我が君は組織全員（ファミリー）の頂点に立つお方である！貴様などに渡せるものか！」
「然様！先のお主の言葉だが流石に看過できぬ！我が君を得たければ我ら組織全員（ファミリー）を打ち倒してからにしてもらおうか！」
「何だと！？貴様らっ！？このおおおおっ！！」
「「なんの！甘いわッ！！はあああああっ！」」

うわー…イキナリ取っ組み合い（キャットファイト）がはじまったよ…。店内で暴れるのは埃が飛ぶからやめてほしいなぁ。だけどそれでも今この子達を止めるのは難しいし、手間がかかりそうで面倒だ。

「せや！ハオさん！ユエさん！やったってや！！兄さまを渡すわけにはイカンねん！！」
「よ、よくわからないけど……がんばれーっ！ハオさん！ユエさん！」

こらこら。二人とも何を煽っているのか。木乃香ちゃんはもうアレだけど、明日菜よ。意味わからないなら傍観しとけよ。そういうお祭り好きなところを見るとやっぱりお前も2Aなんだな、と納得しそうだよ……。

「ぐぬぬぬぬぬぬぬっ！！」
「「フフ、フフフッ！！」」
「…ああ。マスターがあんなに楽しそうに…」

いや、茶々丸ちゃん？楽しそうってのは違うと思うよ？メガッサ睨み合っているじゃないか。だからそうしてジッと撮影するのはやめなさい。そんなことをしていたらあとでエヴァちゃんに怒られるよ？

……。

ハオ達がエヴァちゃんと取っ組み合い（キャットファイト）を演じた直後に昼食ができたことをメイドさんが知らせてくれた。騒がしくしてゴメンね？

それでまぁ俺と木乃香ちゃん、明日菜は只今試合中の辺りから少し離れた席に席を確保して食べることにした。暴れている彼女達の近くだと埃が飛んでくるかもだから当然だよね。

テーブルの上にはシンプルなトマトパスタ、ミズナとトマトのサラダ、ミネストローネ。他にもクロワッサンとバターロール。トマトとモッツァレラチーズのピッツァ。デザートに各種ケーキやゼリー、プリンなどがある。

トマト料理が多いのは月の収穫物だからだ。地球産の物に比べて酸味が少し強いのが特徴だ。言うなればこのトマトは“月トマト”

だな。そしてこの月トマトは調理の時に加熱すると甘味が増すと言う特徴がある。

この月トマト、今後は名物になるだろうか……？

「んっんっ…。でも家族（ファミリー）の頂点かー。兄さまは一家の大黒柱やなー。あむっ…んー。このパスタ美味しいわー」

「まぁね。これでも一応は組織（ファミリー）の責任者的な位置だからな。あっ、こっちも食べてみ。ほら、明日菜も。美味いから」

「ありがと。んむっ…ほんとっ、このピザも美味しいっ。今度来た時もまた食べたいわね」

「ありがとう、兄さま。んっ…ほんま美味しいわー。うんっ、流石、兄さまやね！」

うんうん。たくさん食べなさい。そして力を付けなさい。そしてネギ少年を助けてあげなさい。……俺は面白おかしく傍観したいから。

そのまま暫くは三人で他愛もない話しを一言二言お喋りしながら料理をパクついていた。食事も中盤に入った頃だ。ふと何かに気が付いたように木乃香ちゃんがジト目で俺を見てきた。

「……それにしても驚いたわー。兄さまはいつの間にお手伝いさん――」

「違う。メイドさんだ」

「葵さん……」

木乃香ちゃんは彼女達を“お手伝いさん”と呼ぶが断じて違う。彼女達は“メイドさん”だ。それ以外の何ものでもない。即座に否定した時に明日菜の視線が痛かったがこればかりは譲れないのだ。

そして木乃香ちゃんは給仕をしているメイドさんのことを問い詰めたいらしい。何も悪いことはしていないはずなのに彼女のジト目が据わり始めてややコワイ……。

「えっ？格好はそうかもしれんけど、やっぱりここはお手つ――」
「だからメイドさんだって。メ・イ・ド・さ・ん。オーケー？」
「……もうメイドさんでええわ」

再度メイドさんだと言い聞かせて説得した。何度も言わせないでね？彼女達はメイド服を着用したお手伝いさんではなく正真正銘メイドさんなのだよ。ハッキリ言ってしまえば俺の趣味だけどね！

メイド服姿の茶々丸ちゃんとかいいよね……。でもスカートが短いのは減点だと思うんだ。あれじゃウェイトレスさんと間違えてしまう。メイド服はスタンダードにロングに限るよ。

今度、茶々丸ちゃんにウチのメイド服をプレゼントしてみようかな……。いや、ここは意表をついてエヴァちゃんに、とか？ふむ、幼女メイドさん、か。……アリじゃね？試しにウーリとシルビアに着てくれるように頼んでみようかな。

あ……こほんっ。

「さて、と。いつメイドさんを雇ったかだったか？」
「そうや。てっきり前までのウェイトレスさんかと思ってん。やのに見たことない人もおったし」

よく見ているなぁ……。一年も前のことを良く覚えているものだ。俺が中坊の時は一年前のこととか直ぐに忘れてしまっていたのに。

「あー…。実はその…アレだ。アレだよ。うん」
「“アレ”？……なんやの？」
「いや……木乃香ちゃん達にこういうことは非常に言い難いことであって、ね。……聞かなくてもよくない？」
「そう言われると俄然気になるわー。これは是非とも聞かな。……サッサと話しぃや（絶対に答えてもらうわー。こんなハッキリしない兄さまはアヤシイやんか……）」

木乃香ちゃんの何に火を点けたのか。ものすごく食い付きがいいんですけどー…。しかも目が少し据わり始めているし。普段ほわわんとしている木乃香ちゃんがすると本当にコワイ。こう…精神的にくる。

「えー…あー…まぁ、その…なんだ？アレだよ。俺がメイド好きということが家族の一人にバレた。そしたら……」
「なんや話しの先が読めてきたんやけど……それで？そしたら、なんやの？」
「……次の日、皆がメイドさんになって……増えてた」
「……（皆？……皆！？増えたって何人！？メイド服なんて本職の人かす、好きな人の気を引くためくらいしか着ないやないか！兄さま、どれだけ女の子引っ掛けたんや！？）」

えー…。木乃香ちゃんの顔からストンッと表情が抜け落ちたんですけど。明日菜は明日菜で俺達の話しを聞いてフォークを持って口をあんぐり開けて固まっているしね。

こら。口を閉めないか。可愛いんだからそういうのはマナー的にいけないと思います。それと木乃香ちゃんはいい加減にいつもののほほんとした木乃香ちゃんに戻ってください。俺の癒し的な意味で

帰ってきてほしい。是非。

……二人に引かれた？流石に「俺メイドさんが好きなんだ」ってカミングアウトしたのは間違いだったのだろうか？いや、でも話せ（ゲロしろ）と言ったのは木乃香ちゃんだし、それで引かれるのはマジで勘弁なんだけど……。

「……（ヒソヒソ）アスナ！アスナ！どないしよ！？兄さま取られてしまうわ！」

「……（ヒソヒソ）私に聞かれても知らないないわよ！それに私は別に……ごにょごにょ」

「……（ヒソヒソ）え？なに？今なんて？え？なんて言いかけたんや？なぁぁ？」

「……（ヒソヒソ）な、なんでもないわよ！それよりも……！」

あ、あぁ……なんか俺に聞こえないようにヒソヒソと話しているし。なに話しているのか気になるけど聞きたくない。絶対に碌なこと言われていない気がするから。

「もう……いいかな？これ以上は、ちょっと……（あー…何が悲しくて中学生に自分の性癖を告白しているのか。くぅぅ）」

「え？あぁ…えと……（そう言えばメイドさん雇ってることは葵さんってお金持ち？うわっ、今までの私何気に失礼なことしてない？）」

「？？？……アスナ？どうしたん？」

明日菜よ。何をそんなに凝視してくるのか？そんなに俺の趣味がアレだったか？メイドさん好きはダメなのか？自慢じゃないが和服も好きだぞ？そこを間違えるなよ？

特に○さんはいいね。見事に和服を着こなした時なんか……くぅぅ！もう、ね！って○さん。アレ？名前が出せない？クッ！これが噂に聞く世界（作者）の修正力（著作権）と言うものなのか……！？

……あ？

え？俺は今何を考えていたのか……。んん？思い出せない……？確かメイドさんが好き云々考えていて…次に和服も好きだ云々と考えて、それから……それから？くっ！ここからが思い出せない？…一体何が？

「も、もしかして葵さんって実はスゴイ人だったりする？」

人が考えている時に突然そんなことを言い出した奴が居た。……明日菜だ。お前ェ……。何バカなこと言ってんの？そんなこと子供が気にしなくていいんだよ。まったく……。

「はぁ……そんなことないって。いつも通りでいいの。寂しいだろが、バカ……」

「あ……ぅん。（いつも通り、か。葵さんは変わらないなぁ……うん。そうしよ）」

ポンポンと明日菜の頭を撫でて本心であることを伝えてみた。確実に伝わる行為でもないけど伝われればこれ以上にないくらい伝わり易い。今までの経験上な。尤も伝わったのは精霊や悪魔ばかりだったから比較検証にならないけどね……。

「アスナ！？なんでちょっと二人でイイ雰囲気になってるん！？私もまぜてぇな！」

「ちょ！このか！？いきなり抱きつかないでよ！危ないじゃないの

！あはははははっ！」
「むぅぅぅ！アスナばかりずるいずるい！むむむむっ！」
木乃香ちゃんが突然、明日菜をハグした。手がワキワキ動いていて明日菜はそれがくすぐったいようで賑やかに笑っている。それとさっきまでの木乃香ちゃんと違ってほんわか元気な彼女になっていた。
「なんだ？二人とも仲いいなぁ。くくくっ」
これだよ。この木乃香ちゃんを待っていたんだ。癒し的な意味で。
二人の妹分は相も変わらず仲がいいようで安心だ。ここにもう一人の妹分である刹那ちゃんも居れば更に安心なんだけど。あの子って混血児であることや白い翼（コンプレックス）のせいでただ今ヘタレ街道まっしぐらだから。
はぁ、今は無理なのかなー……。
「目を放した隙に貴様らは何を和んでいるかーっ！！」
はい！折角和んでいたのに幼女吸血鬼に襲撃されました！まぁ今回は飛び蹴りがなかったが……。
声のしたほうを向けばそこには取っ組み合いで服や髪を乱したエヴァちゃんが居た。その背後には茶々丸ちゃんが居てぺこりと礼をしてくる。……なるほど。つまり「ご迷惑お掛けします」と言いたいわけだな。
「あ？もういいの？」

「いいわけあるか！なんなのだ！貴様の従者は！？あたたたた……」

彼女達の更に後ろではハオとユエが少しだけ満足そうな雰囲気をしていた。そのまま満足げにしながら定位置である俺の背後に回る。

……なんか楽しそうだなぁ。

それと、従者じゃなくて家族なんだけど……。ああ、それよりも、ほら。髪の毛がこんなに跳ねているじゃないか。破れてはいないけど服装も乱れているぞ？皺になったらどうするのか。

「それで結果はどうよ？エヴァちゃんの格好から予想はつくけど」

「ふふんっ。所詮は人間などに力を封じられた存在でしかありませんでしたな」

「うむ！ユエの言うとおり、吾らの敵ではありませんな！はっはっはっはっ！」

見た目が幼女なエヴァちゃん相手に見た目が美人な姉妹が襲い掛かる画が俺の脳裏に浮かんで……即削除した。なんか見た目だけは弱い者イジメに見えなくもなかったから。

「くそぉ…！枷さえなければコイツらなど物の数ではないのに……！！」

「はいはい。そうだねぇ。それじゃこっちにおいで」

ポンポンと膝を叩いてこっちへ来るように誘ってみた。できれば先程の木乃香ちゃんのように座ってくれると尚良しだ。おじいちゃん的気分になるけど美幼じこほんっ、美少女であるエヴァちゃんは癒されるからねぇ。

「んむ？なぜだ？」

「もうお昼だけど……くくくっ。その格好では、ね？」
「むっ？」

エヴァちゃんは言われて改めて自分の格好を見る。そこで俺の言うことを理解した彼女は不機嫌そうに眉間を少し歪ませた。

「ふんっ！いらん世話だ！…茶々丸！」
「…はい。マスター」

いらん世話と言う割に茶々丸ちゃんにはキッチリ頼るんですね？わかります。流石は元貴族のお姫様だ。人を使う姿が板についているじゃないか。

「それじゃエヴァちゃんの準備もできたようだな」

身嗜みを整えたエヴァちゃんが席について昼食が再開される。木乃香ちゃんや明日菜は半ば食べ終えているがお喋りしていたからそれほど進んでもいない。今はなにやら俺達のやり取りを気にならない程度にチラ見している。

茶々丸ちゃんは「…お手伝いいたします」とウチのメイドさんに言ってエヴァちゃんの世話を焼き始める。ウチの子はそれを見て「あらあら、まぁまぁ」と微笑ましそうに見ていた。仕事取られているがそれでいいのか、メイドさん……。

「ふんっ！下手なもので私を満足させられると思うなよ！」
「はいはい。まずは食べてから文句言おうね。……ただし、わかっているとは思うが粗末にはするなよ？その時は……！！」
「わ、わかっている！それだけはしないっ！……（もう、あのような目に遭いたくないのだ……）」

「そか。それじゃ、召し上がれ」
「……ふん。あむ、もきゅもきゅ……っ！うまいっ！！」

嬉しい言葉だ。ピッツァの一切れを引っ手繰って口にしたエヴァちゃんはただ「うまい」と言ってくれた。料理人にとってその一言が何よりの報酬だ。

「んくくくっ。そうか、そうかそうか。調理した彼女達も報われると言うものだな」
「……ふんっ！んむっ、はむはむ……あむっ、もっきゅもきゅ……」

納得はしていないが料理も素晴らしいのは事実だった。エヴァちゃんは言葉で言い返すのはやめて無心にパスタやピッツァに手を伸ばして口に収めていく。

だが知ってるか？エヴァちゃん。君のその行為は料理人をますます喜ばせることに等しいのだよ。くくくっ。

……。

……。

木乃香ちゃん、明日菜にエヴァちゃんと茶々丸ちゃんを交えて話している内に日も暮れた。約束通りに俺手ずから用意した夕食も皆で食べ終わり木乃香ちゃん達は女子寮へ帰った。

ただし、木乃香ちゃんはエヴァちゃん達がもう少し残ることを知ると一瞬だけ目から光が消えたように感じた……気がした。気のせいだったけどね！いつもと変わらない笑顔がそこにあったし！

言うなよ！？明日菜がピクピクしていたけどそれこそ気のせいだし！？……そうだよ！今は冬なんだから寒さに身を震わせただけなんだよ！なっ！？

……ふぅぅ。

とまぁ、そんなことがあって、だ。今俺とエヴァちゃんは店内で向かい合って座っているわけだ。お互いの背後にはハオとユエ、茶々丸ちゃんがそれぞれ立っている。メイドさんも今は紅茶を入れて奥へ待機してもらっている。

「……それで話しとは何だ？あの二人に内密に残れと言うのだから何かあったのだろ？」

「ああ。大したことじゃない。エヴァちゃん。君は最近、と言うか三～四ヶ月前から血を集めているらしいな？」

「……」

「ん？……ああ。安心していい。ここの防諜は万全だ。学園も某火星人も他の誰にも聞かれる心配はない」

「……フフフ。いやに耳が早いではないか？ええ？九重・葵よ」

ニヤニヤと魔王のように笑う。身に纏う雰囲気は威圧感タップリだ。だがしかし、今の幼女姿では精一杯背伸びしているようにしか見えない。

「まぁ、ね。小さな噂から奥に隠された秘密までくらいならそこそこ調べてくれるからな」

「それはもう“そこそこ”とは言わないと思うのだが……」

「くくくっ。できることをしてくれているだけだ。もう感謝してもしきれない」

「できることを、か。なるほど……。それで葵は何を言いたい？」

ふむ。“聞きたい”ではなく“言いたい”と来たか。エヴァちゃんは俺がなんで“血を集めているのかを知っている”と半ば確信に近い感覚を得ていると見ていいようだ。

「くくくっ。単刀直入に言うとだ。俺の家族、そして近衛・木乃香、神楽坂・明日菜、桜咲・刹那の三名には手を出すなと釘を刺しにね。それ以外はまぁエヴァちゃんの信条を信じているので裁量は任せる、と言った感じか」

エヴァちゃんの信条が未だ折れていないのならば被害者は最悪でも貧血くらいの被害にしかならないだろうさ。誤って死なせてしまうとか、そんなくだらないミスを彼女がするはずもない。

「指図されるのは好きではないな。仮に貴様らに害をなした、としたらどうする気だ？」

「とりあえず四肢を切断して無理矢理にでも身柄を確保して“この世界の驚き！真・地獄体験ツアー！！”へご招待して差し上げようか。例えば――宇宙空間に裸で投げ出される、とか楽しそうではないか？我が友よ」

「ククククッ。なるほど、なるほどなるほど。確かにそれは楽しそうだな。わかった。約束しよう。私からは決して手を出さないとな。だが――」

「言わずとも承知している。……自衛の時はその限りじゃない」

彼女達が自分から首を突っ込むようなら俺は保護する気はサラサラない。危険な場所に足を踏み出すならそのリスクは本人が負うものだからな。

「これは俺の個人的好奇心だが、血を集める理由は近々麻帆良へやってくると言うナギの息子…ネギ少年か？」
「ああ。忌々しいことにこの状態では碌に満足な魔法も使えない。だから手っ取り早く血を少々、な」

尤も例え魔法が使えなくとも負けはしないが、とエヴァちゃんは続けて言った。やっぱり六百年の真祖は違うねぇ。経験に裏付けされた確かな自身と確信が伺える。ホント頼もしいねー…。

「そう言えば葵。貴様、どこか変わったか？昼間と違い、雰囲気が……」
「……まぁ俺も色々遭った、もといあったのよ。上手くは言えないけどさ」

エヴァちゃんはそうか、と一言言うと口を閉ざしてくれた。そこまで変わった気はないけど……うん。よくそんな小さなことに気がつくね？エヴァちゃんの観察眼に脱帽だ。

それに詳しく事情を聞いてこないことは正直言って助かる。だってこれ以上に何をどう言えと？「ちょっと異世界行って揉まれてきました」とか「異世界って楽しいよね」とか言えるわけがないじゃない。

「あっ、月で造ったいいワインがあるんだけど飲まない？」
「ふむ。月で、か。（月？え？月？……え？）……貰おう。期待していいのだな？」
「任せな。俺のお墨付きだ」
「葵の、か。それは期待できそうだな。ククク」

この“月ワイン”も赤と白があるが月トマトと同様に名物になる

だろうか？口当たりは仄かに甘くフルーティーであるため女性に人気が出そうなのだが。うん。不安はないが俺と家族だけの意見だから人間の舌に合うかわからないね。

……今後、飲食物では舌の肥えたエヴァちゃんに試飲、試食してもらうか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　葵

この葵達の酒会から一ヵ月後の二月上旬頃。物語の主人公であり“英雄の息子”であるネギ・スプリングフィールドが麻帆良に２－Ａの担任教師として訪れた。

ネギ…数えで十歳の冬の日のことだった。

第八十二話「喫茶店と昼食会と酒会と」（後書き）

葵の性格矯正に役立つのは番外編だと思うのです。
まぁ当作品に限った話しですが。切欠が……。
元より感情を持つ者は少しずつ周囲から影響されて変化するものですしね。
変化しないのはただの機械でしかないです。
人間味と言うか温かみがないと思うのですよねー…。

ではでは！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8915k/

葵と精霊と九十九神と悪魔と…

2011年11月22日06時31分発行